

HP SiteScope

Windows, Solaris, および Linux オペレーティング・システム用

ソフトウェア・バージョン :11.10

SiteScope の使用

ドキュメント・リリース日 : 2011 年 2 月 (英語版)

ソフトウェア・リリース日 : 2011 年 2 月 (英語版)



法的通知

保証

HP の製品およびサービスの保証は、かかる製品およびサービスに付属する明示的な保証の声明において定められている保証に限ります。本文書の内容は、追加の保証を構成するものではありません。HP は、本文書に技術的な間違いまたは編集上の間違い、あるいは欠落があった場合でも責任を負わないものとします。

本文書に含まれる情報は、事前の予告なく変更されることがあります。

制限事項

本コンピュータ・ソフトウェアは、機密性があります。所有、使用、コピーには、HP による有効なライセンスが必要です。FAR 12.211 および 12.212 に従って、商用コンピュータ・ソフトウェア、コンピュータ・ソフトウェアのドキュメント、および商用アイテムの技術データは、HP の標準商用ライセンス条件に基づいて米国政府にライセンスされています。

著作権

© Copyright 2005 - 2011 Hewlett-Packard Development Company, L.P.

商標

Adobe® および Acrobat® は、Adobe Systems Incorporated の商標です。

Intel®, Pentium®, および Intel® Xeon® は、米国およびその他の国における Intel Corporation の商標です。

iPod は Apple Computer, Inc. の商標です。

Java は、Oracle またはその子会社、あるいはその両方の登録商標です。

Microsoft®, Windows®, Windows NT®, および Windows® XP は、Microsoft Corporation の米国登録商標です。

Oracle は、Oracle Corporation またはその子会社、あるいはその両方の登録商標です。

UNIX® は The Open Group の登録商標です。

謝辞

本製品には、Apache Software Foundation (<http://www.apache.org>, 英語サイト) が開発したソフトウェアが含まれています。

本製品には、JDOM Project (<http://www.jdom.org>, 英語サイト) が開発したソフトウェアが含まれています。

文書の更新

本書のタイトル・ページには、次の識別情報が含まれています。

- ソフトウェアのバージョンを示すソフトウェア・バージョン番号
- ドキュメントが更新されるたびに更新されるドキュメント・リリース日
- 本バージョンのソフトウェアをリリースした日付を示す、ソフトウェア・リリース日

最新のアップデートまたはドキュメントの最新版を使用していることを確認するには、次の URL にアクセスしてください：

<http://support.openview.hp.com/selfsolve/manuals>

このサイトでは、HP Passport に登録してサインインする必要があります。HP Passport ID の登録は、次の場所で行います。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

または、HP Passport のログイン・ページの [New users - please register] リンクをクリックしてください。

適切な製品サポート・サービスに登録すると、更新情報や最新情報も入手できます。詳細については HP の営業担当にお問い合わせください。

サポート

HP ソフトウェアのサポート Web サイトは、次の場所にあります。

<http://support.openview.hp.com/>

この Web サイトでは、連絡先に関する情報や、HP ソフトウェアが提供する製品、サービス、およびサポートの詳細情報を提供します。

HP ソフトウェア・サポート・オンラインでは、お客様にセルフ・ソルブ機能を提供しています。ビジネスの管理に必要なインタラクティブな技術サポート・ツールにアクセスするための効率的な手段を提供します。有償サポートをご利用のお客様は、サポート・サイトの以下の機能をご利用いただけます。

- 関心のある情報や文書の検索
- サポート相談や改善依頼の送信および追跡
- ソフトウェア・パッチのダウンロード
- サポート契約の管理
- HP サポート連絡先の検索
- 使用可能なサービスに関する情報の閲覧
- 他のソフトウェア・カスタマとの意見交換
- ソフトウェア・トレーニングの検索と申し込み

ほとんどのサポート・エリアでは、HP Passport ユーザとして登録し、ログインする必要があります。また、多くの場合、サポート契約も必要です。HP Passport ID の登録は、次の URL にアクセスしてください。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

アクセス・レベルに関する詳細は、次の URL を参照してください。

http://support.openview.hp.com/access_level.jsp

目次

はじめに.....	19
本書の構成.....	19
対象読者.....	22
必要な情報の見つけ方.....	22
その他のオンライン・リソース.....	24
文書の更新.....	25

第 I 部 : SITESCOPE の紹介

第 1 章 : SiteScope の概要.....	29
SiteScope の概要.....	30
SiteScope 監視モデル.....	33

第 II 部 : 概要と管理

第 2 章 : SiteScope の設定および管理.....	37
作業開始の概要.....	38
サイレント・ログインの使用.....	38
SiteScope Failover Manager の使用.....	39
JMX コンソールの使用.....	40
SiteScope 設定 API の使用.....	42
SiteScope 統合.....	44
SiteScope iPhone アプリケーションの使用.....	46
SiteScope を使用した起動方法.....	48
SiteScope へのアクセス方法.....	50
サイレント・ログイン URL の作成方法.....	51
SiteScope の設定および管理方法.....	55
SiteScope の監視用の設定方法.....	59
テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの 設定方法 - フローチャート.....	62

第 3 章： SiteScope ユーザ・インタフェースの操作	63
SiteScope ユーザ・インタフェースについて.....	64
コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行.....	68
複数のグループやモニタに対するアクションの実行.....	68
SiteScope オブジェクトのコピーと移動	69
SiteScope キーボード・ショートカット	72
SiteScope ユーザ・インタフェースの操作.....	73
第 4 章： SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理	115
SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要.....	116
フィルタ設定の定義と管理.....	117
検索 / フィルタ・タグを使った作業.....	118
新しい検索 / フィルタ・タグの作成および定義方法	119
[タグの検索 / フィルタ] のユーザ・インタフェース	122
第 5 章： グローバル検索と置換	131
グローバル検索と置換の概要.....	132
グローバル検索と置換の実行方法.....	135
グローバル検索と置換ウィザード.....	142
第 6 章： SiteScope ツール	159
SiteScope ツールの概要.....	160
モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法.....	162
ログ・ファイル・モニタの設定時またはトラブルシューティング 時のログ分析ツールの使用方法 - 使用ケースのシナリオ.....	164
SiteScope ツールのユーザ・インタフェース.....	168
第 7 章： 正規表現の使用	235
正規表現の概要.....	236
正規表現の定義.....	237
文字列リテラルの照合	239
メタ文字を使用したパターンの照合	241
検索モード修飾子	246
内容の照合値の保持.....	247
SiteScope の日付変数	248
ログ・ファイル監視の例.....	254
正規表現の使用時に発生する問題.....	262

第 III 部：統合

第 8 章：BSM の使用	269
SiteScope と BSM の通信方法について	270
接続の設定	272
SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合	273
検出されたトポロジの BSM へのレポート	282
CI のダウンタイム	285
SiteScope および BSM 間の統合の設定方法	288
SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法	296
SiteScope をクライアント証明書が必要な BSM サーバに 接続する方法	297
トポロジ・レポートの設定方法	298
初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ	302
測定値ごとに CI をレポートするモニタ	303
トラブルシューティングおよび制限事項	304
第 9 章：HP Operations Agent を使用した Operations Manager と BSM での作業	307
SiteScope の HPOM と BSM の通信方法について	308
イベントの送信	313
HP Operations Agent を使用した測定値のレポート	322
SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効に する方法	326
SiteScope から HP Operations Agent にメトリックスをレポート できるようにする方法	349
SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合	352
SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項	356
第 10 章：Network Node Manager i (NNMi) との連携	359
NNMi への SiteScope イベントの送信	360
NNMi へのメトリックのレポート	362
NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法	363
メトリック・データを NNMi にレポートするための SiteScope の 設定方法	366
NNMi に送信される SiteScope オブジェクトの SNMP トラップ形式	370
NNMi にレポートされる SiteScope モニタ・メトリック	373
トラブルシューティングおよび制限事項	375

第 IV 部：モニタ

第 11 章：SiteScope グループを使った作業	379
SiteScope グループの概要	380
グループの管理方法	383
[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス	387

第 12 章 : SiteScope モニタを使った作業	391
SiteScope モニタの概要.....	392
SiteScope モニタのカテゴリ.....	393
リモート・サーバの監視.....	396
グループの依存関係の監視.....	397
状態のしきい値の設定.....	400
ベースラインを使用した状態のしきい値の設定.....	405
モニタのデプロイ方法.....	414
ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法.....	418
モニタ・カテゴリ・リスト.....	428
Windows 環境にインストールされた SiteScope のみでサポート されているモニタ.....	433
Windows Management Instrumentation (WMI) をサポート しているモニタ.....	434
SiteScope の監視に使用されるポート.....	436
廃止された SiteScope モニタのリスト.....	442
SiteScope モニタのユーザ・インタフェース.....	443
第 13 章 : XML ドキュメントの監視	513
XML ドキュメントの監視の概要.....	514
XML ドキュメントの内容の照合.....	515
モニタ設定での XML 内容照合値の使用.....	517
第 V 部 : 統合モニタ	
第 14 章 : SiteScope 統合モニタを使った作業	521
統合モニタの概要.....	522
テクノロジー統合モニタのトポロジ設定.....	526
統合モニタのデプロイ方法.....	534
廃止された統合モニタのリスト.....	540
トラブルシューティングと制限事項.....	542
第 15 章 : 統合モニタのフィールドのマッピング	545
統合モニタのフィールドのマッピングの概要.....	546
フィールドのマッピングの構造について.....	549
イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定.....	550
メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定.....	556
チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定.....	562
イベント・ハンドラの構造.....	566
第 16 章 : HP Network Node Manager との統合	575
Network Node Manager 統合の概要.....	576
Network Node Manager データをエクスポートするスクリプト の記述.....	577
Network Node Manager でのイベントの設定方法.....	578

第 VI 部 : リモート・サーバ

第 17 章 : リモート・サーバを使った作業	581
リモート・サーバの概要.....	582
リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法.....	584
リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法.....	596
リモート・サーバのユーザ・インタフェース	598
トラブルシューティングおよび制限事項	617
第 18 章 : SiteScope での IP バージョン 6 のサポート	627
IP バージョン 6 のサポート	628
SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法.....	632
IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ	634
第 19 章 : セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視	637
SiteScope および SSH の概要.....	638
SSH を使用したリモート Windows サーバの監視	642
リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法.....	644
リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法.....	645
UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件	662
(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイル を使用した) Windows SSH をサポートするモニタ	663
トラブルシューティングと制限事項	665
第 20 章 : SSH クライアントを使った作業.....	667
統合された Java SSH クライアントの概要	668
統合された Java SSH クライアントの設定方法	671
第 21 章 : UNIX オペレーティング・システム・アダプタ	675
SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要	676
アダプタの追加方法.....	677
SiteScope で提供される UNIX アダプタ	679
アダプタ・ファイルの形式	680
アダプタ・コマンド・リスト.....	682

第 VII 部 : プリファレンス

第 22 章 : 一般プリファレンス.....	689
一般プリファレンスの概要	690
一般プリファレンス・ページ.....	692
第 23 章 : インフラストラクチャ・プリファレンス	705
インフラストラクチャ・プリファレンスの概要.....	706
[インフラストラクチャプリファレンス] ページ	707

第 24 章：統合プリファレンス	739
統合プリファレンスの概要.....	740
アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンス の設定方法.....	749
一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報.....	751
[統合プリファレンス] のユーザ・インタフェース.....	754
第 25 章：ログ・プリファレンス	781
ログ・プリファレンスの概要.....	782
SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造.....	783
[ログ プリファレンス] ページ.....	784
トラブルシューティングと制限事項.....	788
第 26 章：電子メール・プリファレンス	789
電子メール・プリファレンスの概要.....	790
電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース.....	791
第 27 章：ページャ・プリファレンス	799
ページャ・プリファレンスの概要.....	800
ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース	801
第 28 章：SNMP プリファレンス	809
SNMP プリファレンスの概要.....	810
SNMP のユーザ・インタフェース	811
第 29 章：共通イベント・マッピング	817
共通イベント・マッピングの概要.....	818
共通イベント・マッピングの設定方法.....	820
共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース	822
第 30 章：スケジュール・プリファレンス	833
スケジュール・プリファレンスの概要.....	834
スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース	837
第 31 章：ユーザ管理プリファレンス	843
ユーザ管理プリファレンスの概要.....	844
LDAP 認証と承認	849
SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法.....	851
SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法	853
LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法	856
パスワード要件パラメータ	861
ユーザ管理のユーザ・インタフェース.....	862

第 32 章 : 資格情報のプリファレンス	889
資格情報のプリファレンスの概要.....	890
資格情報のプリファレンスの設定方法.....	893
[資格情報のプリファレンス] のユーザ・インタフェース	895
第 33 章 : タグの検索 / フィルタ	901
タグの検索 / フィルタの概要.....	902
[タグの検索 / フィルタ] ページ.....	903
第 34 章 : 証明書管理.....	905
証明書管理の概要	906
証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法	908
[証明書管理] のユーザ・インタフェース.....	910
第 35 章 : 多言語化 (I18N) 環境での SiteScope の使用	915
多言語ユーザ (MLU) インタフェースのサポート	916
SiteScope の英語以外のロケールの設定方法.....	918
特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示.....	920
多言語化がサポートされているモニタ	921
トラブルシューティングおよび制限事項	923
第 36 章 : SiteScope へログインのための認証方法の設定	925
認証方法 - 概要.....	926
SiteScope にログオンするための認証方法の設定方法.....	928
第 37 章 : Lightweight シングル・サインオン認証 (LW-SSO) - 一般的な参照.....	929
LW-SSO 認証の概要	930
LW-SSO のシステム要件	932
LW-SSO のセキュリティに関する警告.....	933
トラブルシューティングおよび制限事項	935

第 VIII 部：ユーザ定義のテンプレート

第 38 章：SiteScope テンプレート	941
SiteScope テンプレートの概要	942
テンプレートについて	944
テンプレート例.....	948
テンプレートの計画.....	949
テンプレート変数を使った作業	951
モニタ・テンプレートのカウンタ選択.....	957
テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューション の設定方法	962
既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法.....	972
正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法	974
予約済みテンプレート・グループ・タイプ	975
SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース	976
第 39 章：テンプレートのインポートおよびエクスポート	1001
テンプレートのエクスポートおよびインポート	1002
テンプレートのエクスポートとインポート方法.....	1003
PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法	1005
テンプレートのインポートおよびエクスポートのユーザ・ インタフェース	1006
第 40 章：テンプレートのデプロイ	1009
SiteScope テンプレートのデプロイの概要	1010
CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ	1011
ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法	1012
CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法	1015
テンプレートのデプロイのユーザ・インタフェース	1020
第 41 章：ユーザ定義テンプレートの適用	1029
テンプレート・デプロイメントの更新	1030
関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新 適用方法.....	1033
テンプレート変更適用ウィザード.....	1038

第 42 章 : 自動テンプレート・デプロイメント	1051
自動テンプレート・デプロイメントの概要	1052
XML ファイルの作成と操作	1053
XML ファイルの例および変数	1053
XML バリデータ	1058
XML を使用したテンプレート変更適用	1059
デプロイメントの結果	1061
XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ	1062
テキストの暗号化方法	1066
デプロイメントの更新方法	1067
XML タグ参照情報	1069
自動デプロイメント XML の生成	1073
トラブルシューティングおよび制限事項	1075

第 IX 部 : ソリューション・テンプレート

第 43 章 : SiteScope ソリューション・テンプレート	1081
ソリューション・テンプレートの概要	1082
SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1086
ソリューション・テンプレート・ページ	1089
トラブルシューティングおよび制限事項	1090
第 44 章 : フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート	1093
フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの概要	1094
フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの デプロイ方法	1098
[フェールオーバー監視ソリューション テンプレート] ページ	1100
第 45 章 : Active Directory ソリューション・テンプレート	1103
Active Directory ソリューションの概要	1104
Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1107
[Active Directory ソリューション テンプレート] ページ	1108
第 46 章 : AIX Host ソリューション・テンプレート	1111
AIX Host ソリューションの概要	1112
AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1114
[AIX Host ソリューション テンプレート] ページ	1116
第 47 章 : HP Quality Center ソリューション・テンプレート	1119
HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要	1120
HP Quality Center ソリューション・テンプレート のデプロイ方法	1123
[HP Quality Center ソリューション テンプレート] ページ	1126
トラブルシューティングと制限事項	1136

第 48 章 : HP Service Manager ソリューション・テンプレート	1137
HP Service Manager ソリューションの概要	1138
HP Service Manager ソリューション・テンプレート のデプロイ方法	1140
[HP Service Manager ソリューションテンプレート] ページ	1143
第 49 章 : JBoss Application Server ソリューション・テンプレート	1147
JBoss Application Server ソリューションの概要	1148
JBoss Application Server ソリューション・テンプレートの デプロイ方法	1150
JBoss ソリューション・テンプレート・ページ	1153
第 50 章 : Linux Host ソリューション・テンプレート	1155
Linux Host ソリューションの概要	1156
Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1158
Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ	1160
第 51 章 : Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート	1163
Microsoft Exchange ソリューションの概要	1164
Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート のデプロイ方法	1167
[Microsoft Exchange ソリューションテンプレート] ページ	1169
第 52 章 : Microsoft IIS ソリューション・テンプレート	1173
Microsoft IIS ソリューションの概要	1174
Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1176
[Microsoft IIS ソリューションテンプレート] ページ	1179
第 53 章 : Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・ テンプレート	1181
Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの概要	1182
Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート のデプロイ方法	1186
Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ ..	1187
第 54 章 : Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・ テンプレート	1189
Microsoft SharePoint 2010 ソリューションの概要	1190
Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート のデプロイ方法	1192
[Microsoft SharePoint 2010 ソリューションテンプレート] ページ	1193
第 55 章 : Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート	1195
Microsoft SQL Server ソリューションの概要	1196
Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの デプロイ方法	1198
Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート・ページ	1200

第 56 章 : Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート	1205
Microsoft Windows Host ソリューションの概要.....	1206
Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート のデプロイ方法	1208
[Microsoft Windows Host ソリューションテンプレート] ページ..	1210
第 57 章 : .NET ソリューション・テンプレート	1213
.NET ソリューションの概要	1214
.NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法.....	1216
[.NET ソリューションテンプレート] ページ	1218
第 58 章 : Oracle Database ソリューション・テンプレート	1221
Oracle Database ソリューションの概要	1222
Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法.....	1224
Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール	1225
Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ	1228
第 59 章 : SAP ソリューション・テンプレート	1231
SAP ソリューションの概要	1232
SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法.....	1233
[SAP ソリューションテンプレート] ページ	1235
第 60 章 : Siebel ソリューション・テンプレート	1239
Siebel ソリューションの概要.....	1240
Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1242
[Siebel ソリューションテンプレート] ページ.....	1245
第 61 章 : Solaris Host ソリューション・テンプレート	1251
Solaris Host ソリューションの概要	1252
Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法.....	1254
[Solaris Host ソリューションテンプレート] ページ.....	1256
第 62 章 : VMware Host ソリューション・テンプレート	1259
VMware Host ソリューションの概要	1260
VMware Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法.....	1262
[VMware Host ソリューションテンプレート] ページ	1263
第 63 章 : WebLogic ソリューション・テンプレート	1265
WebLogic ソリューションの概要	1266
WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法.....	1268
監視対象の WebLogic モジュールの選択.....	1270
[WebLogic ソリューションテンプレート] ページ	1272
第 64 章 : WebSphere ソリューション・テンプレート	1275
WebSphere ソリューションの概要	1276
WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法	1278
[WebSphere ソリューションテンプレート] ページ.....	1280

第 X 部 : SITESCOPE ダッシュボード

第 65 章 : SiteScope ダッシュボードを使った作業	1285
SiteScope ダッシュボードの概要.....	1286
ダッシュボード・フィルタの概要.....	1287
モニタの状態の確認.....	1288
SiteScope ツールへのアクセス.....	1289
SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法.....	1290
SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法.....	1292
SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース.....	1295
第 66 章 : サーバ中心のレポート	1321
サーバ中心のレポートの生成.....	1322
サーバ中心のレポートの作成方法.....	1324
サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ.....	1326
サーバ中心のレポートの測定値.....	1331
サーバ中心のレポート.....	1332
第 67 章 : SiteScope サーバの状況	1337
SiteScope 状況の概要.....	1338
SiteScope 状況のグループ.....	1341
BAC 統合設定モニタ.....	1343
BAC 統合統計モニタ.....	1344
接続統計モニタ.....	1344
ダイナミック・モニタリング統計.....	1344
SiteScope サーバの状況モニタ.....	1345
SiteScope ログ・イベント・モニタ.....	1345
SiteScope 負荷モニタの監視.....	1345
SiteScope の状況監視データの分析方法.....	1346
SiteScope の状況のユーザ・インタフェース.....	1350
第 68 章 : サーバ統計の表示	1369
サーバ統計の使用.....	1370
SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析.....	1371
ログ・ファイルの使用.....	1374
SiteScope サーバ統計の分析方法.....	1377
監査ログの設定方法.....	1378
SiteScope ログ・ファイルの列.....	1379
監査ログのエントリ.....	1380
SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース.....	1391

第 XI 部 : 警告とレポート

第 69 章 : SiteScope 警告	1415
SiteScope 警告の概要	1417
警告アクションの作成	1421
SiteScope 警告が送信される時期について	1422
警告テンプレートのカスタマイズ	1427
データベース警告を使った作業	1429
モニタの無効化 / 有効化警告を使った作業	1430
電子メール警告を使った作業	1431
ログ・イベント警告を使った作業	1432
ページ警告を使った作業	1433
送信警告を使った作業	1434
スクリプト警告を使った作業	1435
SMS 警告を使った作業	1439
SNMP トラップ警告を使った作業	1441
サウンド警告を使った作業	1442
警告の設定方法	1443
警告メッセージ内容のカスタマイズ方法	1446
警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法	1449
SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ	1450
SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティ のディレクトリ	1451
SiteScope 警告のユーザ・インタフェース	1461
第 70 章 : スクリプト警告のスクリプトの記述	1495
スクリプト警告のスクリプトの記述の概要	1496
SiteScope のスクリプトを使った作業	1496
SiteScope からスクリプトへのデータの引き渡し	1498
第 71 章 : SiteScope レポート	1501
SiteScope レポートの概要	1502
SiteScope レポート・タイプ	1504
SiteScope 管理レポートを使った作業	1506
レポートの作成方法	1508
SiteScope レポートのユーザ・インタフェース	1510
索引	1589

はじめに

本書では、分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスを監視するために HP SiteScope のエージェントレス監視ソリューションを設定および使用する方法について説明します。

本章の内容

- ▶ 本書の構成 (19 ページ)
- ▶ 対象読者 (22 ページ)

本書の構成

本書は、次の各部で構成されています。

第 I 部 SiteScope の紹介

SiteScope を紹介し、SiteScope の主要機能および監視モデルの概要を説明します。

第 II 部 概要と管理

SiteScope の設定および管理、SiteScope へのアクセス、サイレント・ログインの使用、SiteScope 設定 API、SiteScope iPhone アプリケーション、他の製品と SiteScope の統合方法を説明し、SiteScope を使用するための作業順序を提供します。

また、SiteScope ユーザ・インタフェースの操作方法、SiteScope オブジェクトの検索およびフィルタ方法、グローバル検索と置換の使用方法、SiteScope ツールを使用したリソースおよびモニタ設定に関する問題のトラブルシューティング方法、正規表現の使用方法について説明します。

第 III 部 統合

SiteScope を使用してメトリックスを送信しトポロジ・データを HP Business Service Management (BSM) に報告する方法, SiteScope を使用してイベントを送信しメトリックスを BSM の HP Operations Manager (HPOM) およびオペレーション管理に報告する方法, そして SiteScope を使用しイベントを送信してメトリックスを NNMi に報告する方法を説明します。

第 IV 部 モニタ

SiteScope グループおよびモニタの操作方法について説明します。XML ドキュメントの監視方法についても説明します。

第 V 部 統合モニタ

SiteScope 統合モニタを使用して, サードパーティのアプリケーションからデータをキャプチャして BSM に転送する方法を説明します。Network Node Manager とのモニタ・フィールドのマッピングと統合についても説明します。

第 VI 部 リモート・サーバ

SiteScope でリモート環境を監視できるように接続プロパティを設定する方法について説明します。リモート・サーバ監視のセキュア・シェル (SSH) 接続の使用方法, SSH を使用するクライアントの設定方法, UNIX 監視のアダプタ・ファイルの作成およびカスタマイズ方法についても説明します。

第 VII 部 プリファレンス

インフラストラクチャ, 統合, ログ, 接続設定 (電子メール, ページャ, SNMP システムとの接続), 共通イベント・マッピング, スケジュール・プロファイル, ユーザ・プロファイル, 検索タグ, フィルタ・タグ, 証明書管理, 資格情報管理など, SiteScope の一般的な機能と管理機能の設定方法について説明します。また, I18N 環境での SiteScope の使用や, SiteScope へのログインに使用する認証方式の設定についても説明します。

第 VIII 部 ユーザ定義のテンプレート

固有のテンプレートを作成したりカスタマイズして、グループ、モニタ、リモート・サーバ、警告などの監視ソリューションを効率的にデプロイ、保守、更新する方法について説明します。XML ファイルを使用して SiteScope テンプレートを自動的にデプロイする方法も説明します。

第 IX 部 ソリューション・テンプレート

一般的に使用されるエンタープライズ・アプリケーションおよびネットワーク・システムを監視するために設計された、事前に定義された一連のソリューション・テンプレートをデプロイする方法を説明します。

第 X 部 SiteScope ダッシュボード

[SiteScope サービス状況] タブを使用して、最新のリアルタイム監視データを表示し、監視結果の表示をカスタマイズする方法について説明します。SiteScope サーバ状況の監視、およびサーバ統計情報とログの表示についても説明します。

第 XI 部 警告とレポート

SiteScope 警告を使用してインフラストラクチャ内のイベントまたは状態変更の通知を送信する方法、および警告テンプレートをカスタマイズしてスク립ト警告を作成する方法について説明します。SiteScope レポートを作成し、測定するモニタ・パラメータ、時間間隔、またはサマリ・データを定義する方法についても説明します。

対象読者

本書は、次の SiteScope 利用者を対象としています。

- ▶ SiteScope または BSM の管理者
- ▶ SiteScope または BSM のアプリケーション管理者
- ▶ SiteScope または BSM のデータ・コレクタ管理者
- ▶ SiteScope または BSM のエンド・ユーザ

本書の読者は、エンタープライズ・システム管理、インフラストラクチャ監視システム、SiteScope に精通し、監視対象として設定されるシステムを熟知している必要があります。さらに、BSM と統合する読者は、BSM、エンタープライズ監視および管理の概念を理解している必要があります。

必要な情報の見つけ方

本書は HP SiteScope ヘルプ に含まれています。SiteScope ヘルプは、すべての SiteScope ドキュメントへの単一のアクセス・ポイントを提供します。



SiteScope ヘルプにアクセスするには、SiteScope サーバ上で **[ヘルプ]** > **[SiteScope ヘルプ]** を選択します。



トピック・タイプ

本書では、各サブジェクト・エリアをトピックに分けて説明しています。個々のトピックには、サブジェクト固有の情報モジュールが含まれます。トピックは、通常、その中に含まれる情報のタイプに従って分類されています。

この構造は、ユーザが各時点で必要とする情報のタイプに合わせてドキュメントを分割することによって、個々の情報に簡単にアクセスできるように設計されています。

使用されている主なトピックの種類は、「**概念**」, 「**タスク**」, 「**参照情報**」です。これらのトピック・タイプは、アイコンによって視覚的に区別されています。

トピック・タイプ	説明	使用目的
概念 	背景情報, 説明情報, または概念的な情報。	特定の機能について一般的な情報を得る。
タスク 	<p>操作手順が示されたタスク: アプリケーションの操作および目的の達成に役立つ, 順を追ったガイダンス。タスク・ステップによっては, サンプル・データを使用した例が示されます。</p> <p>タスク・ステップは, 番号が付いているものと番号なしのものがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 番号付きのステップ: 各ステップを順番どおりに進めることによって実行されるタスクです。 ▶ 番号なしのステップ: どのような順にでも実行できる, 個々に完結する操作のリストです。 	<ul style="list-style-type: none"> ▶ タスクの全体的な流れを把握する。 ▶ 番号付きタスクに示されたステップを順に実行し, タスクを完了する。 ▶ 番号なしのタスク内のステップを実行することにより, 独立した操作を行う。
	<p>使用例としてのシナリオ・タスク: 具体的な状況に関するタスクの実行方法を示した例です。</p>	実際の場面でタスクをどのように実行できるかを知る。

トピック・タイプ	説明	使用目的
参照情報 	一般的な参照情報 ：参照情報としての資料の詳細リストと説明です。	特定の状況に関連した具体的な参照情報を検索する。
	ユーザ・インタフェースの参照情報 ：特定のユーザ・インタフェースについて詳しく説明する、専門的な参照情報トピックです。通常、製品の [ヘルプ] メニューから [このページのヘルプ] を選択すると、ユーザ・インタフェースのトピックが表示されます。	1つ以上の特定のユーザ・インタフェース要素（ウィンドウ、ダイアログ・ボックス、ウィザードなど）に入力する情報や使用方法などに関する具体的な情報を調べる。
トラブルシューティングおよび制限事項 	トラブルシューティングおよび制限事項 ：遭遇することが多い問題とその解決方法について説明するとともに、機能領域または製品領域の制限事項を示す、専門的な参照情報トピックです。	特定の機能を使用する前や、ソフトウェアの使用上の問題に直面した場合などに、重要な問題についての理解を深める。

その他のオンライン・リソース

トラブルシューティングと技術情報：HP Software サポート Web サイトのトラブルシューティング・ページでセルフ・ソルブ技術情報を検索できます。[ヘルプ] > [トラブルシューティング&ナレッジベース] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://h20230.www2.hp.com/troubleshooting.jsp> です。

HP Software サポート：セルフ・ソルブ技術情報を参照できます。また、ユーザ・ディスカッション・フォーラムへの投稿や検索、サポート依頼の送信、パッチや更新されたドキュメントのダウンロードなども行えます。[ヘルプ] > [HP Software サポート] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://support.openview.hp.com> です。

ほとんどのサポート・エリアでは、HP Passport ユーザとして登録し、ログインする必要があります。また、多くの場合、サポート契約も必要です。

アクセス・レベルに関する詳細は、次の URL を参照してください。

http://support.openview.hp.com/access_level.jsp

HP Passport ユーザ ID の登録は、次の場所で行います。

<http://h20229.www2.hp.com/passport-registration.html> (英語サイト)

HP ソフトウェア Web サイト : HP ソフトウェア製品の最新情報をご覧になれます。新しいソフトウェアのリリース、セミナー、展示会、カスタマ・サポートなどの情報も含まれています。[ヘルプ] > [HP ソフトウェア Web サイト] を選択します。この Web サイトの URL は、<http://welcome.hp.com/country/jp/ja/prodserv/software.html> です。

文書の更新

HP ソフトウェアは製品のドキュメントを新しい情報で継続的に更新しています。

最新のアップデートまたはドキュメントの最新版を使用していることを確認するには、HP ソフトウェア製品マニュアル Web サイト (<http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/manuals>) にアクセスしてください。

はじめに

第 I 部

SiteScope の紹介

1

SiteScope の概要

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope の概要 (30 ページ)
- ▶ SiteScope 監視モデル (33 ページ)

概念

SiteScope の概要

HP SiteScope は、サーバ、オペレーティング・システム、ネットワーク・デバイス、ネットワーク・サービス、アプリケーション、アプリケーション・コンポーネントなどから構成される、分散 IT インフラストラクチャの可用性とパフォーマンスの確認の支援を目的とする、エージェントレス監視ソリューションです。SiteScope は Web ベースでインフラストラクチャを監視し、軽量で柔軟にカスタマイズでき、実運用システムにデータ収集エージェントをインストールする必要がありません。

SiteScope モニタは、幅広いバックエンド・インフラストラクチャ・コンポーネントの主要なパフォーマンスの測定値を収集し、トポロジをレポートします。モニタは、ネットワーク環境でのシステムおよびサービスのパフォーマンスと可用性を自動的にテストするように個々に設定されています。

SiteScope 監視には、監視対象の環境のリアルタイム画像用のダッシュボードとともに警告およびレポート機能が含まれます。SiteScope は、IT インフラストラクチャの問題を検出するたびに警告を送信するように設定できます。さらに、SiteScope は、時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するモニタまたはモニタ・グループのレポートを作成できます。

組織全体にわたり類似する監視設定の基準を用いたモニタのデプロイを支援するために、テンプレートを定義する、または事前設定した SiteScope ソリューション・テンプレートを使用できます。テンプレートを使用することにより、各オブジェクトを個別に更新しなくても、繰り返しデプロイし、簡単に更新可能な 1 つの構造に標準化された一連のモニタ・タイプと設定を開発および維持できます。

SiteScope にはまた、さまざまなメディアでイベント情報の通信と記録に使用できる警告テンプレート・タイプも用意されています。警告テンプレートは、組織のニーズに合わせてカスタマイズできます。

SiteScope の主な機能

SiteScope には次の機能があります。

- ▶ **エージェントレス監視** : SiteScope では、監視対象のサーバ上にエージェント・ソフトウェアをデプロイすることなく監視を行います。この機能により、SiteScope のデプロイメントおよび保守は、ほかのパフォーマンス監視ソリューションに比べて非常に簡素です。
- ▶ **簡素なインストールとデプロイメント** : SiteScope は、サービスまたはプロセスとして稼動する 1 台のサーバ上にインストールされます。このため、インストールが迅速で、監視の設定も容易です。
- ▶ **直感的な管理** : SiteScope では、ユーザが使いやすいブラウザ・ベースのインタフェースで監視プラットフォームの表示と管理ができるため、監視環境の管理にかかる時間が短縮されます。詳細については、64 ページの「SiteScope ユーザ・インタフェースについて」を参照してください。
- ▶ **エンタープライズ対応アーキテクチャ** : SiteScope では、大量システムの同時監視、セキュリティ保護された接続のサポート、フェールオーバー機能を利用できます。SiteScope Failover Manager の詳細については、39 ページの「SiteScope Failover Manager の使用」を参照してください。
- ▶ **インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性の監視** : SiteScope には 100 を超えるモニタ・タイプがあります。SiteScope は、さまざまなホスト・タイプやアプリケーション・プラットフォームの使用状況、応答時間、利用率、リソース可用性を監視できます。SiteScope モニタの詳細については、392 ページの「SiteScope モニタの概要」を参照してください。
- ▶ **テンプレートを使用したモニタのデプロイメントと更新の標準化** : SiteScope は再利用可能なテンプレートを作成して公開する機能をサポートします。これにより、類似する監視設定基準を用いて複数の IT 要素を設定およびデプロイできます。テンプレート変更適用ウィザードを使用すれば、広範な手動による更新を実行することなく、組織全体にわたり監視環境を速やかに更新できます。SiteScope テンプレートの詳細については、942 ページの「SiteScope テンプレートの概要」を参照してください。
- ▶ **XML による自動デプロイメント** : SiteScope では、XML ファイルを使用してユーザ・インタフェースをバイパスしテンプレートをデプロイできます。これにより、単一操作で多数のモニタを導入することが可能となり、IT 部門は時間と経費を節約できます。テンプレートの自動デプロイの詳細については、1052 ページの「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。

- ▶ **ベースライン管理** : SiteScope を使用して、ベースラインを作成したり、時間帯または日付に基づいて特定のしきい値をスケジュールできます。設定のために計算されたベースラインを実際のパフォーマンス状況に照らし合わせてテストして、計算されたベースラインによって削減されたエラーと警告を表示できます。グラフを使用して、パフォーマンスの改善の可能性を判断するために現在のしきい値設定と計算されたベースラインを比較できます。ベースラインの使用の詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。
- ▶ **予防的警告** : SiteScope は、IT インフラストラクチャの問題を検出するたびに警告するように設定できます。警告アクションには、電子メール・メッセージの送信、ページング、SNMP (Simple Network Management Protocol) トラップの送信、スクリプトの実行など、複数のタイプがあります。SiteScope 警告の詳細については、1417 ページの「SiteScope 警告の概要」を参照してください。
- ▶ **サーバベースのレポート** : SiteScope は特定のサーバから複数の事前に選択したメトリックスを収集し、ご使用の環境内の任意のサーバの主要なパフォーマンス監視データに素早くアクセスできる単一のグラフに結合します。サーバベースのレポートの主な利点の 1 つは、サーバ関連の問題のトラブルシューティングのためにレポートをドリルダウンが可能なことです。SiteScope レポートの詳細については、1502 ページの「SiteScope レポートの概要」を参照してください。
- ▶ **自己監視** : SiteScope は自身の動作状況の主な要素を監視して、モニタ設定上の問題や重大なサーバ負荷を識別します。また、Business Service Management へのレポートが設定されている場合、自身の統合やデータのイベントも監視します。SiteScope サーバの状況の監視の詳細については、1338 ページの「SiteScope 状況の概要」を参照してください。
- ▶ **カスタマイズ機能** : SiteScope では、カスタム・データ・フィールドと HTML センシティブな記述タグを使用して、カスタマイズしたグループとモニタを表示できます。さらに、SiteScope では、テンプレートとユーザ定義変数を使用して警告テキストとレポート設定のカスタマイズが可能です。詳細については、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

- ▶ **統合** : SiteScope を使用して、次のことができます。主要なパフォーマンス・メトリックスを収集し、トポロジを BSM にレポートします。HP Operations Agent を使用して、共通イベントとメトリックス・データを BSM 内の HP Operations Manager (HPOM) およびオペレーション管理に送信します。イベントとメトリックス・データを Network Node Manager i (NNMi) に送信します。データを HP Diagnostics または直接統合が存在しないアプリケーションに転送します。詳細については、44 ページの「SiteScope 統合」を参照してください。

SiteScope 監視モデル

SiteScope の Web 対応アーキテクチャでは、拡張性の高い監視環境の作成と継続的な管理が可能です。アーキテクチャは次の主要コンポーネントで構成されます。

- ▶ **ブラウザ・ベースのインタフェース** : エンド・ユーザのステータス情報要求、設定変更要求、アクセス制御を管理します。
- ▶ **スケジューラ** : モニタ、警告作成、レポート生成の実行を調整します。
- ▶ **グループ** : グループは監視アセットのコンテナです。グループはモニタの整理に使用され、サブグループを含む場合があります。グループはモニタよりも前に作成されます。
- ▶ **モニタ** : モニタは監視対象システムのパフォーマンスおよび可用性情報を収集します。サーバ・コンポーネント、主要なアプリケーション・プロセス、ログ・ファイル、ネットワーク・デバイスなどのステータスをチェックします。選択したメトリックスに基づいてデータも収集し、設定されたしきい値に対して正常、警告またはエラーのステータスを表示します。
- ▶ **警告** : 警告は、監視対象アセットのステータスが変化するとトリガされるアクションです。問題イベントや障害が発生すると必要なユーザに通知します。警告は、電子メール、ページャ、SMS (ショート・メッセージ・サービス) メッセージ、SNMP トラップなど、さまざまなメディアに送信できます。
- ▶ **レポート** : レポートは傾向把握および分析を目的とした監視対象データの履歴表現です。SiteScope では、クイック・モニタ・レポートから詳細な管理レポートまで、さまざまなレポートを提供します。レポートを使用して、傾向と運用パフォーマンスの追跡や問題のトラブルシューティングを行うことができます。

第 II 部

概要と管理

2

SiteScope の設定および管理

本章の内容

概念

- ▶ 作業開始の概要 (38 ページ)
- ▶ サイレント・ログインの使用 (38 ページ)
- ▶ SiteScope Failover Manager の使用 (39 ページ)
- ▶ JMX コンソールの使用 (40 ページ)
- ▶ SiteScope 設定 API の使用 (42 ページ)
- ▶ SiteScope 統合 (44 ページ)
- ▶ SiteScope iPhone アプリケーションの使用 (46 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope を使用した起動方法 (48 ページ)
- ▶ SiteScope へのアクセス方法 (50 ページ)
- ▶ サイレント・ログイン URL の作成方法 (51 ページ)
- ▶ SiteScope の設定および管理方法 (55 ページ)
- ▶ SiteScope の監視用の設定方法 (59 ページ)
- ▶ テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート (62 ページ)

概念

作業開始の概要

この章では、SiteScope の作業開始の概要と、監視ソリューションの設定および管理の推奨フローを説明します。

作業開始の詳細については、48 ページの「SiteScope を使用した起動方法」を参照してください。

サイレント・ログインの使用

サイレント・ログインは、ユーザ・ログイン名およびパスワードを SiteScope のログイン・ページに入力することなく SiteScope を起動する自動プロセスです。サイレント・ログインにより、初期ログイン・ページをスキップして直接 SiteScope クライアントを表示できます。さらに、サイレント・ログインとブラウザのお気に入りのリストに保存したページ・オプション・ビューを併用すると、SiteScope の特定のグループまたはビューを直接表示できます。お気に入りのページ・オプション・ビューの設定の詳細については、66 ページの「SiteScope 共通ツールバー」の「ページ・オプション」を参照してください。

サイレント・ログインを使用して SiteScope を起動するには、ユーザ・ログイン名およびパスワードを SiteScope 暗号化ツールを使用して暗号化し、暗号化した情報をサイレント・ログイン URL に入力する必要があります。URL の形式は次のとおりです。

```
http:// <サーバ名> :8080/SiteScope?sis_silent_login_type=encrypted&login=  
<暗号化ログイン名> &password= <暗号化パスワード>
```

SiteScope サイレント・ログイン URL の作成方法の詳細については、51 ページの「サイレント・ログイン URL の作成方法」を参照してください。

SiteScope Failover Manager の使用

HP SiteScope Failover Manager は、自動フェールオーバー機能を備えた特殊なバージョンの SiteScope です。プライマリ・システムが異常停止したり、一時的に稼動を中止する場合に、自動的にプライマリ・システムの機能をスタンバイ・サーバに切り替えます。

SiteScope Failover Manager には次の利点があります。

- ▶ SiteScope 設定共有は次のとおりです。
 - ▶ SiteScope がフェールオーバー・マシンにアクセスできる共有リソースにインストールされる。
 - ▶ プライマリ SiteScope がダウンすると、SiteScope Failover Manager によってアクティブ化された SiteScope Failover プロセスが、プライマリ SiteScope がオフになった時点から監視を続行する。
 - ▶ 設定のコピーはなく（プライマリおよびフェールオーバー・サーバ間の設定変更は透過的）、SiteScope Failover Manager に行われる設定変更はプライマリ SiteScope で利用できる。
 - ▶ レポートのデータ損失がない。
- ▶ SiteScope Failover Manager のインストールは次のとおりです。
 - ▶ スタンドアロンの管理アプリケーションにはユーザ・インタフェースがないため、プライマリおよびフェールオーバー・インスタンスの管理を担当する。共有リソースではなく、ローカル・ディスクにインストールされる。
 - ▶ SiteScope Failover Manager は単一のフェールオーバー・マネージャ・マシンから同時に複数のプライマリを監視でき、フェールオーバー時に単一の SiteScope インスタンスが自動バックアップされる。
 - ▶ SiteScope Failover のデータ・ストレージ要件はプライマリ SiteScope より大幅に少ない。
- ▶ SiteScope Failover Manager は通常の SiteScope インストールで無料で利用できる。

SiteScope Failover Manager の使用の詳細については、< SiteScope >¥sisdocs¥pdfs¥SiteScopeFailover.pdf にある『HP SiteScope Failover Manager Guide』(PDF) を参照してください。

注：プライマリ SiteScope はすべて共有リソース上にインストールする必要があるため、このガイドで示されているインストール・パスは、共有リソース上の SiteScope インストール・パスとみなす必要があります。

JMX コンソールの使用

SiteScope には、Java 監視および管理 (JConsole) ツールが含まれています。このツールは、Java Management Extension (JMX) テクノロジを使用し、Java プラットフォーム上で実行されるアプリケーションのパフォーマンスおよびリソース消費に関する情報を提供します。

JConsole を使用して、リモート管理操作の実行、プロセスのパフォーマンス表示、SiteScope の問題領域のトラブルシューティングを行うことができます。このツールは、実運用環境のメモリ消費、スレッドなどに関する難しい問題のデバッグに役立つ場合があります。

JConsole ツールにアクセスするには、Windows プラットフォームの場合は < SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥java¥bin¥jconsole.exe を実行します (UNIX プラットフォームの場合は < SiteScope のルート・ディレクトリ > /java/bin/jconsole バイナリ・ファイル)。監視対象の SiteScope に応じて、ローカル、またはリモートとポート 27676 を選択します。

ヒント:

- ▶ JMX サーバへのアクセスはパスワードで保護されていないため (SiteScope の標準設定では JConsole パスワード認証は無効) , 不正侵入を防ぐために JMX パスワード認証を有効にすることをお勧めします。詳細については, 58 ページの「JMX サーバのパスワード保護の有効化 (任意指定)」を参照してください。
 - ▶ その他の JConsole 設定は変更しないことをお勧めします。
-

SiteScope 設定 API の使用

SiteScope には、大規模で動的な環境の管理に役立つ拡張 SOAP ベースの API が含まれています。この API では、SiteScope テンプレート、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、サーバの状況、タグの検索 / フィルタおよび設定を操作するためのサービスを提供します。各 API 呼び出しは、Windows または UNIX プラットフォームのコマンド・ラインから実行できます。

SiteScope API では次の操作がサポートされています。

SiteScope オブジェクト	アクション
テンプレート	<ul style="list-style-type: none"> ▶ テンプレートの管理 (テンプレートの作成 / 削除, テンプレート・コンテナの作成 / 削除, テンプレートのインポート) ▶ テンプレートのデプロイメント (モニタ, グループ, 警告, リモート・サーバ作成) ▶ テンプレートの更新による更新のデプロイメント (グループ, モニタ, 警告, リモート・サーバ)
グループ	グループの有効化 / 無効化, グループの削除
モニタ	モニタの有効化 / 無効化, モニタの削除, モニタの実行
警告	警告の有効化 / 無効化
リモート・サーバ	リモート・サーバ・プリファレンスの削除
状態	SiteScope サーバの状態 (アクティブ監視, 起動) に関する統計情報の取得
タグ	タグの作成, タグの値の追加, タグの詳細の編集, タグの値 (名前, 詳細) の編集, タグの削除
設定	SiteScope 設定の取得

SiteScope 設定 API は、Axis, WSIF など既知の Web サービス呼び出しフレームワークまたは任意のクライアント・アプリケーションによって呼び出すことができます。SiteScope ログイン名およびパスワードを使用して、API を呼び出し、設定変更やその他のアクションを実行することができます。

SiteScope API のサンプルは < SiteScope のインストール・ディレクトリ > `¥examples¥integrations¥api` ディレクトリにあります。API の使用方法の詳細については、`¥api` ディレクトリの `readme.txt` ファイルを参照してください。

SiteScope に含まれる API の詳細および API を活用するサンプルの Java コードについては、< SiteScope のインストール・ディレクトリ `¥examples¥integrations¥api¥doc¥javadoc.zip` にある『HP SiteScope API Reference』を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ この API のメソッドでは、メソッド呼び出しの一部として SiteScope ユーザおよびパスワードが要求されます。これらのメソッドを使用する前に、<SiteScope インストール >`¥groups¥master.config` のアクセス制御を定義する行を編集して「`_accessControlled=true`」に変更します。ユーザおよびパスワードは、平文でも暗号化してもかまいません。文字列を暗号化するには、< SiteScope インストール > `¥tools¥AutoDeployment¥encrypt_password.bat` を使用します。
- ▶ ユーザ名およびパスワードを持たないすべての API メソッドは SiteScope の今後のバージョンでは廃止されます。ユーザおよびパスワード認証を使用する類似の API メソッドの名前はすべて変更され、ほかのパラメータで同じメソッド名を使用しないように、`Ex` サフィックスが付きます (`enableGroupEx` など)。
- ▶ SiteScope ユーザのアクセス・レベルはメソッドの動作に影響します。たとえば、`getConfigurationSnapshot` と `getFullConfigurationSnapshot` を呼び出す場合、返されるマップにはユーザがアクセス権限を持つエンティティのみが含まれます。
- ▶ 以前のバージョンの API で作成されたアプリケーションを使用するには、`_accessControlled=false` を設定し、廃止された API を使用します。このような廃止されたメソッドは今後のバージョンではサポートされないため、セキュリティ保護されたバージョンの API メソッドを使用するようにアプリケーションを移行する必要があります。
- ▶ `_accessControlled=true` と設定して廃止された形式のメソッドを使用したり、`_accessControlled=false` と設定してセキュリティ保護されたメソッドを使用すると例外が発生します。

- ▶ **.bat** ファイルはサンプル専用であり、実運用のスクリプトを目的とはしていません。スクリプトは、要件に合わせて変更できます。特殊文字は、パラメータ値ではサポートされていません。
- ▶ **[プリファレンス]>[ユーザ管理プリファレンス]>[権限]>[警告]>[警告を一時的に無効化]** 権限が選択されていない場合、警告無効化 API はサポートされていません。
- ▶ サーバ上で一部の API 操作を無効にすることができます。これは、API を使用して設定をリモートで変更できないように、読み取り専用モードをサポートしています。

SiteScope 統合

SiteScope は、次のアプリケーションと統合することができます。

- ▶ **HP Business Service Management** : SiteScope は BSM のデータ・コレクタとして使用できます。BSM では、エンドユーザ、ビジネス・プロセス、システムに関するデータを受信し、レポートと分析でこのデータを使用します。すべてのモニタ、または選択したモニタのみが BSM に送信できる SiteScope 監視データを設定できます。詳細については、269 ページの「BSM の使用」を参照してください。
- ▶ **HP Diagnostics** : Diagnostics では SiteScope を使用してアプリケーション・サーバを監視します。SiteScope がこれらのアプリケーション・サーバに関するデータを Diagnostics に転送し、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。Diagnostics ではデータをレポートやグラフで表示します。詳細については、744 ページの「Diagnostics 統合の概要」を参照してください。
- ▶ **HP Operations Manager** : SiteScope が HP Operations Manager 製品と連携して、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理を組み合わせることができます。SiteScope では次の HP Operations Agent を使用します。
 - ▶ イベント・データを HP Operations Manager (HPOM) または BSM のオペレーション管理に転送するため、IT 運用の状況に関してより包括的で詳細な全容を把握できます。
 - ▶ SiteScope は自身で収集したメトリックス・データのデータ・ストレージとして機能できるため、HPOM および オペレーション管理 からそのデータを直接使用できます。

詳細については、307 ページの「HP Operations Agent を使用した Operations Manager と BSM での作業」を参照してください。

- ▶ **HP Network Node Manager (NNMi) : SiteScope は Network Node Manager i (NNMi) (ネットワーク監視に使用するイベント・コンソール) のデータ・コレクタとして使用できます。** SiteScope は NNMi が監視しているシステムのアプリケーション側を監視し、SNMP トラップを使用して SiteScope モニタから NNMi にイベント・データを転送します。SiteScope はメトリックス・データを NNMi にレポートすることもできます。詳細については、359 ページの「Network Node Manager i (NNMi) との連携」を参照してください。
- ▶ **汎用統合 :** SiteScope を使用して、SiteScope からの XML ファイルを受信できるほかのアプリケーションにデータを転送できます。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値のステータスに関する情報が含まれています。汎用的なデータ統合の詳細については、747 ページの「汎用データ統合の概要」を参照してください。SiteScope が受信側のアプリケーションに転送する統合ファイルに含まれる XML タグ、要素、属性の詳細なリファレンスについては、751 ページの「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」を参照してください。

ヒント : SiteScope と BSM および HPOM 製品との統合を使用および設定するうえでのベスト・プラクティスとトラブルシューティングについては、『Best Practices for the SiteScope-BSM/OM Integration』を参照してください。

SiteScope iPhone アプリケーションの使用

SiteScope iPhone アプリケーションは無料でダウンロードして、iPhone、iPad、または iPod touch を使用して、コンピュータから離れているときも監視対象の IT インフラストラクチャを追跡できます。

SiteScope iPhone アプリケーションを使用すると、次の操作を実行できます。

- ▶ SiteScope を検索してモニタ統計を表示し、その検索結果にアクションを実行し、問題を軽減できます（モニタ詳細の表示、モニタの有効化 / 無効化、モニタの実行、警告アクションの設定）。
- ▶ IT インフラストラクチャで問題が検出される場合は電子メール警告に応じません（警告の有効化 / 無効化、関連する警告の有効化 / 無効化、警告の確認、確認ログの表示）。
- ▶ 特定のモニタ、グループの一時的なレポートの生成、または特定の期間の警告を生成します。
- ▶ 選択したモニタとグループをお気に入りリストに追加します。

SiteScope iPhone アプリケーションは iPhone App Store (<http://www.apple.com/jp/iphone/apps-for-iphone/>) から入手できます。SiteScope iPhone アプリケーションのデモ・ムービーについては、<http://www.youtube.com/watch?v=MulAmO322nl>（英語サイト）を参照してください。

iPhone での SiteScope の使用の詳細については、SiteScope iPhone アプリケーションのヘルプを参照してください。

SiteScope iPhone アプリケーションで利用可能な機能の使用法に関するその他の情報については、SiteScope ヘルプの関連トピックを参照してください。

本項の内容

- ▶ 47 ページの「設定の要件」
- ▶ 47 ページの「注意事項および制限事項」

設定の要件

- ▶ iPhone に送信する警告を設定するには、< SiteScope のルート >
¥ **templates.mail** フォルダにある **MobileAppMail** テンプレートを使用します。
このテンプレートには電子メールからのアプリケーションの起動に使用できるリンクが含まれています。
- ▶ iPhone に送信する電子メール・テンプレートには **html** コンテンツを含める必要があります。これを有効にするには、**master.config** ファイルの **_defaultMailAlertContentType** プロパティの値を **=text/html** に設定します。
- ▶ iPhone で SiteScope をセキュア・モードで使用するには、**master.config** ファイルで **_accessControlled** プロパティを **=true** に設定する必要があります。設定しないと SiteScope ユーザ名とパスワードが無視されます。
- ▶ iPhone が正確なローカル時刻に設定されていることを確認します。

注意事項および制限事項

- ▶ 一時期間無効になっているモニタ (SiteScope ユーザ・インタフェースでまたは iPhone から無効化されていたかどうかに関係なく) は、サーバ時間に応じてモニタの詳細サマリに表示されます。
- ▶ iPhone から SiteScope ユーザ・アカウントを削除すると、そのアカウントのお気に入り保存されたモニタまたはグループも削除されます。
- ▶ SiteScope ユーザ・アカウント設定を変更すると (たとえば、プロファイルのプロトコルを **http** から **https** に変更、または SiteScope ポートの変更)、そのプロファイルに関連するすべてのモニタがお気に入りリストに表示されなくなります。
- ▶ レポートの生成時にメモリ・リソースの不足メッセージを受信した場合、iPhone のメモリ容量を空ける必要があります (実行中のアプリケーションを閉じるなど)。HP SiteScope の [iPhone Settings] の [**Minimum memory for reports (MB)**] スライダーを動かして、SiteScope レポートに必要なメモリを増加または減少できます。
- ▶ 3G シグナルを使用して SiteScope に iPhone アプリケーションを接続できず、ワイヤレス・ネットワーク (WiFi) を使用して接続できる場合は、SiteScope ポートを **80** に変更するようにしてください。一部のサービス・プロバイダでは (初期設定の SiteScope ポート、**8080** など) 一部のポートをブロックする場合があります。

タスク

SiteScope を使用した起動方法

このタスクでは、SiteScope を使用した起動方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 48 ページの「SiteScope のインストール」
- ▶ 48 ページの「SiteScope へのログオン」
- ▶ 49 ページの「設定 API からの SiteScope の管理 (任意指定)」
- ▶ 49 ページの「SiteScope の設定および管理」
- ▶ 49 ページの「その他のアプリケーションを使用して統合するための SiteScope の設定 (任意指定)」
- ▶ 49 ページの「SiteScope の監視の設定」
- ▶ 49 ページの「iPhone からの SiteScope へのアクセス (任意指定)」

1 SiteScope のインストール

監視するアプリケーションおよびオペレーティング・システムにアクセスする際に、サーバまたはプロセスとして実行する単一のサーバに SiteScope をインストールします。SiteScope のインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) を参照してください。

SiteScope 障害時の自動バックアップ監視用に SiteScope Failover Manager をインストールすることもできます。詳細については、39 ページの「SiteScope Failover Manager の使用」を参照してください。

2 SiteScope へのログオン

ブラウザまたは [スタート] メニューから SiteScope にアクセスするには、50 ページの「SiteScope へのアクセス方法」を参照してください。

また、サイレント・ログインを使用して初期ログイン・ページをスキップして、直接 SiteScope クライアントに進むこともできます。概念の詳細については、38 ページの「サイレント・ログインの使用」を参照してください。タスクの詳細については、51 ページの「サイレント・ログイン URL の作成方法」を参照してください。

3 設定 API からの SiteScope の管理（任意指定）

SiteScope 設定 API を使用して Windows または UNIX プラットフォームのコマンド・ラインから大規模で動的な環境を管理できます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。

4 SiteScope の設定および管理

SiteScope の使用準備をする際の推奨作業順序については、55 ページの「SiteScope の設定および管理方法」を参照してください。

5 その他のアプリケーションを使用して統合するための SiteScope の設定（任意指定）

SiteScope ではその他のさまざまなアプリケーションで、データ・コレクタとして使用できます。詳細については、44 ページの「SiteScope 統合」を参照してください。

6 SiteScope の監視の設定

SiteScope で基本的な監視構造を手動で作成、または SiteScope テンプレートを 사용하여一括デプロイメントできます。

- ▶ SiteScope で基本的な監視構造を（作成したグループに個別にモニタを追加して）作成するには、59 ページの「SiteScope の監視用の設定方法」を参照してください。
- ▶ 組織の異なる IT 要素の監視を標準化するテンプレートを使用するには、62 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート」を参照してください。

7 iPhone からの SiteScope へのアクセス（任意指定）

コンピュータから離れているときに監視対象 IT インフラストラクチャを追跡して、監視の特定のアクションを実行するには、SiteScope iPhone アプリケーションを使用できます。詳細については、46 ページの「SiteScope iPhone アプリケーションの使用」を参照してください。

SiteScope へのアクセス方法

このタスクでは、SiteScope にアクセスするための方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 50 ページの「ブラウザから SiteScope へのアクセス（任意指定）」
- ▶ 50 ページの「[スタート] メニューから SiteScope へのアクセス（任意指定）」
- ▶ 50 ページの「リモート・ログインを使用した SiteScope へのアクセス（任意指定）」
- ▶ 51 ページの「結果」

ブラウザから SiteScope へのアクセス（任意指定）

SiteScope にアクセスするには、Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準アドレスは、`http:// <サーバ名> :8080/SiteScope` です。

[スタート] メニューから SiteScope へのアクセス（任意指定）

Windows プラットフォームでは、[スタート] メニューからも SiteScope にアクセスできます。[スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [HP SiteScope を開く] をクリックします。

リモート・ログインを使用した SiteScope へのアクセス（任意指定）

サイレント・ログインを使用して SiteScope にアクセスできます。これにより、ログイン・ページをスキップし、サイレント・ログイン・アドレスを使用して特定のユーザ名とパスワードに対するユーザ・アカウントを直接開くことができます。

概念の詳細については、38 ページの「サイレント・ログインの使用」を参照してください。

タスクの詳細については、51 ページの「サイレント・ログイン URL の作成方法」を参照してください。

結果

SiteScope が初めてデプロイされた場合は、インタフェース要素の初期化のために遅延が生じます。SiteScope に接続すると、SiteScope の [ダッシュボード] ビューが開きます。

注：このアカウントとその権限の使用を制限するには、ユーザ名とログイン・パスワードを含めるように管理者アカウント・プロファイルを編集する必要があります。SiteScope によって SiteScope にアクセスする前にログイン・ダイアログが表示されます。管理者ユーザにユーザ名およびパスワードが定義されていない場合、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。管理者アカウント・プロファイルの編集方法の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

サイレント・ログイン URL の作成方法

このタスクでは、サイレント・ログイン URL の作成方法について説明します。サイレント・ログイン URL を使用すると、SiteScope のログイン・ページを表示せずに指定した SiteScope サーバに直接ログオンできます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 52 ページの「ユーザ・プロファイルの作成」
- ▶ 53 ページの「ユーザ権限の設定（任意指定）」
- ▶ 53 ページの「ユーザ・プロファイルの暗号化」
- ▶ 54 ページの「ユーザ・プロファイル用 SiteScope サイレント・ログイン URL の作成」
- ▶ 54 ページの「結果」

1 ユーザ・プロフィールの作成

[**プリファレンス**] コンテキストで、[**ユーザ管理プリファレンス**] メニューをクリックし、ユーザ・アカウントを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、862 ページの「[**ユーザ管理プリファレンス**] ページ」を参照してください。

注：管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。ほかのアカウントを作成するには、ユーザ・ログイン名およびパスワードを含めるように最初に管理者アカウント・プロフィールを編集する必要があります。

例：

表示名「**一般ユーザ**」を持つユーザ・プロフィールが、ログイン名 **Regular**、パスワード **Regular** で追加されました。

メイン設定

表示ユーザ名: Regular User

ログイン名: Regular

パスワード:

パスワードの確認:

LDAP サービス プロバイダ:

LDAP セキュリティ プリンシパル:

ログインを無効にする

許可されているグループ: SiteScope

権限

2 ユーザ権限の設定（任意指定）

新規ユーザ / ユーザの編集ダイアログ・ボックスの「権限」セクションで、ユーザのアクション権限を設定します。標準設定では、新規ユーザにはほかのユーザのプリファレンスの変更または削除権限を除く、すべての権限が与えられます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、868 ページの「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 ユーザ・プロファイルの暗号化

ユーザ・ログイン名およびパスワードを暗号化します。

- a コマンド・プロンプトで、ログイン名についてコマンド **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %tools%AutoDeployment%encrypt_password.bat <ログイン名>** を実行します。

例を次に示します。

```
C:%SiteScope%tools%AutoDeployment%encrypt_password.bat Regular
```

Regular の暗号化値は (sisp)uq1zrGl1lms= です。

- b <http://www.blooberry.com/indexdot/html/topics/urlencoding.htm>（英語サイト）のリストに従って、非標準の URL 文字をエンコードします。1 文字の URL エンコーディングは、% 記号とその後に続く 2 桁の文字表現で構成されます。

この例では、= が予約文字であるため %3D で置き換えます。その結果、Regular のエンコード値は (sisp)uq1zrGl1lms%3D になります。

- c 暗号化値をサイレント・ログイン URL に追加できるように保存します。
- d ログイン・パスワードについて暗号化プロセスを繰り返します（ログイン名と異なる場合）。

4 ユーザ・プロフィール用 SiteScope サイレント・ログイン URL の作成

Web ブラウザに SiteScope サイレント・ログイン URL を入力します。次の URL 形式を使用します。

```
http:// <サーバ名> :8080/SiteScope?sis_silent_login_type=
encrypted&login= <暗号化ログイン名> &password=
<暗号化パスワード>
```

<暗号化ログイン名> と <暗号化パスワード> は暗号化したログイン名とパスワードで置き換えます。

5 結果

SiteScope はログイン・ページをスキップし、指定されたユーザ名およびパスワードに対するユーザ・アカウントを直接開きます。

注：ログイン名およびパスワード・パラメータに入力した値がどちらも存在しないか見つからない場合、または認証が失敗した場合は、SiteScope のログイン・ページが表示されます。

SiteScope の設定および管理方法

このタスクでは、SiteScope の使用準備をする際の推奨作業順序について説明します。

SiteScope Failover Manager を使って作業する場合の注意事項 : SiteScope Failover Manager を使用してバックアップのインフラストラクチャ監視を使用可能にする場合、推奨作業順序については、< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥sisdocs¥pdfs¥SiteScopeFailover.pdf にある『HP SiteScope Failover Manager Guide』(PDF) を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 55 ページの「SiteScope へのログオン」
- ▶ 55 ページの「SiteScope ライセンスの入力」
- ▶ 56 ページの「SiteScope のプリファレンスの設定」
- ▶ 58 ページの「リモート・サーバの接続プロファイルの設定」
- ▶ 58 ページの「ミドルウェア・ドライバのインストール (必要な場合)」
- ▶ 58 ページの「JMX サーバのパスワード保護の有効化 (任意指定)」
- ▶ 59 ページの「結果」

1 SiteScope へのログオン

Web ブラウザで SiteScope のアドレスを入力します。標準アドレスは、<http://localhost:8080/SiteScope> です。

2 SiteScope ライセンスの入力

インストール時に SiteScope のライセンス情報を入力しなかった場合、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ライセンス] で入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、696 ページの「ライセンス ファイル」を参照してください。

3 SiteScope のプリファレンスの設定

SiteScope 内の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定値を設定します。

- a **SiteScope ユーザ・アカウントを作成します。** 管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。このアカウントは SiteScope を管理するすべての権限を持ち、アカウントを制限しなければ、製品にアクセスするすべてのユーザが使用します。組織の要件に基づいて、その他のユーザ・アカウントを作成して設定します。タスクの詳細については、851 ページの「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法」を参照してください。

注： 管理者ユーザにユーザ名およびパスワードが定義されていない場合、SiteScope はログイン・ページをスキップして自動的にログインします。

- b **SiteScope の電子メール・プリファレンスでサーバを設定します。** 管理者の電子メール・アドレスを設定し、SiteScope がユーザへの電子メール・メッセージや警告の送信に使用できるメール・サーバを指定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、791 ページの「[電子メール プリファレンス] ページ」を参照してください。
- c **ログ・プリファレンスを調整します。** 監視データを SiteScope サーバ上に保持する日数を設定します。標準では、SiteScope は 40 日以上経過したログを削除します。監視データを外部データベースにエクスポートする場合は、データベースと必要なドライバを準備し、ログのプリファレンスを適切に設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、784 ページの「[ログ プリファレンス] ページ」を参照してください。
- d **SiteScope オブジェクトの資格情報を設定します。** [資格情報のプリファレンス] を使用して、ユーザ認証を必要とする SiteScope オブジェクトの資格情報を保存、管理します。タスクの詳細については、893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。

e SiteScope 統合を設定します (必要に応じて)。

- ▶ BSM に報告するよう SiteScope を設定します。これにより、BSM にレポートする SiteScope 監視データとトポロジを記録できます。タスクの詳細については、288 ページの「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」を参照してください。
 - ▶ HP Operations Manager (HPOM) 統合を設定します。これにより、SiteScope イベントの送信および HPOM と BSM 製品への測定値データのレポートが可能になります。HPOM および BSM へのイベント送信の詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。HPOM および BSM への測定値のレポートの詳細については、349 ページの「SiteScope から HP Operations Agent にメトリックスをレポートできるようにする方法」を参照してください。
 - ▶ HP Diagnostics 統合を設定します。これにより、Diagnostics が監視するアプリケーション・サーバに関する包括的な情報を表示できるようにします。ユーザ・インタフェースの詳細については、769 ページの「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
 - ▶ 汎用データ統合を設定します。これにより、直接統合されていないアプリケーションに SiteScope データを転送できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、764 ページの「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
 - ▶ Network Node Manager i (NNMi) 統合を設定します。これにより、SiteScope イベントの送信および NNMi への測定値データのレポートが可能になります。NNMi へのイベント送信の詳細については、363 ページの「NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法」を参照してください。NNMi への測定値のレポートの詳細については、366 ページの「メトリック・データを NNMi にレポートするための SiteScope の設定方法」を参照してください。
- f** さらに、必要に応じてほかの SiteScope プリファレンスも設定できます。詳細については、104 ページの「プリファレンス・メニュー」を参照してください。

4 リモート・サーバの接続プロファイルの設定

セキュリティ要件に応じて、監視するリモート・サーバの接続方法を指定します。

SiteScope によるリモート Windows サーバのデータ監視の有効化の詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

SiteScope によるリモート UNIX サーバのデータ監視の有効化の詳細については、596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

5 ミドルウェア・ドライバのインストール（必要な場合）

リモート・データベースとの接続用のミドルウェア・ドライバと、ドライバを必要とするモニタ用のアプリケーションをインストールします。

詳細については、各モニタのヘルプを参照してください。

6 JMX サーバのパスワード保護の有効化（任意指定）

SiteScope に組み込まれた JMX サーバへの不正侵入を防止するため、次のシステム・プロパティを設定して JVM の起動時にパスワード保護を有効にします。

`-Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=true`

- ▶ Windows プラットフォームの場合、Windows レジストリ設定 `HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\SiteScope\serviceParam` にこの引数を追加するか、置き換えます。

標準設定では、`serviceParam` の -

`Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate` パラメータは `false` に設定されています。

- ▶ UNIX プラットフォームの場合、`< SiteScope のルート・ディレクトリ > /bin/start-monitor` スクリプトにこの引数を追加する必要があります。

JVM の設定の詳細については、Java Oracle のドキュメント

(<http://download.oracle.com/javase/1.5.0/docs/guide/management/agent.html> (英語サイト)) を参照してください。

JMX コンソールの詳細については、40 ページの「JMX コンソールの使用」を参照してください。

7 結果

これで SiteScope を使用できるようになりました。

- ▶ SiteScope での基本的な監視構造の作成の詳細については、59 ページの「SiteScope の監視用の設定方法」を参照してください。
- ▶ テンプレートを作成および開発し、標準化したグループ構造、命名規則、設定を使用して監視のデプロイメントを迅速化する方法の詳細については、962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。

SiteScope の監視用の設定方法

このタスクでは、SiteScope で作成したグループにモニタを個別に追加して基本的な監視構造を作成する際の作業順序について説明します。

ヒント: または、SiteScope テンプレート、ソリューション・テンプレート、テンプレート変更適用ウィザード、自動テンプレート・デプロイメントを使用して、企業内のさまざまな IT 要素の監視を標準化できます。一括デプロイメントの場合、これらの方法は基本的な監視方法よりも効率的です。テンプレートを使用した監視ソリューションの設定に関連する手順を示すフローチャートについては、62 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート」を参照してください。

テンプレート・ワークフローの詳細については、962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 60 ページの「前提条件」
- ▶ 60 ページの「グループとサブグループの作成」
- ▶ 60 ページの「モニタ・インスタンスの作成」
- ▶ 61 ページの「モニタの依存関係の設定（任意指定）」
- ▶ 61 ページの「モニタのしきい値の設定（任意指定）」
- ▶ 61 ページの「モニタおよびグループの警告のセットアップ（任意指定）」
- ▶ 61 ページの「モニタおよびグループのレポートのセットアップ（任意指定）」
- ▶ 61 ページの「結果」

1 前提条件

SiteScope に監視を設定する前に、インストール後の管理タスクの実行が終了していることを確認します。

タスクの詳細については、55 ページの「SiteScope の設定および管理方法」を参照してください。

2 グループとサブグループの作成

実装するモニタ階層に従ってグループを作成します。これにより、モニタと関連付けられた警告のデプロイメントを管理しやすくし、環境や組織への有効性を高めることができます。たとえば、場所、サーバ・タイプ、ネットワーク・リソースなどのグループを作成できます。

タスクの詳細については、383 ページの「グループの管理方法」を参照してください。

3 モニタ・インスタンスの作成

グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。

タスクの詳細については、414 ページの「モニタのデプロイ方法」を参照してください。

4 モニタの依存関係の設定（任意指定）

グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。

概念の詳細については、397 ページの「グループの依存関係の監視」を参照してください。

5 モニタのしきい値の設定（任意指定）

ベースラインを使用して 1 つまたは複数のモニタのしきい値を設定するか、各モニタ・インスタンスについてレポートされるステータスを決定するロジック条件を手動で設定します。

- ▶ ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法の詳細については、418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。
- ▶ 手動でモニタしきい値を設定するためのユーザ・インタフェースの詳細については、458 ページの「しきい値設定」を参照してください。

6 モニタおよびグループの警告のセットアップ（任意指定）

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスに変化したときに通知を送信する警告を作成します。

タスクの詳細については、1443 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

7 モニタおよびグループのレポートのセットアップ（任意指定）

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

タスクの詳細については、1508 ページの「レポートの作成方法」を参照してください。

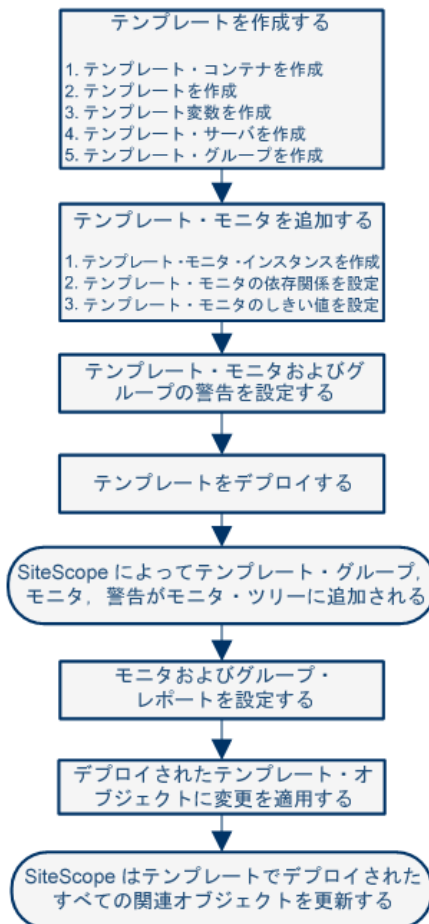
8 結果

SiteScope は、モニタ・ツリーの指定されたコンテナにモニタ、警告、レポートを追加します。

👉 テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート

次のフロー・チャートは、SiteScope テンプレートおよびテンプレート変更適用ウィザードを使用して SiteScope 監視ソリューションを設定するために必要な手順を示します。テンプレートは、一連のグループ構造、モニタ・タイプ、設定を 1 つの構造に標準化し、繰り返しデプロイおよび更新できるようにするために使用します。

詳細については、962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。



3

SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースについて (64 ページ)
- ▶ コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行 (68 ページ)
- ▶ 複数のグループやモニタに対するアクションの実行 (68 ページ)
- ▶ SiteScope オブジェクトのコピーと移動 (69 ページ)

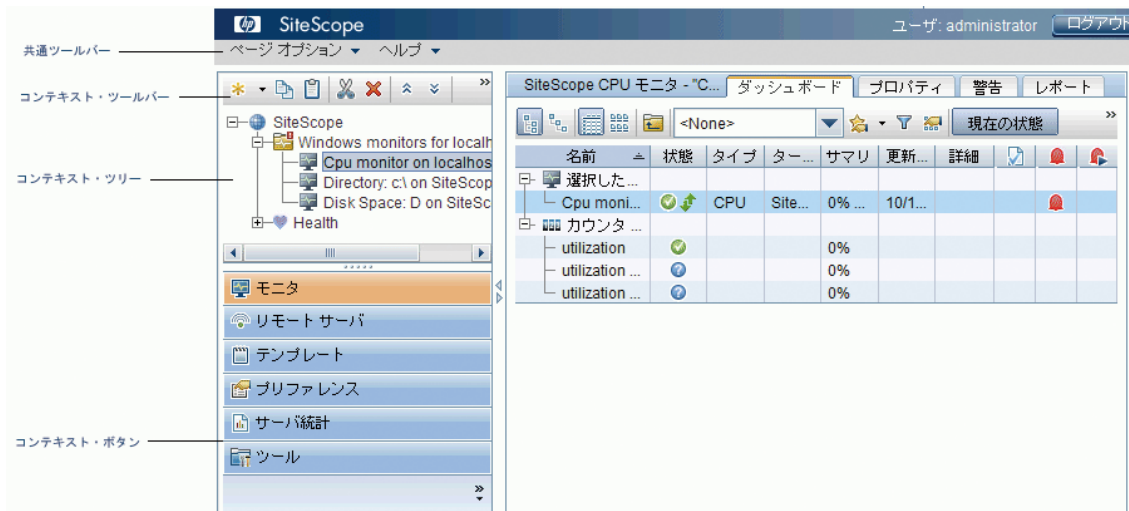
参照情報

- ▶ SiteScope キーボード・ショートカット (72 ページ)
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの操作 (73 ページ)

概念

SiteScope ユーザ・インタフェースについて

SiteScope に接続すると、SiteScope の [ダッシュボード] ビューが次のように開きます。ユーザ名を入力して SiteScope にログオンした場合は、ユーザ名がウィンドウの右上に表示されます。



SiteScope ウィンドウには、次の主要な要素が含まれます。

- ▶ **SiteScope 共通ツールバー** : ページ・オプション、ドキュメント、追加のリソースにアクセスできます。このツールバーはウィンドウの上部にあります。詳細については、66 ページの「SiteScope 共通ツールバー」を参照してください。
- ▶ **SiteScope コンテキスト・ツールバー** : 選択した SiteScope コンテキスト内でよく使用されるコマンドのボタンが含まれます。詳細については、74 ページの「ツリー・ツールバーのボタン」を参照してください。
- ▶ **SiteScope コンテキスト・ツリー** : ツリー構造で SiteScope オブジェクトを作成、管理できます。詳細については、81 ページの「モニタ・ツリー」、93 ページの「リモート・サーバ・ツリー」、95 ページの「テンプレート・ツリー」を参照してください。

- ▶ **SiteScope コンテキスト・ボタン** : SiteScope モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス, サーバ統計, 診断ツールにアクセスできます。詳細については, 67 ページの「SiteScope コンテキスト・ボタン」を参照してください。

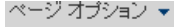
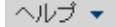


注 : SiteScope の以前のバージョンで利用できた SiteScope クラシック・インタフェース (URL は `http:// < sitescope ホスト > :8888`) は, SiteScope の管理には使用できなくなりました。詳細については, 『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』 (PDF) の「SiteScope クラシック・インタフェース」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 66 ページの「SiteScope 共通ツールバー」
- ▶ 67 ページの「SiteScope コンテキスト・ボタン」

SiteScope 共通ツールバー

SiteScope 共通ツールバーは、SiteScope ウィンドウの上部にあり、すべてのコンテキストからアクセスできます。次のボタンが含まれます。







UI 要素	説明
	<p>次のページ・オプションを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ お気に入りに追加：現在の SiteScope ビューをブラウザのお気に入りのリストに追加できます。 ▶ ユーザのお気に入りにレイアウトを保存：現在のビューを特定の SiteScope ユーザの標準設定のレイアウトとして保存できます。
	<p>SiteScope のヘルプ、特定のウィンドウのコンテキスト・センシティブ・ヘルプ、リリース・ノート、その他の追加オンライン・リソースにアクセスできます。</p> <p>また、ほとんどのページまたはダイアログ・ボックスでユーザ・インタフェース要素の説明を表示できます。この機能を有効にするには、特定のページまたはダイアログ・ボックスで [クイック ヘルプ]  ボタンをクリックし、マウス・ポインタを要素ボックスの上に置いてヒントの説明を表示します。この機能を使用不能にするには、[クイック ヘルプ] ボタンをもう一度クリックします。</p>
	SiteScope セッションからログアウトします。

モニタ・ツリーのビューをカスタマイズして、作業中の SiteScope 要素のみを表示することができます。また、検索 / フィルタ・タグをグループ、モニタ、レポート、警告に割り当てて、選択内容をさらに絞り込むこともできます。このトピックの詳細については、116 ページの「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」を参照してください。

SiteScope では、グローバル置換を使用して複数のモニタ、グループ、または複数の SiteScope を対象にモニタ設定を変更できます。グローバル置換のユーザ・インタフェースの詳細については、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」を参照してください。

SiteScope コンテキスト・ボタン

SiteScope には次のコンテキストがあり、左側の表示枠から使用できます。

UI 要素	説明
 モニタ	<p>モニタ・ツリーで表された階層で SiteScope グループおよびモニタの作成、管理できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、81 ページの「モニタ・ツリー」を参照してください。</p>
 リモートサーバ	<p>SiteScope がリモートの Windows および UNIX 環境で実行されているシステムとサービスを監視できるように、接続プロパティをセットアップできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、93 ページの「リモート・サーバ・ツリー」を参照してください。</p>
 テンプレート	<p>テンプレートを使用して、標準化した監視パターンを、インフラストラクチャの複数の要素へデプロイできます。事前に設定された SiteScope ソリューション・テンプレートを使用することも、独自のテンプレートを作成および管理することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、95 ページの「テンプレート・ツリー」を参照してください。</p>
 プリファレンス	<p>SiteScope 内のほとんどの管理タスクに関連する特定のプロパティおよび設定値を設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、104 ページの「プリファレンス・メニュー」を参照してください。</p>
 サーバ統計	<p>主要な SiteScope サーバ・パフォーマンス・メトリックスを表示できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、106 ページの「[サーバ統計]メニュー」を参照してください。</p>
 ツール	<p>SiteScope の問題のトラブルシューティングや、モニタ設定に役立つ診断ツールを表示できます。利用可能なツールの詳細については、160 ページの「SiteScope ツールの概要」を参照してください。</p>

コンテキスト・ツリーでのアクションの操作と実行

コンテキスト・ツリーの操作、アクションの実行、オブジェクト・プロパティの編集にはいくつかの方法があります。

コンテキスト・ツールバーを使用してアクションを実行するか、またはコンテキスト・ツリー内でオブジェクトを選択して右クリックし、そのオブジェクトのメニュー・オプションにアクセスできます。たとえば、モニタ・ツリーで SiteScope ノードを右クリックした場合、その SiteScope ノードに対して実行できるアクションのみが表示されたメニューから選択します。複数のグループおよびモニタに対してアクションを実行することもできます。詳細については、68 ページの「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」を参照してください。

コンテキスト・ツリー・オブジェクトとツリーのオブジェクトごとに使用可能なショートカット・メニュー・オプションの詳細については、81 ページの「モニタ・ツリー」、93 ページの「リモート・サーバ・ツリー」、95 ページの「テンプレート・ツリー」、104 ページの「プリファレンス・メニュー」、106 ページの「[サーバ統計] メニュー」、108 ページの「[ツール] メニュー」を参照してください。

複数のグループやモニタに対するアクションの実行

複数の SiteScope オブジェクトに対して一括操作を実行するには、モニタとグループの管理機能を使用します。この機能では、モニタ・ツリーの複数の SiteScope オブジェクトに対してモニタの移動、コピー、削除、実行、モニタの有効化 / 無効化、関連付けられた警告アクションの有効化 / 無効化を実行できます。フィルタ・オプションを使用し、フィルタ基準に基づいてフィルタしたグループとモニタのリストを作成することもできます。

[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスを使用して、組織の展開可能な階層ビューから 1 つ以上のグループとモニタを選択し、実行するアクションを選択できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、77 ページの「[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope オブジェクトのコピーと移動


SiteScope オブジェクトをコンテキスト・ツリー内の別の場所にコピーできます。さらに、SiteScope オブジェクトをテンプレートにコピーできます。また、モニタとグループをその内容とともにモニタ・ツリーの別のグループに移動することもできます。

各オブジェクトを区別できるように、オブジェクト名は親コンテナ内で一意にする必要があります。たとえば、SiteScope オブジェクトをコピーまたは移動する場合、同じグループ内でまったく同じ名前を持つ 2 つのモニタは作成できません。SiteScope オブジェクトのコピーを作成し、その名前がコンテナ内の既存のオブジェクトと同じである場合、SiteScope では自動的にサフィックス (数字) がオブジェクト名の最後に追加されます。たとえば、モニタ **Mail Flow** のコピーを作成し、同じモニタ・グループ内に貼り付けると、SiteScope では自動的に名前が **Mail Flow(1)** に変更されます。

次の SiteScope オブジェクトをコピーまたは移動できます。

SiteScope オブジェクト	操作と説明
グループ	<p>コピー / 貼り付け : モニタ・グループ (サブグループ, モニタ, 警告, レポートを含む) を同じまたは別のモニタ・グループにコピーします。</p> <p>切り取り / 貼り付け : モニタ・グループ (サブグループ, モニタ, 警告, レポートを含む) を別のモニタ・グループに移動します。</p> <p>テンプレートにコピー : モニタ・グループ (モニタ, 警告, レポートを含む) をテンプレートにコピーします。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタ・グループをそのサブグループに移動またはコピーすることはできません。 ▶ 警告やレポートのターゲットであるグループを移動し、その警告やレポートを移動しないと、そのグループは警告やレポートのターゲットから削除されます。 ▶ ベースラインを使用してしきい値を設定したモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値は一緒にコピーまたは移動されません。

SiteScope オブジェクト	操作と説明
<p>モニタ</p>	<p>コピー / 貼り付け : モニタ (警告, レポートを含む) を同じまたは別のモニタ・グループにコピーします。</p> <p>切り取り / 貼り付け : モニタ (警告, レポートを含む) を別のモニタ・グループに移動します。</p> <p>テンプレートにコピー : モニタ (警告, レポートを含む) をテンプレートにコピーします。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 警告やレポートのターゲットであるモニタを移動し, その警告やレポートを移動しないと, そのモニタは警告やレポートのターゲットから削除されます。 ▶ モニタをコピーしたら, 通常はモニタが対象とするシステムまたはアプリケーションを変更する必要があります。変更しない場合, コピーされたモニタは元のモニタ・インスタンスの監視アクションを複製します。 ▶ ベースラインを使用してしきい値を設定したモニタをコピーまたは移動する場合, ベースラインしきい値は一緒にコピーまたは移動されません。
<p>リモート・サーバ</p>	<p>テンプレートにコピー : リモート・サーバ・プロファイルをテンプレートにコピーします。</p>
<p>テンプレート・コンテナ</p>	<p>貼り付け / 貼り付け : テンプレート・コンテナをコピーして別のテンプレート・コンテナまたは SiteScope ルートに貼り付けます。</p>
<p>テンプレート</p>	<p>コピー / 貼り付け : テンプレート (グループ, モニタ, 警告, レポートを含む) をテンプレート・コンテナにコピーします。</p>
<p>テンプレート・グループ</p>	<p>コピー / 貼り付け : テンプレート・グループ (サブグループ, モニタ, 警告, レポートを含む) をテンプレート (テンプレートにまだテンプレート・グループが含まれていない場合) またはテンプレート・グループにコピーします。</p>
<p>テンプレート・モニタ</p>	<p>コピー / 貼り付け : テンプレート・モニタ (警告, レポートを含む) をテンプレート・グループにコピーします。</p>
<p>警告</p>	<p>コピー / 貼り付け : 警告定義を ([警告] タブから) モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーの同じまたは別の場所 (グループまたはモニタ) にコピーします。</p>
<p>レポート</p>	<p>コピー / 貼り付け : レポート定義を ([レポート] タブから) モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーの同じまたは別の場所 (グループまたはモニタ) にコピーします。</p>

注: また、モニタ・ツリー・ツールバーの **[モニタとグループの管理]**  ボタンをクリックしても、複数のモニタとグループをターゲット・グループに移動またはコピーできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、77 ページの「**[モニタとグループの管理]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope オブジェクトのコピーと移動の詳細については、73 ページの「**SiteScope ユーザ・インタフェースの操作**」で関連する SiteScope ビューのショートカット・メニュー・オプションを展開してください。

参照情報

SiteScope キーボード・ショートカット

次のコマンドは、モニタ・ツリー、テンプレート・ツリー、リモート・サーバ・ツリーで対応するショートカット・キーを押して実行できます。

UI 要素	説明
CTRL+A	[新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、新規警告を作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1463 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+C	選択した項目をクリップボードにコピーします。
CTRL+D	選択した項目を削除します。
CTRL+F	[新規フィルタ] ダイアログ・ボックスが開き、新規フィルタを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、123 ページの「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+G	[新規グループ] ダイアログ・ボックスが開き、新規グループを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+J	[テンプレートの選択] / [グループの選択] ダイアログ・ボックスが開き、デプロイするテンプレート、またはテンプレートのデプロイ先にするグループを選択できます。[テンプレートの選択] のユーザ・インタフェースの詳細については、488 ページの「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。[グループの選択] のユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+M	[新規モニタ] ダイアログ・ボックスが開き、新規モニタを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、444 ページの「[新規モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
CTRL+R	[フィルタ] ダイアログ・ボックスで設定したフィルタをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、123 ページの「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CTRL+V	クリップボードの内容を選択した場所に貼り付けます。
CTRL+X	選択した項目を切り取ってクリップボードに置きます。
DELETE	選択内容を削除します。
F5	ツリーを最新の表示に更新します。

SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

本項の内容








- ▶ ツリー・ツールバーのボタン (74 ページ)
- ▶ [モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス (77 ページ)
- ▶ モニタ・ツリー (81 ページ)
- ▶ リモート・サーバ・ツリー (93 ページ)
- ▶ テンプレート・ツリー (95 ページ)
- ▶ プリファレンス・メニュー (104 ページ)
- ▶ [サーバ統計] メニュー (106 ページ)
- ▶ [ツール] メニュー (108 ページ)
- ▶ [警告] タブのショートカット・メニュー・オプション (112 ページ)
- ▶ [レポート] タブのショートカット・メニュー・オプション (113 ページ)






ツリー・ツールバーのボタン



ツリー・ツールバーから、さまざまな SiteScope ビューで共通の機能を実行できます。

アクセス方法	[モニタ] / [リモート サーバ] / [テンプレート] コンテキストを選択します。ツリー・ツールバーが左上の表示枠に表示されます。
重要な情報	SiteScope ビューによっては使用できないツールバー・ボタンがあります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 81 ページの「モニタ・ツリー」 ▶ 93 ページの「リモート・サーバ・ツリー」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
	新規作成 : SiteScope オブジェクト (グループ, モニタ, 警告, リモート・サーバ, テンプレート) を関連するツリーに追加する。追加できるオブジェクトはコンテキストによって異なります。
	テスト : サーバとの接続をテストする。 注 : リモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。
	詳細テスト : リモート・サーバの実行コマンドの結果を表示するテストを実行する。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。 注 : UNIX サーバのリモート・サーバ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。
	切り取り : 選択したオブジェクトをツリー内の別の場所に移動する。
	コピー : 選択したオブジェクトのコピーを作成する。
	貼り付け : オブジェクトをツリー内の選択した場所にコピーまたは移動する。
	削除 : 選択したオブジェクトをツリーから削除する。

UI 要素	説明
	<p>フィルタ：モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たす SiteScope オブジェクトのみを表示する。</p> <p>フィルタ・オプションを次から選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 新規フィルタ：フィルタを作成できる [新規フィルタ] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、123 ページの「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ フィルタをクリア：フィルタ設定をクリアする。 ▶ <既存のフィルタのリスト>：既存のフィルタのリストを表示する。次のオプションを指定できます。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 適用：左側のツリー表示枠にフィルタを適用する。 ▶ 編集：フィルタを編集できる [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、123 ページの「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ 削除：フィルタ・リストからフィルタを削除する。 <p>注：モニタ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>モニタとグループの管理：モニタ・ツリー内の複数のグループおよびモニタに対するアクション（コピー、移動、削除、モニタの実行、モニタの有効化 / 無効化、関連する警告の有効化 / 無効化）を実行できる。また、モニタ・ツリー内のオブジェクトのリストをフィルタできます。[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスの詳細については、77 ページの「[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：モニタ・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>更新：ツリーのデータを更新する。</p>
	<p>すべて折りたたみ：ツリーの分岐をすべて折りたたむ。</p> <p>注：モニタおよびテンプレート・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>
	<p>すべて展開：ツリーの分岐をすべて展開する。</p> <p>注：モニタおよびテンプレート・ツリーのツールバーでのみ使用できます。</p>

UI 要素	説明
	<p>パネルを表示 / 非表示 : ツリーを表示または非表示にし、右側の表示枠を展開または縮小する。</p>
	<p>クリックしてコンテキスト・ボタンの表示を設定する。次のオプションを指定できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Show More Buttons : クリックすると、次に表示率の高い SiteScope コンテキスト・ボタンが左側の表示枠に表示される。このボタンは、一部のコンテキスト・ボタンが表示されていない場合にのみ表示されます。 ▶ Show Fewer Buttons : クリックすると、表示率の最も低い SiteScope コンテキスト・ボタンが左側の表示枠で非表示になる。このボタンは、少なくとも 1 つのコンテキスト・ボタンが表示されている場合にのみ表示されます。 ▶ オプション : SiteScope コンテキスト・ボタンを表示する順序を選択する。順序を並べ替えるには、[上へ移動] ボタンと [下へ移動] ボタンを使用します。左側の表示枠でボタンを非表示にするには、コンテキストのチェック・ボックスをクリアします。標準設定では、すべてのコンテキスト・ボタンが選択されます (左側の表示枠に表示されます)。 ▶ Add or Remove Buttons : コンテキスト・ボタンの表示 / 非表示の状態を表示する。標準設定では、すべてのコンテキスト・ボタンが選択されます (左側の表示枠に表示されます)。ボタンを非表示にするには、コンテキストのチェック・マークをクリアします。






[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス





このダイアログ・ボックスでは、1つ以上のグループ、モニタ、または両方を選択し、選択したオブジェクトに対するアクション（コピー、移動、削除、モニタの実行、モニタの有効化 / 無効化、関連する警告の有効化 / 無効化）を実行できます。また、フィルタ・オプションを使用して、フィルタ基準に基づいてフィルタを適用したグループとモニタのリストを作成するか、モニタ・ツリー・フィルタで以前定義した既存のフィルタを選択することもできます。


アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーのツールバーで、[モニタとグループの管理]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ツールバー・アクションは、ユーザ権限と選択したオブジェクトに従って使用できる。 ▶ 状況コンテナは削除できない。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 383 ページの「グループの管理方法」 ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 119 ページの「新しい検索 / フィルタ・タグの作成および定義方法」
関連情報	68 ページの「複数のグループやモニタに対するアクションの実行」

第3章 • SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 	<p>フィルタ：モニタ・ツリーをフィルタし、定義した基準を満たす SiteScope オブジェクトのみを表示できる。フィルタを適用した後に、フィルタの名前がボタンに表示されます (フィルタを [モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスで作成した場合はカスタム、それ以外の場合は、モニタ・ツリー・フィルタで定義したフィルタの名前です)。</p> <p>[フィルタ] ボタン矢印をクリックして、フィルタ・オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">▶ 新規フィルタ：フィルタを作成できる [新規フィルタ] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、123 ページの「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。▶ フィルタをクリア：フィルタ設定をクリアする。▶ <既存のフィルタのリスト>：モニタ・ツリー・フィルタで以前定義した既存のフィルタのリストを表示する。
	<p>すべて選択：リストされたすべての SiteScope オブジェクトを選択する。</p>
	<p>選択範囲を解除：選択をクリアする。</p>
	<p>切り取り：選択したオブジェクトを宛先グループに移動する。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none">▶ 特定のモニタに定義された警告は、モニタと一緒に転送される。▶ モニタを移動すると、モニタ履歴が再起動し、モニタに生成されるレポートはモニタを移動した時点から開始される。履歴データはログ・ファイルに残りますが、モニタの移動後はそのモニタのレポートからアクセスできなくなります。グループの移動は、履歴に影響しません。▶ モニタを移動すると、グループとモニタの依存関係が壊れる可能性がある。移動するモニタの状態に依存するグループが 1 つ以上ある場合、モニタの移動後に依存関係を更新します。

UI 要素	説明
	コピー ：宛先グループに貼り付けるために選択したオブジェクトのコピーを作成する。
	貼り付け ：選択したオブジェクトを宛先グループに貼り付ける。SiteScope オブジェクトのコピーを作成し、その名前がコンテナ内の既存のオブジェクトと同じである場合、SiteScope では自動的にサフィックス（数字）がオブジェクト名の最後に追加されます。 例 ：モニタ Mail Flow のコピーを作成し、同じモニタ・グループ内に貼り付けると、SiteScope では自動的に名前が Mail Flow(1) に変更されます。
	削除 ：選択したオブジェクトをモニタ・ツリーから削除する。
	モニタの実行 ：選択したモニタ、またはグループ内に設定されている任意のモニタを実行する。結果を表示する情報ウィンドウが開きます。
	モニタの有効化 / 無効化 ：モニタ・プロパティの設定に関係なく、選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタを有効化または無効化する [モニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスを開く。[無効化] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [有効化] を選択するまでモニタは無効になります。ユーザ・インタフェースの詳細については、1319 ページの「 [グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
	<p>関連する警告の有効化 / 無効化 : [関連する警告の有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスが開き、モニタやグループ内の全モニタに関連付けられているすべての警告を有効化または無効化できる。詳細については、482 ページの「関連する警告の有効化 / 無効化」を参照してください。</p>
<p><SiteScope オブジェクト></p>	<p>アクションは、ツリーのチェック・ボックスを使用して選択したすべてのモニタとグループに適用される。ツリーの表示は、ダイアログ・ボックスへのアクセスおよび関連するアクション全体にわたって保存されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ オブジェクトを選択するには、オブジェクト名の左側にあるチェック・ボックスを選択する。グループまたはモニタの任意の組み合わせを選択できます。グループの左側に表示される <input type="checkbox"/> アイコンは、そのグループ内に含まれるモニタおよびサブグループのすべてが選択されていないことを示します。 ▶ オブジェクトのコピー先または移動先を選択するには、(チェック・ボックスではなく) オブジェクト名をクリックする。 <p>標準設定値 : 最上位レベルのグループが表示されるが、オブジェクトは選択されない。</p>





モニタ・ツリー




モニタ・ツリーは、ネットワーク環境内のシステムとサービスの体系を表します。ツリーには、インフラストラクチャ内のコンテナとオブジェクトが含まれます。「ショートカット・メニュー・オプション」では、モニタ・ツリーの各オブジェクトで使用できるショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ツリーのルート・ノードは SiteScope コンテナである。モニタ・ツリーには、SiteScope ノードが 1 つだけ存在します。SiteScope ノードの下のツリーにその他の要素をすべて追加します。 ▶ ノードを選択し、ポップアップ検索ボックスに検索する文字を入力して、モニタ・ツリー内のオブジェクトを検索できる。検索ボックスを閉じるには、ESC キーをクリックします。
関連情報	391 ページの「SiteScope モニタを使った作業」

モニタ・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	<p>個々の SiteScope サーバを表します。</p> <p>親: エンタープライズ・ノードまたはコンテナ。</p> <p>ツリーへの追加方法: 空の SiteScope プロファイルをインポートまたは追加する。</p>
	<p>SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ (有効化されたモニタを含む, モニタを含まない, または有効化されたモニタがない) を表します。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに警告が設定されている場合, グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに管理レポートが設定されている場合, グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p>親: SiteScope または SiteScope グループ。</p> <p>ツリーへの追加方法: グループが定義されている SiteScope を使用して作成, またはインポートする。</p>

UI 要素	説明
	<p>SiteScope モニタ（有効 / 無効）を表します。</p> <p>モニタに警告が設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>モニタに管理レポートが設定されている場合、モニタ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p>親： SiteScope グループまたはサブグループ、テンプレート、またはソリューション・テンプレート。</p> <p>ツリーへの追加方法： モニタが設定されている SiteScope を使用して作成、またはインポートする。</p>
	<p>SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる使用可能な状況モニタの集合を表します。</p> <p>親： SiteScope。</p> <p>ツリーへの追加方法： SiteScope オブジェクトを使用して自動的に追加される。</p>

SiteScope ショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
ベースライン設定	<p>SiteScope の下にあるすべてのモニタで、応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 計算：モニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定する。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。 ▶ レビューと有効化：計算したモニタとベースライン・データのサマリを表示する。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ▶ 削除：ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ▶ 状態レポート：SiteScope の下にあるすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報を表示する。 <p>このトピックの詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。</p>
テンプレートのデプロイ	<p>グループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、488 ページの「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	<p>CSV ファイルを使用してグループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、488 ページの「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
すべて展開	<p>SiteScope の下のすべてのサブツリーを開く。</p>

メニュー項目	説明
グローバル検索と置換	[グローバル検索と置換] ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」を参照してください。
モニタ・デプロイメント・ウィザード	このメニュー項目は、BSM のシステム可用性管理 (SAM) から SiteScope にアクセスするユーザのみが使用できる。[モニタ デプロイメント ウィザード] が開きます。このトピックの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。
[新規作成] > [警告]	SiteScope の新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1415 ページの「SiteScope 警告」を参照してください。
[新規作成] > [グループ]	新しい SiteScope グループを定義できる [新規グループ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
貼り付け	選択した（事前にコピーまたは切り取った）SiteScope オブジェクトを SiteScope ノードに貼り付ける。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できる。別の SiteScope から選択した（事前にコピーまたは切り取った）SiteScope オブジェクトを SiteScope ノードに貼り付けます。
[レポート] > [管理 / クイック / モニタ / 警告]	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。これらのレポートの詳細については、1501 ページの「SiteScope レポート」を参照してください。

メニュー項目	説明
[レポート] > [BSM 設定変更レポート]	このメニュー項目は、SiteScope が BSM に接続されている場合にシステム可用性管理からのみ使用できる。BSM の設定変更のログが表示されます。詳細については、1504 ページの「SiteScope レポート・タイプ」を参照してください。
ツール	特定のモニタの設定または編集時に使用可能です (SiteScope の管理者、または「 モニタ・ツールを使用 」権限を付与されたユーザのみ)。ツールが使用可能な場合には、クリックしてツールを開きモニタの既存のデータを入力として実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。利用可能なツールの詳細については、160 ページの「SiteScope ツールの概要」を参照してください。

グループのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
ベースライン設定	<p>グループ内のすべてのモニタで、応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 計算：グループからモニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定できます。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整し、境界を定義できます。 ▶ レビューと有効化：グループの計算したモニタとベースライン・データのサマリを表示します。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ▶ 削除：ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ▶ 状態レポート：グループ内のすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報を表示します。 <p>このトピックの詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。</p>
コピー	<p>グループとその内容（モニタ、警告、レポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーする。</p> <p>注：ベースラインしきい値が設定されているモニタを含むグループをコピーすると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
別の SiteScope にコピーする	<p>このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できる。別の SiteScope のグループとその内容（モニタ、警告、レポート）を SiteScope ノードのモニタ・グループまたはテンプレートにコピーします。</p>

メニュー項目	説明
<p>テンプレートにコピー</p>	<p>グループとその内容（モニタ、警告、レポート）をテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、972 ページの「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。</p>
<p>切り取り</p>	<p>グループとその内容（モニタ、警告、レポート）またはモニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループに移動する。</p> <p>注： ベースラインしきい値が設定されているモニタを含むグループを移動すると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
<p>削除</p>	<p>グループを削除する。</p> <p>注： コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、グループは削除できません。依存関係があるグループを削除するには、各依存関係の [警告ターゲット] と [レポートのターゲット] からグループを削除してから、グループを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるグループは削除できます。</p>
<p>テンプレートのデプロイ</p>	<p>グループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、488 ページの「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
<p>CSV を使用してテンプレートをデプロイ</p>	<p>CSV ファイルを使用してグループにデプロイするテンプレートを選択できる [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、488 ページの「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
<p>モニタの有効化 / 無効化</p>	<p>モニタ・プロパティの設定に関係なく、グループ内のモニタを有効化または無効化する [グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスを開きます。[無効化] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [有効化] を選択するまでモニタは無効になります。[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] のユーザ・インタフェースの詳細については、1319 ページの「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

メニュー項目	説明
すべて展開	グループの下のすべてのサブツリーを開く。
グローバル検索と置換	[グローバル検索と置換] ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」を参照してください。
モニタ・デプロイメント・ウィザード	このメニュー項目は、BSM のシステム可用性管理から SiteScope にアクセスするユーザのみが使用できる。[モニタデプロイメントウィザード] が開きます。このトピックの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザード」を参照してください。
[新規作成] > [警告]	グループの新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1415 ページの「SiteScope 警告」を参照してください。
[新規作成] > [グループ]	新しい SiteScope グループを定義できる [新規グループ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[新規作成] > [モニタ]	新しい SiteScope モニタを定義できる [新規モニタ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、444 ページの「[新規モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
貼り付け	選択したグループとその内容 (モニタ、警告、レポート) またはモニタとその内容 (警告とレポート) を指定したモニタ・グループに貼り付ける。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できる。別の SiteScope から選択したグループとその内容 (モニタ、警告、レポート) またはモニタとその内容 (警告とレポート) を指定したモニタ・グループに貼り付けます。

メニュー項目	説明
レポート	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、1501 ページの「SiteScope レポート」を参照してください。
モニタの実行	グループ内に設定されている任意のモニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。

モニタのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
ベースライン設定	<p>特定のモニタの応答時間の変動やインフラストラクチャのパフォーマンスの監視に使用するベースラインを作成できる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 計算：モニタを選択し、ベースラインの計算に使用する関連時間とスケジュールを指定できます。また、ベースラインの順守レベルを選択、微調整、境界を定義できます。 ▶ レビューと有効化：計算したモニタのベースライン・データのサマリを表示します。現在のモニタ設定の保存、失敗した操作の表示と再試行、ベースライン測定値グラフの表示、ベースライン設定の適用もできます。 ▶ 削除：ベースラインしきい値を削除、またはベースラインを計算した後に再計算できる。 ▶ 状態レポート：モニタのベースラインの状態に関する情報を表示します。 <p>このトピックの詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。</p>

メニュー項目	説明
コピー	<p>モニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーする。</p> <p>注： ベースラインしきい値が設定されているモニタをコピーすると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
別の SiteScope にコピーする	<p>このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できる。別の SiteScope のモニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループまたはテンプレートにコピーします。</p>
テンプレートにコピー	<p>モニタとその内容（警告とレポート）をテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、972 ページの「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。</p>
切り取り	<p>モニタとその内容（警告とレポート）をモニタ・グループに移動する。</p> <p>注： ベースラインしきい値が設定されているモニタを移動すると、ベースラインしきい値は静的しきい値（現在のパーセンタイル値）に置換され、モニタはベースライン・モードではなくなります。</p>
削除	<p>モニタを削除する。</p> <p>注： コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、モニタは削除できません。依存関係があるモニタを削除するには、各依存関係の [警告ターゲット] と [レポートのターゲット] からモニタを削除してから、モニタを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるモニタは削除できません。</p>
モニタの有効化 / 無効化	<p>モニタ・プロパティの設定に関係なく、モニタを有効化または無効化する [グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスを開きます。[無効化] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [有効化] を選択するまでモニタは無効になります。[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] のユーザ・インタフェースの詳細については、1319 ページの「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

メニュー項目	説明
グローバル検索と置換	[グローバル検索と置換] ウィザードを開く。このウィザードでは、モニタ、警告、グループ、プリファレンス、警告アクション、レポートのプロパティのグローバル検索と置換を実行できます。このトピックの詳細については、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」を参照してください。
[新規作成] > [警告]	モニタの新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1415 ページの「SiteScope 警告」を参照してください。
貼り付け	選択したモニタのコンテキスト・オブジェクトを指定したモニタに貼り付ける。
別の SiteScope から貼り付ける	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できる。別の SiteScope から選択したモニタのコンテキスト・オブジェクトを指定したモニタに貼り付けます。
レポート	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、1501 ページの「SiteScope レポート」を参照してください。
モニタの実行	モニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。

SiteScope 状況のショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
ログ記録の無効化	日次ログ・ファイルへの SiteScope サーバ状況データのログを無効にします。SiteScope サーバの状況の詳細は、1337 ページの「SiteScope サーバの状況」を参照してください。
ログ記録の有効化	日次ログ・ファイルへの SiteScope サーバ状況データのログを有効にします。SiteScope サーバの状況の詳細は、1337 ページの「SiteScope サーバの状況」を参照してください。
すべて展開	SiteScope 状況の下のすべてのサブツリーを開く。

メニュー項目	説明
[新規作成] > [警告]	状況の新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開く。このトピックの詳細については、1415 ページの「SiteScope 警告」を参照してください。
[新規作成] > [グループ]	新しい SiteScope グループを定義できる [新規グループ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[新規作成] > [モニタ]	新しい SiteScope モニタを定義できる [新規モニタ] ウィンドウを開く。ユーザ・インタフェースの詳細については、444 ページの「[新規モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
貼り付け	モニタおよびモニタ・グループを状況コンテナに貼り付ける。
欠落している状況モニタの再作成	状況コンテナから削除された状況モニタを復元できる。
レポート	定義する SiteScope レポートのタイプを選択できる。このトピックの詳細については、1501 ページの「SiteScope レポート」を参照してください。
モニタの実行	状況モニタを実行し、結果を表示する情報ウィンドウを開く。



リモート・サーバ・ツリー

モニタ・ツリーは、ネットワーク環境内に設定されているリモート・サーバを表します。「ショートカット・メニュー・オプション」では、リモート・サーバ・ツリーの各オブジェクトで使用できるショートカット・メニュー・オプションについて説明します。

アクセス方法	[リモートサーバ] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 581 ページの「リモート・サーバを使った作業」 ▶ 598 ページの「リモート・サーバのプロパティ・ページ」

リモート・サーバ・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	リモート・サーバ・ビューの Windows/UNIX リモート・サーバ・コンテナを表します。
	Windows / UNIX リモート・サーバを表します。 親 : Windows / UNIX リモート・サーバ・コンテナ。 追加方法 : Windows / UNIX リモート・サーバ・コンテナまたはテンプレート・ツリーで作成する。

リモート・サーバのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
新規 Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバ	新規 Microsoft Windows サーバまたは UNIX サーバを定義できる新規サーバ・ウィンドウを開く。

リモート・サーバのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
テンプレートにコピー	リモート・サーバをテンプレート・グループにコピーする。このトピックの詳細については、972 ページの「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。
削除	リモート・サーバを削除する。
詳細テスト	リモート・ホストで実行中のコマンドをテストし、定義されたユーザの権限を確認できる。UNIX サーバでのみ使用できます。
テスト	リモート・サーバへの接続をテストできる。


テンプレート・ツリー








モニタ・ツリーには、モニタ・グループへのデプロイメントに使用できる SiteScope ソリューション・テンプレート・セット、テンプレートの例、モニタ・デプロイメント・ウィザードのテンプレート、ユーザ定義のテンプレートが表示されます。「ショートカット・メニュー・オプション」では、テンプレート・ツリーの各オブジェクトで使用できるショートカット・メニュー・オプションについて説明します。



アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーが左側の表示枠に表示されます。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 941 ページの「SiteScope テンプレート」 ▶ 1081 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレート」 ▶ 976 ページの「[SiteScope テンプレート] ページ」 ▶ 979 ページの「テンプレート・ツリー - [警告] タブ」

テンプレート・ツリー・オブジェクト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	<p>個々の SiteScope サーバを表します。</p> <p>親: エンタープライズ・ノードまたはコンテナ。</p> <p>ツリーへの追加方法: 空の SiteScope プロファイルをインポートまたは追加する。</p>
	<p>ソリューション・テンプレート・コンテナを表します (使用可能 / 使用不能)。使用可能アイコンのあるライセンスが供与されたソリューション・テンプレートのみを設定できます。</p> <p>親: SiteScope。</p>
	<p>テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。</p> <p>親: SiteScope。</p> <p>テンプレート・ツリーへの追加方法: テンプレート・コンテナが定義された SiteScope を使用して作成、またはインポートする。</p>

UI 要素	説明
	<p>SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。</p> <p>親: テンプレート・コンテナ。</p> <p>テンプレート・ツリーへの追加方法: 作成する。</p>
	<p>SiteScope テンプレート・グループまたはサブグループ (モニタが有効 / モニタなしまたはモニタが無効) を表します。</p> <p>警告がテンプレート・グループまたはサブグループに設定されている場合, グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>管理レポートがテンプレート・グループまたはサブグループに設定されている場合, グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p>親: テンプレート。</p> <p>ツリーへの追加方法: テンプレート・グループが定義された SiteScope を使用して作成, またはインポートする。</p>
	<p>SiteScope テンプレート・モニタを表します (有効 / 無効)。</p> <p>警告がテンプレート・モニタに設定されている場合, モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>管理レポートがテンプレート・モニタに設定されている場合, モニタ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p> <p>親: テンプレート・グループまたはサブグループ, テンプレート, またはソリューション・テンプレート。</p> <p>ツリーへの追加方法: テンプレート・モニタが設定された SiteScope を使用して作成, またはインポートする。</p>

UI 要素	説明
	Windows / UNIX リモート・サーバを表します。 親 : テンプレート。 追加方法 : リモート・サーバ・ツリーまたはテンプレート・ツリーで作成する。
	テンプレートのデプロイ時に入力を促すプレースホルダとして使用する変数を表します。 親 : テンプレート。 テンプレート・ツリーへの追加方法 : 作成する。

SiteScope ショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
すべて展開	SiteScope の下のすべてのサブツリーを開きます。
インポート	テンプレート・ファイルをインポートできる [テンプレートのインポート] ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [テンプレート コンテナ]	新しいテンプレート・コンテナを定義できる [新規テンプレート コンテナ] ウィンドウを開きます。
貼り付け	SiteScope ルートの下でのテンプレート・コンテナを貼り付けます。

ソリューション・テンプレート・コンテナのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
すべて展開	コンテナ内のすべてのソリューション・テンプレートを表示するように、ソリューション・テンプレート・コンテナを展開します。

ソリューション・テンプレートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	ソリューション・テンプレートをコピーします。テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナにソリューション・テンプレートを貼り付けられます。
テンプレートのデプロイ	ソリューション・テンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
すべて展開	コンテナ内のすべてのソリューション・テンプレートを表示するように、ソリューション・テンプレート・コンテナを展開します。
XML の生成	ソリューション・テンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できる自動デプロイメント XML の生成ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、1051 ページの「自動テンプレート・デプロイメント」を参照してください。ユーザ・インタフェースの詳細については、1073 ページの「自動デプロイメント XML の生成」を参照してください。

テンプレート・コンテナのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート・コンテナとその内容をコピーします。SiteScope ルートの下のテンプレート・コンテナ、またはテンプレート・ツリー内で選択したテンプレート・コンテナを貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・コンテナとその内容を移動します。SiteScope ルートの下のテンプレート・コンテナ、またはテンプレート・ツリー内で選択したテンプレート・コンテナを貼り付けられます。
削除	テンプレート・コンテナを削除します。

メニュー項目	説明
テンプレートのデプロイ	1 つまたは複数のテンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
すべて展開	コンテナ内のすべてのテンプレート・オブジェクトを表示するように、テンプレート・コンテナを展開します。
エクスポート	テンプレート・ファイルをエクスポートできるテンプレートのエクスポート・ウィンドウを開きます。
XML の生成	コンテナ内のテンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できる自動デプロイメント XML の生成ウィンドウを開きます。
インポート	テンプレート・ファイルをインポートできる [テンプレートのインポート] ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [テンプレート]	新しいテンプレートを定義できる [新規テンプレート] ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [テンプレート コンテナ]	新しいテンプレート・コンテナを定義できる [新規テンプレート コンテナ] ウィンドウを開く。
貼り付け	テンプレートまたはテンプレート・コンテナをテンプレート・コンテナに貼り付けます。

テンプレートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレートとその内容をコピーします。テンプレートを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・コンテナに貼り付けられます。
切り取り	テンプレートとその内容を移動します。テンプレートを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・コンテナに貼り付けられます。
削除	テンプレートを削除します。
テンプレートのデプロイ	テンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
CSV を使用してテンプレートをデプロイ	CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイするグループを選択できる [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
すべて展開	テンプレートのすべてのサブツリーを開きます。
[新規作成] > [グループ]	新しいテンプレート・グループを定義できる新規グループ・ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注: このメニュー項目は、テンプレートにテンプレート・グループが含まれていない場合にのみ使用できます。
[新規作成] > [新規 UNIX リモートサーバ]	新しいリモート UNIX テンプレートを定義できる [新規 UNIX リモート サーバ] ウィンドウを開きます。 注: このメニュー項目は、テンプレートにリモート・サーバが含まれていない場合にのみ使用できます。

メニュー項目	説明
[新規作成] > [変数]	新しいテンプレート変数を定義できる [新規変数] ウィンドウを開きます。
[新規作成] > [新規 Microsoft Windows リモート サーバ]	新しいリモート NT テンプレートを定義できる [新規 Microsoft Windows リモート サーバ] ウィンドウを開きます。 注: このメニュー項目は、テンプレートにリモート・サーバが含まれていない場合のみ使用できます。
貼り付け	テンプレートにテンプレート・グループ、モニタ、または警告を貼り付けます。
変更の適用	テンプレート変更適用ウィザードが開き、デプロイしたグループのテンプレート・コンプライアンスをチェックします。また、テンプレートを更新するたびにテンプレートによってデプロイされる SiteScope オブジェクトを更新できます。

テンプレート変数のショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート変数をコピーします。テンプレート変数を、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート変数を移動します。テンプレート変数を、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
削除	テンプレート変数を削除します。

テンプレート・リモートのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	<p>テンプレート・リモート・サーバをコピーします。テンプレート・リモート・サーバを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。</p> <p>注: 1 つのテンプレートに追加できるのは 1 つのテンプレート・リモート・サーバのみです。これは、古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには適用されません。</p>
切り取り	<p>テンプレート・リモート・サーバを移動します。テンプレート・リモート・サーバを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。</p> <p>注: 1 つのテンプレートに追加できるのは 1 つのテンプレート・リモート・サーバのみです。これは、古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには適用されません。</p>
削除	テンプレート・リモートを削除します。

テンプレート・グループのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート・グループとその内容 (モニタ、警告、およびサブグループ) をコピーします。テンプレート・グループを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・グループとその内容 (モニタ、警告、およびサブグループ) を移動します。テンプレート・グループを、テンプレート・ツリー内のテンプレートに貼り付けられます。
削除	テンプレート・グループを削除します。
すべて展開	テンプレート・グループのすべてのサブツリーを開きます。
【新規作成】 > 【警告】	テンプレート・グループの新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、1415 ページの「SiteScope 警告」を参照してください。

メニュー項目	説明
[新規作成] > [グループ]	新しいテンプレート・サブグループを定義できる [新規グループ] ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
[新規作成] > [モニタ]	テンプレート・グループの新しい SiteScope モニタを定義できる新規モニタ・ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、444 ページの「[新規モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
貼り付け	選択したテンプレート・グループとその内容 (モニタ, 警告, およびサブグループ) をテンプレートに貼り付けます。

テンプレート・モニタのショートカット・メニュー・オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	テンプレート・モニタとその内容 (警告) をコピーします。テンプレート・モニタを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・グループに貼り付けられます。
切り取り	テンプレート・モニタとその内容 (警告) を移動します。テンプレート・モニタを、テンプレート・ツリー内のテンプレート・グループに貼り付けられます。
削除	テンプレート・モニタを削除します。
[新規作成] > [警告]	テンプレート・モニタの新しい警告を定義できる [新規警告] ウィンドウを開きます。このトピックの詳細については、1415 ページの「SiteScope 警告」を参照してください。
貼り付け	選択したテンプレート・モニタとその内容 (警告) をテンプレート・グループに貼り付けます。

プリファレンス・メニュー

プリファレンス・メニューは、SiteScope で使用できる大部分の管理タスクに関連する特定のプロパティと設定を設定できるプリファレンス・タイプを表します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキストを選択します。[プリファレンス] メニュー・オプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	管理者、または「<プリファレンス・タイプ>の編集」権限を付与されたユーザのみが、SiteScope プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<プリファレンスのタイプ>	<p>SiteScope のプリファレンスのタイプは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 一般プリファレンス：標準と任意指定の SiteScope ライセンス・キーの入力、表示機能の制御、セキュリティ・オプションの設定など、設定後のタスクの実行に使用します。詳細については、689 ページの「一般プリファレンス」を参照してください。 ▶ インフラストラクチャ・プリファレンス：SiteScope の実行方法を決定するグローバル設定の値の定義に使用します。詳細については、705 ページの「インフラストラクチャ・プリファレンス」を参照してください。 ▶ 統合プリファレンス：SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するために使用します。詳細については、739 ページの「統合プリファレンス」を参照してください。 ▶ ログ・プリファレンス：モニタのデータ・ログの累積と保管の制御に使用します。詳細については、781 ページの「ログ・プリファレンス」を参照してください。 ▶ 電子メール・プリファレンス：SiteScope 電子メール警告と状態レポートに使用される、電子メール・サーバの設定とプロファイルの定義に使用します。詳細については、789 ページの「電子メール・プリファレンス」を参照してください。

UI 要素	説明
< プリファレンスのタイプ > (つづき)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ページャ・プリファレンス : SiteScope でのページャ警告の送信に使用する設定と追加のページャ・プロファイルの設定に使用します。詳細については、799 ページの「ページャ・プリファレンス」を参照してください。 ▶ SNMP プリファレンス : 管理コンソールへのデータ送信時に SiteScope SNMP トラップ警告で使用する設定の定義に使用します。詳細については、809 ページの「SNMP プリファレンス」を参照してください。 ▶ 共通イベント・マッピング : SiteScope ランタイム・データと、HPOM/BSM サーバに送信されるイベント属性値間のイベント・マッピング・インスタンスを作成するために使用します。詳細については、817 ページの「共通イベント・マッピング」を参照してください。 ▶ スケジュール・プリファレンス : SiteScope モニタと警告の操作を、特定の時間でのみ、または特定の期間中のみ実行するようにカスタマイズするために使用します。詳細については、833 ページの「スケジュール・プリファレンス」を参照してください。 ▶ ユーザ管理プリファレンス : ほかのユーザが SiteScope にアクセスする方法を制御するユーザのログイン・プロファイルの定義と管理に使用します。詳細については、843 ページの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。 ▶ 資格情報のプリファレンス : SiteScope リソースの資格情報の作成と管理に使用します。詳細については、889 ページの「資格情報のプリファレンス」を参照してください。 ▶ タグの検索/フィルタ : SiteScope で定義されたタグの検索/フィルタの管理に使用します。コンテキスト・ツリーとプリファレンス・プロファイルの 1 つ以上の項目にタグを割り当て、そのタグをフィルタのオブジェクトとして使用できます。詳細については、901 ページの「タグの検索/フィルタ」を参照してください。 ▶ 証明書管理 : 各証明書で操作を変更した後に SiteScope を再起動せずに、サーバの証明書の追加と削除、およびキーストアの再読み込みを行うために使用します。詳細については、905 ページの「証明書管理」を参照してください。
< プリファレンス >	<p>プリファレンスを表します。追加するには、特定のプリファレンス・コンテナにプリファレンスを作成するか、プリファレンスが定義された SiteScope をインポートします。</p>

[サーバ統計] メニュー

[サーバ統計] メニューでは、いくつかの主要な SiteScope サーバのパフォーマンス統計の概要を表示できます。このコンテキストには、SiteScope サーバの負荷、実行中のモニタや最近実行されたモニタのリスト、perfex プールのサマリおよび統計、WMI 統計、SSH 接続、Telnet 接続、ダイナミック・モニタリング統計が含まれます。また、SiteScope ログ・ファイルも表示されます。


アクセス方法	[サーバ統計] コンテキストを選択します。[サーバ統計] メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1370 ページの「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p><メニュー・オプション></p>	<p>SiteScope で使用可能なモニタ・パフォーマンス・データ・オプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 全般 : SiteScope サーバ統計を表示します。SiteScope サーバの負荷 (実行中モニタ数, 待機中モニタ数, 実行モニタ数 / 分), タイプごとの実行中モニタ数のリストが含まれます。詳細については, 1391 ページの「[一般] ページ」を参照してください。 ▶ 実行中のモニタ数 : 実行中の SiteScope モニタ, 最近実行されたモニタ, 実行された時間, 実行で返された状態のリストを表示します。詳細については, 1393 ページの「[実行中モニタ] ページ」を参照してください。 ▶ Perfex プロセス・プール : プロセス・マネージャ・サマリ, 各プールのプール統計と状態テーブルを表示します。詳細については, 1395 ページの「[Perfex プロセス プール] ページ」を参照してください。 ▶ WMI 統計 : Windows Management Instrumentation (WMI) 統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。詳細については, 1398 ページの「[WMI 統計] ページ」を参照してください。 ▶ SSH 接続 : リモート UNIX または Windows サーバへの接続にセキュア・シェル (SSH) を使用した場合の SSH 統計と SSH 接続のサマリを表示します。詳細については, 1400 ページの「[SSH 接続] ページ」を参照してください。 ▶ Telnet 接続 : リモート UNIX または Windows サーバへの接続に Telnet を使用した場合の Telnet 統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については, 1402 ページの「[Telnet 接続] ページ」を参照してください。 ▶ ダイナミック・モニタリング統計 : ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新する時に統計が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については, 1404 ページの「[ダイナミック モニタリング] ページ」を参照してください。 ▶ ログ・ファイル : SiteScope のパフォーマンスの問題の理解, モニタと警告の問題のトラブルシューティング, SiteScope の管理アクションの確認に役立つ, SiteScope のログ・ファイルのリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については, 1408 ページの「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

[ツール] メニュー

[ツール] メニューには、SiteScope の問題のトラブルシューティングに役立ち、モニタ設定を容易にする診断ツールのリストが表示されます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[ツール] コンテキストを選択します。[ツール] メニューのオプションが左側の表示枠に表示されます。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 左側の表示枠の [ツール] コンテキストでツールを表示または使用するには、SiteScope の管理者、または「ツールを使用」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ また、特定のモニタの設定または編集時にも、一部のツールが使用可能です (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限を付与されたユーザのみ)。モニタの設定または編集時にツールが使用可能な場合、次の方法でツールにアクセスできます。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 新規モニタの設定時に新規モニタのダイアログ・ボックスで、または既存のモニタの設定時にモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールの実行中に、SiteScope ダッシュボードのツールパーで [ツール]  ボタンをクリックします。この操作で、入力にモニタの既存のデータを使用したツールが開いて実行され、[結果] 表示枠にテスト結果が表示されます。 ▶ SiteScope クライアントで SiteScope サーバと異なるマルチバイトのロケールを使用する場合の文字セットの問題を避けるには、master.config ファイルの _httpCharset 設定の値を UTF-8 に設定します。標準設定では、_httpCharset の値は空で、標準設定のサーバのロケールが使用されます。
<p>関連情報</p>	<p>160 ページの「SiteScope ツールの概要」</p>

含まれているツールは次のとおりです（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
アプリケーション・ツール	
Microsoft Windows Media Player ツール	Microsoft Windows Media Player のストリーミングをテストします。詳細については、195 ページの「Microsoft Windows Media Player ツール」を参照してください。
ニュース・サーバ・ツール	ニュース・サーバが使用可能かどうかをチェックします。詳細については、198 ページの「ニュース・サーバ・ツール」を参照してください。
Real Media Player ツール	Real Media Player のストリーミングをテストします。詳細については、205 ページの「Real Media Player ツール」を参照してください。
共通ユーティリティ・ツール	
正規表現ツール	監視する内容のサンプルに対して一致する内容の正規表現をテストします。詳細については、207 ページの「正規表現ツール」を参照してください。
XSL 変換ツール	参照可能な XML モニタで監視する XML データのカスタム XSL 変換をテストします。詳細については、233 ページの「XSL 変換ツール」を参照してください。
ログ分析ツール	ログ・ファイル内のパターンを分析し、すべての定期パターンのリストを提供します。各パターンはログ・ファイル・モニタで使用できる正規表現に転送できます。詳細については、187 ページの「イベント分析ツール」を参照してください。
データベース・ツール	
データベース接続ツール	JDBC または ODBC データベース接続の接続性と設定をチェックします。詳細については、169 ページの「データベース接続ツール」を参照してください。
データベース情報ツール	製品とドライバのバージョン、SQL の互換性レベル情報、サポートされている SQL 関数などのデータベース・サーバ・メタデータを取得、表示します。詳細については、173 ページの「データベース情報ツール」を参照してください。

第3章 • SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

UI 要素	説明
LDAP 認証状態ツール	ユーザ認証を要求して LDAP サーバをテストします。詳細については、184 ページの「LDAP 認証状態ツール」を参照してください。
メール・ツール	
メールの送受信ツール	テスト・メッセージを送受信してメール・サーバをテストします。詳細については、191 ページの「メールの送受信ツール」を参照してください。
ネットワーク・ツール	
DNS ツール	DNS サーバでドメイン名を解決できるかどうかをテストします。詳細については、176 ページの「DNS ツール」を参照してください。
ネットワーク状態ツール	サーバのネットワーク・インタフェースの状態とアクティブな接続を表示します。詳細については、197 ページの「ネットワーク状態ツール」を参照してください。 注: このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
Ping ツール	ネットワーク全体で Ping の送受信テストを実行します。詳細については、201 ページの「Ping ツール」を参照してください。
トレース・ルート・ツール	サーバから別の場所へのトレースルートを実行します。詳細については、219 ページの「トレース・ルート・ツール」を参照してください。
オペレーティング・システム・ツール	
イベント・ログ・ツール	ローカルまたはリモート・サーバの Windows イベント・ログの一部を表示します。詳細については、178 ページの「イベント・ログ・ツール」を参照してください。 注: このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
パフォーマンス・カウンタ・ツール	Win NT パフォーマンス・カウンタのレジストリへの接続性と値をチェックします。詳細については、199 ページの「パフォーマンス・カウンタ・ツール」を参照してください。 注: このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。

UI 要素	説明
プロセス・ツール	ローカルまたはリモート・サーバで現在実行中のプロセスのリストを表示します。詳細については、203 ページの「プロセス・ツール」を参照してください。
サービス・ツール	現在実行中の Windows サービスのリストを表示します。詳細については、209 ページの「サービス・ツール」を参照してください。 注： このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
SNMP ツール	
SNMP ブラウザ・ツール	SNMP MIB を参照して使用可能な OID を表示します。詳細については、212 ページの「SNMP ブラウザ・ツール」を参照してください。
SNMP ツール	指定した SNMP ホストに対して SNMP の get コマンドを実行して OID のリストを取得します。詳細については、215 ページの「SNMP ツール」を参照してください。
SNMP トラップ・ツール	SNMP が使用可能なデバイスから SiteScope が受信した SNMP トラップのログを表示します。詳細については、217 ページの「SNMP トラップ・ツール」を参照してください。
Web ツール	
FTP ツール	FTP サーバの可用性と、ファイルを取得可能かどうかをチェックします。詳細については、181 ページの「FTP ツール」を参照してください。
URL ツール	サーバから URL を要求して、返されたデータを印刷します。詳細については、221 ページの「URL ツール」を参照してください。
Web サービス・ツール	SOAP が使用可能な Web サービスの可用性をテストします。詳細については、226 ページの「Web サービス・ツール」を参照してください。

[警告] タブのショートカット・メニュー・オプション

[警告] タブのショートカット・メニュー・オプションには、警告で使用可能なショートカット・メニュー・オプションの説明が含まれます。

アクセス方法	[モニタ] / [テンプレート] コンテキストを選択します。 [警告] タブが右側の表示枠に表示されます。
関連タスク	1443 ページの「警告の設定方法」
関連情報	1415 ページの「SiteScope 警告」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
コピー	モニタ・ツリーの選択した場所に警告をコピーします。 注: [モニタの警告] / [グループの警告] テーブルの警告でのみ使用可能です。
別の SiteScope にコピーする	このメニュー項目は、複数の SiteScope が BSM に接続されている場合に SAM 管理からのみ使用できる。モニタ・ツリーの選択した場所に、別の SiteScope からの警告をコピーします。
削除	警告を削除します。
この警告を無効化する	警告を無効にします。
警告の編集	警告を編集するウィンドウが開き、警告の設定を編集できます。
この警告を有効化する	警告を有効にします。
新規警告	[新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、新規警告の定義を作成できます。このタスクの実行方法の詳細については、1443 ページの「警告の設定方法」を参照してください。 注: [モニタの警告] / [グループの警告] テーブルの警告でのみ使用可能です。

メニュー項目	説明
貼り付け	選択した警告を貼り付けます。 注: [モニタの警告] / [グループの警告] テーブルの警告でのみ使用可能です。
すべての子孫の警告を表示	選択したノードのすべての子孫の警告を表示します。
子の警告を表示	選択したノードの直接の子の警告のみを表示します。
テスト	[警告のテスト] ダイアログ・ボックスが開き、警告をテストできます。

[レポート] タブのショートカット・メニュー・オプション

[レポート] タブのショートカット・メニュー・オプションには、モニタ・ツリーの管理レポートで使用可能なオプションの説明が含まれます。

説明	[モニタ] または [テンプレート] コンテキストを選択します。[レポート] タブが右側の表示枠に表示されます。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	1501 ページの「SiteScope レポート」

第3章 • SiteScope ユーザ・インタフェースの操作

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

メニュー項目	説明
選択を解除	選択をクリアする。
レポートのコピー	モニタ・ツリーの選択した場所にレポートをコピーします。 注： [モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルのレポートでのみ使用可能です。
レポートの新規作成	作成する SiteScope レポートのタイプを選択できます。このトピックの詳細については、1504 ページの「SiteScope レポート・タイプ」を参照してください。 注： <ul style="list-style-type: none">▶ [モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルのレポートでのみ使用可能です。▶ 管理レポートのみが [レポート] タブに追加されます。
レポートを削除	レポートを削除します。
レポートの編集	レポートを編集するウィンドウが開き、レポートの設定を編集できます。
レポートを生成	レポートを生成します。
レポートの貼り付け	選択したレポートを貼り付けます。 注： [モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルのレポートでのみ使用可能です。
すべて選択	表示されたレポートをすべて選択します。
すべての子孫レポートの表示	選択したノードのすべての子孫レポートを表示します。
子レポートの表示	選択したノードの直接の子レポートのみを表示します。

4

SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要 (116 ページ)
- ▶ フィルタ設定の定義と管理 (117 ページ)
- ▶ 検索 / フィルタ・タグを使った作業 (118 ページ)

タスク

- ▶ 新しい検索 / フィルタ・タグの作成および定義方法 (119 ページ)

参照情報

- ▶ [タグの検索 / フィルタ] のユーザ・インタフェース (122 ページ)

概念

SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要

モニタのデプロイメントを管理するときに、追加されたすべてのオブジェクトを表示する広範囲なツリーの管理が困難な場合があります。SiteScope では、フィルタ条件に基づいて表示するツリー内のオブジェクトを選択できます。さまざまな設定タスクに適用できる、異なる条件を使用した複数のフィルタを定義できます。

たとえば、CPU 使用率とディスク領域を監視する SiteScope モニタのみを表示するフィルタを作成できます。このフィルタの結果として、エンタープライズ・ノードのすぐ下に、CPU およびディスク領域モニタのすべての種類を示すツリーが表示されます。

また、コンテキスト・ツリー内の任意のオブジェクトとプリファレンス・プロファイルに検索 / フィルタ・タグを割り当て、これらのタグを使用して表示を検索またはフィルタできます。たとえば、特定のオペレーティング・システムで実行されているすべてのモニタにタグを定義できます。

また、ノードを選択し、ポップアップ検索ボックスに検索する文字を入力して、モニタ・ツリー内のオブジェクトを検索することもできます。SiteScope では、検索文字列の最初の 1 字を入力すると同時に検索が開始され、文字列内の文字が最初に一致したオブジェクトが強調表示されます。検索ボックスを閉じるには、ESC キーをクリックします。

フィルタの詳細については、117 ページの「フィルタ設定の定義と管理」を参照してください。

タグの詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。

フィルタ設定の定義と管理

[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで設定するグローバル・フィルタを作成および使用して、ビューを定義、管理します。

次を使用してフィルタを定義できます。

- ▶ **モニタ名**：ワイルド・カード ("*") と OR 表現を使用して、ツリーに表示される SiteScope オブジェクトをモニタ名でフィルタします。
- ▶ **モニタ・タイプ**：たとえば、プロパティに関係なく、すべての CPU モニタを含むフィルタを定義できます。このビューでは、モニタ・ツリーには SiteScope で定義されているすべての CPU モニタが表示されます。
- ▶ **ターゲット・サーバ**：たとえば、同じホストが定義されている SiteScope モニタをすべて含むフィルタを定義し、選択したホストを監視するモニタのみを表示できます。
- ▶ **フィルタ・タグ**。特定のタグの値を使用する SiteScope オブジェクトをすべて含むフィルタを定義できます。たとえば、Windows, Linux, AIX, Solaris という値のプラットフォーム・タグがある場合、AIX というタグの値が割り当てられたすべてのオブジェクトをフィルタできます。
- ▶ **モニタの状態 (有効 / 無効)**。有効または無効の SiteScope モニタのみを含むフィルタを定義できます。
- ▶ **BSM ログ記録**：BSM へのレポート・データの設定に基づいてモニタを含めるフィルタを定義できます。

注：特定の共通するプロパティに基づいてフィルタを作成するには、グローバル検索と置換を使用します。詳細については、131 ページの「グローバル検索と置換」を参照してください。

定義済みのフィルタがある場合は、モニタ・ツリーの上のドロップダウン・フィルタ・リストに表示されます。リストからフィルタを選択すると、フィルタ選択で定義したオブジェクトのみがツリーに表示されます。

検索 / フィルタ ・ タグを使った作業

左側のツリー表示枠の表示で SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）をフィルタするために使用するカスタム検索タグまたはカスタム・フィルタ・タグを作成します。タグとその値を定義し、それらをエンタープライズ内のさまざまな要素に割り当てます。

たとえば、「Critical」、「High」、「Medium」、「Low」という値を使用する Priority というタグを定義します。これらのタグの値をインフラストラクチャ内のさまざまな要素に割り当てます。お客様からのアクセスを 24 時間年中無休でサポートする Web サーバおよびデータベースのモニタには、「Priority: Critical」のカテゴリ値を割り当てることができます。新しいフィルタ設定を追加するときには、[フィルタ オプション] セクションで [タグ] を選択し、オブジェクトの値に「Priority:Critical」を入力して、[保存] をクリックします。このフィルタにより、このタグと値が割り当てられている要素のみが表示されます。

タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。

< tag:[tagName] > プロパティを使用することで、フィルタ・タグ内の値を警告内のパラメータとして含めることができます。この方法により、SiteScope 10.00 で削除されたカスタム・プロパティ・メカニズムに似た機能を提供できます。

たとえば、値 Apache がモニタに割り当てられた AppServer というタグあり、モニタ用に設定された警告テンプレートに < tag:AppServer > を含めます。警告がトリガされた場合、警告テキストの新しいプロパティが Apache に置き換えられます。警告テンプレート・プロパティの詳細については、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

タスク

新しい検索 / フィルタ・タグの作成および定義方法

このタスクでは、新しい検索 / フィルタ・タグを定義し、コンテキスト・ツリー内の 1 つ以上の要素に割り当てる手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 119 ページの「検索 / フィルタ・タグの作成」
- ▶ 119 ページの「SiteScope ツリー要素への検索 / フィルタ・タグの割り当て」
- ▶ 120 ページの「フィルタ設定のタグの定義」

1 検索 / フィルタ・タグの作成

検索 / フィルタ・タグを追加するには、SiteScope オブジェクトの [タグの検索 / フィルタ] 表示枠を使用します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、484 ページの「タグの検索 / フィルタ」を参照してください。

タグの追加タスクの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 SiteScope ツリー要素への検索 / フィルタ・タグの割り当て

ビュー・フィルタの一部としてタグを使用するには、まずコンテキスト・ツリー内の 1 つ以上の要素またはプリファレンス・プロファイルにタグを割り当てる必要があります。タグは、コンテナ、モニタ、グループ、警告など、ツリー内の任意の項目に割り当てることができます。

タグの割り当ては、コンテキスト・ツリー・オブジェクトまたはプリファレンス・プロファイルを追加、インポート、または編集するときに行います。タグは、コンテキスト・ツリー内のすべての種類のオブジェクトのプロパティとして含まれます。

モニタ・ツリー内のオブジェクトの詳細については、81 ページの「モニタ・ツリー」を参照してください。

テンプレート・ツリー内のオブジェクトの詳細については、95 ページの「テンプレート・ツリー」を参照してください。

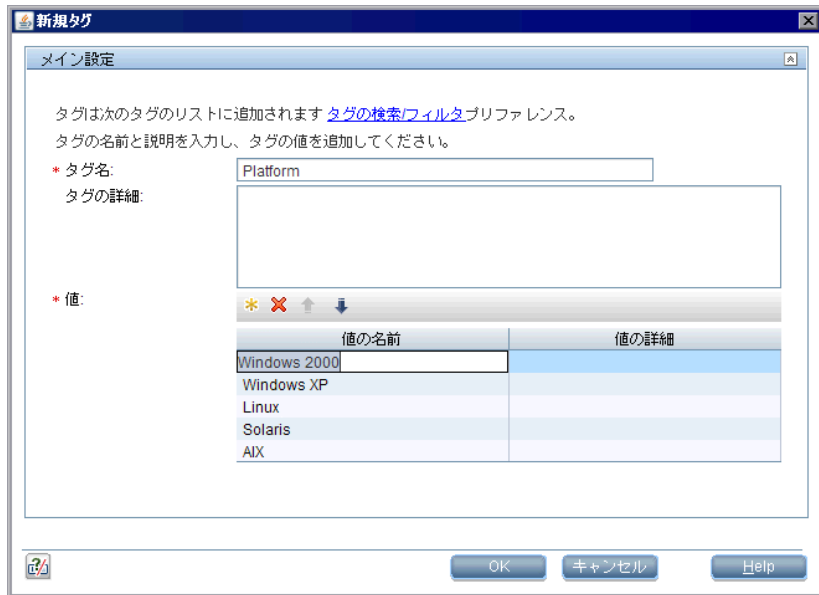
3 フィルタ設定のタグの定義

コンテキスト・ツリーまたはプリファレンス・プロファイルの 1 つ以上の項目にタグを割り当てたら、フィルタのオブジェクトとしてタグを使用できます。

ユーザ・インターフェースでのフィルタの詳細については、123 ページの「[新規フィルタ]/[フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

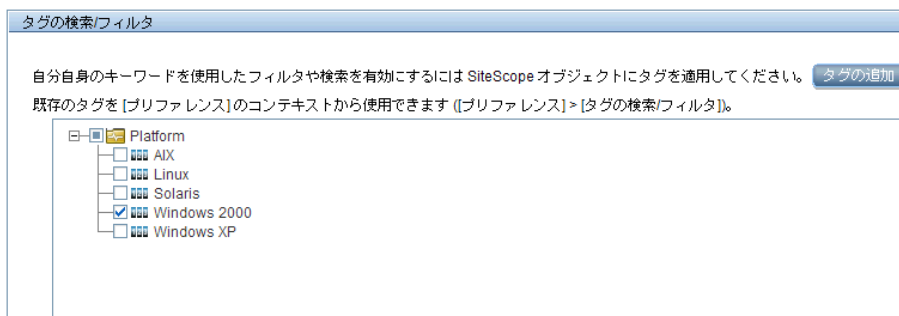
例：

モニタが実行されているオペレーティング・システムの種類を示すタグを作成します。タグ **Operating Systems** には、**Windows 2000**、**Windows XP**、**Solaris**、**Linux** などの値を設定します。



第 4 章 • SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理

グループの検索 / フィルタ設定を開き、**Operating Systems** タグの値として **Windows 2000** を選択し、グループなどのモニタ・ツリーの要素にタグを割り当てます。



この新しいタグを使用して、**Windows** マシンで実行されているモニタのみが表示されるように、モニタ・ツリーのフィルタ設定を定義できます。

参照情報



[タグの検索 / フィルタ] のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス (123 ページ)
- ▶ [新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス (129 ページ)


[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス

モニタ・ツリーまたは [モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスで作業中に、このダイアログ・ボックスで新規フィルタの追加、または既存のフィルタの編集ができます。

アクセス方法	コンテキスト・ツールバー（左側のツリー表示枠の上）で、 [フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。フィルタが適用されたら、フィルタ・アイコンは  として表示されます。フィルタ・オプションは、[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスでも利用できます。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 116 ページの「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」 ▶ 117 ページの「フィルタ設定の定義と管理」 ▶ 74 ページの「ツリー・ツールバーのボタン」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。



UI 要素	説明
一般設定 (この表示枠は、[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックスからフィルタにアクセスした場合は表示されません)	
フィルタ名	フィルタ名。この名前は、 [フィルタ] 矢印をクリックしたときに選択できるフィルタのリストに表示されます。
フィルタの説明	フィルタの詳細。この詳細は、フィルタを編集するときに表示されます。 注: このフィールドは任意指定です。
パブリック・フィルタ	フィルタの権限を表します。フィルタが公開用の場合、すべてのユーザがフィルタを表示、使用、編集できますが、公開フィルタの所有者のみがこのフィルタを非公開フィルタに変更できます。 公開用以外のフィルタは、現在のユーザのみが表示、使用できます。

UI 要素	説明
フィルタ・オプション	
正規表現	<p>モニタ・ツリーのフィルタに標準の正規表現を使用できます。選択すると、フィルタ・リストからモニタ名、モニタ・タイプ、タグの値は選択できません。チェック・ボックスをクリアすると、フィルタでは POSIX 正規表現形式が使用されます。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
モニタ名	<p>ツリーに表示されるオブジェクトをモニタ名でフィルタするには、モニタ名を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタ名は、モニタの設定時に [一般設定] 領域の [名前] ボックスに入力した文字列です。 ▶ フィルタを拡張するには、正規表現を入力できます。 <p>モニタ・ツリーには、グループ内で、入力した文字列に一致したモニタとそれらのモニタを含むグループのみが表示されます。</p> <p>例：表現 <code>/URL Monitor.*.gov/</code> は、ドメイン <code>.gov</code> を含むアドレスを使用する文字列 <code>URL Monitor</code> を含むモニタ名すべてに一致します。</p> <p>注：このフィールドでは大文字と小文字が区別されます。</p>
モニタ・タイプ	<p>ツリーに表示されるオブジェクトをモニタ・タイプでフィルタするには、モニタ・タイプを入力するか、[ブラウズ]  ボタンをクリックして [モニタ] リストからフィルタするモニタ・タイプを選択します。</p> <p>[モニタ タイプのフィルタ] のユーザ・インタフェースの詳細については、126 ページの「[モニタ タイプのフィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 複数のモニタを入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。 ▶ モニタ・タイプを入力するときには、正規表現を入力できます。 <p>例：SAP* または CPU*</p>

UI 要素	説明
ターゲット・サーバ	<p>ツリーに表示されるオブジェクトをターゲット・サーバでフィルタするには、サーバ名を入力するか、[ブラウズ] ボタンをクリックしてターゲット・リストからフィルタするリモート・サーバを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ターゲット名は、モニタの設定時に [モニタ設定] 領域の [サーバ] ボックスに入力した文字列です。 ▶ フィルタを拡張するには、正規表現を入力できます。 <p>ツリーには、グループ内で、入力した文字列に一致したターゲット・サーバのモニタとそれらのモニタを含むグループのみが表示されます。</p> <p>[ターゲット サーバのフィルタ] のユーザ・インタフェースの詳細については、127 ページの「[ターゲット サーバのフィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注: 複数のターゲットを入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。</p>
タグ	<p>タグの値を入力するか、[ブラウズ] ボタンをクリックしてタグ・リストからフィルタするタグの値を選択します。</p> <p>[フィルタ タグ] のユーザ・インタフェースの詳細については、128 ページの「[フィルタ タグ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 複数のタグ値を入力する場合は、カンマ (",") で区切ります。 ▶ タグ値のフィルタには、ワイルドカード文字 ("*") と or 表現を使用できます。
モニタの有効化 / 無効化	<p>フィルタするモニタの状態 (有効 / 無効)。</p> <p>標準設定値: なし</p>
HP BSM ログ記録	<p>フィルタする BSM ログ記録オプション。</p> <p>ログ記録オプションの詳細については、467 ページの「HP 統合設定」を参照してください。</p>

[モニタ タイプのフィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、SiteScope オブジェクトをフィルタするモニタ・タイプを選択できます。



<p>アクセス方法</p>	<p>コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで、[モニタタイプ] の横の [ブラウズ]  ボタンをクリックします。</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 116 ページの「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」 ▶ 117 ページの「フィルタ設定の定義と管理」 ▶ 123 ページの「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>使用可能なモニタ・タイプ</p>	<p>使用可能なモニタ・タイプが表示されます。</p> <p>フィルタに含めるモニタ・タイプを選択し、[選択されたモニタタイプへ移動] ボタンをクリックします。選択したモニタ・タイプが [選択されたモニタタイプ] リストに移動されます。</p>
<p>選択されたモニタ・タイプ</p>	<p>このフィルタに現在選択されているモニタ・タイプが表示されます。</p> <p>このリストからモニタ・タイプを削除するには、モニタ・タイプを選択し、[使用可能なモニタタイプへ移動] ボタンをクリックします。測定値が [使用可能なモニタタイプ] リストに移動されます。</p>

[ターゲット サーバのフィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope で設定されている選択したサーバ・ターゲットによって SiteScope オブジェクトをフィルタできます。



アクセス方法	コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで、[ターゲット サーバ] の横の [ブラウズ]  ボタンをクリックします。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 116 ページの「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」 ▶ 117 ページの「フィルタ設定の定義と管理」 ▶ 123 ページの「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
使用可能なターゲット・サーバ	SiteScope で使用可能なリモート・サーバが表示されます。フィルタに含めるリモート・サーバを選択し、[選択されたターゲット サーバへ移動] ボタンをクリックします。選択したリモート・サーバが [選択されたターゲット サーバ] リストに移動されます。
選択されたターゲット・サーバ	このフィルタに現在選択されているリモート・サーバが表示されます。 このリストからリモート・サーバを削除するには、リモート・サーバを選択し、[使用可能なターゲット サーバへ移動] ボタンをクリックします。測定値が [使用可能なターゲット サーバ] リストに移動されます。

[フィルタ タグ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスで、SiteScope オブジェクトをフィルタするタグの値を選択できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>コンテキスト・ツールバーで、[フィルタ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規フィルタ] を選択するか、既存のフィルタを選択して [編集] をクリックします。[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックスで、[タグ] の横の [ブラウズ]  ボタンをクリックします。</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 116 ページの「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」 ▶ 117 ページの「フィルタ設定の定義と管理」 ▶ 123 ページの「[新規フィルタ] / [フィルタの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。





UI 要素	説明
<p>< タグ名と値 ></p>	<p>タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。フィルタに含めるタグの横にあるチェック・ボックスを選択して、[保存] をクリックします。</p> <p>概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。</p>

[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい検索 / フィルタ・タグを追加できます。

アクセス方法	SiteScope オブジェクト (グループ、モニタ、テンプレート、またはプリファレンス・プロファイル) を選択し、[プロパティ] タブまたはプリファレンス・プロファイル・ページの [タグの検索 / フィルタ] 表示枠を開きます。[タグの追加] ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [プリファレンス] コンテキスト ([プリファレンス] > [タグの検索 / フィルタ]) で既存のタグを編集できます。このトピックの詳細については、902 ページの「タグの検索 / フィルタの概要」を参照してください。 ▶ SiteScope オブジェクトで参照されている場合、検索 / フィルタ・タグまたはタグの値は削除できません。削除するには、すべての SiteScope オブジェクトからタグまたはタグの値を削除する必要があります。 ▶ タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。詳細については、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。
関連タスク	119 ページの「新しい検索 / フィルタ・タグの作成および定義方法」
関連情報	118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規 : タグの値を追加します。新しい行がタグの値リストの末尾に追加されます。
	削除 : 選択した値をタグから削除します。
	タグ値を高くする : タグ値のリスト内で、選択したタグ値を上に移動します。この方法を使用すると、アルファベット順ではなく、タグ値順に並べ替えることができます。
	タグ値を低くする : タグ値のリスト内で、選択したタグ値を下に移動します。この方法を使用すると、アルファベット順ではなく、タグ値順に並べ替えることができます。

UI 要素	説明
タグ名	検索 / フィルタ ・ タグ の 名 前 。 最大文字数 : 255 文字
タグの詳細	検索 / フィルタ ・ タグ の 詳 細 。
値	タグに含まれる値。
値の名前	タグに含まれる値の名前。各タグには、少なくとも 1 つの値を含める必要があります。モニタ・ツリー内のすべてのオブジェクトのタグ設定を定義または編集するときに、各値はタグ名の子オブジェクトとして表示されます。
値の詳細	各値の詳細。この詳細は、タグを編集するときに表示されます。

5

グローバル検索と置換

本章の内容

概念

- ▶ グローバル検索と置換の概要 (132 ページ)

タスク

- ▶ グローバル検索と置換の実行方法 (135 ページ)

参照情報

- ▶ グローバル検索と置換ウィザード (142 ページ)

概念

グローバル検索と置換の概要

[グローバル検索と置換] ウィザードでは、モニタ、警告、警告アクション、グループ、プリファレンス、レポートのプロパティを変更できます。オブジェクト・タイプに基づいてオブジェクトを選択し、システム可用性管理で、SiteScope または複数の SiteScope 全体の選択オブジェクトのプロパティをグローバルに置換できます。

たとえば、BSM をアップグレードする場合、[グローバル検索と置換] ウィザードを使用して BSM にデータをレポートするすべての SiteScope をアップグレードしたバージョンに設定します。

本項の内容

- ▶ 132 ページの「影響を受けるオブジェクトをフィルタ」
- ▶ 133 ページの「置換または検索と置換」
- ▶ 133 ページの「しきい値設定」

影響を受けるオブジェクトをフィルタ

[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] オプションでは、検索操作の選択オブジェクトをさらに絞り込みます。特定のプロパティを選択して、オブジェクトに属する値を選択または入力できます。これにより、置換する値ではなく選択オブジェクトを制限できます。

置換操作の実行中に、[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ページで選択したプロパティに一致するオブジェクトのみで、置換する値のみが置換されます。たとえば、頻度を 5 分に設定したすべてのモニタを選択してそのすべてのモニタのモニタ依存関係の設定を置換するか、特定のサーバを監視するモニタのみを選択して、フィルタで入力したサーバの値に一致するモニタ・インスタンスのみのしきい値設定を置換します。

置換または検索と置換

置換メソッドでは、フィールドの値を検索してその値を新しい値に置換します。たとえば、[モニタの実行設定] 領域の [頻度] チェック・ボックスを選択して、頻度の値を 10 分から 15 分に更新することで、選択したモニタのモニタの実行頻度の標準設定を変更します。

検索と置換メソッドでは、特定の設定とプロパティ値を検索して、入力した設定または値を含むオブジェクトのみを置換します。文字列、値、または正規表現パターンを検索して、その文字列のみを置換できます。置換はフィルタ条件に一致する場合にのみ実行されます。たとえば、現在使用されていないサーバ名が名前の値に含まれるすべてのモニタを検索し、その古いサーバを示す文字列を、更新されたサーバを示す新しい文字列で置換します。

しきい値設定

モニタのしきい値の設定を置換する場合、標準設定では次のすべてを共有する設定のみが置換されます。

- ▶ 同じ条件（「**エラー条件**」，「**警告条件**」，または「**良好条件**」）
- ▶ 同じスケジュールの設定
- ▶ 同じ演算子タイプ（< <=, > >=, ==, !=, 含む, !含む）を使用

注： <（より小さい）と <=（より小さいか等しい）は、>（より大きい）と >=（より大きいか等しい）と同じ演算子タイプとみなされます。

使用された演算子と設定されたスケジュールに関係なく、条件（「**エラー条件**」，「**警告条件**」，または「**良好条件**」）が同じすべての既存のしきい値設定を上書きするオプションもあります。このオプションは [カテゴリーの上書き] と呼ばれ、ウィザードの [タイプの選択] で [モニタ] を選択した場合に、[しきい値の設定] 領域のウィザードの [変更の入力] ページに表示されます。

たとえば、すべての CPU モニタの「**エラー条件**」のしきい値を 85% より大きい設定に変更するとします。ウィザードで、[タイプの選択] ページの「**モニタ**」, [サブタイプの選択] ページの「**CPU**」を選択し、[変更の入力] ページの「**しきい値の設定**」領域を展開します。

「**新規エラー条件**」の状態に 85% より大きい条件を選択して「**カテゴリの上書き**」オプションを選択すると、すべての CPU モニタの既存の「**エラー条件**」の設定がすべて上書きされ、ウィザードの完了時に 85% より大きい値に変更されます。

このオプションをクリアしたままにすると、ウィザードで選択した 85% より大きい「**エラー条件**」の設定は、< (より大きい) と <= (より大きいか等しい) 演算子を使用してすべての CPU モニタに同スケジュールを設定した「**エラー条件**」の設定のみと置換されます。

しきい値の設定の詳細については、400 ページの「状態のしきい値の設定」を参照してください。

タスク

グローバル検索と置換の実行方法

このタスクでは、グローバル検索と置換ウィザードを使ってオブジェクトのグローバル検索と置換を実行する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 135 ページの「グローバル検索と置換ウィザードの実行の開始」
- ▶ 136 ページの「SiteScope の選択 (SAM のみで)」
- ▶ 136 ページの「オブジェクト・タイプの選択」
- ▶ 137 ページの「オブジェクトの検索と置換」
- ▶ 140 ページの「影響を受けるオブジェクトのチェック」
- ▶ 141 ページの「置換したオブジェクトの確認」

1 グローバル検索と置換ウィザードの実行の開始

グローバル置換を実行するモニタ・ツリーの **SiteScope** ルート、グループ、モニタのいずれかを右クリックします。プリファレンス・オブジェクトを置換するには、**SiteScope** ルートを右クリックします。警告オブジェクトを置換するには、**SiteScope** ルート、または関連グループかモニタ・オブジェクトを右クリックします。ショートカット・メニューから [**グローバル検索と置換**] を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」を参照してください。

2 SiteScope の選択 (SAM のみで)

注: この手順は SAM から [グローバル検索と置換] ウィザードにアクセスする場合にのみ適用できます。

[SiteScope の選択] ページで、検索と置換を実行する 1 つ以上の SiteScope を選択します。

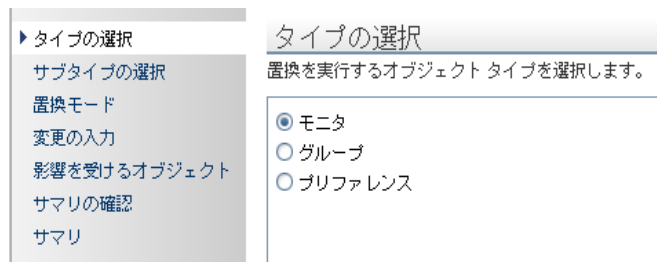
3 オブジェクト・タイプを選択

[タイプの選択] ページと [サブタイプの選択] ページで、置換を実行するオブジェクトと、必要に応じてサブタイプを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、144 ページの「[タイプの選択] ページ」および 145 ページの「[サブタイプの選択] ページ」を参照してください。

例:

すべての CPU モニタのしきい値の境界を変更します。
オブジェクト・タイプとして [モニタ] を選択します。



特定のモニタ・タイプとして [CPU] を選択します。

タイプの選択 ▶ サブタイプの選択 置換モード 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ	サブタイプの選択 置換を実行するタイプを選択します。 <input checked="" type="checkbox"/> CPU <input type="checkbox"/> メモリ
---	---

4 オブジェクトの検索と置換

[置換モード] ページで、置換のタイプを選択します。[置換] を選択してオブジェクトをグローバルに置換するか、[検索と置換] を選択してオブジェクトの特定のインスタンスを置換します。必要に応じて、[詳細フィルタ] ダイアログ・ボックスを開き、オブジェクトのプロパティを使用してフィルタできます。このダイアログ・ボックスで、置換操作を実行するオブジェクトを選択します。[変更の入力] ページで、置換するプロパティまたは値を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、145 ページの「[置換モード] ページ」および 147 ページの「[変更の入力] ページ」を参照してください。

例 - 特定のサーバのモニタ実行の頻度の低減：

会社の特定のサーバで、モニタを実行する頻度を低減するとします。

[変更の入力] ページの [モニタ設定] 領域で選択内容をフィルタして、指定したサーバを監視するモニタのみが含まれるようになります。

<ul style="list-style-type: none"> タイプの選択 サブタイプの選択 置換モード ▶ 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ 	<h3>変更の入力</h3> <p>実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px;"> <div style="background-color: #e6f2ff; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">一般設定</div> <hr/> <div style="background-color: #e6f2ff; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">モニタ設定</div> <div style="padding: 5px;"> <input type="checkbox"/> サーバ: SiteScope Server サーバの参照 リモートサーバの追加 </div> </div>
--	--

[変更の入力] ページで、指定したサーバを監視する 1 日 1 回の新しい頻度を入力します。

<ul style="list-style-type: none"> タイプの選択 サブタイプの選択 置換モード ▶ 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ 	<h3>変更の入力</h3> <p>実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。</p> <div style="border: 1px solid #ccc; padding: 5px;"> <div style="background-color: #e6f2ff; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">一般設定</div> <hr/> <div style="background-color: #e6f2ff; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">モニタ設定</div> <hr/> <div style="background-color: #e6f2ff; padding: 2px; margin-bottom: 5px;">モニタの実行設定</div> <div style="padding: 5px;"> <input checked="" type="checkbox"/> 頻度: <input style="width: 100px;" type="text" value="10"/> 分 ▼ <input type="checkbox"/> エラー時頻度: <input style="width: 100px;" type="text"/> 秒 ▼ <input type="checkbox"/> <input type="checkbox"/> エラーの検証 <input type="checkbox"/> モニタのスケジュール: 毎日、全日 ▼ <input type="checkbox"/> <input checked="" type="checkbox"/> 更新時に実行結果を表示 </div> </div>
--	---

例 - 指定した電子メール・アドレスに警告メッセージを送信する警告アクションの設定:

指定した電子メール・アドレスに警告メッセージを送信する、警告アクションを設定します。ただし、警告の受信に設定した電子メール・アドレスの 1 つを変更して、新しい電子メール・アドレスに警告メッセージを送信するとします。変更した電子メール・アドレスのみを更新します。

オブジェクト・タイプとして [**警告アクション**] を選択したら、[置換モード] ページの [**検索と置換**] を選択します。

タイプの選択 サブタイプの選択 ▶ 置換モード 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ	<h3>置換モード</h3> <p>フィールドを新しい値で置換する場合は、[置換] を選択します。 フィールドを含む文字列を検索して新しい値で置換する場合は、[検索と置換] を選択します。</p> <p> <input type="radio"/> 置換 <input checked="" type="radio"/> 検索と置換 </p>
---	--

[変更の入力] ページで、[**次を検索:**] フィールドに古い電子メール・アドレス、[**次で置換:**] フィールドに新しい電子メール・アドレスを入力します。

タイプの選択 サブタイプの選択 置換モード ▶ 変更の入力 影響を受けるオブジェクト サマリの確認 サマリ	<h3>変更の入力</h3> <p>実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。</p> <p>次を検索: <input type="text" value="@yahoo.com"/> 次で置換: <input type="text" value="@hotmail.com"/></p> <p> <input type="button" value="一般設定"/> <input type="button" value="モニタ設定"/> </p>
---	---

5 影響を受けるオブジェクトのチェック

[影響を受けるオブジェクト] ページで影響を受けるオブジェクトを表示し、必要に応じて置換操作対象のオブジェクトをクリアまたは選択します。必要に応じて、[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックスを開いてオブジェクトのプロパティでフィルタできます。このダイアログ・ボックスで、置換操作を実行するオブジェクトを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、152 ページの「[影響を受けるオブジェクト] ページ」を参照してください。

例 - 特定のサーバのモニタ実行の頻度の低減：

会社の特定のサーバで、モニタを実行する頻度を低減するとします。

[置換モード] ページ, [変更の入力] ページの [置換] を選択した場合, 指定したサーバを監視する新しい頻度として 1 日 1 回を入力します。

タイプの選択
サブタイプの選択
置換モード
▶ 変更の入力
影響を受けるオブジェクト
サマリの確認
サマリ

変更の入力

実行する変更を入力します。マークされたプロパティが入力された値で置換されます。

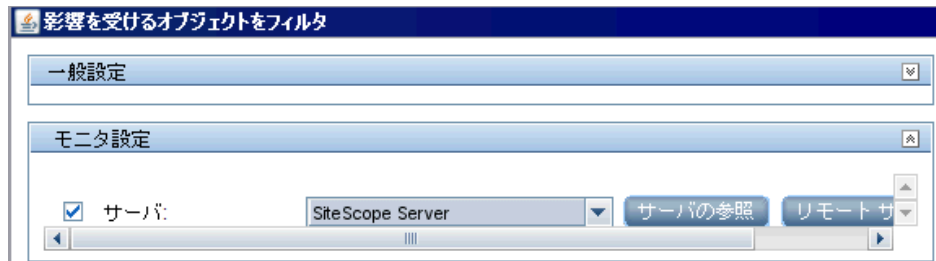
一般設定

モニタ設定

モニタの実行設定

- 頻度: 1 日
- エラー時頻度: 秒
- エラーの検証
- モニタのスケジュール: 毎日、全日
- 更新時に実行結果を表示

[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ページの選択を、指定したサーバを監視するモニタのみを含むようにフィルタします。



6 置換したオブジェクトの確認

[サマリの確認] ページで、置換操作の結果を確認し、[完了] をクリックしてウィザードを完了します。[サマリ] ページで変更のサマリを表示して、正常に実行された変更と発生したエラーを参照できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、154 ページの「[サマリの確認] ページ」および 156 ページの「[サマリ] ページ」を参照してください。

参照情報

グローバル検索と置換ウィザード

このウィザードでは、グループ、モニタ、プリファレンス、警告、警告アクション、レポートのプロパティを変更できます。これらの変更は、システム可用性管理で作業中に SiteScope または複数の SiteScope 全体で実行できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope で、グローバル置換を実行するモニタ・ツリーの SiteScope ルート、グループ、モニタのいずれかを右クリックします。プリファレンス・オブジェクトを置換するには、SiteScope ルートを右クリックします。警告オブジェクトを置換するには、SiteScope ルート、または関連グループかモニタ・オブジェクトを右クリックします。ショートカット・メニューから [グローバル検索と置換] を選択します。 ▶ BSM で、[管理] > [システム可用性管理] を選択します。右側の表示枠の [SiteScope サマリ] テーブル下で、[グローバル検索と置換] ボタンをクリックします。
関連タスク	135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	このウィザードには、次のページが含まれています。 ([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ

[SiteScope の選択] ページ

注: このページは、SAM 管理で作業しているときのみ表示されます。

このウィザード・ページでは、置換を実行する SiteScope を選択できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。 ▶ バージョン 9.0 以降で、接続状態の設定を SAM から変更できる SiteScope のみが表示されます。 ▶ 少なくとも 1 つの SiteScope を選択する必要があります。
関連タスク	135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ</p>

[タイプの選択] ページ

このウィザード・ページでは、置換を実行するオブジェクト・タイプを選択できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。 ▶ 選択したノードで使用可能なオブジェクトのタイプのみが表示されます。
関連タスク	135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
警告 警告アクション グループ モニタ プリファレンス レポート	<p>各置換操作に対して 1 つのオブジェクト・タイプのみ選択できます。SiteScope に存在するオブジェクトのみが表示されます。</p> <p>SAM 管理で [グローバル検索と置換] を実行するときに、前のページで選択した少なくとも 1 つの SiteScope に、グループ、モニタ、警告、警告アクション、プリファレンスが存在する場合にのみ表示されます。</p>

[サブタイプの選択] ページ

このウィザード・ページでは、置換を実行するオブジェクト・タイプのプロパティを選択できます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。 ▶ このページは、ウィザードの [タイプの選択] ページでオブジェクト・タイプとして [警告アクション], [モニタ], または [プリファレンス] を選択した場合にのみ表示されます。 ▶ [グループ], [警告], または [レポート] のオブジェクト・タイプを選択した場合は、このページは表示されません。
関連タスク	135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。 ([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ

[置換モード] ページ

このウィザード・ページでは、置換のタイプ（グローバル置換またはフィルタ条件に基づいた置換）を選択できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。
関連タスク	135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。 ([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
置換	すべての一致するオブジェクトを新しい文字列または値とグローバルに置換します。
検索と置換	<p>文字列または正規表現に一致するプロパティの対象オブジェクトを検索し、一致するパターンのみを置換値と置換する場合に選択します。</p> <p>この置換メソッドには特定の設定とプロパティ値の検索が含まれ、入力した設定または値を含むオブジェクトのみを置換します。値の一部のみを選択して、その文字列のみを置換できます。</p> <p>例： 現在使用されていないサーバ名が名前の値に含まれるすべてのモニタを検索し、その古いサーバを示す文字列を、更新されたサーバを示す新しい文字列で置換します。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ このオプションを選択した場合、値に文字列を含めることができる設定のみが [変更の入力] ページの設定領域で使用可能で、検索と置換アクションに選択できます。 ▶ この設定は、置換する対象の選択と値の指定に使用します。置換する値ではなく選択オブジェクトを制限する方法の [詳細フィルタ] オプションとは異なります。

[変更の入力] ページ

このウィザード・ページでは、グローバル置換の置換対象を選択できます。ウィザードには、前のページで選択したオブジェクト・タイプの変更可能な設定とプロパティのみが表示されます。フィルタ条件は、[タイプ] ページ、[サブタイプ] ページ、[詳細フィルタ] ページの選択内容から作成されます。

<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。 ▶ 表示されるサブタイプのプロパティは、SiteScope でモニタ、警告、プリファレンスなどを編集するときに表示されるプロパティとは異なる可能性があります。 <p>例： [電子メールのプリファレンス] は [グローバル検索と置換] ユーティリティではドロップダウン・リストではなくテキスト・ボックスで、[依存の対象] プロパティは [グローバル検索と置換] ユーティリティに表示されません。</p> ▶ サーバ・プロパティは、CPU、ディスク領域、メモリ、Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ、Web サーバ、サービス・モニタのモニタが選択されている場合のみ、利用できます。その他のモニタの場合、[サブタイプの選択] ページので特定のモニタのサブタイプを選択することによってのみサーバ属性を変更できます。たとえば、Web サーバ・モニタで CPU モニタを選択している場合は、サーバ・プロパティを使用できます。このグループ以外のモニタも選択している場合、サーバ・プロパティは使用できません。 ▶ SAM 管理内で SiteScope をお使いの方へ：置換操作対象に選択した SiteScope のバージョンがすべて同じでない場合、SiteScope のサブタイプ間でプロパティが一致しない場合があります。
<p>関連タスク</p>	<p>135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」</p>
<p>ウィザード・マップ</p>	<p>グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
<p>検索 次で置換</p>	<p>[置換モード] ページで [検索と置換] オプションを選択した場合、テキスト・ボックス [次を検索] と [次で置換] がこのページの上部に追加されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [次を検索] ボックスに、置換する設定またはプロパティの検索文字列、値、または正規表現パターンを入力します。 ▶ [次で置換] ボックスに、すべての一致するパターンで変更する文字列または値を入力します。 <p>注：[モニタの実行設定] で [頻度] を選択した場合、[次を検索] と [次で置換] テキスト・ボックスに入力する値は秒単位で入力する必要があります。たとえば、頻度が 10 分のモニタを検索して頻度を 20 分に変更するとします。[次を検索] テキスト・ボックスに「600」と入力し、[次で置換] テキスト・ボックスに「1200」と入力します。</p> <p>フィルタ条件に合うオブジェクトが見つからない場合は、エラー・メッセージが表示されます。フィルタ条件を再度選択します。</p>
<p>< 設定領域 ></p>	<p>この領域には、選択したオブジェクトの設定が含まれています。これらの設定の詳細については、選択したオブジェクトの設定ページを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [置換モード] ページで [検索と置換] を選択した場合、設定領域で設定のみ選択します。[次を検索] / [次で置換] ボックスに置換する古い値と新しい値を入力します。 ▶ [置換モード] ページで [置換] を選択した場合、設定領域で設定と新しい値を選択します。 <p>一部の領域の詳細については、次を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 149 ページの「[しきい値の設定] 領域」 ▶ 149 ページの「フィルタ設定領域」 ▶ 150 ページの「サーバ設定領域」

【しきい値の設定】領域

【しきい値の設定】領域については次のとおりです。

- ▶ 【タイプの選択】 ページで **【モニタ】** を選択して、【サブタイプの選択】 ページで 1 つのモニタを選択する場合にのみ表示される。
- ▶ 【サブタイプの選択】 ページで複数のモニタを選択し、いずれかのモニタにしきい値の定義が含まれない場合、【変更の入力】 ページに表示されない。

【タイプの選択】 ページで **【モニタ】** を選択した場合にのみ、**【カテゴリの上書き】** オプションが **【しきい値の設定】** 領域に表示されます。

- ▶ このオプションを選択すると、選択したモニタ・インスタンスで同じしきい値条件（**【エラー条件】**、**【警告条件】**、または**【良好条件】**）のしきい値を、ここで置換操作として入力した設定に上書きできます。
- ▶ このオプションがクリアされている場合、ここで入力した設定は、モニタ・インスタンスの演算子タイプ（<=>、>=>、!=、==、含む、doesNotContain）と設定したスケジュールが同じ設定のみと置換されます。条件が同じで演算子タイプまたはスケジュールが異なるその他の設定はそのままとなり、変更されません。このオプションの詳細と例については、133 ページの「しきい値設定」を参照してください。

フィルタ設定領域

【タイプの選択】 ページで **【警告】** を選択した場合、【フィルタ設定】 の **【モニタタイプ的一致】** フィールドは表示されず、ウィザードで値を置換できません。

サーバ設定領域

[タイプの選択] ページで [モニタ] を選択し, [サブタイプの選択] ページで 1 つのモニタを選択する場合に, [サーバ設定] 領域が [変更の入力] ページに表示されます。

[サブタイプの選択] ページで複数のモニタを選択し, それらのモニタが同じファミリに属していない場合 (次の表に記載), [サーバ設定] 領域は表示されません。

モニタのファミリ	モニタ
SAP モニタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SAP Java Web アプリケーション・サーバ ▶ SAP CCMS ▶ SAP CCMS 警告 ▶ SAP パフォーマンス ▶ SAP Work Processes
SNMP モニタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Cisco ▶ F5 Big-IP ▶ ネットワーク帯域幅 ▶ MIB による SNMP
URL モニタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ URL ▶ URL リスト ▶ URL コンテンツ ▶ URL シーケンス
Media Player モニタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Real Media Player ▶ Microsoft Windows Media Player


モニタのファミリー	モニタ
Windows Counters モニタ	<ul style="list-style-type: none">▶ ASP▶ Citrix▶ ColdFusion▶ Microsoft Hyper-V▶ Microsoft IIS サーバ▶ Microsoft SQL Server▶ Microsoft Windows Media▶ Real Monitor
サーバ・モニタ	<ul style="list-style-type: none">▶ CPU▶ ディスク領域▶ メモリ▶ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ▶ サービス▶ UNIX リソース▶ Web サーバ

[影響を受けるオブジェクト] ページ

このウィザード・ページでは、変更対象として選択したオブジェクトを表示できます。ページには、ツリー形式で選択オブジェクトが表示されます。[影響を受けるオブジェクト] ツリーのオブジェクトは、置換操作にクリアまたは選択できます。


<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。 ▶ 表示されるオブジェクトは、ユーザにオブジェクトの変更権限があるかどうかによって異なります。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ SAM 管理では、権限は BSM の [権限管理] ([管理] > [プラットフォーム] > [ユーザと権限]) で設定します。 ▶ SiteScope スタンドアロンでは、権限は [プリファレンス] > [ユーザ管理プリファレンス] で設定します。 ▶ [置換モード] ページで [検索と置換] を選択した場合、置換はフィルタ条件に一致する場合にのみ実行されます。[置換] を選択した場合、置換はすべての選択オブジェクトで実行されます。
<p>関連タスク</p>	<p>135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」</p>
<p>ウィザード・マップ</p>	<p>グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
	<p>フィルタ：必要に応じて、クリックしてダイアログ・ボックスを開き、選択をさらに絞り込みます。ユーザ・インタフェースの詳細については、153 ページの「[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
<p>< [影響を受けるオブジェクト] ツリー ></p>	<p>[影響を受けるオブジェクト] ツリーには、ウィザードの前のページで選択したフィルタ条件に一致するすべてのオブジェクトが含まれます。</p> <p>置換操作が必要かどうかに応じて、オブジェクトを選択またはクリアします。</p> <p>注：SAM 管理で [グローバル検索と置換] を使用している場合、選択した各 SiteScope のツリーが表示されます。</p>

[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、オブジェクト・タイプのほか、各オブジェクトに固有の設定に基づいてオブジェクトを選択できます。たとえば、危険域の定義済みカテゴリがあるすべての警告を選択して、その警告の任意の設定を置換できます。また、特定のモニタまたはグループに設定した依存関係があるすべてのグループを選択して、そのグループの任意の設定を置換することもできます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[影響を受けるオブジェクト] ページの [フィルタ]  ボタンをクリックします。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。 ▶ このオプションは置換の選択の絞り込みのみに使用し、置換の対象は指定しません。

関連タスク	135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
< 設定領域 >	<p>選択したオブジェクトに関する設定領域が表示されます。これらの設定の詳細については、選択したオブジェクトの設定ページを参照してください。プロパティを選択し、選択オブジェクトをフィルタする値を入力します。</p>


[サマリの確認] ページ

このウィザード・ページでは、置換操作を実行するオブジェクトをプレビューできます。システム可用性管理で複数の SiteScope で作業している場合、各 SiteScope のテーブルが表示され、そのテーブルの上に SiteScope 名が表示されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。 ▶ グローバル置換で影響を受けるオブジェクト数が、テーブルの上に表示されます。 ▶ 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。 ▶ このページで [適用] をクリックすると、置換操作は元に戻せません。
--------------	---

関連タスク	135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」
ウィザード・マップ	<p>グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。



UI 要素	説明
	<p>列タイトルの上矢印と下矢印をクリックして、列の並べ替え順序を変更します。</p> <p>標準設定： [完全名] 列は、昇順のアルファベット順です。</p>
完全名	値が置換されるサーバ名、グループ、モニタ名、モニタのプロパティのツリーを表示します。
< プロパティ >	置換操作の結果変更された [変更の入力] ページで選択したボックス名。
以前の値	<p>置換操作の結果として変更される現在の値。</p> <p>注： 置換される値がクリアされていたチェック・ボックスで、現在は値が選択されている場合、チェック・ボックスの以前の値（クリアされていた値）は表示されない可能性があります。</p>
新規値	[変更の入力] ページで入力した新しい値。

 **[サマリ] ページ**

[サマリ] ページでは、正常に実行された変更とエラーが発生した変更がレポートされます。ページには、テーブル形式で変更が表示されます。システム可用性管理で複数の SiteScope で作業している場合、各 SiteScope のテーブルが表示され、そのテーブルの上に SiteScope 名が表示されます。

<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、142 ページの「グローバル検索と置換ウィザード」で入手できます。 ▶ 置換操作で実行した変更は元に戻せません。 ▶ グローバル置換で影響を受けるオブジェクト数が、テーブルの上に表示されます。 ▶ 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。
<p>関連タスク</p>	<p>135 ページの「グローバル検索と置換の実行方法」</p>
<p>ウィザード・マップ</p>	<p>グローバル検索と置換ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>([SiteScope の選択] ページ) > [タイプの選択] ページ > [サブタイプの選択] ページ > [置換モード] ページ > [変更の入力] ページ > [影響を受けるオブジェクト] ページ > ([影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス) > [サマリの確認] ページ > [サマリ] ページ</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
	列タイトルの上矢印と下矢印をクリックして、列の並べ替え順序を変更します。 標準設定： 〔完全名〕列は、昇順のアルファベット順です。
完全名	値が置換されるサーバ名、グループ、モニタ名、モニタのプロパティのツリーを表示します。
< プロパティ >	置換操作の結果変更された [変更の入力] ページで選択したボックス名。
以前の値	グローバル置換操作で置換された値。
新規値	グローバル置換操作の結果となる新しい値。
	印刷： テーブルを印刷するときにクリックします。サマリの各テーブルにこのアイコンが表示されます。
適用	ウィザードを閉じます。

6

SiteScope ツール

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope ツールの概要 (160 ページ)

タスク

- ▶ モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法 (162 ページ)
- ▶ ログ・ファイル・モニタの設定時またはトラブルシューティング時のログ分析ツールの使用方法 - 使用ケースのシナリオ (164 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope ツールのユーザ・インタフェース (168 ページ)

概念

SiteScope ツールの概要

SiteScope には、監視環境のテストに便利な多数の診断ツールがあります。これらのツールでは、モニタの設定前に問題を特定してモニタの設定を容易にできます。また、モニタの設定後に問題のトラブルシューティングや診断を行うこともできます。


これらのツールを使用して、監視対象となるシステムのさまざまな要求やクエリを作成し、アクションの詳細な結果を表示します。要求には、ネットワーク接続のテストや、外部のデータベースまたはサービスにアクセスするためのログイン認証の検証などがあります。

特定のモニタ・タイプを設定する場合に使用して、容易にモニタ設定ができるようにするツールもあります。データをツールのフィールドに入力し、SiteScope でデータをテストします。データのテストが完了したら、テスト済みデータをモニタ設定フォームに直接適用できます。たとえば、DNS モニタを設定する前に DNS ツールを使用してドメイン名を IP アドレスに変換できます。名前の変換後、SiteScope でそのデータを新規モニタに適用できます。

使用可能な SiteScope ツールのリストについては、108 ページの「[ツール] メニュー」を参照してください。

ユーザ権限

SiteScope ツールを使用するには、次の権限が必要です。

- ▶ **ツールを使用**：左側の表示枠にある [ツール] コンテキストのツールを表示および使用するには、SiteScope の管理者、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
- ▶ **モニタ・ツールを使用**：モニタの設定時または編集時にツールを使用するには（該当のモニタに対応するツールが使用可能な場合）、SiteScope の管理者、または「**モニタ・ツールを使用**」権限が付与されたユーザである必要があります。
 - ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[**ツールを使用**] ボタンをクリックします。
 - ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行する場合、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。

タスク

モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法

このタスクでは、SiteScope ツールを使用して、モニタの設定やトラブルシューティングをサポートする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 162 ページの「前提条件」
- ▶ 162 ページの「モニタの追加と設定」
- ▶ 163 ページの「テストの設定と実行」
- ▶ 163 ページの「モニタのフィールドへのテスト済みデータの適用」
- ▶ 163 ページの「ツールを使用したモニタ・プロパティの編集またはテスト（任意指定）」

1 前提条件

- ▶ 左側の表示枠にある [ツール] コンテキストのツールを表示および使用するには、SiteScope の管理者、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザーである必要があります。
- ▶ 特定のモニタの設定時に使用可能なツールを使用するには、SiteScope の管理者、または「**モニタ・ツールを使用**」権限を付与されたユーザーである必要があります。

2 モニタの追加と設定

[**新規作成**] > [**モニタ**] を選択して、[**新規モニタ**] ダイアログ・ボックスから新しいモニタを追加します。モニタの設定をサポートするツールが使用できる場合は、新規モニタのダイアログ・ボックスの下部にある [**ツールを使用**] ボタンをクリックします。

3 テストの設定と実行


必要な情報をツールのダイアログ・ボックスに入力し、ツールを実行します。サーバ側の検証エラーが結果の表示枠に表示されます。

4 モニタのフィールドへのテスト済みデータの適用

設定データのテストが正常に完了したら、[Apply to New Monitor] ボタン (既存のモニタを編集している場合は [モニタに適用] ボタン) をクリックして、SiteScope でデータをモニタ設定に適用します。

5 ツールを使用したモニタ・プロパティの編集またはテスト (任意指定)

SiteScope ツール (使用可能な場合) を使用して、既存のモニタの設定プロパティを編集またはテストすることもできます。

- ▶ モニタの設定プロパティを編集するには、モニタの [プロパティ] タブの [ツールを使用] ボタンをクリックし、手順 3 および 4 を実行します。
- ▶ ツールを開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。結果をファイルに保存するには、[ファイルに保存] ボタンをクリックします。

ログ・ファイル・モニタの設定時またはトラブルシューティング時のログ分析ツールの使用方法 - 使用ケースのシナリオ

このタスクは、ログ・ファイル・モニタの設定時のログ分析ツールの使用に関係する手順を説明します。

管理者は、モニタ対象のログに記述されている最も一般的な問題や状況のログ・ファイル・モニタを作成します。状況を選択して対応するログ・ファイル・モニタを作成した後、選択した状況に対応する行がログに追加されるとすぐにモニタが実行されます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 164 ページの「前提条件」
- ▶ 165 ページの「分析するログのコピー」
- ▶ 165 ページの「そのログでログ分析ツールを実行」
- ▶ 167 ページの「結果」

1 前提条件

- ▶ 左側の表示枠にある [ツール] コンテキストのツールを表示および使用するには、SiteScope の管理者、または「**ツールを使用**」権限が付与されたユーザーである必要があります。
- ▶ 特定のモニタの設定時に使用可能なツールを使用するには、SiteScope の管理者、または「**モニタ・ツールを使用**」権限が付与されたユーザーである必要があります。

2 分析するログのコピー

管理者はローカルの SiteScope マシンに分析するログをコピーします。

3 そのログでログ分析ツールを実行

a 管理者は [ツール] > [共通ユーティリティ ツール] > [ログ分析ツール] を選択します。

b [ログ分析ツール] ダイアログ・ボックスで、管理者は次を入力します。

▶ **ファイルの場所** : ローカルの SiteScope サーバにコピーされたログの場所。

▶ **メッセージの位置** : パターンのために分析するメッセージの左側にあるブロックの数 (空白で区切られている)。

たとえば、次のログ構造で、関心があるログ・エントリの部分は 7 番目の空白 (日付形式内の空白は日付形式の一部であるため含まれません) の後に開始するメッセージです。

```
2010-11-02 11:49:02,738 [SiteScope Main Thread]
(SiteScopeHeartbeatManager.java:53) INFO - The Heartbeat Scheduler was
started.
2010-11-02 11:49:02,786 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82)
INFO - Registering service: Host DNS Resolution Service
```

▶ **パターン内の日付の位置** : 日付が配置されているテキストのブロックの順序。上記の例で、日付はテキストの最初のブロックに含まれています。

▶ **日付形式** : 上記の例で、日付形式は標準設定に従います。標準設定には空白が含まれます。

- ▶ 管理者は [ツールの実行] をクリックします。

[ログ分析ツール] ダイアログ・ボックスの [結果] ボックスには、ログで検出された正規表現パターンとパターンのインスタンスの数が表示されます。

結果	
* 新規のログ ファイル モニタを作成します	
メッセージパターン	発生数
Starting SiteScope...*	12
preferences initialize.*	6
Starting SiteScope... 123.*	4
preferences initialize.* sdf	2
The Heartbeat Scheduler was started.	1
Registering service: Host DNS Resolution Service	1
Registering service: Monitor History Event Sink Service	1
Registering service: Alert Action Execution Counter Registry Service	1
Registering service: Alert Open Status Registry Service	1
_____	1
Starting SiteScope... 789	1
Initializing configuration layer.	1
Configuration layer initialize successfully.	1
Initializing preferences.	1

- c 管理者は関連するパターンを選択して、[新規ログ ファイル モニタの作成] ボタンをクリックします。開いた [グループの選択] ダイアログ・ボックスで、管理者は既存のグループを選択するか、または [新規グループ] ボタンをクリックして、新しいグループを作成できます。
 [内容の照合] ボックスに表示された正規表示が選択された状態で [新規ログ ファイル モニタ] ダイアログ・ボックスが開きます。
- d そのダイアログ・ボックスで、管理者は分析する「本物の」ログへのパスを含み、ログ・ファイル・モニタを実行するために必要な残りの情報を入力します。
- e 管理者は [保存] をクリックして新規ログ・ファイル・モニタを保存します。

4 結果

ログ・ファイル・モニタは選択された正規表現を含む監視対象ログ・ファイルに追加された特定の入力を監視します。モニタ設定によって、管理者またはユーザは、その他の方法ではさらに深刻な事態が発生するまで放置されていたかもしれない状況を把握することができます。

モニタ・ツリーの選択されたグループに管理者が作成した新規ログ・ファイル・モニタ・ツールがリストされます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、187 ページの「イベント分析ツール」を参照してください。

ログ・ファイル・モニタの詳細については、『Monitor Reference』の「Log File Monitor」を参照してください。

参照情報

SiteScope ツールのユーザ・インタフェース

本項は、次の内容で構成されています。

- ▶ データベース接続ツール (169 ページ)
- ▶ データベース情報ツール (173 ページ)
- ▶ DNS ツール (176 ページ)
- ▶ イベント・ログ・ツール (178 ページ)
- ▶ FTP ツール (181 ページ)
- ▶ LDAP 認証状態ツール (184 ページ)
- ▶ イベント分析ツール (187 ページ)
- ▶ メールの送受信ツール (191 ページ)
- ▶ Microsoft Windows Media Player ツール (195 ページ)
- ▶ ネットワーク状態ツール (197 ページ)
- ▶ ニュース・サーバ・ツール (198 ページ)
- ▶ パフォーマンス・カウンタ・ツール (199 ページ)
- ▶ Ping ツール (201 ページ)
- ▶ プロセス・ツール (203 ページ)
- ▶ Real Media Player ツール (205 ページ)
- ▶ 正規表現ツール (207 ページ)
- ▶ サービス・ツール (209 ページ)
- ▶ SNMP ブラウザ・ツール (212 ページ)
- ▶ SNMP ツール (215 ページ)
- ▶ SNMP トラップ・ツール (217 ページ)
- ▶ トレース・ルート・ツール (219 ページ)


- ▶ URL ツール (221 ページ)
- ▶ Web サービス・ツール (226 ページ)
- ▶ XSL 変換ツール (233 ページ)

データベース接続ツール

このツールでは、SiteScope と外部の ODBC または JDBC 互換データベース間の接続をテストおよび検証できます。この診断ツールでは、次の点がチェックされます。

- ▶ 指定したデータベース・ドライバが検出およびロードできる
- ▶ データベースに接続できる
- ▶ 任意指定の SQL クエリを実行して結果を表示できる
- ▶ データベースの接続とリソースを閉じることができる

このツールは、データベース・モニタ、データベース警告、データベース・ログ記録の設定に必要な接続パラメータ値を検証する場合に便利です。

<p>アクセス方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [データベース ツール] > [データベース接続ツール] を選択します (「ツールを使用」 権限が必要です)。 ▶ データベース・カウンタ・モニタ、データベース・クエリ・モニタ、DB2 8.x および 9.x モニタ、テクノロジー・データベース統合モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または 「モニタ・ツールを使用」 権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
----------------------	---

重要な情報	<ul style="list-style-type: none">▶ テスト中に例外またはエラーが発生した場合、トラブルシューティングに役立つ推奨アクションとともにその情報が出力されます。▶ データベース接続ツールを使用して、データベース・クエリ・モニタまたはテクノロジ・データベース統合モニタにプロパティを適用する場合、資格情報データを手動で入力する必要があります（資格情報プロファイルを選択すると資格情報データは失われます）。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベース接続 URL	<p>モニタの設定時に使用するデータベース接続 URL。Oracle 軽量ドライバを使用する場合、データベース接続 URL の形式は <code>jdbc:oracle:thin:@<サーバ名または IP アドレス>:<ポート>:<データベースの SID ></code> のようになります。</p> <p>例：ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、「<code>jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL</code>」と入力します。前の例のようにコロン記号 (:) を含める必要があります。一般的なデータベース接続 URL のほかの例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」を参照してください。</p> <p>注：Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「<code>jdbc:mercury:sqlserver://<サーバ名または IP アドレス>:1433;DatabaseName=<データベース名>;AuthenticationMethod=type2</code>」を、データベース・ドライバとして「<code>com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver</code>」を入力します。現在ログオンしている Windows ユーザの資格情報 (SiteScope サービスを実行中のアカウント) を使用してデータベースへの接続が確立されるように、[ユーザ名] および [パスワード] ボックスは空のままにします。</p>
データベース・ドライバ	<p>SiteScope で使用する JDBC または ODBC ドライバ。 .jar ファイル、または .class ファイルが含まれるライブラリは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %java%lib%ext ディレクトリにインストールする必要があります。 <code>jdbc:odbc:orders</code> 以外のデータベースを使用するには、ドライバ・ファイルを適切なディレクトリにインストールして SiteScope で使用できるようにする必要があります。</p> <p>標準設定値： <code>sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</code></p> <p>例：一般的なデータベース・ドライバ文字列の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。</p>

UI 要素	説明
資格情報	<p>指定したデータベースでアクセス用の名前およびパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ユーザ名およびパスワードを使用：手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 [ユーザ名] ボックスにユーザ名を、[パスワード] ボックスにパスワードを入力してデータベースにアクセスします。 ▶ 事前定義された資格情報を選択：データベース用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します（標準設定のオプション）。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
クエリ	データベースで実行する SQL クエリ（任意指定）。SQL クエリ文字列を入力しない場合、ドライバがロードされてデータベースへの接続がテストされますが、クエリは実行されません。
結果セットの最大カラム数	SQL クエリを入力した場合にクエリ結果セットに表示される最大列数。 標準設定値 ：10
結果セットの最大行数	SQL クエリを入力した場合にクエリ結果セットに表示される最大行数。 標準設定値 ：10
ツールの実行	接続テストを実行します。接続結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

例

次に、成功したデータベース接続から SQL クエリで返されるデータの例を示します（1 行のみ）。

サーバ名	グループ ID	フレーム・インデックス	フレーム ID	設定名	設定行	行チャンク	チャンク値
10.0.0.157	master.config	1	_config	_database Max Summary	1	1	200

データベース情報ツール

このツールでは、データベース・サーバ・メタデータ（製品およびドライバのバージョン、SQL 互換性レベル情報、サポートされている SQL 機能など）を表示できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [データベース ツール] > [データベース情報ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。
重要な情報	データベース・ドライバやユーザ名によって、表示される情報が大幅に変わります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
<p>データベース接続 URL</p>	<p>モニタの設定時に使用するデータベース接続 URL。Oracle 軽量ドライバを使用する場合、データベース接続 URL の形式は <code>jdbc:oracle:thin:@ <サーバ名または IP アドレス> : <ポート> : <データベースの SID></code> のようになります。</p> <p>例：ポート 1521 を使用しているマシンの ORCL データベースに接続するには、 「<code>jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL</code>」と入力します。前の例のようにコロン (:) とアットマーク (@) 記号を含める必要があります。一般的なデータベース接続 URL のほかの例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」を参照してください。</p>
<p>データベース・ドライバ</p>	<p>SiteScope で使用する JDBC または ODBC ドライバ。 .jar ファイル、または .class ファイルが含まれるライブラリは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %java%lib%ext ディレクトリにインストールする必要があります。 <code>jdbc:odbc:orders</code> 以外のデータベースを使用するには、ドライバ・ファイルを適切なディレクトリにインストールして SiteScope で使用できるようにする必要があります。</p> <p>標準設定値： <code>sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</code></p> <p>例：一般的なデータベース・ドライバ文字列の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。</p>

UI 要素	説明
資格情報	<p>指定したデータベースでアクセス用の名前およびパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ユーザ名およびパスワードを使用：手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 [ユーザ名] ボックスにユーザ名を、[パスワード] ボックスにパスワードを入力してデータベースにアクセスします。 ▶ 事前定義された資格情報を選択：データベース用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します（標準設定のオプション）。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
ツールの実行	<p>ツールを実行し、データベース情報を表示します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

DNS ツール

このツールでは、ドメイン・ネーム・サーバにある名前を参照してドメイン名に対応する IP アドレスを表示できます。また、ドメインのネーム・サーバの情報も表示されます。

このユーティリティを使用して、DNS サーバからサーバの正しいアドレスが返されることを確認できます。また、このユーティリティでは、外部ドメインのアドレスを参照できることを確認できます。


<p>アクセス方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [DNS ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。 ▶ DNS モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
<p>関連タスク</p>	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
DNS サーバ	DNS サーバの IP アドレスまたはホスト名。空のままにすると、ローカル DNS サーバが使用されます。
解決するホスト名	IP アドレスに変更するドメイン名。
ツールの実行	テストを実行します。ツールによって要求が [DNS サーバ] ボックスに入力した DNS サーバに送信され、[解決するホスト名] ボックスに入力したホスト名に対応する IP アドレスが表示されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

イベント・ログ・ツール

このツールでは、ローカルまたはリモート・サーバの Windows イベント・ログの一部を表示できます。

<p>アクセス方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [イベント ログ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Microsoft Windows イベント・ログ・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ データベース・ドライバやユーザ名によって、表示される情報が大幅に変わります。 ▶ このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
<p>関連タスク</p>	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>イベント・ログを監視するサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または, [サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか, [リモートサーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p>標準設定値: SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)</p>
サーバの参照	<p>監視対象のサーバを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ サーバの参照: ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ▶ サーバ名の入力: 監視対象サーバがネットワークで認識されていない, または [リモートサーバ] で設定されていないために, 監視対象サーバがサーバのリストに表示されない場合, 監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマシン名の先頭に, 2 つの円記号 (“¥¥”) が自動的に追加されます。 <p>注: ドメインの権限が付与されているか, Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については, 584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
リモート・サーバの追加	<p>リモート・サーバを追加および設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については, 601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
<p>ログ名</p>	<p>表示するログ・ファイルのタイプを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ アプリケーション ▶ ディレクトリ・サービス ▶ DNS ▶ ファイル・レプリケーション・サービス ▶ セキュリティ ▶ システム <p>標準設定値 : システム</p>
<p>表示イベント数</p>	<p>該当のイベント・ログの表示エントリ数。ログの最新のエントリが最初に表示されます。</p> <p>標準設定値 : 10</p>
<p>ツールの実行</p>	<p>テストを実行し、ログ・エントリのリストを更新します。ログ・エントリは [結果] 表示枠に表示されます。</p>
<p>ファイルに保存</p>	<p>結果をファイルに保存します。</p>

FTP ツール

このツールでは、FTP サーバにアクセスして SiteScope (FTP クライアントとして機能) と FTP サーバのやり取りを表示できます。たとえば、FTP サーバが正常に機能していないことを示す警告を SiteScope から受信した場合、まずこのツールを使用して問題を特定します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [Web ツール] > [FTP ツール] を選択します (「ツールを使用」 権限が必要です)。 ▶ FTP モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または 「モニタ・ツールを使用」 権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
基本 FTP 設定	
FTP サーバ	テストする FTP サーバの IP アドレスまたは名前。 例 : 206.168.191.22 または ftp.thiscompany.com
ファイル	取得するファイル名。 例 : ¥pub¥docs¥mydoc.txt
ユーザ名	FTP サーバにログオンするために使用する名前。
パスワード	FTP サーバにログオンするために使用するパスワード。
パッシブ・モード	SiteScope では、パッシブ FTP 接続を使用します。通常これは、ファイアウォール経由で FTP サーバにアクセスする場合に必要です。
HTTP プロキシ設定	
HTTP プロキシ	FTP テストにプロキシ・サーバを使用する場合のプロキシ名または IP アドレス。
プロキシのユーザ名	プロキシ・サーバにログインするために使用する名前。
プロキシ・パスワード	プロキシ・サーバにログインするために使用するパスワード。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果が [結果] 表示枠に表示されていることを確認します。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

次に、FTP ツールのサンプル出力を示します。このサンプルでは、FTP サーバで問題なくログオンが許可され、サーバが実行されて要求が受け入れられています。要求されたファイル (file.txt) をサーバで特定できなかったために失敗が発生しています。欠落しているファイルを置換するか、ファイルの場所を確認すればこの問題は簡単に解決します。

```
Received:220 public Microsoft FTP Service (Version 2.0).
Sent: USER anonymous
Received:331 Anonymous access allowed, send identity (e-mail name) as password.
Sent: PASS anonymous
Received:230 Anonymous user logged in.
Sent: PASV
Received:227 Entering Passive Mode (206,168,191,1,5,183).
Connecting to server 206.168.191.1 port 1463
Sent: RETR file.txt
Received:550 file.txt:The system cannot find the file specified.
Sent: QUIT
Received:221
```

LDAP 認証状態ツール

このツールでは、Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) サーバで単
純な認証を実行してユーザを認証できるかどうかを確認できます。

<p>アクセス方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [データベース ツール] > [LDAP 認証状態ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ LDAP モニタや Active Directory レプリケーション・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
<p>関連タスク</p>	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
セキュリティ・プリンシパル	<p>サービスの呼び出し側を認証するプリンシパルの ID を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プリンシパルの形式は、認証スキームによって異なります。このプロパティを指定しない場合は、サービス・プロバイダによって動作が決定されます。これは、<code>uid=testuser,ou=TEST,o=mydomain.com</code> の形式になります。</p> <p>注： SiteScope では、等号 (“=”), セミコロン (“;”), 引用符 (“”) の 1 つ以上の文字がユーザ名に使用されているユーザはサポートされません。</p>
セキュリティ資格情報	<p>サービスの呼び出し側を認証するプリンシパルの資格情報を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プロパティの値は、認証スキームによって異なります。たとえば、ハッシュ化されたパスワード、クリア・テキスト・パスワード、鍵、証明書などになります。このプロパティを指定しない場合は、サービス・プロバイダによって動作が決定されます。</p>
LDAP サービス・プロバイダ	<p>使用するサービス・プロバイダの設定情報を指定するための、環境プロパティの名前を保持する定数。プロパティの値には URL 文字列が含まれます。このプロパティは、アプレット・パラメータ、システム・プロパティ、リソース・ファイルで指定できます。これらのソースで指定しない場合は、サービス・プロバイダによって標準設定が決定されます。</p> <p>例： <code>ldap://<somehost>:389</code></p>
オブジェクト・クエリ	<p>標準設定のユーザ dn オブジェクト以外の LDAP オブジェクトを参照するためのオブジェクト・クエリ。LDAP フィルタを使用する場合、このテキスト・ボックスに有効なオブジェクト・クエリを入力する必要があります。検索フィルタの詳細については、後述の説明を参照してください。</p> <p>例： 上記で入力した dn オブジェクトに関連付けられている電子メール・アドレスをチェックするためのメール・オブジェクトを入力します。</p>

UI 要素	説明
LDAP フィルタ	<p>フィルタ条件を使用して LDAP を検索します。LDAP フィルタの構文は、論理演算子が引数の前にくる前置表記法の論理式になります。</p> <p>例：項目 <code>sn=Freddie</code> は、<code>sn</code> 属性の属性値が <code>Freddie</code> になる必要があることを意味しています。</p> <p>複数の項目をフィルタ文字列に含めるには、<code>(sn=Freddie)</code> のように各項目を括弧で囲み、<code>&</code> (結合演算子) などの論理演算子で結合して論理式を作成します。</p> <p>例：フィルタの構文 <code>(& (sn=Freddie) (mail=*))</code> では、<code>Freddie</code> の <code>sn</code> 属性と任意の <code>mail</code> 属性がある LDAP エントリが要求されます。</p>
ツールの実行	テストを実行します。LDAP 認証テストの結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

イベント分析ツール

このツールによってファイル内で繰り返しパターンを示すためにログ・ファイルをスキャンできます。ツールがパターンをリストアップしたら、ツールでログ内のそのパターンを監視するための SiteScope ログ・ファイル・モニタを作成できます。

アクセス方法	<p>[ツール] コンテキスト > [共通ユーティリティ ツール] > [ログ分析ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。</p> <p>注: ログ・ファイル・モニタをこのツールから作成した場合には、ツールには [ログ ファイル モニタ] からアクセスできます (ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタンを使用)。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 分析するログの構造に一貫性がない場合は、このツールを使用できません。 ▶ ログ分析ツールで検出されたパターンのログ・ファイル・モニタを作成した後で、新しいモニタがモニタ・ツリーにリストされます。 ▶ 分析するテキストが配置されているログ・ファイル内の場所をログ分析ツールログ・ファイルに通知するには、正規表現または分析するテキストの前にあるテキストのブロック数を指定できます。 <p>制限事項: 分析するログ・ファイルのサイズは、10MB を超えないようにしてください。</p>
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」 ▶ 164 ページの「ログ・ファイル・モニタの設定時またはトラブルシューティング時のログ分析ツールの使用方法 - 使用ケースのシナリオ」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ログ分析ツール領域	
SiteScope サーバ上のフォルダの場所	分析対象のログ・ファイルが配置されている SiteScope サーバ上のフォルダのパスを入力します。

UI 要素	説明
ファイル名	<p>分析対象のログ・ファイル名を入力します。</p> <p>同時に複数ファイルを分析する時は、分析対象のログ・ファイルのファイル名と一致する正規表現を入力できます。</p> <p>例 : error123.log と error345.log を同時に分析するには /error/ と入力します。</p>
正規表現を使用します	<p>分析するテキストが配置されているログ・ファイル内の場所をログ分析ツールログ・ファイルに通知するには、正規表現または分析するテキストの前にあるテキストのブロック数を指定できます。</p> <p>正規表現を使用する場合には、このオプションを選択します。</p>
正規表現	<p>分析するテキストが配置されているログ・ファイル内の場所をログ分析ツールログ・ファイルに通知するには、正規表現または分析するテキストの前にあるテキストのブロック数を指定できます。</p> <p>このフィールドは [正規表現を使用します] オプションをクリアすると無効になります。</p> <p>スラッシュ (/) の間に分析するテキストを検索するためにツールが使用する正規表現を入力します。</p> <p>例 : 正規表現の例については、190 ページの「正規表現の例」を参照してください。</p>
メッセージ開始前のブロック数	<p>ログ・ファイルには多数の情報が含まれます。ログ分析ツールは、メッセージのパターンを探します (たとえば、INFO または ERROR 後のメッセージ)。</p> <p>このフィールドは [正規表現を使用します] オプションを選択すると無効になります。</p> <p>分析対象のメッセージが開始する場所をツールに示すには、分析するメッセージの先頭の前の、ログの各行に現れる空白によって区切られるテキスト (文字列) のブロック数を指定する必要があります。日付形式に空白が含まれる場合には日付の空白を無視します (以下の [日付形式] を参照してください)。</p> <p>注 : 一貫した構造を持たないログはこのツールで分析できません。</p>

UI 要素	説明
日付があるブロックの 順番	<p>左からカウントした、日付が配置されるテキストのブロック数を入力します。最初のブロックの数は 1 です。</p> <p>このフィールドは [正規表現を使用します] オプションを選択すると無効になります。</p>
日付形式	<p>ログで使用される日付形式を選択します。</p> <p>標準設定の形式 : yyyy-mm-dd HH:mm:ss,SSS</p>
ツール・タイムアウト (秒単位)	<p>タイムアウトの前にログ分析ツールを待機する時間(秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 30 秒</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。すべての繰り返しメッセージ・パターンのリストは [結果] ボックスに表示されます。</p>
結果領域	
新規ログ・ファイル・ モニタの作成	<p>パターンを選択しボタンをクリックして [グループの選択] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスで既存のグループを選択するか、または [新規グループ] ボタンをクリックして新しいグループを作成できます。[内容の照合] ボックスに表示された正規表示が選択された状態で [新規ログ ファイル モニタ] ダイアログ・ボックスが開きます。</p>
メッセージ・パターン	<p>ログで検出されたパターンのリストが表示されます。</p> <p>リストはパターンの発生数の順に並べられます。</p>
発生数	<p>各パターンのインスタンス数が表示されます。</p> <p>リストはパターンの発生数の順に並べられます。</p>

正規表現の例

次の構造を持つログで、正規表現

`%d*-%d*-%d*%s%d*.*%d*%s%[(%w.*%)]%s%(%w.*%)%s%w.*%s%-%s`

を使用します。ここで、**d** は数字、**w** はワード、**s** はスペース、***** は任意の文字を示します。

```
2010-11-02 11:49:02,738 [SiteScope Main Thread]
(SiteScopeHeartbeatManager.java:53) INFO - The Heartbeat Scheduler was started.
2010-11-02 11:49:02,786 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) INFO -
Registering service: Host DNS Resolution Service
2010-11-02 11:49:02,951 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) INFO -
Registering service: Monitor History Event Sink Service
2010-11-02 11:49:03,035 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) INFO -
Registering service: Alert Action Execution Counter Registry Service
2010-11-02 11:49:03,035 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) ERROR -
Connection Error while trying to connect
2010-11-02 11:49:03,037 [SiteScope Main Thread] (ServiceController.java:82) INFO -
Registering service: Alert Open Status Registry Service
2010-11-02 11:49:03,277 [SiteScope Main Thread] (SiteScopeSupport.java:655) INFO
```


次の構造を持つログで、正規表現

`%d*%s%w*%s%w*%s%*%d*%*%s%-%s` を使用します。ここで、**d** は数字、**w** はワード、**s** はスペース、***** は任意の文字を示します。

```
123 Error starts *****12***** - The Heartbeat Scheduler was started.
123 Error starts *****23***** - Registering service:Host DNS Resolution Service
123 Error starts *****34***** - Registering service:Monitor History Event Sink Service
123 Error starts *****45***** - Registering service:Alert Action Execution Counter
Registry Service
123 Error starts *****45***** - Registering service:Alert Action Execution Counter
Registry Service
```

メールを送受信ツール

このツールでは、ネットワークを使用してメール・サーバをチェックし、メール・サーバで要求が受け入れられているかどうかや、メッセージの送受信ができるかどうかを確認できます。SMTP を使用して標準的なメール・メッセージを送信し、次に POP ユーザ・アカウントを使用してそのメッセージを取得します。SiteScope によって送信される各メッセージには、不正なメッセージを取得していないかや、誤った肯定読み取りを返していないかをチェックするための一意の鍵が含まれています。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [メール ツール] > [メールの送受信ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ メール・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
基本メール設定	
アクション	<p>実行するアクションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 送信と受信：テスト・メッセージを SMTP サーバに送信して POP3 または IMAP4 サーバから受信し、メール・サーバが起動および動作していることを確認できます (標準設定のオプション)。 ▶ 受信のみ：以前に送信したメッセージの受信用メール・サーバ (POP3 または IMAP4) をチェックします。このチェックは、以前に送信したメッセージの内容を照合して行われます。 ▶ 送信のみ：受信用メール・サーバでメッセージが受信されたかどうかをチェックします。
送信元電子メール・サーバ (SMTP)	<p>テスト・メール・メッセージを送信する SMTP メール・サーバのホスト名。</p> <p>例：mail.thiscompany.com</p>
送信先アドレス	<p>テスト・メッセージを送信するメール・アドレス。</p>
受信プロトコル	<p>受信用メール・サーバで使用されるプロトコル。送信したメッセージの POP3 メール・サーバをチェックするには、POP3 オプションを使用します。送信したメッセージの IMAP メール・サーバをチェックするには、IMAP4 オプションを使用します。</p> <p>標準設定値：POP3</p>
電子メール受信サーバ	<p>テスト・メッセージを受信する POP メール・サーバのホスト名。これは、テスト・メッセージを送信したメール・サーバと同じにすることができます。</p> <p>例：mail.thiscompany.com</p>

UI 要素	説明
電子メール受信サーバのユーザ名	<p>POP ユーザ・アカウント名。このアカウントにテスト電子メール・メッセージが送信され、アカウントにログインしてメッセージが受信されたことが確認されます。このアカウントのほかのメールは検出されません。このアカウントには、個人用メール・アカウントまたは別の既存のアカウントを使用できます。</p> <p>注：サーバからのメッセージを自動的に受信して削除する電子メール・リーダーを使用する場合、メールの送受信ツールでメール・メッセージが表示されずにエラーがレポートされる可能性があります。</p>
電子メール・サーバ・パスワード	<p>必要な場合に使用するテスト・メール・アカウントのパスワード。</p>
内容が一致するもののみ受信	<p>受信メッセージの内容を照合するためのテキスト文字列。受信メッセージにこのテキストが含まれていない場合、メールの送受信でエラーがレポートされます。これは、受信専用オプション（Subject:MySubject など）が対象となります。検索では大文字と小文字は区別されます。</p> <p>HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合は HTML タグも対象となります（“< B> Hello< /B> World” など）。これは、XML ページにも当てはまります。</p> <p>文字列をスラッシュで囲んで正規表現による照合を実行できます。最後のスラッシュの後に i を付けると、照合で大文字と小文字が区別されません。たとえば、 “/href=Doc%d+%\$.html/” や “/href=doc%d+%\$.html/i” のようになります。</p> <p>特定のテキスト部分を保存して状態の一部として表示する場合、正規表現に括弧を使用します（/Temperature: (%d+)/）など。これにより、ページに表示されるときに該当の温度が返されます。</p>

UI 要素	説明
詳細メール設定	
タイムアウト (秒単位)	メール・メッセージの受信を待機する秒数。この秒数を超えるとタイムアウトになります。 標準設定値 : 300 秒
POP チェックの 遅延秒)	SiteScope によってテスト・メッセージが送信された直後に、メール・アカウントにログインしてメッセージが受信されたことが確認されます。メッセージが受信されていない場合、SiteScope では再チェック前に自動的に 10 秒間待機します。待機時間は、このボックスに別の秒数を指定して調整できます。 標準設定値 : 10 秒
NTLM 認証	電子メール・サーバで NTLM 認証が使用される場合の NTLM のバージョン (バージョン 1 または 2)。 標準設定値 : なし
詳細表示	送受信テストの詳細が表示されます。
ツールの実行	テストを実行します。メール・サーバのテスト結果が [結果] 表示枠に表示されていることをチェックします。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

Microsoft Windows Media Player ツール

このツールでは、Microsoft Windows Media Player のストリーミングをテストできます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [Microsoft Windows Media Player ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Microsoft Windows Media Player モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
URL	<p>テストするメディア・ファイルまたはストリーミング・ソースの URL。メディア・ファイルの URL である必要があります。</p> <p>例 : mms:// <サーバ名> /sample.asf (ユニキャスト・ストリームの場合) または http:// <サーバ名> /stationid.nsc (Windows Media Server マルチキャスト・ステーション・プログラムを使用したマルチキャスト・ストリームの場合)。</p> <p>注 : このモニタでは .asx または .mov 形式はサポートされていません。</p>
継続時間 (ミリ秒)	<p>ツールで使用するメディア・ファイルまたはソースの再生を継続する時間。この継続時間の値は、ファイルに含まれているメディアの継続時間に一致している必要はありません。</p> <p>テストするファイルまたはソースのメディア・コンテンツが、テストに選択した継続時間の値よりも短い場合、モニタではメディア・コンテンツがすべて再生され、その結果がレポートされます。この結果にはメディア・コンテンツの再生に要した時間が含まれます。</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。メール・サーバのテスト結果が [結果] 表示枠に表示されていることをチェックします。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

ネットワーク状態ツール

このツールでは、現在のネットワーク・インタフェースの統計情報がレポートされ、アクティブなネットワーク接続が表示されます。この情報は、ネットワーク・インタフェースの状況を判断するのに役立つ場合があります。また、ネットワーク接続が開いたまま残されていたり、接続が閉じられることなく次々と開かれていくといった暴走状態などの問題を追跡できます。


アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [ネットワーク状態ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。
重要な情報	このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ツールの実行	ネットワーク状態ツールを実行し、ネットワーク情報をレポートします。データは [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

ニュース・サーバ・ツール

このツールを使用して、ニュース・サーバにアクセスし、SiteScope (ニュース・クライアントとして機能) とニュース・サーバの間の NNTP 相互通信を表示できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [ニュース サーバ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ ニュース・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ニュース・サーバ	news.sitescope.com または news.sitescope.com:7777 という形式のニュース・サーバ名。
ニュース・グループ	ニュース・グループ名 (任意指定)。複数のニュース・グループ名はカンマ (“,”) で区切ります。
ユーザ名	上記で指定したニュース・サーバへのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名。
パスワード	上記で指定したニュース・サーバへのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するパスワード。

UI 要素	説明
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

パフォーマンス・カウンタ・ツール

このツールを使用して、Windows NT/2000 ネットワーク内の特定のマシンのパフォーマンス・カウンタをチェックできます。このツールは、SiteScope の一部として供給される **perfex.exe** 実行ファイルへのインタフェースを提供します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [パフォーマンス カウンタ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ CPU モニタ, ディスク領域モニタ, メモリ・モニタ, Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタを設定または表示するときにも使用できます (SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで, [ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
重要な情報	このツールは, UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>監視する Windows パフォーマンス・カウンタのオブジェクトが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または、[サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、[Microsoft Windows リモート サーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p>標準設定値 : SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)</p>
サーバの参照	<p>[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ サーバの参照 : ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ▶ サーバ名の入力 : 監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または [リモート サーバ] で設定されていないために、監視対象サーバがサーバのリストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマシン名の先頭に、2 つの円記号 (“¥¥”) が自動的に追加されます。 <p>注 : ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
リモート・サーバの追加	<p>[リモート サーバの追加] ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。</p> <p>Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、608 ページの「[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
カウンタ	個々のパフォーマンス・カウンタおよび選択したカウンタ・オブジェクトの対応する値を表示する、カウンタ・オブジェクトを選択します。
ツールの実行	ツールを実行し、個々の Windows パフォーマンス・カウンタおよび選択したカウンタ・オブジェクトの対応する値を表示します。この情報は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

Ping ツール

このツールでは、往復時間とパスが表示されます。このツールによってパケットが別の場所に送信され、送信者に返されます。ネットワークに問題がある場合、ping を使用して別の場所に到達できるかどうかわかります。Ping ツールでは、現在のサーバから別の場所に ping を行います。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [Ping ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Ping モニタやポート・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
--------	---

関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
解決するホスト名	ping するホストのドメイン名または IP アドレス。 例 : demo.thiscompany.com または 206.168.112.53
ツールの実行	ドメイン名または IP アドレスに Ping します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

プロセス・ツール

このツールでは、SiteScope がインストールされているサーバで実行中のプロセスが表示されます。これは、重要なプロセスが使用可能であることを確認する場合に便利です。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [プロセス ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>監視対象プロセスが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されます) からサーバを選択します。または、[サーバの参照] ボタンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択するか、[リモートサーバの追加] をクリックして新しいサーバを追加します。</p> <p>標準設定値: SiteScope サーバ (SiteScope がインストールされているサーバ)</p>

UI 要素	説明
サーバの参照	<p>[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ サーバの参照: ローカル・ドメインに表示されるサーバのドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ▶ サーバ名の入力: 監視対象サーバがネットワークで認識されていない、または [リモート サーバ] で設定されていないために、監視対象サーバがサーバのリストに表示されない場合、監視対象サーバの IP アドレスまたは名前を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマシン名の先頭に、2 つの円記号 (“¥¥”) が自動的に追加されます。 <p>注: ドメインの権限が付与されているか、Windows リモート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。リモート Windows サーバの設定方法の詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
リモート・サーバの追加	<p>[リモート サーバの追加] ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。</p> <p>Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、608 ページの「[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

Real Media Player ツール

このツールでは、Real Media Player のストリーミングをテストできます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [アプリケーション ツール] > [Real Media Player ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Real Media Player モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
URL	<p>テストするメディア・ファイルまたはストリーミング・ソースの URL。メディア・ファイルの URL である必要があります。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ このツールでは、(音声ではなく) ビデオ・ストリームのみをテストできます。 ▶ このツールでは、.smi 形式などのメタデータ・ファイルはサポートされていません。
継続時間 (ミリ秒)	<p>ツールで使用するメディア・ファイルまたはソースの再生を継続する時間。この継続時間の値は、ファイルに含まれているメディアの継続時間に一致している必要はありません。</p> <p>テストするファイルまたはソースのメディア・コンテンツが、テストに選択した継続時間の値よりも短い場合、モニターではメディア・コンテンツがすべて再生され、その結果がレポートされます。この結果にはメディア・コンテンツの再生に要した時間が含まれます。</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

正規表現ツール

このツールを使用すると、正規表現の照合を実行できます。

アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [共通ユーティリティ ツール] > [正規表現ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
テキスト	<p>正規表現の照合を実行する文字列または値を含むテキストの一部をコピーして、このボックスに貼り付けます。</p> <p>正規表現を効率よく作成するために、照合する対象データまたはパターンに先行する内容をすべて含める必要があります。たとえば、Web ページの内容を照合するための正規表現を作成する場合、URL ツールを使用して HTTP ヘッダを含む HTTP の内容全体を取得する必要があります。</p>
正規表現	<p>入力したテキストの一部を照合するには、正規表現をスラッシュ (//) で囲んで入力します。</p> <p>注: 復帰改行および行送りが含まれる複数行の内容の場合、表現の最後に s 検索修飾子を追加して内容を 1 行のテキストとして扱うことを検討してください。</p> <p>例: /value:¥W[¥d]{2,6}/s</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。照合テストの結果は [結果] 表示枠に表示されます。正規表現に問題がある場合、エラー・メッセージが表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>


解析された括弧および一致文字列テーブル

本項で説明するテーブルには、正規表現内の括弧のペアによって保持された値または逆参照として要求される一致が表示されます。表現に括弧が含まれていない場合、このテーブルは空です。解析された括弧テーブルには次の列があります。

UI 要素	説明
左から数えた括弧の数	左から数えた、正規表現内の括弧で区切られたパターンが表示されます。
一致テキスト	左側の列に表示された、括弧でマークされたパターンに一致したテキストが表示されます。
スラッシュの間と完全一致	テーブルの下にあるテキスト領域。[検索対象となるテキスト] ボックスに入力された内容全体がそのまま表示されます。このなかで正規表現内のパターンに一致した内容が、通常は青いフォントで強調表示されます。これは、.* パターンのようなワイルドカード表現を使用して、一致する内容が多すぎる場合などに起こり得る問題を表示するのに便利です。また、内容に重複したパターンがあるという問題を明らかにすることもできます。この場合、内容の必要な部分に一致させるために別の固有パターンを表現に追加する必要があります。

サービス・ツール

このツールでは、SiteScope がインストールされているサーバ上で実行中のサービスが表示されます。これは、重要なサービスが使用可能であることを確認する場合に便利です。リモート UNIX マシンが定義されている場合、ドロップダウン・メニューに表示されます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [オペレーティング システム ツール] > [サービス ツール] を選択します ([ツールを使用] 権限が必要です)。 ▶ サービス・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
重要な情報	<p>このツールは、UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope ではサポートされていません。</p>
関連タスク	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>監視対象サービスが実行されているサーバ。サーバのリスト (SiteScope で設定したリモート・サーバのみが表示されま す) からサーバを選択します。または, [サーバの参照] ボ タンをクリックしてローカル・ドメインからサーバを選択す るか, [リモートサーバの追加] をクリックして新しいサー バを追加します。</p> <p>標準設定値: SiteScope サーバ (SiteScope がインストールさ れているサーバ)</p>
サーバの参照	<p>[HP SiteScope サーバの検索] ダイアログ・ボックスが開き, 監視対象のサーバを選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ サーバの参照: ローカル・ドメインに表示されるサーバの ドロップダウン・リストからサーバを選択します。 ▶ サーバ名の入力: 監視対象サーバがネットワークで認識 されていない, または [リモートサーバ] で設定されて いない場合, 監視対象サーバがサーバのリストに表示 されない場合, 監視対象サーバの IP アドレスまたは名前 を入力します。[サーバ名の入力] ボックスで入力したマ シン名の先頭に, 2 つの円記号 (“¥¥”) が自動的に追加さ れます。 <p>注: ドメインの権限が付与されているか, Windows リモ ート・サーバへのアクセスが認証されている必要があります。 リモート Windows サーバの設定方法の詳細については, 584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視 するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
リモート・サーバの追加	<p>[リモートサーバの追加] ダイアログ・ボックスが開き、追加するリモートのタイプ (Windows または UNIX) を選択して設定の詳細を入力できます。</p> <p>Microsoft Windows リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>UNIX リモート・サーバのユーザ・インタフェースの詳細については、608 ページの「[新規 UNIX リモートサーバ] / [UNIX リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

SNMP ブラウザ ツール

このツールは、SNMP エージェントの MIB の XML 表現を提供します。SNMP エージェントの接続プロパティの検証や、そのエージェントが実装する MIB の詳細情報の取得に使用できます。

<p>アクセス方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP ブラウザ ツール] を選択します («ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Cisco Works モニタ, F5 Big-IP モニタ, MIB による SNMP モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者, または「モニタ ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで, [ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このツールは, 特定のエージェント上にあるすべての OID を横断し, < SiteScope のルート・ディレクトリ > *templates.mib ディレクトリの MIB 情報を使用して OID の XML 表現を作成します。XML ツリーに含まれるのは, OID のテキスト名および数値名, その説明 (使用可能な場合), 横断時点の値です。 ▶ XML は, 別個の [結果] 表示枠に表示されます。この表示枠では行番号が表示され, 個別の XML が強調表示されます。MIB 横断中にエラーが発生した場合, 問題を説明するエラー・メッセージが [結果] 表示枠に出力されます。
<p>関連タスク</p>	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SNMP 接続設定	
サーバ	SNMP エージェントが実行されている、監視対象のデバイスのホスト名または IP アドレス。
SNMP のバージョン	ツールがエージェントへの接続時に使用する SNMP のバージョン。 標準設定値 : V1
コミュニティ	バージョン 1 または 2 接続で SNMP エージェントに接続するときに使用するコミュニティ文字列。 標準設定値 : public
タイムアウト (秒単位)	すべての SNMP 要求 (再試行を含む) が完了するまで SiteScope が待機する合計時間 (秒単位)。 標準設定値 : 5 秒
再試行	SiteScope が SNMP GET 要求を失敗とみなすまで各 SNMP GET 要求を再試行する回数。 標準設定値 : 1
ポート	SNMP エージェントが監視するポート。 標準設定値 : 161
開始 OID	このモニタのカウンタを選択する場合に、このオプションを使用します。モニタが SNMP エージェントのツリーの取得を試みるときは、ここで入力した OID 値から開始します。標準設定値は 1 で、一般的に使用され、ほとんどのアプリケーションに適用できます。1 から開始する OID を処理しないアプリケーションから値の取得を試みる場合のみ、このボックスを編集する必要があります。標準設定値の 1 ではどのカウンタも取得できなかった場合、異なる値の入力が必要になることがあります。

UI 要素	説明
MIB ファイル	<p>表示する MIB。[すべての MIB] を選択した場合、MIB 横断時に取得されたすべてのデータが表示されます。特定の MIB を選択した場合、その MIB 内の OID のみが表示されます。この MIB のリストを更新または拡張するには、新しい MIB ファイルを <SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥templates.mib ディレクトリに置きます。</p> <p>標準設定値 : すべての MIB</p>
<p>V3 SNMP 設定 (この表示枠は、[SNMP のバージョン] フィールドで V3 が選択された場合にのみ有効になります)</p>	
SNMP V3 認証タイプ	<p>バージョン 3 接続に使用する認証のタイプ。</p> <p>標準設定値 : MD5</p>
SNMP V3 ユーザ名	<p>バージョン 3 接続のユーザ名。</p>
SNMP V3 認証パスワード	<p>バージョン 3 接続の認証に使用するパスワード。</p>
SNMP V3 プライバシー・パスワード	<p>バージョン 3 接続の DES プライバシー暗号化で使用するパスワード。プライバシーが不要な場合はこのボックスを空白のままにします。</p>
SNMP V3 コンテキスト・エンジン ID	<p>この接続に使用するコンテキスト・エンジン ID を表す 16 進文字列。これは SNMP V3 にのみ適用されます。</p>
SNMP V3 コンテキスト名	<p>この接続に使用するコンテキスト名。これは SNMP V3 にのみ適用されます。</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

SNMP ツール

このツールでは、SNMP 管理情報ベース (MIB) に問い合わせる OID のセットを取得できます。


<p>アクセス方法</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ SNMP モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザーの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
<p>関連タスク</p>	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ホスト名	問い合わせる SNMP MIB をホストするサーバの IP アドレス。
オブジェクト ID	取得される次のオブジェクトの ID。
インデックス	SNMP オブジェクトのインデックス。OID の値は、スカラ値またはインデックス（配列）値のいずれかです。スカラ OID の場合、インデックス値を 0 に設定する必要があります。インデックス値の場合、必要な値を含む要素にインデックス（1 で始まる正の整数）を指定する必要があります。 例：OID 1.3.6.1.2.1.2.2.1.17 は、4 つの要素を含むインデックス値です。この OID の 2 番目の要素にアクセスするには、このテキスト・ボックスに 2 のインデックスを入力します。 標準設定値：0
コミュニティ	SNMP デバイスのコミュニティ文字列。 標準設定値：public
SNMP のバージョン	テストする SNMP ホストで使用される SNMP のバージョン。SiteScope では SNMP のバージョン 1 およびバージョン 2 の両方がサポートされています。 標準設定値：V1
取得するレコード数	取得する OID レコード数。 標準設定値：1
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

SNMP トラップ・ツール

このツールでは、SiteScope の SNMP リスナで受信される SNMP トラップを表示できます。このツールは、すでに 1 つ以上の SNMP トラップ・モニタを作成している場合にのみ有効になります。SNMP トラップ・モニタを作成することで、SiteScope の SNMP トラップ・ログが有効になります。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [SNMP ツール] > [SNMP トラップ ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ SNMP トラップ・モニタまたはテクノロジー SNMP トラップ統合モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
重要な情報	<p>SNMP トラップ・ログがアクティブでない場合、「SNMP トラップの受信がアクティブではありません」というメッセージがツール・ページの上部に表示されます。</p>
関連タスク	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
内容の照合	<p>SNMP トラップ・ログのエントリの照合に使用する任意のテキスト文字列または正規表現。内容の照合は、OID、コミュニティ、エージェントなどのログの列から実行できます。</p> <p>SiteScope の SNMP トラップ・ログの SNMP トラップは、[SNMP トラップ ログ] テーブルに表示されます。検索条件と一致するトラップ数が、ページの下部にある [SNMP トラップ ログ] テーブルのタイトルに表示されます。</p>
表示するトラップ数	<p>表示する SNMP トラップ数。トラップ数は、平均トラップ長に基づいて計算されます。トラップ・テキストが平均よりも長いまたは短い場合、表示されるトラップ数は選択した値と異なる場合があります。SiteScope が受信した最新の SNMP トラップが最初に表示されます。</p> <p>標準設定値 : 10</p>
ツールの実行	<p>テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</p>
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

トレース・ルート・ツール

このツールは、2つの場所を結ぶネットワーク経路を調べるためのツールで、経路上の各ホップに到達するまでの時間を示します。ネットワークに問題があれば、多くの場合にトレースルートを使用することで問題が生じている箇所を絞り込むことができます。このツールは、サーバから別の場所までのトレースルートを実行します。

このユーティリティを使用して、ホストの接続性を確認し、ホストがインターネットに接続する方法を決定できます。サーバから指定したホストへの経路を決定することもできます。これにより、インターネットのほかの場所にあるホストへの接続を試みる場合に、パケット損失が発生している可能性のある箇所を確認できます。


アクセス方法	[ツール] コンテキスト > [ネットワーク ツール] > [トレース ルート ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。
重要な情報	このツールでは、Windows プラットフォームでのみトレースルートを実行できます。UNIX の場合、SiteScope プロセスを停止し、トレースルート・ユーティリティのパス (/usr/sbin/traceroute など) を [インフラストラクチャ プリファレンス] の [トレースルート コマンド] ボックスに追加してから SiteScope を再起動する必要があります。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
解決するホスト名	解決するほかの場所のドメイン名または IP アドレス。 例 : demo.thiscompany.com または 206.168.112.53
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

URL ツール

このツールを使用すると、Web サーバから項目を取得できます。URL には接続するサーバと返す項目を指定します。SiteScope には要求した URL の内容が表示されるため、このツールは URL 内容のチェック機能としても使用できます。このユーティリティを使用して、特定の URL が Web サーバからアクセスできることを確認できます。また、ページが返されるまでにかかる時間の確認にも使用できます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [Web ツール] > [URL ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ URL モニタ, URL 内容モニタ, Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者, または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで, 既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで, [ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには, SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより, ツールが開き, モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
メイン設定	
URL	テストする URL。 例 : http://demo.company.com
内容の照合	返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト文字列。ページにこのテキストが含まれていない場合、内容の照合は失敗します。検索では大文字と小文字は区別されます。HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合はその HTML タグを含める必要があります (" < B> Hello< /B> World " など)。
エラーの内容の照合	返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト文字列。ページにこのテキストが含まれている場合、テストはエラー状況を示します。検索では大文字と小文字は区別されます。
HTTP 設定	
URL 内容のエンコード	内容の書き込みに使用するエンコーディング。エンコーディングは次のいずれからでも検出できます。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ HTTP ヘッダ : Content-Type: text/html; charset=UTF-8 ▶ HTML メタ・タグ : <meta http-equiv="Content-Type" content="text/html; charset=US-ASCII"> ▶ XML :<?xml version="1.0" encoding="ISO-8859-1"?> ドロップダウン・リストからエンコーディング・タイプを選択します。 例 : UTF-8, UTF-16, US-ASCII, ISO-8859-1 標準設定値 : サーバ応答からのエンコーディング
画像を取得	SiteScope には、要求した URL にリンクするグラフィック、ロゴなどの画像が表示されます。
フレームを取得	SiteScope には、要求した URL にリンクするフレームの HTML コードが表示されます。

UI 要素	説明
認証設定	
資格情報	<p>指定した URL でアクセス用の名前とパスワードが必要な場合に資格情報を許可するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ユーザ名およびパスワードを使用 : 手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。[ユーザ名] ボックスにユーザ名を、[パスワード] ボックスにパスワードを入力して URL にアクセスします。 ▶ 事前定義された資格情報を選択 : URL 用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します (標準設定のオプション)。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。


UI 要素	説明
<p>プリエンティブ認証</p>	<p>SiteScope がターゲット URL を要求する場合、認証資格情報を送信するためのオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ グローバル・プリファレンスを使用：[一般プリファレンス] ページの [プリエンティブ認証] で指定されている設定を SiteScope が使用するよう選択します。 ▶ 最初の要求を認証：認証先 URL に対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。 注：URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションのために URL でエラーが発生する可能性があります。 ▶ 要求された場合に認証：サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されるよう選択します。 注：URL でユーザ名とパスワードが必要とされない場合には、このオプションが使用される場合があります。 <p>すべてのオプションで、このモニタ・インスタンスのために入力された [ユーザ名] と [パスワード] が使用されます。ユーザ名とパスワードが個々のモニタに指定されない場合には、[一般プリファレンス] ページの [メイン] セクションで指定されている [標準設定の認証ユーザ名] と [標準設定の認証パスワード] が使用されます (指定されている場合)。 注：プリエンティブ認証はユーザ名とパスワードを送信するかどうかや、どのユーザ名とパスワードを送信するのかを制御しません。</p>
<p>クライアント側証明書</p>	<p>ターゲット URL にアクセスするためにクライアント側証明書を使用する必要がある場合の証明書ファイル。普通、これは .pfx (.p12) タイプ証明書で、通常はパスワードを要求します。[クライアント側証明書パスワード] ボックスに証明書のパスワードを入力します。 注：クライアント側証明書ファイルは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %templates.certificates ディレクトリにコピーする必要があります。</p>
<p>クライアント側証明書パスワード</p>	<p>クライアント側証明書を使用しており、その証明書がパスワードを要求する場合のパスワード。</p>
<p>認証 NTLM ドメイン</p>	<p>URL へのアクセスが求められる場合の NT LAN Manager (NTLM) のドメイン。</p>

UI 要素	説明
HTTPS に対して信頼されていない証明書を許容	セキュア HTTP (HTTPS) を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope が必要とされるサーバ証明書を持っていない場合には、このオプションを選択するか、または関連する証明書をインポートできます。サーバ証明書のインポートの詳細については、『Monitor Reference』の「URL Monitor Overview」の SSL 接続を参照してください。
HTTPS に対して無効な証明書を許容	セキュア HTTP (HTTPS) を使用してターゲット URL にアクセスしており、SiteScope に無効なサーバ証明書がある場合にはこのオプションを選択します。現在の日付が証明書チェーンで指定されている日付範囲内ではない場合、この状態が発生する可能性があります。
NTLM V2	アクセス先の URL が NTLM バージョン 2 を使用する認証を必要とする場合に選択します。
プロキシ設定	
HTTP プロキシ	URL へのアクセスに使用する HTTP プロキシ・サーバのアドレスまたはドメイン名とポート。
プロキシ・サーバのユーザ名	プロキシ・サーバにログオンするために使用する名前。
プロキシ・サーバのパスワード	プロキシ・サーバにログオンするために使用するパスワード。
Proxy NTLM V2	プロキシでユーザ・ログオンの認証に NTLM (Windows NT LAN Manager) バージョン 2 を使用します。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。結果には、URL 取得の統計情報と URL 内容のテキスト表現が含まれます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

Web サービス・ツール

このツールを使用すると、SOAP (Simple Object Access Protocol) に対応する Web サービスの可用性や安定性のチェック、または実際の SOAP 応答の表示を行うことができます。失敗した Web サービス要求の診断や、特定の Web サービス・モニタで使用する照合文字列の選択にも便利です。Web サービス・テストは、SOAP 要求をサーバに送信し、HTTP 応答コードをチェックしてサービスが応答していることを確認します。実際の SOAP 応答が表示されますが、返されたメッセージについてそれ以上の検証は行われません。

SOAP は、あるオペレーティング・システム下で実行されているプログラムが同じまたは別のオペレーティング・システム下で実行されている別のプログラムと通信する手段です (Linux ベースのプログラムと通信する Windows 2000 プログラムなど)。SOAP は分散環境のサービスとの情報交換に HTTP (Hypertext Transfer Protocol) と XML (Extensible Markup Language) を使用します。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [Web ツール] > [Web サービス ツール] を選択します (「ツールを使用」権限が必要です)。 ▶ Web サービス・モニタを設定または表示する場合も使用できます (SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合)。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
---------------	--

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 現在サポートされている仕様の機能は、WSDL 1.2, SOAP 1.1, XML Schema 2001 に基づく Simple Type および Complex Type, HTTP(s) プロトコルのみを使用した SOAP バインディングです。SOAP with Attachments はサポートされていません。 ▶ SOAP および WSDL テクノロジーは進化しています。そのため、WSDL ドキュメントによっては正確に解析されない場合があります。また、SOAP 要求によっては、やり取りできない Web サービス・プロバイダがある場合もあります。
関連タスク	162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
WSDL 設定	
WSDL の場所	<p>次のいずれかの WSDL の場所を選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ファイル : 使用する WSDL ファイルを選択します。このリストには、<SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥templates.wSDL/*.wSDL を検索して見つかったファイルが反映されます。WSDL ファイルには拡張子 .wSDL が必要です。 ▶ URL : テストする Web サービスの URL を入力します。
データの取得	メソッド引数に指定した WSDL ファイルを取得して分析します。結果のページには、使用できる測定値が表示されます。
サービス名	呼び出すサービスの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
ポート名	呼び出すポートの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。
メソッド名	呼び出すメソッドの名前。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。

UI 要素	説明
メソッド名前空間	SOAP 要求内のメソッドの XML 名前空間。初期セットアップ時、この値が WSDL ファイルから抽出されます。
スキーマ名前空間	SOAP 要求内のスキーマの XML 名前空間。初期セットアップ時、この値が WSDL ファイルから抽出されます。
SOAP アクション	Web サービスへの SOAP 要求のヘッダに含まれる SOAP アクションの URL。初期セットアップ時、この名前が WSDL ファイルから抽出されます。

UI 要素	説明
引数の名前	<p>前述の指定したメソッドへの引数とそのタイプ。Simple Type パラメータは形式 parm-name(parm-type) = value で指定します。<param-name> および <param-type> は、WSDL ファイルのサービス・メソッド仕様と完全に一致する必要があります。<value> は <param-type> と一致する必要があります。一致しない場合、要求は失敗します。空白が埋め込まれた文字列は、二重引用符 (“”) で囲みます。各パラメータは、各 value の最後に復帰改行を追加して別個の行に置く必要があります。</p> <p>例 : stockSymbol (string) = MERQ numShares (int) = 10</p> <p>Complex Type パラメータは、1 つの長い文字列として表現する必要があります (改行は読みやすくする目的にのみ使用します)。</p> <pre>stocksymbol[COMPLEX] = <stocksymbol xmlns:xsd="http://www.w3.org/2001/XMLSchema"xmlns:soap enc="http://schemas.xmlsoap.org/soap/encoding/"xmlns:xsi=" http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xmlns:fw100="urn:ws-stock" xsi:type="fw100:getQuote"> <ticker xsi:type="xsd:string">MERQ </ticker> </stocksymbol></pre> <p>注 : SiteScope は入力パラメータ・リストに対する検証を行わないため、Complex Type 値が有効で適切な形式の XML 文字列であることを確認してください。Complex Type パラメータの場合、行末以外に復帰改行を追加しないでください。</p> <p>Web サービス・メソッドがパラメータを取り込まない場合、テキスト・ボックスは空のままにします。</p>
ユーザ定義 SOAP XML の使用	<p>[ユーザ SOAP XML] ボックスの XML を使用します。これにより、手動で定義した XML を使用できます。</p>
ユーザ SOAP XML	<p>WSDL ファイルから抽出された、選択した Web サービスの SOAP XML が表示されます。標準設定の XML を変更し、[ユーザ定義 SOAP XML の使用] チェック・ボックスを選択すると、このボックスに手動で定義した XML を使用できます。</p>


UI 要素	説明
メイン設定	
要求のスキーマ	要求のスキーマ。現在 SiteScope でサポートされているのは SOAP のみです。
タイムアウト (秒単位)	Web サービス要求が完了するまで SiteScope が待機する合計時間 (秒単位)。 標準設定値 : 30 秒
.NET SOAP の使用	Web サービスが Microsoft .NET に基づいている場合に選択します。
内容の照合	<p>返されたページまたはフレーム・セット内でチェックするテキスト。ページにこのテキストが含まれていない場合、ツールから内容の一致はないというメッセージが表示されます。</p> <p>HTML タグはテキスト・ドキュメントの一部であるため、検索するテキストに HTML タグが含まれている場合は HTML タグも対象となります。これは、XML ページにも当てはまります。</p> <p>例 : "< B> Hello< /B> World"</p> <p>文字列をスラッシュで囲んで正規表現による照合を実行することもできます。最後のスラッシュの後に i を付けると、検索では大文字と小文字が区別されません。</p> <p>例 : /href=Doc%d+%#.html/ または /href=doc%d+%#.html/i</p> <p>特定のテキスト部分を保存して状態の一部として表示する場合、Perl 正規表現に括弧を使用します。</p> <p>例 : /Temperature: (\d+)</p> <p>注 : 検索では大文字と小文字は区別されます。</p>
HTTP 設定	
Web サービス・サーバ URL	チェックする Web サービス・サーバの URL が表示されます。
HTTP ユーザ・エージェント	SOAP 要求の HTTP ユーザ・エージェント。
HTTP コンテンツ・タイプ	HTTP 要求のコンテンツ・タイプ。

UI 要素	説明
プロキシ設定	
HTTP プロキシ	URL へのアクセスに使用できるプロキシ・サーバ(任意指定)。HTTP プロキシ・サーバのドメイン名およびポートを入力します。
プロキシ・サーバのユーザ名	このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名。 注: これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。
プロキシ・サーバのパスワード	このプロキシ・サーバで URL へのアクセスに名前とパスワードが必要な場合に使用するパスワード。 注: これらのオプションが機能するには、プロキシ・サーバでプロキシ認証がサポートされている必要があります。
ログイン設定	
NTLM ドメイン	Web サービスで、資格情報の一部として (後述のユーザ名およびパスワードとともに) NTLM/ チャレンジ・レスポンス認証が必要な場合の NTLM ドメイン。
認証ユーザ名	Web サービスへのアクセスにユーザ名およびパスワードが必要な場合に使用するユーザ名 (基本, ダイジェスト, NTLM 認証)。ユーザ名を入力します。 または、このエントリを空白のままにし、[一般プリファレンス] ページの [標準設定の認証ユーザ名] ボックスにユーザ名を入力できます。共通の認証資格情報を定義する場合は、この代替の方法を使用します。
認証パスワード	Web サービスへのアクセスにユーザ名およびパスワードが必要な場合に使用するパスワード (基本, ダイジェスト, NTLM 認証)。パスワードを入力します。 または、このエントリを空白のままにし、[一般プリファレンス] ページの [標準設定の認証パスワード] ボックスにパスワードを入力できます。共通の認証資格情報を定義する場合は、この代替の方法を使用します。

UI 要素	説明
ツールの実行	<p>テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。</p> <p>テストから返されるステータス値は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ OK ▶ 不明なホスト名 ▶ サーバに到達できません ▶ サーバに接続できません ▶ 読み込みのタイムアウト ▶ 内容の照合エラー ▶ ドキュメントが移動しました ▶ 許可されていません ▶ 禁止されています ▶ 見つかりません ▶ プロキシ認証が必要 ▶ サーバ・エラー ▶ 実装されていません ▶ サーバが使用中です
ファイルに保存	<p>結果をファイルに保存します。</p>

XSL 変換ツール

このツールを使用すると、XML ファイルまたは出力の変換に使用可能なユーザ定義の XSL ファイルをテストできます。これには、Web アプリケーションから取得した、パフォーマンス・メトリクス・データが含まれるファイルなどがあります。XSL 変換の使用は、参照可能な XML モニタで XML データを使用できるように許容可能な形式に処理するために必要になる場合があります。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [ツール] コンテキスト > [共通ユーティリティ ツール] > [XSL 変換ツール] を選択します（「ツールを使用」権限が必要です）。 ▶ XML 測定値モニタを設定または表示する場合も使用できます（SiteScope の管理者、または「モニタ・ツールを使用」権限が付与されたユーザの場合）。 ▶ 新規モニタを設定する場合は新規モニタのダイアログ・ボックスで、既存のモニタを設定する場合はモニタの [プロパティ] タブで、[ツールを使用] ボタンをクリックします。 ▶ 既存のモニタのテスト・ツールを実行するには、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [ツール] ボタン  をクリックします。これにより、ツールが開き、モニタの既存のデータを入力に使用して実行されます。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
関連タスク	<p>162 ページの「モニタの設定時またはトラブルシューティング時の SiteScope ツールの使用方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 160 ページの「SiteScope ツールの概要」 ▶ 108 ページの「[ツール] メニュー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
メイン設定	
XML URL	変換の入力である XML ファイルの URL。
XSL ファイル	テストする XSL ファイルへのパス。これは、SiteScope のルート・フォルダへの相対パスです。 例 : < SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥templates.applications¥XmlApp1.xsl
認証設定	
認証ユーザ名	対象 XML ファイルへのアクセスに認証が必要な場合、内容へのアクセスに必要なユーザ名。
認証パスワード	対象 XML ファイルへのアクセスに認証が必要な場合、内容へのアクセスに必要なパスワード。
プロキシ・サーバ	対象 XML 内容へのアクセスにプロキシ・サーバを使用する場合、プロキシ・サーバ・アドレス。
プロキシ・サーバのユーザ名 / プロキシ・サーバのパスワード	対象 XML 内容へのアクセスにプロキシを使用する場合、プロキシの使用に必要なユーザ名およびパスワード。
ツールの実行	テストを実行します。テスト結果は [結果] 表示枠に表示されます。
ファイルに保存	結果をファイルに保存します。

7

正規表現の使用

本章の内容

概念

- ▶ 正規表現の概要 (236 ページ)
- ▶ 正規表現の定義 (237 ページ)
- ▶ 文字列リテラルの照合 (239 ページ)

参照情報

- ▶ メタ文字を使用したパターンの照合 (241 ページ)
- ▶ 検索モード修飾子 (246 ページ)
- ▶ 内容の照合値の保持 (247 ページ)
- ▶ SiteScope の日付変数 (248 ページ)
- ▶ ログ・ファイル監視の例 (254 ページ)
- ▶ 正規表現の使用時に発生する問題 (262 ページ)

概念

正規表現の概要

SiteScope では、テキスト・コンテンツの照合に正規表現を利用します。いくつかの SiteScope モニタでは、モニタの要求またはアクションによって返されるテキストの内容を照合できます。この章では、SiteScope モニタで正規表現を使用してテキスト・コンテンツを照合する方法について説明します。

正規表現は、Awk や Perl などのスクリプト言語および Emacs, Visual C++, Java などのプログラミング環境で使用するために開発されたテキスト解析ツールに付けられた名前です。正規表現自体はプログラミング言語ではありません。ただし、文字や記号の特殊な組み合わせを数多く使用するため、一部のプログラミング言語よりも理解しづらくなっている場合が多くあります。このような特殊文字（メタ文字と呼ばれます）のさまざまな組み合わせによって、正規表現は、より大きなテキストに含まれている特定のテキストを解析および抽出するための非常に強力な柔軟性のあるツールとなります。

モニタの **[内容の照合]** テキスト・ボックスに正規表現を使用すると、実行時にモニタに返されるテキストが SiteScope によって解析され、正規表現で定義したパターンに一致する内容が検索されます。このドキュメントでは、SiteScope モニタの内容を照合するために正規表現で使用される構文とメタ文字の概要について説明します。

正規表現の定義

SiteScope の内容を照合するための要素は、スラッシュ (/) 文字です。SiteScope モニタの [内容の照合] テキスト・ボックスのエントリは、正規表現として認識されるようにスラッシュで囲む必要があります。たとえば、/website/ という表現をモニタの [内容の照合] ボックスに入力すると、SiteScope によって、モニタで受信したテキスト・コンテンツから **website** というリテラル・テキスト文字列が検索されます。一致するテキスト文字列がない場合、モニタによってエラー・ステータスがレポートされます。一致するテキスト文字列がある場合、ほかのモニタ・ステータスのしきい値に対応する条件もすべて満たしていれば、モニタによって正常ステータスが返されます。スラッシュでエントリを区切らずにテキストまたはほかの文字を [内容の照合] ボックスに入力すると、SiteScope では、エントリは無視されるか、内容の照合エラーとしてレポートされます。

また、SiteScope の正規表現では、正規表現を囲むスラッシュ内に括弧 () を追加できます。これは非常に便利な機能です。括弧は「後方参照」を作成するために使用されます。後方参照として、SiteScope では括弧間で一致したテキストが保持され、モニタの詳細のページの [ステータス] フィールドにそのテキストが表示されます。これは、内容の照合のトラブルシューティングに役立ちます。この方法を使用して、一致した値をあるモニタから別のモニタに、または URL シーケンス・モニタのあるステップから同じトランザクションの次のステップに渡すこともできます。また、括弧は次に示すように選択肢の範囲を定義するためにも使用されます。

通常、SiteScope で正規表現を作成して内容を照合する場合、反復的な手法が適しています。次に、正規表現を作成して内容を照合する場合の一般的な手順とガイドラインを示します。

- ▶ 監視するデータの 1 つのサンプルに一致するリテラル文字を使用して正規表現を作成します。例：`/value: 1022.5/`。
- ▶ 繰り返しリテラル文字を文字クラスおよびメタ文字に置き換えて、リテラルをパターンへと標準化していきます。たとえば、前述の例のリテラルは、4 つの数値、小数点、もう 1 つの数値に一致する `/value:¥s¥d¥d¥d¥d¥.¥d/` になります。
- ▶ 照合するデータのパターンが変わる可能性がある場合を考えます。予測されるまたは可能性のある対象データの変動に合わせてパターンを調整します。前の例の `/value:¥s¥d¥d¥d¥d¥.¥d/` という表現は `/value:¥s[¥d]{1, 8}¥.[¥d]{1,2}/` のようになります。このパターンでは、小数点前の数値の数と小数点後の数値の数の変動に対応できます。このパターンでは、小数点が存在することを想定しています。ここで使用されている文字クラスの詳細については、次項を参照してください。
- ▶ 照合するリテラル文字列またはパターンがコンテンツ内に複数回出現する可能性がある場合を考えます。照合するコンテンツより前に出現する一意のコンテンツを指定してから正規表現のパターンを追加します。これにより、監視するコンテンツが照合される前に一意のコンテンツが式で照合されます。この例のパターンでは、最初のいくつかのエントリが `/value:numbers/` のようになるパターンに一致します。静的コンテンツに一致するリテラルをパターンに追加すると、特定のデータの範囲が定まり、確実に対象データに対して照合を実行できるようになります。たとえば、照合するデータが `Open Queries` というテキストの後にある場合、`/Open Queries[¥s¥W]{1,5} value:¥s[¥d]{1, 8}¥.[¥d]{1,2}/` のように、介在するコンテンツのパターンとともにこのリテラルをパターンに追加できます。

文字列リテラルの照合

正確な文字列またはリテラル文字列の検索と照合は、正規表現でのパターン照合の最も単純な形式です。リテラルの照合では、正規表現はワード・プロセッシング・アプリケーションの検索 / 置換と同様に動作します。前述の例では、**Web site** というテキストと照合しました。正規表現 `/Buy Now/` は、文字 **Buy Now** が空白も含めてこの順序で含まれるテキストがモニタに返された場合に成功します。

標準設定では、正規表現は大文字と小文字を区別したリテラルです。つまり、英数字以外の文字を含めて、大文字と小文字、および順序で内容が表現と一致する必要があります。たとえば、修飾子のない `/Website/` の正規表現は、内容に完全に一致する文字列 **Website** が含まれる場合のみに成功し、ページに含まれる内容が **website**, **WEBSITE**, または **Web site** の場合は失敗します（最後の例では、2つの単語の間に正規表現にはない空白があるため失敗します）。

この場合は、正規表現で使用される特別な「予約済み」メタ文字である特定の英数字以外の文字をリテラルに照合できます。一部のメタ文字は、正規表現で照合する重要なリテラルと競合する場合があります。たとえば、ピリオドやドット記号 (`.`)、アスタリスク (`*`)、ドル記号 (`$`)、バックスラッシュ (`\`) は正規表現内で特別な意味を持ちます。これらの文字のいずれかが検索する特定のテキスト・パターンの主要部分である場合、正規表現プロセスでこれらの文字を特別なメタ文字としてではなくリテラル文字として扱うように「エスケープ」する必要があります。文字をメタ文字ではなくリテラルとして強制的に解釈させるには、その文字の前にバックスラッシュを追加します。

本項の内容

- ▶ 240 ページの「例 - リテラル文字列の照合」
- ▶ 240 ページの「代替の使用」

例 - リテラル文字列の照合

たとえば、Web ページで文字列 `4.99` を検索する場合に、`/4.99/` という正規表現を作成したとします。この場合、文字列 `4.99` が一致しますが、ピリオド文字は特別な意味を持つため、`4599` や `4Q99` のような文字列も一致します。正規表現でピリオドをリテラルとして解釈させるには、`/4¥.99/` のようにピリオドをスラッシュでエスケープします。文字の前にバックスラッシュのエスケープ文字を追加することで、正規表現プロセスでバックスラッシュに続く文字をリテラルとして強制的に解釈させることができます。通常、句読点やその他の英数字以外の文字を照合する場合は、常にこの構文を使用します。

代替の使用

代替を使用して、複数の文字列のいずれかが内容に含まれる `either/or` 照合を構成できます。代替文字は垂直パイプ記号 (`|`) です。

垂直パイプは、正規表現で代替文字を区切るために使用されます。たとえば、正規表現 `/(e-mail|e-mail|contact us)/` は、垂直パイプで区切られた 3 つの文字列のいずれかが内容に含まれる場合に成功します。ここでは、代替の区切りに括弧が使用されています。この例では、一致する必要がある代替の外側にはパターンがありません。これに対して、`/(e-mail|e-mail|contact) us/` のように正規表現を記述することもできます。この場合、括弧に囲まれた 3 つの代替のいずれかの直後に空白スペースと単語 `us` が続く場合にのみ、照合は成功します。これは前の例よりも制限がありますが、括弧によって代替が内部の 3 つの単語に限定されていることもわかります。代替の 1 つ以上が見つかったとしても次の単語が「`us`」でない場合は、照合は失敗します。

参照情報

メタ文字を使用したパターンの照合

照合が必要なテキストが正確にわからない場合や、テキスト・パターンがセッションや日によって変わることはよくあります。正規表現には、パターンの定義や文字のカテゴリ全体の照合に使用する特殊なメタ文字が多くあります。正規表現は、単なるリテラルの英数字文字の照合だけでなく、非英数字文字の照合にも使用できます。このため、正規表現では検索する内容に非英数字文字が存在することを考慮することが重要です。つまり、正規表現を作成するときには、ピリオド、カンマ、ハイフン、引用符などの文字や、空白さえも考慮する必要があります。

本項の内容

- ▶ 241 ページの「正規表現で使用するメタ文字」
- ▶ 243 ページの「文字クラスの定義」
- ▶ 244 ページの「数量詞の使用」

正規表現で使用するメタ文字

メタ文字	説明
¥s	汎用的な空白（つまり Space キー）を照合する。このメタ文字は、数量詞と組み合わせて、照合対象の単語間に発生する可変の空白数の位置を照合する場合に特に便利です。
¥S	空白以外の文字を照合する。¥S は大文字です。一方、小文字の ¥s は空白の照合に使用します。

メタ文字	説明
.	ピリオド（ドット文字）。通常、これはすべての文字を照合します。SiteScopeでは、ドットは独自形式の文字クラスとみなされるため、文字クラスの角括弧内に含めないでください。
¥n	行送り文字を照合する。
¥r	復帰改行文字を照合する。
¥w	空白以外の文字を照合する。文字クラス [A-Za-z0-9_] で照合するものと同じです。¥w メタ文字は、アンダースコア文字を照合しますが、ほかの句読点（ハイフン、カンマ、ピリオドなど）は照合しません。
¥W	¥w（小文字）で照合する文字以外の文字を照合する。句読点と非英数字文字（~!@#\$%^&*()+={[]:;&行送り文字、復帰改行、空白を含む）を照合する場合に特に便利です。¥w で照合される単語構成要素とみなされるアンダースコア文字は照合しません。
¥d	数字のみを照合する。これは、[0-9] 文字クラスに相当します。
¥D	非数字文字（¥d で照合しない文字）とほかの文字を照合する。¥W と似ていますが、英文字も照合します。SiteScopeでは、通常これは数字に遭遇するまでのすべて（複数行を含む）を照合します。
¥b	照合に際し、¥b で指示した位置に単語の境界（通常は空白）が必要であることを示す。
¥B	指示した位置に単語の境界があってはならないことを示す。

文字クラスの定義

文字クラスは、重要で非常に便利な正規表現構成です。文字クラスには、正規表現内の特定の位置で検出される可能性がある特定の文字セットを定義します。文字クラスを使用するのは、1つの位置で照合する文字の範囲を定義する場合、または数量詞を追加して複数の文字や複数行を広く照合する場合などです。

文字クラスは、文字とメタ文字の任意の組み合わせを角括弧 `[]` で囲んで形成します。文字クラスでは、照合対象となる「いずれか、またはすべて」の文字のグループを作成します。文字クラス外のリテラルやメタ文字とは異なり、文字クラス内の文字やメタ文字の物理的な並びは検索や照合の順序に影響しません。たとえば、クラス `[ABC0123abc]` は `[0123abcABC]` と同じ内容を照合します。

ハイフンを使用して文字または数字の範囲を示すことで、文字クラスをさらに効率化できます。たとえば、クラス `[0-9]` には `0` から `9` までのすべての数字が含まれます。クラス `[a-z]` には `a` から `z` までのすべての小文字が含まれます。ハイフンを使用して、より限定的なクラスを作成することもできます。たとえば、`[e-tE-T]` は `E` から `T` までの大文字または小文字を照合し、`[0-5]` は `0` から `5` までの数字のみを照合します。

キャレット文字 (^) を文字クラス内で否定として使用すると、特定の文字を内容の照合から除外できます。

文字クラスの例

例	説明
<code>[a-zA-Z]</code>	文字 <code>a</code> から文字 <code>z</code> までの任意の英文字（大文字と小文字の両方）を照合する。複数の文字を照合するには、後述のように文字クラスの後に数量詞を付加します。
<code>[0-9]</code>	<code>0</code> から <code>9</code> までの任意の数字を照合する。複数の数字を照合するには、後述のように文字クラスの後に数量詞を付加します。
<code>[\w\s]</code>	英数字文字または空白、あるいはその両方を照合する。
<code>[\w^[]]</code>	アンダースコアを除く、任意の英数字文字を照合する。

数量詞の使用

正規表現に、文字をカウントするオプションとして使用できるメタ文字のもう 1 つのセットです。これにより、内容の照合機能を大幅に強化して柔軟性を高めることができます。数量詞は、前述のメタ文字と文字クラスの後に付加して、先行する照合文字またはメタ文字を照合する位置を指定します。たとえば、正規表現 `/(contact|about)¥s+us/` では、メタ文字 `¥s` が空白を照合します。プラス記号の数量詞を `¥s` の後に付けると、単語 `contact` (または `about`) と `us` の間に少なくとも 1 文字以上の空白が必要であることを示します。

次の表では、正規表現で使用できる数量詞について説明します。数量詞は、その直前にある 1 文字に適用されます。文字クラスと併用する場合、数量詞は文字クラスの閉じ角括弧の外側に置きます。たとえば、`[a-z]+` や `[0-9]*` のように指定します。

数量詞	説明
?	疑問符は、先行する文字または文字クラスが 1 回だけ出現する可能性があることを示す。ただしこれは任意指定であり、指示した位置に出現しなくてもかまわない。
*	アスタリスクでは、任意の数の先行する文字または文字クラスが指定した位置に出現する必要がある。これには、0 以上の一致が含まれます。 注: この数量詞を、ドット (.) メタ文字または <code>¥W</code> メタ文字を含む文字クラスと組み合わせると、想定より多くの内容が取得されて正規表現エンジンが SiteScope サーバの使用可能な CPU 時間を使い切ってしまう可能性があるため、注意してください。

数量詞	説明
+	プラス記号は、先行する文字また文字クラスが少なくとも1回出現する必要があることを示す。
{min,max}	波括弧は、数量詞の範囲指定に使用する。範囲列挙子の数字はカンマで区切ります。この構成では、先行する文字または文字クラスの出現回数が min 列挙子で指定した回数以上、 max 列挙子で指定した値以下である必要があります。少なくとも min 列挙子で指定した回数出現すれば、照合は成功します。ただし、照合は max 列挙子で指定した回数か、それ以上一致が検出されなくなるまで続行されます。

SiteScope での内容の照合は、HTTP 応答全体に対して実行されます。これには、通常はブラウザでは表示できない HTTP ヘッダも含まれます。HTTP ヘッダには通常、数字のシーケンスと組になった単語を含む、複数行のテキストが含まれます。これにより、数字や文字の小さいセットなどの単純な内容に対する照合以外では、照合が失敗することがあります。失敗を避けるには、照合対象のテキストの近くにある固有の文字シーケンスを特定し、可能ならばそれをリテラルとして正規表現に含めます。

検索モード修飾子

SiteScope で使用する正規表現では、表現を区切るスラッシュの外側に任意指定の修飾子が含まれていることがあります。閉じるスラッシュの後にある修飾子は、照合の実行方法に影響します。たとえば、`i` 検索修飾子が追加された `/website/i` という正規表現では、照合内容での検索は大文字と小文字が区別されません。この場合、`website`、`Website`、`WEBSITE` や、`WEBSITE` でさえも一致します。

`i` 修飾子を除き、一部のメタ文字と文字クラスによって検索モード修飾子を上書きできます。特にドット (`.`) と `¥W` メタ文字は、`m` および `s` 修飾子を上書きし、これらの修飾子があっても複数行にわたって内容を照合します。

複数の修飾子を追加するには、正規表現の閉じるスラッシュの後に修飾子を連結して追加します。次に例を示します。`/matchpattern/ic` は `i` および `c` 修飾子を結合します。

正規表現照合モード修飾子

モード修飾子	説明
<code>/i</code>	大文字と小文字の区別を無視する。これにより、大文字と小文字に関係なく検索が行われます。これは、Web ページのテキスト内容内で一致を検索する場合に特に便利なオプションです。
<code>/c</code>	一致したパターンが、検索する内容に出現してはならないことを示す。これは「補集合的」照合であり、パターンが検出されるとエラーが返され、パターンが検出されないと成功します。
<code>/m</code>	途中にある復帰改行や行送りを無視せずに複数行を照合する。この修飾子を使用した場合でも、行送りや復帰改行は、 <code>[¥w¥W]*</code> や <code>[¥s¥S¥n¥r]*</code> などの文字クラスを使用して考慮する必要があります。この修飾子を使用すると、 <code>.*</code> は復帰改行や行送りを照合しません。
<code>/s</code>	途中にある復帰改行および行送り文字を無視して内容を 1 行とみなす。この修飾子を使用した場合、 <code>[¥w¥W]*</code> 文字クラスと <code>.*</code> パターンのどちらも行送りと復帰改行をまたいで照合を行います。

内容の照合値の保持

URL モニタや URL シーケンス・モニタなど、一部のモニタには、ログに記録され、エラー・ステータスしきい値の設定に使用できる内容の照合値があります。正規表現構文で使用される括弧 `(照合パターン)` には、内容の照合値に保持されるテキストを判断するというもう 1 つの目的があります。この機能を使用して、URL モニタまたは URL シーケンス・モニタのエラーしきい値を判断するために、内容の照合値をしきい値として直接使用します。

たとえば、内容の照合表現が次のような場合を例に挙げます。

```
/Copyright (¥d*)/
```

URL リクエストによってモニタに返される内容に次の文字列が含まれているとします。

```
... Copyright 2007 by HP
```

一致した結果、保持される内容の照合値は、次のようになります。

```
2007
```

次に、モニタ設定ページ下部の `error-if` オプションの下で、`error-if` 条件をステータスの標準設定 `!= 200` から内容の照合に変更し、関係演算子を `!=` に指定し、値を `2008` に指定できます。これにより、文字列 `Copyright` の年が `2008` 以外の場合は、モニタからエラーがレポートされるようにこのモニタのエラーしきい値が設定されます。このメカニズムは、Web ページの内容が不正に変更されていないかどうかを監視するために利用できます。

Web ページにあるほかの URL へのリンクの確認は、URL シーケンス・モニタの作成において重要な部分です。Web ページのリンクの URL テキストを照合するには、次の正規表現を使用できます。

```
/a href="?([:¥/¥w¥s¥d¥.]*)"?/i
```

この表現は、`href="protocol://path/URLname.htm"` を多数の URL と照合します。疑問符修飾子を使用することによって、`HREF=` 属性を囲む引用符の指定は任意になります。i 修飾子により、照合パターンの大文字と小文字は区別されません。

内容の照合から保持または記憶された値は、URL シーケンス・モニタの後続ステップで参照され、入力値として使用できます。シーケンス・ステップ間での値の保持または受け渡しに使用する構文については、URL シーケンス・モニタの「**内容の照合**」を参照してください。

SiteScope の日付変数

SiteScope では、特別に定義された変数を使用して、現在の日付または時刻を照合する表現を作成します。これらの変数を内容の照合フィールドで使用すると、日付が記述された内容を検出できます。一般の日付変数は、日付形式の部分を照合するのに便利です。言語または国に固有の日付変数を使用すると、ISO コードに基づき、月と曜日の名称に使用される言語を自動的に特定の国に拡張できます。

本項の内容

- ▶ 249 ページの「一般の日付変数」
- ▶ 251 ページの「言語または国に固有の日付変数」
- ▶ 252 ページの「モニタ URL またはファイル・パスの特殊置換」

一般の日付変数

次の表は、一般変数を示します。

変数	値の範囲
\$hour\$	0 - 23
\$minute\$	0 - 59
\$month\$	1 - 12
\$day\$	1 - 31
\$year\$	1000 - 9999
\$shortYear\$	00 - 99
\$weekdayName\$	Sun ~ Sat
\$fullWeekdayName\$	Sunday - Saturday
\$0hour\$	00 - 23
\$0minute\$	00 - 59
\$0day\$	01 ~ 31 (2桁の日付形式)
\$0month\$	01 ~ 12 (2桁の月形式)
\$monthName\$	Jan ~ Dec (英語の3文字の月形式)
\$fullMonthName\$	January - December
\$ticks\$	1970年1月1日の午前0時から経過したミリ秒数。

たとえば、内容の照合検索表現を次のように定義します。

```
/Updated on $0month$¥/$0day$¥/$shortYear$/
```

リクエストによって返された内容に次の文字列が含まれているとします。

```
Updated on 06/01/98
```

この表現は、モニタが1998年6月1日に実行されると一致します。返された内容に現在のシステム日付と一致する文字列が含まれていない場合、または日付形式が指定した形式と異なる場合、照合は失敗します。

時間を現在時刻より前または後にする場合は、表現に `$offsetMinutes=mmmm$` を追加できます。これにより、置換を行う前に現在時刻が `mmmm` 分間ずらされます（時間を遡るには負の数値を指定できます）。

たとえば、現在の日付が 2007 年 6 月 1 日だとすると、検索表現は次のようになります。

```
/$offsetMinutes=1440$Updated on $0month$¥/$0day$¥/$shortYear$/
```

この場合、一致する内容文字列が次のようになります。

```
Updated on 06/02/07
```

注：日付がシステム日付の 1 日後になっています。

言語または国に固有の日付変数

次の表は、国際標準の曜日および月の名称の照合で使用する SiteScope の特殊変数を示します。LL と CC という文字は、ISO 639 言語コード文字 (2 文字) と ISO 3166 国コード文字 (2 文字) のプレースホルダです (詳細については、表の下の説明を参照)。

変数	値の範囲
\$weekdayName_LL_CC\$	指定した言語 (LL) および国 (CC) の曜日の省略名称 (表の下の説明を参照)
\$fullWeekdayName_LL_CC\$	指定した言語 (LL) および国 (CC) の曜日の正式名称
\$monthName_LL_CC\$	指定した言語 (LL) および国 (CC) の月の省略名称
\$fullMonthName_LL_CC\$	指定した言語 (LL) および国 (CC) の月の正式名称

CC : 大文字 2 文字で表記する ISO-3166 国コード。たとえば、ドイツは DE, フランスは FR, 中国は CN, 日本は JP, ブラジルは BR のように表します。このコードの一覧表は、次のようなインターネット・サイトなど、多数のインターネット・サイトから入手できます。

<http://www.iso.org/iso/en/prods-services/iso3166ma/02iso-3166-code-lists/list-en1.html> (英語サイト)

LL : 小文字 2 文字で表記する ISO-639 言語コード。たとえば、ドイツ語は de, フランス語は fr, 中国語は zh, 日本語は ja, ポルトガル語は pt のように表します。このコードの一覧表は、次のようなインターネット・サイトなど、多数のインターネット・サイトから入手できます。

<http://www.ics.uci.edu/pub/ietf/http/related/iso639.txt> (英語サイト) または
<http://www.dsv.su.se/~jpalme/ietf/language-codes.html> (英語サイト)

たとえば、内容の照合表現を次のように定義します。

```
/$fullWeekdayName_fr_FR$/i
```

リクエストによって返された内容に次の文字列が含まれているとします。

```
mercredi
```

この表現は、モニタが土曜日に実行されると一致します。

国に固有の言語のバリエーションを考慮する必要がない場合は、国コードを含めずに前述の任意の変数を使用できます。例：

```
/$fullWeekdayName_fr$/
```

上の表現は、`/$fullWeekdayName_fr_FR$/`と同じ内容を照合するために使用できます。

モニタ URL またはファイル・パスの特殊置換

SiteScope の日付変数は、正規表現の一部として内容を照合するのに便利です。日付変数は、特定のモニタに URL またはファイル・パスを動的に作成するために、特殊置換としても使用できます。これは、システムの日付情報に基づいて URL またはファイル・パスが自動的に更新される、日付が記述されたファイルとディレクトリを監視するのに役立ちます。SiteScope は、日付が記述されたログ・ファイルを作成するアプリケーションの一例です。ログ・ファイル名には部分的に、`File2001_05_01.log` のように何らかの形式で年月日が含まれます。

この例に基づき、新しいファイルが毎日作成されます。通常、当日のファイルの作成、サイズ、または内容を監視するには、モニタのファイル・パスまたは URL を毎日手動で変更する必要があります。SiteScope の日付変数と特殊置換を使用すると、当日のログ・ファイルのファイル・パスを自動的に更新できます。ファイルの命名に使用されるパターンを把握することによって、システム日付のプロパティの一部をファイル・パスまたは URL に代入する正規表現に似た特殊置換文字列を作成できます。

次の例はファイル・モニタにある当日のログ・ファイルの絶対ファイル・パスであるとします。

```
D:/Production/Webapps/Logs/File2001_05_01.log
```

翌日のログ・ファイルは、次のようになります。

```
D:/Production/Webapps/Logs/File2001_05_02.log
```

次の構文を使用して、モニタで使用するファイル・パスを自動的に更新する特殊置換表現を作成できます。

```
s/D:¥/Production¥/Webapps¥/Logs¥/File$year$_$0month$_$0day$.log/
```

置換の表現は、小文字の `s` で開始し、スラッシュ `/.../` で囲む必要があります。ファイル・パスの一部として含まれるスラッシュは、上に示すようにバックスラッシュ `(¥)` 文字を追加してエスケープする必要があります。**SiteScope** 日付変数は、アンダースコア文字で区切ります。**SiteScope** では、モニタを実行するたびにシステム時刻のプロパティをチェックし、ファイルにアクセスする前に該当する値がファイル・パスまたは URL に代入されます。

特殊置換をサポートする **SiteScope** モニタ・タイプは、次のとおりです。

- ▶ e ビジネス・チェーン
- ▶ ファイル・モニタ
- ▶ ログ・モニタ
- ▶ URL モニタ
- ▶ URL シーケンス・モニタ
- ▶ Web サーバ・モニタ

特殊置換の構文は正規表現で使用される置換構文に似ていますが、同じではありません。内容の照合の正規表現では **SiteScope** の日付変数をすべて使用できるのに対し、特殊置換は内容の照合表現の一部として使用できません。

ログ・ファイル監視の例

SiteScope のログ・ファイル・モニタとファイル・モニタでは、ほかのアプリケーションで作成されたファイルのエントリがチェックされます。これらのファイルは、サードパーティ製のアプリケーションで作成したデータ・ファイルであったり、自分の環境用に特別に設計されたカスタム・システムで作成したログであったりします。ログまたはファイルが既知の予測可能な形式で記述されている場合、新しいエントリを定期的にチェックし、内容の特定の文字列と照合するように **SiteScope** を設定できます。ログ・ファイルのエントリの例とエントリのチェックに使用できる単純な正規表現パターンを次に示します。これらの例をそのまま使用するか、特定のケースに合わせて変更できます。

注: SiteScope では、正規表現をすべて 1 行で入力する必要があります。次に示す例には、このページ内に収めるために複数行にわたって記述されているものもあります。

本項の内容

- ▶ 255 ページの「ログ・ファイルのパスの検索」
- ▶ 257 ページの「カンマで区切られた値の照合」
- ▶ 258 ページの「空白で区切られた値の照合」
- ▶ 259 ページの「テキストまたは数値の行の数値の照合と保持」
- ▶ 260 ページの「整数と浮動小数点数（正または負）の照合」
- ▶ 261 ページの「日付と時刻を含むログ・エントリの照合」

ログ・ファイルのパスの検索

UNIX と Windows オペレーティング・システムとでは、ファイル名の大文字と小文字 (N と n) の取り扱いに互換性がありません。Windows オペレーティング・システムでは大文字と小文字が区別されず、ファイルの検索時には大文字と小文字が無視されます。UNIX オペレーティング・システムでは大文字と小文字が区別され、名前の文字の大小の違いは常に重要です。UNIX オペレーティング・システム上のパス名の検索で正規表現を使用する場合にログ・ファイル・エラーを避けるには、パス表現の大文字と小文字を変更するマークを使用します。

マーカ	説明
\$L	\$L マーカと \$E マーカの間の文字を小文字に変更できる。
\$U	\$U マーカと \$E マーカの間の文字を大文字に変更できる。
\$E	大文字と小文字の変更に使用する終了マーカ。

例：

次のパス表現を定義するとします。

```
s/#!/tmp#!/logs#!/arcv.log.$weekdayName$/
```

Linux マシン上の /tmp/logs/arcv.log.tue ログ・ファイルの場合、SiteScope が tmp/logs/arcv.log.Tue を検出しようとし、Linux では大文字と小文字が区別されるため、ログ・ファイル・エラーが表示されます。

この問題を解決するには、パス表現を次のように定義します。

```
s/#!/tmp#!/logs#!/arcv.log.$L$weekdayName$$E/
```

モニタは、\$L から \$E の間にある文字を小文字 /tmp/logs/arcv.log.tue に変換します。

反対に、SiteScope でマーカ間の文字を大文字に変更できるようにするには、**\$U** と **\$E** を使用します。たとえば、次のパス表現を定義するとします。

```
s/¥/tmp¥/logs¥/arcv.log.$L$weekdayName$$E/
```

モニタは、パスを /tmp/logs/arcv.log.TUE に変換します。

パス表現では、**\$L** と **\$U** を複数回使用できます。また同じ表現で両方を使用できます。

例：

```
s/¥/tmp¥/logs-$L$weekdayName$$E¥/arcv.log.$U$weekdayName$$E/
```

上記はパスを /tmp/logs-tue/arcv.log.TUE に変換します。

```
s/¥/tmp.$L$monthName$$E¥/logs-$L$weekdayName$$E¥/  
arcv.log.$U$weekdayName$$E/
```

上記はパスを /tmp.mar/logs-tue/arcv.log.TUE に変換します。

カンマで区切られた値の照合

カンマで区切られた数値と文字列のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
new,open,changed,12>alerts  
new,open,changed,13>alerts  
new,open,changed,13>alerts  
new,open,changed,14>alerts
```

カンマで区切られた数値と文字列のログ・ファイル・エントリに一致する正規表現を次に示します。

```
/([\w\d]+,[\w\d]+,[\w\d]+,[\w\d]+)[\n\r]?/
```

注：このファイル・エントリにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、`[\w\d]` クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、コロンを含めるには、`[\w\d]` パターンのそれぞれを `[\w\d:]` に変更します。

空白で区切られた値の照合

空白で区切られた文字列と数値のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
requests 12 succeeded 12 failed  
requests 12 succeeded 12 failed  
requests 11 succeeded 11 failed  
requests 12 succeeded 12 failed  
requests 10 succeeded 10 failed
```

空白で区切られた文字列と数値のログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。

```
/([\w\d]+\s+[\w\d]+\s+[\w\d]+\s+[\w\d]+\s+[\w\d]+)[\n\r]?/
```

注: + 文字を使用すると、照合パターンで 1 行に指定した数のシーケンス含めることができます。この例では、ログ・ファイル内で 5 つの単語または数値が含まれる行に一致します。このシーケンスにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、`[\w\d]` クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、コロンを含めるには、`[\w\d]` パターンのそれぞれを `[\w\d:]` に変更します。

テキストまたは数値の行の数値の照合と保持

カンマで区切られた数字と文字が混在する文字列のログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
request handle number 12.56, series 17.5, sequence reported 97.45, 15.95 and 19.51
request handle number 15.96, series 27.5, sequence reported 107.45, 25.95 and 19.52
request handle number 11.06, series 36.5, system codes 9.45, 35.95 and 19.53
log reference number 12.30, series 17.5, channel reset values 100.45, 45.95 and 19.54
```

カンマで区切られた数字と文字が混在する文字列のログ・ファイル・エントリに一致し 10 進数のデータを保持する正規表現の例を次に示します。

```
/[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[,¥w¥s]+(¥d+¥.¥d+)[¥n¥r]?/.
```

注：このファイル・エントリにアンダースコアやコロンなどの句読点が含まれる場合、`[,¥w¥d]` クラス・パターンにその文字を明示的に追加してください。たとえば、テキスト・シーケンスに現れるコロンを含めるには、`[,¥w¥s]` パターンのそれぞれを `[,¥w¥s]` に変更します。

整数と浮動小数点数（正または負）の照合

一連の正または負の整数と浮動小数点数によるログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
12.1987 -71 -199.1 145 -1.00716  
13.2987 -72 -199.2 245 -1.00726  
14.3987 -73 -199.3 345 -1.00736  
15.4987 -74 -199.4 445 -1.00746
```

5つの正または負の整数と浮動小数点数によるログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。各エントリの数値は1つまたは複数の空白で区切られている必要があります。

```
/(-?\d+\.?\d{0,})[^\s]+(-?\d+\.?\d{0,})[^\s]+(-?\d+\.?\d{0,})[^\s]+(-?\d+\.?\d{0,})[^\s]+(-?\d+\.?\d{0,})[^\n\r]?/
```

日付と時刻を含むログ・エントリの照合

多くのログ・ファイルには一定の形式の日付と時刻が各エントリに含まれます。カンマで区切られた文字列に加えて日付と時刻の情報を含むログ・ファイル・エントリの例を次に示します。

```
20/04/2003 14:29:22,ERROR,request failed
20/04/2003 14:31:09,INFO,system check complete
20/04/2003 14:35:46,INFO,new record created
```

カンマで区切られた文字列の前に日付と時刻の情報を含むログ・ファイル・エントリに一致する正規表現の例を次に示します。次の例では、SiteScope が稼動しているサーバのシステム・クロックによって示された同じ年月日に作成されたエントリのみ的一致するために SiteScope の日付変数を使用しています。

```
/$0day$¥/$0month$¥/$year$¥s+¥d+:¥d+:¥d+,[¥w¥d]+,[¥w¥d]+/
```

次の例では、SiteScope が稼動しているサーバのシステム・クロックによって示された同じ年月日および同じ時間内に作成された、より限定されたエントリのみ的一致するために SiteScope の日付変数を使用しています。

```
/$0day$¥/$0month$¥/$year$¥s+$0hour$:¥d+:¥d+,[¥w¥d]+,[¥w¥d]+/
```

正規表現の使用時に発生する問題

本項では、正規表現の使用時に発生する問題について説明します。

本項の内容

- ▶ 262 ページの「.* 構成子を使用すると、内容の任意のページに膨大な一致結果が表示される」
- ▶ 263 ページの「テキストの照合は、JavaScript などのクライアント側スクリプトを含む URL の（スクリプトからのブラウザの出力ではなく）スクリプトのコード行に対して行われる」
- ▶ 263 ページの「要求した最小一致が満たされるとすぐに正規表現の照合が成功する」
- ▶ 263 ページの「英数字以外の内容を考慮するのを忘れる」
- ▶ 264 ページの「過剰なメタ文字の使用は問題となる可能性がある」
- ▶ 264 ページの「正規表現構文の例」

. * 構成子を使用すると、内容の任意のページに膨大な一致結果が表示される

. * 構成子を使用することで、SiteScope で使用される正規表現照合エンジンが SiteScope サーバで使用可能なすべての CPU サイクルを占有してしまうことがわかっています。この問題が発生すると、SiteScope は機能しなくなります。そのため、原因となっている正規表現を使用するモニタが実行されるたびに再起動する必要が生じ、この表現が修正されるまでこの状況が続きます。

注：正規表現の照合は、SiteScope モニタの要求に応じて返されるテキストの内容全体に対して実行されます。これには、ブラウザ・ウィンドウには通常表示されない（たとえば **[表示]** > **[ソース]** オプションでは表示されない）HTTP ヘッダが含まれます。つまり、ブラウザ・ビューに表示されないほかの情報を考慮する必要があることを意味します。これには、インターネット検索エンジンおよびクライアント側スクリプトで使用される **META** タグのテキストが含まれます。

テキストの照合は、JavaScript などのクライアント側スクリプトを含む URL の（スクリプトからのブラウザの出力ではなく）スクリプトのコード行に対して行われる

つまり、スクリプトによって計算された値で Web ページ上のテキストが動的に書き込まれるか置換されると、この内容を正規表現で照合できない可能性があります。スクリプトによってテキストの変更のみが実行されると、スクリプト・コードに表示される、対応するテキスト文字列と照合できる可能性があります。さらに問題なのは、ブラウザで特定の条件が満たされるかどうかを確認しようとすると、ユーザのアクションに関係なく、一致するテキスト文字列がスクリプトの内容に表示されるということです。

要求した最小一致が満たされるとすぐに正規表現の照合が成功する

1 つの一致があると、それ以降の照合は行われません。そのため、正規表現は繰り返されるテキスト・パターンの出現数を数えるのには適していません。たとえば、項目のカタログ・リストが含まれる Web ページを確認するとします。各項目の横には Buy Now! というリンクがあり、少なくとも 5 つの項目が表示されることを確認する場合、/Buy Now!/ という正規表現では、最初の Buy Now! にしか一致しません。同様に、正規表現でメイン・ブラウザ画面上の catalog という単語を検索する場合、HTML ヘッダ・セクションの META タグとしてその単語が表示されていたり、照合しようとした項目の前に、サイト・ナビゲーション・メニューにあるハイパーリンクとして内容に表示されていたりすると、照合が成功してしまいます。

英数字以外の内容を考慮するのを忘れる

正規表現は、存在する文字および存在する可能性のある文字すべてを考慮して記述する必要があります。これには、空白文字、行送り、および復帰改行が含まれます。通常、1 つの単語をリテラル照合する場合にはこれは問題になりません。不明な数の空白文字やその他の英数字以外の文字で区切られ、かつ複数行にわたる可能性のある複数の単語との照合を作成する必要があるときは、難しい場合があります。`[¥s¥n¥r]+` 文字クラスは、表現内で使用される単語と単語の間に使用すると便利な場合があります。一見単純そうな照合の失敗につながる可能性がある、パターンやピリオド、カンマ、ハイフンなどの特殊文字が、照合しようとしている内容の形式に含まれていないかを必ず確認してください。

過剰なメタ文字の使用は問題となる可能性がある

場合によっては、. または `¥W` メタ文字に過度な量の数量詞を組み合わせると、リテラル文字列と照合しようとした内容が正規表現のほかの部分で取得され、照合が失敗する可能性があります。たとえば、ハイパーリンク・アンカー参照の URL 内容を照合する場合は、`/a href="([¥W¥w¥s]*)"/` を使用できます。ただし、モニタでこの正規表現のチェックを行うと、最初に一致したパターン `/a href="...` が取得され、続いてそのページ上の最後の引用符までの複数行のテキストが一致します。ほかの一意的終了区切り文字を使用しないと、`[¥W¥w¥s]*` クラスと数量詞の組み合わせは過剰になります。期待される文字のクラスを絞り込むには、`/a href="?([:¥W¥w¥s¥d¥.]*)"?/` という構文がより適切です。

正規表現構文の例

正規表現で使用する構文の例を次に示します。

表現の例	説明
<code>/CUSTID¥s?=¥s?([A-Z0-9]{20,48})/</code>	この例では、20 文字以上の数字と大文字（スペースと非英数字は使用しない）で構成される ID 文字列を照合します。 <code>¥s?</code> 構成子により、等号記号のどちら側でも空白文字を使用できます。文字クラスを括弧で囲むと、SiteScope では、内容の照合値としてこの値（最大 48 文字）が保持され、一致した値がモニタの詳細状態列に表示されます。
<code>/a href="?([:¥W¥w¥s¥d¥.]*)"?/i</code>	この例では、HTML ハイパーリンク内の URL 文字列を照合します。 <code>"?</code> 構成子により、URL 文字列のいずれの端の引用符も任意となります。括弧を使用すると、SiteScope では、この値が内容の照合値として保持され、値はモニタの状態に表示されます。 <code>i</code> 修飾子は、検索時に大文字と小文字を同等に扱うことを示します。
<code>/["^"]*/</code>	この例では、引用符で囲まれたテキスト・シーケンスを照合します。否定のキャレット (<code>^</code>) を使用して、引用符以外のすべての文字の文字クラスを定義します。

プログラミング言語やスクリプト言語と同様に、ほとんどの場合、特定の照合を達成するための正規表現の構成には、複数の方法があります。正規表現の正しい作成方法は1つだけではありません。必要な結果が得られるまで、必要に応じて正規表現のテストと変更を行ってください。

第 III 部

統合

8

BSM の使用

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope と BSM の通信方法について (270 ページ)
- ▶ 接続の設定 (272 ページ)
- ▶ SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合 (273 ページ)
- ▶ 検出されたトポロジの BSM へのレポート (282 ページ)
- ▶ CI のダウンタイム (285 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope および BSM 間の統合の設定方法 (288 ページ)
- ▶ SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法 (296 ページ)
- ▶ SiteScope をクライアント証明書が必要な BSM サーバに接続する方法 (297 ページ)
- ▶ トポロジ・レポートの設定方法 (298 ページ)

参照情報

- ▶ 初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ (302 ページ)
- ▶ 測定値ごとに CI をレポートするモニタ (303 ページ)

トラブルシューティングおよび制限事項 (304 ページ)

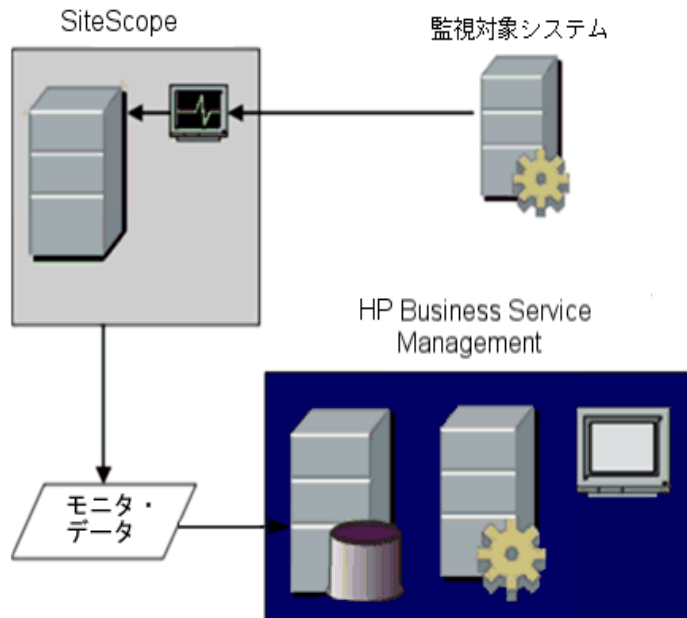
概念

SiteScope と BSM の通信方法について

SiteScope は、Business Service Management (BSM) のデータ・コレクタとして使用できます。BSM では、エンドユーザ、ビジネス・プロセス、システムのデータを使用します。

BSM に対するデータ・コレクタとして設定する場合、SiteScope モニタによって収集されるメトリックおよびトポロジ・データを BSM に渡して分析およびレポートに使用できます。監視データは、すべてのモニタの監視データ、または選択したモニタの監視データのみを送信できます。

次に、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして使用した図を示します。



注：この統合は、HP Operations Agent を使用したメトリック統合と混同しないでください。HP Operations Agent では、オペレーション管理 と HPOM 内の [パフォーマンス パースペクティブ] タブでメトリック・データを表示する必要があります。HP Operations Agent を使用したメトリックの収集の詳細については、322 ページの「HP Operations Agent を使用した測定値のレポート」を参照してください。

BSM には システム可用性管理 (SAM) ページが含まれるため、1 つ以上の SiteScope サーバの SiteScope モニタ設定を中央コンソールで管理できます。BSM 統合をアクティブにすると、SAM 管理または SiteScope スタンドアロン・ユーザ・インタフェースを通じて SiteScope を管理するかどうかに関係なく、SiteScope データが BSM にフローします。

このリリースでサポートされている BSM バージョンについては、SiteScope リリース・ノート (SiteScope で、[ヘルプ] > [Whats New?] を選択) の「HP SiteScope サポート・マトリックス」のセクションを参照してください。

ヒント：BSM および HPOM へのメトリック・データのレポートに関するベスト・プラクティスおよびトラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-BSM/OM Integration』を参照してください。

接続の設定

SiteScope および BSM 間の接続を有効にするには、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する必要があります。これには、SiteScope を BSM の SAM 管理ページに追加する作業も含まれます。このタスクの詳細については、288 ページの「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」を参照してください。

統合プリファレンスの詳細については、755 ページの「統合プリファレンス・ページ」を参照してください。

BSM へのデータのレポートに関するトラブルシューティングの詳細については、304 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

SiteScope と BSM 間通信のための SSL の使用

Secure Sockets Layer (SSL) を使用して、SiteScope から BSM サーバにデータを転送できます。ルート認証局で署名された証明書を BSM サーバにインストールしている場合、SiteScope サーバで必要な設定はありません。

BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、291 ページの「クライアント証明書または SSL が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 - オプション」に説明されている手順を実行する必要があります。

SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更

SiteScope のデータのレポート先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。通常、これは、コンポーネントが複数のサーバにインストールされている BSM デプロイメントでの作業にのみ適用されます (BSM ゲートウェイ・サーバがデータ処理サーバとは異なるマシン上にインストールされている分散デプロイメントの場合)。

この変更方法の詳細については、292 ページの「SiteScope のデータの送信先となるゲートウェイ・サーバの変更 - オプション」を参照してください。

SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合

データを BSM にレポートする SiteScope にモニタ・インスタンスを追加すると、そのモニタによって、Run-time Service Model (RTSM) の対応する構成アイテム (CI) が作成されます。構成アイテムの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『RTSM Administration Guide』の「Configuration Items (CI)」を参照してください。

RTSM を設定する SiteScope モニタには、実際のモニタおよびモニタの作成先となるグループがあります。

- ▶ RTSM では、実際のモニタ・インスタンスはモニタ CI として表されます。モニタ CI は対応する SiteScope モニタ・インスタンスからデータを受信し、SiteScope モニタ・メトリックスに割り当てられている状況インジケータ (HI) やイベント・タイプ・インジケータ (ETI) とともにそのデータを使用して、重要なパフォーマンス・インジケータのステータスを計算します。これらのインジケータには、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューが表示されます。インジケータの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリのサービス状況の「状況インジケータ, KPI, KPI のドメイン」を参照してください。
- ▶ RTSM では、SiteScope グループはグループ CI として表され、実行しているモニタで作成されたモニタ CI から KPI ステータスを受信します。

モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート

モニタのタイプおよび選択したモニタのオプションに応じて、さまざまなレベルのトポロジ・データが SiteScope から RTSM にレポートされます。モニタのタイプは次のとおりです。

▶ **テクノロジー統合モニタ**：これらのモニタでは、選択および編集するモニタのトポロジ設定スクリプトに基づいてデータがレポートされます。レポートされるデータは、BSM と密接に統合されています。カスタム・トポロジを作成するか、定義済みスクリプトを使用して、関連するデータを転送できます。これらのモニタの詳細や、トポロジ設定の操作方法の詳細については、526 ページの「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」を参照してください。

▶ **サポート対象環境のモニタ**：これらのサポート対象環境では、SiteScope は、モニタの作成時またはその設定の変更時にディスカバリ・プローブのように機能します。トポロジ・レポートが有効化されると、SiteScope によってアプリケーションのトポロジが自動的に検出され、関連する CI およびモニタ CI で RTSM が設定されます。サポート対象環境の詳細およびリストについては、282 ページの「検出されたトポロジの BSM へのレポート」を参照してください。

サポート対象環境のモニタのカスタム・トポロジを作成できます（ただし、303 ページの「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」の説明にあるように CI タイプがメトリックごとに存在するモニタは除きます）。トポロジの作成の詳細については、298 ページの「トポロジ・レポートの設定方法」を参照してください。

▶ **標準設定でトポロジ・データがレポートされないモニタ**：SiteScope にはホストまたはサーバをレポートしないモニタがあるため、監視する CI タイプを事前に知ることができません。BSM へのレポート時にこれらのモニタのトポロジ・データを含めるには、CI タイプを選択して CI タイプのキー属性を定義し、モニタ・タイプに関連するメトリックスを特定のインジケータにマップする必要があります。これにより、SiteScope によって RTSM にモニタの CI が作成され、モニタの CI データが BSM に転送されます。標準設定のトポロジが定義されていないモニタのリストについては、302 ページの「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 275 ページの「モニタおよび CI 間の関係の作成」
- ▶ 276 ページの「RTSM の CI のエイジング」
- ▶ 277 ページの「システム可用性管理のインジケータ割り当て管理」
- ▶ 279 ページの「SiteScope メトリックスのインジケータへの割り当て」
- ▶ 280 ページの「状況インジケータが作成されるタイミング」
- ▶ 280 ページの「ディスカバリ・スクリプトとパッケージ・マネージャ」
- ▶ 281 ページの「トポロジ・レポートの制限」

モニタおよび CI 間の関係の作成

SiteScope モニタ CI および RTSM の既存の CI 間の関係を作成することもできます。この関係を使用すれば、SiteScope から転送されるトポロジで CI が作成されていない場合でも、モニタは関連付けられている CI に HI ステータスを渡すことができます。

これらの関係は SiteScope または SAM 管理内で作成できます。詳細については、293 ページの「RTSM での SiteScope モニタと既存の CI 間の関係の作成 - オプション」のタスクの手順を参照してください。

RTSM の CI のエイジング

RTSM では、長期間活動のない CI はデータベースから削除されます。SiteScope データから作成された CI も、このエイジング・ポリシーの影響を受けます。エイジング・ポリシーが、SiteScope が BSM に送信した CI 上で動作しないように、SiteScope が BSM に送信するデータを同期します。同期されると、これらの CI のデータが更新され、CI の活動が作成されます。

トポロジの同期間隔の設定の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「トポロジ設定」を参照してください。エイジング・メカニズムの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Modeling』の「Working with CIs」を参照してください。

注：

- ▶ 測定値のフィールド・マッピングを使用する EMS 統合モニタによって作成された総合的なモニタおよびグループは、同期に関係なくエイジング・プロセスの影響を受けます。
 - ▶ エイジングが有効な場合、EMS 統合モニタの CI が RTSM から削除されないようにするために、SiteScope のハード同期時に EMS トポロジが再送信されます。また、プロパティ `_reportEmsCIsAsPartOfAntiAging=true` を `master.config` ファイルに追加することで、エイジング対策プロセスでトポロジの再送信を有効化できます。
 - ▶ RTSM から CI を削除する場合、([統合プリファレンス] で) SiteScope の再同期またはハード同期を実行するか、SiteScope が再起動して RTSM の CI が元に戻るまで待機する必要があります。これは、SiteScope によって未変更の CI が 2 回送信されることを回避する SiteScope の CI キャッシュに起因します。詳細については、762 ページの「BSM プリファレンス利用可能操作」を参照してください。
-

システム可用性管理のインジケータ割り当て管理

注：本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

インジケータにマップされる SiteScope のメトリックが、システム可用性管理のインジケータ割り当てリポジトリで保存および管理されます。リポジトリには、次の利点があります。

- ▶ BSM では測定値のマッピングを中央管理できる。これにより、大量の SiteScope およびモニタを管理しやすくなります。インジケータ割り当てリポジトリは、[SAM 管理] の [メトリクスとインジケータ] タブから編集できます。
- ▶ モニタ・タイプごとに異なる SiteScope モニタからインジケータに測定値をマッピングできる。特定のモニタ・タイプのインジケータ割り当てを作成、編集、削除できます。
- ▶ インジケータ割り当てリポジトリに新しいインジケータ割り当てが追加されるか、既存の割り当てが変更された場合、その変更内容を BSM に接続されているすべての SiteScope に適用できる。これにより、SiteScope で作成された新しいモニタ・インスタンスのインジケータが、中央管理されている最新の割り当てに対応するようになります。現在のバージョンの SiteScope に含まれている標準設定の割り当てに戻すには、モニタ・プロパティの [HP 統合設定] > [インジケータ設定] セクションの [標準設定にセット] ボタンをクリックします。

注：ローカルの **SiteScope** サーバでのインジケータ割り当てを変更する(モニタ測定値のマッピングが変更された) 場合：

- ▶ **SiteScope** によって更新されたマッピングがダウンロードされた場合は、これらの割り当ては中央管理されている割り当てによって上書きされません。
- ▶ 割り当てがインジケータ割り当てリポジトリから削除された場合、ローカル割り当ては自動的に削除されません。また、**SiteScope** により **BSM** に古いインジケータの値を送信し続けます。この場合、モニタ測定値に対してほかのインジケータ割り当てを選択する必要があります。
- ▶ インジケータがインジケータ・リポジトリから削除された場合、そのマッピングを使用するモニタ測定値に対してその他のインジケータ割り当てを選択する必要があります。

-
- ▶ 以前の **SiteScope** のメトリックスをインジケータにマッピングすることで、以前のバージョンの **SiteScope** との互換性が確保される。
 - ▶ **SiteScope** でハード同期が実行されると、すべてのインジケータのマッピングが **BSM** からダウンロードされます。

中央管理されているインジケータの割り当てを [SAM 管理] で編集する方法の詳細については、**HP Business Service Management** 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。

SiteScope メトリックスのインジケータへの割り当て

注：本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

モニタ・インスタンスの設定時に、メトリックスをインジケータにマッピングすることもできます。SiteScope モニタ・メトリックスは、次のようなモニタ・タイプに基づいてインジケータにマッピングされます。

- ▶ サポート対象環境のモニタおよび定義済みトポロジがあるモニタの場合、標準設定で測定値にインジケータが割り当てられています。これらのモニタの詳細については、274 ページの「モニタ・タイプおよびトポロジ・レポート」を参照してください。標準設定のインジケータ割り当てについては、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「インジケータ・マッピングの整合」を参照してください。
- ▶ 定義済みトポロジがない SiteScope モニタの場合、さまざまな CI タイプにリンクする可能性があり、1 つのマッピングを設定できないため標準設定のインジケータのマッピングはありません。これらのモニタでは、モニタにリンクする CI タイプの適切なインジケータに測定値をマッピングできます。定義済みトポロジがないモニタのリストについては、302 ページの「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。

SiteScope で標準設定のメトリックスのマッピングを変更できます。インジケータのマッピングがローカルの SiteScope で変更されている場合、SiteScope によって BSM から最新のマッピングがダウンロードされても、これらのマッピングは中央管理されているリポジトリのマッピングで上書きされません。これにより、次のことが可能になります。

- ▶ モニタ・インスタンスのインジケータまたはモニタの一部の測定値の上書き。
- ▶ テンプレートの標準設定でないインジケータを設定する。カスタム・トポロジの CI タイプおよび測定値のマッピングは、テンプレートの変数では設定できません（これらは、テンプレートで事前に定義しておく必要があります）。

- ▶ 警告用のインジケータの設定：トリガされた警告の CI タイプは、警告（グループの警告や測定値ごとに CI をレポートするモニタの警告）の設定時に毎回わかっているわけではないため、警告のイベント・タイプ・インジケータとイベント・タイプ・インジケータの状態を手動で入力する場合があります。詳細については、1468 ページの「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。

インジケータへの SiteScope メトリックスのマッピングの詳細については、300 ページの「インジケータとモニタのマッピング」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、473 ページの「インジケータ設定」を参照してください。

状況インジケータが作成されるタイミング

- ▶ SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。最初のイベントが CI に到着後イベントが作成されます。詳細については、316 ページの「イベントの生成」を参照してください。
- ▶ メトリックスは、モニタのトポロジが RTSM にレポートされる時点で作成されます。詳細については、282 ページの「検出されたトポロジの BSM へのレポート」を参照してください。

ディスカバリ・スクリプトとパッケージ・マネージャ

注：本項は、Business Availability Center / BSM 8.00 以降を統合するユーザを対象としています。トポロジ・データを以前のバージョンの BSM と統合する場合、SiteScope では、SiteScope サーバに保存されている従来のスクリプトが使用されます。

SiteScope がディスカバリ・プローブとして機能できるようにするスクリプトは、BSM サーバの **SiteScope** パッケージに保存されています。アプリケーションのトポロジを検出するように SiteScope が設定されている場合、SiteScope によって BSM サーバから適切なスクリプトがダウンロードされます。アプリケーションの監視時にこのスクリプトを使用してディスカバリが実行されます。

SiteScope パッケージには、スクリプトのほかにビューやエンリッチメントなど、SiteScope に関連する RTSM リソースが含まれています。BSM のこのパッケージには、[管理] > [RTSM 管理] > [管理] > [パッケージ マネージャ] からアクセスできます。パッケージはファクトリ・パッケージです。つまり、パッケージの用意済みの設定で SiteScope のディスカバリを実行できます。パッケージを使った作業の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Modeling』ガイドの「Package Administration Overview」を参照してください。

注：上級ユーザは、パッケージ内のトポロジ・スクリプトを変更できます。SiteScope パッケージでは、SiteScope と データ・フロー管理 で共有している可能性のあるほかのパッケージのスクリプトが使用されます。パッケージのスクリプトの変更は、データ・フロー管理 にも影響する可能性があります。

BSM へのトポロジのレポート方法に影響するトポロジ・スクリプトを変更すると、それらのトポロジを使用するすべてのアプリケーション(BSM のアプリケーションや オペレーション管理 など) に影響を与える可能性があります。

トポロジ・レポートの制限

BSM にレポートできる SiteScope のグループおよびモニタの詳細の文字数は 600 文字に制限されます。グループまたはモニタの詳細の文字数が 600 文字よりも多い場合、SiteScope によって最初の 600 文字まで詳細が切り捨てられます。

検出されたトポロジの BSM へのレポート

注: 本項は、SiteScope を Business Availability Center / BSM 7.50 以降に接続するユーザのみを対象としています。

SiteScope は、ディスカバリ・プローブとして機能でき、選択した環境の監視対象エンティティの階層を検出できます。これらの階層は、SiteScope から BSM にレポートされるトポロジで表されます。トポロジ内の CI は、SiteScope によって監視されるホスト、サーバ、アプリケーションに対応しており、BSM の RTSM に作成されます。モニタおよび測定値の CI も作成され、SiteScope によってそのステータスが BSM にレポートされます。CI 間の関係は、SiteScope によってレポートされるトポロジで定義されます。

この機能を有効にするには、モニタ・インスタンスの作成時または設定時に [HP 統合設定] 表示枠の [モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート] オプションを選択します。このオプションがクリアされている場合、RTSM で作成された CI は自動的に削除されることはありません。CI に活動がない場合、最終的にエージングによってデータベースから削除されます。または、手動で削除する必要があります。

[トポロジ設定] のユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「トポロジ設定」を参照してください。

トポロジ・レポートに関する問題のトラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-Business Service Management/Operations Manager Integration』の「Business Service Management Topology Issues」を参照してください。

サポート対象環境

SiteScope および BSM 間の直接接続は、選択した環境の特定のバージョンの BSM でのみ使用できます。SiteScope は次のモニタの特定のトポロジをレポートします。

環境 / モニタ・タイプ	モニタ
ノード・トポロジをレポートするモニタ	<p>これには、ノード、コンピュータ、またはその他の一部のチャイルド CI タイプの派生物など、事前定義した CI タイプを使って BSM にトポロジ・データを転送できる (テクノロジー統合モニタまたは次に一覧表示したサポート対象環境間を含まない) ホストまたはサーバのステータスをレポートするすべてのモニタが含まれます。トポロジ・レポートが有効化されている場合は、SiteScope によってモニタ CI とともにトポロジが BSM に転送されます。このオプションの詳細については、467 ページの「HP 統合設定」を参照してください。</p> <p>注: 監視する CI タイプを事前に知ることができないため、ホストやサーバのステータスを監視しないモニタは含まれません。ホスト・データのないモニタのリストについては、302 ページの「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。</p>
データベース環境	<p>(Business Availability Center バージョン 8.00 以降を統合する場合に使用可能)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 「DB2 8.x and 9.x Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「Microsoft SQL Server Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「Oracle Database Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照)

環境 / モニタ・タイプ	モニタ
ERP / CRM アプリケーション環境	<p>(Business Availability Center / BSM 7.50 以降を統合する場合に使用可能)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 「SAP CCMS Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「SAP Work Processes Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「Siebel Application Server Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「Siebel Web Server Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照)
SOA 環境	<p>(Business Availability Center / BSM 7.50 以降を統合する場合に使用可能)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 「Web Service Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照)
仮想化環境	<p>(Business Availability Center / BSM 8.02 以降を統合する場合に使用可能)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 「Solaris Zones Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「VMware Performance Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「VMware Host Monitor Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照)
Web サーバ環境	<p>(Business Availability Center / BSM 7.50 以降を統合する場合に使用可能)</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 「Microsoft IIS Server Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「WebLogic Application Server Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照) ▶ 「WebSphere Application Server Topology」 (SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』を参照)

CI のダウンタイム

注：本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続するユーザのみを対象としています。

ダウンタイムは、BSM から [プラットフォーム管理] の [ダウンタイムの管理] ページを使用して、定義および管理します。ダウンタイム設定の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Platform Administration』の「Downtime Management — Overview」を参照してください。

SiteScope は、SiteScope のモニタ、測定値、またはグループ CI が、BSM によってダウンタイムであることが検出された CI に直接リンクしている場合、ダウンタイムによる影響を受けます。

現在ダウンタイム状態にある CI の影響を受けるモニタは、すぐにはダウンタイム状態にはなりません。モニタがダウンタイム状態になるまでの時間は次の 2 つのパラメータに影響されます。

- ▶ SiteScope から BSM にダウンタイムの要求が送られる間隔（ダウンタイム取得頻度の標準設定の値は 15 分）。これは、SiteScope の [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [BSM ダウンタイム取得頻度 (分)] で変更できます。
- ▶ SiteScope のダウンタイム要求を保持する BSM のキャッシュの更新間隔（標準設定の値は 5 分）。これは、BSM の [管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] > [インフラストラクチャ設定] で変更できます。
 - ▶ [アプリケーション] を選択します。
 - ▶ [エンドユーザ / システム可用性管理] を選択します。
 - ▶ [ダウンタイム] テーブルで、[SiteScope ダウンタイム キャッシュ更新間隔 (分)] を見つけます。この値を必要なキャッシュ更新間隔に変更します。

ダウンタイム時に SiteScope で実行されるアクションは、BSM でのダウンタイムの設定によって異なります。ダウンタイムは次の情報に対して実行できます。

- ▶ 警告：ダウンタイムに関連付けられている CI に対して警告は送信されません。
- ▶ レポート：レポートが更新されず、CI のダウンタイムが表示されます。
- ▶ KPI：問題の CI に関連付けられている KPI は更新されず、CI がダウンタイムであることがサービス状況に表示されます。
- ▶ 監視：ダウンタイムに関連付けられているすべての CI に対して SiteScope 監視が停止します。

ダウンタイムになっているモニタは、SiteScope ダッシュボードの [サマリ] 列に「disabled by <ダウンタイム名> from BSM」と表示されます。モニタに関連付けられていて、現在実行中のダウンタイムの詳細は、[モニタの有効化 / 無効化] 表示枠の [Monitor Downtime] テーブルに表示されます。詳細については、480 ページの「モニタの有効化 / 無効化」を参照してください。

モニタが現在ダウンタイムになっている CI の影響を受けていて、モニタの関連付けられている警告にダウンタイムが適用されている場合、ダウンタイムの詳細は [関連する警告の有効化 / 無効化] 表示枠の [Associated Alerts Downtime] テーブルに表示されます。詳細については、482 ページの「関連する警告の有効化 / 無効化」を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ SiteScope から BSM にダウンタイムの要求が行われると、設定されているダウンタイム期間（最長で 24 時間）にわたってダウンタイム状態になります。レコードが < SiteScope ルート・ディレクトリ > %logs ディレクトリにある **audit.log** に書き込まれます。これには、新しいダウンタイム、既存のダウンタイムに対する変更、削除されたダウンタイムが保持されています。
- ▶ SiteScope が BSM 9.00 以降に接続されると、ダウンタイム・メカニズムは初期設定で有効化されます。標準設定を変更するには、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] の [ダウンタイム メカニズムの有効化] チェックボックスをクリアします。
- ▶ SPA, Siebel, SOA トポロジではダウンタイムはサポートされていません (Application Management for Siebel/SAP ライセンスがインストールされているかどうかは無関係)。
- ▶ 測定値ごとの CI をレポートするモニタでは、測定値に接続されている CI がダウンタイムにある場合、測定値がダウンタイムに属するモニタに送信されます。これは、『Monitor Reference』の「VMware Performance Monitor」および「Solaris Zones Monitor」に適用されます。
- ▶ ダウンタイム情報は、システム可用性管理レポートには含まれません。
- ▶ SiteScope が BSM 9.10 に接続されると、SiteScope プロファイル上のダウンタイムが、SiteScope プロファイル・モニタおよび測定値によって監視されているホストまたはソフトウェア要素上のダウンタイムにアップグレードされます。
- ▶ CI のダウンタイムに関するその他のトラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-Business Service Management/Operations Manager Integration』の「Business Service Management CI Downtime Issues」を参照してください。

タスク

SiteScope および BSM 間の統合の設定方法

このタスクでは、SiteScope および BSM 間の統合を設定する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 289 ページの「前提条件」
- ▶ 289 ページの「SiteScope のダウンロードおよびインストール」
- ▶ 289 ページの「インストールした SiteScope の BSM への接続」
- ▶ 291 ページの「クライアント証明書または SSL が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 - オプション」
- ▶ 292 ページの「SiteScope のデータの送信先となるゲートウェイ・サーバの変更 - オプション」
- ▶ 292 ページの「SiteScope の監視構造の作成」
- ▶ 293 ページの「RTSM での SiteScope モニタと既存の CI 間の関係の作成 - オプション」
- ▶ 294 ページの「SiteScope メトリックのインジケータへのマップ - オプション」
- ▶ 294 ページの「BSM の権限の割り当て」
- ▶ 295 ページの「接続設定の変更 (任意)」

1 前提条件

データを収集する特定の IT インフラストラクチャ・リソースの緻密な計画を立てる準備をします。指定したインフラストラクチャ・コンポーネントの影響を受けるビジネス・プロセスの情報を含めます。たとえば、SiteScope モニタの実行先となるアプリケーション・サーバ上で実行されている Business Process Monitor が監視しているビジネス プロセスなどです。

2 SiteScope のダウンロードおよびインストール

BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [セットアップと保守] に移動し、[ダウンロード] をクリックします。SiteScope インストール・ファイル (Windows または Solaris 用) をダウンロードしてローカル・ドライブまたはネットワーク・ドライブに保存します。

SiteScope データ・コレクタを実行するマシンに SiteScope をインストールします。複数のプラットフォームで複数の SiteScope を実行できます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) を参照してください。

3 インストールした SiteScope の BSM への接続

BSM で、[管理] > [システム可用性管理] と移動し、SiteScope とシステム可用性管理を追加します。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「[新規 SiteScope] ページ」を参照してください。

- ▶ SiteScope のデータのレポート先とは異なる BSM サーバに接続している場合 (たとえば、BSM ゲートウェイ・サーバがデータ処理サーバとは異なるマシン上にインストールされている場合)、システム可用性管理の [新規 SiteScope] ページの [分散設定] 下 (または SiteScope の [統合プリファレンス] の [BSM 統合のメイン設定] 下) に両方のサーバの接続情報を設定する必要があります。
- ▶ ログ記録オプションを変更するには、モニタのプロパティ・ページの [HP 統合設定] パネルで、特定のモニタを編集して関連するオプションを選択します。詳細については、467 ページの「HP 統合設定」を参照してください。[グローバル検索と置換] ウィザードを使用して、統合を確立する前に作成したモニタのログ記録オプションを更新できます。このウィザードの詳細については、131 ページの「グローバル検索と置換」を参照してください。

- ▶ BSM に登録する前に SiteScope で作成されたモニタは、ログ記録オプションが「**BSM への測定値レポートを無効化する**」に設定されます。BSM にレポートするデータ・コレクタとして SiteScope を設定した後に SiteScope で作成された新しいモニタの場合、標準設定では監視データのログは BSM に記録されます。
-

注：

- ▶ BSM からアクセスできない SiteScope を使って作業する場合 (HP Software-as-a-Service など)、接続するには SAM 管理で空のプロファイルの作成し、SiteScope で BSM 用の統合プリファレンスを作成する必要があります。タスクの詳細については、749 ページの「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」を参照してください。
 - ▶ 高負荷下で作業している場合は、初めて BSM に接続する前に全モニタを一時停止してください。
-

4 クライアント証明書または SSL が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定 - オプション

BSM サーバで証明書を使用し、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、次の適切な手順を実行する必要があります。

- ▶ SSL が必要な BSM サーバについては、296 ページの「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。
- ▶ クライアント証明書が必要な BSM サーバについては、297 ページの「SiteScope をクライアント証明書が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。

注：

- ▶ BSM マシンにインストールされている証明書がルート認証局（CA）で署名されていない場合にのみ、これらの設定を指定する必要があります。たとえば、Verisign などの認証局によって署名されている証明書を使用している場合、これらの設定を変更する必要はありません。
 - ▶ ほかの SiteScope モニタで使用しているキーストア・ファイルに自己署名証明書をインポートできますが、必須ではありません。BSM サーバの証明書のキーストアは、個別に作成できます。
-

5 SiteScope のデータの送信先となるゲートウェイ・サーバの変更 - オプション

SiteScope のデータのレポート先となるゲートウェイ・サーバを変更できません。一般に、これは、複数のサーバにコンポーネントがインストールされている BSM デプロイメントで作業している場合にのみ当てはまります。

- ▶ SiteScope の [BSM 統合プリファレンス] で、[**Business Service Management マシン名 /IP アドレス**] ボックスに必要なゲートウェイ・サーバ名または IP アドレスを入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、758 ページの「[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ [システム可用性管理] で、[**分散設定**] でゲートウェイ・サーバ名の SiteScope 設定を更新します。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「[新規 SiteScope] ページ」を参照してください。

注：この機能は、特定の BSM インストールにすでに登録されている SiteScope のゲートウェイ・サーバを変更する場合にのみ使用できます。新しい SiteScope を追加する場合や、異なる BSM システムに SiteScope を接続する場合には、この機能は使用できません。

6 SiteScope の監視構造の作成

- a デプロイするモニタを整理するためのグループおよびサブグループを作成し、これらのグループにモニタを作成します。モニタの設定時に、必要に応じて BSM のデータのログ記録とトポロジ設定が設定されていることを確認します。

監視構造の作成の詳細については、59 ページの「SiteScope の監視用の設定方法」を参照してください。

- b メトリックをレポートし、BSM にイベントを送信するよう SiteScope を設定します。

BSM メトリックス統合の設定の詳細については、468 ページの「BSM 統合データとトポロジ設定」を参照してください。

BSM にイベントを送信するために SiteScope を有効化するタスクの詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。

7 RTSM での SiteScope モニタと既存の CI 間の関係の作成 - オプション

この関係を作成して、(SiteScope から転送されるトポロジで CI が作成されていない場合でも) モニタは関連付けられている CI に HI ステータスを渡すことができます。

- ▶ SiteScope で、モニタ・インスタンスを編集する場合は、[HP 統合設定] で [CI タイプ] オプションを手動で選択して、SiteScope モニタ CI と既存の CI 間の関係を SiteScope でカスタマイズできます。サポート対象環境のモニタと、定義済みトポロジがあるモニタの CI タイプは標準設定で定義されています。タスクの詳細については、299 ページの「CI タイプの選択」を参照してください。
- ▶ システム可用性管理で、RTSM の既存の CI プロパティ・データを使用する **モニタ・デプロイメント・ウィザード** を使用して、SiteScope のモニタ、グループ、リモート・サーバをデプロイします。RTSM に監視対象の CI と作成したモニタ間の **monitored by** 関係を作成します。概念の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザードの概要」を参照してください。

定義が完了したら、SiteScope とそのグループ、およびモニタが CI として RTSM に追加され、関連する監視ビューに自動的に関連付けられます。これらは、このビューから別のビューに追加できます。SAM 管理でモニタを編集する場合、[HP BSM Integration Settings] を使用して、既存の CI にモニタを関連付けることができます。たとえば、CPU が監視されているマシンを表す既存の論理 CI に CPU モニタを関連付けることができます。

SiteScope のデータは、サービス状況およびサービス・レベル管理で使用できます。

8 SiteScope メトリックのインジケータへのマップ - オプション

SiteScope で、標準設定のインジケータのメトリックのマッピングがないモニタのマッピングを追加、または既存のマッピングを修正できます（サポート対象環境のモニタおよび初期設定でメトリックにマップされたインジケータがあるモニタ）。

タスクの詳細については、300 ページの「インジケータとモニタのマッピング」を参照してください。

9 BSM の権限の割り当て

BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [ユーザおよび権限] に移動し、[ユーザ管理] をクリックします。

定義されているユーザごとに、SAM レポートおよびカスタム・レポートの SiteScope グループとそのサブグループを表示できる権限を割り当てます。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Platform Administration』の「System Availability Management」を参照してください。

権限の適用方法の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリにある『システム可用性管理の使用』の「SiteScope へのアクセスと権限モデルの作成」を参照してください。

10 接続設定の変更（任意）

接続を作成したら、変更する設定に応じて SiteScope または BSM のいずれかで設定を変更できます。

- ▶ BSM で、[管理] > [システム可用性管理] を選択します。SiteScope のリストで、関連する SiteScope を右クリックして、コンテキスト・メニューから [SiteScope の編集] を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「[新規 SiteScope] ページ」を参照してください。
- ▶ SiteScope で、[プリファレンス] コンテキストを開き、[統合プリファレンス] を選択します。BSM の統合プリファレンスを編集します。ユーザ・インタフェースの詳細については、758 ページの「[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

ヒント：

- ▶ BSM への接続をセキュリティで保護するには (BSM ユーザ名とパスワードは認証に使用されないため)、SiteScope に基本認証を設定するか、双方向の SSL を使用することをお勧めします。BSM を基本認証を使用するように設定すると、SiteScope の [認証ユーザ名] フィールドと [認証パスワード] フィールドに入力したものと同一ユーザ名とパスワードが、BSM へのデータとトポロジーのレポートにも使用されます。BSM が基本認証を使用するように設定されていない場合、送信された資格情報は無視されます。
- ▶ SiteScope サーバから BSM に送信される前にデータを圧縮するには、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups%master.config** ファイルで `_topazCompressDataInGzip=true` を設定します。有効化すると、SiteScope モニタ (ss_monitor_t) および SiteScope メトリック (ss_t) サンプルが、BSM (ここで展開される) に送信される前に GZIP 圧縮されます。データ圧縮は、SiteScope が BAC / BSM 8.05 以降にレポートされる場合にのみ利用できます。

SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法

このタスクでは、BSM サーバで SSL が必要な場合に SiteScope および BSM 間のセキュリティ保護された通信を有効にする手順について説明します。

- 1 SiteScope ユーザ・インタフェースで証明書管理を使って SiteScope に CA または BSM サーバ証明書をインポートします。タスクの詳細については、908 ページの「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」を参照してください。
- 2 BSM で、[管理] > [システム可用性管理] を選択し、[新規 SiteScope] ボタンをクリックして、SiteScope インスタンスを追加します。[新規 SiteScope] ページで、次の設定が構成されているかどうか確認します。
 - ▶ 分散設定：[ゲートウェイ サーバ名 /IP アドレス]に適切なサーバ名とポート（初期設定 443）が設定されているかどうか確認します。
 - ▶ プロファイル設定：[Web サーバで SSL を使用する] チェック・ボックスを選択します。

SiteScope をクライアント証明書が必要な BSM サーバに接続する方法

このタスクでは、BSM サーバでクライアント証明書が必要な場合に SiteScope および BSM 間のセキュリティ保護された通信を有効にする手順について説明します。

- 1 JKS 形式でクライアント証明書を取得して、`$SITE_SCOPE_HOME/ssl/template/certificates` フォルダにコピーします。

クライアント証明書が必要な BSM サーバに接続するための SiteScope の設定の詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「クライアント証明書を要求する BSM サーバに接続するための SiteScope の設定」を参照してください。

注: プライベート・キー・パスワードが少なくとも 6 文字であること、またプライベート・キーとキーストア・パスワードが同一であることを確認します。

- 2 < SiteScope のルート・ディレクトリ > `$SITE_SCOPE_HOME/groups` にある `master.config` ファイルを、テキスト・エディタを使用して編集します。指定のデータを使用して次のエントリを追加します。

```
_urlClientCert=<keystoreName>
```

```
_urlClientCertPassword=<keystorePassword>
```

次に例を示します。

```
_urlClientCert=.ks  
_urlClientCertPassword=changeit
```

- 3 変更点をファイルに保存します。
- 4 SiteScope サーバを再起動します。

トポロジ・レポートの設定方法

注：インジケータ・マッピングの編集またはメトリクスへのマッピングの追加は、CI とインジケータに精通している上級ユーザーのみが行うようにしてください。

このタスクでは、モニタのトポロジ設定を設定する方法について説明します。また、CI タイプの選択または変更の方法、インジケータへの測定値のマッピング方法についても説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 298 ページの「前提条件」
- ▶ 299 ページの「CI タイプの選択」
- ▶ 300 ページの「インジケータとモニタのマッピング」
- ▶ 300 ページの「イベントおよびメトリックが BSM にレポートされる場合の影響を与える BSM の サービス状況 のプリファレンスの選択 - オプション」
- ▶ 301 ページの「結果」

1 前提条件

- ▶ BSM でクライアント証明書が必要な場合は、SiteScope のトポロジのディスクカバリ・エージェントを設定して、トポロジを BSM サーバにレポートする必要があります。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「BSM サーバがクライアント証明書を必要とする時 SiteScope でトポロジ・ディスクカバリ・エージェントの設定方法」を参照してください。
- ▶ モニタ CI データとともにホスト・トポロジを SiteScope から BSM に転送するには、モニタ・プロパティの [HP 統合設定] 表示枠の [モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート] オプションを選択する必要があります。サポート対象環境のモニタと標準設定で CI タイプが定義されているモニタの場合、このオプションは標準設定で選択されています。

ユーザ・インタフェースの詳細については、468 ページの「BSM 統合データとトポロジ設定」を参照してください。

2 CI タイプの選択

標準設定でトポロジをレポートするモニタの場合（モニタに関連付けられている CI タイプは **[CI タイプ]** フィールドの丸括弧内に表示されます），標準設定の選択を使用することも，CI タイプを変更してキー属性を入力し，標準設定の選択を上書きすることもできます。

標準設定でトポロジをレポートしないモニタの場合，**[BSM 統合データとトポロジ設定]** セクションでモニタの **[CI タイプ]** を選択し，CI タイプのキー属性の値を入力します。標準設定ではトポロジがレポートされていないモニタのリストについては，302 ページの「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。

注：CI タイプがメトリクスごとのモニタについては（モニタのリストについては，303 ページの「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」を参照），CI タイプは変更できず，CI キー属性は表示されません。

ヒント：モニタのトポロジ設定を変更してから 10 分以内に BSM を再起動した場合，SiteScope の再同期を実行することをお勧めします。これを行うには，**[プリファレンス]** > **[統合プリファレンス]** > **[BSM 統合]** > **[BSM プリファレンス利用可能操作]** を選択し，**[再同期化]** をクリックします。

ユーザ・インタフェースの詳細については，468 ページの「BSM 統合データとトポロジ設定」を参照してください。

3 インジケータとモニタのマッピング

CI タイプが選択されている場合、[**インジケータ 設定**] セクションのテーブルは、選択した CI タイプのインジケータ設定が表示されるようにフィルタされます。サポート対象環境のモニタおよび定義済みトポロジがあるモニタの場合、標準設定で測定値にインジケータがマッピングされています。新しい測定値のマッピングを追加することも、既存のマッピングの設定を編集することもできます。

標準設定のインジケータの測定値のマッピングがないモニタの場合、モニタにリンクする CI タイプの適切なインジケータに測定値をマッピングできます。標準設定のインジケータ割り当てについては、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「インジケータ・マッピングの整合」を参照してください。

トピックの詳細については、279 ページの「SiteScope メトリックスのインジケータへの割り当て」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、473 ページの「インジケータ設定」を参照してください。

4 イベントおよびメトリックが BSM にレポートされる場合の影響を与える BSM の サービス状況 のプリファレンスの選択 - オプション

SiteScope のイベントとメトリックスは BSM の サービス状況 に影響を与えるため、両方のデータ・タイプがレポートされる場合は、影響を与える サービス状況 のプリファレンスを選択します。このプリファレンスは次の場合のみに関連します。

- ▶ BSM と HP Operations Manager 統合の両方がアクティブな場合。
- ▶ HP Operations Manager イベント統合が、HPOM サーバではなく BSM サーバに接続されている場合。
- ▶ モニタの [HP 統合設定] で次の設定を行います。
 - ▶ [BSM 統合データとトポロジ設定] セクションでは、[**モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする**] または [**モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする**] を設定します。
 - ▶ [HP Operations Manager 統合設定] では、[**イベント送信**] を設定します。

[**HP 統合設定**] の [**BSM サービス状況プリファレンス**] セクションのプリファレンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、478 ページの「BSM サービス状況プリファレンス」を参照してください。

注：

- ▶ プリファレンスではまた、[**統合プリファレンス**] > [**HP Operations Manager 統合**] > [**HP Operations Manager 統合メイン設定**] で、新しく作成された各モニタをグローバルに設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、775 ページの「HP Operations Manager 統合のメイン設定」を参照してください。
 - ▶ 使用するプリファレンスの選択の詳細については、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-Business Service Management/Operations Manager Integration』の「Integrating SiteScope with Business Service Management Applications」を参照してください。
-

5 結果

トポロジの設定が済んだら、[**保存**] をクリックします。SiteScope によって RTSM にモニタの CI が作成され、モニタの CI データが BSM に転送されます。

参照情報

初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ

次に、ホストまたはサーバのステータスを監視しないモニタのリストを示します。これらのモニタで CI 情報を BSM にレポートするには、CI タイプを選択して必要な CI のキー属性を入力し、モニタにリンクしている CI タイプに関連するインジケータを選択する必要があります。該当するモニタを次に示します。

- ▶ コンポジット・モニタ
- ▶ ディレクトリ・モニタ
- ▶ e ビジネス・トランザクション・モニタ
- ▶ ファイル・モニタ
- ▶ フォーミュラ・コンポジット・モニタ
- ▶ HP NonStop イベント・ログ・モニタ
- ▶ JMX モニタ (WebLogic を監視しない場合)
- ▶ リンク・チェック・トランザクション・モニタ
- ▶ ログ・ファイル・モニタ
- ▶ Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタ
- ▶ Microsoft Windows Media Player モニタ
- ▶ マルチ・ログ・ファイル・モニタ
- ▶ ネットワーク帯域幅モニタ
- ▶ Real Media Player モニタ
- ▶ スクリプト・モニタ
- ▶ SNMP トラップ・モニタ
- ▶ URL モニタ
- ▶ URL 内容モニタ
- ▶ URL リスト・モニタ

- ▶ URL シーケンス・モニタ
- ▶ XML 測定値モニタ

測定値ごとに CI をレポートするモニタ

次のモニタは、測定値ごとの CI をレポートします。これらのモニタには複数の CI があるため、これらのモニタについて CI とインジケータのマッピングは変更できません。

- ▶ SAP CCMS
- ▶ SAP Work Processes
- ▶ Siebel アプリケーション・サーバ
- ▶ Siebel Web サーバ
- ▶ Solaris ゾーン
- ▶ VMware ホスト CPU
- ▶ VMware ホスト・メモリ
- ▶ VMware ホスト・ネットワーク
- ▶ VMware ホスト状態
- ▶ VMware ホスト・ストレージ
- ▶ VMware パフォーマンス

注：モニタのカスタム・トポロジ・ノードを定義し、そのホスト名を指定することができます。この BSM に接続している SiteScope にリモート・サーバがある場合、リモート・サーバの環境に応じて、この CI の CI タイプは自動的に Unix または Windows に変わります。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、BSM 統合に関するトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- ▶ 304 ページの「Internet Explorer 7 を使用した SAM 管理からの SiteScope へのアクセス」
- ▶ 305 ページの「BSM へのデータのレポート」
- ▶ 305 ページの「SiteScope と BSM 間統合のトラブルシューティング」

ヒント: 大量のアップロード・データによるシステムの過負荷を避けるため、これらのファイルはデータ・フォルダが空の場合にのみコピーすることをお勧めします。**data.old** フォルダの数が指定したしきい値（標準設定は 10 フォルダ）を超えると、最も古いフォルダが削除されます。

Internet Explorer 7 を使用した SAM 管理からの SiteScope へのアクセス

Internet Explorer 7 を使用して SAM 管理から SiteScope にアクセスすると、「408 Request Timeout」エラーが表示されます。

回避策: BSM から SiteScope にログオンするには、ブラウザで SiteScope サーバのクッキーを受け入れるよう設定します。

- 1 Internet Explorer で、[ツール] > [インターネット オプション] > [プライバシー] タブと選択し、[詳細設定] ボタンをクリックします。
- 2 [自動クッキー処理を上書きする]を選択し、[ファーストパーティの Cookie] と [サードパーティの Cookie] が [受け入れる] に設定され、[常にセッション Cookie を許可する] が選択されていることを確認します。

BSM へのデータのレポート

監視のデプロイメントやネットワーク通信の複雑さによっては、SiteScope が一時的に BSM サーバと通信できなくなることがあります。SiteScope の状況の監視には、BSM サーバへの接続およびデータ転送を監視する複数のモニタが含まれています。

SiteScope が BSM サーバに接続できない場合、SiteScope は引き続き監視データ・ファイルをローカルに記録して保存します。データ・ファイル数が指定したしきい値を超えると、SiteScope は構文 **< SiteScope のルート > ¥cache¥persistent¥topaz¥data <インデックス> .old** を使用してデータ・ファイルをキャッシュ・フォルダに保存します。保持する **data.old** フォルダの数を設定するには、**master.config** ファイルの **_topazMaxOldDirs** プロパティを変更します。

注：標準設定では、データ・ファイル数のしきい値が 1,000 ファイルに設定されています。この設定を変更するには、**master.config** ファイルの **_topazMaxPersistenceDirSize** プロパティを変更します。

SiteScope とエージェント・サーバ間の接続が復旧したら、これらのフォルダから **< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥cache¥persistent¥topaz¥data** フォルダに手動でファイルをコピーする必要があります。

SiteScope と BSM 間統合のトラブルシューティング

SiteScope と BSM 間メトリック統合、CI トポロジ・レポート、CI ダウンタイムに関する問題のトラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-Business Service Management/Operations Manager Integration』の「Troubleshooting SiteScope Integration Issues」を参照してください。

9

HP Operations Agent を使用した Operations Manager と BSM での作業

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope の HPOM と BSM の通信方法について (308 ページ)
- ▶ イベントの送信 (313 ページ)
- ▶ HP Operations Agent を使用した測定値のレポート (322 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法 (326 ページ)
- ▶ SiteScope から HP Operations Agent にメトリックスをレポートできるようにする方法 (349 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合 (352 ページ)
- ▶ SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項 (356 ページ)

概念

SiteScope の HPOM と BSM の通信方法について

注: 本項は、SiteScope を HP Operations Manager (HPOM) 製品または BSM に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM バージョン 9.00 以降にレポートする場合にのみ該当します。

スタンドアロン・アプリケーションとしての SiteScope は、IT インフラストラクチャのパフォーマンスと可用性を監視するエージェントレス・ソリューションです。また、SiteScope は、HP Operations Manager (HPOM)、HP Performance Manager (HPOM のレポート・コンポーネント)、および BSM のオペレーション管理と連動して、エージェントレスとエージェント・ベースのインフラストラクチャ管理の強力な組み合わせも可能にします。

SiteScope は、SiteScope サーバにインストールされている HP Operations Agent を使用してこれらのアプリケーションと通信します。HP Operations Agent を使用して、SiteScope でイベント・データや測定値データを統合できます。

- ▶ **イベント:** HP Operations Agent は、オペレーション管理、サービス状況、および サービス・レベル管理 で使用するために、イベント・データを HPOM 管理サーバ、または BSM に送信します。SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。イベント・レポートの有効化の詳細については、313 ページの「イベントの送信」を参照してください。
- ▶ **メトリックス:** HP Operations Agent は、SiteScope で収集されたメトリックス・データのデータ・ストレージとしても機能します。これによって、SiteScope では測定値データを Performance Manager (HPOM レポート・コンポーネント) および BSM のオペレーション管理の [パフォーマンス パースペクティブ] タブから直接使用可能となります。メトリックス・レポートの有効化の詳細については、322 ページの「HP Operations Agent を使用した測定値のレポート」を参照してください。

注：

- ▶ HP Operations Agent を使用する測定値統合（オペレーション管理の [パフォーマンス パースペクティブ] タブで測定値データが使用される）は、CIの状態を計算する時に（たとえば、サービス状況、サービス・レベル管理、およびシステム可用性管理で）、さまざまな BSM アプリケーションによって使用される SiteScope モニタ測定値の統合と混同しないでください。BSM 測定値統合の設定の詳細については、269 ページの「BSM の使用」を参照してください。
 - ▶ HP Operations Agent を使用した測定値統合は、HPOM とオペレーション管理のために Windows および UNIX プラットフォームで実行されている SiteScope によってサポートされます。
 - ▶ SiteScope では、HP Operations Agent バージョン 8.60.501 をサポートします。
-

ヒント： HP Operations Agent を使用した BSM および HPOM 製品への測定値データのレポートのベスト・プラクティスおよびトラブルシューティングの詳細については、『Best Practices for the SiteScope-BSM/OM Integration』を参照してください。

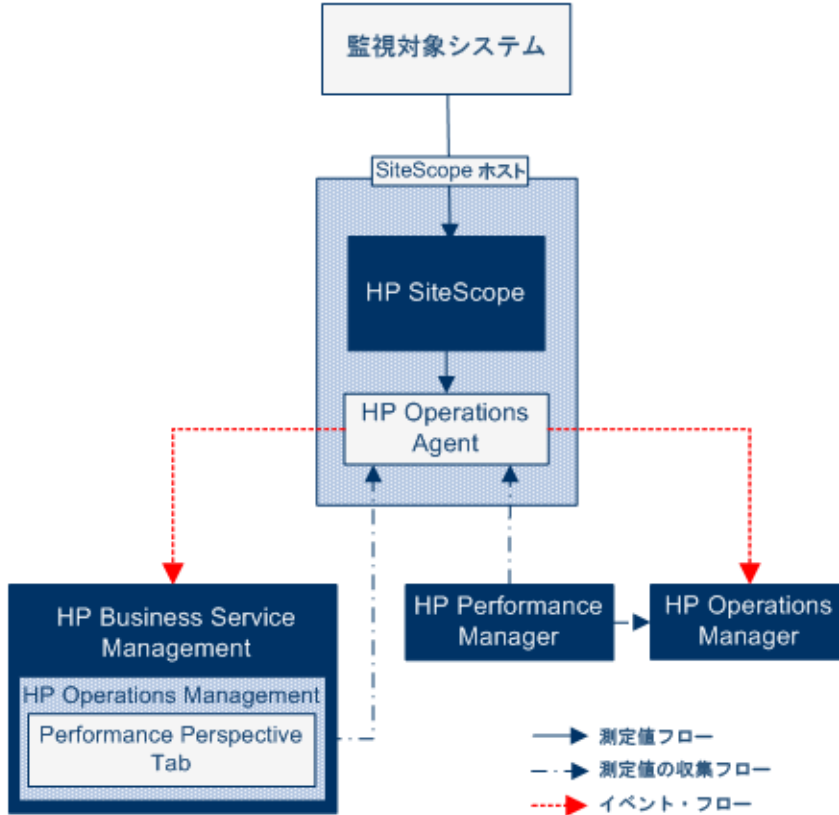
SiteScope と HPOM の機能が結合することで、効果的で詳細な監視ソリューションが提供されます。HPOM の使用の詳細については、HPOM のドキュメントを参照してください。

本項の内容

- ▶ 310 ページの「イベントとメトリックスのフロー図」
- ▶ 311 ページの「HP Operations Agent のトポロジ」
- ▶ 312 ページの「SiteScope Failover と Operations Manager の統合」

イベントとメトリックスのフロー図

次の図は、SiteScope と HPOM および BSM アプリケーションとの間での測定値データおよびイベントのフローを示しています。



HP Operations Agent のトポロジ

HP Operations Agent の CI は、SiteScope が HPOM に接続され、HPOM が BSM に接続される時点で作成されます。

SiteScope が直接 BSM に接続されると、SiteScope は通常のトポロジ・フローを使用してエージェント CI を作成します。SiteScope がメインのトポロジ（プロファイル CI）を送信するときに、アクティブなイベントまたは HP Operations Manager とのメトリックス統合がある場合、SiteScope はエージェントのトポロジも送信します。

注：

- ▶ エージェント CI が削除されるのは、イベント統合と測定値統合の両方が削除される場合だけです。
 - ▶ エージェント CI は、SiteScope が BSM から切断されても削除されません。これは、接続が HPOM と BSM のどちらを介して確立されていたかが SiteScope では不明なためです（ただし、エージェント CI はエージング・プロセスのために最終的には削除されます）。
-

SiteScope Failover と Operations Manager の統合

SiteScope Failover を使用してバックアップの監視を使用可能にしている場合、HP Operations Agent を SiteScope Failover Manager にインストールし、プライマリの SiteScope が停止した場合に、HPOM 管理サーバか BSM ゲートウェイ・サーバとの統合のためにフェールオーバー・マネージャでイベントを送信する、またはメトリックス・データを保存できるようにする必要があります。エージェントは、SiteScope Failover のインストール中、または SiteScope Failover のインストール後に SiteScope 設定ツールを使用してインストールできます。

- ▶ **イベント統合の場合** : プライマリの SiteScope が停止すると、SiteScope Failover インスタンスがアクティブ化され、HPOM か BSM へのイベント送信を続行します。

注 : 統合を有効にするには、フェールオーバー・サーバとプライマリの SiteScope サーバのエージェントを HPOM に接続し、HPOM 内の対応するエージェント・ノードに SiteScope ポリシーをアップロードしてインストールする必要があります。設定の詳細については、『HP SiteScope Failover Manager Guide』(PDF) を参照してください。

- ▶ **測定値統合の場合** : 連続的なデータのグラフ表示は、プライマリの SiteScope と SiteScope Failover の両方を選択して、HPOM および BSM のレポート・ツールを使用することで実現できます。

注 : HP Operations Manager および BSM とのイベント統合と、HP Operations Manager とのメトリックス統合さえも、プライマリの SiteScope に設定できませんが、Microsoft Cluster Service を使用してフェールオーバー監視を行っている場合は、これらの統合に対して高可用性はサポートされません。

SiteScope Failover の使用の詳細については、『HP SiteScope Failover Manager Guide』(PDF) を参照してください。

イベントの送信

注: 本項は、SiteScope を HP Operations Manager (HPOM) または BSM に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM バージョン 9.00 以降にレポートする場合にのみ該当します。

SiteScope からイベントを直接 HPOM 管理サーバおよび BSM に送信できます (オペレーション管理, サービス状況, および サービス・レベル管理 で使用するために)。SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。

SiteScope からのイベント送信を有効にするには、HP Operations Agent が SiteScope サーバにインストールされている必要があります。エージェントは、SiteScope のインストール中に SiteScope のインストール・メディアから、または SiteScope のインストール後に設定ツールを使用してインストールできます。また、HPOM 管理サーバから手動でインストールすることもできますが、エージェントが SiteScope に同梱されているエージェントと同じか新しいバージョンでないかぎり、この方法は推奨されません。

エージェントがインストールされたら、SiteScope の [統合プリファレンス] で設定する必要があります。この設定には、エージェントのインストール・パスおよび HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバのホスト名または IP アドレスの入力、HPOM と BSM へのエージェントの接続が含まれます。設定が済むとエージェントは、HPOM か BSM に接続要求を送信し、HPOM または BSM によって証明書要求が承認される必要があります (HPOM 管理サーバは、このクライアントを自動的に受け入れるように設定できます)。

HPOM サーバまたは BSM サーバで証明書要求が承認されると、SiteScope サーバへのエージェントのインストール時に、事前に設定されたログ・ファイル・ポリシーがインストールおよび署名されます。これで、SiteScope が、事前に構成された Operations Manager ポリシーにローカルで自動的に署名できるようになります。このポリシーは SiteScope に付属していて、SiteScope の統合プリファレンスの [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスからデプロイできます。

イベントがトリガされると、SiteScope によって

HPSiteScopeOperationsManagerIntegration.log ファイルにイベント・データが書き込まれます。このファイルは < SiteScope ルート・ディレクトリ > %logs ディレクトリにあります。各イベントはログの個別の行に書き込まれます。ログ・ファイル・ポリシーでは、エージェントがこのファイルを読み取り、HPOM または BSM に送信されるイベント・メッセージを作成するように指定されています。

イベント属性の形式は、イベント・マッピング・テンプレートを使用して決定されます。このテンプレートでは、イベントのトリガ時に HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに送信されたイベントの属性値に SiteScope ランタイム・データをマップします。イベント・マッピングの詳細については、818 ページの「共通イベント・マッピングの概要」を参照してください。

データがイベントに変換されたら、エージェントによって HPOM 管理サーバか BSM ゲートウェイ・サーバにイベントが送信されます。イベントは次に表示されます。

- ▶ HPOM のイベント・コンソール。
- ▶ BSM の オペレーション管理 イベント・ブラウザ (イベント管理ファウンデーション・ライセンスがある場合) およびサービス状況 (CI に影響するイベントの)。BSM のインストールに オペレーション管理 が含まれていない場合は、CI のステータスに影響するイベントを サービス状況 のステータス・インジケータを使用して確認できます。

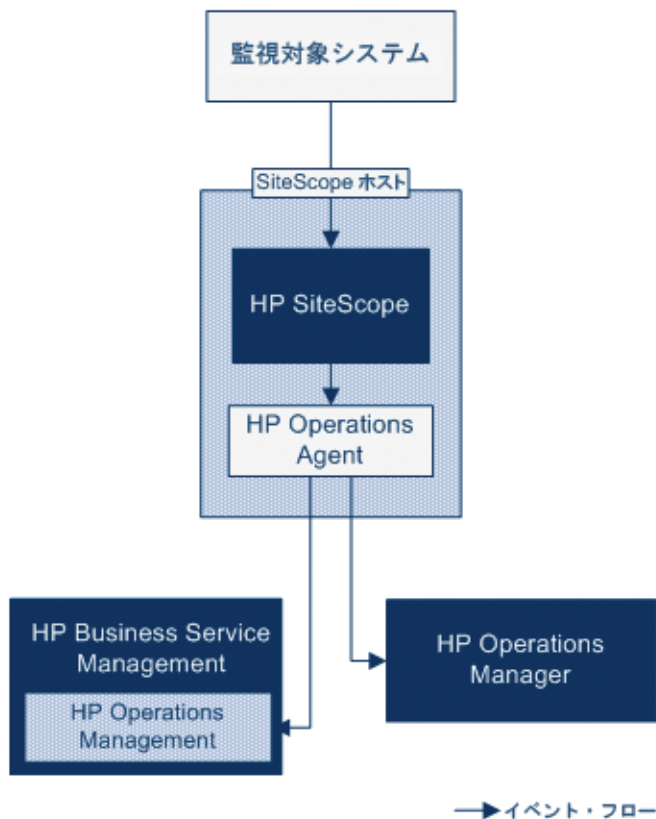
イベントを送信するように SiteScope を設定する方法の詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 315 ページの「イベント統合の図」
- ▶ 316 ページの「SiteScope と HP Operations Manager のサポート早見表 - イベント統合」
- ▶ 316 ページの「イベントの生成」
- ▶ 318 ページの「ディスカバリ・スクリプトと HPOM イベントを表示するためのドリル・ダウン・ユーザ」
- ▶ 320 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」

イベント統合の図

次の図は、イベントのデータ・フローを示します。



注：HP Operations Agent のイベントのレポート先には、HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバの両方ではなく、どちらかしか設定できません。

SiteScope と HP Operations Manager のサポート早見表 - イベント統合

本リリースでサポートされる HP Operations Manager バージョンについては、リリース・ノート の HP SiteScope サポート早見表を参照してください (SiteScope で [ヘルプ] > [新機能] を選択)。

イベントの生成

モニタのメトリックスの状態の変更に続いて、または SiteScope 警告がトリガされるときに、イベントを生成して HPOM 管理サーバまたは BSM のオペレーション管理に送信するように設定できます。

- ▶ **状態の変更** : すべての測定値またはカウンタの状態の変更はイベントとなります (たとえば、CPU 使用率のカウンタの状態が「正常」から「エラー」に変更された場合)。モニタのプロパティで、メトリックスの状態の変更によりイベントがトリガされるかどうかを選択できます。標準設定では、モニタ・インスタンスのメトリックスの状態が変更されると、常に SiteScope からイベントが送信されます。

イベントがトリガされたときに使用する、イベントとイベントの属性値を送信する標準設定を変更できます。イベントの属性値は、モニタのプロパティを使用したイベント設定マッピングに従って入力されます。イベント・マッピングの詳細については、818 ページの「共通イベント・マッピングの概要」を参照してください。

モニタのプロパティを送信するだけでなく、SiteScope ではモニタ・インスタンスの状況インジケータまたはイベント・タイプ・インジケータも送信します。イベントはインジケータに従って分類されます。BSM イベント・マネージャでは、インジケータを使用して、管理対象の IT 環境における発生タイプ (CPU 負荷など) に従ってイベントを分類します。続いて、CI 状態情報を提供するインジケータが、CI の計算に使用されます。

注 : 状態の変更は、モニタのしきい値の設定で設定された測定値にのみ適用されます。

- ▶ **警告**：すべての警告がイベントとなります。警告はモニタごとにトリガされるため、警告によってトリガされるイベントでは、モニタのプロパティを使用できますが、特定のメトリックスに関連付けられているインジケータは使用できません。このため、イベント警告を設定する際には、警告によってイベントがトリガされるときにレポートされるインジケータを手動で選択できます。結果として、インジケータの汎用性は高くなるため、BSM の状態インジケータに影響しないインジケータを選択してください。

[HP Operations Manager 統合設定] 表示枠の警告定義で、HPOM または BSM にイベントを送信するかどうかを選択できます。

注：

- ▶ イベントを送信するように警告とモニタの両方が設定されている場合、1 つの SiteScope の警告がトリガされたときに、2 つのイベントが生成される可能性があります。警告にイベント送信を設定する場合は、モニタにはイベント送信を設定しないようにします。
 - ▶ HPOM に送信される警告には、SiteScope によってしきい値情報も追加されます。SiteScope と BSM の以前のバージョンでは、モニタ用に作成されたしきい値を警告に含めることはできませんでした。
 - ▶ オペレーション管理 で、警告イベントは通知目的のみに使用することをお勧めします。
-

ディスカバリ・スクリプトと HPOM イベントを表示するためのドリル・ダウン・ユーザ

SiteScope が HPOM と統合されると、**ノード・ディスカバリ**および**モニタ・ディスカバリ**・ポリシーが HPOM 管理サーバのノードとモニタに対してアクティブになります。詳細については、319 ページの「ノード・ディスカバリ・ポリシー」および 319 ページの「モニタ・ディスカバリ・ポリシー」を参照してください。

どちらのディスカバリ・ポリシーも、SiteScope の**統合ビューア**・ユーザに依存します。これは、HPOM イベントからのドリルダウン用として SiteScope に用意されているユーザです。このユーザには、表示権限と、グループとモニタをリフレッシュする権限が与えられています。ユーザとユーザ権限の詳細については、843 ページの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。

注:

- ▶ **統合ビューア**・ユーザがユーザ管理プリファレンスから削除されると、SiteScope が再起動された時にユーザ・タイプが自動的に作成されます。
- ▶ 統合ビューア・ユーザ・プロパティを変更した場合は、SiteScope を再起動してユーザ・プロパティ・ファイルを更新する必要があります。または、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥conf¥ sitescope_connection.properties** ファイル内のユーザ・プロパティを手動で更新することもできます。統合ビューア・ユーザ・プロパティを手動で変更する場合は、SiteScope 暗号化ツールを使用してユーザのログイン名とパスワードを暗号化する必要があります。暗号化ツールの詳細については、1066 ページの「テキストの暗号化方法」を参照してください。

HPOM 管理サーバへのディスカバリ・ポリシーのデプロイの詳細については、HPOM のドキュメントを参照してください。

ノード・ディスカバリ・ポリシー

SiteScope が HPOM に接続されると、SiteScope によって監視される各ノードに対応するノードが HPOM に自動的に作成および登録されます。この機能のおかげで、SiteScope は監視対象のすべてのノードを HPOM にレポートできます。イベントをレポートするモニタのホストのみが、このディスカバリ・ポリシーによって、HPOM に送信されます。

ヒント: HPOM に接続していない場合 (オペレーション管理 に接続している場合)、次のコマンドを実行することによってノード・ディスカバリを無効にするように推奨します。ovpolicy -disable -polname SiteScope_Hosts_Discovery

注: SiteScope では、無効に設定されているモニタ、またはイベントを送信するように設定されていないモニタについて、ノードまたはサービスは HPOM にレポートされません。

モニタ・ディスカバリ・ポリシー

これは、< SiteScope ルート・ディレクトリ > ¥tools¥OMIntegration¥ SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy ディレクトリのファイルを使用して、HPOM で手動でアクティブ化しなければならないオプションのポリシーです。ポリシーがアクティブ化された後で、HPOM に接続されると SiteScope は SiteScope-OM モニタ検出スクリプトを実行します。

このポリシーによって HPOM Service Navigator は HPOM サービス・マップに SiteScope モニタ・ツリーを表示できます。新しいモニタ、グループ、または両方を追加する、または SiteScope モニタ・ツリーで変更を行うと、HPOM でサービス・ツリーが更新され、これらの変更が反映されます。さらに、イベントが HPOM に達すると、SiteScope サービス・ツリーに影響し、影響を受けたすべての関連ノードに色を付けます。

モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法の詳細については、338 ページの「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」を参照してください。

ツールが HPOM から SiteScope にドリルダウンできるようにする方法の詳細については、344 ページの「HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」と 346 ページの「HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」を参照してください。

トラブルシューティングおよび制限事項

- ▶ 以前の SiteScope-OM イベント統合 (SiteScope 11.00 より前) はサポートされていません。
- ▶ SiteScope 10.x バージョンは HPOM イベント統合をサポートしていますが、11.00 よりも前のバージョンの SiteScope で生成されたイベントは、BSM 9.0x の サービス状況 と サービス・レベル管理 に影響しません。
- ▶ HP Operations Agent を使用して HPOM にイベントを送信できるのは、BSM 9.00 以降に接続している時に限定されます。以前のバージョンの SiteScope では、HPOM 管理サーバへの HP SiteScope Adaptor のインストールという以前の HPOM の統合ソリューションがサポートされますが、SiteScope 11.10 ではサポートされないためインストールしないでください。したがって HP Operations Agent を使用して新しい実装にアップグレードしてください。
- ▶ ノード・ディスカバリのアクティブ化またはモニタ・ディスカバリ・ポリシーのデプロイに問題がある場合には、SiteScope ノード・システム・プロパティが正しく検出されていることを確認し、必要に応じて修正します。[ノードプロパティ] ダイアログ・ボックスで、[システム] タブを選択して、設定が SiteScope ノード・システム設定と一致することを確認します。
- ▶ 現在 HPOM を SiteScope と使用していて、HPOM を BSM にアップグレードすることを計画している場合、アップグレードを実行するには、SiteScope を直接 BSM に接続する必要があります。これにより、SiteScope によるトポロジの BSM へのレポートも可能になります。SiteScope を BSM に接続する方法の詳細については、269 ページの「BSM の使用」を参照してください。
- ▶ SiteScope から、モニタのメトリクス値がどのしきい値にも一致しないイベントが送信されると、インジケータの重大度 [正常域] が HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに送信されます。

- ▶ SiteScope が BSM に接続されるときに、新しいホストにモニタが作成されると、関連 CI の値がないイベントがオペレーション管理に送信されます（トポロジが BSM にレポートされる前に、イベントがトリガされます）。次のイベントの送信を待たずに済むようにするには、モニタの [HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定] の [最初のイベントを手動で送信] チェック・ボックスを選択します。この処理は、[グローバル検索と置換] を使用してグローバルに実行できます。
- ▶ 次の状況で SiteScope による監視が停止する場合、イベントは閉じられず（HPOM と BSM に関係）、インジケータのステータスはクリアされません（BSM に関係）。
 - ▶ 関連付けられている SiteScope モニタが省略されたか、（永続的またはスケジューラにより）無効または一時停止にされている。
 - ▶ 関連付けられている SiteScope モニタが削除された。
 - ▶ SiteScope からの BSM へのレポートが停止される（SiteScope が切断される場合など）。
- ▶ サービス状況、サービス・レベル管理、または両方から無効化されているモニタのインジケータを除外するには、BSM 9.0x でダウンタイムの管理を使用することをお勧めします。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Platform Administration』の「Downtime Management — Overview」を参照してください。
- ▶ HP Operations Agent のインストール、イベント統合設定、イベントの送信、およびノード・ディスカバリとモニタ・ディスカバリに関連する追加のトラブルシューティングについては、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-BSM/OM Integration』の「Troubleshooting SiteScope Integration Issues」を参照してください。

HP Operations Agent を使用した測定値のレポート

注：本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降の オペレーション管理 または HP Performance Manager 9.0 以降に接続するユーザのみを対象としており、HP Operations Agent を使用している場合にのみ該当します。

SiteScope は HP Operations Agent を使用して、測定値データを HP Performance Manager (HPOM のレポート・コンポーネント) および BSM のオペレーション管理の [パフォーマンス パースペクティブ] タブが使用できるようにします。SiteScope メトリックスをレポート製品が収集できるようにするには、HP Operations Agent が SiteScope サーバにインストールされている必要があります。

注：HP Operations Agent を使用する測定値統合 (オペレーション管理の [パフォーマンス パースペクティブ] タブで測定値データが使用される) は、CI の状態を計算する時に (たとえば、サービス状況、サービス・レベル管理、および システム可用性管理 で)、さまざまな BSM アプリケーションによって使用される SiteScope モニタ測定値の統合と混同しないでください。BSM 測定値統合の設定の詳細については、269 ページの「BSM の使用」を参照してください。

Performance Manager との測定値統合は、HP Operations Agent と HPOM サーバまたは BSM サーバとの接続状態に関係なく有効化されます。これは、測定値がエージェントによって収集されるためです。

SiteScope によってメトリックス・データが収集されて、SiteScope ホストにインストールされているエージェントのデータ・ストアに記録されます。サイズ設定の推奨事項については、356 ページの「SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項」を参照してください。

Performance Manager のユーザがグラフを描くか設計する場合、SiteScope の監視対象の Performance Manager で選択したノードに対応するエージェント・データ・ストアから、メトリックス・データが Performance Manager によって収集され、グラフが描かれます。エージェントレス・グラフ作成は、Performance Manager 9.0 でサポートされます。Performance Manager の詳細については、Performance Manager のマニュアルを参照してください。

SiteScope から収集されたメトリックス・データは、BSM のオペレーション管理のグラフ作成コンポーネント、[パフォーマンス パースペクティブ] タブでも使用されます。

メトリックス名の整合、つまり SiteScope のメトリックス名を HPOM または BSM で使用されている名前と対応付けるプロセスは、最もよく使用されるいくつかのモニタに対して実行されています。詳細については、352 ページの「SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合」を参照してください。

ヒント : HP Operations Agent を使用した BSM および HPOM 製品への測定値データのレポートのベスト・プラクティスおよびトラブルシューティングの詳細については、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-BSM/OM Integration』を参照してください。

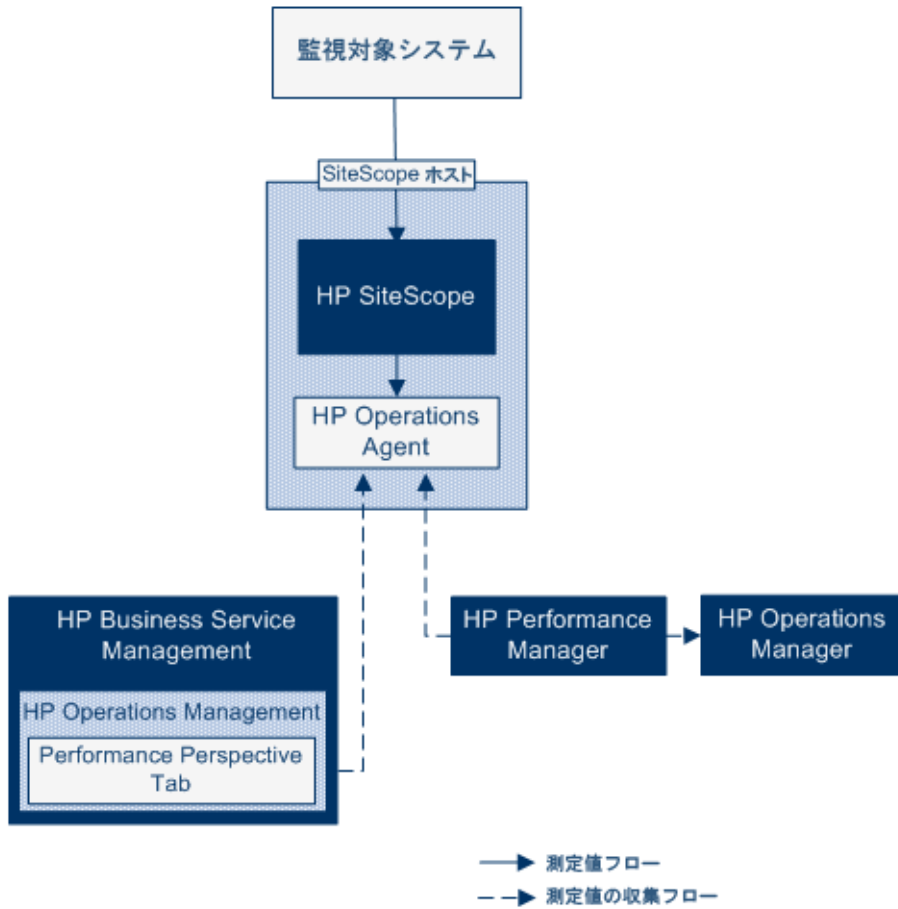
メトリックス統合の設定の詳細については、349 ページの「SiteScope から HP Operations Agent にメトリックスをレポートできるようにする方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 324 ページの「メトリックス・データのフロー図」
- ▶ 325 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」

メトリックス・データのフロー図

次の図は、測定値のデータ・フローを示します。



トラブルシューティングおよび制限事項

- ▶ エージェントのデータ・ストアでは、SiteScope メトリックス名に英数字とアンダースコア文字 (_) しかサポートされません。それ以外のすべての文字は、サポートされる文字に変換されます (メトリックスの表示名 (ヘッダ) では SiteScope のスタイルが維持されます)。
- ▶ Web スクリプト・モニタ・データは、オペレーション管理または HPOM にレポートできません。
- ▶ HP Performance Manager から BSM の オペレーション管理 (パフォーマンス・パースペクティブ) にアップグレードし、SiteScope を BSM に接続した後で、履歴レポート・データはアップグレードできません。CI ベースのレポート作成機能がないためです (従来の HP Performance Manager の方法で、表示はできます)。
- ▶ エージェント・データ・ストアにポストフィックス (25% または 400MB など) がある数値をレポートできるようにするには、コンマで区切られたポストフィックスのリストを **master.config** ファイルの **_omMetricIntergationAllowedNumberPostfixs** プロパティに追加します。たとえば、%, MB, KB, および GB を含むには、**=%,mb,kb,gb** を追加します。すべてのポストフィックスが小文字でなければならないことに注意してください。
- ▶ オペレーション管理による「マネージャのマネージャ」設定 (この設定で、複数の HPOM サーバがオペレーション管理に接続され、複数の SiteScope が HPOM サーバを介して間接的にオペレーション管理に接続されます) では、SiteScope から送信されたデータは、オペレーション管理のパフォーマンス・パースペクティブによってサポートされません。これは、SiteScope からトポロジがオペレーション管理に送信されないためです。オペレーション管理のデプロイメント構成の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『オペレーション管理の使用』(英語版)の「サーバの接続」を参照してください。
- ▶ HP Operations Agent 設定、状況モニタ・エラー、Performance Manager の設定に関するトラブルシューティングの問題については、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-BSM/OM Integration』の「Troubleshooting SiteScope Integration Issues」を参照してください。

タスク

SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法

注: 本項は、SiteScope を HP Operations Manager (HPOM) または BSM に接続するユーザのみを対象としており、SiteScope から HPOM または BSM バージョン 9.00 以降にレポートする場合にのみ該当します。

このタスクでは、SiteScope を使用して HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバにイベントを送信する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 327 ページの「前提条件」
- ▶ 327 ページの「HP Operations Agent の SiteScope サーバへのインストール」
- ▶ 328 ページの「分散環境の BSM のみ：データ処理サーバに渡される接続要求の設定」
- ▶ 330 ページの「SiteScope サーバでのエージェントの接続設定の設定」
- ▶ 331 ページの「エージェントの接続要求を HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ / Web 処理サーバで受け入れる」
- ▶ 332 ページの「SiteScope サーバへのログ・ポリシーのインストール」
- ▶ 332 ページの「接続状態のチェックおよび SiteScope サーバからのテスト・メッセージの送信（任意）」
- ▶ 333 ページの「モニタ・ディスカバリを使用して統合を拡張 - オプション」
- ▶ 333 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信の有効化」
- ▶ 334 ページの「標準設定のイベント重大度マッピングの使用を有効にする - オプション」
- ▶ 334 ページの「モニタ・インスタンスと警告のイベントの送信の有効化 / 無効化」

- ▶ 335 ページの「モニタと警告のイベント・マッピングの設定 (任意)」
- ▶ 335 ページの「結果」

1 前提条件

SiteScope の管理者、または「**統合プリファレンスの編集**」権限と「**共通イベント・マッピングの編集**」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスと共通イベント・マッピングを作成または変更できます。詳細については、843 ページの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。

2 HP Operations Agent の SiteScope サーバへのインストール

HP Operations Agent は、SiteScope インストール・メディアから SiteScope をインストールするとき、SiteScope のインストール後に設定ツールを使用してインストールできます。このエージェントによって、SiteScope からイベント・データを HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ・サーバに送信できます。

SiteScope のインストール中にエージェントをインストールする方法の詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「インストール・ウィザードを使用してインストール」を参照してください。

設定ツールを使用したエージェントのインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「SiteScope 設定ツールの使用」を参照してください。

サポートされる HPOM 環境のリストについては、リリース・ノート of HP SiteScope サポート早見表を参照してください。

3 分散環境の BSM のみ：データ処理サーバに渡される接続要求の設定

BSM によって別のゲートウェイ・サーバとデータ処理サーバが使用されている場合、次の手順を実行して、ゲートウェイ・サーバで受信された要求がデータ処理サーバにわたされるようにします。

- a BSM で、[管理] > [プラットフォーム] > [インフラストラクチャ設定] を選択します。
 - ▶ [アプリケーション] を選択します。
 - ▶ [オペレーション管理] を選択します。
 - ▶ [証明書サーバの設定] で、[証明書サーバ ホスト] を見つけます。証明書サーバ・ホストとして稼働するアクティブな BSM データ処理サーバのホスト名または IP アドレスと値が一致することを確認します。一致しない場合には、適宜変更します。

注：BSM データ処理サーバが故障して自動フェールオーバーが設定されている場合には、**証明書サーバ・ホスト**の設定をバックアップのデータ処理サーバ名に変更し、新しい証明書要求を処理する必要があります。ただし、データ処理サーバのフェールオーバー・タイムフレームの間に新しい証明書要求が予測されない場合には、以前に設定したイベント統合に影響しないように、設定を変更せずにおくことができます。

- b ゲートウェイ・サーバで：
 - ▶ `cd < HPBSM ルート・ディレクトリ > %bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを `%bin` ディレクトリに変更します。
 - ▶ `setup-secure-communication.bat` を実行してデータ処理サーバの DNS 名を入力します。

- c データ処理サーバで：
- ▶ `cd < HPBSM ルート・ディレクトリ > %bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを `%bin` ディレクトリに変更します。
 - ▶ `setup-secure-communication.bat` を実行して、`g` と入力し要求を付与します(この要求を付与しその他の要求は付与しないことを確認します)。
- d BSM フェールオーバー環境をロード・バランサと使用している場合には、各データ処理サーバの証明書サーバが同期していることを確認します。
- ▶ すべてのゲートウェイ・サーバでステップ b と c を繰り返します。どのデータ処理サーバに証明書要求を送信するかは重要ではありません。データ処理サーバは既に信頼関係があるからです。その結果、すべてのゲートウェイ・サーバは両方のデータ処理サーバを信頼しており、どちらのサーバがアクティブなのかにかかわらず、常にこれらのサーバと通信できます。
 - ▶ 稼働中のデータ処理サーバに新しい証明書をインストールする場合、フェールオーバーとして使用される二次データ処理サーバに証明書をインストールすることも必要となります。新しい証明書をインストールするには、次のコマンドを実行します。
`ovcert -importtrusted -file <newCertificateFilePath>`
`ovcert -importtrusted -file <newCertificateFilePath> -ovrg server`
 - ▶ ポート 383 に到着するすべての HTTPS トラフィックをゲートウェイ・サーバーに転送するようにロード・バランサを設定します。これによって証明書要求とイベント転送を稼働できます。

4 SiteScope サーバでのエージェントの接続設定の設定

SiteScope 統合プリファレンスで、HPOM 管理サーバまたは BSM サーバへの HP Operations Agent の接続を設定します。

- a [プリファレンス] > [統合プリファレンス] を選択し、[HP Operations Manager 統合] をクリックして新しい統合を作成するか既存の統合を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、755 ページの「統合プリファレンス・ページ」を参照してください。
- b [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで [HP Operations Manager 統合のメイン設定] 表示枠を展開し、エージェントのインストール・パスと HPOM 管理サーバまたは BSM サーバの名前か IP アドレスを入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、775 ページの「HP Operations Manager 統合のメイン設定」を参照してください。
- c [接続] をクリックして、エージェントを HPOM 管理サーバまたは BSM サーバに接続します。エージェントから HPOM 管理サーバまたは BSM サーバに接続要求が送信されます。
- d [分析] ボタンをクリックすると、プロセスの各段階が正常に完了したかを検証できます。分析結果に表示される情報を、問題分析とトラブルシューティングに使用します。たとえば、**bbcutil** 接続プロトコルを検証することで、エージェントとサーバ間の接続を確認できます。

注： エージェントが HPOM サーバまたは BSM サーバに接続されており、異なるサーバに接続する場合には、エージェントをアンインストールしてから再インストールするか、エージェントを別のサーバにリダイレクトする必要があります。タスクの詳細については、336 ページの「HP Operations Agent を異なる HPOM または BSM サーバに再接続する方法」を参照してください。

5 エージェントの接続要求を HPOM 管理サーバまたは BSM ゲートウェイ / Web 処理サーバで受け入れる

▶ HPOM の場合 :

HPOM ユーザ・インタフェースで、SiteScope ノードを設定し、証明書要求をこのノードにマップして、証明書要求を受け入れる必要があります。詳細については、HPOM ドキュメントの「環境の管理」の「管理対象ノードの設定」と「証明書の設定」を参照するか、HPOM 管理者にお問い合わせください。

▶ BSM の場合 :

ゲートウェイ・サーバで BSM を実行している場合のみ、BSM ゲート・サーバで次の手順を実行します。BSM が分散環境で実行されている場合は、データ処理サーバで次の手順を実行します。

- a (任意) OV 証明書サーバ・プロセスが実行されているかどうかを確認するには、コマンド・ライン `run ovc -status` を実行します。実行中でない場合、コマンド `ovc -start` を実行するか、BSM の管理者にお問い合わせください。
- b `cd < HPBSM ルート・ディレクトリ > %bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを `%bin` ディレクトリに変更します。
- c `setup-secure-communication.bat` を実行して、`g` と入力し要求を付与します (この要求を付与しその他の要求は付与しないことを確認します)。
- d 受け入れる予定の要求 ID がエージェントのコア ID に対応していることを確認します。エージェントのコア ID を取得するには、SiteScope で [HP Operations Manager 統合] の [分析] ボタンをクリックするか、SiteScope サーバ上でエージェントの `ovcoreid` コマンドを実行します。

6 SiteScope サーバへのログ・ポリシーのインストール

[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスの [HP Operations Manager 統合のメイン設定] 表示枠で, [ポリシーのインストール] をクリックします。事前に設定されたログ・ファイル・ポリシーがエージェント上にインストールされ, 署名されます。

7 接続状態のチェックおよび SiteScope サーバからのテスト・メッセージの送信 (任意)

接続に問題がある場合は, 問題の分析を実行してエージェントと証明書要求の状態をチェックできます。[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで, [HP Operations Manager 統合のメイン設定] 表示枠を展開して [分析] をクリックします。

エージェントが HPOM 管理サーバまたは BSM サーバに接続していることをチェックするには, [HP Operations Manager 統合詳細設定] 表示枠を展開して, [メッセージ テキストのテスト] ボックスにメッセージを入力し, [テストメッセージ送信] をクリックします。テストが成功すると, HPOM コンソールまたは BSM の オペレーション管理 イベント・ブラウザにテキスト・メッセージが表示されます。このメッセージは, 基本的な `opcmsg` ポリシー・コマンドによって生成されます。

8 モニタ・ディスカバリを使用して統合を拡張 - オプション

OM Service Navigator が OM サービス・マップに SiteScope グループおよびモニタを表示できるようにするには、**< SiteScope のルート・ディレクトリ >**
¥tools¥OMIntegration¥SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy ディレクトリのファイルを使用して、HPOM でモニタ・ディスカバリ・ポリシーを手動で有効にする必要があります。

ポリシーを有効にする方法の詳細については、338 ページの「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」を参照してください。

注: また、SiteScope にドリルダウン・ツールを使用して、モニタ・ディスカバリ・ポリシーによって検出され HPOM サービス・ナビゲータに追加されたモニタまたはグループ・サービスから SiteScope ユーザ・インタフェースを開くことも可能です。

- ▶ HPOM for Windows でツールを有効にする方法の詳細については、344 ページの「HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」を参照してください。
- ▶ HPOM for UNIX/Linux/Solaris でツールを有効にする方法の詳細については、346 ページの「HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」を参照してください。

9 SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信の有効化

- a [HP Operations Manager 統合]ダイアログ・ボックスで、[HP Operations Manager 統合のメイン設定] 表示枠を展開して [イベント送信の有効化] を選択し、SiteScope から HPOM または BSM サーバにイベントを送信できるようにします。
- b エージェントが HPOM / BSM にイベントを送信できることをチェックするには、[HP Operations Manager 統合詳細設定] 表示枠を展開し、[テストイベント送信] をクリックします。SiteScope によってログにテスト・イベントが書き込まれ、エージェントによってこのログが HPOM / BSM に送信されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、779 ページの「HP Operations Manager 統合詳細設定」を参照してください。

10 標準設定のイベント重大度マッピングの使用を有効にする - オプション

[HP Operations Manager 統合詳細設定] 表示枠の [重大度のマッピングの標準設定] で、HPOM / BSM の重大度レベルを SiteScope のモニタしきい値の状態に関連付ける重大度のマッピングの標準設定を使用できるようにします。SiteScope が BSM に接続されていない時、またはインジケータの状態および重大度の値が欠落している場合 (たとえば、定義済みのトポロジを持たないモニタを使用している時)、これらのマッピングは SiteScope 警告によって起動されるイベントで送信されます。重大度のマッピングの標準設定のカスタマイズも可能です。

ユーザ・インタフェースの詳細については、779 ページの「HP Operations Manager 統合詳細設定」を参照してください。

注 : 共通イベント・マッピングで [重大度] 属性を変更することによりモニタ・レベルで重大度マッピングをオーバーライドできます。詳細については、ステップ 12 (ページ 335) を参照してください。

11 モニタ・インスタンスと警告のイベントの送信の有効化 / 無効化

標準設定では、新たに作成された各モニタ・インスタンスは、各測定値状態変更のイベントを送信するように設定されます。また、新しい警告はそれぞれ、トリガ時にイベントを送信するように設定されます。SiteScope の以前のバージョンからアップグレードされたモニタと警告は、イベントを送信するように設定されていません。

- ▶ 任意のモニタ・インスタンスのイベントの送信を無効にするには、選択したモニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで [HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定] を展開して、[イベント送信] チェック・ボックスをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、475 ページの「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。
- ▶ 警告のイベントの送信を無効にするには、[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスで [HP Operations Manager Integration Settings] 表示枠を展開して、[イベント送信] チェック・ボックスをクリアします。ユーザ・インタフェースの詳細については、1468 ページの「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。

注： [イベント送信] 設定は、[HP Operations Manager 統合プリファレンス] の [HP Operations Manager 統合のメイン設定] 表示枠で [イベント送信の有効化] が選択されている場合にものみアクティブになります。

12 モニタと警告のイベント・マッピングの設定（任意）

モニタ・インスタンスと警告は、イベントがトリガされたときに使用する共通イベント・マッピングに割り当てられます。これは SiteScope ランタイム・データと送信されるイベントの属性値との間のマッピングです。

モニタまたは警告に関連付けられた標準設定のイベント・マッピングを使用するか、異なるイベント・マッピングを選択するか（存在する場合）、[プリファレンス] > [共通イベント マッピング] で新規イベント・マッピングを作成できます。あるいは、警告の場合、その警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用できます。

[共通イベント マッピング] ユーザ・インタフェースの詳細については、824 ページの「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

13 結果

モニタ・メトリックスの状態の変更または警告が SiteScope でトリガされると、[共通イベント マッピング] でそのモニタ・インスタンスまたは警告用に指定されている形式で、ログ・ファイルにイベントが書き込まれます。

エージェントによって、ログ・ファイルの監視とイベントの作成が実行され、HPOM または BSM に送信されます。イベントは、HPOM のイベント・コンソール、または オペレーション管理 イベント・ブラウザの BSM に表示されます（イベント管理ファウンデーションのライセンスがある場合）。BSM のインストールに オペレーション管理 が含まれていない場合は、CI のステータスに影響するイベントを サービス状況 の状況インジケータを使って確認できます。

HP Operations Agent を異なる HPOM または BSM サーバに再接続する方法

次のいずれかによって、HP Operations Agent を異なる HPOM 管理サーバまたは BSM サーバに再接続できます。

- ▶ HP Operations Agent をインストールおよび再インストールする。
- ▶ HP Operations Agent を異なるサーバにリダイレクトする。

注：このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。

HP Operations Agent をインストールおよび再インストールには、次の手順を実行します。

- 1 SiteScope で、[プリファレンス] > [統合プリファレンス] を選択し、HP Operations Manager 統合を削除します。
- 2 SiteScope 設定ツール ([スタート] > [プログラム] > [HP SiteScope] > [設定ツール]) を開き、[HP Operations Agent] オプションを選択し、HP Operations Agent をアンインストールします。
- 3 SiteScope 設定ツールを開き、[HP Operations Agent] オプションを選択して、HP Operations Agent をインストールします。
- 4 SiteScope で、接続する新しい HPOM/BSM サーバとの HP Operations Manager 統合を設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、774 ページの「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：HPOM サーバに再接続した後で、イベントが HPOM に送信されるまで時間がかかる場合があります。HPOM サーバ、HP Operations Agent、または両方の再起動によって修正されます。

HP Operations Agent を異なるサーバにリダイレクトするには、次の手順を実行します。

- 1 HP Operations Agent がインストールされている SiteScope サーバで、新しいコア ID を作成するために次のコマンドを実行します。ovcoreid -create -force
- 2 ovcert -list を実行して証明書を削除します。出力のすべての ID で、コマンド ovcert -remove id を実行します。
- 3 次のコマンドを実行することによって xpl 設定変数 OPC_NODENAME を適合させます。ovconfchg -ns eaagt -set OPC_NODENAME hostname
- 4 次のコマンドを実行することによって新しいサーバ・ホスト名とコア ID を設定します。

```
ovconfchg -ns sec.cm.client -set CERTIFICATE_SERVER <新しい OM サーバ>  
ovconfchg -ns sec.core.auth -set MANAGER <新しい OM サーバ>  
ovconfchg -ns sec.core.auth -set MANAGER_ID <新しい OM サーバ ovcoreid >  
ovconfchg -ns eaagt.lic.mgrs -set general_licmgr <新しい OM サーバのホスト名>  
ovconfchg -ns sec.cm.certificates -set CERT_INSTALLED FALSE
```

- 5 次のコマンドを実行することによって HP Operations Agent を再起動します。
ovc -kill
ovc -start
- 6 ovcert -certreq を実行して新しい証明書要求を作成します。
- 7 HPOM/BSM ゲートウェイ・サーバーで証明書要求を付与します（分散 BSM の場合には、データ処理サーバで証明書要求を付与します）。
- 8 SiteScope で、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスを開き、[HP Operations Manager 統合のメイン設定] 表示枠で次を実行します。
 - ▶ [HP Operations Manager / BSM ホスト] ボックスで HPOM/BSM サーバの名前または IP アドレスを変更します。詳細については、775 ページの「HP Operations Manager 統合のメイン設定」を参照してください。
 - ▶ [ポリシーのインストール] ボタンをクリックしてログ・ポリシーをインストールします。

注：HPOM サーバに再接続した後で、イベントが HPOM に送信されるまで時間がかかる場合があります。HPOM サーバ、HP Operations Agent、または両方の再起動によって修正されます。

SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法

このタスクでは、HPOM サービス・ナビゲータが HPOM サービス・マップに SiteScope グループおよびモニタを表示できるようにすることによって、HPOM との SiteScope 統合を拡張する方法を説明します。

注:

- ▶ このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。
- ▶ HPOM 9.0 for Windows 64 ビット・コンソールはサービス・ツリー・ビューをサポートしません。ツリー・ビューは左側の表示枠で使用できますが、右のサービス・マップでは使用できません。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 339 ページの「ポリシー・ファイルの instrumentation フォルダへのコピー」
- ▶ 339 ページの「ポリシーの HPOM サーバへのアップロード (HPOM for Windows サーバの場合)」
- ▶ 340 ページの「ポリシーの HPOM サーバへのアップロード (HPOM for Linux, UNIX, Solaris 9.x サーバの場合)」
- ▶ 341 ページの「スケジュール間隔の設定」
- ▶ 341 ページの「ポリシーのデプロイ」
- ▶ 342 ページの「モニタ・ディスカバリ・ポリシーの手動による実行 - オプション」
- ▶ 343 ページの「HPOM から SiteScope ユーザ・インタフェースへのドリルダウン - オプション」
- ▶ 343 ページの「トラブルシューティング」

1 ポリシー・ファイルの instrumentation フォルダへのコピー

SiteScope サーバで :

- ▶ Windows の場合 : **discoverSiteScope.bat** ファイルを < SiteScope ルート・ディレクトリ > %integrations%om%bin フォルダから %OvDataDir%bin%instrumentation フォルダにコピーします。
- ▶ Linux, UNIX, Solaris の場合 : すべてのファイルを /opt/HP/SiteScope/integrations/om/bin/* から /var/opt/OV/bin/instrumentation フォルダにコピーします。

注 : すべての関連するポリシー・ファイルは、 < SiteScope ルート・ディレクトリ > %tools%OMIntegration%SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy%SiS_Discovery_policy_3.0 フォルダにあります。

2 ポリシーの HPOM サーバへのアップロード (HPOM for Windows サーバの場合)

前提条件 :

- ▶ HPOM for Windows 8.16 (または同等のパッチ済み 8.10 サーバ) または 9.10, および十分なユーザ権限 (通常は管理者)。
- ▶ すべてのアップロードは、通常環境パス内にある HPOM for Windows コマンド・ライン・ツール, **ovpmutil** を使用して実行されます。

ポリシーを HPOM サーバにアップロードするには、次の手順を実行します。

- a コマンド・プロンプトを開き, SiteScope Discovery 3.0 サーバ・コンポーネントが配置されているフォルダにナビゲートします。たとえば, C:%temp%SiS_Discovery_3.0:

```
cd C:%temp%SiS_Discovery_3.0%ForServer
```

- b** `ovpmutil` を使用してサービス・モデルをアップロードします。

```
ovpmutil cfg svt upl .¥DiscoverSiteScope.mof
```

サービス・モデルは HPOM サービス・タイプ設定エディタに表示されま
す ([**アプリケーション サービス**] > [**SiteScope**] の下にある)。

- c** `ovpmutil` と次の指定されたインデックス・ファイルを使用して **SiteScope**
モニタ・ディスクバリエーションをアップロードします。

```
ovpmutil cfg pol upl .¥PolicyConfig_77BFF2F6-38BD-45B3-BEA9-  
E237C55F7877.xml
```

これでポリシーは、 [**ポリシー管理**] > [**ポリシー グループ**] の下にある
HPOM サーバ・ポリシー・リポジトリで使用可能となりました。

3 ポリシーの HPOM サーバへのアップロード (HPOM for Linux, UNIX, Solaris 9.x サーバの場合)

- a** HPOM サービス・モデルを HPOM 管理サーバにアップロードします。コ
マンド・シェルを開き、次を入力します。

```
/opt/OV/bin/OpC/utills/mof_cfgupld.sh /opt/HP/SiteScope/tools/¥
```

```
OMIntegration/SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy/¥
```

```
SiS_Discovery_policy_3.0/ForServer/DiscoverSiteScope.mof
```

(.mof ファイルは <**SiteScope**>/tools/OMIntegration/
SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy/SiS_Discovery_policy_3.0/ForServer
フォルダに配置されています)。

- b** コマンド・シェルに次を入力してポリシーをアップロードします。

```
/opt/OV/bin/OpC/utills/opcpolicy -upload dir=/opt/HP/SiteScope/¥
```

```
tools/OMIntegration/SiteScopeMonitorDiscoveryPolicy/¥
```

```
SiS_Discovery_policy_3.0/ForServer
```

- c** コマンド・シェルに次を入力してポリシーをノードに割り当て、**SiteScope**
ノードにデプロイします。

```
# /opt/OV/bin/OpC/utills/opcnode -assign_pol node_name=<NODENAME>  
net_type=NETWORK_IP pol_name="SiteScope Discovery"  
pol_type=svcdisc
```

4 スケジュール間隔の設定

HPOM for Windows コンソールで、HPOM エージェントで SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを実行するためのスケジュール間隔を設定できます。

- a [ポリシー管理] > [ポリシー グループ] > [SiteScope ディスカバリ] を選択します。右ペインで、[SiteScope ディスカバリ] を右クリックして [すべてのタスク] > [編集] を選択します。
- b サービス自動ディスカバリ・ポリシー・エディタで、[スケジュール] タブを選択し、HPOM for Windows コンソールで HPOM エージェントで SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを実行するための間隔を指定します。

5 ポリシーのデプロイ

前提条件：

- ▶ 統合される SiteScope サーバは HPOM 管理対象ノードとして設定されます。
- ▶ HP Operations Agent が実行中で接続されています（詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください）。
- ▶ 証明書が付与されています（詳細については、HPOM ドキュメントの「環境の管理」の「管理対象ノードの設定」を参照してください）。
- ▶ SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーが **SiteScope Discovery** ポリシー・グループにアップロードされています（詳細については、ステップ 2（ページ 339）またはステップ 3（ページ 340）を参照してください）。

HPOM for Linux, UNIX, Solaris 9.x サーバのポリシーをデプロイするには、次の手順を実行します。

コマンド・シェルを開き、次を入力します。# `opcragt -dist <NODENAME>`

HPOM for Windows サーバのポリシーをデプロイするには、次の手順を実行します。

- a** [SiteScope ディスカバリ] ポリシーを右クリックして、[すべてのタスク] > [デプロイ] を選択します。
- b** [デプロイ・ポリシー] ダイアログ・ボックスで、使用可能な管理対象ノードから SiteScope Server OM ノードを選択し、[OK] をクリックします。デプロイメント ステータスが OM コンソールの [Deployment jobs] に表示されます。
- c** ノードのポリシー詳細リストを表示するには、Nodes の下の SiteScope Server OM ノードを右クリックして、[表示] > [ポリシー詳細リスト] を選択します。
- d** ポリシー詳細リストが右ペインに表示され、ノードにデプロイされたすべてのポリシーを示します。

6 モニタ・ディスカバリ・ポリシーの手動による実行 - オプション

テストまたはデバッグのために、ディスカバリを手動で実行すると役に立ちます。これは、ポリシーが実行されている SiteScope サーバ HPOM エージェント・ノードで **ovagtrep** コマンド・ライン・ツールを使用して実行できます。これを実行するには、次のコマンドを実行します。

- a** ポリシーの実行を強制するには、次のコマンドを実行します。
`ovagtrep -run "SiteScope Discovery"`
- b** サーバへの送信を強制するには、次のコマンドを実行します。
`ovagtrep -publish`
- c** トラブルシューティングには、`%OvDataDir%\log` フォルダの `System.txt` ファイルを使用します。

7 HPOM から SiteScope ユーザ・インタフェースへのドリルダウン - オプション

また、SiteScope にドリルダウン・ツールを使用して、モニタ・ディスカバリ・ポリシーによって検出され HPOM サービス・ナビゲータに追加されたモニタまたはグループ・サービスから SiteScope ユーザ・インタフェースを開くことも可能です。

HPOM for Windows でツールを有効にする方法の詳細については、344 ページの「HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」を参照してください。

HPOM for UNIX/Linux/Solaris でツールを有効にする方法の詳細については、346 ページの「HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法」を参照してください。

8 トラブルシューティング

トラブルシューティングでは、次のファイルをチェックできます。

- ▶ **<SiteScope Server>%OvDataDir%¥log** フォルダにある **System.txt** ファイル (Linux の場合 : **<SiteScope Server>/var/opt/OV/log**)。
- ▶ エージェントが確認している検出済みインスタンスを表示するための **<SiteScope Server>%OvDataDir%¥datafiles** フォルダにある **agtrep.xml** ファイル (Linux の場合 : **<SiteScope Server>/var/opt/OV/datafile**)。
- ▶ HPOM サーバが何を受信するかを表示するための **<HPOM Server>%OvShareDir%¥server¥log¥OvSvcDiscServer.log**。

HPOM for Windows で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法

このタスクでは、HPOM for Windows 管理サーバで SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法を説明します。このツールによって、モニタ・ディスカバリ・ポリシーによって検出され、HPOM サービス・ナビゲータに追加されたモニタまたはグループ・サービスから SiteScope ユーザ・インタフェースを開けます。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 344 ページの「前提条件」
- ▶ 345 ページの「HPOM for Windows サーバへの [SiteScope にドリルダウン] ツールのインストール」
- ▶ 345 ページの「ツールを SiteScope サービスとの関連付け」
- ▶ 345 ページの「ツールの起動 (SiteScope サービスから)」
- ▶ 346 ページの「ツールの起動 (ツール・リポジトリから)」

1 前提条件

モニタ・ディスカバリ・ポリシーを HPOM の SiteScope サーバ・ノードで有効化およびデプロイする必要があります。

タスクの詳細については、338 ページの「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」を参照してください。

2 HPOM for Windows サーバへの [SiteScope にドリルダウン] ツールのインストール

- a HPOM for Windows サーバ・マシンに管理者としてログオンします。
- b `drillDownToSiteScope.vbs` ファイルを `< SiteScope ルート > %tools%\OMIntegration\DrillDownTool\ForOMW` フォルダから `%<HPOM server>%\SPI-Share\SiteScope` にコピーします。
- c SiteScope にドリルダウン・ツールを HPOM サーバにアップロードします。
 - ▶ `tls_drillDownToSIS.mof` ファイルを `< SiteScope ルート > %tools%\OMIntegration\DrillDownTool\ForOMW` フォルダから HPOM サーバ・マシン上の任意のフォルダ (`<tls path>`) にコピーします。
 - ▶ コマンド・ラインを開き、次のコマンドを実行します。

```
>> ovpmutil cfg tls upl <tls path>%tls_drillDownToSIS.mof
```
- d SiteScope にドリルダウン・ツールは、[ツール] > [SiteScope ツール] の下にある HPOM サーバで使用できます。

3 ツールを SiteScope サービスとの関連付け

- a HPOM for Windows コンソールで、サービス・タイプ設定エディタを開き、[アプリケーション サービス] > [SiteScope] を選択して、[プロパティ] をクリックします。
- b [SiteScope プロパティ] ダイアログ・ボックスで、[ツール] タブをクリックして、[SiteScope ツール] を選択し、次に [OK] をクリックします。

4 ツールの起動 (SiteScope サービスから)

- a HPOM for Windows コンソールで、表示する SiteScope サービス (SiteScope モニタ, グループ, またはサーバ・サービス) を右クリックし、[すべてのタスク] > [ツールの起動] を選択します。
- b [SiteScope にドリルダウン] ツールを選択し、[起動] をクリックします。
- c SiteScope ユーザ・インタフェースが開いて、選択されたモニタ, グループ, 標準設定のダッシュボード・ビューが表示されます (SiteScope サーバ・サービスが選択された場合)。

5 ツールの起動（ツール・リポジトリから）

- a HPOM for Windows コンソールで、[ツール] > [SiteScope ツール] を展開します。右ペインで、[SiteScope にドリルダウン] を右クリックして [すべてのタスク] > [ツールの起動] を選択します。
- b [パラメータの編集] ダイアログ・ボックスで、表示するモニタ、グループ、または SiteScope サーバ・サービスを選択し、[起動] をクリックします。
- c SiteScope ユーザ・インタフェースが開いて、選択されたモニタ、グループ、標準設定のダッシュボード・ビューが表示されます（SiteScope サーバ・サービスが選択された場合）。

HPOM for UNIX/Linux/Solaris で SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法

このタスクでは、HPOM for UNIX/Linux/Solaris 管理サーバで SiteScope にドリルダウン・ツールを有効にする方法を説明します。このツールによって、イベントから、またはモニタ・ディスカバリ・ポリシーによって検出され、HPOM サービス・ナビゲータに追加されたモニタまたはグループ・サービスから SiteScope ユーザ・インタフェースを開けます。

注：このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 347 ページの「前提条件」
- ▶ 347 ページの「HPOM for UNIX/Linux/Solaris サーバへの [SiteScope にドリルダウン] ツールのインストール」
- ▶ 348 ページの「ツールの起動 (SiteScope サービスから)」
- ▶ 348 ページの「ツールの起動 (イベントから)」

1 前提条件

モニタ・ディスカバリ・ポリシーを HPOM の SiteScope サーバ・ノードで有効化およびデプロイする必要があります。タスクの詳細については、338 ページの「SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリシーを有効にする方法」を参照してください。

2 HPOM for UNIX/Linux/Solaris サーバへの [SiteScope にドリルダウン] ツールのインストール

- a HPOM for UNIX/Linux/Solaris サーバ・マシンに管理者としてログオンします。
- b コマンド・シェルを開いて、次を入力して新しいディレクトリを作成します。
`# mkdir -p /opt/OV/newconfig/SiteScope`
- c 次を入力して SiteScope ディレクトリを変更します。
`cd /opt/OV/newconfig/SiteScope`
- d **DrillDownToSIS.tar** ファイルを < SiteScope ルート > `¥tools¥OMIntegration¥DrillDownTool¥ForOMX` フォルダから HPOM サーバ・マシン上の `/opt/OV/newconfig/SiteScope` にコピーします。
- e 次を入力して .tar ファイルを現在のディレクトリに抽出します。
`# cd /opt/OV/newconfig/SiteScope`
`# tar -xvf DrillDownToSIS.tar`
- f 次を入力して、SiteScope にドリルダウン・ツールを HPOM サーバにアップロードします。
`# cd /opt/OV/bin/OpC/# opccfgupld -replace -subentity /opt/OV/newconfig/SiteScope/ DrillDownToSIS`
- g SiteScope にドリルダウン・ツールは、[参照] > [すべてのツール グループ] の下の HPOM 管理者ユーザ・インタフェースで使用できます。

- h** [SiteScope にドリルダウン] ツールを `opc_adm` ユーザに割り当てます。
 - ▶ [アクション] > [ユーザ/プロファイルに割り当て...] をクリックします。
 - ▶ [すべてのユーザ] > [opc_adm] を選択して [OK] をクリックします。
- i** [ファイル] > [設定の再ロード] を選択して HPOM ユーザ・インタフェースを更新します。
- j** [SiteScope にドリルダウン] ツールは, [ツール] > [SiteScope にドリルダウン ツール] の下にある HPOM サーバで使用できます。

3 ツールの起動 (SiteScope サービスから)

- a** HPOM 管理者ユーザ・インタフェースで, SiteScope サービス (サーバ, グループ, またはモニタ) を右クリックして, [スタート] > [ツール] > [SiteScope にドリルダウン ツール] > [SiteScope にドリルダウン サービス] を選択し, 選択されたサービス・タイプに応じてツールを選択します。
- b** SiteScope ユーザ・インタフェースが開いて, 選択されたモニタ, グループ, または標準設定の SiteScope ダッシュボード ビューが表示されます。

4 ツールの起動 (イベントから)

- a** HPOM 管理者ユーザ・インタフェースで, イベントを右クリックして, [スタート] > [SiteScope にドリルダウン ツール] > [SiteScope にドリルダウン イベント] を選択します。
- b** SiteScope ユーザ・インタフェースが開いて, イベントを送信する選択したモニタが表示されます。

SiteScope から HP Operations Agent にメトリックスをレポートできるようにする方法

注: 本項は、SiteScope を BSM 9.00 以降の オペレーション管理 または HP Performance Manager 9.0 以降に接続するユーザのみを対象としており、HP Operations Agent を使用している場合にのみ該当します。

このタスクでは、SiteScope を使用して HPOM および BSM 管理製品にメトリックス・データをレポートする方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 349 ページの「前提条件」
- ▶ 350 ページの「HP Operations Agent の SiteScope サーバへのインストール」
- ▶ 350 ページの「SiteScope からのメトリックスの送信の有効化」
- ▶ 351 ページの「モニタ・インスタンスからのメトリックス送信の有効化」
- ▶ 351 ページの「結果」

1 前提条件

- ▶ SiteScope の管理者または「**統合プリファレンスの編集**」権限を付与されたユーザのみが、このタスクを実行する権限があります。詳細については、843 ページの「ユーザ管理プリファレンス」を参照してください。
- ▶ Performance Manager 管理者は、SiteScope インスタンスがデータをログ記録する SiteScope ノードに接続するように Performance Manager を設定する必要があります。詳細については、Performance Manager のマニュアルを参照してください。

2 HP Operations Agent の SiteScope サーバへのインストール

SiteScope のインストール中またはインストール後に、SiteScope インストール・メディアから HP Operations Agent をインストールできます。このエージェントによって、SiteScope は、SiteScope で収集されたメトリックス・データのデータ・ストレージとして機能します。

エージェントのインストールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「インストール・ウィザードを使用してインストール」を参照してください。

3 SiteScope からのメトリックスの送信の有効化

[プリファレンス] > [統合プリファレンス] で、既存の Operations Manager 統合を選択するか、[HP Operations Manager 統合] をクリックして新しい統合を作成します。[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで、[HP Operations Manager 測定値統合] 表示枠を展開し、[HP Operations Manager 測定値統合の有効化] を選択します。

注： HP Operations Manager とのメトリックス統合は、HP Operations Agent と HPOM サーバまたは BSM サーバとの接続状態に関係なく、有効化されません。これは、メトリックスがエージェントによって収集されるためです。

ユーザ・インタフェースの詳細については、780 ページの「HP Operations Manager 測定値統合」を参照してください。

4 モニタ・インスタンスからのメトリックス送信の有効化

測定値データをエージェント・データ・ストレージにレポートする各モニタ・インスタンスごとに、モニタ・プロパティの **[HP 統合設定]** を展開し、**[HP Operations Manager 統合設定]** セクションの **[HP Operations Agent へのメトリックのレポート]** を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、475 ページの「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。

ヒント : 各モニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで **[HP Operations Agent へのメトリックのレポート]** を選択することなく、すべてのメモリ、CPU、ディスク領域、Windows リソースについて測定値のレポートを有効にできます。これを実行するには、**[統合プリファレンス]** > **[HP Operations Manager 統合]** > **[HP Operations Manager 測定値統合]** 表示枠で **[特定モニタのメトリック レポートの有効化]** ボタンをクリックします。

5 結果

各モニタのメトリックスは、SiteScope ホスト・ノードのエージェントによって、時間とホストのインスタンス識別を含めたインスタンスとしてログに記録されます。メトリックス・データは HPOM および BSM によってエージェントのデータ・ストレージから収集され、レポート製品で使用できます。

測定値エラー・データは **oa_metric_integration.log** ファイルに書き込まれます。このファイルは **< SiteScope ルート・ディレクトリ > %logs** ディレクトリにあります。ログ・ファイルの使用の詳細については、1408 ページの「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

参照情報

SiteScope-Operations エージェントの測定値の整合

メトリックス名の整合は、SiteScope のメトリックス名を、Operations Manager の Performance Agent (PA) で使用される名前と対応付けるプロセスです。測定値名の整合は、次に示すよく使用される測定値で実行されています。

注： Performance Agent のメトリックスの詳細については、Performance Agent 5.0 ドキュメントの『HP Performance Agent Metric Help Viewer』(http://support.openview.hp.com/selfsolve/document/KM864772/binary/PA5_MetricHelpView.html?searchIdentifier=-65c7a852:127e60d1b54:6921&resultType=document, 英語サイト) を参照してください。HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログインする必要があります。

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
BYCPU_CPU_TOTAL_UTIL (CPU 使用率合計)	Windows : ▶ CPU モニタ : ¥utilization (cpu #1, cpu #2 など) ▶ Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Processor¥{instance}%¥ Processor Time Linux : UNIX リソース・モニタ ¥Processor¥{ インスタンス }¥System HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX : UNIX リソース・モニタ ¥Processor¥{ インスタンス }¥sys

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
BYNETIF_IN_BYTE_RATE (受信 KB 速度)	<p>Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Network Interface¥{instance}¥Bytes Received¥sec</p> <p>Linux : UNIX リソース・モニタ ¥Network Interface¥ReceiveBytes</p> <p>HP-UX : N/A</p> <p>Solaris : UNIX リソース・モニタ ¥Network Interface¥obytes</p> <p>AIX : N/A</p>
BYNETIF_OUT_BYTE_RATE (送信 KB 速度)	<p>Windows: Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Network Interface¥{instance}¥Bytes Sent¥sec</p> <p>Linux : UNIX リソース・モニタ ¥Network Interface¥TransmitBytes</p> <p>HP-UX : N/A</p> <p>Solaris : UNIX リソース・モニタ ¥Network Interface¥rbytes</p> <p>AIX : N/A</p>
BYDSK_PHYS_READ_BYTE_RATE (物理的な読み取り KB 速度)	<p>Windows: Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Physical Disk¥{instance}¥% Disk Read Bytes¥sec</p> <p>Linux : N/A</p> <p>HP-UX : N/A</p> <p>Solaris : UNIX リソース・モニタ ¥PhysicalDisk¥nread</p> <p>AIX : N/A</p>
BYDSK_PHYS_WRITE_BYTE_RATE (物理的な書き込み KB 速度)	<p>Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Physical Disk¥{instance}¥% Disk Write Bytes¥sec</p> <p>Linux : N/A</p> <p>HP-UX : N/A</p> <p>Solaris : UNIX リソース・モニタ ¥PhysicalDisk¥nwritten</p> <p>AIX : N/A</p>
BYDSK_REQUEST_QUEUE (要求キュー)	<p>Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Physical Disk¥{ インスタンス }¥Avg.Disk Queue Length</p> <p>Linux : N/A</p> <p>HP-UX : N/A</p> <p>Solaris : N/A</p> <p>AIX : N/A</p>

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
BYDSK_UTIL (ディスク %)	<p>Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Physical Disk¥{instance}¥% Disk Time</p> <p>Linux : N/A</p> <p>HP-UX : UNIX リソース・モニタ ¥Block device activity¥ <デバイス> ¥%busy</p> <p>Solaris : UNIX リソース・モニタ ¥Block device activity¥ <デバイス> ¥%busy</p> <p>AIX : UNIX リソース・モニタ ¥Block device activity¥ <デバイス> ¥%busy</p>
FS_SPACE_UTIL (容量 %)	<p>Windows : ディスク容量モニタ : ¥percent full</p> <p>Linux : ディスク容量モニタ : ¥percent full</p> <p>HP-UX : ディスク容量モニタ : ¥percent full</p> <p>Solaris : ディスク容量モニタ : ¥percent full</p> <p>AIX : ディスク容量モニタ : ¥percent full</p>
GBL_CPU_TOTAL_UTIL (CPU %)	<p>Windows :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ CPU モニタ : ¥utilization (avgas) ▶ Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Processor¥_Total¥ % Processor Time <p>Linux : UNIX リソース・モニタ ¥Processor¥Total¥System</p> <p>HP-UX : N/A</p> <p>Solaris : N/A</p> <p>AIX : UNIX リソース・モニタ ¥Processor¥Total¥%sys</p>
GBL_MEM_PAGEOUT_RATE (ページ書き出し速度)	<p>Windows:Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Memory¥Pages Output/sec</p> <p>Linux : N/A</p> <p>HP-UX : N/A</p> <p>Solaris : UNIX リソース・モニタ ¥Page-out memory and memory freeing activities¥ppgout/s</p> <p>AIX : N/A</p>

PA 測定値名 (表示名)	SiteScope 測定値名
GBL_MEM_UTIL (メモリ %)	Windows : メモリ・モニタ ¥percent used Linux : メモリ・モニタ ¥percent used HP-UX : メモリ・モニタ ¥percent used Solaris : メモリ・モニタ ¥percent used AIX : N/A
GBL_SWAP_SPACE_UTIL (スワップ %)	Windows : Microsoft Windows リソース・モニタ ¥Memory¥ % Committed Bytes In Use Linux : N/A HP-UX : N/A Solaris : N/A AIX : N/A

SiteScope-Operations Manager 測定値統合のサイズ設定の推奨事項

標準設定の SiteScope 設定によって数千のモニタを実行できるようにする時に、SiteScope-HPOM 測定値統合内に保存可能なモニタ、メトリックス、およびモニタ・タイプの最大数を計画する場合にサイズ設定は重要です。

サイズ設定は次を超えないようにしてください。

- ▶ 最大挿入率 / 分, 1000 メトリックス。
- ▶ 合計保存容量, 1 GB。
- ▶ 合計保存期間, 5 週間。

定義

以下の検証計算で使用される用語の定義は次の通りです。

- ▶ **モニタ** : HPOM Performance Manager にメトリックスをレポートするモニタ数。
- ▶ **メトリックス** : HPOM Performance Manager にレポートする上記のモニタのメトリックスの平均数。
- ▶ **頻度** : 上記のモニタがデータを統合に提供する平均頻度。

検証

特定の SiteScope モニタおよびメトリックスを選択して SiteScope-HPOM 測定値統合内に保管する時は、挿入率と保存率が推奨を超えていないことを検証する必要があります。検証には以下の数式を使用できます。

▶ **サポートされる挿入率の検証：**

$$(\text{モニタ} * \text{メトリックス}) / \text{頻度} \leq 1000 \text{ メトリックス / 分}$$

▶ **サポートされる保存期間の検証：**

$$(1000 \text{ MB}) / ((\text{モニタ} * \text{メトリックス} / \text{頻度}) * 0.07 \text{ MB}) = \text{一日の設定された保存期間 (最大保存期間, 5 週間未満でなければならない)}$$

0.07 MB は 1 日あたりの各メトリックス / 分の保管サイズです。

例

HPOM 測定値統合を使用してデータをレポートするモニタ数が 2500 であり、すべてのモニタに 4 メトリックスあり、これらのモニタの頻度は 10 分ごとで、平均メトリックス保管サイズ / 日が 0.07 MB の場合、14 日間の履歴データを保管できます。

検証の計算：

▶ **挿入率の検証：**

$$(2500 \text{ モニタ} * 4 \text{ メトリックス}) / 10 \text{ 分} = 1000 \leq 1000 \text{ メトリックス / 分}$$

▶ **保存期間の検証：**

$$1000 \text{ MB} / (((2500 * 4 \text{ メトリックス}) / 10 \text{ 分}) * 0.07 \text{ MB}) = 14.28 \text{ 日}$$

(< = 5 週間)

10

Network Node Manager i (NNMi) との連携

本章の内容

概念

- ▶ NNMi への SiteScope イベントの送信 (360 ページ)
- ▶ NNMi へのメトリックのレポート (362 ページ)

タスク

- ▶ NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法 (363 ページ)
- ▶ メトリック・データを NNMi にレポートするための SiteScope の設定方法 (366 ページ)

参照情報

- ▶ NNMi に送信される SiteScope オブジェクトの SNMP トラップ形式 (370 ページ)
- ▶ NNMi にレポートされる SiteScope モニタ・メトリック (373 ページ)
- ▶ トラブルシューティングおよび制限事項 (375 ページ)

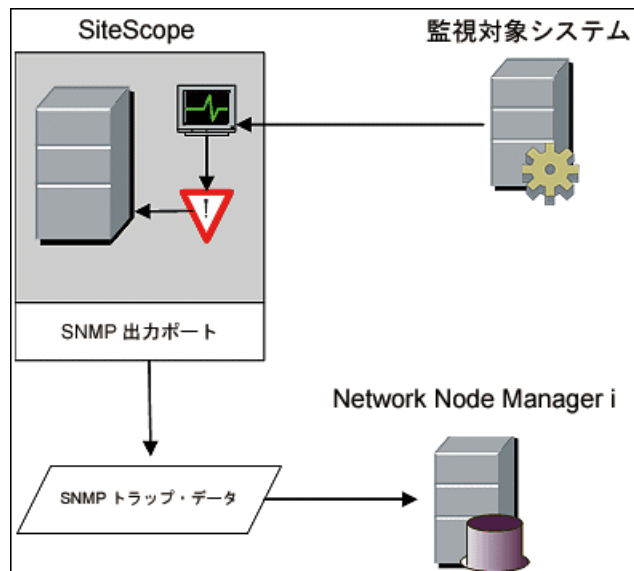
概念

NNMi への SiteScope イベントの送信

SiteScope は、ネットワークの監視に使用されるイベント・コンソール、HP Network Node Manager i (NNMi) のデータ・コレクタとして使用できます。SiteScope は NNMi が監視しているシステムのアプリケーション側を監視し、SNMP トラップ警告を使ってイベント・データをすべての種類の SiteScope モニタから NNMi に転送します。SiteScope のイベントは、SiteScope のモニタ測定値の状態の変更とトリガされた警告に基づきます。

SiteScope が SNMP トラップを NNMi に送信し、NNMi インシデントに変換されます。変換されたインシデントから、NNMi コンソール・ユーザは (NNMi サーバに送信された SNMP トラップ形式の URL を使用して) そのモニタのコンテキストで SiteScope を起動できます。NNMi サーバにメッセージを送信する SiteScope オブジェクトの特定に使用される SNMP トラップ形式の一覧については、370 ページの「NNMi に送信される SiteScope オブジェクトの SNMP トラップ形式」を参照してください。

次に、SiteScope を NNMi のイベント・データ・コレクタとして使用した図を示します。



SiteScope を有効化し NNMi にイベント・データを送信するには、SiteScope が NNMi のデータ・コレクタとして設定されている必要があります。これには、SNMP トラップのレポート先のサーバの SNMP プリファレンスを設定し、SNMP トラップ警告を作成して、NNMi にレポートするモニタに割り当てる作業も含まれます。

イベントを送信するための SiteScope の設定の詳細については、363 ページの「NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

対応バージョン

- ▶ SiteScope バージョン 11.10 以降
- ▶ NNMi バージョン 9.10 以降

対応ハードウェア・プラットフォームおよびオペレーティング・システムの最新情報については、すべての製品のサポート・マトリックスを参照してください。

NNMi へのメトリックのレポート

SiteScope は NNMi にメトリック・データもレポートできます。SiteScope を有効化しメトリックをレポートするには、一般データの統合が SiteScope サーバ上で設定されている必要があります。HP NNMi HP SiteScope システム・メトリックの統合では、SiteScope モニタによって収集されたシステム・メトリック・データを使って、NNM iSPI Performance for Metrics の Network Performance Server (NPS) を設定します。

対応バージョン

- ▶ SiteScope バージョン 11.10 以降
- ▶ NNMi バージョン 9.10 以降
- ▶ NNM iSPI Performance for Metrics バージョン 9.10 以降

対応ハードウェア・プラットフォームおよびオペレーティング・システムの最新情報については、すべての製品のサポート・マトリックスを参照してください。

サポートされている SiteScope モニタ

SiteScope がすべてのモニタ・タイプをレポートする一方で、NNMi では次の SiteScope モニタ・タイプからのデータのみを認識し、NPS で使用するよう転送します。

- ▶ CPU 使用率モニタ
- ▶ ディスク容量モニタ
- ▶ メモリ・モニタ
- ▶ Microsoft Windows リソース・モニタのプロセス監視オブジェクト
- ▶ UNIX リソース・モニタのプロセス監視オブジェクト

監視されているノードは NNMi で管理される必要があります。統合では、NNMi トポロジに存在しないノードまたは管理されていないノードのデータは破棄されます。

NNM と通信するために SiteScope を設定する方法の詳細については、366 ページの「メトリック・データを NNMi にレポートするための SiteScope の設定方法」を参照してください。

SiteScope と通信するための NNMi の設定方法の詳細については、NNMi 製品メディアに含まれる『NNMi デプロイメント リファレンス』を参照してください。

タスク

NNMi にイベント・データを送信するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、NNMi にイベント・データを送信するために SiteScope を設定する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 363 ページの「NNMi サーバに SNMP トラップをレポートするための SNMP プリファレンスの作成」
- ▶ 364 ページの「SNMP トラップ警告の作成」
- ▶ 365 ページの「結果」

1 NNMi サーバに SNMP トラップをレポートするための SNMP プリファレンスの作成

SiteScope で、[プリファレンス] > [SNMP プリファレンス] を選択し、次の設定を使用して、SNMP トラップのレポート先のサーバのプリファレンスを作成します。

- ▶ **SNMP トラップ ID**：[企業固有 SNMP トラップ ID] を選択し、[1] を入力します。
- ▶ **SNMP オブジェクト ID**：[事前設定 SNMP オブジェクト ID] を選択し、リストから [HP SiteScope イベント] を選択します。

必要に応じて、その他の SNMP トラップのフィールドを設定します。

ユーザ・インターフェースの詳細については、813 ページの「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 SNMP トラップ警告の作成

各ステータス・レベル（エラー、警告、正常、使用不能）の SNMP トラップ警告アクションで、SNMP トラップ警告を作成します。

- a SiteScope モニタ・ツリーで、[SiteScope] ルートを右クリックして、[新規作成] > [警告] と選択します。
- b [警告ターゲット] 表示枠で、グループ、モニタ、またはその両方を選択し、この警告をトリガします。ユーザ・インタフェースの詳細については、1463 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- c 各ステータス・レベル（エラー、警告、正常、使用不能）の SNMP トラップ警告アクションを作成します。
 - ▶ [警告アクション] 表示枠で、[SNMP トラップ] のアクション・タイプを選択し、SNMP トラップ警告を設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1489 ページの「SNMP トラップ警告のプロパティ」を参照してください。
 - ▶ [アクション タイプの設定] 表示枠で、[テンプレート] リストから [SiteScopeEvent.xml] を選択します。このテンプレートには、SNMP トラップがトリガされた場合に SNMP によって NNMi に送信されるメッセージの形式と内容が含まれます。このテンプレートをコピーしてカスタマイズできます。このテンプレートは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %templates.snmp にあります。
 - ▶ [状態トリガ] 表示枠で SNMP トラップの状態を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1491 ページの「[状態トリガ] 表示枠」を参照してください。
- d [状態トリガ] 表示枠で、各ステータスについて前の手順（SNMP トラップ警告アクションの作成）を繰り返します。

例：

この例は、各トリガ・ステータス（エラー、警告、正常、使用不能）の SNMP トラップ警告アクションの NNMi 警告を示しています。

一般設定

名前:

警告の説明:

警告ターゲット

警告アクション

警告アクション *

* ✎ ✖ 📄 🔍 🔗

	名前	カテゴリ	いつ	スケジュール	ターゲット
	NNMi integrati...	エラー	1回のみ: 1回	毎日、全日	NNMi - vmamrnd1 ...
	NNMi integrati...	正常	1回のみ: 1回	毎日、全日	NNMi - vmamrnd1 ...
	NNMi integrati...	警告	1回のみ: 1回	毎日、全日	NNMi - vmamrnd1 ...
	NNMi integrati...	使用不能	1回のみ: 1回	毎日、全日	NNMi - vmamrnd1 ...

3 結果

警告が SiteScope でモニタの状態の変更の結果としてトリガされる場合、この警告は SNMP トラップを NNMi サーバにレポートします。NNMi が SNMP トラップを読み取り、属性を変換し、NNMi インシデント・コンソールに SiteScope イベント・データを表示します。

NNMi インシデント・コンソールの詳細については、NNMi 製品メディアに含まれる『NNMi デプロイメント リファレンス』を参照してください。

メトリック・データを NNMi にレポートするための SiteScope の設定方法

このタスクでは、メトリック・データを NNMi にレポートするために SiteScope を設定する方法について説明します。


このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 366 ページの「NNMi サーバでの統合の有効化」
- ▶ 366 ページの「SSL を使用して NNMi と通信するための SiteScope の設定」
- ▶ 367 ページの「NNMi サーバを特定するための検索 / フィルタ・タグの作成」
- ▶ 367 ページの「SiteScope と NNMi サーバ間の接続の設定」
- ▶ 368 ページの「NNMi サーバの SiteScope レポートに關与するモニタの設定」
- ▶ 369 ページの「結果」

1 NNMi サーバでの統合の有効化


NNMi コンソールでの NNMi メトリック統合の設定方法の詳細については、NNMi 製品メディアに含まれる『NNMi デプロイメントリファレンス』の「HP NNMi HP SiteScope システム メトリックス統合」を参照してください。

2 SSL を使用して NNMi と通信するための SiteScope の設定


- a SiteScope で、[プリファレンス] > [証明書管理] と選択し、[証明書のインポート] ボタン  をクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、912 ページの「[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b [ソースの選択] で、NNMi 管理サーバを SiteScope に特定するための情報を入力します。
 - ▶ [ホスト] を選択し、NNMi 管理サーバの完全修飾ドメイン名を入力します。
 - ▶ 必要に応じて、NNMi 管理サーバの HTTPS ポートと一致するようにポート番号を変更します。
- c [読み込み] をクリックします。[読み込み済み証明書] 下に NNMi 証明書情報が表示されます。証明書の別名をメモします。

- d NNMi の証明書を選択してから、[インポート] をクリックします。インポートした証明書が [証明書管理] のキーストア・リストに一覧表示されます。

3 NNMi サーバを特定するための検索 / フィルタ・タグの作成

- a SiteScope で、[プリファレンス] > [タグの検索 / フィルタ] と選択し、[新規タグ] ボタン  をクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b タグ名 (たとえば, NNMi_upload) と少なくとも 1 つの値を入力します。

4 SiteScope と NNMi サーバ間の接続の設定

- a SiteScope で、[プリファレンス] > [統合プリファレンス] と選択します。[新規統合] ボタン  をクリックしてから [データ統合] をクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、764 ページの「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b [一般設定] で、名前 (たとえば, NNMi_receiver) と詳細 (オプション) を入力します。
- c [データ統合プリファレンス設定] には、次の設定が含まれます。
 - ▶ [受信者 URL] フィールドで、NNMi コンソールで統合を有効化した後に返される URL を貼り付けます (たとえば, `https://nnmi_server.example.com:443/ssitescope-adapter/sitescopereceiver`)。
 - ▶ [GZIP 圧縮] チェック・ボックスを選択します。
 - ▶ [追加のデータを含める] と [リダイレクトでエラー] チェック・ボックスをクリアします (これらは標準設定です)。
 - ▶ [要求された場合の認証] チェック・ボックスを選択します (これは標準設定です)。
 - ▶ [統合を無効にする] チェック・ボックスをクリアします (これは標準設定です)。
 - ▶ その他の設定については、標準設定で問題ありません。

- d [Web サーバのセキュリティ設定] で、NNMi ユーザのユーザ名とパスワードを入力します。これは、NNMi コンソール内の統合設定で指定されたものです。詳細については、NNMi 管理者に連絡してください。
- e [レポートタグ] で、手順 3 で作成した検索 / フィルタ・タグ (たとえば、NNMi_upload) を選択します。

5 NNMi サーバの SiteScope レポートに関与するモニタの設定

- a 新しいモニタを作成するか (必要に応じて) サポートされたタイプの既存のモニタを指定します。
 - ▶ CPU 使用率モニタ
 - ▶ ディスク容量モニタ
 - ▶ メモリ・モニタ
 - ▶ Microsoft Windows リソース・モニタのプロセス監視オブジェクト
 - ▶ UNIX リソース・モニタのプロセス監視オブジェクト

モニタ設定を構成します。モニタ設定の詳細、『Monitor Reference』で個々のモニタのヘルプを参照してください。

利用可能なカウンタのリストについては、373 ページの「NNMi にレポートされる SiteScope モニタ・メトリック」を参照してください。

- b 手順 3 で作成した検索 / フィルタ・タグ (たとえば、NNMi_upload) を、データを NNMi に渡すべきモニタに追加します。

統合では、NNMi トポロジで管理されたノードのデータのみを処理できません。そのため、NNMi トポロジのノード上のモニタにのみタグを適用してください。

ヒント: NNMi にデータを渡すモニタを 1 つのモニタ・グループで編成することをお勧めします。

6 結果

NNM iSPI Performance for Metrics の Network Performance Server (NPS) は、SiteScope モニタによって収集されたシステム・メトリック・データを使って設定されます。

詳細については、NNMi 製品メディアに含まれる『NNMi デプロイメント リファレンス』を参照してください。

参照情報

NNMi に送信される SiteScope オブジェクトの SNMP トラップ形式

NNMi サーバにメッセージを送信する SiteScope オブジェクトの特定に使用される SNMP トラップ形式の一覧は次のとおりです。これにより、NNMi コンソール・ユーザがこのモニタのコンテキストで SiteScope を起動できます。

SNMP トラップ形式は、**SiteScopeEvent.xml** ファイルで保存されます。このファイルは **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %templates.snmp** フォルダにあります。

フィールド名	オブジェクト ID (OID)	説明	値
エンタープライズ OID	.1.3.6.1.4.1.11.15.1	SiteScope ルートのオブジェクト ID	.1.3.6.1.4.1.11.15.1
トラップ OID	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.0	SNMP トラップのオブジェクト ID	(OID) V1 の場合： [1.3.6.1.4.1.11.15.1.4.0.1] V2 の場合： [1.3.6.1.4.1.11.15.1.4.1]
SiteScope ホスト	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.1.2	SiteScope サーバの IP アドレスまたはホスト名	(IpAddress) [16.55.244.182] または (OctetString) [sisserver.mydomain]
プロバイダ (コレクタ)	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.1.3	SiteScope アプリケーション名	(OctetString) SiteScope
モニタ名	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1.1	SiteScope モニタ名	(OctetString) [Memory monitor on myhost.mydomain]
モニタ・タイプ	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1.2	SiteScope モニタ・タイプ	(OctetString) [Memory Monitor]

フィールド名	オブジェクト ID (OID)	説明	値
モニタ ID	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1.3	モニタ固有 ID	(OctetString) [067e6162-3b6f-4ae2-a171-2470b63dff00]
セキュアなモニタ・ドリル・ダウンロード URL	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1.4	サイレント・ログイン情報なしで、警告されたモニタのコンテキストで SiteScope を起動する URL。これにより、統合インスタンス・レベルごとに統合できます。 ユーザ資格情報のドリル・ダウンロード URL を取得するには、 monitorDrilldownUrl Secured から monitorDrilldownUrl に参照値を変更します。	(OctetString) [http://sisserver:8080/SiteScope/servlet/Main?activeid=__SiteScopeRoot_&activerighttop=dashboard&view=new&dashboard_view=Details&dashboard_model=true&dashb]
モニタ・ターゲット・ホスト	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1.5	モニタ・ターゲット・ホスト	(IpAddress) [16.55.244.182] または (OctetString) [myhost.mydomain]
モニタ・ターゲット IP	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1.6	モニタ・ターゲット IP アドレス	(IpAddress) [16.55.244.182]
モニタ完全名	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.2.1.7	ルートのフル・パスを含む SiteScope モニタ名。	(OctetString) [Memory monitor on myhost.mydomain]
タイトル	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1.1	SiteScope イベント・タイトル	(OctetString) [Alert 'Memory Alert' was triggered on monitor 'Memory monitor on myhost.mydomain' due to a status change]

第 10 章 • Network Node Manager i (NNMi) との連携

フィールド名	オブジェクト ID (OID)	説明	値
イベント・ソース	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1.2	イベント (警告またはメトリック) のソース	(OctetString)
重大度	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1.3	SiteScope のイベントの重大度	(整数) [0,1,2,3] つまり [使用不能, 正常, 警告, エラー]
イベント時刻	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1.4	元のイベント時刻 (ミリ秒)	(TimeTicks) 1287316779
値	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1.5	(非警告フロー)	(OctetString) [running] または [25] または [n/a] - 警告用
イベントの詳細	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1.6	発生したイベントの詳細	(OctetString)
イベント・キー	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1.7	イベントのキー	(OctetString) [sisserver:067e6162-3b6f-4ae2-a171-2470b63dff00:Memory]
イベント終了 キー・パターン	.1.3.6.1.4.1.11.15.1.3.1.8	削除するイベントを特定するためのキー	[sisserver:067e6162-3b6f-4ae2-a171-2470b63dff00]

NNMi にレポートされる SiteScope モニタ・メトリック

NNMi サーバにレポートされる SiteScope モニタ・メトリックの一覧は次のとおりです。

モニタ	利用可能なメトリック
CPU 使用率	<ul style="list-style-type: none"> ▶ CPU 使用率 <p>注: SiteScope では、HP-UX および AIX オペレーティング・システムで収集された CPU 使用率データを、特定の CPU ごとではなく、システムの個別の平均値として配信します。これは、統合では、NNMi に平均値を送信しないので、CPU 使用率データは HP-UX および AIX オペレーティング・システムで利用できないためです。</p>
ディスク領域	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ディスクの空き領域 (MB) ▶ 使用中のディスク (%)
メモリ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ メモリ・ページ / 秒 ▶ 仮想メモリ使用 (%) ▶ 仮想メモリ空き領域 (MB) ▶ スワップ・メモリ使用 (%) ▶ スワップ・メモリ空き領域 (MB) ▶ 物理メモリ使用 (%) ▶ 物理メモリ空き領域 (MB)

モニタ	利用可能なメトリック
Microsoft Windows リソース	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Windows プロセス - 特権モード時間 (%) ▶ Windows プロセス - プロセッサ時間 (%) ▶ Windows プロセス - ユーザ時間 (%) ▶ Windows プロセス - 作成プロセス ID ▶ Windows プロセス - 経過時間 ▶ Windows プロセス - ハンドル数 ▶ Windows プロセス - ID プロセス ▶ Windows プロセス - IO データ (バイト / 秒) ▶ Windows プロセス - IO データ操作 / 秒 ▶ Windows プロセス - IO その他のデータ (バイト / 秒) ▶ Windows プロセス - IO 読み取り (バイト / 秒) ▶ Windows プロセス - IO 読み取り操作 / 秒 ▶ Windows プロセス - IO 書き込み (バイト / 秒) ▶ Windows プロセス - IO 書き込み操作 / 秒 ▶ Windows プロセス - ページ・フォルト ▶ Windows プロセス - ページ・ファイル (バイト) ▶ Windows プロセス - ページ・ファイルのピーク (バイト) ▶ Windows プロセス - プール非ページ (バイト) ▶ Windows プロセス - プール・ページ (バイト) ▶ Windows プロセス - ベースの優先度 ▶ Windows プロセス - プライベート・バイト ▶ Windows プロセス - スレッド数 ▶ Windows プロセス - 仮想バイト ▶ Windows プロセス - 仮想バイトのピーク ▶ Windows プロセス - ワーキング・セット ▶ Windows プロセス - プライベート・ワーキング・セット ▶ Windows プロセス - プライベート・ワーキング・ピーク

モニタ	利用可能なメトリック
UNIX リソース	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Unix プロセス - CPU (%) ▶ Unix プロセス - メモリ・サイズ ▶ Unix プロセス - 実行数 ▶ Unix プロセス - PID <p>注：HP-UX オペレーティング・システム上の UNIX リソース・モニタでは、SiteScope は CPU (%)，実行数，プロセス ID のみを収集します。HP-UX ノードでは、メモリ・サイズとユーザ・データは表示されません。</p>

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、SiteScope を NNMi と統合する場合のトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

▶ イベント統合のトラブルシューティング

NNMi インシデント・ビューに SiteScope モニタ警告インシデントが含まれていない場合、NNMi に SNMP トラップを送信するために、少なくとも 1 つのモニタ警告が設定されていないかどうか SiteScope で確認します。詳細については、364 ページの「SNMP トラップ警告の作成」を参照してください。

NNMi 側からの統合のトラブルシューティングについては、『NNMi デプロイメントリファレンス』の「HP NNMi HP SiteScope イベント統合のトラブルシューティング」のセクションを参照してください。

▶ メトリック統合データ・フローのトラブルシューティング

データ統合の問題に関連するメッセージを SiteScope エラー・ログ・ファイル (`data_integration.log`) で確認します。詳細については、1374 ページの「ログ・ファイルの使用」を参照してください。

NNMi 側からの統合のトラブルシューティングについては、『NNMi デプロイメントリファレンス』の「HP NNMi HP SiteScope システム メトリックス統合のトラブルシューティング」のセクションを参照してください。

第 IV 部

モ二夕

11

SiteScope グループを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope グループの概要 (380 ページ)

タスク

- ▶ グループの管理方法 (383 ページ)

参照情報

- ▶ [新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス (387 ページ)

概念

SiteScope グループの概要

グループは複数のモニタの集まりです。グループには URL モニタなどのいずれかのタイプのモニタや、特定のトランザクションに関連する Web サーバ、URL、ネットワーク・パラメータなどの Web 環境の特定の部分を追跡する複数の異なるモニタが含まれる場合があります。グループ・コンテナは、モニタのデプロイメントおよび関連する警告を自分の環境や組織で管理可能かつ効果的にするために作成します。また、同じような警告を生成する必要があるモニタのグループを作成すると便利です。

作成する各 SiteScope モニタのインスタンスは、最上位レベルのグループまたはほかのグループ・コンテナ内にネストされたサブグループのいずれかである SiteScope グループに属する必要があります。

たとえば、システムで実行されている多数のプロセスを監視する場合、それらのプロセスのすべてを「プロセス」という名前の 1 つのグループに含めることができます。リモート・モニタを使用して複数のマシンのプロセスを監視する場合は、監視する各リモート・マシンの名前を付けた複数のサブグループで「プロセス」と呼ばれるプライマリ・グループを作成できます。

新規モニタを追加するときには、既存のグループに追加するか、モニタのグループを先に作成しておく必要があります。グループは個別に SiteScope に追加できます。またはテンプレートを使用して、複数のモニタと一緒にグループをデプロイできます。テンプレートの詳細については、942 ページの「SiteScope テンプレートの概要」を参照してください。

複数のグループ・オブジェクトに対して一括操作を実行するには、モニタとグループの管理機能を使用します。この機能では、複数の SiteScope オブジェクトに対してグループ内のモニタの移動、コピー、削除、実行、モニタの有効化 / 無効化、関連付けられた警告アクションの有効化 / 無効化を実行できます。詳細については、77 ページの「[モニタとグループの管理] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：グループを使った作業では、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 381 ページの「既存のグループのコピーまたは移動」
- ▶ 382 ページの「グループの警告とレポートの作成」

既存のグループのコピーまたは移動

グループの作成に加え、既存のグループを SiteScope ツリー内の新しい場所へコピーまたは移動できます。グループをコピーまたは移動すると、グループの設定とグループ内のすべてのモニタが複製されます。通常、グループをコピーまたは移動した後に、グループおよびグループ内の各モニタの設定プロパティを編集し、モニタに一意のシステムまたはアプリケーションを指定する必要があります。指定しない場合、グループ内のモニタでは元のグループの監視アクションが複製されます。

ヒント：冗長な監視につながるグループのコピーを実行する代わりに、テンプレートを使用して共通するグループおよびモニタ設定パターンをより効率的に複製します。テンプレートを使った作業の詳細については、「SiteScope テンプレート」を参照してください。

注：

- ▶ SiteScope 内のグループ識別の問題を回避するには、オブジェクト名を親グループ内で一意にする必要があります。グループをまったく同じ名前のグループが含まれている別のグループにコピーまたは移動すると、SiteScope によって、コピーまたは移動したグループの名前の最後に自動的にサフィックス（数字）が追加されます。
 - ▶ モニタ・グループをそのサブグループに移動またはコピーすることはできません。
-

グループの警告とレポートの作成

グループを作成したら、そのグループに警告とレポートを作成できます。標準設定で、グループの警告とレポートはグループ内のすべてのモニタに関連付けられます。

警告は、グループ・コンテナに警告定義を追加して作成します。つまり、グループのいずれかのモニタで、警告に定義された状態カテゴリ（エラー、警告など）がレポートされると、グループ警告が起動されます。**[警告ターゲット]** 選択ツリーを使用して、グループ内の 1 つ以上のモニタを除外するようにグループ警告を設定できます。このトピックの詳細については、1417 ページの「SiteScope 警告の概要」を参照してください。

グループ・レポートは、グループ・コンテナにレポート定義を追加して作成します。**[レポート対象のモニタおよびグループ]** 選択ツリーを使用して、グループ内の 1 つ以上のモニタを除外するようにグループ・レポートを設定できます。このトピックの詳細については、1502 ページの「SiteScope レポートの概要」を参照してください。

グループを削除すると、SiteScope によって適用されるモニタ・アクションが削除され、グループに関連付けられている警告アクションが無効化されます。

タスク

グループの管理方法


このタスクでは、グループの管理に関連する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 384 ページの「SiteScope グループとサブグループの作成」
- ▶ 384 ページの「モニタ・インスタンスの作成」
- ▶ 385 ページの「グループの詳細に URL リンクを追加（任意指定）」
- ▶ 385 ページの「グループの依存関係の設定（任意指定）」
- ▶ 386 ページの「グループ警告の設定（任意指定）」
- ▶ 386 ページの「グループ・レポートの設定（任意指定）」
- ▶ 386 ページの「結果」

1 SiteScope グループとサブグループの作成

実装するモニタ階層に従ってグループを作成します。たとえば、場所、サーバ・タイプ、ネットワーク・リソースなどのグループを作成できます。

- ▶ **新しいグループを作成する。**グループを作成する SiteScope またはグループ・コンテナを右クリックして、**[新規作成]** > **[グループ]** を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、387 ページの「**[新規 SiteScope グループ]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ **既存のグループをコピーまたは移動してグループを作成する。**
 - ▶ コピーするグループを右クリックし、**[コピー]** をクリックします。グループ・コンテナのコピー先のモニタ・ツリー内で右クリックして、**[貼り付け]** をクリックします。
 - ▶ 移動するグループを右クリックし、**[切り取り]** をクリックします。グループ・コンテナの移動先のモニタ・ツリー内で右クリックして、**[貼り付け]** をクリックします。
 - ▶ 複数のモニタとグループをターゲット・グループに移動またはコピーするには、モニタ・ツリー・ツールバーの **[モニタとグループの管理]** ボタン  をクリックします。コピーまたは移動するオブジェクトを選択して **[コピー]** / **[切り取り]** をクリックします。宛先グループを選択して **[貼り付け]** をクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、77 ページの「**[モニタとグループの管理]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 モニタ・インスタンスの作成

グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。

タスクの詳細については、414 ページの「モニタのデプロイ方法」を参照してください。

3 グループの詳細に URL リンクを追加（任意指定）

グループの詳細情報を追加し、ハイパーリンクの HTML タグを含めると、SiteScope ダッシュボードから URL にアクセスできるようになります。

- a ハイパーリンクを追加するには、選択したグループの [プロパティ] タブを開きます。
- b [一般設定] 表示枠を展開し、[グループの詳細] フィールドに URL を入力します。例 : `My Link`。
- c [ダッシュボード] タブをクリックします。選択したグループの [詳細] フィールドに URL が表示されます。URL を開くには、グループの [詳細] フィールドをクリックしてからリンクをクリックします。

4 グループの依存関係の設定（任意指定）

グループの依存関係を設定し、このグループ内のモニタの実行を、別のモニタの状態に依存させることができます。

概念の詳細については、397 ページの「グループの依存関係の監視」を参照してください。

例 :

[依存] ボックスで選択したモニタで、[依存条件] ボックスで選択した条件がレポートされるかぎり、設定するグループ内のモニタは通常どおりに実行されます。この例では、設定するグループは、「サービス」モニタで「正常」という状態がレポートされる場合にのみ有効になります。

The screenshot shows a window titled '依存関係' (Dependencies). It contains two fields: '依存:' (Dependency) and '依存条件:' (Dependency Condition). The '依存:' field has a text input containing 'Service: HTTP on SiteScope Server' and a small icon to its right. The '依存条件:' field has a dropdown menu with '正常' (Normal) selected.

5 グループ警告の設定（任意指定）

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスに変化したときに通知を送信する警告を作成します。

グループの警告を作成するには、グループを右クリックして、**[新規作成]** > **[警告]** を選択します。各警告スキームに 1 つ以上の警告アクションを作成できます。**[新規警告]** ダイアログ・ボックスで **[新規警告アクション]** をクリックすると、**[警告アクション]** ウィザードが起動します。

タスクの詳細については、1443 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

6 グループ・レポートの設定（任意指定）

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

グループのレポートを作成するには、グループを右クリックして、**[レポート]** をクリックします。レポート・タイプを選択し、レポート設定を指定します。

タスクの詳細については、1508 ページの「レポートの作成方法」を参照してください。

7 結果

モニタ、警告、レポートを含むモニタ・グループが、モニタ・ツリーに追加されます。

参照情報

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス

[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスでは、SiteScope の新規グループ、または既存のモニタ・グループのサブグループを定義できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope コンテナまたは既存のモニタ・グループを右クリックして、[新規作成] > [グループ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ コンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、モニタは削除できません。依存関係があるモニタ・グループを削除するには、各依存関係の [警告ターゲット] と [レポートのターゲット] からモニタ・グループを削除してから、モニタ・グループを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるグループ・モニタは削除できます。 ▶ グループを使った作業では、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	383 ページの「グループの管理方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 380 ページの「SiteScope グループの概要」 ▶ 81 ページの「モニタ・ツリー」


[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスに含まれている要素は次のとおりです。

一般設定

UI 要素	説明
<p>グループ名</p>	<p>グループの内容、またはグループに追加されたモニタの目的を説明する名前。 <host_name>, <business_unitresource_name>, <resource_type> など。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ グループ名には、 sitescope または ‘ ; & < > / ¥ + = ’ のいずれかを使用できません。 ▶ グループ名では大文字と小文字が区別されます。つまり、それぞれの名前の大文字と小文字の構成が異なる場合は、同じ名前のグループを複数使用できます。
<p>グループの詳細</p>	<p>グループの詳細。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (
, <HR>, など) とハイパーリンクを含めることができます。詳細は、 SiteScope ダッシュボードでグループのプロパティを表示または編集するときのみ表示されます。ハイパーリンクの追加の詳細については、 385 ページの「グループの詳細に URL リンクを追加 (任意指定)」を参照してください。</p> <p>注： このフィールドでは、 JavaScript, iframes, frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

UI 要素	説明
ソース・テンプレート	グループがテンプレートから作成された場合、ソース・テンプレートのパスを表示する。古いバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートをデプロイして使用している場合、ソース・テンプレートのパスを入力して、ルート・グループをソース・テンプレートに手動で関連付けることができます。
クリア	ルート・グループに関連付けられているソース・テンプレートを削除する。

依存関係

UI 要素	説明
依存	<p>このモニタ・グループの実行の依存の対象とするモニタ。</p> <p>[依存] ボタン  をクリックして [依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックスを開き、依存関係を作成するモニタを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、487 ページの「[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>概念の詳細については、397 ページの「グループの依存関係の監視」を参照してください。</p> <p>標準設定: モニタ・グループに依存関係は設定されません。</p>
依存条件	<p>現在のモニタ・グループが通常どおりに実行されるために、依存の対象モニタが満たす必要のある依存条件。選択した条件が満たされない場合、[依存] ボックスで選択したモニタは自動的に無効になります。条件は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 正常 ▶ エラー ▶ 使用可能

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	<p>SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

12

SiteScope モニタを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope モニタの概要 (392 ページ)
- ▶ SiteScope モニタのカテゴリ (393 ページ)
- ▶ リモート・サーバの監視 (396 ページ)
- ▶ グループの依存関係の監視 (397 ページ)
- ▶ 状態のしきい値の設定 (400 ページ)
- ▶ ベースラインを使用した状態のしきい値の設定 (405 ページ)

タスク

- ▶ モニタのデプロイ方法 (414 ページ)
- ▶ ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法 (418 ページ)

参照情報

- ▶ モニタ・カテゴリ・リスト (428 ページ)
- ▶ Windows 環境にインストールされた SiteScope のみでサポートされているモニタ (433 ページ)
- ▶ Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ (434 ページ)
- ▶ SiteScope の監視に使用されるポート (436 ページ)
- ▶ 廃止された SiteScope モニタのリスト (442 ページ)
- ▶ SiteScope モニタのユーザ・インタフェース (443 ページ)

概念

SiteScope モニタの概要

SiteScope モニタは、エンタープライズ・ビジネス・システムで使用する多種多様なシステムおよびアプリケーションへの接続や照会を自動的に行うツールです。さまざまなモニタ・タイプがあり、システムごとに固有のアクションを実行する汎用的な機能が装備されています。1 つのモニタ・タイプのインスタンスを 1 つ以上作成し、SiteScope に IT インフラストラクチャの特定の要素をどのように監視するかを指示できます。

たとえば、100 個のモニタ・インスタンスを作成し、SiteScope CPU モニタ・タイプをリモート・サーバに接続して CPU 使用率を測定するように指示できます。各モニタ・インスタンスには、監視対象のリモート・サーバと監視頻度を定義する異なる設定が含まれます。続いて、100 台のサーバの CPU 使用率を一定間隔で自動的に監視するように SiteScope を設定します。

作成したモニタ・インスタンスは、SiteScope モニタ・グループ・コンテナ内に追加する必要があります。グループ・コンテナを使用して、作成したモニタ・インスタンスを整理できます。

注：

- ▶ 特定の SiteScope モニタのモニタ設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイドのモニタ・タイプに関する説明を参照してください。
 - ▶ SiteScope モニタに設定可能なカウンタまたはメトリックスのリストと、サポート対象のアプリケーションおよびオペレーティング・システムのバージョンについては、< SiteScope > [¥sisdocs¥pdfs¥](#) **SiteScope_Monitors_Metrics.doc** の『HP SiteScope Monitors and Metrics』を参照してください。
 - ▶ モニタの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
-

SiteScope モニタのカテゴリ

SiteScope モニタのカテゴリは、そのカテゴリの可用性と、その機能を反映したカテゴリを示すクラスに従ってグループ化されます。SiteScope エージェントに新規モニタを追加するように選択すると、製品のインタフェースにそのエージェントについて使用可能なモニタ・タイプのリストがアルファベット順に、カテゴリで分類されて表示されます。モニタのカテゴリの可用性は、モニタのクラスによって決まります。本項では、モニタのクラスとカテゴリのリスト形式について説明します。

本項の内容

- ▶ 393 ページの「標準モニタ」
- ▶ 394 ページの「統合モニタ」
- ▶ 395 ページの「ソリューション・テンプレート・モニタ」

標準モニタ

標準モニタ・カテゴリは、SiteScope の一般ライセンスで使用可能なモニタのカテゴリです。これらのモニタのカテゴリには、汎用的なモニタのカテゴリが数多く含まれています。

- ▶ **アプリケーション・モニタ**：このカテゴリのモニタは、サードパーティ・アプリケーションを監視します。SiteScope では、これらのモニタを使用して監視対象アプリケーションにアクセスし、データを取得できます。
- ▶ **データベース・モニタ**：このカテゴリのモニタは、さまざまなタイプのデータベース・アプリケーションを監視します。特定のデータベース・アプリケーションのデータにアクセスするモニタと、どのデータベース・アプリケーションの監視でも設定可能な汎用モニタがあります。
- ▶ **汎用モニタ**：このカテゴリのモニタは、異なるタイプの環境を監視します。これらのモニタは、設定に応じてネットワーク、アプリケーション、データベースを監視できます。
- ▶ **ネットワーク・モニタ**：このカテゴリのモニタは、ネットワークの状況と可用性を監視します。
- ▶ **サーバ・モニタ**：このカテゴリのモニタは、サーバの状況と可用性を監視します。

- ▶ **メディア・モニタ** : このカテゴリのモニタは、メディア・ファイルとストリーム・データを再生するアプリケーションを監視します。
- ▶ **Web トランザクション・モニタ** : このカテゴリのモニタは、Web ベースのアプリケーションを監視します。
- ▶ **仮想化モニタ** : このカテゴリのモニタは、仮想化技術を監視します。
- ▶ **仮想化とクラウド・モニタ** : このカテゴリのモニタは仮想化された環境とクラウド・インフラストラクチャを監視します。

各モニタのカテゴリに含まれるモニタのリストを確認するには、428 ページの「モニタ・カテゴリ・リスト」を参照してください。

各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイドのモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

統合モニタ

HP 製品をほかの一般的に使用されているエンタープライズ・マネジメント・システムやアプリケーションと統合するには、このモニタ・タイプ・グループ（省略可能）を使用します。

これらのモニタ・タイプには、追加のライセンスが必要です。また、ほかの HP 製品の一部としてのみ使用できます。統合モニタ機能の詳細については、521 ページの「SiteScope 統合モニタを使った作業」を参照してください。

各モニタのカテゴリに含まれるモニタのリストを確認するには、428 ページの「モニタ・カテゴリ・リスト」を参照してください。

各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイドのモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

ソリューション・テンプレート・モニタ

ソリューション・テンプレート・モニタは、特定のアプリケーションや環境向けに新しい監視機能を有効にする特殊なクラスのモニタです。これらのモニタ・タイプは、ソリューション・テンプレートの一部としてほかの標準モニタ・タイプと一緒に自動的にデプロイされ、設定のベスト・プラクティスを取り込んだ監視ソリューションを提供します。これらのモニタ・タイプは、任意指定のライセンスによって管理されます。また、追加するには該当するソリューション・テンプレートをデプロイする必要があります。デプロイ後、ほかのモニタ・タイプと同じ手順を使用して編集または削除できます。詳細については、1081 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレート」を参照してください。

次のようなモニタ・タイプでソリューション・テンプレートが使用されます。

- ▶ Active Directory (グローバル・カタログあり / なし)
- ▶ HP Service Manager
- ▶ Microsoft Exchange
- ▶ Microsoft IIS サーバ
- ▶ Microsoft Lync サーバ
- ▶ Microsoft SQL Server
- ▶ Microsoft Windows リソース
- ▶ Oracle データベース
- ▶ SAP アプリケーション・サーバ
- ▶ Siebel アプリケーション / ゲートウェイ / Web サーバ (UNIX および Windows 用)
- ▶ UNIX リソース
- ▶ VMware Host CPU/Memory/Network/State/Storage
- ▶ WebLogic アプリケーション・サーバ
- ▶ WebSphere アプリケーション・サーバ

リモート・サーバの監視

一部の SiteScope モニタでは、インターネット・プロトコルを使用して Web システムおよびアプリケーションをテストします。それ以外の SiteScope モニタでは、ネットワーク・ファイル・システム・サービスおよびコマンドを使用してリモート・サーバの情報を監視します。

リモート Windows サーバの監視には、次の条件があります。

- ▶ Windows XP/2000/2003/2008 用の SiteScope が必要です。一般に、UNIX 用の SiteScope ではリモート Windows サーバを監視できません。
- ▶ SiteScope サービスは、監視対象のリモート・サーバ上にある Windows パフォーマンス・レジストリへのアクセス権限を持つユーザ・アカウントまたは管理アカウントで実行する必要があります。SiteScope アカウント・ユーザの変更方法の詳細については、590 ページの「SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更」を参照してください。

ネットワーク・ファイル・システム・サービスを使用してリモート・サーバ上の特定のサーバ・レベル・パラメータを監視するには、リモート・サーバ・プロファイルを作成する必要があります。サーバ・プロファイルのテーブルは、リモート・サーバ・ビューの [Microsoft Windows リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバ] ページに表示されます。リモート・サーバ・プロファイルには、SiteScope がリモート接続するために必要なアドレスと接続情報が含まれています。リモート・サーバ・プロファイルを作成したら、リモート接続プロファイルを使用するようにモニタを設定します。リモート・プロファイルの作成と Windows または UNIX サーバのリモート監視の詳細については、582 ページの「リモート・サーバの概要」を参照してください。

リモート・サーバ上で実行されているサービスおよびアプリケーションを監視するための要件は、環境のアプリケーションやネットワーク・ポリシーに応じて変わります。SiteScope モニタによるリモート・システムへの接続方法の詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」および 596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

リモート・サーバの監視に関するその他の情報については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) も参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログインする必要があります。

グループの依存関係の監視

1 つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタから重複して警告が通知されるのを防ぐには、1 つのモニタを選択してシステムの基本的な可用性をチェックし、次にそのシステムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。これにより依存関係が作成され、選択したモニタの状態に応じてモニタ・グループを実行できます。

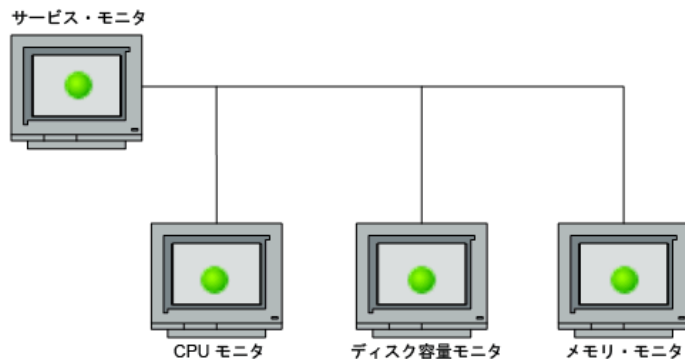
依存関係の設定の詳細については、457 ページの「依存条件」および「依存」を参照してください。

本項の内容

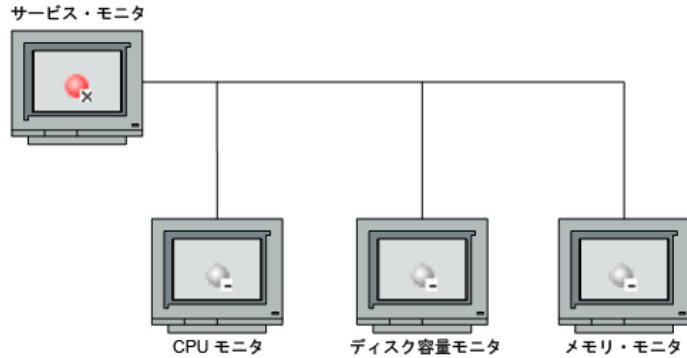
- ▶ 397 ページの「依存の対象」
- ▶ 399 ページの「依存条件」

依存の対象

別のモニタの状態に応じてモニタを実行するには、このオプションを使用します。このオプションを使用して、1 つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタから重複して警告が通知されるのを防ぐことができます。単純なシステム・モニタを 1 つ作成してシステムの基本的な可用性（システムのハートビート）をチェックし、次にそのシステムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。次の図は、3 つのシステム・モニタがサービス・モニタ・インスタンスに依存している依存関係の例を示しています。



詳細テスト・モニタをハートビート・モニタの状態に依存させるには、ハートビート・モニタを選択します。依存する側のモニタは、依存条件が満たされている場合に実行されます。ハートビート・モニタが対象システムが使用不能になったことを検出すると、依存関係によって自動的にほかのモニタが無効になります。この結果、ほかのモニタで生成されていた警告が無効になるという影響があります。次の図は、依存先のモニタがエラー条件をレポートしたためにモニタが無効になった例を示しています。



標準設定では、モニタ・インスタンスに依存関係は設定されません。別のモニタの状態に応じてモニタを実行するには、依存の対象となるモニタが含まれる SiteScope ツリーでノードを展開し、必要なモニタの横にあるチェック・ボックスを選択します。モニタの依存関係を削除するには、必要なチェック・ボックスをクリアします。

依存条件

別のモニタの状態に応じてモニタを実行するように選択した場合（**[依存]** 設定を使用）、このオプションを使用して、現在のモニタを正常に実行するために必要な **[依存]** モニタの状態カテゴリまたは条件を選択します。

次の状態カテゴリがあります。

- ▶ 正常
- ▶ エラー
- ▶ 使用可能
- ▶ 使用不能

設定対象のモニタは、**[依存]** ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。**[使用不能]** を選択して、**[依存]** のモニタがこの状態をレポートすると、現在のモニタは無効になりません。

たとえば、「**正常**」を選択すると、このモニタは **[依存]** ボックスで選択したモニタが「**正常**」状態をレポートしている場合に有効になります。**[依存]** ボックスで選択したモニタがこの設定で選択した条件以外のカテゴリまたは条件をレポートすると、現在のモニタは自動的に無効になります。**依存の対象** の設定例を参照してください。

状態のしきい値の設定

レポートされた各モニタ・インスタンスの状態を判別するロジック条件を設定するには、[しきい値の設定] セクションを使用します。状態は、対象システムに対するモニタ・アクションから返された結果または測定値と、そのモニタに設定したしきい値との比較に基づいています。

モニタ・インスタンスごとに状態のしきい値基準を設定して、**エラー状態**、**警告状態**、**正常状態**を判別できます。各状態のしきい値は、測定値パラメータ、ロジック比較演算、測定値で構成され、必要に応じて指定できます。パラメータと値はモニタ・タイプに応じて異なります。たとえば、CPU モニタの測定値パラメータは **CPU utilization (%)** です。現在のモニタ読み取りがモニタの以前の実行から大幅にそれる場合に、データ・ボラティリティを示すには、ベースラインを使用して状態のしきい値を設定します。詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。

状態の条件ごとに状態のしきい値基準を 1 つ以上設定できます。ほとんどのモニタ・タイプには、3 つの状態の条件のそれぞれについて標準設定が 1 つ含まれています。モニタの標準設定のしきい値は、最初にモニタを設定するときに表示されます。

さらに、ダイナミック (VMware ホスト) モニタでは、実際の現在のカウンタに変換されるすべての正規表現パターンのしきい値を表示できます。パターンにより、モニタは関連するダイナミック環境コンポーネントでカウンタを用いて自動的にモニタ自体を設定できます。詳細については、『Monitor Reference』の「VMware Host Monitors Overview」を参照してください。

モニタ状態のしきい値設定の詳細については、458 ページの「しきい値設定」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 401 ページの「スケジュール」
- ▶ 401 ページの「可用性」
- ▶ 401 ページの「ベースラインしきい値」
- ▶ 402 ページの「しきい値の状態の影響」
- ▶ 402 ページの「複数のしきい値」
- ▶ 403 ページの「SiteScope インジケータに割り当てられた測定値」

スケジュール

モニタの実行のしきい値に対する結果をチェックするタイミングを定義する場合、モニタ・インスタンスの状態を判別するスケジュールを選択できます。これは、モニタ実行の結果としきい値のチェックを特定の日または時間のみに制限する場合に便利です。たとえば、業務時間中に収集した結果のみに基づいたモニタの状態を必要とする場合などがあります。しきい値のスケジュール期間外の時間、モニタには**〔標準設定の状態〕**ボックスに事前定義された状態が割り当てられます。標準設定では、モニタ実行の結果は**〔毎日、全日〕**スケジュールに基づいて、しきい値に対しチェックされます。

可用性

モニタが使用可能でない場合、**〔使用不能な場合〕**ドロップダウン・リストのユーザ定義に基づいて状態が割り当てられます。モニタの状態は、**正常**、**警告**、**エラー**だけでなく、**使用不能**になることもあります。警告は、可用性または状態、あるいはその両方に従って起動されます。

ベースラインしきい値

モニタ・インスタンスごとのしきい値の設定に手動でロジック条件を設定するかわりに、SiteScope でベースラインを使用して 1 つ以上のモニタ・インスタンスのしきい値を計算することができます。このトピックの詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。

しきい値の状態の影響

状態が変化すると、イベントが通知され、モニタまたはモニタが属するグループに関連付けられた警告が起動されます。たとえば、システムが使用不能になったことをモニタが検出した場合、状態は**正常**から**エラー**に変化し、これがエラー警告への起因となります。

状態の変化はまた、モニタ間の依存関係の状態にも影響します。たとえば、**エラー**状態になる変化をモニタが検出すると、それが起因となり、そのシステムに依存するほかの 1 つ以上のモニタが無効になる場合があります。依存関係の設定の詳細については、397 ページの「グループの依存関係の監視」を参照してください。

しきい値の設定はまた、SiteScope ダッシュボードのモニタの状態にも影響します。ダッシュボードの [現在の状態] タブで SiteScope データを表示中に、モニタ・ツリーを掘り下げてモニタ、測定値の状態、可用性を表示できます。SiteScope ダッシュボードには、色付けされた状態と状態アイコンが表示されます。ダッシュボードのユーザ・インタフェースでの測定値の状態と可用性の詳細については、1302 ページの「状態および可用性のレベル」を参照してください。

複数のしきい値

3 つの設定のいずれかに複数のしきい値条件が定義されている場合、個別のしきい値基準の結果は論理 **OR** 関係として組み合わせられます。1 つの状態設定について、条件の 1 つ以上が満たされる場合（「**エラー条件**」設定に対して 2 つの条件がある場合など）、モニタの状態は対応する状態の条件に設定されます。複数の状態の条件設定について状態の条件が満たされる場合、モニタの状態は最も高い値を持つ状態の条件に設定されます。

たとえば、ある条件が「**エラー条件**」として選択され、別の条件が「**警告条件**」として選択された場合、状態は「**エラー**」としてレポートされます。これは「**エラー**」の値が最も高く、「**警告**」の値が次に高く、「**正常**」の値が最も低いからです。

SiteScope インジケータに割り当てられた測定値

SiteScope が BSM に対してデータをレポートする際に、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューがインジケータによって表示されます。インジケータの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『サービス状況』の「状況インジケータ, KPI, KPI のドメイン」を参照してください。

モニタ測定値のしきい値を設定すると、定義済みトポロジと標準設定のマッピングが存在するモニタは、その測定値状態に標準設定で割り当てられるインジケータ状態と重要度値を持つようになります。

- ▶ 各インジケータは、複数の状態を持つことができます。たとえば、CPU 負荷を測定する場合、インジケータ状態は「ボトルネック」や「ビジー」になる可能性があります。一方、メモリ負荷を測定する場合は、インジケータ状態が「ページング」や「メモリ不足」になる可能性があります。
- ▶ インジケータ重大度は、インジケータ状態に対応した重大度です。使用できるインジケータ重大度レベルは、致命的、重大、軽微、警告、正常域、および不明です。

インジケータ状態は、その測定値に関連付けられているインジケータの状態に存在する使用可能な重大度のうちの最も近い重大度に従って測定値状態に割り当てられます。選択された重大度は、SiteScope しきい値に示されます。たとえば、メモリ・モニタの使用済みパーセントを測定する場合、「エラー」しきい値内の重大度「重大」に測定値がマップされます。これは、インジケータ「メモリ負荷」には、重大度「致命的」を使用できないためです。Ping モニタの往復時間を測定する場合、「警告」しきい値内の最も近い重大度レベルは「重大」です。これは、このインジケータ状態には重大度レベル「軽微」が存在しないためです。しきい値「正常」は、常に重大度レベル「正常域」にマップされます。

インジケータ状態と重大度の関連付けは、ローカル SiteScope サーバでは変更できません。

モニタの [HP 統合設定] 表示枠で異なるインジケータ・マッピングを選択した場合、そのインジケータ状態と重大度値は [しきい値の設定] で更新されます。

注： [Indicator State and Severity] ボックスが空の場合、自動的に割り当てられる [always (default)] の場合を除き、測定値は [サービス状況] で色付けされません。

標準設定のインジケータ割り当て (マッピング) は、SAM 管理のインジケータ割り当て設定に保存されます。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。

インジケータ割り当て設定での割り当てに変更があると、SiteScope はその変更を検出し、更新された割り当てをダウンロードします。ローカル SiteScope サーバ上のインジケータ割り当てが変更された場合、これらの割り当てがインジケータ割り当て設定によって上書きされることはありません。ユーザ・インタフェースで選択した状態が標準設定値と同じ場合のインジケータ状態についても同様です。

注：

- ▶ 重複するしきい値が設定された場合 (たとえば、エラー条件 `cpu utilization > 80%` およびエラー条件 `cpu utilization > 90%`)、最も近いしきい値にマップされたインジケータ状態と重大度値が送信されます。この例では、実際の測定値が `95%` の場合、エラー条件 `cpu utilization > 90%` にマップされたインジケータ値が送信されます。これは、しきい値が数値の場合にのみ該当します。
 - ▶ インジケータ状態と重大度は、SiteScope レポートには表示されません。
-

ベースラインを使用した状態のしきい値の設定

ベースライン・データは、ある期間のモニタ・パフォーマンス・メトリックスから収集され、許容可能な、または期待するしきい値範囲を設定するための比較に使用されます。

モニタのパフォーマンスが一定の値の範囲を超えた場合（または、空きディスク容量の場合のように範囲に達しない場合）、モニタはエラーまたは警告を通知することがあります。許容可能なモニタのしきい値範囲は、現在のパフォーマンスがベースラインからどの程度離れているかによって決まります。ベースラインによって、アプリケーションの通常のパフォーマンスを把握でき、またパフォーマンスの問題が単独のインシデントなのか、重大なパフォーマンス低下傾向の兆候なのかを判別できます。

このタスクの詳細については、418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 406 ページの「ベースラインの計算」
- ▶ 406 ページの「ベースラインのアクティブ化」
- ▶ 407 ページの「注意事項および制限事項」
- ▶ 409 ページの「ベースライン順守レベルの設定」
- ▶ 409 ページの「正常な限度とエラー限度について」
- ▶ 411 ページの「ベースラインしきい値について」

ベースラインの計算

SiteScope でベースラインの計算を開始できるようにするには、ベースライン・データの収集に使用するグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。ベースラインしきい値データの収集に使用するスケジュールを選択することもできます。これにより、SiteScope がベースラインの計算のデータを収集する期間を特定の曜日や時間に限定できます。たとえば、ピーク業務時間中に収集した結果のみに基づいたモニタの状態を必要とする場合があります。

順守レベルを選択してベースラインの計算の値がしきい値に影響する範囲を決定し、すべてのモニタ測定値のしきい値の限度を設定することもできます。詳細については、409 ページの「ベースライン順守レベルの設定」および 409 ページの「正常な限度とエラー限度について」を参照してください。

ベースライン・エンジンはデータ収集期間中にモニタから収集された測定値を使用して、スケジュールごとのベースラインを計算します。SiteScope は、パーセンタイル値を使用してベースラインの値を決定するパーセンタイル・アルゴリズムをベースラインの計算に使用します。ベースラインしきい値の計算方法の詳細については、411 ページの「ベースラインしきい値について」を参照してください。

ベースラインのアクティブ化

ベースラインを計算したら、[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックスで計算したモニタのサマリを確認し、ベースライン・データを分析できます。このダイアログ・ボックスには、ベースライン計算の対象となったすべてのモニタ・インスタンス、ベースライン計算日、ベースラインしきい値が適用された場合にモニタに生成されるエラー状態および警告状態の数の減少幅が表示されます。SiteScope でモニタに対するベースラインを計算できない場合、計算が失敗した理由が表示されます。

各モニタ測定値の現在のしきい値、ベースラインしきい値、過去 24 時間におけるすべてのベースライン関連のモニタ測定値の履歴データのグラフも表示されます。グラフには注釈ツールが含まれており、表示中のグラフのスナップショットに注釈を追加して、重要な領域を強調表示できます。注釈付きのグラフは、保存、印刷、電子メールによる送信が可能です。ユーザ・インタフェースの詳細については、1550 ページの「注釈ツール」を参照してください。

ベースライン・データを確認したら、ベースラインしきい値設定をアクティブ化できます。これにより、ベースライン値が選択したモニタのしきい値に適用されます。「**データが十分ではありません。**」が理由で失敗したモニタのベースラインを、収集した限定的な測定値のサンプルを使用してアクティブ化することもできます。

ベースラインをアクティブ化した後にしきい値設定を元に戻すことはできないため、ベースラインしきい値をアクティブ化する前に、現在のモニタ設定の保存が必要かどうか検討してください。

ベースラインをアクティブ化すると、各モニタの [しきい値の設定] 領域にベースラインしきい値が表示されます。ベースライン値は、測定値に対して収集された履歴サンプルと当日の測定結果に従って毎日再計算されます。また、それに応じてベースラインしきい値が再計算、更新されます。

選択したコンテキストで、各モニタのベースラインの状態とベースラインの状態の説明を表示するベースライン・サマリ・レポートをいつでも作成できます。

注意事項および制限事項

- ▶ ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「**モニタの編集**」権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。編集権限があるかどうかに関係なく、すべてのユーザがベースラインの状態レポートを表示できます。
- ▶ ベースライン計算プロセス中は、しきい値または測定値の追加や削除、モニタのコピーや移動を行うことはできません（モニタのベースラインがアクティブ化されるまで）。
- ▶ 参照可能なモニタのベースラインをアクティブにした後でそれらのモニタに対してしきい値測定値の追加、編集、または削除を行った場合は、ベースライン・モニタとしてそのモニタの計算とアクティブ化を再度行う必要があります。
- ▶ アクティブ化されたベースラインと一緒にグループやモニタをコピーまたは移動する場合、ベースラインしきい値がほかのグループやモニタ・オブジェクトと一緒にコピーまたは移動されることはありません。
- ▶ ベースラインの削除プロセスが完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後にプロセスは続行されないため、ベースラインの削除プロセスを再度実行する必要があります。

- ▶ ベースラインの計算またはアクティブ化プロセスが完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後に自動的にプロセスが継続されます。ほかのベースラインの状態（**計算済み、アクティブでない、アクティベーションが失敗しました、計算に失敗、アクティブ化されたベースライン**）を持つモニタは、再起動による影響を受けません。
- ▶ ベースラインを計算する前に、モニタを有効にして、SiteScope がベースラインを計算するのに十分なデータを蓄積できるだけの期間、モニタを実行できるようにします。この期間は、[インフラストラクチャプリファレンス]の**[ベースライン設定に必要な最小日数]**および**[ベースライン設定に必要な最小サンプル数]**設定に応じて変わります。詳細については、733 ページの「ベースライン設定」を参照してください。モニタに十分なデータがなくてもベースラインを計算してアクティブ化できますが、計算が不正確になる可能性があります。
- ▶ 参照可能なモニタにカウンタのセットを定義し、これらのカウンタを使用してモニタを一定期間実行した後、カウンタを変更して（既存のカウンタの削除や新規カウンタの追加など）ベースラインを計算しようとする、計算結果が不正確になる可能性があります。この原因として、すでに存在しない可能性があるカウンタ用の古いデータが新しいデータと矛盾することが考えられます。モニタの作成時点から変更されていないカウンタでも、計算が不正確になる可能性があります。この問題を避けるため、ベースラインの計算に必要な最小日数の間はモニタの参照可能なカウンタを変更しないでください。
- ▶ しきい値をベースラインを使用して作成したか手動で作成したかに関係なく、しきい値関連のプロパティは**[グローバル検索と置換]**を使用して変更できます。ただし、**[グローバル検索と置換]**を使用してモニタのベースラインしきい値をアクティブ化することはできません。
- ▶ ベースラインの計算中とベースラインのアクティブ化後は、特定のベースラインしきい値の変更のみがサポートされます。**[グローバル検索と置換]**を使用してしきい値関連のプロパティを変更する場合にも、同じ制限が適用されます。許可されているしきい値の変更の詳細については、466 ページの「しきい値の設定の変更」を参照してください。
- ▶ メモリ消費量は、ベースラインを使用して設定されたモニタのしきい値ごとに増加します。メモリ消費量を削減するには、**[ベースライン設定]**で**[累積されたベースラインデータをディスクに保存する間隔]**設定を設定できます。詳細については、733 ページの「ベースライン設定」を参照してください。

ベースライン順守レベルの設定

しきい値の決定に使用するベースライン順守レベルを選択できます。これは、ベースライン計算の値がすべてのモニタ測定値のしきい値に与える影響の範囲を示します。[高]、[中]、[低]のいずれかを選択できます。順守レベルが高いほど、しきい値の範囲がモニタ測定値のベースライン値に近くなります。反対に、順守レベルが低いほど、しきい値の範囲がモニタ測定値のベースライン値から離れます。

順守レベルの選択に加え、モニタ測定値ごとに別個の順守パーセンタイルを設定して、個別のモニタ測定値の順守レベルを微調整することもできます。順守レベルは、測定値がいつエラーまたは警告になるかを決定する測定値である、順守パーセンタイルに基づきます。参照可能なモニタ測定値の場合、設定できる順守パーセンタイルは 1 セットのみで、これがすべての参照可能なモニタに使用されます。

順守レベルを手動で微調整するには、しきい値の作成方法を理解する必要があります。このトピックの詳細については、411 ページの「ベースラインしきい値について」を参照してください。

正常な限度とエラー限度について

正常な限度とエラー限度を設定すると、ベースラインしきい値の使用時に不要なエラーや警告の発生を防止するのに役立ちます。モニタ測定値ごとの正常な限度と参照可能なモニタ・カウンタを手動で設定できます。SiteScope では、モニタ測定値ごとにエラー限度が自動的に設定されます。

注：正常な限度を設定するには、ベースラインしきい値の作成方法を理解することが重要です。このトピックの詳細については、411 ページの「ベースラインしきい値について」を参照してください。

正常な限度

これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされない測定値です。たとえば、CPU 使用率が常に 3% 未満である低負荷のシステムがあるとします。これらの測定値に基づいて、SiteScope は 5% のエラーしきい値を持つベースラインしきい値を計算する可能性があります。これは CPU 負荷エラーの正確な指標ではないため、誤ったエラーの生成を避けるために正常な限度として 70% の CPU 使用率を定義することができます。CPU 使用率がこの限度を下回っているかぎり、(ベースライン・エラーしきい値を上回っていても) モニタはエラー状態になりません。

正常な限度は、[順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックスの [正常な限度] で設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、497 ページの「[順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

エラー限度

これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がない場合でも、エラー状態とみなされる測定値です。測定値がある期間にわたって徐々に増加した場合（少しずつ発生するメモリ・リークなど）に発生することがあります。ベースラインしきい値は、測定値の平均が増加するのにあわせて毎日再計算されて更新されるため、測定値が新しいしきい値を上回る（下回る）ことはありません。

この問題を解決するために、SiteScope ではモニタ測定値ごとにエラー限度が自動的に設定されます。このために、モニタ測定値が指定した値を超えるとベースラインに関係なくエラーを誘発する制限が設定されます。たとえば、SiteScope が CPU 使用率 80% のエラー限度を設定すると、計算したベースライン・エラーしきい値を超えていなくても、CPU 使用率 80% を超える値はエラー状態になります。

エラー限度の計算方法の詳細については、412 ページの「SiteScope によるエラー限度の計算方法」を参照してください。

ベースラインしきい値について

各順守レベルのベースライン計算で使用されるパーセンタイル値の微調整や、エラー限度および正常な限度の設定（詳細については、409 ページの「正常な限度とエラー限度について」を参照してください）には、次のことを理解する必要があります。

- ▶ しきい値のタイプ
- ▶ しきい値の測定値への適用方法
- ▶ ベースラインしきい値および限度の計算での測定値の使用方法

ベースラインしきい値は、ベースラインが計算される前のモニタの測定値ごとに、モニタ設定に対して動的に追加または更新されます。ベースラインしきい値は、ベースライン・データの収集用に選択したスケジュールごとに追加されます。

一般に、しきい値にはベースラインしきい値と静的しきい値の 2 タイプがあります。ベースラインしきい値には、測定値がいつエラーまたは警告状態になるかを決定するのに使用するパーセンタイル値が設定され、静的しきい値には実際の固定値が設定されます。ベースラインしきい値の測定値には、測定の方角に応じて \geq または \leq の条件があります。

ベースラインしきい値は、次の 2 つの条件が満たされた場合に測定値に対して変更、追加、削除されます。

- ▶ 測定値をベースラインの計算で使用できる。ベースラインの計算で使用するには、測定値は数値で、方向を持っている必要があります。ベースラインの計算に使用できない測定値の例として、URL 404 エラー・コードがあります（数値ですが方向がありません）。
- ▶ ベースラインの計算に先だって、測定値にスケジュールおよび状態カテゴリ（正常、警告、エラー）に定義された静的しきい値がある。

これらの条件を順守していない測定値は（測定値に定義されているしきい値という点では）影響を受けず、ベースラインはこれらの測定値に対して計算されません。

SiteScope でのしきい値の計算方法

SiteScope では、ベースラインの計算時に、各スケジュールのベースラインしきい値の測定値ごとにパーセンタイル値を作成します。SiteScope は、極端な測定値を調整するために、標準設定で最も極端なサンプルの 2% を破棄し（「ノイズ」測定値とみなされます）、残りの測定値に対してパーセンタイルを計算します。たとえば、サーバ上のほとんどのモニタ実行結果が CPU 使用率 20% 以下と 1 回だけのピーク値 50% を示している場合、このピーク値はベースラインの決定には使用されません。測定値サンプルから破棄するパーセンテージは、[ベースライン設定] で変更できます。

ベースライン・エンジンは、しきい値の計算にスライディング・ウィンドウ法を使用します。つまり、データ・サンプルが新しいほど、古いサンプルよりもベースライン計算に与える影響が大きく、一定期間が経過すると（標準設定では 30 日間）、履歴データは使用されなくなります。計算に含める日数は [ベースライン設定] で設定できます。

[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定] の設定については、733 ページの「ベースライン設定」を参照してください。

SiteScope によるエラー限度の計算方法

SiteScope では、各測定値のエラー限度の作成にパーセンタイル値を使用します。これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がない場合でも、エラー状態とみなされる測定値です。詳細については、410 ページの「エラー限度」を参照してください。

SiteScope では、次のいずれかの方法でエラー限度を計算します。

- ▶ 測定値に特定のスケジュールの静的エラーしきい値がある場合、ベースラインしきい値のパーセンタイル値が実際の値に対して計算され、この値が次のように静的しきい値の値と比較されます。
- ▶ 静的エラーしきい値がベースラインしきい値より極端な場合、静的エラーしきい値がその測定値のエラーしきい値の上限として使用されます。

例：静的エラーしきい値が 100% の CPU 使用率で、計算されたベースラインしきい値が 67% の CPU 使用率の場合、静的エラーしきい値（100% の CPU 使用率）がエラー限度として使用されます。

- ▶ ベースラインしきい値が静的エラーしきい値より極端な場合、オフセット値が使用されます。オフセットは、SiteScope によってベースラインしきい値に加算（または測定値の方向によってはベースラインしきい値から減算）されるパーセンテージの値で、結果値がその測定値のエラー限度として使用されます。オフセット値は、[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定] 領域で決定できます。

例：スケジュールの静的エラーしきい値が 60% の CPU 使用率で、計算されたベースラインしきい値が 65% の CPU 使用率の場合、エラーしきい値は次のように計算されます。

65% の CPU 使用率 * 130% (標準設定のオフセット値 0.3 を使用) = 84.5% の CPU 使用率

- ▶ ベースラインを計算する前に特定のスケジュールの測定値にエラーしきい値がなく（測定値にエラーしきい値ではなく警告しきい値または良好しきい値がある）、[ベースライン設定] で **[エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラー限度の作成を自動化する]** オプションが選択されている場合、ベースラインしきい値のパーセンタイル値が実際の値に対して計算され、オフセット値がベースラインしきい値に加算またはベースラインしきい値から減算（測定値の方向による）されます。結果値は、測定値のエラー限度として使用されます。

注：次の場合にはエラー限度は作成されません。

- ▶ ベースラインを計算する前に特定のスケジュールの測定値にエラーしきい値がない（たとえば、測定値にエラーしきい値ではなく警告しきい値または良好しきい値がある）、さらに
- ▶ **[エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラー限度の作成を自動化する]** オプションが選択されていない場合。

オフセット値の定義とエラー限度の作成の自動化の詳細については、733 ページの「ベースライン設定」を参照してください。

タスク

モニタのデプロイ方法

このタスクでは、モニタのデプロイに関する手順を説明します。

- ▶ 414 ページの「前提条件」
- ▶ 415 ページの「モニタ・インスタンスの作成」
- ▶ 417 ページの「モニタの警告の設定（任意指定）」
- ▶ 418 ページの「モニタ・レポートの設定（任意指定）」
- ▶ 418 ページの「結果」

1 前提条件

モニタを設定する前に、モニタ用に取得する必要があるセットアップ要件とユーザ権限があるかどうかを確認します。詳細については、『**Monitor Reference**』ガイドで各モニタのヘルプを参照してください。

注：

- ▶ モニタは、モニタ・ツリー内のグループで作成する必要があります。タスクの詳細については、384 ページの「SiteScope グループとサブグループの作成」を参照してください。
 - ▶ SiteScope でリモート・サーバのデータを監視するには、リモート・サーバを設定する必要があります。Windows リモート・サーバを設定する方法の詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。UNIX リモート・サーバを設定する方法の詳細については、596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
-

2 モニタ・インスタンスの作成

- a 新しいモニタ・インスタンスを作成するには、モニタ・インスタンスの追加先のグループを右クリックし、**[新規作成]** > **[モニタ]** を選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、444 ページの「**[新規モニタ]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。

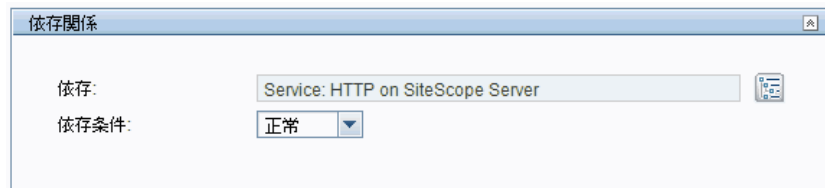
注：既存のモニタ・インスタンスをモニタ・ビュー内のグループにコピーまたは移動して、新しいモニタ・インスタンスを作成することもできます。詳細については、69 ページの「**SiteScope オブジェクトのコピーと移動**」を参照してください。

- b **[新規モニタ]** ダイアログ・ボックスから追加するモニタを選択し、そのモニタの設定を行います。モニタ設定の詳細、『**Monitor Reference**』で個々のモニタのヘルプを参照してください。

- c モニタに影響するほかのプロパティを設定できます。次に例を示します。
 - ▶ **[モニタの実行設定]** タブでは、モニタ・インスタンスに定義されたアクションの実行を SiteScope が試みる頻度を設定できます。特定の日または一定のスケジュールでモニタを実行する場合は、範囲スケジュールを設定することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、452 ページの「モニタの実行設定」を参照してください。
 - ▶ **[依存関係]** タブでは、モニタの依存関係を設定することにより、このモニタの実行をほかのモニタの状態に依存させることができます。ユーザ・インタフェースの詳細については、455 ページの「依存関係」を参照してください。

例：

設定されているモニタは、**[依存]** ボックスで選択したモニタが **[依存条件]** ボックスで選択した条件をレポートしている間は通常どおり実行されます。この例では、「サービス」のモニタが「正常」の状態をレポートした場合にのみ、設定されているモニタが有効になります。



- ▶ **[しきい値の設定]** タブでは、レポートされた各モニタ・インスタンスの状態を判別するロジック条件を手動で設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、458 ページの「しきい値設定」を参照してください。

あるいは、ベースラインを使用して 1 つ以上のモニタのしきい値を設定することもできます。タスクの詳細については、418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。

例：

次に、ディスク領域モニタのしきい値の標準設定を示します。

標準しきい値の追加 標準しきい値の削除

エラー条件

条件	オペレータ	値	スケジュール	Indicator State and Se...
percent full(default)	==	'n/a'	毎日、全日	Much Higher Than No...
percent full(default)	>	98	毎日、全日	Much Higher Than No...

警告条件

条件	オペレータ	値	スケジュール	Indicator State and Se...
percent full(default)	>	95	毎日、全日	Much Higher Than No...

良好条件

条件	オペレータ	値	スケジュール	Indicator State and Se...
always(default)				

使用中パーセントが 95 より小さいディスク領域は正常な状態です。使用中パーセントが 95 よりも大きく 98 よりも小さいディスク領域は警告状態です。使用中パーセントが 98 より大きいか「n/a」のディスク領域はエラー状態です。

- ▶ ほかの共通モニタ・プロパティの詳細については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

3 モニタの警告の設定（任意指定）

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが増減したときに通知を送信する警告を作成します。

モニタの警告を作成するには、モニタを右クリックして **[新規作成]** > **[警告]** を選択します。各警告スキームに 1 つ以上の警告アクションを作成できます。**[新規警告]** ダイアログ・ボックスで **[新規警告アクション]** をクリックすると、**[警告アクション]** ウィザードが起動します。

タスクの詳細については、1443 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

4 モニタ・レポートの設定（任意指定）

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

モニタのレポートを作成するには、モニタを右クリックして [レポート] をクリックします。レポート・タイプを選択し、レポート設定を指定します。

タスクの詳細については、1508 ページの「レポートの作成方法」を参照してください。

5 結果

[プロパティ] タブで指定した設定内容で、モニタ・ツリーのモニタ・グループにモニタが追加されます。

ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法

このタスクでは、ベースラインを使用したモニタしきい値の設定に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 419 ページの「前提条件」
- ▶ 419 ページの「ベースライン設定プリファレンスの設定（任意指定）」
- ▶ 419 ページの「ベースラインの計算」
- ▶ 422 ページの「ベースライン設定の確認」
- ▶ 423 ページの「ベースライン・モニタ測定値グラフの表示」
- ▶ 424 ページの「ベースライン設定のアクティブ化」
- ▶ 425 ページの「[ベースラインの状態レポート] でベースラインのプロパティを表示」
- ▶ 426 ページの「ベースラインしきい値の表示と変更」

1 前提条件

モニタのベースラインを計算する前に、モニタが有効になっていて、SiteScope でベースラインを計算するために必要なデータを蓄積するのに十分な長さの期間実行されていることを確認します。この期間は、[ベースライン設定] で設定したベースラインの計算に必要な日数とサンプルの最小数ごとに異なります。ユーザ・インタフェースの詳細については、733 ページの「ベースライン設定」を参照してください。

注：モニタに十分なデータがなくてもベースラインを計算してアクティブ化できますが、計算が不正確になる可能性があります。

2 ベースライン設定プリファレンスの設定（任意指定）

[インフラストラクチャプリファレンス] のグローバル SiteScope ベースライン設定の値を表示、定義できます。これには、計算とアクティブ化の優先設定、ベースライン計算に含める履歴データの日数、エラー限度の計算に使用するオフセットが含まれます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、733 ページの「ベースライン設定」を参照してください。

3 ベースラインの計算

ベースラインを計算するモニタ測定値のしきい値を定義します。

- a ベースライン設定するモニタ・インスタンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、494 ページの「ベースライン計算対象のモニタの選択」を参照してください。
- b ベースライン・データの収集に使用する 1 つ以上のスケジュール範囲を選択するか、標準設定のスケジュール（毎日、全日）を受け入れます。ユーザ・インタフェースの詳細については、494 ページの「スケジュール」を参照してください。
- c ベースライン計算の値が、すべてのモニタ測定値のしきい値にどの程度影響するかを判断するためのグローバル・ベースライン順守レベルを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、495 ページの「順守レベル」を参照してください。

d また、[**順守レベルの微調整 / 限度の設定**] ボタンをクリックして次を実行できます。

- ▶ モニタ測定値のベースライン順守レベルを個々に微調整する。
- ▶ 各モニタ測定値の正常な限度を定義する。この限度内の測定値は、既存のベースライン・パーセンタイルに応じてエラーをレポートする必要のある場合でも、エラー状態にはなりません。

ユーザ・インタフェースの詳細については、497 ページ「順守パーセンタイルの設定」を参照してください。

e [**計算**] をクリックしてベースラインしきい値の計算を実行します。

例：

[ベースラインの計算] ダイアログ・ボックスの例です。



注： ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます。

[順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックスの例。

順守レベルの微調整/限度の設定

静的カウンタ付きモニタ

リセット

モニタ名:測定値名	警告のパーセンタイル			エラーのパーセンタイル			正常な限度
	低	中	高	低	中	高	
CPU : utilizationPercentage	110	93	90	120	98	95	
メモリ : percentFull	110	93	90	120	98	95	
メモリ : freeSpace	110	93	90	120	98	95	
メモリ : pageFaultsPerSecond	110	93	90	120	98	95	
サービス : status	110	93	90	120	98	95	
サービス : running	110	93	90	120	98	95	
サービス : installed	110	93	90	120	98	95	
サービス : processCount	110	93	90	120	98	95	
サービス : serviceNameStatus	110	93	90	120	98	95	

ブラウザ可能なモニタ

リセット

モニタ名:測定値名	警告のパーセンタイル			エラーのパーセンタイル			正常な限度
	低	中	高	低	中	高	
ブラウザ可能なすべてのモニタの測定値	110	93	90	120	98	95	

保存 キャンセル Help

4 ベースライン設定の確認

[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックスで、計算されたモニタとベースライン・データのサマリを確認します。ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、499 ページの「[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：



注：ユーザ権限に応じてユーザの表示が許可されているモニタのみが表示されます。

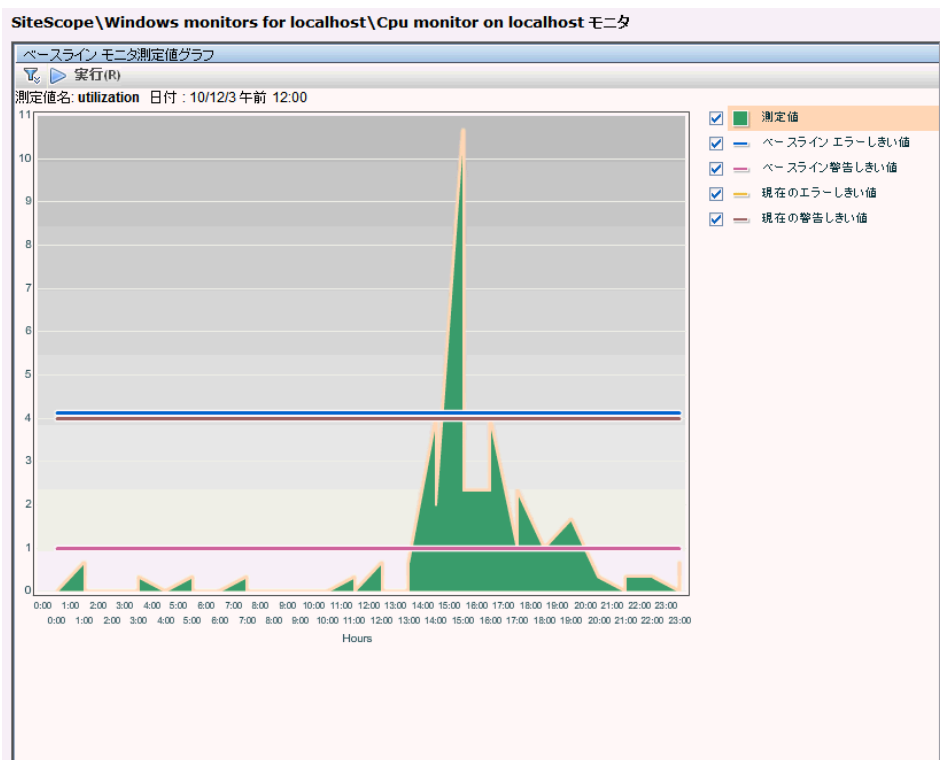
5 ベースライン・モニタ測定値グラフの表示

各モニタのベースライン処理済み測定値のグラフを表示して、選択した日のベースライン・データを分析できます。表示しているグラフのスナップショット作成に注釈ツールを使用して、重要な領域を強調表示することもできます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、504 ページの「[ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注： グラフに表示されるデータは測定値データの集計であるため、時間帯はデータが収集された時間を正確に反映していない可能性があります。

例：



6 ベースライン設定のアクティブ化

ベースラインを使用してしきい値を設定するモニタを選択し、**[アクティブ]** をクリックします。計算に成功したベースラインのすべてのモニタと、「**データが十分ではありません**」という理由で失敗したモニタ (**[アクティブ化可能]** 列で **[はい]** と表示) を選択できます。モニタしきい値はベースライン計算に応じて設定され、しきい値の設定を超えた場合に状態を変更するように設定されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、499 ページの「[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: 現在のモニタしきい値の設定に戻す場合は、ベースライン設定をアクティブ化する前に現在のモニタ設定を保存するオプションを選択します。

7 [ベースラインの状態レポート] でベースラインのプロパティを表示

選択したコンテキストの各モニタに関する情報を示す、一時的なレポートを作成できます。この情報には各モニタのベースラインの状態とベースラインの状態の詳細が含まれます。ユーザ・インタフェースの詳細については、509 ページの「ベースラインの状態レポート」を参照してください。

モニタの [ベースライン設定] で、モニタのベースラインの状態を追跡することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、485 ページの「ベースライン設定」を参照してください。

例：


ベースラインの状態レポート			
サマリ			
5 個のモニタの合計です。			
2 個のモニタにアクティブ化されたベースラインがあります。			
3 個のモニタの計算が失敗しました。			
詳細			
モニタ名	モニタタイプ	ベースラインの状態	ベースラインの状態の詳細
SiteScope\Lab monitors\C...	CPU	アクティブ化されたベースライン	
SiteScope\Lab monitors\M...	メモリ	アクティブ化されたベースライン	
SiteScope\Lab monitors\S...	サービス	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...
SiteScope\Lab monitors\Port	ポート	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...
SiteScope\Lab monitors\Di...	ディレクトリ	計算に失敗	ベースライン設定する測定値がありませ...

8 ベースラインしきい値の表示と変更

[しきい値の設定] でベースラインしきい値を表示し、しきい値が生成されたパーセンタイル値を変更することでしきい値を手動で微調整できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、458 ページの「しきい値設定」を参照してください。

例：

この例では、[エラー条件] の [percent used] しきい値が ≥ 42.81 で、[警告条件] の [percent used] しきい値が ≥ 40.77 です（これらの値は両方とも編集できません）。しきい値を変更するには、しきい値が生成されたパーセンタイル値を変更する必要があります。パーセンタイル値を変更した後の新しいしきい値を確認できるように、[パーセンタイル テーブル] ボタン  をクリックして、各パーセンタイル範囲にマップされているしきい値を表示するパーセンタイル・テーブルを開きます。

しきい値の設定 A

使用不能な場合:

標準設定の状態:

内部エラーの場合:

エラー条件

条件	オペレータ	値	スケジュール
percent used	\geq	42.81 	every day, 18:00-09:00
percent used(default)	$>$	90	毎日、全日
percent used	$=$	'n/a'	毎日、全日

警告条件

条件	オペレータ	値	スケジュール
percent used	\geq	40.77 	every day, 18:00-09:00

良好条件

条件	オペレータ	値	スケジュール
always(default)			

注： [エラー条件] の [percent used (default)] > 90 のしきい値がエラー限度です。既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートしない場合でも、この測定値の値はエラーの状態とみなされます。たとえば、ベースラインしきい値が「エラー条件」の [使用済みパーセント (%)] >= 96 に更新された場合、計算されたベースライン・エラーしきい値の 96 を超えなくても、90 よりも大きいすべての測定値がエラー状態になります。このトピックの詳細については、410 ページの「エラー限度」を参照してください。

参照情報

モニタ・カテゴリ・リスト

このセクションには、各モニタ・カテゴリの SiteScope モニタを表示します。各モニタ・タイプの使用と設定の詳細については、『Monitor Reference』ガイドのモニタ・タイプに関する説明を参照してください。

- ▶ 428 ページの「アプリケーション・モニタ」
- ▶ 430 ページの「データベース・モニタ」
- ▶ 430 ページの「汎用モニタ」
- ▶ 430 ページの「統合モニタ」
- ▶ 431 ページの「メディア・モニタ」
- ▶ 431 ページの「ネットワーク・モニタ」
- ▶ 432 ページの「サーバ・モニタ」
- ▶ 432 ページの「Web トランザクション・モニタ」
- ▶ 433 ページの「仮想化とクラウド・モニタ」

アプリケーション・モニタ

- ▶ Active Directory Replication Monitor
- ▶ Apache Server Monitor
- ▶ BroadVision Application Server Monitor
- ▶ Check Point Monitor
- ▶ Cisco Works Monitor
- ▶ Citrix Monitor
- ▶ ColdFusion Server Monitor
- ▶ COM+ Server
- ▶ F5 Big-IP Monitor

- ▶ Microsoft ASP Server Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 2003 Mailbox Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 5.5 Message Traffic Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 2000/2003/2007 Message Traffic Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 2003 Public Folder Monitor
- ▶ Microsoft IIS Server Monitor
- ▶ News Monitor
- ▶ Oracle 9i Application Server Monitor
- ▶ Oracle 10g Application Server Monitor
- ▶ Radius Monitor
- ▶ SAP CCMS Monitor
- ▶ SAP CCMS Alerts Monitor
- ▶ SAP Java Web Application Server Monitor
- ▶ SAP Performance Monitor
- ▶ SAP Work Processes Monitor
- ▶ Siebel Application Server Monitor
- ▶ Siebel Log File Monitor
- ▶ Siebel Web Server Monitor
- ▶ SunONE Web Server Monitor
- ▶ Tuxedo Monitor
- ▶ UDDI Monitor
- ▶ WebLogic Application Server Monitor
- ▶ WebSphere Application Server Monitor
- ▶ WebSphere MQ Status Monitor
- ▶ WebSphere Performance Servlet Monitor

データベース・モニタ

- ▶ DB2 8.x and 9.x Monitor
- ▶ Database Counter Monitor
- ▶ Database Query Monitor
- ▶ LDAP Monitor
- ▶ Microsoft SQL Server Monitor
- ▶ Oracle Database Monitor
- ▶ Sybase Monitor

汎用モニタ

- ▶ Composite Monitor
- ▶ Directory Monitor
- ▶ File Monitor
- ▶ JMX Monitor
- ▶ Log File Monitor
- ▶ Multi Log File Monitor
- ▶ Script Monitor
- ▶ Web Service Monitor
- ▶ XML Metrics Monitor

統合モニタ

- ▶ HP OM Event Monitor
- ▶ HP Service Manager Monitor
- ▶ NetScout Event Monitor
- ▶ Technology Database Integration Monitor
- ▶ Technology Log File Integration Monitor
- ▶ Technology SNMP Trap Integration Monitor
- ▶ Technology Web Service Integration Monitor

メディア・モニタ

- ▶ Microsoft A/V Conferencing Server Monitor
- ▶ Microsoft Archiving Server Monitor
- ▶ Microsoft Director Server Monitor
- ▶ Microsoft Edge Server Monitor
- ▶ Microsoft Front End Server Monitor
- ▶ Microsoft Mediation Server Monitor
- ▶ Microsoft Monitoring and CDR Server Monitor
- ▶ Microsoft Registrar Server Monitor
- ▶ Microsoft Windows Media Player Monitor
- ▶ Microsoft Windows Media Server Monitor
- ▶ Real Media Player Monitor
- ▶ Real Media Server Monitor

ネットワーク・モニタ

- ▶ DHCP Monitor
- ▶ DNS Monitor
- ▶ FTP Monitor
- ▶ Formula Composite Monitor
- ▶ Mail Monitor
- ▶ MAPI Monitor
- ▶ Microsoft Windows Dial-up Monitor
- ▶ Network Bandwidth Monitor
- ▶ Ping Monitor
- ▶ Port Monitor
- ▶ SNMP Monitor

- ▶ SNMP Trap Monitor
- ▶ SNMP by MIB Monitor

サーバ・モニタ

- ▶ Browsable Windows Performance Monitor
- ▶ CPU Monitor
- ▶ Disk Space Monitor
- ▶ HP iLO (Integrated Lights-Out) Monitor
- ▶ HP NonStop Event Log Monitor
- ▶ HP NonStop Resources Monitor
- ▶ IPMI Monitor
- ▶ Memory Monitor
- ▶ Microsoft Windows Event Log Monitor
- ▶ Microsoft Windows Performance Counter Monitor
- ▶ Microsoft Windows Resources Monitor
- ▶ Microsoft Windows Services State Monitor
- ▶ Service Monitor
- ▶ UNIX Resources Monitor
- ▶ Web Server Monitor

Web トランザクション・モニタ

- ▶ e-Business Transaction Monitor
- ▶ Link Check Transaction Monitor
- ▶ URL Monitor
- ▶ URL Content Monitor
- ▶ URL List Monitor
- ▶ URL Sequence Monitor
- ▶ Web Script Monitor

仮想化とクラウド・モニタ

- ▶ Amazon Web Services Monitor
- ▶ Microsoft Hyper-V Monitor
- ▶ Solaris Zones Monitor
- ▶ VMware Host CPU Monitor
- ▶ VMware Host Memory Monitor
- ▶ VMware Host Network Monitor
- ▶ VMware Host State Monitor
- ▶ VMware Host Storage Monitor
- ▶ VMware Performance Monitor

Windows 環境にインストールされた SiteScope のみでサポートされているモニタ

Windows バージョンで実行している SiteScope のみでサポートされているモニタを次に示します。関連性がある場合は、モニタは任意のプラットフォーム / オペレーティング・システムで実行中のリモート・サーバを監視できます。

- ▶ MAPI Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 2003 Mailbox Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 2003 Public Folder Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 2000/2003/2007 Message Traffic Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor
- ▶ Microsoft Exchange 5.5 Message Traffic Monitor
- ▶ Microsoft Windows Dial-up Monitor
- ▶ Microsoft Windows Media Player Monitor
- ▶ Real Media Player Monitor
- ▶ Sybase Monitor

- ▶ Tuxedo Monitor
- ▶ Web Script Monitor

Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ

データ収集に Windows Management Instrumentation (WMI) メソッドをサポートしているモニタを次に示します。WMI は、Windows サーバで実行しているリモート・サーバから管理データを収集する、NetBIOS よりも安全な通信方法です。

- ▶ Citrix Monitor
- ▶ ColdFusion Server Monitor
- ▶ CPU Monitor
- ▶ Disk Space Monitor
- ▶ Memory Monitor
- ▶ Microsoft A/V Conferencing Server Monitor
- ▶ Microsoft Archiving Server Monitor
- ▶ Microsoft ASP Server Monitor
- ▶ Microsoft Director Server Monitor
- ▶ Microsoft Edge Server Monitor
- ▶ Microsoft Front End Server Monitor
- ▶ Microsoft Hyper-V Monitor
- ▶ Microsoft IIS Server Monitor
- ▶ Microsoft Mediation Server Monitor
- ▶ Microsoft Monitoring and CDR Server Monitor
- ▶ Microsoft Registrar Server Monitor
- ▶ Microsoft SQL Server Monitor
- ▶ Microsoft Windows Event Log Monitor

- ▶ Microsoft Windows Media Server Monitor
- ▶ Microsoft Windows Resources Monitor
- ▶ Microsoft Windows Services State Monitor
- ▶ Real Media Server Monitor
- ▶ Service Monitor

リモート・マシンでの WMI の設定方法の詳細については、594 ページの「リモート監視用の WMI サービスの設定」を参照してください。

SiteScope の監視に使用されるポート

次の表に、SiteScope 監視に通常使用されるネットワーク・ポートを示します。多くの場合、環境のセキュリティ要件に応じて代替ポートを設定できます。

注：Windows APIsmay に接続する perfexSiteScope 内部アプリケーションをサポートするすべてのモニタは、その他のポートに加えてポート 135 を使用します。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Apache Server Monitor	Apache サーバ管理ページで指定されたポート。サーバ設定ファイルで変更可能。
BroadVision Application Server Monitor	監視対象の BroadVision サーバごとに、ORB (Object Request Broker) ポート番号を使用。
Check Point Monitor	SNMP モニタ。標準設定では、ポート 161。変更可能。
Cisco Works Monitor	Cisco Works のリソースは、通常、サーバの設定によってポート 161 または 162 (SNMP) よりアクセス可能。
Citrix Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
ColdFusion Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
CPU Monitor	ローカル CPU の場合、ポートは不要。 リモート・サーバの CPU の場合、Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Database Query Monitor	変更可能。ODBC または JDBC ドライバおよび DB 設定によって異なる。
DB2 8.x and 9.x Monitor	標準設定では、ポート 50000。変更可能。

モニタ・タイプ	使用されるポート
DHCP Monitor	標準設定では、ポート 68。
Directory Monitor	ローカル・ディレクトリの場合、ポートは不要。 リモート・サーバのディレクトリの場合、Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Disk Space Monitor	ローカル・ディスク領域の場合、ポートは不要。 リモート・サーバのディスク領域の場合、Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
DNS Monitor	標準設定では、ポート 53。
F5 Big-IP Monitor	SNMP を使用。変更可能。
File Monitor	ローカル・ディスク。ポートは不要。 リモート・サーバのファイルの場合、Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
FTP Monitor	標準設定では、ポート 21。変更可能。
LDAP Monitor	標準設定では、ポート 389。変更可能。
Link Check Transaction Monitor	標準設定では、ポート 80。変更可能。
Log File Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Mail Monitor	POP3 ではポート 110, SMTP ではポート 25, IMAP ではポート 143。

モニタ・タイプ	使用されるポート
MAPI Monitor	MAPI では、動的に割り当てられた 1024 より後のポートで NSPI (Name Service Provider Interface) を使用して、クライアント・ディレクトリ検索を実行します。
Memory Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS), Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Microsoft Archiving Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft A/V Conferencing Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft ASP Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Director Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Edge Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Front End Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Hyper-V Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft IIS Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Mediation Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Monitoring and CDR Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft Registrar Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS) を介しての Windows パフォーマンス・カウンタ。
Microsoft SQL Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。

モニタ・タイプ	使用されるポート
Microsoft Windows Event Log Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
Microsoft Windows Media Player Monitor	監視するメディア・コンテンツと同じポートを使用。
Microsoft Windows Media Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
Microsoft Windows Performance Counter Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
Microsoft Windows Resources Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
Network Bandwidth Monitor	ポートは不要で、ローカル・マシンのみを監視。
News Monitor	標準設定では、ポート 144。変更可能。
Oracle Database Monitor	変更可能。対象となる DB によって異なる。標準設定では、ポート 1521。
Oracle 9i Application Server Monitor/Oracle 10g Application Server Monitor	変更可能。Webcaching 管理ページで指定されたポート。
Ping Monitor	標準設定では、ポート 7。
Port Monitor	任意のポートを監視。
Radius Monitor	<p>現在、パスワード認証プロトコル (PAP) 認証をサポートするが、チャレンジ・ハンドシェイク認証プロトコル (CHAP) および Microsoft チャレンジ・ハンドシェイク認証プロトコル (MS-CHAP) はサポートしない。Radius サーバは、PAP リクエストを受け付けるように設定する必要がある。</p> <p>標準設定では、ポート 1645。Radius 仕様の最近の変更では、このポートは 1812 に変更。モニタは変更可能。</p>

モニタ・タイプ	使用されるポート
Real Media Player Monitor	SiteScope ボックスで Real Media クライアントを使用します。メディア・コンテンツのストリーミング元のポートを使用します (URL に基づいて)。
Real Media Server Monitor	ポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。
SAP CCMS Monitor	SAP クライアント・ソフトウェア (SAP Front End) を使用して、特定の SAP トランザクションを実行。そのため、SAP と同じポートを使用。
Script Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Service Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
SNMP Monitor	標準設定では、ポート 161。変更可能。
SNMP Trap Monitor	トラップの受信には、ポート 162 を使用。変更可能。
SunONE Web Server Monitor	対象 SunONE サーバの stats-xml ファイルの URL。ポートは変更可能。
Sybase Monitor	Adaptive Server Enterprise Monitor Server に接続するには、SiteScope が稼動しているマシン上に Sybase Central クライアントが必要。ポート番号は、Sybase クライアントと同じ。
Tuxedo Monitor	Tuxedo ワークステーション・リスナの標準設定では、ポート 65535。変更可能。
URL Monitor	通常は、ポート 80。変更可能。
Web Server Monitor	Windows ベースのシステムではポート 137, 138, 139 (NetBIOS)。 Solaris/Linux ベースのシステムではポート 22 (SSH), 23 (telnet), または 513 (rlogin)。
Web Service Monitor	変更可能。

モニタ・タイプ	使用されるポート
WebLogic Application Server Monitor	Oracle WebLogic アプリケーション・サーバ・モニタでは, Java JMX インタフェースを使用。ポートは変更可能。
WebSphere Application Server Monitor	IBM WebSphere 管理者のコンソールと同じポートを使用。
WebSphere Performance Servlet Monitor	WebSphere パフォーマンス・サーブレット。ポートは変更可能。

廃止された SiteScope モニタのリスト

SiteScope の最近のバージョンでは、多数のモニタが廃止されてサポートされなくなりました。次の表に、廃止されたモニタと、代わりに使用できるそれぞれのモニタ（存在する場合）を示します。

廃止されたモニタ	推奨される代替モニタ
Active Directory パフォーマンス	N/A
Asset	N/A
Astra Load Test	Web スクリプト
DB2	DB2 8.x および 9.x
Dynamo	N/A
iPlanet アプリケーション・サーバ	SunONE Web サーバ
IPlanet サーバ	SunONE Web サーバ
IPlanet Web サーバ	SunONE Web サーバ
ネットワーク	ネットワーク帯域幅
Quick Test Pro	Web スクリプト
RTSP	Real Media Player
SAP	SAP パフォーマンス
SAP Portal	SAP CCMS
SilverStream サーバ	N/A
WebLogic 5.x アプリケーション・サーバ	N/A

SiteScope をアップグレードする際に、End of Life Monitor Viewer を使用して、現在の設定に廃止されたモニタが含まれるかどうかを確認できます。End of Life Monitor Viewer の使用方法の詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「End Of Life Monitor Viewer の使用」を参照してください。

廃止されたテクノロジー統合モニタのリストについては、540 ページの「廃止された統合モニタのリスト」を参照してください。

SiteScope モニタのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [新規モニタ] ダイアログ・ボックス (444 ページ)
- ▶ 共通モニタ設定 (447 ページ)
- ▶ [依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス (487 ページ)
- ▶ [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス (488 ページ)
- ▶ [テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックス (489 ページ)
- ▶ パーセンタイル範囲マッピング・テーブル (491 ページ)
- ▶ [ベースラインの計算] ダイアログ・ボックス (493 ページ)
- ▶ [順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックス (497 ページ)
- ▶ [ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス (499 ページ)
- ▶ [設定のバックアップ] ダイアログ・ボックス (503 ページ)
- ▶ [ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス (504 ページ)
- ▶ [ベースラインの削除] ダイアログ・ボックス (508 ページ)
- ▶ ベースラインの状態レポート (509 ページ)

[新規モニタ] ダイアログ・ボックス

[新規モニタ] ダイアログ・ボックスでは、モニタ・グループで新規モニタを定義できます。


アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、グループを右クリックして [新規作成] > [モニタ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタは SiteScope グループでのみ作成できます。 ▶ モニタにコンテナ・レベルで依存する警告またはレポートがある場合、そのモニタは削除できません。依存関係があるモニタを削除するには、各依存関係の [警告ターゲット] と [レポートのターゲット] からモニタを削除してから、モニタを削除する必要があります。子レベルの依存関係があるモニタは削除できます。 ▶ [モニタの詳細] フィールドでは、
, <HR>, などの、テキスト・スタイルの最も一般的なタグとハイパーリンクを含む HTML タグ (HTML バージョン 3.2) をサポートしています。JavaScript/iframes/frames またはその他の高度な機能はサポートしていません。 ▶ モニタの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	414 ページの「モニタのデプロイ方法」
関連情報	81 ページの「モニタ・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
クイック検索	<p>[クイック検索] ボックスにモニタ名を入力します。検索に役立つ次の設定を選択できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ すべて : すべての列で一致を検索します。 ▶ モニタ : [モニタ] 列のみで一致を検索します。 ▶ カテゴリ : [カテゴリ] 列のみで一致を検索します。 ▶ 大文字小文字を区別する : 大文字小文字を区別して一致を検索します。 ▶ 大文字小文字を区別しない : 大文字小文字を区別しないで一致文字列を検索します。 ▶ ワイルドカードの使用 : 検索にワイルドカード文字を使用できます。たとえば、文字列を表すアスタリスクのワイルドカード (*), または 1 文字のみを表す疑問符のワイルドカード (?) を使用します。 ▶ 先頭から照合 : 検索テキストに一致するモニタ・カテゴリを先頭から検索します。 ▶ 完全に一致 : 検索テキストに完全に一致するモニタ・カテゴリを検索します。 ▶ 部分的に一致 : 名前の一部に検索テキストを含むモニタ・カテゴリを検索します。
最近使用されたモニタ	<p>最近選択された 5 つのモニタを表示します。選択したモニタ・タイプの新規モニタを作成するには、リンクをクリックします。</p> <p>注 : モニタを新たに選択すると、表示されるモニター一覧が変更される可能性があります。</p>

UI 要素	説明
<p>使用可能なモニタ</p>	<p>使用可能なモニタとカテゴリのリストが表示されます。</p> <p>モニタを選択して、使用可能なモニタのリストから、またはカテゴリ別にデプロイできます。カテゴリ別に選択するには、[カテゴリ]の見出しの右側にある矢印をクリックして、次に詳細を示すリストからモニタ・カテゴリを選択します。</p> <p>表示されたモニタまたはカテゴリのアルファベット順(昇順または降順)を変更するには、[モニタ]または[カテゴリ]列のヘッダにある矢印をクリックします。</p>
<p>カテゴリ</p>	<p>次のカテゴリのいずれかを選択してそのカテゴリのモニタをクリックすることで、モニタを追加できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ すべて (標準設定) ▶ アプリケーション ▶ データベース ▶ 汎用 ▶ 統合 ▶ Media ▶ ネットワーク ▶ サーバ ▶ 仮想化および Cloud ▶ Web トランザクション

 **共通モニタ設定**

共通モニタ設定を使用して、新規モニタを設定できます。

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none">▶ 新規モニタの場合：モニタ・ツリーで、グループを右クリックして [新規作成] > [モニタ] を選択し、[新規モニタ] ダイアログ・ボックスからモニタを選択します。▶ 既存のモニタの場合：モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックします。
関連タスク	414 ページの「モニタのデプロイ方法」
関連情報	81 ページの「モニタ・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
<p>< 設定表示枠 ></p>	<p>モニタの [プロパティ] タブにある次の設定表示枠は、すべてのモニタで共通です。特定の SiteScope モニタの設定の詳細については、そのモニタ・タイプのユーザ・インタフェース・ページを参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 450 ページの「一般設定」 ▶ 452 ページの「モニタの実行設定」 ▶ 455 ページの「依存関係」 ▶ 458 ページの「しきい値設定」 ▶ 467 ページの「HP 統合設定」 ▶ 480 ページの「モニタの有効化 / 無効化」 ▶ 482 ページの「関連する警告の有効化 / 無効化」 ▶ 484 ページの「タグの検索 / フィルタ」 ▶ 485 ページの「ベースライン設定」 <p>注： [モニタを CI にリンクする] 設定表示枠は SiteScope 11.00 で削除され、その機能は [HP 統合設定] 表示枠のカスタム・トポロジのレポート機能に置き換わりました。</p>
<p>検証および保存</p>	<p>設定を保存する前に、モニタ対象のローカルとリモート・サーバのモニタ設定が正しいかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、検証は失敗してエラー・メッセージが表示されます。</p> <p>ヒント： [保存] の代わりに [保存およびテスト] を使用すると、パフォーマンスはあまり速くなりません。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要があるためです。テンプレート変更適用やグローバル検索と置換などのバルク操作では、[保存] オプションのみの使用を推奨します。</p>

UI 要素	説明
保存	<p>設定のローカル検証を実行して、設定を保存します (リモート・サーバのモニタ設定が正しいかどうかは検証しません)。</p> <p>ヒント: [検証および保存] の代わりに [保存] を使用すると、パフォーマンスは速くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要がないためです。テンプレート変更適用やグローバル検索と置換などのバルク操作では、[保存] オプションのみの使用を推奨します。</p>

一般設定

[一般設定] 表示枠では、モニタ・インスタンスの名前と詳細を作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [一般設定] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	414 ページの「モニタのデプロイ方法」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	<p>監視の対象となる要素またはシステムを示す名前。ビュー・フィルタの作成とカテゴリの割り当てをより効果的にするため、すべてのモニタに有益な命名規則を使用します。</p> <p>例 : <hostname:resource_type> または <business_unit resource_name monitored_element></p> <p>標準設定値 : 監視の対象となるホスト、システム、URL に基づいた標準設定の名前、またはモニタ・タイプに対して定義された標準設定の名前が SiteScope によって作成されます。</p>

UI 要素	説明
モニタの詳細	<p>モニタを説明する追加情報。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (
, <HR>, など) を含めることができます。詳細は, SiteScope ダッシュボードでモニタのプロパティを表示または編集するときに表示されます。</p> <p>また, HTML タグを含めることにより, SiteScope ダッシュボードから URL へのアクセスも行えます。ハイパーリンクを追加するには, URL を入力します。例: <code>My Link</code>。この URL は, SiteScope ダッシュボードで選択したモニタの 【詳細】 フィールドに表示されます。</p> <p>注: このフィールドでは, JavaScript, iframes, frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは, 有効性とセキュリティがチェックされ, コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると, フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ: script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

UI 要素	説明
<p>レポートの詳細</p>	<p>モニタの動作をわかりやすくするための、このモニタの任意の詳細です。この詳細は、管理レポートの各棒グラフに表示されます。</p> <p>例：ネットワーク・トラフィックまたはメイン・サーバ応答時間。</p> <p>注：このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ：script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例：onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

モニタの実行設定

[モニタの実行設定] 表示枠では、モニタの実行を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [モニタの実行設定] を選択します。
重要な情報	すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	414 ページの「モニタのデプロイ方法」
関連情報	834 ページの「スケジュール・プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
頻度	<p>SiteScope によってモニタ・インスタンスに定義されたアクションの実行が試みられる頻度。各モニタの実行でモニタの状態が更新されます。ドロップダウン・リストを使用して、秒、分、時間、日のいずれかの増分を指定します。</p> <p>標準設定値 : 10 分</p> <p>最小値 : 15 秒</p> <p>注 : テンプレートでこの設定を指定する場合、変数の値は秒単位でのみ設定できます。</p>
エラー時頻度	<p>エラー条件をレポートしたモニタの監視間隔。</p> <p>例 : 通常は 10 分間隔でモニタを実行し、エラーが検出された場合は 2 分間隔で実行するように指定できます。モニタの状態がエラーでなくなると、モニタは [頻度] 設定で指定した実行間隔に戻ります。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ <code>monitor run frequency</code> を高くすると、モニタで生成される警告数に影響を与えます。 ▶ テンプレートでこの設定を指定する場合、変数の値は秒単位でのみ設定できます。


UI 要素	説明
<p>エラーの検証</p>	<p>エラーが検出された場合、モニタを自動的に再実行します。最初のエラーが誤った警告でなかったことを確認するために通常の実行がエラーを返した直後にモニタを実行します。エラーが再度返された場合には、モニタ実行の結果としてレポートされ、次の実行はモニタ・スケジュールに従って発生します。</p> <p>モニタがエラー状態のときにモニタ・スケジュールを変更するには、[エラー時頻度] の設定を確認します。これは特に大規模な SiteScope 環境の場合には、[エラーの検証] よりも優先され推奨される設定です。</p> <p>エラーの検証によるモニタの実行で返された状態が、エラーを検出した元のスケジュールの実行の状態を上書きします。検証の実行によるデータが最初のエラー状態と異なる場合、重要なパフォーマンス・データが失われる可能性があります。</p> <p>ヒント: このオプションは小規模な監視環境のみで使用することをお勧めします。複数のモニタが同時にエラーを検証するようにスケジュールされている場合、監視が大幅に遅くなる可能性があります。</p>
<p>モニタのスケジュール</p>	<p>特定の日または固定スケジュールでのみモニタを実行する場合の範囲スケジュール。[スケジュール プリファレンス] で作成された範囲スケジュールがドロップダウン・リストに表示されます。モニタのスケジュールの作成の詳細については、834 ページの「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p> <p>注: [しきい値の設定] でしきい値のスケジュールを選択した場合、少なくとも 1 つのしきい値のスケジュールがモニタの実行スケジュールと重なる必要があります (モニタの実行スケジュールの少なくとも 1 分がしきい値のスケジュールのいずれかに含まれている必要があります)。</p>
<p>更新時に実行結果を表示</p>	<p>モニタの設定が変更されるたびに、モニタが実行されます。モニタの実行結果がポップアップ・ダイアログ・ボックスに表示されます。</p> <p>注: 更新された実行結果は、モニタの適切な [ダッシュボード] ビューに常に表示されます。</p>

 **依存関係**

[依存関係] 表示枠では、モニタの実行を別のモニタの状態に依存させる依存関係を作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [依存関係] を選択します。
重要な情報	すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	414 ページの「モニタのデプロイ方法」
関連情報	397 ページの「グループの依存関係の監視」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>依存</p>	<p>[依存]  をクリックして [依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックスを開き、モニタの実行を依存させるモニタを選択します。[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックスの詳細については、487 ページの「[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>1 つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタからの過剰な警告を避ける場合に、このオプションを使用します。</p> <p>例：システムの基本的な可用性をチェックするシステム・モニタを作成して、システムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。基本的な可用性をチェックするモニタの状態に依存するように、詳細テスト・モニタを設定します。</p> <p>システム・モニタによって対象システムが使用不能になったことが検出されると、依存関係によってほかのモニタが自動的に無効になります。また、依存するモニタによって生成される警告も無効になります。</p> <p>標準設定値：モニタ・インスタンスに設定された依存関係はありません。</p>

UI 要素	説明
依存条件	<p>[依存] 設定を使用してモニタを別のモニタの状態に依存させた場合、このオプションを使用して、現在のモニタが通常どおりに実行されるように [依存] のモニタの状態の条件を選択します。</p> <p>次の状態カテゴリがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">▶ 正常▶ エラー▶ 使用可能▶ 使用不能 <p>設定対象のモニタは、[依存] ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。</p> <p>例： [正常] を選択して、[依存] ボックスで選択したモニタが「正常」の状態をレポートする場合にのみこのモニタが有効になるようにします。[依存] ボックスで選択したモニタが「正常」以外のカテゴリまたは条件をレポートした場合、現在のモニタは自動的に無効になります。モニタがエラーを検出した場合に依存するモニタを有効にすることもできます。</p> <p>標準設定値： 正常</p>

しきい値設定



各モニタ・インスタンスのレポートされる状態を決定する条件を設定するために使用します。状態の結果は、特定の期間中に対象システムのモニタ・アクションによって返された結果または測定値に基づきます。

各モニタ・インスタンスの状態のしきい値条件は、「**エラー条件**」、「**警告条件**」、「**良好条件**」の状態の条件に設定できます。許容可能または予測されるしきい値の範囲を構築するための比較を提供するためにベースラインを使用してモニタしきい値を設定することもできます。詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。

<p>アクセス方法</p>	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [しきい値の設定] を選択します。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタ・インスタンスごとの各状態の条件に、複数の状態のしきい値条件を適用できます。1 つのモニタ・インスタンスに、「エラー」状態を決定する 1 つ以上の条件、「警告」状態を決定する 1 つ以上の条件、「正常」状態を示す 1 つ以上の条件を設定できます。ほとんどのモニタ・タイプには、3 つの状態の条件のそれぞれについて標準設定が 1 つ含まれています。 ▶ ベースラインしきい値を設定する場合、ベースラインの計算中とベースラインがアクティブになった後に、特定のしきい値条件のみ変更できます。許可されているしきい値の変更の詳細については、466 ページの「しきい値の設定の変更」を参照してください。 ▶ [グローバル検索と置換] で作業している場合、しきい値の設定の置換を選択すると、[カテゴリの上書き] オプションが表示されます。このオプションを選択すると、選択したモニタ・インスタンスのすべてのしきい値の設定が、置換操作に入力した設定で上書きされます。このオプションがクリアされている場合にしきい値の設定の置換を選択すると、入力した設定がモニタ・インスタンスの既存のしきい値の設定に追加されます。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 400 ページの「状態のしきい値の設定」 ▶ 405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規: 「エラー」, 「警告」, 「正常」状態を決定する追加しきい値を作成します。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、測定値の値を入力します。</p> <p>標準設定では、モニタを最初に設定するときに「エラー」状態の 2 つのしきい値と、「警告」と「正常」状態の 1 つのしきい値が表示されます。</p>
	<p>削除: 選択したしきい値を削除します。</p>

UI 要素	説明
<p>使用不能な場合</p>	<p>モニタが使用不能な場合、次のオプションから状態を割り当てます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタの状態をしきい値に応じて設定：しきい値に応じてモニタの新しい状態を取得します。 ▶ モニタの状態を「正常」に設定：モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「正常」に設定されます ▶ モニタの状態を「警告」に設定：モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「警告」に設定されます。 ▶ モニタの状態を「エラー」に設定：モニタが使用不能な場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「エラー」に設定されます。 <p>注：モニタ・インスタンスには「使用不能」の状態および「正常」, 「警告」, または「エラー」の状態を設定できます。可用性, 状態, または可用性と状態の両方（警告の設定により異なる）に応じて警告が起動されます。詳細については、1417 ページの「SiteScope 警告の概要」を参照してください。</p>
<p>標準設定の状態</p>	<p>モニタ・インスタンスのしきい値条件を満たさない場合のモニタの状態（「正常」, 「警告」, または「エラー」）。</p> <p>標準設定値：正常</p>

UI 要素	説明
内部エラーの場合	<p>設定または内部エラーが発生した場合、次のオプションからモニタの状態を割り当てます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタの状態をしきい値に応じて設定：設定または内部エラーが発生した場合、モニタの状態が現在のしきい値に応じて設定されます（標準設定）。エラーがいつ発生したか（およびしきい値が古いデータ、更新されたデータ、またはその両方に基づいているかどうか）を確認する方法はないため、しきい値に依存すると信頼性が低くなります。たとえば、モニタが実行されなかった場合でも現在の状態を維持し、しきい値が不適切に定義された場合に状態が変更され、リモートが実際には接続されていない場合に使用不能として誤った警報を誘発する可能性があります。 ▶ モニタの状態を「エラー」に設定：設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「エラー」に設定されます。 ▶ モニタの状態を「警告」に設定：設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「警告」に設定されます。 ▶ モニタの状態を「正常」に設定：設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「正常」に設定されます。 ▶ モニタを利用不可として扱う：設定または内部エラーが発生した場合、しきい値を確認せずにモニタの状態が「使用不能」に扱われます。
Add Default Thresholds	<p>しきい値の標準設定を適切な状態カテゴリのモニタ・インスタンスに追加します。標準設定のしきい値は、[(default)] ラベルで示されます。標準設定のしきい値は、[条件] フィールドから条件を選択（標準設定の条件を選択できます）した後でのみ編集できます。標準設定のしきい値の条件が変更されると、[(default)] ラベルは削除されます。</p>
Remove Default Thresholds	<p>モニタ・インスタンスからしきい値の標準設定（[(default)] ラベルで示される）を削除します。追加した後に変更した標準設定は削除されません。</p>

UI 要素	説明
しきい値プレビュー	<p>[しきい値プレビュー] ダイアログ・ボックスが開き、静的カウンタおよび実際の現在のカウンタに変換される正規表現パターンのしきい値のプレビューを表示します。パターンによって、モニタは関連するダイナミック環境コンポーネントでカウンタとしきい値を用いて自動的にモニタ自体を設定できます (現在 VMware ホスト・モニタで使用できます)。</p> <p>テーブルには、パターンから変換される現在のカウンタごとに インジケータ状態および重大度 値も表示されます。</p> <p>ダイナミック・モニタの詳細については、『Monitor Reference』の「VMware Host Monitors Overview」を参照してください。</p> <p>例 : パターン <code>./*/VirtualMachine./*/cpu/usage.average¥[¥]/</code> は、現在監視対象となっている VM ごとに平均の CPU 使用しきい値の条件を表示します。</p>
エラー条件	<p>「エラー」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。</p>
条件	<p>モニタ・インスタンスの状態を決定する測定値パラメータ。測定値のリストは、設定しているモニタのタイプに基づいて動的に更新されます。</p> <p>標準設定値 : 多くのモニタ・タイプに存在し、モニタ・タイプごとに異なる標準設定の測定値。多くの標準設定の測定値の場合、対応する編集不可の演算子と値の標準設定ボックスがあります。</p>

UI 要素	説明
オペレータ	<p>モニタ・インスタンスの状態を決定する測定値の演算子。次の演算子を利用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ >= : より大きいか等しい ▶ > : より大きい ▶ == : 等しい ▶ != : 等しくない ▶ <= : より小さいか等しい ▶ < : より小さい ▶ contains : 入力した値を含む ▶ !contains : 入力した値を含まない <p>注 : 現在のモニタ読み取りが以前の実行から大幅にそれる場合に、データ・ボラティリティを示すには、ベースラインを使用して状態のしきい値を設定します。詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。</p>
値	<p>測定値パラメータに適用可能な値。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタにアクティブなベースラインがある場合、その測定値は編集不可で [パーセンタイル テーブル] ボタン  が表示されます。ベースラインしきい値を変更するには、ボタンをクリックしてパーセンタイル・テーブルで現在のパーセンタイル値を変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、491 ページの「パーセンタイル範囲マッピング・テーブル」を参照してください。 ▶ ベースラインしきい値条件の測定値、演算子、スケジュールは変更できません。

UI 要素	説明
<p>スケジュール</p>	<p>しきい値に対するモニタの実行結果を確認する時期を定義する場合の、モニタ・インスタンスの状態を決定する範囲スケジュール。たとえば、特定の日またはピーク時間のみでしきい値に対するモニタの実行結果を確認する場合に役立ちます。[スケジュール プリファレンス] で作成された範囲スケジュールがドロップダウン・リストに表示されません。モニタのスケジュールの作成の詳細については、834 ページの「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。</p> <p>標準設定値：毎日，全日</p> <p>注：しきい値のスケジュールを選択した場合，少なくとも 1 つのしきい値のスケジュールが [モニタの実行設定] の [モニタのスケジュール] と重なる必要があります (モニタの実行スケジュールの少なくとも 1 分がしきい値のスケジュールのいずれかに含まれている必要があります)。</p>

UI 要素	説明
Indicator State and Severity	<p>インジケータの状態（「ボトルネック」など）と、そのインジケータ状態に対応する重大度（「致命的」など）。</p> <p>各インジケータは、複数の状態を持つことができます。たとえば、CPU 負荷を測定する場合、インジケータ状態は「ボトルネック」や「ビジー」になる可能性があります。一方、メモリ負荷を測定する場合は、インジケータ状態が「ページング」や「メモリ不足」になる可能性があります。</p> <p>インジケータ状態と重大度レベルは、その測定値に関連付けられているインジケータの状態に存在する使用可能な重大度のうちの最も近い重大度に従って測定値状態にマップされます。インジケータ状態と重大度値は、[HP 統合設定] 表示枠で異なるインジケータ・マッピングが選択された場合に更新されます。</p> <p>インジケータ・マッピングの詳細については、403 ページの「SiteScope インジケータに割り当てられた測定値」を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [Indicator State and Severity] カラムを表示するためには、SiteScope を BSM 9.00 以降に接続する必要があります。 ▶ インジケータ状態と重大度値は、SiteScope レポートには表示されません。 ▶ [Indicator State and Severity] ボックスが空の場合、自動的に割り当てられる [always (default)] の場合を除き、測定値は [サービス状況] で色付けされません。 ▶ ダイナミック・モニタの現在のカウンタごとに [Indicator State and Severity] 値を表示するには（これらは正規表現パターンから変換された実際のカウンタ）、[しきい値プレビュー] ボタンをクリックします。インジケータ状態および重大度値は [しきい値プレビュー] ダイアログ・ボックスの実際のカウンタごとに表示されます。 ▶ インジケータ状態と重大度の関連付けは、ローカル SiteScope サーバでは変更できません。

UI 要素	説明
警告条件	「警告」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、測定値の値を入力します。
良好条件	「正常」状態をレポートするモニタ・インスタンスの条件。各しきい値に対して測定値と演算子を選択し、測定値の値を入力します。

しきい値の設定の変更

モニタ・インスタンスのベースラインの状態に応じて、しきい値条件を変更できます。

モニタのベースラインの状態	しきい値条件の変更	しきい値条件の追加 / 削除
ベースライン未処理	任意のしきい値の条件を変更できます。	可能
計算プロセス / アクティブ化プロセス中	静的しきい値の測定値のみ変更できます。 たとえば、エラー条件 CPU >= 70 毎日、全日の場合、70 の値のみを別の値に変更できます。	不可
ベースライン処理済み	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 静的しきい値の条件を変更できます。 ▶ ベースラインしきい値のみのパーセンタイル値を変更できます。 	静的しきい値のみ可能

HP 統合設定

[HP 統合設定] 表示枠では、SiteScope と統合されたアプリケーションにモニタが転送するデータを制御できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で、[プロパティ] タブをクリックして [HP 統合設定] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。 ▶ [HP 統合設定] パネルが表示されるのは、SiteScope が BSM と統合されているか、あるいは SiteScope が HP Operations Manager (HPOM) と統合されてイベントまたは測定値の統合が有効に設定されている場合だけです。 ▶ カスタム・トポロジを使用できるのは、SiteScope がバージョン 9.00 以降の BSM に接続されている場合だけです。 ▶ インジケータ設定が行えるのは、SiteScope がバージョン 9.00 以降の BSM または HPOM に接続されている場合だけです。 ▶ HP Operations Manager の統合設定が行えるのは、OM 統合が設定され、SiteScope が HPOM に接続されている場合だけです。OM 統合の設定の詳細については、774 ページの「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 288 ページの「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」
関連情報	739 ページの「統合プリファレンス」

BSM 統合データとトポロジ設定

このセクションでは、モニタ・インスタンスの BSM ログ記録オプションとトポロジ・レポート設定を選択できます。

重要な情報

- ▶ BSM ログ記録オプションを使用できるのは、BSM 統合が有効に設定されている場合だけです。
- ▶ BSM 9.10 にアップグレード後に、ステータスの変更をレポートするように設定されたモニタはこれ以上に BSM の サービス状況 に影響しません (システム・モニタ・ビューを除く)。これが発生するのは、測定値 - インジケータ・マッピングと関連しないモニタごとにステータス変更イベントのサンプルが送信されるためです。サービス状況 でステータス変更イベントのサンプルを使用している場合には、次を実行してください。
 - ▶ これらのイベントの SLM がいない場合メトリック・レポートに切り替えます。
 - ▶ サービス状況 と SLM の両方がステータス変更イベントのサンプルに使用されている場合には、ステータス変更イベントのサンプルに加えて SiteScope 11.x へのアップグレードとイベント・レポートへの切り替えを推奨します。
- ▶ BSM でイベント管理が導入されたため、**【状態の変更をレポート】** オプションが削除されました。このオプションは、`master.config` ファイルでプロパティ `_allowToSendOnlyMonitorStatusToBSM9` を `=true` に変更することで後方互換性を有効にできます。
- ▶ BSM ログ記録の選択は、このモニタの BSM へのレポートに関連するデータの量と、BSM データベースでこのデータに使用できる領域に基づいて行う必要があります。
- ▶ トポロジー報告に関するトラブルシューティングの問題については、SiteScope ヘルプの『Best Practices for the SiteScope-Business Service Management/Operations Manager Integration』の「Business Service Management Topology Issues」を参照してください。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 288 ページの「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」 ▶ 298 ページの「トポロジ・レポートの設定方法」
関連情報	739 ページの「統合プリファレンス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
BSM ログ記録オプション	
BSM へのメトリックのレポートを無効にする	このモニタの状態情報または測定値が BSM に転送されることを防ぐか、BSM へのモニタのレポートを一時的に無効にします。
モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする	モニタを実行するたびにすべての監視データを BSM に送信します。このオプションは最大のデータ転送読み込みを可能にします。 標準設定値 ：選択されている
モニタの状態のレポートを有効にする（メトリックなし）	モニタを実行するたびに、モニタ・カテゴリ（「 エラー 」、「 警告 」、「 正常 」）、状態の文字列、およびその他の基本的なデータのみを送信します。特定のパフォーマンス・カウンタでの情報は含まれません。 注 ：このオプションがサポートされるのは、サービス状況ではなく、レガシ SLM との後方互換性に対してのみです。
モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする	モニタ・カテゴリ（「 エラー 」、「 警告 」、「 正常 」）、状態の文字列、およびしきい値（「 エラー条件 」、「 警告条件 」、「 良好条件 」など）が設定された測定値カウンタのみのパフォーマンス・カウンタ・データを送信します。データはモニタを実行するたびに送信されます。

UI 要素	説明
トポロジ設定	
<p>モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート</p>	<p>SiteScope はモニタおよび関連 CI のトポロジ・データを BSM の RTSM (Run-time Service Model) にレポートします。SiteScope から転送されるデータは、モニタ・タイプによって異なります。このオプションを使用すると、SiteScope で次のことが行えます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ サポートされる環境のグループからアプリケーションを監視するモニタのトポロジを検出し、特定の CI データを転送します。サポートされる環境の詳細およびリストについては、282 ページの「検出されたトポロジの BSM へのレポート」を参照してください。 ▶ ホストを監視するモニタのノード CI データをレポートします (SiteScope は各監視対象ホストの Computer CI タイプを送信する)。このオプションが選択されている場合、モニタでは BSM の RTSM に CI としてホストを含めるトポロジが作成されます。 ▶ ユーザ定義の CI タイプとキー属性値に基づいて CI データをレポートします。 <p>クリアされると、モニタおよび関連 CI のトポロジ・データは BSM (およびインジケータ設定) にレポートされません。SiteScope から RTSM にデータをレポートする方法の詳細については、273 ページの「SiteScope データと BSM の構成アイテムとの統合」を参照してください。</p> <p>注： SiteScope が BSM に接続された状態で (イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有しており)、イベント送信が有効になっていると、ホストはオペレーション管理経由で BSM にレポートされます。</p> <p>標準設定値：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ サポートされる環境のモニタ、および標準設定で CI タイプが定義されるモニタの場合に選択されています。 ▶ 標準設定でトポロジが定義されていないモニタの場合には選択されていません。これらのモニタのリストについては、302 ページの「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。

UI 要素	説明
CI タイプ	<p>BSM の RTSM にデータをレポートするために使用される、モニタのトポロジ。このモニタ・インスタンスと BSM の RTSM 内の既存の論理構成アイテム・タイプ (CIT) をリンクできます。このリンク (関係) により、モニタでは KPI 状態をリンク先の CI に渡せます。</p> <p>CI タイプは次のことを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Default (<CI type>) : モニタの標準設定の CI タイプ (ほとんどのモニタでは、標準設定の CI タイプは Computer)。標準設定の CI タイプが Computer でないモニタのリストについては、283 ページの「サポート対象環境」を参照してください。 <p>CI タイプには、BusinessApplication, BusinessService, DB2, InfrastructureService, JBoss AS, Node, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, Unix, WebLogic AS, WebSphere AS, Windows があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Default (Multiple) : モニタに複数の CI があります (これは CI タイプが測定値ごとに存在する場合)。これらのモニタの CI タイプは固定されていて変更できません。これらのモニタのリストについては、303 ページの「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」を参照してください。 ▶ None : モニタ・インスタンスが CI タイプにリンクしていません。これらのモニタのリストについては、302 ページの「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。RTSM ビューから CI タイプを選択し、このモニタ・インスタンスにリンクできます。ビューの選択およびビューを使った作業の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリにある『Modeling』の「Working with the CI Selector」を参照してください。 <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ この設定がアクティブになるのは、[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート] が選択されている場合だけです。 ▶ CI タイプを選択すると、インジケータ設定テーブルがフィルタされ、選択した CI タイプにのみ存在するマッピングが表示されます。






UI 要素	説明
<p><CI タイプのキー属性></p>	<p>モニタ・インスタンスに選択した CI タイプに従って、CI タイプのキー属性が表示されます。選択した CI タイプのキー属性値を入力します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ サーバ: 選択した CI のコンテナ CI。この属性は、DB2, JBoss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, WebLogic AS, WebSphere AS, および Windows CI タイプに必要です。 ▶ 名前: <ul style="list-style-type: none"> ▶ CI の名前 (BusinessApplication, BusinessService, Computer, DB2, InfrastructureService, JBoss AS, Oracle, Oracle iAS, SQL Server, Sybase, WebLogic AS, および WebSphere AS CI タイプ用)。 ▶ 組織タイプ: 組織内のレベルを識別するために使用される識別子。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。 ▶ 組織名: 組織の名前。この属性は、BusinessApplication, BusinessService, および InfrastructureService CI タイプに必要です。 <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ この設定がアクティブになるのは、[モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート] が選択されている場合だけです。 ▶ CI キー属性は、CI タイプが測定値ごとのモニタの場合は表示されません。これらのモニタのリストについては、303 ページの「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」を参照してください。

インジケータ設定

このセクションには、SiteScope モニタ・タイプの測定値と、その測定値の割り当て先である状況インジケータ (HI) およびイベント・タイプ・インジケータ (ETI) が表示されます。インジケータは、モニタのトポロジが BSM の RTSM にレポートされるときに、構成アイテム (CI) の状況の詳細ビューを提供します。インジケータ設定テーブルはフィルタされ、選択した CI タイプのみに存在するモニタ・インスタンスのマッピングが表示されます。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ インジケータ設定が使用できるのは HP Operations Manager イベント統合または BSM 統合が有効な場合に限定されます。そして <ul style="list-style-type: none"> ▶ [モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート] 設定が [BSM 統合データとトポロジ設定] で選択されている。 ▶ モニタに標準設定の測定値とインジケータのマッピングがある。標準設定のインジケータ・マッピングを持たないモニタのリストについては、302 ページの「初期設定でトポロジ・データをレポートしないモニタ」を参照してください。 ▶ CI タイプが測定値ごとの場合、インジケータ設定の追加と削除は行えません (Default (Multiple))。これらのモニタのリストについては、303 ページの「測定値ごとに CI をレポートするモニタ」を参照してください。 ▶ SiteScope 内のインジケータ割り当てテーブルには、BSM 内のインジケータ割り当てリポジトリには存在しない割り当てが含まれることがあります。これは BSM 内で不正に定義されたマッピングは、SiteScope にダウンロードされる際に検証されないためです (一方 BSM では検証される。したがって表示はされない)。 ▶ CI およびインジケータ に関する十分な知識がある上級ユーザ以外は、インジケータのマッピングの編集や、測定値へのマッピングの追加は行わないでください。 ▶ インジケータ・マッピング・テーブルのいずれかの設定を修正すると、これを示す注がテーブルの下に表示されます。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 298 ページの「トポロジ・レポートの設定方法」
関連情報	<p>279 ページの「SiteScope メトリックスのインジケータへの割り当て」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

	<p>新規: モニタ・タイプに基づいて、モニタ・インスタンスに測定値とインジケータのマッピングを追加できます。</p>
	<p>削除: 選択されている測定値とインジケータのマッピングを削除します。</p>
	<p>標準設定にセット: モニタ・タイプの測定値とインジケータ・マッピングを、現在のバージョンの SiteScope に含まれている標準設定のマッピングにリセットします。インジケータ・マッピングは、BSM のシステム可用性管理 (SAM) の中央リポジトリに格納されます。SiteScope では、SAM でマッピングが変更されていないかを 5 分ごとにチェックし、変更されている場合は最新のマッピングをダウンロードします。</p> <p>ローカル SiteScope サーバ上でインジケータ・マッピングが変更された場合、これらのマッピングは、トポロジが次回 BSM にレポートされるときに、中央管理されているマッピングによって上書きされません。</p> <p>中央管理されているマッピングの変更の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリにある『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。</p>
	<p>下へ移動: 選択したインジケータ・マッピングをリスト内で下方向へ移動することにより、インジケータ・マッピングの並べ替え順序を変更できます。マッピングの順序をローカルに変更する場合は、SAM 管理内のインジケータ・リポジトリからマッピング変更がダウンロードされる際にローカルのマッピング順序が上書きされることはありません。</p>
	<p>上へ移動: 選択したインジケータ・マッピングをリスト内で上方向へ移動することにより、インジケータ・マッピングの並べ替え順序を変更できます。マッピングの順序をローカルに変更する場合は、SAM 管理内のインジケータ・リポジトリからマッピング変更がダウンロードされる際にローカルのマッピング順序が上書きされることはありません。</p>

測定値パターン	測定値名に基づいて正規表現パターンを表示します。既存のマッピングを変更、または新規作成できます。同じ正規表現に複数の CI タイプが存在する場合は、別々の行にそれらが表示されます。正規表現の使用の詳細については、235 ページの「正規表現の使用」を参照してください。
CI タイプ	モニタ・インスタンスに選択した CI タイプを表示します (インジケータ設定テーブルがフィルタされ、選択した CI タイプにのみ存在するマッピングが表示される)。 注: このフィールドは編集できません。
インジケータ	測定値のインジケータ・マッピングを表示します。ドロップダウン・リスト内で、状況インジケータは区分線の上に表示され、イベント・タイプ・インジケータは区分線の下に表示されます。

HP Operations Manager 統合設定

このセクションでは、HP Operations Agent にイベントを送信し、測定値をレポートするように SiteScope を設定できます。イベントを HPOM と BSM のオペレーション管理 に送信する、またメトリクスを HP Performance Manager (HPOM のレポート・コンポーネント) および オペレーション管理 に送信するにはエージェントが必要です。モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・プリファレンス・マッピングも選択できます。

重要な情報	これらの設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて HPOM サーバに接続されており、かつイベント / 測定値統合が [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」 ▶ 349 ページの「SiteScope から HP Operations Agent にメトリクスをレポートできるようにする方法」 ▶ 820 ページの「共通イベント・マッピングの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 739 ページの「統合プリファレンス」 ▶ 817 ページの「共通イベント・マッピング」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

<p>HP Operations Agent へのメトリックのレポート</p>	<p>HPOM および オペレーション管理 (BSM の) がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope からモニタ・インスタンスの測定値をレポートできます。</p> <p>注: モニタ測定値がエージェントに送信されるのは、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで測定値統合が有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、780 ページの「HP Operations Manager 測定値統合」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 測定値統合が有効になっている場合、選択済み (有効でない場合、この設定は行えません)。</p>
<p>イベント送信</p>	<p>モニタ・インスタンスのカウンタ / 測定値の状態 (正常, 警告, エラー, 使用不能) に変更があった場合に HPOM または オペレーション管理 (BSM の) へのイベント送信を有効にします。状態の変更は、モニタのしきい値の設定で指定されているカウンタまたは測定値にのみ適用されます。</p> <p>注: この設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて HPOM または BSM サーバに接続されており、かつイベント統合が [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、775 ページの「HP Operations Manager 統合のメイン設定」を参照してください。</p> <p>標準設定値: イベント統合が有効になっている場合、選択済み (有効でない場合、この設定は行えません)。</p>

<p>イベント・マッピング</p>	<p>モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・マッピング・テンプレート。このテンプレートには、SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値のマッピングが含まれます。</p> <p>必要なイベント・マッピング・テンプレートを選択するか、標準設定のマッピングを使用します。[新規] または [編集] をクリックして [共通イベント マッピング] ダイアログ・ボックスを開き、新しいイベント・プリファレンスを設定するか、既存のイベント・プリファレンスを変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、824 ページの「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ この設定が行えるのは、HP Operations Agent がインストールされて HPOM または BSM サーバに接続されており、かつイベント統合が [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスで有効に設定されている場合だけです。ユーザ・インタフェースの詳細については、775 ページの「HP Operations Manager 統合のメイン設定」を参照してください。 ▶ ここでイベント・マッピングを編集すると、このテンプレートを使用しているすべてのモニタのイベント・パターンが変更されます。特定のモニタによって別の属性をレポートするためには、新しいイベント・マッピングを作成することをお勧めします。
<p>最初のイベントを手動で送信</p>	<p>BSM に接続されている SiteScope で新しいモニタを作成すると、BSM にトポロジがレポートされる前に最初のイベントが起動される可能性があります。この際、このイベントはサービス状況 パースペクティブから消失します（オペレーション管理 には引き続き表示されている）。このオプションは、次のイベントが送信されるのを待機するのを避ける場合に選択してください。モニタの測定値がその状態変更条件を満たしていても、イベントは次のモニタ実行時に再送信されます。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ このオプションは、モニタの実行後、自動的に無効になります。 ▶ この設定は、[グローバル検索と置換] を使用してグローバルに行えます。

BSM サービス状況プリファレンス

このセクションによって、SiteScope イベントとメトリックスの両方が BSM にレポートされるときに BSM の サービス状況 に影響を与えるプリファレンスを設定できます。

<p>重要な情報</p>	<p>この設定を使用できるのは次の場合に限りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ BSM および HP Operations Manager 統合の両方がアクティブで、同じ BSM サーバに接続されている (HPOM サーバの代わりに BSM サーバが使用されます)。 ▶ モニタの [HP 統合設定] で次の設定を行います。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ BSM 統合データとトポロジ設定で: [モニタの状態およびメトリックのレポートを有効にする] または [モニタの状態としきい値のあるメトリックのレポートを有効にする], および ▶ [HP Operations Manager 統合設定] で: イベント送信。 <p>注:</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [イベント送信] だけが選択されている場合, [次の要因に影響される BSM サービス状況] プリファレンスは [イベント] に設定されます。 ▶ [モニタおよび関連 CI のトポロジをレポート] だけが選択されている場合, [次の要因に影響される BSM サービス状況] プリファレンスは [メトリックス] に設定されます。 ▶ 両方が選択されている場合, [Metrics] が標準設定のプリファレンスとなります。
<p>関連タスク</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 298 ページの「トポロジ・レポートの設定方法」 ▶ 326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

<p>次の要因に影響される BSM サービス状況</p>	<p>SiteScope イベントおよびメトリックスの両方が サービス状況 にレポートされるときに BSM の サービス状況 に影響を与えるプリファレンス (イベントまたはメトリックス) を選択します (SiteScope イベントおよびメトリックス両方のインジケータが CI に影響を与えるため)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ メトリックス : 選択されると, 各 SiteScope 測定値は BSM で CI に影響します (SiteScope によってレポートされるステータス変更イベントは サービス状況 で CI に全く影響しません)。 ▶ イベント : 選択されると, ステータス変更イベントは BSM の サービス状況 の CI に影響します (監視対象の CI の SAM レポートはこれまで通りメトリックスに基づいています)。 <p>使用するプリファレンスの選択の詳細については, SiteScope ヘルプ の『Best Practices for the SiteScope-Business Service Management/Operations Manager Integration』の「Integrating SiteScope with Business Service Management Applications」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : メトリックス</p> <p>注 : HP Operations Manager 統合の設定時に作成されたすべての新しいモニタにグローバル標準設定プリファレンス (イベントまたはメトリックス) も設定できます。詳細は, 775 ページの「HP Operations Manager 統合のメイン設定」の BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル・プリファレンス) を参照してください。</p>
---	--

モニタの有効化 / 無効化

[モニタの有効化 / 無効化] 表示枠では、選択したモニタの状態（有効 / 無効）を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [モニタの有効化 / 無効化] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 ▶ モニタのダウンタイム・テーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、選択したモニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受ける場合にのみ表示されます。詳細については、285 ページの「CI のダウンタイム」を参照してください。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	414 ページの「モニタのデプロイ方法」
関連情報	1319 ページの「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
モニタを有効化	モニタがすでに無効になっている場合、モニタを有効にします。 標準設定値 : 選択されている
モニタを無効化	モニタを無効にします。モニタが無効になっている場合、SiteScope ではモニタの [頻度] 設定に基づいてモニタの実行が引き続きスケジュールされますが、モニタ・アクションは実行されません。SiteScope では、モニタの実行がスケジュールされたときに監視データ・ログ・エントリが記録されますが、測定値データの代わりにモニタの状態が無効とレポートされます。

UI 要素	説明
次の時間設定でモニタを無効化： < 期間 >	モニタを無効にしておく期間。[秒]，[分]，[時間]，または[日]を選択して，適用する無効化期間を定義します。
1 回限りのスケジュールに基づいてモニタを無効化： < 時間 > ~ < 時間 >	モニタを将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力または選択します。
無効化の説明	モニタ・グループ表示にモニタの状態の一部として表示される省略可能な説明テキスト。無効化状態のテキストには，モニタに無効化オプションが適用されていることを示す文字列が含まれます。たとえば，「 手動で無効化されています 」は，[モニタを無効化] オプションを使用してモニタが無効にされたことを示します。
モニタのダウンタイム・テーブル (このテーブルは，SiteScope が BSM に接続されていて，選択したモニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受ける場合にのみ表示されます。詳細については，285 ページの「CI のダウンタイム」を参照)。	
ダウンタイム名	[BSM Downtime] ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
ダウンタイムの詳細	[BSM Downtime] ウィザードで入力されたダウンタイムの詳細。
現在オカレンスの終了日	現在発生しているダウンタイムが終了する予定日時。

関連する警告の有効化 / 無効化

[関連する警告の有効化 / 無効化] 表示枠では、関連付けられている警告の状態 (有効 / 無効) を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [関連する警告の有効化 / 無効化] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ モニタの詳細フィールドに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。 ▶ 関連付けられた警告のダウンタイム・テーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、モニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受け、かつモニタの関連付けられた警告にダウンタイムが適用される場合のみ表示されます。詳細については、285 ページの「CI のダウンタイム」を参照してください。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 1443 ページの「警告の設定方法」
関連情報	1417 ページの「SiteScope 警告の概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
関連付けられたすべての警告を有効化	このモニタに関連付けられた警告がすでに無効になっている場合は、その警告を有効にします。 標準設定値 : 選択されている
次に関連付けられたすべての警告を無効化 <期間>	関連付けられた警告を無効にしておく期間。[秒], [分], [時間], または [日] を選択して、適用する無効化期間を定義します。

UI 要素	説明
1 回限りのスケジュールに基づいて関連付けられたすべての警告を無効化： < 時間 > ~ < 時間 >	関連付けられた警告を将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力します。
無効化の説明	省略可能な説明テキスト。
関連付けられた警告のダウンタイム・テーブル (このテーブルは、SiteScope が BSM に接続されていて、モニタが現在ダウンタイム中の CI の影響を受け、かつモニタに関連付けられた警告にダウンタイムが適用される場合にのみ表示されます。詳細については、285 ページの「CI のダウンタイム」を参照)。	
ダウンタイム名	[BSM Downtime] ウィザードで設定されたダウンタイムの名前。
ダウンタイムの詳細	[BSM Downtime] ウィザードで入力されたダウンタイムの詳細。
現在オカレンスの終了日	現在発生しているダウンタイムが終了する予定日時。

タグの検索 / フィルタ

[タグの検索 / フィルタ] 表示枠では、新しい検索 / フィルタ・タグを追加し、コンテキスト・ツリー内のオブジェクトとプリファレンス・プロファイルにタグを割り当てることができます。SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [タグの検索 / フィルタ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [プリファレンス] コンテキスト（ [プリファレンス] > [タグの検索 / フィルタ] ）で既存のタグを編集できます。このトピックの詳細については、902 ページの「タグの検索 / フィルタの概要」を参照してください。 ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 119 ページの「新しい検索 / フィルタ・タグの作成および定義方法」
関連情報	118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	タグが作成されている場合は、タグの名前と値が表示されます。オブジェクトに割り当てるタグまたはタグの値を選択します。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

ベースライン設定

[ベースライン設定] 表示枠には、選択したモニタのベースラインの状態が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、そのモニタを含むグループ・フォルダを展開して、モニタを選択します。右側の表示枠で [プロパティ] タブをクリックして [ベースライン設定] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ すべての表示枠で共通のボタンについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。 ▶ ベースライン設定は、しきい値設定を更新するためのダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用するモニタには使用できません。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 414 ページの「モニタのデプロイ方法」 ▶ 418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>ベースラインの状態</p>	<p>モニタ・ベースライン状態。次の状態があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ベースライン設定するモニタが選択されていません : ベースライン設定するモニタが選択されていません。 ▶ ベースラインの計算中 : ベースラインを計算中です。 ▶ 計算に失敗 : ベースラインを計算できませんでした。 ▶ 計算済み、アクティブでない : モニタのベースラインが計算されましたが、まだアクティブ化されていません。 ▶ ベースラインの有効化 : ベースラインを有効化しています。 ▶ アクティベーションが失敗しました : ベースラインをアクティブ化できませんでした。 ▶ アクティブ化されたベースライン : モニタのベースラインがアクティブ化されました。 <p>ベースラインの状態が「ベースライン設定するモニタが選択されていません」以外の場合は、[ベースライン モード] チェック・ボックスが選択されています。</p> <p>ベースラインしきい値の使用の詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。</p>
<p>ベースラインの削除</p>	<p>ベースラインしきい値を削除します。ベースラインしきい値が削除され、静的しきい値を使用してしきい値が作成されます。ベースラインを計算した後に（計算が失敗した場合でも）ベースラインを計算するには、ベースラインを削除する必要があります。</p> <p>このトピックの詳細については、405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」を参照してください。</p>









[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、別のモニタの状態に基づいてこのモニタまたはモニタ・グループを実行するように設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでモニタを選択し、[プロパティ] タブをクリックします。[依存関係] タブを展開し、[依存]  をクリックします。依存関係を作成するモニタを選択します。
関連タスク	414 ページの「モニタのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 397 ページの「グループの依存関係の監視」 ▶ 81 ページの「モニタ・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。




UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表します。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表します。 モニタ・グループまたはサブグループにグループ警告が設定されている場合、グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。
	SiteScope モニタ（有効 / 無効）を表します。 モニタに警告が設定されている場合、モニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる使用可能な状況モニタの集合を表します。 親 : SiteScope。

[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタ・グループにデプロイするテンプレートを
選択できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、テンプレートのデプロイ先のグループを右クリックして、[テンプレートのデプロイ] または [CSV を使用してテンプレートをデプロイ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 子オブジェクト (サブグループ, モニタ, 変数, リモート・サーバ) がまったく含まれていないテンプレートは、テンプレート・ツリーに表示されません。 ▶ ソリューション・テンプレートは [テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスには表示されず、[テンプレート] コンテキストからのみデプロイできます。詳細については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
関連タスク	962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 1081 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレート」 ▶ 81 ページの「モニタ・ツリー」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	SiteScope ルート・グループを表します。
	テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。展開するとテンプレートが表示されます。
	SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。デプロイするテンプレートを選択します。CTRL または SHIFT キーを使用すると複数のテンプレートを選択できます。








[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートまたはテンプレート・グループに SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ）とその内容（モニタ、警告、レポート）をコピーできます。

アクセス方法	モニタ・ツリーまたはリモート・サーバ・ツリーで、テンプレートにコピーするオブジェクトを右クリックして、 [テンプレートにコピー] を選択します。[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックスで、テンプレート・オブジェクトのコピー先を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ テンプレートにまだグループが含まれていない場合、グループとその内容をテンプレートにコピーできます。 ▶ サーバ・モニタをテンプレートにコピーすると、SiteScope によってサーバ名が <code>\$\$\$SERVER_LIST\$\$</code> 変数で置換されます。 ヒント: モニタをテンプレートにコピーした後にテンプレートにリモート・サーバを作成し、<code>\$\$\$SERVER_LIST\$\$</code> 変数をこのリモート・サーバで置換することをお勧めします。 ▶ Web スクリプト・モニタはテンプレート・モードではサポートされていません。
関連タスク	962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 81 ページの「モニタ・ツリー」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	個々の SiteScope サーバを表します。
	<p>テンプレート・コンテナを表します。テンプレート・コンテナは、デプロイメントの設定テンプレートの整理に使用されます。</p> <p>テンプレート・コンテナにはテンプレートのみを格納できます。</p>

UI 要素	説明
	<p>SiteScope オブジェクトのデプロイ用のテンプレート設定を表します。</p> <p>テンプレート・グループ (テンプレートにまだグループが含まれていない場合) またはリモート・サーバをテンプレート・グループにコピーできます。</p>
	<p>SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ (有効化されたモニタを含む, モニタを含まない, または有効化されたモニタがない) を表します。</p> <p>テンプレート・グループまたはモニタをテンプレート・グループにコピーできます。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループにグループ警告が設定されている場合, グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p>

パーセンタイル範囲マッピング・テーブル

このテーブルには、各パーセンタイル範囲にマップされている実際の値が表示されます。SiteScope ではパーセンタイル値を使用してベースライン・エラーおよび警告しきい値を定義します。このテーブルを使用して、パーセンタイル値に対応する実際の値を表示し、パーセンタイル値を手動で変更します。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、ベースラインがアクティブ化されているモニタを選択します（モニタにアクティブ化されたベースラインがあるかどうかは、グループまたはモニタを右クリックして [ベースライン設定] > [状態レポート] を選択すると確認できます）。モニタの [しきい値の設定] を展開し、[パーセンタイル・テーブル] ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このテーブルは、ベースラインがアクティブ化されているモニタのみで使用できます。 ▶ 現在のパーセンタイルは 100% より大きい値に設定できます。これにより、収集したサンプル測定値に基づいて、しきい値レベルを設定されたレベルより高くできます。たとえば、収集した CPU 使用率の測定値の範囲が 10% ~ 60% で、CPU 使用率が 80% を超えるエラーのみを取得するには、エラーしきい値レベルを望ましいレベルまで上げるパーセンタイルにパーセンタイル値を設定します。この場合は、パーセンタイルを 134%（CPU 使用率 $60\% * 134\% = \text{CPU 使用率 } 80.4\%$）に設定します。
関連タスク	418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」 ▶ 458 ページの「しきい値設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>パーセンタイル範囲</p>	<p>ベースライン・エラーおよび警告しきい値の定義に使用する実際の値に相関するパーセンタイル範囲。SiteScope のプリファレンス ([プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [ベースライン設定]) で、テーブルに表示されるパーセンタイル範囲の数値を設定できます。</p> <p>注: 左の値は含まれず、右の値は含まれます。つまり、33 ~ 100 というパーセンタイル範囲の場合、33 より大きくて (33 は含まない) 100 までのすべての値が範囲に含まれます。33 は前の範囲に含まれ、100.01 は次の範囲に含まれます。</p>
<p>実際の値</p>	<p>パーセンタイル範囲にマップされる実際の値。</p>
<p>現在のパーセンタイル</p>	<p>ベースラインしきい値の定義に使用する実際の値に相関するパーセンタイル値。</p>

[ベースラインの計算] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインの計算に含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方の選択、ベースライン・データ収集の時間範囲スケジュールの選択、モニタ測定サンプル値がしきい値にどの程度影響するかを判断するための順守レベルの選択と微調整、ベースラインしきい値の計算を実行できます。

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [計算] を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「モニタの編集」権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ ベースラインしきい値の計算に必要な時間は、SiteScope サーバの処理速度とベースライン設定で選択したモニタ数に左右されます。計算プロセスを完了する前に SiteScope を再起動する必要がある場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。 ▶ SiteScope でベースラインを計算するために必要なデータを蓄積するのに十分と思われる期間、モニタが実行されるようにします。この期間は、[インフラストラクチャプリファレンス] の [ベースライン設定に必要な最小日数] および [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定に応じて変わります。詳細については、733 ページの「ベースライン設定」を参照してください。ベースラインは、モニタに十分なデータがなくても計算およびアクティブ化できますが、計算は正確でない可能性が高くなります。
関連タスク	<p>418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」</p>
関連情報	<p>405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」</p>

ベースライン計算対象のモニタの選択

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
<使用可能なグループまたはモニタ、あるいはその両方のリスト>	<p>ベースラインしきい値の計算に含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方。リストには、現在選択されているコンテナ、およびユーザの許可されているグループ・リストに含まれるすべての子コンテナが表示されます。</p> <p>標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。</p> <p>注：次の場合、モニタ・インスタンスは選択できません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ベースラインがすでにアクティブ化されている。この場合、選択チェック・ボックスは表示されません。 ▶ SiteScope に同じ名前の別のモニタがある（ファイル・パス、グループ名、モニタ名が同一）。この場合、モニタ名の横に「名前の重複」と表示されます。

スケジュール

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
スケジュール範囲名	<p>ベースラインしきい値データの収集に使用するスケジュール範囲。これによって、ベースラインの計算に使用する監視データの収集期間を特定の日または時間に制限できます。作成されるベースラインしきい値は、同じスケジュール範囲期間のみ有効になります。表示される範囲スケジュールは、[スケジュール プリファレンス] で作成されます。範囲スケジュールの作成の詳細については、834 ページの「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。</p> <p>注：CTRL または SHIFT キーを使用すると複数の範囲を選択できます。</p> <p>標準設定値：スケジュール範囲が選択されていない場合、ベースラインしきい値データは全日、毎日収集されます。</p>

順守レベル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

説明	<p>ベースライン計算で使用されるモニタ測定サンプル値がしきい値にどの程度影響するかを判断する順守レベルを選択できます。順守レベルは、測定値がエラーまたは警告であるかを判断するためにすべてのモニタ測定値に適用されるパーセンタイル値に基づいています。また、個々のモニタ測定値の順守レベルを微調整したり、正常な限度を設定することもできます。</p> <p>利用方法： モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [計算] を選択します。[順守レベル] 表示枠を展開します。</p>
関連タスク	418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	409 ページの「ベースライン順守レベルの設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
低	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値からより遠くなります。極端な測定値によるベースラインへの影響に対する許容度が高い場合はこのオプションを選択します。
中	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値から中間範囲にあります (標準設定)。




UI 要素	説明
高	しきい値の更新に使用される値は、ベースラインによって計算される値により近くなります。極端な測定値によるベースラインへの影響に対する許容度が低い場合はこのオプションを選択します。
順守レベルの微調整 / 限度の設定	[順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでベースラインの順守レベルを微調整し、選択したコンテキスト内の任意のモニタ・タイプの任意の測定値に正常な限度を定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、497 ページの「[順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、選択されたコンテキストにおいて各モニタ測定値の順守レベルおよび正常な限度（設定されている場合）で、ベースライン計算で使用されるパーセンタイル値が表示されます。任意のモニタ・タイプの任意の測定値のベースライン順守レベルを微調整し、正常な限度を設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope コンテナ、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [計算] を選択します。[順守レベル] 表示枠を展開して、[順守レベルの微調整 / 限度の設定] をクリックします。
重要な情報	順守レベルのパーセンタイル値は 100% より大きく設定できます。これにより、収集したサンプル測定値に基づいて、しきい値レベルを設定されたレベルより高くできます。たとえば、収集した CPU 使用率の測定値の範囲が 10% ~ 60% で、CPU 使用率が 80% を超えるエラーのみを取得するには、[エラーのパーセンタイル] の「低」の値を、エラーしきい値レベルを望ましいレベルまで上げるパーセンタイルに設定します。この場合は、パーセンタイルを 134% (CPU 使用率 60% * 134% = CPU 使用率 80.4%) に設定します。
関連タスク	418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	リセット : モニタ測定値の標準設定のエラーおよび警告しきい値の順守レベル値を元に戻し、正常な限度を削除します。
	すべて選択 : リストされたすべてのモニタ測定値を選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。




UI 要素	説明
モニタ名：測定値名	<p>選択されているコンテキストの各モニタのベースライン計算で使用される測定値を表示します。また、ブラウズ可能なモニタすべての測定値を代表する 1 つの測定値が（リストの最後に）表示されます。</p>
警告のパーセンタイル	<p>警告ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。このトピックの詳細については、409 ページの「ベースライン順守レベルの設定」を参照してください。</p> <p>標準設定値：「低」110、「中」93、「高」90</p>
エラーのパーセンタイル	<p>エラー・ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。このトピックの詳細については、409 ページの「ベースライン順守レベルの設定」を参照してください。</p> <p>標準設定値：「低」120、「中」98、「高」95</p>
正常な限度	<p>各モニタ測定値タイプの正常な限度の実際の値を表示します。これは、既存のベースライン・パーセンタイルに従うとエラーをレポートする必要がある場合でも、エラー状態とみなされない測定値です。このトピックの詳細については、409 ページの「正常な限度とエラー限度について」を参照してください。</p> <p>標準設定値：値なし</p>
ブラウズ可能なすべてのモニタの測定値	<p>参照可能なすべてのモニタの測定値の警告およびエラー・ベースラインしきい値の計算に使用される順守レベル「低」、「中」、「高」のパーセンタイル値を表示します。</p> <p>警告の標準設定値：「低」110、「中」93、「高」90</p> <p>エラーの標準設定値：「低」120、「中」98、「高」95</p>



[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、計算されたモニタのベースライン・データのサマリが表示され、現在のモニタ設定の保存、ベースライン測定値グラフの表示、失敗した操作の表示、ベースラインしきい値設定のアクティブ化を行えます。SiteScope でベースラインを計算できないモニタについては、失敗の原因が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ベースライン機能を使用してモニタのしきい値を設定できるのは、SiteScope の管理者または「モニタの編集」権限を持つユーザのみです。また、設定できる対象はユーザに許可されているグループ・リストに含まれるモニタのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ 現在のモニタ設定に戻すには、バックアップ設定を作成してからベースライン設定をアクティブ化する必要があります。 ▶ ベースラインしきい値のアクティブ化に必要な時間は、SiteScope サーバの処理速度とベースライン設定で選択したモニタ数に左右されます。アクティブ化プロセスを完了する前に SiteScope を再起動する必要がある場合、再起動後に自動的にプロセスが続行されます。
関連タスク	418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
正常に計算されたモニタ	
 ビュー・グラフ	ビュー・グラフ : モニタのすべての測定値のベースライン・データがグラフで表示されます。詳細については、504 ページの「[ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	すべて選択 : リストされたすべてのモニタを選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
モニタ名	ベースライン設定に選択された SiteScope モニタの名前。
計算日	ベースラインが計算された日付。
エラー・ステータスの減少	<p>ベースラインしきい値が適用された場合のモニタのエラー・ステータス数の減少。負の数は、提案されたベースラインしきい値が適用された場合、モニタのエラー・ステータス数の増加を示します。</p> <p>例 : CPU 使用率のしきい値の状態をエラー条件 >= 65% に手動で設定し、CPU モニタに 5 つのエラー・ステータス (そのうち 3 つのエラーは 65% ~ 70% のデータ・サンプル、2 つのエラーは 70% を超えるもの) があるとします。SiteScope でベースラインを使用してしきい値を計算し、しきい値がエラー条件 >= 70% に設定されている場合、[エラー ステータスの減少] は 3 になります。</p> <p>注 : [エラー ステータスの減少] の値は、計算日に収集されたデータに基づいています。</p> <p>ヒント : 計算日から 3 日以上経過している場合、ベースラインを再計算することをお勧めします。</p>

UI 要素	説明
警告のステータスの減少	<p>ベースラインしきい値が適用された場合のモニタの警告ステータス数の減少。負の数は、提案されたベースラインしきい値が適用された場合のモニタの警告ステータス数の増加を示します。</p> <p>例: CPU 使用率のしきい値の状態を警告条件 >= 55% に手動で設定し、CPU モニタに 3 つの警告のステータス（そのうち 2 つの警告は 55% ~ 60% のデータ・サンプル、1 つの警告は 60% を超えるもの）があるとします。SiteScope でベースラインを使用してしきい値を計算し、しきい値が警告条件 >= 60% に設定されている場合、[警告のステータスの減少] は 2 になります。</p> <p>注: [警告のステータスの減少] の値は、計算日に収集されたデータに基づいています。</p> <p>ヒント: 計算日から 3 日以上経過している場合、ベースラインを再計算することをお勧めします。</p>
失敗したモニタ	
	すべて選択: リストされたすべての失敗したモニタを選択します。
	選択範囲を解除: 選択をクリアします。
モニタ名	SiteScope でベースラインを計算できなかったモニタの名前。

UI 要素	説明
<p>失敗の原因</p>	<p>SiteScope でモニタのベースライン値を計算できなかった原因。次のような原因があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ データが十分ではありません : モニタの実行期間が、有意なベースラインしきい値を得られるデータの収集期間としては十分ではありませんでした。この期間は、[インフラストラクチャ プリファレンス] の [ベースライン設定に必要な最小日数] および [ベースライン設定に必要な最小サンプル数] 設定に応じて変わります。ベースライン設定の詳細については、733 ページの「ベースライン設定」を参照してください。 ▶ ベースライン設定する測定値がありません : モニタに、ベースライン計算に使用できる測定値がありません。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 ▶ リクエストされたスケジュールのサンプルがありません : 指定された範囲スケジュールで収集されたデータ・サンプルがありません。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。 ▶ 不明 : ベースライン計算の失敗の原因が不明です。ベースラインをアクティブ化するモニタを選択できません。
<p>アクティブ化可能</p>	<p>モニタのベースライン計算が失敗した場合でも、ベースラインをアクティブ化できることを示します。</p> <p>「データが十分ではありません。」という理由以外でベースライン計算が失敗した場合、「いいえ」が表示されます。</p> <p>「データが十分ではありません。」という理由でベースライン計算が失敗した場合、「はい」が表示されます。SiteScope ではベースラインを計算するために収集された限定的な測定値サンプルが使用されます。</p>

[設定のバックアップ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインしきい値をアクティブ化する前に現在のモニタのしきい値設定を保存できます。設定を元に戻すには、設定ツールを使用します。設定ツールの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) を参照してください。

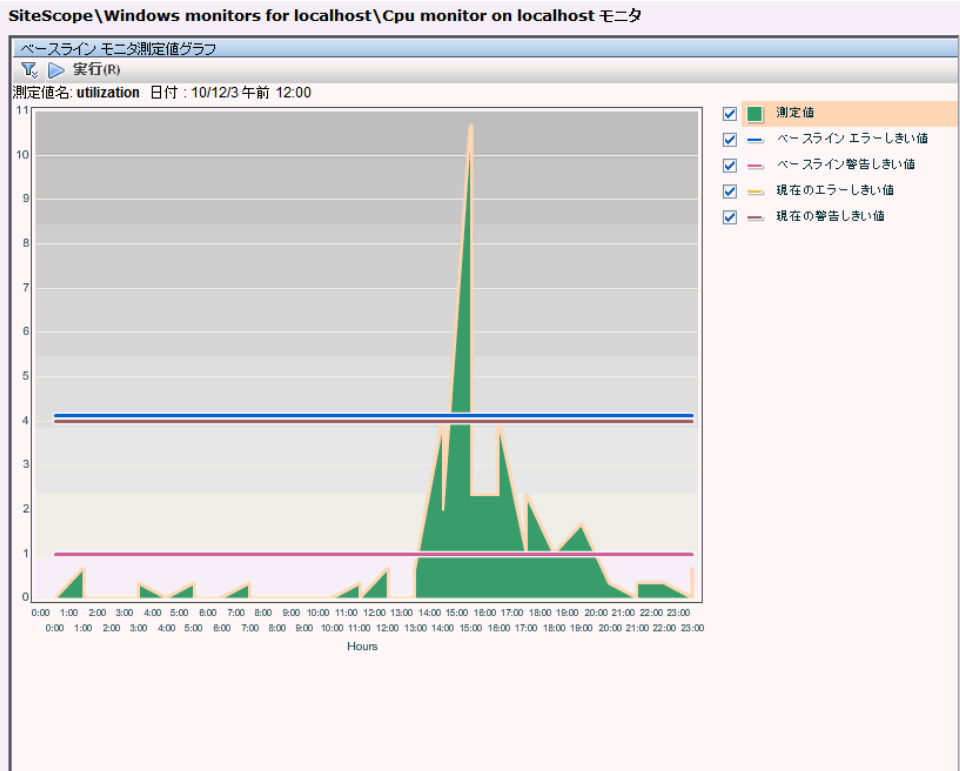
アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化] を選択します。[設定のバックアップ] ボタンをクリックします。
重要な情報	ベースラインをアクティブ化するとしきい値設定の変更は元に戻せないため、バックアップ設定を作成してからベースライン設定をアクティブ化してください。
関連タスク	418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ターゲット・ディレクトリを入力してください	バックアップ設定ファイルの保存先ディレクトリ、または標準設定の SiteScope インストール・ディレクトリを使用します。 標準設定値 : C:\SiteScope
バックアップ・ファイル名を入力してください	設定バックアップ・ファイルの名前。標準設定で、ファイルには SiteScope_<MM_DD_YYYY>_<HH_MM_SS> という形式で名前が付けられます。バックアップ・ファイルは指定した場所に zip 形式で保存されます。 例 : SiteScope__11_05_2008_08_24_06

[ベースライン モニタ測定値グラフ] ダイアログ・ボックス




このダイアログ・ボックスには、モニタのすべての測定値のグラフが測定値ごとに表示されます。グラフを表示する標準設定の日付は、エラー減少が最大の日です。各グラフには、現在の警告およびエラーしきい値、ベースライン警告およびエラーしきい値、ベースライン関連のモニタ測定値すべての 24 時間分 (00:00 ~ 23:59) の履歴データが表示されます。




アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[ベースライン設定] > [レビューと有効化] を選択します。[正常に計算されたモニタ] 表示枠で、ベースライン・データが計算されたモニタを選択して、[ビューグラフ] ボタンをクリックします。
重要な情報	モニタ測定値グラフに表示されるデータは測定値データの集計で、その期間にはデータが収集された時間が正確に反映されていない場合があります。
関連タスク	418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

グラフ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>注釈ツール:表示しているグラフのスナップショットを作成します。また、スナップショットに図形や線を描画したりテキストを追加したりして、グラフの重要な領域を強調表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1550 ページの「注釈ツール」を参照してください。</p>
 	<p>レポート・フィルタの折りたたみ:クリックしてレポート・フィルタを折りたたむまたは展開します。</p> <p>ツールチップ:折りたたみ可能なレポート・フィルタが閉じると、アイコンのツールチップにフィルタで行った選択に関する詳細が表示されます。</p>

UI 要素	説明
	実行 : レポート設定を指定した後で, [実行] をクリックして, 日付リンクに表示される日付のレポートを実行します。
Historic date < 日付リンク >	<p>カレンダーを開いてモニタ測定値グラフを作成する日付を選択できます。カレンダーには次のボタンがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 戻す : 前に選択したレポート日に戻ります。 ▶ 現在 : カレンダーで今日の日付を選択します。 ▶ OK : 選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。 ▶ キャンセル : 変更せずにカレンダーを閉じます。

グラフの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
< 凡例 >	グラフで使用されている色分けを説明します。
測定値名	グラフの上に表示される測定値の名前。
日付	グラフが生成された日付と時刻。
< データ・ポイント >	<p>選択されているモニタ測定値を「時間」軸上に 2 時間区分で表示します。</p> <p>ヒント : 測定値。</p>
< 測定値タイプ > < y 軸 >	モニタの測定値タイプを表示します。

UI 要素	説明
時間< x 軸>	レポートを生成するときに指定した日付の時間区分単位 (0 ~ 24 時間)。
ベースライン・エラーしきい値	エラー のステータスを判断するベースラインしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタのエラー・ベースライン・ステータスのしきい値を超えます。これは、赤の実線でグラフに表示されます。
ベースライン警告しきい値	警告 のステータスを判断するベースラインしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタの警告ベースライン・ステータスのしきい値を超えます。これは、オレンジ色の実線でグラフに表示されます。
現在のエラーしきい値	エラー のステータスを判断するしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタのエラー・ステータスのしきい値を超えます。これは、黒の点線でグラフに表示されます。
現在の警告しきい値	警告 のステータスを判断するしきい値線を表示します。この線を越える測定値は、モニタの警告ステータスしきい値を超えます。これは、青の点線でグラフに表示されます。

[ベースラインの削除] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ベースラインを削除するグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択できます。モニタのしきい値ベースラインを再計算するには、まずモニタの既存のベースライン計算を削除する必要があります。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [削除] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者または「 モニタの編集 」権限を付与されたユーザのみがベースラインを削除でき、さらに、削除できるのはユーザの許可されているグループ・リストにあるモニタのベースラインのみです。ユーザに権限がないグループ内のモニタは、ダイアログ・ボックスに表示されません。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< グループまたはモニタ、あるいはその両方のリスト >	ベースラインしきい値計算を削除するグループまたはモニタ、あるいはその両方。リストには、現在選択されているコンテナ、およびユーザの許可されているグループ・リストに含まれるすべての子コンテナのすべてのグループまたはモニタ、あるいはその両方が表示されます。 標準設定値 ：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。

ベースラインの状態レポート

このレポートには、選択されたコンテキストのすべてのモニタのベースラインの状態に関する情報が表示されます。

ベースラインの状態レポート			
サマリー			
5 個のモニタの合計です。			
2 個のモニタにアクティブ化されたベースラインがあります。			
3 個のモニタの計算が失敗しました。			
詳細			
モニタ名	モニタタイプ	ベースラインの状態	ベースラインの状態の詳細
SiteScope\Lab monitors\C...	CPU	アクティブ化されたベースライン	
SiteScope\Lab monitors\W...	メモリ	アクティブ化されたベースライン	
SiteScope\Lab monitors\S...	サービス	計算に失敗	ベースライン設定する測定値があり
SiteScope\Lab monitors\Port	ポート	計算に失敗	ベースライン設定する測定値があり
SiteScope\Lab monitors\Di...	ディレクトリ	計算に失敗	ベースライン設定する測定値があり

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで SiteScope ノード、グループ、またはモニタを右クリックして、[ベースライン設定] > [状態レポート] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ これは一時的なレポートです。後で使用するために SiteScope 設定データに保存されるものではありません。 ▶ 列ヘッダをクリックして、モニタ・タイプを昇順または降順で並べ替えることができます。並べ替え順序の方向を示す矢印が表示されます。 ▶ 下向き矢印  をクリックして、フィルタ基準とするモニタ・タイプまたはベースラインの状態を選択すると、モニタ・タイプおよびベースラインの状態の表示をフィルタできます。フィルタをクリアするには、[(All)] を選択します。
関連タスク	418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」
関連情報	405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタ名	コンテキストによって異なる SiteScope モニタの名前とパス。 注： レポートには、ユーザにアクセス権限があるグループまたはサブグループのモニタのみが表示されます。
モニタ・タイプ	SiteScope モニタのタイプ。
ベースラインの状態	モニタ・ベースライン状態。次の状態があります。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ ベースライン設定するモニタが選択されていません： ベースライン設定するモニタが選択されていません。 ▶ ベースラインの計算中：ベースラインを計算中です。 ▶ 計算に失敗：ベースラインを計算できませんでした。 ▶ 計算済み、アクティブでない：モニタのベースラインが計算されましたが、まだアクティブ化されていません。 ▶ ベースラインの有効化：ベースラインを有効化しています。 ▶ アクティベーションが失敗しました：ベースラインをアクティブ化できませんでした。 ▶ アクティブ化されたベースライン：モニタのベースラインがアクティブ化されました。

UI 要素	説明
ベースラインの状態の詳細	<p>次の状態のモニタの追加の詳細情報を表示します。</p> <ul style="list-style-type: none">▶ ベースラインの計算中：モニタのベースラインの計算ステージを表示します。▶ 計算に失敗：ベースラインの計算が失敗した原因を表示します（「データが十分ではありません」, 「ベースライン設定する測定値がありません」）。SiteScope でベースライン期間のデータを蓄積するのに十分な期間モニタが実行された後、自動ベースライン計算では十分なデータがないために失敗したモニタが標準設定で選択されます。詳細については、499 ページの「[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
更新	計算プロセス中にクリックすると、状態レポートのデータが更新されます。

13

XML ドキュメントの監視

本章の内容

概念

- ▶ XML ドキュメントの監視の概要 (514 ページ)

参照情報

- ▶ XML ドキュメントの内容の照合 (515 ページ)
- ▶ モニタ設定での XML 内容照合値の使用 (517 ページ)

概念

XML ドキュメントの監視の概要

SiteScope の内容の照合は、ネットワーク化された情報システムと内容の監視において重要な機能です。内容の照合機能を持つ SiteScope モニタでは、基本的な内容の照合は Perl 正規表現を使用して実行できます。SiteScope には、XML ドキュメントを横断してドキュメント内容を照合する機能も含まれています。たとえば、URL モニタと Web サービス・モニタを使用して XML 内容照合文字列を組み込み、XML 要素名、XML 要素の属性、要素の内容を照合することができます。この機能を使用して、XML ベースの Web ページ、SOAP または XML-RPC ドキュメント、さらに WAP 対応デバイスにサービスを提供する WML ページまでチェックできます。

参照情報

XML ドキュメントの内容の照合

XML 内容照合文字列の構文には、XML ドキュメントの階層構造が反映されます。「xml」で始まる内容照合文字列は、XML ドキュメント内の要素名として認識されます。要素名は、ルート要素との関係の順にピリオドで区切られて追加されます。たとえば、`weather.xml` というドキュメントでは、ルート要素は `<weather>` です。この要素には、`<area>`、`<skies>`、`<wind>`、`<forecast>` などの名前を持つ子要素があります。これらの XML 要素の内容またはその属性にアクセスするには、`xml.weather.area` のような構文を使用します。

特定の内容または値が存在することをチェックするには、テストする内容を持つ要素名の後に等号記号を追加し、続いて内容の値を追加します。ドキュメント内に 1 つの要素名の複数インスタンスが存在する場合、その要素の特定のインスタンスをチェックするには、ドキュメント内の要素の順序を示す数値を角括弧で囲んで追加します（例については、次の表を参照してください）。また、複数の要素または値をテストするには、個々の検索文字列をカンマで区切ります。次の表では、XML ドキュメント内の内容の照合に使用する構文の例を示します。

内容の照合の例	説明
xml.weather.temperature	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに <temperature> 要素が 1 つ以上 含まれる場合、成功します。<temperature> 要素の内容がモニタから返されます。<weather> ノード内で <temperature> 要素が検出されない場合、エラーが返されます。
xml.weather.temperature=20	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、値が 20 と等しい <temperature> 要素が 1 つ以上 含まれる場合、成功します。一致が検出された場合、モニタから <temperature> 要素の内容は 返されません 。<weather> ノード内で <temperature> 要素が検出されない場合、または値 20 が含まれる <temperature> 要素がない場合、エラーが返されます。
xml.weather.forecast. [confidence]	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、confidence という名前の 属性 を持つ <forecast> 要素が含まれる場合、成功します。一致が検出された場合、モニタから confidence 属性の値が返されます。<weather> ノード内で <forecast> 要素が検出されない場合、または confidence 属性が検出されない場合、エラーが返されます。
xml.weather.forecast[3]. [confidence]=50	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに 3 つ以上の <forecast> 要素があり、3 番目の <forecast> 要素に値が 50 の confidence 属性 がある場合、成功します。<weather> ノード内にある <forecast> 要素が 3 個未満の場合、または confidence 属性の値が 50 以外の場合、エラーが返されます。
xml.weather.temperature=20, xml.weather.skies=rain	ドキュメント内のいずれかの <weather> ノードに、内容が 20 と等しい <temperature> 要素が 1 つ以上 あり、 かつ 、いずれかの <weather> ノードに内容が rain と等しい <skies> 要素が 1 つ以上 含まれる場合、成功します。いずれかの照合が失敗した場合、エラーが返されます。
xml.wml.card.p.table.tr.td. anchor=Home Page	WML ドキュメントの指定されたパスにある <anchor> 要素の内容をチェックします。テーブル・セルが含まれるいずれかの <card> ノードに内容が“Home Page”と等しい <anchor> 要素が 1 つ以上 ある場合、成功します。

モニタ設定での XML 内容照合値の使用

URL モニタのようなモニタには、SiteScope モニタのデータ・ログに記録される内容照合値があり、モニタのエラー状態や警告状態のしきい値設定にも使用できます。XML 名の値はモニタの内容照合値として保存されます。

たとえば、内容照合表現が `xml.weather.temperature` で、ドキュメントがファイル `weather.xml` の内容だった場合、内容照合値は **46** になります。

次に、モニタの [詳細オプション] セクションでエラー状態、警告状態、正常状態のしきい値を設定すると、特定のしきい値を内容の照合から返された値と比較できます。

たとえば、気温の値を監視していて、気温が 72 度を下回ったら警告を受け取る場合、モニタの状態のしきい値を次のように設定できます。

エラー条件	内容の照合 $< \leq 72$
警告条件	内容の照合 $== \leq 72$
良好条件	内容の照合 $\geq > 72$

このように設定すると、モニタは温度要素の内容をチェックして、エラーおよび警告しきい値と比較します。前述の例では、温度の値が 46 度で 72 度を下回っているため、モニタの状態は**エラー**になります。

第 V 部

統合モ二夕

14

SiteScope 統合モニタを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ 統合モニタの概要 (522 ページ)
- ▶ テクノロジ統合モニタのトポロジ設定 (526 ページ)

タスク

- ▶ 統合モニタのデプロイ方法 (534 ページ)

参照情報

- ▶ 廃止された統合モニタのリスト (540 ページ)
- ▶ [トラブルシューティングと制限事項](#) (542 ページ)

概念

統合モニタの概要

統合モニタは、SiteScope データ・コレクタによって実行され、サードパーティ・アプリケーション（通常、Enterprise Management Systems (EMS) アプリケーションおよびサーバ）のデータをキャプチャして BSM に転送するために使用されます。

BSM の [EMS 統合管理] ページで EMS 統合を作成できます。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの

データを収集して BSM にデータを転送する場合、次の 2 つのレベルの設定があります。

- ▶ **必須**：監視対象システムを適切にマッピングして必要なサンプルを収集するようにモニタを設定する必要があります。イベント、メトリック、チケットの形式は関係ありません。[フィールドのマッピング] 設定でサンプルのタイプを選択し、対応するスクリプト・テンプレートをテキスト・エディタで編集して、監視対象システムのフィールド・マッピングを行います。
- ▶ **オプション**：データをトポロジにマッピングして、BSM の適切な CI 階層に転送することもできます。これにより、モニタから BSM 内の必要な CI に状態を正確にレポートでき、製品の別のアプリケーションで使用できるようになります。トポロジ設定は、作成するトポロジのタイプに応じてロードされるトポロジ・スクリプトを使用して行います。

本項の内容

- ▶ 522 ページの「統合モニタのカテゴリ」
- ▶ 524 ページの「フィールドのマッピングのサンプルのタイプ」

統合モニタのカテゴリ

統合モニタは、2 つのカテゴリに分類できます。

アプリケーション固有のモニタ

これらの統合モニタは、特定の EMS アプリケーションで使用するよう設計されています。これらのモニタは、必須フィールドのマッピングおよびトポロジ設定を使用して事前に定義されています。

該当するモニタを次に示します。

- ▶ HP OM Event Monitor (詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- ▶ HP Service Manager Monitor (詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- ▶ NetScout Event Monitor (詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。

特定の環境のニーズに合わせて、フィールドのマッピングおよびトポロジ設定の両方のスクリプトを詳細に設定できます。

注:

- ▶ SiteScope が BSM バージョン 9.00 以降に接続されている場合 (SiteScope 11.10 にアップグレードされた以前のバージョンの SiteScope でモニタが作成されている場合は除きます)、HP OM イベント・モニタは使用できません。Event Management Foundation ライセンスを所有していて、HP Business Service Management 文書ライブラリの『HP Business Service Management デプロイメント・ガイド』(PDF) の手順に従って統合を設定している場合は、OM イベントを HPOM サーバから BSM 9.00 に転送できます。
- ▶ NetScout イベント・モニタでは、トポロジ設定は使用できません。

汎用統合モニタ

データベース、ログ・ファイル、SNMP トラップ、Web サービス・インタフェースからデータを抽出できる大部分の EMS アプリケーションで使用するよう設計されたテクノロジー統合モニタ。

これらのモニタのフィールドのマッピングおよびトポロジ設定は、適切なスクリプトをロードし、モニタの作成時に別のテキスト・エディタで編集して設定する必要があります。

該当するモニタを次に示します。

- ▶ **Technology Database Integration Monitor** (詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- ▶ **Technology Log File Integration Monitor** (詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- ▶ **Technology SNMP Trap Integration Monitor** (詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。
- ▶ **Technology Web Service Integration Monitor** (詳細については、SiteScope ヘルプの『Monitor Reference』ガイドを参照してください)。

フィールドのマッピングのサンプルのタイプ

統合モニタでは、フィールドのマッピング・スクリプトを使用して、収集するデータを BSM で認識できる形式に適切にマッピングします。汎用統合モニタの場合、必要に応じてこれらのマッピングを設定およびカスタマイズします。フィールドのマッピングのタイプを選択する場合、付属のスクリプト・エディタを使用するか、スクリプトを任意のテキスト・エディタにコピーして変更を行い、フィールドのマッピングのテキスト・ボックスに再度コピーできます。

ヒント: アプリケーション固有のモニタのマッピングは、モニタの設定時に編集できません。これらのモニタにあらかじめ設定されている用意済みの統合マッピングを使用することをお勧めします。

汎用統合モニタを設定する場合、次のサンプル・スクリプトのタイプを選択します。

- ▶ **メトリック:** 時間ベースのデータを収集する場合に使用します。メトリックのサンプルのタイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、一般的な SiteScope データとして BSM に統合され、SiteScope データを表示できるすべてのコンテキスト (サービス状況、サービス・レベル管理、SAM、ユーザ・レポートなど) で表示できます。

- ▶ **イベント** : 特定のイベントに基づいてデータを収集する場合に使用します。イベントのサンプルのタイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、UDX フレームワークを使用して BSM に統合され、UDX データを表示できるコンテキスト(イベント・ログ, サービス状況, トレンド・レポート)で表示できます。BSM API を使用してデータにアクセスすることもできます。

注 : EMS アプリケーションによって送信されるイベントは、イベントのサンプルです。それらのイベントは、BSM の オペレーション管理 イベントと同じではありません。

- ▶ **チケット** : チケット・システムからインシデントおよびイベントを収集する場合に使用します。チケットのサンプルのタイプを使用する統合モニタによって収集されたデータは、BSM に統合され、サービス状況およびサービス・レベル管理で表示できます。

データベース、ログ・ファイル、SNMP トラップ、Web サービスのテクノロジー統合モニタは、これらのサンプルのタイプで設定できます。特定の環境のニーズに合ったカスタム設定を作成するためのベースとして、SiteScope に同梱されているフィールドのマッピング・スクリプトのテンプレートを使用します。統合モニタを設定する場合、サンプルのタイプを選択して必要なスクリプト・テンプレートをロードし、BSM に転送するデータが収集されるようにスクリプトを編集します。

フィールドのマッピング・スクリプトのカスタマイズの詳細については、545 ページの「統合モニタのフィールドのマッピング」を参照してください。

テクノロジ統合モニタのトポロジ設定

BSM との完全な統合を確立するには、統合モニタのトポロジ・テンプレートを選択します。これは、統合モニタの作成時に [トポロジ設定] 領域で行います。[ノード], [ノード - 実行中のソフトウェア], [チケット] のトポロジ・テンプレートは、BSM の RTSM の必要な CI にデータが転送されるように、必須値を使用して別途設定します。

注:

- ▶ SiteScope 10.x の EMC トポロジ・テンプレートのスクリプトは、SiteScope が BSM 9.00 に接続されている場合でも SiteScope では以前のコンテンツ言語の形式で表示されます。たとえば、CI タイプのホストはノードではなくスクリプト内に表示されます。
- ▶ SiteScope が 9.00 より前のバージョンの BSM に接続されている場合、[ノード], [ノード - 実行中のソフトウェア] の代わりに、[ホスト], [ホスト - ソフトウェア要素] トポロジ・スクリプト・テンプレートがモニタのトポロジ・テンプレート・スクリプト一覧に表示されます。
- ▶ NetScout イベント・モニタまたは HP Service Manager モニタの組織トポロジをカスタマイズすることはできません。

トポロジは、Python に基づき、Java によって強化された Jython 言語を使用して、トポロジ・スクリプトとして記述されます。Jython の使用方法の詳細については、次の Web サイトを参照してください。

▶ <http://www.jython.org> (英語サイト)

▶ <http://www.python.org> (英語サイト)

このスクリプトには、必要なトポロジ・データを監視対象アプリケーションから取得するための基本機能があります。トポロジを作成するために、モニタのフィールドのマッピングによって作成されたサンプルがスクリプトで使用されます。スクリプトには、取得したデータを BSM の関連する CI に転送するためのマッピングが含まれています。

次の場合、SiteScope によってトポロジが転送されて CI が作成または更新されます。

- ▶ モニタのデータ取得の結果として初めて CI が SiteScope で作成されたとき、その CI が RTSM に存在しているかどうかは関係ありません。
- ▶ CI のプロパティに変更があったとき。
- ▶ SiteScope が再起動してから最初にモニタが実行されたとき。

これにより、モニタからの CI の更新によって RTSM が過負荷になることを防止できます。

本項の内容

- ▶ 528 ページの「トポロジの選択」
- ▶ 531 ページの「トポロジ・スクリプトの編集」
- ▶ 533 ページの「トポロジ・スクリプト・プロパティ・ファイル」
- ▶ 533 ページの「その他の参照先」

トポロジの選択

アプリケーション固有のモニタを使って作業する場合、トポロジを選択しないと、統合に必要なデータを使用してトポロジが事前設定されます。

汎用統合モニタを使って作業する場合、次のトポロジ設定を選択できます。

- ▶ **カスタム** : 取得したデータを標準のノードまたは実行されているソフトウェアの CI ではなく特定の CI に転送する場合、独自のトポロジを作成します。

注 : [カスタム] を選択する場合は、トポロジ・スクリプトが読み込まれず、自分で Jython 言語でトポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している必要があります。[ノード] または [ノード - 実行中のソフトウェア] で開始して、これらのスクリプトのいずれかを編集することをお勧めします。

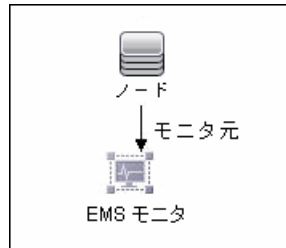
- ▶ **ノード** : ノード CI と EMS モニタ CI (リーフ・ノード) が作成されます。
- ▶ **ノード - 実行中のソフトウェア** : ノード CI を親 CI として、その下に実行中ソフトウェア CI、さらにその下に EMS モニタ CI が存在するトポロジが作成されます。フィールドのマッピングで定義される対象がシステムである場合、ノード CI のトポロジさらにその下に EMS モニタ CI が作成されます。
- ▶ **チケット** : BusinessService CI と EMS モニタ CI (リーフ・ノード) が作成されます。

注 : トポロジ・スクリプトには、EMS モニタ CI (統合によって作成されるトポロジの最下位リーフ) が含まれている必要があります。

標準設定の統合タイプの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Solutions and Integrations』の「Understanding Node, Tickets, or Node - Running Software Integration Types」を参照してください。

ノード・トポロジ

標準設定では、作成したトポロジにノード CI と EMS モニタ CI (リーフ・ノード) が含まれています。





ノード CI と EMS モニタ CI には [Monitored by] 関係があります。EMS モニタ CI からノード CI に状態が渡されます。

ノード - 実行中のソフトウェア・トポロジ

このトポロジで監視対象システムから取得するデータ・タイプは、**ソフトウェア要素イベント**と**システム・イベント**の 2 つです。

- ▶ **ソフトウェア要素イベント**: このデータは、サービスまたはアプリケーションに影響するデータとして認識されます。これらのイベントは、関連する CI のシステム KPI にマッピングされます。これらのイベントはノード CI に伝播されません。
- ▶ **システム・イベント**: このデータは、サービスまたはアプリケーションに影響しない、管理対象アプリケーションから取得するほかのすべてのデータになります。このデータでは状態がノード CI に渡されます。システム・イベントを受信するノード CI と実行中ソフトウェア CI 間に関係がある場合、アプリケーション CI に状態を伝播できます。このイベントは、関連する CI のシステム KPI にもマッピングされます。

次の表に、それぞれのイベント・タイプ用に作成されたトポロジを示します。

ソフトウェア要素イベント用に作成されたトポロジ	システム・イベント用に作成されたトポロジ
 <p>ノード ↓ 構成リンク ソフトウェア要素 ↓ モニタ元 EMS モニタ</p>	 <p>ノード ↓ モニタ元 EMS モニタ</p>

イベントがサービス・イベントのカテゴリに属していない場合、イベントはシステム・イベントとみなされます。

どのデータがアプリケーション・データまたはサービス・データとみなされて、どのデータがみなされないのかを設定できます。次のようにトポロジ・スクリプトを編集して、これらの指示を設定できます。

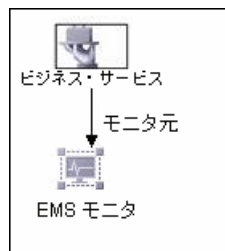
トポロジ・スクリプトの次の文字列を検索します。

if (subject != "system"):

変数 **subject** は、取得したサンプルのサブジェクト・フィールド(イベントのフィールドのマッピングで定義されます)を表します。値 **system** は、システム・データとみなされ、実行中ソフトウェア CI に転送されないアプリケーションからのデータを表す値の一例です。このシステム・データはノード CI に転送されます。

チケット

標準設定では、作成したトポロジには **BusinessService CI** と 2 つの **EMS モニタ CI** (実行中ソフトウェアを監視するものとノードを監視するもの) が含まれています。**BusinessService CI** と **EMS モニタ CI** には [Monitored by] 関係があります。



EMS モニタ CI から **BusinessService CI** に状態が渡されます。

トポロジ・スクリプトの編集

トポロジを設定するには、統合モニタの作成時に [トポロジ設定] 領域に表示されるトポロジ・スクリプトを編集する必要があります。[トポロジ設定] フィールドのスクリプトは、**SiteScope** に付属するスクリプト・エディタを使用して編集できます。

[**ノード**]、[**ノード - 実行中のソフトウェア**]、[**チケット**] のトポロジは、必要な情報を使用して事前に設定されています。次に、独自のトポロジを作成する場合に使用するスクリプトの編集ガイドラインを示します。

- ▶ このスクリプトを編集する前に **Jython** 言語を理解しておくことをお勧めします。
- ▶ **Jython** 言語では、スペースやタブの有無が区別されるため、スクリプトの編集時には注意が必要です。
- ▶ **import** セクションはそのままにしておき、追加のみ行ってください。
- ▶ スクリプトの本文は必須で、次のように構成されています。

```
def DiscoveryMain(Framework)
```

この本文の機能には、**Object State Holder Vector (OSHV)** の結果を作成する役割があります。これには、**CI データ**や、受信サンプルを **CI** にマッピングする方法が保持されています。

- ▶ 各 CI で使用できる EMS モニタ CI (リーフ・ノード) は 1 つのみです。
- ▶ イベント・スクリプトの場合、次の式がスクリプトの最後の行に必ず表示されます。

```
Framework.setUserObject("result_object",monitoredCiType)  
return OSHVResult
```

変数 `monitoredCiType` は、イベントを受信する EMS モニタ CI によって監視される CI タイプです。

取得する 1 つのイベントに対して複数の EMS モニタ CI をスクリプトで作成した場合、どの CI がイベントに属し、状態を渡すのかを決定する必要があります。これを行うには、適切な値を `monitoredCiType` に割り当てます。たとえば、アプリケーション CI 用の EMS モニタ CI と、ノード CI 用の EMS モニタ CI をスクリプトで作成した場合、イベントからノード CI に状態が渡されるには、変数 `monitoredCiType` の値が “host” である必要があります。

- ▶ サンプルの到着時に組み込みの “ログ機能” を使用してトポロジ・スクリプトをデバッグします。これを行うには、ログ・ファイルにレポートする情報のレベルとタイプを変更します。次のように、<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥conf¥core¥Tools¥log4j¥PlainJava¥log4j.properties ファイルのログ・ファイル設定を変更します。

- a **log4j.properties** ファイルをテキスト・エディタで開き、ファイルにある次の行を特定します。

```
# Jython prints  
log4j.category.PATTERNS_DEBUG=${loglevel}, integration.appender
```

次のように、`log4j.category.PATTERNS_DEBUG` の引数を `${loglevel}` から **DEBUG** に変更します。

```
log4j.category.PATTERNS_DEBUG=DEBUG, integration.appender
```

- b ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。この結果は `bac_integration.log` ファイルに記録されます。

トポロジ・スクリプト・プロパティ・ファイル

< SiteScope のルート・ディレクトリ > `¥discovery¥discovery_agent.properties` ファイルで、トポロジ・スクリプトの特性の多くが制御されます。通常、このファイルを編集する必要はありません。このファイルには、トポロジ・スクリプトの実行に必要なすべてのプロパティがあらかじめ含まれています。

証明書がある安全な BSM インストールで作業している場合、このファイルにあるいずれかのプロパティの編集が必要になる可能性があります。編集する場合、ファイルに次の行を挿入する必要があります。

```
appilog.agent.Probe.BasicAuth.Realm=MyPrivateFile
```

ここで、`myPrivateFile` は証明書領域の変数です。所定の URL がどの領域に属しているかを調べるには、Web ブラウザで URL を開いてポップアップ・ボックスの最初の行を確認します。

注 : `discovery_agent.properties` を変更した場合、SiteScope を再起動して変更を有効にする必要があります。

その他の参照先

トポロジ・スクリプトに関する一般的な情報については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『RTSM Developer Reference Guide』の「Create Jython Code」と「Developing Jython Adapters」を参照してください。

トポロジ・スクリプトで使用できる Java クラスについては、HP Business Service Management 文書ライブラリの『RTSM Developer Reference Guide』の「HP Data Flow Management API Reference」を参照してください。

タスク

統合モニタのデプロイ方法

注: 次の場所で作業しているときに統合モニタをデプロイできます。

- ▶ BSM をレポートするスタンドアロン SiteScope。
 - ▶ SAM 管理で直接。
 - ▶ SAM 管理を開く BSM の EMS 統合管理。
-

このタスクでは、統合モニタをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 535 ページの「統合の計画」
- ▶ 535 ページの「SiteScope の選択」
- ▶ 535 ページの「統合モニタのグループの作成」
- ▶ 536 ページの「統合モニタの設定」
- ▶ 537 ページの「BSM での (メトリック・フローの) インジケータ・マッピングの編集」
- ▶ 538 ページの「フィールドのマッピングとトポロジ・スクリプトの編集」
- ▶ 539 ページの「BSM の EMS 統合アプリケーションの設定」

1 統合の計画

詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Solutions and Integrations』の「How to Integrate Data from Third-Party Sources (EMS Data) into HP Business Service Management」の概要と最初の 3 つの手順を参照してください。

2 SiteScope の選択

統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。

- ▶ SiteScope スタンドアロンでは、SiteScope インスタンスを選択して開きます。
- ▶ システム可用性管理で、統合モニタをデプロイする SiteScope サーバを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「[システム可用性管理] ページ」を参照してください。
- ▶ [EMS 統合管理] で、[新規統合] または [統合を編集します] ボタンをクリックします。[統合を編集します] ダイアログ・ボックスで、**システム可用性管理** 表示枠のリンクをクリックして、SiteScope サーバを選択できる [システム可用性管理] ウィンドウを開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Solutions and Integrations』の「Edit Integration Dialog Box」を参照してください。

3 統合モニタのグループの作成

統合モニタ専用のグループを作成することをお勧めします。これにより、BSM にレポートされるデータを統合からのデータとして簡単に識別できるようになります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4 統合モニタの設定

モニタを設定して、モニタの設定に必要なデータを追加する必要があります。次のアプリケーション固有の統合を選択できます。

- ▶ HP OM イベント・モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください）
- ▶ HP Service Center モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください）
- ▶ NetScout イベント・モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください）

次の汎用統合モニタを選択できます。

- ▶ テクノロジ・データベース統合モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください）
- ▶ テクノロジ・ログ・ファイル統合モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください）
- ▶ テクノロジ SNMP トラップ統合モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください）
- ▶ テクノロジ Web サービス統合モニタ（詳細については、『Monitor Reference』ガイドを参照してください）

5 BSM での（メトリック・フローの）インジケータ・マッピングの編集

BSM のインジケータを選択して、サードパーティ・メトリックにマップすることもできます。

- a BSM では、フィールド・マッピングで定義される EMS 合成モニタのタイプである新しいモニタ・タイプのインジケータ割り当てを作成します。タスクの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての作成方法と管理方法」を参照してください。

例：

合成モニタ・タイプが `MyDiskMonitorType` の場合、`MyDiskMonitorType` モニタの [新規割り当て] ダイアログ・ボックスで新しいモニタ・タイプ `MyDiskMonitorType` を作成し、測定値パターンに `diskFull` を入力します（これはフィールド・マッピングで定義されるメトリック名です）。`Disk` など、この測定値をマッピングするインジケータを選択します。

注： コンピュータの CI タイプに適切なインジケータを選択する必要があります。

- b インジケータ・マッピングの定義後は、[変更の適用] をクリックして、SiteScope にインジケータ・マッピングを適用します。
- c SiteScope で、統合モニタ・インスタンスを作成し、**メトリック**・サンプル・タイプをロードします。
- d [フィールドのマッピング] セクションで、たとえば、次を使用して入力します。

```
MonitorName="MyMonitor"
TargetName="ServerName"
MonitorState="Disk is almost full"
MonitorType="MyDiskMonitorType"
MeasurementName(1)="diskFull"
Value(1):DOUBLE=90.0
```

- e [保存] をクリックします。合成モニタに定義されたマッピングに応じて、トポロジとデータで適切なインジケータが送信されます。

6 フィールドのマッピングとトポロジ・スクリプトの編集

汎用統合モニタまたは特別なカスタマイズでは、次の作業を行う必要があります。

- ▶ サンプル・フィールドのマッピング・スクリプト ([**イベント**], [**チケット**], [**メトリック**]) を選択して、組織のニーズに合わせて編集します。マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。概念の詳細については、546 ページの「統合モニタのフィールドのマッピングの概要」を参照してください。
- ▶ トポロジ・スクリプト・テンプレートを選擇して、トポロジ設定を編集します。概念の詳細については、526 ページの「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」を参照してください。

利用可能なトポロジ・スクリプト・テンプレートは、選擇したフィールドのマッピングにより異なります。

イベントのサンプル・スクリプト	チケットのサンプル・スクリプト	メトリックのサンプル・スクリプト
<p>次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [ノード] では、[ノード]と[EMS モニタ CI]を作成します ▶ [ノード-実行中のソフトウェア] では、[ノード] , [実行中ソフトウェア], [EMS モニタ CI] を作成します ▶ [カスタム] では、トポロジのユーザ定義トポロジ・スクリプトに応じて CI を作成します 	<p>次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [チケット] では、[ビジネス サービス] と [EMS モニタ CI] を作成します ▶ [カスタム] では、トポロジのユーザ定義トポロジ・スクリプトに応じて CI を作成します 	<p>次のいずれかのオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [SiteScope トポロジ] では、SiteScope モニタとコンピュータ CI の基本的な SiteScope トポロジを作成します ▶ [トポロジなし]では、トポロジなしのデータのみを送信します ▶ [カスタム] では、ユーザ定義トポロジ・スクリプトで定義したトポロジに応じて CI を作成します

7 BSM の EMS 統合アプリケーションの設定

注: 測定値統合を設定する場合、BSM の [SAM システム可用性管理] にアクセスし、新しい統合を設定する必要はありません。モニタを作成して、[レポート トポロジ] オプションを選択するだけです。

モニタの設定に加え、BSM の EMS 統合アプリケーションの設定が必要になります。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『Solutions and Integrations』の「How to Integrate Data from Third-Party Sources (EMS Data) into HP Business Service Management」の「Create or customize a data assignment」の手順から残りの手順を参照してください。

参照情報

廃止された統合モニタのリスト

次の表に、廃止された統合モニタと、それぞれの代替となるテクノロジー統合モニタを示します。

廃止されたモニタ	推奨モニタ
Avalon イベント	テクノロジー SNMP トラップ
BMC Patrol イベント	テクノロジー SNMP トラップ, テクノロジー・ログ・ファイル
BMC Patrol	テクノロジー・ログ・ファイル
CA Unicenter イベント (1)	テクノロジー SNMP トラップ
Compaq Insight Manager イベント (2)	テクノロジー・データベース
HP Systems Insight Manager イベント	テクノロジー・データベース
NetCool イベント	テクノロジー SNMP トラップ
NetIQ (3)	テクノロジー・データベース
Remedy チケット発行	テクノロジー・データベース
Tivoli TEC イベント	テクノロジー・データベース
Tivoli DM	テクノロジー・データベース
WhatsUp イベント (4)	テクノロジー・ログ・ファイル

次に、テクノロジー・モニタを設定して、廃止されたモニタを置換する方法の例を示します。

(1) CA Unicenter エージェントを設定して、テクノロジー置換モニタが設定されている SiteScope ホスト・マシンに SNMP トラップを送信します。

(2) Compaq Insight Manager バージョン 7.0 の場合、**Notices**, **NoticeType**, **Devices**, **StringResource**, **StringTableLarge** のテーブルから読み取るように SiteScope 置換モニタを設定します。

(3) NetIQ バージョン 5.0 および 5.1 の場合、テーブル **Data** (未処理データが含まれています) および **DataHeader** (NetIQ で監視するオブジェクトのメタデータが含まれています) に対してクエリを実行するように SiteScope 置換モニタを設定します。

(4) WhatsUp バージョン 8.0 の場合、ログ・ファイル **EV- <日付> .tab** から読み取るように SiteScope 置換モニタを設定します。

注 : モニタ設定ファイル **main.config** は、SiteScope 8.x から使用されなくなりました。**main.config** でサポートされていたすべての機能は、現在 **event.config** でサポートされており、**[フィールドのマッピング]** 設定で使用できます。

🔍 トラブルシューティングと制限事項

本項では、SiteScope 統合モニタを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 542 ページの「統合モニタのログ」
- ▶ 543 ページの「その他のログおよびトラブルシューティングの問題」
- ▶ 544 ページの「トラブルシューティングの追加情報」

統合モニタのログ

統合モニタの活動は、以下に記録されます。< SiteScope ルート・ディレクトリ > %logs%\RunMonitor.log および < SiteScope ルート・ディレクトリ > %logs%\bac_integration%\bac_integration.log。

ログ・ファイルにレポートする情報のレベルとタイプを変更するには、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %conf%\core%\Tools%\log4j%\PlainJava%\log4j.properties ファイルのログ・ファイル設定を変更します。ログ記録メカニズムを次のように設定できます。

- ▶ ログに記録された情報を、標準設定の詳細度よりも低いまたは高い状態でレポートする。
- ▶ 統合モニタから BSM に送信されるすべてのサンプルをログに記録する。
- ▶ 外部 EMS システムから受信したすべてのイベントをログに記録する。

ログの設定を変更するには、次の手順を実行します。

- 1 log4j.properties** ファイルをテキスト・エディタで開きます。
- 2** 統合モニタから BSM に送信されるサンプルをログに記録するように指定するには、次の手順を実行します。
 - a** ファイルの次の行を特定します。

```
log4j.category.EmsSamplePrinter=${loglevel}, integration.appender
log4j.additivity.EmsSamplePrinter=false
```
 - b** 次のように、`log4j.category.EmsSamplePrinter` の引数を `${loglevel}` から `DEBUG` に変更します。

```
log4j.category.EmsSamplePrinter=DEBUG, integration.appender
```

- c ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。この結果は `bac_integration.log` ファイルに記録されます。
- 3 外部 EMS システムから受信したすべてのイベントをログに記録するように指定するには、次の手順を実行します。
- a ファイルの次の行を特定します。


```
log4j.category.EmsEventPrinter=${loglevel}, monitors.appender
log4j.additivity.EmsEventPrinter=false
```
 - b 次のように、`log4j.category.EmsEventPrinter` の引数を `${loglevel}` から `DEBUG` に変更します。


```
log4j.category.EmsEventPrinter=DEBUG, monitors.appender
```
 - c ファイルを保存します。変更が有効になるまで数秒かかる場合があります。この結果は `RunMonitor.log` ファイルに記録されます。

その他のログおよびトラブルシューティングの問題

- ▶ < SiteScope のルート・ディレクトリ > `¥logs¥error.log` および < SiteScope のルート・ディレクトリ > `¥logs¥bac_integration¥bac_integration.log` でエラーを探します。
- ▶ サンプルが作成され SiteScope から送信されているが、BSM のサービス状況、イベント・ログ、SiteScope レポートにない場合、< BSM のルート・ディレクトリ > `¥log¥mercury_wde¥` ディレクトリの `wde.logl` および `loader.logl` ファイルで文字列 `ERROR` または `WARN` を検索し、フィールドや値の欠落が原因でサンプルが削除されていないかどうかを確認します。
- ▶ < BSM のルート・ディレクトリ > `¥conf¥core¥Tools¥log4j¥EJB¥ble.properties` ファイルでサービス状況のログ・レベルを上げて、サービス状況でサンプルが受信されていることを確認します。次のパラメータを特定し、ログ・レベルの状態を `DEBUG` に変更します。

```
log4j.category.Trinity.BLE_SAMPLES=DEBUG, trinity.samples.appender
```

この結果は < BSM のルート・ディレクトリ > `¥log¥EJBContainer¥TrinitySamples.log` に記録されます。

ヒント: 問題の原因を特定したら、システムが過負荷にならないようにログ・レベルを標準設定にすることをお勧めします。

トラブルシューティングの追加情報

トラブルシューティングの追加情報は、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents> (英語サイト)) (技術情報にログオンするには HP Passport ID が必要です) およびドキュメントの次の節にあります。

- ▶ テクノロジ・データベース統合モニタについては、『Monitor Reference』ガイドの「Troubleshooting the Technology Database Integration Monitor」を参照してください。
- ▶ テクノロジ・ログ・ファイル・モニタについては、『Monitor Reference』ガイドの「Troubleshooting the Technology Log File Integration Monitor」を参照してください。
- ▶ テクノロジ SNMP トラップ・モニタについては、『Monitor Reference』ガイドの「Troubleshooting the Technology SNMP Trap Integration Monitor」を参照してください。
- ▶ テクノロジ Web サービス統合モニタについては、『Monitor Reference』ガイドの「Troubleshooting the Technology Web Service Integration Monitor」を参照してください。

15

統合モニタのフィールドのマッピング

本章の内容

概念

- ▶ 統合モニタのフィールドのマッピングの概要 (546 ページ)
- ▶ フィールドのマッピングの構造について (549 ページ)

参照情報

- ▶ イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定 (550 ページ)
- ▶ メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定 (556 ページ)
- ▶ チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定 (562 ページ)
- ▶ イベント・ハンドラの構造 (566 ページ)

概念

統合モニタのフィールドのマッピングの概要

統合モニタとそのフィールドのマッピング・スクリプトを設定して、Enterprise Management Systems や自動サポート・システムなどの管理アプリケーションのイベントおよび測定値データをキャプチャできます。

統合モニタは、モニタの設定のユーザ・インタフェースでカスタマイズするフィールドのマッピングによって異なります。マッピングによって、受信データの処理や BSM に転送される出力サンプルが定義されます。

特定の EMS アプリケーション (HP OM, HP Service Center, NetScout など) で使用するよう設計された統合モニタは、フィールドのマッピング・スクリプトを編集しなくても設定できます。これらのマッピングは HP によって事前に定義されているため、特別なカスタマイズが必要な場合以外は変更する必要はありません。これらのフィールドのマッピング・スクリプトの編集の詳細については、デプロイするモニタのユーザ・インタフェースの各ページにあるフィールドのマッピング要素の説明を参照してください。

テクノロジー統合モニタ (テクノロジー SNMP トラップ・モニタ, テクノロジー・ログ・ファイル・モニタ, およびテクノロジー・データベース・モニタ) の場合、サンプル・タイプを選択する必要があります。必要なスクリプトのテンプレートはフィールドのマッピングのテキスト・ボックスに直接ロードされます。組織のニーズに合わせてフィールドのマッピング・スクリプトを編集する必要があります。テクノロジー Web サービス統合モニタのフィールドのマッピングもカスタマイズする必要があります。

次に、選択できるサンプル・タイプを示します。

- ▶ **イベント** : イベント・データを BSM に転送する場合に選択します。

[**イベント**] を選択し、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合、次のトポロジ・スクリプト・テンプレートから選択できます。[**ノード**]、[**ノード - 実行中のソフトウェア**]、または [**カスタム**] (自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合に限りです)。

注 :

- ▶ EMS アプリケーションによって送信されるイベントは、イベントのサンプルです。それらのイベントは、BSM の オペレーション管理 イベントと同じではありません。
- ▶ SiteScope の 11.10 以前のバージョンを BSM 9.00 に接続している場合、モニタのトポロジ・テンプレート・スクリプトでは**ホスト・アプリケーション**のトポロジ・スクリプト・テンプレートは使用できません。**ホスト・アプリケーション**をレポートする既存の統合 (BSM 8.x に接続されている SiteScope で作成) のみ、引き続き BSM 9.00 にレポートします。このスクリプト・テンプレート・タイプを使用して新しい統合を作成することはできません。

- ▶ **メトリックス** : メトリック・データを BSM に転送する場合に選択します。

[**メトリック**] を選択し、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合、次のトポロジ・スクリプト・テンプレートから選択できます。

- ▶ **SiteScope トポロジ** : SiteScope トポロジ (モニタ) を送信する場合に選択します。これは標準設定です。SiteScope ではこのデータをノード CI のサブタイプであるコンピュータ CI にレポートします。
- ▶ **トポロジなし** : トポロジを送信しない場合に選択します (ただし、データおよび設定のサンプルはまだ送信される)。
- ▶ **カスタム** : 独自のトポロジを作成できます。自分で Jython 言語でトポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している必要があります。

注： SiteScope は、BSM で定義されたカスタムの EMS 合成モニタのインジケータ定義を使用します（コンピュータ CI タイプに適用）。別の ETI がモニタのフィールド・マッピングで指定された場合、これにより標準設定のインジケータ定義が上書きされます。

▶ **チケット：** チケット・データを BSM に転送する場合に選択します。

[**チケット**] を選択し、トポロジ設定を使用して BSM に統合する場合、次のトポロジ・スクリプト・テンプレートを選択できます。[**チケット**] または [**カスタム**]（自分で Jython トポロジ・スクリプトを作成する必要があるため、Jython 言語を十分理解している場合に限りです）。

トポロジ設定の選択の詳細については、526 ページの「テクノロジー統合モニタのトポロジ設定」を参照してください。

注： フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプト・テンプレートで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、各サンプル・タイプの表を参照してください。

フィールドのマッピングの構造について

フィールドのマッピングには、データが統合モニタに到着したときの処理方法の指示が含まれています。フィールドのマッピングを構成する指示は、イベント・ハンドラにグループ化されます。イベント・ハンドラは、特定のデータに関連する指示が含まれる独立したセクションです。各イベント・ハンドラには、**一致条件**があります。SiteScope は、この条件に基づいて到着イベントに特定のイベント・ハンドラを使用するかどうかを決定できます。

イベントまたはメトリック・データが統合モニタに到着すると、フィールドのマッピングの各イベント・ハンドラの**一致条件**が、表示されている順序で繰り返しテストされます。一致するハンドラが検出された場合、モニタはそのハンドラの指示を使用してイベントを処理し、ハンドラに定義されたアクション（BSM への転送や破棄など）を実行します。最初に一致すると、それ以降のセクションはチェックされません。一致がない場合、イベントは破棄されます。

イベント・ハンドラ以外にも、フィールドのマッピングには統合モニタ・エンジン全体に影響を与える特別なエントリが含まれています。これらの値は `[$DEFAULT_PARAMETERS$]` セクションにグループ化されます。このセクションでは、すべてのハンドラで共通するタグの標準設定値が定義されます。フィールドのマッピングのこのセクションで任意のタグを設定できます。これは、一致するイベント・ハンドラで上書きされないかぎり、レポートされる値の作成に使用されます。受信イベントごとに、一致するイベント・ハンドラの前にこのイベント・ハンドラが必ず実行されます。

イベント・ハンドラの構造の詳細については、566 ページの「イベント・ハンドラの構造」を参照してください。

参照情報

イベント・サンプルのフィールドのマッピングの設定

イベントのサンプル・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。イベント・スクリプトをロードするには、統合モニタのフィールドのマッピングを設定するときに **[イベント]** サンプル・タイプを選択します。次に、**[フィールドのマッピング]** テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を **[フィールドのマッピング]** テキスト・ボックスにコピーします。

本項の内容

- ▶ 551 ページの「イベント・スクリプトの必須値」
- ▶ 552 ページの「イベント・スクリプトの任意値」
- ▶ 554 ページの「条件式の例 1」
- ▶ 554 ページの「条件式の例 2」
- ▶ 555 ページの「イベント・スクリプトの例」

イベント・スクリプトの必須値

次の表に、イベント・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
time_stamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds(\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS"). time_stamp:DOUBLE=time()
severity	INT	事前に設定された次のいずれかの重大度になります(該当の整数に基づきます)。 0:SEVERITY_UNKNOWN 1:SEVERITY_INFORMATIONAL 2:SEVERITY_WARNING 3:SEVERITY_MINOR 4:SEVERITY_MAJOR 5:SEVERITY_CRITICAL	severity:INT=SEVERITY_MINOR
target_name	STRING	イベントを生成したデバイスまたはホストの名前。	target_name=\$hostName target_name=resolveHostName (String host name)
status	STRING	イベントの状態(外部 EMS での名称)。	status="OPEN" status="ASSIGNED" status="CLOSED"
subject	STRING	イベントの対象(CPU, SAP アプリケーション, ハード・ディスクなど)。イベント・ソースを表す中 / 高レベルの階層です。	subject="DISK"

フィールド名	タイプ	説明	例
instance	STRING	イベントを生成した対象のインスタンス (D:¥ など)。イベント・ソースを表す最下位レベルの階層です。	instance="E:¥¥"
description	STRING	イベントのテキスト説明。	description="free space on drive e is below 10%"
data_source	STRING	イベントを生成したシステム。	data_source="HP OVO"

イベント・スクリプトの任意値

次の表に、イベント・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
target_ip	STRING	イベントを生成したホストまたはデバイスの IP。	target_ip=\$IPString
object	STRING	イベント・ソースを表す階層の任意レベル。	object="OS"
event_id	STRING	該当のイベントの一意の識別子。	event_id=\$id
logical_group	STRING	該当のイベントの論理グループ。	logical_group="error messages"
monitor_group	STRING	該当のイベントをレポートしたモニタ・グループ。	monitor_group="log monitors on ¥¥hostname"
orig_severity_name	STRING	重大度 (外部 EMS での名称)。	orig_severity_name = "Cleared"
acknowledged_by	STRING	該当のイベントを確認したユーザの名前。	acknowledged_by = \$username
owner	STRING	該当のイベントを所有するユーザの名前。	owner="admin"

フィールド名	タイプ	説明	例
value	DOUBLE	イベントの数値を転送するために使用されます。	value=\$thresholdViolated
attr1	STRING	予備データ・スロット。	attr1=\$history
attr2	STRING	予備データ・スロット。	attr2=\$moreHistory
attr3	STRING	予備データ・スロット。	attr3="Design"
attr4	STRING	予備データ・スロット。	attr4=\$MonitorOutput
attr5	STRING	長い文字列用の予備データ・スロット。	attr5=\$Longhistory

イベント・サンプルのホスト DNS 解決

BSM 統合では、ノード CI の作成に使用するフィールドに FQDN（完全修飾ドメイン名）と有効な IP アドレスの両方が必要です。

FQDN, IP アドレス, またはその両方がわからない場合, フィールドのマッピングで次の関数を使用して名前を解決し, 統合のソースからアクセスできます。

target_name=resolveHostName(\$SomeHost)

target_ip=resolveHostIP(\$SomeHost)

注: 変数 **\$SomeHost** は, 統合のソースの変数で置換される必要があります。

次の場合これらの関数は必要ありません。

- ▶ 統合でアクセスするソースから FQDN, IP アドレス, またはその両方を取得できる。この場合, **target_name=** の値 (FQDN) と **target_ip=** の値を, 関数を使用せずに入力する必要があります。
- ▶ SiteScope サーバで, 統合でアクセスするソースからサーバの FQDN, IP アドレス, またはその両方を解決できない。この場合, 関数で有効な値を生成できない可能性があります。

条件式の例 1

```
severity:INT=$var6.equals("red") ?SEVERITY_CRITICAL  
: SEVERITY_INFORMATIONal
```

この例では, 6 番目の変数バインドの値が文字列 **赤** と比較されます。変数バインドが文字列 **red** に等しい場合は **severity** タグの値が **SEVERITY_CRITICAL** に設定され, 等しくない場合は **SEVERITY_INFORMATIONal** に設定されます。

条件式の例 2

```
severity:INT=$var6.equals("red") ?SEVERITY_CRITICAL :  
$var6.equals("green") ?SEVERITY_INFORMATIONal :$var6.equals("yellow")  
? SEVERITY_MINOR :SEVERITY_WARNING
```

この例では, 条件演算子を連結して連鎖的に決定が行われます。6 番目の変数バインドに文字列 **red** が保持されている場合, **severity** タグの値は **SEVERITY_CRITICAL** になります。6 番目の変数バインドに文字列 **green** が保持されている場合, **severity** タグの値は **SEVERITY_INFORMATIONal** になります。変数バインドに文字列 **yellow** が保持されている場合, タグの値は **SEVERITY_MINOR** になります。前述の条件に 1 つも該当しない場合, タグの値は **SEVERITY_WARNING** になります。

イベント・スクリプトの例

次の例では、状態が "OPEN" のイベントと、ユーザによってクリアされたイベントの 2 つのタイプのイベントが送信されます。データは、\$ 表記を使用して受信イベント・フィールドから取得されます。ほかのすべてのイベントは、最後のハンドラによって破棄されます。

```
[DEFAULT_PARAMETERS$]
#####
# NOTE: the following parameters are mandatory #
#####
time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds($time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS")
severity:INT= SEVERITY_UNKNOWN
target_name=$Device
status=$Status
subject="EMS X Events"
instance=$target
description=$description
data_source="EMS X"

#send an open event with the value in value fields and with the event id
[OPEN events]
$MATCH="OPEN".equals($Status)
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
value:DOUBLE=parseDouble($threshold)
event_id=$uid

#send clear events with the event id and acknowledging username
[clear events]
$MATCH="CLEAR".equals($Status)
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
event_id=$uid
acknowledged_by=$ClearedBy

[event sink]
$MATCH=true
$ACTION=DISCARD
```

メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定

メトリックのサンプル・タイプは、外部システムによって収集されたメトリックを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。メトリック・スクリプトをロードするには、統合モニタのフィールドのマッピングを設定するとき [メトリック] サンプル・タイプを選択します。次に、[フィールドのマッピング] テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を [フィールドのマッピング] テキスト・ボックスにコピーします。

本項の内容

- ▶ 557 ページの「メトリック・スクリプトの必須値」
- ▶ 558 ページの「メトリック・スクリプトの任意値」
- ▶ 560 ページの「メトリック・スクリプトの例」

メトリック・スクリプトの必須値

次の表に、メトリック・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
TimeStamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	TimeStamp:DOUBLE=time()
Quality	INT	品質 (SiteScope での名称) : 使用可能な値は, QUALITY_ERROR, QUALITY_WARNING, QUALITY_GOOD です。	Quality:INT=QUALITY_ERROR
MonitorName	STRING	論理モニタ名。	MonitorName="NT cpu Monitor"
MonitorState	STRING	モニタの状態 (N/A, Good, Error など)。	MonitorState="Received " + \$count + " events"
MonitorType	STRING	モニタ・タイプ。	MonitorType="System Monitor"
TargetName	STRING	該当の監視の対象 (ホスト名など)。	TargetName=\$Device
Measurement Name(N)	STRING	N 番目のメトリックの名称。	MeasurementName(1)="CPU Temperature"
Value(N)	DOUBLE	N 番目のメトリックの値。	Value(1):DOUBLE=\$CPU Temperature

メトリック・スクリプトの任意値

次の表に、メトリック・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
Measurement ETI	STRING	<p>ETI の表示名。</p> <p>注: BSM 9.00 を使用する場合、統合フィールド・マッピングに関連するインジケータ名を追加するか（追加しない場合、代わりにシステム KPI が使用される）、SAM システム可用性管理でインジケータを設定します。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「インジケータ割り当ての設定」を参照してください。</p>	MeasurementETI(1)= "インジケータの表示名"

フィールド名	タイプ	説明	例
Measurement CI Hint	STRING	<p>監視対象の CI を特定し、測定値をそれらの CI に関連付ける場合に使用する CI 解決のヒント：SiteScope では、モニタの内部 ID に基づくフォーマットで用意済みの CI 解決のヒントを送信します。</p> <p>EMS 測定値フィールド・マッピングでは、次の場合、カスタム CI 解決のヒントを送信する必要が生じることがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶カスタム・トポロジ・スクリプトを使用したモニタ CI のないカスタム・トポロジの送信する場合。 ▶サードパーティの測定値を転送し、既存のトポロジにそれらを接続することのみが必要な場合。この場合、フィールド・マッピングを作成し、CI 解決のヒントを提供し、統合モニタの [トポロジ設定] で [トポロジなし] を選択します。 <p>CI 解決のヒントは、次の注記に示すように BSM で認識可能な形式で指定する必要があります。</p>	MeasurementCIHint(1)="@@SCDAM038.testlab"

注： CI 解決のヒントには次の形式を使用できます。

- 1 ノード CI のコンテキストに存在しないスタンドアロン CI：**たとえば、ビジネス・アプリケーション、ビジネス・サービス、または Siebel Enterprise。CI 解決のヒントは CI 名である必要があります。
例： myBusinessService という名前のビジネス・サービス CI の場合、CI 解決のヒントは MeasurementCIHint(1)="myBusinessService" になります。CI 名は RTSM で一意である必要があります。
- 2 ノード・トポロジ：** CI 解決のヒントは完全修飾ドメイン名または @@ 区切り文字の後に続くノードの IP アドレスである必要があります。
例： IP アドレス 12.34.56.78 のノードをレポートする場合、CI 解決のヒントは "@@ 12.34.56.78" または "@@ <マシン名>" になります。
- 3 ノード CI のコンテキストに存在する CI：** 実行中ソフトウェア、ノード要素、ネットワーク・エンティティから継承する CI タイプに属する CI など。ノード CI および @@ で区切られているノード CI に接続されている CI の両方のヒントで次のように指定する必要があります。
例： ノード CI に接続されている Oracle データベース CI の場合、CI 解決のヒントの形式は "< oraclesid > : <製品名> @@ < fqdnhostname >" になります。

メトリック・スクリプトの例

次の例では、2 つのメトリックが送信されます。最初のメトリック (MeasurementName(1)) では、\$legend フィールドから名前が、\$value フィールドから値が取得されます。2 番目のメトリック (MeasurementName(2)) では、定数名 CPU Temperature が使用され、\$CPUTemp フィールドからその値が取得されます。


```

#####
#       EMS Integration metricsconfig file #
# use this file to send metrics to HP Business Service Management #
#####
[$DEFAULT_PARAMETERS$]
# time stamp in the seconds since Jan 1st 1970 format.
TimeStamp:DOUBLE=str_to_seconds($time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS")

# quality in SiteScope terms QUALITY_ERROR, QUALITY_WARNING,
QUALITY_GOOD
Quality:INT=QUALITY_ERROR

# Logical monitor name
MonitorName=$kpName

#target, e.g. host name
TargetName=$parentMachineName

#the status string of the monitor (e.g.: "Log file read, 3 matches found")
MonitorState="The monitor status is: "+ $status

#the monitor type (e.g. "Log Monitor", "CPU Monitor")
MonitorType="NetIQ measurements"

#measurement name
MeasurementName(1)=$legend
#value as double
Value(1):DOUBLE=parseDouble($value)

#measurement name
MeasurementName(2)="CPU Temperature"
#value as double
Value(2):DOUBLE=parseDouble($CPUTemp)
#####
# To send more than one measurement per DB row #
# add pairs #
# MeasurementName ( * ) = #
# Value ( * ) :DOUBLE= #
# where * = 1,2,..,n #
# #####
[allR]
$MATCH=true
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(ss_t)

```

このスクリプトで複数のメトリックを指定する場合は、各メトリックについて個別のサンプルが送られます。

注: 各ファイルについて複数のメトリックを指定する場合は、メトリックに連続した番号を付ける必要があります。

失敗した場合は **RunMonitor.log** にエラーが表示されますが、エラーはモニタの状態に影響しません。

チケット・サンプルのフィールドのマッピングの設定

チケットのサンプル・タイプは、外部システムによって収集されたイベントを抽出し、BSM にインポートするために使用されます。チケット・スクリプトをロードするには、統合モニタのフィールドのマッピングを設定するときに **[チケット]** サンプル・タイプを選択します。次に、**[フィールドのマッピング]** テキスト・ボックスの内容をコピーしてテキスト・エディタに貼り付け、設定を変更します。変更が完了したら、その内容を **[フィールドのマッピング]** テキスト・ボックスにコピーします。

本項の内容

- ▶ 563 ページの「チケット・スクリプトの必須値」
- ▶ 564 ページの「チケット・スクリプトの任意値」
- ▶ 565 ページの「条件式の例」
- ▶ 565 ページの「チケット・スクリプトの例」

チケット・スクリプトの必須値

次の表に、チケット・スクリプトの必須値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
time_stamp	DOUBLE	1970 年 1 月 1 日以降の秒単位のタイムスタンプ。	time_stamp:DOUBLE=str_to_seconds(\$time,"yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS").
severity	INT	事前に設定された次のいずれかの重大度になります (該当の整数に基づきます)。 SEVERITY_UNKNOWN SEVERITY_INFORMATIONAL SEVERITY_WARNING SEVERITY_MINOR SEVERITY_MAJOR SEVERITY_CRITICAL	4".equals(\$severity) ? "Low" : ("3".equals(\$severity) ? "Average" : ("2".equals(\$severity) ? "High" : ("1".equals(\$severity) ? "Critical" : "Unknown")))
target_name	STRING	チケットを生成したエンティティ (通常はサービス) の名前。	target_name="mail service" (ここに静的文字列を入力しないでください。チケットから動的に取得する必要があります)
data_source	STRING	チケットを生成したシステム。	data_source="ticketing" (この文字列は、HP ServiceCenter 統合ではなく汎用テクノロジー統合モニタ用に編集する必要があります)
ticket_id	STRING	チケットの ID。	ticket_id=112233
ticket_state	STRING	チケット・システムで定義したインシデント・ライフサイクルの状態。	"Open" / "Closed"

フィールド名	タイプ	説明	例
ticket_type	STRING	チケット・システムで定義したインシデントのタイプ。	"Incident"
orig_severity_name	STRING	重大度 (外部 EMS での名称)。	orig_severity_name = "Cleared"

チケット・スクリプトの任意値

スクリプトには、チケット・スクリプトで使用できる任意値を説明するためのコメントが含まれています。次の表に、チケット・スクリプトの任意値を示します。

フィールド名	タイプ	説明	例
subject	STRING	イベント・ソースを表す中/高レベルの階層。	CPU, SAP application, hard disk
instance	STRING	イベントを生成した対象のインスタンス。イベント・ソースを表す最下位レベルの階層です。	D:¥¥
object	STRING	チケット・ソースを表す階層の任意レベル。	object="OS"
logical_group	STRING	該当のチケットの論理グループ。	logical_group="error messages"
monitor_group	STRING	該当のチケットをレポートしたモニタ・グループ。	monitor_group="log monitors on ¥¥hostname"
elapsed_time	STRING	チケットの経過時間。	
orig_severity_name	STRING	チケット・システムで定義した重大度の名前。	
attr1	STRING	予備データ・スロット。	attr1=\$history
attr2	STRING	予備データ・スロット。	attr2=\$moreHistory

フィールド名	タイプ	説明	例
attr3	STRING	ビジネス・サービスを所有する組織の名前(ビジネス・サービス統合トポロジ・フローで使用する場合)。	Attr3="XYZ Inc"
attr4	STRING	ビジネス・サービスを所有する組織のタイプ (ビジネス・サービス統合トポロジ・フローで使用する場合)。	Attr4="department"
attr5	STRING	長い文字列用の予備データ・スロット。2000 文字までの値に使用します。	attr5=\$Longhistory

条件式の例

```
4".equals($severity) ? "Low" : ("3".equals($severity) ? "Average" :
("2".equals($severity) ? "High" : ("1".equals($severity) ? "Critical" : "Unknown")))
```

この例はチケット・サンプルの重大度を設定します。チケット・システムで使用されているステータス項と BSM で使用されているステータス項で照合を行います。

チケット・スクリプトの例

```
[$DEFAULT_PARAMETERS$]
time_stamp:DOUBLE=$time_stamp
ticket_id=$ticket_id
ticket_state=$ticketStatus
severity:INT=$severity
target_name=$target_name
data_source="ticketing"
ticket_type="Incident"
orig_severity_name="4".equals($severity) ? "Low" : ("3".equals($severity) ? "Average" :
("2".equals($severity) ? "High" : ("1".equals($severity) ? "Critical" : "Unknown")))
```

イベント・ハンドラの構造

次に、イベント・ハンドラの構造を示します。

```
[name]
Matching condition
Action directive
Tags
```

一致条件、**アクション・ディレクティブ**、および追加ディレクティブの名前は、ドル記号 (\$) で開始します。タグの名前はドル記号で開始されません。

フィールドのマッピングではコメントを使用できます。コメントは、#, !, または ; のいずれかの文字で開始します。これらの文字から行末までがコメントになります。

注: フィールドのマッピングを使った作業では、スクリプト・テンプレートで定義した必須フィールドおよび任意フィールドのみを使用します。詳細については、次項の表を参照してください。

本項の内容

- ▶ 567 ページの「一致条件」
- ▶ 571 ページの「基本的な文字列式」
- ▶ 571 ページの「基本的な条件式」
- ▶ 571 ページの「アクション・ディレクティブ」
- ▶ 572 ページの「タグ」
- ▶ 573 ページの「統合モニタのフィールドのマッピングの例」

一致条件

一致条件は有効なブール式である必要があります。式には、次の表で定義されている演算子と関数の呼び出しが含まれています。式では、ドル記号 (\$) 表記を使用して、処理されるイベントのコンテンツにアクセスできます。たとえば、受信イベントが SNMP トラップの場合、そのエンタープライズ OID に \$oid としてアクセスできます。モニタ固有の名前については、関連するモニタ・タイプのドキュメントを参照してください。

注：一致条件の式は、4,000 文字に制限されています。

一致条件の形式は次のようになります。

`$MATCH=Boolean expression`

このブール式は以下の表に示す式の 1 つです。この説明では、この式はタグに値を割り当てるために使用されることもあります (572 ページの「タグ」を参照)。

式と関数	説明	例	次の場合に True
<, <=, >, >=, ==, !=	式が数値として正しいかどうかチェックします。INT または DOUBLE フィールドで使用できます。	\$MATCH=\$numberOfLines == 100	\$numberOfLines が 100 に等しい
		\$MATCH=\$numberOfColumns <= 107	\$numberOfColumns が 107 以下
equals(String)	文字列の相等性がチェックされます。	\$MATCH="ERROR".equals(\$status)	\$status が単語 ERROR に等しい
		\$MATCH=\$status.equals("ERROR")	\$status が単語 ERROR に等しい

式と関数	説明	例	次の場合に True
true, false	定数のブール値。	\$MATCH= true	常に true。
&&,	前述のブール式を結合するために使用されます。	\$MATCH= \$status.equals ("ERROR") \$numberOfLines == 100	\$status が単語 ERROR に等しいか、 \$numberOfLines が 100 に等しい
time()	1970 年 1 月 1 日 以降の現在の時刻 が秒単位で返され ます。DOUBLE フィールドで使用 できます。	\$MATCH= \$timeStampField > (time()-600)	値 \$timeStampField が 10 分前よりも新 しい (秒単位, 1970 年 1 月 1 日以降)
parseInt (String), parseDouble (String),	文字列を数値に変換 する場合に使用 します。入力文字 列は、有効な整数 または浮動小数点 数である必要があ ります。 注: 数値に変換で きない文字列に対 してこの関数を呼 び出すと、エラー が発生して受信イ ベントが削除され ます。 INT または DOUBLE フィー ルドで使用するこ とができます。	\$MATCH= parseInt(\$size) > 10	\$size の文字列値が 10 よりも大きい整数 になる。

式と関数	説明	例	次の場合に True
str_to_seconds(Str1, Str2)	2 番目の文字列の形式を使用して、最初の文字列に保持されたタイムスタンプ(秒単位, 1970 年 1 月 1 日以降)が計算されます。DOUBLE フィールドで使用することもできます。	<p>\$MATCH= str_to_seconds (\$time, "yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS") > time()</p> <p>注: 時間を表すために次の記号が使用されます。</p> <p>年 - y 月 - M" 月の日 - d 時間 - H 分 - m 秒 - s</p>	<p>\$time で指定した yyyy-MM-dd HH:mm:ss.SSS 形式の日付が現在の時刻よりも新しい。</p> <p>詳細については、SimpleDateFormat をインターネットで検索してください。</p>
exist(\$field)	処理されるイベントのフィールドが存在しているかどうか、およびその値が空ではないかどうかをチェックされます。	\$MATCH= exist (\$status)	\$status が受信イベントに存在し、空の文字列ではない。
isInt(String), isDouble (String)	入力文字列がそれぞれ整数または倍精度浮動小数点数に変換できるかどうかをチェックされます。	\$MATCH=isDouble (\$size)	\$size の文字列値が倍精度浮動小数点数に変換できる。

式と関数	説明	例	次の場合に True
resolveHostIP (String host name)	DNS 解決を実行し、サーバからその IP アドレスを求めます。DNS 解決が失敗した場合、この関数では unknown host という値が返されます。	target_ip= resolveHostIP (\$host)	
resolveHost- Name (String host name)	DNS 解決を実行し、IP アドレスから完全修飾ドメイン名を求めます。DNS 解決が失敗した場合、この関数は元の入力ホスト名を返します。	target_name= resolveHostName (\$host)	

前述のいずれかの式を使用できます。また、式では受信イベント・フィールドを参照できます。式の値 (**true** または **false**) によって、イベント・ハンドラがイベントの処理に使用されるかどうかが決まります。

基本的な文字列式

次の表に、フィールドのマッピングで使用できる文字列式の概要を示します。

操作	説明	例
+	文字列の連結。	"trap type is " + \$trap
substring	特定の文字列の部分文字列。	\$var4.substring(3,5)
indexOf	別の文字列の indexOf 文字列を返します。	\$var4.indexOf(\$var3)

基本的な条件式

サポートされる 1 つの条件式は ? 演算子です。この演算子を使用して、3 つの式を 1 つにまとめることができます (<Conditional part> ? <if true part> : <if false part> など)。

アクション・ディレクティブ

アクション・ディレクティブの形式は次のようになります。

\$ACTION= TOPAZ_BUS_POST または DISCARD

アクション・ディレクティブの値によって、イベントが処理されて BSM に転送されるか、破棄されるかが決まります。この値は、ハンドラ的一致条件が肯定値 (**true**) として評価された場合にのみ有効になります。次の表に、さまざまなアクションの効果を示します。

アクション	説明	対象
TOPAZ_BUS_POST (event)	イベントを BSM のバスおよびデータベースに送信します。	BSM
TOPAZ_BUS_POST (ss_t)	測定値を SiteScope データとして RTSM に送信します。	BSM
DISCARD	BSM にデータを送信しません。	除外するイベント

注: 測定値マッピング TOPAZ_BUS_POST(ss_t) を使用すると、データは SiteScope データとして BSM データベースに送信され、データベースに保存されます。測定値マッピングの詳細については、556 ページの「メトリック・サンプルのフィールドのマッピングの設定」を参照してください。

タグ

ディレクティブに加えて、イベント・ハンドラには**タグ**が含まれます。各タグは、BSM に転送される場合のフィールドを表します。タグの値は、イベントが統合モニタに到着したときに評価できます。

一般的なタグの形式は `name[:type]=value` です。

<name> は、スペースやドル記号 (\$) のない任意の文字列です。<type> で、BSM にレポートされるときフィールドのタイプを指定します。タイプは、**INT**、**DOUBLE** または **STRING** のいずれかになります。標準設定のタイプは **STRING** です。

タグを定義して、BSM に転送するイベントをカスタマイズできます。したがって、これらのイベントを生成する外部アプリケーションからさらに多くの値を取得できます。たとえば、モニタで、警告のテキスト説明が含まれるデータベースのテーブル列 (**AlertText**) からデータを取得する場合、イベント・ハンドラのセクションに次の行を追加してこのデータを BSM に送信できます。

```
[event handler]
$MATCH=true
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
text=$AlertText
```

注: タグを追加する場合、必ず **\$MATCH** と **\$ACTION** の後に追加します。

統合モニタのフィールドのマッピングの例

例 1 : 汎用イベント・ハンドラ

```
[post them all]
$MATCH=true
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
szAlarmText:STRING="post them all handler received an event"
```

ハンドラの **\$MATCH** ディレクティブは **true** に設定されます。これにより、すべてのイベントがこのハンドラに一致し、BSM のバスに送信されます。

例 2 : 重大度ごとに異なるイベント・ハンドラ

```
[Error Handler]
$MATCH= $status.equals("ERROR")
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
severity:INT=SEVERITY_CRITICAL

[Info Handler]
$MATCH= $status.equals("INFO")
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL

[post them all]
$MATCH=true
$ACTION=TOPAZ_BUS_POST(event)
severity:INT=SEVERITY_INFORMATIONAL
```

この例では、**Error Handler** イベント・ハンドラに対して受信イベントが照合されます。ハンドラの条件が **true** の場合 (状態フィールドの値が **ERROR** の場合)、**severity** というフィールドがあり、その値が **SEVERITY_CRITICAL** であるイベントは BSM に送信されます。イベントは、1 つのハンドラにのみ一致します。最初の一致で処理が停止されるため、セクションでイベントが一致すると、次のハンドラによって処理されることはありません。

最初のハンドラでイベントが一致しない場合、2 番目のハンドラが処理対象になり、そのハンドラの照合 (**INFO** 状態が検索されます) を使用して 2 番目のハンドラのアクションを実行する必要があるかどうか判断されます。イベントが 2 番目のハンドラに一致しない場合、最後に 3 番目の汎用ハンドラが評価されます。

16

HP Network Node Manager との統合

本章の内容

概念

- ▶ Network Node Manager 統合の概要 (576 ページ)
- ▶ Network Node Manager データをエクスポートするスクリプトの記述 (577 ページ)

タスク

- ▶ Network Node Manager でのイベントの設定方法 (578 ページ)

概念

Network Node Manager 統合の概要

BSM は、HP Network Node Manager (NNM) からイベントを受け取ることができます。Network Node Manager (NNM) からのイベント・データを転送するには、BSM に転送するイベントごとにスクリプトを実行するように NNM を設定します。次のいずれかのアクションを実行するスクリプトを記述し、NNM と関連付けることができます。

- ▶ NNM データをログ・ファイルに書き込む
- ▶ SNMP トラップと NNM データを一緒に SiteScope サーバに送信する

スクリプトでデータをログに書き込む場合は、テクノロジー・ログ・ファイル統合モニタを使用してデータを読み取り、BSM に転送します。SNMP トラップを SiteScope サーバに送信するスクリプトを使用する場合は、SNMP トラップを受信して BSM に転送するように設定したテクノロジー SNMP トラップ統合モニタを使用します。

Network Node Manager データをエクスポートするスクリプトの記述

使用するスクリプトは、NNM からのデータをコマンド・ライン引数として受け取り、データを BSM に転送できるように処理する必要があります。次の各項では、NNM データのエクスポートに使用可能なスクリプト例について説明します。

本項の内容

- ▶ 577 ページの「ログ・ファイルへの書き込みを行うサンプル・スクリプト」
- ▶ 577 ページの「SNMP トラップ・データを送信するサンプル・スクリプト」

ログ・ファイルへの書き込みを行うサンプル・スクリプト

次の Perl スクリプトは、コマンド・ラインからデータを受け取り、ログ・ファイル統合モニタで解析可能なカンマ区切りベクトル値としてログ・ファイルに書き込みます。

```
#!/usr/bin/perl
open LOG, ">>log1.log" or die;
print LOG (join ',', @ARGV) . "\n";
close LOG;
```

SNMP トラップ・データを送信するサンプル・スクリプト

次の Perl スクリプトは、コマンド・ラインからデータを受け取り、テクノロジー SNMP トラップ統合モニタでキャッチ可能な SNMP トラップ内のメッセージとして送信します (Network Node Manager で生成された SNMP データを使用)。第 1 パラメータとしてトラップの送信先となるホスト名を、第 2 パラメータとして警告の文字列記述を受け取ります。

```
#!/usr/bin/perl
$host = $ARGV[0];
$message = $ARGV[1];
system("snmptrap $host ¥"¥" ¥"¥" 6 0 5 system.sysDescr.0 " . "octetstringascii $message");
```

タスク

Network Node Manager でのイベントの設定方法

要求されたイベント用のスクリプトを NNM で実行するように NNM 7.x を設定するには、次の手順を実行します。

注: それ以降のバージョンの NNM と NNMi については、NNMi のドキュメントを参照してください。

- 1 **[オプション]** メニューから、**[イベント設定]** を選択します。
- 2 **[イベント設定]** ダイアログから要求されたエンタープライズおよびイベントを選択します。
- 3 **[編集]** > **[イベント]** > **[イベントの変更]** ダイアログ・ボックス > **[アクション]** タブを選択します。
- 4 **[自動アクションのコマンド]** テキスト・ボックスにスクリプトのコマンド・ラインを入力します。NNM 変数を使用してコマンド・ラインにデータを渡すこともできます。
- 5 **[OK]** をクリックして **[イベントの変更]** ダイアログを閉じます。
- 6 **[イベント設定]** ダイアログの **[ファイル]** メニューから **[保存]** を選択します。注: NNM 及び NNMi の最新のバージョンについては、NNMi ドキュメントを参照してください。

第 VI 部

リモート・サーバ

17

リモート・サーバを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ リモート・サーバの概要 (582 ページ)

タスク

- ▶ リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法 (584 ページ)
- ▶ リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法 (596 ページ)

参照情報

- ▶ リモート・サーバのユーザ・インタフェース (598 ページ)
- ▶ [トラブルシューティングおよび制限事項](#) (617 ページ)

概念

リモート・サーバの概要

SiteScope では、監視するサーバへの接続を確立できる必要があります。また、Microsoft Windows リモート・マシンの Windows パフォーマンス・レジストリにアクセスしたり、リモート・ユーザとして UNIX リモート・マシンでコマンド・ライン・ツールを実行するには、アカウント権限を持つユーザとして認証されている必要があります。

資格情報やプロトコルなどの接続プロパティを設定するには、[Microsoft Windows リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバ] オプションを使用します。これにより SiteScope は、リモート環境で実行されているシステムやサービスを監視できるようになります。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。同じホスト・マシンに対して複数のリモート・サーバを作成することもできます。

注：NetBIOS 方式を使用して複数の Windows リモート・サーバを同じホスト・マシンに対して設定すると、接続は失敗します。これは、Windows NT では、複数のユーザ名を使用した同じユーザによるサーバまたは共有リソースへの複数接続が許可されていないためです（システム・エラー 1219）。

SiteScope によるリモート・サーバのデータ監視の有効化の詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」および 596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

ユーザ・インタフェースでこれらの設定を行う方法の詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」および 608 ページの「[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、617 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

注：SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、SiteScope を拡張し、標準設定ではサポートされていない UNIX のバージョンに接続してリモートで監視できます。詳細については、675 ページの「UNIX オペレーティング・システム・アダプタ」を参照してください。

タスク

リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、リモート Windows サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 584 ページの「前提条件 (Windows Server 2008 リモート・サーバ用)」
- ▶ 585 ページの「SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視できるようにする」
- ▶ 585 ページの「リモート監視用のユーザ権限を設定する」
- ▶ 586 ページの「Windows リモート・サーバの設定を行ってテストする」
- ▶ 587 ページの「結果」

1 前提条件 (Windows Server 2008 リモート・サーバ用)

SiteScope では、ユーザ・アカウント制御 (UAC) が有効、無効のどちらの場合も、Microsoft Windows Server 2008 のリモート・サーバの監視をサポートします。UAC が有効な場合、UAC のリモート制限を次のように無効にする必要があります。

- a [スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし、「regedit」と入力して ENTER キーを押します。
- b 次のレジストリ・サブキーを見つけてクリックします。
HKEY_LOCAL_MACHINE¥SOFTWARE¥Microsoft¥Windows¥CurrentVersion¥Policies¥System
- c LocalAccountTokenFilterPolicy レジストリ・エントリが存在しない場合、次の手順を実行します。
 - ▶ [編集] メニューで、[新規] > [DWORD 値] を選択します。
 - ▶ 「LocalAccountTokenFilterPolicy」と入力し、ENTER キーを押します。
- d LocalAccountTokenFilterPolicy を右クリックし、[修正] をクリックします。

- e [値のデータ] ボックスで、「1」と入力し、[OK] をクリックします。
- f レジストリ・エディタを終了します。

2 SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視できるようにする

SiteScope でリモート Windows サーバのデータを監視するには、次のいずれかの手順を行う必要があります。

- ▶ サーバごとに個別のリモート Windows サーバ接続プロファイルを定義します。タスクの詳細については、588 ページの「リモート Windows サーバ接続プロファイルの定義」を参照してください。
- ▶ リモート・サーバへのアクセスを SiteScope に許可するドメイン・アクセス権限を設定します。モニタ設定の詳細については、589 ページの「SiteScope 監視のドメイン権限の設定」を参照してください。

注： SiteScope サービスがドメイン・ユーザとして実行するように設定すると、SiteScope はすべての Windows 関連の認証にこのアカウントを使用します。このアカウントがこのドメイン全体に必要な権限を持っていることを確認する必要があります。

3 リモート監視用のユーザ権限を設定する

SiteScope マシンのオペレーティング・システムに従って、リモート・マシンにアクセスするためのユーザ権限を設定します。モニタ設定の詳細については、591 ページの「リモート監視用のユーザ権限の設定」を参照してください。

4 Windows リモート・サーバの設定を行ってテストする

- a リモート・サーバ・ツリーでリモート Windows サーバを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。


注：

- ▶ リモート Windows サーバに SiteScope での SSH 監視を設定する場合、645 ページの「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- ▶ リモート・サーバから管理データを収集する方法として、[メイン設定] の [接続方式] フィールドで WMI を選択した場合、WMI サービスがリモート・マシンに設定されている必要があります。タスクの詳細については、594 ページの「リモート監視用の WMI サービスの設定」を参照してください。
- ▶ NetBIOS 接続方式を使用するときリモート監視対象サーバの名前としてリテラルの IPv6 アドレスを指定する場合、IPv6 アドレスを次のようにカスタマイズする必要があります。

1. すべてのコロン (':') 文字をダッシュ ('-') 文字に置き換える。
2. 「.ipv6-literal.net」というテキストを IP アドレスの最後に付加する。

たとえば、IPv6 アドレス : 2004:DB8:2a:1005:230:48ff:fe73:982d
は次のようになります。2004-DB8-2a-1005-230-48ff-fe73-982d.ipv6-literal.net

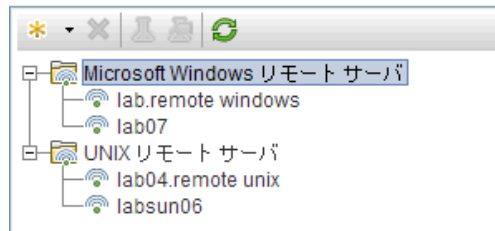
また、WMI 接続方法 (サポートされている場合) に切り替えると、IPv6 アドレスを変更する必要がなくなります。

- b SiteScope 用の Microsoft Windows リモート・サーバの定義を行ったら、該当するサーバの [テスト]  ボタンをクリックして接続をテストします。

注: リモート・カウンタを表示するときに [コンピュータに接続できません] というエラー・メッセージが表示された場合は、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/300702/>) を参照してください。

5 結果

リモート・サーバ・ツリーにある Windows リモート・サーバのリストにサーバが追加されます。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。



注: リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、617 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

リモート Windows サーバ接続プロファイルの定義

リモート Windows サーバ・データの監視には、リモート・サーバへの認証されたアクセス権が必要です。Windows サーバ接続プロファイルは、SiteScope がリモート・サーバにログオンし、そのリモート・マシンで Windows パフォーマンス・レジストリにアクセスするために必要なアドレスとログイン資格情報を提供します。

注：このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

Windows サーバ接続プロファイルを使用してリモート・サーバにログオンするには、次のいずれかを行います。

- ▶ **管理者権限を持つユーザとしてリモート・サーバにログオンします。**
- ▶ リモート・サーバに、そのサーバの SiteScope 接続プロファイルで使用している接続方法とログイン権限に対応するユーザ・アカウントを作成または変更します。

SiteScope 監視のドメイン権限の設定

Windows 用の SiteScope では自動的にサーバのリストが生成され、ローカル・ドメインに表示されます。サーバにはモニタ・タイプを指定する必要があります。これらのサーバは、モニタ・タイプのサーバ・リストに表示されます。Windows で実行している SiteScope では、サーバごとに個別の接続プロファイルを作成しなくても、このリストを使用してリモート Windows サーバを監視できる場合があります。

注：このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

ドメイン権限を設定するには、次のいずれかの方法を使用します。

- ▶ **SiteScope サービスを Domain Admin グループのユーザとして実行されるように設定します。**

インストール時の標準設定では、SiteScope はローカル・システム・アカウントとして実行されるように設定されています。SiteScope サービスを、ドメイン管理権限を持つユーザとしてログオンするように設定できます。これにより、SiteScope にドメイン内のサーバ・データを監視するためのアクセス権限が付与されます。SiteScope アカウント・ユーザの変更方法の詳細については、590 ページの「SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更」を参照してください。

- ▶ **SiteScope が実行されているサーバを、Active Directory の Domain Admin グループに追加します (Windows 2000 以降の場合)。**

このオプションでは、SiteScope サービスは、ローカル・システム・アカウントとしてログオンするように設定されますが、SiteScope が実行されているマシンはドメイン管理権限を持つグループに追加されます。

- ▶ **非管理者アクセスを許可するように、ドメイン内のすべてのマシンのレジストリ・アクセス権を編集します。**

このオプションを使用するには、監視する各リモート・マシンでレジストリを変更する必要があります。したがって、ドメインのサーバ・リストにドメインのすべてのマシンが含まれていても、接続プロファイルなしで監視できるのは、レジストリが変更されたリモート・マシンのみです。

SiteScope サービスのユーザ・アカウントの変更

このタスクでは、SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更する手順について説明します。

注：このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、589 ページの「SiteScope 監視のドメイン権限の設定」を参照してください。

SiteScope サービスのユーザ・アカウントを変更するには、次の手順を実行します。

- 1** [管理ツール] で [サービス] を開き、サービスのリストから [SiteScope] を選択します。[SiteScope のプロパティ] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 2** [ログオン] タブをクリックし、[ログオン] 領域で、リモート・サーバにアクセス可能なアカウントを入力します。
- 3** [OK] をクリックして設定を保存し、[SiteScope のプロパティ] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 4** [SiteScope] を右クリックします。[停止] をクリックして SiteScope サービスを停止します。
- 5** [開始] をクリックします。これで、SiteScope サービスで新しいアカウントが使用されます。

リモート監視用のユーザ権限の設定

SiteScope がリモート・マシンでパフォーマンス測定値を収集するには、リモート・マシンにアクセスする権限が SiteScope に必要です。本タスクでは、SiteScope マシンのオペレーティング・システムに従ってユーザ権限を設定する方法について説明します。

注：

- ▶ このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
 - ▶ Microsoft のベスト・プラクティスでは、ユーザではなくグループに権限を与えることを推奨しています。
 - ▶ レジストリを変更する前にレジストリをバックアップしてください。
-

Windows XP および Windows 2003 を設定するには、次の手順を実行します。

- 1** SiteScope マシンで、[スタート] > [ファイル名を指定して実行] を選択します。[名前] テキスト・ボックスに「Regedt32.exe」と入力します。[レジストリ エディタ] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 2** [HKEY_LOCAL_MACHINE] ウィンドウで、[SOFTWARE] > [Microsoft] > [Windows NT] > [CurrentVersion] > [Perflib] を選択します。
- 3** レジストリ・エディタのツールバーで [セキュリティ] をクリックし、[アクセス許可] を選択します。[Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 4** [名前] 表示枠で、SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザを選択します。[アクセス許可] 表示枠で、[読み取り] の [許可] チェック・ボックスを選択します。[OK] をクリックして設定を保存し、[Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスを閉じます。

- 5 [HKEY_LOCAL_MACHINE] ウィンドウで, [SYSTEM] > [CurrentControlSet] > [Control] > [SecurePipeServers] > [winreg] を選択します。レジストリ・エディタのツールバーで [セキュリティ] をクリックし, [アクセス許可] を選択します。[Winreg のアクセス許可] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 6 [名前] 表示枠で, SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザを選択します。[アクセス許可] 表示枠で, [読み取り] の [許可] チェック・ボックスを選択します。[OK] をクリックして設定を保存し, [Perflib のアクセス許可] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 7 レジストリ・エディタのツールバーで, [レジストリ] をクリックし, [終了] を選択して設定を保存し, 終了します。
- 8 SiteScope マシンを再起動します。

注: 非管理者ユーザがリモート・マシンのパフォーマンス監視を行うことができるようにする手順の詳細については, Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/q164018/>) を参照してください。

Windows 2000 を設定するには, 次の手順を実行します。

- 1 SiteScope マシンで, [管理ツール] を開き, [コンピュータの管理] を選択します。[コンピュータの管理] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 2 [システム ツール] ツリーで, [ローカル ユーザーとグループ] ツリーを展開し, [グループ] を選択します。マシン上のすべてのグループが, 右の表示枠に表示されます。
- 3 右の表示枠で, [Administrators] グループを選択します。[Administrators のプロパティ] ダイアログ・ボックスが開きます。

- 4 SiteScope がリモート・マシンへのアクセスに使用するユーザが [メンバ] 表示枠に表示されていたら、ステップ 5 に進みます。ユーザが表示されていない場合は、[追加] をクリックします。[ユーザーまたはグループを選択] ダイアログ・ボックスが開きます。
 - a テキスト・ボックスにユーザを入力します。
 - b [OK] をクリックして設定を保存し、[ユーザーまたはグループを選択] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 5 [OK] をクリックして設定を保存し、[Administrators のプロパティ] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 6 [コンピュータの管理] ダイアログ・ボックスで、ツールバーの [ファイル] をクリックし、[終了] を選択します。
- 7 SiteScope マシンの SiteScope を再起動します。

リモート監視用の WMI サービスの設定

このタスクでは、WMI (Windows Management Instrumentation) を使用してリモート Windows サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。WMI を使用すると、パフォーマンス・ライブラリのオブジェクトのシステム・カウンタ・データにアクセスできます。これは、Perfmon ユーティリティに表示されるパフォーマンス・データと同じデータです。

注: このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 594 ページの「前提条件」
- ▶ 594 ページの「リモート・サーバに WMI サービスを設定する」
- ▶ 595 ページの「SiteScope に WMI プリファレンスを設定する (任意指定)」
- ▶ 595 ページの「モニタを設定する」

1 前提条件

SiteScope が Windows マシンにインストールされている必要があります。

2 リモート・サーバに WMI サービスを設定する

SiteScope で WMI を使用してリモート・マシンのパフォーマンス測定値を収集する場合、次の要件があります。

- ▶ リモート・マシンで WMI サービスが実行されている必要があります。詳細については、WMI のドキュメントを参照してください ([http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa826517(VS.85).aspx))。
- ▶ WMI リモート・サーバにログオンするユーザには、WMI 名前空間 **root\CIMV2** からリモートで統計情報を読み取る権限が必要です。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/295292> を参照してください。

WMI サービスの問題に関するトラブルシューティングの詳細については、624 ページの「WMI のトラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

3 SiteScope に WMI プリファレンスを設定する（任意指定）

[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [WMI プリファレンス] では、ローカル・ホスト・マシンの Windows サーバ・リソースを監視するための接続タイプと WMI タイムアウト値を設定できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、701 ページの「WMI プリファレンス」を参照してください。

4 モニタを設定する

WMI をサポートするモニタを追加し、モニタ設定を行います。WMI プロトコルをサポートするモニタのリストについては、434 ページの「Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ」を参照してください。

リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法

このタスクでは、リモート UNIX サーバのデータを監視するように SiteScope を設定する手順について説明します。



このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 596 ページの「SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視できるようにする」
- ▶ 596 ページの「UNIX リモート・サーバの設定を行ってテストする」
- ▶ 597 ページの「結果」

1 SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視できるようにする

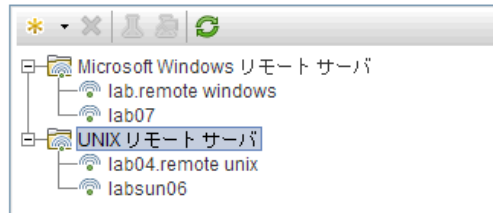
SiteScope でリモート UNIX サーバのデータを監視するには、サーバごとに個別のリモート UNIX サーバ接続プロファイルを定義します。タスクの詳細については、597 ページの「リモート UNIX サーバ接続プロファイルの定義」を参照してください。

2 UNIX リモート・サーバの設定を行ってテストする

- a リモート・サーバ・ツリーでリモート UNIX サーバを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、608 ページの「[新規 UNIX リモートサーバ] / [UNIX リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b 該当するサーバの設定をテストします。
 - ▶ サーバへの接続をテストするには、[テスト]  ボタンをクリックします。
 - ▶ リモート・ホストで実行されているコマンドをテストし、定義したユーザの権限をチェックするには、[詳細テスト]  ボタンをクリックします。

3 結果

リモート・サーバ・ツリーにある UNIX リモート・サーバのリストにサーバが追加されます。続いて、そのサーバのリソースとパフォーマンス・カウンタを監視するモニタを作成できます。複数のモニタで同じ接続プロファイルを使用できます。



注：リモート・サーバの SiteScope 監視に関するトラブルシューティングと制限事項の詳細については、617 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

リモート UNIX サーバ接続プロファイルの定義

リモート UNIX サーバ・データの監視には、リモート・サーバへの認証されたアクセス権が必要です。UNIX サーバ接続プロファイルは、SiteScope がリモート・サーバにログオンするために必要なアドレスとログイン資格情報を提供します。

注：このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UNIX サーバ接続プロファイルを使用してリモート・サーバにログオンするには、次のいずれかを行います。

- ▶ **管理者権限を持つユーザとしてリモート・サーバにログオンします。**
- ▶ リモート・サーバに、そのサーバの SiteScope 接続プロファイルで使用している接続方法とログイン権限に対応するユーザ・アカウントを作成または変更します。

参照情報

リモート・サーバのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ リモート・サーバのプロパティ・ページ (598 ページ)
- ▶ [新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス (601 ページ)
- ▶ [新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス (608 ページ)







リモート・サーバのプロパティ・ページ


このページには、ネットワーク環境に設定されたリモート・サーバに関する情報が表示されます。このページを使用して、リモート・サーバのプロファイルを追加、編集、削除できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[リモート サーバ] コンテキストを選択する。リモート・サーバ・ツリーで、[Microsoft Windows リモート サーバ] または[UNIX リモート サーバ] コンテナをクリックします。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者または「リモート・サーバを編集」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ サーバがモニタから参照されている場合は、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの [モニタ設定] 表示枠にある [サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。 ▶ 同じホスト・マシンに複数のリモート・サーバを作成できます。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」 ▶ 596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 582 ページの「リモート・サーバの概要」 ▶ 93 ページの「リモート・サーバ・ツリー」 ▶ 617 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規 Microsoft Windows リモート・サーバ / 新規 Unix リモート・サーバ: リモート・サーバを設定してツリーに追加できる [新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [新規 Unix リモートサーバ] ダイアログ・ボックスを開きます。詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」または 608 ページの「[新規 UNIX リモートサーバ] / [UNIX リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>リモート・サーバの編集: 選択したリモート・サーバのプロパティを編集できます。</p>
	<p>リモート・サーバの削除: 選択したサーバをツリーから削除します。</p>
	<p>テスト: 1 つ以上のサーバとの接続をテストします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 単一のリモート・サーバとの接続をテストする場合、テスト結果はポップアップ・ウィンドウに表示されます。 ▶ 複数のリモート・サーバとの接続をテストする場合は、SiteScope を引き続き使用できるように、テストはバックグラウンドで実行されます。テスト結果は、[サーバ統計] > [ログ ファイル] > [その他のログ] の remotes_multi_test.log に表示されます。
	<p>詳細テスト: UNIX リモート・サーバの実行コマンドの結果を表示するテストを実行します。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。</p>
	<p>すべて選択: すべてのリストされたリモート・サーバを選択します。</p>

UI 要素	説明
	選択範囲を解除 ：選択をクリアします。
< リモート・サーバ・リスト >	SiteScope で設定されたリモート・サーバのリストを表示します。リモート・サーバをダブルクリックすると、選択したリモート・サーバ・タイプの [リモートサーバの編集] ページが開きます。詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」または 608 ページの「[新規 UNIX リモートサーバ] / [UNIX リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
名前	SiteScope で認識されるリモート・サーバの名前。
サーバ	監視対象のリモート・サーバの IP アドレスまたは名前。同じホスト名のリモート・サーバを 2 つ作成できます。
状態	リモート・サーバの接続状態。SiteScope がリモート・サーバに接続できない場合、接続失敗の理由が示されます。
最新のテスト	リモート・サーバ接続が最後にテストされた日時。
オペレーティング・システム	リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システム。
接続方式	サーバ・リソース (NetBIOS, SSH, WMI, Rlogin, Telnet) を監視する接続タイプ。
関連モニタ	各リモート・サーバで使用されるモニタ数。各リモート・サーバで使用されるモニタ数によってテーブルを並べ替えて、未使用のリモート・サーバを削除できます (関連モニタが 0 のリモート・サーバがその後削除可能になります)。
詳細	リモート・サーバの詳細。

[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス

SiteScope では、各サーバにエージェント・ソフトウェアをインストールしなくても、リモート Windows サーバで実行しているシステムとサービスの多数の統計をモニタできます。これには、CPU、ディスク領域、メモリ、Windows 固有のパフォーマンス・カウンタ・データなどのサーバ・リソースの監視が含まれます。モニタの設定時に表示するサーバを選択します。SiteScope によって、リストにある各サーバ・アドレスの新しいリモート接続プロファイルが作成されます。

アクセス方法	<p>[リモート サーバ] コンテキストを選択する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Microsoft Windows リモート・サーバを追加するには、[Microsoft Windows リモート サーバ] コンテナを右クリックして、[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] を選択します。 ▶ 既存の Microsoft Windows リモート・サーバを編集するには、[Microsoft Windows リモート サーバ] コンテナを展開して、編集するリモート・サーバを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者または「リモート・サーバを編集」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ サーバがモニタから参照されている場合は、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの [モニタ設定] 表示枠にある [サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。
関連タスク	<p>584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 582 ページの「リモート・サーバの概要」 ▶ 93 ページの「リモート・サーバ・ツリー」 ▶ 598 ページの「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 ▶ 617 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」

含まれている要素は次のとおりです。

UI 要素	説明
保存	<p>リモート・サーバの設定が正しいかどうかを確認せずに、設定を保存します。</p> <p>ヒント: [保存およびテスト] の代わりに [保存] を使用すると、パフォーマンスが速くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要がないためです。</p>
保存およびテスト	<p>設定を保存して、リモート・サーバの設定が正しいかどうかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、エラー・メッセージが表示されます。</p> <p>ヒント: [保存] の代わりに [保存およびテスト] を使用すると、パフォーマンスはあまり速くなりません。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要があるためです。</p>


一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	<p>SiteScope で認識されるリモート・マシンの名前。この名前は、接続プロファイルを使用できるモニタの [サーバ] リストに表示されます。</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ このリモート・サーバを必要とする各テンプレート・モニタに対して、テンプレート・モニタの [サーバ] ボックスにこの同じ値を入力する必要があります。 ▶ 名前が一意でない場合はデプロイメントが失敗します。
詳細	<p>リモート Window サーバの詳細。このテキストは、リモートのプロパティを編集する場合にのみ表示されます。</p>

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>監視対象の Windows サーバの実際の IP アドレスまたは UNC 名（仮想 IP アドレスはサポートされていません）。SiteScope サーバでホスト・ファイル、DNS、または WINS/DNS 統合を使用してこの一般名を IP アドレスに変換できる場合は、IP ホスト名も使用できます。</p> <p>同じホスト・マシンに複数のリモート・サーバを作成できます。たとえば、NetBIOS プロトコルを使用する 1 つのリモート・サーバと、WMI を使用する同じホスト・マシンの別のリモート・サーバを作成し、[一般設定] で一意の名前を指定できます。</p> <p>同時に複数のサーバを設定するときと同じログイン資格情報を使用するには、サーバ名またはアドレスをカンマ (,)、セミコロン (;)、または空白で区切って入力します。たとえば、<code>¥¥server1, ¥¥server2, ¥¥</code>。</p> <p>注：プロファイルを追加した後に接続をテストするには、Windows リモート・サーバのリストで [テスト]  ボタンをクリックします。</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。リモート・サーバ名を表すテンプレート変数名、たとえば、<code>%%host%%</code>。これにより、テンプレートのデプロイ時に変数に必要な情報の入力を求められたときに各サーバを入力できます。変数にサーバ名を入力するたびに、そのサーバのモニタ・インスタンスが作成され、リモート・サーバ・ツリーにサーバが追加されます。ホスト名がその時点でサーバ名と一致しない場合、モニタは失敗します。</p> <p>モニタ・テンプレートをデプロイするリモート・サーバが [リモートサーバ] にすでに存在する場合、モニタ・テンプレート内でそのサーバを参照できます。そのためには、SiteScope にアクセス可能なサーバを識別するシステム変数 <code>\$\$\$SERVER_LIST\$\$</code> を参照します。詳細については、954 ページの「システム変数の構文」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
資格情報	<p>リモート Windows サーバのユーザ名とパスワードを指定するオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ユーザ名およびパスワードを使用：手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 ▶ ユーザ名：リモート・サーバのユーザ名を入力するか、ユーザ・ログイン名を表すテンプレート変数 (%%user%% など) を使用します。 注：サーバが SiteScope マシンと同じドメイン内にある場合、ユーザ・ログイン名の前にドメイン名を追加します。例：<DOMAIN>¥<username>。ドメイン内またはドメイン外のマシンにローカル・マシンのログイン・アカウントを使用する場合、ユーザ・ログイン名の前にそのマシン名を追加します。例：<machinename>¥<username>。 ▶ パスワード：リモート・サーバのパスワードまたは SSH 鍵ファイルのパスフレーズを入力するか、パスワードを表すテンプレート変数 (%%password%% など) を使用します。公開鍵 / 秘密鍵ベースの認証の SSH 認証を使用する場合、ID ファイルのパスフレーズをここに入力します。 ▶ 事前定義された資格情報を選択：サーバの事前に定義されたユーザ名とパスワードを SiteScope で自動的に指定する場合は、このオプションを選択します (標準設定)。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、893 ページの「資格情報のブリファレンスの設定方法」を参照してください。
トレース	<p>従属サーバへのメッセージと従属サーバからのメッセージを追跡して、SiteScope の RunMonitor.log ファイルに記録します。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

UI 要素	説明
メソッド	<p>Windows サーバ・リソースを監視する接続タイプを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ NetBIOS : Microsoft Windows NT と 2000 ネットワークの標準設定のサーバ間通信プロトコル。 注 : NetBIOS 接続が使用され、[トレース] オプションが選択されている場合は、Windows プラットフォーム上の SiteScope を、リモート・サーバからパフォーマンス・カウンタ・データにアクセスするために必要な管理セキュリティ権限を持つアカウントで実行する必要があります。監視する複数のサーバが異なるドメインに存在する場合、異なるポリシーで管理されている場合、または SiteScope の実行に使用しているアカウントとは異なる固有のログインを必要とする場合は、リモート・サーバ・ビューの [Microsoft Windows リモート サーバ] オプションでこれらのサーバへの接続を定義する必要があります。 ▶ SSH : セキュア・シェル。Microsoft Windows NT/2000 ベースのネットワークにインストールできる、よりセキュアな通信プロトコル。通常、エージェントレスな Windows SSH を使用していない場合、この接続方法では接続先の各サーバに SSH ライブラリをインストールする必要があります。 Windows SSH (エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用) をサポートするモニタのリストについては、663 ページの「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。 SSH の要件の詳細については、637 ページの「セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視」を参照してください。 ▶ WMI : Windows Management Instrumentation。NetBIOS よりセキュアな通信プロトコルで、パフォーマンス・データの収集に perfmon を使用する Windows サーバ・モニタをサポートします。WMI をサポートするモニタのリストについては、434 ページの「Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ」を参照してください。 WMI サービスをリモート監視用に設定する方法の詳細については、594 ページの「リモート監視用の WMI サービスの設定」を参照してください。 注 : WMI 接続方法で設定されたリモート・サーバは、WMI をサポートしないモニタの設定時には、使用可能なリモート・サーバのリストに表示されません。

UI 要素	説明
リモート・サーバのエンコーディング	<p>リモート・サーバのオペレーティング・システムのバージョンで、SiteScope が稼動するサーバと異なる文字エンコードが使用される場合の、リモート・サーバのエンコード。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。</p> <p>標準設定値 : Cp1252 エンコーディング</p>

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SSH ポート番号	<p>リモート SSH サーバで監視するポート。</p> <p>標準設定値 : 22</p>
最大接続数	<p>SiteScope でこのリモートに許可されている開いた接続数。この接続を使用するように設定されたモニタが多数ある場合、開いた接続数を、潜在的なボトルネックを避けるのに十分な数に設定します。</p> <p>標準設定値 : 3</p> <p>注 : この設定はリモート・サーバの実行テストには適用されません。テストでは常に新しい接続を作成します。</p>
SSH 認証方式	<p>SSH 接続に使用する認証方法を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ パスワード : パスワードを使用して認証します (標準設定)。 ▶ 鍵ファイル : 公開鍵 / 秘密鍵認証を使用して認証します。このオプションを選択すると、SiteScope では認証にファイル < SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups%identity の秘密鍵を使用します。対応する公開鍵がリモート・ホストの authorized_keys ファイルに含まれている必要があります。 <p>SSH の要件の詳細については、637 ページの「セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視」を参照してください。</p>
接続キャッシュの無効化	<p>このリモートの接続キャッシュを無効にします。標準設定では、SiteScope キャッシュで接続が開かれます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

UI 要素	説明
SSH 接続の鍵ファイル	この接続の秘密鍵を含むファイルのパスと名前。標準設定の鍵ファイルは、 < SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups%identity です。この設定は、認証方法が鍵ファイルの場合にのみ適用されます。
SSH バージョン 2 のみを使用	SiteScope で強制的に SSH プロトコルのバージョン 2 のみを使用します。 標準設定値 ：選択されていない
SSH Keep Alive メカニズム	SSH バージョン 2 のセッションに Keep Alive メカニズムを使用します。このオプションは、統合 Java クライアントを使用する場合にのみ適用されます。 標準設定値 ：選択されていない
プリインストールされた SiteScope Windows SSH ファイルを使用する SSH	プリインストールされた SiteScope Windows SSH ファイルを使用します。SiteScope SSH ファイルを使用して Windows SSH をサポートするモニタのリストについては、663 ページの「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。 標準設定値 ：選択されている

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト (グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル) を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス

SiteScope では、各リモート UNIX サーバにエージェント・ソフトウェアをインストールしなくても、各サーバで実行されているシステムとサービスを監視して特定の統計情報（CPU、ディスク領域、メモリ、プロセスなど）を取得できます。表示するサーバは、UNIX モニタの設定時に選択します。SiteScope によって、リストにある各サーバ・アドレスの新しいリモート接続プロファイルが作成されます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[リモート サーバ] コンテキストを選択する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ UNIX リモート・サーバを追加するには、[UNIX リモート サーバ] コンテナを右クリックして、[新規 UNIX リモート サーバ] を選択します。 ▶ 既存の UNIX リモート・サーバを編集するには、[UNIX リモート サーバ] コンテナを展開して、編集するリモート・サーバを選択します。
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者または「リモート・サーバを編集」権限が付与されたユーザのみが、[リモート サーバ] ページを表示、編集できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ リモート・サーバがほかのモニタから参照されている場合、リモート・サーバのリストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの [モニタ設定] 表示枠にある [サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。 ▶ HTTP は、リモート・サーバへの接続方法としてサポートされなくなりました。
<p>関連タスク</p>	<p>596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 582 ページの「リモート・サーバの概要」 ▶ 93 ページの「リモート・サーバ・ツリー」 ▶ 598 ページの「リモート・サーバのプロパティ・ページ」 ▶ 617 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」

含まれている要素は次のとおりです。

UI 要素	説明
保存	<p>リモート・サーバの設定が正しいかどうかを確認せずに、設定を保存します。</p> <p>ヒント: [保存およびテスト] の代わりに [保存] を使用すると、パフォーマンスが速くなります。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要がないためです。</p>
保存およびテスト	<p>設定を保存して、リモート・サーバの設定が正しいかどうかを検証します。SiteScope がリモート・サーバへの接続に失敗した場合、または設定に無効なプロパティがある場合、エラー・メッセージが表示されます。</p> <p>ヒント: [保存] の代わりに [保存およびテスト] を使用すると、パフォーマンスはあまり速くなりません。SiteScope は設定を検証するためにリモート・サーバへの接続を確立する必要があるためです。</p>



一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	SiteScope で認識されるリモート・マシンの名前。この名前は、接続プロファイルを使用できるモニタの [サーバ] リストに表示されます。
詳細	リモート UNIX サーバの説明。このテキストは、リモートのプロパティを編集する場合にのみ表示されます。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
メイン設定	
サーバ	<p>監視対象サーバの実 IP アドレスまたはホスト名 (仮想 IP アドレスはサポートされていません)。</p> <p>同時に複数のサーバを設定するときと同じログイン資格情報を使用するには、サーバ名またはアドレスをカンマ (,)、セミコロン (;)、または空白で区切って入力します。</p> <p>例：ほかのサーバへの接続に NetBIOS を使用している場合、「serveraddress1,serveraddress2,serveraddress3」のようにサーバ・アドレスをカンマで区切った文字列を入力します。</p> <p>フォームへのほかの必要な入力が完了すると、SiteScope によって、リスト内のサーバ・アドレスごとに新しいリモート接続プロファイルが作成されます。</p> <p>注：ホストを追加した後に接続をテストするには、UNIX サーバのリストが表示されているテーブルで [テスト]  ボタンをクリックします。この場合、テストされるのはサーバへの接続のみです。リモート・ホストでのコマンドの実行結果を表示するテストを実行するには、[詳細テスト]  ボタンをクリックします。このテストにより、定義済みユーザの権限を確認できます。</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。リモート・サーバ名を表すテンプレート変数名、たとえば、<code>%%host%%</code> を入力します。変数にサーバ名を入力するたびに、そのサーバのモニタ・インスタンスが作成され、リモート・サーバ・ツリーにサーバが追加されます。</p> <p>モニタ・テンプレートをデプロイするリモート・サーバが [リモートサーバ] にすでに存在する場合、モニタ・テンプレート内でそのサーバを参照できます。そのためには、SiteScope にアクセス可能なサーバを識別するシステム変数 <code>\$\$SERVER_LIST\$\$</code> を参照します。詳細については、954 ページの「システム変数の構文」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
資格情報	<p>リモート UNIX サーバのユーザ名とパスワードを指定するオプションを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ユーザ名およびパスワードを使用：手動でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。 ▶ ユーザ名：リモート・サーバのユーザ名を入力するか、ユーザ・ログイン名を表すテンプレート変数 (%%user%% など) を使用します。 ▶ パスワード：リモート・サーバのパスワードまたは SSH 鍵ファイルのパスフレーズを入力するか、パスワードを表すテンプレート変数 (%%password%% など) を使用します。公開鍵 / 秘密鍵ベースの認証の SSH 認証を使用する場合、ID ファイルのパスフレーズをここに入力します。 ▶ 事前定義された資格情報を選択：サーバの事前に定義されたユーザ名とパスワードを SiteScope で自動的に指定する場合は、このオプションを選択します (標準設定)。 [資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
トレース	<p>リモート・サーバとの間でやり取りされるメッセージを追跡して、RunMonitor.log ファイルに記録します。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
オペレーティング・システム	<p>リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システム。これは、リモート・サーバから正しい情報を取得するために必要な情報です。リストからオペレーティング・システムを選択します。</p> <p>リモート UNIX サーバの定義時にサポートされているオペレーティング・システムは、AIX, FreeBSD, HP-UX, HP/UX, HP/UX 64 ビット, Linux, MacOSX, NonStopOS, OPENSERVER, Red Hat Enterprise Linux, SCO, SGI Irix, Solaris Zone, Sun Solaris, SunOS, Tru64 5.x, Tru64 4.x 以前 (Digital) です。リストに含まれていないバージョンの UNIX を実行しているサーバについては、675 ページの「UNIX オペレーティング・システム・アダプタ」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
メソッド	<p>UNIX サーバ・リソースを監視するための接続タイプを次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Rlogin : Rlogin プロトコルを使用して、リモート・サーバにログインします。rlogin にパスワードを要求するように、またはパスワードなしでアクセスできるように (rsh と同様)、リモート・サーバを設定できます。SiteScope ではどちらもサポートされています。 ▶ SSH : セキュリティが強化された通信プロトコルであるセキュア・シェルを使用してリモート・サーバにログインします。UNIX のバージョンによっては、ソフトウェアとセットアップが追加で必要になることがあります。Solaris の場合、SSH アクセス方法を使用するには、SiteScope マシンに SSH クライアントがインストールされ、監視するサーバに SSH サーバがインストールされている必要があります。SiteScope が実行されるマシンの SSH クライアントへのパスは、<code>/usr/local/bin/ssh</code> または <code>/usr/bin/ssh</code> である必要があります。SSH 要件の詳細については、637 ページの「セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視」を参照してください。SSH を使用するには、デジタル証明書が接続先の各サーバにインストールされている必要があります。 ▶ Telnet : Telnet を使用してリモート・サーバにログインします。Telnet は、リモート UNIX サーバへの接続に広く使用される方法です。Telnet でパスワードを要求するように、またはパスワードなしでアクセスできるように (rsh と同様)、リモート・サーバを設定できます。SiteScope ではどちらも処理されます。
プロンプト	リモート・システムがコマンドを処理できるときのプロンプト出力です。
ログイン・プロンプト	システムがログインの入力を待っているときのプロンプト出力。
パスワード・プロンプト	システムがパスワードの入力を待っているときのプロンプト出力。

UI 要素	説明
二次プロンプト	<p>リモート・サーバへ Telnet 接続されたために、リモート・サーバが接続に関する詳細情報を要求する場合の二次プロンプト。複数のプロンプト文字列はカンマ (,) で区切ります。</p> <p>例: リモート・サーバによっては、Telnet 接続でリモート・サーバから接続でエミュレートするターミナル・タイプの入力を要求される場合があります。この場合、二次プロンプトとして「Terminal type?」と入力します。二次プロンプトへの応答は、後述の [二次応答] ボックスに入力します。</p>
二次応答を隠す	<p>二次応答をアスタリスクの背面に隠します。その後、このチェック・ボックスをクリアすると、隠されたデータは削除されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
二次応答	<p>該当リモート・サーバとの接続を確立するために必要な二次プロンプトへの応答。複数の応答はカンマ (,) で区切ります。</p>

UI 要素	説明
<p>シェル環境の初期化</p>	<p>セッションの初めに実行するシェル・コマンド。複数のコマンドはセミコロン (;) で区切ります。このオプションでは、Telnet または SSH セッションを初期化した直後に、リモート・マシンで実行するシェル・コマンドを指定します。これらのコマンドは、SiteScope リモートごとのシェルのカスタマイズに使用できます。例として次のような場合があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ リモート・シェルには、SiteScope スクリプトを実行するための正確なパスが設定されていない場合があります。コマンド <code>export PATH=\$PATH:/usr/local/sbin</code> を指定すると、リモート・マシンの現在のシェルの PATH にディレクトリ <code>/usr/local/bin</code> が追加されます。 ▶ リモート・シェルでは、疑似ターミナルが正しく初期化されない場合があります。コマンド <code>stty cols 1024;\${SHELL}</code> を入力すると、ターミナル幅が 1024 文字に増えます。 <p>注：シェル呼び出し後のコマンドは実行されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ リモート Telnet サーバがコマンド・ラインを正確にエコー・バックしない場合があります。これにより、コマンド・ラインのエコーに依存するモニタが正常に動作しなくなる可能性があります。コマンド <code>stty echo</code> を入力すると、リモート・ターミナルが強制的にエコーされます。 ▶ 特定の UNIX シェルは、SiteScope と併用すると動作が不規則になることが判明しています。これには、<code>bash</code>、<code>ksh</code>、<code>cs</code>h が含まれます。コマンド <code>/bin/sh</code> を入力すると、SiteScope 接続のシェルが <code>sh</code> に変更されます。
<p>リモート・サーバのエンコーディング</p>	<p>リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システムのバージョンが、SiteScope が稼働するサーバとは異なる文字エンコーディングを使用する場合、リモート・サーバのエンコーディングを設定します。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。</p> <p>標準設定値： Cp1252 エンコーディング</p>

UI 要素	説明
HP NonStop シェル設定	
シェル選択プロンプト	(NonStop OS のみ) システムがシェルの選択を待っているときのプロンプト出力。 標準設定値 : >
シェル名	(NonStop OS のみ) 実行するシェル名。 標準設定値 : OSS

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SSH ポート番号	リモート SSH サーバで監視するポート。 標準設定値 : 22
最大接続数	SiteScope でこのリモートに許可されている開いた接続数。この接続を使用するように設定されたモニタが多数ある場合、開いた接続数を、潜在的なボトルネックを避けるのに十分な数に設定します。 標準設定値 : 3 注 : この設定はリモート・サーバの実行テストには適用されません。テストでは常に新しい接続を作成します。
SSH 認証方式	SSH 接続に使用される認証方法を次に示します。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ パスワード : パスワードを使用して認証します (標準設定)。 ▶ 鍵ファイル : 公開鍵 / 秘密鍵認証を使用して認証します。このオプションを選択すると、SiteScope では認証にファイル < SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups% identity の秘密鍵を使用します。対応する公開鍵がリモート・ホストの authorized_keys ファイルに含まれている必要があります。SSH の要件の詳細については、637 ページの「セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視」を参照してください。

UI 要素	説明
接続キャッシュの無効化	このリモートの接続キャッシュを無効にします。標準設定では、SiteScope キャッシュで接続が開かれます。 標準設定値 ：選択されていない
SSH 接続の鍵ファイル	この接続の秘密鍵を含むファイルのパスと名前。標準設定の鍵ファイルは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups%identity です。この設定は、認証方法が鍵ファイルの場合にのみ適用されます。
SSH バージョン 2 のみを使用	SiteScope で強制的に SSH プロトコルのバージョン 2 のみを使用します。 標準設定値 ：選択されていない
SSH Keep Alive メカニズム	SSH バージョン 2 のセッションに Keep Alive メカニズムを使用します。このオプションは、統合 Java クライアントを使用する場合にのみ適用されます。 標準設定値 ：選択されていない

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、リモート・サーバを使った作業でのトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ **618 ページの「リモート Windows サーバの SiteScope 監視」**
- ▶ 619 ページの「Windows サーバ監視で推奨されるネットワーク設定」
- ▶ 620 ページの「Windows リモート・サーバのテスト時のエラー・コードについて」
- ▶ 620 ページの「リモート Windows サーバでの Microsoft Windows イベント・ログ・アクセス」
- ▶ 622 ページの「SiteScope Perfex を使用したリモート Windows 接続の不正な資格情報の使用」
- ▶ 622 ページの「SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータの表示」
- ▶ 624 ページの「WMI のトラブルシューティングと制限事項」
- ▶ 625 ページの「リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない」
- ▶ 626 ページの「NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース表示時に使用するシステム・エンコーディング」

リモート Windows サーバの SiteScope 監視

リモート Windows サーバの SiteScope 監視のセットアップとトラブルシューティングに関して、次の追加情報があります。

- ▶ PERFMON を使用してリモート・マシンに接続する場合、PERFMON を使用して接続できない場合、リモート・サーバ上の SiteScope アカウントに付与されているユーザ・アクセス権に関して問題がある可能性があります。SiteScope でサーバ統計を監視できるようにするには、特定の管理権限が必要です。
- ▶ セキュリティ上の理由から、SiteScope に管理者アカウントの全権限の使用が許可されない場合があります。SiteScope に制限付きの監視アクセス権を付与するには、Windows の特定のレジストリ・キーを編集します。リモート・マシンからレジストリへのアクセスの制限の詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/q153183/>) を参照してください。
- ▶ スタンドアロン・サーバ、または SiteScope サーバで表示可能になっているドメイン以外のサーバを監視する必要がある場合、[ログイン] ボックスにマシン名、スラッシュ (/)、ログイン名の順番で入力してください。例 : loneserver¥sitescope。
- ▶ NetBIOS 接続方式で Microsoft Windows Vista または Microsoft Windows 2008 リモート・サーバに接続できない場合は、代わりに WMI 接続を使用できます。
- ▶ Windows NT4 で稼動している SiteScope から Windows 2000 サーバを監視しようとする場合、いくつかの問題があります。多くの場合、問題にはオペレーティング・システムがサーバ間での通信に使用する DLL の非互換が関係しています。

注：

- ▶ Windows 2000, Windows NT, Windows XP でのパフォーマンス・データのセキュリティ確保の詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/q146906/>) を参照してください。
 - ▶ Windows 2000, Windows NT でのパフォーマンス・モニタ・カウンタに関する問題のトラブルシューティングの詳細については、Microsoft Knowledge Base (<http://support.microsoft.com/kb/152513/>) を参照してください。
-

Windows サーバ監視で推奨されるネットワーク設定

Windows ベースのサーバを監視する際、「システム エラー: 53 - ネットワーク パスが見つかりません。」のようなネットワーク関連エラーを避けるために、WINS が有効ではないネットワークでは NetBios over TCP/IP を無効にすることをお勧めします。

- 1 [ネットワーク接続] を開きます。
- 2 設定するネットワーク接続を右クリックし、[プロパティ] をクリックします。
- 3 [全般] タブで、[インターネット プロトコル (TCP/IP)] をクリックし、[プロパティ] をクリックします。
- 4 [詳細設定] をクリックし、[WINS] タブをクリックして、[NetBios over TCP/IP を無効にする] オプションを選択します。

Windows リモート・サーバのテスト時のエラー・コードについて

問題：

リモート・サーバのテスト結果で、わかりやすいエラー・コードが状態文字列に含まれていない。

解決方法：

Windows ネットワーク・メッセージを説明し、問題解決情報を提供するには、`net helpmsg` コマンドを使用します。

次のコマンド・ラインを実行します。

```
net helpmsg <エラー・コード番号>
```

たとえば、「`net helpmsg 53`」と入力すると「ネットワーク パスが見つかりません。」と表示されます。

リモート Windows サーバでの Microsoft Windows イベント・ログ・アクセス

問題：

リモート Windows イベント・ログの表示時、またはリモート Windows マシンの監視に関する通知の受信時に、次のメッセージが表示される。

```
イベント ID (XXXX) (ソース XXXX 内) に関する説明が見つかりませんでした。次の文字列が含まれています。  
処理が正常に完了しました。
```

原因：

コンピュータのイベント・ログをリモート・コンピュータから表示するとき、必要なレジストリ・キー（および参照ファイル）がリモート・コンピュータに存在しない場合、SiteScope はデータに形式を設定できず、データを汎用的な形式で表示します。

解決方法：

必要なレジストリ・エントリと DLL ファイルを、イベント・ビューア・アプリケーションを実行するリモート・コンピュータにコピーする必要があります。

リモート・レジストリ・エントリと DLL ファイルをローカル SiteScope マシンで取得するには、次の手順を実行します。

- 1 SiteScope でイベントを正しく取得できないリモート・マシンのエントリを、イベント・ビューアで見つけます。ソース、イベント ID、記述の情報を書き留めます。例：

ソース：MSExchangeSA、イベント ID: 5008、説明：メッセージ追跡ログ ファイル
C:\%exchsrvr%\tracking.log\20020723.log を削除しました。

- 2 レジストリ設定

HKEY_LOCAL_MACHINE\System\CurrentControlSet\Services\EventLog\Application を開き、ソースをクリックします (MSExchangeSA など)。

- 3 **EventMessageFile** をクリックして、その DLL が存在するデータを書き留めます (C:\%EXCHSRVR%\bin\madmsg.dll など)。

- 4 リモートで DLL を見つけて、SiteScope マシンにコピーします。次のいずれかの方法でコピーできます。

- ▶ BackOffice リソース・キット第 2 版の **Initlog.exe** ユーティリティを使用して、必要なレジストリ・エントリを Exchange Server コンピュータからリモート・コンピュータにコピーします。Exchange Server コンピュータの管理者権限を持つアカウントで Windows NT にログオンしている場合、このユーティリティを使用して必要な DLL ファイルをコピーすることもできます (Microsoft の記事 Q184719 を参照してください)。
- ▶ FTP、電子メールなどを使用してファイルをローカル・ドライブにコピーします。

- 5 SiteScope は、ステップ 3 の **EventMessageFile** フィールドのデータを使用して、ローカル・マシンのどこに DLL があるかを判別します。このステップと同じフォルダ構造を作成して、ファイルをそのディレクトリに置く必要があります。または、ディレクトリ構造を **c:\Windows\System32** のように変更し (SiteScope は標準設定ではリモート・マシン上の ADMIN\$ を参照します)、DLL をそのフォルダに置きます。ただし、この構造と DLL は両方のマシンに存在する必要があります。これを行う場合、ステップ 3 でレジストリを更新して、DLL が存在するディレクトリを反映する必要があります。

SiteScope Perfex を使用したリモート Windows 接続の不正な資格情報の使用

問題：

SiteScope は特定のリモートに指定された資格情報を無視して、SiteScope サービスを開始するために使用される資格情報を使用して、perfex ベースのモニタ (CPU、メモリ、および Windows モニタなど) に対してモニタリング・コマンドおよびアクションを実行しようとしています。

解決方法：

perfex ベースのモニタがリモート・サーバで正しく動作するには、`_perfexOptions=optionalSetupConnection` プロパティを < SiteScope ルート・ディレクトリ > %groups フォルダの `master.config` ファイルに追加する必要があります。

SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータの表示

SiteScope がリモート・レジストリにアクセスしようとしたときに返されたデータを表示するには、次の手順に従います。

- 1 SiteScope サーバでコマンド・ウィンドウを開きます。
- 2 ディレクトリを < SiteScope のルート・ディレクトリ > %tools に変更します。
- 3 コマンド・ラインから次のように入力します。

```
perfex %MACHINE -u username -p password -d -elast "Application"
```

このコマンドでは、Application ログ内のエントリ数を返します。例：

```
DEBUG: perfex debugging on
-----
MODE: elast
LOGNAME: Application
START RECORD: 0
MACHINE: %g11nvm46
OLDEST RECORD=1
NUMBER OF RECORDS=1847
```

- 4 探しているイベントを見つけるには、最後の 10 個か 12 個程度のイベントだけを表示する必要があります。この例では、コマンドは次のようになります。

```
perfx ¥MACHINE -u username -p password -d -elog "Application" 2355 | more
```

- 5 必要なエントリが見つかるまで各エントリを確認します。次回ステップ 3 のコマンドを使用するときに検索しやすいように、レコード ID を書き留めておきます。
- 6 この出力には、SiteScope が受信するデータが表示されています。今回の例では、通常は次のようなデータが返されます。

```
Type: Information
Time: 02:00:24 08/01/102
Source: MExchangeMTA
ID: 298
Category: 1
Record: 2342
Machine: EX-SRV
FILE=C:¥EXCHSRVR¥res¥mtamsg.dll
REMOTE FILE=
String 835050d is: MTA
Next String 835054d is: OPERATOR
Next String 83505dd is: 34
Next String 835060d is: 0
Next String 835062d is:
File: C:¥EXCHSRVR¥res¥mtamsg.dll
Remote Path:
calling FormatMessage()
Formatted Message 142 bytes long
Raw message is: The most current routing information has been loaded by the MTA,
and a text copy was saved in the fileGWART0.MTA. [MTA OPERATOR 34 0] (12)
Message: The most current routing information has been loaded by the MTA, and a
text copy was saved in the file GWART0.MTA.[MTA OPERATOR 34 0] (12)
```

ファイル・パスはリモート・ファイルが検出された場所です。DLL を WINDOWS\SYSTEM にコピーした場合、ファイルとリモート・ファイル・パスは次のようになります。

```
Type: Information
Time: 03:15:00 08/01/10203:15:00 08/01/102
Source: MSEXCHANGES Public
ID: 1221
Category: 6
Record: 2350
Machine: EX-SRV
FILE=C:\WINNT\SYSTEM32\mdbmsg.dll
REMOTE FILE=\\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dll
String 835054d is: 0
Next String 835056d is:
File: C:\WINNT\SYSTEM32\mdbmsg.dll
Remote Path: \\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dll
LOADING LIB REMOTE: \\ex-srv\ADMIN$\SYSTEM32\mdbmsg.dllcalling
FormatMessage()Formatted Message 89 bytes long
Raw message is: The database has 0 megabytes of free spaceafter online
defragmentation has terminated.Message: The database has 0 megabytes of free
space afteronline defragmentation has terminated.
```

WMI のトラブルシューティングと制限事項

WMI の制限事項

- ▶ WMI 使用時に 4000 を超えるモニタを使用することはお勧めしません。
- ▶ カウンタまたはオブジェクトがリソース間で共有されていると、SiteScope はカウンタのデータを受信できず、クエリは失敗します。同じクエリではほかのカウンタが参照されている場合、それらのカウンタのデータも受信できません。詳細とトラブルシューティング情報については、<http://support.microsoft.com/kb/836802> を参照してください。

WMI がカウンタを取得できない

場合によっては、perfmon ではカウンタが値 0 を示しているのに WMI では同じカウンタが n/a を示すことがあります。perfmon ユーティリティを使用して選択できないカウンタは、このように動作します。perfex がこれらのカウンタの値を取得できるのは、perfmon をバイパスしてレジストリ経由でカウンタにアクセスしているためです。

WMI データが同期されない

WMI データは、Perfmon ユーティリティと同期されている必要があります。WMI データが同期されていない場合、次の操作を行う必要があります。

- 1 WMI サービスが対象マシンで開始していることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa826517\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa826517(VS.85).aspx) を参照してください。
- 2 名前空間 `root\CIMV2` が、SiteScope WMI リモート・サーバで指定したユーザにリモート・アクセスできるように設定されていることを確認します。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/295292> を参照してください。
- 3 対象マシンで、コマンド `perfmon` を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa645516\(VS.71\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa645516(VS.71).aspx) を参照してください。

これらのライブラリを再構築する方法の詳細については、<http://support.microsoft.com/?kbid=300956> を参照してください。

- 4 対象マシンで、コマンド `perfmon /wmi` を実行し、必要な perfmon オブジェクトが表示されることを確認します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa645516\(VS.71\).aspx](http://msdn.microsoft.com/ja-jp/library/aa645516(VS.71).aspx) を参照してください。

必要な perfmon オブジェクトが表示されない場合、コマンド `perfmon wmiadapt /f` を実行します。詳細については、[http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa394528\(VS.85\).aspx](http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa394528(VS.85).aspx) を参照してください。

リモート UNIX サーバが英語ロケールに設定されていない

問題：

標準設定で英語ロケールまたは英語言語に設定されていない UNIX リモート・サーバを使用すると、ファイル・モニタとディレクトリ・モニタで問題が発生する可能性があります。

解決方法：

「`LANG=C; export LANG`」を、問題が発生している UNIX リモート・サーバの [シェル環境の初期化] プロパティに追加します。

NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース表示時に使用するシステム・エンコーディング

この制限は、受信したデータの表示にリモート・ホストのエンコーディングを使用するすべてのサーバ・モニタに影響します。

SiteScope は、NETBIOS を介して接続するリモート・ホストのシステム・リソース情報を表示する際に、標準設定のシステム・エンコーディングを使用します。[**リモートサーバのエンコード**] フィールド (リモート・サーバの 603 ページの「メイン設定」で指定可能) は使用されません。たとえば、システム・エンコーディングが ASCII でリモートのエンコーディングが Unicode の場合、ASCII 文字は正しく表示され、Unicode 記号はサポートされません。

18

SiteScope での IP バージョン 6 のサポート

本章の内容

概念

▶ IP バージョン 6 のサポート (628 ページ)

タスク

▶ SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法 (632 ページ)

参照情報

▶ IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ (634 ページ)

概念

IP バージョン 6 のサポート

インターネット・プロトコル・バージョン 6 (IPv6) は、インターネットのネットワーク・レイヤの、インターネット・プロトコルの新しいバージョンです。IPv6 は、アドレスの枯渇、セキュリティ、自動構成、拡張性など、現在の IP バージョン (IPv4) が持つ問題の多くを解決するために設計されています。

IPv6 のサポートのレベルは、SiteScope がインストールされているオペレーティング・システムによって異なります。Windows Server 2008 では、IPv6 の全機能がサポートされ、標準設定でインストールおよび有効化されます。その結果、SiteScope が Windows Server 2008 以降にインストールされると、ほとんどの SiteScope モニタで IPv6 がサポートされます。Windows Server 2003 での IPv6 のサポートは限られており、多くのコア・サービスおよびネットワークング・コンポーネントではサポートされていません。また、SiteScope が IPv6 の完全サポートを提供する UNIX オペレーティング・システムにインストールされると、IPv6 が完全にサポートされます。

SiteScope では、標準設定で IPv4 アドレスを使用してリモート・サーバに接続します。ホスト名が IPv6 に解決されるように環境を設定するには、SiteScope の [インフラストラクチャプリファレンス] で [IP バージョン 6 アドレスを優先] オプションを選択できます。このオプションが選択されている場合、IPv6 が IPv4 より優先されるには、次の条件を満たす必要があります。

- ▶ リモート・サーバにホスト名が指定されている。IP アドレスが指定されている場合、使用される IP バージョンは IP アドレスによって判断されるため、IPv6 の優先設定はホストには何の効果もありません。
- ▶ ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決される。ホスト名が IPv4 アドレスのみに解決される場合は、IPv4 アドレスが使用されます。

注：

- ▶ ホスト名が指定されていて、ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決されるが、モニタで IPv6 がサポートされていない場合、モニタは機能しません。この問題の解決方法の詳細については、630 ページの「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」を参照してください。IPv6 をサポートするモニタのリストについては、634 ページの「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」を参照してください。
- ▶ NetBIOS 接続方式を使用するときにリモート監視対象サーバの名前としてリテラルの IPv6 アドレスを指定する場合、IPv6 アドレスを次のようにカスタマイズする必要があります。

1. すべてのコロン (':') 文字をダッシュ ('-') 文字に置き換える。
2. 「.ipv6-literal.net」というテキストを IP アドレスの最後に付加する。

たとえば、IPv6 アドレス : 2004:DB8:2a:1005:230:48ff:fe73:982d
は次のようになります。2004-DB8-2a-1005-230-48ff-fe73-982d.ipv6-literal.net

また、WMI 接続方法 (サポートされている場合) に切り替えると、IPv6 アドレスを変更する必要がなくなります。

本項の内容

- ▶ 630 ページの「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」
- ▶ 631 ページの「サポートされているプロトコル」

IPv4 と IPv6 の混合環境での作業

IPv4 と IPv6 の両方が使用される混合環境で作業する場合、DNS サーバから IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方がホスト名に返されることがあります。解決される各ホスト名に使用する IP アドレスを SiteScope で指定するには、次の手順を実行します。

- ▶ **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションを選択し、次のいずれかを実行します (IPv4 プロトコルを使用するホストの場合)。
 - ▶ 指定したリモート・サーバのホスト名の代わりに IP アドレスを入力します。
 - ▶ リモート・サーバで使用する IP アドレスにホスト名が解決されるように DNS サーバを設定します。これを行うには、指定したホストの DNS サーバから IPv6 アドレスを削除します。
- ▶ **[IP バージョン 6 アドレスを優先]** オプションをクリアし、次を実行します (IPv6 プロトコルを使用するホストの場合)。
 - ▶ 指定したリモート・サーバのホスト名の代わりに IP アドレスを入力します。
 - ▶ 指定したリモート・サーバで使用する IP アドレスにホスト名が解決されるように DNS サーバを設定します。これを行うには、指定したホストの DNS サーバから IPv4 アドレスを削除します。

SiteScope での IPv6 アドレス指定の有効化の詳細については、632 ページの「SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法」を参照してください。

サポートされているプロトコル

Windows および UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope で IPv6 を使用するときサポートされるプロトコルは、次のとおりです。

ターゲット	Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope	UNIX プラットフォームにインストールされた SiteScope
Windows	NetBios WMI	SSH
UNIX	サポートされていません	SSH

注：

- ▶ Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope では、Windows マシンのみを監視できます。
 - ▶ NetBIOS および WMI は、SiteScope が Windows にインストールされている場合のみサポートされます。SSH は Windows ではサポートされていません。
 - ▶ SSH は SiteScope が UNIX マシンにインストールされている場合のみサポートされます。UNIX 上で、SSH を使用して実行される SiteScope でサポートされる、Windows ベースのモニタのリストについては、663 ページの「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。
-

タスク

SiteScope での IP バージョン 6 アドレスの優先の有効化方法

このタスクでは、リモート・サーバに接続するときに IPv4 アドレスより IPv6 アドレスが優先されるように SiteScope を設定する方法について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 632 ページの「SiteScope での IPv6 アドレスの優先の有効化」
- ▶ 633 ページの「リモート監視対象サーバの名前として IPv6 アドレスをカスタマイズ (特定のモニタのみ)」

1 SiteScope での IPv6 アドレスの優先の有効化

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [サーバ設定] で、[IP バージョン 6 アドレスを優先] を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、715 ページの「サーバ設定」を参照してください。

注：

- ▶ この設定の変更を有効にするには、SiteScope を再起動する必要があります。
 - ▶ ホスト名が指定されていて、ホスト名が IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方に解決されるが、モニタで IPv6 がサポートされていない場合、モニタは機能しません。この問題の解決方法の詳細については、630 ページの「IPv4 と IPv6 の混合環境での作業」を参照してください。
-

2 リモート監視対象サーバの名前として IPv6 アドレスをカスタマイズ (特定のモニタのみ)

IPv6 アドレス指定を使用する場合、一部のモニタには追加のカスタマイズ要件（制限）があります。

追加の IPv6 アドレス・カスタマイズが必要なモニタについては、634 ページの「IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ」を参照してください。

参照情報

IP バージョン 6 アドレスがサポートされているモニタ

次に、IPv6 がサポートされているモニタを示します。SiteScope で IPv6 アドレスをさらにカスタマイズする必要があるモニタには、アスタリスク (*) が付いています。

- ▶ *Citrix Monitor
- ▶ *ColdFusion Server Monitor
- ▶ *CPU Monitor
- ▶ Database Counter Monitor
- ▶ Database Query Monitor
- ▶ DB2 8.x and 9.x Monitor
- ▶ Disk Space Monitor
- ▶ *Log File Monitor
- ▶ *Memory Monitor
- ▶ *Microsoft A/V Conferencing
- ▶ *Microsoft Archiving Server
- ▶ *Microsoft ASP Server Monitor
- ▶ *Microsoft Director Server
- ▶ *Microsoft Edge Server
- ▶ *Microsoft Front End Server
- ▶ *Microsoft IIS Server Monitor
- ▶ *Microsoft Mediation Server
- ▶ *Microsoft Monitoring and CDR Server
- ▶ *Microsoft Registrar Server
- ▶ *Microsoft SQL Server Monitor

- *Microsoft Windows Event Log Monitor
- *Microsoft Windows Resources Monitor
- *Microsoft Windows Media Server Monitor
- Oracle Database Monitor
- Ping Monitor
- Port Monitor
- *Real Media Server Monitor
- *Service Monitor
- UNIX Resources Monitor
- *URL Monitor
- *URL Content Monitor
- *URL List Monitor
- *URL Sequence Monitor
- *Web Service Monitor

19

セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope および SSH の概要 (638 ページ)
- ▶ SSH を使用したリモート Windows サーバの監視 (642 ページ)

タスク

- ▶ リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法 (644 ページ)
- ▶ リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法 (645 ページ)

参照情報

- ▶ UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件 (662 ページ)
- ▶ (エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ (663 ページ)

トラブルシューティングと制限事項 (665 ページ)

概念

SiteScope および SSH の概要

SiteScope では多数のセキュリティ機能をサポートしています。その 1 つに、セキュア・シェル (SSH) 接続を使用したリモート・サーバ監視のサポートがあります。SSH を使用してサーバに接続し、自動的にコマンドを送信できます。これにより、サーバでそのコマンドを実行してからサーバを切断できます。これは自動化された処理とスクリプトの作成に役立ちます。

セキュア・ソケット・シェルとも呼ばれるセキュア・シェル (SSH) は、UNIX ベースのコマンド・インタフェースで、リモート・コンピュータに安全にアクセスするためのプロトコルです。SSH は、Web やその他のサービスをリモート制御するためにネットワーク管理者によって広く使用されています。SSH コマンドは暗号化されており、いくつかの点でセキュアです。クライアント / サーバ接続の両端ではデジタル証明書を使用して認証され、パスワードは暗号化によって保護されています。セキュア・シェル・クライアント・マシンによって、リモート・マシンの SSH デーモンまたはサーバが要求されます。

SSH を使用した SiteScope での監視には、次の基本要件があります。

- 1 SSH を使用した SiteScope で監視するサーバに、SSH デーモン (またはサーバ) がインストールされてアクティブになっている。
- 2 Java SSH クライアントを統合した SiteScope。SiteScope には、Java と SiteScope アプリケーション・コード専用の言語で記述された SSH クライアントが含まれています。

本項の内容

- ▶ 639 ページの「SSH 接続オプション」
- ▶ 641 ページの「ガイドライン」

SSH 接続オプション

次の表に、現在 SiteScope でサポートされている SSH 接続オプションの概要を示します。SSH 接続の設定と管理の詳細については、641 ページの「ガイドライン」を参照してください。

Windows プラットフォームにインストールされた SiteScope の場合：

ターゲット	SiteScope クライアント・オプション	関連する接続先サーバ	コメント
Windows	Java SSH クライアントを統合した SiteScope	SSH サーバ (Cygwin OpenSSH)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ エージェントレス SSH。RemoteNTSSH パッケージは、エージェントレス SSH をサポートするモニタには不要です。エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、663 ページの「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。 ▶ SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH。リモート・サーバのホーム・ユーザ・ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージがインストールされている必要があります。詳細については、659 ページの「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。
UNIX/ Linux	Java SSH クライアントを統合した SiteScope	SSH ホスト・デーモン (独自開発または OpenSSH の sshd)	

UNIX または Linux プラットフォームにインストールされた SiteScope の場合 :

ターゲット	SiteScope クライアント・オプション	関連する接続先サーバ	コメント
Windows	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Java SSH クライアントを統合した SiteScope ▶ SSH クライアント (/usr/local/bin/ssh または usr/bin/ssh) 	SSH サーバ (Cygwin OpenSSH)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ エージェントレス SSH。RemoteNTSSH パッケージは、エージェントレス SSH をサポートするモニタには不要です。エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、663 ページの「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。 ▶ SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH。リモート・サーバのホーム・ユーザ・ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージがインストールされている必要があります。詳細については、659 ページの「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。
UNIX/ Linux	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Java SSH クライアントを統合した SiteScope ▶ SSH クライアント (/usr/local/bin/ssh または usr/bin/ssh) 	SSH ホスト・デーモン (独自開発または OpenSSH の sshd)	

ガイドライン

- ▶ SSH プロトコルには、バージョン 1 とバージョン 2 の 2 つの異なるバージョンがあります。バージョン 1 とバージョン 2 は異なるプロトコルで、互換性はありません。そのため、SSH クライアントと SSH ホストで同じプロトコル・バージョンを使用するように設定して通信できるようにする必要があります。多くの場合、SSH バージョン 1 (SSH1) が標準設定です。SSH バージョン 1 にはいくつかのセキュリティの脆弱性が発見されています。また、SSH1 プロトコルの開発は終了しており、SSH2 が現在の標準とみなされています。

ヒント: すべての SSH 接続に SSH バージョン 2 (SSH2) を使用することをお勧めします。

- ▶ インストールした SSH ユーティリティとライブラリのリリース・バージョン番号は、使用する SSH プロトコルのバージョンとは異なります。たとえば、OpenSSH リリース 3.5 は SSH1 と SSH2 プロトコルの両方をサポートしています。リリース・バージョン 3.5 のライブラリでは SSH バージョン 3.5 のプロトコルを使用するということではありません。OpenSSH ソフトウェアは SSH1 か SSH2 のいずれかを使用するように設定する必要があります。
- ▶ SSH 接続を使用して SiteScope リモート監視を設定した後に、その設定を変更するか、環境内のリモート・サーバにデプロイした SSH デモンまたはサーバ・ソフトウェアにアップグレードした場合、SiteScope が稼動しているマシンと監視されているリモート・サーバ間の SSH 接続を再設定することが必要になる可能性があります。

SSH を使用したリモート Windows サーバの監視

SiteScope が Windows 間の接続と Windows NT / 2000 / 2003 ネットワークでの監視に使用する標準設定のリモート接続方法は、NetBIOS です。これにより接続が容易になる一方で、いくつかの不利な点もあります。その 1 つは、NetBIOS はネットワーク・セキュリティにおいて比較的脆弱な点です。もう 1 つは、リモート実行スクリプトをサポートしていない点です。リモート・サーバでの実行コマンドは、リモート・サーバの UNC 構文を使用して記述された、リモート・マシンへのコマンドでローカルに実行されるスクリプトを必要とします。その場合でも、NetBIOS ではリモート・サーバから一部のパラメータを返しません。

注： SiteScope では Windows Management Instrumentation (WMI) プロトコルもサポートしています。このプロトコルは、Windows サーバで稼動しているリモート・サーバからデータを収集する場合に NetBIOS よりもセキュアな通信プロトコルです。リモート・マシンで WMI サービスを設定する方法の詳細については、594 ページの「リモート監視用の WMI サービスの設定」を参照してください。

SiteScope では、SSH を使用したリモート Windows NT/2000 サーバの監視をサポートしています。このテクノロジーは、リモート・サーバに SSH サーバとしてインストールされた Cygwin (<http://www.cygwin.com/> (英語サイト) で入手可能) からの OpenSSH バイナリでテストされています。また、F-Secure から使用可能なサーバでもテストされています。SourceForge (<http://sshhwindows.sourceforge.net/> (英語サイト) で入手可能) で使用可能な OpenSSH for Windows (以前の Network Simplicity の「OpenSSH on Windows」) も使用できます。

2 つのパッケージの比較概要を次に示します。

OpenSSH パッケージ	利点	不利な点
Cygwin OpenSSH	<ol style="list-style-type: none"> 1. Windows マシンで Windows または UNIX 形式のスクリプトにアクセス可能。 2. UNIX 形式のシステム・ツールとユーティリティにアクセス可能。 3. SiteScope から Windows リモートまたは UNIX リモート、あるいはその両方としてリモート・サーバにアクセス可能。 	複雑なセットアップ手順。
OpenSSH for Windows	単純なセットアップ手順。	Windows コマンド、スクリプト、ユーティリティにのみアクセス可能。

注：

- ▶ OpenSSH for Windows と Cygwin SSH の実装は互換性がありません。この 2 つは同じマシンにインストールしないでください。
- ▶ 複数のバージョンの Cygwin ユーティリティまたは複数の SSH サーバが 1 台のマシンにインストールされている場合、SSH 接続の動作を妨げる競合が発生する可能性があります。このような競合の 1 つに、「**エントリ・ポイントが見つかりません**」のようなエラー・メッセージがあります。このエラーの可能性を確認するには、マシンで `cygwin1.dll` の複数のコピーを検索します。この問題を解決するには、ユーティリティのすべてのバージョンを削除して、1 つのバージョンのみ再インストールすることが必要な場合があります。

リモート Windows サーバを SSH 監視用に設定する方法の詳細については、645 ページの「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。

タスク

リモート UNIX サーバでの SSH 監視の設定方法

Solaris または Linux の SiteScope では、SSH を使用したリモート監視をサポートしています。このタスクでは、リモート UNIX サーバでの SiteScope を使用した SSH 監視の設定に関する手順を説明します。

注 : UNIX 環境で監視するリモート・サーバの SSH ホストの設定は非常に複雑で、このドキュメントではそのすべては説明されていません。OpenSSH デーモンのインストールに関する推奨リソースとして、<http://www.sunfreeware.com/openssh.html> (英語サイト) (Solaris の場合) と <http://www.redhat.com/docs/manuals/linux/RHL5.4-Manual/ref-guide/s1-ssh-configfiles.html> (英語サイト) (Redhat Linux の場合) があります。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 645 ページの「前提条件」
- ▶ 645 ページの「リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定」
- ▶ 645 ページの「SSH 接続方法を使用するための UNIX リモートの設定」

1 前提条件

UNIX 環境で SiteScope を使用して SSH 監視をリモート UNIX サーバで設定する場合の要件の詳細は、662 ページの「UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件」を参照してください。

2 リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定

リモート・サーバで SSH サーバまたはデーモンを設定したら、リモート・サーバへの接続に SiteScope で使用する統合 Java SSH クライアントを設定する必要があります。

タスクの詳細については、671 ページの「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

3 SSH 接続方法を使用するための UNIX リモートの設定

SSH 接続を確認したら、SSH を接続方法として使用するために、SiteScope で UNIX リモート設定を作成または設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、608 ページの「[新規 UNIX リモートサーバ] / [UNIX リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法

このタスクでは、リモート Windows サーバでの SiteScope を使用した SSH 監視の設定に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 646 ページの「SSH サーバのインストールと設定」
- ▶ 646 ページの「プリインストール SiteScope SSH ファイルを使用した Windows SSH 監視の有効化 (任意指定)」
- ▶ 647 ページの「リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定」
- ▶ 647 ページの「SSH 接続方法を使用するための Windows リモートの設定」

1 SSH サーバのインストールと設定

SiteScope を接続する各リモート・サーバで SSH サーバをインストールして設定します。SSH 機能を可能にする、一般に入手可能な 2 つのソフトウェア・パッケージがあります。

- ▶ <http://www.cygwin.com/> (英語サイト) から入手可能な Cygwin 環境。タスクの詳細については、648 ページの「Windows での Cygwin OpenSSH のインストール」を参照してください。
- ▶ OpenSSH for Windows で入手可能な Windows 用の OpenSSH。タスクの詳細については、656 ページの「OpenSSH for Windows のインストール」を参照してください。

注: これらのセットアップは、SSH デーモンまたはサーバを実行する各サーバで実行する必要があります。

2 プリインストール SiteScope SSH ファイルを使用した Windows SSH 監視の有効化 (任意指定)

使用しているモニタに応じて、リモート・サーバの監視にプリインストールされた SiteScope SSH ファイルまたはエージェントレス Windows SSH を使用できます (サポートされているモニタのリストについては、663 ページの「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください)。

- ▶ **プリインストール SiteScope リモート Windows SSH ファイルの使用:** プリインストール SSH ファイルを使用したリモート・サーバの SSH 監視を有効にするには、各リモート・サーバに SiteScope リモート Windows SSH ファイルをインストールして、一般的に使用されるサーバ監視機能を有効にする必要があります。タスクの詳細については、659 ページの「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。
- ▶ **エージェントレス SSH:** エージェントレス Windows SSH を使用する場合は、リモート Windows サーバに SiteScope リモート Windows SSH ファイルをインストールする必要はありません。

ヒント: モニタがプリインストール SiteScope SSH ファイルとエージェントレス Windows SSH をサポートしている場合、エージェントレス Windows SSH の使用をお勧めします。

3 リモート・サーバに接続する SSH クライアントの設定

リモート・サーバで SSH サーバまたはデーモンを設定したら、リモート・サーバへの接続に SiteScope で使用する統合 Java SSH クライアントを設定する必要があります。タスクの詳細については、671 ページの「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

4 SSH 接続方法を使用するための Windows リモートの設定

SiteScope とリモート・サーバ間の SSH 接続を確認したら、次のように SiteScope で Windows リモート・サーバを設定します。

- ▶ [メイン設定] で、接続方法として **[SSH]** を選択します。その後、SSH 接続を使用するようにモニタを設定できます。
- ▶ プリインストール SiteScope SSH ファイルを使用したリモート・サーバの SSH 監視を有効にするには、[詳細設定] 表示枠で **[プリインストールされた SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH]** が選択されていることを確認します（これが標準設定です）。
- ▶ エージェントレス Windows SSH を使用して監視するには、[詳細設定] 表示枠で **[プリインストールされた SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用する SSH]** チェック・ボックスをクリアします。

ユーザ・インタフェースの詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

Windows での Cygwin OpenSSH のインストール

このタスクでは、Windows サーバでの Cygwin OpenSSH サーバのインストールと設定に関する手順を説明します。

注:

- ▶ このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、645 ページの「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- ▶ 次の手順は、マシンにはほかの Cygwin または SSH ユーティリティがインストールされておらず、マシンでインターネット・アクセスが可能なことを前提としています。
- ▶ SSH デーモンのインストールと実行に使用されるユーザ・ログイン・アカウントには、必要なプログラムのインストール、いくつかのファイル・オプションの設定、Windows サービスの制御に対する適切な権限が必要です。SiteScope で従属サーバの接続に使用するアカウントである必要はありませんが、SiteScope でサーバを監視する前にそのアカウントを Cygwin インストールで設定する必要があります。

Windows NT/2000 サーバで Cygwin OpenSSH サーバをインストールして設定するには、次の手順を実行します。

- 1 定義 CYGWIN = ntsec tty で新しいシステム環境変数を作成します。
- 2 文字列 ;C:¥cygwin¥bin を PATH 変数に追加します。変数への変更を保存します。
- 3 Cygwin セットアップ・プログラムを一時フォルダにダウンロードします。次に例を示します。C:¥temp。セットアップ・プログラムは、Cygwin で使用可能な異なるパッケージとコンポーネントの選択、ダウンロード、インストールに使用します。
- 4 ダウンロードしたセットアップ・プログラムを実行して、ダウンロード元の選択を促すメッセージが表示されたら [Install from Internet] オプションを選択します。[次へ] をクリックして次に進みます。
- 5 選択を促すメッセージが表示されたら、Cygwin パッケージをインストールするルート・インストール・ディレクトリを選択します。このディレクトリに SSH デーモンと関連ファイルがインストールされます。例 : C:¥cygwin。[次へ] をクリックして次に進みます。

- 6 選択を促すメッセージが表示されたら、Cygwin インストール・ファイルを保存する一時ディレクトリを選択します。例：C:\%temp。[次へ] をクリックして次に進みます。
- 7 選択を促すメッセージが表示されたら、[Internet Connection] オプションを選択します。通常は [Direct Connection] を使用できます。[次へ] をクリックして次に進みます。
- 8 選択を促すメッセージが表示されたら、選択リストを使用してファイルを取得するための適切なミラー・サイトを選択します。[次へ] をクリックして次に進みます。
- 9 セットアップ・プログラムによってそのミラー・サイトにあるパッケージが確認され、パッケージ・カテゴリの階層ツリーが表示されます。ダウンロードするパッケージを表示して選択するには、カテゴリ名の左側にあるプラス記号 (+) をクリックしてパッケージ・ツリーを展開します。ダウンロードとインストールに選択したパッケージのバージョン番号が [New] 列に表示されます。特定のパッケージのバージョン番号が表示されない場合、そのパッケージはダウンロードもインストールもされていません。パッケージをダウンロード用に選択するには、パッケージ名の左側にある [Skip] をクリックします。

注：標準設定でダウンロードに選択されている可能性のある開発ツール (Devel) とデータベース・ツール (Database) の多くは SSH デーモンの実行には不要で、ダウンロード時間とインストール領域を削減するために選択解除できます。

ダウンロードとインストールに次の各パッケージを選択します。

- ▶ [Admin] 分岐から [cygrunsrv]
- ▶ [Doc] 分岐から [cygwin-doc]
- ▶ [Shells] 分岐から [pdksh]
- ▶ [Net] 分岐から [openssh] と [openssl]
- ▶ [Editors] 分岐から任意の UNIX 形式のテキスト・エディタ (例：[vim] または [emacs])

選択を促すメッセージに従い、クリックしてファイルをダウンロードします。

- 10 指定したインストール・オプションに応じて、Cygwin セットアップで、選択したパッケージがダウンロードされてインストールされます。Cygwin ターミナル・ウィンドウへのショートカットをデスクトップまたは [Program Start] メニューに追加するかどうかの選択を促すメッセージが表示される場合があります。クリックして次に進み、インストールを完了します。
- 11 Cygwin セットアップが完了したら、デスクトップ・ショートカットまたは [Program Start] メニューの [Cygwin] をクリックして Cygwin ターミナル・ウィンドウを開きます。

注： Windows システムのユーザ・プロファイルによっては、ターミナル・ウィンドウで開かれる標準設定のディレクトリがルート Cygwin インストール・ツリー内でない場合があります。pwd コマンドを使用して現在のディレクトリを表示します。通常は、コマンド文字列 `cd /` を入力すると、標準設定では Windows の `C:\cygwin` ディレクトリの Cygwin ルートにディレクトリが変更されます。

標準設定の Cygwin グループ・ファイルを、マシンとネットワークで使用しているグループ名で更新します。標準設定の Cygwin グループ・ファイルを、サーバとドメインで定義したグループで更新するには、`mkgroup` ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkgroup -l >> ../etc/group
mkgroup -d >> ../etc/group
```

注:

- ▶ Cygwin にドメインとローカル・グループ・アカウントの両方を認識させるには、`mkgroup` ユーティリティをローカル・ユーザ (`-l` オプション) に対して 1 回、ドメイン・ユーザ (`-d` オプション) に対して 1 回の計 2 回実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、`>` だけではなく `>>` の構文を使用してください。
 - ▶ ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、`/etc/group` ファイルを手動で編集 (ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用) して重複するグループ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、監視に不要なグループ・エントリや、このマシンへのアクセスを禁止するグループ・エントリも削除します。
-

標準設定の Cygwin ユーザ (`passwd`) ファイルを、ローカル・マシンで定義したユーザと、このマシンの Cygwin にアクセスを許可する個々のドメイン・ユーザで更新します。標準設定の Cygwin ユーザ・ファイルの更新には、`mkpasswd` ユーティリティを使用します。

コマンドの使用例を次に示します。

```
mkpasswd -l >> ../etc/passwd
mkpasswd -d -u username >> ../etc/passwd (domain users)
```

注：

- ▶ 標準設定では、Cygwin は SYSTEM と呼ばれるローカル・ユーザとして OpenSSH デーモンを実行するように設定されています。Cygwin にドメインとローカル・マシン・ユーザ・アカウントの両方を認識させるには、すべてのローカル・ユーザの追加に `-l` オプション、個々のドメイン・ユーザの追加に `-d` と `-u` オプションを使用して `mkpasswd` を実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、`>` だけではなく `>>` の構文を使用してください。
 - ▶ ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、`/etc/passwd` ファイルを手動で編集 (ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用) して重複するユーザ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、個々のユーザの標準設定の `/home` パスとシェルを変更します。SiteScope で使用するユーザ・アカウントの `/home/sitescopeaccount/` ディレクトリに RemoteNTSSH パッケージをインストールする場合に、この変更が必要な可能性があります。
-

- 12 `cd /bin` と入力して、アクティブ・ディレクトリを `/bin` ディレクトリに変更します。
- 13 次のコマンド・ライン (末尾の空白とピリオドを含む) を入力して、Windows コマンド (CMD) ・シェルを示す `/bin` ディレクトリへのシンボリック・リンクを作成します。

```
In -s /cygdrive/c/winnt/system32/cmd.exe .
```

- 14 いくつかの Cygwin ファイルとディレクトリの権限と所有権を変更することをお勧めします。また、SSH デーモンのログ・ファイルを作成することもお勧めします。Cygwin ターミナル・コマンド・ラインに次のコマンド・ラインを入力し、各コマンド・ラインの入力後に **Enter** キーを押します。

```
cd /  
chmod -R og-w .  
chmod og+w /tmp  
touch /var/log/sshd.log
```

注:

- ▶ 空白を含めた正確な構文が必要です。
 - ▶ ファイルとディレクトリの権限が矛盾していたり不正に割り当てられたりしていると、SSH デーモンが開始できない、または SiteScope をリモート・サーバに接続してコマンドまたはスクリプトを実行できない可能性があります。
-

- 15** 次のコマンドを入力して、SSH デーモンを Windows サービスとして実行するように設定します。

```
ssh-host-config -y
```

CYGWIN= プロンプトが表示されたら、この操作の最初に設定した環境変数に一致させるため `ntsec tty` と入力します。通常、これにより、サーバの再起動が必要な場合に SSH デーモンまたはサービスを自動的に再起動するように設定されます。

- 16** 次のコマンドを使用して、SSH デーモンの暗号鍵とファイルを設定します。

```
ssh-user-config -y.
```

入力を促すメッセージが表示されたら、いくつかのキーストア・ファイルに必要なパスフレーズを入力します。プログラムから、確認のためにパスフレーズを再入力するように求められます。

- 17** SSH デーモンで使用するために、いくつかのファイルとフォルダの所有権を変更する必要があります。これらのファイルの権限がグループまたは「世界」レベルのユーザによって変更または実行可能な場合、プログラムは正常に実行できません。これらのファイルへのアクセスを制限するために、次のコマンド文字列を入力します。

```
chown SYSTEM:Users /var/log/sshd.log /var/empty /etc/ssh_h*  
chmod 755 /var/empty
```

- 18 [プログラム] > [管理ツール] > [サービス] パネルを使用し、CYGWIN sshd サービスの開始と停止を実行して、インストールされていることを確認します。

注: Cygwin には、SSH デーモンを開始するサーバ・ユーティリティが含まれています。ただし、Windows の [サービス] パネルを使用した場合はサーバを起動できる場合でも、この方法ではサーバの起動に失敗する多数の状況があります。

- 19 SiteScope での監視に使用するユーザ・アカウントの標準設定のシェルまたはコマンド環境を設定します。選択したシェルは、SSH 接続を使用してリモート実行できるスクリプトまたはコマンドのタイプに影響を与えます。UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して、`/etc/passwd` ファイルを編集します。使用する SiteScope ログイン・アカウントのエントリを検索し、次に示すように、`/bin/bash` からのシェルを使用するシェルに変更します。通常、これがそのアカウント・エントリ行の最後のエントリです。

- ▶ SiteScope で Windows コマンド・シェルを使用してリモート・サーバとやり取りする場合、標準設定のシェル・エントリを `/bin/cmd` に変更しません。Windows 形式のバッチ・ファイルとスクリプトを使用する場合はこのオプションを使用します。この前の操作手順で説明したように、`/bin` ディレクトリの Windows `cmd.exe` カーネルへのシンボリック・リンクを含める必要もあります。
- ▶ SiteScope で Cygwin UNIX シェルを使用してリモート Windows サーバとやり取りする場合、標準設定のシェル・エントリを `/bin/pdksh` に変更します。SiteScope SSH クライアントでは Cygwin の標準設定の `bash` シェルを正確に解析できない可能性があります。また、リモート UNIX サーバ接続を、Cygwin SSH デーモンに接続するこの (Windows) サーバに設定する必要もあります。

変更点をファイルに保存します。

- 20** `/etc/profile` ファイル内の `PATH` と標準設定のプロンプト・コマンドを編集して、`Cygwin` で特定のファイルを検索して `SiteScope` でリモート・シェルからの出力を解析できるようにします。UNIX 形式のテキスト・エディタを使用して、`/etc/profile` ファイルを編集します。ファイルの上部にある `PATH` 定義エントリを検索します。例：

```
PATH=/usr/local/bin:/usr/bin:/bin:$PATH
```

このエントリを次のように変更します。

```
PATH=./usr/local/bin:/usr/bin:/bin:$PATH
```

- 21** 標準設定のプロンプト・コマンドを変更するには、`/etc/profile` ファイルを編集して、次のようなセクションを検索します。

```
::
sh | -sh | */sh | ¥
sh.exe | -sh.exe | */sh.exe )
#Set a simple prompt
PS1='$ '
::
```

このエントリのすぐ下に、次を追加します。

```
::
pdksh | -pdksh | */pdksh | ¥
pdksh.exe | -pdksh.exe | */pdksh.exe )
#Set a simple prompt
PS1=>'
::
```

- 22** 変更点をファイルに保存します。
- 23** アクティブ・ディレクトリを、`SiteScope` 監視用に作成した、ユーザのホーム・ディレクトリに変更します。

これらの変更を加えて `SSH` デーモンを起動すると、`SSH` クライアントを使用してサーバに接続できます。

注 : `mkpasswd -l /etc/passwd` コマンドを実行するときは常に (新規ユーザの追加時など) `/etc/passwd` ファイルを再編集して, そのユーザの標準設定のシェルが SiteScope で使用するアカウントに必要な値に設定されるようにします。

OpenSSH for Windows のインストール

このタスクでは, Windows サーバでの OpenSSH サーバのインストールと設定に関する手順を説明します。

OpenSSH for Windows パッケージは, Cygwin SSH パッケージの代替パッケージで, インストールがより簡単です。その他の多くの製品と同じく, Cygwin 製品と Open SSH for Windows は変更される可能性があります。その影響として, 一部のバージョンの Cygwin SSH サーバでは SiteScope 監視に必要なデータが返されない場合があります。OpenSSH for Windows パッケージでこの問題を解決できる場合は, Cygwin パッケージの代わりにこのパッケージを使用する必要があります。

注 : このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については, 645 ページの「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。

Windows NT/2000 サーバで OpenSSH for Windows サーバをインストールして設定するには, 次の手順を実行します。

- 1 OpenSSH for Windows パッケージをダウンロードしてインストールします。
- 2 コマンド・プロンプトを開いてインストール・ディレクトリ (標準設定のインストール・パスは `C:\Program Files\OpenSSH`) を変更します。
- 3 アクティブ・ディレクトリを `OpenSSH\bin` ディレクトリに変更します。

- 4 標準設定のグループ・ファイルを、マシンとネットワークで使用しているグループ名で更新する必要があります。標準設定の OpenSSH グループ・ファイルを、サーバとドメインで定義したグループで更新するには、`mkggroup` ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkggroup -l >> ../etc/group
mkggroup -d >> ../etc/group
```

注：

- ▶ OpenSSH にドメインとローカル・グループ・アカウントの両方を認識させるには、`mkggroup` ユーティリティをローカル・ユーザ (`-l` オプション) に対して 1 回、ドメイン・ユーザ (`-d` オプション) に対して 1 回の計 2 回実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、`>` だけではなく `>>` の構文を使用してください。
- ▶ ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、`/etc/group` ファイルを手動で編集 (ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用) して重複するグループ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、不要なグループ・エントリや、このマシンへのアクセスを禁止するグループ・エントリも削除します。

- 5 標準設定の OpenSSH ユーザ (passwd) ファイルを、ローカル・マシンで定義したユーザと、このマシンの SSH サーバにアクセスを許可するドメイン・ユーザで更新する必要があります。標準設定のユーザ・ファイルの更新には、**mkpasswd** ユーティリティを使用します。コマンドの使用例を次に示します。

```
mkpasswd -l >> ../etc/passwd
mkpasswd -d -u username >> ../etc/passwd
```

注：

- ▶ OpenSSH にドメインとローカル・マシン・ユーザ・アカウントの両方を認識させるには、すべてのローカル・ユーザの追加に **-l** オプション、個々のドメイン・ユーザの追加に **-d** と **-u** オプションを使用して **mkpasswd** ユーティリティを実行します。ファイルへのエントリを追加する場合、> だけではなく >> の構文を使用してください。
- ▶ ローカルとドメインの両方のオプションを使用する場合、**/etc/passwd** ファイルを手動で編集 (ダウンロードした UNIX 形式のテキスト・エディタを使用) して重複するユーザ・エントリを削除する必要があります。必要に応じて、個々のユーザの標準設定の **/home** パスとシェルを変更します (次の指示を参照)。

-
- 6 [プログラム] > [管理ツール] > [サービス] パネルを使用し、**OpenSSH Server** サービスを開始して、インストールされていることを確認します。

SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール

このタスクでは、操作中の SSH パッケージに応じて、各リモート Windows サーバに SiteScope リモート Windows ファイルをインストールする手順を説明します。

注：

- ▶ このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、645 ページの「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
 - ▶ SiteScope リモート Windows ファイルは、エージェントレス SSH をサポートするリモート Windows サーバ・モニタにインストールする必要はありません。エージェントレス SSH をサポートするモニタのリストについては、663 ページの「(エージェントレスまたは SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した) Windows SSH をサポートするモニタ」を参照してください。
-

Cygwin インストールで SiteScope SSH ファイルをインストールする場合：

- 1 SSH を使用して SiteScope で監視する各マシンの **<インストール・ドライブ> :%cygwin%home** ディレクトリ内に **%sitescope_login_account_name** ディレクトリが存在することを確認します。**sitescope_login_account_name** を、SSH サーバを使用しているマシンへの接続に使用するユーザ・アカウント名に置き換えます。
- 2 Windows で SSH を使用する利点の 1 つは、SSH デーモンを実行しているリモート・サーバで SiteScope からスクリプトを実行できる点です。リモート・スクリプトの実行にスクリプト・モニタを使用できるようにするには、**/home/sitescope_login_account_name** ディレクトリに **scripts** サブディレクトリを作成します。SiteScope スクリプト・モニタで実行するために作成したスクリプトは、このディレクトリ内に置く必要があります。

- 3 SiteScope がインストールされているマシンで、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %tools** ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。

注 : **RemoteNTSSH.zip** の .exe および .dll ファイルのすべてで実行可能権限が必要です。コマンド **chmod +x *** を使用して、関連するファイルへの実行可能権限を取得します。

- 4 このファイルを、SSH サーバまたはデーモン・ソフトウェアをインストールした各リモート Windows NT/2000 サーバの **<インストール・ドライブ> :%cygwin%home%sitescope_login_account_name** ディレクトリにコピーします。
- 5 **RemoteNTSSH.zip** ファイルをリモート・サーバで展開します。zip ファイルの内容を **<インストール・ドライブ> :%cygwin%home%sitescope_login_account_name** ディレクトリに移動します。この操作で **<インストール・ドライブ> :%cygwin%home%sitescope_login_account_name%scripts** サブフォルダが作成されます。このサブフォルダには、SiteScope スクリプト・モニタで実行できるスクリプトを保持します。

注 : **RemoteNTSSH.zip** ファイルが SiteScope 11.10 以前のバージョンからのもの場合、すべてのリモート・サーバで **< SiteScope 11.10 のルート > %tools** ディレクトリから zip ファイルを再インストールする必要があります。

- 6 リモート・サーバで CYGWIN sshd サービスを開始します。

OpenSSH for Windows インストールで SiteScope SSH ファイルをインストールする場合 :

- 1** SiteScope がインストールされているマシンで、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %tools** ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。
- 2** このファイルを、インストール済みの SSH サーバを使用してマシンにログオンした後に自動的にユーザを移動する、ユーザ・ホーム・ディレクトリにコピーします。このディレクトリは、SSH サーバまたはデーモン・ソフトウェアをインストールした各リモート Windows NT/2000 サーバのディレクトリです。
- 3** リモート・サーバの **RemoteNTSSH.zip** ファイルをユーザ・ホーム・ディレクトリに展開します。この操作で**<ユーザ・ホーム・ディレクトリ > %scripts** サブフォルダが作成されます。このサブフォルダには、SiteScope スクリプト・モニタで実行できるスクリプトを保持します。

注 : **RemoteNTSSH.zip** ファイルが SiteScope 11.10 以前のバージョンからのもの場合、すべてのリモート・サーバで **< SiteScope 11.10 のルート > %tools** ディレクトリから zip ファイルを再インストールする必要があります。

- 4** リモート・サーバで OpenSSH Server サービスを開始します。

参照情報

UNIX リモート・サーバの SSH 設定要件

UNIX 環境で SiteScope を使用して SSH 監視を行う場合、リモート UNIX サーバには次の設定要件があります。

- ▶ セキュア・シェル・デーモンまたはサーバ (sshd) を、SiteScope で監視する各リモート・サーバにインストールする必要があります。
- ▶ リモート・サーバ上の SSH デーモンが実行されており、該当する通信ポートが開いている必要があります。たとえば、SSH の標準設定ではポート番号 22 です。
- ▶ SiteScope が実行されているサーバに SSH クライアントがインストールされている必要があります。この要件は、SiteScope に統合された Java SSH クライアントによって満たされます。

SiteScope を実行しているマシンから監視するリモート・マシンへの、SSH クライアントとサーバ間の接続を確認する必要があります。SiteScope で SSH を使用してリモート・サーバ接続を設定する前に、SiteScope アプリケーション外部で SSH 接続をチェックします。たとえば、SiteScope を Solaris または Linux で実行している場合、次のコマンド・ラインを使用して、サーバ <remotehost> に SSH2 を使用した SSH 接続を要求します。

```
ssh -2 <リモートホスト>
```

通常は、使用されている SSH プロトコルのバージョンを示すテキスト情報が返されます。また、現在のユーザの認証が試行されます。異なるユーザとしてログインを要求するには、`-l username` スイッチを使用します。

SSH 接続を確認したら、SSH を接続方法として使用するために、SiteScope で UNIX リモート設定を作成または設定します。

(エージェントレスまたは **SiteScope** リモート **Windows SSH** ファイルを使用した) **Windows SSH** をサポートするモニタ

次に、エージェントレス Windows SSH, または SiteScope のリモート Windows SSH ファイルを使用した Windows SSH がサポートされているモニタの一覧を示します。SiteScope の SSH ファイルを使用した Windows SSH がサポートされたすべてのモニタでは、UNIX プラットフォーム上で実行している SiteScope に対応しています。

モニタ	SiteScopes リモート Windows SSH ファイルを使用した Windows SSH のサポート	エージェントレス Windows SSH のサポート
Citrix Monitor	✓	✓
ColdFusion Server Monitor	✓	✓
CPU Monitor	✓	✓
Directory Monitor	✓	
Disk Space Monitor	✓	✓
Log File Monitor	✓	
Memory Monitor	✓	✓
Microsoft Archiving Server Monitor	✓	✓
Microsoft A/V Conferencing Server Monitor	✓	✓
Microsoft ASP Server Monitor	✓	✓
Microsoft Director Server Monitor	✓	✓
Microsoft Edge Server Monitor	✓	✓
Microsoft Front End Server Monitor	✓	✓
Microsoft Hyper-V Monitor	✓	✓
Microsoft IIS Server Monitor	✓	✓
Microsoft Mediation Server Monitor	✓	✓

第 19 章 • セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視

モニタ	SiteScopes リモート Windows SSH フィルを使用した Windows SSH のサポート	エージェントレス Windows SSH のサポート
Microsoft Monitoring and CDR Server Monitor	✓	✓
Microsoft Registrar Server Monitor	✓	✓
Microsoft SQL Server Monitor	✓	✓
Microsoft Windows Event Log Monitor	✓	
Microsoft Windows Media Server Monitor	✓	✓
Microsoft Windows Performance Counter Monitor	✓	
Microsoft Windows Resources Monitor	✓	✓
Microsoft Windows Services State Monitor	✓	
Real Media Server Monitor	✓	✓
Script Monitor	✓	
Service Monitor	✓	

🔍 トラブルシューティングと制限事項

本項では、SSH を使用して監視する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 665 ページの「Windows SSH ベースのモニタでのスキップ (Linux RedHat 5)」
- ▶ 665 ページの「エージェントレス Windows SSH が機能しない」
- ▶ 666 ページの「エージェントレス SSH がカウンタを取得できない」
- ▶ 666 ページの「SiteScope リモート SSH ファイルを使用した Windows SSH が機能しない」
- ▶ 666 ページの「エラー : "resize: unknown character exiting"」

Windows SSH ベースのモニタでのスキップ (Linux RedHat 5)

Linux RedHat 5 プラットフォームで実行されている Windows SSH ベースのモニタでスキップが発生した場合、`opt/SiteScope/java/lib/security/java.security` ファイルで次の変更を行う必要があります。

```
securerandom.source=file:/dev/urandom から
```

```
securerandom.source=file:///dev/urandom
```

エージェントレス Windows SSH が機能しない

SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用して Windows SSH が機能せず、エージェントレス Windows SSH がない場合は、次を実行します。

- ▶ `perfmon` が正常に機能していることを確認します。対象マシンで、コマンド `perfmon` を実行し、必要な `perfmon` オブジェクトが表示されることを確認します。これらのライブラリを再構築する方法の詳細については、<http://support.microsoft.com/?kbid=300956> を参照してください。
- ▶ コマンド・ラインで次のコマンドを入力し、リモート・マシンで `typeperf` コマンドが機能していることを確認します。

```
typeperf "%Processor(_Total)% Processor Time"
```

詳細については、<http://technet.microsoft.com/ja-jp/library/cc753182.aspx> を参照してください。

エージェントレス SSH がカウンタを取得できない

場合によっては、`perfmon` ではカウンタが値 0 を示しているのに SSH では同じカウンタが `n/a` を示すことがあります。`perfmon` ユーティリティを使用して選択できないカウンタは、このように動作します。SiteScope リモート Windows SSH ファイルを使用した SSH がこれらのカウンタの値を取得できるのは、`perfmon` をバイパスしてレジストリを通じてカウンタにアクセスしているためです。

SiteScope リモート SSH ファイルを使用した Windows SSH が機能しない

SiteScope SSH ファイルを使用した Windows SSH の監視の前提条件を満たしていることを確認します。詳細については、659 ページの「SiteScope リモート Windows SSH ファイルのインストール」を参照してください。

エラー : "resize: unknown character exiting"

SiteScope で SSH を使用して接続を作成できない場合、`error.log` または `runMonitor.log` に "resize: unknown character exiting" に類似するサーバ・エラー・メッセージが含まれている場合、これは、無効な `bash` 関連のコマンドが原因である可能性があります。SiteScope では、基本的な `bash` 環境のみがサポートされています。通常、`bash` コマンドはユーザの標準設定ディレクトリの下での `.bashrc` ファイルにあります。

20

SSH クライアントを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ 統合された Java SSH クライアントの概要 (668 ページ)

タスク

- ▶ 統合された Java SSH クライアントの設定方法 (671 ページ)

概念

統合された Java SSH クライアントの概要

リモート UNIX または Windows サーバとの接続にセキュア・シェル (SSH) を使用する必要がある場合、接続を確立し、データを転送するには、SiteScope から SSH クライアントにアクセスできる必要があります。この項では、SiteScope による監視で SSH を使用する場合のクライアント設定および問題をいくつか紹介します。

SiteScope では、Java で記述された SSH クライアントが SiteScope アプリケーションに統合されています。SSH を使用してサーバに接続するときに SiteScope で使用される必要なシステム・リソースが、このクライアントにより大幅に削減されます。Java クライアントでは、SSH バージョン 1 (SSH1) とバージョン 2 (SSH2) の両方のプロトコル、およびパスワード・ベースと鍵ベースの両方の認証がサポートされています。クライアントの SiteScope 設定は、UNIX、Linux、Windows の SiteScope で同じになります。

統合された Java SSH クライアントの設定の詳細については、671 ページの「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 669 ページの「統合された SSH クライアントを使った作業」
- ▶ 670 ページの「鍵ベース認証の設定」
- ▶ 670 ページの「SSH バージョン 2 プロトコルの使用」

統合された SSH クライアントを使った作業

SSH1 と SSH2 はいずれもセキュア・シェル・プロトコルですが、2 つの異なるプロトコルとみなされ、相互に互換性はありません。SSH1 にセキュリティの脆弱性が検出されたため、SSH2 が現行標準とみなされています。ほとんどの SSH ソフトウェアでは、両方のプロトコルがサポートされています。ただし、SSH 接続の要求には SSH1 ではなく、SSH2 を必ず使用してください。SSH クライアントと SSH ホスト間の通信に同じプロトコル・バージョンを使用するように、SSH クライアントと SSH ホストを設定する必要があります。多くの場合、SSH クライアントと SSH ホストの間で最低の共通基準とみなされる SSH1 が、接続に使用される標準設定のバージョンになります。

SSH2 接続を強制的に使用するには、次の 2 通りの方法があります。

- ▶ **SSH2 接続要求のみを受け入れるように、すべての SSH デーモンまたはサーバを設定する。**これは最も安全な方法ですが、各サーバのインストールおよびアクティブ化時に設定されていない場合は最も時間がかかります。
- ▶ **SSH2 のみを要求するように、SiteScope サーバの SSH クライアントを設定する。**変更が必要なのは、SiteScope サーバのクライアントのみです。統合された Java SSH クライアントの場合、これはリモート・サーバ設定ページの [詳細オプション] セクションの設定で制御されます。

鍵ベース認証の設定

SSH セキュリティのもう一つの要素は、認証です。SiteScope に統合された SSH クライアントは、2 つの認証オプションのいずれかを使用するように設定できます。

- ▶ **パスワード認証** : パスワード認証は、SiteScope で SSH 接続に使用される標準設定の方法です。
- ▶ **鍵ベース認証** : 鍵ベース認証では、パスフレーズと公開鍵および秘密鍵認証の使用によってセキュリティが強化されます。

SSH リモート・サーバで鍵ベース認証を使用するには、まず公開鍵と秘密鍵のペアを作成する必要があります。公開鍵はリモート・サーバに置かれ、秘密鍵は SiteScope マシンに保管されます。Cygwin OpenSSH と OpenSSH for Windows のいずれにも、ssh-keygen と呼ばれる鍵生成ツールが含まれています。ssh-keygen ツールでは、プロトコル・バージョン 1 とバージョン 2 の両方の鍵を作成できます。内部 Java ライブラリ・クライアントを使用して UNIX または Windows リモート・サーバを設定する場合は、MindTerm と呼ばれる鍵生成ツールを使用して、RSA (バージョン 1 とバージョン 2) と DSA (バージョン 2) の公開鍵 / 秘密鍵ペアを作成します。

SSH バージョン 2 プロトコルの使用

SiteScope Java クライアントでは、接続しようとしているサーバで SSH1 接続が許可される場合、標準設定で SSH1 プロトコルが使用されます。この折衝に失敗すると、バージョン 2 プロトコルを使用して接続が試行されます。SiteScope Java クライアントは、SSH2 接続のみを使用するように設定できます。SiteScope マシンで変更を行うほうが、多数のリモート SSH サーバを再設定するより簡単な場合があります。

タスク

統合された Java SSH クライアントの設定方法

このタスクでは、統合された Java SSH クライアントの設定の手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 671 ページの「SSH 接続の認証オプションを選択する」
- ▶ 671 ページの「SSH2 接続のみを使用するように SiteScope Java クライアントを設定する」

1 SSH 接続の認証オプションを選択する

SiteScope に SSH クライアントを統合する認証オプションとして、パスワード認証（SiteScope の標準設定の方法）または鍵ベース認証を選択します。

SSH 接続の鍵ベース認証を設定する方法の詳細については、672 ページの「鍵ベース認証の設定」を参照してください。

2 SSH2 接続のみを使用するように SiteScope Java クライアントを設定する

Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバでリモート・サーバ・プロファイルを設定するときに、[詳細設定] で [SSH バージョン 2 のみを使用] チェック・ボックスを選択します。

鍵ベース認証の設定

このタスクでは、MindTerm を使用して SSH リモート・サーバに鍵ベース認証を設定する手順について説明します。

注：このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、671 ページの「統合された Java SSH クライアントの設定方法」を参照してください。

公開鍵または秘密鍵ペアを作成するには、次の手順を実行します。

- 1 SiteScope サーバでコマンド・ウィンドウを開き、MindTerm を起動する次のコマンドを実行します。

```
< SiteScope のルート・ディレクトリ > %java%bin%java -jar c:% < SiteScope  
のルート・ディレクトリ > %WEB-INF%lib%mindterm.jar
```

注：SiteScope 7.9.5.x 以前のバージョンでは、次のコマンドを入力してください。<SiteScope のルート・ディレクトリ >%java%bin%java -jar c:%<SiteScope のルート・ディレクトリ > %java%lib%ext%mindterm.jar。

- 2 MindTerm で、[File] > [Create Keypair] > [DSA (または RSA)] を選択します。また、OpenSSH .pub 形式も選択します。
- 3 鍵ペアは、<ユーザのホーム・ディレクトリ > %mindterm ディレクトリに書き込まれます。identity.pub ファイルを <SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups ディレクトリにコピーします。
- 4 identity.pub ファイルをリモート・マシンの<ユーザのホーム・ディレクトリ > /.ssh ディレクトリにコピーし、ファイル名を authorized_keys (SSH2 の場合は authorized_keys2) に変更します。
- 5 リモート・マシンで、<ユーザのホーム・ディレクトリ > /.ssh ディレクトリで次のコマンドを実行し、User に authorized_keys ファイルの読み取り、書き込み、実行の権限があり、Group と Other に読み取り権限があることを確認します。

- 6 鍵ファイル認証と内部 Java ライブラリを使用して、リモート・サーバの SiteScope でリモート接続を作成します。

秘密鍵は **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups** ディレクトリに置かれ、公開鍵はリモート・マシンの **< ユーザのホーム・ディレクトリ > /.ssh/authorized_keys** ファイルに保存されます。

MindTerm から生成される鍵は、**Openssh** 形式になります。

注：サーバの鍵と MindTerm の鍵が同じレベルであることを確認する必要があります。たとえば、サーバの鍵が 768 ビットで MindTerm の鍵が 1024 ビットだと、認証手順は失敗します。

サーバで使用されているレベルを調べるには、次の手順を実行します。

- 1 リモート・サーバの sshd サービスを停止します。Red Hat Linux サーバの場合は、次のコマンドを実行します。

```
/etc/rc.d/init.d/sshd stop
```

- 2 リモート・サーバでデバッグ・モードで sshd サービスを起動します。Red Hat Linux サーバの場合は、次のコマンドを実行します。

```
/usr/sbin/sshd -d
```

Generating 768 bit RSA key に似た出力が表示されます。

注：SiteScope で [SSH 接続の鍵ファイル] ボックスを使用する場合、入力した情報の末尾にスペースがあると、「不明なエラー (-1)」による失敗の原因になります。問題を修正するには、末尾のスペースを削除します。

openSSH 鍵を SEC SSH 形式に変換するには、次の手順を実行します。

- 1 MindTerm で RSA 鍵（openSSH 鍵ペア）を作成します。
- 2 リモート・サーバで次のコマンドを実行して、openSSH 鍵を SEC SSH 形式に変換します。

```
ssh-kegen -e -f <公開鍵>
```

- 3 openSSH 形式の秘密鍵を SiteScope サーバに置いたままにします。

注：鍵ベース認証を使用する場合、提供する鍵ファイルはバージョン 2 の秘密鍵にする必要があります。

21

UNIX オペレーティング・システム・アダプタ

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要 (676 ページ)

タスク

- ▶ アダプタの追加方法 (677 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope で提供される UNIX アダプタ (679 ページ)
- ▶ アダプタ・ファイルの形式 (680 ページ)
- ▶ アダプタ・コマンド・リスト (682 ページ)

概念

SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタの概要

SiteScope UNIX オペレーティング・システム・アダプタを使用して、SiteScope を拡張し、標準設定でサポートされている UNIX のバージョンおよびそれ以外のバージョンに接続してリモートで監視できます。そのためには、監視する UNIX の特定のバージョンがサポートされるようにアダプタ・ファイルを設定します。

SiteScope では、アダプタ・ファイルを使用して、異なるバージョンの UNIX オペレーティング・システムが実行されているサーバからさまざまなシステム・リソース情報を取得するために必要なコマンドを記述します。これらのアダプタ・ファイルはプレーン・テキストで記述され、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > /templates.os** ディレクトリに保存されます。SiteScope に含まれている標準設定の UNIX アダプタのリストについては、679 ページの「SiteScope で提供される UNIX アダプタ」を参照してください。

使用している環境の特定のシステム要件に合わせて既存のアダプタ・ファイルを変更できます。また、独自のアダプタ・ファイルを作成し、SiteScope で他の UNIX バージョンを監視できます。

タスク

アダプタの追加方法

このタスクでは、UNIX の特定のバージョンにアダプタを追加する手順について説明します。

- 1 アダプタ・キットのドキュメントをよく読みます。
- 2 サポートを追加する UNIX プラットフォームが、SiteScope の標準設定でサポートされている UNIX プラットフォームのいずれかに類似する場合、その UNIX バージョンのアダプタ・ファイルのコピーを作成し、使用するアダプタの出発点として使用します。
- 3 SiteScope で接続する UNIX バージョンのコマンド・ライン要件に適合するように、アダプタ・ファイルを変更します。
- 4 アダプタ・ファイルを < SiteScope のルート・ディレクトリ > /templates.os ディレクトリに保存します。ファイル名には、.config 拡張子を使用する必要があります。
- 5 新しいアダプタ・ファイルを追加したインストール SiteScope を開きます。
- 6 左側の表示枠で [リモート サーバ] をクリックして、リモート・サーバ・ビューを表示します。
- 7 リモート・サーバ・ツリーで、[UNIX リモート サーバ] を右クリックして、[新規 UNIX リモート サーバ] を選択します。[新規 UNIX リモート サーバ] ダイアログ・ボックスが開きます。
- 8 [オペレーティング システム] ボックスで、作成した UNIX アダプタの名前を選択します。
- 9 [OK] をクリックすると、SiteScope で新しいアダプタ・ファイルを使用して、リモート・サーバから該当するデータの取得が試行されます。

- 10** 1 つ以上のサーバ接続プロファイルがアダプタを使用するように設定した後にアダプタ・ファイルを変更する場合、アダプタをテストするには、[UNIX リモートサーバ] の [詳細テスト] オプションを使用できます。リモートサーバを追加したら、[詳細テスト] には、リモートで SiteScope が実行されるコマンドの出力と、SiteScope による出力の解析が表示されます。

特定のテンプレートを変更するのに必要な作業量は、新しい UNIX プラットフォームが、サポートされている UNIX プラットフォームとどの程度異なるかによります。

参照情報

SiteScope で提供される UNIX アダプタ

SiteScope で提供される標準設定の UNIX アダプタは、次のとおりです。

ファイル名	説明
AIX.config	IBM AIX のアダプタ・ファイル
Digital.config	Digital Tru64 UNIX (Pre 4.x) のアダプタ・ファイル
FreeBSD.config	FreeBSD 3.x のアダプタ・ファイル
HP.config /HP-UX.config	Hewlett-Packard HP/UX のアダプタ・ファイル
HP64.config	Hewlett-Packard HP/UX 64 ビットのアダプタ・ファイル
ILO.config	Hewlett-Packard Integrated Lights-Out のアダプタ・ファイル
Linux.config	Linux (Redhat など) のアダプタ・ファイル
MacOSX.config	Apple Macintosh OS X のアダプタ・ファイル
NonStopOS.config	Hewlett-Packard NonStop オペレーティング・システムのアダプタ・ファイル
OPENSERVER.config	SCO OpenServer のアダプタ・ファイル
RedHatEnterpriseLinux.config	RedHat ES Linux のアダプタ・ファイル
SCO.config	SCO UNIXWare のアダプタ・ファイル
SGI.config	Silicon Graphics Irix のアダプタ・ファイル
Sun.config / SunOS.config	Sun Microsystems Solaris のアダプタ・ファイル
Tru64.config	Compaq Tru64 UNIX 5.x のアダプタ・ファイル

アダプタ・ファイルの形式

< SiteScope のルート・ディレクトリ > /templates.os ディレクトリに, SiteScope のリモート監視でサポートされている各 UNIX プラットフォームのアダプタ・ファイルがあります。これらのファイルには, SiteScope の標準設定ファイル形式が使用されます。

最初の設定グループ (最初の # 記号行の前の設定) にプラットフォームが記述されます。

```
id=yourPlatform
name=your Platform Name
```

id は, OS を示す SiteScope 内部の ID です。この ID は一意である必要があります。スペースを含まない英数字を使用できます。

ヒント: アダプタ・ファイルの名前を ID 名として使用することをお勧めします。たとえばアダプタ・ファイルの名前が `linux.config` の場合, ID は `linux` になります。

`name` は, リモート・サーバを追加または編集するときにドロップダウン・リストに表示する名前です。

テンプレート・ファイルの残りの部分には, # 文字の行で区切ってコマンドを 1 つずつ表す設定のグループが含まれています。たとえば, 次の設定はディスク領域のコマンドを表します。

```
id=disks
command=/usr/bin/df -k
mount=6
name=1
```


各パラメータの内容は次のとおりです。

id=disks は、SiteScope でコマンドを検索するときを使用される ID です。これは、SiteScope コマンド・セットの 1 つであることが必要です (682 ページの「アダプタ・コマンド・リスト」を参照)。このエントリでは大文字と小文字が区別されます。

command=/usr/bin/df -k は、ディスクについての情報を取得するために **usr/bin/df -k** コマンドが実行されることを意味します。

mount=6 と **name=1** は、マウント名が列 6 にあり、マウントまたはファイル・システムの名前が列 1 にあることを意味します。データ名はコマンドごとに異なり、後述のようにドキュメント化されています。

これを次のコマンド出力に適用します。

```
ファイルシステムによって使用可能な容量が /proc 0 0 0 0% にマウントされました  
/proc /dev/dsk/c0t3d0s0 73049 42404 23341 65% /
```

disks コマンドにより、(/dev) で始まらない行では、ファイル・システムの名前として列 1 (/dev/dsk/c0t3d0s0)、マウント名として列 6 ("/") の読み取りが自動的にスキップされます。

アダプタ・コマンド・リスト

SiteScope が正常に動作するには、次の各コマンドの設定が必要です。各コマンド記述には、ID、コマンド、データの読み取り元を指定する 1 つ以上のフィールド、および（ヘッダ行など）特定の行を排除するためにコマンド出力のフィルタに使用する修飾子セット（任意指定）が必要です。

後述の変数 **column** は、データが表示される列の数を意味します。列はスペースで区切られたデータ・セットです。

さらに、コマンド記述に任意で適用できる特定のフィールドがあります。詳細については、685 ページの「任意のアダプタ・コマンドの詳細」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 682 ページの「ディスク一覧表示」
- ▶ 683 ページの「ディスク情報」
- ▶ 683 ページの「メモリ」
- ▶ 684 ページの「ページ障害」
- ▶ 684 ページの「CPU 使用率」
- ▶ 685 ページの「プロセス・リスト」
- ▶ 685 ページの「プロセス・リストと詳細」
- ▶ 685 ページの「任意のアダプタ・コマンドの詳細」

ディスク一覧表示

ID	説明	使用場所	フィールド
disks	システムにあるファイル・システムのリストを返します。 <code>/usr/bin/df -k</code> コマンドは、このデータを取得する標準的な方法です。返された行で <code>/dev</code> で始まらないものは自動的にスキップされます。	ディスク容量モニタ	name : ファイル・システムの名前の列。 mount : マウントの名前の列。

ディスク情報

ID	説明	使用場所	フィールド
disk	引数としてディスクを使用し、ディスクの合計、空き、使用済みパーセントを返します。	ディスク容量モニタ	total : ファイル・システムの合計容量(キロバイト)の列。 free : ファイル・システムの空き容量(キロバイト)の列。

メモリ

ID	説明	使用場所	フィールド
メモリ	スワップ領域の使用済み量と使用可能量。	メモリ・モニタ	swapUnit : バイト数を計算するために使用済み、空き、または合計スワップ領域に適用される乗数。 used : 使用済みのスワップ領域の量。 free : 空いているスワップ領域の量。 total : 合計スワップ領域の量。 注 : 読み込む必要があるのは、 used , free , total フィールドのうち 2 つのみです。残りは計算されます。

ページ障害

ID	説明	使用場所	フィールド
pageFault	1 秒あたりのページ障害の数。複数のページ障害行に一致した場合は、合計されます。	メモリ・モニタ	<p>pageFaults : ページ障害の数の列。</p> <p>inPageFaults : ページ読み込み障害の数の列。</p> <p>outPageFaults : ページ書き出し障害の数の列。</p> <p>units : ページング・データの pages (標準設定), pages/sec, または k/sec units。</p> <p>pageSize : 単位が k/sec の場合, pageSize を使用してページ数が計算されます。それ以外では無視されます。</p> <p>注 : データが 1 列の場合は pageFaults, ページ障害データが 2 列の場合は inPageFaults と outPageFaults を使用します。inPageFaults と outPageFaults は、合計ページ障害数を出すために合計されます。</p>

CPU 使用率

ID	説明	使用場所	フィールド
cpu	CPU の待ち % とアイドル % を返します。	CPU モニタ	<p>idle : CPU のアイドル %。</p> <p>wait : CPU の待ち % (任意指定)。</p>

プロセス・リスト

ID	説明	使用場所	フィールド
process	プロセス名が長いプロセスのリスト。通常これは <code>/usr/bin/ps -ef</code> です。	サービス・モニタ	name : プロセスの名前の列。

プロセス・リストと詳細

ID	説明	使用場所	フィールド
process Detail	プロセスのサイズを表示するプロセスのリスト。通常これは <code>/usr/bin/ps -el</code> です。	サービス・モニタ ([Check Memory] オプションは有効)	name : プロセスの名前の列。 size : プロセスのサイズの列。 pageSize : システム上のページ・サイズ (任意指定)。標準設定は 8192 です。

任意のアダプタ・コマンドの詳細

次のフィールドは、コマンド記述に任意で適用できます。

プロセス・リストと詳細

ID	説明
startLine	コマンドがデータ検索を開始する行番号。
endLine	コマンドがデータ検索を終了する行番号。
skipLine	一致したら行をスキップするパターン。
matchLine	一致したらその行のデータを検索するパターン。
startMatch	一致したらデータを検索するコマンドを起動するパターン。

ID	説明
endMatch	一致したらデータを検索するコマンドを終了するパターン。
reverseLines	true の場合、コマンド・ラインは逆転され後ろから前に読み取られます。これは、コマンドの最後にデータがあり、読み取りを開始するときに操作しづらい場合に便利です。

フィールド名に **fieldNameColumnName=COLUMN** という形式がある場合、アダプタはヘッダ（最初の行）から **COLUMN** を検索し、データを含む列を記録し、それらの設定を使用して **fieldName** フィールドを読み取ります。これは、列幅が異なり、データにスペースが使用されている場合に便利です。

次のコマンド出力から **my data** 情報を読み取る場合の例を示します。

```
MEM NAME DESC
12K my data some of my data
```

コマンド記述の名前フィールドを次のように指定します。

```
nameColumnName=NAME
```

アダプタは、ヘッダ行を読み取り、**NAME** を検出し、前の列が終了した場所（この場合は **MEM**）と指定した列が終了する場所（**NAME**）を記録し、それを使用して、（この場合では）文字の列 6 ~ 22 を読み取ります。

ColumnName の実際の読み取りの例を参照するには、サポートされている UNIX プラットフォームの **process** および **processDetail** コマンドを参照してください。このメソッドを使用して、プロセス名とプロセスのサイズが取得されます。

第 VII 部

プリファレンス

22

一般プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ 一般プリファレンスの概要 (690 ページ)

参照情報

- ▶ 一般プリファレンス・ページ (692 ページ)

概念

一般プリファレンスの概要

本項では、次の SiteScope 一般プリファレンスの主要概念について説明します。

- ▶ 690 ページの「標準設定の認証資格情報の使用」
- ▶ 691 ページの「モニタ・プロセスの一時停止」
- ▶ 691 ページの「Web スクリプト・モニタのファイル・ディレクトリ」

注：多言語化の問題に関連する一般プリファレンスの詳細については、915 ページの「多言語化 (I18N) 環境での SiteScope の使用」を参照してください。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、692 ページの「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。

標準設定の認証資格情報の使用

このセクションを使用して、特定のアプリケーションおよびシステムにログインするために SiteScope で使用する標準設定の認証資格情報を入力します。このユーザ名およびパスワードは、次の条件を満たす場合に使用されます。

- ▶ ほかの認証資格情報が個々のモニタの設定時に入力されていない。
- ▶ 認証先アプリケーションまたはシステムで認証資格情報が必要である。URL モニタ、URL シーケンス・モニタ、Web サービス・モニタでこの機能を使用できます。

モニタ・プロセスの一時停止

大規模で複雑な監視環境の場合、大量のモニタが実行されて SiteScope の負荷が高くなり、応答が遅くなる可能性があります。これは、一部のモニタで過度に監視が行われるように設定されていることや、システムが過負荷になっていることなどが原因になります。監視アクションによって SiteScope のパフォーマンスが下がっている場合、監視アクションを一時停止して設定を変更することをお勧めします。モニタを一時停止して、大規模な設定操作（一括の検索置換など）の完了に要する時間を削減できます。[**全モニタを一時停止**] オプションには、次の機能があります。

Web スクリプト・モニタのファイル・ディレクトリ

Web スクリプト・モニタでは、VuGen スクリプトを実行してパフォーマンスと Web アプリケーションのデータ内容を監視します。モニタで使用する VuGen スクリプトは、これらのスクリプト用の標準設定ディレクトリ（< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> %templates.webscripts）に保存することも、一般プリファレンスで別のディレクトリを定義することもできます。

注： Web スクリプト・モニタは、SiteScope に直接アクセスしているユーザのみが使用できます。BSM のシステム可用性管理を使用して SiteScope にアクセスしているユーザは使用できません。

参照情報

一般プリファレンス・ページ

このページでは、SiteScope のライセンス情報のほかに、一般的な表示機能、任意指定の機能、アクセス・オプションを入力および表示できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 一般プリファレンスの編集 」権限を付与されたユーザのみが、一般プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	918 ページの「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」
関連情報	690 ページの「一般プリファレンスの概要」

メイン・パネル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
VuGen スクリプト・パスのルート	<p>Web スクリプト・モニタで使用する VuGen スクリプトの zip ファイルを保存するディレクトリ。ここで入力したディレクトリのファイルが Web スクリプト・モニタの設定時に使用可能なスクリプトのリストに表示されます。ここで値を入力しない場合、標準設定のディレクトリ < SiteScope のルート・ディレクトリ > <code>¥templates.webscripts</code> ファイルがモニタの設定時に表示されます。</p> <p>モニタを使った作業の詳細については、784 ページの「Web Script Monitor Overview」を参照してください。</p>
標準設定の認証ユーザ名	<p>リモート・システムの認証に使用する標準設定のユーザ名。<ユーザ名>と<ドメイン>¥<ユーザ名>のどちらも有効な形式です。モニタの設定時に別のユーザ名を明示的に入力しないかぎり、SiteScope ではこのユーザ名が使用されます。</p>
標準設定の認証パスワード	<p>リモート・システムの認証に使用する標準設定のパスワード。モニタの設定時に別のパスワードを明示的に入力しないかぎり、SiteScope では先の一覧表示したモニタ・タイプにこのパスワードが使用されます。</p>
プリエンティブ認証	<p>SiteScope で認証先 URL が要求されたときに、標準設定のユーザの資格情報を認証するために使用されるオプションが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 最初の要求を認証：認証先サーバに対して、SiteScope によって作成される最初の要求でユーザ名とパスワードが送信されます。 ▶ 要求された場合に認証：サーバでユーザ名とパスワードの要求があった場合に、2 番目の要求でユーザ名とパスワードが送信されます。 <p>標準設定値：最初の要求を認証</p>
SiteScope 再起動スケジュール	<p>SiteScope の再起動のスケジュールを選択できます([オフ], [開始後 24 時間ごと], または [時間指定スケジュール プリファレンス] でスケジュールを定義できます)。スケジュールの定義の詳細については、837 ページの「[時間指定スケジュール] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：オフ</p>

UI 要素	説明
<p>ファイルごとのバックアップ数</p>	<p>保持する SiteScope 設定ファイルのバックアップ数が表示されます。この機能は、重要なモニタ、警告、一般的な SiteScope 設定情報の保持に役立ちます。この数は、保持するファイルごとのバックアップ数を表します。SiteScope では、filename.bak.1、filename.bak.2、filename.bak.# の命名規則が使用されます。ここで 1 は最新のバックアップ・ファイルになります。</p> <p>例：一般的な SiteScope 設定情報が含まれるファイルを < SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups にバックアップできます。</p> <p>標準設定値： 1</p>
<p>ロケール固有の日付と時間</p>	<p>特定のロケール、国、文化に該当する形式で日付と時間が表示されます。別のロケール設定を使用するには、目的のロケールのコードが含まれるように SiteScope 設定ファイルを変更し、[一般プリファレンス] 設定でこのオプションを選択します。このタスクの実行方法の詳細については、918 ページの「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」を参照してください。</p> <p>標準設定値： 選択済み (標準設定は米国形式です)</p>

UI 要素	説明
国際化対応版	<p>国際化対応文字セットが有効になります。このオプションを選択すると、すべての文字エンコーディングが SiteScope によってサポートされます。このオプションを使用して、複数のソースおよびオペレーティング・システムの文字エンコーディング（外国語の Web ページなど）を SiteScope で同時に処理できます。</p> <p>選択しない場合、SiteScope がインストールされているオペレーティング・システムの標準設定の文字セットのみがサポートされます。すべての URL モニタ・タイプ、ログ・ファイル・モニタ、ファイル・モニタはこのかぎりではありません。これらのモニタ・タイプでは、[国際化対応版] オプション設定に関係なく複数の文字エンコーディングがサポートされます。このタスクを実行する方法の詳細については、918 ページの「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」を参照してください。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>
全モニタを一時停止	<p>すべてのモニタの実行が一時停止されます。監視インフラストラクチャ全体の設定を変更する場合に使用します。監視を再アクティブ化するには、このオプションをクリアします。</p> <p>注： このオプションでは、該当の SiteScope インストールで現在定義されているすべてのモニタが無効になります。モニタの一時停止を設定してからこのオプションをクリアしてモニタを再有効化する場合、モニタの一時停止アクションの前に無効化されていた個々のモニタは元の無効化された状態が維持されます。</p> <p>このオプションを使用すると、レポートに影響する可能性があります。監視が一時停止されている間に実行されたモニタでは、レポートでその期間が空白で表示される場合があります。</p> <p>警告： SiteScope でモニタが一時停止になっていることは、現在インタフェースには表示されません。[全モニタを一時停止] オプションが有効になっている場合、「SiteScope は [一時停止] モードです；モニタは現在一切起動していません。」というメッセージが表示されます。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>

ライセンス

SiteScope を使用するには、有効なライセンスが必要です。この表示枠では、SiteScope へのライセンス・ファイルのインポートのほか、ライセンスの種類、状態、ポイント消費などの表示が行えます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [ライセンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 有効なライセンス・ファイルがない場合、HP License Key Delivery Service サイト (https://webware.hp.com/Welcome.asp) (英語サイト) を使用して、ライセンスの更新またはアップグレードの要求を送信できます。 ▶ [OS インスタンス ライセンス使用状況] の表には、1 つ以上の OS ベース・ライセンス・モニタが定義されているホストだけが表示されます。
関連情報	『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF)の「SiteScope のライセンス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<ライセンス・サマリ>	<p>ライセンスの種類と状態のサマリ(ライセンスされたポイントの数と使用されているポイントの数、OS ライセンス・インスタンスの合計数、使用されている OS インスタンス、OS インスタンスによって保存されているライセンス・ポイントの数など)が表示されます。一時ライセンスまたは評価ライセンスの場合、ライセンスの残余日数も含まれます。</p> <p>注: これには、期限が切れているライセンスや評価ライセンス(一般ライセンスがインポートされている場合)の情報は含まれていません。</p>
ライセンス ファイル	SiteScope ライセンス・ファイルのパスを入力するか、 [選択] ボタンをクリックしてライセンス・ファイルを選択します。60 日間のトライアル期間以降も SiteScope を使用する場合はライセンスを購入する必要があります。
インポート	選択したライセンス・ファイルからライセンスがインポートされます。

UI 要素	説明
ライセンスの削除	<p>選択したライセンスが削除されます。</p> <p>注: ライセンスを削除すると、選択されているライセンス・タイプのほかのライセンスも削除される可能性があります。</p>
[インストールされているライセンス] テーブル	
期限切れライセンスを表示	<p>期限切れライセンスをテーブル内に含める場合に選択します。</p>
タイプ	<p>インポートされるライセンスのタイプ。ライセンスは次のいずれかになります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 一般: ライセンスの一部として含まれているモニタ・ポイントの数に基づいて、SiteScope の標準的な機能を有効にします。一般ライセンスは、一時ライセンス (時間ベース) または永続ライセンスのどちらかです。 ▶ 評価: SiteScope の標準機能が有効になり、無料のトライアル期間 (60 日間で 500 モニタ・ポイント) 中に追加モニタを使用できます。評価ライセンスは更新できません。 ▶ 拡張: 任意指定の監視機能およびソリューション・テンプレートが有効になります。 ▶ OS インスタンス: 使用されているモニタの数に対するポイントではなく、監視されている OS / ホスト・インスタンスの数に応じて計算される、代替ライセンス・モデル・オプションです。 ▶ フェールオーバー: プライマリ SiteScope サーバが停止した場合に SiteScope Failover Manager の機能を有効にします。 <p>ライセンスのタイプの詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「SiteScope ライセンスのタイプについて」を参照してください。</p>
詳細	<p>ライセンスのタイプとライセンスの有効期間 (永続または日数)。</p>
失効	<p>ライセンスが永久ライセンスであるか、あるいは有効期限に達している場合を除き、失効日と残余日数が表示されます。</p> <p>注: 評価ライセンスが通常のポイント・ライセンスによってオーバーライドされる場合、そのライセンスは「期限切れ」と表示されます。</p>

UI 要素	説明
<p>数量</p>	<p>購入したライセンスのモニタ・ポイントの数。一般ライセンス・キーによって管理されているモニタ・ポイントの総数が、拡張ライセンスによって増えることはありません。任意指定のモニタ・タイプを作成するために使用されるモニタ・ポイントは、一般ライセンスに含まれるモニタ・ポイントの総数から差し引かれます。評価の固定値は 500 ポイントです。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ OS インスタンス・ライセンスの場合、この列には監視される OS / ホスト・インスタンスの数が表示されます。 ▶ 拡張ライセンスの場合、この列には常に「1」が表示されます。各モニタまたはソリューション・テンプレートには、「一般」ライセンス・ポイントから取得される、それ自体のポイント消費があります。
<p>【OS インスタンス ライセンス使用状況】 テーブル</p> <p>SiteScope は、使用可能な OS インスタンス・ライセンスを、最もビジーなホスト（そのサーバ上で OS インスタンス対応モニタによってのみ消費されるポイントの最大数を占めるホスト）に適用します。OS 対応モニタ・インスタンスによって消費されるポイントは適用されず、OS インスタンス・ライセンスの対象ではないほかのモニタでも使用できます。</p>	
<p>Show top 20 hosts only</p>	<p>テーブル内に最もビジーなホスト・サーバ 20 台だけを表示します。</p> <p>標準設定値： 選択されている</p>
<p>ホスト /OS</p>	<p>OS インスタンス対応モニタが実行されているホスト・マシンの名前または IP アドレス。</p>

UI 要素	説明
適用されている OS インスタンス ライセンス	<p>OS インスタンス・ライセンスがそのホストに適用されたかどうかを示します。OS インスタンス・ライセンスが適用されたホストの場合、保存されているポイントの数が表示されます。</p> <p>次に、OS インスタンス対応のモニタ・タイプを示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ CPU ▶ ディレクトリ ▶ ディスク領域 ▶ ファイル ▶ HP NonStop イベント・ログ ▶ HP NonStop リソース ▶ メモリ ▶ Microsoft Archiving サーバ ▶ Microsoft A/V Conferencing サーバ ▶ Microsoft Director サーバ ▶ Microsoft Edge サーバ ▶ Microsoft Front End サーバ ▶ Microsoft Hyper-V ▶ Microsoft Mediation サーバ ▶ Microsoft Monitoring と CDR サーバ ▶ Microsoft Registrar サーバ ▶ Microsoft Windows イベント・ログ ▶ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ ▶ Microsoft Windows リソース ▶ Microsoft Windows サービス・ステート ▶ Ping ▶ ポート ▶ サービス ▶ Solaris ゾーン ▶ UNIX リソース ▶ VMware PerformanceVMware ホスト CPU ▶ VMware ホスト・メモリ ▶ VMware ホスト・ネットワーク ▶ VMware ホスト状態 ▶ VMware ホスト・ストレージ ▶ VMware パフォーマンス <p>注：このホスト上で作成されたほかのモニタ・タイプからのポイントは適用外ではありません。</p>

SSH プリファレンス

この表示枠では、リモート・コンピュータに安全にアクセスするためのプリファレンスを設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [SSH プリファレンス] を選択します。
---------------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SSH V2 接続タイムアウト (秒)	SiteScope で正常な応答を待機する合計秒数。この時間を超えると、接続が自動的に閉じます。 標準設定値 : 30 秒
SSH V2 ハンドシェイク・タイムアウト (秒)	ハンドシェイク・タイムアウト (秒単位)。 標準設定値 : 30 秒
SSH V2 キー交換タイムアウト (秒)	SiteScope で SSH 鍵交換を待機する合計秒数。 標準設定値 : 30 秒
SSH V2 認証段階タイムアウト (秒)	SiteScope で SSH 認証を待機する合計秒数。 標準設定値 : 30 秒

WMI プリファレンス

この表示枠では、Windows Management Instrumentation (WMI) を使用してリモート・コンピュータにアクセスするためのプリファレンスを設定できます。WMI では、NetBIOS よりも安全な通信を使用して Windows サーバ上で動作するリモート・サーバからデータを収集できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [WMI プリファレンス] を選択します。
関連タスク	594 ページの「リモート監視用の WMI サービスの設定」
重要な情報	434 ページの「Windows Management Instrumentation (WMI) をサポートしているモニタ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SiteScope NT ローカルホスト・メソッド	ローカルホスト・マシンにある Windows サーバのリソースを監視するための接続方法のタイプ (NetBIOS または WMI)。 標準設定値 : NetBIOS
WMI クエリ・タイムアウト (秒単位)	各モニタの実行の WMI クエリ タイムアウト (秒単位)。このボックスが空のときは、タイムアウトが 120 秒になります。 標準設定値 : 120 秒

ダッシュボード・モニタ履歴表示オプション

この表示枠では、[モニタ履歴の設定] を設定して、すべてのモニタおよびモニタ・グループのモニタ履歴を表示できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [ダッシュボード モニタ履歴表示オプション] を選択します。
重要な情報	[ダッシュボード レイアウト] では、選択した条件に一致するモニタのみが表示されるように、フィルタを使用してさらにモニタを絞り込むことができます。プリファレンスは、[ダッシュボード フィルタ] 設定で保存されます。詳細については、1287 ページの「ダッシュボード・フィルタの概要」を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタ履歴ビューを有効にする	ダッシュボードのモニタ履歴が有効になります。このオプションが有効になっている状態で無効にすると、履歴ビューに表示されていたすべてのビュー・データが削除されます。 標準設定値 : 選択されていない
期間中に収集されたデータを表示	過去の実行を表示するタイム・フレーム。古い実行は削除されます。この設定は、ダッシュボードのフィルタリングより優先されます。 標準設定値 : 過去 1 時間
モニタの実行の状態	必要な実行の状態が表示されます。ほかの状態の実行は削除されます。この設定は、ダッシュボードのフィルタリングより優先されます。 標準設定値 : 任意
表示する実行の最大数	メモリの保持するデータの行数。 標準設定値 : 100000 最小値 : 1000

JDBC グローバル・オプション

この表示枠では、SiteScope のデータベース・ログ機能，データベース接続ツールやデータベース情報ツール，データベース警告，データベース・モニタ (Oracle データベース，データベース・カウンタ，データベース・クエリ，DB2 8.x および 9.x，テクノロジ・データベース統合) にグローバルな JDBC オプションを適用できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [JDBC グローバル オプション] を選択します。
---------------	---

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
接続タイムアウト	<p>新しい SQL 接続の作成を待機する時間 (秒 / 分 / 時 / 日)。すべての SQL ドライバにこの機能があるわけではありません。SQL ドライバでこの機能がサポートされていない場合、このパラメータは無視されます。</p> <p>標準設定値 : 5 分</p>
ドライバ・トレース・ログ・ファイル	<p>データベース・ドライバのトラブルシューティングに使用するドライバ・トレース・ログ・ファイルが作成されます。ログ・ファイルを作成するには、ドライバ・トレース・ファイルの完全パスまたは UNC 名を入力します (e:¥mydir¥myfile.log など)。</p> <p>注 : 記録先ログ・ファイルには、ログイン情報、テーブル名、クエリなどが含まれます。</p> <p>ヒント : このオプションはトラブルシューティングのみに使用することをお勧めします (標準設定では空です)。</p>

LW SSO 設定

このパネルでは、SiteScope の Lightweight シングル・サインオン (LW-SSO) 認証の文字列を変更できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [一般プリファレンス] > [LW SSO 設定] を選択します。
---------------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
LW SSO 初期化文字列	<p>HP の Lightweight シングル・サインオン (LW-SSO) で統合されるすべての信頼されたアプリケーションで使用される共有文字列が含まれている必要があります。</p> <p>ヒント: パスフレーズ・パラメータは少なくとも 12 文字使用することをお勧めします。サロゲート・ブロック, FFFE, および FFFF を除く任意の Unicode 文字を使用できます。</p> <p>注: SiteScope の標準設定のパスフレーズ文字列は安全ではありません。安全な文字列を使用するには、SiteScope の標準設定のパスフレーズ値を変更して、LW-SSO を使用して統合されるすべての HP ソフトウェア・アプリケーションのパスフレーズ値を変更します。</p> <p>LW-SSO の詳細については、925 ページの「SiteScope ヘログインのための認証方法の設定」を参照してください。</p>

23

インフラストラクチャ・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ インフラストラクチャ・プリファレンスの概要 (706 ページ)

参照情報

- ▶ [インフラストラクチャ プリファレンス] ページ (707 ページ)

概念

インフラストラクチャ・プリファレンスの概要

インフラストラクチャ・プリファレンスでは、**master.config** ファイルにアクセスすることなく SiteScope のグローバル設定を表示および定義できます。インフラストラクチャ・プリファレンスは、[一般設定]、[サーバ設定]、[モニタ設定]、[モニタ設定をスキップ]、[動的監視設定]、[警告設定]、[テンプレート設定]、[永続性設定]、[レポート設定]、[ベースライン設定]、[カスタム設定] のカテゴリで並べ替えられグループ化されます。

インフラストラクチャ・プリファレンスで設定値を編集したら、SiteScope によってすべての入力データの形式が正しいかどうかを検証され、SiteScope の再起動が必要な場合は警告が表示されます。[インフラストラクチャ プリファレンス] ページから SiteScope を再起動できます。

インフラストラクチャ・プリファレンスの値の設定の詳細については、707 ページの「[インフラストラクチャ プリファレンス] ページ」を参照してください。

参照情報

[インフラストラクチャ プリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope の実行方法を決定する設定の値を定義できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [インフラストラクチャ プリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「インフラストラクチャ・プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、SiteScope 設定の作成や変更、およびインフラストラクチャ・プリファレンスからの SiteScope の再起動を実行できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ 多くのカスタム設定には、使いやすいテキスト・ラベルはなく、master.config ファイルの対応するプロパティ名のみが表示されます。
関連情報	706 ページの「インフラストラクチャ・プリファレンスの概要」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
信頼されていない SSL 証明書を許可	<p>SSL の使用時に SiteScope で信頼されていない証明書を許可できるようになります。このオプションを使用しない場合、キーストア・ファイルで指定した証明書、または登録済みの CA 証明書に繋がる信頼チェーンがある証明書のみが許可されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_sslAcceptAllUntrustedCerts</code></p>
BSM ダウンタイム取得頻度 (分)	<p>BSM にダウンタイムの要求を行う間の SiteScope の待機時間 (分単位)。</p> <p>標準設定値 : 15 分</p>

UI 要素	説明
Microsoft Windows リソース・モニタ用のデフォルト収集メソッド	<p>[モニタ設定] で [グローバル設定を使用する] オプションが選択されている場合に、Microsoft Windows リソース・モニタに使用されるデフォルト収集メソッド (pdh またはレジストリ)。詳細については、419 ページの「Collection method」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : pdh</p>
ホスト解決要求間の遅延 (ミリ秒)	<p>DNS サーバへの連続した呼び出し間の遅延 (ミリ秒)。</p> <p>標準設定値 : 0 ミリ秒</p>
cmd.exe での引用符文字を無効化	<p>特定の作業で cmd.exe を実行するときに、引用符付きのパラメータを使用しません。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : _disableDoubleQuotesInTemplates</p>
DNS 名前タグ	<p>DNS “名前” タグとして DNS 関連の機能によって参照されるカンマ区切りのリストの値。</p> <p>標準設定値 : Name;,:Nombre;,:Navn;,:Nome;,:Nom;,:Nom¥u00FF:</p> <p>プロパティ名 : _dnsNameTags</p>
DNS サーバ・タグ	<p>DNS “サーバ” タグとして DNS 関連の機能によって参照されるカンマ区切りのリストの値。</p> <p>標準設定値 : Server;,:Servidor;,:Serveur;,:Serveur¥u00FF:</p> <p>プロパティ名 : _dnsServerTags</p>
標準のしきい値を確認しない	<p>ユーザが選択したしきい値に対してモニタ結果がチェックされます。標準設定の SiteScope モニタしきい値に対してはチェックは行われません。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p> <p>プロパティ名 : _noCheckDefaultThresholds</p>
電子メールの文字セット	<p>SiteScope の電子メール・プリファレンスおよび電子メール警告で生成される電子メールの文字セット。</p> <p>標準設定値 : 値が入力されないと、UTF-8 が使用されます。</p> <p>プロパティ名 : _mailCharSet</p>

UI 要素	説明
電子メールの件名の文字セット	<p>SiteScope の電子メール・プリファレンスおよび電子メール警告で生成される電子メールの件名の文字セット。</p> <p>標準設定値 : 値が入力されないと、UTF-8 が使用されます。</p> <p>プロパティ名 : <code>_mailSubjectCharSet</code></p>
ダウンタイム・メカニズムの有効化	<p>SiteScope を BSM に接続する際に、CI ダウンタイム・メカニズムを有効にします。BSM によって停止中と検知される CI に SiteScope モニタ、測定地位、グループ、またはプロファイル CI が直接リンクしている場合、SiteScope はダウンタイムによって影響を受けます。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p> <p>プロパティ名 : <code>_downtimeEnable</code></p>
BSM への資格情報のレポートを有効化	<p>選択すると、ホストの資格情報が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_sendCredentials</code></p>
LDAP バイナリ属性	<p>SiteScope では、設定要求および応答の際、既知のすべてのバイナリ LDAP 属性の名前を使用します (これは LDAP クエリの出力の形式に影響を与えます)。</p> <p>標準設定値 : <code>audio, auditingPolicy, authorityRevocationList, cACertificate, certificateRevocationList, crossCertificatePair, dSASignature, extensionData, javaSerializedData, jpegPhoto, msExchIMACL, msExchMailboxGuid, msExchMailboxSecurityDescriptor, mSMQDigests, mSMQSignCertificates, objectGUID, objectSid, personalSignature, photo, replicationSignature, thumbnailLogo, thumbnailPhoto, userCertificate, userParameters, userPassword, x500UniqueIdentifier</code></p> <p>プロパティ名 : <code>_ldapBinaryAttributes</code></p>
有効化されているモニタのみログに記録	<p>SiteScope では、無効になっているモニタの実行は、日次ログ・ファイルに記録されません。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_onlyLogEnabledMonitors</code></p>

UI 要素	説明
<p>プールごとの最大アイドル・スレッド数</p>	<p>スレッド・プールあたりのアイドル・スレッドの最大数。 標準設定値 : 100 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : <code>_threadPoolMaxIdle</code></p>
<p>プール内のスレッドの最長アイドル時間 (ミリ秒)</p>	<p>SiteScope によってアイドル・スレッド・プールが消去されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値 : 600000 ミリ秒 (10 分) プロパティ名 : <code>_threadPoolMaxIdleTime</code></p>
<p>perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)</p>	<p>SiteScope によってアイドル perfex プロセスが消去されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。 標準設定値 : 60 分 プロパティ名 : <code>_perfexProcessMaxIdleTime</code></p>
<p>プールあたりの最大プロセス数</p>	<p>プロセス・プールあたりの最大プロセス数。 標準設定値 : 200 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名 : <code>_processPoolMaxPerPool</code></p>
<p>データ統合サンプルのキューの最大サイズ</p>	<p>データ統合サンプルのキューの上限。この制限に達すると、古いサンプルが破棄されます。 標準設定値 : 1000 プロパティ名 : <code>_dataSamplesQueueMaxSize</code></p>
<p>更新間でのモニタの遅延 (ミリ秒)</p>	<p>起動してからすでに実行されているモニタが再度実行されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値 : 1000 ミリ秒 プロパティ名 : <code>_monitorDelayBetweenRefresh</code></p>

UI 要素	説明
NT SSH タイムアウト (秒)	<p>リモート Windows サーバへの SSH 接続を待機するタイムアウト時間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値: 60 秒</p> <p>プロパティ名: <code>_NTSSHTimeout</code></p>
ポートを開こうとする回数	<p>予約ポートを開こうとする最大回数。rlogin および rsh リモート・アクセス・メソッドの 811 ~ 1024 の範囲を使用します。</p> <p>標準設定値: 25</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_localPortRetryCount</code></p>
キューが最大サイズに達したときに破棄するサンプル数	<p>キューの最大サイズに達した場合に破棄するサンプルの数です。</p> <p>標準設定値: 500</p> <p>プロパティ名: <code>_dataSamplesQueueDiscardSamples</code></p>
数値形式	<p>文字列表現に変換するときの数値の形式。</p> <p>標準設定値: <code>###</code></p> <p>プロパティ名: <code>_noScientificNotation</code></p> <p>ヒント: 数値形式の詳細については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (http://h20230.www2.hp.com/selfsolve/document/KM305059) (英語サイト) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。</p>
perfex タイムアウト (秒)	<p>perfex によって接続が作成されるまで、またはモニタが実行されるまで待機するタイムアウト時間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値: 120 秒</p> <p>プロパティ名: <code>_perfexTimeout</code></p>

UI 要素	説明
<p>PowerShell 実行コマンド</p>	<p>64 ビット・バージョンの Windows 2003, Windows 2008, または Windows XP 上で Microsoft Exchange 2007 / 2010 モニタの使用を有効にするには、次の処理を行います (32 ビット・アプリケーションは 64 ビット・バージョンの Windows Server 2003, 2008, または Windows XP を使用しているコンピュータ上で system32 フォルダにアクセスできないため)。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ http://support.microsoft.com/?scid=kb;en-us;942589 から入手できる Microsoft Hotfix を適用する。 ▶ PowerShell 実行コマンドを入力する。例： <code>C:¥Windows¥Sysnative¥WindowsPowerShell¥v1.0¥powershell.exe</code> <p>注： Windows 2003 と Windows XP では、標準設定では Symlink Sysnative を使用できません。</p>
<p>マルチスレッドでサーバのタイムアウトを待機するプロセス</p>	<p>選択すると、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているか、またはプロセスをプールに戻すために回答を待機しているプロセスごとに、別のスレッドが開かれます。多数のサーバがダウンしている場合にこの設定を行うと、スレッド・カウントと使用されるメモリが増えます。この設定をクリアすると (推奨), SiteScope はこれらのプロセスの管理にスレッドを 1 つだけ使用します。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>
<p>プロセス・プール強制終了タイムアウト (ミリ秒)</p>	<p>SiteScope によって応答のないプロセスが強制終了されるまでの待機時間 (ミリ秒単位)。これにより、すべてのタイムアウトでプロセスが強制終了されることを回避できます。</p> <p>標準設定値： 60000 ミリ秒 (最大でも 180000 ミリ秒にすることを勧めます)</p> <p>注： この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名： _processPoolKillTimeout</p>

UI 要素	説明
回帰的 '依存対象'	<p>モニタの [依存] ボックスで回帰を可能にします。これは、依存関係のため親グループが無効化されたとき、サブグループが無効化されることを意味します。標準設定では、依存関係が無効化されることによって、直接のグループのみが影響を受けます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_dependsOnRecursive</code></p>
リモート・サーバの表示名を BSM に送信	<p>リモート・サーバのホスト名の代わりにリモート・サーバの表示名が BSM に送信されます。この設定は、DNS 解決が無効な場合に使用することをお勧めします。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_sendRemoteServerDisplayNameToBAC</code></p>
SiteScope のスリープ遅延 (ミリ秒)	<p>メイン・スレッドでのスリープ間隔の時間 (ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値: 180 ミリ秒</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_monitorProcessCheckDelay</code></p>
SiteScope ツリー更新レート (秒)	<p>SiteScope ツリーの更新間の待機時間 (秒単位)。最小値は 30 秒です。</p> <p>標準設定値: 60 秒</p> <p>プロパティ名: <code>_sisTreeRefreshRateSecs</code></p>
エラー発生時のスリープ間隔 (ミリ秒)	<p>[エラーの検証] オプションを使用してモニタを再実行するまでに待機する時間 (ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値: 5000 ミリ秒</p> <p>プロパティ名: <code>_verifySleepDuration</code></p>

UI 要素	説明
SSH プロンプト・タイムアウト (ミリ秒)	<p>最初のコマンドを実行する前に SiteScope が SSH 接続プロンプトの完了を待機する時間 (ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 3000 ミリ秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_waitSshPromptTimeout</code></p>
プールからアイドル SSH 接続をクリーンする期間 (分)	<p>SSH 接続プールからアイドル SSH 接続をクリーンする時間 (分単位)。</p> <p>標準設定値 : 10 分</p> <p>プロパティ名 : <code>_SSHConnectionIdleCleanTimeMinutes</code></p>
タイム・ゾーン・オフセット	<p>グリニッジ標準時 (GMT) のタイム・ゾーン・オフセット (時間単位) を手動で設定します。正と負、整数と非整数の両方の値を入力できます。</p> <p>標準設定値 : -999 (オフセットなし)</p> <p>例 : 米国東部 (EST) の場合、タイム・ゾーン・オフセットは GMT -5 になり、値 5 を入力する必要があります。中央ヨーロッパの場合、タイム・ゾーン・オフセットは GMT +2 になり、値 -2 を入力します。</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_timeZoneOffset</code></p>
トレースルート・コマンド	<p>(Unix の場合) プラットフォームの標準設定を上書きするトレースルート・コマンドへのパス。</p> <p>標準設定値 : 値なし</p> <p>プロパティ名 : <code>_tracerouteCommand</code></p>
SSH 接続プロンプトを待機する	<p>SiteScope は、最初のコマンドの実行を開始する前に、SSH 接続プロンプトの終了を待機します。この設定は、SSH リモート・サーバの起動プロンプトが長い場合に選択してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_readUntilPromptFound</code></p>

サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ホスト名の上書き	BSM の SiteScope ホスト名が上書きされます。 標準設定値：値なし プロパティ名：_sisHostNameOverride
プロセスの強制終了	SiteScope プロセスが停止すると子プロセスが強制終了されます。 標準設定値：選択されている プロパティ名：_killProcesses
モニタ・プロセスの最大数	プロセス・プール内のモニタ・プロセスの最大数。 標準設定値：100 注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名：_maxMonitorProcesses
実行中モニタの最大数	キュー内の実行中モニタ・プロセスの最大数。 標準設定値：400 注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 プロパティ名：_maxMonitorsRunning
最小限のモニタ実行間隔 (秒)	最小限のモニタ頻度。この頻度に満たない頻度を指定してモニタを作成しようとする時、検証エラーが表示されます。 注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 標準設定値：15 プロパティ名：_monitorMinInterval

UI 要素	説明
<p>IP バージョン 6 アドレスを優先</p>	<p>ホストが IPv6 と IPv4 の両方に解決された場合、IPv6 が使用されます。SiteScope の IPv6 のサポートの詳細については、627 ページの「SiteScope での IP バージョン 6 のサポート」を参照してください。</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>プロパティ名: <code>_preferIPV6Address</code></p>
<p>SiteScope ハートビート再開タイムアウト (分)</p>	<p>ハートビート・イベントが検出されなくなってから SiteScope が再起動するまでの最大時間 (分単位)。</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値: 5 分</p> <p>プロパティ名: <code>_heartbeatRestartTimeout</code></p>
<p>SiteScope 再起動タイムアウト (分)</p>	<p>SiteScope が再起動するための最大時間。</p> <p>標準設定値: 15 分</p> <p>プロパティ名: <code>_restartTimeout</code></p>
<p>SiteScope シャットダウン・タイムアウト (秒)</p>	<p>SiteScope でシャットダウンを待機するタイムアウト時間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値: 60 秒</p> <p>プロパティ名: <code>_shutdownTimeout</code></p>
<p>起動スクリプト</p>	<p>SiteScope の起動で使用するプラットフォームや手順に関係なく、SiteScope を起動するときは必ずこのスクリプトが実行されます。(空 = なし)</p> <p>標準設定値: 値なし</p> <p>プロパティ名: <code>_startupScript</code></p>

モニタ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
追加エラー・トークン	サーバ出力の解析時に失敗の兆候として処理されるキーワードの追加のリスト。 標準設定値 : 失敗しました。* エラー コード : プロパティ名 : _scriptMonitorErrorMsgs2
追加イベント・ログ名	Microsoft Windows イベント・ログ・モニタで別のログ名を入力して、標準ログ以外のイベント・ログを監視できます。 標準設定値 : 値なし プロパティ名 : _additionalEventLogNames
追加イベント・タイプ	Microsoft Windows イベント・ログ・モニタで別のイベント・タイプ・カテゴリを入力して、標準アプリケーション、システム、セキュリティ・ログ以外のイベント・タイプを監視できます。 標準設定値 : 値なし プロパティ名 : _additionalEventTypes
URL 専用モニタのすべての要求ヘッダを許可する	URL 専用モニタのすべての要求ヘッダを許可します。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _urlOtherHeader=
参照可能な EXE タイムアウト (ミリ秒)	カウンタ情報の取得やモニタの実行を待機する最大時間 (ミリ秒単位)。この設定は、SAP, Sybase, DB2 8.x および 9.x のモニタなど、実行可能な参照可能モニタにのみ適用されます。 標準設定値 : 45000 プロパティ名 : _browsableExeTimeout

UI 要素	説明
<p>ブラウズ可能モニタ - エラー時にすべてのカウンタの状態を BSM に送信</p>	<p>参照可能なモニタの状態がエラーになっている場合、エラー発生カウンタ数とその現在の値のリストのみが SiteScope から BSM に送信されます。エラーになっていない場合（モニタの状態が正常な場合）、すべてのカウンタ名と値が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p>選択すると、エラー時でもすべてのカウンタ（エラーのカウンタと正常な状態のカウンタ）とその値が SiteScope から BSM に送信されます。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p> <p>プロパティ名： _isSendStatusOfAllBrowsableCountersToBAC</p>
<p>100% で発生する CPU エラー</p>	<p>対象マシンの CPU 使用率が 100% に達すると、CPU モニタは標準設定エラー状態に切り替わります。</p> <p>標準設定値： 選択されている</p> <p>プロパティ名： _cpuEnableErrorAt100</p>
<p>CPU 最大単位数</p>	<p>CPU モニタによってサポートされる最大 CPU 単位数。</p> <p>標準設定値： 16</p> <p>プロパティ名： _cpuMaxProcessors</p>
<p>DB 最大カラム数</p>	<p>DB モニタによって処理される最大列数。</p> <p>標準設定値： 10</p> <p>プロパティ名： _databaseMaxColumns</p>
<p>DB 最大行数</p>	<p>DB モニタによって処理される最大行数。</p> <p>標準設定値： 1</p> <p>プロパティ名： _databaseMaxRows</p>
<p>DB 値の最大長</p>	<p>DB モニタによって処理されるデータの最大の長さ（文字数）。</p> <p>標準設定値： 200</p> <p>プロパティ名： _databaseMaxSummary</p>

UI 要素	説明
標準精度	<p>モニタによって処理される浮動小数点値の標準精度。</p> <p>標準設定値 : 0 (無効)</p> <p>プロパティ名 : <code>_defaultPrecision</code></p>
ダイアルアップ・オプション	<p>Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタから dialup.exe を実行するときのオプション。暗黙的にモデムでダイアルするには、<code>-silent</code> に設定します。ダイアルアップのデバッグを有効にするには、<code>-debug</code> に設定します。</p> <p>標準設定値 : 0</p> <p>プロパティ名 : <code>_dialupOptions</code></p>
最終行の読み取りを空にする	<p>スクリプト・モニタの出力に空行の最終行が含まれます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_enable_script_monitor_non_empty_last_line_reading</code></p>
詳細の必須を有効化 / 無効化	<p>警告またはモニタを有効化 / 無効化するときに、詳細の追加を必須フィールドとして設定できます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_enableDisableDescriptionMandatory</code></p>
JDBC ログ記録の有効化	<p>リンク・チェック・モニタの JDBC 検索結果ログ記録が有効になります。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_linkMonitorJdbcEnabled</code></p>
スクリプト・モニタ・エラー・トークン	<p>サーバ出力の解析時に失敗の兆候として処理されるキーワードのリスト。</p> <p>標準設定値 : 見つかりません, 拒否されました, そのようなファイルまたはディレクトリは実行できません</p> <p>プロパティ名 : <code>_scriptMonitorErrorMsgs</code></p>
保存するイベント・ログ・メッセージ	<p>警告の診断テキストと同時に保存する Microsoft Windows イベント・ログの詳細の数。</p> <p>標準設定値 : 10</p> <p>プロパティ名 : <code>_eventLogMessagesToSave</code></p>

UI 要素	説明
排他的モニタのタイムアウト (秒)	<p>実行前にほかのモニタの完了を排他的モニタで待機する最大時間 (秒単位)。この影響を受けるモニタは、Microsoft Windows ダイアルアップ・モニタだけです。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_exclusiveMonitorTimeout</code></p>
FTP コンテンツ一致最大量	<p>FTP データ内容の照合に使用する最大バッファ・サイズ。</p> <p>標準設定値 : 50000</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpContentMatchMax</code></p>
FTP ダウンロード制限	<p>各ファイルから照合のためにダウンロードする最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : -1 (制限なし)</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpDownloadLimit</code></p>
FTP 最大スレッド数	<p>同時 FTP ワーカー・スレッド最大数。</p> <p>標準設定値 : 1</p> <p>プロパティ名 : <code>_ftpMaxThreads</code></p>
HTTP 内容一致表示制限	<p>URL モニタの内容一致を表示するための最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : 150</p> <p>プロパティ名 : <code>_urlContentMatchDisplayMax</code></p>
HTTP 内容一致制限	<p>URL モニタの内容一致を確認するための最大バイト数。</p> <p>標準設定値 : 50000</p> <p>プロパティ名 : <code>_urlContentMatchMax</code></p>

UI 要素	説明
初期モニタ遅延 (秒)	<p>SiteScope の再起動後にモニタの更新がランダムにスケジュールされる時間 (秒単位)。</p> <p>次の実行がすぐに行われるようにモニタの頻度を変更すると (たとえば, モニタが 5 分以内に実行されない場合, 頻度を 5 分より小さい値に変更します), SiteScope によって次の実行が指定した期間でランダムにスケジュールされます。</p> <p>標準設定値: 600 秒</p> <p>プロパティ名: <code>_initialMonitorDelay</code></p>
メール添付ファイルのコンテンツとして Base64 をサポート	<p>メール・モニタに対してメール添付ファイルのデータ内容送信エンコードとして Base64 がサポートされます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>注: この設定を変更する場合は, SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_mailAttachmentBase64Support</code></p>
選択されるブラウズ可能カウンタの最大数	<p>参照可能ツリーから選択される参照可能カウンタの最大数。この値よりもカウンタ数が多くなるようにモニタを作成または編集する場合, この値のカウンタ数までしか保存されません。</p> <p>注: 参照可能なモニタがテンプレートに表示される場合, 選択したパターンと一致するカウンタ数は <code>master.config</code> ファイルの <code>_maxCountersForRegexMatch</code> パラメータによって制限されます。デプロイメント中に, パターンと一致するカウンタ数がこの値を超える場合, この値以下のカウンタ数のみが保存されます。そのため, この設定と同じ値と <code>_maxCountersForRegexMatch</code> パラメータを使用することをお勧めします。これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です。</p> <p>標準設定値: 1000</p> <p>プロパティ名: <code>_browsableContentMaxCounters</code></p>

UI 要素	説明
アプリケーション・モニタの最大カウンタ	アプリケーション・モニタに選択できるカウンタの最大数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : _ApplicationMonitorMaxCounters=100
MIB モニタによる SNMP に対する最大カウンタ	[MIB による SNMP] モニタでサポートされるカウンタの最大数。 標準設定値 : 32 プロパティ名 : _maxSNMPbyMIBCounters
最大 Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ・カウンタ数	Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタのインスタンスごとのカウンタの最大数。 標準設定値 : 8 プロパティ名 : _NTCounterMonitorMaxCounters
Microsoft Windows Media Server モニタ・サービス名	Microsoft Windows Media Server モニタを使用して監視するサービス名。 標準設定値 : Windows Media サービス (Windows Media Station Service や Windows Media Unicast Service など) プロパティ名 : _counterObjectsWindowsMediaMonitor
MQ サーバ CCSID	SiteScope の標準設定の WebSphere MQ サーバ CCSID 標準設定値 : 値なし プロパティ名 : _mqServerCCSID=
MS Media Player 9 アカウント・ブロック	Media Player アカウントが 17999 エラーで停止する場合、このオプションを選択して、アカウント・ディレクトリ・パスを [MS Media Player 9 アカウント ディレクトリ] ボックスに追加します。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : _MediaPlayer9AccountBlocked

UI 要素	説明
MS Media Player 9 アカウント・ディレクトリ	<p>Media Player モニタで 17999 エラーが発生した場合、Media Player アカウント・ディレクトリを入力します。</p> <p>標準設定値: 値なし</p> <p>例: C:¥Documents and Settings¥ <ユーザ> ¥Local Settings¥Application Data¥Microsoft¥Windows Media¥9.0</p> <p>プロパティ名: _MediaPlayer9AccountBlockedDir</p>
ネットワーク帯域幅モニタ整合性確認	<p>ネットワーク帯域幅モニタに対して整合性確認が実行されます。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>プロパティ名: _performNetworkBandwidthSanityCheck</p>
Real Media Server モニタ・サービス名	<p>Real Media Server モニタを使用して監視するサービス名。</p> <p>標準設定値: RMServer</p> <p>プロパティ名: _counterObjectsRealMonitor</p>
スクリプトの実行に perfex ツールを使用	<p>スクリプトの実行に perfex ツールを使用します。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>プロパティ名: _scriptRunThroughPerfex</p>
スクリプト・モニタ出力制限	<p>スクリプト・モニタの起動後にスクリプトの出力から保存する行数。</p> <p>標準設定値: 25</p> <p>プロパティ名: _scriptMonitorLinesToSave</p>
スクリプト・モニタ置換文字列	<p>リモート・スクリプトのパラメータ・タグであるスペース区切りの文字列のリストが保存されます。スクリプト・モニタの実行時に、スクリプト・コマンドのパラメータ・タグがモニタのプリファレンスの実際のパラメータ値に置換されます。</p> <p>標準設定値: \$ %</p> <p>プロパティ名: _scriptMonitorReplacementChars</p> <p>例: スクリプト・コマンドが test \$ %, 置換文字が \$ %, パラメータが Param1 Param2 である場合、コマンド test Param1 Param2 がモニタで実行されます。</p>

UI 要素	説明
<p>同時実行 DNS モニタ</p>	<p>同時に実行できる DNS モニタの最大数。これは、roundTripTime カウンタを使用する場合にのみ関係します。NSLookup 操作で、オペレーティング・システムをロードし、値を変更できます。</p> <p>標準設定値 : 0 (0 は、同時に実行できる DNS モニタの数に制限がないことを意味します)</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxDnsMonitorsRunning</code></p>
<p>SNMP モニタの最大数</p>	<p>指定の時間に実行できる SNMP モニタの最大数。</p> <p>標準設定値 : 10</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_snmpMonitorMaximum</code></p>
<p>SNMP セッション終了タイムアウト (ミリ秒)</p>	<p>SNMP セッションを閉じる前に SiteScope が待機する最大時間 (ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 30000</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxSNMPCloseSessionTimeMillis</code></p>
<p>SNMP トラップ・エンコーディング</p>	<p>SNMP トラップ・モニタの SNMP トラップ・エンコーディング。空 = ISO8859-1。</p> <p>標準設定値 : ISO8859-1</p> <p>プロパティ名 : <code>_snmpTrapEncoding</code></p>
<p>SNMP トラップ・モニタ・ログ制限</p>	<p>SNMP トラップ・モニタに対して SNMP トラップ・ログに記録される最大行数。このボックスは、SNMP トラップ・モニタ・ページの [警告の実行] が [すべての SNMP トラップの確認後に一度のみ] に設定されている場合에만入力します。</p> <p>注 : 制限を高く設定すると、SiteScope.log または RunMonitor.log のサイズが増加する可能性があります。</p> <p>標準設定値 : 1000</p> <p>プロパティ名 : <code>_SNMPTrapMonitorDetailsMax</code></p>

UI 要素	説明
DNS Java ライブラリを使用	<p>標準の <code>perfex</code> 設定を使用せずに、Java DNS 機能をアクティブにします。DNS 応答時間は <code>perfex</code> 応答よりも速い場合があります。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_useDNSJava</code></p>
MIB による SNMP に対する要求シーケンスを使用する	<p>[MIB による SNMP] モニタに対して新しい要求モードを有効にします。このオプションを使用すると、SiteScope はリモート・サーバに対して、モニタからの OID カウンタごとに個別の要求を実行します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_sequenceSNMP</code></p>
Web スクリプト・モニタのキュー・サイズ	<p>Web スクリプト・モニタのキューのサイズ。</p> <p>標準設定値 : 20 (最大値 : 40)</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxWebScriptMonitorsRunning</code></p>
キュー内に待機中の Web スクリプト・モニタのタイムアウト (秒)	<p>タイムアウトするまでの Web スクリプト・モニタのキュー内の待機時間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_webScriptMonitorsWaitingInQueueTimeout</code></p>
Web Service モニタの最大読み取り長 (バイト)	<p>Web サーバ・モニタのログ・ファイルから読み取る最大データ量 (バイト単位)。</p> <p>標準設定値 : 50000 バイト</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxAmountToRead</code></p>

UI 要素	説明
<p>Web サービス・モニタのタイムアウト (秒)</p>	<p>Web Server モニタが実行される最大時間 (秒単位)。 標準設定値 : 30 秒 プロパティ名 : webServiceTimeout=30</p>
<p>Web サービス・モニタは共通コンテンツ・マッチを使用する</p>	<p>Web サービス・モニタの内容照合動作は, SiteScope 10.12 で変更されました。この設定により, SiteScope 10.12 以前に定義された Web サービス・モニタは正しい値を照合するようになりました。これは, Web サービス・モニタが, 内容照合が使用されるほかのモニタと同じように動作することを意味します。古い内容照合動作に戻すには, この設定をクリアしてください。 標準設定値 : 選択されている</p>

モニタ設定をスキップ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
スキップ・モニタの無効化期間 (秒)	<p>モニタの最大スキップ数 ([モニタの最大スキップ数] で定義されます) を超えてからモニタが無効化される期間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 360 秒</p> <p>プロパティ名 : <code>_monitorDisablePeriodOnSkip</code></p>
モニタの最大スキップ数	<p>モニタが無効化されるまでのモニタの最大連続スキップ数。</p> <p>標準設定値 : 10</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_maxMonitorSkips</code></p>
スキップ後モニタが無効になった場合に管理者に電子メールを送信	<p>モニタの最大連続スキップ数を超えてモニタが無効化された場合、SiteScope から管理者に電子メールが送信されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_emailSkipNotification</code></p>
スキップされるモニタをシャットダウン	<p>モニタが最大数を超えてスキップした場合、SiteScope がエラーを出力してシャットダウンします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>プロパティ名 : <code>_shutdownOnSkips</code></p>

動的監視設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>ダイナミック・モニタリング・コア・スレッド・プール・サイズ</p>	<p>新しいダイナミック・モニタ用に作成するプールのスレッド数でチェック・タスクが変更されます。</p> <p>標準設定値 : 5</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_dynamicMonitoringCoreThreadPoolSize</code></p>
<p>ダイナミック・モニタリング最大キュー・サイズ</p>	<p>新しいダイナミック・モニタの最大数により、キューに追加できるチェック・タスクが変更されます。コア・スレッドがビジーの場合、最大キュー・サイズに達するまで、新しいタスクがキューに追加されます。</p> <p>標準設定値 : 5000</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_dynamicMonitoringMaxQueueSize</code></p>
<p>ダイナミック・モニタリングの最大スレッド・プール・サイズ</p>	<p>新しいダイナミック・モニタ用に作成するプールのスレッドの最大数でチェック・タスクが変更されます。これらの余分のスレッドは、すべてのコア・スレッドがビジーで、最大キュー・サイズに達した場合にのみ作成されます。</p> <p>標準設定値 : 30</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_dynamicMonitoringMaxThreadPoolSize</code></p>

警告設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
警告試行時の遅延 (秒)	Post 警告の送信を試行する間の待機時間 (秒単位)。 標準設定値 : 120 秒 プロパティ名 : <code>_postAttemptDelay</code>
警告スレッドの最大数	プール内の警告スレッドの最大数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : <code>_threadPoolAlertMaxThreads</code>
Post アクションの最大実行数	Post 警告の送信を試行する最大数。 標準設定値 : 4 プロパティ名 : <code>_postAttempts</code>
最大スクリプト警告プロセス数	同時に実行できるスクリプト警告プロセスの最大数。 標準設定値 : 25 プロパティ名 : <code>_maxScriptAlertProcesses</code>
サウンド警告の最大の長さ (ミリ秒)	サウンド警告音の最長時間 (ミリ秒単位)。 標準設定値 : 0 プロパティ名 : <code>_AudioSleepTime</code>
ページの遅延 (秒)	ページャ信号間の遅延 (ページャ警告を使用の場合)。 標準設定値 : 5 プロパティ名 : <code>_delayBetweenPages</code>

テンプレート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
テンプレート・エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する	<p>テンプレート内にグループを作成せずに、テンプレートの直下にモニタを追加できるようになります。</p> <p>注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p> <p>プロパティ名： _allowTemplateMonitorDirectlyUnderTemplate</p>

永続性設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
永続差異ファイルあたりの最大変更数	<p>各永続差異ファイルに保持される、永続的変更の最大数。</p> <p>標準設定値：51</p> <p>注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名：_PersistencyMaxChangesInDeltaFile</p>
永続履歴項目の最大数	<p>永続的に保持される履歴項目の最大数。</p> <p>標準設定値：1000</p> <p>プロパティ名：_PersistencyMaxHistoryItems</p>
最大永続履歴サイズ	<p>永続的履歴の最大サイズ (バイト単位)。</p> <p>標準設定値：20000</p> <p>注：この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名：_PersistencyMaxHistorySize</p>

UI 要素	説明
永続差異ファイルの最大数	<p>永続的に保持される差異ファイルの最大数。この数に達すると、すべての永続オブジェクトを使用して新しいスナップショット (.ssf) ファイルが作成されます。古い .ssf ファイルは、履歴フォルダに移動されます。</p> <p>標準設定値 : 100</p> <p>プロパティ名 : _PersistencyMaxDeltaFiles</p>
最大一時ディレクトリ・サイズ	<p>一時ディレクトリの最大サイズ (キロバイト単位)。</p> <p>標準設定値 : 10000</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _tempDirMaxSize</p>

レポート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートの標準設定時間 (時間)	クイック・レポートまたは警告レポートの監視データを含める標準設定期間。 標準設定値 : 1 時間 プロパティ名 : <code>_quickReportDefaultTimePeriod</code>
レポートに <code>alert.log.old</code> を含める	<code>alert.log.old</code> ファイルが警告レポートに含まれます。 標準設定値 : 選択されている プロパティ名 : <code>_includeAlertLogOld</code>
モニタ履歴レポートの最大エラー数	モニタ履歴レポートに表示される最大エラー数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : <code>_maxReportErrors</code>
履歴レポートの最大サンプル数	履歴レポートの最大サンプル数 (読み取り数または行数)。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : <code>_reportMaxBuckets</code>
モニタ履歴レポートの最大警告数	モニタ履歴レポートに表示される最大警告数。 標準設定値 : 100 プロパティ名 : <code>_maxReportWarnings</code>
レポートで詳細なサンプリング・アルゴリズムを使用	レポートのサンプル間の時間が、レポートされたすべてのモニタ頻度の最小値として定義されます。 標準設定値 : 選択されていない プロパティ名 : <code>_useReportAdvancedSamplingAlgorithm</code>

ベースライン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
アクティベーション・スレッドの優先順位	<p>アクティベーション・スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p>標準設定値: 1 (低い優先順位)</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningActivationThreadPriority</code></p>
エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する	<p>モニタのエラーのしきい値が定義されていない場合、エラーの上限のオフセット値を使用して、ベースラインしきい値が自動的に作成されます。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningAutomateUpperBoundCreation</code></p>
計算スレッドの優先順位	<p>計算スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ～ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p>標準設定値: 1 (低い優先順位)</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningCalculationThreadPriority</code></p>

UI 要素	説明
<p>失敗した解析ハンドラ・スレッドの優先順位</p>	<p>失敗した解析スレッド・ハンドラに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ~ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p>標準設定値 : 1 (低い優先順位)</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _baseliningFailedParsingHandlerThreadPriority</p>
<p>今日の日を計算に含める</p>	<p>現在の日のデータをベースライン計算に含めるかどうかを指定します。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _baseliningCalculationIncludesToday</p>
<p>ベースライン・データをディスクに保存する間隔 (分)</p>	<p>メモリに累積されるベースライン・データのディスクへの保存を SiteScope が行う間隔 (分単位)。間隔が短いほどメモリの消費量が少なくなりますが、失敗による脆弱性が増加し、パフォーマンスも低下します。</p> <p>標準設定値 : 30 分</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : _baseliningSaveAccumulatedDataIntervalMinutes</p>

UI 要素	説明
計算に含める最大日数	<p>ベースライン計算に含める履歴データの日数。数値が高いほどベースライン結果の精度は高くなりますが、計算時間が長くなり、使用するディスク領域も増加します。この値よりも古いデータは計算に含まれません。計算モデルの詳細については、412 ページの「SiteScope でのしきい値の計算方法」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 30 日</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_baseliningDaysToIncludeInCalculation</code></p>
パーセンタイル範囲の最大数	<p>パーセンタイル範囲マッピング・テーブルに表示されるパーセンタイル範囲の数が制限されます。</p> <p>標準設定値 : 8</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_baseliningMaxNumberOfPercentilesRanges</code></p>
ベースライン設定に必要な最小日数	<p>SiteScope でベースラインを計算するためにモニタで実行する必要のある最小日数。</p> <p>標準設定値 : 14 日</p> <p>最小値 : 1 (1 より小さい値を入力した場合、標準設定値が使用されます)。</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_baseliningMinimumNumberOfDays</code></p>

UI 要素	説明
<p>ベースライン設定に必要な最小サンプル数</p>	<p>SiteScope でベースラインを計算するために必要な最小サンプル数。</p> <p>標準設定値 : 2016 (2 週間周期で実行中で 10 分ごとに実行されるモニタに対して生成されるサンプルの数)</p> <p>最小値 : 1 (1 より小さい値を入力した場合、標準設定値が使用されます)。</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_baseliningMinimumNumberOfSamples</code></p>
<p>エラーの上限の計算に使用するオフセット</p>	<p>エラー限度の計算に使用するオフセット値。次の場合、ベースラインのしきい値はこの値に乗じられます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [エラーのしきい値が定義されていない場合は、エラーの上限の作成を自動化する] オプションが選択されている (下記参照)。 ▶ 最も上限に近い現在のエラーしきい値が、計算されたベースラインのしきい値よりも低い。 <p>標準設定値 : 0.3</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_baseliningUpperBoundOffset</code></p>
<p>解析のチャンク・サイズ</p>	<p>ログ・ファイル・パーサによって同時に処理されるモニタの数。数値が高いほどベースライン計算は早くなりますが、使用されるファイル・ハンドラの数が増加します。</p> <p>標準設定値 : 100</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名 : <code>_baseliningParsingChunkSize</code></p>

UI 要素	説明
解析スレッドの優先順位	<p>解析スレッドに割り当てられた優先順位。指定する場合、優先順位は 1 ~ 10 にする必要があります。指定しない場合、優先順位は 1 に設定されます。通常、優先順位が高いほど、ベースライン計算の完了が早くなります。SiteScope のオンライン機能を妨げないように、優先順位はできるだけ低くしてください。</p> <p>標準設定値: 1 (低い優先順位)</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningParsingThreadPriority</code></p>
破棄したサンプルのパーセンタイル	<p>ベースライン計算に含まれない最も上限に近いサンプルのパーセンタイル (“ノイズ” とみなされる測定値のサンプル)。</p> <p>標準設定値: 2.0</p> <p>注: この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>プロパティ名: <code>_baseliningNoiseMarginPercentile</code></p>

カスタム設定

注: 多くのカスタム設定には、使いやすいテキスト・ラベルはなく、**master.config** ファイルの対応するプロパティ名のみが表示されます。これらの設定はドキュメントに含まれていません。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
自動デプロイメント・チェックの頻度 (秒)	<p>persistence*autodeployment ディレクトリの自動テンプレート・デプロイメント xml ファイルがデプロイされる間隔 (秒単位)。この機能の詳細については、1051 ページの「自動テンプレート・デプロイメント」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 120</p> <p>プロパティ名: _autoDeploymentCheckFrequency</p>
トポロジ解決頻度 (分)	<p>監視対象サーバのトポロジをチェックする間の待機時間 (分単位)。モニタの実行中にこの時間を超えると、モニタによって BSM の RTSM にトポロジが再作成されます。</p> <p>標準設定値: 120 分</p> <p>プロパティ名: _topologyResolvingFrequencyInMinutes</p>

24

統合プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ 統合プリファレンスの概要 (740 ページ)

タスク

- ▶ アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法 (749 ページ)

参照情報

- ▶ 一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報 (751 ページ)
- ▶ [統合プリファレンス] のユーザ・インタフェース (754 ページ)

概念

統合プリファレンスの概要

[統合プリファレンス] インタフェースを使用すると、統合インスタンスを作成して、SiteScope が監視データを次のアプリケーションに報告できるようになります。

▶ HP Business Service Management

- ▶ 統合の詳細については、269 ページの「BSM の使用」を参照してください。
- ▶ 統合プリファレンスの詳細については、741 ページの「HP Business Service Management 統合プリファレンス」を参照してください。
- ▶ ユーザ・インタフェースの詳細については、758 ページの「[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

▶ HP Diagnostics

- ▶ 統合の詳細については、744 ページの「Diagnostics 統合の概要」を参照してください。
- ▶ ユーザ・インタフェースの詳細については、769 ページの「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

▶ HP Operations Manager

- ▶ 統合の詳細については、308 ページの「SiteScope の HPOM と BSM の通信方法について」を参照してください。
- ▶ HP Operations Manager 統合プリファレンスの詳細については、746 ページの「HP Operations Manager の概要」を参照してください。
- ▶ ユーザ・インタフェースの詳細については、774 ページの「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

▶ 汎用データ・アプリケーション

- ▶ 統合の詳細については、747 ページの「汎用データ統合の概要」を参照してください。
- ▶ ユーザ・インタフェースの詳細については、764 ページの「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



HP Business Service Management 統合プリファレンス

SiteScope 監視データのログを BSM に記録できるようにするには、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する必要があります。これには、SiteScope を BSM の [システム可用性管理] ページに追加する作業も含まれます。SiteScope が追加され、接続が確立されたら、[統合プリファレンス] ページに、[システム可用性管理] の [新規 SiteScope] ページに入力した関連設定を含む [BSM 統合プリファレンス] が表示されます。

統合プリファレンスは次の用途に使用します。

- ▶ 使用可能な統合設定を変更する。
- ▶ BSM への全データのログ記録を無効にする。これには、トポロジ・レポートが含まれます。
- ▶ 空の SiteScope プロファイルに対して統合を作成する。[システム可用性管理] に SiteScope を追加したときに BSM から SiteScope にアクセスできなかった場合は (HP Software-as-a-Service で作業している場合など)、アクセス不可プロファイルを持つ SiteScope をシステム可用性管理に追加します。この後、[統合プリファレンス] で接続と統合を設定します。このタスクの詳細については、749 ページの「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」を参照してください。

接続先の BSM サーバが、SiteScope のデータ報告先の BSM サーバと異なるマシンにある場合、SiteScope の [統合プリファレンス] の [メイン設定]、または [システム可用性管理] の [新規 SiteScope] ページの [分散設定] で、両方のサーバについて接続情報を指定する必要があります。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、758 ページの「[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 742 ページの「SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用」
- ▶ 743 ページの「SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更」
- ▶ 743 ページの「BSM に送信された SiteScope データの圧縮」
- ▶ 743 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」

SiteScope-BSM 通信のための SSL の使用

Secure Sockets Layer (SSL) を使用して、SiteScope から BSM サーバにデータを転送できます。ルート認証局で署名された証明書を BSM サーバにインストールしている場合、SiteScope サーバに必要な設定はありません。BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、適切な以下の手順を実行する必要があります。

- ▶ SSL を必要とする BSM サーバの詳細については、296 ページの「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。
- ▶ クライアント証明書を必要とする BSM サーバの詳細については、297 ページの「SiteScope をクライアント証明書が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。

注:

- ▶ これらの設定は、BSM マシンにインストールされている証明書がルート認証局 (CA) によって署名されていない場合にのみ指定する必要があります。たとえば、Verisign のように認証局が署名した証明書を使用している場合、これらの設定を変更する必要はありません。
 - ▶ ほかの SiteScope モニタで使用しているキーストア・ファイルに自己署名証明書をインポートできますが、必須ではありません。BSM サーバの証明書のキーストアは、個別に作成できます。
-

SiteScope のデータ送信先となるゲートウェイ・サーバの変更

SiteScope のデータのレポート先となるゲートウェイ・サーバを変更できます。一般に、これは、複数のサーバにコンポーネントがインストールされている BSM デプロイメントで作業している場合にのみ当てはまります。この変更を行うには、[統合プリファレンス] ページの [Business Service Management マシン名 / IP アドレス] ボックスに必要なゲートウェイ・サーバの名前または IP アドレスを入力します。また、SiteScope 設定を [システム可用性管理] の [ゲートウェイ サーバ] の名前を更新する必要があります。

注：この機能は、特定の BSM インストールにすでに登録されている SiteScope のゲートウェイ・サーバを変更する場合にのみ使用できます。新しい SiteScope を追加する場合や、異なる BSM システムに SiteScope を接続する場合には、この機能は使用できません。

BSM に送信された SiteScope データの圧縮

標準設定で、データが SiteScope サーバから BSM に送信される時には圧縮されずに送信されます。SiteScope モニタ (ss_monitor_t) および SiteScope メトリック (ss_t) サンプルのデータ圧縮を有効にするには、< SiteScope ルート・ディレクトリ > %groups%master.config ファイルでプロパティ `_compressDataInGzipFormat=` を `true` に設定します。この設定を有効にすると、BSM (ここで解凍される) に送信される前に SiteScope データは gzip に圧縮されます。データ圧縮を使用できるのは、SiteScope が BAC 8.05 以降、または BSM 9.01 以降にレポートされる時に限定されることに注意してください。

トラブルシューティングおよび制限事項

BSM へのデータのレポートに関するトラブルシューティングの詳細については、304 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

Diagnostics 統合の概要

SiteScope は HP Diagnostics にデータを転送して、Diagnostics が監視するアプリケーション・サーバに関する包括的な情報を表示できるようにします。このデータから、アプリケーション・サーバのデプロイ先であるインフラストラクチャ・コンポーネントに関する洞察を得ることができます。

たとえば、MIB による SNMP モニタからのデータを統合すると、アプリケーション・サーバが実行されているインフラストラクチャに関する問題の判別に役立ちます。SiteScope は、グループ、モニタ、測定値に関するデータを転送します。HP Diagnostics は、SiteScope から送信されたデータを読み込み、レポートやグラフで表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、769 ページの「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

Diagnostics の測定単位

SiteScope では、SiteScope モニタと Diagnostics のメトリックスおよびメトリックに使用する測定単位のマッピングを制御するファイル **< SiteScope のルート・ディレクトリ > /conf/ integration/data_integration_uom.xml** を生成します。Diagnostics は、認識できる測定単位にデータが関連付けられている場合にのみ、SiteScope からのデータを受け入れます。SiteScope の単位は、監視対象のソースから取得され、場合によっては該当する Diagnostics の測定単位にマップする必要があります。SiteScope モニタで使用される測定単位は、監視対象のデータのタイプに応じて異なります。たとえば、CPU モニタに使用する測定単位はパーセンテージで、ディスク領域モニタに使用する測定単位はバイト数です。したがって、SiteScope から送られる監視データに使用する測定単位が Diagnostics で認識されるように、必要に応じて XML ファイルを変更することをお勧めします。

Diagnostics にデータを報告する新しいモニタを SiteScope に追加する場合、[Diagnostics 統合プリファレンス] を編集して、[UOM XML の生成] ボタンをクリックすることをお勧めします。SiteScope は、現在デプロイされているモニタと対応する測定値のリストを生成します。このリストは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > /conf/ integration/data_integration_uom.xml** ファイルと結合されており、XML ファイル内の手動で変更されていない値のみが更新されています。XML ファイル内に手動で変更された値がある場合、その値は更新されず、保持されます。この測定単位に関する情報の結合は、[UOM XML の生成] ボタンをクリックするか、SiteScope を再起動するたびに行われます。

SiteScope が HP Diagnostics に転送する統合ファイルに含まれる XML タグ、要素、属性の詳細なリファレンスについては、751 ページの「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」を参照してください。

HP Operations Manager の概要

HP Operations Manager (HPOM) および BSM 内の オペレーション管理に SiteScope のサーバおよびモニタに関する可視性を提供するには、HP Operations Agent をインストールして SiteScope サーバに設定する必要があります。HP Operations Agent は、イベント・データを HPOM 管理サーバと オペレーション管理に送信します。HP Operations Agent は、SiteScope で収集された測定値データのデータ・ストレージとしても機能します。HP Operations Agent を HPOM/BSM サーバに接続し、HP Operations Manager とのイベント統合または測定値統合を有効にする必要があります。

注：以前の統合ソリューションでは、基本的な警告スクリプト・メカニズムの使用時には、HP SiteScope アダプタを HPOM サーバにインストールする必要がありました。この統合により不要になります。

- ▶ **イベント統合：**SiteScope イベントがトリガされるのは、SiteScope モニタのメトリックスの状態（正常 / 警告 / エラー）に変更があったか、SiteScope 警告がトリガされた場合です。HP Operations Agent が監視しているログ・ファイルにイベントが書き込まれると、SiteScope はイベントを送信します。HP Operations Agent はデータを読み取ってイベントに変換し、HPOM/BSM サーバに転送します。イベント送信の詳細については、313 ページの「イベントの送信」を参照してください。
- ▶ **メトリックス統合：**SiteScope メトリックス・データは、HPOM が Performance Manager グラフで使用するために、また BSM が オペレーション管理 内の Performance Perspective で使用するために、HP Operations Agent データ・ストレージから収集します。測定値のレポートの詳細については、322 ページの「HP Operations Agent を使用した測定値のレポート」を参照してください。

HP Operations Manager の統合設定の詳細については、774 ページの「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

汎用データ統合の概要

これは、別のアプリケーションへのデータの転送に使用できる汎用の統合です。アプリケーションは SiteScope が転送する XML ファイルを受信できる必要があります。これらのファイルには、SiteScope のグループ、モニタ、測定値のステータスに関する情報が含まれています。

SiteScope が受信側のアプリケーションに転送する統合ファイルに含まれる XML タグ、要素、属性の詳細なリファレンスについては、751 ページの「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、764 ページの「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 747 ページの「HTTP 要求を使用した配信」
- ▶ 748 ページの「時刻同期」

HTTP 要求を使用した配信

受信側のアプリケーションは、SiteScope からのデータを受信できるようになっている必要があります。つまり、アプリケーションは SiteScope サーバからの HTTP 要求を受信し、受信した XML ファイルを復号化できる必要があります。

HTTP 要求には次のヘッダが含まれています。

コンテンツ・タイプ : text/xml

XML ファイルの内容を zip 圧縮するように選択した場合、HTTP 要求には次のヘッダが含まれます。

Content-Type: text/xml

Content-Encoding: gzip

データを zip 圧縮するかどうかは、SiteScope に統合を作成するときに [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスで選択します。データを zip 圧縮するように選択した場合、SiteScope が送信したファイルをアプリケーションで展開できる必要があります。

時刻同期

SiteScope が時刻同期 XML ファイルを個別に転送できるようにして、SiteScope サーバの時刻をアプリケーションのサーバと同期できます。このファイルは、SiteScope での統合作成時に [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックスの [時刻同期の間隔] フィールドで選択した間隔で、データ XML と同じように送信されます。このフィールドに値を入力すると、SiteScope はサーバの日付スタンプを、指定した間隔でデータを受信するアプリケーションに転送します。このオプションの詳細については、765 ページの「時刻同期の間隔 (分)」を参照してください。この XML ファイルの内容の詳細については、754 ページの「時刻同期 XML」を参照してください。

タスク

アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法

このタスクでは、BSM から SiteScope にアクセスできない場合（HP Software-as-a-Service での作業時など）に、SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 749 ページの「BSM への SiteScope プロファイルの追加」
- ▶ 749 ページの「BSM サーバへの接続パラメータの指定」
- ▶ 750 ページの「SiteScope-BSM 通信のための SSL の設定」

1 BSM への SiteScope プロファイルの追加

BSM で、システム可用性管理の [新規 SiteScope] ページで [アクセス不能なプロファイル] を選択して SiteScope の空のプロファイルを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「[新規 SiteScope] ページ」を参照してください。

2 BSM サーバへの接続パラメータの指定

SiteScope で、新しい BSM の統合プリファレンスを [統合プリファレンス] に追加します。BSM 統合の値を入力します。統合を追加する場合、[使用可能なプロファイルの取得] ボタンをクリックし、BSM で作成した空のプロファイルを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、758 ページの「[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 SiteScope-BSM 通信のための SSL の設定

BSM サーバに自己署名証明書があり、その証明書を使用して SiteScope との通信のセキュリティを保護する場合、適切な以下の手順を実行する必要があります。

- ▶ SSL が必要な BSM サーバについては、296 ページの「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。
- ▶ クライアント証明書を必要とする BSM サーバの詳細については、297 ページの「SiteScope をクライアント証明書が必要な BSM サーバに接続する方法」を参照してください。

参照情報

一般データおよび **Diagnostics** 統合の XML タグの参照情報

SiteScope で一般データまたは Diagnostics の統合のデータを転送するときには、XML ファイルが使用されます。この XML ファイルの要素と属性について次に説明します。統合の作成の詳細については、747 ページの「汎用データ統合の概要」または 744 ページの「Diagnostics 統合の概要」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、764 ページの「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」または 769 ページの「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 751 ページの「データの XML 要素および属性表」
- ▶ 754 ページの「時刻同期 XML」

データの XML 要素および属性表

親要素	要素の説明	属性	説明
performance Monitors	XML の親要素。この要素内のすべての group 要素を含む。	collectorHost	SiteScope ホスト
		collector	データを収集するアプリケーション（常に SiteScope）
group	SiteScope グループを表す。group および monitor 要素の親要素。	name	ユーザによって定義されたグループ名
		desc（任意指定）	グループの詳細（入力されている場合）
		previousName（任意指定）	グループの以前の名前（ある場合）

親要素	要素の説明	属性	説明
monitor	SiteScope モニタを表す。 counter 要素の親要素。	type	モニタ・タイプ ([新規モニタ] ダイアログ・ボックスに表示される)
		name	ユーザによって定義されたモニタ名
		target	監視対象のリモート・サーバ
		targetIP	監視されるリモート・サーバの IP アドレス
		time	測定の時刻
		quality	モニタのしきい値によって判断される状態 使用可能な値： ▶ 0: データなし (しきい値が定義されていない) ▶ 1: 情報 (正常) ▶ 2: 警告 ▶ 3: 危険域
		previousName (任意指定)	モニタの以前の名前 (ある場合)
		desc (任意指定)	モニタの詳細 (入力されている場合)
		sourceTemplateName	モニタがテンプレートまたはソリューション・テンプレートから作成された場合のソース・テンプレート名
statusDesc (任意指定)	統合の作成時に [追加のデータを含める] が選択されている場合のみ含まれるモニタの状態の文字列を表す。このオプションの詳細については、766 ページの「追加のデータを含める」を参照してください。		

親要素	要素の説明	属性	説明
counter	モニタによって収集された測定値を表す。	name	カウンタの名前
		value	カウンタの値
		quality	カウンタのしきい値によって判断されるカウンタの状態 使用可能な値： ▶ 0：データなし（しきい値が定義されていない） ▶ 1：情報（正常） ▶ 2：警告 ▶ 3：危険域
		desc (任意指定)	モニタの詳細（入力されている場合）
		status (任意指定)	この属性の値が 0 と表示される場合、カウンタは使用できない。カウンタが使用可能な場合、この属性は SiteScope から送信されず、XML には含まれない。 使用可能な値： 0：カウンタは使用できない
units (任意指定)	カウンタの測定値の単位（関連する場合）		

時刻同期 XML

データ統合を作成するときに「時刻同期の間隔」フィールドに値を入力すると、SiteScope サーバの時刻と受信側アプリケーションの時刻を同期化するために、SiteScope によってこの XML が送信されます。

親要素	要素の説明	属性	属性の説明
performanceMonitors	XML の親要素。	collectorHost	SiteScope ホスト
		collector	データを収集するアプリケーション (常に SiteScope)
timeStamp	SiteScope サーバの時刻を提供します。	timestamp	タイムスタンプ。1970 年 1 月 1 日から経過した秒数として計算されます。

[統合プリファレンス] のユーザ・インタフェース

本項の内容


- ▶ 統合プリファレンス・ページ (755 ページ)
- ▶ [統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス (757 ページ)
- ▶ [BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス (758 ページ)
- ▶ [データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス (764 ページ)
- ▶ [Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス (769 ページ)
- ▶ [HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス (774 ページ)





統合プリファレンス・ページ

このページでは、SiteScope を BSM, HPOM, Diagnostics などのアプリケーションに統合する場合に設定を行うことができます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 統合プリファレンスの編集 」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 288 ページの「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」 ▶ 749 ページの「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 740 ページの「統合プリファレンスの概要」 ▶ 304 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規統合 : SiteScope の新規統合を作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、757 ページの「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
	<p>統合の編集 : SiteScope の既存の統合を編集できます。選択した統合タイプに応じた統合の編集ダイアログ・ボックスが開きます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [BSM 統合] のユーザ・インタフェースの詳細については、758 ページの「[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [データ統合] のユーザ・インタフェースの詳細については、764 ページの「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [Diagnostics 統合] のユーザ・インタフェースの詳細については、769 ページの「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [HP Operations Manager 統合] ユーザ・インタフェースの詳細については、774 ページの「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	<p>統合の削除 : [統合プリファレンス] から選択した統合を削除します。</p>
	<p>すべて選択 : 表示されたすべての統合を選択します。</p>
	<p>選択範囲を解除 : 選択をクリアします。</p>
<p>SiteScope のデタッチ</p>	<p>(ショートカット・メニューからのみ使用可能) SiteScope を LoadRunner 統合からデタッチします。この操作で、現在の LoadRunner 統合を SiteScope 側から削除できます。SiteScope がアタッチされている場合は、モニタを LoadRunner ユーザ・インタフェースから定義できます。</p>
<p>統合名</p>	<p>新規統合プリファレンスの作成時に統合に割り当てられる名前の文字列。</p>
<p>統合の詳細</p>	<p>統合プリファレンスの作成時または編集時に割り当てられた統合の詳細。</p>

[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、設定する統合プリファレンスのタイプを選択できます。



アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択し、[新規統合]  ボタンをクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	749 ページの「アクセス不可プロファイルの SiteScope-BSM 統合プリファレンスの設定方法」
関連情報	740 ページの「統合プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
統合プリファレンス・タイプ	<p>次の統合プリファレンス・タイプを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ BSM 統合 : SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、758 ページの「[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ データ統合 : 一般データの統合を作成するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、764 ページの「[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ Diagnostics 統合 : Diagnostics 統合を作成するために使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、769 ページの「[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ HP Operations Manager 統合 : イベント測定値とレポート測定値を HPOM および BSM サーバに送信するように SiteScope を設定する場合に使用します。ユーザ・インタフェースの詳細については、774 ページの「[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
統合プリファレンスの詳細	統合プリファレンス・タイプの詳細。

[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、BSM 統合設定を変更し、システム可用性管理で作成されていて SiteScope にアクセス不可プロファイル用に新しい BSM 統合を作成できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規統合]  ボタンをクリックして [BSM 統合] を選択するか ▶ または、既存の BSM 統合を選択して [統合を編集します]  ボタンをクリックします。
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ BSM への接続を保護するには（認証用に BSM のユーザ名およびパスワードは使用しないため）、SiteScope の基本認証または双方向 SSL のいずれかを設定することをお勧めします。基本認証を使用するように BSM を設定している場合、SiteScope の [認証ユーザ名] フィールドと [認証パスワード] フィールドに入力した同じユーザ名とパスワードが、BSM へのデータとトポロジのレポートに使用されます。BSM が基本認証を使用するように設定されていない場合、送信された資格情報は無視されます。 ▶ SiteScope サーバから BSM に送信される前にデータを圧縮できるようにするには、< SiteScope ルート・ディレクトリ > %groups%master.config ファイルで <code>_topazCompressDataInGzip=true</code> を設定します。有効化すると、SiteScope モニタ (ss_monitor_t) および SiteScope メトリック (ss_t) サンプルが、BSM（ここで展開される）に送信される前に GZIP 圧縮されます。データ圧縮を使用できるのは SiteScope が BAC 8.05 以降にレポートする時に限定されます。

重要な情報 (つづき)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 標準設定で、データが SiteScope サーバから BSM に送信される時には圧縮されずに送信されます。データ圧縮の有効化の詳細については、743 ページの「BSM に送信された SiteScope データの圧縮」を参照してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 288 ページの「SiteScope および BSM 間の統合の設定方法」 ▶ 296 ページの「SiteScope を SSL が必要な BSM サーバに接続する方法」 ▶ 297 ページの「SiteScope をクライアント証明書が必要な BSM サーバに接続する方法」 ▶ 298 ページの「トポロジ・レポートの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 740 ページの「統合プリファレンスの概要」 ▶ 755 ページの「統合プリファレンス・ページ」 ▶ 757 ページの「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

BSM 統合のメイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
Business Service Management マシン名 /IP アドレス	<p>この SiteScope を接続する BSM サーバのマシン名または IP アドレス。</p> <p>注: このフィールドは必須です。</p>
SiteScope エージェント・マシンの場所	<p>BSM に接続している SiteScope サーバの場所。この特定の SiteScope サーバの場所を容易に識別できる任意の値を指定できます。</p> <p>注: このフィールドは必須です。</p>
Business Service Management へのログ記録をすべて無効にする	<p>SiteScope の BSM へのデータ送信を停止します。すべてのトポロジ報告も無効になります。</p> <p>ログ記録を再度有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

UI 要素	説明
< プロファイル >	SiteScope によって収集されたデータを BSM を使用して格納する SiteScope プロファイル。 注: プロファイルは BSM のシステム可用性管理で事前に設定されている必要があります。
使用可能なプロファイルの取得	使用可能なプロファイルのリストが表示されます。このボタンは、システム可用性管理で作成された空のプロファイル (アクセス不可プロファイル) に SiteScope を登録する場合のみ使用します。
Business Service Management ユーザ名	BSM 管理者レベルのユーザのユーザ名。
Business Service Management ユーザ・パスワード	指定したユーザのパスワード。

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
認証ユーザ名	BSM サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
認証パスワード	BSM サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。
SSL を使用 (HTTPS プロトコル)	HTTPS プロトコルが使用されるように BSM サーバを設定する場合に選択します。 標準設定値: 選択されていない

プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス (必要な場合)。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。

トポロジ報告設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
トポロジの再同期化の時間間隔 (日)	<p>SiteScope で BSM のトポロジ・データと同期化する日数。 SiteScope が BSM に報告するトポロジ情報は、この時間間隔に達した後の SiteScope の再起動時に同期化されます。</p> <p>標準設定値 : 7 日</p> <p>最小値 : 1 日</p> <p>注 : SiteScope で作成されて RTSM に格納されているすべてのトポロジは、エージング・プロセスの対象です。エージングを避けるには、276 ページの「RTSM の CI のエイジング」を参照してください。</p>
標準トポロジ・プローブ・ドメイン	<p>SiteScope トポロジ・プローブの標準設定のドメイン。</p> <p>標準設定値 : DefaultDomain</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
トポロジ受信者ポート	<p>BSM で使用するトポロジ受信者ポート。</p> <p>標準設定値 : 80</p> <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>

UI 要素	説明
トポロジ受信者 SSL ポート	BSM で使用するトポロジ受信者 SSL ポート。 標準設定値 : 443 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。
トポロジ・アンチエイジング・オフセット (分)	アンチエイジング・プロセスを実行する、分単位の午前 0 時からのオフセット。アンチエイジングの詳細については、276 ページの「RTSM の CI のエイジング」を参照してください。 標準設定値 : 0 注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。 例 : 午前 1:30 にアンチエイジングを実行するには、90 のオフセットを入力します。

BSM プリファレンス利用可能操作



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
リセット	SiteScope サーバからすべての BSM 関連の設定を削除します。すべての SiteScope 設定が BSM から削除されます。また、対応するプロファイルから SiteScope エージェントを解除するメッセージが、適切な BSM サーバに送信されます。 注 : 現在の設定のリセットを選択した場合、SiteScope の BSM への再接続に異なるプロファイルを作成または使用する必要があります。BSM では、以前使用された接続プロファイルは選択できません。

UI 要素	説明
再同期化	<p>SiteScope からすべての設定データを強制的に BSM に再送信します。このデータは、すべてのグループとモニタ定義で構成されます。再同期化では、SiteScope からすべてのトポロジ・データも強制的に BSM に再送信します。</p> <p>注：BSM 9.10 以降にアップグレードする場合は、[トポロジの再同期化の時間間隔] 値に基づいてトポロジ・データが BSM に送信されるのを待機せず、SiteScope を手動で再同期することをお勧めします。</p>
厳密な再同期化	<p>SiteScope からすべての設定データとトポロジ・データを強制的に BSM に再送信します。また、設定データの場合、BSM からこの SiteScope プロファイルの既存のモニタおよびグループ・データを削除します。</p>

[データ統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい一般データの統合の作成や既存のデータ統合の編集ができます。直接統合されていないアプリケーションへの SiteScope データの転送に使用できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規統合]  ボタンをクリックして [データ統合] を選択するか ▶ または、既存のデータ統合を選択して [統合を編集します]  ボタンをクリックします。
<p>重要な情報</p>	<p>SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 740 ページの「統合プリファレンスの概要」 ▶ 747 ページの「汎用データ統合の概要」 ▶ 755 ページの「統合プリファレンス・ページ」 ▶ 757 ページの「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」 ▶ 751 ページの「一般データおよび Diagnostics 統合の XML タグの参照情報」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>名前</p>	<p>SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 注: このフィールドは必須です。</p>
<p>詳細</p>	<p>統合の詳細。これには、SiteScope からのデータを受信するアプリケーションに関する情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の [統合プリファレンス] ページにのみ表示されます。</p>

データ統合プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
受信者 URL	<p>SiteScope データを受信するアプリケーション・サーバの URL。これは、サーバ、ポート、パスを含む完全な URL である必要があります。</p> <p>セキュリティ保護された接続 (SSL) の場合、「https」と入力します。</p> <p>構文: http または https:// <受信側のサーバの完全修飾ドメイン名> : <データを受信するポート番号> / <パス></p>
エンコーディング	<p>受信側のアプリケーションが使用するエンコーディング。</p> <p>標準設定値: UTF-8</p>
レポート間隔 (秒)	<p>SiteScope がデータの送信を終了してから次にデータの送信を開始するまでの時間間隔 (秒単位)。</p> <p>標準設定値: 60 秒</p>
時刻同期の間隔 (分)	<p>SiteScope サーバと SiteScope データを受信するサーバの時刻を同期化するために、SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告できます。受信側のサーバは、SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し、SiteScope データとアプリケーション自身のデータの時刻が一致するようにします。</p> <p>SiteScope が、SiteScope サーバの時刻を SiteScope のデータを受信するサーバに報告する間隔を分単位で選択します。</p> <p>標準設定値: 10 分</p>

UI 要素	説明
GZIP 圧縮	<p>受信側のサーバに送信するサンプル・データを圧縮します。データが圧縮されていると、データ送信にかかる時間が短縮されるためパフォーマンスが向上します。送信するデータの量と受信側のアプリケーションが圧縮データを処理できるかどうかに応じて、このフィールドを選択またはクリアします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
追加のデータを含める	<p>クリアすると、SiteScope によって次の SiteScope オブジェクトの状態が報告されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ グループ ▶ モニタ ▶ カウンタ <p>選択した場合、これらのオブジェクトの状態が、各オブジェクトの説明を含む状態文字列と一緒に報告されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>ヒント : 追加データを含めるとパフォーマンスが低下し、状態文字列は標準設定で送信される状態データを繰り返すため、含めないことをお勧めします。</p>
リダイレクトでエラー	<p>接続先 URL がリダイレクトされると、SiteScope からエラーが返されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
要求タイムアウト (秒)	<p>サーバとの接続が確立されるまでのタイムアウト (秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p>
接続タイムアウト (秒)	<p>データを待機するソケットのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p>
再試行の回数	<p>SiteScope が接続の確立を試みる回数。</p> <p>標準設定値 : 3</p>

UI 要素	説明
要求された場合の認証	SiteScope は、要求された場合、ユーザ名およびパスワードの資格情報を送信します。クリアすると、SiteScope は資格情報を転送しません。 標準設定値 ：選択されている
統合を無効にする	SiteScope は、データをサーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。 標準設定値 ：選択されていない

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
認証ユーザ名	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
認証パスワード	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。

プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス（必要な場合）。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。



レポート・タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
<p>< タグ名と値 ></p>	<p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して受信側のアプリケーションに転送するデータを決定します。統合ごとに少なくとも 1 つのタグを選択する必要があります。受信側のアプリケーションにデータを転送するグループ、サブグループ、モニタについても同じタグを選択する必要があります。</p> <p>オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を受信側のアプリケーションに報告します。</p> <p>例： Integration1 というタグを作成して、ここで選択します。受信側のアプリケーションに状態を報告する各グループ、モニタ、または両方に、オブジェクトの [タグの検索 / フィルタ] 設定でこのタグを選択します。</p> <p>注： 統合プリファレンスごとに複数のタグを選択できます。報告するオブジェクトに対して複数の統合タグを選択できます。</p>
<p>タグの追加</p>	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>ヒント： 統合タグの作成時には、単語 Integration を使用しません。統合タグは、SiteScope に対して作成されたほかのすべての検索 / フィルタ・タグと一緒に表示されるため、グループやモニタで統合を有効にする際に選択するタグを識別しやすくなります。</p>

[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい HP Diagnostics との統合の作成や既存の Diagnostics 統合の編集ができます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規統合]  ボタンをクリックして [Diagnostics 統合] を選択するか ▶ 既存の Diagnostics 統合を選択して [統合を編集します]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<p>SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 744 ページの「Diagnostics 統合の概要」 ▶ 755 ページの「統合プリファレンス・ページ」 ▶ 757 ページの「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	<p>SiteScope インタフェースでこの統合の識別に使用する名前。 注：このフィールドは必須です。</p>
詳細	<p>統合の詳細。SiteScope からデータを受信する Diagnostics サーバの情報が含まれる場合があります。この詳細は、SiteScope の [統合プリファレンス] ページにのみ表示されます。</p>

Diagnostics 統合プリファレンス設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
受信者 URL	<p>SiteScope データを受信する Diagnostics サーバの URL。サーバ, Diagnostics でデータを受信するポート, パスを含む完全な URL を指定する必要があります。パスには常に /metricdata/siteScopeData を含める必要があります。</p> <p>セキュリティ保護された接続 (SSL) の場合, 「https」と入力します。</p> <p>構文: http または https:// <受信側のサーバの完全修飾ドメイン名> : <データを受信するポート番号> /metricdata/siteScopeData</p> <p>例: http://DiagnosticsServer1.hp.net:2006/metricdata/siteScopeData</p>
エンコーディング	<p>Diagnostics アプリケーションで使用するエンコーディング。</p> <p>標準設定値: UTF-8</p>
レポート間隔 (秒)	<p>SiteScope が Diagnostics サーバへデータの送信を終了してから, 次にデータを送信するまでの時間間隔 (秒単位)。この時間間隔はデータが送信されない時間間隔のため, サーバ間の通信遅延を防ぐことができます。</p> <p>標準設定値: 60 秒</p>
時刻同期の間隔 (分)	<p>SiteScope サーバの時刻と Diagnostics サーバの時刻を同期化するために, SiteScope ではサーバに登録されている時刻を定期的に報告します。その後, Diagnostics は, SiteScope から送信されたデータ・サンプルの時刻を自分のサーバの時刻と同期化し, SiteScope データと Diagnostics データの時刻が一致するようにします。</p> <p>SiteScope から Diagnostics に SiteScope サーバの時刻を報告する頻度を, 分単位で選択します。</p> <p>標準設定値: 10 分</p>

UI 要素	説明
GZIP 圧縮	<p>Diagnostics サーバに送信するサンプル・データを圧縮します。データが圧縮されていると、データ送信にかかる時間が短縮されるためパフォーマンスが向上します。Diagnostics アプリケーションで圧縮データを処理できます。送信するデータ量に応じて、このフィールドを選択またはクリアします。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
追加のデータを含める	<p>クリアすると、SiteScope によって次の SiteScope オブジェクトの状態が報告されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ グループ ▶ モニタ ▶ カウンタ <p>選択した場合、これらのオブジェクトの状態が、各オブジェクトの説明を含む状態文字列と一緒に報告されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>ヒント : 追加データを含めるとパフォーマンスが低下し、状態文字列は標準設定で送信される状態データを繰り返すため、含めないことをお勧めします。</p>
リダイレクトでエラー	<p>接続先 URL がリダイレクトされると、SiteScope からエラーが返されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
要求タイムアウト (秒)	<p>データを待機するソケットのタイムアウト (秒単位)。タイムアウト値 0 は、無制限のタイムアウトとして解釈されます。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p>
接続タイムアウト (秒)	<p>接続が確立されるまでのタイムアウト (秒単位)。値 0 は、タイムアウトを使用しないことを示します。</p> <p>標準設定値 : 120 秒</p>
再試行の回数	<p>SiteScope が接続の確立を試みる回数。</p> <p>標準設定値 : 3</p>

UI 要素	説明
要求された場合の認証	SiteScope は、要求された場合、ユーザ名およびパスワードの資格情報を送信します。クリアすると、SiteScope は資格情報を転送しません。 標準設定値 ：選択されている
統合を無効にする	SiteScope は、データを Diagnostics サーバに転送しません。統合プリファレンス設定はそのまま残ります。統合を一時的に無効にする場合に使用します。 標準設定値 ：選択されていない
UOM XML の生成	<SiteScope のルート・ディレクトリ>/conf/ integration/ data_integration_uom.xml ファイルと結合する測定単位 XML ファイルを生成します。このファイルにより、Diagnostics で SiteScope データを読み取り、適切な測定単位をデータに適用できます。Diagnostics にデータを報告するモニタ・インスタンスを追加する場合、このボタンをクリックすることをお勧めします。data_integration_uom.xml ファイルの値を手動で変更した場合、その値は変更されたまま残り、この結合ファイルでは更新されません。また、SiteScope の再起動時にも常にこの結合ファイルが生成され、XML ファイルが更新されます。詳細については、744 ページの「Diagnostics の測定単位」を参照してください。

Web サーバのセキュリティ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
認証ユーザ名	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするユーザ名。
認証パスワード	サーバが基本認証を使用するように設定されている場合の、サーバにアクセスするパスワード。

プロキシ・サーバ設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
アドレス	プロキシ・サーバ・アドレス (必要な場合)。
ユーザ名	プロキシ・サーバのユーザ名。
パスワード	指定したサーバのパスワード。



レポート・タグ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	<p>SiteScope では、ここで選択したタグを使用して Diagnostics に転送するデータを決定します。統合ごとに複数のタグを選択できます。 Diagnostics にデータを転送するグループ、サブグループ、モニタに対して、タグを選択する必要があります。</p> <p>オブジェクトに対して統合タグを選択すると、そのタグがオブジェクトの子に伝搬されます。この統合タグでグループにタグ付けすると、そのすべてのサブグループとモニタが状態を Diagnostics に報告します。</p> <p>例 : Diagnostics_Integration1 というタグを作成して、ここで選択します。 Diagnostics に状態を報告する各グループ、モニタまたは両方に、 [タグの検索 / フィルタ] 設定でこのタグを選択します。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの 「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>ヒント : 統合タグの作成時には、単語 Integration を使用します。統合タグは、SiteScope に対して作成されたほかのすべての検索 / フィルタ・タグと一緒に表示されるため、グループやモニタで統合を有効にする際に選択するタグを識別しやすくなります。</p>

[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope で共通イベントと測定値データを HPOM 製品と BSM 製品に送信できる HP Operations Agent 接続を設定し、イベント統合と測定値統合を設定できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [統合プリファレンス] を選択します。[統合プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規統合]  ボタンをクリックして [HP Operations Manager 統合] を選択するか ▶ または、既存の HPOM 統合を選択して [統合を編集します]  ボタンをクリックします。
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「統合プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、統合プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ HP Operations Manager とのメトリックス統合は、HP Operations Agent と HPOM サーバまたは BSM サーバとの接続状態に関係なく、有効化されます。これは、メトリックスがエージェントによって収集されるためです。
<p>関連タスク</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」 ▶ 349 ページの「SiteScope から HP Operations Agent にメトリックスをレポートできるようにする方法」
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 746 ページの「HP Operations Manager の概要」 ▶ 313 ページの「イベントの送信」 ▶ 322 ページの「HP Operations Agent を使用した測定値のレポート」 ▶ 755 ページの「統合プリファレンス・ページ」 ▶ 757 ページの「[統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・ボックス」

HP Operations Manager 統合のメイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
接続設定	
HP Operations Agent インストール・パス	<p>SiteScope マシンの HP Operations Agent インストールへのパス。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Windows プラットフォームでは、インストール・パスは、レジストリ内の HP Operations Agent InstallDir キーから自動的に解決され、このフィールドに表示されます。標準設定パスは、C:\Program Files\HP\HP BTO Software です。キーが見つからない場合、このフィールドは空のままとなります。エージェントのインストール・パスを手動で入力する必要があります。 ▶ UNIX プラットフォームの場合標準設定の /opt/OV パスに HP Operations Agent がインストールされているかどうか SiteScope によって確認されます。このパスに存在しない場合、このフィールドは空のままとなります。エージェントのインストール・パスを手動で入力する必要があります。 <p>手動で別のパスを入力した場合、SiteScope によって見つかった標準設定のインストール・パスを復元するには、[パスの解決] ボタンをクリックします。</p>

UI 要素	説明
<p>HP Operations Manager/BSM サーバ</p>	<p>接続する HPOM / BSM サーバの名前または IP アドレスを入力します。エージェントと HPOM / BSM ホスト・マシンを接続するには、[接続] ボタンをクリックします。</p> <p>BSM 分散環境に接続している場合、BSM ゲートウェイ・サーバー名または IP アドレスを入力します。BSM ゲートウェイ・サーバーがロード・バランサの背後にある場合には、データ・コレクタ用に設定されるロード・バランサの名前または IP アドレスを入力します。タスクの詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」のステップ 3 を参照してください。</p> <p>接続に問題がある場合は、問題の分析を実行してエージェントおよび証明書要求の状態をチェックするために[分析] ボタンをクリックします。</p> <p>接続要求が送信された後、HPOM / BSM サーバは証明書要求を承諾する必要があります(このクライアントを自動的に受け入れるように HPOM / BSM サーバが設定されていない場合)。</p> <p>HPOM / BSM サーバで証明書要求が承諾された後、[ポリシーのインストール] をクリックし、設定済みのログ・ファイル・ポリシー・ファイルを HP Operations Agent 上にインストールし、承認します。</p> <p>注： HPOM / BSM サーバ上で証明書要求が承諾された後は、SiteScope から接続の遮断または別の HPOM / BSM サーバへの接続の変更を行うことはできません。サポートが必要な場合は、HPOM / BSM の管理者にお問い合わせください。</p>

UI 要素	説明
構成設定	
イベントの送信を有効化	<p>SiteScope から HPOM/BSM サーバへのイベントの送信を有効にします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
BSM に直接接続する	<p>BSM 内の オペレーション管理 にエージェントを接続する時には、SiteScope サーバにインストールして有効化した場合はノード・ディスカバリ・ポリシーを自動的に非アクティブ化するように選択します。</p> <p>このオプションが選択されると :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [ノード ディスカバリ ポリシーを有効にする] オプションは使用できないため、ノード・ディスカバリ・ポリシーは SiteScope サーバにインストールして有効化した場合には無効になります。 ▶ [BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル プリファレンス)] オプションが自動的に選択されます。 <p>このオプションがクリアされると :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [ノード ディスカバリ ポリシーを有効にする] オプションが自動的に選択されます。 ▶ [BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル プリファレンス)] オプションが自動的にクリアされます。 <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

UI 要素	説明
<p>BSM サービス状況のメトリックよりイベントを優先します (グローバル・プリファレンス)</p>	<p>SiteScope イベントおよびメトリックスの両方が サービス状況 にレポートされる時に BSM の サービス状況 に影響を与えるグローバル・プリファレンスの標準設定 (SiteScope イベントおよびメトリックスの両方が CI に影響を与えるため)。これは BSM および HP Operations Manager 統合の両方がアクティブで、同じ BSM サーバに接続されている時に限り関係します (HPOM サーバの代わりに BSM サーバが使用されます)。</p> <p>選択される場合には、[イベント] オプションは、([HP 統合設定] > [BSM サービス状況プリファレンス] で) 作成された新しいモニタごとに標準設定のプリファレンスとして設定されます。選択されない場合には、[メトリックス] がデータを BSM にレポートするための標準設定のプリファレンスです。</p> <p>使用するプリファレンスの選択の詳細については、SiteScope ヘルプ の『Best Practices for the SiteScope-Business Service Management/Operations Manager Integration』の「Integrating SiteScope with Business Service Management Applications」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されていない (標準設定でメトリックス・データがサービス状況に影響する)</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ このオプションは [BSM に直接接続する] が選択されると自動的に選択されます。 ▶ この設定は、[HP 統合設定] > [BSM サービス状況プリファレンス] で個々のモニタ・インスタンスに設定されたプリファレンスをオーバーライドしません。
<p>ノード・ディスカバリ・ポリシーを有効にする</p>	<p>SiteScope は SiteScope サーバでノード・ディスカバリ・ポリシー (インストールされている場合) を有効にします。このオプションは [BSM に直接接続する] がクリアされると自動的に選択されます。ノード・ディスカバリの詳細については、318 ページの「ディスカバリ・スクリプトと HPOM イベントを表示するためのドリル・ダウン・ユーザ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

HP Operations Manager 統合詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
イベント統合設定	
テスト・メッセージ	<p>HP Operations Agent が HPOM / BSM サーバに接続されていて、メッセージを送信できることをチェックします。HPOM / BSM サーバに送信するテスト・メッセージを入力し、[テスト メッセージ送信] ボタンをクリックします。</p> <p>注: このテストを実行するためには、opcmsg ログ・ポリシーのデプロイ、承認、およびインストールを手動で行うか、あるいはイベント統合をアクティブ化した後で行う必要があります。</p>
テスト・イベント送信	テスト・イベントを HPOM / BSM サーバに送信します。
<p>重大度マッピング</p> <p>インジケータ状態が使用されない時に、重大度マッピングは SiteScope のモニタしきい値の状態のイベント重大度レベルを制御します。標準設定のしきい値の状態マッピング（以下）をカスタマイズできます。</p>	
エラー	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各モニタ・インスタンスのエラー状態のしきい値間のマッピング。</p> <p>標準設定値: 致命的</p>
警告	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各モニタ・インスタンスの警告状態のしきい値間のマッピング。</p> <p>標準設定値: 軽微</p>
正常	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各モニタ・インスタンスの正常状態のしきい値間のマッピング。</p> <p>標準設定値: 標準</p>
使用不能	<p>SiteScope および HPOM/BSM サーバの各モニタ・インスタンスの使用不能状態のしきい値間のマッピング。</p> <p>標準設定値: 不明</p>

UI 要素	説明
標準重大度を使用します	<p>選択されると、標準設定のマッピングは次の場合に送信されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ トリガされた警告によって作成されたイベント。 ▶ SiteScope が BSM に接続されていない時。 ▶ インジケータの状態と重大度の値が欠落している場合。たとえば、定義済みのトポロジを持たないモニタの使用時。 <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope が BSM に接続される時（またグローバルな重大度マッピングの標準設定が送信できない）、このオプションは使用できません。 ▶ 標準設定で、警告状態は軽微（警告ではない）にマップされます。 <p>標準設定値： 選択されていない</p>

HP Operations Manager 測定値統合

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
HP Operations Manager 測定値統合の有効化	<p>HPOM および BSM レポート製品がデータの収集元として使用できる HP Operations Agent に対して、SiteScope から測定値をレポートできます。</p> <p>注： モニタ・プロパティ（[HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定]）で [HP Operations Agent へのメトリックのレポート] を選択して、HP Operations Agent にデータを送信する各モニタ・インスタンスを有効にする必要があります。詳細については、475 ページの「HP Operations Manager 統合設定」を参照してください。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>
特定モニタのメトリックレポートの有効化	<p>すべての既存のメモリ、CPU、ディスク領域、Windows リソース・モニタに対して、各モニタ・インスタンスのモニタ・プロパティで [HP Operations Agent へのメトリックのレポート] を選択することなく、自動的に測定値のレポートを有効にします。</p>

25

ログ・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ ログ・プリファレンスの概要 (782 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造 (783 ページ)
- ▶ [ログ プリファレンス] ページ (784 ページ)
- ▶ **トラブルシューティングと制限事項** (788 ページ)

概念

ログ・プリファレンスの概要

ログ・プリファレンスを使用すると、SiteScope サーバに蓄積して保持する監視データの量を選択できます。また、監視データを外部データベースにエクスポートするように SiteScope を設定できます。

標準設定では、SiteScope はモニタ結果、警告データ、エラー・データや、モニタから返されたその他の測定値をログ・ファイルに保存します。監視データの結果の場合、日付が記述されたログ・ファイルが 24 時間の監視期間ごとに作成されます。このデータはタブ区切りテキストとして保存されます。SiteScope はこのログ・ファイルを使用して、時間の経過に伴うシステムの可用性とパフォーマンスの管理レポートを作成します。

データ・ログを長期間保存していると問題が生じる場合があります。ただし、ログ・ファイルを保持する日数やデータ・ログ・ファイルの最大サイズを設定することで、SiteScope がローカル・ファイル・システムに保存するログ情報の量を制限できます。外部データベース・アプリケーションに監視データを送信することもできます。これにより SiteScope サーバで必要なデータ・ストレージ容量を削減でき、監視データをほかのレポート・ツールでも使用できるようになります。

注： SiteScope 管理レポートを作成するには、必要なレポート期間の監視ログ情報が SiteScope サーバのファイル・システムで使用できる必要があります。管理レポートの作成の詳細については、1538 ページの「管理レポート」を参照してください。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、784 ページの「[ログ プリファレンス] ページ」を参照してください。

参照情報

SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造

データベース・ログインが有効な場合、監視データは **SiteScopeLog** という 1 つのテーブルに格納されます。各データベース・レコードの先頭 9 フィールドは、すべてのモニタで同じです。次の 10 フィールドには、データを提供するモニタの種類に応じて異なる測定値が含まれます。テーブルのすべてのフィールドは、**VARCHAR(255)** データ型を使用します。ログ・データベース・レコードのフィールド説明とその標準設定のフィールド名を、次の表に示します。

フィールド名	データ例	説明
datex	1999-01-20 11:54:54	第 1 フィールドには、モニタを実行した日付が含まれます。
serverName	demo.sitescope.com	第 2 フィールドには、 SiteScope を実行しているサーバの名前が含まれます。
class	URLMonitor	第 3 フィールドには、モニタのタイプが含まれます。
sample	23	第 4 フィールドには、このモニタのサンプル数が含まれます。
category	正常	第 5 フィールドには、モニタのカテゴリ名が含まれます。
groupName	URL	第 6 フィールドには、モニタのグループ名が含まれます。
monitorName	ホーム・ページ	第 7 フィールドには、モニタの名前が含まれます。
status	1.01 秒	第 8 フィールドには、モニタの状態が含まれます。

フィールド名	データ例	説明
monitorID	10	第 9 フィールドには、モニタの ID が含まれます。
value1, value2, ... value10	(変数)	第 10 から第 19 フィールドには、[Log Columns] ページで記述したモニタ固有のデータが含まれます。最初の変数フィールド (value1) が、ログ・ファイルの列 7 に表示される値に対応します。

データベース・ログ記録に使用する SQL ステートメントを変更するには、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups%master.config** ファイルのパラメータ `_logJdbcInsertSiteScopeLog=` を編集します。insert ステートメントを call ステートメントに置き換えると、ストアド・プロシージャを呼び出せます。たとえば、`call logit(?,?,?)` は、`logit` というストアド・プロシージャを呼び出して、最初の 3 つのパラメータを渡します。

[ログ プリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope ログ・プリファレンスを設定できます。システム可用性を効果的に監視するには、必要な間隔の間、監視データを記録して保存する必要があります。SiteScope ログ・プリファレンスでは、監視データの蓄積と保存を制御します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ログ プリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「ログ・プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、ログ・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ ログ・プリファレンスの変更は、SiteScope を再起動しないと反映されません。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 782 ページの「ログ・プリファレンスの概要」 ▶ 783 ページの「SiteScope ログ・データベース・テーブルの構造」 ▶ 788 ページの「トラブルシューティングと制限事項」

SiteScope ログ・ファイル・プリファレンス

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
日次ログ保存日数	<p>監視データを保持する日数。SiteScope では、1 日に 1 回、指定した日数よりも古くなったログを削除します。</p> <p>標準設定値 : 40</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 指定したログ数または最大ログ・サイズに関係なく、常に最新の 2 つのログ (当日分と前日分) が保持されます。 ▶ 長期間監視データ・ログを保持すると、設定したモニタの総数や 1 日あたりのモニタ実行頻度によっては、SiteScope サーバでデータ・ストレージ上の問題が発生することがあります。< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs ディレクトリにあるログ・ファイルのサイズを監視して、データ蓄積速度を見積り、必要に応じてこの設定やサーバ・リソースを調整する必要があります。
ログ・サイズの上 限 (MB)	<p>すべての監視ログの最大サイズ。SiteScope では、1 日に 1 回、すべての監視ログの合計サイズをチェックし、最大サイズを超えた古いログがあれば削除します。</p> <p>標準設定値 : 0 (ログ・サイズをチェックしない)</p>

データベース・ログ記録プリファレンス

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>データベース接続 URL</p>	<p>データベース接続への URL。データベース接続を作成する最も簡単な方法は、ODBC を使用してデータベースへの名前付き接続を作成する方法です。</p> <p>例:最初に、ODBC コントロール・パネルを使用して SiteScopeLog という接続を作成します。次に、接続 URL として「jdbc:odbc:SiteScopeLog」と入力します。</p> <p>Windows 認証使用時の注意事項: Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「jdbc:mercury:sqlserver:// <サーバ名または IP アドレス> : 1433;DatabaseName= <データベース名> ; AuthenticationMethod=type2」を、データベース・ドライバとして「com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」を入力します。SiteScope サービスの実行元であるアカウントの Windows ユーザの資格情報を使用してデータベースへの接続が確立されるように、[データベース ユーザ名] ボックスおよび [データベース パスワード] ボックスは空のままにします。</p>
<p>データベース・ドライバ</p>	<p>SiteScope でデータベースへの接続に使用するデータベース・ドライバ。このドライバは JDBC ドライバである必要があります。SiteScope で別のドライバを使用するには、そのドライバも < SiteScope のルート・ディレクトリ > %WEB-INF%lib ディレクトリにインストールし、パスとファイル名をこのボックスに入力する必要があります。</p> <p>標準設定値: sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver</p>

UI 要素	説明
データベース・ユーザ名	<p>データベースにログオンするためのユーザ名。Microsoft SQL Server を使用する場合は、ここを空白のままにし、ODBC 接続の設定時に Windows 認証を選択します。</p> <p>Windows 認証の場合、SiteScope は SiteScope サービスのログイン・アカウントを使用して接続するため、ユーザ名を指定できません。</p> <p>Windows 認証使用時の注意事項： SiteScope を実行するユーザには、接続するデータベースへのアクセス権が必要です。SiteScope をローカル・システム・アカウントで実行している場合、サーバの名前を使用して接続が試みられます。</p>
データベース・パスワード	<p>データベースにログオンするためのパスワード。Microsoft SQL Server を使用する場合は、ここを空白のままにし、ODBC 接続の作成時に Windows 認証を選択します。</p> <p>Windows 認証の場合、SiteScope は SiteScope サービスのログイン・アカウントを使用して接続するため、パスワードを指定できません。</p>
バックアップ・データベース接続 URL	<p>バックアップ・データベースへの URL。プライマリ・データベースが使用不能になった場合に、SiteScope データベース・ログ記録のフェールオーバーを可能にするには、このオプションを使用します。</p> <p>注： 同じデータベース・テーブル定義、データベース・ドライバ、ユーザ名、パスワードが両方のデータベース接続に適用されます。</p> <p>データベースのプリファレンスへの変更を保存したら、変更を有効にするために SiteScope サービスを停止して再起動する必要があります。</p>

🔍 トラブルシューティングと制限事項

データベース・ログ記録がアクティブになり、正しく動作すると、データベースに **SiteScopeLog** というテーブルが表示され、モニタを実行するたびにそのテーブルにレコードが追加されます。データは、フラット・ファイル形式の単独のテーブルとしてデータベースに送信されます。

SiteScopeLog テーブルが作成されていないか、空の場合、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%RunMonitor.log** ファイルと **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%Error.log** ファイルに、“jdbc” または “odbc” で始まるログ・メッセージがあるかどうかチェックします。データベース・ログ記録が正しく動作している場合、**RunMonitor.log** に次のような一連のメッセージが表示されます。

```
jdbc log, reconnect seconds=600
jdbc log, loading, driver=sun.jdbc.odbc.JdbcOdbcDriver
jdbc log, connecting, url=jdbc:odbc:SiteScopeLog,
jdbc log, logged in
jdbc log, checking log table
jdbc log, created log table
jdbc log, prepare insert, 19, INSERT INTO SiteScopeLog...
jdbc log, connected
```

これらのエントリがログ・ファイルに表示されない場合、データベース・インタフェースまたはデータベース接続の設定に問題があります。入力した [データベース接続 URL] もチェックする必要があります。このパラメータでは大文字と小文字が区別されます。接続 URL のスペルと大文字 / 小文字をチェックし、テキスト・ボックスの先頭や末尾に空白文字がないことを確認します。

データベース・ログ記録に関するその他の情報については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) も参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

26

電子メール・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ 電子メール・プリファレンスの概要 (790 ページ)

参照情報

- ▶ 電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース (791 ページ)

概念

電子メール・プリファレンスの概要

SiteScope が外部電子メール・サーバと通信するために必要な設定を行うには、電子メール・プリファレンスを使用します。電子メール・プリファレンスは、SiteScope が警告を電子メール・メッセージとして送信するために使用する標準設定です。

[電子メール プリファレンス] ページには、電子メール警告メッセージを受信者に送信するために定義したカスタムの電子メール受信者プロファイルが表示されます。電子メール受信者プロファイルを 1 つ以上の電子メール警告に関連付けるには、該当する警告定義を編集します。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、791 ページの「[電子メール プリファレンス] ページ」を参照してください。

参照情報

電子メール・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容







- ▶ [電子メール プリファレンス] ページ (791 ページ)
- ▶ [新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス (793 ページ)
- ▶ [電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス (796 ページ)

[電子メール プリファレンス] ページ

電子メールは、SiteScope によって問題が検出されたときに (SiteScope インタフェースに表示される視覚的なアイコンと状態メッセージに加えて) イベント警告を送信するための標準設定のメディアです。[電子メール プリファレンス]は、SiteScope が電子メール警告やその他の SiteScope メッセージを送信する際に使用する SMTP メール・サーバ、受信者アドレスなどの設定を指示するために使用します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [電子メール プリファレンス] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集 」権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 790 ページの「電子メール・プリファレンスの概要」 ▶ 793 ページの「[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス」 ▶ 796 ページの「[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規電子メール受信者 : 新規の電子メール受信者プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、793 ページの「[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>電子メール受信者の編集 : 電子メール受信者プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、793 ページの「[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>電子メール受信者の削除 : 選択した電子メール受信者プロフィールを [電子メール プリファレンス] から削除します。</p>
	<p>電子メール受信者のテスト : 電子メール・アドレスにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[電子メール] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。</p>
	<p>すべて選択 : 表示されている電子メール受信者プロフィールをすべて選択します。</p>
	<p>選択範囲を解除 : 選択をクリアします。</p>
<p>標準設定</p>	<p>[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 編集 : [電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規電子メール受信者] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、796 ページの「[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ テスト : 選択したアドレスに電子メールを送信できるかどうかをテストします。選択可能な受信者のリストからテストする電子メール受信者を選択するか、[電子メールアドレス] ボックスに電子メール・アドレスを入力します。
<p>名前</p>	<p>新規電子メール受信者を作成する場合に設定プロフィールに割り当てる名前の文字列。</p>
<p>詳細</p>	<p>プロフィールの作成時または編集時に割り当てられた設定プロフィールの詳細。</p>

UI 要素	説明
電子メール	警告の送信先の電子メール・アドレス。
有効	電子メール警告の状態。状態が「いいえ」の場合、これらの電子メール・アドレスへの電子メール警告の送信は停止されます。

[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規電子メール受信者プロファイルの作成や、既存のプロファイルの編集ができます。SiteScope では、電子メール警告の送信に電子メール受信者プロファイルを使用します。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [電子メール プリファレンス] を選択します。[電子メール プリファレンス] ページで、次のいずれかの操作を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規電子メール受信者]  ボタンをクリックします。 ▶ 既存の電子メール受信者プロファイルを選択して [電子メール受信者の編集] ボタン  をクリックします。
重要な情報	<p>SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 790 ページの「電子メール・プリファレンスの概要」 ▶ 791 ページの「[電子メール プリファレンス] ページ」 ▶ 796 ページの「[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	表示されているプロフィールの識別に使用する電子メール受信者プロフィール定義の名前。
詳細	<p>設定プロフィールの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注: ここに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (長くなったため切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ: script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。
電子メールの送信先	<p>警告の送信先の電子メール・アドレス。</p> <p>例: test@mycompany.com</p> <p>複数の電子メール・アドレスは、カンマで区切って入力できます。</p> <p>例: test@mycompany.com, sysadmin@thiscompany.com</p>
無効	<p>設定された電子メール・アドレスへの電子メール警告の送信が停止されます。この電子メール設定が含まれる警告すべてを編集せずに、特定の電子メールを一時的に無効にする場合、このオプションを使用します。</p>

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
テンプレート	電子メール警告設定を定義するテンプレート。設定を定義した後は、1 つの警告がユーザとページャに送信されます。ページャには ShortMail テンプレートを使用します。
スケジュール	電子メールをいつ有効にするかを指定します。ドロップダウン・メニューに設定されたスケジュールから、より厳密なスケジュールを選択することもできます。 標準設定値 ：毎日、全日

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト (グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル) を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[電子メール プリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、電子メール受信者の標準設定値を設定できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [電子メール プリファレンス] を選択します。[電子メール プリファレンス] ページで [標準設定] > [編集] をクリックします。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「 電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集 」権限を付与されたユーザのみが、電子メール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 790 ページの「電子メール・プリファレンスの概要」 ▶ 791 ページの「[電子メール プリファレンス] ページ」 ▶ 793 ページの「[新規電子メール受信者] / [電子メール受信者の編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
電子メール・サーバのドメイン名	SiteScope が電子メール・メッセージの送信時に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。 例 : mail.thiscompany.com メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。
管理者の電子メール・アドレス	SiteScope が状態メッセージを送信する宛先の電子メール・アドレス。 例 : sysadmin@thiscompany.com
毎日の状態	SiteScope は、管理者の電子メール・アドレスに要約した状態メッセージを毎日送信します。この電子メールは、毎日午前 7:07 に生成するようにスケジュール設定されます。送信する電子メールの件名には、「 SiteScope の毎日の状態 」が含まれます。電子メールの内容には、アクティブなモニタとグループの数、該当する SiteScope メイン・ページへの URL リンク、および SiteScope インストールのバージョン番号が含まれます。

UI 要素	説明
SiteScope 開始 / 再開	<p>SiteScope は、再起動するたびに短いメッセージを送信しません。再起動は、モニタ実行の問題を示唆している場合があります。詳細については、1337 ページの「SiteScope サーバの状況」を参照してください。</p> <p>注： SiteScope は 1 日に 1 回自動的に再起動しなくなりました。</p>
送信元電子メール・アドレス	<p>SiteScope で生成されるメールの送信元アドレスとして使用する電子メール・アドレス。電子メール・アドレスを指定すると、SiteScope から送信された電子メールの参照や並べ替えが容易になる場合があります。何も入力しないと、[送信元電子メール アドレス] は、メールの実際の送信元アドレスと同じになります。</p> <p>例： sitescope@mycompany.com</p> <p>注： 使用するメール・サーバが NTLM 認証を使用する場合（後述）、ここで入力する電子メール・アドレスは有効な電子メール・アドレスである必要があります。</p>
バックアップ電子メール・サーバ・ドメイン名	<p>SiteScope がプライマリ・メール・サーバに到達できない場合に使用する SMTP メール・サーバのドメイン名。バックアップ・メール・サーバのドメイン名がわからない場合は、システム管理者に問い合わせてください。</p> <p>例： gateway.mycompany.com。</p>
ログイン	<p>SMTP サーバで要求されるユーザ名。このユーザ名は、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。</p> <p>注： この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>
パスワード	<p>SMTP サーバで要求されるパスワード。このパスワードは、プライマリとバックアップの両方のメール・サーバに使用します。</p> <p>注： この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p>

UI 要素	説明
<p>NTLM 認証</p>	<p>ドロップダウン・リストから、次の NTLM 認証オプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ なし : メール・サーバで NTLM 認証が不要な場合に選択します。 ▶ NTLMv1 : メール・サーバで NTLM バージョン 1 を使用した認証が必要な場合に選択します。 ▶ NTLMv2 : メール・サーバで NTLM バージョン 2 を使用した認証が必要な場合に選択します。 <p>注 : この設定を変更する場合は、SiteScope を再起動する必要があります。</p> <p>標準設定値 : なし</p>
<p>タイムアウト(秒単位)</p>	<p>SMTP サーバからの応答を待機する時間 (秒単位)。タイムアウト期間内にプライマリ・メール・サーバからの応答を受信しなかった場合、SiteScope はバックアップ・メール・サーバの使用に切り替わります。</p> <p>標準設定値 : 60 秒</p>

27

ページャ・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ ページャ・プリファレンスの概要 (800 ページ)

参照情報

- ▶ ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース (801 ページ)

概念

ページャ・プリファレンスの概要

ページャ・プリファレンスは、SiteScope での外部電子ページャ・サービスとの通信に必要な設定を行うために使用します。SiteScope から電子ページャに警告を送信するために使用する標準設定です。

[ページャ プリファレンス] ページには、定義済みのカスタム・ページャ受信者プロファイルが表示されます。これらのプロファイルは、適切な警告定義を編集することで 1 つ以上のページャ警告に関連付けることができます。

ページャ受信者プロファイルは、[新規ページャ受信者] または [ページャ受信者の編集] ページで定義します。推奨ページャ接続オプションは [モデム間接続] です。この接続を使用する場合、メッセージが正常に送信されたことを SiteScope で確認し、通信に関する問題を記述したメッセージを受け取ることができます。別の接続オプションでは、通常はプッシュホン・ダイアルを使用して自動音声応答システムにメッセージを送信します。プッシュホン・ダイアル方式は数字のメッセージに制限され、ページャ・サービスが正常にメッセージを受け取ったことを SiteScope で確認できません。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、801 ページの「[ページャ プリファレンス] ページ」を参照してください。

参照情報

ページャ・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容







- ▶ [ページャ プリファレンス] ページ (801 ページ)
- ▶ [新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス (803 ページ)

[ページャ プリファレンス] ページ

このページは、個別またはグループにページャ警告を送信するために SiteScope が使用する、ページャ受信者プロファイルと設定の定義に使用します。現在定義されているすべてのページャ受信者プロファイルが表示されます。ページャ警告は、電子メールにすぐにアクセスできない可能性のあるシステム管理者に自動通知を送信する場合、または警告エスカレーションを送信するかオフィスにいない可能性のあるサポート担当者に通知する場合に使用できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [ページャ プリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、[ページャ プリファレンス] を作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ ページャ受信者プロファイルが警告アクションから参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除する前に、警告の受信者を変更する必要があります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 800 ページの「ページャ・プリファレンスの概要」 ▶ 803 ページの「[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規ページャ受信者：新しいページャ受信者プロフィールを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、803 ページの「[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>ページャ受信者の編集：ページャ受信者プロフィールを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、803 ページの「[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>ページャ受信者の削除：[ページャプリファレンス] から選択したページャ受信者プロフィールを削除します。</p>
	<p>ページャ受信者のテスト：ページャにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[ページャのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。ページャ・メッセージに追加するプレフィックスを入力できます。メッセージを数字ページャに送信する場合、32 桁以内で入力します。</p>
	<p>すべて選択：表示されたすべてのページャ受信者プロフィールを選択します。</p>
	<p>選択範囲を解除：選択をクリアします。</p>
<p>標準設定</p>	<p>[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 編集：[ページャプリファレンスの標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規ページャ受信者] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、803 ページの「[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ テスト：[ページャのテスト] ダイアログ・ボックスが開き、標準設定のページャにメッセージを送信できるかどうかをテストできます。[メッセージ] ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。ページャ・メッセージに追加するプレフィックスを入力できます。メッセージを数字ページャに送信する場合、32 桁以内で入力します。

UI 要素	説明
名前	新規ページャ受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
詳細	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

[新規ページャ受信者] / [ページャ受信者の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規ページャ受信者プロファイルの作成や、既存のプロファイルの編集ができます。SiteScope では、ページャ警告の送信にページャ受信者プロファイルを使用します。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [ページャ プリファレンス] を選択します。[ページャ プリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規ページャ受信者] ボタン  をクリックするか ▶ または、既存のページャ・プロファイルを選択して [ページャ受信者の編集] ボタン  をクリックします。
重要な情報	<p>SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、[ページャ プリファレンス] を作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 800 ページの「ページャ・プリファレンスの概要」 ▶ 801 ページの「[ページャ プリファレンス] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	新規ページャ受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
モデム・ポート	<p>モデムから SiteScope サーバに接続する通信ポート。Solaris または Linux の SiteScope の場合、モデムのパスとデバイス名を入力します。Microsoft Windows NT/2000 プラットフォームでは、SiteScope は RS-232C タイプのシリアル・ポートと USB モデム・ポートの両方に COM ポート番号を使用します。</p> <p>USB タイプのモデムを使用している場合、SiteScope で USB モデムを使用できるように USB ポートに関連付けられた COM ポートを選択します。USB モデム用の COM ポート番号を確認するには、[設定] > [ネットワークとダイヤルアップ接続] メニューを使用します。目的のモデムを右クリックして、[プロパティ] をクリックします。そのモデムに関連付けられた COM ポート番号がプロパティに表示されます。</p> <p>標準設定値：COM1</p>

UI 要素	説明
接続速度 (ビット/秒)	ドロップダウン・リストからページャ・サービスへの接続に使用するモデムの速度。 標準設定値 : 1200 ビット / 秒
ページャ接続オプション	ページャ・サービスにメッセージを送信するオプション <ul style="list-style-type: none"> ▶ モデム間接続 (推奨) : 英数字ページャを所有し、英数字ページャ・サービスを使用する場合に選択します。 ▶ ダイヤルしてメッセージを入力します : 直通電話番号にダイヤルしてページを送信する場合に選択します。 ▶ ダイヤルし、コマンドを入力してからメッセージを入力します : 直通電話番号を所有し、ページを送信する前にコマンドを入力する必要がある場合に選択します。 ▶ ユーザ定義モデム接続 : ページャに上記のいずれの接続も使用できない場合に選択します。 選択したオプションで必要な情報の詳細については、次の表を参照してください。

ページャ接続オプション

選択したページャ接続オプションで、次の必要な情報を入力します。

UI 要素	説明
モデム番号	ページャ・サービス・モデムに英数字ページを送信する場合に使用する電話番号。
モデムの PIN 番号	英数字ページャの PIN 番号の末尾 7 桁。英数字ページャ・サービスを使用する場合、英数字ページをページャ・サービス・モデムに送信するために使用する電話番号を入力する必要があります。この番号はページャ・サービスにより提供されます。ページャ・サービスでは、この番号を TAP/IXO 番号と呼ぶ場合があります。

UI 要素	説明
電話番号	<p>通常の電話からダイアルする場合と同じ電話番号。外線にダイアルする番号などの、必要に応じて使用する番号も含まれます。番号を見やすくするためにハイフンを使用できます。電話番号の一部を区切るには、カンマを使用します。各カンマで、残りの番号にダイアルする前にモデル・スクリプトによって数秒間一時停止されます。</p> <p>例：オフィスからページャにダイアルするときに外線番号 9 をダイアルする必要がある場合、「9, 555-6789」と入力します。</p>
ページ送信コマンド	<p>タッチ・トーン電話からダイアルする場合と同じページ・コマンド。</p>
ユーザ定義モデム・コマンド	<p>ダイアル先の電話番号、必要に応じた追加の番号、\$message を含む全体のモデム・コマンド。SiteScope によって、各警告に指定したメッセージに \$message が置き換えられます。</p> <p>例：ページャの会社の番号が 123-4567、ページャの PIN が 333-3333、ページャ会社によって各コマンドの後に # キーの入力が指定されている場合、コマンドは次のようになります。ATDT 123-4567,,333-3333#,, \$message#</p> <p>注：UNIX で実行している SiteScope の場合、[Modem Path] ボックスにモデムのデバイス・パスを入力します。Solaris を使用してデバイスのリストを参照するには、ls /dev/term/* コマンドを使用します。</p>
無効	<p>このユーザのページャを含むすべての警告を編集せずに、特定のページャを一時的に無効にします。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
スケジュール	<p>ページャの設定を有効にする日時を指定します。ドロップダウン・リストから、より制限されたスケジュールを選択できます。</p> <p>標準設定値：毎日、全日</p>
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注：このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	<p>SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

28

SNMP プリファレンス

本章の内容

概念

▶ SNMP プリファレンスの概要 (810 ページ)

参照情報

▶ SNMP のユーザ・インタフェース (811 ページ)

概念

SNMP プリファレンスの概要

SNMP プリファレンスは、SiteScope での外部の SNMP ホストまたは管理コンソールとの通信に必要な設定を行うために使用します。これらは、SNMP トラップ警告で使用する標準設定の SNMP パラメータです。

[SNMP プリファレンス] ページには、トラップをホストに送信するための定義済みカスタム SNMP トラップ・プロファイルまたはテンプレートが表示されます。SNMP トラップ・プロファイルは、適切な警告定義を編集することで 1 つ以上の SNMP トラップ警告に関連付けることができます。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、811 ページの「[SNMP プリファレンス] ページ」を参照してください。

参照情報

SNMP のユーザ・インタフェース

本項の内容







- ▶ [SNMP プリファレンス] ページ (811 ページ)
- ▶ [新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス (813 ページ)

[SNMP プリファレンス] ページ

このページでは、管理コンソールにデータを送信するときに SiteScope SNMP トラップ警告によって使用される設定を定義できます。SiteScope では、SiteScope SNMP トラップ警告タイプを使用して、SNMP ベースのネットワーク管理システムと統合します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [SNMP プリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、[SNMP プリファレンス] を作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ SNMP トラップ・プロファイルが警告アクションから参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。SNMP トラップ・プロファイルを削除する前に、警告の SNMP トラップを変更する必要があります。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 810 ページの「SNMP プリファレンスの概要」 ▶ 813 ページの「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規 SNMP トラップ : 新しい SNMP トラップ・プロファイルを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、813 ページの「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SNMP トラップの編集 : SNMP トラップ・プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、813 ページの「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SNMP トラップの削除 : [SNMP プリファレンス] から選択した SNMP トラップ・プロファイルを削除します。
	SNMP トラップのテスト : SNMP トラップにメッセージを送信できるかどうかをテストします。[SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。
	すべて選択 : 表示されたすべての SNMP トラップ・プロファイルを選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
標準設定	<p>[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 編集: [SNMP トラップ プリファレンス標準設定] ダイアログ・ボックスが開き、[新規 SNMP トラップ] ダイアログ・ボックスに表示された標準設定を変更できます。この設定の詳細については、813 ページの「[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ テスト: [SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスが開き、標準設定の SNMP トラップにメッセージを送信できるかどうかをテストできます。[SNMP トラップのテスト] ダイアログ・ボックスにメッセージを入力し、[テスト] をクリックします。 <p>注: SNMP トラップのテストではすべての varbind を含む完全なトラップは送信しません。設定されたトラップ OID とメッセージのみを含む SNMP トラップを送信します。</p>
名前	新規 SNMP トラップ・プロファイルの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。

UI 要素	説明
詳細	プロファイルの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。
ホスト	すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。
ポート	トラップの送信先の SNMP ポート。

[新規 SNMP トラップ] / [SNMP トラップの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規 SNMP トラップ・プロファイルの作成や既存のプロファイルの編集ができます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [SNMP プリファレンス] を選択します。SNMP トラップのプリファレンス・ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規 SNMP トラップ] ボタン  をクリックするか ▶ または、既存の SNMP トラップ・プロファイルを選択して [SNMP トラップの編集] ボタン  をクリックします。
重要な情報	<p>SiteScope の管理者、または「電子メール、ページャ、および SNMP のプリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、[SNMP プリファレンス] を作成または変更できます。このトピックの詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 810 ページの「SNMP プリファレンスの概要」 ▶ 811 ページの「[SNMP プリファレンス] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	新規 SNMP 受信者の作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注: このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。
送信先ホスト	<p>すべての SNMP トラップ・メッセージを受信するマシンのドメイン名または IP アドレス。このマシンでトラップ・メッセージを受信するには、SNMP コンソールが実行されている必要があります。</p> <p>例 : snmp.mydomain.com または 206.168.191.20。</p>
SNMP ポート	<p>トラップの送信先の SNMP ポート。</p> <p>標準設定値 : 162</p>
SNMP コミュニティ	<p>トラップの送信に使用される標準設定の SNMP コミュニティ名。コミュニティ文字列は、SNMP 管理コンソールで使用されるコミュニティ文字列と一致する必要があります。</p> <p>標準設定値 : public</p>

UI 要素	説明
SNMP トラップ ID	<p>送信するトラップのタイプを選択します。共通する条件に複数の定義済み ID タイプがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 一般 SNMP トラップ ID : ドロップダウン・リストから一般 SNMP タイプを選択します。 ▶ 企業固有 SNMP トラップ ID : 企業固有の SNMP ID タイプを使用するには、ボックスに特定のトラップ・タイプの番号を入力します。 <p>注 : SiteScope と NNMi と統合する場合は、[企業固有 SNMP トラップ ID] を選択し、1 を入力する必要があります。SiteScope は各 SNMP バージョンで異なる通知 ID を送信します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ SNMP V1 :.1.3.6.1.4.1.11.15.1.4 ▶ SNMP V2 :.1.3.6.1.4.1.11.15.1.4.1
SNMP トラップのバージョン	<p>使用する標準設定の SNMP プロトコル・バージョン番号。現在、SNMP V1 および V2c がサポートされています。</p> <p>標準設定値 : V1</p>
SNMP オブジェクト ID	<p>コンソールに対し、メッセージを送信したオブジェクトを識別します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 事前設定 SNMP オブジェクト ID : ドロップダウン・リストから、いずれかの定義済みオブジェクトを選択します。 ▶ その他の SNMP オブジェクト ID : 別のオブジェクト ID を使用するには、ボックスにほかのオブジェクト ID を入力します。 <p>注 : SiteScope を NNMi と統合する場合は、[事前設定 SNMP オブジェクト ID] を選択し、リストから [HP SiteScope イベント] を選択します。</p>
タイムアウト(ミリ秒)	<p>SMTP トラップ要求 (再試行を含む) の完了までの待機時間 (ミリ秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 500</p>
再試行	<p>SiteScope が SNMP トラップの GET 要求を失敗とみなすまで各 SNMP GET 要求を再試行する回数。</p> <p>標準設定値 : 2</p>

UI 要素	説明
システム OID を SNMP トラップにプレフィックスとして追加します	標準設定のシステム OID (1.3.6.1.2.1) をすべての SNMP トラップ OID にプレフィックスとして追加します。プレフィックスを使用しない場合は、このチェック・ボックスをクリアします。 標準設定値 : 選択されている
SNMP ソース	SNMP トラップ・ソース (SiteScope サーバまたは監視対象サーバ)。 標準設定値 : 監視対象ホスト

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト (グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル) を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

29

共通イベント・マッピング

本章の内容

概念

- ▶ 共通イベント・マッピングの概要 (818 ページ)

タスク

- ▶ 共通イベント・マッピングの設定方法 (820 ページ)

参照情報

- ▶ 共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース (822 ページ)

概念

共通イベント・マッピングの概要

イベントが Operations Manager (HPOM) または BSM 内のオペレーション管理に直接送信されるように SiteScope を設定できます。これを行うには、[共通イベントマッピング] を使用して、SiteScope ランタイム・データと、HPOM または BSM ゲートウェイ・サーバに送信されるイベント属性値間のイベント・マッピング・インスタンスを作成します。

イベントのトリガ条件に一致すると、イベント・テンプレートをを使用して、SiteScope ランタイム・データがイベント属性にマッピングされます。これらの属性にはイベント・サブシステムに渡される値があり、この値を使用して対応するイベントが作成されます (たとえば、テンプレートによってランタイム・データが HPOM / BSM のイベントに変換されます)。その後、イベントが HPOM または BSM に送信されます。

このためには、モニタや警告に関連付けられている標準設定のイベント・マッピングを使用するか、別のイベント・マッピング (存在する場合) を選択します。または、[共通イベントマッピング] で新しいイベント・マッピングを作成することもできます。あるいは、警告の場合、その警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用できます。イベント・マッピングの作成の詳細については、820 ページの「共通イベント・マッピングの設定方法」を参照してください。

イベント・マッピングのユーザ・インタフェースの詳細については、822 ページの「[イベントマッピング] ページ」を参照してください。

イベント・マッピングの属性プロパティの詳細については、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

イベントが Operations Manager サーバに直接レポートされるように SiteScope を設定する詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。

ヒント : SiteScope のバージョン 11.00 以前および BSM のバージョン 9.00 以前からアップグレードする場合は、すべての既存のイベント統合を無効にし、新しい統合を設定することをお勧めします。アップグレード後に統合が機能しても、イベントは BSM イベント・ブラウザでのみ使用されます。

タスク

共通イベント・マッピングの設定方法

このタスクでは、[共通イベント マッピング] を使用してモニタと警告のイベント・マッピングを設定する方法について説明します。これは、SiteScope ランタイム・データと送信されるイベントの属性値との間のマッピングです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 820 ページの「前提条件」
- ▶ 821 ページの「警告またはモニタ・インスタンスの設定」
- ▶ 821 ページの「警告またはモニタ・インスタンスのイベント・マッピングの設定」
- ▶ 821 ページの「結果」

1 前提条件

- ▶ イベント・マッピングを作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**共通イベント・マッピングの編集**」権限を付与されたユーザである必要があります。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
- ▶ 警告またはモニタ・インスタンスの設定時にイベント・マッピングを選択するには、HP Operations Agent をインストールして HPOM または BSM サーバに接続し、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス（[プリファレンス] > [統合プリファレンス] > [HP Operations Manager 統合]）でイベント統合を有効にする必要があります。タスクの詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。

2 警告またはモニタ・インスタンスの設定

トリガ時にイベント・システムの関連するイベントを作成する、警告またはモニタ・インスタンスを設定します。

SiteScope 警告の作成の詳細については、1443 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

モニタ・インスタンスの作成の詳細については、414 ページの「モニタのデプロイ方法」を参照してください。

3 警告またはモニタ・インスタンスのイベント・マッピングの設定

イベント・マッピングを設定して、警告またはモニタ・インスタンスに対応するイベント属性にマッピングします。警告またはモニタのタイプごとに複数のマッピングを作成できます。

各警告またはモニタ・インスタンスで、既存のイベント・マッピングを選択することも、[共通イベントマッピング] で新しいイベント・マッピングを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、824 ページの「[新規イベントマッピング] / [イベントマッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注: イベント・マッピングのリストは、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックスの [HP Operations Manager 統合メイン設定] 表示枠で [イベント送信の有効化] が選択されている場合のみアクティブになります。

4 結果

トリガされる警告またはモニタの測定値状態の変更に対応するイベントは、HPOM Console で表示できるほか、イベント管理ファウンデーション・ライセンスを保有していれば BSM のオペレーション管理でも表示できます。BSM のインストールにオペレーション管理が含まれていない場合は、CI のステータスに影響するイベントをサービス状況の状況インジケータを使って確認できます。

参照情報

共通イベント・マッピングのユーザ・インタフェース

本項の内容






- ▶ [イベント マッピング] ページ (822 ページ)
- ▶ [新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス (824 ページ)

[イベント マッピング] ページ

このページは、イベントのマッピングと設定を定義するために使用されます。このページでは、SiteScope ランタイム・データと送信するイベントの属性値間のマッピングを設定できます。



アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [共通イベント マッピング] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「共通イベント・マッピングの編集」権限を付与されたユーザのみが、共通イベント・マッピングを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ 共通イベント・マッピングがモニタまたは警告アクションで参照されている場合、その共通イベント・マッピングは削除できません。マッピングを削除するには、モニタまたは警告で参照されているイベント・マッピングを変更する必要があります。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」 ▶ 820 ページの「共通イベント・マッピングの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 818 ページの「共通イベント・マッピングの概要」 ▶ 824 ページの「[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規イベント・マッピング : 新規イベント・マッピングが作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、824 ページの「[新規イベント マッピング]/[イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	イベント・マッピングの編集 : イベント・マッピングの編集ができるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、824 ページの「[新規イベント マッピング]/[イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	イベント・マッピングの削除 : 選択したイベント・マッピングが[共通イベント マッピング]のリストから削除されます。
	すべて選択 : 表示されているイベントがすべて選択されます。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
標準設定	<p>[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 標準設定モニター・イベント・マッピングの編集: [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、標準設定のモニターのイベント・マッピング設定を変更できます。この設定の詳細については、824 ページの「[新規イベント マッピング]/[イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ 標準設定警告イベント・マッピングの編集: [イベント・マッピングの編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このダイアログ・ボックスでは、標準設定の警告のイベント・マッピング設定を変更できます。この設定の詳細については、824 ページの「[新規イベント マッピング]/[イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
名前	新規イベントを作成する場合に設定プロファイルに割り当てる名前の文字列。
詳細	イベントの作成時または編集時に割り当てられたマッピングの詳細。

[新規イベント マッピング] / [イベント マッピングの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しい共通イベント・マッピングの作成や既存のマッピングの編集ができます。これらは、SiteScope ランタイム・データとイベントを送信するために使用される属性値間のマッピングになります。

<p>アクセス方法</p>	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [共通イベント マッピング] を選択します。[共通イベント マッピング] ページで、[新規イベント マッピング] ボタン  をクリックするか、既存のイベントを選択して [イベント マッピングの編集] ボタン  をクリックします。</p> <p>次の場合にもこのダイアログ・ボックスにアクセスします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [警告] タブ > [新規警告] / [警告の編集] > [HP Operations Manager 統合設定] > [イベント マッピング] から警告を設定する場合。 ▶ モニタの [プロパティ] タブ > [HP 統合設定] > [HP Operations Manager 統合設定] > [HP Operations Manager 統合メイン設定] からモニタ・インスタンスを設定する場合。
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「共通イベント・マッピングの編集」権限を付与されたユーザのみが、共通イベント・マッピングを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ 共通イベント・マッピングがモニタまたは警告アクションで参照されている場合、その共通イベント・マッピングは削除できません。マッピングを削除するには、モニタまたは警告で参照されているイベント・マッピングを変更する必要があります。 ▶ 長い説明を入力した場合や、共通イベント・マッピングのフィールドを変更した結果、フィールド名が長くなりすぎた場合には、SiteScope でイベントを送信できないことがあります。
<p>関連タスク</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」 ▶ 820 ページの「共通イベント・マッピングの設定方法」
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 818 ページの「共通イベント・マッピングの概要」 ▶ 822 ページの「[イベント マッピング] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	共通イベントの識別に使用する名前。
詳細	共通イベントの詳細。

[共通イベント モデル設定] - [一般] タブ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
全般	
タイトル	<p>イベントで表示される項目を説明するわかりやすいテキスト。タイトルには、到達したしきい値 (またはほかのトリガ条件) や現在の値の情報が含まれている必要があります。</p> <p>標準設定値 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 状態が変更された測定値の場合 : Metric '<<metric>>' changed status from '<<oldStatus>>' to '<<newStatus>>' ▶ 警告の場合 : Alert '<<alertName>>' was fired on monitor '<<fullMonitorName>>' status change <p>ヒント : 通常、テキストはイベント・ブラウザに 1 行で表示されるため、最も関連する情報を最初に配置することをお勧めします。</p>
詳細	<p>イベントを説明する追加情報。</p> <p>標準設定値 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 状態が変更された測定値の場合 : Metric '<<metric>>' crossed '<<thresholdCrossed>>' with value '<<metricValue>>' ▶ 警告の場合 : Monitor '<<fullMonitorName>>' changed status from '<<oldStatus>>' to '<<newStatus>>'

UI 要素	説明
<p>重大度</p>	<p>イベントに関連する項目の重大度。重大度レベルは、「不明」、「正常域」、「警告」、「軽微」、「重大」、または「致命的」です。</p> <p>標準設定値 : <<severity>>。<<severity>> 属性は、選択されたモニタ測定値の [しきい値の設定] の [インジケータ状態および重大度] フィールドに指定される重大度に置き換わります。</p>
<p>カテゴリ</p>	<p>モニタ・タイプごとにイベントを編成およびグループ化するために使用される値。</p> <p>標準設定値 : <<monitorType>></p> <p>例 : データベース, アプリケーション, J2EE</p>
<p>サブカテゴリ</p>	<p>同じのカテゴリを持つイベントを編成およびグループ化するために使用される値。</p> <p>標準設定値 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 状態が変更された測定値の場合 : <<metric>> ▶ 警告の場合 : <<fullMonitorName>> <p>例 : Oracle</p>
<p>ログのみ</p>	<p>[True] を選択すると、履歴イベント・ブラウザに直接向かうイベントを、閉じたイベントとして送信できるようになります。このようなイベントは完全に処理されますが、[Life Cycle State] が [close from the beginning] に設定されます。</p> <p>典型的な例として、インジケータが通常または正常な状態にリセットされるイベントや、前の問題が解消されたことを示すイベント（問題が別のイベントにレポートされた）が挙げられます。</p> <p>[True for normal severity] を選択すると、SiteScope から HPOM に転送されるすべてのメッセージが、その重大度が正常域の場合、([アクティブ] メッセージ・ブラウザではなく) [確認済み] メッセージ・ブラウザに送信されます。これにより、[アクティブ] メッセージ・ブラウザが正常域の重大度メッセージで不必要に乱雑にならなくなります。</p> <p>標準設定値 : False</p>

UI 要素	説明
インジケータ	<p>イベントとインジケータ間のリンク。これにより、イベントが送信されるとインジケータの情報が更新されるようになります。</p> <p>標準設定値：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 状態が変更された測定値の場合： <<etiType>>:<<etiValue>>:<<metricValue>> ▶ 警告の場合：<<etiType>>:<<etiValue>> <p>測定値の状態の変更の例： CPU Load:High:90</p> <p>注：インジケータを更新する場合、このフィールドは必須です。この属性のテンプレート値の変更はお勧めできません。</p>
関連処理	
キー	<p>発生したイベントのタイプを表す一意の文字列。管理対象の環境で両方のイベントが同じ状況を表している場合、2 つのイベントのキーが同じになることがあります。重複イベントの数（[Number of Duplicates] の数）が増加すると重複イベントは破棄されます。</p> <p>標準設定値：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 状態が変更された測定値の場合： <Host>:<Group>:<Monitor>:<Metric>:<etiValue> ▶ 警告の場合： <<siteScopeHost>>:<<fullgroupid>>:<<monitorName>>:<<alertName>>:<<etiValue>> <p>測定値の状態の変更の例：</p> <p>labmachine1:OMEventIntegration:CPU Utilization on SiteScope Server:utilization:Good</p>
終了キー条件を送信	<p>クローズ・キー・パターンがイベント・サブシステムで評価できるようになります。選択する場合、次の [キーパターンを閉じる] ボックスにパターンを入力します。</p> <p>標準設定値： 選択されている</p>

UI 要素	説明
<p>キー・パターンを閉じる</p>	<p>(このボックスは, [終了キー条件を送信] を選択した場合にのみ使用できます。) 送信するイベントによって, この式に一致するキー属性を持つすべてのイベントが自動的に閉じるようになります。このフィールドの値は [Key] フィールドと同じにすることをお勧めします。</p> <p>注: SiteScope のイベント統合ポリシーでは, クローズ・キー・パターンの最後に必ず "<*>" が追加されます。"<" および ">" 記号はログ・ファイル・ポリシーでは解析できないため, このボックスでは使用できません。</p> <p>標準設定値: <<siteScopeHost>>:<<fullgroupid>>:<<monitorName>>:<<metric>></p> <p>例: labmachine1:OMEventIntegration:CPU Utilization on SiteScope Server:utilization<*></p>
<p>詳細パラメータ</p>	
<p>CI ヒント</p>	<p>イベントに関連する CI の情報。この属性は, イベント処理で正しい関連 CI (関連 CI の RTSM ID) を検出できるようにヒントを提供するために使用されます。</p> <p>標準設定値: <<ciHint>>。このフィールドの値は, SiteScope が BSM と HPOM のどちらに接続されているかによって異なります。このフィールドは編集できません。</p>
<p>ホスト・ヒント</p>	<p>イベントをトリガされたモニタによって監視されているターゲット・ホスト。値は, HPOM 内のレガシ・ノード属性に変換されます。HPOM 内にこのノードが存在しない場合, イベントは消失します。</p> <p>標準設定値: <<targetHost>></p> <p>例:</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ IPv4: 15.15.12.13 ▶ DNS: host1.hp.com



UI 要素	説明
ソース・ヒントを生成中	<p>監視アプリケーションと、対応するプローブ / エージェント (イベントに作成に関与) の情報。</p> <p>標準設定値 : SiteScope@@<<siteScopeHost>></p> <p>例 : SiteScope@@host1.hp.com</p>
属性	
< 属性のリスト >	<p>使用可能な属性変数のリストが表示されます。属性を追加するには、選択したテキスト・ボックスに [Attributes] リストの属性をドラッグするか、選択した属性をコピーするセルを選択し、Ctrl キーを押しながら I キーをクリックします。</p> <p>利用可能な属性変数の詳細については、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。</p>

[共通イベント モデル設定] - [カスタム属性] タブ

このタブを使用して、カスタム属性を追加します。カスタム属性を使用して、ほかの共通イベント属性にないイベントの追加情報を提供できます。

重要な情報	<p>定義する属性名が一意であることと、出荷時の属性のリストに存在していないことを確認してください。</p> <p>カスタム属性は、キーと値で構成されます (両方とも文字列です)。値には任意の文字列を使用できます。この値は、ほかの値のように共通イベント・マッピングで使用されます。</p> <p>注 : サポートされるのは、事前定義されたカスタム・マッピング属性だけです。カスタム属性名 (cma1 ~ cma5) は変更できず、新しいカスタム属性名を追加することもできません。</p>
--------------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>イベントの新しいカスタム属性を作成できるようになります。各イベントのカスタム属性の数に制限はありません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 新規のキー：テーブルに新しい行が追加され、属性の名前と値を追加できるようになります。 ▶ 既知のキー：既知のキーを選択できるサブメニューがオプションとして開きます。関連するキーを選択できます。[Name/Value] テーブルで新しい行が開き、選択したキーの名前が [Name] 列に表示されます。対応する [Value] 列にキーの値を入力できます。 <p>注：現在サポートされているのは、事前定義されたカスタム・マッピング属性だけです。カスタム属性名 (cma1 ~ cma5) は変更できず、新しいカスタム属性名を追加することもできません。</p>
	<p>カスタム属性の削除：選択したカスタム属性がテーブルから削除されます。</p>
<p>Name and Value</p>	<p>各イベントのカスタム属性の数に制限はありません。カスタム属性を使用して、ほかの共通イベント属性にない、またはほかの属性に含まれていないイベントの追加情報を表示できます。各カスタム属性は、[Name] と [Value] のペアです。[Name] フィールドに属性の名前を入力し、[Value] フィールドに属性の値を入力します。</p> <p>この機能は、複数のカスタマが製品の 1 つのインスタンスを使用している環境を管理する場合に使用できます。1 つのカスタム属性オブジェクトで複数のカスタマを処理できます。</p> <p>例：名前 = "cma1" ; 値 = "XYZ Company"</p>

UI 要素	説明
属性	
< 属性のリスト >	<p>使用可能な属性変数のリストが表示されます。属性を追加するには、選択したボックスに [Attributes] リストの属性をドラッグするか、選択した属性をコピーするセルを選択し、Ctrl キーを押しながら I キーをクリックします。</p> <p>利用可能な属性変数の詳細については、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。</p>
サービス ID	<p>モニタのサービス ID の値を入力して、SiteScope イベントから HPOM に送信されるサービス名をカスタマイズできます。これは、SiteScope モニタが HPOM サービス名と関連する場合に便利です。</p> <p>標準設定値 : <<monitorServiceId>></p>

30

スケジュール・プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ スケジュール・プリファレンスの概要 (834 ページ)

参照情報

- ▶ スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース (837 ページ)

概念

スケジュール・プリファレンスの概要

SiteScope モニタ、警告、レポートは、標準設定で 1 日 24 時間、週 7 日、1 年 365 日有効になっています。モニタが有効な間は、個別のモニタ設定で指定した更新頻度に従ってモニタが実行されます。たとえば、30 秒ごとにモニタを実行するように設定している場合、SiteScope によって終日 30 秒ごとにモニタの実行が試みられます。SiteScope がエラー状態を検出すると、時刻に関係なくモニタに関連付けられた警告がトリガされます。

場合によっては、単一イベントまたは特定の時刻に対応する特定の SiteScope アクションを有効にすると便利です。たとえば、サーバの負荷が一般的に軽い場合に、1 日 1 回のみリンク・チェック・モニタを実行するようなタイプのスケジュールをモニタに使用できます。このようなスケジュールを実行するには、時間指定スケジュールを使用します。

モニタの対象のサーバおよびシステムを担当する個人またはグループのスケジュールに基づいて、特定の SiteScope アクションを無効にすることもできます。定義した期間に従ってモニタを有効または無効にするように SiteScope に指示するには、範囲スケジュールを使用します。

本項の内容

- ▶ 835 ページの「時間指定スケジュール」
- ▶ 836 ページの「範囲スケジュール」

時間指定スケジュール

時間指定スケジュールでは、モニタを週単位で実行する特定の時間を設定できます。時間指定スケジュールは週の終わりにリセットされ、毎週繰り返されます。時間指定スケジュールは、スケジュールで指定した各時間に 1 回だけ実行するモニタをトリガします。

時間指定スケジュールは、モニタ・インスタンスに明示的に関連付けられるまで非アクティブです。時間指定スケジュールをモニタに関連付けるには、スケジュールを設定するモニタの[**モニタの実行設定**]表示枠の[**モニタのスケジュール**]フィールドを使用します。

注：モニタが警告に関連付けられる方法によって、時間指定スケジュールが間接的に警告に関連付けられます。時間指定スケジュールで無効にしたモニタに関連付けられている警告は、そのモニタが無効な間は実質的に使用不能になります。ただし、警告が同じスケジュールで制御されないほかのモニタに関連付けられている場合、そのモニタがエラー状態を報告すると警告はトリガされます。

時間指定スケジュールのプリファレンスの設定の詳細については、837 ページの「[時間指定スケジュール] ページ」を参照してください。

範囲スケジュール

範囲スケジュールを使用して、SiteScope で特定のモニタを有効または無効にする時間範囲を指定できます。モニタに有効な時間範囲を指定（そのモニタの「**モニタの実行設定**」表示枠の「**モニタのスケジュール**」フィールドを使用）した場合、SiteScope ではその時間範囲内のモニタのみ実行します。たとえば、月曜日から金曜日の午前 8 時～午後 9 時の範囲を作成した場合、その範囲スケジュールが関連付けられたモニタは、その時間内にのみ実行されます。

範囲スケジュールは、複数の管理者が呼び出しに応じる場合、それぞれの勤務シフトの時間に実行するモニタに異なるページャ警告を関連付けるために一般的に使用されます。スケジュールによって、個人の勤務スケジュールに合わない時間帯にページャ警告を送信することを避けられます。

範囲スケジュールのプリファレンスは、モニタ・インスタンスに明示的に関連付けられるまでは非アクティブです。範囲スケジュールのプリファレンスをモニタに関連付けるには、モニタの設定ページの「**モニタの実行設定**」表示枠を使用します。

注：モニタが警告に関連付けられる方法によって、範囲スケジュールが間接的に警告に関連付けられます。範囲スケジュールで無効にしたモニタに関連付けられている警告は、そのモニタが無効な間は実質的に使用不能になります。ただし、警告が同じスケジュールで制御されないほかのモニタに関連付けられている場合、そのモニタがエラー状態を報告すると警告はトリガされます。

範囲スケジュールのプリファレンスの設定の詳細については、839 ページの「**範囲スケジュールのユーザ・ページ**」を参照してください。

参照情報


スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [時間指定スケジュール] ページ (837 ページ)
- ▶ 範囲スケジュールのユーザ・ページ (839 ページ)

[時間指定スケジュール] ページ

このページは、SiteScope モニタおよび警告の操作を特定の時間でのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。

アクセス方法	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [スケジュール プリファレンス] を選択します。[スケジュール プリファレンス] ツールバーで [新規スケジュール] ボタン  をクリックし、[新規時間指定スケジュール] を選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「スケジュール・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、スケジュール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ 時間指定スケジュール・プロファイルが警告アクション、レポート、モニタ、モニタしきい値から参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。
関連情報	<p>834 ページの「スケジュール・プリファレンスの概要」</p>

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	時間指定スケジュールの名前。この名前は、製品の表示での時間指定スケジュールの識別に使用されます。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注: このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

時間指定スケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
< 曜日 >	<p>曜日の横にあるボックス内の、モニタを実行する時間。時間指定スケジュールの時間の値は、それぞれの標準日の 24 時間以内に制限されています。1 日に複数の時間を入力するには、時間をカンマ (,) で区切ります。</p> <p>例 : 01,02:30,23:30 では、午前 1:00、午前 2:30、午後 11:30 にモニタを実行します。</p>


タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ]ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

範囲スケジュールのユーザ・ページ

このページは、SiteScope モニタおよび警告の操作を特定の時間範囲内でのみ実行するようにカスタマイズするために使用します。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [スケジュール プリファレンス] を選択します。[スケジュール プリファレンス] ツールバーで [新規スケジュール] ボタン  をクリックし、[新規時間範囲スケジュール] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「スケジュール・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、スケジュール・プリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ 範囲スケジュール・プロファイルが警告アクション、レポート、モニタ、モニタしきい値から参照されている場合、そのプロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。
関連情報	834 ページの「スケジュール・プリファレンスの概要」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	範囲スケジュールの名前。
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注: このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

範囲スケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
< 曜日 >	<p>モニタを実行する日と時間。範囲スケジュールの時間の値は、それぞれの標準日の 24 時間以内に制限されています。[有効] を選択すると、指定した時間範囲内でのみモニタが実行され、[無効] を選択すると、適用可能な日の指定した時間範囲外のすべての時間でモニタを実行します。</p> <p>注: 範囲スケジュールには 24 時間の形式のみ使用します。</p> <p>例: 木曜日の午後 6:00 から翌朝の午前 8:00 までモニタを無効にするには、木曜日の [開始] に「18」、[終了] に「24」を入力し、金曜日の [開始] に「0」、[終了] に「8」を入力します。木曜日のスケジュールで [開始] に「18」、[終了] に「8」を入力した場合、スケジュールは無効になります。</p> <p>1 日に複数の時間を入力するには、時間をカンマ (,) で区切ります。たとえば、午前 2 時～午前 3 時と午前 7 時～午前 8 時に無効にするには、[開始] ボックスに「2:00,7:00」、[終了] ボックスに「3:00,8:00。」と入力します。</p> <p>標準設定値: 有効(時間の値の指定なし) 詳細については、次の表を参照してください。</p>

曜日

設定の有効化 (有効 / 無効)	表示期間 (開始 / 終了)	スケジュールの効果
有効	[開始] および [終了] 時間の値が指定済み	[開始] および [終了] の時間範囲内でのみモニタが実行されます。
有効	(時間の値の指定なし)	適用可能な日のすべての時間でモニタが実行されます。これが 24 時間稼働の標準設定です。

設定の有効化 (有効 / 無効)	表示期間 (開始 / 終了)	スケジュールの効果
無効	[開始] および [終了] 時間の値が指定済み	適用可能な日の [開始] および [終了] の時間範囲外のすべての時間でモニタが実行されます。
無効	(時間の値の指定なし)	適用可能な日のすべての時間でモニタが無効になります。

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します (ラベルのない要素は山括弧内に表示されます)。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト (グループ, モニタ, リモート・サーバ, テンプレート, プリファレンス・プロファイル) を検索およびフィルタするために, キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合, このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され, 必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については, 118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き, 新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については, 129 ページの「 [新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

31

ユーザ管理プリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ ユーザ管理プリファレンスの概要 (844 ページ)
- ▶ LDAP 認証と承認 (849 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法 (851 ページ)
- ▶ SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法 (853 ページ)
- ▶ LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法 (856 ページ)

参照情報

- ▶ パスワード要件パラメータ (861 ページ)
- ▶ ユーザ管理のユーザ・インタフェース (862 ページ)

概念

ユーザ管理プリファレンスの概要

注： ユーザ管理プリファレンスは、SiteScope に直接アクセスしているユーザのみが使用でき、BSM の SAM を使用して SiteScope にアクセスしているユーザは使用できません。SiteScope の権限と BSM との相互関係の詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリにある『システム可用性管理の使用』の「SiteScope へのアクセスと権限モデルの作成」を参照してください。

SiteScope ユーザ・アカウントは [ユーザ管理プリファレンス] ページで管理します。このページでは、SiteScope へのアクセスが許可されているユーザを管理できます。ユーザ管理プリファレンスの設定の詳細については、862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」を参照してください。

クライアント・サーバ・ベースのアーキテクチャとして、複数のユーザが単一の SiteScope ユーザ・プロファイルに同時にアクセスできます。さまざまな対象者に異なる表示および編集権限を提供する複数の SiteScope ユーザ・アカウントを定義できます。たとえば、モニタの状態とレポートの表示を可能にし、モニタ設定または警告の追加や編集はできないようにするユーザ・プロファイルを作成できます。

ユーザ・プロファイルによって、SiteScope へのアクセスは正しいユーザ名とパスワードを入力したユーザに制限されます。必要に応じて、LDAP データベースにクエリが送信されユーザ認証が処理されることもあります。これによって、セントラル・リポジトリに全 SiteScope ユーザの認証情報 (ユーザ名とパスワード) を保管して、LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証することによって、外部の LDAP サーバからユーザを管理できます。詳細については、849 ページの「LDAP 認証と承認」を参照してください。

ユーザ・プロフィールには、次の 2 つの主要コンポーネントがあります。

- ▶ ユーザ認証情報とアクセス権限
- ▶ アクション権限

該当するユーザ・プロフィール・コンテナで各ユーザ・プロフィールにこれらの設定を指定します。

SiteScope ユーザ・プロフィールの作成の詳細については、851 ページの「SiteScope ユーザ・プロフィールの作成方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 845 ページの「ユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプ」
- ▶ 847 ページの「ユーザ権限」
- ▶ 848 ページの「ユーザ・アカウントに関する注意事項」

ユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプ

SiteScope は、次のユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプを提供します。

ユーザ・タイプ:

- ▶ **管理者**: SiteScope には標準で 1 人の管理者が設定されます。管理者は、SiteScope ですべてを表示および変更できます。[ユーザ管理プリファレンス] ページでほかのユーザの作成やユーザ・プロフィールの変更が許可されているなど、その他にも管理者には特別なプロパティがあります。管理者アカウントは、無効にすることも削除することもできません。
- ▶ **パワー・ユーザ (スーパー・ユーザ)**: これはユーザ管理権限が付与された正規ユーザです。パワー・ユーザは、管理者以外のユーザを作成、編集、削除できます。自分のアカウントも編集できますが、削除はできません。管理者とパワー・ユーザは、いずれもパワー・ユーザを作成できます。パワー・ユーザは複数存在する場合があります。このユーザ・タイプを有効化する方法の詳細については、871 ページの「権限」を参照してください。

- ▶ **正規ユーザ**：正規ユーザは、自分自身を含め、どのユーザも作成、削除、編集できません。管理者またはパワー・ユーザが正規ユーザに定義したすべての権限があります。標準設定で、正規ユーザには（[**ユーザ管理プリファレンス**]にある）「**ユーザ・プリファレンスの編集**」以外のすべての権限が付与されます。そのため、ユーザが表示できるのは、自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループに制限されます。正規ユーザは、ほかのユーザの設定や権限を表示または編集できません。

標準設定では、SiteScope は HPOM イベントからのドリルダウンに使用する**統合ビューア**・ユーザを提供します。これは、表示権限と、グループとモニタをリフレッシュする権限が与えられた正規ユーザです。詳細については、318 ページの「**ディスカバリ・スクリプトと HPOM イベントを表示するためのドリル・ダウン・ユーザ**」を参照してください。

ユーザ・ロール・タイプ：外部の LDAP サーバを使用する時に SiteScope ユーザのグループを管理するために使用されます。

- ▶ **スーパー・ユーザ・ロール**：これはユーザ管理権限（[**ユーザ プリファレンスの編集**]）が付与された正規ユーザ・ロールです。このタイプのユーザは、管理者以外のユーザを作成、編集、削除できます。自分のユーザ・ロールも編集できますが、削除できません。管理者とパワー・ユーザは、いずれもスーパー・ユーザ・ロールを作成できます。スーパー・ユーザ・ロールは複数存在する場合があります。
- ▶ **正規ユーザ・ロール**：このタイプのユーザは、自分自身を含め、どのユーザも作成、削除、編集できません。管理者またはパワー・ユーザが正規ユーザに定義したすべての権限があります。標準設定で、正規ユーザ・ロールには「**ユーザ・プリファレンスの編集**」（[**ユーザ管理プリファレンス**]の下にある）以外のすべての権限が付与されます。そのため、ユーザが表示できるのは、自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループに制限されます。正規ユーザ・ロールは、ほかのユーザの設定や権限を表示または編集できません。正規ユーザ・ロールは複数存在する場合があります。

ユーザ・ロール・タイプを有効化する方法の詳細については、853 ページの「**SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法**」を参照してください。

LDAP 認証の詳細については、849 ページの「**LDAP 認証と承認**」を参照してください。

ユーザ権限

SiteScope ユーザ・アカウントを設定するときに、SiteScope の管理者またはパワー・ユーザは、さまざまなユーザに必要な権限を設定できます。権限により、ユーザがアクセスできる SiteScope の領域が制限され、SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、警告、レポート、プリファレンス、リモート・サーバ、テンプレート、ダッシュボードなど）に対して実行できるアクションのタイプが制御されます。

注：標準設定で、正規ユーザは自分のユーザ・プロパティおよび権限が付与されているルート・グループのみを表示できます。正規ユーザに「**ユーザ・プリファレンスの編集**」権限が付与されている場合（その結果、このユーザはパワー・ユーザになります）、ユーザは自分の設定と権限の編集、およびほかのユーザの設定と権限の作成および変更ができます。

SiteScope ではユーザ権限が拡張されました。各プリファレンス・タイプに特定の表示、編集、テスト権限があり、リモート・サーバには表示、編集、テスト権限があります。これによって、管理者またはパワー・ユーザは、選択したユーザのアクセスを特定のプリファレンス・タイプおよびリモート・サーバ・プロパティに制限できます。ユーザに特定のプリファレンスの表示権限がない場合、そのプリファレンスのタブは使用できません。

特定の権限と権限の間に依存関係があることを理解しておくことは、アクション・タイプの権限を選択する場合に重要です。編集権限とテスト権限は、常に対応する表示権限に依存します。たとえば、「**リモート・サーバを編集**」権限または「**リモート・サーバのテスト**」権限を選択する場合、「**リモート・サーバを表示**」権限が自動的に選択されます。反対に、「**リモート・サーバを表示**」権限をクリアすると、「**リモート・サーバを編集**」権限と「**リモート・サーバのテスト**」が自動的にクリアされます。

ユーザ権限は、[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスの「**権限**」表示枠で設定します。SiteScope ユーザ権限の詳細については、871 ページの「権限」を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ SiteScope のユーザ・プリファレンス権限は、SiteScope で Business Availability Center バージョン 8.00 以前にレポートされる場合、SAM 管理ではサポートされません。
- ▶ SiteScope の 10.10 以前のバージョンからアップグレードすると、権限値は次のように判断されます。
 - ▶ すべてのプリファレンス・タイプに「<プリファレンス・タイプ>の表示」権限が標準設定で選択される（SiteScope の以前のバージョンでは対応するプリファレンス権限がなかったため）。
 - ▶ すべてのプリファレンス・タイプの「<プリファレンス・タイプ>の編集」権限は、SiteScope の以前のバージョンの「プリファレンスの編集」権限に従って判断される。
 - ▶ すべてのプリファレンス・タイプの「<プリファレンス・タイプ>のテスト」権限は、SiteScope の以前のバージョンの「プリファレンスのテスト」権限に従って判断される。

ユーザ・アカウントに関する注意事項

- ▶ 管理者アカウントは、SiteScope へのアクセス時に使用される標準設定のアカウントです。つまり、SiteScope が実行されているサーバ・アドレスとポート番号を要求するユーザは、標準設定で管理者アカウントにログインされます。このアカウントとその権限へのアクセスを制限するには、ユーザ名とログイン・パスワードを含めるように管理者アカウント・プロファイルを編集する必要があります。これにより、SiteScope にアクセスする前にログイン・ダイアログ・ボックスが表示されるようになります。
- ▶ ユーザ・ログイン名とパスワードを必要としない名前付きユーザ・アカウントを作成できます。これを作成するには、標準形式の新しいユーザ・プロファイルを作成し（[表示ユーザ名] を指定する）、[ログイン名] と [パスワード] ボックスは空白にします。この設定では、ユーザが SiteScope にアクセスしようとする、認証ダイアログが表示されます。[ログイン名] と [パスワード] ボックスを空白のままにして [ログイン] ボタンをクリックすると、この名前付きユーザとして認証されます。このユーザは、SiteScope UI の右側上に **guest** (ゲスト) として表示されます。
- ▶ SiteScope 設定の不正な変更を防ぐため、正規ユーザ・アカウントの権限を制限する必要があります。
- ▶ ユーザ・ログイン名とパスワードは必ず英語の文字でなければなりません。

LDAP 認証と承認

Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用して認証の設定を選択できます。これによって認証情報 (ユーザ名とパスワード) を保管するために外部の LDAP サーバを使用できます。SiteScope は LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。

情報を LDAP サーバに保管すると、多くの SiteScope にわたって多数のユーザを管理しやすくなります。LDAP 認証を使用すると、ユーザ・ロール・プロフィールを作成してユーザ権限の管理をより効率的に行えます。一度に各ユーザにアクセス権限を割り当てる代わりに、同じリソース上で同じ権限レベルが割り当てられているユーザを同じユーザ・ロール・プロフィールにグループ化できます。ユーザ・ロールの詳細については、845 ページの「ユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプ」を参照してください。

ユーザ・ロールを作成して割り当て、SiteScope 外でユーザーを管理することに加えて、SiteScope 管理者は SiteScope にログオンする権限を持つすべての LDAP ユーザのリストを CSV ファイルに保存することも可能です。

LDAP 認証の有効化とユーザ・ロールの作成の詳細については、853 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」を参照してください。

SiteScope へのログインに使用可能なその他の認証方法の詳細については、926 ページの「認証方法 - 概要」を参照してください。

注：

- ▶ 監査ログにはユーザ名 ([**表示名**]) のみが含まれ、ユーザ・ロールや LDAP グループ ([**ユーザ ロール コンテキスト**] または [**LDAP コンテキスト**]) は含まれません。
 - ▶ LDAP 認証を使用してユーザがログオンする時、ユーザが作成されるのは 1 SiteScope セッション限りです。セッションが終了すると、ユーザは削除されます (永続性で保存されません)。
-

サイレント認証

ブラウザに保存される証明書, またはクライアント証明書認証によりスマートカードから認証を設定することも可能です。これは, ユーザ・ログイン名およびパスワードを SiteScope のログイン・ページに入力することなく SiteScope を起動する自動プロセスです。

証明書を提供する, またはスマート・カードを入れると, SiteScope は証明書 / スマート・カードから一意の属性を取得し, LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。ユーザを見つけると, LDAP ユーザ資格情報を使用して自動的にログオンします。

詳細については, 856 ページの「LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法」を参照してください。

タスク

SiteScope ユーザ・プロフィールの作成方法

このタスクでは、SiteScope ユーザ・プロフィールの作成に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。


- ▶ 851 ページの「前提条件」
- ▶ 851 ページの「SiteScope ユーザ・プロフィールの作成」
- ▶ 852 ページの「ユーザへの権限の割り当て - オプション」
- ▶ 852 ページの「SiteScope へのログオン」
- ▶ 852 ページの「ユーザのパスワードの変更 - オプション」

1 前提条件

SiteScope ユーザ管理設定および権限を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または **[ユーザ プリファレンスの編集]** 権限が付与されたユーザでなければなりません。標準設定では、正規ユーザは **[ユーザ プリファレンスの編集]** 権限を有していません。

ユーザ権限の詳細については、868 ページの「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 SiteScope ユーザ・プロフィールの作成

- a [ユーザ管理プリファレンス] ページで、**[新規ユーザ]**  ボタンの横の矢印をクリックして **[新規ユーザ]** を選択します。
- b [メイン設定] ペインで、ユーザ名、ログイン名、およびパスワードを入力して、このユーザ・プロフィールでアクセス可能なグループを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、868 ページの「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 ユーザへの権限の割り当て - オプション

[権限] ペインでこのユーザに付与された権限を選択する、または標準設定の権限 ([**ユーザ権限の編集**] を除きすべての権限が付与) を使用します。

[OK] をクリックします。新しいユーザ・プロファイルがユーザ管理プリファレンス・リストに追加されます。

4 SiteScope へのログオン

新しいユーザ・プロファイルを使用して SiteScope にログオンします。詳細については、50 ページの「SiteScope へのアクセス方法」を参照してください。

注 : SiteScope のログイン・パスワードは大文字と小文字が区別されます。

SiteScope はダッシュボード・ビューに開き、関連するユーザ権限はそのユーザに帰属します。

5 ユーザのパスワードの変更 - オプション

ユーザのパスワードを変更するには、SiteScope のログイン・ウィンドウで [**パスワード変更**] リンクをクリックして、[パスワード変更] ダイアログ・ボックスにユーザのユーザ名、現在のパスワード、および新しいパスワードを入力します。

新しいパスワードがパスワード設定ルールに従っていない場合はエラー・メッセージが表示され、パスワードは変更されません。パスワード設定ルールについては、861 ページの「パスワード要件パラメータ」を参照してください。

SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法

このタスクは、SiteScope へのログオンでの LDAP 認証と承認の使用に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 853 ページの「前提条件」
- ▶ 853 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする」
- ▶ 854 ページの「LDAP ユーザ・ロール・プロファイルの作成」
- ▶ 854 ページの「既存のユーザ権限をユーザ・ロールにコピー - オプション」
- ▶ 855 ページの「SiteScope へのログオン」
- ▶ 855 ページの「結果」

1 前提条件

- ▶ LDAP を使用して SiteScope にアクセスする時、LDAP サーバでユーザに割り当てられたユーザ・ログインとセキュリティ・プリンシパルが必要です。詳細は、LDAP サーバ管理者に問い合わせてください。
- ▶ SiteScope LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または [ユーザ プリファレンスの編集] 権限が付与されたユーザでなければなりません。標準設定では、正規ユーザは [ユーザ プリファレンスの編集] 権限を有していません。ユーザ・インタフェースの詳細については、868 ページの「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする


- a SiteScope で、[プリファレンス] > [ユーザ管理プリファレンス] を選択して、[標準設定] の横にある矢印をクリックし、[編集] を選択します。[ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックスが開き、LDAP ユーザ管理設定が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、865 ページの「[ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b [LDAP 認証の有効化] チェック・ボックスを選択して、LDAP 認証設定を設定します。

ヒント: これらの設定をするときには LDAP サーバ管理者に問い合わせることをお勧めします。

- c LDAP 接続をテストするには、[標準設定]の横にある矢印をクリックして、[テスト]を選択します。テストのステータスが返されます（テストが成功すると、LDAP ユーザ数が表示されます）。

注: [ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックスで [すべての LDAP ユーザの表示権限の有効化] を選択する場合、この LDAP のすべてのユーザーはビューア・ロールを含まない表示権限を取得します。

3 LDAP ユーザ・ロール・プロファイルの作成

[ユーザ管理プリファレンス] ページで、[新規ユーザ]  ボタンの横の矢印をクリックして [新規ユーザ ロール] を選択します。ユーザ・ロール名、LDAP セキュリティ・グループ（コンテキスト）を入力して、このユーザ・ロール・プロファイルによってアクセスできるグループを選択し、このユーザ・ロールに付与される権限を選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、883 ページの「[新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4 既存のユーザ権限をユーザ・ロールにコピー - オプション

既存の SiteScope ユーザ権限を新しいユーザ・ロールにコピーできます。これにより、ユーザ・プロファイルを作成または編集する時にユーザ・ロールとして同じ権限を割り当てられます。

- a [ユーザ管理プリファレンス] ページで、権限をユーザ・ロールにコピーするユーザを選択し、[コピー] > [ユーザ ロールへコピー] を選択します。
- b [新規ユーザ ロール プロファイル] ダイアログ・ボックスで、新しいユーザ・ロールの名前とコンテキストを入力して保存します。ユーザ・インタフェースの詳細については、883 ページの「[新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

- c 選択されたユーザの権限はユーザ・ロールにコピーされます。これは [一般ユーザ ロール] または [スーパー ユーザ ロール] タイプ (付与された権限によって異なる) として [ユーザ管理プリファレンス] ページに追加されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」を参照してください。

5 SiteScope からのログオフ

[ログアウト] ボタンをクリックして SiteScope からログアウトします。

6 SiteScope へのログオン

LDAP を使用して SiteScope にアクセスする場合、ユーザは通常の方法で SiteScope にアクセスできます。詳細については、50 ページの「SiteScope へのアクセス方法」を参照してください。

注 : SiteScope ユーザはこれまで通り [SiteScope ログイン] ページに入力しなければならない SiteScope ログイン名とパスワードを定義しておく必要があります (LDAP ユーザは SiteScope にログオンするために固有の LDAP ユーザ名とパスワードを持っています)。

7 結果

ユーザがログイン名とパスワードを [SiteScope ログイン] ページに入力した後で (またはサイレント・ログインを使用)、要求が SiteScope から LDAP に送信されます。

要求がユーザの確認を返してユーザ・グループがユーザ・ロール定義に一致する場合、関連するユーザ・ロール権限はユーザに帰属し、SiteScope はダッシュボード・ビューを開きます。

LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法

このタスクは、クライアント証明書認証による SiteScope へのサイレント・ログインを設定する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 856 ページの「証明書クライアントの取得」
- ▶ 857 ページの「サーバ証明書プロパティの設定」
- ▶ 859 ページの「SiteScope へのサーバ証明書のインポート」
- ▶ 859 ページの「LDAP ユーザ管理設定の設定」
- ▶ 860 ページの「結果」

1 証明書クライアントの取得

認証局が発行するデジタル証明書を取得します。自分の組織がこれに該当するデジタル証明書を持っていない場合は、認証局に証明書の発行を要求する必要があります。

2 サーバ証明書プロパティの設定

Tomcat サーバによって使用される設定ファイルに変更を行いサイレント・ログインを有効にします。

- a < SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥Tomcat¥conf ディレクトリにある **server.xml** ファイルを開きます。
- b 設定ファイルの次のようなセクションを探します。

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->
<!--
<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
clientAuth="false" sslProtocol="TLS" />
-->
```

- c このセクションを次のように変更し、必要なパラメータを入力します。

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->

<Connector port="8443"
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"
clientAuth="false" sslProtocol="TLS"
keystoreFile="<Keystore_file_path>"
keystorePass="<Keystore_password>" keystoreType="<Keystore_type>"
keyAlias="<Keystore_alias>" truststoreFile="<truststore_File>"
truststorePass="<truststore_password>" truststoreType="<truststore_type>"
clientAuth="true" />

/>
```

次に例を示します。

```
<!-- Define a SSL HTTP/1.1 Connector on port 8443 -->  
  
<Connector port="8443"  
maxThreads="150" minSpareThreads="25" maxSpareThreads="75"  
enableLookups="false" disableUploadTimeout="true"  
acceptCount="100" debug="0" scheme="https" secure="true"  
clientAuth="false" sslProtocol="TLS"  
keystoreFile="c:¥myclientstore.p12"  
keystorePass="testing" keystoreType="PKCS12" keyAlias="client"  
truststoreFile="..¥java¥lib¥security¥cacerts" truststorePass="changeit"  
truststoreType="JKS" clientAuth="true" />  
  
</>
```

注： SiteScope と同じサーバにほかの HP 製品がインストールされている場合は、競合を回避するために、ポート 8443 を別のポートに変更しなければならない場合があります。

Tomcat ログ出力は、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥logs¥ tomcat.log** ファイルに書き込まれます。ログ・ファイルの設定は、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥Tomcat¥common¥classes¥ log4j.properties** ファイルで実行できます。

- d** ポート 8443 で SSL アクセスを設定した後で、**Define a non-SSL HTTP/1.1 Connector on port 8080** とコメントすることによって SiteScope へのセキュアでないアクセスを制限します。

3 SiteScope へのサーバ証明書のインポート

証明書管理を使用して認証局の証明書をインポートします。[プリファレンス] > [証明書管理] を選択し、[証明書のインポート] ボタンをクリックします。[ファイル] または [ホスト] を選択し、ソース・サーバの詳細を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、910 ページの「[証明書管理] ページ」を参照してください。

注：[証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示 / 編集」権限を持つユーザのみです。

4 LDAP ユーザ管理設定の設定

- a [LDAP ユーザ管理設定] 表示枠で設定を設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、865 ページの「[ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b [LDAP ユーザ管理の詳細設定] 表示枠で、[LDAP アクティブ キー認証の同一属性] ボックスに LDAP ユーザの一意の属性を入力できます（または空白のままにしておくことができます。この場合、`userPrincipalName` 属性が使用されます）。

5 結果

サイレント・ログインを使用して SiteScope にログオンしようとする時、SiteScope から要求が LDAP に送信されます。要求がユーザの確認を返してユーザ・グループがユーザ・ロール定義に一致する場合、関連するユーザ・ロール権限はユーザに帰属し、SiteScope はダッシュボード・ビューに開きます。

SiteScope に表示されるユーザ名はユーザ証明書のユーザ個人名から取得されます。

注：

- ▶ ユーザが作成されるのは SiteScope 1 セッションだけです。セッションが終了すると、ユーザは削除されます（永続性で保存されません）。
- ▶ SiteScope からログオフする時（[ログアウト] ボタンをクリックして）、サイレント・ログイン・パラメータ（`sis_silent_login_type_default` が URL に表示されます。このパラメータを削除してからでなければ、更新アクションを使用して SiteScope にログオンできません。

参照情報

パスワード要件パラメータ

パスワード要件を設定するには、< SiteScope のルート・ディレクトリ >
`¥groups¥master.config` で次のパラメータを設定します。

パラメータ	説明
<code>_adminMinimumLength = x</code>	パスワードの長さは x 文字以上で指定する必要があります。
<code>_adminRequireAlpha = (1,0)</code>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 0. パスワードに英字を含める必要はありません。 ▶ 1. パスワードに英字を含める必要があります。
<code>_adminRequireNumber = (1,0)</code>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 0. パスワードに数字を含める必要はありません。 ▶ 1. パスワードに数字を含める必要があります。
<code>_adminRequirePunctuation = (1,0)</code>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 0. パスワードに句読点を含める必要はありません。 ▶ 1. パスワードに句読点を含める必要があります。

ユーザ管理のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [ユーザ管理プリファレンス] ページ (862 ページ)
- ▶ [ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックス (865 ページ)
- ▶ [新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス (868 ページ)
- ▶ [新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス (883 ページ)
- ▶ [SiteScope LDAP ユーザを CSV ファイルに保存します] ダイアログ・ボックス (885 ページ)
- ▶ [ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス (886 ページ)





[ユーザ管理プリファレンス] ページ



SiteScope によって提供されるデータは、すべてのユーザに完全な管理権限を付与せずに複数のユーザが利用できるようにすることができます。このページでは、さまざまな対象者に異なる表示および編集権限を提供する複数のユーザ・アカウントを作成できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[プリファレンス]コンテキスト>[ユーザ管理プリファレンス]を選択します。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。 ▶ 管理者アカウントは標準設定のアカウントで、製品がインストールされると有効になります。ほかのアカウントを作成するには、ユーザ・ログイン名およびログイン・パスワードを含めるように最初に管理者アカウント・プロファイルを編集する必要があります。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 851 ページの「SiteScope ユーザ・プロファイルの作成方法」 ▶ 853 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」 ▶ 856 ページの「LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法」
関連情報	844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規作成: ボタンの横にある矢印をクリックして選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 新規ユーザ: 新しいユーザ・プロファイルを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、868 ページの「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ 新規ユーザ・ロール: 新しいユーザ・ロール・プロファイルを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、883 ページの「[新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	<p>編集: 選択したユーザまたはユーザ・ロール・プロファイルを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、868 ページの「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」、および 883 ページの「[新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>ユーザ / ユーザ・ロールの削除: 選択したユーザまたはユーザ・ロール・プロファイルを削除します。</p>
	<p>ユーザ・ロールへのコピー: 既存の SiteScope ユーザ権限を新しいユーザ・ロールにコピーできます。</p> <p>注: SiteScope ユーザはこれまで同様 LDAP サーバでユーザ・ログインとセキュリティ・グループを割り当てられる必要があります (LDAP ユーザは SiteScope にログオンするために固有の LDAP ユーザ名とパスワードを持っています)。</p>

UI 要素	説明
	<p>すべて選択 : すべてのリストされたユーザとユーザ・ロール・プロファイルを選択します。</p>
	<p>選択を解除 : 選択をクリアします。</p>
<p>標準設定</p>	<p>[標準設定] の横にある矢印をクリックし、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 編集 : 標準設定の LDAP 認証設定を変更できる [ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックスを開きます。この設定の詳細については、862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」を参照してください。 ▶ テスト : LDAP サーバへの接続とユーザの認証をテストします。 ▶ 許可された LDAP ユーザを CSV として保存 : SiteScope へのログオン権限を持っているすべての LDAP ユーザのリストを CSV ファイルに保存できます。詳細については、885 ページの「[SiteScope LDAP ユーザを CSV ファイルに保存します] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 <p>注 : このオプションは SiteScope 管理者でのみ使用できます。</p>
<p>表示名</p>	<p>[表示ユーザ名] または [表示されたユーザ ロール名] ボックスに提供されたユーザまたはユーザ・ロール・プロファイルのタイトル。</p> <p>注 : ユーザ・プロファイルを設定する時、ユーザ名が提供されないと、[ログイン名] 値が代わりに使用されます。</p>
<p>ログイン名 / ユーザ・ロール・コンテキスト</p>	<p>ユーザ・プロファイルのログイン名とユーザ・ロールの LDAP コンテキストを表示します。</p>
<p>ログインを無効にする</p>	<p>ログイン状態を表示します。チェック・ボックスがクリアされていると、このユーザ・プロファイルを使用した SiteScope へのアクセスは有効です。チェック・ボックスが選択されていると、このユーザ・プロファイルを使用した SiteScope へのアクセスは許可されません。</p>
<p>ユーザ・タイプ</p>	<p>ユーザのタイプ。さまざまなユーザ・タイプの詳細については、845 ページの「ユーザ・タイプとユーザ・ロール・タイプ」を参照してください。</p>

[ユーザ管理設定] ダイアログ・ボックス




このダイアログ・ボックスでは、標準設定の LDAP ユーザ管理設定を設定できます。


アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト>[ユーザ管理プリファレンス]を選択します。[ユーザ管理プリファレンス] ツールバーで、[標準設定] > [編集] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更できます。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 853 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」 ▶ 856 ページの「LDAP 認証の使用時にサイレント・ログインを設定する方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

LDAP ユーザ管理設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
LDAP 認証の有効化	SiteScope ユーザを認証するために外部の LDAP サーバを使用できます。 標準設定値 : 選択されていない
LDAP サーバ URL	SiteScope 固有のパスワードではなく、一元化された LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするための該当する LDAP サーバの URL。この SiteScope へのアクセスのパスワード認証は LDAP によって実行できます。 例 : ldap://ldap.mydomain.com:389 または ldaps://ldap.mydomain.com:636 (SSL 接続を使用する時)。

UI 要素	説明
LDAP 資格情報	<p>LDAP サーバ認証資格情報を提供するオプション。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ ユーザ名およびパスワードを使用 : 手でユーザの資格情報を入力する場合に、このオプションを選択します。[ユーザ名] ボックスと [パスワード] ボックスに、LDAP サーバにアクセスするために使用されるユーザ名とパスワードを入力します。これによって、SiteScope は LDAP で検索クエリを実行できます。ユーザは LDAP の管理者、または LDAP の検索権限を付与されているユーザでなければなりません。 <p>例 : ユーザ名は [Domain]/[user_name] または [user_name]@[Domain] の形式にできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 事前定義された資格情報を選択 : LDAP サーバ用の定義済みユーザ名およびパスワードを SiteScope で自動的に設定する場合に、このオプションを選択します (標準設定のオプション)。[資格情報プロファイル] ドロップダウン・リストから使用する資格情報プロファイルを選択するか、[資格情報の追加] をクリックして新規資格情報プロファイルを作成します。このタスクの実行方法の詳細については、893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。
すべての LDAP ユーザの表示権限の有効化	<p>指定された LDAP コンテキストですべてのユーザに対して (特定の SiteScope ユーザ・ロールに割り当てられていないユーザに対しても) 表示権限を有効にします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
LDAP コンテキスト	
	<p>新規 LDAP コンテキスト : LDAP コンテキスト・テーブルの一番下に新しい行を追加します。これにより新しい LDAP コンテキストを追加できます。</p>
	<p>LDAP コンテキストの削除 : 選択した LDAP コンテキストを削除します。</p>
	<p>上へ移動 : 選択した LDAP コンテキストを上へ移動することによって LDAP コンテキストの順序を変更できます。</p>

UI 要素	説明
	下へ移動 : 選択した LDAP コンテキストを下へ移動することによって LDAP コンテキストの順序を変更できます。
コンテキスト	LDAP 内を検索するためにコンテキストの LDAP ルート・ノードを表示します。 例: DC=ldap,DC=server DC はドメイン・コンポーネントのことです。



LDAP ユーザ管理の詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	LDAP ユーザ管理の詳細設定のすべての標準設定値はアクティブ・ディレクトリ・システムに関連します。異なるサーバ・タイプを使用している場合には、関連する設定値について LDAP サーバ管理者に問い合わせください。
LDAP ユーザの objectClass	LDAP ユーザ・ロール名に使用されるクエリ値。 標準設定値 : user
LDAP ユーザの同一属性	同一のログイン属性を持つ LDAP ユーザに使用されるクエリ値。 標準設定値 : sAMAccountName
LDAP グループの objectClass	LDAP グループに使用されるクエリ値 (ロール・コンテキスト)。 標準設定値 : Group
LDAP アクティブキー認証の同一属性	サイレント・ログイン認証用の LDAP 同一属性。このフィールドはアクティブ・キー認証設定と使用した場合に限り使用されます。LDAP ユーザを識別するために一意の属性を入力する、または空白のままにしておくことができます。この場合 userPrincipalName 属性が使用されます。 アクティブ・キーを使用したサイレント・ログインの詳細については、850 ページの「サイレント認証」を参照してください。

[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいユーザ・プロフィールを作成または既存のプロフィールを編集できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス] を選択します。[ユーザ管理プリファレンス] ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規ユーザ]  ボタンの横にある矢印をクリックして、[新規ユーザ] を選択する、または ▶ 既存のユーザ・プロフィールを選択して、[編集]  ボタンをクリックします。
<p>重要な情報</p>	<p>現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者が「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</p>
<p>関連タスク</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 851 ページの「SiteScope ユーザ・プロフィールの作成方法」 ▶ 853 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」



メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>表示ユーザ名</p>	<p>ユーザ・プロフィールのタイトル。タイトルはユーザのリストに表示されます。タイトルを入力しない場合は、[ログイン名] の値が表示名として使用されます。</p>

UI 要素	説明
ログイン名	<p>このプロファイルを使用して SiteScope にアクセスするための SiteScope ログイン名。</p> <p>または、関連する LDAP セルに値を入力して、LDAP 認証を使用して SiteScope にログインできます。</p> <p>使用できる文字 : 英数字。</p> <p>注 : ユーザ・プロファイルの作成時に使用可能な文字以外の文字を入力してもエラーにはなりません。ただし、そのログイン名を使用して SiteScope にログオンすることはできません。</p>
パスワード	<p>このユーザが SiteScope にログインするためのパスワード。</p> <p>ユーザ認証に LDAP を使用する場合、ここにパスワードを入力する必要はありません。ユーザ・アカウントにログオンする場合、ユーザは [SiteScope ログイン] ダイアログ・ボックスに LDAP パスワードを入力します。</p> <p>パスワード要件の詳細については、852 ページの「ユーザのパスワードの変更 - オプション」を参照してください。</p> <p>すべての SiteScope パスワードは、3DES (TDES (Triple Data Encryption Algorithm) と呼ばれます) を使用して暗号化されます。TDES 鍵は SiteScope に保存されますが、変更はできません。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。</p> <p>注 : SiteScope のログイン・パスワードは大文字と小文字が区別されます。</p>
パスワードの確認	<p>[パスワード] ボックスで入力したパスワードの確認。このパスワードは、新しいユーザ・プロファイルを作成するとき、または既存のユーザ・プロファイルのパスワードを変更するときに使用されます。</p>

UI 要素	説明
<p>LDAP サービス・プロバイダ</p>	<p>SiteScope 固有のパスワードではなく、一元化された LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするための該当する LDAP サーバの URL。この SiteScope へのアクセスのパスワード認証は LDAP によって実行できます。</p> <p>各 LDAP サービス・プロバイダのホスト名 /IP アドレスをセミコロン(";")で区切って入力することにより、複数の LDAP サービス・プロバイダを指定できます。SiteScope は、指定された LDAP サービス・プロバイダのリストを読み取り、そのリストから使用できるプロバイダを探します。</p> <p>例 : ldap://ldap.mydomain.com:389。</p> <p>注 :</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ この場合も、ユーザには定義された SiteScope ログイン名が必要です。 ▶ ユーザは、LDAP を使用して SiteScope にアクセスできますが、LDAP サーバでユーザに割り当てられたユーザ・ログインとセキュリティ・プリンシパルが必要です。
<p>LDAP セキュリティ・プリンシパル</p>	<p>LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスするときの、このユーザのセキュリティ・プリンシパル。</p> <p>例 : uid=testuser,ou=TEST,o=this-company.com</p> <p>注 : LDAP サーバでは、ユーザを特殊文字で定義できます。ただし、SiteScope では、ユーザ名に等号記号 (=), セミコロン (;), 引用符 (") を含むユーザはサポートされていません。無効な文字を含むユーザ名では SiteScope にログオンできません。</p>
<p>ユーザ・ロールを割り当てる</p>	<p>ユーザにユーザ・ロールと同じ権限を割り当てるように選択します。リストには、SiteScope に定義されたすべてのユーザ・ロール名が表示されます。ユーザ・ロールを選択すると、[ログインを無効にする], [許可されているグループ], および [権限] 設定を選択に使用できなくなります。</p>
<p>ログインを無効にする</p>	<p>このユーザ名とパスワードを使用した SiteScope へのアクセスを無効にします。このユーザ・プロファイルを使用したアクセスを有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。</p>

UI 要素	説明
許可されているグループ	<p>このユーザ・プロファイルでアクセスできるグループのリストを表示します。[新規] ボタン  をクリックして [ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックスを開き、グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、886 ページの「[ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>グループへのユーザ・アクセスを削除するには、グループを選択し、[削除] ボタン  をクリックします。リスト内のすべてのグループを削除することはできません。</p> <p>標準設定値: すべてのグループにアクセスできるように SiteScope ノードが選択されます。</p> <p>注: このフィールドは管理者の設定では表示されません。</p>

権限

ユーザのアクション権限を決定できます。権限を付与するには、権限または権限グループの左側にあるチェック・ボックスを選択します。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 管理者にはすべての権限があり、またこれらの権限は変更できないため、管理者のアカウントに [権限] 表示枠は表示されません。 ▶ 現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。 ▶ [権限] 表示枠のすべての権限が標準設定で選択されます。ただし、「ユーザ・プリファレンスの編集」権限は、SiteScope 管理者が付与する必要があります。 ▶ 権限グループの左側に表示される <input type="checkbox"/> アイコンは、そのルート・グループ内に含まれる権限で選択されていない権限があることを示します。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
グループ	
グループの編集	<p>新しいグループの追加，既存のモニタ・グループの名前変更，コピー，削除ができます。詳細については，387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
グループのリフレッシュ	<p>スケジュールに関係なく，グループ内のすべてのモニタをリフレッシュまたは強制的に実行できます。詳細については，387 ページの「[新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
グループの無効化	<p>グループを無効化できます。詳細については，1319 ページの「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
モニタ	
モニタの編集	<p>新しいモニタの追加，既存のモニタ設定の編集，またはモニタの削除ができます。詳細については，391 ページの「SiteScope モニタを使った作業」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
モニタをリフレッシュします	<p>スケジュールに関係なく，個々のモニタをリフレッシュまたは強制的に実行できます。詳細については，391 ページの「SiteScope モニタを使った作業」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
モニタを確認します	<p>確認機能を使用して，グループの詳細ページにモニタの状態についてコメントができます。詳細については，1288 ページの「モニタの状態の確認」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

UI 要素	説明
モニタの無効化	<p>グループ内のモニタを無効化できます。1319 ページの「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化]ダイアログ・ボックス」。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
警告	
警告リストの表示	<p>警告リスト・ページに、現在設定されている警告定義のリストを表示できます。これは、警告を編集、テスト、無期限に無効化するために必要なルート権限です。詳細については、1461 ページの「SiteScope 警告ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
警告の編集	<p>新しい警告の追加、既存の警告の編集または削除ができます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。詳細については、1463 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注 : 警告アクションは警告アクション・プリファレンスの権限によって制御されないため、この権限は「電子メール、ページ、および SNMP のリストの表示」権限には依存しません。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
警告のテスト	<p>既存の警告定義をテストできます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。詳細については、1461 ページの「SiteScope 警告ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
警告を無期限に無効化	<p>1 つ以上の警告を無期限に無効化または有効化できます。このオプションは、「警告リストの表示」権限に依存します。詳細については、1463 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
警告を一時的に無効化	<p>1 つ以上の警告を一時的に無効化または有効化できます。詳細については、1463 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

UI 要素	説明
レポート	
モニタ・サマリ・レポートの生成	<p>モニタの参照フォームおよびモニタ・サマリ・レポートを使用できます。詳細については、1546 ページの「モニタ・サマリ・レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
管理レポートの生成	<p>定期管理レポートを手動で作成できます。詳細については、1538 ページの「管理レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
管理レポートの編集	<p>新しいレポート定義の追加、既存のレポート定義の編集または削除ができます。詳細については、1538 ページの「管理レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
クイック・レポートの生成	<p>一時的な SiteScope 管理レポートを作成できます。詳細については、1542 ページの「クイック・レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
警告レポートの生成	<p>一時的なクイック警告レポートを作成できます。詳細については、1548 ページの「警告レポート」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバ	
リモート・サーバのリストを表示	<p>SiteScope で設定されているリモート・サーバのリストを表示できます。これは、リモート・サーバを編集またはテストするために必要なルート権限です。詳細については、598 ページの「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。</p> <p>このオプションが選択されていない場合、次のエンティティは表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [リモート サーバ] コンテキストのリモート・サーバ・ツリーおよびリモート・サーバ・ページ。 ▶ [モニタ] コンテキストの [リモート サーバの追加] ボタン。 <p>標準設定値：選択されている</p>

UI 要素	説明
リモート・サーバを編集	<p>リモート・サーバを SiteScope に追加したり、リモート・サーバ設定を編集したりできます。このオプションは、「リモート・サーバのリストを表示」権限に依存します。詳細については、598 ページの「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>リモート・サーバの接続をテストできます。このオプションは、「リモート・サーバのリストを表示」権限に依存します。詳細については、598 ページの「リモート・サーバのプロパティ・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
一般プリファレンス	
一般プリファレンスの表示	<p>一般プリファレンスを表示できます。これは、一般プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、692 ページの「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
一般プリファレンスの編集	<p>一般プリファレンスを編集できます。このオプションは、「一般プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、692 ページの「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
インフラストラクチャ・プリファレンス	
インフラストラクチャ・プリファレンスの表示	<p>インフラストラクチャ・プリファレンスを表示できます。これは、インフラストラクチャ・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、707 ページの「[インフラストラクチャ プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
インフラストラクチャ・プリファレンスの編集	<p>インフラストラクチャ・プリファレンスを編集できます。このオプションは、「インフラストラクチャ・プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、707 ページの「[インフラストラクチャ プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

UI 要素	説明
統合プリファレンス	
統合プリファレンスの表示	<p>統合プリファレンスを表示できます。これは、統合プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、755 ページの「統合プリファレンス・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
統合プリファレンスの編集	<p>統合プリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「統合プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、755 ページの「統合プリファレンス・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ログ・プリファレンス	
ログ・プリファレンスの表示	<p>ログ・プリファレンスを表示できます。これは、ログ・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、784 ページの「[ログ プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ログ・プリファレンスの編集	<p>ログ・プリファレンスを編集できます。このオプションは、「ログ・プリファレンスの表示」権限に依存します。詳細については、784 ページの「[ログ プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>


UI 要素	説明
電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンス	
電子メール、ページ、および SNMP のリストの表示	<p>電子メール、ページ、および SNMP プロファイル・リストを表示できます。これは、電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンスを編集またはテストするために必要なルート権限です。</p> <p>詳細については、791 ページの「[電子メール プリファレンス] ページ」、801 ページの「[ページ プリファレンス] ページ」、811 ページの「[SNMP プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンスの編集	<p>電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「電子メール、ページ、および SNMP のリストの表示」権限に依存します。</p> <p>詳細については、791 ページの「[電子メール プリファレンス] ページ」、801 ページの「[ページ プリファレンス] ページ」、811 ページの「[SNMP プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
電子メール、ページ、および SNMP のプリファレンスのテスト	<p>電子メール、ページ、SNMP などの外部サービスとの通信のプリファレンス設定をテストできます。このオプションは、「電子メール、ページ、および SNMP のリストの表示」権限に依存します。</p> <p>詳細については、791 ページの「[電子メール プリファレンス] ページ」、801 ページの「[ページ プリファレンス] ページ」、811 ページの「[SNMP プリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

UI 要素	説明
共通イベント・マッピング	
共通イベント・マッピングの表示	<p>共通イベント・マッピングを表示できます。これは、共通イベント・マッピングを編集するために必要なルート権限です。詳細については、817 ページの「共通イベント・マッピング」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
共通イベント・マッピングの編集	<p>共通イベント・マッピングを編集できます。このオプションは、「共通イベント・マッピングの表示」権限に依存します。詳細については、817 ページの「共通イベント・マッピング」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
スケジュール・プリファレンス	
スケジュール・リストの表示	<p>スケジュール・プリファレンスを表示できます。これは、スケジュール・プリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、837 ページの「スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
スケジュール・プリファレンスの編集	<p>スケジュール・プリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「スケジュール・リストの表示」権限に依存します。詳細については、837 ページの「スケジュール・プリファレンスのユーザ・インタフェース」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ユーザ管理プリファレンス	
ユーザ・プリファレンスの編集	<p>SiteScope 管理者ユーザ以外のすべてのほかのユーザのユーザ・プリファレンスを表示、編集、削除できます。パワー・ユーザは自分のアカウントを削除できません。この権限のないユーザには、[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスが読み取り専用として表示され、現在のユーザが権限を持つ設定およびルート・グループが表示されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

UI 要素	説明
資格情報のプリファレンス	
資格情報リストの表示	<p>資格情報のプリファレンスを表示できます。これは、資格情報のプリファレンスを編集するために必要なルート権限です。詳細については、895 ページの「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>このオプションが選択されていない場合、次のエンティティは表示されません。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [プリファレンス] コンテキストの [資格情報のプリファレンス] タブ。 ▶ [リモート サーバ] および [モニタ] コンテキストの [資格情報の追加] ボタン。 <p>標準設定値 : 選択されている</p>
資格情報プリファレンスの編集	<p>資格情報のプリファレンスを作成または編集できます。このオプションは、「資格情報リストの表示」権限に依存します。詳細については、895 ページの「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
証明書管理	
証明書リストの表示	<p>[証明書管理] ページを表示できます。これは、証明書管理を編集するために必要なルート権限です。詳細については、910 ページの「[証明書管理] のユーザ・インタフェース」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
証明書リストの編集	<p>証明書管理を使用して証明書を管理できます。このオプションは、「証明書リストの表示」権限に依存します。詳細については、910 ページの「[証明書管理] のユーザ・インタフェース」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>



UI 要素	説明
タグ	
タグの表示	<p>定義されたタグのリストを確認するための SiteScope の新規タグ /SiteScope タグの編集ダイアログ・ボックスを表示できます。これは、タグを編集するために必要なルート権限です。詳細については、903 ページの「[タグの検索 / フィルタ] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
タグの編集	<p>検索 / フィルタ・タグとタグ値を追加、編集、削除できます。このオプションは、「タグの表示」権限に依存します。詳細については、903 ページの「[タグの検索 / フィルタ] ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
テンプレート	
テンプレートの表示	<p>モニタ・ツリーにあるテンプレートを表示できます。これは、テンプレートを編集するために必要なルート権限です。詳細については、95 ページの「テンプレート・ツリー」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
テンプレートの編集	<p>テンプレートを追加、編集、削除できます。このオプションは、「テンプレートの表示」権限に依存します。詳細については、95 ページの「テンプレート・ツリー」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

UI 要素	説明
ダッシュボード	
お気に入りの編集	<p>SiteScope ダッシュボード・ビューのお気に入りのビュー・リストに、項目を追加または削除できます。詳細については、1308 ページの「[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス」および 1309 ページの「[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
レイアウトの編集	<p>ユーザは SiteScope ダッシュボードでフィールドを永久に無効にできます。たとえば、監視対象サーバの IP アドレスを特定のユーザに表示しない場合には、ダッシュボードで Target 列を永久に非表示にできます。この権限を持たないユーザは無効になっている列を見ることができません。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
モニタ履歴の表示	<p>モニタの最近の履歴レポートを表示できます。詳細については、1305 ページの「SiteScope ダッシュボード・モニタ履歴ビュー」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>

UI 要素	説明
その他	
ツールを使用	<p>ツール・コンテナにある SiteScope ツールを使用して、モニタ設定に関する問題のトラブルシューティングおよび診断を行えます。詳細については、159 ページの「SiteScope ツール」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
ログの表示	<p>警告によって送信された SiteScope モニタでレポートされた未処理のデータ、およびその他の SiteScope ログを表示できます。詳細については、1374 ページの「ログ・ファイルの使用」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
サーバ統計の表示	<p>SiteScope サーバのパフォーマンス、安定性、状況の分析、およびボトルネックのデバッグに使用できる SiteScope の内部データを表示できます。詳細については、1370 ページの「サーバ統計の使用」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
モニタ・ツールを使用	<p>特定のモニタ・タイプを設定または編集するときに SiteScope ツールを使用できます。モニタ・タイプに診断ツールが使用できる場合は、グループの詳細ページで、そのモニタのダッシュボード・ツールバーの [ツール]  ボタンが有効になります。詳細については、159 ページの「SiteScope ツール」を参照してください。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 診断ツールによって、機密のシステム情報が表示される場合があります。 ▶ このオプションは、「ツールを使用」権限に依存します。 <p>標準設定値：選択されている</p>

[新規ユーザ ロール プロファイル] / [ユーザ ロール プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス



このダイアログ・ボックスでは、新しいユーザ・ロール・プロファイルを作成または既存のプロファイルを編集できます。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト>[ユーザ管理プリファレンス]を選択します。[ユーザ管理プリファレンス] ページで、次の操作を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規ユーザ] ボタン  の横にある矢印をクリックして、[新規ユーザ ロール] を選択する、または ▶ 既存のユーザ・ロール・プロファイルを選択して、[編集] ボタン  をクリックします。
重要な情報	<p>現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。</p>
関連タスク	<p>853 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
表示されたユーザ・ロール名	<p>ユーザ・ロール・プロファイルのタイトル。タイトルはユーザのリストに表示されます。</p>
ユーザ・ロール・コンテキスト	<p>LDAP 認証を使用して SiteScope サービスにアクセスする時の、このユーザのセキュリティ・グループ。ユーザ・ロール・コンテキストは SiteScope が LDAP 内を検索するために使用するプロパティです。</p> <p>例：uid=testuser,ou=TEST,o=this-company.com</p>

UI 要素	説明
ログインを無効にする	このユーザ名とパスワードを使用した SiteScope へのアクセスを無効にします。このユーザ・ロール・プロファイルを使用したアクセスを有効にするには、チェック・ボックスをクリアします。
許可されているグループ	<p>このユーザ・ロール・プロファイルでアクセスできるグループのリストを表示します。[新規]  ボタンをクリックして [ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックスを開き、グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、886 ページの「[ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>グループへのユーザ・アクセスを削除するには、グループを選択し、[削除]  ボタンをクリックします。リスト内のすべてのグループを削除することはできません。</p> <p>標準設定値：すべてのグループにアクセスできるように SiteScope ノードが選択されます。</p> <p>注：このフィールドは管理者の設定では表示されません。</p>

権限

ユーザのロール権限を決定できます。権限を付与するには、権限または権限グループの左側にあるチェック・ボックスを選択します。

各権限のリストと説明については、871 ページの「権限」を参照してください。

[SiteScope LDAP ユーザを CSV ファイルに保存します] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスによって、SiteScope 管理者は SiteScope にログオンする権限を持っているすべての LDAP ユーザのリストを CSV ファイルに保存できます。




アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト>[ユーザ管理プリファレンス]を選択します。[ユーザ管理プリファレンス] ツールバーで、[標準設定] > [許可された LDAP ユーザを CSV として保存] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみが、LDAP ユーザ管理設定および権限を作成または変更できます。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。
関連タスク	853 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ファイル	SiteScope にログオンできる LDAP ユーザを保存する CSV ファイル名。このファイルには、ユーザ・ロール名、LDAP グループ (ロール・コンテキスト)、およびユーザ同一属性 (ログイン) の 3 列が含まれます。
ユーザの保存	ボタンをクリックして、既存の CSV ファイルを選択する、または LDAP ユーザのリストを保存する新しいファイル名を入力します。

[ユーザの許可されているグループを選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ユーザのアクセスを許可するグループ、サブグループまたは両方を選択できます。個々のグループまたはサブグループの横にあるボックスを選択して、そのグループへのアクセスを可能にします。標準設定では、すべてのグループへのアクセスが許可されています。ユーザ・アクセスをいくつかのグループに制限するには、SiteScope ノードのチェック・ボックスをクリアして、アクセスを可能にする SiteScope ノードの下のグループを個別に選択します。

<p>アクセス方法</p>	<p>[プリファレンス] コンテキスト > [ユーザ管理プリファレンス] を選択します。[ユーザ管理プリファレンス] ページで、[新規ユーザ]  ボタンをクリックするか、既存のユーザ・プロファイルを選択して [ユーザの編集]  ボタンをクリックします。[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックスで、[許可されているグループ] 領域の [新規]  ボタンをクリックします。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 現在のユーザまたはその他のユーザのユーザ設定および権限を作成または変更できるのは、SiteScope の管理者か「ユーザ・プリファレンスの編集」権限が付与されたユーザのみです。標準設定で、正規ユーザには「ユーザ・プリファレンスの編集」権限がありません。つまり、自分のユーザ・プロパティしか表示できません。 ▶ グループが選択されている場合は、グループの各サブグループも許可されているグループのリストに追加されます。
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」 ▶ 862 ページの「[ユーザ管理プリファレンス] ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	<p>個々の SiteScope サーバを表します。</p> <p>標準設定値：現在のコンテナおよび選択されているすべての子要素。</p>
 	<p>SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む，モニタを含まない，または有効化されたモニタがない）を表します。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに警告が設定されている場合，グループ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。</p> <p>モニタ・グループまたはサブグループに管理レポートが設定されている場合，グループ・アイコンの横にレポート  記号が表示されます。</p>
	<p>SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる使用可能な状況モニタの集合を表します。</p>

32

資格情報のプリファレンス

本章の内容

概念

- ▶ 資格情報のプリファレンスの概要 (890 ページ)

タスク

- ▶ 資格情報のプリファレンスの設定方法 (893 ページ)

参照情報

- ▶ [資格情報のプリファレンス] のユーザ・インタフェース (895 ページ)

概念

資格情報のプリファレンスの概要

[資格情報のプリファレンス] では、SiteScope リソースの資格情報を中央管理できます。SiteScope モニタ、テンプレート、およびリモート・ホストのユーザ名とパスワードを資格情報プロファイルとして一度入力すると、これらのリソースの設定時に SiteScope によって自動的にその情報が設定されます。

[資格情報のプリファレンス] では、次の作業ができます。

- ▶ 資格情報の作成および管理。1 つの中心的な場所から資格情報を追加、変更、および削除できます。
- ▶ 資格情報の更新。リソースの資格情報の期限が切れている場合や更新が必要な場合、資格情報プロファイルを更新すれば、SiteScope のリソースのすべての利用形態に変更が適用されます。これにより、SiteScope のリソースのすべての利用形態を検索して手動で更新する必要がなくなります。
- ▶ ユーザ資格情報の保護。[資格情報のプリファレンス] で保存したすべてのパスワードは暗号化されます。管理者、または「**資格情報プリファレンスの編集**」権限を付与されたユーザのみが、資格情報を変更できます。
- ▶ 資格情報プロパティによる検索と置換。[グローバル検索と置換] を使用して資格情報をほかの資格情報に置換します。
- ▶ 資格情報設定がある SiteScope へのモニタのコピー。複数の SiteScope が BSM に接続されている場合、モニタをほかの SiteScope にコピーすることもできます (システム可用性管理を介してのみ使用できます)。モニタをコピーする SiteScope に資格情報プロファイルが存在しない場合、その SiteScope に資格情報プロファイルが作成されます。

タスクの詳細については、893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」を参照してください。ユーザ・インターフェースの詳細については、895 ページの「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 891 ページの「サポートされているモニタ」
- ▶ 892 ページの「資格情報プロファイルの監視」
- ▶ 892 ページの「注意事項」

サポートされているモニタ

[資格情報のプリファレンス]を使用して、次のモニタの資格情報を保存できます。

モニタのカテゴリ	モニタ
アプリケーション	<ul style="list-style-type: none"> ▶ COM+ Server ▶ SAP CCMS ▶ SAP CCMS Alert ▶ SAP Java Web Application Server ▶ SAP Performance ▶ SAP Work Processes ▶ Siebel Application Server ▶ WebSphere Application Server
データベース	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Database Counter ▶ DB2 8.x ▶ Oracle Database
サーバ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ IPMI
Web トランザクション	<ul style="list-style-type: none"> ▶ URL ▶ URL Content ▶ URL List

資格情報プロファイルの監視

ユーザ資格情報が期限切れまたは変更された場合、これらの資格情報を使用しているモニタが機能しなくなり、状態が **[エラー]** になります。この状況を回避するには、認証をチェックする資格情報プロファイルごとにモニタを作成し、そのモニタ・タイプのすべてのモニタがテスト・モニタに依存するようにします。

たとえば、IPMI モニタ `IPMI_test_credentials` を作成し、サーバのログインとパスワードを手動で設定します。IPMI モニタの設定時に、**[依存関係]** 表示枠の **[依存]** ボックスに「`IPMI_test_credentials`」と入力し、**[依存条件]** として **[使用可能]** を選択します。IPMI_test_credentials モニタが何らかの理由により使用できなくなった場合、IPMI モニタは自動的に無効になります。

注意事項

- ▶ モニタをほかの古いバージョンの SiteScope にコピーする場合、資格情報設定は SiteScope にコピーされません。
- ▶ 資格情報プロファイルがモニタまたはリモート・ホストで参照されている場合、その資格情報プロファイルは削除できません。資格情報プロファイルを削除するには、各依存関係から資格情報プロファイルを削除する必要があります。
- ▶ テンプレート・リモート・ホストまたはテンプレート・モニタで使用している資格情報が削除されている場合、欠落している資格情報を **[資格情報のプリファレンス]** に追加するか、リソースの資格情報をテンプレート・オブジェクトに手動で入力してからテンプレートをデプロイする必要があります。

タスク

資格情報のプリファレンスの設定方法

このタスクでは、ユーザ認証が必要な SiteScope オブジェクトの資格情報の設定および管理の手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 893 ページの「前提条件」
- ▶ 893 ページの「資格情報プロファイルの作成」
- ▶ 894 ページの「資格情報プロファイルを使用する SiteScope リソースの設定」
- ▶ 894 ページの「資格情報プロファイルの更新」
- ▶ 894 ページの「結果」

1 前提条件

資格情報を作成または変更するには、SiteScope の管理者、または「**資格情報プリファレンスの編集**」権限を付与されたユーザである必要があります。

ユーザ権限の詳細については、871 ページの「権限」を参照してください。

2 資格情報プロファイルの作成

ユーザ認証が必要な SiteScope リソースごとに、[資格情報のプリファレンス] で資格情報プロファイルを設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、895 ページの「[資格情報のプリファレンス] ページ」を参照してください。

サポートされているモニタのリストについては、891 ページの「サポートされているモニタ」を参照してください。

3 資格情報プロファイルを使用する SiteScope リソースの設定

資格情報プロファイルがある SiteScope リソースを設定する場合、リソースの設定領域にある **[資格情報]** ボックスでプロファイルを選択します。

- ▶ モニタ設定時のユーザ・インタフェースの詳細については、そのモニタのモニタ設定を参照してください。
- ▶ リモート・サーバの設定時のユーザ・インタフェースの詳細については、601 ページの「**[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]** / **[Microsoft Windows リモート サーバの編集]** ダイアログ・ボックス」および 608 ページの「**[新規 UNIX リモート サーバ]** / **[UNIX リモート サーバの編集]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4 資格情報プロファイルの更新

リソースの資格情報が変更された場合、資格情報プロファイルを更新するだけでよく、リソースのすべての利用形態を検索して SiteScope の各リソースを個別に更新する必要はありません。プロファイルを変更するには、**[資格情報のプリファレンス]** でプロファイルを選択して **[資格情報プロファイルの編集]** をクリックし、必要な変更を行います。

ユーザ・インタフェースの詳細については、895 ページの「**[資格情報のプリファレンス]** ページ」を参照してください。

5 結果

SiteScope では、**[資格情報のプリファレンス]** で入力した資格情報を使用してリソースのログインとパスワードが認証されます。

参照情報

[資格情報のプリファレンス] のユーザ・インタフェース

本項の内容






- ▶ [資格情報のプリファレンス] ページ (895 ページ)
- ▶ [新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス (897 ページ)

[資格情報のプリファレンス] ページ

このページでは、SiteScope リソースの資格情報を中央管理できます。このページでは、SiteScope モニタ、テンプレート、リモート・ホストの設定に使用する資格情報を追加、更新、および削除できます。



アクセス方法	[プリファレンス]コンテキスト>[資格情報のプリファレンス] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「資格情報プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、資格情報のプリファレンスを作成または変更できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ 資格情報プロファイルがモニタで参照されている場合、その資格情報プロファイルは削除できません。プロファイルを削除するには、各依存関係からプロファイルを削除する必要があります。
関連タスク	893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 890 ページの「資格情報のプリファレンスの概要」 ▶ 897 ページの「[新規資格情報プロファイル] / [資格情報プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規資格情報プロフィール: 新規資格情報プロフィールが作成されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、897 ページの「[新規資格情報プロフィール] / [資格情報プロフィールの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>資格情報プロフィールの編集: 資格情報プロフィールを編集できるようになります。ユーザ・インタフェースの詳細については、897 ページの「[新規資格情報プロフィール] / [資格情報プロフィールの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>資格情報プロフィールの削除: 選択した資格情報プロフィールが [資格情報プリファレンス] から削除されます。</p>
	<p>すべて選択: 表示されている資格情報プロフィールがすべて選択されます。</p>
	<p>選択範囲を解除: 選択をクリアします。</p>
<p>名前</p>	<p>新規資格情報プロフィールを作成する場合に設定プロフィールに割り当てる名前の文字列。</p>
<p>ログイン</p>	<p>該当の資格情報プロフィールを使用するリソースにアクセスするためのユーザ名。</p>
<p>詳細</p>	<p>資格情報プロフィールの作成時または編集時に割り当てられた設定プロフィールの詳細。</p>

[新規資格情報プロフィール] / [資格情報プロフィールの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新規資格情報プロフィールの作成や既存のプロフィールの編集ができます。資格情報プロフィールを使用して、SiteScope リソースの認証資格情報を保存および管理します。

アクセス方法	<p>[プリファレンス]コンテキスト>[資格情報のプリファレンス]を選択します。[資格情報のプリファレンス] ページで次を実行します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [新規資格情報プロフィール] ボタン  ボタンをクリックするか、 ▶ 既存の資格情報プロフィールを選択して [資格情報プロフィールの編集] ボタン  をクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope の管理者、または「資格情報プリファレンスの編集」権限を付与されたユーザのみが、資格情報のプリファレンスを作成または変更できます。 ▶ このページは、ユーザ権限に応じてビュー・モードまたは編集モードで開きます。 <p>ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。</p>
関連タスク	893 ページの「資格情報のプリファレンスの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 890 ページの「資格情報のプリファレンスの概要」 ▶ 895 ページの「[資格情報のプリファレンス] ページ」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	資格情報プロフィールのわかりやすい名前。 最大文字数 : 50 文字
ドメイン	資格情報のドメイン。接続時に、<ドメイン>¥<ログイン>の形式でドメインがログインに追加されます。
ログイン	該当の資格情報プロフィールを使用するリソースにアクセスするためのユーザ名。

UI 要素	説明
パスワード	<p>該当の資格情報プロファイルを使用するリソースにアクセスするためのパスワード。</p> <p>すべての SiteScope パスワードは、3DES (TDES (Triple Data Encryption Algorithm) と呼ばれます) を使用して暗号化されます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「SiteScope プラットフォームのセキュリティ強化」を参照してください。</p>
パスワードの確認	<p>[パスワード] ボックスで入力したパスワードの確認。これは、新規資格情報を作成するときや、既存の資格情報のパスワードを変更するとき使用されます。</p>

詳細設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
詳細	<p>設定プロファイルの詳細。プロパティを編集または表示する場合にのみ表示されます。HTML タグ (
, <HR>, および タグなど) を使用して、表示形式および表示スタイルを制御できます。</p> <p>注: このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。悪意のある HTML コードや JavaScript が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ: script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例: onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	<p>SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

33

タグの検索 / フィルタ

本章の内容

概念

▶ タグの検索 / フィルタの概要 (902 ページ)

参照情報

▶ [タグの検索 / フィルタ] ページ (903 ページ)

概念

タグの検索 / フィルタの概要

SiteScope で定義した検索 / フィルタ・タグを管理するには、タグの検索 / フィルタのプリファレンスを使用します。これらのタグは、コンテキスト・ツリーまたはプリファレンス・プロファイルの項目に割り当てることができ、フィルタのオブジェクトとして使用されます。

タグの検索 / フィルタのプリファレンス・ページには、検索 / フィルタ・タグのリストが表示されます。このページで、検索 / フィルタ・タグを追加、編集、削除できます。

これらのプリファレンスの設定の詳細については、903 ページの「[タグの検索 / フィルタ] ページ」を参照してください。



参照情報




[タグの検索 / フィルタ] ページ

このページでは、SiteScope で定義した検索 / フィルタ・タグを管理できます。コンテキスト・ツリーとプリファレンス・プロファイルの 1 つ以上の項目にタグを割り当て、そのタグをフィルタのオブジェクトとして使用できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [タグの検索 / フィルタ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ SiteScope オブジェクトで参照されている場合、検索 / フィルタ・タグまたはタグの値は削除できません。削除するには、すべての SiteScope オブジェクトからタグまたはタグの値を削除する必要があります。 ▶ タグは、<tag> 属性を使用して警告テンプレートでも使用できます。詳細については、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。
関連タスク	119 ページの「新しい検索 / フィルタ・タグの作成および定義方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」 ▶ 902 ページの「タグの検索 / フィルタの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規タグ ：新しい検索 / フィルタ・タグを作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	タグの編集 ：検索 / フィルタ・タグを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

UI 要素	説明
	タグの削除 : タグの検索 / フィルタのプリファレンスから選択したタグを削除します。
	すべて選択 : 表示されたすべての検索 / フィルタ・タグを選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
名前	新しい検索 / フィルタ・タグの作成時に設定プロファイルに割り当てられる名前の文字列。
詳細	検索 / フィルタ・タグの作成時または編集時に割り当てられた設定プロファイルの詳細。

34

証明書管理

本章の内容

概念

- ▶ 証明書管理の概要 (906 ページ)

タスク

- ▶ 証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法 (908 ページ)

参照情報

- ▶ [証明書管理] のユーザ・インタフェース (910 ページ)

概念

証明書管理の概要

リモート・サーバの監視時に、対象サーバが自己署名証明書を使用している場合、その証明書を信頼されたキーストアに追加する必要があります。セキュアな接続を使用して URL、WebSphere アプリケーション・サーバ、VMware ベースのサーバを監視している場合、[証明書管理] ページで自己署名証明書を管理できます。

証明書管理を使用すると次のような利点があります。

- ▶ 標準の JVM ツール (keytool) を使用して証明書を管理する必要がありません。これにより、SiteScope マシンに対するデスクトップとシェル・セッションの要件が不要になります。
- ▶ 視覚的なキーストア管理 (証明書の追加と削除) が可能になり、証明書変更操作をするたびに SiteScope を再起動しなくても動的にキーストアを再読み込みできます。

注:

- ▶ [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「**証明書リストの表示 / 編集**」権限を持つユーザのみです。
 - ▶ モニタは使用するキーストアと関連付けられています。URL モニタ、WebSphere アプリケーション・サーバ・モニタ、VMware パフォーマンス・モニタの場合、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %java%lib%security%cacerts** のキーストアを使用します。ほかのキーストアは無視されます。
 - ▶ その場合でも、必要であれば keytool による方法を使用して証明書をインポートできます。証明書の手動インポートの詳細については、各モニタ・タイプのドキュメントを参照してください。
 - ▶ 自己生成した認証局 (CA) 証明書を使用してすべてのサーバ証明書に署名する場合、CA 証明書を 1 回だけインポートする必要があります。
-

証明書管理を使用した証明書のインポートの詳細については、908 ページの「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの詳細については、910 ページの「[証明書管理] ページ」を参照してください。

タスク

証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法

このタスクでは、証明書管理を使用して自己署名証明書をインポートする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。


- ▶ 908 ページの「前提条件」
- ▶ 909 ページの「サーバ証明書のインポート」
- ▶ 909 ページの「モニタのプロパティの設定」

1 前提条件

- ▶ 証明書管理を使用すると、URL、URL Content、URL List、URL Sequence、VMware Performance、VMware Host、および WebSphere Application Server の各モニタにのみセキュアな接続を設定する際に必要なサーバ証明書をインポートできます。
- ▶ [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「**証明書リストの表示 / 編集**」権限を持つユーザのみです。ユーザ権限の詳細については、871 ページの「権限」を参照してください。

2 サーバ証明書のインポート

監視している Web サーバのプレフィックスが `https://` の場合、その接続はセキュアで暗号化されており、サーバ証明書のインポートが必要です。

- a [プリファレンス] > [証明書管理] を選択し、[証明書のインポート] ボタン  をクリックします。[ファイル] または [ホスト] を選択し、ソース・サーバの詳細を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、912 ページの「[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b [読み込み済み証明書] テーブルから、インポートするサーバ証明書を選択して、[インポート] をクリックします。インポートした証明書が [証明書管理] ページに一覧表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、910 ページの「[証明書管理] ページ」を参照してください。

3 モニタのプロパティの設定

必要なサーバ証明書をインポートしたら、セキュアな接続を使用するモニタを作成できます。

参照情報

[証明書管理] のユーザ・インタフェース

本項の内容






- ▶ [証明書管理] ページ (910 ページ)
- ▶ [証明書のインポート] ダイアログ・ボックス (912 ページ)
- ▶ [証明書の詳細] ダイアログ・ボックス (914 ページ)

[証明書管理] ページ

このページを使用して、SiteScope URL、URL Content、URL List、URL Sequence、VMware Performance、WebSphere Application Server の各モニタで使用する証明書を管理します。[証明書管理] ページでは、キーストアの内容を追加、削除、更新できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [証明書管理] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示 / 編集」権限を持つユーザのみです。 ▶ 列の並べ替え順序を変更するには、列・タイトルの矢印をクリックします。列が昇順または降順に並べ替えられていることを示す、小さい上向きまたは下向き矢印が表示されます。
関連タスク	908 ページの「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」
関連情報	906 ページの「証明書管理の概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	証明書のインポート ： [証明書のインポート] ダイアログ・ボックスが開きます。証明書が [証明書管理] のキーストア・リストに追加されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、912 ページの「[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	証明書の削除 ： 選択した証明書が [証明書管理] のキーストア・リストから削除されます。
	証明書リストの再読み込み ： リモート・サーバの < SiteScope のルート・ディレクトリ > %java%lib%security%cacerts ファイルからキーストア証明書を再読み込みします。これにより、SiteScope を再起動しなくても、キーストアの変更を手動で再読み込みできます。
	すべて選択 ： 表示されているすべての証明書を選択します。
	選択範囲を解除 ： 選択をクリアします。
< 証明書 >	インポートしたサーバ証明書のリストが表示されます。証明書をダブルクリックすると、 [証明書の詳細] ダイアログ・ボックスが開き、証明書のプロパティと値が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、914 ページの「[証明書の詳細] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
別名	証明書の別名。 注 ： インポート後の証明書の別名は変更できません (証明書のインポート操作時にのみ変更できます)。
発行者	証明書の発行者名。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。
バージョン	証明書のバージョン番号。



[証明書のインポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスを使用して、SiteScope URL モニタ、WebSphere アプリケーション・モニタ、VMware パフォーマンス・モニタで使用する証明書を [証明書管理] のキーストア・リストに追加します。[証明書管理] ページでは、キーストアの内容を追加、削除、更新できます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [証明書管理] を選択します。 [証明書のインポート] ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「証明書リストの表示 / 編集」権限を持つユーザのみです。 ▶ 列の並べ替え順序を変更するには、列・タイトルの矢印をクリックします。列が昇順または降順に並べ替えられていることを示す、小さい上向きまたは下向き矢印が表示されます。
関連タスク	908 ページの「証明書管理を使用したサーバ証明書のインポート方法」
関連情報	906 ページの「証明書管理の概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ソースの選択	
ファイル	ファイルから証明書を追加します。 [選択] ボタンをクリックし、証明書のインポート元のファイルに移動して、 [開く] をクリックします。必要な証明書を [証明書管理] のリストに追加します。
ホスト	ホスト・サーバから証明書を追加します。監視対象サーバの実 IP アドレスまたはホスト名を入力します。
ポート	ホスト・マシンのポート番号 ([ホスト] オプションが選択されている場合) のみ使用可能。 標準設定のポート値 : 443

UI 要素	説明
読み込み	[ホスト] フィールドで指定したマシンの証明書を読み込みます。証明書は [読み込み済み証明書] テーブルに表示されます。
読み込み済み証明書	
	すべて選択 : 表示されているすべての証明書を選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
別名	証明書の別名。証明書の別名を変更するには、証明書のインポート操作時に [別名] 列に新しい別名を入力します。 注 : 証明書をインポートした後に別名を変更することはできません。
発行者	証明書の発行者名。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。
バージョン	証明書のバージョン番号。
インポート	[読み込み済み証明書] テーブルからインポートするサーバ証明書を選択して、 [インポート] をクリックします。インポートした証明書が [証明書管理] ページに表示されます。

[証明書の詳細] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスには、選択したサーバ証明書のプロパティと値が表示されます。

アクセス方法	[プリファレンス] コンテキスト > [証明書管理] を選択します。[証明書管理] ページで証明書をダブルクリックします。
重要な情報	[証明書管理] ページで証明書キーストアの表示、追加、変更を行うことができるのは、SiteScope の管理者、または「 証明書リストの表示 / 編集 」権限を持つユーザのみです。
関連情報	906 ページの「証明書管理の概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
別名	証明書の別名。
証明書のプロパティ	
フィンガープリント	証明書のフィンガープリント。
タイプ	証明書のタイプ。
バージョン	証明書のバージョン番号。
発行者プリンシパル	証明書の発行者名。
シリアル番号	証明書のシリアル番号。
署名アルゴリズム名	証明書の署名アルゴリズムの名前。
次から有効	証明書の有効期間の開始日時。
次まで有効	証明書の有効期限の日時。

35

多言語化（I18N）環境での SiteScope の使用

本章の内容

概念

- ▶ 多言語ユーザ（MLU）インタフェースのサポート（916 ページ）

タスク

- ▶ SiteScope の英語以外のロケールの設定方法（918 ページ）
- ▶ 特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示（920 ページ）

参照情報

- ▶ 多言語化がサポートされているモニタ（921 ページ）
- ▶ **トラブルシューティングおよび制限事項**（923 ページ）

概念

多言語ユーザ (MLU) インタフェースのサポート

SiteScope ユーザ・インタフェースは、Web ブラウザで次の言語で表示できます。

言語	Web ブラウザの言語設定
英語	英語
フランス語	フランス語 [fr]
簡体中国語	中国語 (中国) [zh-cn], 中国語 (シンガポール) [zh-sg]
韓国語	韓国語 [ko]
日本語	日本語 [ja]

SiteScope の表示方法を指定するには、ブラウザの言語設定オプションを使用します。言語設定の選択は、ユーザのローカル・マシンだけに影響があり、SiteScope マシンや同じ SiteScope へのほかのユーザ・アクセスには影響しません。ユーザ・インタフェースの表示言語の設定の詳細については、920 ページの「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示」を参照してください。

注：言語は SiteScope へのログオン時に決定されます。ログインした後でブラウザの言語設定を変更しても、ログアウトしてログインしなおさないと有効にはなりません。

注意事項および制限事項

- ▶ 言語パックをインストールする必要はありません。表示されるすべての言語は SiteScope 多言語ユーザ・インタフェース (MLU) に統合されています。
- ▶ Web ブラウザの言語が変更されても、データは入力された言語で残されます。ローカル・マシンで Web ブラウザの言語を変更しても、モニタの定義および設定の言語は変更されません。
- ▶ サンプル・テンプレート、ソリューション・テンプレート、ビュー、および状況モニタなど、SiteScope インストールに含まれているエンティティの名前は英語のみです。
- ▶ インストール・ウィザードのユーザ・インタフェースではフランス語はサポートされていません。
- ▶ ユーザ・インタフェースに選択されている言語が日本語の場合、SiteScope ヘルプ を日本語で表示できます。[このページのヘルプ] または [SiteScope ヘルプ] を選択すると、日本語で表示されます。この機能を有効化するには、ソフトウェア・パッチをインストールする必要があります。詳細については、HP ソフトウェア・サポート (<http://www.support.openview.hp.com>) にお問い合わせください。
- ▶ [ヘルプ] ドロップダウン・リストのほかのリンク ([トラブルシューティング & ナレッジ ベース], [HP ソフトウェア・サポート], および [HP ソフトウェア Web サイト] など) も、選択したユーザ・インタフェース言語で表示されます。

タスク

SiteScope の英語以外のロケールの設定方法

このタスクでは、SiteScope を英語以外のロケールに設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 918 ページの「ロケールの版の設定変更」
- ▶ 918 ページの「新しいロケールの時間と日付の設定」
- ▶ 919 ページの「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示」
- ▶ 919 ページの「結果」

1 ロケールの版の設定変更

モニタ・ツリーで、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] を選択します。[メイン パネル] で、[国際化対応版] を選択して [保存] をクリックします。SiteScope を再起動します。これにより、SiteScope が複数の文字セットに対応するようになります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、695 ページの「国際化対応版」を参照してください。

2 新しいロケールの時間と日付の設定

SiteScope の新しいロケールの時間と日付を設定できます。

- a < SiteScope ルート・ディレクトリ > %groups%master.config をテキスト・エディタで開きます。
- b `_localeCountry=` というエントリを見つけ、大文字 2 文字の ISO-3166 国コードを割り当てます。次に例を示します。`_localeCountry=US`。国コードのリストは、http://www.chemie.fu-berlin.de/diverse/doc/ISO_3166.html (英語サイト) で入手できます。

- c `_localeLanguage=` というエントリを見つけ、小文字 2 文字の ISO-639 言語コードを割り当てます。次に例を示します。`_localeLanguage=en`。言語コードのリストは、
<http://www.ics.uci.edu/pub/ietf/http/related/iso639.txt> (英語サイト) で入手できます。
- d ファイルを保存し、SiteScope を再起動します。

3 特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示

SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語設定を選択します。

このタスクの実行方法の詳細については、920 ページの「特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示」を参照してください。

4 結果

SiteScope が複数の外国語の文字セットに対応するように設定されます。時間と日付の設定はロケール固有の形式で表示され、ユーザ・インタフェースは外国語で表示されます。

特定の言語での SiteScope ユーザ・インタフェースの表示

このタスクでは、SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語設定を選択する方法を説明します。

注: サポートされている言語のリストについては、916 ページの「多言語ユーザ (MLU) インタフェースのサポート」を参照してください。

- 1 ローカル・マシンに必要な言語のフォントがインストールされていない場合はインストールします。フォントがインストールされていない言語を Web ブラウザで選択すると、SiteScope ユーザ・インタフェースでは、ローカル・マシンの標準設定の言語が使用されます。

たとえば、ローカル・マシンの標準設定の言語が英語である場合に、日本語を使用するように Web ブラウザを設定するとします。日本語のフォントがローカル・マシンにインストールされていない場合、SiteScope ユーザ・インタフェースは英語で表示されます。

- 2 Internet Explorer を使用する場合、ローカル・マシンの Web ブラウザを設定して、SiteScope ユーザ・インタフェースを表示する言語を選択します。詳細については、<http://support.microsoft.com/kb/306872/ja-jp> を参照してください。手順 4 に進みます。
- 3 FireFox を使用する場合、ローカル・マシンで Web ブラウザを次のように設定します。
 - a [ツール] > [オプション] > [詳細] を選択します。[言語を編集] をクリックします。[言語] ダイアログ・ボックスが開きます。
 - b SiteScope を表示する言語を選択します。

使用する言語がダイアログ・ボックスにない場合は、[追加する言語を選択...] リストを展開して [追加] をクリックします。
 - c [上へ移動] をクリックして、選択した言語を最初の行に移動します。
 - d [OK] をクリックして設定を保存し、[言語] ダイアログ・ボックスを閉じます。
- 4 SiteScope ウィンドウ上部の [ログアウト] をクリックします。SiteScope が更新され、選択した言語でユーザ・インタフェースが表示されます。

参照情報

多言語化がサポートされているモニタ

次のモニタは多言語化がサポートされています。認定されているモニタは、アスタリスク (*) で示しています。

Windows オペレーティング・システムでサポートされているモニタ

- ▶ *CPU Monitor
- ▶ Database Counter Monitor
- ▶ *Database Query Monitor
- ▶ *Disk Space Monitor
- ▶ *DNS Monitor
- ▶ *e-Business Transaction Monitor
- ▶ *File Monitor
- ▶ *FTP Monitor
- ▶ Link Check Transaction Monitor
- ▶ *Log File Monitor
- ▶ *Memory Monitor
- ▶ Microsoft IIS Server Monitor
- ▶ Microsoft SQL Server Monitor
- ▶ Microsoft Windows Event Log Monitor
- ▶ Microsoft Windows Performance Counter Monitor
- ▶ Microsoft Windows Resources Monitor
- ▶ Oracle 9i Application Server Monitor
- ▶ *Oracle 10g Application Server Monitor
- ▶ *Oracle Database Monitor

- ▶ *Ping Monitor
- ▶ *Port Monitor
- ▶ *Script Monitor
- ▶ *Service Monitor
- ▶ SNMP Monitor
- ▶ SNMP Trap Monitor
- ▶ UDDI Monitor
- ▶ *URL Monitor
- ▶ URL Content Monitor
- ▶ URL List Monitor
- ▶ URL Sequence Monitor
- ▶ *VMware Performance Monitor
- ▶ Web Script Monitor

UNIX オペレーティング・システムでサポートされているモニタ

- ▶ CPU Monitor
- ▶ Database Query Monitor
- ▶ Disk Space Monitor
- ▶ Log File Monitor
- ▶ Port Monitor
- ▶ Script Monitor
- ▶ Service Monitor
- ▶ UNIX Resources Monitor
- ▶ URL Monitor
- ▶ URL Content Monitor
- ▶ URL Sequence Monitor

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、多言語化環境の SiteScope を使った作業に関連する次の問題のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 923 ページの「I18N 環境の SiteScope を使用する場合の一般的な制限事項」
- ▶ 924 ページの「データベース環境に関する問題」
- ▶ 924 ページの「リモート UNIX サーバが英語のロケールに設定されていない場合のトラブルシューティング」

I18N 環境の SiteScope を使用する場合の一般的な制限事項

- ▶ ユーザ名、パスワード、および URL は必ず英語の文字になります。
- ▶ SiteScope がインストールされているマシン (SiteScope マシン) と監視対象マシンのロケールを同じにする必要があります。標準設定のロケールは英語です。
- ▶ SiteScope マシンでは、英語と英語以外のロケールを使用できます。たとえば、監視対象マシンでドイツ語のロケールがサポートされている場合、SiteScope マシンではドイツと英語がサポートされます。英語以外のロケールの設定の詳細については、918 ページの「SiteScope の英語以外のロケールの設定方法」を参照してください。
- ▶ Web スクリプト・モニタをデプロイする場合、スクリプト名とトランザクション名も英語の文字にする必要があります。
- ▶ Redhat ES4 のスクリプト・モニタでは、英語以外の言語のパラメータはサポートされていません。
- ▶ SiteScope は、リモート UNIX マシンから取得された日付の解析に常に「en_US」ロケールを使用します (たとえば、ファイル・モニタの実行中など)。UNIX マシンの標準設定のロケールが en_US でない場合、このマシンの UNIX リモートの定義で [シェル環境の初期化] フィールドに「"LANG=C; export LANG"」が含まれている必要があります。
- ▶ SiteScope 管理レポートでは英語以外のラベルはサポートされていません。

データベース環境に関する問題

- ▶ Oracle データベースで新規の Oracle インスタンスを作成する場合は、インスタンスの文字セットを指定する必要があります。データ・ディクショナリ内のデータを含め、文字データはすべてインスタンスの文字セットを使って格納されます。
- ▶ データベース・クエリ・モニタが Oracle データベースに接続するには、Oracle のユーザ名とパスワードが英字のみを含んでいる必要があります。

リモート UNIX サーバが英語のロケールに設定されていない場合のトラブルシューティング

- ▶ 標準設定で英語ロケールまたは英語言語に設定されていない UNIX リモート・サーバを使用すると、ファイル・モニタとディレクトリ・モニタで問題が発生する可能性があります。**回避策**：問題のある UNIX リモート・サーバの [シェル環境の初期化] プロパティに "LANG=C; export LANG" を追加します。

36

SiteScope へログインのための認証方法の設定

本章の内容

概念

▶ 認証方法 - 概要 (926 ページ)

タスク

▶ SiteScope にログインするための認証方法の設定方法 (928 ページ)

概念

認証方法 - 概要

SiteScope の認証は認証方法の概念に基づいています。各方法は特定の認証サービスに照らし合わせて認証を処理します。常に SiteScope で設定できる認証サービスは 1 つだけです。

SiteScope にログオンするための標準設定の認証方法は SiteScope 内蔵認証サービスです。ログイン・ページで SiteScope のユーザ名とパスワードを入力すると、資格情報が SiteScope によって保管および検証されます。

SiteScope は、シングル・サインオン (SSO) をサポートしています。これは、一度ログオンしたユーザであれば、再びログオンせずに複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法の 1 つです。設定されたソフトウェア・システムのグループに属するアプリケーションは、認証されていることを信用しているため、アプリケーションから別のアプリケーションに移動するときにさらに認証処理を行う必要がありません。

SiteScope は、次の SSO 認証方法をサポートします。

▶ **ライトウェイト・シングル・サインオン (LW-SSO)** : これは SiteScope の標準設定のシングル・サインオン認証方法です。LW-SSO は、SiteScope に組み込まれており、認証処理を行う外部マシンは不要です。SiteScope のインストール後、LW-SSO を使用して統合されているすべての HP ソフトウェア・アプリケーションについて、標準設定のパスフレーズ文字列を直ちに変更する必要があります。SiteScope の SSO 標準設定値の変更の詳細については、928 ページの「SiteScope の Lightweight Single Sign-On 文字列の変更」を参照してください。

LW-SSO の使用に関する制限事項、セキュリティの警告、一般的な参照情報については、929 ページの「Lightweight シングル・サインオン認証 (LW-SSO) - 一般的な参照」を参照してください。

- ▶ **Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)** :Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) を使用して認証を設定できます。これによって認証情報（ユーザ名とパスワード）を保管するために外部の LDAP サーバを使用できます。SiteScope は LDAP サーバを使用してユーザの資格情報を検証します。ユーザ管理プリファレンスを使用して LDAP 認証を有効または無効にします。詳細については、849 ページの「LDAP 認証と承認」を参照してください。

タスク

SiteScope にログオンするための認証方法の設定方法

次の手順は SiteScope にログオンするための認証方法を設定する方法を説明します。

- ▶ 928 ページの「SiteScope の Lightweight Single Sign-On 文字列の変更」
- ▶ 928 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする - オプション」

SiteScope の Lightweight Single Sign-On 文字列の変更

SiteScope のインストール後、LW-SSO を使用して統合されているすべての HP ソフトウェア・アプリケーションについて、標準設定のパスフレーズ文字列を直ちに変更する必要があります。

- ▶ SiteScope 以外のアプリケーションでは、`lwssofmconf.xml` ファイルを見つけて、そのファイルの値を直接変更します。
- ▶ SiteScope では、< SiteScope ルート・ディレクトリ >
`¥conf¥lwss¥lwssofmconf.xml` ファイルで（サービスの初回読み込みの前のみ）直接変更できます。[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [LW SSO 設定] > [LW SSO 初期化文字列] で値を変更することもできます。

SiteScope が LDAP 認証を使用できるようにする - オプション

概念の詳細については、849 ページの「LDAP 認証と承認」を参照してください。

タスクの詳細については、853 ページの「SiteScope が LDAP 認証を使用するように設定する方法」を参照してください。

37

Lightweight シングル・サインオン認証 (LW-SSO) - 一般的な参照

本章の内容

概念

- ▶ LW-SSO 認証の概要 (930 ページ)

参照情報

- ▶ LW-SSO のシステム要件 (932 ページ)
- ▶ LW-SSO のセキュリティに関する警告 (933 ページ)
- ▶ トラブルシューティングおよび制限事項 (935 ページ)

概念

LW-SSO 認証の概要

LW-SSO は、一度ログオンしたユーザであれば、再びログオンせずに複数のソフトウェア・システムのリソースにアクセスできるようにするアクセス制御方法の 1 つです。設定されたソフトウェア・システムのグループに属するアプリケーションは、認証されていることを信用しているため、アプリケーションから別のアプリケーションに移動するときにさらに認証処理を行う必要がありません。

本項の情報は、LW-SSO バージョン 2.4 に適用されます。

本項の内容

- ▶ 930 ページの「LW-SSO トークンの期限」
- ▶ 930 ページの「LW-SSO トークンの期限の推奨設定」
- ▶ 931 ページの「GMT 時間」
- ▶ 931 ページの「マルチドメイン機能」
- ▶ 931 ページの「URL 機能のセキュリティ・トークンの取得」

LW-SSO トークンの期限

LW-SSO トークンの期限の数値により、アプリケーションのセッションの有効性が判断されます。そのため、期限の数値は、アプリケーションのセッション期限の数値と同じか、またはそれよりも大きな値にする必要があります。

LW-SSO トークンの期限の推奨設定

LW-SSO を使用するアプリケーションごとに、トークンの期限を設定する必要があります。推奨値は 60 分です。高度なセキュリティを必要としないアプリケーションの場合、値を 300 分に設定できます。

GMT 時間

LW-SSO に統合されているアプリケーションでは、すべて同じ GMT 時間を使用し、最大誤差を 15 分に抑える必要があります。

マルチドメイン機能

マルチドメイン機能では、LW-SSO 統合に含まれるアプリケーションを、別の DNS ドメインのアプリケーションに統合する必要がある場合、それらすべてのアプリケーションで **trustedHosts** (または **protectedDomains**) を設定する必要があります。さらに、設定の **lwssso** 要素に正しいドメインを追加する必要があります。

URL 機能のセキュリティ・トークンの取得

ほかのアプリケーションの URL に対する **セキュリティ・トークン** として送信された情報を取得するには、ホスト・アプリケーション設定の **lwssso** 要素で、正しいドメインを設定する必要があります。

参照情報

LW-SSO のシステム要件

次の表に、LW-SSO の設定要件を示します。

アプリケーション	バージョン	コメント
Java	1.5 以上	
HTTP サーブレット API	2.1 以上	
Internet Explorer	6.0 以上	ブラウザで、HTTP セッション cookie と HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要あり
Firefox	2.0 以上	ブラウザで、HTTP セッション cookie と HTTP 302 リダイレクト機能を有効にする必要あり
Jboss 認証	Jboss 4.0.3 Jboss 4.3.0	
Tomcat 認証	Standalone Tomcat 6.0.29	
Acegi 認証	Acegi 0.9.0 Acegi 1.0.4	
Spring Security 認証	Spring Security 2.0.4	
Web サービス・エンジン	Axis 1 - 1.4 Axis 2 - 1.2 JAX-WS-RI 2.1.1	

LW-SSO のセキュリティに関する警告

本項では、LW-SSO 設定に関するセキュリティの警告について説明します。

- ▶ **LW-SSO の InitString 機密パラメータ** : LW-SSO では、対称暗号化方式を使用して LW-SSO トークンを検証および作成します。設定内にある **initString** パラメータは、秘密鍵の初期化に使用します。アプリケーションでトークンが作成され、同じ **initString** パラメータを使用するアプリケーションにより、トークンが検証されます。

注意 :

- ▶ **initString** パラメータの設定を行わずに LW-SSO を使用することはできません。
 - ▶ **initString** パラメータは機密情報なので、公開、転送、永続性などの点で慎重に扱う必要があります。
 - ▶ **initString** パラメータは、LW-SSO を使用して相互に統合されたアプリケーション間でのみ共有する必要があります。
 - ▶ **initString** パラメータは 12 文字以上の長さにする必要があります。
-
- ▶ **必要な場合のみ LW-SSO を有効化** : 特に必要な場合を除き、LW-SSO を無効にする必要があります。
 - ▶ **認証セキュリティのレベル** : 最も弱いタイプの認証フレームワークを使用し、ほかの統合アプリケーションで信頼されている LW-SSO トークンを発行するアプリケーションにより、アプリケーション全体の認証セキュリティ・レベルが決まります。

強力で安全な認証フレームワークを使用するアプリケーションの場合のみ、LW-SSO トークンを発行することをお勧めします。

- ▶ **対称暗号化方式の意味** : LW-SSO では、対称暗号化方式を使用して LW-SSO トークンを発行および検証します。そのため、LW-SSO を使用するアプリケーションから、同じ **initString** パラメータを共有する、その他すべてのアプリケーションに信頼されたトークンを発行できます。**initString** を共有するアプリケーションが、信頼されていない場所に置かれているか、またはそのような場所からアクセスできる場合、リスクが発生する場合があります。
- ▶ **ユーザ・マッピング (同期)** : LW-SSO フレームワークでは、統合アプリケーション間のユーザ・マッピングが保証されていません。そのため、統合アプリケーションでユーザ・マッピングを監視する必要があります。すべての統合アプリケーションで、同じユーザ・レジストリ (LDAP/AD など) を共有することをお勧めします。

ユーザのマッピングに失敗すると、セキュリティ違反が発生し、さまざまなアプリケーションの複数ユーザに同じユーザ名が割り当てられるなど、アプリケーションの動作不良が発生する場合があります。

さらに、あるアプリケーション (AppA) にユーザがログオンしてから、コンテナ認証またはアプリケーション認証を使用する別のアプリケーション (AppB) にアクセスすると、ユーザのマッピングに失敗した場合に、ユーザが手動で AppB にログオンし、ユーザ名を入力する必要があります。ユーザが AppA へのログオンに使用していたのとは別のユーザ名を入力した場合、次のような動作が発生する場合があります。その後ユーザが AppA または AppB から第 3 のアプリケーション (AppC) にアクセスすると、AppA または AppB へのログオンに使用していたユーザ名で、AppC にアクセスしてしまいます。

- ▶ **ID マネージャ** : 認証目的で使用する場合、ID マネージャの保護されていないリソースは、すべて LW-SSO の **nonsecureURLs** 設定により構成する必要があります。
- ▶ **LW-SSO デモ・モード** :
 - ▶ このデモ・モードは実証目的のみに使用します。
 - ▶ デモ・モードはセキュリティが確保されていないネットワークでのみ使用してください。
 - ▶ デモ・モードは実運用環境では使用しないでください。デモ・モードと実運用モードを組み合わせ使用しないでください。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、LW-SSO 認証のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 935 ページの「既知の問題」
- ▶ 936 ページの「制限事項」

既知の問題

本項では、LW-SSO 認証の既知の問題について説明します。

- ▶ **セキュリティ・コンテキスト** : LW-SSO のセキュリティ・コンテキストでは、1 つの属性名につき 1 つの属性値のみがサポートされています。

そのため、SAML2 トークンから、同じ属性名の値が複数送信されても、LW-SSO フレームワークで許可される値は 1 つのみです。

同様に、IdM トークンから同じ属性名の値が複数送信されるよう設定されていても、LW-SSO フレームワークで許可される値は 1 つのみです。

- ▶ **Internet Explorer 7 を使用したマルチドメインのログアウト機能** : 次の状況では、マルチドメインのログアウトに失敗する場合があります

ブラウザに Internet Explorer 7 を使用していて、アプリケーションのログアウト手順で、3 回連続 HTTP 302 リダイレクトの動作が呼び出される。

この場合、Internet Explorer 7 で HTTP 302 リダイレクトの応答が正しく処理されず、[Internet Explorer ではこのページは表示できません] というエラー・ページが表示される場合があります。

回避策として推奨されるのは、アプリケーションのログアウト手順で、できるだけリダイレクト・コマンドの数を少なくすることです。

制限事項

LW-SSO 認証を使って作業する場合は次の制限事項に注意してください。

▶ アプリケーションへのクライアント・アクセス :

ドメインが LW-SSO 設定で定義されている場合 :

- ▶ アプリケーション・クライアントは、ログイン URL で FQDN (完全修飾ドメイン名) を持つアプリケーション (例 : `http://myserver.companydomain.com/WebApp`) にアクセスする必要があります。
- ▶ LW-SSO では、IP アドレスによる URL (`http://192.168.12.13/WebApp` など) はサポートされていません。
- ▶ LW-SSO では、ドメインなしの URL (`http://myserver/WebApp` など) はサポートされていません。

ドメインが LW-SSO 設定で定義されていない場合 : ログイン URL に FQDN が無い場合、クライアントはアプリケーションにアクセスできません。この場合、LW-SSO セッション cookie はドメイン情報なしで単一のマシン専用で作成されます。そのため、cookie はブラウザによってほかの cookie に委任されないで、同一の DNS ドメインにあるほかのコンピュータに渡されません。つまり、同一ドメインでは LW-SSO が機能しません。

- ▶ **LW-SSO フレームワークの統合 :** アプリケーションで LW-SSO の機能を活用できるのは、あらかじめ LW-SSO フレームワーク内に統合されている場合のみです。

▶ マルチドメインのサポート :

- ▶ マルチドメイン機能は、HTTP リファラに基づいています。そのため LW-SSO では、アプリケーション間のリンクはサポートされていますが、2 つのアプリケーションが同じドメインにある場合を除き、ブラウザ・ウィンドウへの URL の入力にはサポートされていません。
- ▶ 最初のクロス・ドメイン・リンクに **HTTP POST** を使用することはサポートされていません。

マルチドメイン機能では、最初のアプリケーションから 2 番目のアプリケーションへ **HTTP POST** を要求することはサポートされていません (**HTTP GET** 要求のみサポートされています)。たとえば、最初のアプリケーションから 2 番目のアプリケーションへの HTTP リンクがある場合、**HTTP GET** 要求はサポートされていますが、**HTTP FORM** 要求はサポートされていません。2 回目以降の要求は、すべて **HTTP POST** か **HTTP GET** のいずれかです。

▶ LW-SSO トークンのサイズ :

LW-SSO が、あるドメインのアプリケーションから別のドメインのアプリケーションに転送できる情報量は、15 グループ / ロール / 属性までに制限されています (各項目は平均 15 文字長)。

▶ マルチドメイン・シナリオでの、保護されたページ (HTTPS) から保護されていないページ (HTTP) へのリンク :

保護されたページ (HTTPS) から保護されていないページ (HTTP) にリンクする場合、マルチドメインは機能しません。これはブラウザの制限事項の 1 つです。この場合、保護されたリソースから保護されていないリソースにリンクするときに、Referer ヘッダが送信されません。具体例については、次の URL を参照してください。

<http://support.microsoft.com/support/kb/articles/Q178/0/66.ASP>

▶ サードパーティ cookie の Internet Explorer での動作 :

Microsoft Internet Explorer 6 には、P3P (Platform for Privacy Preferences) プロジェクトをサポートするモジュールが含まれています。そのため、サードパーティ・ドメインの cookie は、標準設定で [インターネット] セキュリティ・ゾーンでブロックされています。IE では、セッションの cookie もサードパーティ cookie とみなされるため、セッションの cookie もブロックされてしまい、LW-SSO が機能しません。

この問題を解決するには、起動したアプリケーション (または *.mydomian.com などの DNS ドメイン・サブセット) を、コンピュータの [ローカルイントラネット] または [信頼済みサイト] ゾーンに追加します (Microsoft Internet Explorer の場合、メニューから [ツール] > [インターネット オプション] > [セキュリティ] > [ローカルイントラネット] > [サイト] > [詳細設定] をクリックします)。こうすることで、cookie が許可されます。

注意 : LW-SSO のセッション cookie は、ブロックされているサードパーティ・アプリケーションで使用する cookie の 1 つにすぎません。

▶ SAML2 トークン :

▶ SAML2 トークンを使用する場合、ログアウト機能がサポートされません。

そのため、SAML2 トークンを使用して 2 番目のアプリケーションにアクセスすると、ユーザが最初のアプリケーションからログアウトしても 2 番目のアプリケーションからログアウトされません。

- ▶ SAML2 トークンの期限切れは、アプリケーションのセッション管理に反映されません。

そのため、SAML2 トークンを使用して 2 番目のアプリケーションにアクセスする場合、各アプリケーションのセッション管理は個別に処理されます。

- ▶ **JAAS Realm** : Tomcat の JAAS Realm はサポートされていません。
- ▶ **Tomcat ディレクトリでのスペースの使用** : Tomcat ディレクトリでのスペースの使用はサポートされていません。

Tomcat のインストール・パス (フォルダ) にスペースが含まれている場合 ([Program Files] など)、および LW-SSO 設定ファイルが Tomcat の **common¥classes** フォルダに置かれている場合、LW-SSO を使用できません。
- ▶ **ロード・バランサの設定** : LW-SSO によりデプロイされたロード・バランサは、セッション維持を使用するよう設定する必要があります。
- ▶ **デモ・モード** : デモ・モードでは、LW-SSO は、アプリケーション間のリンクはサポートされていますが、ブラウザ・ウィンドウへの URL の入力にはサポートされていません。これは、この場合、HTTP リファラ・ヘッダがないためです。

第 VIII 部

ユーザ定義のテンプレート

38

SiteScope テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope テンプレートの概要 (942 ページ)
- ▶ テンプレートについて (944 ページ)
- ▶ テンプレート例 (948 ページ)
- ▶ テンプレートの計画 (949 ページ)
- ▶ テンプレート変数を使った作業 (951 ページ)
- ▶ モニタ・テンプレートのカウンタ選択 (957 ページ) タスク
- ▶ テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 (962 ページ)
- ▶ 既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法 (972 ページ)
- ▶ 正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法 (974 ページ)

参照情報

- ▶ 予約済みテンプレート・グループ・タイプ (975 ページ)
- ▶ SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース (976 ページ)

概念

SiteScope テンプレートの概要

テンプレートによって、サーバ、アプリケーション、データベース、ネットワーク環境など、企業内のさまざまな IT 要素の監視を標準化するエンタープライズ・ソリューションを提供します。インフラストラクチャ内にある、同じような特性を持つシステムをチェックする一連のモニタを迅速にデプロイするには、テンプレートを使用します。

SiteScope は次のタイプのテンプレートを提供します。

- ▶ ユーザ定義のテンプレート（本章で説明）。
- ▶ 定義済みのソリューション・テンプレート。詳細については、1081 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレート」を参照してください。
- ▶ モニタ・デプロイメント・ウィザード・テンプレート。詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「モニタ・デプロイメント・ウィザードのテンプレートと変数」を参照してください。

SiteScope テンプレート使用の利点

- ▶ 組織の要件に合わせて独自のテンプレートを作成およびカスタマイズできます。
- ▶ SiteScope テンプレートは、一連のモニタ・タイプや設定を 1 つの構造にまとめて標準化するために使用します。この構造を、監視対象環境の複数の要素を対象とするモニタのグループとして、繰り返しデプロイできます。
- ▶ テンプレートを使用することで、グループ、モニタ、警告、リモート・サーバ、設定のデプロイメントを 1 回の操作で実行できるため、企業全体へのモニタのデプロイメント時間が短縮されます。

- ▶ テンプレートによって、実際の監視対象デプロイメントがテンプレートに定義されている標準化されたデプロイメントにどの程度準拠しているかを表示できます。これにより、監視対象環境に発生した変化は監視側のインフラストラクチャで迅速に更新されます。また、監視側のインフラストラクチャでは、テンプレートの標準セットへの準拠が維持されます。
- ▶ 各テンプレートを個別にデプロイする代わりに複数のテンプレートを同時にデプロイできます。また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外側で CSV ファイルを使用することで、同じテンプレートの一括デプロイメントを実行することもできます。テンプレートのデプロイのさまざまな方法については、1010 ページの「SiteScope テンプレートのデプロイの概要」を参照してください。CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイの詳細については、1011 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。
- ▶ サイレント・テンプレート・デプロイメントを使用してデプロイメント要求を送信し、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。テンプレート・デプロイメント要求は、キューに入れられ、バックグラウンドで処理されます。キュー内のすべての要求が完了する前に SiteScope が再起動された場合、再起動後にデプロイメントの処理が自動的に続行されます。
- ▶ テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートを変更し、その変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに適用できます。しきい値の変更や、新しいモニタや警告が必要になるなど、テンプレート・オブジェクトに変更が必要な場合、テンプレートを 1 回更新すれば、各オブジェクトを個別に更新せずに変更をすべてのデプロイ済みグループに適用できます。変更の適用の詳細については、1029 ページの「ユーザ定義テンプレートの適用」を参照してください。
- ▶ ほかの SiteScope インストールで使用できるようにテンプレートをエクスポートおよびインポートします。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。テンプレートのエクスポートおよびインポートの詳細については、1001 ページの「テンプレートのインポートおよびエクスポート」を参照してください。

テンプレートについて

テンプレートは、事前定義したパターンと設定に従ってグループ、サーバ、モニタ、警告を再現するために使用するオブジェクトです。テンプレートを SiteScope 階層内の場所にコピーすることで、テンプレートに定義された項目のすべてを 1 回の操作でデプロイできます。また、テンプレート変数を使用して特定のモニタ、サーバ、警告の設定をテンプレートのデプロイ時に対話形式で行うこともできます。テンプレートを作成したら、必要に応じて何回でもモニタのデプロイに使用できます。

次の方法は、作成したテンプレートに設定を追加する場合に使用します。

- ▶ 既存のグループとモニタ階層を SiteScope からテンプレートにコピーし、それらの要素をテンプレートとして使用できるように編集します。詳細については、972 ページの「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。
- ▶ 企業内に適切な SiteScope モニタ要素がない場合、または新しいオブジェクトや設定を作成する場合、手動でテンプレート内にテンプレート・グループ、モニタ、サーバ、警告を作成できます。詳細については、962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。

ヒント:

- ▶ SiteScope 監視がまだ設定されておらず、SiteScope モニタとグループを使った作業に慣れていない場合は、テンプレートを作成する前にサンプルのグループ、モニタ、警告を設定します。これにより、モニタの設定とモニタ、グループ、警告間の関係を理解することができます。その後、SiteScope から構造をコピーし、設定をテンプレートに変換できます。
 - ▶ テンプレートの作業を開始しやすいように、SiteScope には Windows と UNIX の環境を監視するためのテンプレート例が付属されています。詳細については、948 ページの「テンプレート例」を参照してください。
-

本項の内容

- ▶ 945 ページの「テンプレートの要素と機能」
- ▶ 946 ページの「テンプレート・オブジェクト」

テンプレートの要素と機能

テンプレートは、テンプレート・ビューでテンプレート・コンテナ内に作成します。作成した要素はテンプレート・ツリーに表示され、変更やデプロイメントの際にアクセスできます。詳細については、944 ページの「テンプレートについて」を参照してください。

テンプレートを使用して、標準化した監視パターンをインフラストラクチャの複数の要素にデプロイできます。テンプレートには複数のオブジェクト・タイプを追加できるため、テンプレートを効果的にデプロイして使用するには計画が必要です。詳細については、949 ページの「テンプレートの計画」を参照してください。

テンプレートを作成するには、グループ、リモート・サーバ定義、モニタ、警告、変数をテンプレートに追加して設定します。テンプレート変数は、テンプレートをデプロイするたびに動的または対話的に変更する設定値の置換マーカとして使用します。変数の作成と参照は、各テンプレートで独自に行います。詳細については、951 ページの「テンプレート変数を使った作業」を参照してください。

一部の SiteScope モニタ・タイプでは、測定カウンタ・ブラウザ機能を使用して、監視で使用できるメトリックスがあるかどうかアプリケーションとシステムを動的に照会します。これらのモニタのいずれかを手動で作成する場合、複数ステップからなる手順を使用してカウンタを表示および選択します。テンプレートをデプロイするときのカウンタの選択には、別の方法を使用します。詳細については、974 ページの「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」を参照してください。

テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。テンプレートのデプロイの詳細については、970 ページの「テンプレートのデプロイ」を参照してください。その後、ソース・テンプレートを変更する場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに変更を自動的に適用できます。テンプレートの更新の詳細については、1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

ほかの SiteScope インストールでテンプレートを使用する場合、テンプレートをファイルに保存し、エクスポート・ファイルをほかの SiteScope サーバにコピーして、使用するテンプレートが含まれるテンプレート・コンテナ・オブジェクトをインポートします。テンプレートのエクスポートおよびインポートの詳細については、1001 ページの「テンプレートのインポートおよびエクスポート」を参照してください。



注：






- ▶ SiteScope テンプレートの内部プロパティの設定の詳細については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。
- ▶ テンプレートの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。

テンプレート・オブジェクト

テンプレートは、テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナ内に作成され、保存されます。テンプレートを使用して設定できるテンプレート変数定義と SiteScope オブジェクトは、テンプレート内にオブジェクトとして表示されます。

次の表では、テンプレートで使用するオブジェクトについて説明します。

アイコン	オブジェクト・タイプ	説明
	テンプレート・コンテナ	テンプレート・コンテナでは、テンプレート監視ソリューションを管理できます。テンプレートは、テンプレート・コンテナにのみ追加できます。このオブジェクトの設定の詳細については、981 ページの「[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート	テンプレートには、テンプレート監視ソリューションを構成する SiteScope グループ、モニタ、リモート・サーバ、変数定義、警告が含まれています。このオブジェクトの設定の詳細については、982 ページの「[新規テンプレート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

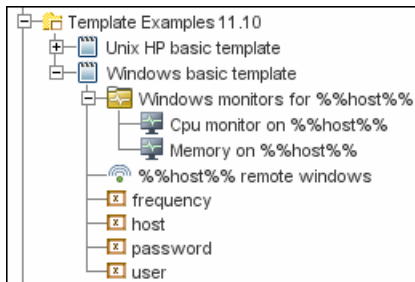
アイコン	オブジェクト・タイプ	説明
	テンプレート変数	変数を使用して、テンプレートのデプロイ時にユーザ入力を促すメッセージを表示します。テンプレート変数は、ユーザ定義または事前定義されたシステム変数です。このオブジェクトの設定の詳細については、985 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート・リモート・サーバ	テンプレート・リモート・サーバを使用して、テンプレートのデプロイ時に作成される Windows または UNIX のリモート・サーバ・プリファレンスを定義します。このオブジェクトの設定の詳細については、988 ページの「[新規テンプレート リモートサーバ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート・グループ	テンプレート・グループには、テンプレート・モニタと、関連付けられた警告が含まれます。テンプレート・グループを使用して、モニタおよび関連付けられた警告のインフラストラクチャへのデプロイメントを管理します。このオブジェクトの設定の詳細については、990 ページの「[新規テンプレート グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート・モニタ	テンプレート・モニタを使用して、テンプレートのデプロイ時に作成されるモニタを定義します。このオブジェクトの設定の詳細については、996 ページの「[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート警告	テンプレート警告を使用して、テンプレートのデプロイ時に作成されるグループおよびモニタに関する警告を定義します。テンプレート・モニタまたはグループに警告が設定されている場合、そのモニタまたはグループ・アイコンの横に警告記号が表示されます。このオブジェクトの設定の詳細については、999 ページの「[新規警告] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

🔗 テンプレート例

SiteScope には、Windows と UNIX の環境で監視するためのテンプレート例が付属しています。これらのテンプレートは、テンプレート・ツリーの [Template Examples 11.10] フォルダから使用できます。テンプレート例を使用して、SiteScope テンプレートの使用方法を習熟できます。また、テンプレート例を使用して次のことを確認できます。

- ▶ テンプレート・グループ、モニタ、リモート・サーバの使用方法
- ▶ テンプレート・リモート・サーバとそれを使用するモニタ間の接続
- ▶ 変数値の使用法とシステム変数の使用法

次の例は、[Windows basic template] を示しています。テンプレートには、テンプレート・グループである [Windows monitors for %%host%%]、2 つのテンプレート・モニタ (CPU、メモリ)、4 つのユーザ定義変数 (ホスト、ユーザ、パスワード、頻度)、テンプレート・リモート・サーバが含まれています。



テンプレートの計画

SiteScope を効果的に管理するには、テンプレートの計画が重要になります。テンプレート構造内でのグループとモニタの関係とプロパティ、また、それを監視環境全体にどのように適合させるかを考慮する必要があります。

テンプレートを計画する際の考慮事項を次に示します。

オブジェクト	考慮事項
可変プロパティ	テンプレートのデプロイメントに応じて変わるモニタ設定プロパティを決定します。たとえば、監視対象のサーバ・アドレスやリソースは一般的な可変プロパティです。グループとモニタに使用する命名規則も考慮する必要があります。テンプレートをデプロイするたびに可変プロパティの値を入力または選択するには、テンプレート変数を使用します。変数を使用して設定できないモニタ設定プロパティもあります。詳細については、951 ページの「テンプレート変数を使った作業」を参照してください。
サーバ	監視対象サーバにするサーバを決定します。これは、監視対象のオブジェクトが存在する場所です。テンプレート・サーバは、テンプレートのデプロイ時に自動的に複製されます。リモート・サーバ・ツリーの [Microsoft Windows リモートサーバ] または [UNIX リモートサーバ] コンテナで手動で定義することもできます。詳細については、582 ページの「リモート・サーバの概要」を参照してください。
モニタ・タイプ	テンプレートを使用して複製するモニタ・タイプを決定します。これは、複数のシステムを監視するモニタ・タイプである必要があります。たとえば、CPU、ディスク、メモリ、サービスの各モニタ・タイプは、一般的にインフラストラクチャのサーバごとにデプロイされます。テンプレートにサービス・モニタ・タイプの複数のインスタンスを含めて、各サーバで実行されているさまざまなサービスやプロセスを監視することもできます。

オブジェクト	考慮事項
共通のプロパティ	テンプレートのデプロイメント間で同じ設定プロパティについては、値を決定する必要があります。たとえば、 [頻度] 設定は、モニタ・タイプごとに必要な設定です。標準設定は 10 分です。監視対象と全体的なモニタ負荷に応じて、この値を変更し、テンプレートを使用して作成したモニタの実行頻度を高くすることもできます。
グループ構造	モニタの整理に使用するグループ構造を決定します。テンプレート内の組織のグループとモニタには、環境内の監視を整理するための全体的な計画との互換性が必要です。使用するグループ構造は、レポート、警告、監視に影響する可能性があります。
警告	テンプレートの一部として警告をデプロイするかどうかを決定します。テンプレートとモニタにどの警告のタイプとアクションを関連付けるか検討します。テンプレートの一部としてデプロイする警告の [警告ターゲット] プロパティが、テンプレート内に定義されているすべてのモニタに設定されます (1461 ページの「SiteScope 警告ページ」を参照)。たとえば、テンプレート・グループに追加したテンプレート警告は、そのグループに属するすべてのモニタに関する警告を通知します。これが計画している警告に合わない場合、デプロイメント後に警告設定を編集するか、手動で警告を追加する必要があります。

テンプレート変数を使った作業

テンプレート変数を使用しなくてもテンプレートを作成できますが、変数の使用によってテンプレートの能力とユーティリティを十分に活用できるようになります。テンプレート変数は、モニタ設定の置換マークです。テンプレートのデプロイ時にいつでも変更できるモニタ設定を使用する場合に、テンプレート変数を作成します。1 つ以上のテンプレート・モニタのテキスト・ボックスで、変数を参照します。テンプレート内のモニタまたはグループ・オブジェクトで参照された各変数によって、テンプレートのデプロイ時に対応する入力ボックスの表示が促されます。変数名がテキスト入力ボックスのラベルとして使用されます。

テンプレート変数の一般的な使用例を次に示します。

- ▶ サーバまたはホスト・アドレス
- ▶ ディスク・ドライブ指定子
- ▶ ファイルのパス
- ▶ モニタ名の詳細

注: テンプレート・ツリーの [Template Examples 11.10] フォルダで、テンプレートに使用する変数の例を参照できます。詳細については、948 ページの「テンプレート例」を参照してください。

テンプレート変数の使用についてのガイドライン

- ▶ サーバやモニタなどほかのテンプレート・オブジェクトを作成する前に、テンプレート変数の計画を立てて作成する必要があります。これにより、テンプレートにオブジェクトを追加するときに、テンプレートのモニタ、グループ、または警告に、変数への参照を入力できます。テンプレート・オブジェクトですでに参照されているテンプレート変数を削除する場合、無効なリンクをクリアするためにテンプレートから参照オブジェクトを削除する必要があります。テンプレート変数の参照の詳細については、955 ページの「テンプレート変数の参照」を参照してください。
- ▶ 一部のモニタ設定は、テンプレート変数を使用して設定できません。リモート・サーバ選択メニューを除き、通常は選択ドロップダウンを使用して選択される設定項目は、テンプレート変数を使用して定義できません。通常はチェック・ボックスまたはラジオ選択を使用して選択される設定項目は、テンプレート変数を使用して設定できません。
- ▶ テンプレート変数は常に、その変数が存在するテンプレート・コンテナの子要素です。変数を参照して、テンプレート内のグループ、モニタ、または警告設定テンプレートの設定を定義するために使用できます。SiteScope のテンプレート変数のタイプとその固有の構文規則の詳細については、953 ページの「変数の構文」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 953 ページの「変数の構文」
- ▶ 955 ページの「テンプレート変数の参照」

変数の構文

SiteScope では、次のテンプレート変数のタイプを使用できます。

- ▶ **ユーザ定義変数**：テンプレートをデプロイする際のテキストベースの値の入力に使用します。ユーザ定義変数には、変数名の両側に「%%」記号を使用する必要があります。
- ▶ **システム変数**：SiteScope で認識されているリモート・サーバのリストとシステム時刻情報の両方にアクセスするために使用する、事前定義された変数のセット。システム変数には、変数名の両側に「\$\$」記号を使用する必要があります。

注：ユーザ定義および事前定義のシステム変数は、テンプレートを設定する時にすべてのテキスト・フィールドおよびテキスト・テーブル・セルで使用できます。使用可能な変数のリストを表示するには、フィールドに %% と \$\$ のいずれかを入力し、関連する変数を選択します。これでフィールドに変数が表示されます。

変数の各タイプには、次項に記載されているように固有の構文規則があります。

ユーザ定義変数の構文

ユーザ定義のテンプレート変数には、英数字とアンダースコアのみ使用できます。変数は、必要な数だけ作成できます。

有効なテンプレート変数構文の例を次に示します。

```
description_text
DiskDrive
TARGET_URL
matchExpression
```

表示される設定パラメータを説明する変数名を選択する必要があります。変数名は、テンプレートのデプロイ時に変数の値の入力ウィンドウにある変数入力ボックスのラベルとして使用されます。

システム変数の構文

SiteScope では、いくつかの事前定義されたテンプレート変数を認識します。これらの値はシステムで認識され、SiteScope のサーバ、NetBIOS などの検出されたサーバ、およびリモート UNIX などのユーザ定義のサーバ接続プロファイルのリストを含みます。事前定義されたシステム変数の構文と詳細を次に示します。

システム変数の構文	説明
\$\$SERVER_LIST\$\$	プラットフォームで認識されるすべてのサーバのいずれかを選択するリストを返します。[サーバ] または [ホスト名] プロパティのみでリモート・サーバの選択を有効にする場合にこの変数を使用します。
\$\$SERVER_NAME\$\$	\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数の派生。現在のサーバの名前の前に ¥¥ (バックスラッシュ) を追加して返します。ほかのボックスのサーバを参照する場合に使用します。
\$\$SERVER_NAME_BARE\$\$	\$\$SERVER_LIST\$\$ 変数の派生。現在のサーバの名前の前に ¥¥ (バックスラッシュ) を追加せずに返します。サーバの名前のみを必要とするボックスでサーバを参照する場合 (たとえば、CPU モニタをデプロイする場合または詳細「サーバ Mail のディスク領域」のサーバの名前を参照する場合) に使用します。
\$\$DATE\$\$	SiteScope を実行しているサーバのシステム日付を返します。モニタが作成された日付を名前または詳細に追加する場合に使用します。
\$\$TIME\$\$	SiteScope を実行しているサーバのシステム時刻を返します。モニタが作成された時刻を名前または詳細に追加する場合に使用します。値は、テンプレートがデプロイされた時刻を表します。

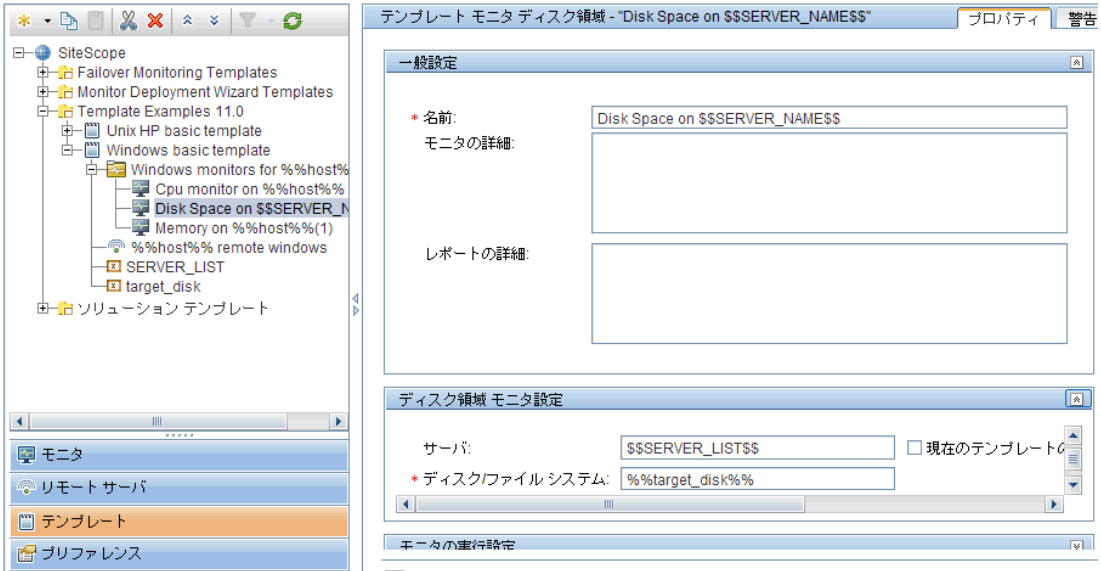
テンプレート変数の参照

テンプレート変数をテンプレートへ追加したら、モニタまたはグループ設定オブジェクトでそのテンプレート変数への参照を作成する必要があります。変数の参照に使用する構文は、変数のタイプにより異なります。

変数タイプ	構文	情報
ユーザ定義	%%variable_name%%	<p>参照は大文字と小文字を区別し、構文に依存します。</p> <p>注：ユーザ定義のテンプレート変数は、モニタまたはグループ設定テンプレートで参照する前に作成する必要があります。テンプレート変数としてテンプレートに追加されていないテキスト文字列に %% 記号を使用した場合、一致する変数名が後から追加されたとしても、テンプレート変数への参照は作成されません。</p>
システム	\$\$VARIABLE_NAME\$\$	<p>参照は大文字と小文字を区別し、構文に依存します。</p> <p>\$\$\$SERVER_LIST\$\$\$ 変数は、テンプレートの変数として明示的に定義する必要があります。この変数の定義後、モニタまたはグループ設定オブジェクトで直接 \$\$VARIABLE_NAME\$\$ 構文を使用して \$\$\$SERVER_NAME\$\$\$ と \$\$\$SERVER_NAME_BARE\$\$\$ 変数を参照することによって、これらの変数を設定オブジェクトで使用できます。</p> <p>\$\$TIME\$\$ と \$\$DATE\$\$ 変数を直接参照することもできます。</p> <p>システム変数の詳細については、953 ページの「変数の構文」を参照してください。</p>

例 - ユーザ定義変数とシステム変数の参照

モニタ・テンプレートのユーザ定義変数, `$$$SERVER_LIST$$`, 派生システム変数を参照する方法の例を次に示します。



モニタ・テンプレートのカウンタ選択

SiteScope には、監視対象システム固有の測定値を監視するために設計された多数のアプリケーション・モニタ・タイプが含まれています。これらの参照可能なカウンタ・モニタ・タイプでは、[モニタ設定] 表示枠の [カウンタの取得] または [測定値の取得] ブラウザ機能を使用します。これらのモニタ・タイプを手動で設定する場合、モニタ・タイプの選択後に次の手順が必要です。

- ▶ 監視対象システムへの接続プロパティを指定し、SiteScope でリモート・システムから測定値カウンタを取得するように要求します。
- ▶ 監視対象のカウンタを選択し、設定に追加します。その後、モニタを SiteScope に追加できます。

テンプレートを使用したモニタのデプロイでは、カウンタ選択に独立した手順を使用しません。テンプレートを使用したこれらのモニタ・タイプのカウンタの選択を有効にするには、別のメカニズムを使用します。SiteScope では、テンプレート・デプロイメントのカウンタ選択手順を自動化するために、テキスト照合または正規表現照合を使用します。テンプレート・モニタの作成時に、カウンタ選択の手順を使用します。

テンプレートのカウンタ選択で最も簡単な方法は、モニタ・テンプレートで特定のカウンタを明示的に選択することです。この方法により、デプロイメント中に照合カウンタの選択に使用する明示的テキスト照合が作成されます。明示的に選択したカウンタを含む参照可能なカウンタ・モニタ・タイプを追加するために必要な手順の詳細については、967 ページの「テンプレート・モニタ・インスタンスの作成」を参照してください。

監視対象システムの特定のカウンタがデプロイメントによって異なる場合、監視するカウンタのタイプまたはカテゴリを表すパターンの照合に、正規表現を使用できます。詳細については、次を参照してください。

本項の内容

- ▶ 958 ページの「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更」
- ▶ 958 ページの「正規表現を使用したカウンタ選択」
- ▶ 961 ページの「保存可能なカウンタの最大数」

正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更

正規表現を使用するために、モニタの作成時にテンプレート・モニタのカウンタ選択文字列を変更するか、後からモニタを編集できます。正規表現カウンタ照合用にテンプレート・モニタを変更する方法の詳細については、974 ページの「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」を参照してください。

正規表現を使用したカウンタ選択

多くのアプリケーションには、実行しているシステム、システム・オプションの設定、インストールされているコンポーネントによって異なる多数の測定値カウンタがあります。この場合、モニタ・テンプレートで明示的にカウンタを選択すると、アプリケーションまたはシステムの複数のインスタンスに渡って役に立たない可能性があります。一部のシステムには、パターンが似ていてもノードの名前またはオブジェクト・コンテキストが異なる測定値カウンタがあります。複数の測定値カウンタの選択を自動化するために、モニタ・テンプレートで正規表現を使用できます。

注：この正規表現カウンタ照合機能を使用するには、監視対象のシステムのカウンタの知識が必要です。テンプレートに追加するモニタ・タイプを手動で設定し、監視対象のシステムのタイプで使用可能なカウンタを慎重に確認する必要があります。リモート・システムで多数のカウンタを照合する「欲張りな」正規表現を作成すると、SiteScope のパフォーマンスが低下する可能性があります。

正規表現を使用するテンプレート・モニタを作成する手順は、前のセクションで説明されている手順と非常に似ています。明示的に監視するためのすべてのカウンタを選択する代わりに、選択するすべてのカウンタを代表する 1 つ以上のカウンタを選択します。モニタ・テンプレートでのカウンタ選択は、テキスト文字列で保存されます。モニタのデプロイ時に、選択したカウンタとの一致を検索するために SiteScope で使用するパターンを作成するには、この文字列を編集します。

注: 正規表現を使用して測定値カウンタを選択するか、しきい値を照合する場合、SiteScope では、相等性チェックを実行するのではなく、1 つの文字列が別の文字列の一部であるかどうかのみを確認します。このため、デプロイ後にモニタで誤ったカウンタおよびしきい値のセットが定義される可能性があります。たとえば、選択されているモニタのしきい値が x/y である場合、 x/yy も正規表現に一致するので、このしきい値も定義されます。

例 - 正規表現の使用

- ▶ **例 1:** テンプレートで [MIB による SNMP] モニタ・タイプのカウンタを選択する場合に、正規表現を使用する方法の簡単な例を次に示します。

インフラストラクチャの複数の SNMP エージェントから、次の 3 つのカウンタを監視するとします。

```
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysDescr
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysUpTime
iso/org/dod/internet/mgmt/mib-2/system/sysName
```

テンプレート・モニタで 3 つのカウンタすべてを明示的に選択できます。あるいは、いずれか 1 つを選択して、カウンタ文字列を次のような正規表現に変更できます。

```
/iso¥/org¥/dod¥/internet¥/mgmt¥/mib-2¥/system¥/sys[DUN][a-zT]*/
```

この例では、文字列の前後にスラッシュ (/) のペアを追加するようにカウンタ選択文字列が編集されています。この処理は、文字列が正規表現として解釈されるために必要となります。選択文字列には初期状態で複数のスラッシュ (/) が含まれているため、これらの文字のすぐ前にバックスラッシュ (¥) を追加してエスケープする必要があります。[DUN][a-zT]* 文字列には、正規表現構文で一般的に使用される 2 つの文字クラス宣言が含まれています。正規表現構文の詳細については、235 ページの「正規表現の使用」を参照してください。

- ▶ **例 2:** テンプレートで [Unix リソース] モニタ・タイプのカウンタを選択する場合に、正規表現を使用する方法の例を次に示します。

インフラストラクチャの複数の UNIX または Linux サーバで実行されているデーモン・プロセスを監視するとします。実行中のプロセスのリストに次の情報が含まれています。

```
Process¥-bash¥NUMBER RUNNING
Process¥../java/bin/java¥NUMBER RUNNING
Process¥./ns-admin¥NUMBER RUNNING
Process¥./ns-proxy¥NUMBER RUNNING
Process¥./ns-sockd¥NUMBER RUNNING
Process¥/bin/sh¥NUMBER RUNNING
Process¥/etc/init¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/apache/bin/httpd¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/nfs/statd¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/saf/sac¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/saf/ttymon¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/snmp/snmpdx¥NUMBER RUNNING
Process¥/usr/lib/ssh/sshd¥NUMBER RUNNING
...
```

文字「d」で終わるプロセスのみと照合する、正規表現カウンタ選択文字列を作成できます。このパターンを照合する正規表現の例を次に示します。

```
/Process[¥W¥w]{5,18}d[¥W]{1,2}NUMBER RUNNING/
```

例 1 のように、カウンタ選択文字列には、文字列が正規表現であることを示すために文字列の前後にスラッシュ (/) が含まれています。この例の UNIX サーバのプロセス文字列には、バックスラッシュ (¥) とスラッシュ (/) の組み合わせが含まれています。これらの文字は正規表現で特別な意味を持つため、エスケープする必要があります。プロセス文字列には、これらの文字やその他の記号の多くのバリエーションと組み合わせが含まれるため、エスケープが複雑になる場合があります。

この例で使用した正規表現では、文字クラス宣言を使用して表現を簡素化しています。[¥W] クラスは句読点の照合に使用されています。この照合では、文字を個別にエスケープする必要がなく、一部のプロセス文字列で使用される ¥, -, :, / の文字に一致します。正規表現構文の詳細については、235 ページの「正規表現の使用」を参照してください。

保存可能なカウンタの最大数

ブラウザ可能なモニタはモニタに指定されたカウンタ数によって制限されます。カウンタの最大数は、`master.config` ファイルの `_browsableContentMaxCounters` パラメータによって決定されます（[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [モニタ設定] > [選択されるブラウザ可能カウンタの最大数] でも設定できます）。この値よりもカウンタ数が多くなるようにモニタを作成または編集する場合、この値のカウンタ数までしか保存されません。

ブラウザ可能なモニタがテンプレートにデプロイされる時、選択されたパターンに一致するカウンタ数は `master.config` ファイルの `_maxCountersForRegexMatch` によって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。

動的モニタを作成および更新する時に選択されたカウンタ・パターンに一致するカウンタ数を制限するために、`_maxCountersForRegexMatch` パラメータも使用されます。`master.config` ファイルの `_browsableContentMaxCounters` と `_maxCountersForRegexMatch` の両パラメータに同じ値を使用することを推奨します。これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です。

以前のバージョンの SiteScope からアップグレードする時、これらの両パラメータの値は以前のバージョンの 2 つのパラメータ値よりも高い値、または 1000（いずれか高い方）に設定されます。

タスク

テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法

このタスクでは、ユーザ定義のテンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの作成に関する手順を説明します。このタスクのフローチャートを表示するには、62 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法 - フローチャート」を参照してください。事前定義されたソリューション・テンプレートの使用方法の詳細については、1081 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレート」を参照してください。

ヒント:

- ▶ 表示されている順番でテンプレート・オブジェクトを作成することをお勧めします。不要なテンプレート・オブジェクトの手順はスキップできます。
- ▶ テンプレートの作業を開始しやすいように、SiteScope には Windows と UNIX の環境を監視するためのテンプレート例が付属されています。詳細については、948 ページの「テンプレート例」を参照してください。

注: 標準モードでオブジェクトを設定するときにドロップダウン・リストが表示される一部のフィールドは、テンプレート・モードでのオブジェクト設定時にはテキスト・ボックスとして表示されます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 963 ページの「前提条件」
- ▶ 963 ページの「テンプレート・コンテナの作成」
- ▶ 963 ページの「テンプレートの作成」
- ▶ 964 ページの「テンプレート変数の作成」

- ▶ 965 ページの「テンプレート・リモート・サーバの作成」
- ▶ 967 ページの「テンプレート・グループの作成」
- ▶ 967 ページの「テンプレート・モニタ・インスタンスの作成」
- ▶ 970 ページの「モニタとグループ警告の設定」
- ▶ 970 ページの「テンプレートのデプロイ」
- ▶ 971 ページの「結果」
- ▶ 971 ページの「モニタとグループ・レポートの設定 (モニタ・ビューを使用)」
- ▶ 971 ページの「監視ソリューションへの変更の適用」

1 前提条件

- ▶ SiteScope に監視を設定する前に、インストール後の管理タスクの実行が終了していることを確認します。タスクの詳細については、55 ページの「SiteScope の設定および管理方法」を参照してください。
- ▶ テンプレートをデプロイするには、その内容に関わらず、デプロイ先グループの権限を編集する必要があります。テンプレート・オブジェクト (モニタ、リモート、警告) の権限は編集する必要はありません。ユーザ権限の詳細については、868 ページの「[新規ユーザ プロファイル] / [ユーザ プロファイルの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 テンプレート・コンテナの作成

監視ソリューションを管理できる、テンプレート・コンテナを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、981 ページの「[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 テンプレートの作成

テンプレートをテンプレート・コンテナに追加します。このテンプレートが監視ソリューションのコンテナとなり、監視ソリューションのグループ、モニタ、リモート・サーバ、変数、警告を作成できます。テンプレート・コンテナに複数のテンプレートを作成できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、982 ページの「[新規テンプレート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注 : 既存のグループとモニタ階層を SiteScope からテンプレートにコピーし、テンプレートとして使用するためにその要素を編集することもできます。タスクの詳細については、972 ページの「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」を参照してください。

4 テンプレート変数の作成

テンプレートには、テンプレートをデプロイするたびにオブジェクトに異なる名前を指定できる、テンプレート変数を作成できます。グループ、モニタ、サーバ、警告を作成するときに変数が参照されるため、テンプレートでは最初に変数のオブジェクトを作成する必要があります。

- a テンプレートのテンプレート変数を作成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、985 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b テンプレート内の 1 つ以上の設定オブジェクトで、変数を参照します。このトピックの詳細については、955 ページの「テンプレート変数の参照」を参照してください。

注：

- ▶ プレフィックスまたはサフィックスの文字が追加されていない変数名 (%%hostname%% など) を使用してリモート・サーバを指定し、同じ変数をモニタのいずれかのフィールドで指定している場合、デプロイ後その値は、デプロイで指定した単なる変数値ではなく、UNIX では **Remote-##**、Windows では **¥¥ <変数値>** として表示されます。これを避けるには、変数名をリモート・サーバに使用する場合は、プレフィックスまたはサフィックスの文字を変数名に追加する必要があります。
 - ▶ ユーザ定義および事前定義のシステム変数は、テンプレートを設定する時にすべてのテキスト・フィールドおよびテキスト・テーブル・セルで使用できます。使用可能な変数のリストを表示するには、フィールドに %% または \$\$ のいずれかを入力し、関連する変数を選択します。これでフィールドに変数が表示されます。
-

5 テンプレート・リモート・サーバの作成

テンプレートで、監視対象のオブジェクトが含まれるリモート Windows サーバまたはリモート UNIX サーバを定義できます。テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバで手動で定義されたサーバで実行できます。テンプレートのデプロイ時に、[Microsoft Windows リモート サーバ] または [UNIX リモート サーバ] のリモート・サーバ・ツリーにテンプレート・サーバが追加されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、988 ページの「[新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：テンプレートには 1 つのリモート・サーバのみ追加できます。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。

例：

Windows テンプレート・リモート・サーバが「%%host%% remote windows」の名前で作成されています。

The image shows two overlapping configuration windows from SiteScope. The top window is titled "一般設定" (General Settings) and contains a "名前:" (Name) field with the value "%%host%% remote windows" and a larger empty "詳細:" (Details) field below it. The bottom window is titled "メイン設定" (Main Settings) and contains several configuration options:

- * サーバ: %%host%%
- 資格情報:
 - ユーザ名およびパスワードを使用
 - ユーザ名: %%user%%
 - パスワード:
 - 事前定義された資格情報を選択
 - 資格情報プロファイル: [dropdown menu]
 - 資格情報の追加 [button]
 - トレース
- * 接続方式: NetBIOS [dropdown menu]
- リモートサーバのエンコード: Cp1252 [dropdown menu]

6 テンプレート・グループの作成

テンプレートで、モニタおよび関連付けられた警告のデプロイメントを組織で管理して効率的にする場合にテンプレート・グループを作成します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、990 ページの「[新規テンプレートグループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

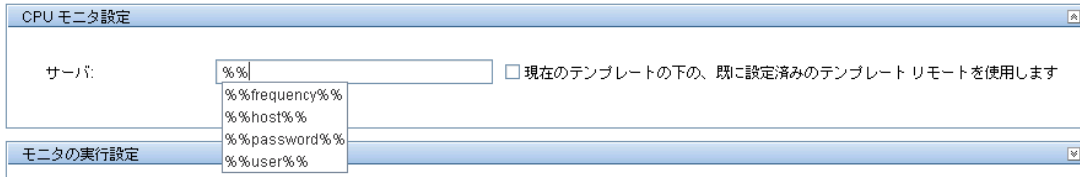
注：

- ▶ 標準設定では、モニタをテンプレート・グループに作成する必要があります。[テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択することで、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] でこの設定を上書きできます。
- ▶ コンテンツがテンプレートに含まれないようにテンプレート・グループを定義することも可能ですが、デプロイ済みグループに変更が適用される時には無視されます。これによってさまざまなデプロイ済みグループ内にテンプレートをデプロイできます。詳細については、992 ページの「変更を公開するとき、グループを無視する」を参照してください。
- ▶ テンプレートには、その直下に 1 つのテンプレート・グループ（親グループ）のみを含めることができます。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。

7 テンプレート・モニタ・インスタンスの作成

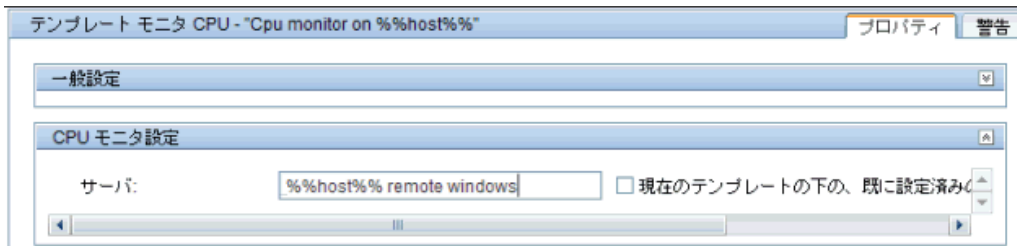
- a テンプレート・グループに追加するモニタ・インスタンスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、996 ページの「[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b モニタのプロパティの値を入力します。
 - ▶ テンプレート変数を使用している場合、値が変数と置き換えられるすべてのフィールドの変数の構文を入力します。これには `$$$SERVER_LIST$$` システム変数の使用が含まれます。概念の詳細については、954 ページの「システム変数の構文」を参照してください。

- ▶ 変数を入力するには、%% と \$\$ のいずれかを入力します。そのタイプの使用可能な変数のリストが自動的に表示されます。関連する変数をクリックして選択します（キーボードを使用した使用可能な変数のリストのナビゲートはサポートされません）。これでフィールドに変数が表示されます。



モニタ設定時に変数を使用する例：

この例では、テンプレート・モニタ（SiteScope CPU モニタ）をテンプレート・リモート・サーバ「%%host%% remote windows」で実行するように設定されています。



注：

- ▶ テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時にテンプレート・サーバで定義されたサーバ、またはリモート・サーバ・ツリーのリモート・サーバ・コンテナで手動で定義されたサーバで実行できます。どちらの場合でも、[サーバ] ボックスの値は、テンプレート変数に値が代入された後のテンプレートのデプロイ時の、実際のサーバのホスト名と一致する必要があります。サーバ名が実際のサーバのホスト名と一致しない場合、監視は失敗します。テンプレート・リモート・サーバ名（作成済みの場合）を自動的に取得するには、[モニタ設定] フィールドの **[現在のテンプレートの下、既に設定済みのテンプレート リモートを使用します]** チェック・ボックスを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、996 ページの「[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ モニタの [サーバ] フィールドとリモート・サーバの [名前] と [サーバ] フィールドには、「¥¥」を使用しないでください。
- ▶ [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択した場合、テンプレート・エンティティに直接モニタ・インスタンスを追加できます。

-
- c 参照可能なカウンタを含むモニタの場合、カウンタを選択して監視対象システム固有の測定値を監視します。
 - ▶ [カウンタの取得] ボタンをクリックして、サーバを選択するか、監視対象のサービスまたはアプリケーションを実行しているサーバの接続情報を入力します。
 - ▶ [カウンタの取得] ボタンを再度クリックして使用可能なカウンタを取得します。カウンタの選択ダイアログ・ボックスが更新されます。
 - ▶ 監視する測定値またはカウンタを選択します。監視対象システムの特定のカウンタがデプロイメントによって異なる場合、監視するカウンタのタイプまたはカテゴリを表すパターンを照合する正規表現を使用できます。タスクの詳細については、974 ページの「正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法」を参照してください。

- d [プロパティ] タブで次のようなその他のモニタ設定を設定します。
 - ▶ 報告される各モニタ・インスタンスの状態を決定するロジック条件を設定して、モニタのしきい値を手動で設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、458 ページの「しきい値設定」を参照してください。

注: テンプレートのデプロイ後、ベースラインを使用して 1 つ以上のモニタのしきい値を設定することもできます。タスクの詳細については、418 ページの「ベースラインを使用したモニタしきい値の設定方法」を参照してください。

- ▶ グループと主要なモニタの依存関係を作成し、過剰な警告を制御できるようにします。概念の詳細については、397 ページの「グループの依存関係の監視」を参照してください。
- ▶ 一般的なユーザ設定の完全なリストについては、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

8 モニタとグループ警告の設定

イベントが発生したか、インフラストラクチャの要素やシステムのステータスが増減したときに通知を送信する警告を作成します。

タスクの詳細については、1443 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

9 テンプレートのデプロイ

SiteScope 監視テンプレートの作成後、テンプレートをグループにデプロイできます。

- ▶ ユーザ・インタフェースから 1 つのテンプレートをデプロイする、または複数のテンプレートをグループに同時にデプロイできます。タスクの詳細については、1012 ページの「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの外側で CSV ファイルを使用することで、1 つテンプレートの一括デプロイメントを実行できます。1 つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行には CSV ファイルが適しています。概念の詳細については、1011 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。タスクの詳細については、1015 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

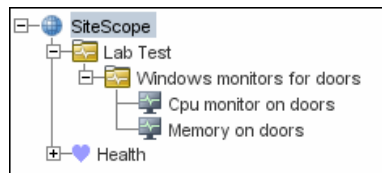
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイできます。概念の詳細については、1052 ページの「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。タスクの詳細については、1062 ページの「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」を参照してください。

10 結果

SiteScope によって、モニタ・ツリーの指定したグループにグループ、モニタ、警告が追加されます。

例：

テンプレートの例では、**Windows basic template** が、**Lab Test** という名前のグループ・コンテナにデプロイされています。テンプレートには **CPU モニタ** と **メモリ・モニタ** が含まれ、**doors** という名前のサーバでリソースの使用率を監視するためにデプロイされています。



11 モニタとグループ・レポートの設定（モニタ・ビューを使用）

時間の経過に伴う監視対象のサーバおよびアプリケーションのパフォーマンスに関する情報を表示するレポートを作成します。

タスクの詳細については、1508 ページの「レポートの作成方法」を参照してください。

12 監視ソリューションへの変更の適用

デプロイ済みテンプレートに対して、変更（モニタの追加や削除、モニタのプロパティの変更など）を加えることができます。この変更を実行するには、テンプレートを編集し、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、テンプレートでデプロイされたすべての関連オブジェクトへの変更を適用します。

タスクの詳細については、1033 ページの「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」を参照してください。

既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法

このタスクでは、既存のグループ、モニタ、またはリモート・サーバを SiteScope からテンプレートにコピーして、テンプレートとして使用するために要素を編集する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 972 ページの「前提条件」
- ▶ 973 ページの「テンプレートへの設定のコピー」
- ▶ 973 ページの「テンプレート変数の編集」
- ▶ 973 ページの「結果」

1 前提条件

既存の設定を SiteScope からテンプレートにコピーするには、エンティティをコピーするテンプレート・コンテナおよびテンプレートがテンプレート・ツリーに存在している必要があります。

注：既存のモニタまたはリモート・サーバをテンプレートにコピーする場合、テンプレート・グループもテンプレートに存在している必要があります。

テンプレート・コンテナ、テンプレート、およびテンプレート・グループの作成の詳細については、962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。

2 テンプレートへの設定のコピー

コピーするグループ、モニタ、またはリモート・サーバを右クリックし、**[テンプレートにコピー]** を選択します。[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックスで、コピーした設定を追加するテンプレートまたはテンプレート・グループを選択します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、489 ページの「[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

3 テンプレート変数の編集

新しいテンプレートでテンプレート変数を使用する場合、該当する設定フィールドの値を必要な変数の構文に置き換えて、コピーした各オブジェクトを編集します。

概念の詳細については、955 ページの「テンプレート変数の参照」を参照してください。

4 結果

SiteScope によって、テンプレート・ツリーの指定したテンプレートまたはテンプレート・グループにグループ、モニタ、リモート・サーバが追加されます。

正規表現を使用するためのカウンタ選択文字列の変更方法

このタスクでは、測定値カウンタの選択に正規表現を使用するためにテンプレート・モニタを変更する手順について説明します。

注: このタスクは、参照可能なカウンタを使用するモニタのみに適用されます。

- 1 テンプレート・ツリーで、変更するモニタ・テンプレートをクリックして、テンプレート・モニタの [プロパティ] ビューを開きます。
- 2 [モニタ設定] 表示枠を開き、[測定値] セクションまたは [カウンタ] セクション (モニタ・タイプによって異なる) で、モニタに設定するカウンタのパターンを表すカウンタ選択文字列を選択します。
- 3 カウンタ選択文字列の先頭と末尾にスラッシュ ("/") 文字を追加して、正規表現に変更します。必要に応じて、ほかのパターン照合構文を使用するように文字列を変更します。正規表現構文の詳細については、235 ページの「正規表現の使用」を参照してください。



注: テンプレート・モニタの設定時に、入力した正規表現を使用して照合可能なカウンタを明示的に選択している場合は、[カウンタの削除] ボタンをクリックして余分なカウンタ文字列を削除できます。

参照情報

予約済みテンプレート・グループ・タイプ

次の表は、SiteScope アプリケーションで使用するテンプレート・タイプを示します。これらのディレクトリにあるテンプレートは予約されており、警告では使用されません。警告で使用されるテンプレートのリストについては、1450 ページの「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」を参照してください。

注：製品のドキュメントに記載された特定の手順に従う場合や、HP ソフトウェア・サポートから指示された場合を除き、これらのディレクトリ内のテンプレートを変更することはお勧めしません。

テンプレート・グループ	説明	場所
MIB	SNMP トラップで使用するテキスト	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥templates.mib
オペレーティング・システム	リモート UNIX サーバの監視時に実行するシェル・コマンド	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥templates.os
パフォーマンス・モニタ	NT パフォーマンスの監視に使用	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥templates.perfmon
サウンド	サウンド警告に使用するオーディオ・ファイル	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥templates.sound
ビュー	クエリおよび XML/XSL テンプレート	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥templates.view

SiteScope テンプレートのユーザ・インタフェース

本項の内容




- ▶ [SiteScope テンプレート] ページ (976 ページ)
- ▶ テンプレート・ツリー - [プロパティ] ページ (977 ページ)
- ▶ テンプレート・ツリー - [警告] タブ (979 ページ)
- ▶ [新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス (981 ページ)
- ▶ [新規テンプレート] ダイアログ・ボックス (982 ページ)
- ▶ [新規変数] ダイアログ・ボックス (985 ページ)
- ▶ [新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックス (988 ページ)
- ▶ [新規テンプレート グループ] ダイアログ・ボックス (990 ページ)
- ▶ [新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス (996 ページ)
- ▶ [新規警告] ダイアログ・ボックス (999 ページ)
- ▶ [タグの検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックス (1000 ページ)

[SiteScope テンプレート] ページ

このページには、選択したテンプレート・コンテナの名前と詳細が表示されます。このページでは、テンプレート・コンテナを追加、または既存のテンプレート・コンテナのプロパティを編集できます (ソリューション・テンプレート以外)。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを開きます。テンプレート・ツリーで、[SiteScope] ノードを選択します。
重要な情報	テンプレートの操作時に SiteScope API を使用することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規テンプレート・コンテナ : 新しいテンプレート・コンテナを作成できる [新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、981 ページの「[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	テンプレート・コンテナの編集 : 選択したテンプレート・コンテナを編集できます。
	テンプレートの削除 : テンプレート・コンテナを削除します。
<SiteScope テンプレート・テーブル>	SiteScope に含まれている定義済みテンプレート (テンプレート例, モニタ デプロイメント ウィザードのテンプレート, ソリューション・テンプレート) およびユーザ定義のテンプレート・コンテナが表示されます。テンプレート・コンテナをダブルクリックすると、選択したテンプレートのテンプレート・コンテナ・ページが開きます。
名前	テンプレート・コンテナに割り当てられている名前文字列。
詳細	テンプレート・コンテナを作成または編集したときに割り当てたテンプレート・コンテナの詳細。

テンプレート・ツリー - [プロパティ] ページ

このページには、選択したテンプレート・オブジェクトの名前と詳細が表示されます。テンプレート・ツリーでテンプレート・オブジェクト (テンプレート・グループ, テンプレート・モニタ, テンプレート変数) を選択して、特定のオブジェクトのプロパティを表示します。このページでは、テンプレートのプロパティを編集します。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレート・オブジェクトを選択してそのオブジェクトのプロパティを表示します。テンプレートの [プロパティ] タブが表示されるのは、テンプレート・グループまたはモニタが選択される時だけです。
--------	--

関連タスク	962 ページの「テンプレートをを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	テンプレートの名前。
詳細	テンプレートの詳細。
最終編集者	テンプレートを最後に編集した SiteScope ユーザ。このフィールドは読み取り専用です。 注: このフィールドが表示されるのは、テンプレート・ツリーでテンプレートが選択される時だけです。
最終編集時刻	テンプレートまたはテンプレート内の任意のオブジェクトが最後に編集された日時。このフィールドは読み取り専用です。 注: このフィールドが表示されるのは、テンプレート・ツリーでテンプレートが選択される時だけです。

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。






UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
既存のタグを追加	クリックして既存のタグを追加します。[検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックスが開きます。詳細については、1000 ページの「[タグの検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

テンプレート・ツリー - [警告] タブ

このタブには、ソリューション・テンプレートに関連付けられている警告のリストが表示されます。このページを使用して、テンプレートに関連付けられている警告を追加、削除、編集します。テンプレート・ツリーで、選択したオブジェクトの警告を表示するテンプレート・グループまたはモニタを選択します。


アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、警告を表示、追加、編集するグループまたはモニタに移動します。[警告] タブをクリックします。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」 ▶ 1443 ページの「警告の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」 ▶ 1461 ページの「SiteScope 警告ページ」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	新規警告 ：[新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、新しい警告を定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1463 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	警告の編集 ：[警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、警告を編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1463 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	警告のコピー ：警告がコピーされます。
	警告の貼り付け ：警告が貼り付けられます。
	警告の削除 ：警告を削除します。
名前	警告定義に割り当てられている名前の文字列。
状態	警告の状態（有効 / 無効）。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 有効：無効化された警告アクションが上書きされ、定義した条件に基づいて警告が実行されるようになります。 ▶ 無期限に無効化：このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。 ▶ <Time1> から <Time2> へ 1 回限定のスケジュールに基づいて無効化：指定した期間、条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されなくなります。警告は、この期間の開始時に無効になり、この期間を過ぎると再度有効になります。
詳細	警告の作成時または編集時に割り当てられた警告定義の詳細。
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。

[新規テンプレート コンテナ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、新しいテンプレート・コンテナを定義できます。テンプレート・コンテナは、テンプレートの格納と管理に使用します。テンプレート・コンテナでは、目的または分類別に複数のテンプレートをグループ化、整理できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、SiteScope ノードまたは既存のテンプレート・コンテナを右クリックし、[新規作成] > [テンプレート コンテナ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ テンプレート・コンテナは、テンプレート・ツリーの SiteScope ノードにのみ追加できます。 ▶ テンプレートは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。テンプレート・コンテナにはテンプレートのみを格納できます。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 972 ページの「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 948 ページの「テンプレート例」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
名前	テンプレート・コンテナの名前。 最大文字数 : 250 文字
詳細	テンプレート・コンテナの詳細。

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規テンプレート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・コンテナにテンプレートを追加できます。個々のテンプレートは、テンプレートのデプロイ時に作成されるオブジェクトのオブジェクト定義から構成されます。テンプレートは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、[新規作成] > [テンプレート] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ テンプレートには、直下にテンプレート・グループが 1 つだけあります（親グループ）。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。 ▶ テンプレートには、グループ、サブグループ、変数、リモート・サーバを含めることができます。また、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] が選択されている場合は、モニタを含めることができます。

関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 972 ページの「既存の設定のコピーによるテンプレートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 948 ページの「テンプレート例」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。


UI 要素	説明
名前	テンプレートの名前。入力する名前は、テンプレート・ツリーにテンプレート・コンテナの子ノードとして表示されます。 最大文字数 : 250 文字です。
詳細	テンプレートの詳細。
最終編集者	テンプレートを最後に編集した SiteScope ユーザ。このフィールドはテンプレートが作成された後でなければ更新されません。 標準設定値 : N/A
最終編集時刻	テンプレート（またはテンプレート内の任意のオブジェクト）が最後に編集された日時。このフィールドはテンプレートが作成された後でなければ更新されません。 標準設定値 : N/A

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	<p>SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

[新規変数] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートにテンプレート変数を追加できます。変数を使用することで、テンプレートのデプロイ時にユーザ入力が必要になります。テンプレート変数は、ユーザ定義の変数か、SiteScope の既知のリモート・サーバ接続リストにアクセスできる定義済みシステム変数のいずれかです。テンプレート変数は、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、[新規] > [変数] を選択します。 ▶ [テンプレート<モニタ>] ページで、[新規変数] をクリックします。詳細については、996 ページの「[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [新規テンプレート警告] ダイアログ・ボックスで、[新規変数] をクリックします。詳細については、999 ページの「[新規警告] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [警告アクション] ダイアログ・ボックスで、[新規変数] をクリックします。詳細については、1476 ページの「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [新規 Microsoft Windows リモート サーバ] ダイアログ・ボックスで、[新規変数] をクリックします。詳細については、988 ページの「[新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [新規 UNIX リモート サーバ] ダイアログ・ボックスで、[新規変数] をクリックします。詳細については、988 ページの「[新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
重要な情報	[モニタの実行設定] で [頻度] と [エラー時頻度] の変数を設定する場合、変数の値は秒単位でのみ指定できます。
関連タスク	962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 951 ページの「テンプレート変数を使った作業」 ▶ 948 ページの「テンプレート例」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」


メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	<p>テンプレート変数の名前。入力する名前は、テンプレート・ツリーでテンプレートの変数を識別するために使用されます。これは、ほかのテンプレート・オブジェクトの変数を参照するときに使用する必要がある名前です。</p> <p>注: 変数を追加した後に変数の名前の編集はできません。変数名を変更するには、その変数を削除してから、正しい名前 で新しい変数を作成します。</p>
表示名	<p>デプロイ時の変数名の代わりに別の名前を表示する場合に使用する表示名。ただし、テンプレート・オブジェクトの変数を参照するときには、変数名を使用する必要があります。</p>
詳細	<p>変数の詳細。</p>
標準設定値	<p>この変数に使用する標準設定値。このボックスの値が必須である場合、値を入力しないと、テンプレートのデプロイ時に値の入力を求められます。</p>
テンプレートでの表示順序	<p>変数の表示シーケンス番号。これは、デプロイ時に変数の値の入力が要求される順序です。変数は昇順で表示されます。表示番号のない変数は最後に表示されます。</p> <p>注: 表示順序によってテンプレート定義内の変数の順序が変更されることはありません。</p>

UI 要素	説明
パスワード変数	<p>標準設定値とデプロイ時に入力した値を非表示にします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 : このオプションは、名前の末尾に PASSWORD または passord が使用されている、以前のバージョンの SiteScope の変数に自動的に選択されます。</p>
必須変数	<p>変数フィールドには値が必須で、テンプレートのデプロイ時に値の入力が要求されます。変数を必須でない値として設定するには、チェック・ボックスをクリアします。このオプションがクリアされると、必須でない変数の値に空の文字列 ("") が使用されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

[新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートに UNIX または Windows リモート・サーバを作成できます。テンプレート・リモート・サーバは、テンプレートのデプロイ時に作成されるリモート・サーバのプリファレンスを定義するために使用されます。テンプレート・リモート・サーバは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、[新規作成] > [新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [新規 UNIX リモートサーバ] を選択します。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ テンプレートのデプロイメント全体を通して一定のままであるフィールドには、実際の値を入力します。テンプレートのデプロイ時に変数値で置換される値のフィールドには、テンプレート変数を入力します。詳細については、955 ページの「テンプレート変数の参照」を参照してください。 ▶ テンプレートには 1 つのリモート・サーバのみ追加できます。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。 ▶ サーバがテンプレート・モニタから参照されている場合は、リモート・サーバ・リストからそのサーバを削除できません。そのリモート・サーバを参照する各モニタの [モニタ設定] 表示枠にある [サーバ] ボックスで別のサーバを選択すると、リモート・サーバ・リストからそのリモート・サーバを削除できます。 ▶ [新規テンプレート リモート サーバ] ダイアログ・ボックスから新しい変数を追加するには、[新規変数] ボタンをクリックして、985 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」に説明されている方法で変数を設定します。 ▶ テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新 (1059 ページの「XML を使用したテンプレート変更適用」を参照) を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値は変更できます。 ▶ リモート・サーバの [名前] および [サーバ] フィールド、およびモニタの [サーバ] フィールドでは、「¥」を使用しないでください。 ▶ 標準モードでオブジェクトを設定するときにドロップダウン・リストが表示される一部のフィールドは、テンプレート・モードではテキスト・ボックスとして表示されます。

関連タスク	962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 582 ページの「リモート・サーバの概要」 ▶ 948 ページの「テンプレート例」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」


次のユーザ・インターフェースはページの全領域に共通です。

UI 要素	説明
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、985 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] ダイアログ・ボックスの要素の詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規 UNIX リモート サーバ] ダイアログ・ボックスの要素の詳細については、608 ページの「[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[新規テンプレート グループ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートまたは既存のテンプレート・グループにテンプレート・グループを追加して、サブグループを作成できます。テンプレート・グループは、インフラストラクチャの複数の場所に監視のデプロイメントを複製するために使用します。テンプレート・グループは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレートまたはテンプレート・グループを右クリックして、[新規作成] > [グループ] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ テンプレートには、その直下に 1 つのテンプレート・グループ (親グループ) のみを含めることができます。9.50 より前のバージョンの SiteScope で作成されたテンプレートには、これは適用されません。 ▶ 標準設定では、親グループまたはサブグループのみにテンプレート・モニタ、警告、サブグループを作成できます。テンプレート・エンティティの直下にテンプレート・モニタを作成する場合は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] チェック・ボックスを選択します。 ▶ [新規 SiteScope グループ] ダイアログ・ボックスから新しい変数を追加するには、[新規変数] ボタンをクリックして、985 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」に説明されている方法で変数を設定します。
関連タスク	962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 948 ページの「テンプレート例」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

次のユーザ・インタフェースはページの全領域に共通です。

UI 要素	説明
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、985 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
グループ名	<p>テンプレート・グループの名前 (テンプレート変数を使用するのが望ましい)。テンプレート変数を使用すると、テンプレートをデプロイするたびにグループに異なる名前を指定できます。グループ名に変数が含まれていない場合は、グループ名が一意でないため、同じディレクトリ内にテンプレートを複数回デプロイすると失敗します。テンプレート変数の使用の詳細については、955 ページの「テンプレート変数の参照」を参照してください。</p> <p>注: 各グループの親グループが異なっても、テンプレートに同じ名前のグループが複数ある場合、テンプレートのデプロイメントは失敗します。</p>
グループの詳細	<p>テンプレート・グループの詳細。テキスト・スタイルの一般的な HTML タグ (
, <HR>, など) とハイパーリンクを含めることができます。詳細は、SiteScope ダッシュボードでグループのプロパティを表示または編集するときのみ表示されます。ハイパーリンクの追加の詳細については、385 ページの「グループの詳細に URL リンクを追加 (任意指定)」を参照してください。</p> <p>注: このフィールドでは、JavaScript, iframes, frames やその他の高度な機能はサポートされていません。このボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード (複数行にわたるために切り捨てられたコードなど) を修正する修正アクションが実行されます。</p>

UI 要素	説明
<p>変更を公開するとき、グループを無視する</p>	<p>(このオプションはルート・グループには使用できません。またソリューション・テンプレートには非アクティブです。)</p> <p>デプロイ済みグループに変更を適用する時、このグループ内の任意のオブジェクトに行った変更は無視されます。</p> <p>このオプションにより、次のことが可能になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 無視されたグループ内の SiteScope オブジェクトに影響を与えることなく、既存のデプロイ済みグループ内でテンプレートをデプロイし、デプロイ済みグループにテンプレートの変更を適用します。つまり、変更を適用する時に影響を与えることなくデプロイ済みグループでモニタ、グループ、警告を編集または削除できるということです。 ▶ ソース テンプレートに含まれなかったデプロイ済みグループで作成されたその他のオブジェクトを削除することなく、ソース テンプレートから削除されたデプロイ済みグループでオブジェクトを削除します ([更新で削除できます] オプションが選択されている時)。 <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>異なるアクションを実行する時にこの設定を有効にする方法は、以下の表を参照してください。</p>


次に、異なるアクションが実行される時の **[変更を公開するとき、グループを無視する]** 設定の影響をリストします。

アクション	[変更を公開するとき、グループを無視する] が選択された時に有効
デプロイ済みのグループ名を変更する	変更の適用フローで名前の変更は無視されます。
テンプレート・グループ名を変更する	
デプロイ済みのグループの削除	変更を適用する時にグループが再作成されます。
テンプレート・グループの削除	変更の適用フローでは、 [更新で削除できます] が選択された時にデプロイ済みグループが削除されます。

アクション	[変更を公開するとき、グループを無視する] が選択された時に有効
テンプレート・グループのコピー	テンプレート・グループとそのコンテンツをテンプレートにコピーする時 [変更を公開するとき、グループを無視する] 設定は変わりません。
テンプレートへコピー	グループとそのコンテンツをテンプレートにコピーする時 [変更を公開するとき、グループを無視する] 設定は False (クリア) に設定されます。
テンプレート間でコピー	[変更を公開するとき、グループを無視する] 設定は、その他のテンプレート・グループ設定とともにコピーされます。
テンプレートを以前のバージョンの SiteScope からインポート	[変更を公開するとき、グループを無視する] 設定は False (クリア) と解釈されます。
テンプレートのエクスポート	テンプレートをエクスポートする時 [変更を公開するとき、グループを無視する] 設定は変わりません。

依存関係

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>依存</p>	<p>[依存]  をクリックして [依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックスを開き、モニタの実行を依存させるモニタを選択します。[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックスの詳細については、487 ページの「[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>1 つのシステムの異なる側面を監視している複数のモニタからの過剰な警告を避ける場合に、このオプションを使用します。</p> <p>例：システムの基本的な可用性をチェックするシステム・モニタを作成して、システムのより詳細なテストを実行するほかのモニタを作成します。基本的な可用性をチェックするモニタの状態に依存するように、詳細テスト・モニタを設定します。</p> <p>システム・モニタによって対象システムが使用不能になったことが検出されると、依存関係によってほかのモニタが自動的に無効になります。また、依存するモニタによって生成される警告も無効になります。</p> <p>標準設定値：モニタ・インスタンスに設定された依存関係はありません。</p>

UI 要素	説明
依存条件	<p>[依存] 設定を使用してモニタを別のモニタの状態に依存させた場合、このオプションを使用して、現在のモニタが通常どおりに実行されるように [依存] のモニタの状態の条件を選択します。</p> <p>次の状態カテゴリがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">▶ 正常▶ エラー▶ 使用可能▶ 使用不能 <p>設定対象のモニタは、[依存] ボックスで選択したモニタがこのボックスで選択した条件をレポートしている場合、正常に実行されます。</p> <p>例： [正常] を選択して、[依存] ボックスで選択したモニタが「正常」の状態をレポートする場合にのみこのモニタが有効になるようにします。[依存] ボックスで選択したモニタが「正常」以外のカテゴリまたは条件をレポートした場合、現在のモニタは自動的に無効になります。モニタがエラーを検出した場合に依存するモニタを有効にすることもできます。</p> <p>標準設定値： 正常</p>


タグの検索 / フィルタ

SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	<p>次のいずれかを実行できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [既存のタグを追加] ボタンをクリックして、[タグの検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスで既存のタグを選択できます。詳細については、1000 ページの「[タグの検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ [タグ名] ボックスと [値] ボックスに値を入力し、新しいタグを作成します。タグと値として変数を使用することも可能です。概念の詳細およびタグ名と値の書式設定方法については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。 <p>[タグ名] ボックスと [値] ボックスに選択または入力された値が表示されます。タグを選択するまでボックスは空です。</p>
既存のタグを追加	<p>[タグの検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックスを開きます。これで既存のキーワード・タグを追加または新しいタグを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1000 ページの「[タグの検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

[新規テンプレート モニタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・グループまたはサブグループにテンプレート・モニタを追加できます。テンプレート・モニタは、テンプレートのデプロイ時に実際のモニタの作成の土台として使用されます。テンプレート・モニタは、テンプレート・ツリーに  アイコンで表示されます。

アクセス方法	<p>[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・グループを右クリックして、[新規作成] > [モニタ] を選択します。テンプレートに設定するモニタ・タイプを選択します。</p>
--------	--


<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 標準設定では、テンプレート・モニタはテンプレート・グループ内に作成されます。テンプレート・エンティティの直下にテンプレート・モニタを作成するには、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] チェック・ボックスを選択します。テンプレート・モニタには警告を含めることができます。 ▶ テンプレート・モニタはアクティブなモニタ・インスタンスではありません。モニタは、テンプレートをデプロイしたときにのみ、これらのテンプレート設定に基づいて作成、アクティブ化されます。 ▶ モニタの [サーバ] フィールドとリモート・サーバの [名前] と [サーバ] フィールドには、「¥」を使用しないでください。 ▶ 正規表現を使用して測定値カウンタを選択するか、しきい値を照合する場合、SiteScope では、相等性チェックを実行するのではなく、1 つの文字列が別の文字列の一部であるかどうかのみを確認します。このため、デプロイ後にモニタで誤ったカウンタおよびしきい値のセットが定義される可能性があります。これは、SiteScope は標準設定で、カウンタ・テーブル内のすべてのカウンタを正規表現で処理し、この表現に適合するすべてのカウンタとしきい値設定を一致させるためです。たとえば、選択されているモニタのしきい値が x/y である場合、x/yy も正規表現に一致するので、このしきい値も定義されます。これを回避するには、正確な要件を満たすために特定の正規表現を追加します（958 ページの「正規表現を使用したカウンタ選択」を参照してください）。 ▶ [タグの検索 / フィルタ] をテンプレート・モニタに追加する時は、同じタグ値グループで実際のパラメータと変数パラメータの両方を使用できません。 ▶ テンプレートからスクリプト・モニタをデプロイするときには、リモート・スクリプト名の大文字と小文字が、スクリプト・サブディレクトリ内のスクリプト名の大文字と小文字と一致する必要があります。一致しない場合、選択されたスクリプトは「なし」と表示されます。 ▶ ネットワーク帯域幅モニタの標準設定以外のしきい値は、テンプレートに正しくコピーされません。
<p>関連タスク</p>	<p>962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」</p>

関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 948 ページの「テンプレート例」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」
-------------	--

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>以下は、テンプレート・モードの時に限り [新規モニタ] ダイアログ・ボックス固有の設定です。すべてのモニタに共通する設定については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。</p>
現在のテンプレートの下の、既に設定済みのテンプレート・リモートを使用します	<p>監視するサーバを選択する時は、名前を入力しなくても、テンプレート・リモート・サーバ（作成されていれば）の使用が可能となります。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
新規変数	<p>[新規変数] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスによって、[新規モニタ] ダイアログ・ボックスと別の場所にナビゲートせずに新しい変数を作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、985 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

[新規警告] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレート・グループまたはテンプレート・モニタに警告を定義できます。テンプレート警告は、テンプレートのデプロイ時に作成されるモニタの警告を定義するために使用されます。テンプレート・グループまたはモニタに警告が設定されている場合、グループまたはモニタ・アイコンの横に警告  記号が表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・グループまたはテンプレート・モニタを右クリックして、[新規作成] > [警告] を選択します。
重要な情報	警告テンプレートを作成するときには、[モニタの無効化 / 有効化] 警告アクションは選択できません。テンプレート警告は、その定義の対象であるオブジェクトに属するすべてのモニタに対して有効になります。たとえば、警告がモニタに対して定義されている場合、そのモニタのみでアクティブ化されます。警告がテンプレートに対して定義されている場合、そのテンプレートにあるすべてのモニタでアクティブ化されます。
関連タスク	962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 1461 ページの「SiteScope 警告ページ」 ▶ 948 ページの「テンプレート例」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

次の要素はすべてのアクション・タイプに共通します。

UI 要素	説明
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、985 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。



[新規警告] ダイアログ・ボックスのその他の要素の詳細については、1463 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[タグの検索 / フィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスによって、1 つ以上の既存のタグを選択する、または新しいタグを作成できます。

アクセス方法	テンプレート・グループ、テンプレート・モニタ、およびテンプレート警告の [タグの検索 / フィルタ] 領域で [既存のタグを追加] をクリックします。
関連タスク	962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」
関連情報	902 ページの「タグの検索 / フィルタの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
タグの追加	クリックして、新しいタグを作成します。詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ (有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない) を表します。
	タグを表します。

39

テンプレートのインポートおよびエクスポート

本章の内容

概念

- ▶ テンプレートのエクスポートおよびインポート (1002 ページ)

タスク

- ▶ テンプレートのエクスポートとインポート方法 (1003 ページ)
- ▶ PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法 (1005 ページ)

参照情報

- ▶ テンプレートのインポートおよびエクスポートのユーザ・インタフェース (1006 ページ)

概念

テンプレートのエクスポートおよびインポート

本項では、テンプレートのエクスポートおよびインポート機能の詳細について説明します。

ほかの **SiteScope** インストールで使用できるようにテンプレートをエクスポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。複数のテンプレートを含むテンプレート・コンテナをエクスポートする場合、そのテンプレート・コンテナとテンプレートがエクスポートされます。テンプレートは、エクスポートした後もテンプレート・コンテナに残ります。

また、ほかの **SiteScope** インストールからテンプレート設定をインポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で効率的に複製できます。

関連タスクの詳細については、**1003** ページの「テンプレートのエクスポートとインポート方法」を参照してください。

タスク

テンプレートのエクスポートとインポート方法

このタスクでは、テンプレートをエクスポートおよびインポートする手順について説明します。

関連概念の詳細については、1002 ページの「テンプレートのエクスポートおよびインポート」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1003 ページの「テンプレートのエクスポート」
- ▶ 1004 ページの「テンプレートのインポート」
- ▶ 1004 ページの「結果」

注：インポートが失敗するか、または [ソリューション テンプレート] ツリーのソリューション・テンプレートを表示できない場合、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %export** フォルダから **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %persistency%import** フォルダにコピーするとこれらのテンプレートを回復できます。**%export** フォルダにテンプレートのサンプルも含まれている場合、前述の一意の名前に関する違反を避けるためにテンプレート・コンテナの名前を変更する必要があります。

1 テンプレートのエクスポート

テンプレート・ツリーで、エクスポートするテンプレートを含むテンプレート・コンテナ・オブジェクトを右クリックして、**[エクスポート]** をクリックします。テンプレート・ツリー内のテンプレートを右クリックし、**[エクスポート]** をクリックすることもできます。テンプレート・ファイルを保存する名前と場所を入力し、エクスポートするテンプレートを選択します。

制限事項：コンテナなしでテンプレートをエクスポートする場合でも、コンテナはテンプレートとともにエクスポートされます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1006 ページの「[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 テンプレートのインポート

テンプレートをエクスポートしたら、エクスポート・ファイルを別の SiteScope サーバにコピーし、使用する単一または複数のテンプレートを含むテンプレート・コンテナをインポートできます。テンプレート・ツリーで、テンプレートのインポート先のテンプレート・コンテナを右クリックして、**[インポート]** をクリックします。インポートするファイルの名前と場所を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、**1008** ページの「[テンプレートのインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注： SiteScope の以前のバージョンの廃止されたモニタが含まれるテンプレートを SiteScope にインポートすると、廃止されたモニタはテンプレート・ツリーに表示されません。

3 結果

ファイルに含まれているテンプレートがテンプレート・コンテナに追加されます。インポートしたテンプレートは、直接使用するか、必要に応じて変更できます。

PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法

このタスクでは、PDF にレポートをエクスポートするときに現在のロケールとは異なる文字を表示する Unicode フォントを設定する方法について説明します。これにより、複数の言語の文字で構成されるテキストを表示できます。

注： Microsoft Office がインストールされているマシンを使用している場合、Arial Unicode MS フォントはすでにインストールされているため、このフォントをダウンロードまたは設定する必要はありません。

フォント・ライブラリを使用して Arial Unicode MS フォントを設定するには、次の手順を実行します。

1 SiteScope サーバのフォント・ライブラリに移動します。次に例を示します。

環境	フォント・ライブラリ
AIX	/usr/lpp/Acrobat3/Fonts
HPUX	/usr/contrib/xf86/xterm/fonts /usr/lib/X11/fonts/ms.st/typefaces
Linux	/usr/share/fonts/truetype /usr/share/fonts/local
UNIX	/usr/openwin/lib/X11/fonts/TrueType /usr/X11/lib/X11/fonts/TrueType /usr/X11/lib/X11/fonts/Type1
Windows	C:¥Windows¥Fonts C:¥WINNT¥Fonts

2 選択したフォント・ライブラリに Arial Unicode MS フォントをダウンロードします。フォントは、
<http://www.microsoft.com/typography/fonts/family.aspx?FID=24> (英語サイト) から入手できます。

3 SiteScope を再起動します。

参照情報

テンプレートのインポートおよびエクスポートのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス (1006 ページ)
- ▶ [テンプレートのインポート] ダイアログ・ボックス (1008 ページ)

[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ほかの SiteScope インストールで使用するためにテンプレートをエクスポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で複製できます。テンプレートは、エクスポートした後もテンプレート・コンテナに残ります。

アクセス方法	<p>[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、エクスポートするテンプレートを含むテンプレート・コンテナ・オブジェクトを右クリックして、[エクスポート] を選択します。</p> <p>テンプレート・ツリーのテンプレートを右クリックし、[エクスポート] をクリックすることもできます。</p>
重要な情報	<p>SiteScope テンプレートは、バイナリ・データとして保存されます。これは、SiteScope の以前のバージョンで使用されたテキストベースのモニタ・セットとは異なります。テンプレートの変更は、SiteScope インタフェースを使用して行う必要があります。</p> <p>制限事項: コンテナなしでテンプレートをエクスポートする場合でも、コンテナはテンプレートとともにエクスポートされます。</p>
関連タスク	<p>1003 ページの「テンプレートのエクスポートとインポート方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 1002 ページの「テンプレートのエクスポートおよびインポート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>ファイル名</p>	<p>1 〔ファイル名〕 ボタンをクリックし 〔保存〕 ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスではエクスポートするファイルを保存する場所を参照し選択できます。</p> <p>2 〔保存〕 ダイアログ・ボックスの 〔ファイル名〕 フィールドに、エクスポートするテンプレートのわかりやすい名前を入力します。</p> <p>3 〔保存〕 をクリックし、〔テンプレートのエクスポート〕 ダイアログ・ボックスに戻ります。選択したパスとファイル名が、〔テンプレートのエクスポート〕 ダイアログ・ボックスの 〔ファイル名〕 フィールドに表示されます。</p>
<p>テンプレート・ツリー</p>	<p>エクスポートするテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値 : テンプレート・コンテナ内のテンプレートは選択されていません。</p>

[テンプレートのインポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ほかの SiteScope インストールからテンプレート設定をインポートできます。これにより、標準化されたモニタ設定を企業全体で効率的に複製できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートのインポート先のテンプレート・コンテナを右クリックして、[インポート] を選択します。
関連タスク	1003 ページの「テンプレートのエクスポートとインポート方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 944 ページの「テンプレートについて」 ▶ 1002 ページの「テンプレートのエクスポートおよびインポート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ファイル名	<p>インポートするテンプレート・ファイルの名前。</p> <p>[ファイル名] ボタンをクリックし [開く] ダイアログ・ボックスを開きます。このダイアログ・ボックスではインポートするファイルの場所を参照し選択できます。</p> <p>ファイルを選択したら、[開く] をクリックして [テンプレートのインポート] ダイアログ・ボックスに戻ります。選択したパスとファイル名が [ファイル名] フィールドに表示されます。</p>
既存のインスタンスのオーバーライド	<p>インポートしたファイルのテンプレートで、同じ名前の既存のテンプレートを上書きする場合にこのオプションを選択します。</p> <p>注: テンプレート・ツリーのテンプレート・コンテナがインポートしたファイルのテンプレート・コンテナと同じ名前の場合、このオプションを選択すると、コンテナ内の同じ名前の既存のテンプレートが上書きされ、インポートされたファイルのほかのテンプレートが既存のテンプレートにマージされます。</p>

40

テンプレートのデプロイ

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope テンプレートのデプロイの概要 (1010 ページ)
- ▶ CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ (1011 ページ) タスク
- ▶ ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法 (1012 ページ)
- ▶ CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法 (1015 ページ)

参照情報

- ▶ テンプレートのデプロイのユーザ・インタフェース (1020 ページ)

概念

SiteScope テンプレートのデプロイの概要

インフラストラクチャ内にある、同じような特性を持つシステムをチェックする一連のモニタを迅速にデプロイするには、テンプレートを使用します。テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。SiteScope 監視テンプレートの作成後、そのテンプレートを次の方法でグループにデプロイできます。

- ▶ 単一のテンプレート、または複数のテンプレートをユーザ・インタフェースから同時にグループにデプロイできます。タスクの詳細については、1012 ページの「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの外部の CSV ファイルを使用して、単一のテンプレートに対して一括デプロイメントを実行できます。1 つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行には CSV ファイルが適しています。概念の詳細については、1011 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。タスクの詳細については、1015 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイできます。概念の詳細については、1052 ページの「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。タスクの詳細については、1062 ページの「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」を参照してください。

その後、ソース・テンプレートを変更する場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに変更を自動的に適用できます。テンプレートの更新の詳細については、1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ テンプレートに同じ名前の複数のグループが含まれている場合は、各グループが異なる親グループであっても、テンプレート・デプロイメントは失敗します。
- ▶ テンプレート・グループ名に変数が含まれていない場合は、グループ名が一意でないため、同じディレクトリ内にテンプレートを複数回デプロイすると失敗します。

CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ

テンプレートを作成、設定した後で、SiteScope 階層にデプロイします。テンプレートは、ユーザ・インタフェースから直接デプロイできます (1012 ページの「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照)。または外部のカンマ区切り (CSV) ファイルからデプロイできます。CSV ファイルは、テンプレートに定義された変数値のデプロイに使用します。

SiteScope CSV テンプレート・デプロイメントを使用すると、次のような利点があります。

- ▶ 1 つの CSV ファイルですべてのテンプレート変数値の入力と更新がしやすくなるため、一括デプロイメントの実行にはユーザ・インタフェースよりも適しています。
- ▶ ユーザ・インタフェースでデプロイメントごとに変数値を手動で入力しなくても、複数のデプロイメントを 1 回で実行できます。
- ▶ テンプレートはサイレントにデプロイされます (テンプレート・デプロイメント要求はキューに送信され、デプロイメントはバックグラウンドで処理されます)。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs %silent_deployment.log** に記録されます。

注: サイレント・デプロイメントの最大キュー長は 2000 です (CSV ファイル内の各行がキュー内の 1 デプロイメントを表します)。

このタスクの実行方法の詳細については、1015 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

タスク

ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、ユーザ・インタフェースを使用して SiteScope テンプレートをデプロイする手順について説明します。

ヒント:

- ▶ 単一テンプレートの一括デプロイメントの場合、CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイすることもできます。概念の詳細については、1011 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。
- ▶ また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイおよび更新することもできます。トピックの詳細については、1052 ページの「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1012 ページの「前提条件」
- ▶ 1013 ページの「単一のテンプレートのデプロイ - オプション」
- ▶ 1014 ページの「複数のテンプレートのデプロイ - オプション」
- ▶ 1014 ページの「結果」

1 前提条件

- ▶ SiteScope 監視テンプレートを作成するか、テンプレート・ツリーから既存のユーザ定義テンプレートを選択します。タスクの詳細については、962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。
- ▶ 複数のサーバにモニタを同時にデプロイする場合、テンプレート・リモート・サーバの **Host** 値として変数を使用する必要があります。デプロイメントのホスト変数に、複数のサーバ名をカンマ (",") 区切りで指定します。

2 単一のテンプレートのデプロイ - オプション

- a テンプレートをグループにデプロイします。
- ▶ モニタ・ツリーで、テンプレートをデプロイするグループを右クリックし、**[テンプレートのデプロイ]** を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、488 ページの「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
 - ▶ テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックし、**[テンプレートのデプロイ]** を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**[新規グループ]** ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b [デプロイメント値] ダイアログ・ボックスで、表示される入力ボックスに必要な変数値を入力します。表示される入力ボックスは、テンプレート・オブジェクトで使用されるテンプレート変数に対応します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1025 ページの「[デプロイメント値] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：

テンプレート・ツリーの**[Template Examples 11.10]**フォルダから**[Windows basic template]**を SiteScope グループにデプロイする場合、次の入力ボックスが [デプロイメント値] 入力ウィンドウに表示されます。

The screenshot shows a dialog box titled "メイン設定" (Main Settings). It contains four input fields, each with a red asterisk indicating a required field:

- * Host: [Empty text box]
- * User Name: [Empty text box]
- * Password: [Empty text box]
- * Frequency (sec): [600]

3 複数のテンプレートのデプロイ - オプション

- a テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、**[テンプレートのデプロイ]** を選択します。**[グループの選択]** ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**[新規グループ]** ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「**[グループの選択]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b **[複数のテンプレートのデプロイ]** ダイアログ・ボックスでは、次のとおりに実行します。
 - ▶ 左側の表示枠で、グループにデプロイするテンプレートを選択します。テンプレート・コンテナを選択する場合は、そのコンテナ内のすべてのテンプレートが自動的に選択されます。
 - ▶ 右側の表示枠で、表示される入力ボックスに必要な変数値を入力します。
 - ▶ 右側の表示枠の変数値セクションの下で、デプロイされているすべてのテンプレートの永続オプションを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1022 ページの「**[複数のテンプレートのデプロイ]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。

4 結果

テンプレート・デプロイメントのサマリが表示されます。デプロイメントが成功すると、テンプレート・オブジェクトがモニタ・ツリーに追加されます。

テンプレート・デプロイメントが失敗すると、失敗の理由を示すメッセージが表示されます。ディスク領域モニタを例に挙げると、テンプレートで指定したディスク・ドライブがデプロイ先のサーバに存在していない場合、テンプレート・モニタのデプロイが失敗する可能性があります。

CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、CSV ファイルを使用して SiteScope テンプレートをデプロイする手順について説明します。

ヒント:

- ▶ 代わりに、ユーザ・インタフェースを使用してテンプレートをデプロイすることもできます。詳細については、1012 ページの「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ また、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイおよび更新することもできます。このトピックの詳細については、1052 ページの「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1015 ページの「前提条件」
- ▶ 1016 ページの「テンプレート変数の表示順序の確認」
- ▶ 1017 ページの「CSV ファイルの作成」
- ▶ 1019 ページの「テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1019 ページの「結果」

1 前提条件

- ▶ 新しい SiteScope 監視テンプレートを作成するか、既存のユーザ定義テンプレートまたはソリューション・テンプレートをテンプレート・ツリーから選択します。タスクの詳細については、962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」を参照してください。
- ▶ CSV ファイルを使用してソリューション・テンプレートをデプロイするには、最初にテンプレート・コンテナにソリューション・テンプレートのコピーを作成し、コピーしたテンプレートに次の手順の必要な変更を加えます。

- ▶ テンプレート・グループ名は、各デプロイメント・インスタンスで一意的にする必要があります。値を一意的にするには、グループ名に変数を使用し、各デプロイメントでそれぞれ異なる変数の値を入力します。[**Template Examples 11.10**] フォルダの `%%host%%` 変数を含む [**Windows basic template**] のグループ名で、この例を確認できます。

2 テンプレート変数の表示順序の確認

CSV ファイルを作成する前に、各変数のテンプレート変数の表示順序を確認します。CSV ファイルの列の順序は 0 から始まります。そのため、テンプレート変数の表示順序も 1 ではなく 0 から開始することを確認します。この確認により、デプロイメントで CSV ファイルの正しい列が変数に確実にマップされます。

テンプレート変数の表示順序を確認するには、次の手順を実行します。

- a** [**テンプレート**] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、CSV ファイルを使用してデプロイするテンプレートを含むテンプレート・コンテナを展開し、テンプレートを選択します。
- b** テンプレートのデプロイ時に最初に表示するテンプレート変数を選択し、[**テンプレートでの表示順序**] の値が 0 であることを確認します。
- c** テンプレートの各変数でこの手順を繰り返し、正しい表示番号（毎回 1 ずつ増加）が使用されていることを確認します。

注： 各変数に表示順序を定義していない場合は、デプロイメントが失敗します。

3 CSV ファイルの作成

新しいテキスト・ファイルを開き、次の手順を行います。

- a デプロイメントに必要な各変数の値をカンマ (",") 区切りで入力します。テンプレートに定義したすべての変数を十分理解している必要があります。[**テンプレートでの表示順序**] フィールドに、表示される順序の値を入力します (表示順序 0 の変数から開始)。
- b 各デプロイメント・インスタンスの別の行に変数の値を追加します。

注:

- ▶ 空白はフィールドの一部とみなされるため、無視されません。
- ▶ 必須でない変数または標準設定の変数の値は、CSV ファイルに入力する必要はありません。その代わりに、変数の値を示すカンマを前のカンマに続けて入力する必要があります (",,")。
- ▶ 資格情報を使用する場合、パスワードは CSV ファイルで暗号化できないため、資格情報名の変数のみ使用することをお勧めします。

-
- c ファイルを CSV 形式で保存します。テンプレートのデプロイ後、CSV ファイルの各行にグループが作成されます。

例：

CSV ファイルを使用して **Windows basic template** をデプロイするため、変数の表示順序がホスト (0)，ユーザ (1)，パスワード (2)，頻度の変数 (3) に設定されていることを確認します。host テンプレート変数の設定を次に示します。

次に、各デプロイメント・インスタンスに対して、CSV ファイルを作成してホスト，ユーザ，パスワード，頻度の値をカンマ区切りで入力します（これがテンプレートで使用する変数の表示順序です）。

頻度の変数はテンプレートで標準設定値が設定されているため、この変数が必須の場合でも CSV ファイルに値を入力する必要はありません（標準設定値の 600 秒を使用する場合）。

4 テンプレートのデプロイ

- a テンプレートの CSV ファイルを作成したら、そのテンプレートをグループにデプロイします。
 - ▶ モニタ・ツリーで、テンプレートをデプロイするグループを右クリックし、**[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]** を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、488 ページの「[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
 - ▶ テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックし、**[CSV を使用してテンプレートをデプロイ]** を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートをデプロイするグループを選択します。または、**[新規グループ]** ボタンをクリックし、テンプレートをデプロイできる新しいグループを作成することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- b **[CSV ファイルの選択]** ダイアログ・ボックスで、テンプレート・デプロイメントに使用する CSV ファイルを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1027 ページの「**[CSV ファイルの選択]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。

5 結果

デプロイメントが成功すると、テンプレート・オブジェクトがモニタ・ツリーに追加されます。モニタ・ツリーは定期的に更新されます。ツリー・ツールバーの**[更新]**をクリックしてツリーを更新し、デプロイメントを確認します。

silent_deployment.log ファイルでデプロイメントのサマリを確認することもできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1408 ページの「[ログファイル] ページ」を参照してください。

注: 入力したパスワードの値はログ・ファイルには表示されません。実際のパスワードの代わりに、一連のアスタリスク ("****") が表示されます。

参照情報

テンプレートのデプロイのユーザ・インタフェース

本項の内容




- ▶ [グループの選択] ダイアログ・ボックス (1020 ページ)
- ▶ [複数のテンプレートのデプロイ] ダイアログ・ボックス (1022 ページ)
- ▶ [デプロイメント値] ダイアログ・ボックス (1025 ページ)
- ▶ [CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックス (1027 ページ)

[グループの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタ・ツリーでテンプレートのデプロイ先のグループを選択できます。または、SiteScope ノードを選択して、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックして、[テンプレートのデプロイ] または [CSV を使用してテンプレートをデプロイ] を選択します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 1033 ページの「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」 ▶ 1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 1081 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
 SiteScope	SiteScope ルート・グループを表します。SiteScope ルート・グループにテンプレートをデプロイするか、 [新規グループ] ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成できます。
	SiteScope モニタ・グループまたはサブグループ（有効化されたモニタを含む、モニタを含まない、または有効化されたモニタがない）を表します。テンプレートのデプロイ先のグループを選択するか、 [新規グループ] ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイ先のグループを新規作成します。
	SiteScope モニタの適切な機能をチェックするためにデプロイされる使用可能な状況モニタの集合を表します。

[複数のテンプレートのデプロイ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、(各テンプレートを別々にデプロイするのではなく) 複数のテンプレートを選択して、グループに同時にデプロイできます。

<p>アクセス方法</p>	<p>[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーでテンプレート・コンテナを右クリックして、[テンプレートのデプロイ] を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して [OK] をクリックします。[複数のテンプレートのデプロイ] ダイアログ・ボックスが表示されます。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 同時に複数のサーバにモニタをデプロイするには、サーバ名またはアドレスをカンマ (",") で区切って入力します。このとき、モニタによって参照されるテンプレート・リモート・サーバの [ホスト] プロパティの値は、変数値で構成される必要があり、かつ使用できる変数は 1 つのみです。 ▶ デプロイ先グループの編集権限がある場合は、テンプレートの内容に関係なくテンプレートをデプロイできます。モニタ、リモート、警告などのテンプレート・オブジェクトの編集権限は必要ありません。 ▶ モニタをデプロイできない場合は、エラー・メッセージが表示されます。これは、たとえば、ディスク領域モニタ・テンプレートをデプロイするときに、デプロイ先のサーバにディスク・ドライブが存在しない場合に発生します。
<p>関連タスク</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 1012 ページの「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」 ▶ 1033 ページの「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
テンプレートの選択（左側の表示枠）	
< テンプレート・ツリー >	<p>テンプレート・ツリーからデプロイするテンプレートを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ テンプレート・コンテナを選択すると、コンテナ内のすべてのテンプレートが選択されます。SiteScope ルートを選択すると、テンプレート・ツリー内のすべてのテンプレートが選択されます。 ▶ SiteScope ルートまたはテンプレート・コンテナの左側に表示される <input type="checkbox"/> アイコンは、SiteScope または特定のコンテナ内でテンプレートの一部が選択されていないことを示します。
テンプレート・デプロイメント設定（右側の表示枠）	
< テンプレート変数値 >	<p>選択した各テンプレート内で使用される変数の一覧は、右側の表示枠の当該テンプレートのフル・パスとともにラベル下に表示されます。変数のデプロイメント値を入力します（必須の変数は赤のアスタリスクで示されます）。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信されます。SiteScope ではバックグラウンドでデプロイメントを処理するため、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

UI 要素	説明
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバと比較して、各テンプレートのモニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。</p> <p>注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

[デプロイメント値] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートのデプロイ時に変数の値を入力できます。

アクセス方法	<p>[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレート (変数が含まれていること) を右クリックして、[テンプレートのデプロイ] を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して[OK]をクリックします。[デプロイメント値] ダイアログ・ボックスが開きます。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 同時に複数のサーバにモニタをデプロイするには、サーバ名またはアドレスをカンマ (",") で区切って入力します。このとき、モニタによって参照されるテンプレート・リモート・サーバの [ホスト] プロパティの値は、変数値で構成される必要があります、かつ使用できる変数は 1 つのみです。 ▶ デプロイ先グループの編集権限がある場合は、テンプレートの内容に関係なくテンプレートをデプロイできます。モニタ、リモート、警告などのテンプレート・オブジェクトの編集権限は必要ありません。 ▶ モニタをデプロイできない場合は、エラー・メッセージが表示されます。これは、たとえば、ディスク領域モニタ・テンプレートをデプロイするときに、デプロイ先のサーバにディスク・ドライバが存在しない場合に発生します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 1012 ページの「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」 ▶ 1033 ページの「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
< 変数名 >	<p>テンプレートのデプロイ時に、テンプレート・オブジェクトで参照される各変数によって対応する入力ボックスが表示されます。変数名がテキスト入力ボックスのラベルとして使用されます。変数のデプロイメント値を入力します。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレートのデプロイメント要求をキューに送信し、SiteScope がバックグラウンドでデプロイメントを処理するように指定します。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバと比較して、テンプレートのモニタ設定プロパティが正しいかどうかを検証します。</p> <p>注： このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値： 選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>注： このオプションは、リモート・サーバを含むテンプレートをデプロイする場合にのみ表示されます。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>

[CSV ファイルの選択] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、テンプレートのデプロイ時に使用する CSV ファイルを選択できます。

<p>アクセス方法</p>	<p>次のいずれかを使用します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [テンプレート] コンテキストを開きます。テンプレート・ツリーで、デプロイするテンプレートを右クリックして、[CSV を使用してテンプレートをデプロイ] を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、テンプレートのデプロイ先のグループを選択して [OK] をクリックします。 ▶ [モニタ] コンテキストを開きます。モニタ・ツリーで、テンプレートのデプロイ先のグループを右クリックして [CSV を使用してテンプレートをデプロイ] を選択します。[テンプレートの選択] ダイアログ・ボックスで、デプロイするテンプレートを選擇して [OK] をクリックします。
<p>関連タスク</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 962 ページの「テンプレートを使用した SiteScope 監視ソリューションの設定方法」 ▶ 1015 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」
<p>関連情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<p>CSV ファイル</p>	<p>テンプレートで定義された変数値をデプロイするために使用するカンマ区切り値 (CSV) ファイル。[選択] ボタンをクリックして、テンプレートのデプロイメントに使用する CSV ファイルを選択します。</p> <p>注: CSV 拡張子のファイルのみを使用できます。</p>
<p>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</p>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
<p>リモート・サーバのテスト</p>	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバへの接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>注: このオプションは、リモート・サーバを含むテンプレートをデプロイする場合にのみ表示されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

41

ユーザ定義テンプレートの適用

本章の内容

概念

- ▶ テンプレート・デプロイメントの更新 (1030 ページ)

タスク

- ▶ 関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法 (1033 ページ)

参照情報

- ▶ テンプレート変更適用ウィザード (1038 ページ)

概念

テンプレート・デプロイメントの更新

テンプレート変更適用ウィザードを使用すると、テンプレートを変更し、その変更をテンプレートによってデプロイされたすべての SiteScope オブジェクトに適用できます。しきい値の変更や、新しいモニタや警告が必要になるなど、テンプレート・オブジェクトに変更が必要な場合、テンプレートを 1 回更新すれば、各オブジェクトを個別に更新せずに変更をすべてのデプロイ済みグループに適用できます。

テンプレート変更適用ウィザードを使用して、実際の監視対象のデプロイメントがソース・テンプレートで定義された標準化デプロイメントに従う方法を表示できます。これにより、監視対象環境に発生した変化は監視側のインフラストラクチャで迅速に更新されます。また、監視側のインフラストラクチャでは、ソース・テンプレートの標準セットへの準拠が維持されます。

注: テンプレート変更適用ウィザードを実行するには「**グループの編集**」権限が必要で、[許可されているグループ] リストで権限が付与されているグループのみで実行できます。[許可されているグループ] リストに含まれていないデプロイ済みのグループは、ウィザードには表示されません。

テンプレートをデプロイすると、デプロイ済み親グループが自動的にそのソース・テンプレートに関連付けられます。その後そのソース・テンプレートを変更した場合、テンプレート変更適用ウィザードを使用して、そのテンプレートでデプロイされた SiteScope オブジェクトに自動的にその変更を適用できます。このウィザードでは、各オブジェクトを個別に更新しなくても、ソース・テンプレートが更新されるたびに組織全体の関連するデプロイ済みグループを更新できます。

デプロイ済みグループは、テンプレートで設定したグループ、モニタ、警告、変数、リモート・サーバで構成されます。テンプレートのデプロイ方法の詳細については、970 ページの「テンプレートのデプロイ」を参照してください。

テンプレート変更適用ウィザードでは、次の方法でデプロイ済みグループを更新できます。

- ▶ ソース・テンプレートの変更のみをデプロイ済みグループに適用できます。これにより追加オブジェクトが作成されて既存のオブジェクトの値が更新されますが、ソース・テンプレートに存在しないその他のオブジェクトは変更されません。
- ▶ ソース・テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用して、SiteScope で上記の変更を実行し、デプロイされたグループからソース・テンプレートに含まれないその他すべての SiteScope オブジェクトを削除できます。
- ▶ 変更を公開するとき、SiteScope でルート・グループ下のグループへの変更の適用を無視できます。これにより、
 - ▶ テンプレートを既存のデプロイ済みグループ内にデプロイし、無視されるグループに含まれる SiteScope オブジェクトに影響を与えずに、デプロイ済みグループにテンプレートの変更を適用できます。これによってさまざまなデプロイ済みグループ内にテンプレートをデプロイできます。
 - ▶ ソース・テンプレートから削除されたデプロイ済みグループのオブジェクトを削除できます（[更新で削除できます] オプションが選択されている場合）。ただし、ソース・テンプレートに含まれていないデプロイ済みグループで作成されたその他のオブジェクトは削除されません。

テンプレート変更の適用方法の詳細については、1033 ページの「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」を参照してください。

テンプレート変更適用ウィザードのユーザ・インタフェースの詳細については、1038 ページの「テンプレート変更適用ウィザード」を参照してください。

注意事項および制限事項

- ▶ SiteScope の 9.50 より前のバージョンで作成したテンプレートによってデプロイされたグループを使用している場合、ルート・グループはソース・テンプレートに関連付けられません。これらのテンプレート・デプロイメントを更新するには、次の方法を使用します。
 - ▶ [グローバル検索と置換] を使用して、テンプレート・グループをソース・テンプレートに手動で関連付けます。
 - ▶ 現在のグループの [一般設定] にある [ソース テンプレート] ボックスで、ソース・テンプレートのパスを入力します。

- ▶ テンプレートとデプロイ済みグループは ID によって内部でリンクされています。そのため、テンプレート名またはデプロイ済みグループのルート・グループが変更された場合でも、変更を適用できます。ただし、ルート・グループの **[ソース テンプレート]** プロパティを使用してテンプレートにグループを手動で関連付ける場合、デプロイメントでルート・グループ名が変更されたときには変更を適用できません。
- ▶ 変更を適用するには、ルート・グループ階層のすべての変更が成功する必要があります。グループへのいずれかの変更が失敗すると、そのグループへのすべての変更がロール・バックされます。
- ▶ [テンプレート変更適用ウィザード] の [整合性の確認] ページに表示されていない [タグの検索 / フィルタ] 値に変更します。ただし、変更はデプロイ済みグループに適用されます。
- ▶ テンプレート変更適用ウィザードは、しきい値の設定で正規表現をサポートしません。
- ▶ テンプレート変更適用サマリ・レポートの PDF 版は、Firefox 2.x ではサポートされていません。
- ▶ レポートを PDF にエクスポートするときに、ほとんどの言語で文字を表示できるようにするには、PDF の表示に使用するマシンに Arial Unicode MS フォントがインストールされている必要があります。詳細については、1005 ページの「PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope がインストールされているサーバのロケールに従って、テンプレート変更適用ウィザードにプロパティが表示されます。ブラウザのロケールは、プロパティの表示には影響しません。
- ▶ テンプレート変更適用ウィザードまたは自動デプロイメント更新(1059 ページの「XML を使用したテンプレート変更適用」を参照) を使用して既存の監視対象サーバを置換することはできませんが、必要に応じて監視対象サーバ自体のプロパティ値は変更できます。
- ▶ 参照可能なモニタ・カウンタでの変更をデプロイ済みグループに適用するには、モニタ・グループをデプロイするリモート・サーバに接続されている必要があります。
- ▶ SiteScope API を使用して、テンプレートでデプロイされたグループ、モニタ、警告、リモート・サーバを更新することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。

タスク

関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法

このタスクでは、テンプレート変更適用ウィザードを使用してテンプレートの変更を関連グループ・デプロイメントに適用する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1034 ページの「ウィザードの実行」
- ▶ 1035 ページの「構造および内容の相違の表示」
- ▶ 1036 ページの「新規変数の値の追加」
- ▶ 1037 ページの「テンプレート変更適用の結果の確認」
- ▶ 1037 ページの「サマリ・レポートへのテンプレート変更のエクスポート - オプション」

1 ウィザードの実行

ウィザードを実行するには、テンプレート・ツリーでテンプレートを右クリックして、**[変更の適用]** を選択します。最初のページで、更新する関連テンプレート・グループを選択します。さらに次のオプションも選択できます。

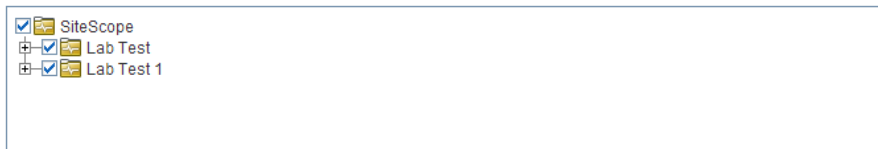
- ▶ **[更新で削除できます]** を選択すると、ソース・テンプレートに含まれない SiteScope オブジェクトがデプロイ済みグループから削除されます。
- ▶ **[リモート サーバでテンプレートの変更を検証]** を選択すると、テンプレートのデプロイ先のリモート・サーバと比較し、選択したテンプレートのモニタ設定変更が正しいかどうかを検証されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1038 ページの「テンプレート変更適用ウィザード」を参照してください。

例：

デプロイ済みグループの選択

テンプレート変更を適用するデプロイ済みテンプレートと関連するグループを選択します。



更新で削除できます

(ソース テンプレートに含まれないすべての SiteScope オブジェクトをデプロイ済みテンプレートから削除できます)

リモート サーバでテンプレートの変更を検証

2 構造および内容の相違の表示

テンプレートとデプロイ済みグループの構造上の相違を表示します。[整合性の確認] のユーザ・インタフェースの詳細については、1041 ページの「[整合性の確認] ページ」を参照してください。

テンプレート・オブジェクトの内容の相違を表示するには、[相違の表示] リンクをクリックして [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックスを開きます。このリンクは、内容の相違があるテンプレート・オブジェクトにのみ表示されます。[コンテンツの変更] のユーザ・インタフェースの詳細については、1043 ページの「[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例 - [整合性の確認] ページ

整合性の確認

テンプレートとデプロイ済みグループ間の構造上の相違を表示します。
テンプレートとデプロイ済みグループオブジェクトプロパティ間の相違がある場合は、
[相違の表示] リンクをクリックして、これらの相違を表示できます。

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 2
2 のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違があります

グループ名	コンテンツの差異	
[-] SiteScope\Lab Te...		<input checked="" type="checkbox"/>
[-] Memory on 16...		
[-] Cpu monitor o...		
[-] Unix リモート ...		
[-] 16.148.24.2...	相違の表示	
[+] SiteScope\Lab Te...		<input checked="" type="checkbox"/>

例 - [コンテンツの変更] ページ

コンテンツの変更

オブジェクトのプロパティに行われる内容の変更の詳細をレビューします。

タイプ: モニタ

名前: Cpu monitor on localhost

プロパティ名	現在の値	置換する値	アクション
すべて更新	600	60	Modified
エラー条件	utilizationPercentage == ...	utilizationPercentage == 90e...	Modified
エラーの検証		on	Added

3 新規変数の値の追加

テンプレートにある新規変数に値を追加します。必須の変数値は、赤のアスタリスク (*) で示されます。既存の変数の値を編集することもできます。[適用] をクリックするとウィザードが完了し、テンプレートの更新が適用されます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1044 ページの「[変数の変更] ページ」を参照してください。

例 - 変数の変更] ページ

変数の変更

デプロイされたグループの新しい変数に値を追加するか既存の変数値を編集する、またはその両方を行ってください。

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 4

4 のデプロイ済みグループに既存の変数値があるか変数がありません

既存の値を持つ変数を持つ、あるいは変数のないデプロイ済みグループは以下の通りです。

変数値を持つグループは展開でき、必要に応じて変数値を変更できます。

変数名	変数の値	
SiteScopeLab Test 4...		<input checked="" type="checkbox"/>
x user*		
x host		
x frequency	60	
x test	Cp1252	
x password	
SiteScopeLab Test 1...		<input checked="" type="checkbox"/>
x user*		
x host		
x frequency	600	
x test	Cp1252	
x password	
SiteScopeLab Test...		<input checked="" type="checkbox"/>

4 テンプレート変更適用の結果の確認

テンプレート変更適用の結果を確認し、必要な場合は、更新に失敗したデプロイ済みグループに変更を再適用します。[結果サマリの適用] のユーザ・インタフェースの詳細については、1045 ページの「[結果サマリの適用] ページ」を参照してください。

例 - [結果サマリの適用] ページ

結果サマリの適用

テンプレート変更による影響を受けるデプロイ済みグループのサマリを表示します。PDF レポート アイコンをクリックして、デプロイ済みグループに行われた変更を確認してください。

1 個のデプロイ済みグループが正常に更新されました。

1 個のデプロイ済みグループが更新されませんでした。



変更されなかったルート グループ:

グループ名	理由
SiteScopeLab monitors\Windows m...	
Memory on cinderella(1)	Parameter error occurred propertyThe fo...
Cpu monitor on cinderella	Parameter error occurred propertyThe fo...
Microsoft Windows リモート サーバ	Parameter error occurred propertyThe fo...
cinderella remote windows	更新できませんでした

5 サマリ・レポートへのテンプレート変更のエクスポート - オプション

任意で、テンプレート変更適用の結果をサマリ・レポート (PDF ファイル) にエクスポートできます。サマリ・レポートの詳細については、1047 ページの「テンプレート変更適用サマリ・レポート」を参照してください。

参照情報

テンプレート変更適用ウィザード

このウィザードでは、デプロイ済みグループのテンプレートの整合性を確認し、ソース・テンプレートが更新されるたびにテンプレートによってデプロイされる SiteScope オブジェクトを更新できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、テンプレートを右クリックして [変更の適用] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ テンプレート変更適用ウィザードを実行するには「グループの編集」権限が必要で、[許可されているグループ] リストで権限が付与されているグループのみで実行できます。[許可されているグループ] リストに含まれていないデプロイ済みのグループは、ウィザードには表示されません。 ▶ 選択したテンプレートに関連付けられたデプロイメントがある場合にのみ、ウィザードが開きます。テンプレートのデプロイの詳細については、970 ページの「テンプレートのデプロイ」を参照してください。
関連タスク	1033 ページの「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」
ウィザード・マップ	<p>このウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>[デプロイ済みグループの選択] ページ > [整合性の確認] ページ > [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

[デプロイ済みグループの選択] ページ

このウィザード・ページでは、テンプレートの変更を適用するソース・テンプレートに関連付けられたグループを選択できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、1038 ページの「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。 [デプロイ済みグループの選択] ページ > [整合性の確認] ページ > [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<選択済みテンプレートに関連付けられたグループのリスト>	<p>テンプレートの変更内容を更新する選択済みテンプレートに関連付けられたグループ。</p> <p>標準設定値：すべての関連付けられたグループとサブグループが選択されます。</p>

UI 要素	説明
<p>更新で削除できます</p>	<p>テンプレートの整合性を確実にするには、このオプションを選択します。デプロイ済みグループからソース・テンプレートに含まれていないすべての SiteScope オブジェクトを削除します。ただし、[変更を公開するとき、グループを無視する] オプションが選択されているルート・グループ下のグループのオブジェクトは除きます。グループ設定の無視の詳細については、990 ページの「[新規テンプレート グループ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：デプロイした後テンプレートから削除した、[変更を公開するとき、グループを無視する] オプションが選択されたテンプレート・グループは、[更新で削除できます] が選択され変更が適用されると、デプロイメントから削除されます。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>
<p>リモート・サーバでテンプレートの変更を検証</p>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバで、選択済みテンプレートのモニタ設定の変更が正しいかを検証します。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続を使用するため更新のパフォーマンス時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>

[整合性の確認] ページ

このウィザードでは、ソース・テンプレートとデプロイ済みグループ間の構造上の差異を表示可能にし、デプロイ済みグループ・オブジェクトの内容の差異へのリンクを提供します。

重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は、1038 ページの「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。 ▶ [テンプレート変更適用ウィザード] の [整合性の確認] ページに表示されていない [タグの検索 / フィルタ] 値に変更します。ただし、変更はデプロイ済みグループに適用されます。
ウィザード・マップ	<p>テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)</p>
関連情報	1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
<N> のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違があります	ソース・テンプレートとの間に構造上または内容の差異があるデプロイ済みグループとグループ・オブジェクト (サブグループ、モニタ、警告、リモート・サーバ) を表示します。
<N> のデプロイ済みグループに構造およびコンテンツの相違がありません	ソース・テンプレートとの構造または内容の差異がないデプロイ済みグループを表示します。デプロイメントの差異がないグループは、折りたたまれて表示されます。

UI 要素	説明
<p>グループ名</p>	<p>デプロイ済みグループとそのすべてのオブジェクト（サブグループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ）の名前を表示します。オブジェクトの構造上の差異は、グループ・ツリー階層に次のテキストと色分けで表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 追加済み：デプロイ済みグループに追加された新規オブジェクトを示します。オブジェクトは緑色で表示されます。 ▶ テンプレート内に存在しない（[更新で削除できます] オプションが [デプロイ済みグループの選択] ページで選択されていない場合のみ使用可能）：ソース・テンプレートに存在しないオブジェクトを示します。オブジェクトは青色で表示されます。 ▶ 無視： [変更を公開するとき、グループを無視する] オプションが選択されたサブグループが表示されます。無視されたグループが灰色で表示されます。 ▶ 削除（[更新で削除できます] オプションが [デプロイ済みグループの選択] ページで選択されている場合のみ使用可能）：デプロイ済みグループから削除されるオブジェクトを示します。オブジェクトは赤色で表示されます。 ▶ 未使用：テンプレート・リモート・サーバが使用されていないことを示します。未使用のリモート・サーバは灰色で表示されます。
<p>コンテンツの差異</p>	<p>プロパティ、しきい値、その他の構造上以外の差異での内容の差異を含むオブジェクトでは、[相違の表示] リンクが表示されます。リンクをクリックすると [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックスが開き、デプロイ済みグループまたはオブジェクトのプロパティ・レベルの差異が表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1043 ページの [コンテンツの変更] ダイアログ・ボックスを参照してください。</p> <p>デプロイされたテンプレート・リモート・サーバは、[Microsoft Windows リモート サーバ] または [UNIX リモート サーバ] セクションに表示されます。Microsoft Windows/UNIX リモート・サーバにリモート・サーバがすでに存在する場合、テンプレートのデプロイ時にリモート・サーバは再デプロイされません。</p>

[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス

このウィザード・ページでは、更新に選択したオブジェクトのすべてのプロパティ、現在の値と置換する値、プロパティ・アクションの状態のリストを表示できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、1038 ページの「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。 テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)
関連情報	1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
タイプ	オブジェクト・タイプ (グループ, モニタ, 警告, 警告アクション, リモート)。
名前	選択したオブジェクトの名前。
プロパティ名	変更の適用で影響を受けるプロパティの名前。
現在の値	デプロイ済みグループの既存のプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループに追加される場合は、この値は空です。 注: 既存のパスワードのプロパティは暗号化されて表示されます。

UI 要素	説明
置換する値	<p>テンプレートの置換するプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループから削除される場合は、この値は空です。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 置換するパスワードのプロパティは暗号化されて表示されます。 ▶ テンプレート・モニタの 【依存対象】 プロパティを変更すると、依存関係にあるテンプレート・モニタのフル・パスが表示されます (SiteScope¥tc¥template¥group¥CPU など)。
アクション	<p>アクションの状態 (「Modified」, 「Added」, 「Deleted」, 「Ignored」)。ベースラインしきい値に変更がない場合、ベースライン・モニタには「Ignored」状態が使用されます。</p>

【変数の変更】 ページ

このウィザードでは、デプロイ済みグループの新規変数に値を追加できます。既存の変数の値を編集することもできます。

重要な情報	<p>このウィザードに関する一般情報は、1038 ページの「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。</p>
ウィザード・マップ	<p>テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > 【変数の変更】 ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)</p>
関連情報	<p>1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」</p>

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
変数名	<p>デプロイ済みグループの新規または既存の変数の名前。赤色のアスタリスクは、変数の値が必須であることを示します。</p> <p>注： 値が入力された変数を含むグループを展開して、必要に応じてその変数を変更できます。変数が含まれないグループは展開できません。</p>
変数の値	<p>デプロイ済みグループに追加された新規変数の値。既存の変数の値を編集することもできます。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ リモート・サーバの変数の値は、読み取り専用で変更できません。 ▶ 変数文字列にハイパーテキストのタグが含まれていると、その文字列が切り捨てられて [変数の値] ボックスに正しく表示されません (文字列の一部がテキスト・ラベルに表示されます)。


[結果サマリの適用] ページ

このウィザード・ページでは、適用されたテンプレートの更新のサマリを表示できます。

重要な情報	このウィザードに関する一般情報は、1038 ページの「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。
ウィザード・マップ	<p>テンプレート変更適用ウィザードには、次のページが含まれています。</p> <p>テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)</p>
関連情報	1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」

第 41 章 • ユーザ定義テンプレートの適用

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	エクスポート : 各ルート・グループの適用の結果を PDF ファイルにエクスポートします。詳細については、1047 ページの「テンプレート変更適用サマリ・レポート」を参照してください。
グループ名	ルート・グループ名とグループのオブジェクト (サブグループ, モニタ) を表示します。
理由	SiteScope でデプロイ済みグループへの変更を適用できない場合、失敗した原因がそのグループの各モニタに表示されます。


テンプレート変更適用サマリ・レポート

このレポートには、デプロイ済みグループに適用されるテンプレート変更に関する情報が表示されます。更新に失敗したまたは無視されたグループ・オブジェクトの情報も表示されます。結果はオブジェクト・レベル（グループ、モニタ、警告、警告アクション、リモート・サーバ）で表示されます。

テンプレート変更適用サマリ レポート

変更を適用するデプロイ済みグループの総数: 4
 更新されていないデプロイ済みグループの総数: 0
 正常に更新されたデプロイ済みグループの総数: 4

正常に変更されたデプロイ済みグループ				
デプロイ済みルート グループ: SiteScope\Lab Test 4\Unix monitors for 16.16.16.16				
タイプ	名前	理由	メッセージ	
モニタ	SiteScope\ Lab Test 4\ Unix monitors for 16.16.16.16 Memory on 16.16.16.16	未変更		
	プロパティ 名	デプロイメント 値 (以前)	テンプレート 値 (現在)	プロパティ 値の アクション
	すべて更新	150	120	正常に変更 されました
リモート サーバ	16.16.16.16 remote unix	正常に変更 されました		

<p>アクセス方法</p>	<p>[テンプレート変更適用ウィザード] の [結果サマリの適用] ページで, [レポート]  ボタンをクリックします。</p>
<p>重要な情報</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このウィザードに関する一般情報は, 1038 ページの「テンプレート変更適用ウィザード」で入手できます。 ▶ テンプレート変更適用サマリ・レポートの PDF 版は, Firefox 2.x ではサポートされていません。 ▶ レポートを PDF にエクスポートするときに, ほとんどの言語で文字を表示できるようにするには, PDF の表示に使用するマシンに Arial Unicode MS フォントがインストールされている必要があります。詳細については, 1005 ページの「PDF へのエクスポート時の Unicode フォントの有効化方法」を参照してください。
<p>関連タスク</p>	<p>1033 ページの「関連グループ・デプロイメントへのテンプレートの更新適用方法」</p>
<p>ウィザード・マップ</p>	<p>テンプレート変更適用ウィザードには, 次のページが含まれています。</p> <p>テンプレート変更適用ウィザード > [整合性の確認] ページ > ([コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス) > [変数の変更] ページ > [結果サマリの適用] ページ > (テンプレート変更適用サマリ・レポート)</p>
<p>関連情報</p>	<p>1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」</p>

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
< レポートのサマリ >	変更の適用対象として選択したルート・グループの総数。変更成功したグループ数と失敗したグループ数を含みます。
デプロイ済みルート グループ < グループ・ パス >	<p>テンプレートの変更による更新に成功または失敗した、デプロイ済みグループとすべてのグループ・オブジェクトの名前。更新されなかったデプロイ済みグループが最初に表示されます。</p> <p>注: 変更を適用するには、ルート・グループ階層のすべての変更が成功する必要があります。グループ・オブジェクトへのいずれかの変更が失敗すると、そのグループへのすべての変更がロール・バックされます。</p>
タイプ	オブジェクト・タイプ (グループ, モニタ, 警告, 警告アクション, リモート・サーバ)。
名前	オブジェクトの名前とそのパス。
理由	オブジェクトの適用状態 (「Successfully added」, 「Successfully modified」, 「Successfully deleted」, 「Failed to add」, 「Failed to modify」, 「Failed to delete」, Ignored」, 「Unchanged」)。

UI 要素	説明
メッセージ	テンプレートの変更によって更新されなかったデプロイ済みグループ・オブジェクトの、変更の適用に失敗した理由。
< プロパティの詳細 >	<p>内容が変更されたデプロイ済みグループ・オブジェクトの場合</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ プロパティ名 : 更新されたプロパティの名前。 ▶ デプロイメント値 (以前) : デプロイ済みグループの以前のプロパティ値。プロパティがデプロイ済みグループに追加された場合は、この値は空です。以前のパスワード変数は暗号化されて表示されます。 ▶ テンプレート値 (現在) : デプロイ済みグループの置換するプロパティ値。これがテンプレートの現在のプロパティ値です。プロパティがデプロイ済みグループから削除された場合は、この値は空です。置換するパスワード変数は暗号化が解除されて表示されます。 ▶ プロパティ値のアクション : プロパティ値に加えられた変更のタイプ (「正常に変更されました」, 「正常に追加されました」, 「正常に削除されました」)。

42

自動テンプレート・デプロイメント

本章の内容

概念

- ▶ 自動テンプレート・デプロイメントの概要 (1052 ページ)
- ▶ XML ファイルの作成と操作 (1053 ページ)
- ▶ XML ファイルの例および変数 (1053 ページ)
- ▶ XML バリデータ (1058 ページ)
- ▶ XML を使用したテンプレート変更適用 (1059 ページ)
- ▶ デプロイメントの結果 (1061 ページ)

タスク

- ▶ XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ (1062 ページ)
- ▶ テキストの暗号化方法 (1066 ページ)
- ▶ デプロイメントの更新方法 (1067 ページ)

参照情報

- ▶ XML タグ参照情報 (1069 ページ)
- ▶ 自動デプロイメント XML の生成 (1073 ページ)
- ▶ トラブルシューティングおよび制限事項 (1075 ページ)

概念

自動テンプレート・デプロイメントの概要

SiteScope では、SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用して SiteScope テンプレートまたはソリューション・テンプレートを自動的にデプロイできます。XML ファイルを使用して、テンプレートで定義したオブジェクトをデプロイします。このテンプレートには親グループを含める必要があります。また、サブグループ、モニタ、リモート・サーバ (1 つ)、警告、変数定義を含めることができます。XML ファイルを編集して、変数定義を必須変数、グローバル変数、インスタンス変数に割り当てることができます。

テンプレートの作成の詳細については、942 ページの「SiteScope テンプレートの概要」を参照してください。ソリューション・テンプレートを使った作業の詳細については、1082 ページの「ソリューション・テンプレートの概要」を参照してください。

自動テンプレート・デプロイメントを使用して、テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用することもできます。自動テンプレート・デプロイメントでは、テンプレート変更適用ウィザードと同じ機能が使用されます。このウィザードの動作の詳細については、1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

ユーザ・インタフェースの代わりに自動テンプレート・デプロイメントを使用してテンプレートをデプロイし、テンプレートの変更をデプロイ済みグループに適用できます。スクリプトを使用して複数の SiteScope にデプロイする場合は、この方法がユーザ・インタフェースよりも適しています。これは、1 つのファイルを使用して、標準の XML スクリプトで複数の SiteScope にデプロイできるためです。

XML ファイルの作成と操作

次のいずれかの方法で XML ファイルを作成します。

- ▶ テキストがサポートされている任意のツールで XML を生成および編集します。ファイルは、SiteScope ファイル・ディレクトリにある XSD ファイルに基づいている必要があります。XSD ファイルは基本となる XML ファイルで、各自のバージョンのデプロイメント XML を作成するのに適したタグ、要素、属性がすでに含まれています。
- ▶ SiteScope インタフェースを使用して、テンプレート・コンテナまたはソリューション・テンプレートからデプロイメント XML ファイルを生成します。各テンプレート・コンテナおよびソリューション・テンプレートには、該当の自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルを生成するためのオプションがあります。詳細については、1073 ページの「自動デプロイメント XML の生成」を参照してください。

テンプレートまたはソリューション・テンプレートから生成する場合も、手動で作成する場合も、使用する XML は有効な XML で、ATD スキーマ (XSD) に適合している必要があります。専用ツールを使用して XML ファイルを検証できます。

XML ファイルのデプロイは、関連するテンプレートまたはソリューション・テンプレートがモニタ・ツリーにある対象 SiteScope によって異なります。テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイするには、関連するテンプレートまたはソリューション・テンプレートがある対象 SiteScope の永続フォルダに XML ファイルをコピーします。複数のデプロイメントを 1 つの XML ファイルにグループ化できます。

XML ファイルの例および変数

自動テンプレート・デプロイメント・ファイルに含まれているすべての XML タグ、要素、属性の詳細については、1069 ページの「XML タグ参照情報」を参照してください。

各自動テンプレート・デプロイメント XML は、必ず次の宣言で始まります。

- ▶ `<?xml version="1.0" encoding="UTF-8" ?>` これは、UTF-8 文字エンコーディングの XML であることを宣言しています。
- ▶ `<sitescope:sitescopeRoot>` これは、スキーマの宣言です。URL が記載されますが、どのようなときでも SiteScope 外部の場所に接続することはありません。

XML ファイルの各セクションは次のいずれかのタグで始まり、そのアクションを実行するための指示があります。

- ▶ **<sitescope:templateDeployment>** テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイします。同じ XML ファイルに複数のインスタンスを含めることができます。
- ▶ **<sitescope:templateDeployUpdate>** 既存のデプロイメントに変更が適用されます。

各アクション内で、次を指定する必要があります。

- ▶ **<deploy:fullPathtoTemplate>** ユーザ・インタフェースの SiteScope ツリー内のテンプレートへのパス。SiteScope ルート・ノードは含まれません。XML ファイルの例では、この値は `Templates¥Windows` になります。
- ▶ **<deploy:fullPathToDestinationGroup>** アクションを実行するデプロイ先グループの SiteScope ツリー内のパス。たとえば、XML ファイルの例では、テンプレート・グループ・オブジェクトはグループ `SiteScope¥Windows_Monitors` のサブグループとして作成されます。

本項の内容

- ▶ 1055 ページの「XML ファイルの例」
- ▶ 1056 ページの「変数」

XML ファイルの例

次に、自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルの例を示します。このファイルは、ユーザ・インタフェースから生成されました。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!-- SiteScope deployment descriptor -->
<sitescope:sitescopeRoot xmlns:sitescope="." xmlns:deploy="." xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance" xsi:schemaLocation="." ./schemas/sitescope.xsd">
  <!-- To deploy use "templateDeployment", to update an existing deployment use templateDeploymentUpdate (this element can have the attribute enableDeleteOnUpdate with values of yes/no) -->
  <sitescope:templateDeployment>
    <!-- Path to source template in SiteScope tree (not including the root node) -->
    <deploy:fullPathToTemplate>Template Examples/Windows basic template
  </deploy:fullPathToTemplate>
    <!-- Path to destination group in SiteScope tree (not including the root node). New group will be created if need be -->
    <deploy:fullPathToDestinationGroup> </deploy:fullPathToDestinationGroup>
    <deploy:login user="admin99" password="(sisp)n9JRVALxlsq="/>
    <!-- Mandatory variables names -->
    <deploy:mandatoryFields>host frequency password user</deploy:mandatoryFields>
    <!-- Global values for variables in current template -->
    <deploy:globalVariables>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="600"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="password" value="(sisp)d5JLOSWaVfe="/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="user" value="admin"/>
    </deploy:globalVariables>
    <!-- Add here local variables for a deploy instance (overrides global variables with same name) -->
    <deploy:templateInstanceDeployVariable>
      <deploy:variables encrypted="no" name="group" value="Critical_monitors"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="600"/>
    </deploy:templateInstanceDeployVariable>
    <deploy:templateInstanceDeployVariable connectToServer="no">
      <deploy:variables encrypted="no" name="group" value="Minor_monitors"/>
      <deploy:variables encrypted="no" name="frequency" value="6000"/>
    </deploy:templateInstanceDeployVariable>
  </sitescope:templateDeployment>
</sitescope:sitescopeRoot>
```

変数

テンプレートとデプロイ先グループのパスを指定したら、XML ファイルの次のセクションでテンプレート変数と値に対応します。XML ファイルでは、変数とその値の定義、必須変数の宣言、対応する値の適用範囲（デプロイメント全体またはインスタンス単位）の決定を柔軟に行うことができます。

ユーザ・インタフェースから XML ファイルを生成し、変数に定義済みの値がある場合、その値が XML ファイルの変数に割り当てられます。

必須変数

テンプレートの必須変数の宣言は、**<deploy:mandatoryFields>** タグ内に表示されます。変数が必須変数として宣言されている場合、変数に対応する値をファイルで定義する必要があります。

ユーザ・インタフェースから XML を生成し、変数の作成時または編集時に **[Mandatory]** オプションを選択している場合、その変数は、**<deploy:mandatoryFields>** タグ内に表示されます。変数名を手動でこのリストに追加し、必須変数として宣言することもできます。

上記のファイルの例では、**group** と **frequency** が必須変数として定義されています。これらの変数の値は、**<deploy:globalVariables>** または **<deploy:templateInstanceDeployVariables>** のいずれかの **<deploy:variables>** タグ内に表示されます。

グローバル変数またはインスタンス変数

任意指定の **<deploy:globalVariables>** タグには、デプロイメントの標準設定のグローバル・テンプレート変数が含まれています。グローバル・テンプレート変数を定義するかどうかは任意です。グローバル・テンプレート変数を定義する場合、ファイルのデプロイメント・インスタンス領域 (**<templateInstanceDeployVariables>** タグ) で別の変数の値を指定して変数の値を上書きできます。グローバル変数の値は、各デプロイメント・インスタンスの別の値で上書きできます。

XML ファイルの例のように、テンプレートの複数のインスタンスが同じ SiteScope の同じ場所にデプロイされる場合、各インスタンスにグループ名の変数を含める必要があります。グループ名は必須変数にし、各デプロイメント・インスタンスで異なる値を指定する必要があります。グループ・テンプレート・オブジェクトには、その値として同じ変数が定義されている必要があります。テンプレートには、名前値が変数ではないほかのグループを含めることができます。このグループは一度だけデプロイされます。

上記の XML ファイルの例では、デプロイメントのインスタンスが 2 つあるため、変数 **group** は必須変数として定義されており、各インスタンス・デプロイメントで異なる値 (**Critical_monitors** と **Minor_monitors**) が指定されています。この結果、テンプレートのグループ・オブジェクトの下に、同じモニタ・オブジェクトの 2 つのグループが作成されます。

XML ファイルの例では、次のグループがデプロイされます。

- ▶ **SiteScope/Windows_Monitors/Critical_monitors** (デプロイメントの最初のインスタンス)。

このグループに該当するモニタおよび警告がテンプレートで定義されます。頻度値が変数 **frequency** として定義されているテンプレート・モニタ・オブジェクトの値が 600 (10 分ごと) になります。

- ▶ **SiteScope/Windows_Monitors/Minor_monitors** (デプロイメントの 2 番目のインスタンス)。

このグループに該当するモニタおよび警告がテンプレートで定義されます。頻度値が変数 **frequency** として定義されているテンプレート・モニタ・オブジェクトの値が 6000 (1 時間ごと) になります。このグループには、**connectToServer=no** 属性が追加されています。つまり、テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティは検証されません。

XML ファイルの例には、ユーザ名およびパスワード (`<deploy:login user="admin99" password="(sisp)n9JRVALxIsq=" />`) のログイン情報も含まれています。セキュリティ保護された環境を使用している場合、各デプロイメントで有効なユーザ名およびパスワードを指定する必要があります。暗号化ツールを使用してユーザ名とパスワードを暗号化できます。

注: テンプレートにシステム変数を定義している場合 (%% ではなく \$\$ で定義されます), 自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルでは通常の変数として扱われます。テンプレートでシステム変数を使用する場合に適用される制限は, XML ファイルで使用する場合にも適用されます。

XML バリデータ

XML バリデータは, 自動テンプレート・デプロイメントで使用するスキーマに対して XML ファイルを検証するユーティリティです。SiteScope デプロイメント自体は検証されません。バリデータ・ファイルへのパスは次のとおりです。

- ▶ Windows の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ >
¥tools¥AutoDeployment¥validate_template_xml.bat
- ▶ UNIX の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ >
¥tools¥AutoDeployment¥validate_template_xml.sh

このユーティリティでは, XSD ファイルに対して XML の構造がチェックされ, ファイルの内容が有効な XML であることと, XSD に対応していることが確認されます。また, すべての必須変数に値が定義されているかどうかも検証されます。値は, グローバル変数またはデプロイメント・インスタンス変数のいずれかとして定義できます。検証に失敗すると, 失敗の理由が画面に出力されます。

XML を使用したテンプレート変更適用

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用してテンプレートの変更を適用し、デプロイ済みグループの値または構造を更新することもできます。グループの [ソース テンプレート] フィールドが、XML で参照しているテンプレートとして識別される場合、自動テンプレート・デプロイメント XML を使用してグループの値およびオブジェクトを更新できます。

XML では、テンプレート変更適用ウィザードと同じ機能が使用されますが、ユーザ・インタフェースにアクセスする必要はありません。XML ファイルでは、テンプレートの変更を適用するために使用される変数に値を指定できます。ウィザードおよびテンプレートの更新機能の詳細については、1030 ページの「テンプレート・デプロイメントの更新」を参照してください。

自動テンプレート・デプロイメントでは、XML を使用してグループ・デプロイメントを作成する場合と同じように、テンプレートの変更をテンプレートのデプロイ済みグループに適用できます。テンプレートを変更したら XML を作成し、編集済み XML をコピーしてデプロイ先 SiteScope マシンの永続フォルダに貼り付けます。

本項の内容

- ▶ 1060 ページの「デプロイメント XML タグの更新の詳細」
- ▶ 1060 ページの「テンプレート更新レポート」

デプロイメント XML タグの更新の詳細

デプロイ済みグループの値またはオブジェクトを更新する場合、XML ファイルでは `<sitescope:templateDeploymentUpdate>` タグ (テンプレートをデプロイする場合に使用する `<sitescope:templateDeployment>` タグではありません) を使用する必要があります。XML ファイルで使用する要素および属性の詳細については、1069 ページの「XML タグ参照情報」を参照してください。

`<sitescope:templateDeploymentUpdate>` タグ内で、`enableDeleteOnUpdate` 属性に「**yes**」を入力し、XML ファイルを使用してデプロイメントを更新するときにデプロイ済みグループ内のオブジェクトを削除できます。自動テンプレート・デプロイメント XML で参照されるテンプレートに表示されていないオブジェクトが削除の対象になります。「**no**」を入力すると、XML ファイルで参照されるテンプレートに表示されていない場合でも、グループ内のすべてのオブジェクトがデプロイメントの更新後も保持されます。テンプレート変更適用ウィザードのこのオプションの詳細については、1040 ページの「更新で削除できます」を参照してください。

更新を正常に実行するには、デプロイ済みグループのデプロイ先 SiteScope グループの名前を `deploy:fullPathToDestinationGroup` タグの値として定義する必要があります。`fullPathToDestination` は、デプロイメントのルート・グループ (テンプレートのルート・グループ) で終わる必要があります。デプロイメント・セクションごとに 1 つのグループが更新されるため、複数のグループがある場合はそれぞれに個別のデプロイメント更新セクションとグループ名を定義する必要があります。

テンプレート更新レポート

自動テンプレート・デプロイメントの更新を実行したら、XML 形式のレポートを使用できるようになります。このレポート・ファイルの名前には、XML ファイルの名前、タイムスタンプ、文字列 `_reports` が含まれています。これらのレポートは、`<SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistency%autodeployment%reports` にあります。

レポートは XML 形式で、次のタグが最初に含まれています。

- ▶ `totalNumberOfDeployments`
- ▶ `totalNumberOfFailedDeployments`
- ▶ `totalNumberOfSuccessDeployments`

デプロイメント・インスタンスごとに、XML の `<publishChangesSummaryPage>` セクションが表示されます。ここでは、更新された内容の詳細が表示されます。正常に変更されなかったデプロイメントは、ファイルの最初に表示されます。

SiteScope ユーザ・インタフェースを使用してデプロイ済みグループを更新する場合、このファイルはテンプレート変更適用ウィザードによって作成される XML バージョンの PDF ファイルになります。レポートの詳細については、1047 ページの「テンプレート変更適用サマリ・レポート」を参照してください。

デプロイメントの結果

デプロイおよび更新の両方の XML ファイルをコピー先 SiteScope の永続フォルダにコピーする場合、ファイルは次の 2 つのディレクトリのいずれかにコピーされます。

▶ < SiteScope のルート・ディレクトリ >

`¥persistency¥autodeployment¥successHistory` ディレクトリ。デプロイ済みグループのすべてのインスタンスを正常にデプロイまたは更新した XML ファイルが含まれます。

▶ < SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥persistency¥autodeployment

`¥failHistory` ディレクトリ。デプロイ済みグループのインスタンスのデプロイまたは更新に失敗した XML ファイルが含まれます。1 つでも失敗したインスタンスがあると、ほかのすべてが成功していても XML はこのフォルダに適用されます。

XML ファイルの名前が変更されます (アンダースコアとタイムスタンプが元の XML ファイルの名前に追加されます)。たとえば、すべてのグループとインスタンスのデプロイに成功した CPUgroups.XML という名前の XML ファイルは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥persistency¥autodeployment¥successHistory ディレクトリに保存され、CPUgroups_1203951216931.xml という名前になります。

タスク

XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ

このタスクでは、自動テンプレート・デプロイメントを実行する方法について説明します。ソリューション・テンプレートをデプロイする場合も同じ手順を使用できます。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1062 ページの「前提条件」
- ▶ 1063 ページの「XML ファイルの作成」
- ▶ 1063 ページの「XML ファイルの編集」
- ▶ 1064 ページの「ログインの詳細の指定（セキュリティ保護された環境で作業している場合に必須）」
- ▶ 1064 ページの「パスワードなどのフィールドの暗号化（任意指定）」
- ▶ 1065 ページの「XML ファイルの検証」
- ▶ 1065 ページの「SiteScope サーバ・マシンへの検証済み XML のコピー」
- ▶ 1065 ページの「デプロイメントが成功したかどうかのチェック」

1 前提条件

テンプレートを自動的にデプロイする各 SiteScope には、テンプレート・コンテナ内にそのテンプレートが含まれている必要があります。テンプレートの最上位レベルには、グループ・オブジェクトが必要です。ほかのすべてのオブジェクトはそのグループ内に作成する必要があります。テンプレートには、サブグループ、モニタ、警告、リモート・サーバ（1 つ）、変数を含めることができます。

複数の SiteScope を使った作業の場合：

- ▶ 1 つの SiteScope でテンプレートを作成したら、[テンプレート コンテナ] ショートカット・メニューの [エクスポート] / [インポート] オプションを使用してほかの SiteScope にエクスポートできます。タスクの詳細については、1006 ページの「[テンプレートのエクスポート] ダイアログ・ボックス」および 1008 ページの「[テンプレートのインポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

- ▶ BSM を使って作業している場合、[SAM 管理] の [SiteScope の同期] ウィザードを使用して、SiteScope 間でテンプレートをコピーできます。ユーザ・インタフェースの詳細については、HP Business Service Management 文書ライブラリの『システム可用性管理の使用』の「SiteScope の同期ウィザード」を参照してください。

2 XML ファイルの作成

次のいずれかの方法で XML ファイルを作成できます。

- ▶ テンプレート・コンテナを右クリックし、コンテキスト・メニューの [XML の生成] を選択します。ソリューション・テンプレートをデプロイする場合、このオプションはテンプレート・レベルで表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1073 ページの「自動デプロイメント XML の生成」を参照してください。
- ▶ 専用の XML アプリケーションを使用して XML ファイルを作成します。ファイルは有効な XML ファイルで、次のディレクトリにある XSD ファイルに基づいている必要があります。
 - ▶ < SiteScope のルート・ディレクトリ > %conf%\xsds\deploy.xsd
 - ▶ < SiteScope のルート・ディレクトリ > %conf%\xsds\sitescope.xsd

3 XML ファイルの編集

XML ファイルを編集して、デプロイメントに必要な値を入力する必要があります。ファイルの編集およびファイルのサンプルの詳細については、1053 ページの「XML ファイルの例および変数」を参照してください。

XML ファイルのタグの詳細については、1069 ページの「XML タグ参照情報」を参照してください。

注: ユーザ・インタフェースから XML が生成された場合、必須変数フィールドはテンプレートの必須変数に基づいて生成されます。XML ファイルを作成するときに、デプロイメントの成功に不可欠なフィールドがある場合、XML をデプロイする前にこれらのフィールドに値が割り当てられていることを確認する必要があります。

4 ログインの詳細の指定（セキュリティ保護された環境で作業している場合に必須）

セキュリティ保護された環境で作業している場合、各デプロイメントで有効なユーザ名およびパスワードを指定する必要があります。ログイン資格情報を **audit.log** ファイルを使用して、テンプレートを変更するユーザの ID を追跡することもできます。

API でログインをサポートできるようにするには、(</deploy:fullPathToDestinationGroup> の後に) 次の行を追加します。

```
<deploy:login user="<myUserName>" password="<myPassword>" />
```

暗号化ツールを使用して、ユーザ名とパスワードの暗号化手順を実行します。タスクの詳細については、1066 ページの「テキストの暗号化方法」を参照してください。

注：セキュリティ保護された環境で作業している場合、ログインを追加すれば以前のバージョンの SiteScope で生成された XML ファイルを使用できます。

5 パスワードなどのフィールドの暗号化（任意指定）

視認可能なテキスト形式で表示されないようにするフィールドが含まれているテンプレートをデプロイする場合、暗号化ツールを使用してテキストの暗号化手順を実行します。タスクの詳細については、1066 ページの「テキストの暗号化方法」を参照してください。

6 XML ファイルの検証

デプロイする前に XML ファイルを検証することをお勧めします。デプロイするときに XML ファイルが検証にパスしないと、デプロイメントは失敗します。

次のディレクトリにある検証ツールを使用します。

- ▶ Windows の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ >
¥tools¥AutoDeployment¥validate_template_xml.bat
- ▶ UNIX の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ >
¥tools¥AutoDeployment¥validate_template_xml.sh

概念の詳細については、1058 ページの「XML バリデータ」を参照してください。

7 SiteScope サーバ・マシンへの検証済み XML のコピー

各 SiteScope マシンの ¥persistency¥autodeployment ディレクトリ (XML 形式のテンプレートをデプロイする場所) に XML ファイルをコピーします。

標準設定では、テンプレートは 2 分ごとに自動的にデプロイされます。[インフラストラクチャプリファレンス] の **【自動デプロイメント チェックの頻度】** フィールド (プロパティ名 : _autoDeploymentCheckFrequency) で頻度を変更できます。

8 デプロイメントが成功したかどうかのチェック

デプロイメントが成功したかどうかをチェックするには、デプロイ先 SiteScope の < SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥persistency¥autodeployment ディレクトリを検索して、XML が ¥successHistory サブディレクトリまたは ¥failHistory サブディレクトリのどちらにコピーされているかを確認します。

概念の詳細については、1061 ページの「デプロイメントの結果」を参照してください。

また、SiteScope のエラー・ログをチェックすることもできます。

テキストの暗号化方法

このタスクでは、視認可能なテキスト形式で表示されないようにする、パスワードなどのフィールドのテキストを暗号化する方法について説明します。このツールでは XML のフィールドのみが暗号化されます。テンプレート自体で永続ディレクトリの変数の暗号化が制御されます。

デプロイメント XML で使用するテキストを暗号化するには、次の手順を実行します。

1 次のバッチ・ファイルを実行します。

- ▶ Windows の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ>
`¥tools¥AutoDeployment¥encrypt_password.bat`
- ▶ UNIX の場合 : < SiteScope のルート・ディレクトリ>
`¥tools¥AutoDeployment¥encrypt_password.sh`

2 コマンド・プロンプト・ウィンドウを開きます。

- ▶ Windows の場合、ファイルをコマンド・プロンプト・ウィンドウにドラッグ・アンド・ドロップします。
- ▶ UNIX の場合、.sh ファイルをそのディレクトリから実行する必要があります。

3 スペースとパスワード値を入力します (Mypassword など)。ENTER キーを押します。

4 XML ファイルの暗号化された変数の値として、戻り文字列を使用します。属性 **encrypted** の値を **yes** に、変数属性 **value** の値を戻り文字列に変更する必要があります。

たとえば、暗号化ツールによって `<deploy:variables encrypted="yes" name="password" value="(sisp)d5JLOSWaVfE="/>` のような値が生成されます。

デプロイメントの更新方法

このタスクでは、自動テンプレート・デプロイメント XML を使用して、既存のデプロイ済みグループを更新する方法について説明します。テンプレートを変更した場合、デプロイメントの構造を更新できます。また、テンプレートで宣言されている変数に新しい値を指定してオブジェクト・プロパティを更新することもできます。

このタスクの手順は、テンプレートをデプロイする場合のタスクと同じです（ただし、この手順で挙げる例外や追加情報はあります）。デプロイメント・タスクの詳細については、1062 ページの「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1067 ページの「前提条件」
- ▶ 1068 ページの「オブジェクトおよび値を更新するための XML ファイルの作成および編集」
- ▶ 1068 ページの「コピー先 SiteScope へのテンプレート更新適用 XML のコピー」
- ▶ 1068 ページの「パスワードなどのテキストの暗号化（任意指定）」
- ▶ 1068 ページの「テンプレート更新適用 XML の検証」
- ▶ 1068 ページの「結果のレポート」

1 前提条件

更新するデプロイ済みグループの[ソース テンプレート]フィールドは、XML デプロイメント更新ファイルのテンプレートと同じである必要があります。これは、更新するテンプレートとともにデプロイ先 SiteScope に存在します。

2 オブジェクトおよび値を更新するための XML ファイルの作成および編集

XML ファイルを使って作業する場合、次の操作を実行する必要があります。

- ▶ `<templateDeployment>` タグの代わりに `<templateDeploymentUpdate>` タグを使用します。
- ▶ `<templateDeploymentUpdate>` タグの `enableDeleteOnUpdate` 属性に「yes」または「no」の値を入力します。
- ▶ `deploy:fullPathToDestinationGroup` タグを定義します。このタグの値として更新するグループ名を使用します。

これらのタグおよび更新 XML ファイルの詳細については、1060 ページの「デプロイメント XML タグの更新の詳細」を参照してください。

3 コピー先 SiteScope へのテンプレート更新適用 XML のコピー

自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルをデプロイするときのように、テンプレート更新適用 XML をコピー先 SiteScope の永続ディレクトリにコピーします。

4 パスワードなどのテキストの暗号化（任意指定）

タスクの詳細については、1066 ページの「テキストの暗号化方法」を参照してください。

5 テンプレート更新適用 XML の検証

自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルをデプロイするときのように、バリデータ・ツールを使用して編集済み XML ファイルを検証します。

6 結果のレポート

更新用の自動テンプレート・デプロイメント XML をデプロイすると、結果のレポート・ファイルが XML 形式で作成されます。これらのレポートは、`<SiteScope のルート・ディレクトリ>%persistence%autodeployment%reports` にあります。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1060 ページの「テンプレート更新レポート」を参照してください。

参照情報

XML タグ参照情報

次の各表では、自動テンプレート・デプロイメント XML ファイルで使用するすべての要素と属性について説明します。

- ▶ 1069 ページの「要素表」
- ▶ 1071 ページの「属性表」

要素表

要素	説明
sitescope:sitescopeRoot	これは、デプロイメントを作成するための指示、使用する XML のバージョン、XSD ファイルの場所を指定する XML ファイル内の最初のタグにする必要があります。 注 ：これは、SiteScope に関連するすべての XML ファイルで最初の要素になります。
sitescope:template Deployment	このタグを使用すると、テンプレートまたはソリューション・テンプレートをデプロイして、デプロイ先 SiteScope に新しいグループ構造を作成できます。これは、ユーザ・インタフェースからの生成時に XML ファイルで使用される標準設定のタグです。

要素	説明
<p>sitescope:template DeploymentUpdate</p>	<p>このタグを使用すると、更新したテンプレートの変更を公開できます。この変更は、XML で識別されたテンプレートと一致する [ソース テンプレート] フィールドを持つグループの監視構造に適用できます。この XML ファイルではまた、テンプレートで使用する変数の値を更新できます。</p> <p>たとえば、テンプレートで作成した既存のグループに警告やモニタを追加する場合、テンプレートを変更し、このタグを使用してデプロイできます。</p>
<p>deploy:fullPathToTemplate</p>	<p>このタグは、デプロイするテンプレートまたはソリューション・テンプレートの SiteScope ツリー内でのフル・パスを示します。</p> <p>構文： <テンプレート・コンテナ名> / <テンプレート名></p>
<p>deploy:fullPathTo DestinationGroup</p>	<p>このタグは、デプロイした監視構造の作成先となるグループ名の、SiteScope ツリー内でのフル・パス位置を示します。このタグに値がない場合、デプロイメントは SiteScope ノード・レベルに作成されます。</p>
<p>deploy:mandatoryFields</p>	<p>このタグ内の値は、テンプレート作成時に必須フィールドとして選択された変数です。このタグ内に値が存在する場合、グローバル変数には <deploy:globalVariables> タグで、その他の変数には <deploy:variables> タグで値を指定する必要があります。これらの必須フィールドに対応する値がない場合、XML は検証に失敗します。</p>
<p>deploy:globalVariables</p>	<p>このタグは、選択したテンプレート全体にデプロイされる変数が含まれるファイルのセクションをマークします。</p> <p>属性が含まれます。詳細については、1071 ページの「属性表」を参照してください。</p>

要素	説明
deploy:templateInstance DeployVariable	<p>このタグは、選択したテンプレートのインスタンスごとにデプロイされる変数が含まれるファイルのセクションをマークします。</p> <p>同じ変数が <deploy:globalVariables> に存在する場合、インスタンスの変数の値は、同じ変数が存在するインスタンスについてのみグローバル変数の値を上書きします。それ以外のすべてのインスタンスの値は、<deploy:globalVariables> セクションの入力値になります。</p> <p>属性が含まれます。詳細については、1071 ページの「属性表」を参照してください。</p>
deploy:variables	<p>このタグでは、変数とその値を定義します。</p> <p>属性が含まれます。詳細については、1071 ページの「属性表」を参照してください。</p>

属性表

親要素	属性	説明
templateDeploymentUpdate	enableDelete OnUpdate	<p>テンプレートのデプロイメントに存在するオブジェクトのインスタンスが、デプロイメントの構造の更新に使用する XML ファイルに存在しない場合、そのインスタンスを削除するかどうかを示します。</p> <p>使用可能な値 : yes, no</p> <p>このオプションの詳細については、1040 ページの「更新で削除できます」を参照してください。</p>

親要素	属性	説明
deploy:globalVariables deploy:templateInstance DeployVariable	description	デプロイメントのユーザ説明（任意指定）。
	connectToServer	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティを検証します（任意指定）。これは、（この属性が指定されていなくても）標準設定の動作です。リモート・サーバへの接続を避けるには、 connectToServer=no を <deploy:globalVariables> または <deploy:templateInstanceDeployVariable> タグに追加します。 使用可能な値 : yes, no このオプションの詳細については、1024 ページの「リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証」を参照してください。
	accessControlled	（任意）テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。 使用可能な値 : true, false
deploy:variables	encrypted	変数フィールドの値が暗号化されているかどうかを示します。 使用可能な値 : yes, no 値を暗号化するには、暗号化ツールを使用して変数の値を指定します。詳細については、1066 ページの「テキストの暗号化方法」を参照してください。
	name	変数の名前。
	value	変数の値。

自動デプロイメント XML の生成

このダイアログ・ボックスでは、強調表示されたテンプレート・コンテナのテンプレートを自動的にデプロイするために使用する XML ファイルを作成できます。XML ファイルを生成した後、このファイルを編集して、SiteScope ユーザ・インタフェース以外のファイル・ディレクトリからテンプレートをデプロイするために使用できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、作成する自動デプロイ XML ファイルの対象とするテンプレート・コンテナを右クリックして、[XML の生成] を選択します。
関連タスク	1062 ページの「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1052 ページの「自動テンプレート・デプロイメントの概要」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ファイル名	作成する XML ファイルの名前。これは、このテンプレート・コンテナ内のテンプレートを自動的にデプロイするために編集して使用できるファイルです。

UI 要素	説明
パス	<p>XML ファイルの保存場所。標準設定の場所をそのまま使用するか、別の場所を入力します。パスが空の場合、XML ファイルは SiteScope がインストールされているルート・ドライブに保存されます。</p> <p>標準設定値 : < SiteScope インストール・パス > ¥SiteScope¥persistence¥autodeployment¥drafts</p> <p>注 : 以前に同じ ファイル名 と パス を使用して XML ファイルが作成されている場合、以前に保存した XML ファイルは上書きされません。以前のファイルは、_bck <バックアップ番号> を末尾に追加した名前に変更されます。たとえば、[ファイル名] に「CPUtemplate」と入力し、標準設定の場所を受け入れた場合、標準設定のフォルダにある既存のファイルは CPUtemplate.xml_bck1 となり、生成されている現在の XML ファイルは CPUtemplate.xml として保存されます。</p>
テンプレート・ツリー	<p>XML ファイルを作成するテンプレート。XML ファイルの内容は、選択するテンプレートにあるオブジェクトに基づきます。生成される XML ファイルには、選択したテンプレートごとに別々のデプロイ・セクションがあります。</p>

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、自動テンプレート・デプロイメントを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

注：SiteScope テンプレート、ソリューション・テンプレート、テンプレート変更適用ウィザードに適用される注意事項、制限事項、トラブルシューティングの問題は、すべて自動テンプレート・デプロイメントの機能にも適用されます。

本項の内容

- ▶ 1075 ページの「I18N ユーザ」
- ▶ 1076 ページの「ソリューション・テンプレート」
- ▶ 1076 ページの「XML で禁止されている文字」
- ▶ 1076 ページの「グループのないテンプレートを自動デプロイできない」
- ▶ 1077 ページの「自動テンプレート・デプロイメント XML を使用したデプロイ済みグループの更新」

I18N ユーザ

- ▶ メモ帳を使用して XML ファイルを編集しないでください。メモ帳ではファイルの先頭に余分な文字が追加されるため、XML ファイルを解析できなくなります。この文字は表示されませんが、英語以外のファイルを解析不能にします。メモ帳ではなく、ワードパッドまたは XML エディタを使用してください。
- ▶ SiteScope のルート・ディレクトリへのパスに英語以外の文字が含まれている場合、XML を SiteScope の永続ディレクトリにコピーするまでは XML の検証に検証ツールを使用できません。このため、XML が XSD に準拠しているか、必須フィールドに値があるかが検証されません。

ソリューション・テンプレート

次のソリューション・テンプレートでは変数が動的に作成され、XML ファイルで値を指定できないため、自動テンプレート・デプロイメントを実行できません。

- ▶ JBoss Application Server 4.x
- ▶ WebLogic アプリケーション・サーバ
- ▶ WebSphere 5.x アプリケーション・サーバ
- ▶ WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ

XML で禁止されている文字

アンパサンド (&)、引用符 (')、山括弧 (< >) 文字は、XML 属性値で禁止されているため、使用は避けてください。

不正な XML 文字をエスケープするには、一般的なエンコーディングを使用するか (& ではなく & を使用するなど)、文字を CDATA (文字データ) セクションで囲みます。詳細については、http://xmmssc-www.star.le.ac.uk/SAS/xmmsas_20070308_1802/doc/param/node24.html (英語サイト) を参照してください。

グループのないテンプレートを自動デプロイできない

親グループが定義されていないテンプレート (つまり、ルート・テンプレートの直下にモニタがあるテンプレート) を自動デプロイしようとする、デプロイメントは失敗し、次のエラーが <SiteScope のルート・ディレクトリ %logs%>error.log ファイルに書き込まれます。

```
[Autodeployment new XML detection] (XMLAutomationParser.java:294) ERROR  
- Prerequisites of template structure are unmet.Template must be rooted by only  
one group.
```

[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [テンプレート設定] で [テンプレート エンティティの直下にテンプレートの作成を許可する] を選択した場合でも、自動デプロイメントは失敗します。

回避策: テンプレートを手動でデプロイします (テンプレート・ツリーで該当するテンプレートを右クリックしてから、[テンプレートのデプロイ] を選択します)。

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用したデプロイ済みグループの更新

自動テンプレート・デプロイメント XML を使用した既存のデプロイメントの更新の制限事項については、1031 ページの「注意事項および制限事項」を参照してください。

第 IX 部

ソリューション・テンプレート

43

SiteScope ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ ソリューション・テンプレートの概要 (1082 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1086 ページ)

参照情報

- ▶ ソリューション・テンプレート・ページ (1089 ページ)

トラブルシューティングおよび制限事項 (1090 ページ)

概念

ソリューション・テンプレートの概要

SiteScope ソリューション・テンプレートは、一般的なエンタープライズ・アプリケーションやネットワーク・システムを監視するために設計された、事前設定済みのモニタ・セット・テンプレートです。ソリューション・テンプレートを使用すると、標準の SiteScope モニタ・タイプとソリューション固有のモニタを組み合わせ、対象アプリケーションやシステムの可用性、パフォーマンス、状況を監視するために最適化された設定により迅速にデプロイできます。たとえば、Microsoft Exchange 監視のソリューションには、パフォーマンス・カウンタ、イベント・ログ、Exchange アプリケーション固有のモニタ・タイプが含まれます。

ソリューションをデプロイすると、新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。ソリューション・テンプレートは、環境内のサーバごとにデプロイできます。ソリューション・テンプレートでシステム変数 `SERVER_LIST` を使用すると、複数のリモート・ホストにソリューションをデプロイできます。

本項の内容

- ▶ 1083 ページの「ソリューション・テンプレートのリスト」
- ▶ 1085 ページの「ソリューション・テンプレートのカスタマイズ」
- ▶ 1085 ページの「注意事項および制限事項」

ソリューション・テンプレートのリスト

次の表に、SiteScope で使用可能なソリューション・テンプレートを示します。各ソリューションとソリューション固有のモニタ・タイプの詳細については、各ソリューション・テンプレートに関する章を参照してください。

ソリューション名	説明
フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート	SiteScope Failover Manager を使用する場合は、プライマリおよびフェールオーバー SiteScope マシンの可用性を監視します。
Active Directory ソリューション・テンプレート	Microsoft Windows 2000, 2003, Active Directory 2008 R2 用 (グローバル・カテゴリあり, なしの) Microsoft ドメイン・コントローラのパフォーマンスおよび効率を監視します。
AIX Host ソリューション・テンプレート	AIX ホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
HP Quality Center ソリューション・テンプレート	Windows および UNIX 上の HP Quality Center 9.x および 10.x アプリケーション・サーバのパフォーマンス, 可用性, 状況, Oracle データベース・サーバ上の HP Quality Center ライセンスの使用状況および有効期限, HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションおよびシステムの可用性を監視します。
HP Service Manager ソリューション・テンプレート	Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager アプリケーション・サーバの可用性とシステム状態を監視します。
JBoss Application Server ソリューション・テンプレート	JBoss 環境のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
Linux Host ソリューション・テンプレート	Linux ホスト・マシンのパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。
Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート	Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003, 2007, 2010 サーバのアプリケーション状況, メッセージ・フロー, 使用統計を監視するための個別のソリューション・オプションが含まれます。
Microsoft IIS ソリューション・テンプレート	IIS 6.0, IIS 7.x 環境のパフォーマンス, 可用性, 状況を監視します。

ソリューション名	説明
Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート	次の Microsoft Lync Server 2010 Server のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。A/V Conferencing サーバ、Archiving サーバ、Director サーバ、Edge サーバ、Front End サーバ、Lync Server Event Log、Mediation サーバ、Monitoring サーバ、Registrar サーバ。
Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート	Microsoft SharePoint 2010 のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート	Microsoft SQL Server 2005, 2008, Microsoft SQL Server 2008 R2 のパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。
Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート	Microsoft Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 のホスト・マシンのパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
.NET ソリューション・テンプレート	Microsoft Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 上の .NET アプリケーションおよび環境のパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
Oracle Database ソリューション・テンプレート	Oracle 9i, 10g, 11g データベースのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。
SAP ソリューション・テンプレート	SAP システム・コンポーネントのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。
Siebel ソリューション・テンプレート	Windows および UNIX オペレーティング・システムにインストールされた Siebel アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。
Solaris Host ソリューション・テンプレート	Solaris ホスト・マシンのパフォーマンス、可用性、状況を監視します。
VMware Host ソリューション・テンプレート	VMware Host サーバ、ホスト・サーバのゲスト仮想マシン上の CPU、メモリ、ストレージ、状態、ネットワーク・パフォーマンス、使用統計を監視します。
WebLogic ソリューション・テンプレート	Oracle WebLogic アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。
WebSphere ソリューション・テンプレート	IBM WebSphere Server 5.x アプリケーション・サーバのパフォーマンス、可用性、使用統計を監視します。

ソリューション・テンプレートのカスタマイズ

ソリューション・テンプレートに適合しないシステム設定もあるため、システム要件に合わせて次のようにソリューション・テンプレートをカスタマイズできます。

- ▶ ソリューション・テンプレートをテンプレート・コンテナにコピーし、システム要件に合わせて変更して、変更後のソリューション・テンプレートをデプロイする。
- ▶ ソリューション・テンプレートをデプロイし、デプロイ後にシステムの要件に合わせて変更する。

たとえば、HP Quality Center アプリケーション・サーバ・ソリューション・テンプレートを使用して、アプリケーション・サーバとは別のホスト上にあるリポジトリのディスク変数を監視する場合、テンプレートのデプロイ後に、リポジトリのディスク使用率モニタをほかのホストを使用するように変更する必要があります。

注意事項および制限事項

- ▶ ソリューション・テンプレートを使用したモニタの作成中に検出されたエラーは、個々のモニタの実行時に返される状態とは関係ありません。つまり、モニタが正常に作成されていても、設定が不正確な場合や監視対象のシステムが使用できない場合があります。
- ▶ ソリューション・テンプレートのデプロイ後、関連するモニタが **[BSM への測定値レポートを無効化する]** の BSM レポートینگ・レベルで定義されている場合があります。そのため、ソリューション・テンプレートのデプロイ後、モニタのレポートینگ・レベルをチェックすることをお勧めします。デプロイされたモニタのレポートینگ・レベルを変更する場合、**[グローバル検索と置換]** ウィザードを使用してレポートینگ・レベル・オプションを変更できます。
- ▶ ソリューション・テンプレートでは、作成したモニタに対して自動警告やレポートは設定されません。警告定義やレポートを 1 つ以上作成し、ソリューション・テンプレートで作成したモニタまたはモニタ・グループに関連付ける場合もあります。

タスク

SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。環境内のサーバごとにソリューション・テンプレートをデプロイします。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1086 ページの「前提条件」
- ▶ 1087 ページの「テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1088 ページの「テンプレート・デプロイメントの変数の値の入力」
- ▶ 1088 ページの「警告およびレポートの設定」
- ▶ 1088 ページの「結果」

1 前提条件

- ▶ ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- ▶ ライセンスは、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ライセンス] のライセンス・ファイルからインポートする必要があります。ユーザ・インタフェースの詳細については、692 ページの「一般プリファレンス・ページ」を参照してください。

2 テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをグループにデプロイする方法を次から選択します。

- ▶ ユーザ・インタフェースからソリューション・テンプレートを直接デプロイできます。テンプレート・ツリーで、デプロイするソリューション・テンプレートを右クリックし、[**テンプレートのデプロイ**] を選択します。[グループの選択] ダイアログ・ボックスで、ソリューション・テンプレートをデプロイするモニタ・グループを選択します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1020 ページの「[グループの選択] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

注：多数のテンプレート（テンプレート・コンテナ内でグループ化されている）を用意しているソリューションでは、グループを個別にまたは同時にデプロイできます。たとえば、Microsoft Exchange 2010 ソリューションをデプロイする場合、必要なテンプレートのみを選択し、別のサーバに分散された Exchange サーバのインストールに対し、このテンプレートをデプロイできます。複数テンプレートの同時デプロイの詳細については、1014 ページの「複数のテンプレートのデプロイ・オプション」を参照してください。

- ▶ テンプレート内に定義した変数の値が含まれる CSV ファイルを使用して、ソリューション・テンプレートをデプロイできます。概念の詳細については、1011 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ」を参照してください。タスクの詳細については、1015 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用してテンプレートをデプロイし、更新できます。概念の詳細については、1052 ページの「自動テンプレート・デプロイメントの概要」を参照してください。タスクの詳細については、1062 ページの「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」を参照してください。

3 テンプレート・デプロイメントの変数の値の入力

選択したソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、各ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページを参照してください。

4 警告およびレポートの設定

新しく作成したソリューション・モニタに警告とレポートを設定します。

警告の設定の詳細については、1443 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

レポートの設定の詳細については、1508 ページの「レポートの作成方法」を参照してください。

5 結果

ソリューション・テンプレートによって新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のソリューション・モニタが追加されます。このモニタ・グループ・コンテナには、<ソリューション・テンプレート名> on <サーバ名> の形式で名前が割り当てられます。サーバ名 は、[サーバ] ボックスで選択したサーバです。


これらのモニタは、SiteScope のほかのモニタと同じ方法で表示、編集、削除できます。

注：デプロイに失敗したモニタがある場合、モニタ名のリストを含むメッセージが、エラーを説明するメッセージと一緒に表示されます。

参照情報

ソリューション・テンプレート・ページ

選択したソリューション・テンプレートの名前と説明が表示されます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] コンテナを展開し、必要なテンプレートを選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ ライセンスが供与され、 アイコンと一緒に表示されているソリューション・テンプレートのみを設定できます。 ▶ [タグの検索 / フィルタ] 表示枠は、ソリューション・テンプレート・オブジェクトのフィルタリングには使用できません。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	95 ページの「テンプレート・ツリー」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	ソリューション・テンプレートの名前（読み取り専用）。
詳細	ソリューション・テンプレートの説明（読み取り専用）。

トラブルシューティングおよび制限事項

本項では、SiteScope ソリューション・テンプレートのトラブルシューティングおよび制限事項について説明します。

- ▶ 1090 ページの「ソリューション・テンプレートの再インストール」
- ▶ 1091 ページの「テンプレートのインポート」

ソリューション・テンプレートの再インストール

インストールされたソリューション・テンプレートは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %persistence** ディレクトリにあります。このディレクトリの内容が削除されると、ソリューション・テンプレートはテンプレート・ツリーに表示されません。ソリューション・テンプレートを再インストールするには、ソリューション・テンプレート・ファイルを**永続**ディレクトリに再度コピーする必要があります。

注： **persistence** ディレクトリを削除すると、SiteScope 設定データと BSM の履歴データ（SiteScope が BSM と統合されている場合）がすべて永続的に削除されるため、お勧めしません。

ソリューション・テンプレート・ファイルを再インストールするには、次の手順を実行します。

- 1 ソリューション・テンプレート・ファイルを次のディレクトリで特定します。
< SiteScope のルート・ディレクトリ > %export。
- 2 **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %export** の内容を **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %persistence%import** にコピーします。
- 3 ソリューション・テンプレートが再インストールされたことをチェックするには、テンプレート・ツリーの [**ソリューション テンプレート**] フォルダでそのソリューション・テンプレートを見つけます。

テンプレートのインポート

- ▶ テンプレートをインポートする場合、同じテンプレート・コンテナに同じ名前のテンプレートがすでにある場合は、一意の名前に関する違反によりインポートが失敗する可能性があります。これを回避するには、既存のテンプレート・コンテナの名前を変更します。
- ▶ インポートが失敗するか、または [ソリューション テンプレート] ツリーのソリューション・テンプレートを表示できない場合、1090 ページの「ソリューション・テンプレートの再インストール」の説明に従ってソリューション・テンプレートを回復できます。**¥export** フォルダにテンプレートのサンプルも含まれている場合、前述の一意の名前に関する違反を避けるためにテンプレート・コンテナの名前を変更する必要があります。

44

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの概要 (1094 ページ)

タスク

- ▶ フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1098 ページ)

参照情報

- ▶ [フェールオーバー監視ソリューション テンプレート] ページ (1100 ページ)

概念

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの概要

SiteScope Failover Manager は、自動フェールオーバー機能を備えた特殊なバージョンの SiteScope です。SiteScope マシンに障害が発生した場合、サービスをほとんど中断せずに自動的に素早く別のマシンに置き換えることで、インフラストラクチャ監視のフェールオーバー機能を実装できます。

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートは、フェールオーバー環境を監視するために設計された、事前設定済みのモニタ・セット・テンプレートです。フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートを使用すると、プライマリおよびフェールオーバー SiteScope マシンの可用性の監視が最適化された設定で、ソリューション固有の SiteScope モニタを迅速にデプロイできます。

プライマリ SiteScope がフェールオーバー・マネージャ設定ファイルに登録されている場合、SiteScope を実行しているプラットフォームに応じてフェールオーバー監視ソリューション・テンプレート (Windows または UNIX 用) をプライマリ SiteScope にデプロイすることをお勧めします。フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートは、フェールオーバー・マネージャが監視するプライマリ SiteScope サーバごとにデプロイする必要があります。

ソリューション・テンプレートによってプライマリ SiteScope 上にモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に特別に設定されたフェールオーバー・モニタが追加されます。これらのフェールオーバー・モニタは、対象のプライマリ SiteScope の可用性とフェールオーバー・サービスを監視するために最適化された設定を持つ SiteScope ログ・モニタです。

ソリューション・テンプレートのデプロイ後、デプロイしたモニタに警告を設定して、プライマリ SiteScope の状態の変化や、フェールオーバーの発生時期について通知を受けることができます。たとえば、プライマリ SiteScope が停止したときに電子メール通知を受け取るようにフェールオーバー警告を設定できます。

注 : SiteScope Failover Manager の使用の詳細については、< SiteScope のルート・ディレクトリ >¥sisdocs¥pdfs¥SiteScopeFailover.pdf にある『HP SiteScope Failover Manager Guide』 (PDF) を参照してください。

フェールオーバー・テンプレート・モニタ

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートは SiteScope テンプレート・ツリーの [ソリューション テンプレート] フォルダにあります。すべてのモニタは、フェールオーバー・マネージャの **ha.log** ファイル内で一致する特定のテキストを検索するように設定されたログ・ファイル・モニタです。このファイルからの情報は、警告アクションをアクティブ化するためのトリガとして使用します。

監視の頻度は、フェールオーバー・モニタの [モニタの実行設定] 表示枠にある [頻度] 設定で定義します。標準設定では、各モニタを 60 秒おきに実行するように設定されています。

第 44 章 • フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート

次の表では、フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのモニタの概要を説明します。

フェールオーバー・モニタ	説明	しきい値設定
Failed to Start SiteScope Failover	<p>これは、プライマリ SiteScope の停止後、フェールオーバー・サービスが開始に失敗したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。</p> <p>モニタがエラー状態の場合、フェールオーバー・マネージャは ha.log ファイルにメッセージを記録し、モニタは一致を確認します。モニタがエラー状態の場合に通知するよう警告を設定します。</p>	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常
Failed to Stop SiteScope Failover	<p>これは、フェールオーバー・マネージャからシャットダウンを要求された後、フェールオーバー・サービスが停止に失敗したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。</p> <p>モニタがエラー状態の場合、フェールオーバー・マネージャは ha.log ファイルにメッセージを記録し、モニタは一致を確認します。モニタがエラー状態の場合に通知するよう警告を設定します。</p>	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常
Primary SiteScope has Recovered	<p>これは、プライマリ SiteScope が障害の後、回復したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。</p> <p>モニタは、一致がある場合はエラー状態になるように設定されます。</p>	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常

フェールオーバー・モニタ	説明	しきい値設定
Primary SiteScope is Down	<p>これは、プライマリ SiteScope が停止したかどうかを検出するために使用するログ・モニタです。</p> <p>プライマリ SiteScope が停止すると、このモニタはエラー状態になります。</p>	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常
Primary SiteScope Status Unknown	<p>これは、プライマリ SiteScope が不明かどうかを検出するために使用するログ・モニタです。プライマリ SiteScope の状態が不明な場合、フェールオーバーはバックアップとして起動および稼働していない必要があります。</p> <p>モニタは、一致がある場合はエラー状態になるように設定されます。</p>	一致が「n/a」または 0 以上の場合、エラー 0 の場合、正常

タスク

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1098 ページの「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1099 ページの「フェールオーバー・モニタ設定のプロパティの変更（任意指定）」
- ▶ 1099 ページの「警告およびレポートの設定」
- ▶ 1099 ページの「フェールオーバー時の監視結果の表示」
- ▶ 1099 ページの「プライマリ SiteScope 回復時の監視結果の表示」

1 フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ

次のいずれかの方法を用いて、フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートをデプロイします。

- ▶ ユーザ・インタフェースのテンプレート・ツリーから。タスクの詳細については、1012 ページの「ユーザ・インタフェースを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ CSV を使用する。タスクの詳細については、1015 ページの「CSV ファイルを使用したテンプレートのデプロイ方法」を参照してください。
- ▶ SiteScope ユーザ・インタフェースの外部にある XML ファイルを使用する。タスクの詳細については、1062 ページの「XML ファイルを使用した監視構造のデプロイ」を参照してください。

デプロイされると、フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートによって新しいモニタ・グループ・コンテナが作成され、その中に個々のフェールオーバー・モニタが追加されます。このモニタ・グループ・コンテナには、**Failover Monitors on <プライマリ SiteScope インストール・パス>** の形式で名前が割り当てられます。

フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのプロパティについては、1100 ページの「[フェールオーバー監視ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

2 フェールオーバー・モニタ設定のプロパティの変更（任意指定）

フェールオーバー・モニタのモニタ設定のプロパティは、SiteScope のほかのモニタと同じ方法で変更できます。

たとえば、報告された各モニタ・インスタンスの状態を判別する条件は、[しきい値の設定] で変更できます。モニタしきい値の変更の詳細については、458 ページの「しきい値設定」を参照してください。

3 警告およびレポートの設定

デプロイしたフェールオーバー・モニタに警告を設定して、プライマリ SiteScope の状態の変化や、フェールオーバーの発生時期についての通知を受けます。警告の設定の詳細については、1443 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

新しく作成したフェールオーバー・モニタのレポートを設定することもできます。レポートの設定の詳細については、1508 ページの「レポートの作成方法」を参照してください。

4 フェールオーバー時の監視結果の表示

プライマリ SiteScope が停止した場合、プライマリ SiteScope の状態の変化を通知する警告がトリガされます。フェールオーバー時の監視結果を表示するには、次の形式を使用して Web ブラウザをフェールオーバー SiteScope サーバのアドレスにリダイレクトする必要があります。

`http:// <フェールオーバー・マシン名> : <フェールオーバー・マネージャ・ポート> /SiteScope`

例 : `http://localhost:8080/SiteScope`。

5 プライマリ SiteScope 回復時の監視結果の表示

プライマリ SiteScope が回復すると、[Primary SiteScope has Recovered] モニタに警告が設定されている場合は警告がトリガされます。監視結果を表示するには、次の形式を使用して Web ブラウザをプライマリ SiteScope インスタンスのアドレスにリダイレクトします。

`http:// <プライマリ SiteScope 名> : <プライマリ SiteScope ポート> / SiteScope`

参照情報

[フェールオーバー監視ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、プライマリ SiteScope サーバにフェールオーバー監視ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] コンテナを展開し、必要なフェールオーバー監視テンプレートを選択します。
関連タスク	1098 ページの「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	1094 ページの「フェールオーバー監視ソリューション・テンプレートの概要」

Windows 用フェールオーバー監視ソリューション・テンプレート

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Failover Manager host	フェールオーバー・マネージャ・ホストの名前。
Failover Manager user name	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用する管理者資格情報を持つユーザ名。
Failover Manager password	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用するユーザ名のパスワード。
Failover Manager ha.log path	フェールオーバー・マネージャの ha.log ファイルへのフル UNC パス。 標準設定値 : ¥¥ <フェールオーバー・マネージャ・サーバ> ¥¥SiteScope¥logs¥ha.log

UI 要素	説明
Primary SiteScope installation path	<p>プライマリ SiteScope サーバのフル・インストール・パス。</p> <p>標準設定値 : ¥¥¥¥ <共有フォルダ> ¥¥ <プライマリ・サーバ> ¥¥SiteScope</p> <p>構文の例外 : インストール・パスにメタ文字を使用している場合、その文字に通常の意味を持たせる場合はエスケープする必要があります。メタ文字をエスケープするには、メタ文字の前に円記号 (¥) を付けます。</p>
ログ・ファイルのエンコード	<p>監視するログ・ファイルの内容で、SiteScope を実行するサーバとは別のエンコーディングを使用している場合、使用するエンコーディングを入力します。これは、SiteScope が使用するコード・ページが記録先ログ・ファイルで使用する文字セットをサポートしていない場合に必要となる可能性があります。ここで指定することで、SiteScope がエンコードされたログ・ファイルの内容を正確に照合および表示できます。</p> <p>標準設定値 : UTF-8</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> ¥logs¥silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

UNIX 用フェールオーバー監視ソリューション • テンプレート

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Failover Manager Host	フェールオーバー・マネージャ・ホストの名前。
Failover Manager User	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用する管理者資格情報を持つユーザ名。
Failover Manager Password	SiteScope がフェールオーバー・マネージャへの接続時に使用するユーザ名のパスワード。
Failover Manager HA Log	フェールオーバー・マネージャの ha.log ファイルへのフル・パス。 標準設定値 : %opt%SiteScope%logs%ha.log
Primary SiteScope Installation Path	プライマリ SiteScope サーバのフル・インストール・パス。 構文の例外 : インストール・パスにメタ文字を使用している場合、その文字に通常の意味を持たせる場合はエスケープする必要があります。メタ文字をエスケープするには、メタ文字の前に円記号 (¥) を付けます。 標準設定値 : // < HA マウント > // < プライマリ・サーバ > //SiteScope
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている

45

Active Directory ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Active Directory ソリューションの概要 (1104 ページ)

タスク

- ▶ Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1107 ページ)

参照情報

- ▶ [Active Directory ソリューション テンプレート] ページ (1108 ページ)

概念

Active Directory ソリューションの概要

Active Directory ソリューション・テンプレートを使用して、ドメイン・コントローラのパフォーマンス、Active Directory が依存するサービス、分散 Active Directory パフォーマンスを監視できます。

Active Directory ソリューション・テンプレートでは、特定のドメイン・コントローラに対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、Active Directory の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。このテンプレートには、NT イベント・ログ、サービス、LDAP、パフォーマンス・カウンタ、Active Directory レプリケーションのモニタが含まれています。

Active Directory ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

Active Directory ソリューション・テンプレートは Microsoft Windows Server 2000, 2003, および 2008 R2 をサポートします。

注：

- ▶ Active Directory ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Active Directory ソリューションの詳細については、『SiteScope Active Directory Best Practices』を参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれていて、< [SiteScope のルート・ディレクトリ](#)> [%sisdocs%\pdfs\SiteScope_Active_Directory_Best_Practices.pdf](#) にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Active Directory ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Active Directory ソリューション・テンプレートでは、Active Directory パフォーマンスの次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ **ドメイン・コントローラのパフォーマンス**：このカテゴリの対象は、環境の各ドメイン・コントローラの低レベルの状況です。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、ドメイン・コントローラの状況のモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **依存するサービス**：Active Directory は、複数の重要なサービスに依存しています。これらのサービスがないと、Active Directory は反応しなくなるか、完全に機能しなくなります。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、Active Directory パフォーマンスを左右する重要なサービスのリストのモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **分散 Active Directory パフォーマンス**：Active Directory パフォーマンスの最も重要な側面であり、鍵となる指標は、Active Directory によってすべてのドメイン・コントローラに変更が複製される速度だと考えられます。Active Directory ソリューション・テンプレートでは、変更や更新のレプリケーションを監視およびテストするようにモニタが自動的に設定されます。

注: ソリューション・テンプレートによってデプロイされるモニタ・タイプの中には、Active Directory ソリューション・セットを使用しないと SiteScope に追加できないものもあります。詳細については、特定のモニタ・タイプのセクションを参照してください。

タスク

Active Directory ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Active Directory ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1107 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1107 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Active Directory ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1108 ページの「[Active Directory ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[Active Directory ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope Active Directory ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な Active Directory ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1103 ページの「Active Directory ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ReplicatingDomain Controllers	上記で選択したドメイン・コントローラのデータを複製するドメイン・コントローラのカンマ区切りリスト。
LDAPSecurity Principal	ドメイン管理者アカウントの LDAP セキュリティ・プリンシパル。Active Directory の場合、これは <code>cn=Domain Admin User,cn=users,dc=yoursite,dc=com</code> の形式になります。
LogicalDrive	該当のドメイン・コントローラで使用しているデータベースとログ・ファイルの論理ドライブ。
PASSWORD	上記で選択したユーザのパスワード。
HostName	ドメイン・コントローラのホスト名のホスト部分（完全修飾ドメイン名は含まれません）。

UI 要素	説明
Global Catalog (グローバル・カタログを有する AD のみ)	ドメイン・コントローラがグローバル・カタログ・サーバである場合に選択します。
SERVER_LIST	監視するドメイン・コントローラ。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 < SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 ：選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 ：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 ：選択されている
リモート・サーバのテスト (AD 2008 R2 のみ)	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 標準設定値 ：選択されていない

46

AIX Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ AIX Host ソリューションの概要 (1112 ページ)

タスク

- ▶ AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1114 ページ)

参照情報

- ▶ [AIX Host ソリューションテンプレート] ページ (1116 ページ)

概念

AIX Host ソリューションの概要

AIX Host ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（AIX ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテスト）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、SiteScope でサポートされているバージョンの AIX がサポートされます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント：必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、1322 ページの「サーバ中心のレポートの生成」を参照してください。

AIX Host ソリューション・テンプレートは包括的な AIX オペレーティング・システムの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ AIX Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ AIX Host ソリューションの設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』を参照してください。このドキュメントは、< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> **¥sisdocs¥pdfs ¥SiteScope_OS_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Operating System のホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

AIX Host ソリューション・テンプレートでは、AIX のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ CPU の状態と使用率の詳細
- ▶ メモリ状態と使用率の詳細
- ▶ ファイル・システムの状態と使用率の詳細

タスク

AIX Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、AIX Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

注：AIX Host ソリューション・テンプレートでは、対象ホストごとに UNIX リソース・モニタがデプロイされます。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1114 ページの「前提条件」
- ▶ 1115 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1115 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ SiteScope サーバから対象 AIX ホストに接続できる必要があります。
- ▶ 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります ([**リモートサーバ**] > [**UNIX リモートサーバ**])。詳細については、596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

注：

- ▶ サポートされている AIX オペレーティング・システムが SiteScope サーバで実行されている場合、そのサーバ自体を監視することもできます。
 - ▶ このテンプレートでは、SiteScope でサポートされているバージョンの AIX がサポートされます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「システム要件」を参照してください。
-

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

AIX ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1116 ページの「[AIX Host ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[AIX Host ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope AIX ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、[AIX Host] を選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1111 ページの「AIX Host ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

47

HP Quality Center ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要 (1120 ページ)

タスク

- ▶ HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1123 ページ)

参照情報

- ▶ [HP Quality Center ソリューション テンプレート] ページ (1126 ページ)
- ▶ [トラブルシューティングと制限事項](#) (1136 ページ)

概念

HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要

HP Quality Center ソリューション・テンプレートは、HP Quality Center 9.x および 10.x アプリケーション・サーバの可用性、HP Quality Center 9.2 および 10.0 データベース・サーバのライセンスの状態、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションおよびシステム可用性をテストする、標準設定の測定値で設定された一連のモニタをデプロイするために使用できるテンプレートです。

HP Quality Center ソリューション・テンプレートは、包括的な HP Quality Center による監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションのエキスパートである必要はありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ HP Quality Center ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
- ▶ HP Quality Center ソリューションの詳細は、『SiteScope Quality Center Best Practices』を参照してください。このドキュメントは、SiteScope インストールに含まれており、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sisdocs%\pdfs\SiteScope_HP_QC_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、HP Quality Center ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。

本項の内容

- ▶ 1121 ページの「ソリューション・テンプレート・モニタ」
- ▶ 1121 ページの「Quality Center のサードパーティ・アプリケーションの監視」

ソリューション • テンプレート • モニタ

HP Quality Center ソリューションには、次の主要コンポーネントを監視するソリューション • テンプレートが含まれます。

- ▶ **HP Quality Center Application Server for UNIX/Windows** : このソリューション • テンプレートは、アプリケーションがインストールされているオペレーティング • システムの HP Quality Center アプリケーション • サーバの可用性とパフォーマンスを監視するために使用します。
- ▶ **HP Quality Center 9.2/10.0 License Status** : このソリューション • テンプレートは、HP Quality Center データベース • サーバでの HP Quality Center のライセンス使用状況と有効期限を監視するために使用します (ソリューション • テンプレートは Oracle および Microsoft SQL データベースで認定されています)。
- ▶ **HP QuickTest Professional License Server** : このソリューション • テンプレートは、HP QuickTest Professional ライセンス • サーバの可用性とパフォーマンスを監視するために使用します。

Quality Center のサードパーティ • アプリケーションの監視

Quality Center がデプロイされているアプリケーション • サーバ、使用されるデータベースなど、Quality Center のサードパーティ • コンポーネントの監視には、ほかの SiteScope ソリューション • テンプレート、モニタ、あるいはその両方を使用することをお勧めします。

Quality Center のサードパーティ • コンポーネントの監視に推奨されるソリューションの詳細については、次の表を参照してください。

データベース • サーバの監視

データベース • タイプ	推奨ソリューション
Oracle	1221 ページの「Oracle Database ソリューション • テンプレート」
Microsoft SQL Server	1195 ページの「Microsoft SQL Server ソリューション • テンプレート」
LDAP	239 ページの「LDAP モニタ」

アプリケーション / Web サーバの監視

アプリケーション / Web サーバのタイプ	推奨ソリューション
Apache サーバ	39 ページの「Apache サーバ・モニタ」
JBoss	1147 ページの「JBoss Application Server ソリューション・テンプレート」
Microsoft IIS	1173 ページの「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」 333 ページの「Microsoft IIS サーバ・モニタ」
WebLogic 6.x-8.x, 9.x-10.x	1265 ページの「WebLogic ソリューション・テンプレート」
WebSphere 5.x, 6.x	1275 ページの「WebSphere ソリューション・テンプレート」
JMX アクセス (JSR 160) をサポートするその他の Web/アプリケーション・サーバ	227 ページの「JMX モニタ」

タスク

HP Quality Center ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、変数を入力する手順と HP Quality Center ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1123 ページの「前提条件」
- ▶ 1125 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1125 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

HP Quality Center Application Server for Windows :

- ▶ SiteScope サーバから Quality Center コンポーネントにアクセスできる。
- ▶ 次の情報がわかっている。
 - ▶ Quality Center アプリケーションのバージョン (9.2, 10.0)
 - ▶ アプリケーション・サーバの完全なホスト名とログイン資格情報
 - ▶ Quality Center リポジトリ・ディスクまたはリポジトリの場所 (別のホストにある場合)
 - ▶ ログイン URL で使用されるポート (通常は指定なし。つまりポート 80 が使用される)

注: このソリューション・テンプレートは UNIX プラットフォームにインストールされている SiteScope ではサポートされません。

HP Quality Center Application Server for UNIX :

- ▶ SiteScope サーバから Quality Center コンポーネントにアクセスできる。
- ▶ 次の情報がわかっている。
 - ▶ Quality Center アプリケーションのバージョン (9.2, 10.0)
 - ▶ UNIX オペレーティング・システムのタイプ
 - ▶ アプリケーション・サーバの完全なホスト名とログイン資格情報
 - ▶ System file system
 - ▶ Quality Center リポジトリ・ディスクまたはリポジトリの場所 (別のホストにある場合)
 - ▶ ログイン URL で使用されるポート (通常は指定なし。つまりポート 80 が使用される)
 - ▶ UNIX オペレーティング・システムで Quality Center アプリケーションを実行する java プロセス・コマンドの名前 ("ps -ef | grep java" を使用できる)。

HP Quality Center 9.2/10.0 License Status :

- ▶ SiteScope サーバから Quality Center 9.2 または 10.0 コンポーネントにアクセスできる。
- ▶ Quality Center データベースに関する次の情報がわかっている。
 - ▶ データベースのホスト名
 - ▶ タイプ (Oracle, Microsoft SQL, MSDE 2000)
 - ▶ ドライバ (SiteScope に組み込まれているデータベース・ドライバの可能性あり)
 - ▶ データベース接続 URL
 - ▶ データベース・ユーザ名とパスワード

HP QuickTest Professional License Server :

- ▶ SiteScope サーバから QuickTest Professional ライセンス・サーバにアクセスできる。
- ▶ QuickTest Professional ライセンス・サーバのホスト名とログイン資格情報がわかっている。

注: このソリューション・テンプレートは UNIX プラットフォームにインストールされている SiteScope ではサポートされません。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

HP Quality Center ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1126 ページの「[HP Quality Center ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[HP Quality Center ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Windows および UNIX プラットフォームの HP Quality Center 9.x と 10.x アプリケーション・サーバの監視、さらに HP Quality Center 9.2 または 10.0 データベース・サーバのライセンス使用状況と有効期限の監視を行うために、HP Quality Center ソリューション・テンプレートをデプロイできます。また、これらのテンプレートで、HP QuickTest Professional ライセンス・サーバ・アプリケーションとシステムの可用性も監視できます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開し、必要な HP Quality Center ソリューション・テンプレートを選択します。
重要な情報	ソリューション・テンプレートでは、Ping モニタを使用してシステムの可用性を監視します。ネットワークで Ping トラフィックがブロックされている場合は、代わりにポート・モニタを使用する必要があります。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1120 ページの「HP Quality Center ソリューション・テンプレートの概要」 ▶ 1136 ページの「トラブルシューティングと制限事項」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

HP Quality Center Application Server for Windows

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Application server host name	Quality Center アプリケーション・サーバのホスト名。
Application server user name	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのログイン・ユーザ名。
Application server password	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのパスワード。
System disk	Quality Center アプリケーション・サーバがインストールされている論理ディスク・ドライブ。 標準設定値 : C
Repository disk	Quality Center リポジトリがインストールされている論理ディスク・ドライブ。リポジトリが別のホストにある場合は、システム・ディスク・ドライブを入力し、テンプレートをデプロイした後にリポジトリ・ディスク使用率モニタを変更します。 標準設定値 : D
Site Administration path	Quality Center Site Administration の URL のサフィックス。 標準設定値 : qcbn/SiteAdmin.htm。Quality Center バージョン 9.x の場合は、これを sabin に変更します。
Application port	Quality Center アプリケーションへのログイン URL で使用されるポート。通常はポートが指定されません。つまり、ポート 80 が使用されます。 標準設定値 : 80
Maximum round trip time (milliseconds)	アプリケーション URL から応答を得るのに必要な往復時間のエラー・ステータスしきい値として使用されるミリ秒の値。 標準設定値 : 1500 ミリ秒
Quality Center service name	Quality Server サービスの名前。 標準設定値 : HP Quality Center。Quality Center バージョン 9.x の場合は、これを Mercury Quality Center に変更します。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバのテスト (HP Quality Center Application Server for Windows/UNIX のみ)	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

HP Quality Center Application Server for UNIX

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Application server host name	Quality Center アプリケーション・サーバのホスト名。
Application server user name	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのログイン・ユーザ名。
Application server password	Quality Center アプリケーション・サーバのホストのパスワード。

UI 要素	説明
UNIX operating system	<p>UNIX オペレーティング・システムのタイプ。Solaris, Red Hat Enterprise Linux など。UNIX オペレーティング・システム・タイプのリストは, [新規 UNIX リモート・サーバ] / [UNIX リモート・サーバの編集] ダイアログ・ボックスの [オペレーティング システム] フィールドに表示されます。</p> <p>標準設定値 : Linux</p>
System file system	<p>Quality Center アプリケーション・サーバがインストールされているファイル・システム。</p>
Repository file system	<p>Quality Center リポジトリがあるファイル・システム。リポジトリが別のホストにある場合は, システム・ディスクのファイル・システムを入力し, テンプレートをデプロイした後にリポジトリ・ディスク使用率モニタを変更します。</p>
Site Administration path	<p>Quality Center Site Administration の URL のサフィックス。</p> <p>標準設定値 : qcbn/SiteAdmin.htm。Quality Center バージョン 9.x の場合は, これを sabin に変更します。</p>
Application port	<p>Quality Center アプリケーションへのログイン URL で使用されるポート。通常はポートが指定されません。つまり, ポート 80 が使用されます。</p> <p>標準設定値 : 80</p>
Maximum round trip time (milliseconds)	<p>アプリケーション URL から応答を得るのに妥当な往復時間のエラー・ステータスしきい値として使用されるミリ秒の値。</p> <p>標準設定値 : 1500 ミリ秒</p>

UI 要素	説明
Quality Center process unique name	<p>システムで実行されているほかのプロセスと Quality Center の java プロセスを識別するために使用する名前。Quality Center プロセス名、または UNIX オペレーティング・システムで Quality Center アプリケーションを実行する java プロセス・コマンドの一意の部分を使用できます (ps -ef grep java を使用できます)。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

HP Quality Center 9.2/10.0 License Status

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Site Administration database host	Quality Center Site Administration がインストールされているホスト名。
データベース・ドライバ	<p>データベースへの接続に使用するデータベース・ドライバ。カスタム・ドライバを使用する場合、< SiteScope のルート ディレクトリ > %WEB-INF%lib ディレクトリにそのドライバをインストールする必要があります。</p> <p>標準設定値 : com.inet.ora.OraDriver (Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL の場合は com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver を使用します。</p>
Connection URL (full)	<p>Quality Center データベース接続 URL。</p> <p>例 :</p> <p>jdbc:inetora:[host]:[port]:[sid] (Oracle データベースの場合)</p> <p>jdbc:mercury:sqlserver://labm1qcrnd05.devlab.ad:1433;DatabaseName=May22_2008_db (Microsoft SQL の場合)</p>
Connection URL (part 0-3)	<p>接続 URL がセミコロン (;) で区切られた値で構成されている場合は、全体を [Connection URL (full)] フィールドに入力し、各部分を別々のフィールドに入力します。</p> <p>例 :</p> <p>Connection URL (part 0) = jdbc:mercury:sqlserver://labm1qcrnd05.devlab.ad:1433</p> <p>Connection URL (part 1) = DatabaseName=May22_2008_db</p> <p>セミコロンで区切られていない場合は、次のように [Connection URL (part 0)] に接続 URL 全体を入力します。</p> <p>Connection URL (part 0) = jdbc:inetora:[host]:[port]:[sid]</p> <p>注 : このように分割するのは、接続 URL がスクリプト・モニタのパラメータとして使用され、セミコロン (;) 文字がセキュリティ上の理由で許可されないためです。</p>

UI 要素	説明
Database user	データベースのクエリに必要なユーザ名。 指定するユーザ名には、Site Administration データベースの ADMIN と SESSION_LICENSE テーブルで SELECT クエリを実行する権限が必要です。
Database password	特定のユーザ名でデータベースにログオンし、SELECT クエリを実行するために必要なパスワード。
Database password - encrypted	暗号化形式のデータベース・パスワード。暗号化されたパスワードを取得するには、パスワードに対して次のツールを実行します。 < SiteScope のルート・ディレクトリ > %tools %AutoDeployment%encrypt_password.bat <パスワード> UNIX プラットフォームの場合は、 encrypt_password.sh <パスワード> を実行します。 注： 暗号化パスワードは、スクリプト・モニタのパラメータとして使用され、セキュリティ上の理由から必須です。
Admin table name	Quality Center ADMIN テーブルの名前。 標準設定値： ADMIN (Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL データベースの場合は td.ADMIN を使用します。
Session license table name	Quality Center セッション・ライセンス・テーブルの名前。 標準設定値： SESSION_LICENSE (Oracle データベースをサポート)。Microsoft SQL データベースの場合は td.SESSION_LICENSE を使用します。
SiteScope expiration error status (days remaining)	ライセンス有効期限のエラーしきい値。ライセンス有効期限のステータスがデプロイされた各モニタは、ライセンスの有効期限の残り日数がここで指定した数より少なくなるとエラー・ステータスになります。 標準設定値： 7 日
SiteScope expiration warning status (days remaining)	ライセンス有効期限の警告しきい値。ライセンス有効期限のステータスがデプロイされた各モニタは、ライセンスの有効期限の残り日数がここで指定した数より少なくなると警告ステータスになります。 標準設定値： 30 日

UI 要素	説明
Number of free licenses for error	<p>ライセンス使用状況のエラーしきい値。ライセンス使用状況のステータスがデプロイされた各モニタは、使用可能なライセンスの数がここで指定した数より少なくなるとエラー・ステータスになります。</p> <p>標準設定値 : 5</p>
Number of free licenses for warning	<p>ライセンス使用状況の警告しきい値。ライセンス使用状況のステータスがデプロイされた各モニタは、使用可能なライセンスの数がここで指定した数より少なくなると警告ステータスになります。</p> <p>標準設定値 : 20</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

注：

- ▶ Quality Center ライセンスは、XML 形式で Site Administration データベースの ADMIN テーブルに格納されます。これには、さまざまな Quality Center モジュール（不具合、要件など）の Quality Center ライセンスの有効期限およびクォータに関する情報が含まれています。この XML 形式は、Quality Center 9.2 と Quality Center 10.0 では異なります。SESSION_LICENSE という名前の別のテーブルには、ログインした各セッションのリアルタイムのエントリと使用されているライセンス・タイプが表示されます。
 - ▶ ライセンスの使用状況と有効期限を計算するために、SiteScope ソリューション・テンプレートではスクリプト（Microsoft Windows プラットフォームの場合は **runQCLicenseTool.bat**, UNIX プラットフォームの場合は **runQCLicenseTool.sh**）を実行するスクリプト・モニタが使用されます。スクリプトによって Quality Center データベースに照会され、要求したライセンス・タイプに関する次の情報がスクリプト・モニタに返されます。
Total= <総割り当て額> ;used= <このタイプの現在の使用量> ;free= <総空き容量> ;exp_days= <ライセンスが期限切れになるまでの日数>。
-

HP QuickTest Professional License Server

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
QTP license server host name	QuickTest Professional ライセンス・サーバのホスト名。
QTP license server user name	QuickTest Professional ライセンス・サーバ・システム・ログインのユーザ名。
QTP license server password	QuickTest Professional ライセンス・サーバ・システム・ログインのパスワード。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

トラブルシューティングと制限事項

ソリューション・テンプレートをデプロイした後に、モニタで**内容の照合エラー**が発生した場合、使用している Quality Center ではこのライセンス・タイプがサポートされていない可能性があります。

- ▶ その場合は、サポートされていないモニタを削除する必要があります。
- ▶ モニタがサポートされている場合は、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %scripts%qc_license_tool.log** にあるログ・ファイルを確認してください。

デバッグするためにログ・ファイルを設定するには、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %conf%ems%tools%conf%core%Tools%log4j%PlainJava%log4j.properties** を開いて、

次のように設定します。

```
loglevel=DEBUG
```


48

HP Service Manager ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ HP Service Manager ソリューションの概要 (1138 ページ)

タスク

- ▶ HP Service Manager ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1140 ページ)

参照情報

- ▶ [HP Service Manager ソリューション テンプレート] ページ (1143 ページ)

概念

HP Service Manager ソリューションの概要

SiteScope の HP Service Manager ソリューション・テンプレートでは、Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager アプリケーション・サーバの可用性とシステム状態を監視し、トラブルシューティングできます。HP Service Manager のロード・バランサ状態と共有メモリの使用率を測定し、致命的エラーがないかログを監視します。水平拡張モードの HP Service Manager の監視にも使用できます。このテンプレートは Service Manager 7.11 をサポートしています。

HP Service Manager ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定とデプロイにかかる時間を短縮し、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向のどちらの特定にも役立ちます。

注：

- ▶ HP Service Manager ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Service Manager ソリューション・テンプレートの詳細については、『Service Manager Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、SiteScope インストールに含まれており、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sisdocs%\pdfs\SiteScope_Siebel_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、HP Service Manager ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション • テンプレート • モニタ

HP Service Manager ソリューション・テンプレートは、Windows および UNIX プラットフォーム上の HP Service Manager サーバのパフォーマンスと状況を監視対象とする動的なモニタのセットを作成します。モニタの詳細については、『SiteScope HP Service Manager Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。

タスク

HP Service Manager ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、HP Service Manager ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1140 ページの「前提条件」
- ▶ 1141 ページの「sm-lbstatus-win-ssh.bat および sm-shm-win-ssh.bat スクリプトの実行 (Windows 用 HP Service Manager 向け)」
- ▶ 1142 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1142 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ HP Service Manager ソリューション・テンプレートがサポートするのは Service Manager 7.11 のみです。
- ▶ テンプレートのデプロイ時、監視対象のプロセスはすべて起動し、稼動している必要があります。SiteScope が対象モニタを作成しようとしたときにプロセスが検出されない場合、「カウンタが選択されていません」というエラーが表示され、モニタが作成されません。

回避策：稼動していないプロセスがある場合、テンプレートを独自のテンプレート・コンテナにコピーし、プロセス・モニタを削除できます。後でプロセス・モニタを手動で作成するか、プロセス・モニタのみが含まれるテンプレートの別のコピーをデプロイします。

- ▶ HP Service Manager for Windows ソリューション・テンプレートの場合、HP Service Manager がインストールされている Microsoft Windows リモート・サーバ上で **sm-lbstatus-win-ssh.bat** および **sm-shm-win-ssh.bat** スクリプトを実行する必要があります。詳細については、次の手順 2 を参照してください。

注 : HP Service Manager for UNIX ソリューション・テンプレートは < SiteScope のルート・ディレクトリ > /scripts.remote にある **sm-shm.txt** および **sm-lbstatus.txt** ファイルを使用して、リモート Service Manager UNIX ホスト上でコマンドを実行します。

2 sm-lbstatus-win-ssh.bat および sm-shm-win-ssh.bat スクリプトの実行 (Windows 用 HP Service Manager 向け)

- a SSH サーバ (OpenSSH) をインストールして設定します。詳細については、645 ページの「リモート Windows サーバでの SSH 監視の設定方法」を参照してください。
- b SiteScope がインストールされているマシンで、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %tools ディレクトリにある **RemoteNTSSH.zip** ファイルを検索します。監視対象のリモート Service Manager ホスト上で **RemoteNTSSH.zip** ファイルを展開します。zip ファイルの内容を **C:%Documentsand Settings%Administrator** フォルダに置きます。
- c SiteScope がインストールされているマシンで、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %tools%ServiceManager ディレクトリにある **SM_Scripts_win_ssh.zip** というファイルを見つけます。このファイルを、監視対象のリモート Service Manager ホストで **C:%Documents and Settings%Administrator%scripts** に展開します (zip ファイルには **sm-lbstatus-win-ssh.bat** と **sm-shm-win-ssh.bat** というファイルが含まれています)。両方のスクリプトに実行権限があることを確認します。Service Manager を水平拡張モードで実行している場合、これをすべてのシステムで繰り返す必要があります。
- d Service Manager ログ・フォルダを共有します。[logs] フォルダを右クリックし、[プロパティ] > [共有] を選択します。[このフォルダを共有する] を選択し、[共有名] を入力します。SiteScope モニタがそのマシン上でモニタの実行に使用するユーザに共有権限を設定し、[OK] をクリックします。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

4 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

HP Service Manager ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1143 ページの「[HP Service Manager ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[HP Service Manager ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、HP Service Manager ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	<p>[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開して、必要な HP Service Manager ソリューション・テンプレートを選択します。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ HP Service Manager を水平拡張モードで実行している場合、HP Service Manager ソリューション・テンプレートをすべてのシステムでデプロイして設定する必要があります。 ▶ テンプレートのデプロイ時、監視対象のプロセスはすべて起動し、稼動している必要があります。「カウンタが選択されていません」というエラーが表示された場合、停止しているプロセスがあることを示します。この問題を解決するには、テンプレートのコピーを作成し、エラーが発生したモニタを削除してからテンプレートをデプロイします。 ▶ ソリューション・テンプレートでは、Ping モニタを使用してシステムの可用性を監視します。ネットワークで Ping トラフィックがブロックされている場合、ポート・モニタを使用し、[グローバル検索と置換] を使用して依存関係を Ping モニタからポート・モニタに置き換えます。
関連タスク	<p>1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」</p>
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1137 ページの「HP Service Manager ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

HP Service Manager for Windows

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
SM installation partition	HP Service Manager がインストールされているディスク・ドライブ。 標準設定値 : C
Application server host name	アプリケーション・サーバ・ホストの名前。
User name	このプロファイルを使用してアプリケーション・サーバにアクセスするためのログイン名。
Password	このユーザのアプリケーション・サーバ・ログイン・パスワード。
Installation path	HP Service Manager バイナリが実行されているディレクトリへのパス。 標準設定値 : C:\Program Files\HP\Service Manager 7.11\Server\RUN
CPU error threshold	CP エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 90
CPU warning threshold	CPU 警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 80
Memory error threshold	メモリ・エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 2,202,012 KB
Memory warning threshold	メモリ警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 1,782,580 KB
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs \silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない

UI 要素	説明
リモート・サーバで モニタ・プロパティ を検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
リモート・サーバの テスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

HP Service Manager for UNIX

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
SM installation partition	HP Service Manager がインストールされているディスク・ドライブ。
Application server host name	アプリケーション・サーバ・ホストの名前。
User name	このプロファイルを使用してアプリケーション・サーバにアクセスするためのログイン名。
Password	このユーザのアプリケーション・サーバ・ログイン・パスワード。
UNIX operating system	HP Service Manager が実行されている UNIX オペレーティング・システム。
UNIX connection method	UNIX オペレーティング・システムへの接続に使用する方法。
Shell prompt	リモート・システムがコマンドを処理できるときのプロンプト出力 (Telnet および Rlogin 接続方法のみ)。
Installation path	HP Service Manager バイナリが実行されているディレクトリへのパス。

UI 要素	説明
CPU error threshold	CP エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 90
CPU warning threshold	CPU 警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 80
Memory error threshold	メモリ・エラーを起動するためのしきい値。 標準設定値 : 2,202,012 KB
Memory warning threshold	メモリ警告を起動するためのしきい値。 標準設定値 : 1,782,580 KB
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 < SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている
リモート・サーバのテスト	テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。 標準設定値 : 選択されていない

49

JBoss Application Server ソリューション・ テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ JBoss Application Server ソリューションの概要 (1148 ページ)

タスク

- ▶ JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1150 ページ)

参照情報

- ▶ JBoss ソリューション・テンプレート・ページ (1153 ページ)

概念

JBoss Application Server ソリューションの概要

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（JBoss アプリケーション・サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストします）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、JBoss アプリケーション・サーバのバージョン 4.0.x と 4.2.x がサポートされます。

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートでは包括的な JBoss 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ JBoss Application Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ JBoss ソリューションの詳細については、『SiteScope JBoss Application Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、[< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sisdocs%\pdfs\SiteScope_JBoss_Best_Practices.pdf](#) にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、JBoss Application Server ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートを使用すると、JBoss アプリケーション・サーバのパフォーマンスと状況を監視対象とするモニタのセットが動的に作成されます。正確なモニタ・セットは、ソリューション・テンプレートのデプロイ時に選択したエンティティにより異なります。モニタの詳細については、『SiteScope JBoss Application Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。

タスク

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、JBoss Application Server ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1150 ページの「前提条件」
- ▶ 1151 ページの「JBoss の開始」
- ▶ 1152 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1152 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ JBoss ソリューション・テンプレートでは、JBoss アプリケーション・サーバのバージョン 4.0.x と 4.2.x のみサポートされます。
- ▶ 収集する JMX 統計情報 (JMX インスタンスのホスト名とポートなど) の URL と、JMX のユーザ名およびパスワードを把握しておく必要があります。
- ▶ SiteScope と監視対象サーバは、同じホスト上で実行できます。
- ▶ SiteScope で監視できるように、JBoss を特定の方法で開始する必要があります。詳細については、次の手順 2 を参照してください。

2 JBoss の開始

SiteScope で JBoss を監視するには、JBoss JVM の次のオプションを指定する必要があります。

```
-Dcom.sun.management.jmxremote.port=12345 (他のポートもちろん使用できませんが、その場合は ST のデプロイメントで指定する必要があります)
-Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=false
-Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false
-Djavax.management.builder.initial=org.jboss.system.server.jmx.MBeanServerBuilderImpl
-Djboss.platform.mbeanserver
-Dcom.sun.management.jmxremote
```

次のバッチ・ファイルを使用して、この指定を実行できます。

```
@echo off
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote.port=12345
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -
Dcom.sun.management.jmxremote.authenticate=false
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote.ssl=false
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -
Djavax.management.builder.initial=org.jboss.system.server.jmx.MBeanServerBuilderImpl
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Djboss.platform.mbeanserver
set JAVA_OPTS=%JAVA_OPTS% -Dcom.sun.management.jmxremote
call run.bat -b my-jboss-host
```

注：

- ▶ **run.bat** が JBoss の開始に使用される標準設定のスクリプトです。
 - ▶ **-b** は、JBoss 4.2.2 を正しいネットワーク・インタフェースにバインドするオプションです（標準設定ではローカルホストにのみバインドされ、その他のホストからはアクセスできません）。
 - ▶ UNIX 用に同様のスクリプトを作成できます。
-

3 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

4 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

JBoss Application Server ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1153 ページの「JBoss ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

JBoss ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、JBoss Application Server ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

説明	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューションテンプレート] を展開し、[JBoss AS 4.x] を選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1147 ページの「JBoss Application Server ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
JMX_URL	JMX 統計情報を収集する URL。通常、URL は <code>service:jmx:rmi:///jndi/rmi://{hostname}:{port}/jmxrmi</code> の形式です。 監視する JMX インスタンスのホスト名とポートを入力します。
ユーザ名	JMX アプリケーションに接続するユーザ名 (任意指定)。
パスワード	JMX アプリケーションに接続するパスワード (任意指定)。
カウンタ	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。

UI 要素	説明
<p>カウンタの取得</p>	<p>[カウンタの取得] ダイアログ・ボックスが開き、監視するエンティティを選択できます。各インスタンスに対して、モニタとしい値の特定のセットが作成されます。詳細については、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sisdocs%pdfs%SiteScope_JBoss_Best_Practices.pdf にある『SiteScope JBoss Application Server Best Practices Guide』を参照してください。</p>
<p>サイレント・デプロイメント</p>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
<p>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</p>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

50

Linux Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

▶ Linux Host ソリューションの概要 (1156 ページ)

タスク

▶ Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1158 ページ)

参照情報

▶ Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ (1160 ページ)

概念

Linux Host ソリューションの概要

Linux Host ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（監視対象 Linux ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストします）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Linux がサポートされます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント：必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、1322 ページの「サーバ中心のレポートの生成」を参照してください。

Linux Host ソリューション・テンプレートは包括的な Linux オペレーティング・システムの監視が可能です。SiteScope ユーザや IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Linux Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Linux Host ソリューション設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥sisdocs¥pdfs¥ **SiteScope_OS_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Operating System のホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Linux Host ソリューション・テンプレートでは、Linux のパフォーマンスと状況の次の側面を監視対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ CPU の状態と使用率の詳細
- ▶ メモリ状態と使用率の詳細
- ▶ ファイル・システムの状態と使用率の詳細

タスク

Linux Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Linux Host ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

注：Linux Host ソリューション・テンプレートでは、対象ホストごとに UNIX リソース・モニタがデプロイされます。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1158 ページの「前提条件」
- ▶ 1159 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1159 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ SiteScope サーバから監視対象 Linux ホストに接続できる必要があります。
- ▶ 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります ([**リモートサーバ**] > [**UNIX リモートサーバ**])。詳細については、596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

注：

- ▶ サポートされている Linux オペレーティング・システムが SiteScope サーバで実行されている場合、そのサーバ自体を監視することもできます。
 - ▶ このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Linux がサポートされます。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』（PDF）の「システム要件」を参照してください。
-

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Linux Host ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1160 ページの「Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Linux Host ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Linux Host ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューションテンプレート] を展開し、[Linux Host] を選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1155 ページの「Linux Host ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>

51

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Microsoft Exchange ソリューションの概要 (1164 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1167 ページ)

参照情報

- ▶ [Microsoft Exchange ソリューション テンプレート] ページ (1169 ページ)

概念

Microsoft Exchange ソリューションの概要

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートは、次のパフォーマンス、可用性、使用統計の監視を提供します。

- ▶ Microsoft Exchange 5.5 Server
- ▶ Microsoft Exchange 2000 Server
- ▶ Microsoft Exchange 2003 Server
- ▶ Microsoft Exchange 2007 Server (バージョン 8.0)
- ▶ Microsoft Exchange 2010 Server

選択したセットに応じて、NT イベント・ログ・エントリ、MAPI 操作、システム・パフォーマンス・カウンタ、メッセージ・システムの使用統計をチェックするモニタが含まれます。

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは包括的な Microsoft Exchange システムの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック (リアルタイムおよび長期間) の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Microsoft Exchange ソリューションの詳細については、『SiteScopeMicrosoft Exchange Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> %sisdocs%\pdfs\SiteScope_Exchange_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft Exchange ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Exchange のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ **基本的なサーバ / OS パフォーマンス**：このカテゴリの対象は、サーバのシステム・レベルの状況です。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、サーバ状況のモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **アプリケーション・パフォーマンス**：アプリケーション・パフォーマンスは、特定の Exchange コンポーネントの稼働状況の指標です。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、一連の重要な Exchange アプリケーション・コンポーネントのモニタが自動的に設定されます。

- ▶ **メール・プロトコル応答時間** : Microsoft Exchange のパフォーマンスで最も重要な側面であり、主要なインジケータと言えるのがメール・プロトコル応答時間です。Microsoft Exchange では多くのプロトコルを利用できますが、Microsoft ネットワークで一般的に使用されるのは MAPI プロトコルです。
- ▶ **使用統計** : さらに、Microsoft Exchange のパフォーマンス関連のカテゴリとして使用状況があります。使用状況自体は、必ずしもパフォーマンスの主要なインジケータではありませんが、使用状況の変化が Microsoft Exchange の全体的なパフォーマンスに影響を与える可能性があります。また、Microsoft Exchange の使用統計は、IT 組織が傾向を見極め、将来の計画を立てる際に役立ちます。Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートでは、一連の重要な Microsoft Exchange 使用状況パラメータのモニタが自動的に設定されます。

注 : ソリューション・テンプレートによってデプロイされるモニタ・タイプの中には、Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを使用しないと SiteScope に追加できないものもあります。詳細については、特定のモニタ・タイプに関するセクションを参照してください。

タスク

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1167 ページの「前提条件」
- ▶ 1168 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1168 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートをデプロイする前に、デプロイするソリューション・テンプレートに応じて特定の手順を実行する必要があります。

- ▶ **Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003 ソリューション**：これらのソリューション・テンプレートでは SiteScope MAPI モニタを使用します。このモニタ・タイプを正常にデプロイするには、メールボックス所有者と SiteScope サービスに関連して特定のセットアップが必要です。MAPI モニタのシステム要件については、SiteScope の『Monitor Reference』の「MAPI Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ **Microsoft Exchange 2007, 2010 ソリューション**：このソリューション・テンプレートは、Microsoft Exchange 2007 および 2010 モニタを使用します。これらのモニタ・タイプを正常にデプロイするには、特定の設定を必要とします。詳細については、SiteScope の『Monitor Reference』の「Microsoft Exchange 2007/2010 Monitor Overview」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

注 : Microsoft Exchange 2010 ソリューションは、テンプレート コンテナに多数のテンプレートを提供します。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択する、また個別のサーバに分散された Exchange サーバのインストールに対してデプロイできます。複数テンプレートを同時にデプロイする方法については、1014 ページの「複数のテンプレートのデプロイ - オプション」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1169 ページの「[Microsoft Exchange ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[Microsoft Exchange ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Microsoft Exchange 5.5, 2000, 2003, 2007 (バージョン 8.0), 2010 サーバを監視するための Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な Microsoft Exchange ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1163 ページの「Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ドメイン (Exchange 2007 および 2010 のみ)	<p>使用するメールボックスの所有者と Microsoft Exchange サーバの両方が属するドメイン。</p> <p>注: このソリューションで使用するメールボックスの所有者にも SiteScope を実行するマシン上の管理アカウント権限が必要です。SiteScope には、Microsoft Exchange サーバを実行するドメインへのユーザ・アカウント・アクセス権も必要です。</p>
メールボックス	<p>MAPI を使用した電子メール往復時間テストに使用するメールボックスの名前 (別名)。多くの場合、これは電子メール・アカウント名ですが、別の名前にすることもあります。</p> <p>ヒント: このソリューションに使用している電子メール・アカウントの [E-Mail Account] プロパティに表示されるメールボックス名をコピーすることをお勧めします。</p>

UI 要素	説明
MailUser (Microsoft Exchange 5.5, 2000, および 2003 のみ)	MAPI を使用した電子メール往復時間テストのユーザの Windows アカウント・ログイン名。
MailDomain (Microsoft Exchange 5.5, 2000, および 2003 のみ)	使用するメールボックスの所有者と Microsoft Exchange サーバの両方が属するドメイン。 注: このソリューションで使用するメールボックスの所有者にも SiteScope を実行するマシン上の管理アカウント権限が必要です。SiteScope には、Microsoft Exchange サーバを実行するドメインへのユーザ・アカウント・アクセス権も必要です。
MAILPASSWORD (Microsoft Exchange 5.5, 2000, および 2003 のみ)	入力したユーザ名の Windows アカウント・ログイン・パスワード。
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
AuthenticationUser (Microsoft Exchange 2003 のみ)	サーバにメールボックスとパブリック・フォルダの統計情報をクエリするとき使用するユーザ名。この統計情報の収集には WMI (Windows Management Instrumentation) を使用するため、ここで入力するユーザ名には WMI namespace root¥MicrosoftExchangeV2 にある WMI 統計の読み取り権限が必要です。このボックスを空白のままにすると、SiteScope を実行しているユーザが使用されます。
AUTHENTICATION PASSWORD (Microsoft Exchange 2003 のみ)	WMI 統計情報の収集用に入力したユーザのパスワード。ユーザ・ボックスを空白のままにした場合は、このボックスも空白にします。

UI 要素	説明
<p>Exchange PS コンソール・ファイル・パス</p> <p>(Microsoft Exchange 2007 および 2010 のみ)</p>	<p>Microsoft Exchange Management Shell PowerShell コンソール・ファイルへのパス。</p> <p>標準設定値: C:\Program Files\Microsoft\Exchange Server\Bin\ExShell.psc1</p>
<p>サイレント・デプロイメント</p>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
<p>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</p>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注: このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>

52

Microsoft IIS ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

▶ Microsoft IIS ソリューションの概要 (1174 ページ)

タスク

▶ Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1176 ページ)

参照情報

▶ [Microsoft IIS ソリューション テンプレート] ページ (1179 ページ)

概念

Microsoft IIS ソリューションの概要

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ (Microsoft IIS 6 および IIS 7.x サーバの状況, 可用性, パフォーマンスをテスト) をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは包括的な IIS 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック (リアルタイムおよび長期間) の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注:

- ▶ Microsoft IIS ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。IIS 6 および IIS 7.x ソリューション・テンプレートには異なるライセンスがあることに注意してください。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ IIS ソリューション・テンプレートの詳細については、『SiteScope Microsoft IIS Best Practices』ドキュメント ([SiteScope_IIS_Best_Practices.pdf](#)) を参照してください。このドキュメントは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sdocs%pdfs** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、IIS ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

IIS ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートでは、IIS サーバのパフォーマンスと状況の次のサービスと側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ Active Server Pages (ASP エラー, 要求, テンプレート, セッション, トランザクション)
- ▶ FTP サービス, Web サービス, SMTP サーバ, NNTP サーバ, HTTP/HTTPS サービス, MSMQ キュー・サービス, IIS サーバ, グローバル IIS の状態, IIS WAS, IIS W3SVC, IIS Windows ログ, インデックス・サービス
- ▶ Windows プロセスとしての IIS 統計情報

タスク

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft IIS ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1176 ページの「前提条件」
- ▶ 1177 ページの「サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 6 のみ)」
- ▶ 1178 ページの「サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 7.x のみ)」
- ▶ 1178 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1178 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ SiteScope サーバは、監視対象 Microsoft IIS ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、SiteScope の『Monitor Reference』の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[リモートサーバ] > [Microsoft Windows リモートサーバ]）。詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、589 ページの「SiteScope 監視のドメイン権限の設定」を参照してください。

注：SiteScope と監視対象 IIS サーバは、同じホスト上で実行できます。

2 サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 6 のみ)

コンポーネント・ツリーに ASP コンポーネント・パスを含むように IIS サーバを設定します。

- a [コントロール パネル] で, [プログラムの追加と削除] > [Windows コンポーネントの追加と削除] を選択します。
- b [Windows コンポーネント ウィザード] の [Windows コンポーネント] のページで, [アプリケーション サーバ] を強調表示し, [詳細] をクリックします。
- c [アプリケーション サーバ] で, [ASP.NET] チェックボックスを選択します。
- d [インターネット インフォメーション サービス (IIS)] を強調表示し, 次に [詳細] をクリックします。
- e [インターネット インフォメーション サービス (IIS)] で, [World Wide Web サービス] チェックボックスを選択し, 次に [詳細] をクリックします。
- f [World Wide Web サービス] で, [Active Server Pages] チェックボックスを選択し, [OK] をクリックします。
- g [インターネット インフォメーション サービス (IIS)] で, [OK] をクリックします。
- h [アプリケーション サーバ] で, [インターネット インフォメーション サービス (IIS)] チェックボックスが選択され, 次にコンポーネントをインストールするために [OK] をクリックします。
- i [次へ] をクリックして, [Windows コンポーネント ウィザード] の完了画面で, [完了] をクリックします。
- j ASP.NET を有効にするには, [コントロール パネル] で [管理ツール] > [インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ] を選択します。
- k コンソール・ツリーで, ローカル・コンピュータを展開し, [Web サービス拡張] をクリックします。
- l [詳細] ペインで, [ASP.NET] をクリックし, 次に [許可] をクリックします。

3 サーバ環境の設定 (Microsoft IIS 7.x のみ)

コンポーネント・ツリーに ASP コンポーネント・パスを含むように IIS サーバを設定します。

- a サーバ・マネージャを起動します ([スタート] > [ファイル名を指定して実行] をクリックし, CompMgmtLauncher と入力します)。
- b ツリー・ビューで, [役割] を選択し, [役割] ペインで [役割の追加] をクリックします。
- c [役割の追加ウィザード] で, [サーバの役割の選択] をクリックし, [Web サーバ (IIS)] チェックボックスを選択して, [次へ] をクリックし, 次に [次へ] を再度クリックします。
「Web サーバ (IIS) に必要な機能を追加しますか?」というメッセージが表示されたら, [必要な機能を追加] をクリックします。
- d [役割サービスの選択] ウィンドウで, [ASP.NET] および [ASP] サービスが選択されていることを確認します ([アプリケーション開発] の下にある)。

4 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については, 1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

5 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft IIS ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については, 1179 ページの「[Microsoft IIS ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[Microsoft IIS ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Microsoft IIS 6 ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な Microsoft IIS ソリューション・テンプレートを選択します (Microsoft IIS 6 または Microsoft IIS 7.x)。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1173 ページの「Microsoft IIS ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UI 要素	説明
<p>サイレント・デプロイメント</p>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
<p>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</p>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

53

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・ テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの概要 (1182 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1186 ページ)

参照情報

- ▶ Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ (1187 ページ)

概念

Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの概要

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートを使用して Microsoft Lync Server 2010 サーバのさまざまな側面を監視できます。次の内容が含まれます。

- ▶ **Microsoft A/V Conferencing サーバ** : Microsoft Lync A/V Conferencing サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。A/V 会議によって、リアルタイムのオーディオ / ビデオ (A/V) 通信をユーザ間で行うことができます (オーディオ会議用のヘッドセットやビデオ会議用の Web カメラなどの適切なクライアント機器を有することを条件として)。A/V Conferencing サーバは、A/V 会議機能をデプロイメントに提供します。このサーバは Front End サーバと一緒に使用するか、1 つのサーバまたは A/V Conferencing サーバ・プールとして個別にデプロイできます。
- ▶ **Microsoft Archiving サーバ** : Microsoft Lync Archiving サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Archiving サーバによって、規則への準拠のためにインスタント・メッセージング (IM) 通信や会議の内容をアーカイブできます。企業や組織は、特定のタイプの通信の保管を求める業界および政府の多数の規則を受けています。Archiving サーバ機能を使用することで Microsoft Lync Server 2010 通信ソフトウェアは、Lync Server 2010 を介して送信される IM コンテンツや会議内容 (一方または両方) をアーカイブする方法を提供します。Archiving サーバをデプロイして Front End プールと関連付けると、IM や会議をアーカイブするように設定したり、アーカイブを有効に設定されるユーザを指定できます。

- ▶ **Microsoft Director サーバ** : Microsoft Lync Director サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Director はユーザ要求を認証する Microsoft Lync Server 通信ソフトウェアを実行しているサーバですが、ユーザ・アカウントを保管したりプレゼンスまたは会議サービスを提供しません。Director は外部ユーザのアクセスを可能にするデプロイメントで最も役立ち、内部サーバに外部ユーザを導く前に要求を認証できます。Director は複数の Front End プールを用いている組織のパフォーマンスを改善することもできます。
- ▶ **Microsoft Edge サーバ** : Microsoft Lync Edge サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Edge サーバによって、ユーザは組織のファイアウォールの外側のユーザと通信したり共同作業できます。外部ユーザとしては、現在社外で作業中の組織のユーザ、連合するパートナー組織のユーザ、そして Lync サーバのデプロイメントにホストされる会議への参加を要請されている外部ユーザが挙げられます。Edge サーバは、Windows Live, AOL, および Yahoo! を含むパブリック IM 接続サービスへの接続も可能にします。
- ▶ **Microsoft Front End サーバ** : Microsoft Lync Front End サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Front End サーバはコアとなるサーバ・ロールで、多くの基本的な Lync Server 機能を実行します。Front End サーバは、データベースを提供する Back End サーバとともに、Lync Server Enterprise Edition デプロイメントで必要となる唯一のサーバ・ロールです。

Front End プールは、完全に同じように設定され、ユーザの共通グループにサービスを提供するために連動する一連の Front End サーバです。プールはユーザにスケーラビリティとフェイルオーバー機能を提供します。

Front End サーバの機能は次の通りです。

- ▶ ユーザ認証および登録
- ▶ プレゼンス情報および連絡先カード交換
- ▶ アドレス帳サービスおよび配布リスト拡張
- ▶ 複数人による IM 会議を含む IM 機能
- ▶ Web 会議およびアプリケーション共有 (デプロイされている場合)

- ▶ Lync Server (たとえば、Conferencing Attendant および Response Group アプリケーション) およびサードパーティ・アプリケーションに含まれる両アプリケーションのためのアプリケーション・ホスティング・サービス。
- ▶ アプリケーション・ホスティングおよびホスト・アプリケーション (たとえば、Response Group アプリケーションなど) のためのアプリケーション・サービス。
- ▶ **Microsoft Mediation サーバ** : Microsoft Lync Mediation サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Mediation サーバは、Enterprise Voice およびダイヤルイン会議を実装するために必要なコンポーネントです。Mediation サーバは信号を変換しますが、一部の設定では、内部の Lync Server インフラストラクチャと公衆交換電話網 (PSTN) ゲートウェイ、IP-PBX、または Session Initiation Protocol (SIP) トランク間でメディアを変換します。Lync Server 側では、Mediation サーバは単一の相互 TLS (MTLS) 転送アドレスでリッスンします。ゲートウェイ側では、Mediation サーバは単一の TCP および単一の TLS 転送アドレス、または単一の TLS 転送アドレスでリッスンします。すべての正規のゲートウェイは TLS をサポートする必要がありますが、TCP も有効にできます。
- ▶ **Microsoft Monitoring and CDR サーバ** : Microsoft Lync Monitoring and CDR サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Monitoring サーバは、Enterprise Voice コールと A/V 会議の両方においてネットワーク・メディアの品質に関するデータを収集します。この情報は可能な限り最高のメディア・エクスペリエンスをユーザに提供する支援となります。コールの失敗を解決するために使用できるコール・エラー記録 (CER) も収集します。さらに、さまざまな Lync Server サーバ機能に関する使用情報を通話詳細記録 (CDR) の形式で収集するので、デプロイメントの投資に対するリターンを計算したり、将来におけるデプロイメントの拡張を計画できます。
- ▶ **Microsoft Registrar サーバ** : Microsoft Lync Registrar サーバのサーバ・パフォーマンス統計情報を監視します。Lync Server 2010 Registrar は、クライアント登録および認証を可能にし、ルーティング・サービスを提供する新しいサーバ・ロールです。このサーバは、Standard Edition サーバ、Enterprise Front End サーバ、Director、または Survivable Branch Appliance で他のコンポーネントと共に置かれます。Registrar プールは、Lync Server プールで実行し、同じサイトに置かれている Registrar Service で構成されます。

Microsoft Lync Server 2010 モニタの場合は、監視対象のサーバについて 3 つの測定値のデータを表示するサーバ中心のレポートを作成できます。

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの詳細については、『SiteScope Microsoft Lync Server 2010 Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> [%sisdocs%\pdfs\SiteScope_MS_Lync_Server_2010_Best_Practices.pdf](#) にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

タスク

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1186 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1186 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1187 ページの「Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

注 : Microsoft Lync Server 2010 ソリューションは、テンプレート コンテナに多数のテンプレートを提供します。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択できます。複数のテンプレートを同時にデプロイする詳細については、1014 ページの「複数のテンプレートのデプロイ - オプション」を参照してください。

参照情報

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート・ページ

このページによって、さまざまな Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート (Microsoft Archiving サーバ, Microsoft A/V Conferencing サーバ, Microsoft Director サーバ, Microsoft Edge サーバ, Microsoft Front End サーバ, Microsoft Mediation サーバ, および Microsoft Monitoring and CDR サーバ, Microsoft Registrar サーバ) をデプロイできます。テンプレートの説明については、1182 ページの「Microsoft Lync Server 2010 ソリューションの概要」を参照してください。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで, [ソリューション テンプレート] > Microsoft Lync Server 2010] を展開し, 必要な Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1181 ページの「Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ホスト	監視対象の Microsoft Lync Server 2010 インスタンスのホスト名。
ユーザ	Microsoft Lync Server 2010 インスタンスの管理者権限を持つユーザ名。
パスワード	Microsoft Lync Server 2010 のユーザのパスワード。

UI 要素	説明
接続方法	<p>サーバに接続するために使用される方法。オプションは、NetBIOS, WMI, または SSH。</p> <p>標準設定値 : NetBIOS</p>
リモート・サーバのエンコーディング	<p>リモート・サーバのエンコーディング。</p> <p>標準設定値 : Cp1252</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 < SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

54

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・ テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Microsoft SharePoint 2010 ソリューションの概要 (1190 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1192 ページ)

参照情報

- ▶ [Microsoft SharePoint 2010 ソリューション テンプレート] ページ (1193 ページ)

概念

Microsoft SharePoint 2010 ソリューションの概要

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートを使用して、SharePoint Server 2010 システムの稼働状況を理解するために SharePoint 環境を監視したり、SharePoint 2010 製品にある重要なイベント、パフォーマンス・カウンタ、サービスの監視を行うことができます。

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートは、MicrosoftSharePoint 2010 のパフォーマンスおよび状態のサービスおよび側面を対象とする一連のモニタ（Microsoft Windows イベント・ログ、Microsoft Windows リソース、CPU、ディスク領域、および SQL）をデプロイします。これらのモニタは、Microsoft SharePoint 2010 の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートでは包括的な監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Microsoft SharePoint 2010 ソリューションの詳細については、『SiteScope Microsoft SharePoint 2010 Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> %sdocs%pdfs%SiteScope_SharePoint_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
 - ▶ Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートは、監視対象のリモート・サーバが SSH 用に設定されており、SSH 接続方法がテンプレートで使用されている場合には、UNIX バージョンで稼働する SiteScope でもサポートされます。詳細については、『SiteScope の使用』の「セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視」を参照してください。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートでは、SharePoint 環境の次の側面の可用性、パフォーマンス、および状態を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ IIS Process
- ▶ InfoPath Service
- ▶ Publishing Service
- ▶ Search Service
- ▶ Service Application
- ▶ SharePoint Server
- ▶ SQL Server

タスク

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートをデプロイする手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1192 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1192 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1193 ページの「[Microsoft SharePoint 2010 ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

注： Microsoft SharePoint 2010 ソリューションは、テンプレート・コンテナに多数のテンプレートを提供します。これらは個々にまたは同時にグループにデプロイできます。これによって、必要なテンプレートだけを選択できます。複数のテンプレートを同時にデプロイする詳細については、1014 ページの「複数のテンプレートのデプロイ - オプション」を参照してください。

参照情報

[Microsoft SharePoint 2010 ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] > [Microsoft SharePoint 2010] を展開し、必要な SharePoint テンプレートを選択します。
重要な情報	Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレートは、監視対象のリモート・サーバが SSH 用に設定されており、SSH 接続方法がテンプレートで使用されている場合には、UNIX バージョンで稼働する SiteScope でもサポートされます。詳細については、『SiteScope の使用』の「セキュア・シェル (SSH) を使用した SiteScope の監視」を参照してください。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1189 ページの「Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ホスト	Microsoft SharePoint インスタンスのホスト名。
ユーザ名	監視対象の Microsoft SharePoint インスタンスの管理者権限を持つユーザ名。
パスワード	監視対象の Microsoft SharePoint インスタンスのユーザのパスワード。

UI 要素	説明
接続方法	<p>サーバに接続するために使用される方法。オプションは NetBIOS, WMI, および SSH です。</p> <p>標準設定値 : NetBIOS</p>
リモート・サーバのエンコーディング	<p>リモート・サーバで実行されているオペレーティング・システムのバージョンが、SiteScope が稼働するサーバとは異なる文字エンコーディングを使用する場合、リモート・サーバのエンコーディングを設定します。このエンコードによって、エンコードされた内容を SiteScope で適切に表示できます。</p> <p>標準設定値 : Cp1252</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
リモート・サーバのテスト	<p>テンプレートのデプロイ後、テンプレート・リモート・サーバから作成した接続をテストします。テストはバックグラウンドで実行されるので、引き続き SiteScope を使用できます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

55

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Microsoft SQL Server ソリューションの概要 (1196 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1198 ページ)

参照情報

- ▶ Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート・ページ (1200 ページ)

概念

Microsoft SQL Server ソリューションの概要

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートは、標準設定の測定値で設定された一連のモニタ（Microsoft SQL サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテスト）をデプロイする場合に使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、Microsoft SQL Server 2005, 2008, および 2008 R2 がサポートされています。

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートを使用して、Microsoft SQL サーバを包括的に監視できます。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、パフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Microsoft SQL Server ソリューションの詳細は、『SiteScope Microsoft SQL Server Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > [¥sisdocs¥pdfs¥ SiteScope_MSSQL_Best_Practices.pdf](#) にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Microsoft SQL Server ソリューションのライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション • テンプレート • モニタ

Microsoft SQL Server ソリューション • テンプレートでは、Microsoft SQL サーバ • パフォーマンスおよび状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ CPU の状態と使用率の詳細
- ▶ メモリ の状態と使用率の詳細
- ▶ ディスク使用率情報
- ▶ SQL Server の可用性
- ▶ SQL Server オブジェクト (Buffer Manager, データベース, ロック, トランザクション, バッチ要求, キャッシュ)
- ▶ SQL Server のリソース (空き領域, 現在のユーザ接続率, I/O 使用率, ラッチ, ミラーリング, レプリケーション, データ • アクセス)
- ▶ SQL Server のエラー

Microsoft SQL Server ソリューションでは、SiteScope データベース • カウンタ • モニタ, Microsoft SQL Server モニタ, Microsoft Windows リソース • モニタが使用されます。これらのモニタの詳細については、104 ページの「Database Counter Monitor Overview」, 358 ページの「Microsoft SQL Server Monitor Overview」, 408 ページの「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。

タスク

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定し、Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1198 ページの「前提条件」
- ▶ 1199 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1199 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ SiteScope サーバから監視対象の Microsoft SQL ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、SiteScope 『Monitor Reference』の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[リモートサーバ] > [Microsoft Windows リモートサーバ]）。詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、589 ページの「SiteScope 監視のドメイン権限の設定」を参照してください。

- ▶ SQL Server ユーザは、SQL Server システム・ビューからデータを取得するために、監視対象の SQL Server インスタンスの **VIEW SERVER STATE** 権限が必要です。Microsoft SQL Server の権限の付与の詳細については、<http://msdn2.microsoft.com/ja-jp/library/ms186717.aspx> を参照してください。

注： SiteScope と監視対象の Microsoft SQL Server は、同じホストで実行できます。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1200 ページの「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Microsoft SQL Server の主要コンポーネントを監視する Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開し、必要なソリューションを選択します (Microsoft SQL Server または Microsoft SQL Server 2008 R2)。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">▶ 1195 ページの「Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート」▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

Microsoft SQL Server (Microsoft SQL Server 2005 および 2008 用)

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
Login to Microsoft SQL Server	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのログイン名。
Microsoft SQL Server password	監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスのユーザのパスワード。
Microsoft SQL Server URL	<p>監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスの URL。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ <code>\${host}</code> を Microsoft SQL Server が実行されているホスト名で置き換えます。これは、Windows リモート・マシンに定義されているホスト名と同じである必要があります。詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ <code>\${port}</code> を Microsoft SQL Server で接続が許可されるポート番号で置き換えます。標準設定のポートは 1433 です。 <p>例 : jdbc:mercury:sqlserver://doors:1433</p>

UI 要素	説明
SERVER_LIST	<p>監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

Microsoft SQL Server 2008 R2

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
Microsoft SQL Server URL	<p>監視対象の Microsoft SQL Server インスタンスの URL。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ <code>\${host}</code> を Microsoft SQL Server が実行されているホスト名で置き換えます。これは、Windows リモート・マシンに定義されているホスト名と同じである必要があります。詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ] / [Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ <code>\${port}</code> を Microsoft SQL Server で接続が許可されるポート番号で置き換えます。標準設定のポートは 1433 です。 <p>例 : <code>jdbc:mercury:sqlserver://doors:1433</code></p>
Microsoft SQL Server 2008 R2 にログイン	監視対象の Microsoft SQL Server 2008 R2 インスタンスのユーザのログイン名。
Microsoft SQL Server 2008 R2 のパスワード	監視対象の Microsoft SQL Server 2008 R2 インスタンスのユーザのパスワード。
Microsoft SQL Server 2008 R2 エージェント・サービス名	<p>SQL Server 2008 R2 エージェント・サービスの名前。</p> <p>標準設定値 : SQL Server (MSSQLSERVER)</p>
Microsoft SQL Server 2008 R2 サービス・インスタンス名	<p>SQL Server 2008 R2 サービス・インスタンスの名前。</p> <p>標準設定値 : SQL Server (MSSQLSERVER)</p>
Microsoft SQL Server 2008 R2 サービス名	<p>SQL Server 2008 R2 サービスの名前。</p> <p>標準設定値 : SQL Server</p>

UI 要素	説明
SERVER_LIST	<p>監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

56

Microsoft Windows Host ソリューション・ テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Microsoft Windows Host ソリューションの概要 (1206 ページ)

タスク

- ▶ Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1208 ページ)

参照情報

- ▶ [Microsoft Windows Host ソリューション テンプレート] ページ (1210 ページ)

概念

Microsoft Windows Host ソリューションの概要

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートは、Windows ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定されたモニタの収集をデプロイするために使用できるテンプレートです。このテンプレートでは、Microsoft Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003, Windows Server 2008 がサポートされています。

Microsoft Windows リソース・モニタの場合は、監視対象のサーバについて 3 つの測定値のデータを表示するサーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント: 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、Microsoft Windows リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、1322 ページの「サーバ中心のレポートの生成」を参照してください。

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを使用して、Windows オペレーティング・システムを包括的に監視できます。SiteScope ユーザまたは IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Microsoft Windows Host ソリューションの設定の詳細は、『SiteScope Operating System Host Best Practices』のドキュメントを参照してください。このドキュメントは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sdocs%\pdfs\SiteScope_OS_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、オペレーティング・システムのホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows のパフォーマンスおよび状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ CPU の状態および使用率の詳細
- ▶ メモリの状態および使用率の詳細
- ▶ ディスク使用率情報

タスク

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定し、Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

注：Microsoft Windows Host ソリューションでは、各監視対象ホストに Microsoft Windows リソース・モニタがデプロイされます。このモニタは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要な追加モニタです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1209 ページの「前提条件」
- ▶ 1209 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1209 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ SiteScope サーバから監視対象 Windows ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、SiteScope の『Monitor Reference』の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[リモート サーバ] > [Microsoft Windows リモート サーバ]）。詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモート サーバ]/[Microsoft Windows リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、589 ページの「SiteScope 監視のドメイン権限の設定」を参照してください。
- ▶ SiteScope がテンプレートでサポートされる Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合、SiteScope と監視対象サーバは同じホストで実行できます。このテンプレートでは、Microsoft Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003, Windows Server 2008 がサポートされています。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1210 ページの「[Microsoft Windows Host ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[Microsoft Windows Host ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Microsoft Windows 2000, Windows XP, および Windows Server 2003 オペレーティング・システムを監視する Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開し、 [Microsoft Windows Host] を選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none">▶ 1205 ページの「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	<p>監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

57

.NET ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ .NET ソリューションの概要 (1214 ページ)

タスク

- ▶ .NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1216 ページ)

参照情報

- ▶ [.NET ソリューション テンプレート] ページ (1218 ページ)

概念

.NET ソリューションの概要

.NET ソリューション・テンプレートでは、Windows オペレーティング・システムが実行されているサーバの .NET アプリケーションを監視できます。このソリューション・テンプレートでは、Windows ホストの .NET アプリケーションおよび .NET 環境の状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。このテンプレートでは、Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 がサポートされます。

.NET ソリューション・テンプレートでは包括的な .NET 監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ .NET ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ .NET ソリューションの詳細については、『SiteScope .NET Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sisdocs%\pdfs\SiteScope_NET_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは .NET ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

.NET ソリューション・テンプレートでは、.NET のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ **.NET CLR データ** : このカテゴリの対象は、共通言語ランタイム・データ (.NET アプリケーションの環境) です。このカテゴリは、選択したアプリケーションを対象として .NET CLR の複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **ASP.NET** : このカテゴリは、ASP.NET の複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。アプリケーションの再起動と ASP.NET システム全体の安定性に関する一般的な情報が収集されます。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。
- ▶ **ASP.NET アプリケーション** : このカテゴリは、選択した ASP.NET アプリケーションの複数のリソースの統計情報をチェックするように設計されています。アプリケーションのキャッシュやエラーなどの重要な情報に関する一般的な情報が収集されます。.NET ソリューション・テンプレートでは、サーバの状況のモニタが自動的に設定されます。

タスク

.NET ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、.NET ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1216 ページの「前提条件」
- ▶ 1217 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1217 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ SiteScope サーバから監視対象 Windows ホストに接続できる必要があります。Microsoft Windows リソース・モニタを使用して、リモート Windows サーバからサーバのパフォーマンス統計情報を監視します。Microsoft Windows リソース・モニタに特別な設定が必要になる場合があります。詳細については、SiteScope の『Monitor Reference』の「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」を参照してください。
- ▶ 対象サーバを Windows リモート・マシンとして SiteScope に追加し、Windows リモート・テストにパスする必要があります（[リモートサーバ] > [Microsoft Windows リモートサーバ]）。詳細については、601 ページの「[新規 Microsoft Windows リモートサーバ] / [Microsoft Windows リモートサーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

または、ドメイン権限を設定して SiteScope からリモート・サーバへのアクセスを許可することもできます。詳細については、589 ページの「SiteScope 監視のドメイン権限の設定」を参照してください。

- ▶ SiteScope がテンプレートでサポートされている Windows オペレーティング・システムにインストールされている場合、SiteScope および対象 .NET アプリケーションを同じホストで実行できます。このテンプレートでは、Windows 2000, Windows XP, Windows Server 2003 がサポートされます。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

.NET ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1218 ページの「[.NET ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[.NET ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、.NET アプリケーションおよび .NET 環境を監視する .NET ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な .NET ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1213 ページの「.NET ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。Windows 接続プロファイルを作成する手順については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」を参照してください。
ASP.NET アプリケーション (ASP.NET アプリケーションのみ)	監視する ASP.NET アプリケーションの名前。この名前は、タスク・マネージャに表示される名前と同じにする必要があります。
インスタンス (.NET CLR データのみ)	監視するアプリケーションの名前。この名前は、タスク・マネージャに表示される名前と同じにする必要があります。同じでない場合はシステム全体の統計情報 (標準設定) になる可能性があります。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

58

Oracle Database ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Oracle Database ソリューションの概要 (1222 ページ)

タスク

- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1224 ページ)

参照情報

- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール (1225 ページ)
- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ (1228 ページ)

概念

Oracle Database ソリューションの概要

Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用すると、Oracle データベースの状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタをデプロイできます。デプロイしたモニタは、キャッシュ・ヒット率やディスク I/O などの一般的なシステム統計情報をチェックします。また、データベースの重要な側面に関する診断情報を提供するツールを備えています。このソリューションは、Oracle 9, 10g, 11g データベースに使用できます。

このソリューションは、データベース・カウンタ・モニタを使用して JDBC でアクセス可能なデータベースからパフォーマンス測定値を収集します。さらに、Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用して標準設定の測定値が設定された一連のモニタをデプロイできます。

重要なシステム測定値は、Oracle データベースのシステム・テーブルから取得したデータを使用して計算されます。これらの測定値を作成するために、V\$SYSSTAT, V\$LATCH, V\$ROLL_STAT, V\$BUFFER_POOL_STATISTICS などの幅広い Oracle システム・テーブルを参照します。このように、Oracle Database ソリューションは、Oracle インストールにバンドルされているシステム監視スクリプトの多くと同等の機能を実装します。

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは包括的な Oracle データベースの監視が可能です。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Oracle Database ソリューションの詳細については、『SiteScope OracleDatabase Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれていて、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %\$isdocs%pdfs%SiteScope_Oracle_Database_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Oracle Database ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは、Oracle のパフォーマンスと状況の次の側面を監視対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ **一般的なシステム統計情報：**最も重要な V\$SYSSTAT 統計は、Oracle Database ソリューションでデプロイされたモニタによって標準設定で監視されます。必要に応じて、これらの測定値は組み合わせられ、1 秒または 1 トランザクションあたりの差異や速度が計算されます。データベース内の V\$ テーブルから重要な測定値を監視する場合、手動で生成した SQL スクリプトの代わりに Oracle Database ソリューションを使用できます。
- ▶ **Oracle ログ：**ORA- エラーがないかどうか、重要な Oracle ログ・ファイルを監視します。データベース設定に応じて、ユーザがこれらのモニタをログ・ファイル内の特定のテキストを検索するようにカスタマイズすることも可能です。
- ▶ **データベース問題の診断：**デプロイしたモニタに加えて、Oracle ソリューションは、データベースに関する診断情報の取得に使用できる複数のツールを備えています。これらのツールでは、リソースを集中的に消費する SQL ステートメント、共有サーバ・プロセスの競合、特定のイベントを待機しているセッション数などの診断データを利用できます。

タスク

Oracle Database ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Oracle Database ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1224 ページの「前提条件」
- ▶ 1224 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1224 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートを正常にデプロイするには、「CREATE SESSION」システム権限が必要です。
- ▶ Oracle Database ソリューション・テンプレートをデプロイする前に、データベース・カウンタ・モニタとログ・ファイル・モニタについてのドキュメント (SiteScope の『Monitor Reference』の「Database Counter Monitor Overview」と「Log File Monitor Settings」) を参照し、このソリューション・テンプレートで要求される前提条件とパラメータの詳細を確認してください。たとえば、データベースとの通信に必要な Oracle JDBC ドライバのインストールや、ログ・ファイル・パス・パラメータの形式に関する詳細な情報を参照できます。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Oracle Database ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1228 ページの「Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ」を参照してください。

参照情報

Oracle Database ソリューション・テンプレートのツール

Oracle Database ソリューション・テンプレートでは、Oracle データベースに関する診断情報の収集に使用できる複数のツールがデプロイされます。これらのツールは、ソリューション・テンプレートでデプロイしたモニタと同じグループにデプロイされます。ツールは、モニタと同じように表示されますが、無効に設定されています。これらのツールは、グループ内容テーブルの **[状態]** フィールドに太字で表示されたテキスト「**Solution Tool**」で識別します。ソリューション・ツールはモニタ・テーブルに表示されますが、モニタ・インスタンスではありません。ソリューション・ツールが自動的に実行されることはありません。また、アクション結果に基づいて状態が表示されたり、警告が起動されることもありません。これらのツールは事前に設定されたアクションであり、SiteScope 診断ツールを利用して Oracle データベースからパフォーマンス問題を示す特定の統計情報をチェックします。

ユーザがいずれかのソリューション・ツールをクリックすると、SiteScope はデータベース接続テスト・ツールを使用して、データベースへのカスタム SQL クエリを実行します。クエリの結果は、ページ下部にあるテーブルに表示されます。このページで [接続とクエリ実行] ボタンをクリックすることで、ツールを必要に応じて何回でも実行できます。ツールによっては、データベースに著しいオーバーヘッドが発生するため、連続して実行することはお勧めしません。

Oracle Database ソリューション・テンプレートのリスト

次に、Oracle Database ソリューションの一部としてデプロイされるツールについて説明します。

Oracle ソリューション・ツール名	説明と使用ガイドライン
Top Ten SQL Statements in Logical IOs Per Row	<p>このツールは、データベースで実行されている SQL ステートメントのうち、最もリソースを集中的に消費するステートメントを見つけるように設計されたクエリを実行します。V\$SQL テーブルに対して、1 行あたり最も多くの論理 IO を実行する SQL ステートメント上位 10 個を求めるクエリが実行され、テーブルに表示されます。</p> <p>これらの 10 個のステートメントのステートメント ID が、ステートメントごとの追加のリソース使用データとともにテーブルに表示されます。</p> <p>次のような追加データがあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 物理 IO ブロック数：ステートメントのために実行されたディスク読み取り回数。 ▶ 論理 IO 数：ステートメントのために実行されたバッファ取得回数。 ▶ 処理された行数：ステートメント実行時に処理された行数。 ▶ 1 行あたりの論理 IO 数：ステートメント実行時に処理された 1 行あたりのバッファ取得実行回数。 ▶ 実行回数：ステートメントの実行回数。 ▶ 1 回の実行あたりの論理 IO 数：1 回のステートメント実行あたりのバッファ取得回数。 <p>注：実行するアクションはデータベース・リソースに重大な影響を与える可能性があるため、頻繁に実行しないでください。</p>
Number of Sessions Waiting Per Event	<p>このツールは、応答しなくなったセッションのトラブルシューティングに使用できます。複数のセッションが応答しなくなった場合、このツールを使用して、応答しなくなったセッションがすべて同じイベントを待機しているかどうかを判別できます。ツールのアクションによって、特定のイベントを待機しているセッション数を含むテーブルが表示されます。</p>

Oracle ソリューション・ツール名	説明と使用ガイドライン
Shared Server Process Contention (Common Queue Average Wait Time)	このツールは、共有サーバ・メッセージ・キュー (V\$QUEUE に記録された共通キュー) の平均待機時間を計算します。平均待機時間が長い場合、共有サーバ・プロセス間の競合を示している可能性があります。

Oracle Database ソリューション・ツールを実行するには、次の手順を実行します。

- 1 Oracle ソリューション・モニタがデプロイされているグループのグループ名をクリックします。[Group Detail] ページが開きます。
- 2 実行するアクションに対応するソリューション・ツールを見つけます。ソリューション・ツールで実行されるアクションの説明については、そのツールの [**名前**] 列を参照してください。
- 3 アクションを実行するには、ツールの [**名前**] の右にある [**ツール**] リンクをクリックします。[データベース接続テスト] ページが開きます。このページで [**接続とクエリ実行**] ボタンをクリックすることで、ツールを必要に応じて何回でも実行できます。

注: クエリによっては、ソリューション・ツールがデータベースにとって著しいオーバーヘッドとなる場合があるため、ツールを短い間に連続して実行することはお勧めしません。

[データベース接続テスト] ページの上部には、テストに使用したデータベース接続パラメータが表示されます。ツール・クエリの結果は、ページ下部近くのテーブルに表示されます。該当するツールの説明と使用ガイドラインに基づいて、結果を確認します。

Oracle Database ソリューション・テンプレート・ページ

このページでは、Oracle Database ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、[Oracle Database 9i and 10g] を選択します。
重要な情報	Oracle Database 9i and 10g ソリューション・テンプレートを正常にデプロイするには、「CREATE SESSION」システム権限が必要です。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1221 ページの「Oracle Database ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
DatabaseConnection URL	<p>監視対象のデータベースの接続 URL。構文は、<code>jdbc:oracle:thin:@<サーバ名または IP アドレス>:<データベース・サーバ・ポート>;sid=<sid></code> になります。</p> <p>例：ポート 1521 を使用してマシン上の ORCL データベースに接続するには、次の URL を使用します。</p> <p><code>jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL</code>。</p> <p>注：前述の例のようにコロン (:) とアットマーク (@) 記号を含める必要があります。</p>
DatabaseDriver	<p>このモニタで使用する JDBC ドライバの名前。各ドライバがサポートするのは特定の接続 URL パターンであるため、[データベース接続 URL] に入力した URL とその URL パターンは一致する必要があります。</p>

UI 要素	説明
OracleAlertLogPath	Oracle 警告ログへのフル・パス。Windows マシンの場合、これはフル UNC パスです。Oracle 警告ログへのフル・パスを入力します。このファイルへのアクセス方法については、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle のドキュメントを参照してください。
OracleListenerLog Path	Oracle リスナ・ログへのフル・パス。Windows マシンの場合、これはフル UNC パスです。このファイルへのアクセス方法については、データベース管理者に問い合わせるか、Oracle のドキュメントを参照してください。
DatabaseUserName	SiteScope がデータベースへの接続に使用するユーザ名。
DATABASEPASSWORD	SiteScope がデータベースへの接続に使用するユーザ名のパスワード。
ログ・ファイルのエンコード	<p>監視するファイル内容で、SiteScope を実行するサーバとは別のエンコーディングを使用している場合、使用するコード・ページまたはエンコーディングを入力します。これは、SiteScope が使用するコード・ページが対象ファイルで使用する文字セットをサポートしていない場合に必要となる可能性があります。ここで指定することで、SiteScope がエンコードされたファイルの内容を正確に照合および表示できます。</p> <p>例: Cp1252, Cp1251, Cp1256, Shift_JIS, または EUC_JP。</p>
SERVER_LIST	<p>監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。</p> <p>接続プロファイルを作成する手順については、584 ページの「リモート Microsoft Windows サーバを監視するための SiteScope の設定方法」または 596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
<p>サイレント・デプロイメント</p>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
<p>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</p>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

59

SAP ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ SAP ソリューションの概要 (1232 ページ)

タスク

- ▶ SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1233 ページ)

参照情報

- ▶ [SAP ソリューションテンプレート] ページ (1235 ページ)

概念

SAP ソリューションの概要

SAP ソリューションには、次の重要な SAP コンポーネントを監視するためのソリューション・テンプレートが含まれています。

- ▶ **SiteScope SAP R/3 Application Server** ソリューション・テンプレートには、SAP R/3 システムの可用性の監視、使用状況の統計、サーバ・パフォーマンスの統計に使用するツールが用意されています。このソリューション・テンプレートでは、SAP R/3 サーバの状況、可用性、パフォーマンスをテストする一連のモニタをデプロイします。
- ▶ **SiteScope SAP NetWeaver Application Server** ソリューション・テンプレートでは、SAP Java Web アプリケーション・サーバ・クラスタの可用性とサーバ統計情報を監視できます。このソリューション・テンプレートを使用して、サーバ全体のリソースと測定値のモニタをデプロイできます。

SAP ソリューション・テンプレートは、可用性およびパフォーマンスに関してレポートするためにメトリックスで構成されたモニタのコレクションをデプロイします。これらの監視設定は、ベスト・プラクティス・データとさまざまな情報源から得た専門知識を使用して調査されています。

SAP ソリューション・テンプレートは包括的な SAP 監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織に専門的な知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注： SAP R/3 Application Server ソリューション・テンプレートと SAPNetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・テンプレートのライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。

タスク

SAP ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、SAP ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1233 ページの「前提条件」
- ▶ 1234 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1234 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

SAP R/3 アプリケーション・サーバ:

- ▶ SAP Java コネクタのライブラリを、必要な SiteScope フォルダにコピーする必要があります。
- ▶ SiteScope で SAP R/3 サーバへのログインに使用するユーザ名とパスワードが必要です。

システムと設定要件の詳細については、SiteScope の『Monitor Reference』の「SAP CCMS Monitor Overview」を参照してください。このモニタは、SAP R/3 ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ:

- ▶ SAP Java Web アプリケーション・サーバのライブラリを、必要な SiteScope フォルダにコピーする必要があります。
- ▶ SiteScope で SAP Java Web アプリケーション・サーバへのログインに使用するユーザ名とパスワードが必要です。

システムと設定要件の詳細については、SiteScope の『Monitor Reference』の「SAP Java Web Application Server Monitor Overview」を参照してください。このモニタは、SAP NetWeaver Application Server ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

SAP ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1235 ページの「[SAP ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[SAP ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SAP CCMS と SAP Java Web アプリケーション・サーバ上の主要コンポーネントを監視する SAP ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開して、必要な SAP ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1231 ページの「SAP ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

SAP R/3 アプリケーション・サーバ

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
CLIENT_NUMBER	SAP への接続に使用するクライアント。
Password	SAP サーバへの接続に必要なパスワード。
USER_NAME	SAP サーバへの接続に必要なユーザ名。
SYSTEM_NUMBER	SAP サーバのシステム番号。

UI 要素	説明
APPLICATION_SERVER	監視する SAP サーバのアドレス。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

SAP NetWeaver アプリケーション・サーバ

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
TARGET_SERVER_NAME	監視する SAP Java Web アプリケーション・サーバのアドレス。
USER_NAME	SAP Java Web アプリケーション・サーバへの接続に必要なユーザ名。
PORT	SAP Java Web アプリケーション・サーバのポート。
Password	SAP Java Web アプリケーション・サーバへの接続に必要なパスワード。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

60

Siebel ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

▶ Siebel ソリューションの概要 (1240 ページ)

タスク

▶ Siebel ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1242 ページ)

参照情報

▶ [Siebel ソリューション テンプレート] ページ (1245 ページ)

概念

Siebel ソリューションの概要

SiteScope Siebel ソリューション・テンプレートでは、Microsoft Windows および UNIX オペレーティング・システムにインストールされている Siebel アプリケーション・サーバ、ゲートウェイ・サーバ、Web サーバのパフォーマンス、可用性、使用率の統計情報を効率的かつ詳細に監視できます。UNIX および Windows プラットフォームにインストールされているサーバに対応する個別のソリューション・テンプレートがあります。

Siebel の主なソリューション・テンプレートは、Siebel Application Server テンプレートです。このテンプレートを使用して、中核となる Siebel アプリケーションの監視をデプロイします。これらの任意指定のコンポーネントを IT 環境にデプロイする場合、Siebel Gateway Server テンプレートおよび Siebel Web Server テンプレートを使用します。

Siebel ソリューション・テンプレートは包括的な Siebel 監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタを設定およびデプロイする時間の削減や、リアルタイムのパフォーマンス・ボトルネックと長期的な傾向の特定に役立ち、実運用システムには最小限のオーバーヘッドのみが追加されます。

注：

- ▶ Siebel ソリューション・テンプレートを使用するには、該当の SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Siebel ソリューションの詳細については、『SiteScope Siebel Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、SiteScope インストールに含まれており、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sdocs%\pdfs\SiteScope_Siebel_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは Siebel ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Siebel ソリューションには、次の重要な Siebel コンポーネントを監視するためのソリューション・テンプレートが含まれています。

▶ **UNIX/Windows の Siebel アプリケーション・サーバ : SiteScope Siebel**

Application Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel アプリケーション・サーバの可用性、使用率の統計情報、サーバ・パフォーマンス統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel 6.x, 7.x, 8.x のアプリケーション・サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。

▶ **UNIX/Windows の Siebel ゲートウェイ・サーバ : SiteScope Siebel Gateway**

Server ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel ゲートウェイ・サーバの可用性およびサーバ統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel ゲートウェイ・サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。これらのソリューション・テンプレートを使用して、サーバ全体のリソースと測定値のモニタをデプロイできます。

▶ **UNIX/Windows の Siebel Web サーバ : SiteScope Siebel Web Server**

ソリューションでは、Windows および UNIX プラットフォームにインストールされている Siebel Web サーバの可用性およびサーバ統計情報を監視できます。これらのソリューション・テンプレートでは、Siebel Web サーバの状況、可用性、およびパフォーマンスをテストする一連のモニタがデプロイされます。

タスク

Siebel ソリューション • テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、サーバ環境を設定する手順と、Siebel ソリューション • テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1242 ページの「前提条件」
- ▶ 1244 ページの「ソリューション • テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1244 ページの「ソリューション • テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

Siebel Application Server ソリューション • テンプレートの場合：

- ▶ (Siebel アプリケーション • サーバが UNIX にインストールされている場合でも) Siebel サーバ • マネージャ • クライアントは、SiteScope が実行されている、または SiteScope マシンにアクセスできる Windows マシンにのみインストールする必要があります。これを行う方法はいくつかあります。詳細については、Siebel サーバ • マネージャ • モニタのドキュメントを参照してください。
- ▶ SiteScope で Siebel サーバ • マネージャ • モニタを設定するには、サーバ • マネージャ • クライアントのインストール • パスを把握しておく必要があります。SiteScope が実行されているマシンにクライアントをインストールする場合、このマシンのパスがインストール • パスになります。リモート • マシンにクライアントがインストールされている場合、そのマシンに対するクライアント実行ファイルの完全修飾パスを把握しておく必要があります。
- ▶ ネットワークで使用できる Siebel アプリケーションの名前を把握しておく必要があります。たとえば、call center や sales などです。
- ▶ Siebel データベース • マシン名、ユーザ名、パスワード、接続 URL、およびデータベース • ドライバを把握しておく必要があります。

- ▶ Siebel サーバにログインするために SiteScope で使用するユーザ名とパスワードを把握しておく必要があります。このユーザには、Siebel サーバの Siebel 管理者権限を付与する必要があります。
- ▶ 次の Siebel サーバ・コンポーネント・グループが有効であることを確認する必要があります。
 - ▶ Siebel コール・センター (CallCenter)
 - ▶ Siebel リモート (Remote)
 - ▶ システム管理 (System)
 - ▶ 補助システム管理 (SystemAux) - Siebel 8.x のみ
- ▶ Siebel システム・コンポーネントの名前とそれに対応する別名の重要なリストを把握しておく必要があります。コンポーネントの名前と別名のリストについては、1245 ページの「[Siebel ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

注： システムと設定要件の詳細については、586 ページの「Siebel Web Server Monitor Overview」および 114 ページの「Database Query Monitor Overview」のセクションを参照してください。これらのモニタ・タイプは、Siebel Application Server ソリューション・テンプレートの一部としてデプロイされます。

Siebel Web Server ソリューション・テンプレートの場合：

- ▶ Siebel Web サーバが実行されているマシンに SiteScope サーバから接続できる必要があります。
- ▶ Siebel Web Server ソリューションは、Microsoft Windows プラットフォームで実行されている Siebel で使用するよう設計されています。
- ▶ テンプレートでは、Siebel Web サーバが Microsoft Internet Information Server (IIS) で実行されていることを想定しています。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Siebel ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1245 ページの「[Siebel ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[Siebel ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Windows および UNIX プラットフォームの Siebel 6.x, 7.x, 8.x アプリケーション・サーバ、Siebel ゲートウェイ・サーバ、Siebel Web サーバを監視するための Siebel ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで [ソリューション テンプレート] を展開して、必要な Siebel ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1239 ページの「Siebel ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

Siebel アプリケーション・サーバ

[メイン設定] には、Windows および UNIX 環境の Siebel アプリケーション・サーバ 6.x, 7.x, 8.x を監視するための次の要素があります。

UI 要素	説明
Application	Siebel アプリケーション・サーバ・マシンの名前。
CG_Auxiliary_System_Management_Alias (Siebel 8.x のみ)	Siebel 補助システム管理コンポーネント・グループの別名。
CG_Auxiliary_System_Management_Name (Siebel 8.x のみ)	Siebel 補助システム管理コンポーネント・グループの名前。
CG_Callcenter_Alias	Siebel CallCenter コンポーネント・グループの別名。
CG_Callcenter_Name	Siebel CallCenter コンポーネント・グループの名前。

UI 要素	説明
CG_System_Management_Alias	Siebel システム管理コンポーネント・グループの別名。
CG_System_Management_Name	Siebel システム管理コンポーネント・グループの名前。
CP_Callcenter_Alias	Siebel CallCenter コンポーネントの別名。
CP_Callcenter_Name	Siebel CallCenter コンポーネントの名前。
CP_Client_Administration_Alias (Siebel 6.x ~ 7.x のみ)	Siebel クライアント管理コンポーネントの別名。
CP_Client_Administration_Nam (Siebel 6.x ~ 7.x のみ)	Siebel クライアント管理コンポーネントの名前。
CP_eService_Alias	Siebel eService コンポーネントの別名。
CP_eService_Name	Siebel eService コンポーネントの名前。
CP_File_System_Manager_Alias	Siebel ファイル・システム・マネージャ・コンポーネントの別名。
CP_File_System_Manager_Name	Siebel ファイル・システム・マネージャ・コンポーネントの名前。
CP_Server_Manager_Alias	Siebel サーバ・マネージャ・コンポーネントの別名。
CP_Server_Manager_Name	Siebel サーバ・マネージャ・コンポーネントの名前。
CP_Server_Request_Broker_Alias	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの別名。
CP_Server_Request_Broker_Name	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの名前。
CP_Server_Request_Processor_Alias	Siebel サーバ要求ブローカ・コンポーネントの別名。
CP_Server_Request_Processor_Name	Siebel サーバ要求プロセッサ・コンポーネントの名前。

UI 要素	説明
Database_Connection_URL	<p>データベース接続の URL。</p> <p>例 : ODBC 接続の名前が test の場合, URL は jdbc:odbc:test になります。</p> <p>接続するデータベースの接続 URL を入力します。構文は、jdbc:oracle:thin:@ <サーバ名または IP アドレス> : <データベース・サーバ・ポート> ;sid= <sid> になります。</p> <p>例 : ポート 1521 を使用して、マシンの ORCL データベースに接続するには、次の接続 URL を使用します。 jdbc:oracle:thin:@206.168.191.19:1521:ORCL.</p> <p>注 : 前述の例のようにコロンと @ 記号を含める必要があります。</p>
Database_Driver	データベース接続に使用するドライバ。
Database_PASSWORD	Siebel データベースにアクセスするために使用するユーザ名のパスワード。
Database_Username	Siebel データベースにアクセスするために SiteScope で使用する必要があるユーザ名。
Enterprise	Siebel Enterprise サーバの名前。
Gateway	Siebel ゲートウェイ・サーバ・マシンの名前。
PASSWORD	Siebel クライアントのパスワード。
SERVER_LIST	Siebel アプリケーション・サーバが実行されているサーバの名前。
Server_Logical_Instance_Name	Siebel サーバの論理名。
Server_Manager_Path	<p>Siebel サーバ・マネージャ・クライアントのローカル・パス。</p> <p>例 : D:\sea703\client\bin.</p>
Siebel_Database_Machine_Name	Siebel データベース・マシンの名前。
Siebel_Disk	Siebel がインストールされているディスク・ドライブの名前。

UI 要素	説明
Siebel_Root_Dir	Siebel の共有ルート・ディレクトリのパス。 例 : Siebel 7.5.2 サーバの共有ルート・ディレクトリは sea752 になります。
ユーザ名	Siebel クライアントのユーザ名。
サイレント・デプロイメント	テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、 < SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%\silent_deployment.log に記録されます。 標準設定値 : 選択されていない
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。 注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。 標準設定値 : 選択されている

Siebel ゲートウェイ・サーバ

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
Siebel_Root_Dir	Siebel のルート・ディレクトリのパス。このディレクトリには、少なくとも管理コンソールがインストールされている必要があります。
Siebel_Disk	Siebel ゲートウェイ・サーバが実行されているディスク・ドライブ。
Siebel_Logical_Instance_Name	Siebel サーバの論理名の値 (UNIX のみ)。
SERVER_LIST	Siebel ゲートウェイ・サーバが実行されているサーバの名前。サーバ名の一部として、UNC パスを示す円記号 (¥) は入力しないでください。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

Siebel Web サーバ

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
アプリケーション	<p>監視する Siebel アプリケーション。</p> <p>例：callcenter_enu。インストールされている Siebel アプリケーションの名前については、Siebel 管理者にお問い合わせください。</p>
Siebel_Disk	<p>Siebel Web サーバがインストールされているディスク・ドライブの名前またはドライブ文字。</p>
Siebel_Root_Dir	<p>Siebel の共有ルート・ディレクトリの名前。</p> <p>例：Windows の Siebel のルート・ディレクトリは sea752 になります。</p>
Siebel_Logical_Instance_Name	<p>Siebel サーバの論理名の値 (UNIX のみ)。</p>
ユーザ名	<p>Siebel Web サーバにログインするために必要な Siebel クライアントのユーザ名。</p>

UI 要素	説明
パスワード	Siebel Web サーバにログインするために必要な Siebel クライアントのパスワード。
SERVER_LIST	Siebel Web サーバ・マシンの名前。選択した Siebel Web サーバを使用して、サーバ選択ページを表示します。[サーバ] ドロップダウン・メニューを使用して、Siebel Web サーバが実行されているサーバを選択します。
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

61

Solaris Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ Solaris Host ソリューションの概要 (1252 ページ)

タスク

- ▶ Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1254 ページ)

参照情報

- ▶ [Solaris Host ソリューションテンプレート] ページ (1256 ページ)

概念

Solaris Host ソリューションの概要

Solaris Host ソリューション・テンプレートは、Solaris ホストの状況、可用性、パフォーマンスをテストする標準設定の測定値で設定された、モニタの収集のデプロイに使用できるテンプレートです。このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Solaris をサポートしています。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「システム要件」を参照してください。

UNIX リソース・モニタの場合、監視対象サーバの 3 つの異なる測定値のデータが表示される、サーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント: 必要なモニタおよび測定値があらかじめ設定されているため、UNIX リソース・モニタを作成する場合はソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。サーバ中心のレポートの生成の詳細については、1322 ページの「サーバ中心のレポートの生成」を参照してください。

Solaris Host ソリューション・テンプレートを使用して、Solaris オペレーティング・システムを包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織がアプリケーションに精通している必要はありません。また、さまざまなパフォーマンス・モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。

。

注：

- ▶ Solaris Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ Solaris Host ソリューションの設定の詳細については、『SiteScope Operating System Host Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sisdocs%\pdfs\SiteScope_OS_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、Operating System のホスト・ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、Solaris のパフォーマンスと状況の次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- ▶ CPU の状態と使用率の詳細
- ▶ メモリの状態と使用率の詳細
- ▶ ファイル・システムの状態と使用率の詳細

タスク

Solaris Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、Solaris Host ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

注：Solaris Host ソリューション・テンプレートでは、各監視対象ホストの UNIX リソース・モニタをデプロイします。これは、サーバ中心のレポートをサポートするために必要となる補足モニタです。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1255 ページの「前提条件」
- ▶ 1255 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1255 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

- ▶ SiteScope サーバは、監視対象 Solaris ホストに接続できる必要があります。
 - ▶ 対象サーバを UNIX リモート・マシンとして SiteScope に追加し、UNIX リモート・テストにパスする必要があります ([**リモート サーバ**] > [**UNIX リモート サーバ**])。ユーザ・インタフェースの詳細については、608 ページの「[新規 UNIX リモート サーバ] / [UNIX リモート サーバの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
-

注：

- ▶ サポートされている Solaris オペレーティング・システムを実行している SiteScope サーバ自体を監視することもできます。
 - ▶ このテンプレートは、SiteScope でサポートされているバージョンの Solaris をサポートしています。詳細については、『HP SiteScope デプロイメント・ガイド』(PDF) の「システム要件」を参照してください。
-

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

Solaris Host ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1256 ページの「[Solaris Host ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[Solaris Host ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Solaris ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開して [Solaris Host] を選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1251 ページの「Solaris Host ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SERVER_LIST	監視するサーバの名前。監視対象サーバがリストにない場合、サーバへの接続プロファイルを定義する必要があります。UNIX 接続プロファイルを作成する手順については、596 ページの「リモート UNIX サーバを管理するための SiteScope の設定方法」を参照してください。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、<SiteScope のルート・ディレクトリ>%logs %silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>

62

VMware Host ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ VMware Host ソリューションの概要 (1260 ページ)

タスク

- ▶ VMware Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1262 ページ)

参照情報

- ▶ [VMware Host ソリューション テンプレート] ページ (1263 ページ)

概念

VMware Host ソリューションの概要

VMware ホスト・サーバの異なる側面を監視するために VMware Host ソリューション・テンプレートを使用できます。これには、VMware ホスト・サーバおよびそのゲスト仮想マシンの CPU、メモリ、ネットワーク、状態、およびストレージに関連するカウンタの監視が含まれます。

VMware Host ソリューション・テンプレートでは、特定の VMware VirtualCenter に対して一連のモニタがデプロイされます。これらのモニタは、VMware Host の監視のベスト・プラクティスを網羅しています。このテンプレートには、VMware ホスト状態、VMware ホスト CPU、VMware ホスト・メモリ、VMware ホスト・ストレージ、および VMware ホスト・ネットワーク・モニタが含まれます。

VMware Host ソリューション・テンプレートは包括的な監視を提供します。SiteScope ユーザまたは IT 組織にアプリケーションの専門知識は必要ありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ VMware Host ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ VMware Host ソリューションの詳細は、『SiteScope VMware Host Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、< **SiteScope のルート・ディレクトリ** > [%sdocs%pdfs%SiteScope_VMware_Host_Best_Practices.pdf](#) にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、VMware Host ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション • テンプレート • モニタ

VMware Host ソリューション • テンプレートでは, VMware Host パフォーマンスの次の側面を対象とするモニタがデプロイされます。

- ▶ VMware ホスト CPU
- ▶ VMware ホスト • メモリ
- ▶ VMware ホスト • ネットワーク
- ▶ VMware ホスト • ストレージ
- ▶ VMware ホスト状態

タスク

VMware Host ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、VMware Host ソリューション・テンプレートの変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1262 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1262 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

注：ブラウズ可能なモニタがテンプレートにデプロイされている場合、選択したパターンに一致するカウンタ数は、**master.config** ファイルの **_maxCounters ForRegexMatch** パラメータ（これは、ブラウズ可能なモニタが持つことができるカウンタ数を制限する **_browsableContentMaxCounters** パラメータに追加されている）によって制限されます。デプロイの間、パターンに一致するカウンタ数がこの値を超えると、この値までのカウンタ数だけが保存されます。これらの両パラメータに同じ値を使用することをお勧めします（これらの両パラメータの標準設定値は 1000 です）。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

VMware Host ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページの項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1263 ページの「[VMware Host ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[VMware Host ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、SiteScope VMware Host ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な VMware Host ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1259 ページの「VMware Host ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
VirtualCenter URL	監視するサーバの VMware VirtualCenter インフラストラクチャの URL。
ユーザ名	VMware vCenter サービス管理者のユーザ名。
パスワード	VMware VirtualCenter サービス管理者のパスワード。
ホスト	監視する VMware ホスト・サーバの名前。

UI 要素	説明
<p>サイレント・デプロイメント</p>	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
<p>リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証</p>	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

63

WebLogic ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ WebLogic ソリューションの概要 (1266 ページ)

タスク

- ▶ WebLogic ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1268 ページ)

参照情報

- ▶ 監視対象の WebLogic モジュールの選択 (1270 ページ)
- ▶ [WebLogic ソリューション テンプレート] ページ (1272 ページ)

概念

WebLogic ソリューションの概要

WebLogic ソリューション・テンプレートを使用すると、標準設定の測定値が設定された一連の WebLogic モニタをデプロイできます。このモニタは、WebLogic アプリケーション・サーバとデプロイしたアプリケーションおよびコンポーネントの状況、可用性、パフォーマンスをテストします。デプロイしたモニタは、サーバ全体の統計（メモリ使用率など）と、個々の J2EE コンポーネントに固有の測定値（特定の EJB のアクティブ化とパッシブ化の数など）をチェックします。

WebLogic ソリューションは、WebLogic 6.x, 7.x, 8.x, 9.x, 10.x サーバからの統計の監視に使用します。このソリューションは、重要なアプリケーション・サーバ測定値を監視する複数のグループを標準設定で自動的に作成しますが、ユーザが監視可能な個々のコンポーネントのすべてまたは一部を選択できるユーザ・インタフェースも備えています。

WebLogic ソリューション・モニタのデプロイメント・プロセスは、高度なカスタマイズが可能で、ユーザがアプリケーション・サーバ上の特定の J2EE コンポーネントを選択して SiteScope でアクティブに監視できます。

WebLogic ソリューション・テンプレートを使用して、WebLogic を包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織が WebLogic の専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ WebLogic ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ WebLogic ソリューションの詳細は、『SiteScope WebLogic Best Practices』のドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sdocs%pdfs %SiteScope_WebLogic_Best_Practices.pdf** にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、WebLogic ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

WebLogic ソリューション・テンプレートは、WebLogic のパフォーマンスと状況について次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- ▶ **サーバ・パフォーマンス統計**：このカテゴリは、WebLogic アプリケーション・サーバの管理インタフェースを介して公開されるサーバ全体の一連のリソースを参照します。
- ▶ **アプリケーション・パフォーマンス統計**：デプロイしたアプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットのすべての測定値を WebLogic ソリューションを介して監視できます。モニタの自動デプロイ先となる J2EE コンポーネントは、ユーザが選択します。WebLogic ベスト・プラクティスに基づいた一連の測定値が、選択した J2EE コンポーネントごとに監視されます。
- ▶ **WebLogic ソリューションの測定値**：監視可能なコンポーネントのリストについては、『SiteScope WebLogic Best Practices』ドキュメントを参照してください。

タスク

WebLogic ソリューション • テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、WebLogic ソリューション • テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1268 ページの「前提条件」
- ▶ 1268 ページの「ソリューション • テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1269 ページの「ソリューション • テンプレートのデプロイメント値の入力」
- ▶ 1269 ページの「監視対象の WebLogic モジュールの選択」

1 前提条件

WebLogic ソリューション • テンプレートは、ユーザ • インタフェースから選択したモジュールごとに WebLogic アプリケーション • サーバ • モニタをデプロイします。このモニタは、Java JMX インタフェースを使用して WebLogic サーバのランタイム MBean にアクセスします。MBean は、パフォーマンス測定値を保持するコンテナです。SiteScope が MBean を監視できるようにするには、WebLogic サーバに特定の権限の設定が必要になる場合があります。SiteScope モニタ用の WebLogic サーバへのアクセス設定の概要については、SiteScope の『Monitor Reference』の「WebSphere Application Server Monitor Overview」を参照してください。

2 ソリューション • テンプレートのデプロイ

ソリューション • テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション • テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

WebLogic ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページで各項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1272 ページの「[WebLogic ソリューション テンプレート] ページ」を参照してください。

4 監視対象の WebLogic モジュールの選択

EJB 監視のタイプごとに監視される測定値については、1270 ページの「監視対象の WebLogic モジュールの選択」を参照してください。

参照情報

監視対象の WebLogic モジュールの選択

WebLogic ソリューションには階層リストが表示され、そこからユーザが WebLogic モニタのデプロイ先とするモジュールを選択できます。このリストは次の 2 つのメイン・セクションに分類されています。

- ▶ サーバ単位のリソース
- ▶ アプリケーション別に編成される J2EE コンポーネント

これらのカテゴリのモジュールの中には、システムの重要なコンポーネントを表すため、標準設定で自動的に選択されるものがあります（アプリケーション・サーバの JVM 統計など）。それ以外のモジュールは、自動的に選択されません。このため、ユーザはこのソリューションのデプロイメントを、特定のアプリケーション、特定タイプの EJB、一連のサーブレットや Web アプリケーション、その他何らかのアプリケーション・サーバの側面に特化するようにカスタマイズできます。

このモジュールのリストのほとんどの部分は、直感的に編成されています。アプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットの階層は、WebLogic 管理コンソールに表示されるこれらのエンティティの編成とよく似ています。ほとんどの場合、モジュールを選択すると、関連するすべての測定値を持つモニタが、WebLogic サーバの対応する部分にデプロイされます。ただし、監視対象の EJB を選択する場合、EJB は 3 つの測定値タイプ（プール、トランザクション、キャッシュ）に従って分類されています。これには次の 2 つの理由があります。(1) 警告と編成を目的とする場合、WebLogic モニタ単位よりも特定の EJB の 1 つの側面を監視できる方が利便性が高く、(2) すべての EJB がこれら 3 つの測定値タイプのすべてを使用できるとは限りません。

次に、EJB 監視のタイプごとに監視される測定値について簡単に説明します。

- ▶ **EJB 単位のトランザクション統計** : この EJB モニタのカテゴリには、EJB に対して実行されたトランザクションに関する測定値が含まれます。測定値には、ロールバックされたトランザクション数、タイムアウトしたトランザクション数、正常に確定されたトランザクション数などがあります。
- ▶ **EJB 単位のプール統計** : この EJB モニタのカテゴリには、EJB のプールに関連する測定値が含まれます。この見出しの下にある EJB をユーザが選択すると、プールから Bean インスタンスを取得しようとして失敗した回数、プール内で現在使用可能なインスタンス数、現在インスタンスを待機中のスレッド数、アプリケーション以外の例外が原因で Bean インスタンスが破棄された回数など、多くの有用な測定値が監視されます。
- ▶ **EJB 単位のキャッシュ統計** : キャッシュ統計には、特定の EJB のキャッシュに関する測定値が含まれます。この見出しの下にある EJB を監視対象に選択すると、キャッシュ・ヒット数とキャッシュ不在数、EJB のアクティブ化数とパッシブ化数などの測定値が監視されます。

ポップアップ・ウィンドウでモジュールを選択し終えたら、[Module Selection] ウィンドウの下部までスクロールし、[Select Modules] ボタンをクリックします。これにより、ブラウザのメイン・ウィンドウが更新され、選択したモジュールのリストが表示されます。選択したモジュールを確認し、モニタの作成対象外にするモジュールがあれば削除します。

ブラウザのメイン・ウィンドウに表示されている選択したモジュールのリストに問題がなければ、[送信] をクリックします。

[WebLogic ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、Oracle WebLogic 6.x, 7.x, 8.x, 9.x, 10.x アプリケーション・サーバを監視するための WebLogic ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な WebLogic ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1265 ページの「WebLogic ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

WebLogic 9.x-10.x

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
WEBLOGIC_URL	<p>WebLogic 9.x または 10.x アプリケーション・サーバの URL。</p> <p>標準設定値 : service:jmx:rmi:///jndi/iiop:// <ローカル・ホスト> :7001/weblogic.management.mbeanservers.runtime</p> <p><ローカル・ホスト> は、WebLogic アプリケーション・サーバ 9.x または 10.x を実行するマシンの名前です。</p>
カウンタ	このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。
カウンタの取得	[カウンタの取得] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。

UI 要素	説明
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ> %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

WebLogic 6.x, 7.x, 8.x

[メイン設定] には次の要素が含まれています。

UI 要素	説明
WEBLOGIC_PORT	<p>WebLogic サーバが応答するポート番号。</p> <p>標準設定値 : 7001</p>
WEBLOGIC_PASSWORD	<p>WebLogic サーバへのログインに必要なパスワード。</p>
WEBLOGIC_USERNAME	<p>WebLogic サーバへのログインに必要なユーザ名。</p>
WEBLOGIC_SERVER	<p>WebLogic が実行されているサーバの名前またはアドレス。</p>
WEBLOGIC_TIMEOUT	<p>データ要求が WebLogic サーバに到達するまで待機する秒数。</p> <p>標準設定値 : 180</p>

UI 要素	説明
WEBLOGIC_JAR_FILE	<p>SiteScope マシンの weblogic.jar ファイルへの絶対パス。このファイルは, SiteScope サーバにインストールされている必要があり, WebLogic サーバからダウンロードできます。</p> <p>例 : c:\bea\weblogic7\lib\ext\weblogic.jar。</p>
カウンタ	<p>このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。</p>
カウンタの取得	<p>[カウンタの取得] ダイアログ・ボックスが開き, 監視対象のカウンタを選択できます。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され, SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより, テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は, < SiteScope のルート・ディレクトリ > \logs\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して, テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注 : このオプションを選択すると, リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>

64

WebSphere ソリューション・テンプレート

本章の内容

概念

- ▶ WebSphere ソリューションの概要 (1276 ページ)

タスク

- ▶ WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法 (1278 ページ)

参照情報

- ▶ [WebSphere ソリューション テンプレート] ページ (1280 ページ)

概念

WebSphere ソリューションの概要

WebSphere ソリューション・テンプレートを使用すると、標準設定の測定値が設定された一連の WebSphere モニタをデプロイできます。このモニタは、IBM WebSphere アプリケーション・サーバ 5.x および 6.x の可用性、サーバ統計、デプロイした J2EE コンポーネントをテストします。このソリューション・テンプレートを使用して、サーバ単位のリソースと測定値（スレッド・プールや JVM の測定値など）のモニタをデプロイできます。また、このソリューション・テンプレートを使用して、デプロイした EJB、Web アプリケーション、サーブレットのモニタも作成できます。

WebSphere ソリューション・モニタのデプロイメント・プロセスは、高度なカスタマイズが可能で、ユーザがアプリケーション・サーバの特定の J2EE コンポーネントを選択して SiteScope でアクティブに監視できます。

WebSphere ソリューション・テンプレートを使用して、WebSphere を包括的に監視できます。SiteScope ユーザや IT 組織が WebSphere の専門家である必要はありません。また、モニタの設定やデプロイの時間が短縮し、パフォーマンスのボトルネック（リアルタイムおよび長期間）の特定が容易になります。さらに、実運用システムにはほとんど負荷がかかりません。

注：

- ▶ WebSphere ソリューション・テンプレートを使用するには、適切な SiteScope オプション・ライセンスが必要です。ソリューション・ライセンスの詳細については、HP の営業担当にお問い合わせください。
 - ▶ WebSphere ソリューションの詳細は、『SiteScope WebSphere Best Practices』ドキュメントを参照してください。このドキュメントは SiteScope インストールに含まれており、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %sisdocs%\pdfs\SiteScope_WebSphere_Best_Practices.pdf にあります。このドキュメントはパスワードで保護されています。パスワードは、WebSphere ソリューション・ライセンス・キーとともに HP から提供されます。
-

ソリューション・テンプレート・モニタ

WebSphere ソリューション・テンプレートは、WebSphere のパフォーマンスと状況について次の側面を対象とするモニタをデプロイします。

- ▶ **サーバ・パフォーマンス統計**：このカテゴリは、WebSphere アプリケーション・サーバの管理インタフェースを介して公開されるサーバ単位の一連のリソースを参照します。
- ▶ **アプリケーション・パフォーマンス統計**：デプロイしたアプリケーション、EJB、Web アプリケーション、サーブレットのすべての測定値を WebSphere ソリューションを介して監視できます。モニタの自動デプロイ先となる J2EE コンポーネントは、ユーザが選択します。WebSphere ベスト・プラクティスに基づいた一連の測定値が、選択した J2EE コンポーネントごとに監視されます。
- ▶ **WebSphere アプリケーション・サーバ・ソリューションの測定値**：監視可能なコンポーネントのリストについては、『SiteScope WebSphere Best Practices』ドキュメントを参照してください。

タスク

WebSphere ソリューション・テンプレートのデプロイ方法

このタスクでは、WebSphere ソリューション・テンプレートのサーバ環境を設定し、変数を入力する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1278 ページの「前提条件」
- ▶ 1279 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1279 ページの「ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力」

1 前提条件

WebSphere サーバ環境は、使用される環境に基づいて設定する必要があります。詳細については、『Monitor Reference』の「WebSphereApplication Server Monitor Overview」を参照してください。

注: 標準設定では、WebSphere 6.x アプリケーション・サーバ・ソリューション・テンプレートは内部的な JVM メカニズムを使用します。そのため、このソリューション・テンプレートを使用する場合、内部 Java を使用するよう監視環境を設定する必要があります。詳細については、838 ページの「Configure the WebSphere 6.0x Server Environment Using Internal Java」および 845 ページ「Configure the WebSphere 6.1x Server Environment Using Internal Java」を参照してください。

2 ソリューション・テンプレートのデプロイ

ソリューション・テンプレートをデプロイする手順の概要については、1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」を参照してください。

3 ソリューション・テンプレートのデプロイメント値の入力

WebSphere ソリューション・テンプレートの [デプロイメント値] ページで各項目を入力します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1280 ページの「[WebSphere ソリューションテンプレート] ページ」を参照してください。

参照情報

[WebSphere ソリューション テンプレート] ページ

このページでは、IBM WebSphere アプリケーション・サーバ 5.x および 6.x を監視するための WebSphere ソリューション・テンプレートをデプロイできます。

アクセス方法	[テンプレート] コンテキストを選択します。テンプレート・ツリーで、[ソリューション テンプレート] を展開し、必要な WebSphere ソリューション・テンプレートを選択します。
関連タスク	1086 ページの「SiteScope ソリューション・テンプレートのデプロイ方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1275 ページの「WebSphere ソリューション・テンプレート」 ▶ 95 ページの「テンプレート・ツリー」

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
WEBSHERE_SERVER	WebSphere アプリケーションが実行されているサーバの名前。サーバ名の一部として UNC パスを示すために円記号 (¥) を入力しないでください。
WEBSHERE_PORT	WebSphere サーバのポート番号。これは、WebSphere 5.x の SOAP ポートである必要があります。 標準設定値 : 8880

UI 要素	説明
WEBSPPHERE_USER_NAME	<p>SiteScope が WebSphere アプリケーション・サーバへのログオンに使用するユーザ名。</p> <p>WebSphere 6.x では、ソリューション・テンプレートでグローバル・セキュリティはサポートされていません。つまり、任意のテキストを入力できますが、テキスト・ボックスを空白のままにすることはできません。グローバル・セキュリティの作業が必要な場合は、このテンプレートを完成させます。WebSphere モニタを編集し、[モニタ設定] 表示枠で、グローバル・セキュリティの各ボックスを更新します ([トラストストア], [トラストストアのパスワード], [キーストア], [キーストアのパスワード])。</p>
WEBSPPHERE_PASSWORD	<p>SiteScope で WebSphere サーバへのログオンに使用するパスワード。</p> <p>WebSphere 6.x では、ソリューション・テンプレートでグローバル・セキュリティはサポートされていません。つまり、任意のテキストを入力できますが、テキスト・ボックスを空白のままにすることはできません。グローバル・セキュリティの作業が必要な場合は、このテンプレートを完成させます。WebSphere モニタを編集し、[モニタ設定] 表示枠で、グローバル・セキュリティの各ボックスを更新します ([トラストストア], [トラストストアのパスワード], [キーストア], [キーストアのパスワード])。</p>
WEBSPPHERE_CLIENT_PROPERTIES_FILE	<p>クライアント・プロパティ・ファイル。 標準設定値 : /properties/soap.client.props</p>
WEBSPPHERE_DIRECTORY	<p>WebSphere アプリケーション・サーバからの /java および /lib サブディレクトリが含まれる WebSphere ディレクトリへのパス。</p> <p>WebSphere 6.x では、このディレクトリには /profiles サブディレクトリも含まれている必要があります。このサブディレクトリには、グローバル・セキュリティに必要なキー・ストア・ファイルとトラスト・ストア・ファイルがすべて含まれています。/profiles サブディレクトリ内のサーバ・プロファイルは、default という名前にする必要があります。サーバ・プロファイルに別の名前が付いている場合は、名前を「default」に変更します。</p>
WEBSPPHERE_VERSION (WebSphere 6.x ソリューションのみ)	<p>WebSphere 6.x ソリューション・テンプレート (6.0x または 6.1x) を使用している場合、WebSphere のバージョンを選択します。</p>

UI 要素	説明
WEBSHERE_USE_EXTERNAL_JVM	<p>外部 JVM を使用して監視が行えるようにします。標準設定では、WebSphere モニタは内部 JVM を使用します。外部 JVM は大量のリソースを消費し、起動に時間がかかる上、エラー処理が適切に行われません。</p> <p>注：外部 JVM を使用する場合は、証明書管理を介して追加される証明書は使用できません。</p> <p>標準設定値： false</p>
カウンタ	<p>このモニタでチェックするサーバのパフォーマンス・カウンタを表示します。[カウンタの取得] ボタンを使用してカウンタを選択します。</p>
カウンタの取得	<p>[カウンタの取得] ダイアログ・ボックスが開き、監視対象のカウンタを選択できます。</p>
サイレント・デプロイメント	<p>テンプレート・デプロイメント要求がキューに送信され、SiteScope によってデプロイメントがバックグラウンドで処理されます。これにより、テンプレート・デプロイメントの処理が終了するまで待機せずに SiteScope を継続して使用できます。送信されたすべての要求と対応するデプロイメントの結果は、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs%\silent_deployment.log に記録されます。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p>
リモート・サーバでモニタ・プロパティを検証	<p>テンプレートがデプロイされるリモート・サーバに対して、テンプレートのモニタの設定プロパティが正しいかどうかを検証されます。</p> <p>注：このオプションを選択すると、リモート接続のためにデプロイメント時間が遅くなります。</p> <p>標準設定値： 選択されている</p>

第 X 部

SiteScope ダッシュボード

65

SiteScope ダッシュボードを使った作業

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope ダッシュボードの概要 (1286 ページ)
- ▶ ダッシュボード・フィルタの概要 (1287 ページ)
- ▶ モニタの状態の確認 (1288 ページ)
- ▶ SiteScope ツールへのアクセス (1289 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法 (1290 ページ)
- ▶ SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法 (1292 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース (1295 ページ)

概念

SiteScope ダッシュボードの概要

SiteScope 監視では、システムの可用性とパフォーマンスが視覚的にリアルタイムに表示されます。SiteScope モニタを設定して、さまざまなインフラストラクチャ・コンポーネント（Web、アプリケーション、データベース、ファイアウォール・サーバなど）の測定値を収集します。次に、SiteScope ダッシュボードで表示するために状態と測定値が集計されます。

ダッシュボードは SiteScope モニタ・ツリー階層にリンクしています。ダッシュボードに表示されるデータは、モニタ・ツリーで選択したコンテキストを表しています。最上位レベルは、SiteScope ノードおよび適用可能なモニタ・グループです。[ダッシュボード] ビューに表示される最下位レベルの要素は、個々の SiteScope モニタとその測定値です。

ダッシュボードには、モニタ情報の表示をカスタマイズできる機能があります。この機能では、名前付きフィルタ設定を定義して、定義済みの条件に一致するデータのみを表示できます。また、さまざまなデータ表示オプションを選択することもできます。

ダッシュボードには、モニタ要素の階層の移動、モニタの手動実行、モニタの無効化、警告定義へのアクセスを行うために使用できるハイパーリンクやメニューもあります。

ダッシュボード・フィルタの概要

次の条件を使用して、モニタまたはグループをフィルタできます。

- ▶ 特定のテキスト文字列を含むモニタまたはグループの名前
- ▶ 特定のホストやサーバを監視するモニタまたはグループ
- ▶ エラーを報告するモニタまたはグループ
- ▶ 特定のテキスト文字列を含む測定値の結果

フィルタは主にモニタに適用されます。フィルタ条件は、グループ、警告、レポートには適用されません。ビュー設定を使用してほかの要素をフィルタできます。詳細については、116 ページの「SiteScope オブジェクトの検索とフィルタ処理の概要」を参照してください。

フィルタはすべての [ダッシュボード] ビューに適用されます。つまり、フィルタ条件および選択したノードによっては、一部のモニタが表示されない可能性があります。通常、フィルタは [子孫モニタをすべて表示] ビュー・オプションとともに使用することが最適です。フィルタは、[ダッシュボードフィルタ] ウィンドウでフィルタ条件を変更またはリセットするまでアクティブな状態が維持されます。

ダッシュボード・フィルタは、SiteScope ツリー・フィルタとは異なります。ダッシュボード・フィルタまたは SiteScope ツリー・フィルタのいずれかを使用して、特定のモニタ・タイプのみが表示されるようにノードをフィルタできます。ただし、ダッシュボード・フィルタは、現在選択されているツリー・フィルタ設定の結果に適用されます。ツリー・フィルタ設定がアクティブな場合、SiteScope 環境にフィルタ条件に一致するモニタが存在していても、ダッシュボード・フィルタでこのモニタが検出されない可能性があります。

フィルタ設定を保存するには、フィルタ設定を定義して、ダッシュボードのお気に入りとしてビューを保存します。詳細については、117 ページの「フィルタ設定の定義と管理」を参照してください。

ダッシュボード・フィルタの設定の詳細については、1310 ページの「[ダッシュボードフィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

モニタの状態の確認

確認機能を使用して、SiteScope によって検出されたシステムおよびネットワーク・インフラストラクチャの問題の解決を追跡できます。この機能を使用すると、問題が確認された時間、実行されたアクション、実行したユーザが SiteScope によって記録されます。

この機能では、モニタの警告を一時的に無効化することもできます。これは、問題に対処している間、警告の重複を回避する場合に便利です。また、複数のユーザが SiteScope を使用してシステムの可用性を管理する場合、確認機能を単純な問題のチケット・システムとして使用することもできます。

注： 確認機能は、[ダッシュボード] ビューでのみ使用できます。確認アイコンは、ダッシュボード [詳細ビュー] にのみ表示されます。


個々のモニタまたはモニタ・グループに確認を追加できます。モニタに追加された確認は、そのモニタにのみ適用されます。確認で選択した警告の無効化条件は、そのモニタ・インスタンスにのみ適用されます。グループを確認すると、確認の詳細と警告の無効化条件がグループ内のすべてのモニタに適用されます。グループに適用された確認は、グループのモニタごとに編集または削除できます。

モニタまたはグループに適用できる確認は 1 つのみです。これはいつでも適用できます。確認のコメントとインジケータは、該当の警告の無効化スケジュールの期限が切れても、削除されるまでインタフェースに表示されたままになります。

確認のデータおよびコメントは、SiteScope マシンのログ・ファイルに書き込まれます。確認を追加、編集、削除するたびに新しいログ・エントリが作成されます。問題のモニタまたはグループが確認されるか、確認済みの状態がクリアされると、確認ログでその履歴を表示できます。現在適用されている確認がない場合でも、項目の確認ログを表示できます。

[確認応答の追加] のユーザ・インタフェースの詳細については、1306 ページの「[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope ツールへのアクセス

SiteScope には、監視環境のテストに使用できる多数のツールがあります。これらのツールを使用して、監視対象となるシステムに照会し、アクションの詳細な結果を表示できます。これには、簡単なネットワーク接続のテストや、外部のデータベースまたはサービスにアクセスするためのログイン認証の検証などがあります。これらのツールは、ダッシュボード・ツールバーにあるモニタの [ツール]  ボタンをクリックして直接実行できます（特定のモニタの診断ツールが使用できる場合）。

使用可能な各種ツールの詳細については、160 ページの「SiteScope ツールの概要」を参照してください。

注： [SiteScope ツール] オプションは、個々のモニタに対してのみ使用できます。

タスク

SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法

このタスクでは、レイアウトやフィルタを設定して SiteScope ダッシュボードの表示および内容をカスタマイズする手順や、ビューをお気に入りに保存する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1290 ページの「ダッシュボード・レイアウトの設定」
- ▶ 1290 ページの「ダッシュボード・フィルタの選択および設定（任意指定）」
- ▶ 1291 ページの「お気に入りへのビューの保存」

1 ダッシュボード・レイアウトの設定

[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスの設定を使用して、グループおよびモニタの情報の表示をカスタマイズします。

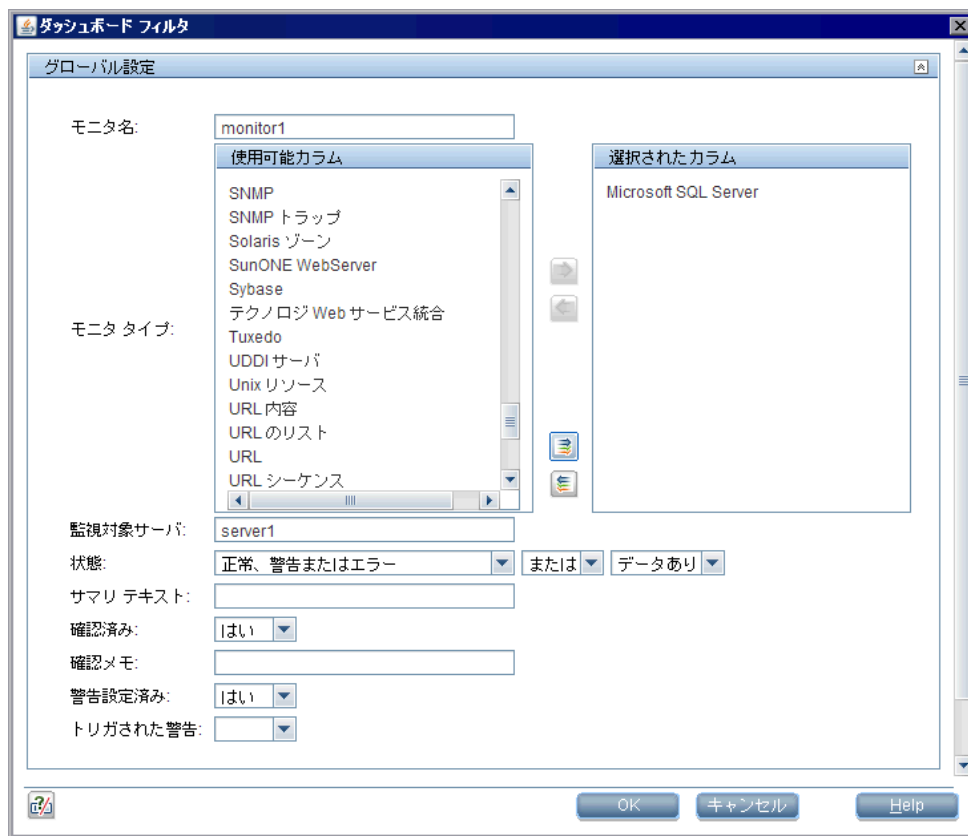
ユーザ・インタフェースの詳細については、1314 ページの「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

2 ダッシュボード・フィルタの選択および設定（任意指定）


[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスにあるオプションを選択して、ダッシュボード・フィルタを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1310 ページの「[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：



3 お気に入りへのビューの保存

ダッシュボード・フィルタおよびレイアウト設定を定義したら、**[お気に入りの管理]**  ボタンの横の矢印をクリックして **[お気に入りに保存]** を選択して、お気に入りリストで名前付きのお気に入りビューとして保存できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1308 ページの「[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

🔑 SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法

このタスクでは、SiteScope ダッシュボードでデータを分析する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1292 ページの「モニタや測定値の状態および可用性を表示するためのドリルダウン」
- ▶ 1293 ページの「設定された警告および起動された警告の表示」
- ▶ 1293 ページの「モニタの確認」
- ▶ 1294 ページの「Microsoft Windows / UNIX サーバのリソースの監視」
- ▶ 1294 ページの「モニタ履歴の表示」

1 モニタや測定値の状態および可用性を表示するためのドリルダウン


ダッシュボードの [現在の状態] ビューで SiteScope データを表示中に、モニタ・ツリーをドリルダウンしてモニタや測定値の状態および可用性を表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1296 ページの「SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー」を参照してください。

例：

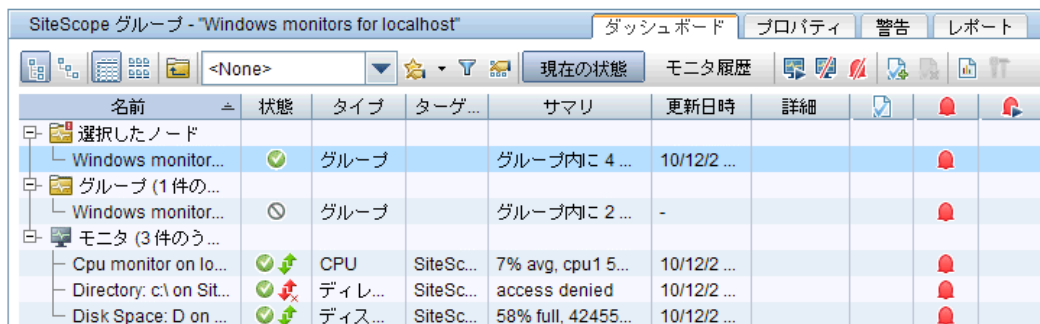
名前	状態	タイプ	ター...	サマリ	更新日時	詳細
選択したノード						
FTP on Localhost	🟢	ポート	loca...	0.017 s...	10/12/...	
カウンタ (3 件の...						
port response	🟡			220		
round trip time	🟡			0.02 sec		
status	🟢			200		











2 設定された警告および起動された警告の表示

設定された警告および起動された警告の列で警告のデータを表示できます。モニタに警告が設定されている場合、**[設定された警告]** アイコン  をダブルクリックして設定された警告のリストを表示し、警告を選択して警告のプロパティを表示または編集できます。


ユーザ・インタフェースの詳細については、1296 ページの「SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー」を参照してください。

例：



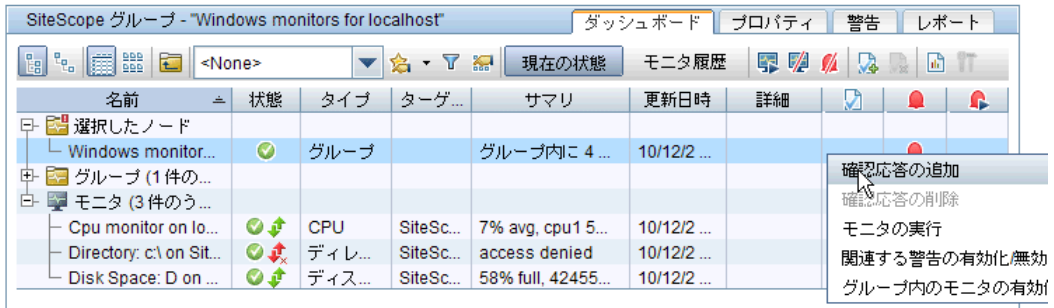
名前	状態	タイプ	ターゲ...	サマリ	更新日時	詳細			
選択したノード									
Windows monitor...		グループ		グループ内に 4 ...	10/12/2 ...				
グループ (1 件の...									
Windows monitor...		グループ		グループ内に 2 ...	-				
モニタ (3 件のう...									
Cpu monitor on lo...		CPU	SiteSc...	7% avg, cpu1 5...	10/12/2 ...				
Directory: c:\ on Sit...		ディレ...	SiteSc...	access denied	10/12/2 ...				
Disk Space: D on ...		ディス...	SiteSc...	58% full, 42455...	10/12/2 ...				

3 モニタの確認

モニタの状態を確認するには、**[確認応答の追加]**  アイコンをクリックするか、コンテキスト・メニューから **[確認応答の追加]** を選択し、**[グループ内のモニタを確認]** ダイアログ・ボックスで詳細を入力します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1306 ページの「[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

例：



4 Microsoft Windows / UNIX サーバのリソースの監視

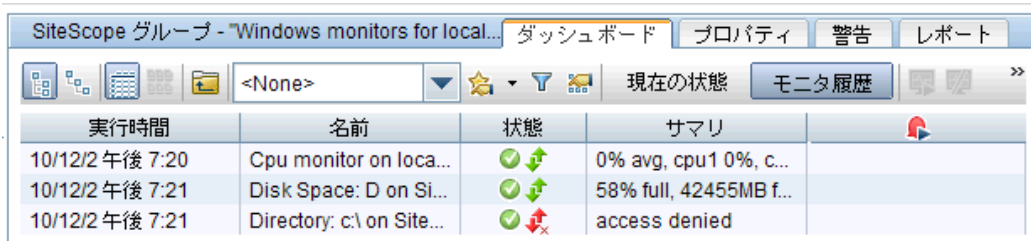
Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタを作成して、Windows サーバまたは UNIX サーバを監視し、サーバ中心のレポートを生成できます。タスクの詳細については、1324 ページの「サーバ中心のレポートの作成方法」を参照してください。

5 モニタ履歴の表示

[一般プリファレンス] でモニタ履歴を有効化および設定します。ユーザ・インタフェースの詳細については、702 ページの「ダッシュボード・モニタ履歴表示オプション」を参照してください。

モニタ履歴を表示するには、SiteScope ダッシュボードの [モニタ履歴] ボタンをクリックします。ユーザ・インタフェースの詳細については、1305 ページの「SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー」を参照してください。

例：



参照情報

SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー (1296 ページ)
- ▶ SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー (1305 ページ)
- ▶ [グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックス (1306 ページ)
- ▶ [ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス (1308 ページ)
- ▶ [ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス (1309 ページ)
- ▶ [ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス (1310 ページ)
- ▶ [ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス (1314 ページ)
- ▶ 診断ツール (1317 ページ)
- ▶ [グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス (1319 ページ)






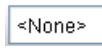
SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー




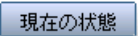
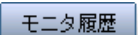

SiteScope によって監視されているインフラストラクチャ要素の現在のパフォーマンス・データが表示され、フィルタの定義に使用する機能にアクセスできます。ダッシュボードには、モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。







ダッシュボードでは、サーバ中心のレポート、事前に設定されたクイック・レポート、モニタの確認の状態、モニタ・ツール、SiteScope 状況ステータス、モニタ履歴情報にアクセスできます。また、モニタや警告を有効化 / 無効化することもできます。




アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーでオブジェクトを選択し、右側の表示枠の [ダッシュボード] タブをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 標準設定では、選択した要素の [ダッシュボード] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数は 4000 で、[アイコン ビュー] で表示できるアイコンの最大数は 700 です。これらの数を変更するには、[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスで値を変更します。ただし、標準設定を使用することをお勧めします。 ▶ 選択した要素の行数が、[ダッシュボード] テーブルに表示できる最大数よりも多い場合、さらに限定的なツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1290 ページの「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 ▶ 1292 ページの「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	1286 ページの「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	子グループと子モニタを表示 ：選択したノードの直接の子である要素のみが表示されます。グループおよびモニタの状態情報領域に、サブグループとモニタが個別のセクションで表示されます。
	すべての子孫モニタを表示 ：選択したノードのすべての子孫モニタが表示されます。[アイコン ビュー] オプションが選択されている場合、子孫モニタのアイコンと名前のみが表示されます。
	詳細ビュー ：グループおよびモニタが表形式のリストとして表示されます。表の各行には要素の名前や状態などの情報が配置されます。
	アイコン ビュー ：グループおよびモニタが一連の状態アイコンとして表示されます。アイコンの下には要素の名前が表示されます。
	上へ ：モニタ・ツリーの 1 つ上のレベルに移動します。このオプションは、SiteScope (ツリーの最上位レベル) では使用できません。
	<p>お気に入りボックスには、ダッシュボード・フィルタとレイアウト設定の既存のお気に入りビューのドロップダウン・リストがあります。[現在の状態] ビューまたは [モニタ履歴] ビューで表示するビューを選択できます。</p> <p>注：お気に入りフィルタはモニタ・レベルで機能するため、グループはフィルタされません。[すべての子孫モニタを表示] ビューで作業している場合、フィルタに一致していない状態のグループが表示されることがあります。フィルタのモニタのみを表示するには、[すべての子孫モニタを表示] ビューを代わりに使用します。</p> <p>標準設定値：<なし></p>

UI 要素	説明
	<p>お気に入りの管理：矢印をクリックして、次のオプションを選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ お気に入りに保存：[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックスが開き、現在のダッシュボード・フィルタとレイアウト設定をお気に入りにビューとして保存できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1308 ページの「[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ お気に入りを削除：[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックスが開き、既存のお気に入りビューを削除できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1309 ページの「[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	<p>ダッシュボード・フィルタ：[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1310 ページの「[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>ダッシュボードの設定：[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1314 ページの「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>現在の状態：モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタのテーブルが表示されます。</p>
	<p>モニタ履歴：過去 24 時間分のモニタ、モニタ・グループ、警告の情報が表示されます。時間、モニタの状態、データ・エントリ数を使用してこの情報をフィルタします。</p> <p>モニタ履歴の表示の詳細については、1305 ページの「SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー」を参照してください。</p>
	<p>モニタの実行：選択したモニタ、またはグループ内に設定されている任意のモニタを実行します。結果を表示する情報ウィンドウが開きます。</p>



UI 要素	説明
	<p>グループ内のモニタの有効化 / 無効化 : モニタ・プロパティの設定に関係なく、選択したモニタまたはグループ内のすべてのモニタを有効化または無効化する [グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスを開きます。[モニタを無効化] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [モニタを有効化] を選択するまでモニタは無効になります。[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] のユーザ・インタフェースの詳細については、1319 ページの「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>関連する警告の有効化 / 無効化 : [関連する警告の有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスが開き、モニタやグループ内の全モニタに関連付けられているすべての警告を有効化または無効化できます。詳細については、482 ページの「関連する警告の有効化 / 無効化」を参照してください。</p>
	<p>確認応答の追加 : [グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックスが開き、確認応答をモニタに追加できます。[グループ内のモニタを確認] のユーザ・インタフェースの詳細については、1306 ページの「[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>確認応答の削除 : モニタの確認応答を削除します。</p>
	<p>クイック・レポート : 選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope 管理レポートが作成されます。レポートの詳細については、1542 ページの「クイック・レポート」を参照してください。</p>
	<p>ツール : 選択した監視環境をテストする診断ツールが開きます。このボタンは、適切な診断ツールがあるモニタ・インスタンスでのみ使用できます。SiteScope ツールの詳細については、1317 ページの「診断ツール」を参照してください。</p>








UI 要素	説明
	<p>確認列 : SiteScope ユーザがモニタの現在の状態を確認したことや、そのモニタに関連付けられている警告アクションを一時的に無効化した可能性があることを示します。このアイコンは、ダッシュボード [詳細ビュー] にのみ表示されます。ポインタをアイコンの上に移動すると、ツールチップとして確認応答情報が表示されます。アイコンをダブルクリックすると、[確認応答の編集] ダイアログ・ボックスが開きます。このトピックの詳細については、1288 ページの「モニタの状態の確認」を参照してください。[確認の追加 / 編集] ダイアログ・ボックスの詳細については、1306 ページの「[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>設定された警告列 : 1 つ以上の警告がグループまたはモニタに関連付けられていることを示します。アイコンをダブルクリックすると、設定された警告がツールチップに表示されます。リストから該当の警告定義名を選択すると、[警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、警告プロパティを表示または編集できます。このトピックの詳細については、1415 ページの「SiteScope 警告」を参照してください。</p>
	<p>トリガされた警告列 : モニタの 1 つ以上の警告が起動されたことを示します。起動された警告がない場合、アイコンは表示されません。起動された警告が 1 つの場合、特定の警告タイプを表すアイコンが表示されます。アイコンのリストについては、1465 ページの「警告アクション」を参照してください。</p> <p>起動された警告が複数の場合、複数の警告を表すアイコンが表示されます。警告アイコンをクリックすると、警告の詳細が表示されます。トリガされた警告列は、テーブルにモニタが含まれている場合にのみ表示されます。このトピックの詳細については、1415 ページの「SiteScope 警告」を参照してください。</p>
<p><オブジェクト・テーブル></p>	<p>モニタ・ツリーで強調表示されている要素またはパスに表示されている要素のグループおよびモニタが表示されます。各グループまたはモニタのノードをダブルクリックして、子ノードおよびモニタに移動できます。モニタをダブルクリックすると、そのモニタのパフォーマンス・カウンタが表示されます。</p>

UI 要素	説明
名前	<p>モニタ・インスタンスまたはグループの表示名（別名）。新規グループを作成する場合、その名前を入力します。新規モニタを作成する場合、使用可能なモニタのリストからそのタイプを選択します。[名前] ボックスでこのタイプを上書きしない場合、モニタはそのモニタ・タイプで識別されます。このモニタを識別しやすくする別名を入力することもできます（任意指定）。</p>
状態	<p>[ダッシュボード] ビューの各ノードに色付きのアイコンが表示されます。このアイコンは、該当のコンポーネントに割り当てられている操作の状態（現在のパフォーマンス・レベルに対応します）を表しています。</p> <p>また、[ダッシュボード] ビューには要素ごとに色付きの矢印も表示されます。この矢印は、モニタのデータの可用性の状態を表しています。</p> <p>アイコンの上にマウス・ポインタを置くと、モニタの状態および可用性を表示できます。モニタの状態および可用性のアイコンの詳細については、後述の「状態および可用性のレベル」を参照してください。</p>
タイプ	<p>表示されるモニタのタイプ。モニタ・タイプは、モニタ・インスタンスの作成時に [新規モニタ] ダイアログ・ボックスで選択します。</p>
ターゲット	<p>[ターゲット] 列には、監視対象オブジェクトがあるリモート・サーバの名前が表示されます（該当するサーバが存在する場合）。たとえば、モニタ・タイプが CPU の場合、監視する CPU が搭載されているサーバの名前が対象になります。</p> <p>サーバをモニタ・ツリーに追加したときに [名前] ボックスに入力した内容に応じて、[ターゲット] 列に表示される名前は、サーバのシステム ID か、ユーザが割り当てた名前（別名）のいずれかになります。</p> <p>グループに Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタが含まれている場合、[ターゲット] 列のサーバ名はリンクとして表示されます。リンクをクリックすると、サーバのサーバ中心のレポートが開きます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1321 ページの「サーバ中心のレポート」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
サマリ	<p>モニタの場合、[サマリ] 列には、モニタによってレポートされた最新の測定値の結果が表示されます。モニタ・タイプによっては、複数の測定値が含まれていることがあります。モニタ・グループの場合、サマリにはグループ内のモニタの数や、エラー状態を報告したモニタの数（存在する場合）が表示されます。</p> <p>モニタが無効になっている場合、無効の状態（[手動で無効化されています]、[disabled until x time]、または [disabled by <ダウンタイム名> from BSM]）が表示されます。</p>
更新日時	グループまたはモニタで最後にイベントが発生した日時。
詳細	<p>[詳細] 列には、モニタまたはグループを説明するテキストか、リンクをクリックするとさまざまなアクションが実行される HTML のいずれかが表示されます。</p> <p>このフィールドにテキストが含まれている場合、そのテキストをダブルクリックすると、HTML 形式の詳細な説明が表示されるダイアログ・ボックスが開きます。</p> <p>この列に情報を入力するには、モニタ・ツリーでモニタまたはグループを選択して [プロパティ] タブを選択します。開いたページで、[一般設定] を展開し、[モニタの詳細] / [グループの詳細] ボックスに詳細を入力します。</p>

状態および可用性のレベル

アイコン	説明
	<p>正常な状態：すべてのパフォーマンス測定値が「正常」のしきい値レベル内にあります。</p>
	<p>警告状態：1 つ以上のパフォーマンス測定値が「警告」の範囲内にありますが、「エラー」または「低」の範囲内の測定値はありません。</p>

アイコン	説明
	<p>エラー/Poor 状態 : 1 つ以上のパフォーマンス測定値が「エラー」または「Poor」の範囲内にあります。これは、次のいずれかを示しています。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ パフォーマンス測定値に値はあるが、品質レベルが低い。 ▶ なんらかのエラーが原因で測定値がない。
	<p>状態が定義されていません (データなし) : グループまたはモニタのデータがありません。これは、次のいずれかの理由が原因で発生します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 新規モニタがまだ実行されていない。 ▶ モニタ・カウンタがまだ収集されていない。 ▶ グループまたはモニタが依存するモニタで「正常」状態がレポートされていない。
	<p>しきい値がない状態 : モニタ・カウンタにしきい値が定義されていないため、状態が割り当てられていません。</p>
	<p>手動で無効化されています : グループまたはモニタが現在無効になっているため、データの更新が受信されていません。</p>
	<p>データが収集されました : SiteScope からリモート・システムに接続して、個々のモニタ設定で定義されているアクションを実行できたことを示します。結果として生じるモニタの状態は、モニタ・アクションの結果を表しています。エラーまたは警告が示された場合、対象システムのパフォーマンスまたは対象リソースの可用性の正確な測定値が表示されます。</p>
	<p>可用性に関する警告 : SiteScope で、リモート・システムとの接続に問題がある可能性が検出されたことを示します。</p>
	<p>データを使用できません : SiteScope からリモート・システムに接続できなかったことを示します。結果として生じる個々のモニタのエラー状態は、リモート・サーバとの接続の失敗に起因する可能性があります。これは、必ずしも対象リソースが機能していないことを表しているわけではありません。</p>

ダッシュボードのコンテキスト・メニュー

次のオプションは、グループまたはモニタのオブジェクト行の列を右クリックすると表示されます。


UI 要素	説明
確認応答の追加	確認ダイアログ・ボックスが開き、確認をモニタに追加できます。
確認応答の削除	モニタの確認応答を削除します。
関連する警告の有効化 / 無効化	[関連する警告の有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスが開き、グループ内の全モニタの警告をすべて有効化または無効化できます。[モニタを無効化] を選択すると、このページに戻って [モニタを有効化] を選択するまで警告が無効になります。詳細については、482 ページの「関連する警告の有効化 / 無効化」を参照してください。
モニタの有効化 / 無効化 グループ内のモニタの有効化 / 無効化	[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックスが開き、モニタまたはグループ内の全モニタを有効化または無効化できます。[モニタを無効化] を選択すると、このページに戻って [モニタを有効化] を選択するまでモニタが無効になります。ユーザ・インターフェースの詳細については、1319 ページの「[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
クイック・レポート	選択したモニタの事前に設定された設定を使用して、1 回かぎりの SiteScope 管理レポートが作成されます。詳細については、1542 ページの「クイック・レポート」を参照してください。 注: このメニュー項目は、モニタの場合にのみ表示されます。
モニタの実行	選択したモニタまたは選択したグループ内の全モニタが実行されます。
ツール	モニタ設定の問題のトラブルシューティングに役立つ診断ツールが開きます。利用可能なツールの詳細については、160 ページの「SiteScope ツールの概要」を参照してください。 注: このメニュー項目は、モニタの場合にのみ表示されます。また、特定のモニタの場合にのみ使用できます。

SiteScope ダッシュボード - モニタ履歴ビュー

このビューには、過去 24 時間に収集されたモニタ、モニタ・グループ、警告の情報が表示されます。時間、モニタの状態、データ・エントリ数を使用してこの情報をフィルタします。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで、[モニタ履歴] ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ この機能を有効にするには、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] > [ダッシュボード モニタ履歴表示オプション] の [モニタ履歴ビューを有効にする] を選択します。 ▶ この機能では、保存するデータ量を厳密に決めることができるため、データベースが過負荷状態になることはありません。 ▶ 標準設定では、選択した要素の [モニタ履歴] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数は 4000 で、[アイコンビュー] で表示できるアイコンの最大数は 70 です。これらの数を変更するには、[ダッシュボードの設定] で値を変更します（[モニタ] を選択して、[ダッシュボードの設定] ボタンをクリックし、[ダッシュボードのプロパティ] を展開する）。ただし、標準設定を使用することをお勧めします。詳細については、1314 ページの「[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 ▶ 選択した要素の行数が、[モニタ履歴] テーブルに表示できる最大数よりも多い場合、さらに限定的なツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1290 ページの「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 ▶ 1292 ページの「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	702 ページの「ダッシュボード・モニタ履歴表示オプション」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	トリガされた警告 ：警告をトリガしたモニタの横に表示されます。
実行時間	モニタの実行時間。
名前	モニタの名前。
状態	実行時のモニタの状態（「エラー」、「警告」、「正常」）。ユーザ・インタフェースの詳細については、1302 ページの「状態および可用性のレベル」を参照してください。
サマリ	モニタの実行の詳細。

[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタまたはモニタ・グループの確認を追加または編集できます。


アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ビューでモニタまたはグループを右クリックし、次のように選択します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 確認を個別のモニタまたはモニタ・グループに追加するには、[確認応答の追加] を選択します。 ▶ 確認済みのモニタまたはグループの確認応答を編集するには、[確認応答の編集] を選択します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1290 ページの「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 ▶ 1292 ページの「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	1288 ページの「モニタの状態の確認」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
確認コメント	[ダッシュボード] ビューの確認アイコンに関連付けられたヒントとして表示される確認コメント。確認ログに記録されます。新しい情報が使用可能になると、コメントを更新できます。コメントは確認が削除するまで表示されます。
関連付けられたすべての警告を有効化	関連付けられたすべての警告を有効にします (標準設定)。
次に関連付けられたすべての警告を無効化 < 期間 >	すぐに警告を無効にし、指定した期間、選択したモニタまたはグループに対する警告の抑止を続けます。
1 回限りのスケジュールに基づいて関連付けられたすべての警告を無効化 開始 < 時刻 > 終了 < 時刻 >	指定した期間、警告を無効にします。これは、監視対象のシステムが特定の期間使用不能になると予想され、その間も警告をトリガせずに監視を続ける場合に便利です。
無効化の説明	確認済みコンテキスト内のモニタに関連付けられた警告アイコンの説明。このテキスト説明は、[ダッシュボード] ビューでモニタに関連付けられた警告アイコンの上にポインタを置くと表示されるツールチップのテキストに追加されます。このテキストは、警告の無効化オプションが有効な間のみ表示されます。このテキストは、確認ログには書き込まれません。
確認ログの表示	確認応答ダイアログ・ボックスの起動元であるモニタまたはグループの確認応答エントリをすべて表示します。ログには、確認応答の日付と時刻、確認応答者のユーザ名、モニタまたはグループの状態、確認応答メッセージが含まれます。

[ダッシュボードのお気に入り保存] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、ダッシュボード・フィルタとレイアウト設定（[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックスおよび [ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックスで選択）の組み合わせを定義し、名前を付けてお気に入りビューとして保存できます。


アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。[ダッシュボード] ツールバーで、[お気に入りの管理]  ボタンの横にある矢印をクリックし、[お気に入り保存] を選択します。
重要な情報	ダッシュボードのお気に入りは、[ダッシュボード] ビューに適用可能な設定に制限されます。つまり、ダッシュボードのお気に入りには、ユーザのグローバル・ビュー設定や、お気に入りの保存時にモニタ・ツリーで選択されていたコンテキストは保存されません。
関連タスク	1290 ページの「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1286 ページの「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	現在のダッシュボード・フィルタとレイアウト設定をお気に入りに保存するためのオプションを選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 既存：既存のお気に入りのいずれかを現在の設定で置き換えることができます。既存のお気に入りビューのリストが表示されます。標準設定では、リストには事前に設定されたお気に入りがすべて含まれます。 ▶ 新規：現在の設定を、ボックスに入力した表示名を付けて新しいお気に入りビューに保存できます。

[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、既存のお気に入りビューを削除できます。


アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで、[お気に入りの管理]  ボタンの横にある矢印をクリックし、[お気に入りを削除] を選択します。
関連タスク	1290 ページの「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1286 ページの「SiteScope ダッシュボードの概要」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
既存のお気に入り	<p>現在のお気に入りビューのリストから削除するビューを選択します。標準設定では、リストには次の事前に設定されたお気に入りの含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ All Objects ▶ Disabled ▶ Errors Only ▶ Errors and Warnings ▶ Good ▶ Good and Warnings ▶ No Data ▶ Warnings Only

[ダッシュボード フィルタ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、一致基準を入力し、メニュー・オプションを選択してダッシュボード・フィルタを設定できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで [ダッシュボード フィルタ]  ボタンをクリックします。
重要な情報	1 つのフィルタにフィルタ・オプションの組み合わせを含めることができます。たとえば、フィルタ定義では モニタ・タイプ 、 監視対象 、 状態 の組み合わせに基づいてフィルタすることができます。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1290 ページの「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」 ▶ 1292 ページの「SiteScope ダッシュボードのデータ分析方法」
関連情報	1287 ページの「ダッシュボード・フィルタの概要」

グローバル設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタ名	1 つ以上のモニタの名前と一致するテキスト文字列または正規表現。このフィルタを [ダッシュボード] ビューに適用すると、[モニタ名] 基準に一致するモニタのみが表示されます。
モニタ・タイプ	選択したモニタ・タイプでモニタをフィルタします。
監視対象サーバ	特定のホストまたは監視対象サーバのサーバ名でモニタをフィルタします。

UI 要素	説明
状態	<p>報告された状態でモニタをフィルタします。状態フィルタ基準は、モニタ・カテゴリの状態に基づいて定義できます。</p> <p>次の状態オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none">▶ 任意の状態：状態に関係なくすべてのモニタが表示されます。これが標準設定のオプションです。このオプションを [データあり] オプションと組み合わせて使用し、接続や可用性が原因でエラー状態にあるモニタを除外できます。▶ 無効：無効と報告されたモニタのみが表示されます。▶ エラー：エラー状態を報告したモニタのみが表示されます。▶ 正常：正常または OK 状態を報告したモニタのみが表示されます。▶ 正常, 警告またはエラー：無効と報告されたモニタを除く、すべてのモニタが表示されます。▶ 警告：警告状態を報告したモニタのみが表示されます。▶ 警告またはエラー：警告またはエラー状態を報告したモニタのみが表示されます。▶ 警告または正常：警告または正常状態を報告したモニタのみが表示されます。 <p>例：警告またはエラーを報告したモニタのみを表示するフィルタを作成します。</p>

UI 要素	説明
<p>状態 (可用性付き)</p>	<p>モニタ状態カテゴリとデータの可用性の状態を組み合わせ、複合フィルタを作成します。</p> <p>次のデータの可用性の状態オプションを使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ データあり : データが使用可能なモニタが表示されます。つまり、モニタが対象システムから測定値を取得できたことを示します。 ▶ データなし : データが使用不能なモニタが表示されます。つまり、SiteScope が対象システムから測定値を取得できなかったことを示します。 <p>例 : [エラー] および [データあり] を報告したモニタのみを表示するフィルタを作成します。つまり、監視対象システムと通信できずにエラーを報告したモニタ ([データなし]) とは異なり、このフィルタを使用すると、監視対象システムからデータを受信できたもののエラー状態を示すモニタが表示されます。</p>
<p>サマリ・テキスト</p>	<p>サマリ文字列に含まれたテキストに基づいてモニタをフィルタします。リテラル・テキスト文字列または正規表現を入力して、テキスト・パターンと照合することができます。</p> <p>正規表現の詳細については、235 ページの「正規表現の使用」を参照してください。</p>
<p>確認済み</p>	<p>「オペレータ認知」の状態に基づいてモニタをフィルタします。確認済みのモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから [はい] を選択します。未確認のモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから [いいえ] を選択します。</p>
<p>確認メモ</p>	<p>[オペレータ認知] のメモに表示されるテキストに基づいてモニタをフィルタします。リテラル・テキスト文字列または正規表現を入力して、テキスト・パターンと照合することができます。</p> <p>正規表現の詳細については、235 ページの「正規表現の使用」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
警告設定済み	警告が設定されているかどうかに基づいてモニタをフィルタします。1 つ以上の警告が設定されているモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから [はい] を選択します。警告が設定されていないモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから [いいえ] を選択します。
トリガされた警告	警告イベントをトリガしたかどうかに基づいてモニタをフィルタします。1 つ以上の警告を生成しているモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから [はい] を選択します。警告を生成していないモニタをフィルタするには、ドロップダウン・メニューから [いいえ] を選択します。


モニタ履歴の設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
表示期間	過去のイベントのタイム・フレーム。 標準設定値 : 過去 1 時間
モニタの実行の状態	必要なイベント状態, 関係演算子, データ可用性。 標準設定値 : 任意

[ダッシュボードの設定] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、[ダッシュボード] ビューでのグループおよび監視データの表示をカスタマイズできます。これにより、モニタ測定値の詳細、警告情報、確認機能の表示を有効化または非表示にできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボード・ツールバーで [ダッシュボードの設定]  ボタンをクリックします。
重要な情報	レイアウト・オプションは、[詳細ビュー] にのみ適用されます。[アイコン ビュー] の使用時には無視されます。
関連タスク	1290 ページの「SiteScope ダッシュボードのカスタマイズ方法」
関連情報	1287 ページの「ダッシュボード・フィルタの概要」

ダッシュボード・テーブルのレイアウト

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
列の固定	<p>テーブルの列の順序を固定します。設定をクリアしてテーブル・列の順序を変更するには、列・ヘッダを右または左にドラッグします。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
テーブル・カラム	<p>詳細テーブルに表示される列。選択内容は、該当するすべてのグループまたはモニタの要素に適用されます。</p> <p>次の列が表示可能です。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ タイプ ▶ サマリ ▶ トリガされた警告 ▶ 警告設定済み ▶ 説明 ▶ 状態 ▶ ターゲット ▶ 確認 ▶ 更新日時 ▶ 名前 <p>標準設定値：すべてのプロパティが選択されている</p> <p>列の詳細については、1296 ページの「SiteScope ダッシュボード - 現在の状態ビュー」を参照してください。</p>


ダッシュボードのプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタが利用可能かを表示	<p>SiteScope がリモート・システムに接続できたかどうか、または接続の問題が原因でリモート・システムを使用できなかったかどうかを示す、モニタの可用性アイコンをダッシュボードに表示します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
ダッシュボード・オブジェクトの最大数	<p>選択した要素について、[ダッシュボード] テーブルに表示できるオブジェクトの最大数。</p> <p>標準設定値 : 4000</p> <p>注 : 選択した要素のオブジェクトが表示可能な最大数よりも多い場合、この設定を増やすのではなく、オブジェクト数を絞り込むツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。</p>
ダッシュボード・アイコンの最大数	<p>ダッシュボード・アイコン・ビューに表示できるアイコンの最大数。</p> <p>標準設定値 : 700</p> <p>最大推奨値 : 1500</p> <p>注 : 選択した要素のアイコンが表示可能な最大数よりも多い場合、この設定を増やすのではなく、アイコン数を絞り込むツリー・フィルタを作成するか、ダッシュボード・フィルタを設定してください。</p>
ダッシュボードの更新間隔 (秒)	<p>ダッシュボードの更新間の待機時間 (秒単位)。</p> <p>標準設定値 : 60 秒</p> <p>最小値 : 30 秒</p>

診断ツール


SiteScope ツールを使用すると、監視環境をテストできます。これらのツールを使用して、監視対象となるシステムのさまざまな要求やクエリを作成し、アクションの詳細な結果を表示します。

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボードで、診断ツールを使用可能なモニタ・インスタンスを選択し、[ツール]  ボタンをクリックします。</p>
重要な情報	<p>[ツール] ボタンは、次のモニタ・インスタンスの設定または表示時に有効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Active Directory レプリケーション・モニタ ▶ Cisco Works モニタ ▶ CPU モニタ ▶ データベース・カウンタ・モニタ ▶ データベース・クエリ・モニタ ▶ DB2 8.x および 9.x モニタ ▶ ディスク容量モニタ ▶ DNS モニタ ▶ F5 Big-IP モニタ ▶ FTP モニタ ▶ LDAP モニタ ▶ ログ・ファイル・モニタ ▶ メール・モニタ ▶ メモリ・モニタ ▶ Microsoft Windows イベント・ログ・モニタ ▶ Microsoft Windows Media Player モニタ ▶ Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・モニタ ▶ ニュース・モニタ ▶ Oracle 9i アプリケーション・サーバ・モニタ ▶ Ping モニタ ▶ ポート・モニタ ▶ Real Media Player モニタ ▶ サービス・モニタ

<p>重要な情報 (つづき)</p>	<ul style="list-style-type: none">▶ SNMP モニタ▶ MIB による SNMP モニタ▶ SNMP トラップ・モニタ▶ テクノロジ・データベース統合モニタ▶ テクノロジ SNMP トラップ統合モニタ▶ URL モニタ▶ URL 内容モニタ▶ Web サービス・モニタ▶ XML 測定値モニタ <p>SiteScope で使用可能な診断ツールの完全なリストについては、左下の表示枠で [ツール] ボタンをクリックします。</p>
<p>関連情報</p>	<p>160 ページの「SiteScope ツールの概要」</p>

[グループ内のモニタの有効化 / 無効化] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、モニタの [プロパティ] タブの個々のモニタ設定に関係なく、モニタまたはグループ内の全モニタを有効化または無効化するオプションを選択できます。[**モニタを無効化**] を選択すると、このダイアログ・ボックスに戻って [**モニタを有効化**] を選択するまでモニタは無効になります。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。ダッシュボードで、モニタまたはグループを選択して [モニタの有効化 / 無効化]  ボタンをクリックします。
重要な情報	[モニタを無効化] オプションを使用してモニタまたはグループを無効化する場合、ダッシュボードには、影響を受けるオブジェクトの [サマリ] 列の状態として「 手動で無効化されています 」が表示されます。特定の期間オブジェクトを無効化するには、事前に状態が「 手動で無効化されています 」のオブジェクトを有効化する必要があります。これは、グループ・レベルでも同様です。たとえば、ある期間グループ内のモニタが無効化されていて、そのグループのサブグループに存在するモニタの状態が「 手動で無効化されています 」である場合、親グループの無効化期間が経過した後もサブグループのモニタは無効化されたままになります。
関連情報	480 ページの「モニタの有効化 / 無効化」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタを有効化	以前にモニタ・プロパティで無効化されている場合、モニタが有効になります。 標準設定値 ：選択されている
一時的に無効化されたモニタのみ有効にする	以前にモニタ・プロパティで一時的に無効化されている場合、モニタが有効になります。

UI 要素	説明
<p>モニタを無効化</p>	<p>グループ内のモニタが無効化されている場合、SiteScope によりモニタの [頻度] 設定に基づいてモニタの実行が継続的にスケジュールされますが、モニタ・アクションは実行されません。モニタの実行がスケジュールされている場合、SiteScope によってモニタのデータ・ログ・エントリが記録されますが、測定値データの代わりに無効なモニタの状態がレポートされます。</p>
<p>次の時間設定でモニタを無効化 : < 期間 ></p>	<p>モニタが無効になっている期間。[秒], [分], [時間], または [日] を選択して、適用する無効化期間を定義します。</p>
<p>1 回限りのスケジュールに基づいてモニタを無効化 : < 時間 > ~ < 時間 ></p>	<p>モニタを将来のある期間だけ一時的に無効にします。1 日より長い期間に設定できます。 hh:mm:ss mm/dd/yyyy の形式で無効化期間の開始時間と終了時間を入力または選択します。</p>
<p>無効化の説明</p>	<p>モニタ・グループのモニタの状態とともに表示される詳細。無効化状態のテキストには、モニタに無効化オプションが適用されていることを示す文字列が含まれます。たとえば、「手動で無効化されています」は、[モニタを無効化] オプションを使用してモニタが無効にされたことを示します。</p>

66

サーバ中心のレポート

本章の内容

概念

- ▶ サーバ中心のレポートの生成 (1322 ページ)

タスク

- ▶ サーバ中心のレポートの作成方法 (1324 ページ)
- ▶ サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ (1326 ページ)

参照情報

- ▶ サーバ中心のレポートの測定値 (1331 ページ)
- ▶ サーバ中心のレポート (1332 ページ)

概念

サーバ中心のレポートの生成

Microsoft Windows および UNIX リソース・モニタの場合、監視対象のサーバに関する 3 つの異なる測定値のデータを表示できる、サーバ中心のレポートを作成できます。

ヒント : Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタの作成時に、ソリューション・テンプレートを使用することをお勧めします。ソリューション・テンプレートの詳細については、次を参照してください。

- ▶ 1111 ページの「AIX Host ソリューション・テンプレート」
 - ▶ 1155 ページの「Linux Host ソリューション・テンプレート」
 - ▶ 1251 ページの「Solaris Host ソリューション・テンプレート」
 - ▶ 1205 ページの「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」
-

モニタを手動で定義するには、416 ページの「Microsoft Windows Resources Monitor Settings」または 657 ページの「UNIX Resources Monitor Settings」の説明に従って、必要な [モニタ設定] ページで [サーバ中心のレポートを有効化] を選択します。モニタを手動で定義する場合、1331 ページの「サーバ中心のレポートの測定値」に記載された表に従って、モニタに必要な測定値を選択する必要があります。

このレポートには、同じグラフ上に次の測定値が表示されます。

- ▶ **CPU 使用率 :** UNIX リソース・モニタの場合、システム処理使用率、ユーザ処理使用率、入力 / 出力処理使用率の 3 つのカウンタの平均として、この測定値が計算されます。Microsoft Windows リソース・モニタの場合、合計処理容量のうち使用された処理容量の割合として測定値が計算されます。
- ▶ **メモリ使用率 :** 使用可能な合計メモリのうち使用されたメモリの割合として計算されます。

- ▶ **ネットワーク使用率**：システム固有のカウンタによって計算されます。ネットワーク使用率の計算は、Windows サーバに対してのみサポートされています。

各測定値は、グラフ上に固有の色の個別の線で表示されます。このレポートでは、異なる測定値間の相関関係を容易に表示できます。

レポートには、CPU 使用率およびメモリ消費別の上位 5 プロセスを表示するテーブルが含まれます。グラフを操作して、テーブルに表示するデータの時間を変更できます。これにより、グラフの問題のある期間に焦点を当てて、その時点で実行されていたプロセスを特定できます。サーバ中心のレポートのインタフェースの詳細については、1332 ページの「サーバ中心のレポート」を参照してください。

サーバ中心のレポートの生成方法の詳細については、1324 ページの「サーバ中心のレポートの作成方法」を参照してください。

タスク

サーバ中心のレポートの作成方法

このタスクでは、Windows および UNIX サーバを監視するモニタの作成とサーバ中心のレポートの生成に関する手順を説明します。

注：このタスクのシナリオについては、1326 ページの「サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ」を参照してください。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1324 ページの「Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの作成」
- ▶ 1325 ページの「サーバ中心のレポートの生成」
- ▶ 1325 ページの「レポート内のデータの分析」

1 Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタの作成

Microsoft Windows または UNIX サーバを監視するには、Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタを作成する必要があります。手動で、またはソリューション・テンプレートを使用して（推奨）、モニタを作成できます。

- ▶ Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタの手動作成の詳細については、次を参照してください。
 - ▶ 408 ページの「Microsoft Windows Resources Monitor Overview」。
 - ▶ 654 ページの「UNIX Resources Monitor Overview」。

注：[**サーバ中心のレポートを有効化**] を選択し、必要な測定値を選択します。測定の詳細については、1331 ページの「サーバ中心のレポートの測定値」を参照してください。

- ▶ ソリューション・テンプレートを使用したモニタの作成の詳細については (テンプレートには必要なすべての測定値カウンタが含まれるため、これを推奨します)、次を参照してください。
 - ▶ 1205 ページの「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート」
 - ▶ 1111 ページの「AIX Host ソリューション・テンプレート」
 - ▶ 1155 ページの「Linux Host ソリューション・テンプレート」
 - ▶ 1251 ページの「Solaris Host ソリューション・テンプレート」

2 サーバ中心のレポートの生成

サーバを監視するには、SiteScope ダッシュボードに移動して該当する Microsoft Windows または UNIX リソース・モニタのデータを表示し、使用するリソース・モニタに対応する行の [ターゲット] 列でサーバ名をクリックします。サーバ中心のレポートが開きます。

3 レポート内のデータの分析

このレポートでは、同じグラフでサーバの CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の 3 つの異なる測定値を表示できます。CPU 使用率およびメモリ消費別の上位 5 プロセスもこのレポートに表示されます。グラフのデータ・ポイントをクリックして、特定の時間に掘り下げることができます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1332 ページの「サーバ中心のレポート」を参照してください。

サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ

この使用例のシナリオでは、サーバ中心のレポートの作成方法について説明します。

注: このシナリオに関連するタスクについては、1324 ページの「サーバ中心のレポートの作成方法」を参照してください。

このシナリオには次の手順が含まれています。

- ▶ 1327 ページの「背景情報」
- ▶ 1327 ページの「リモート・サーバの設定」
- ▶ 1328 ページの「Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ」
- ▶ 1329 ページの「サーバ中心のレポートの作成」

1 背景情報

NewSoft 社の SiteScope ユーザが、監視対象サーバ Apollo の CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率に関するデータを表示するレポートを作成します。

2 リモート・サーバの設定

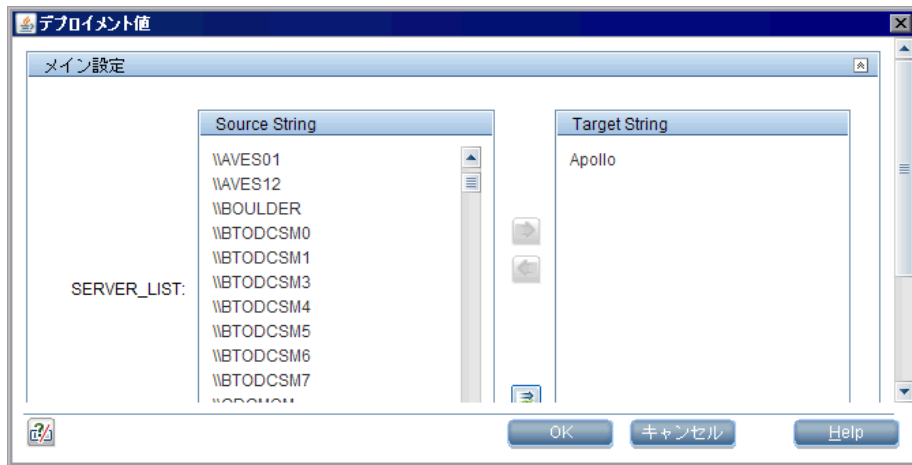
レポートの作成前に、リモート Windows サーバ Apollo を監視するように SiteScope を設定し、Microsoft Windows リモート・サーバのサーバを設定します。

The screenshot shows the 'メイン設定' (Main Settings) dialog box. It is configured for a remote Windows server named 'Apollo'. The '資格情報' (Credentials) section is set to use a username and password, with the username 'administrator' and a masked password. The '接続方式' (Connection Method) is set to 'NetBIOS', and the 'リモートサーバのエンコード' (Remote Server Encoding) is set to 'Cp1252 (windows-1252)'. There is also an unchecked 'トレース' (Trace) checkbox and a '事前定義された資格情報を選択' (Select predefined credentials) option with a dropdown menu and a '資格情報の追加' (Add credentials) button.

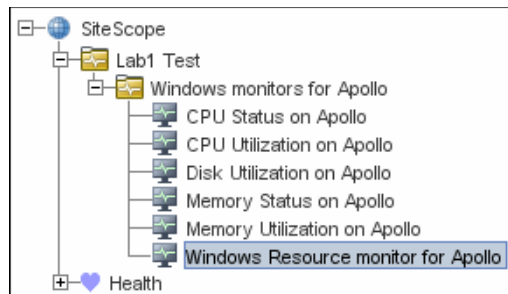
メイン設定	
* サーバ:	<input type="text" value="\\Apollo"/>
資格情報:	<input checked="" type="radio"/> ユーザ名およびパスワードを使用
	ユーザ名 <input type="text" value="administrator"/>
	パスワード <input type="password" value="....."/>
	<input type="radio"/> 事前定義された資格情報を選択
	資格情報プロファイル <input type="text"/> <input type="button" value="資格情報の追加"/>
	<input type="checkbox"/> トレース
* 接続方式:	<input type="text" value="NetBIOS"/>
リモートサーバのエンコード:	<input type="text" value="Cp1252 (windows-1252)"/>

3 Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートのデプロイ

Apollo のデータを監視する SiteScope の有効化後、Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレートを選択したグループ・コンテナにデプロイし、監視するサーバとして [Apollo] を選択します。サーバ中心のレポートの生成に必要なモニタと測定値がすでに設定されているため、Microsoft Windows リソース・モニタの作成時にソリューション・テンプレートを使用します。



ソリューション・テンプレートのデプロイ後、Microsoft Windows リソース・モニタを含む「Windows monitors for Apollo」という名前のグループが SiteScope によって作成されます。



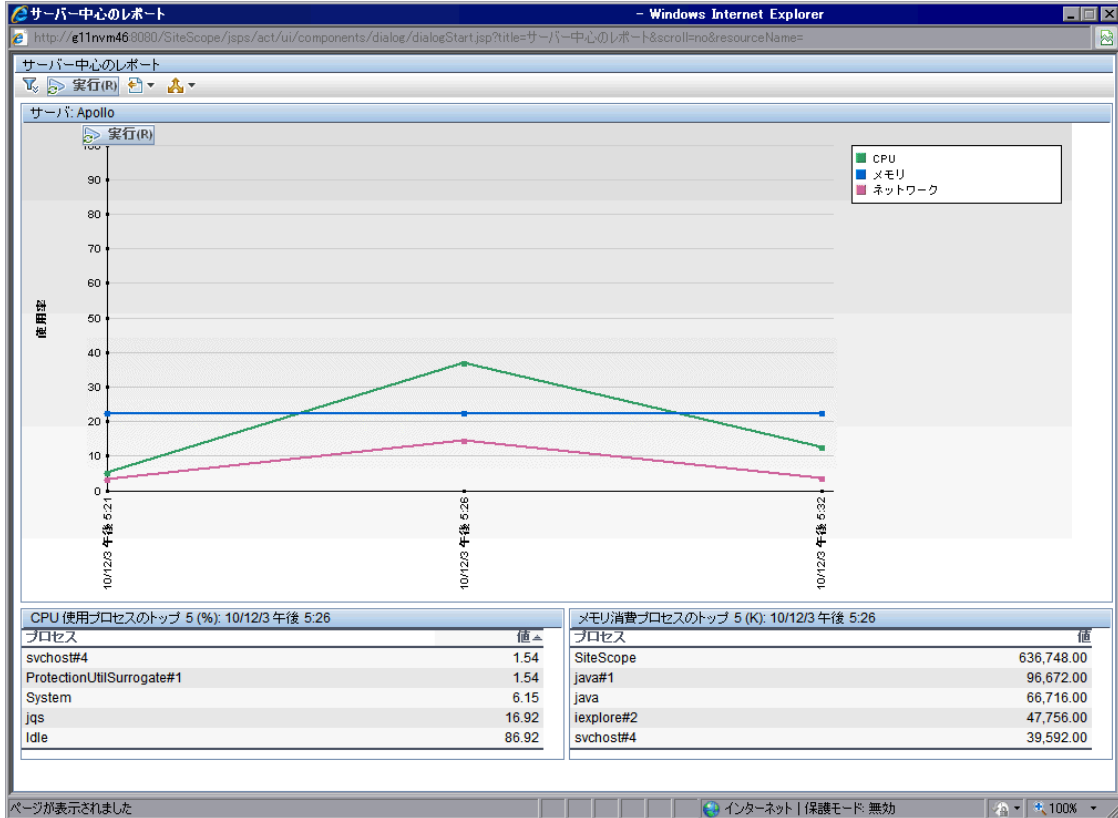
4 サーバ中心のレポートの作成

サービス状況の [現在の状態] ビューから、Apollo のサーバ中心のレポートを生成します。

名前	状態	タイプ	ターゲット	サマリ	更新日時
選択したノード					
Windows monitors for Apollo	⊗	グループ		グループ内こ...	10/12/3 午...
グループ (0 件のうち 0 件)					
モニタ (6 件のうち 6 件)					
CPU Status on Apollo	✔	CPU	Apollo	36% avg. cpu...	10/12/3 午...
CPU Utilization on Apollo	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Processor0L...	10/12/3 午...
Disk Utilization on Apollo	⊗	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	LogicalDisk...	10/12/3 午...
Memory Status on Apollo	✔	メモリ	Apollo	11% used, 1...	10/12/3 午...
Memory Utilization on Apollo	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	MemoryAvail...	10/12/3 午...
Windows Resource monitor for Apo...	✔	Microsoft Windows Resourc...	Apollo	Memory% C...	10/12/3 午...

第 66 章 • サーバ中心のレポート

サーバ中心のレポートが開き、同じグラフに CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の測定値が表示されます。このデータを使用して、異なる時間の CPU 使用率およびメモリ消費別の上位のプロセスを表示し、問題のある期間に焦点を当ててその時点で実行されていたプロセスを特定できます。



参照情報

サーバ中心のレポートの測定値

次の表に、サーバ中心のレポートのモニタを手動で定義するときを選択する必要のあるカウンタを示します。

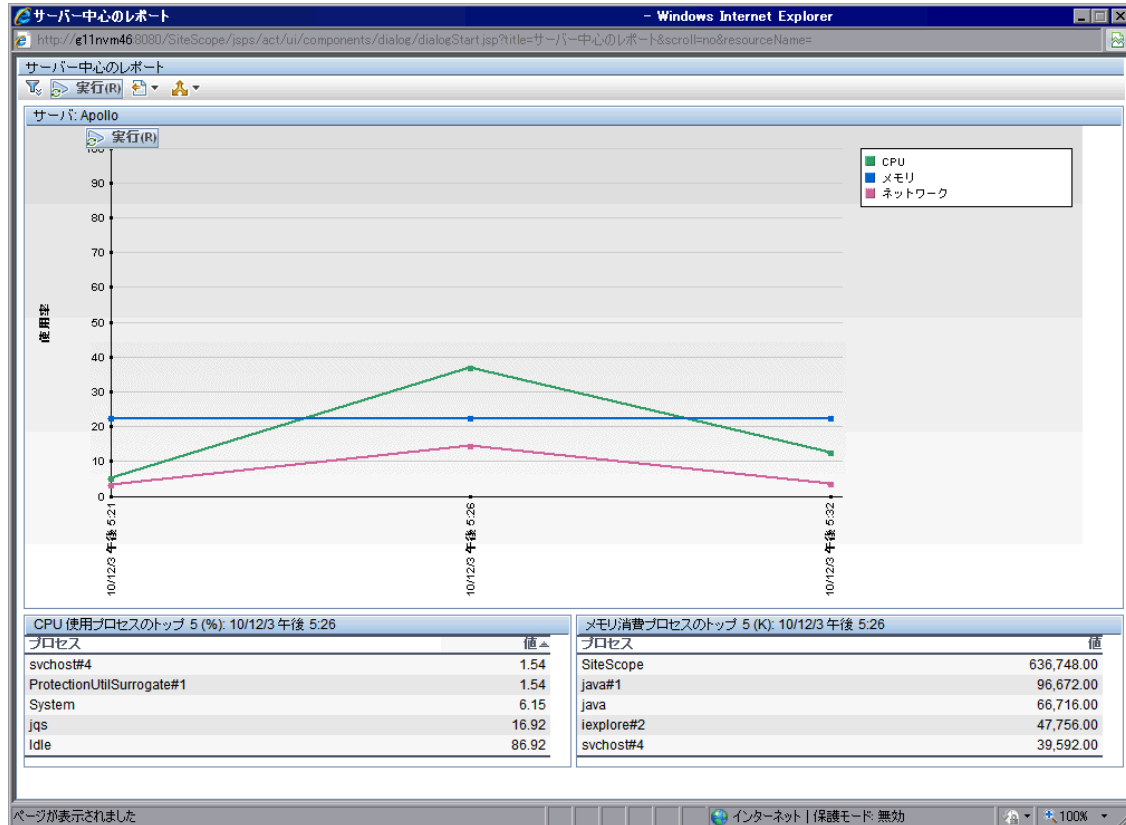
OS Type	サーバ中心の必須カウンタ
Microsoft Windows リソース・モニタのカウンタ	Memory¥% Committed Bytes In Use
	Processor¥_Total¥% Processor Time
Solaris プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	CPU utilization¥%sys
	CPU utilization¥%sys
	CPU utilization¥%sys
	Memory¥swap_avail
	Memory¥swap_resv
AIX プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	Processor¥Total¥%sys
	Processor¥Total¥%usr
	Processor¥Total¥%wio
Linux プラットフォームの UNIX リソース・モニタのカウンタ	Memory¥MemFree
	Memory¥MemTotal
	Processor¥Total¥System
	Processor¥Total¥User
	Processor¥Total¥User low

モニタ定義のカウンタの選択の詳細については、次を参照してください。

- ▶ 416 ページの「Microsoft Windows Resources Monitor Settings」(Microsoft Windows リソース・モニタ・カウンタの場合)。
- ▶ 657 ページの「UNIX Resources Monitor Settings」(Solaris, AIX, Linux プラットフォームの場合)。

サーバ中心のレポート






このレポートには、選択したサーバの CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率の測定値が表示されます。

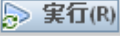


アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタの SiteScope ダッシュボードの [ターゲット] 列で、サーバ名のリンクをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ このレポートは、レポートの実行目的で作成された専用の Microsoft Windows リソース・モニタまたは UNIX リソース・モニタによって監視されるサーバのみで使用可能です。 ▶ これらのモニタの該当するソリューション・テンプレートを使用して、モニタをデプロイすることを強くお勧めします。テンプレートは、適切な測定値カウンタとオプションが選択された状態で事前設定されています。 ▶ サーバ中心のレポートは、Firefox 2.x ではサポートされていません。 ▶ モニタに問題が発生して不適切なデータを返すと、そのデータ・ポイントはスキップされます。そのため、グラフに欠落したデータ・ポイントが含まれる場合があります。
関連タスク	1324 ページの「サーバ中心のレポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1322 ページの「サーバ中心のレポートの生成」 ▶ 1326 ページの「サーバ中心のレポートの作成方法 - 使用例のシナリオ」

レポート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	形式 ：レポート・データをエクスポートするファイルの形式に合わせます。ファイルの形式を選択します。印刷用、CSV、Excel、XML のオプションがあります。
	エクスポート ：レポート・データを電子メールでエクスポートします。ファイルを送信するオプションを選択します。HTML メール、HTML 添付、PDF のオプションがあります。 注 ：エクスポート機能を使用するには、信頼されたサイトに SiteScope マシンを追加する必要があります。
	[フィルタ] / [折りたたみ] レポート・フィルタ ：レポートの時間範囲設定を表示または非表示にする場合にクリックします。
	戻る ：現在表示している時間枠の 1 つ前の時間枠のレポートを表示します。 例 ：[表示] ボックスの値が [日] である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの 1 日前のデータが表示されます。
	進む ：現在表示している時間枠の 1 つ後の時間枠のレポートを表示します。 例 ：[表示] ボックスの値が [日] である場合、このボタンをクリックすると、現在表示しているレポートの 1 日後のデータが表示されます。
ビュー	レポートを表示する時間範囲。次の時間範囲を使用できます。 ▶ カスタム（任意の範囲を設定できます） ▶ 時間、日、週 ▶ 過去 1 時間、過去 1 日、過去 1 週間

UI 要素	説明
開始 / 終了 <日付リンク>	<p>[開始] リンクをクリックし、レポートの開始日付と時刻を設定します。[終了] リンクをクリックし、レポートの終了日付と時刻を設定します。カレンダーには次のボタンがあります。</p> <ul style="list-style-type: none">▶ OK : 選択した日付の日付リンクを更新してカレンダーを閉じます。▶ 戻す : 前に選択したレポート日に戻ります。▶ 現在 : カレンダーで今日の日付を選択します。▶ キャンセル : 変更せずにカレンダーを閉じます。
	日付リンクに表示された日付範囲のレポートを作成します ([フィルタ])。

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
< ツールチップ >	グラフのデータ・ポイント上にポインタを置くと、選択した測定値の選択した時間での使用率の値、および日付と時間を表示する、ツールチップが表示されます。
サーバ名	使用率グラフの上部に表示されるサーバの名前。
使用率グラフ	<p>経過時間ごとの使用率を表示します。CPU 使用率、メモリ使用率、ネットワーク使用率が異なる色の線で表示されます。3 つのすべての測定値は、パーセント単位（つまり、100% の使用率に対する割合）です。</p> <p>グラフのデータ・ポイントをクリックし、より短い時間範囲に焦点を当てることができます。データ・テーブルが更新され、選択したデータ・ポイントの時間の結果が表示されます（同じ時間の 3 つのデータ・ポイントのいずれかをクリックすると、レポートは同じように更新されます）。使用率が非常に高いポイントがある場合に、これを活用できます。そのポイントをクリックすることによって、高い使用率の原因を特定できます。</p> <p>注： ネットワーク使用率は、Windows サーバに対してのみサポートされています。</p>
[CPU 使用プロセスのトップ 5] テーブル	グラフの任意のポイントでの CPU 使用率のトップ 5 プロセスを表示します。このテーブルには、プロセス名と、使用可能な合計 CPU 処理の割合として CPU 使用率が表示されます。
[メモリ消費プロセスのトップ 5] テーブル	グラフの任意のポイントでのメモリ消費のトップ 5 プロセスを表示します。このテーブルには、プロセス名とメモリ消費の値（キロバイト）が表示されます。

67

SiteScope サーバの状況

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope 状況の概要 (1338 ページ)
- ▶ SiteScope 状況のグループ (1341 ページ)
- ▶ BAC 統合設定モニタ (1343 ページ)
- ▶ BAC 統合統計モニタ (1344 ページ)
- ▶ 接続統計モニタ (1344 ページ)
- ▶ ダイナミック・モニタリング統計 (1344 ページ)
- ▶ SiteScope サーバの状況モニタ (1345 ページ)
- ▶ SiteScope ログ・イベント・モニタ (1345 ページ)
- ▶ SiteScope 負荷モニタの監視 (1345 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope の状況監視データの分析方法 (1346 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope の状況のユーザ・インタフェース (1350 ページ)

概念

SiteScope 状況の概要

SiteScope 状況は、SiteScope のパフォーマンスと可用性に関する情報を表示する、特別に設計されたモニタのグループです。状況モニタでは、SiteScope のリソースの使用状況、主要なプロセス、モニタ負荷、サーバのパラメータ、および主要な構成ファイルの整合性に関するデータが取得されます。

標準設定では、毎日のモニタ・ログに SiteScope 状況の監視データが記録され、SiteScope のパフォーマンスと運用状況のレポートを作成できます。これらのログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスに関する問題の把握、モニタや警告に関する問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立ちます。たとえば、SiteScope の監査ログには、モニタ、テンプレート、警告の作成など、新しいユーザ・インタフェースで実行された設定変更が含まれます。

SiteScope 状況の監視とともに、SiteScope 進捗レポートでは、SiteScope アプリケーションのパフォーマンスを監視するために使用する、鍵となるいくつかの指標が提供されます。

本項の内容

- ▶ 1339 ページの「スキップされるモニタ・イベント」
- ▶ 1340 ページの「データのレポートの問題」

スキップされるモニタ・イベント

スケジュールされている次の実行時までにはモニタのアクションが完了しなかった場合、SiteScope モニタはスキップとして報告されます。これは、データベースの照会、マルチページ URL シーケンスの処理、スクリプトの実行の待機、ハングアプリケーションに対する待機など、複雑なアクションが実行されるモニタで発生する場合があります。

たとえば、8 ページの一連の Web ページを通過するように設定されている URL シーケンス・モニタがあります。このシーケンスには、応答時間が遅い可能性がある検索の実行が含まれます。モニタは 60 秒に 1 回実行されるように設定されています。システムの応答が良好な場合、モニタの実行は 45 秒で完了できます。ただし、検索要求が長くかかる場合もあり、その場合はトランザクションが完了するまでに最長で 90 秒かかります。この場合、SiteScope でスケジュールされているモニタの次の実行時までにはモニタが完了しません。SiteScope ではこれを検出し、SiteScope の `skip_monitor.log` にイベントが記録されます。SiteScope ログ・イベント・モニタでは、これを検出し、エラー状態を知らせます。ログ・ファイルの詳細については、1409 ページの「ログ・ファイルのタイプ」を参照してください。

モニタがプロセス・プールからのプロセスを必要とするモニタ・タイプで、プロセス・プールの制限に達した場合にも、モニタがスキップされることがあります。一般に発生する可能性は高くありませんが、監視負荷が高い一部の状況で発生することがあります。SiteScope の状況ログ・イベント・モニタでは、プロセス・プール・イベントも監視されます。モニタがスキップされると、前の実行が完了していないために、または応答しないアプリケーションによってハングしたためにモニタの実行が一時停止されるときに、データの損失を引き起こす可能性があります。モニタのスキップは SiteScope の自動的な停止、再起動も引き起こし、このようなイベントも SiteScope の状況ログ・イベント・モニタによって監視されます。再起動は、問題を解消し、モニタをリセットするために行われます。ただし、これは監視範囲およびデータのギャップにつながる可能性があります。多くの場合、モニタに設定されている実行頻度を調整、または適切なタイムアウト値を指定すると、モニタのスキップの問題を修正できます。

注：

- ▶ 最大許容数を超えたためにスキップしたモニタを自動的に無効にする設定を有効にできます。これが発生すると、SiteScope はエラーを出力してシャットダウンし、無効イベントを知らせるために SiteScope 管理者にモニタのスキップについて電子メールを送信します。この設定を有効にするには、プリファレンス・ビューで [**インフラストラクチャ プリファレンス**] をクリックして、[**モニタ設定をスキップ**] 表示枠を展開します。[**スキップされるモニタをシャットダウン**] チェック・ボックスを選択します。モニタを無効にする期間も決定できます。スキップされるモニタの設定の詳細については、272 ページの「モニタ設定をスキップ」を参照してください。
 - ▶ 使用可能な最大プロセス数を制御できます。この設定は、モニタ・パフォーマンスの問題がモニタ設定の調整によって解決されない場合にのみ変更してください。初期値は 1 プールあたり 200 プロセスです（標準設定の 1 プールあたりの最大プロセス数は 20）。この設定を変更するには、プリファレンス・ビューで [**インフラストラクチャ プリファレンス**] をクリックして、[**一般設定**] 表示枠を展開します。[**プールあたりの最大プロセス数**] ボックスでプロセス数を設定します。
-

データのレポートの問題

SiteScope の状況モニタは、BSM インストールへの SiteScope モニタおよび設定データの転送に関する問題を示すイベントをレポートするように設定されています。BSM へのデータのレポートのトラブルシューティングの詳細については、304 ページの「トラブルシューティングおよび制限事項」を参照してください。

SiteScope 状況のグループ

SiteScope の状況モニタでは、モニタ設定の問題や SiteScope サーバ負荷の特定に役立てるために、モニタ自体の環境の主要な側面を監視できます。また SiteScope では、BSM と接続しているときのその接続および関連するデータ・イベントを監視できます。

通常のモニタと同じように、状況モニタは頻度およびしきい値を再設定するために編集できます。管理者は、追加のサーバおよび環境を対象とする新しいモニタを追加することによって状況グループを拡張できます。

状況モニタ・グループは、メインの SiteScope コンテナ内に状況アイコンとして表示されます。状況モニタ・グループの内容を表示するには、[状況] コンテナをクリックします。

SiteScope の状況の監視に含まれるモニタ・タイプは次のとおりです。

モニタ・タイプ	標準設定の名前	説明
BAC 統合設定 モニタ	BSM 統合設定	SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するときに、SiteScope と BSM の間の設定が正しいかどうかをチェックします。
BAC 統合統計 モニタ	BSM 統合統計	SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして設定するときに、SiteScope と BSM の間のトラフィック量をチェックします。
接続統計モニタ	接続統計モニタ	リモート UNIX または Windows サーバと接続するために使用するときに、SSH および Telnet 接続の状態をチェックします。Perfex、Perfex ディスパッチャ統計、および各 perfex プールの状態もチェックします。
ダイナミック・モニタリング統計	ダイナミック・モニタリング統計	ダイナミック・モニタを定義したら、ダイナミック・モニタリング・フレームワークのパフォーマンスをチェックします。

モニタ・タイプ	標準設定の名前	説明
SiteScope サーバの状況モニタ	SiteScope サーバの状況	SiteScope が実行されているサーバの多数のサーバ・プロセスおよびリソースをチェックします。
ログ・イベント状況モニタ	ログ・イベント・チェッカー	SiteScope エラー・ログに記録された特定のイベントをチェックします。
負荷モニタの監視	モニタ負荷チェッカー	実行中または実行待機中のモニタ数に関するデータをチェックします。
SSL 証書の状態モニタ	SSL 証書の状態	標準設定のキーストアにある SSL 証明書の状態をチェックします。

BAC 統合設定モニタ

SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして統合する場合、BSM 設定との SiteScope の統合が正しいかどうかをこの状況モニタで追跡できます。このモニタは、無効なパス、内部名、または ID が含まれる BSM にレポートされるグループ、モニタ、測定値の数を表示するのに便利です。また、重複する Topaz ID の数、および Topaz ID が (-1) のインスタンスも表示されます。

モニタの設定の詳細については、1350 ページの「[BAC Integration Configuration Monitor] ページ」を参照してください。

トラブルシューティングと制限事項

本項では、SiteScope サーバの状況を使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

- ▶ 重複する BSM ID や BSM ID == (-1) を使用するオブジェクトがある場合：
 - ▶ JMX コンソール (< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥java¥bin¥jconsole.exe) を開き、[ポート] フィールドに「27676」と入力します。
 - ▶ [MBeans] タブで、**com.mercury.sitescope/Integration/Bac/Tools/BacIntegrationToolsJMX** を選択します。
 - ▶ 重複する BSM ID を使用するオブジェクトの場合は、**fixDuplicateBACConfiguration()** をアクティブ化します。
 - ▶ BSM ID == (-1) を使用するオブジェクトの場合は、**fixMinusOneBACConfiguration()** をアクティブ化します。
 - ▶ 新しい設定を BSM に送信するために、**softSync()** をアクティブ化することもお勧めします。
- ▶ 測定値に誤ったカテゴリ ID が使用されている場合は、SiteScope を再起動します。

BAC 統合統計モニタ

BAC 統合統計モニタでは、BSM の状況がチェックされます。SiteScope を BSM のデータ・コレクタとして統合する場合、SiteScope と BSM の間のトラフィック量をこの状況モニタで追跡できます。測定値は、SiteScope から BSM に毎分送信されます。モニタの設定の詳細については、1352 ページの「[BAC Integration Statistics Monitor] ページ」を参照してください。

接続統計モニタ

接続統計モニタでは、全体的な接続ハンドルの概要が表示されます。接続統計モニタは、SSH および Telnet 接続の動作についてのデータと、Perfex および Perfex_dispatcher プールの統計情報を収集します。このモニタは、接続問題やリモート・サーバの設定問題を分析するのに便利です。モニタの設定の詳細については、1353 ページの「[Connection Statistics Monitor] ページ」を参照してください。

ダイナミック・モニタリング統計

ダイナミック・モニタを定義すると、ダイナミック・モニタリング統計に、ダイナミック・モニタリング・フレームワークのパフォーマンスの概要が表示されます。この概要は、ダイナミック・モニタリング・カウンタおよびしきい値を自動的にアップデートするために、ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用する場合、パフォーマンスを表示し問題を分析するのに便利です。モニタの設定の詳細については、1357 ページの「[ダイナミック モニタリング統計] ページ」を参照してください。

SiteScope サーバの状況モニタ

SiteScope サーバの状況モニタは、SiteScope が実行されているサーバのサーバ・リソースを監視する SiteScope モニタと同じです。これには、CPU、ディスク領域、メモリ、主要プロセスのモニタが含まれます。SiteScope サーバのリソース使用率に関する問題は、設定に問題があるモニタが原因であったり、単に特定の SiteScope がパフォーマンス能力の上限に達していることを示していることもあります。たとえば、SiteScope による CPU 使用率が高い場合、実行中のモニタの総数が制限に到達しようとしていることを示す場合があります。ディスク領域使用率が高い場合、SiteScope 監視データのログが、ローカル・ディスク・ドライブの容量を超えようとしていることを示す場合があります。SiteScope データのログ記録オプションの詳細については、781 ページの「ログ・プリファレンス」を参照してください。モニタの設定の詳細については、1360 ページの「[SiteScope サーバの状況モニタ] ページ」を参照してください。

SiteScope ログ・イベント・モニタ

ログ・イベント・モニタは、SiteScope エラー・ログ (`error.log`) に特定のイベントに関するエラーを書き込む SiteScope モニタ・グループと同じです。これらのイベントには、モニタがスキップされたことを示すログ・エントリや、別のアプリケーションへのデータのレポートで問題があったことを示すログ・エントリがあります。モニタの設定の詳細については、1364 ページの「[ログ イベント状況モニタ] ページ」を参照してください。

SiteScope 負荷モニタの監視

負荷モニタの監視では、実行中モニタ数と実行待機中モニタ数が監視されます。監視のパフォーマンスおよび継続性を維持するためにモニタ負荷の監視は重要です。待機中モニタ数が実行中モニタ数に近づいているか超えると、待機中モニタ数を減らすためにモニタ設定を調整する必要があります。これを行うには、一般的に一部のモニタの実行頻度を減らします。モニタの設定の詳細については、1367 ページの「[モニタ負荷モニタ] ページ」を参照してください。

タスク

SiteScope の状況監視データの分析方法

このタスクでは、SiteScope の状況監視データを分析し、SiteScope ログ・ファイルとサーバ統計を表示する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1346 ページの「前提条件」
- ▶ 1347 ページの「SiteScope の状況モニタのデプロイ」
- ▶ 1347 ページの「SiteScope の状況モニタの表示」
- ▶ 1348 ページの「SiteScope ログ・ファイルの表示」
- ▶ 1348 ページの「モニタ・パフォーマンス・データの表示」

1 前提条件

ログ・ファイルおよび進捗レポートにアクセスするには、適切なユーザ権限が必要です。

- a 左側の表示枠で **[プリファレンス]** をクリックして、**[ユーザ管理プリファレンス]** を選択します。
- b ユーザ名を右クリックして、**[ユーザの編集]** を選択します。
- c **[Edit User Profile]** ダイアログ・ボックスで **[権限]** を展開します。
- d **[その他]** セクションで **[サーバ統計の表示]** と **[ログの表示]** が選択されていることを確認します（これらの設定は標準設定で選択されます）。

2 SiteScope の状況モニタのデプロイ

SiteScope を BSM のシステム可用性管理にインポートするときに SiteScope の状況モニタがない場合は、モニタをデプロイする必要があります。

タスクの詳細については、1349 ページの「SiteScope の状況モニタのデプロイ」を参照してください。

注：SiteScope の状況モニタは SiteScope がデプロイされるときに自動的に有効になるので、通常は存在します。

3 SiteScope の状況モニタの表示

SiteScope の状況モニタで収集されたデータは、SiteScope ダッシュボードで表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1350 ページの「SiteScope の状況のユーザ・インタフェース」を参照してください。

例：

名前	状態	タイプ	ターゲッ...	サマリ	更新日時	詳細			
選択したノード									
Health		グループ		グルー...	10/12/3 ...				
グループ (0 件のうち 0 ...)									
モニタ (7 件のうち 7 件)									
Log Event Checker		ログイベント...		*skippe...	10/12/3 ...				
Monitor Load Checker		モニタ負荷		Current ...	10/12/3 ...				
BAC Integration Statistics		BAC 統合統計		Currentl...	10/12/3 ...				
Health of SiteScope Ser...		負荷モニタの...	SiteSco...	Network...	10/12/3 ...				
BAC Integration Configu...		BACIntegratio...		"SiteSco...	10/12/2 ...				
SSL Certificates State		SSLCertificate...		Expired ...	10/12/2 ...				

4 SiteScope ログ・ファイルの表示

[サーバ統計] コンテキストの [ログ ファイル] ページで、さまざまな SiteScope ログ・ファイルを表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1408 ページの「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

例：

ログファイル			
タイプ	ログファイル	サイズ	最終更新日
その他のログ	alert.log	1 K	11/6/2 14:13
その他のログ	amazon_ec2_integrat...	0 バイト	11/5/27 14:25
監査ログ	audit.log	516 バイト	11/6/3 13:50
監査ログ	audit.log.2011-05-27	73 バイト	11/5/27 14:25
監査ログ	audit.log.2011-05-30	86 バイト	11/5/30 16:32
監査ログ	audit.log.2011-06-01	470 バイト	11/6/1 18:01
監査ログ	audit.log.2011-06-02	1 K	11/6/2 14:45
その他のログ	authentication.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	baselining.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	data_integration.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	downtime.log	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	dynamic_monitoring_...	0 バイト	11/5/27 14:25
エラー ログ	error.log	8 K	11/6/3 13:44
その他のログ	ha.log	223 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	HPSiteScopeOperatio...	0 バイト	11/5/27 14:25
その他のログ	HPSiteScopeOperatio...	0 バイト	11/5/27 14:25

5 モニタ・パフォーマンス・データの表示

[サーバ統計] コンテキストで、SiteScope サーバの負荷および最近実行されたモニタのリストを表示できます。

概念の詳細については、1370 ページの「サーバ統計の使用」を参照してください。

SiteScope の状況モニタのデプロイ

このタスクでは、SiteScope をシステム可用性管理の BSM にインポートしたときにモニタがなかった場合に、SiteScope インストールに SiteScope の状況モニタをデプロイする方法について説明します。

注：このタスクは高度なタスクのうちの 1 つです。詳細については、1346 ページの「SiteScope の状況監視データの分析方法」を参照してください。

SiteScope の状況モニタを SiteScope インストールにデプロイするには、次の手順を実行します。

- 1 状況モニタを表示する SiteScope コンテナを開きます。SiteScope に状況モニタ・グループ・コンテナが含まれていることを確認します。

注：状況モニタ・グループ・コンテナは、状況インジケータ・アイコンで識別されます。

- 2 モニタ・ツリーで [Health テンプレート] を見つけます。クリックしてコンテナの内容を展開します。使用可能な状況モニタのテンプレートが表示されます。
- 3 監視対象の SiteScope が実行されているオペレーティング・システムの状況モニタ・テンプレートを選択します。次を選択できます。
 - ▶ UNIX 状況モニタ
 - ▶ Windows 状況モニタ
- 4 テンプレート・アイコンを右クリックして、ショートカット・メニューから [コピー] を選択します。
- 5 状況モニタのデプロイ先の SiteScope の [Health] モニタ・グループ・コンテナを右クリックして、[貼り付け] を選択します。選択したテンプレートのモニタが設定され、選択した SiteScope サーバにデプロイされます。

参照情報

SiteScope の状況のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [BAC Integration Configuration Monitor] ページ (1350 ページ)
- ▶ [BAC Integration Statistics Monitor] ページ (1352 ページ)
- ▶ [Connection Statistics Monitor] ページ (1353 ページ)
- ▶ [ダイナミック モニタリング統計] ページ (1357 ページ)
- ▶ [SiteScope サーバの状況モニタ] ページ (1360 ページ)
- ▶ [ログ イベント状況モニタ] ページ (1364 ページ)
- ▶ [モニタ負荷モニタ] ページ (1367 ページ)
- ▶ [SSL 証書の状態モニタ] ページ (1368 ページ)

[BAC Integration Configuration Monitor] ページ

このページでは、BSM 設定との SiteScope の統合が正しいかどうかをチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [状況] を展開して、[BAC Integration Configuration] をクリックします。
重要な情報	監視データは、SiteScope が BSM のデータ・コレクタとして統合される場合にのみ関係します。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1343 ページの「BAC 統合設定モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Total Groups : データを BSM にレポートするグループの総数。 ▶ Total Monitors : データを BSM にレポートするモニタの総数。 ▶ Duplicate BSM ID : BSM にレポートされた重複する BSM ID の数。すべての SiteScope オブジェクトには、一意の BSM ID があります。2 つのオブジェクトで同じ ID が使用されている場合、データを BSM に送信できるのは、これらのオブジェクトのうちの 1 つのみです。この問題のトラブルシューティングについては、1343 ページの「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。 ▶ BSM ID == (-1) : すべての SiteScope オブジェクトには、一意の BSM ID があります。SiteScope オブジェクトの ID 値が (-1) の場合、そのデータは BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1343 ページの「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。 ▶ Group with invalid path : SiteScope グループに有効なパスがない場合、そのグループは BSM に送信されません。 ▶ Groups with duplicate name : SiteScope グループに一意の内部名がない場合、そのグループは BSM に送信されません。 ▶ Monitor with invalid path : SiteScope モニタに有効なパスがない場合、そのモニタは BSM に送信されません。 ▶ Monitors without internal ID : SiteScope モニタに一意の内部 ID が含まれていない場合、そのモニタは BSM に送信されません。 ▶ Monitors without internal name : SiteScope モニタに有効な内部名が含まれていない場合、このモニタは BSM に送信されません。 ▶ Measurements with wrong category ID : SiteScope 測定値に有効なカテゴリ ID が含まれていない場合、その測定値は BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1343 ページの「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。 ▶ Target with BSM ID == (-1) : すべてのリモート・ターゲットには、一意の BSM ID があります。リモート・ターゲットの ID 値が (-1) の場合、そのデータは BSM に送信されません。この問題のトラブルシューティングについては、1343 ページの「トラブルシューティングと制限事項」を参照してください。

[BAC Integration Statistics Monitor] ページ

このページでは, SiteScope と BSM の間のトラフィック量をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [状況] を展開して, [BAC 統合統計] をクリックします。
重要な情報	監視データは, SiteScope が BSM のデータ・コレクタとして統合される場合にのみ関係します。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1344 ページの「BAC 統合統計モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については, 447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Currently Logging to Business Service Management : 現在 BSM にログ記録されている 1 分あたりの測定値の数を表示します。 ▶ Number of Topology Scripts in Queue : 実行待機中のトポロジ・スクリプトの数を表示します。これらのスクリプトによって, BSM にトポロジ・データが転送されます。これらのスクリプトは SiteScope で設定変更があるたびに実行する必要があります。キューは, SiteScope が最初に BSM に登録される時, または SiteScope で多数の設定変更が行われたときに増えます。

 **[Connection Statistics Monitor] ページ**

このページには、全体的な接続ハンドルの概要が表示されます。接続統計モニタは、SSH および Telnet 接続の動作についてのデータと、Perfex および Perfex_dispatcher プールの統計情報を収集します。このモニタは、接続問題やリモート・サーバの設定問題を分析するのに便利です。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[Connection Statistics Monitor] をクリックします。
関連情報	<ul style="list-style-type: none">▶ 1344 ページの「接続統計モニタ」▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SSH Connection Counters	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 開いた合計：開いた SSH 接続の総数。この数が [現在割り当て済みのリソース] の数を大きく上回っている場合は、設定の問題を示しています。次の状況が発生していないかを確認する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 接続キャッシュが無効になった ▶ 不正なログインまたはパスワードが使用された ▶ リモート・サーバ・タイムアウトが短すぎる ▶ 閉じた合計：最後に SiteScope が再起動されてから閉じた SSH 接続の数。 ▶ V1 を開くのに失敗した合計：SSH バージョン 1 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。標準設定では、V2 での接続を試みる前に、V1 を使用して接続が試行されます。この数が大きい場合は、問題が発生しているリモート・サーバで [SSH バージョン 2 のみを使用] オプションを選択することをお勧めします。 ▶ V2 を開くのに失敗した合計：SSH バージョン 2 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。この数が大きい場合は、リモート・サーバで正しいログインとパスワードが使用されたことを検証し、リモート・サーバ上の SSH バージョンを検証します (V1 または V2)。 ▶ 再利用：最後に SiteScope が再起動されてから再利用された SSH 接続の数。 ▶ 現在割り当て済みのリソース：現在開いている SSH 接続の数。 ▶ 現在使用中：現在開いていて、実行中のモニタで使用されている SSH 接続の数。

UI 要素	説明
Telnet Connection Counters	<ul style="list-style-type: none">▶ 開いた合計：最後に SiteScope が再起動されてから開いた telnet 接続の数。▶ 閉じた合計：最後に SiteScope が再起動されてから閉じた telnet 接続の数。▶ 再利用：最後に SiteScope が再起動されてから再利用された telnet 接続の数。▶ 現在割り当て済みのリソース：現在開かれている telnet 接続の数。▶ 現在使用中：現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている telnet 接続の数。

UI 要素	説明
<p>Perfex/Perfex dispatcher Connection Counters</p>	<ul style="list-style-type: none"> ▶ アイドル・プロセス : 現在アイドル状態のプロセスの数。 ▶ 使用中プロセス : 現在使用中状態のプロセスの数。 ▶ プロセス合計 : プロセスの総数 (アイドル・プロセスと使用中プロセスの合計)。 ▶ プロセス・プール・キューの長さ : 使用可能な perfex の現在待機中のモニタ数。この値は、perfex で実行中のモニタ数が多すぎる、または perfex プールが小さすぎることを示す場合があります。 ▶ 空きプロセスの平均待機時間 : プロセスが使用可能になるまでの平均待機時間 (ミリ秒単位)。この値が 30,000 ミリ秒 (30 秒) を超えると、それ以降のモニタが失敗します。平均待機時間が長い場合は、プールのプロセス数を増やす必要があることを示します。 ▶ 平均実行時間 : perfex の実行にかかる平均時間 (ミリ秒単位)。ここでは、次を示します。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ ネットワーク速度。要求を送信し、サーバから応答を受信するのにかかる時間。 ▶ perfex の可用性。実行を完了し、perfex をプールに戻すまでにかかる平均時間。 ▶ perfex を使用しているモニタ数。 ▶ サーバ・タイムアウトを待機するプロセス : 呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

[ダイナミック モニタリング統計] ページ

このページには、ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新するとき統計が表示されます。統計には、発生した特定のダイナミック・モニタリング・アクションの合計回数と、最後の 10 分間の発生回数が表示されます。このモニタはダイナミック・モニタリングのパフォーマンスを表示し問題を分析するのに便利です。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [状況] を展開して、[ダイナミック モニタリング統計] をクリックします。
重要な情報	この情報は [ダイナミック モニタリング] タブをクリックして、[サーバ統計] コンテキストからも入手できます。
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1344 ページの「ダイナミック・モニタリング統計」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

メイン設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
定義： * ダイナミック・タスク ：サーバからカウンタを取得し、モニタに定義されたパターンに一致するカウンタをその中から見つけ出すという定期的なアクション。 ** カウンタ・ファイル ：カウンタは <SiteScope ルート・ディレクトリ>%templates.application フォルダの下に配置される xml ファイルに保存されます。	
平均タスク実行時間 (ミリ秒)	ダイナミック・タスク * の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
最後の 10 分間の平均タスク実行時間 (ミリ秒)	最後の 10 分間にダイナミック・タスク * の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。

UI 要素	説明
平均タスク待機時間 (ミリ秒)	タスクを受け取ったときからダイナミック・タスク * の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
最後の 10 分間の平均タスク待機時間 (ミリ秒)	最後の 10 分間にタスクを受け取ったときからダイナミック・タスク * の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
最後 10 分間のダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの数	最後の 10 分間に、(ユーザ変更をオーバーライドしないように) ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない回数。
最後の 10 分間にカウンタのマッチングの最大数を超えた回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を超えた回数。
最後の 10 分間にサーバからのカウンタをマッチングできなかった回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった回数。
最後の 10 分間にファイルからカウンタを抽出できない回数	最後の 10 分間に、カウンタ・ファイル ** からカウンタを抽出できない回数。
最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数	最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数。

UI 要素	説明
最後 10 分間にリソース消費のためにダイナミック・タスクを実行できない回数	最後の 10 分間に、最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイナミック・タスク * を実行できない回数。 [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定] でこれらの設定を実行できます。詳細については、728 ページの「動的監視設定」を参照してください。
最後の 10 分間に変更を保存できない回数	最後の 10 分間に永続 SiteScope にカウンタ変更を保存できない回数。
最後の 10 分間に保存されていないカウンタ・ファイル数	最後の 10 分間に既存のカウンタ・ファイル ** を削除、または新しいカウンタ・ファイル保存できない回数。

[SiteScope サーバの状況モニタ] ページ

このページでは、ローカルの SiteScope インストールの SiteScope サーバ・リソースおよびプロセス統計をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[Health of SiteScope Server] をクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ プロセス/perfex カウンタは、SiteScope サーバの状況モニタから削除されており、現在はサポートされていません。 ▶ テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。 選択できるカウンタの最大数は 100 です。SiteScope の以前のバージョンからテンプレート・モニタをインポートする場合、またはテンプレートへのコピーを実行する場合、カウンタ数に制限はありません。
関連タスク	1346 ページの「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1345 ページの「SiteScope サーバの状況モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

SiteScope サーバの状況モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ (UNIX の場合)	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Current Monitors Run Per Minute ▶ Current Monitors Running ▶ Current Monitors Waiting ▶ Maximum Monitors Run Per Minute ▶ Maximum Monitors Running ▶ Maximum Monitors Waiting ▶ Used Disk Space on SiteScope Drive (UNIX にインストールされている SiteScope からアクセス可能) ▶ MegaBytes Available on SiteScope Drive ▶ Physical Memory Free ▶ Physical Memory Free Megabytes ▶ Swap Free ▶ Swap Free Megabytes ▶ Load Avg 5min ▶ SiteScope Process Memory ▶ SiteScope Process Thread Count ▶ SiteScope Process Handle Count ▶ Average CPU ▶ PageIns/sec ▶ PageOuts/sec ▶ SwapIns/sec ▶ SwapOuts/sec ▶ ContextSwitches/sec ▶ Net_TotalPacketsIn/sec ▶ Net_TotalPacketsOut/sec ▶ Net_TotalCollisions/sec

UI 要素	説明
<p>カウンタ (Windows の場合)</p>	<p>メモリ</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Page Faults/sec ▶ Pool Paged Bytes ▶ Pool Nonpaged Bytes ▶ % Committed Bytes In Use ▶ Available MBytes <p>システム</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Context Switches/sec ▶ File Data Operations/sec ▶ System Up Time ▶ Processor Queue Length ▶ プロセス ▶ スレッド <p>Processor</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ _Total <ul style="list-style-type: none"> ▶ % Processor Time ▶ % DPC Time <p>Process</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ java <ul style="list-style-type: none"> ▶ Thread Count ▶ Pool Paged Bytes ▶ Pool Nonpaged Bytes ▶ Handle Count

UI 要素	説明
カウンタ (Windows の場合)	<p>Network Interface</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ MS TCP Loopback interface <ul style="list-style-type: none"> ▶ Bytes Total/sec ▶ Current Bandwidth ▶ Bytes Received/sec ▶ Bytes Sent/sec ▶ <イーサネット・ハードウェア> (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) <ul style="list-style-type: none"> ▶ Bytes Total/sec ▶ Current Bandwidth ▶ Bytes Received/sec ▶ Bytes Sent/sec <p>LogicalDisk</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ <論理ドライブ> (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) <ul style="list-style-type: none"> ▶ % Free Space ▶ Free Megabytes ▶ Avg.Disk Bytes/Transfer ▶ _Total <ul style="list-style-type: none"> ▶ % Free Space ▶ Free Megabytes ▶ Avg.Disk Bytes/Transfer <p>PhysicalDisk</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ _Total <ul style="list-style-type: none"> ▶ Current Disk Queue Length ▶ Disk Transfers/sec ▶ <物理ディスク> (特定の SiteScope サーバに固有のハードウェア) <ul style="list-style-type: none"> ▶ Current Disk Queue Length ▶ Disk Transfers/sec

UI 要素	説明
カウンタ (Windows の場合)	サーバ <ul style="list-style-type: none"> ▶ Bytes Total/sec ▶ Errors Logon ▶ Errors Access Permissions ▶ Errors System ▶ Files Open ▶ Server Sessions

[ログ イベント状況モニタ] ページ

このページでは、ローカルの SiteScope インストールの **error.log** ファイルで特定のイベントを監視できます。これらのイベントには、モニタがスキップされたことを示すログ・エントリや、別のアプリケーションへのデータのレポートで問題があったことを示すログ・エントリがあります。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、 [Log Event Checker] をクリックします。
関連タスク	1346 ページの「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1345 ページの「SiteScope ログ・イベント・モニタ」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

ログ・イベント状況モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ skipped #1 : モニタがスケジュールされていた実行を 1 回スキップしました。 ▶ skipped #2 : モニタがスケジュールされていた実行を 2 回スキップしました。 ▶ skipped #3 : モニタがスケジュールされていた実行を 3 回スキップしました。 ▶ skipped #4 : モニタがスケジュールされていた実行を 4 回スキップしました。 ▶ skipped #5 : モニタがスケジュールされていた実行を 5 回スキップしました。 ▶ SiteScope is shutting down : SiteScope がシャットダウンしました。 ▶ Reached the limit of processes in the process pool : プロセス・プールから要求されたプロセス数が、プールで使用可能なプロセス数を超えています。 ▶ Error. data reporter failed to report chunk of data : BSM への SiteScope モニタ測定値データの転送で障害が発生しました。 ▶ Error. config reporter failed to report chunk of data : BSM のシステム可用性管理への SiteScope 設定データの転送で障害が発生しました。 ▶ Error. HP Business Service Management failed to process data : SiteScope から送信されたデータの処理で障害が発生したことが BSM からレポートされました。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Error. CacheSender. Got to the max number of cached files : BSM への転送待機中にキャッシュ・データ・ファイルの最大数に達しました。これは、SiteScope と BSM の間のデータ転送が中断された場合に発生することがあります。 ▶ Error. CacheSender. Got to the max old dir size : BSM への転送待機中にキャッシュ・データ・ファイルの最大ディレクトリ・サイズに達しました。これは、SiteScope と BSM の間のデータ転送が中断された場合に発生することがあります。 ▶ HP Business Service Management SEVERE : SEVERE ステータスのデータ転送または処理障害が BSM からレポートされました。 ▶ Commit verification failed。 ▶ Error loading monitor。 ▶ Error contacting mirror server。 ▶ Error:open SSH connections limit reached。 ▶ Error:failure in baseline process。 ▶ Error:failed to parse rule。 ▶ Topology Reporter failed to report。
カウンタ値のリセット	モニタのカウンタ値が 0 にリセットされます。

[モニタ 負荷モニタ] ページ

このページでは、ローカルの SiteScope インストールの進捗レポートでレポートされる SiteScope の負荷統計をチェックできます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[Monitor Load Checker] をクリックします。
関連タスク	1346 ページの「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1345 ページの「SiteScope 負荷モニタの監視」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

負荷モニタの監視の設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Current Monitors Run Per Minute ▶ Current Monitors Running ▶ Current Monitors Waiting ▶ Maximum Monitors Run Per Minute ▶ Maximum Monitors Running ▶ Maximum Monitors Waiting

[SSL 証書の状態モニタ] ページ

このページでは、標準設定のキーストア(<SiteScope のルート・ディレクトリ>¥java¥lib¥security¥cacerts)にある SSL 証明書の状態を確認できます。この場所に、URL、WebSphere アプリケーション・サーバ、または VMware ベースのサーバを監視するためにインポートされたクライアント証明書が保存されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで [Health] を展開して、[SSL 証書の状態] をクリックします。
関連タスク	1346 ページの「SiteScope の状況監視データの分析方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 905 ページの「証明書管理」 ▶ モニタ固有の設定を次に示します。すべてのモニタに共通する設定の詳細については、447 ページの「共通モニタ設定」を参照してください。

SSL 証書の状態モニタの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
期限切れ残り日数	<p>指定の日数で証明書の期限が切れる (ただしまだ期限は切れていない) 場合、[Certificates expiring soon] カウンタに追加されます。</p> <p>標準設定値 : 7 日</p>
カウンタ	<ul style="list-style-type: none"> ▶ Expired certificates : すでに期限が切れている証明書のカンマ区切りリスト。 ▶ Certificates expiring soon : [期限切れ残り日数] で示される期間で期限切れになる証明書のカンマ区切りリスト。まもなく (N 日後。これはモニタ設定によって決まる固定値です) 期限切れになりますが、まだ期限切れではありません。 ▶ Number of expired certificates ▶ Number of certificates expiring soon

68

サーバ統計の表示

本章の内容

概念

- ▶ サーバ統計の使用 (1370 ページ)
- ▶ SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析 (1371 ページ)
- ▶ ログ・ファイルの使用 (1374 ページ)

タスク

- ▶ SiteScope サーバ統計の分析方法 (1377 ページ)
- ▶ 監査ログの設定方法 (1378 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope ログ・ファイルの列 (1379 ページ)
- ▶ 監査ログのエントリ (1380 ページ)
- ▶ SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース (1391 ページ)

概念

サーバ統計の使用

SiteScope の「**サーバ統計**」コンテキストには、いくつかの重要な SiteScope サーバのパフォーマンス測定値の概要が表示されます。このパフォーマンス測定値は、SiteScope のパフォーマンス、安定性、状況の分析、およびボトルネックのデバッグに使用できます。このコンテキストには、SiteScope サーバの負荷を表す統計情報、実行中のモニタや最近実行されたモニタのリスト、perfex プールのサマリ、WMI 統計、SSH 接続、Telnet 接続、ダイナミック・モニタリング統計が含まれます。また、SiteScope ログ・ファイルも表示されます。「サーバ統計」コンテキストは、20 秒ごとに更新されます。

「サーバ統計」コンテキストには、次のページがあります。

ページ	説明
全般	SiteScope サーバの負荷を表す重要な統計情報 (実行中モニタ数や待機中モニタ数など) およびタイプごとの実行中モニタ数のリストが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1391 ページの「 [一般] ページ 」を参照してください。
実行中のモニタ数	実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時間、実行で返された状態のリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1393 ページの「 [実行中モニタ] ページ 」を参照してください。
Perfex プロセス プール	プロセス・マネージャ・サマリや、perfex ツールおよび perfex_dispatcher ツールの統計情報テーブルが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1395 ページの「 [Perfex プロセス プール] ページ 」を参照してください。
WMI 統計	Windows Management Instrumentation (WMI) 統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1398 ページの「 [WMI 統計] ページ 」を参照してください。

ページ	説明
SSH 接続	SSH を使用して、UNIX または Windows のリモート・サーバに接続している場合、SSH 統計および SSH 接続サマリが表示されます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1400 ページの「[SSH 接続] ページ」を参照してください。
Telnet 接続	リモート UNIX または Windows サーバへの接続に Telnet を使用した場合の Telnet 統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1402 ページの「[Telnet 接続] ページ」を参照してください。
ダイナミック・モニタリング	ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新するときに統計を表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1404 ページの「[ダイナミック モニタリング] ページ」を参照してください。
ログ・ファイル	SiteScope のパフォーマンスの問題の理解、モニタと警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認に役立つ、SiteScope のログ・ファイルのリストを表示します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1408 ページの「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

SiteScope サーバの負荷を表す統計情報の解析

監視負荷は、SiteScope の拡大・縮小の問題、モニタ設定の問題、またはネットワーク・パフォーマンスの問題の重要な指標になります。SiteScope モニタの実行モデル、および該当のモデルに応じたサーバ・パフォーマンス・データの解析に関する簡単な説明を次に示します。

SiteScope モニタ・インスタンスは、スケジュールされた間隔で定期的に SiteScope アプリケーションによって実行される不可欠な命令セットです。モニタ・インスタンスを定義すると、SiteScope によって、実行（更新）の頻度とスケジュール・オプションに基づいてモニタが実行用のキューに入れられます。モニタ・インスタンスが「無効」とマークされている場合でも、キューにスケジュールされますが、通常の命令は実行されません。

Java ベース・アプリケーションとして、SiteScope では、マルチスレッドを利用してモニタ・タスクを並列実行できます。実行がスケジュールされた各モニタ・インスタンスはスレッドに割り当てられます。スレッドに割り当てられると、モニタ・インスタンスは**実行中モニタ**になります。モニタの実行命令の結果が得られるか、タイムアウト値（該当する場合）に達するまで、スレッドに割り当てられたままになります。

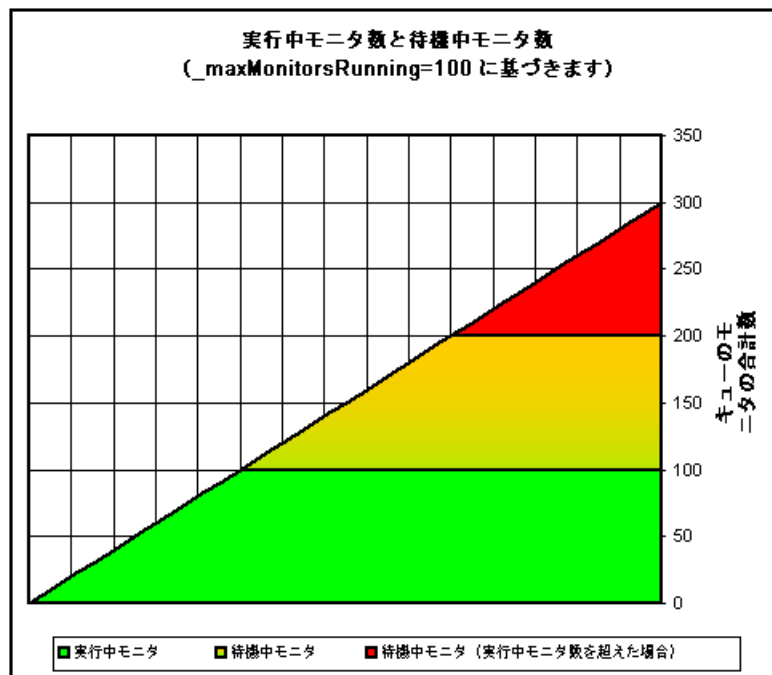
このモデルでも、モニタはすぐに実行されるわけではなく、同時に実行できるモニタ・スレッドの数には制限があります。使用できるスレッドの上限に達すると、実行を要求されたモニタは、実行スレッドを待機する**待機中モニタ**になります。

サーバ容量やネットワーク・デプロイメントの詳細は大きく異なる可能性があるため、特定の値や制限を SiteScope の監視負荷に割り当てることは困難です。また、単純にトランザクションのネットワーク・トラフィックの問題や SiteScope のモニタ設定の問題が原因で、監視負荷が時間の経過とともに大きく変わる場合もあります。

監視負荷を解析するための重要な警告シグナルとして、実行中モニタ数に対する待機中モニタ数の割合が挙げられます。通常、実行中モニタ数に対する待機中モニタ数の割合が常に 1:2 以上になっていなければ、一部のモニタが実行を待機していても問題はありません。たとえば、実行中モニタの最大数が 100 で、待機中モニタ数が 50 の場合、待機中モニタと実行中モニタの割合が 1:2 になります。

注 : `master.config` で制御される `_maxMonitorsRunning=` 設定のモニタ実行スレッドの初期最大数は 400 です (`master.xml` の標準設定値は 30 です)。

次のグラフは、実行中モニタ数と待機中モニタ数の関係を視覚的に表しています。このグラフは、モニタ数が 100 に設定されている `_maxMonitorsRunning` に基づいています。緑色の領域は、キューのモニタの数が 100 を超えるまでは、要求されたすべてのモニタを SiteScope で実行できることを表しています。このレベルでは、実行がスケジュールされている追加モニタの状態が [Monitor Waiting] になります。赤色の領域は、待機中モニタ数が実行中モニタ数の 2 倍以上になっていることを表しています。これは、SiteScope モニタ設定がサーバおよびネットワークの容量に対してうまく調整できていないことを示しています。



待機中モニタ数が多すぎる状態が継続する場合、次のモニタ設定を調整できます。

- ▶ **頻度**：これは、すべてのモニタ・タイプの基本的なスケジュール・パラメータです。短い間隔で多数のモニタが実行（または更新）されるように設定されていることが原因で、実行中モニタ数と待機中モニタ数が多くなっていることがよくあります。最小更新間隔は 15 秒です。さまざまなシステム要因によって、一部のモニタ・アクションで完了時間が 15 秒より長くなる場合があります。たとえば、Web トランザクション、データベース・クエリ、リモート・サーバへのログオン、正規表現の照合でモニタの完了が遅延する可能性があります。1546 ページの「モニタ・サマリ・レポート」を使用して、モニタ・グループの**〔頻度〕**設定を確認し、一部のモニタの値を増やすことを検討してください。
- ▶ **エラーの検証**：このオプションを定期的または頻繁に使用すると、該当の SiteScope モニタでエラー状態が検出されるたびにモニタ実行のキューが急激に増加します。このオプションにはその目的がありますが、すべてのモニタに標準設定で使用しないでください。1546 ページの「モニタ・サマリ・レポート」を使用して、**〔エラーの検証〕**設定が有効になっている可能性のあるモニタを表示します。

SiteScope サーバのパフォーマンス・データの詳細については、1393 ページの「[実行中モニタ] ページ」を参照してください。

ログ・ファイルの使用

SiteScope には多数のログ・ファイルが保持されています。ログ・ファイルは、SiteScope のパフォーマンスの問題の把握、モニタや警告の問題のトラブルシューティング、SiteScope の管理アクションの確認を行う場合に役立ちます。

[サーバ統計] コンテキストの**〔ログ ファイル〕**メニューを使用して、ログ・ファイルにアクセスできます。ログ・ファイルをクリックすると、新しいブラウザ・ウィンドウが開き、ログ・ファイルのテキストが表示されます。スクロール・バーを使用してログの内容を表示できます。また、ブラウザのテキスト検索ユーティリティを使用して特定の情報を見つけることもできます。たとえば、モニタの**〔名前〕**プロパティに表示される一意のテキスト文字列を検索して、特定のモニタ・インスタンスのエントリを見つけることができます。各種 SiteScope ログ・ファイルの詳細については、1408 ページの「**〔ログ ファイル〕** ページ」を参照してください。

ログ・ファイルはプレーン・テキストで書き込まれ、**< SiteScope のルート・パス > %logs** ディレクトリに保存されます。標準設定では、これらのログ・ファイルはタブ区切りのテキスト・ファイルになります。これらのファイルの順序や内容を理解しておく、特定のモニタの結果を検証する場合や、SiteScope モニタの結果を別のデータベースに移す場合に役立ちます。詳細については、1379 ページの「SiteScope ログ・ファイルの列」を参照してください。

注 : SiteScope ログ・ファイルでは Unicode 文字はサポートされません。英語以外の文字はログで文字化けします。回避策として、対応する OS のロケールにインストールされた SiteScope サーバを使用します。たとえば、日本語ロケールの場合は日本語版の Windows OS にインストールされた SiteScope を使用します。

本項の内容

- ▶ 1375 ページの「監査ログの使用」
- ▶ 1376 ページの「監査ログの制限事項」

監査ログの使用

SiteScope の監査ログには、SiteScope で実行されたアクション、実行時間、実行ユーザが記録されています。これには、新しいユーザ・インタフェースで実行された設定の変更（モニタ、テンプレート、警告の作成など）が含まれています。

注 : SiteScope が HP Business Service Management の [SAM 管理] に関連付けられている場合、SiteScope で実行したアクションは SiteScope の監査ログではなく HP Business Service Management の監査ログに表示されます。

それぞれの操作が実行されると、監査ログにエントリが作成されます。現在の監査ログがそのサイズ制限に達すると、監査ログが閉じて新しいログが作成されます。古いログの名前は、**audit.log.1**、**audit.log.2** のようになります（以下同様）。名前に連結される数値が高いほど、古いログになります。保持するバックアップ監査ログのサイズ制限と最大数の設定の詳細については、1378 ページの「監査ログの設定方法」を参照してください。

現在の監査ログの名前は **audit.log** で、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %logs** ディレクトリにあります。このディレクトリまたは SiteScope アプリケーションから監査ログにアクセスできます。監査ログの表示の詳細については、1408 ページの「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

モニタ・ツリーで実行される大部分の操作は、監査ログに記録されます。監査ログに記録されない操作のリストについては、1376 ページの「監査ログの制限事項」を参照してください。

監査ログの制限事項

- ▶ 監査ログのエントリは、英語でのみ作成できます。これは、SiteScope の表示言語に関係なく、監査ログのエントリの表示も英語のみであることを意味しています。
- ▶ 次の操作は監査ログに記録されません。
 - ▶ テンプレートをデプロイするときに行う、テンプレートのさまざまな要素に対する操作は記録されません。

たとえば、グループ **MM2_Servers**（この新しいグループにはモニタが含まれます）を作成するテンプレートをデプロイする場合はこれに該当します。監査ログのエントリは次のようになります。

実行された操作：設定テンプレート 'MM2' は MM2_Servers に貼り付けられました。

MM2_Servers グループのモニタの作成に関するエントリは監査ログにありません。

- ▶ SiteScope から HP Business Service Management へのアタッチおよびデタッチはログに記録されません。

SiteScope が HP Business Service Management の [SAM 管理] に関連付けられている場合、SiteScope で実行したアクションは SiteScope の監査ログではなく BSM の監査ログに表示されます。

タスク

SiteScope サーバ統計の分析方法

このタスクでは、SiteScope サーバ統計とログ・ファイルを分析する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1377 ページの「前提条件」
- ▶ 1377 ページの「SiteScope サーバ統計の表示」
- ▶ 1377 ページの「SiteScope ログ・ファイルの表示」

1 前提条件

サーバ統計コンテキストにアクセスするには、SiteScope の管理者、または **サーバ統計の表示** 権限を付与されたユーザ（この設定は標準設定で選択されている）でなければなりません。

ユーザ権限の詳細については、871 ページの「権限」を参照してください。

2 SiteScope サーバ統計の表示

[サーバ統計] コンテキストでは、SiteScope サーバの負荷、実行中および最近実行したモニタのリスト、perfex プロセス・プール、WMI、SSH 接続、Telnet 接続、およびダイナミック・モニタリング統計を表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1391 ページの「SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース」を参照してください。

3 SiteScope ログ・ファイルの表示

[サーバ統計] コンテキストの [ログ ファイル] ページで、さまざまな SiteScope ログ・ファイルを表示できます。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1408 ページの「[ログ ファイル] ページ」を参照してください。

監査ログの設定方法

このタスクでは、監査ログの最大サイズを設定する手順について説明します。

- 1** < SiteScope のルート・ディレクトリ > `¥conf¥core¥Tools¥log4j¥PlainJava¥` ディレクトリにある `log4j.properties` ファイルを開きます。
- 2** `MaxFileSize` にログの最大行数を設定します。
- 3** `MaxBackupIndex` に、保持しているバックアップ監査ログが何個に達したら最も古い監査ログを削除するのか、最大数を設定します。

たとえば、`MaxBackupIndex` が 5 の場合、保持するバックアップ監査ログは最大 5 個です。5 個のバックアップ・ログ・ファイルが存在する場合、現在の `audit.log` ファイルが `MaxFileSize` サイズに達すると、`audit.log.5` が削除され、`audit.log.4` が `audit.log.5` に、`audit.log.3` が `audit.log.4` というように名前が変更されます。現在の `audit.log` の名前が `audit.log.1` に変更されて、新しい `audit.log` が作成されます。

参照情報

SiteScope ログ・ファイルの列

SiteScope が、インフラストラクチャ内のコンポーネントの可用性をテストするようにモニタ指示を実行すると、モニタの結果がデータ・ログ・ファイルに書き込まれます。SiteScope 監視データのログの各ログ・エントリの先頭 6 列は、どのモニタ・タイプでも同じです。各ログ・エントリの第 7 列以降、各列の内容はモニタ・タイプごとに固有になります。

次の表で、それぞれの列の内容について説明します。各ログ・ファイル内の列は、タブ区切りのテキストとして書き込まれます。

列	列のデータ
1	サンプルが記録された日時。
2	カテゴリ (たとえば, <code>good</code> , <code>error</code> , <code>warning</code> , <code>nodata</code> など)。
3	モニタが定義したモニタ・グループ名 (<code>ownerID</code> と呼ばれます)。
4	モニタ・タイトルのテキスト。
5	<code>stateString</code> ([Group details] ページに表示される状態文字列)。
6	ID: サンプル番号 (このモニタの一意の ID。グループ + ID がモニタの一意のキーになります)。サンプル番号は、そのモニタの一意のサンプル番号です。

監査ログのエントリ

監査ログの各行には、SiteScope で実行された操作が記述されます。

本項の内容

- ▶ 1381 ページの「SiteScope の開始」
- ▶ 1381 ページの「グループ操作」
- ▶ 1382 ページの「モニタ操作」
- ▶ 1382 ページの「一般プリファレンスの更新」
- ▶ 1383 ページの「その他のプリファレンスの更新」
- ▶ 1384 ページの「テンプレートの適用」
- ▶ 1384 ページの「テンプレート・コンテナ」
- ▶ 1385 ページの「テンプレートの作成, 削除, 変更」
- ▶ 1385 ページの「テンプレート変数」
- ▶ 1386 ページの「テンプレート・グループ」
- ▶ 1386 ページの「テンプレート・リモート・オブジェクト」
- ▶ 1387 ページの「テンプレート警告」
- ▶ 1387 ページの「テンプレート・モニタ」
- ▶ 1388 ページの「警告」
- ▶ 1388 ページの「レポート」
- ▶ 1389 ページの「[[グローバル検索と置換] の操作」
- ▶ 1389 ページの「ログインとログアウト」
- ▶ 1389 ページの「ログインの失敗」
- ▶ 1390 ページの「パスワードの変更」
- ▶ 1390 ページの「カテゴリ」

SiteScope の開始

SiteScope を再起動すると、エント리는次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - SiteScope 監査ログが初期化されました
```

グループ操作

グループに対して実行された操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : グループ  
<グループ名> <操作> <コンテナ>
```

各パラメータの内容は次のとおりです。

- ▶ **<グループ名>**は、操作対象となったグループの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : グループが作成された場所。
 - ▶ **Updated in** : グループの情報が更新された場所。
 - ▶ **Deleted From** : グループが削除された場所。
 - ▶ **Pasted On** : ユーザがグループ間で情報をコピーしている。
- ▶ **<コンテナ>**は、操作対象となったグループ・コンテナの名前です。

モニタ操作

モニタに対して実行された操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : モニタ  
<モニタ名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<モニタ名>**は、操作対象となったモニタの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : ユーザがモニタを作成した場所。
 - ▶ **Updated in** : ユーザがモニタの情報を更新した場所。
 - ▶ **Deleted From** : ユーザがモニタを削除した場所。
 - ▶ **Pasted On** : ユーザが情報をモニタ間でコピーしている。
- ▶ **<コンテナ>**はコンテナの名前です。

一般プリファレンスの更新

モニタ・ツリーの [**プリファレンス**] コンテナの下にある [**一般プリファレンス**] への変更は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 :  
<プリファレンス名> が更新されました
```

<**プリファレンス名**>は、変更されたプリファレンスの名前です。

プリファレンスの変更の内容はログには含まれません。

その他のプリファレンスの更新

モニタ・ツリーの「**一般プリファレンス**」に表示されていないプリファレンスへの変更は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ: <ユーザ名> 実行された操作:  
<プリファレンス名> が <オブジェクト名> <操作> と命名されました
```

- ▶ **<プリファレンス名>**はプリファレンスの名前です。
- ▶ **<オブジェクト名>**は、プリファレンスが参照するオブジェクトの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Updated** : ユーザがプリファレンスを変更している。
 - ▶ **Deleted** : ユーザがプリファレンスを削除している。

この形式は、次のプリファレンス・タイプに使用されます。

- ▶ Microsoft Windows リモート・サーバ
- ▶ UNIX リモート・サーバ
- ▶ 電子メールのプリファレンス
- ▶ ページャ・プリファレンス
- ▶ SNMP プリファレンス
- ▶ 時間指定スケジュールのプリファレンス
- ▶ 期間指定スケジュール・プリファレンス
- ▶ ユーザ管理プリファレンス

テンプレートの適用

テンプレートをデプロイしてエンティティが作成されると、ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : 設定テンプレート  
<テンプレート名> が <グループ名> に貼り付けられました >
```

- ▶ **<テンプレート名>**は、エンティティの作成元となったテンプレートの名前です。
- ▶ **<グループ名>**は、テンプレートから作成されたエンティティが含まれるグループの名前です。

注 : テンプレートをデプロイしてどのエンティティが作成されたかを確認するには、テンプレート自体の内容を参照します。エンティティに関する情報は監査ログには含まれません。

テンプレート・コンテナ

テンプレート・コンテナが作成、削除、更新されると、ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート・  
コンテナ <コンテナ名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<コンテナ名>**は、作成、削除、または更新されたテンプレート・コンテナの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created in :** ユーザがテンプレート・コンテナを作成した場所。
 - ▶ **Deleted from :** ユーザがテンプレート・コンテナを削除した場所。
 - ▶ **Updated in :** ユーザがテンプレート・コンテナを変更した場所。
- ▶ **<コンテナ>**は、テンプレートが含まれるコンテナの名前です。

テンプレートの作成, 削除, 変更

テンプレートが作成, 削除, 更新されると, ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート
<テンプレート名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<テンプレート名>**は, 作成, 削除, または更新されたテンプレートの名前です。
- ▶ **<操作>**は, 次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : ユーザがテンプレートを作成した場所。
 - ▶ **Deleted from** : ユーザがテンプレートを削除した場所。
 - ▶ **Updated in** : ユーザがテンプレートを変更した場所。
- ▶ **<コンテナ>**は, テンプレートが含まれるコンテナの名前です。

テンプレート変数

サーバ ID などのオブジェクトに関連するテンプレート変数がコンテナ内で作成, 削除, 更新されると, ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート
変数 <変数名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<変数名>**は, 作成, 削除, または更新された変数の名前です。
- ▶ **<操作>**は, 次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : オブジェクトのテンプレート変数が作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : オブジェクトのテンプレート変数が削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : オブジェクトのテンプレート変数が更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**は, テンプレート変数が含まれるコンテナの名前です。

テンプレート・グループ

特定のオブジェクト・タイプのテンプレート・グループが作成，削除，更新されると，ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート・グループ <グループ名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<グループ名>**は，作成，削除，または更新されたテンプレート・グループの名前です。
- ▶ **<操作>**は，次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : オブジェクトのテンプレート・グループが作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : オブジェクトのテンプレート・グループが削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : オブジェクトのテンプレートが更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**は，テンプレート・グループが含まれるコンテナの名前です。

テンプレート・リモート・オブジェクト

テンプレート・リモート・サーバが作成，削除，更新されると，ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート・リモート <リモート名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<リモート名>**はリモート・サーバの名前です。
- ▶ **<操作>**は，次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : リモート・エンティティが作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : リモート・エンティティが削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : リモート・エンティティが更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**は，リモート・エンティティが含まれるコンテナの名前です。

テンプレート警告

警告のテンプレートが作成、削除、更新されると、ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート警告  
<警告名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<警告名>**は、テンプレート警告の定義対象となるオブジェクトの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : テンプレート警告が作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : テンプレート警告が削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : テンプレート警告が更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**はテンプレート・コンテナの名前です。

テンプレート・モニタ

モニタのテンプレートが作成、削除、更新されると、ログ・エントリは次のようになります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : テンプレート  
<モニタ名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<モニタ名>**はモニタの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : モニタのテンプレートが作成された場所。
 - ▶ **Deleted from** : モニタのテンプレートが削除された場所。
 - ▶ **Updated in** : モニタのテンプレートが更新された場所。
- ▶ **<コンテナ>**は、テンプレートが含まれるコンテナの名前です。

警告

警告に対して実行された操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : <警告>  
<警告名> <操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<警告名>**は警告の名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : 新規警告が作成された場所。
 - ▶ **Updated in** : 新規警告が更新された場所。
 - ▶ **Deleted From** : 新規警告が削除された場所。
 - ▶ **Pasted On** : ユーザが警告間で情報をコピーしている。
- ▶ **<コンテナ>**は、警告のコンテナです。

レポート

レポート定義に対して実行された操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : レポート <レポート名>  
<操作> <コンテナ>
```

- ▶ **<レポート名>**はレポートの名前です。
- ▶ **<操作>**は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created In** : 新規レポートが作成された場所。
 - ▶ **Updated in** : 新規レポートが更新された場所。
 - ▶ **Deleted From** : 新規レポートが削除された場所。
 - ▶ **Pasted On** : ユーザがレポート間で情報をコピーしている。
- ▶ **<コンテナ>** : レポートのコンテナ。

〔グローバル検索と置換〕の操作

〔グローバル検索と置換〕の操作は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ： <ユーザ名> 実行された操作： GSAR 操作を開始しました
-----
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、グループ <グループ名> を更新しました。
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、レポート <レポート名> を更新しました。
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、モニタ <モニタ名> を更新しました。
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、警告 <警告名> を更新しました。
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - グローバル置換は、プリファレンス <プリファレンス名> を更新しました。
-----
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ： <ユーザ名> 実行された操作： GSAR 操作を終了しました
```

開始操作と終了操作は、常にログに表示されます。エント리는、〔グローバル検索と置換〕で実行されたアクションに応じて表示されます。

ログインとログアウト

ログインとログアウトは次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ： <ユーザ名> 実行された操作： <メッセージ>
```

<メッセージ>は次のいずれかになります。

- ▶ Logged in.
- ▶ Logged out.

ログインの失敗

ログイン試行の失敗は次の形式になります。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ名とパスワードが合致しません。ログインできませんでした。
```

パスワードの変更

パスワード操作は、次の形式でログに記録され、表示されます。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : <メッセージ>
```

<メッセージ>は次のいずれかになります。

- ▶ Changed password successfully.
- ▶ Failed to change password.

カテゴリ

カテゴリに対して実行された操作は、次の形式でログに記録され、表示されます。

```
YYYY-MM-DD HH:MM:SS - ユーザ : <ユーザ名> 実行された操作 : カテゴリ  
<カテゴリ名> <操作>
```

- ▶ <カテゴリ名>はカテゴリの名前です。
- ▶ <操作>は、次のいずれかになります。
 - ▶ **Created** : 新規カテゴリが作成された場所。
 - ▶ **Updated** : 新規カテゴリが更新された場所。
 - ▶ **Deleted** : 新規カテゴリが削除された場所。

SiteScope サーバ統計のユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [一般] ページ (1391 ページ)
- ▶ [実行中モニタ] ページ (1393 ページ)
- ▶ [Perfex プロセス プール] ページ (1395 ページ)
- ▶ [WMI 統計] ページ (1398 ページ)
- ▶ [SSH 接続] ページ (1400 ページ)
- ▶ [Telnet 接続] ページ (1402 ページ)
- ▶ [ダイナミック モニタリング] ページ (1404 ページ)
- ▶ [ログ ファイル] ページ (1408 ページ)

[一般] ページ

このページでは、現在実行中のモニタ数、実行中モニタの最大数、待機中のモニタ数、1 分あたりのモニタ実行数など、主要な SiteScope サーバ・パフォーマンス統計の概要を表示できます。現在実行中のモニタ・タイプのリスト、タイプごとの実行中インスタンス数も表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [一般] を選択します。
重要な情報	SiteScope の管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、各モニタ・パフォーマンス・データ・ページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1370 ページの「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
全体統計	
実行中モニタ数	<p>[現在] 列：更新頻度またはスケジュールに基づいて実行キューに入っており、現在実行中のスレッドを持つモニタ数が表示されます。つまり、これらのモニタは実行中であることを示します。</p> <p>[最大数] 列と [次で測定] 列：実行されたモニタの最大数と、いつ実行されたかが表示されます。</p>
待機中モニタ数	<p>[現在] 列：更新頻度またはスケジュールに基づいて実行キューに入っており、現在実行待機中のスレッドを持つモニタ数が表示されます。つまり、これらのモニタは実行中ではないことを示します。</p> <p>[最大数] 列と [次で測定] 列：いずれかの時点で発生した待機中モニタの最大数と、いつ発生したかが表示されます。</p>
実行モニタ数 / 秒	<p>[現在] 列：最後の 10 分間の監視における平均が周期的に表示され、モニタが実行される速度 (1 分あたり) が追跡されます。</p> <p>[最大数] 列と [次で測定] 列：1 分あたりの実行中モニタの最大数と、いつ実行されたかが表示されます。</p>
タイプごとの実行中モニタ数	
< 実行中のモニタ・リスト >	現在実行中のモニタ・タイプのリストと、タイプごとの実行中インスタンス数が表示されます。

[実行中モニタ] ページ

このページでは、実行中の SiteScope モニタ、最近実行されたモニタ、実行された時刻、実行で返された状態のリストを表示できます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [実行中のモニタ数] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1370 ページの「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
実行中のモニタ数	
実行時間	現在実行中のモニタの実行時間（秒単位）。
スキップ	現在実行中のモニタのスキップ数。スケジュールされている次の実行時までにはモニタのアクションが完了しなかった場合、SiteScope モニタはスキップとしてレポートされます。
グループ名	現在実行中のモニタが属するグループ。
モニタ名	現在実行中の SiteScope モニタの名前。モニタ名リンクをクリックすると、選択したモニタの [ダッシュボード] ページが開きます。実行時間が長引いているモニタやスキップは赤で表示されます。

UI 要素	説明
現在の状態	現在実行中のモニタから返された状態。次に例を示します。
最近のモニタの実行	
日付と時刻	モニタが実行された日時。モニタは、実行を完了した日時の新しい順に表示されます。
グループ名	モニタが属するグループ。
モニタ名	SiteScope が実行したモニタの名前。
現在の状態	モニタが返した状態（ 正常 、 警告 、 エラー ）と測定値サマリの詳細。

[Perfex プロセス プール] ページ

このページには、プロセス・マネージャ・サマリ、perfex プールごとのプール統計と状態が表示されます。perfex は、プロセッサ・イベント・カウンタへのコマンド・ライン・インタフェースです。perfex は、指定されたコマンドの完了後に、さまざまなハードウェア・パフォーマンス・カウンタの値を出力します。perfex_dispatcher は、Microsoft Windows リソース・モニタに使用されるプロセスです。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [Perfex プロセス プール] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1370 ページの「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
プロセス・マネージャ・サマリ	
分あたりの呼び出し数	SiteScope サーバで 1 分あたりに発生するプロセス呼び出し数。
二重の失敗	SiteScope が 2 回連続してリモート・サーバへの接続を試みた後に接続に失敗した回数。接続の失敗の詳細については、モニタの実行ログとエラー・ログを確認してください。
停止したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、エラーが原因で停止したプロセスの数（プロセスがタイムアウトした場合など）。
生成したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、すべてのプールについて生成したプロセスの数。生成したプロセスと停止したプロセスの数が多の場合、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [一般設定] > [perfex タイムアウト (秒)] で perfex タイムアウト値を増やします。

UI 要素	説明
クリーン済み プロセス	SiteScope は、最大アイドル時間を超えたプロセスを除去します。標準設定で、アイドル・プロセスは 10 分経過すると除去されます。アイドル・プロセスの最大時間は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)] で変更できます。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。プロセスの除去が特に重要なのは、ネットワーク速度が低下して perfex の終了までに時間がかかる場合です。この場合、結果的により多くの perfex が作成されますが、それらは使用されません。
プール統計 - perfex/perfex_dispatcher	
プロセス・プール・ キューの長さ	使用可能な perfex の現在待機中のモニタ数。この値は、perfex で実行中のモニタ数が多すぎる、または perfex プールが小さすぎることを示す場合があります。
空きプロセスの平均 待機時間 (ミリ秒)	プロセスが使用可能になるまでの平均待機時間 (ミリ秒単位)。この値が 30,000 ミリ秒 (30 秒) を超えると、それ以降のモニタが失敗します。平均待機時間が長い場合は、プールのプロセス数を増やす必要があることを示します。
平均実行時間 (ミリ秒)	perfex の実行にかかる平均時間 (ミリ秒単位)。ここでは、次を示します。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ ネットワーク速度。要求を送信し、サーバから応答を受信するのにかかる時間。 ▶ perfex の可用性。実行を完了し、perfex をプールに戻すまでにかかる平均時間。 ▶ perfex を使用しているモニタ数。
アイドル・プロセス	現在アイドル状態のプロセスの数。
使用中プロセス	現在使用中状態のプロセスの数。

UI 要素	説明
プロセス合計	プロセスの総数 (アイドル・プロセスと使用中プロセスの合計)。
プロセス・プールの最大サイズ	プロセス・プールあたりに使用可能な最大プロセス数。標準設定の値は 200。プロセス・プールの最大サイズは, [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [プールあたりの最大プロセス数] で変更できます。
サーバ・タイムアウトを待機するプロセス	呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス, 接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス, またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

[WMI 統計] ページ

このページは Windows Management Instrumentation (WMI) 統計のプロセス・マネージャ・サマリを表示します。WMI を使用して、パフォーマンス・ライブラリのオブジェクトのシステム・カウンタ・データにアクセスできます。これは、Perfmon ユーティリティに表示されるパフォーマンス・データと同じデータです。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [WMI 統計] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1370 ページの「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
プロセス・マネージャ・サマリ	
分あたりの呼び出し数	SiteScope サーバで 1 分あたりに発生するプロセス呼び出し数。
二重の失敗	SiteScope が 2 回連続してリモート・サーバへの接続を試みた後に接続に失敗した回数。接続の失敗の詳細については、モニタの実行ログとエラー・ログを確認してください。
停止したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、エラーが原因で停止したプロセスの数（プロセスがタイムアウトした場合など）。

UI 要素	説明
生成したプロセス	SiteScope が最後に再起動してから、すべてのプールについて生成したプロセスの数。生成したプロセスと停止したプロセスの数が多い場合、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [perfex タイムアウト (秒)] で perfex タイムアウト値を増やします。
クリーン済みプロセス	SiteScope は、最大アイドル時間を超えたプロセスを除去します。標準設定で、アイドル・プロセスは 10 分経過すると除去されます。アイドル・プロセスの最大時間は、[プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [一般設定] > [perfex プロセスの最大アイドル時間 (分)] で変更できます。クリーニング・プロセスにより、SiteScope マシンのメモリ・フットプリントが改善されます。プロセスの除去が特に重要なのは、ネットワーク速度が低下して perfex の終了までに時間がかかる場合です。この場合、結果的により多くの perfex が作成されますが、それらは使用されません。
サーバ・タイムアウトプロセス	呼び出しタイムアウトを過ぎたプロセス、接続を閉じるためにサーバ・タイムアウトを待機しているプロセス、またはプールに戻るために応答を待機しているプロセスの数。

[SSH 接続] ページ

このページには、リモート UNIX または Windows サーバに接続するためにセキュア・シェル (SSH) を使用する場合、SSH 統計および SSH 接続のサマリが表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [SSH 接続] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1370 ページの「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SSH 統計	
開いた合計	開いた SSH 接続の総数。この数が [現在割り当て済みのリソース] の数を大きく上回っている場合は、設定の問題を示しています。次の状況が発生していないかを確認する必要があります。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 接続キャッシュが無効になった ▶ 不正なログインまたはパスワードが使用された ▶ リモート・サーバ・タイムアウトが短すぎる
閉じた合計	最後に SiteScope が再起動されてから閉じた SSH 接続の数。
V1 を開くのに失敗した合計	SSH バージョン 1 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。標準設定では、V2 での接続を試みる前に、V1 を使用した接続が試行されます。この数が大きい場合は、問題が発生しているリモート・サーバで [SSH バージョン 2 のみを使用] オプションを選択することをお勧めします。

UI 要素	説明
V2 を開くのに失敗した合計	SSH バージョン 2 を使用して開くことに失敗した SSH 接続の数。この数が大きい場合は、リモート・サーバで正しいログインとパスワードが使用されたことを検証し、リモート・サーバ上の SSH バージョンを検証します (V1 または V2)。
再利用	最後に SiteScope が再起動されてから再利用された SSH 接続の数。
現在割り当て済みのリソース	現在開かれている SSH 接続の数。
現在使用中	現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている SSH 接続の数。
SSH 接続サマリ	
< ホスト名 >	<p>各ターゲット・リモート・サーバについて、次の情報を表示する行があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ マシン名 : 監視対象のリモート・サーバの名前。 ▶ 使用中セッション数 : 監視対象のリモート・サーバで開かれている SSH セッション数。 ▶ アイドルセッション数 : 監視対象のリモート・サーバのアイドル SSH セッション数。 ▶ 最大セッション数 : 監視対象のリモート・サーバの SSH セッション (アイドル状態および使用中) の最大数。 ▶ キューの長さ : キューにある SSH セッション数。 ▶ 平均待機時間 : SSH セッションが空くまでの平均待機時間 (ミリ秒単位)。 <p>注 : SiteScope で同時に使用できる SSH 接続数は 500 に制限されています。</p>

[Telnet 接続] ページ

このページには、リモート UNIX または Windows サーバに接続するために telnet を使用する場合、telnet 統計が表示されます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [Telnet 接続] を選択します。
重要な情報	管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。
関連タスク	1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1370 ページの「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

パラメータ	説明
Telnet 統計	
開いた合計	最後に SiteScope が再起動されてから開いた telnet 接続の数。
閉じた合計	最後に SiteScope が再起動されてから閉じた telnet 接続の数。
再利用	最後に SiteScope が再起動されてから再利用された telnet 接続の数。
現在割り当て済みのリソース	現在開かれている telnet 接続の数。

パラメータ	説明
現在使用中	現在開かれていて、実行中のモニタで使用されている telnet 接続の数。
Telnet 接続サマリ	
< ホスト名 >	<p>各ターゲット・リモート・サーバについて、次の情報を表示する行があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ マシン名 : 監視対象のリモート・サーバの名前。 ▶ 使用中セッション数 : 監視対象のリモート・サーバで開かれている telnet セッション数。 ▶ アイドルセッション数 : 監視対象のリモート・サーバのアイドル telnet セッション数。 ▶ 最大セッション数 : 監視対象のリモート・サーバの telnet セッション（アイドル状態または使用中）の最大数。 ▶ キューの長さ : キューにある telnet セッション数。 ▶ 平均待機時間 : telnet セッションが空くまでの平均待機時間（ミリ秒単位）。 <p>注 : SiteScope で同時に使用できる telnet 接続数は 500 に制限されています。</p>

[ダイナミック モニタリング] ページ

このページには、ダイナミック・モニタリング・メカニズムを使用してダイナミック・モニタリングのカウンタとしきい値を自動的に更新するときに統計が表示されます。これは、ダイナミック・モニタリングのパフォーマンスの表示と問題分析に役立ちます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [ダイナミック モニタリング] を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 管理者、または「サーバ統計の表示」権限を付与されたユーザのみが、モニタ・パフォーマンス・データのページを表示できます。ユーザ権限の詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。 ▶ この情報は [モニタ] コンテキストからも使用できます ([Health] フォルダを展開して [ダイナミック モニタリング統計] をクリックします)。
関連タスク	1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」
関連情報	1370 ページの「サーバ統計の使用」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

パラメータ	説明
定義: * ダイナミック・タスク : サーバからカウンタを取得し、モニタに定義されたパターンに一致するカウンタをその中から見つけ出すという定期的なアクション。 ** カウンタ・ファイル : カウンタは < SiteScope ルート・ディレクトリ > %templates.application フォルダの下に配置される xml ファイルに保存されます。	
最後の 10 分間の平均タスク待機時間 (ミリ秒)	最後の 10 分間にタスクを受け取ったときからダイナミック・タスク * の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
平均タスク待機時間 (ミリ秒)	タスクを受け取ったときからダイナミック・タスク * の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。

パラメータ	説明
最後の 10 分間の平均タスク実行時間 (ミリ秒)	最後の 10 分間にダイナミック・タスク * の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
平均タスク実行時間 (ミリ秒)	ダイナミック・タスク * の実行を開始するためにかかった平均時間 (ミリ秒)。
最後の 10 分間に保存されていないカウンタ・ファイル数	最後の 10 分間に既存のカウンタ・ファイル ** を削除、または新しいカウンタ・ファイル保存できない回数。
最後 10 分間のダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの数	最後の 10 分間に、(ユーザ変更をオーバーライドしないように) ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない回数。
最後の 10 分間にカウンタのマッチングの最大数を越えた回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を超えた回数。
最後の 10 分間にファイルからカウンタを抽出できない回数	最後の 10 分間にカウンタ・ファイル ** からカウンタを抽出できない回数。
最後の 10 分間に変更を保存できない回数	最後の 10 分間に永続 SiteScope にカウンタ変更を保存できない回数。

パラメータ	説明
最後 10 分間にリソース消耗のためにダイナミック・タスクを実行できない回数	最後の 10 分間に、最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイナミック・タスク*を実行できない回数。 [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定] でこれらの設定を実行できます。詳細については、728 ページの「動的監視設定」を参照してください。
最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数	最後の 10 分間にサーバからカウンタを検索できない回数。
最後の 10 分間にサーバからのカウンタをマッチングできなかった回数	最後の 10 分間にサーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった回数。
未保存カウンタ・ファイルの総数	既存のカウンタ・ファイルを削除、または新しいカウンタ・ファイルを保存できない総回数。
ダイナミック・モニタリング・フレームワークと同時実行のユーザ変更の間のクラッシュの総数	(ユーザ変更をオーバーライドしないように) ユーザが同時実行の変更を実行した結果としてダイナミック・モニタリング・フレームワークの変更を保存できない総回数。
カウンタのマッチングの最大数を越えた総回数	サーバからパターン用のカウンタのマッチングが限度を超えた回数。
ファイルからカウンタを抽出できない総回数	カウンタ・ファイル**からカウンタを抽出できない総回数。

パラメータ	説明
変更を保存できない総回数	永続 SiteScope へカウンタ変更を保存できない総回数。
リソース消耗のためにダイナミック・タスクを実行できない総回数	最大ダイナミック・モニタリング・フレームワークしきい値プールとキュー・サイズの限界に達したためダイナミック・タスク*を実行できない総回数。 [プリファレンス] > [インフラストラクチャ プリファレンス] > [ダイナミック モニタリング設定] でこれらの設定を実行できます。詳細については、728 ページの「動的監視設定」を参照してください。
サーバからカウンタを検索できない総回数	サーバからカウンタを検索できない総回数。
サーバからのカウンタをマッチングできなかった総回数	サーバからパターン用のカウンタをマッチングできなかった総回数。


[ログ ファイル] ページ

このページでは、SiteScope ログ・ファイルを調査できます。

アクセス方法	[サーバ統計] コンテキスト > [ログ ファイル] を選択します。
重要な情報	SiteScope ログ・ファイルでは Unicode 文字はサポートされません。英語以外の文字はログで文字化けします。回避策として、対応する OS のロケールにインストールされた SiteScope サーバを使用します。たとえば、日本語ロケールの場合は日本語版の Windows OS にインストールされた SiteScope を使用します。
関連タスク	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1377 ページの「SiteScope サーバ統計の分析方法」 ▶ 1378 ページの「監査ログの設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1374 ページの「ログ・ファイルの使用」 ▶ 1379 ページの「SiteScope ログ・ファイルの列」 ▶ 1380 ページの「監査ログのエントリ」 ▶ 1376 ページの「監査ログの制限事項」

[ログ ファイル] テーブル

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>列タイトルの矢印をクリックして列の並べ替え順序を変更します。並べ替え順序を示す矢印の左側に小さい上向き矢印と下向き矢印が表示されます。</p> <p>注： [タイプ] 列のタイトルの矢印をクリックすると、ログ・タイプのリストが開き、表示するログ・タイプでリストをフィルタできます。フィルタをクリアするには、矢印をもう一度クリックして [(All)] を選択します。</p>
タイプ	ログ・ファイルのタイプ。ログ・ファイルの各種タイプの詳細については、1409 ページの「ログ・ファイルのタイプ」を参照してください。
ログ・ファイル	ログ・ファイルの名前。ログ・ファイルのリンクをダブルクリックすると、Web ブラウザでファイルが開きます。

UI 要素	説明
サイズ	ログ・ファイルのサイズ。
最終更新日	ログ・ファイルが最後に変更された日時。

ログ・ファイルのタイプ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
監査ログ	実行された設定の変更（モニタ、テンプレート、警告の作成など）がすべて含まれているログへのリンクが含まれています。監査ログの詳細については、1375 ページの「監査ログの使用」を参照してください。
BSM 統合ログ	BSM にレポートするように SiteScope が設定されている場合、接続および監視データの転送に関する情報が含まれています。
日次ログ	個々のモニタ測定値が含まれているログへのリンクがあります。SiteScope によって新規モニタ・ログが毎日作成され、24 時間以内に実行されたすべてのモニタが記録されます。これらのログは、SiteScope レポートのベースになります。 注： モニタの環境によっては、モニタ・ログのサイズが非常に大きくなる場合があります。サイズが大きくなると、Web ブラウザを使用して表示することが実質的にできなくなります。
エラー・ログ	SiteScope の操作に関連するさまざまなメッセージが含まれています。このメッセージには、モニタ・アクションやデータ通信アクションの実行時に SiteScope で発生した可能性のあるエラーのレコードが含まれます。また、いつ SiteScope が停止または開始されたか、およびタスクを完了できないことが原因でスキップしているモニタがあるかどうかを示すメッセージも含まれます。
実行モニタ・ログ	モニタの管理に関連する特定のモニタの実行やアクションの情報が含まれています。これは、モニタのトラブルシューティングに役立ちます。

UI 要素	説明
<p>その他のログ 次のようなさまざまなログ・ファイル・タイプがあります。</p>	
<p>alert.log</p>	<p>SiteScope で警告が生成されるたびに警告情報が記録されます。これは、警告アクションのトラブルシューティングや、警告が送信されたかどうかの確認に使用できます。</p>
<p>monitorCount.log</p>	<p>SiteScope で使用されているモニタおよびライセンス・ポイントの総数が計測されます。また、各タイプのサーバの状況モニタの数やライセンス・ポイントの使用状況も示されます。このログは、SiteScope が起動したとき、1 日に 1 回更新されます（変更ごとではありません）。このログ・ファイルは、[ヘルプ] > [SiteScope のバージョン情報] を選択していつでも更新できます。</p>
<p>Operator.log</p>	<p>SiteScope オペレータのアクション（主に確認機能の使用に関する情報）を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。このログは、1 つ以上のモニタに確認が追加された場合に作成されます。</p>
<p>Post Log File</p>	<p>作成された SiteScope サーバへの HTTP Post 要求を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。このファイルを使用して、実行された管理アクションを追跡できます。このログは、_postLogFile=true 設定が master.config ファイルに存在している場合にのみ有効になります。</p>
<p>remotes_multi_test</p>	<p>複数のリモートについてテストを行った場合に、リモート・サーバ接続のテスト結果を表示します。</p>
<p>silent_deployment</p>	<p>送信されたサイレント・デプロイメントの要求の詳細と対応するデプロイメントの結果が記録されます。また、失敗したサイレント・デプロイメントのエラー・メッセージも含まれます。このログは、SiteScope が起動したとき、1 日に 1 回更新されます（変更ごとではありません）。</p> <p>注： CSV ファイルを使用してテンプレートをデプロイする場合、CSV ファイルで使用している英語以外の文字は、silent_deployment ログ・ファイルではサポートされません。正しいエンコーディング・オプションが選択されている場合、デプロイメント値はユーザ・インタフェースに正しく表示されます。</p>

UI 要素	説明
skip_monitor.log	スキップされたモニタの詳細が記録されます。スキップが発生するたびに、スキップの日時、モニタの名前（および ID）、サーバ名、スキップ数、モニタの状態（モニタが無効になっていたかどうか）が含まれる行が追加されます。
URL 詳細ログ	<p>SiteScope URL モニタ・タイプによって作成された HTTP および HTTPS 要求のすべての内容を記録するために使用する任意指定のログ・ファイル。これは、URL モニタ・タイプおよび URL シーケンス・モニタ・タイプのトラブルシューティングに使用できます。</p> <p>このログは、<code>_urlDetailLogEnabled=true</code> 設定が <code>master.config</code> ファイルに存在している場合にのみ有効になります。</p>

第 XI 部

警告とレポート

69

SiteScope 警告

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope 警告の概要 (1289 ページ)
- ▶ 警告アクションの作成 (1293 ページ)
- ▶ SiteScope 警告が送信される時期について (1294 ページ)
- ▶ 警告テンプレートのカスタマイズ (1299 ページ)
- ▶ データベース警告を使った作業 (1301 ページ)
- ▶ モニタの無効化 / 有効化警告を使った作業 (1302 ページ)
- ▶ 電子メール警告を使った作業 (1303 ページ)
- ▶ ログ・イベント警告を使った作業 (1304 ページ)
- ▶ ページャ警告を使った作業 (1305 ページ)
- ▶ 送信警告を使った作業 (1306 ページ)
- ▶ スクリプト警告を使った作業 (1307 ページ)
- ▶ SMS 警告を使った作業 (1312 ページ)
- ▶ SNMP トラップ警告を使った作業 (1314 ページ)
- ▶ サウンド警告を使った作業 (1315 ページ)

タスク

- ▶ 警告の設定方法 (1316 ページ)
- ▶ 警告メッセージ内容のカスタマイズ方法 (1318 ページ)
- ▶ 警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法 (1321 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ (1322 ページ)
- ▶ SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ (1323 ページ)
- ▶ SiteScope 警告のユーザ・インタフェース (1333 ページ)

概念

SiteScope 警告の概要

SiteScope 警告は、警告定義の状態が検出された場合にトリガされる通知アクションです。警告を使用して、イベント、要素の状態の変更、インフラストラクチャのシステムの変更の通知を送信します。たとえば、「Good」から「Error」への変更（監視対象システムが応答しなくなったことを示します）が SiteScope モニタで検出された場合に警告がトリガされます。

警告定義には、警告をトリガできるモニタ、対象となる条件、送信する情報、警告の recipient を SiteScope に通知する設定が含まれています。たとえば、特定のシステムでエラー状態が検出されたときに、特定のサーバ・アドレスおよびエラー・コードを SiteScope からページャまたは電子メールに送信するための指示が含まれる警告を作成できます。また、SiteScope では、スクリプト警告を使用して復旧スクリプトやアクション・スクリプトを自動的に起動することで、問題に対応することもできます。たとえば、システムが応答しなくなったことや、CPU 使用率が 100% に達したことがモニタで検出された場合に、スクリプトを実行してサーバを再起動するようにスクリプト警告を設定できます。警告の詳細については、1345 ページの「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope 警告は、複数の方法で設定できます。警告は、1 つ以上の個々のモニタ、1 つ以上のモニタ・グループ、モニタとグループの組み合わせ、すべてのモニタおよびグループにグローバルに関連付けることができます。通常、グローバルまたはグループ全体に警告に関連付けるのが最も効率的ですが、必要な制御ができない可能性もあります。

各警告定義ページの [フィルタ設定] 機能を使用してフィルタ条件を作成すると、グローバル警告およびグループ警告をより詳細な条件で制御できます。フィルタ条件を使用して、特定のタイプのモニタや特定のテキスト文字列、タグを含むモニタなど、フィルタ条件に一致したモニタに警告を限定することができます。たとえば、CPU モニタのフィルタ条件を使用してグローバル警告を作成すると、CPU モニタ・タイプの場合にのみトリガされる警告が作成されます。タグを使用して個々のモニタ警告を制御することもできます。たとえば、選択されたタグのフィルタ条件を用いて個々のモニタ警告を作成できます。警告は、モニタにこれらのタグのいずれかが含まれる場合に限りトリガされます。グローバルまたはルート警告を設定しタグを割り当て、同じタグをグループに割り当てる場合で、グループ内のどのモニタにも警告の時と同じタグが含まれない場合には、モニタのこのグループに警告はトリガされません。

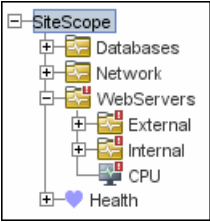
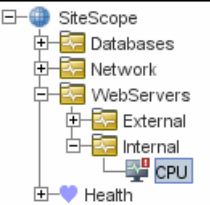
警告を設定する方法の詳細については、1333 ページの「SiteScope 警告ページ」を参照してください。

注: また、警告を使って作業する場合、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。

警告の関連付けと考慮事項

次の表に、各種警告の関連付けと考慮事項の概要を示します。

警告のクラス	説明
グローバル警告	<p>特定の SiteScope の任意のモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p>警告定義を作成した後に追加した新規グループおよび新規モニタは、自動的にこの警告に関連付けられます。</p> <p>次に、SiteScope ノードに関連付けられたグローバル警告の例を示します。この警告は、すべてのモニタでトリガされます。</p> <div data-bbox="619 644 825 864" style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <pre> graph TD SiteScope[SiteScope] --> Databases[Databases] SiteScope --> Network[Network] SiteScope --> WebServers[WebServers] SiteScope --> External[External] SiteScope --> Internal[Internal] SiteScope --> CPU[CPU] SiteScope --> Health[Health] </pre> </div> <p>注： グローバル警告は SiteScope 内のすべてのグループおよびモニタでトリガされる可能性があるため、グローバル警告を作成することはお勧めしません。</p>

警告のクラス	説明
<p>グループ警告</p>	<p>関連付けられているグループ内のモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p>次に、グループ警告の例を示します。この警告は、グループ WebServers 内にあるモニタまたはサブグループでトリガされます。</p>  <p>警告定義を作成した後に関連付けられているグループ内に追加した新規サブグループおよび新規モニタは、自動的にこの警告に関連付けられます。</p>
<p>個別モニタ警告</p>	<p>関連付けられているモニタによって、警告に定義されたカテゴリの状態がレポートされたときにトリガされる警告。</p> <p>次に、個別モニタ警告の例を示します。この警告は、関連付けられているモニタでのみトリガされます。</p>  <p>警告定義を作成した後に追加した新規モニタは自動的にこの警告に関連付けられませんが、警告定義を編集して追加できます。</p>

SiteScope 警告の定義は、必要な数だけ作成できます。ただし、警告定義の数を最小限に抑えるように警告を計画および統合する必要があります。これにより、警告の管理が容易になり、警告のメッセージやアクションの重複を削減できます。

警告アクションの作成

SiteScope で警告スキームを作成する際には、警告条件を満たしたときにトリガされる警告アクションを作成します。警告アクションは、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスを使用して作成します。このダイアログ・ボックスでは、次の項目を決定します。

- ▶ **警告アクションのタイプ。** 使用可能な警告アクションの詳細なリストについては、1345 ページの「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ **送信する警告のタイプに関する設定。** たとえば、電子メール警告アクションには受信者と受信者アドレスを定義できます。
- ▶ **警告をトリガする状態の条件。** たとえば、モニタの状態が「エラー」から「使用不能」に変化した場合に警告アクションをトリガするように SiteScope に指示できます。
- ▶ **警告をトリガして送信する時期を決定するトリガ設定。** 詳細については、1294 ページの「SiteScope 警告が送信される時期について」を参照してください。

1 つの警告スキームに複数の警告アクションを作成できます。

- ▶ **複数の送信方法：** サウンド警告を送信する警告アクションと、電子メール警告を送信する別の警告アクションを作成できます。どちらも警告をトリガすると送信されます。
- ▶ **スケジュールに依存した送信：** 同じ警告定義内に、異なるアクションのための異なるスケジュールを設定することもできます。たとえば、通常の業務時間中は電子メール警告アクションを送信し、夜間は SMS 警告アクションを送信するようにスケジュールを設定できます。どちらも同じ条件の変化によってトリガされますが、警告がトリガされる時間に応じて異なる時間に送信されます。
- ▶ **アクションの依存関係：** ほかの警告アクションに依存する警告アクションを作成することもできます。これにより、トリガ条件が最初に満たされたときにはある警告タイプを送信し、最初の警告タイプが複数回送信されている場合は別のタイプの警告のみを送信するように SiteScope に指示できます。

警告アクションをほかのモニタやグループにコピーして、ほかの警告で使用できます。ほかの警告の警告アクションを使用するには、警告をコピーしてほかのモニタまたはグループに貼り付けます。その警告のすべての警告アクションが新しい警告にコピーされます。その後で、新しいターゲット・モニタまたはグループに対してトリガする警告を編集できます。

異なる警告のタイプを使った作業の詳細については、1345 ページの「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

SiteScope 警告が送信される時期について

SiteScope では、関連付けられているモニタが警告トリガ条件に一致するとただちに警告がトリガされます。[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスの [トリガの設定] オプションを使用すると、特定の条件が検出されたときに、それに関連して警告が送信される時期を制御できます。たとえば、エラー条件が特定のモニタ実行数に対応する特定の間隔で継続して発生した後にのみ SiteScope から警告が送信されるように選択できます。これは、頻繁に変化する動的な環境パラメータを監視する、頻繁に実行されるモニタで使用すると便利です。場合によっては、1 つのエラー条件では介入が正当化されないことがあります。トリガの設定の詳細については、1366 ページの「[トリガの頻度] 表示枠」を参照してください。

次の例では、異なる警告設定での、複数のモニタ実行でエラー条件が継続して発生した後の警告の送信方法について説明します。サンプリング間隔は、モニタの実行頻度に対応することに留意してください。モニタが 15 秒おきに実行され、3 回目のエラー読み取り後に警告が送信されるように設定されている場合、警告はエラー検出から 30 秒後に送信されます。モニタの実行間隔が 1 時間に 1 回で、同じ警告設定を使用する場合、警告は 2 時間後まで送信されません。

例 1 - 常時 : 条件が最低 N 回発生後

例 1a : 最低 3 回のモニタ実行で条件が継続して発生した後、モニタがエラーになるたびに警告が送信されます。これを次の例 1b と比較してください。

警告設定	常時 : 条件が最低 3 回発生後								
サンプリング 間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告!	c=4 警告!	c=5 警告!	c=0	c=1	c=2

例 1b : 最低 3 回のモニタ実行で条件が継続して発生した後、モニタがエラーになるたびに警告が送信されます。連続するエラー読み取りの間にエラー以外の読み取りがモニタから 1 回返されたときに、カウントがリセットされることを示しています。これを前述の例 1a と比較してください。

警告設定	常時 : 条件が最低 3 回発生後								
サンプリング 間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=0	c=1	c=2	c=3 警告!	c=0	c=0

例 2 - 1 回のみ : 条件がちょうど N 回発生後

最低 3 回のモニタ実行でモニタがエラーになると、それ以降にエラーが返される期間に関係なく、警告が 1 回だけ送信されます。

警告設定	1 回のみ : 条件がちょうど 3 回発生後								
サンプリング 間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告!	c=4	c=5	c=6	c=7	c=8

例 3 - 最初に X 回, 以後 Y 回ごとに繰り返す

例 3a : モニタが 5 回エラーになると警告が送信され、それ以降はエラー読み取りが連続して 3 回発生するたびに送信されます。これを次の例 3b と比較してください。

警告設定	最初に 5 回, 以後 3 回ごとに繰り返す								
サンプリング 間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3	c=4	c=5 警告!	c=6	c=7	c=8 警告!

例 3b : モニタが 3 回エラーになると警告が送信され、それ以降はエラー読み取りが連続して 5 回発生するたびに送信されます。これを前述の例 3a と比較してください。

警告設定	最初に 3 回, 以後 5 回ごとに繰り返す								
サンプリング 間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告!	c=4	c=5	c=6	c=7	c=8 警告!

例 4 - 複数の警告の設定

複数の警告を作成し、モニタに複数の警告を関連付けることができるため、特定の状況で複数のアクションが実行されるように SiteScope に指示できます。たとえば、任意のモニタからエラー状態が返されるたびにユーザを呼び出すように SiteScope に指示する警告を作成できます。次に、ディスク領域モニタからエラーが返されるとサーバの /tmp ディレクトリにあるファイルを削除するスクリプト・ファイルを実行するように SiteScope に指示する別の警告を作成できます。ディスクがいっぱいになると、最初の警告定義によってユーザが呼び出され、2 つ目の警告定義によって /tmp ディレクトリにあるファイルを削除するスクリプトが実行されます。

SiteScope 警告は、モニタ読み取りの状態に変化があると生成されます。そのため、OK または警告条件、およびエラー条件に対し警告を設定できます。これを利用する 1 つの方法として、エラーと OK に 1 つずつ、2 つの警告を追加します。条件が 3 回検出された後に警告が送信されるように設定します。OK 警告には、**[モニタが以前に少なくとも 3 回エラー状態だった場合]** チェック・ボックスを選択します。これによって、モニタが何らかの理由で（手動、スケジュール、**依存**によって）無効にされた場合など、一致しない OK 警告が回避され、再起動されます。また、OK 警告が対応するエラー警告が送信された後のみ送信されるよう使用することもできます。これらの 2 つの警告を使用すると、リンクまたはサービスが停止する（モニタが OK から error への変更を検出する）と呼び出しを受け、正常に戻る（モニタが error から OK への変更を検出する）と再び呼び出しを受けます。

次に、1 つのモニタで 2 つの警告を使用する例を示します。条件が少なくとも 3 回のモニタ実行で継続して発生した後のエラーに対して 1 回送信される **Alert on error**。少なくとも 1 回のエラーまたは警告間隔の後の「good」状態に対して 1 回送信される **Alert on OK**。

エラーの警告の設定	対象： エラー		1 回のみ：条件がちょうど 3 回発生後						
OK の警告の設定	対象： OK		1 回のみ：条件がちょうど 1 回発生後および Only alert if monitor was previously in error at least 3 times						
サンプリング間隔	0	1	2	3	4	5	6	7	8
状態									
カウント	c=0	c=1	c=2	c=3 警告!	c=4	c=5	c=6	c=7	c=1 警告!

モニタの状態が変化すると、関連する状態のカウントがゼロにリセットされます。

警告テンプレートのカスタマイズ

SiteScope では、警告メッセージおよびレポートを生成するときにテンプレートを使用します。ほとんどの場合、警告の作成時には [警告] ページで使用するテンプレートを選択します。既存のテンプレートをカスタマイズするか、既存のテンプレートをコピーして独自のテンプレートを作成できます。テキストの追加や削除、プロパティ変数の追加 (1323 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」のリストを参照)、テンプレートに含まれるテキストやプロパティ変数の順序の変更によって、警告テンプレートをカスタマイズできます。

ヒント: 新しいファイル名でカスタム警告テンプレートを作成することをお勧めします。SiteScope に装備されたいずれかの標準設定テンプレートを変更し、同じファイル名で変更を保存した場合、SiteScope を再インストールするか SiteScope インストールをアップグレードすると、その変更が失われる可能性があります。

カスタム警告テンプレートを SiteScope で使用できるようにするには、該当する警告タイプのテンプレートを含むディレクトリにカスタマイズした警告テンプレートを保存する必要があります。コピーおよびカスタマイズできる SiteScope 警告テンプレートが含まれるディレクトリ名のリストについては、1322 ページの「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」を参照してください。

これらのグループのテンプレートは、プロパティ変数マーカを含むテキスト・ファイルです。これらのテンプレートを作成または変更するには、テキスト・エディタを使用します。示されたディレクトリに保存した新規テンプレートは、[警告] ページの該当する警告で使用可能になります。

警告テンプレート設定のカスタマイズの詳細については、1318 ページの「警告メッセージ内容のカスタマイズ方法」および 1321 ページの「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」を参照してください。

例 - 電子メール警告に使用される標準テンプレート

次に、電子メール警告に使用される標準設定テンプレートの例を示します。最初のセクションは警告ヘッダです。警告ヘッダの最初の行には、問題を送信した SiteScope インストールへのリンクが含まれます。これにより、問題を報告した SiteScope インストールにアクセスできます。

このリンクの下には、発生した警告の概要を示すテキスト・ブロックが表示されます。このテキスト・ブロックには次の内容が含まれます。

- ▶ 警告をトリガしたモニタの名前。
- ▶ モニタが属するグループ。
- ▶ モニタにより報告された警告の状態。
- ▶ 状態が報告される前にモニタを実行した回数を示すサンプル ID 番号。
- ▶ エラーが発生した時刻。

```
This alert is from SiteScope at <SiteScopeURL>
Monitor: <groupID>: <name>
Group: <group>
Status: <state>
Sample #: <sample>
Time: <time>
-----Detail -----
<mainParameters>
<mainStateProperties>
```

< 山括弧 > 内に表示される名前は、プロパティ変数マークです。警告の生成時に、SiteScope によってこれらのマークが警告をトリガしたモニタまたはモニタ・グループの変数の対応する値に置換されます。

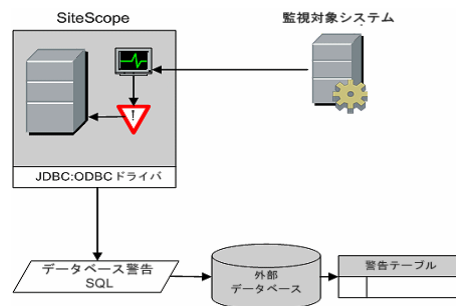
テンプレートのテキスト部分を追加または編集します。たとえば、上記のテンプレートの最初の行の文章を次のように変更できます。

```
< SiteScope URL >で Web 監視の警告が SiteScope によって生成されました
```

データベース警告を使った作業

データベース警告では、システム・フォールト・データやその他の状態の情報を任意の SQL 準拠データベースに転送できます。

次の図に、データベース警告を示します。



データベース警告タイプを使用するには、次が必要です。

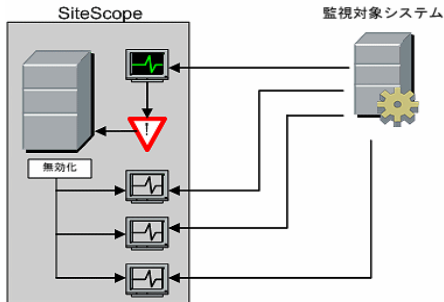
- ▶ SQL 準拠データベースへのアクセス。
- ▶ データベースに接続するために SiteScope サーバで使用される、適切なデータベース接続 URL。一般的なデータベース接続 URL の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
- ▶ SiteScope サーバのデータベースと通信するために SiteScope アプリケーションで使用される、適切なデータベース・ミドルウェア・ドライバのインストール。一般的なデータベース・ドライバ設定の例については、関連するデータベース・モニタの「Setup Requirements and User Permissions」セクションを参照してください。
- ▶ データベースに警告を入力するために SiteScope で使用される、対応する SQL ステートメントに一致するように作成および構造化されたデータベース・テーブル。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 モニタの無効化 / 有効化警告を使った作業

モニタの無効化 / 有効化警告では、モニタの警告のトリガをオンおよびオフにできます。これは、一部のモニタでエラーが発生して不要な警告が生成されるサーバの保守やほかの活動を実行する場合に便利です。

次の図に、1 つのモニタに報告される条件に基づいて複数のモニタを無効化するための、警告タイプの例を示します。

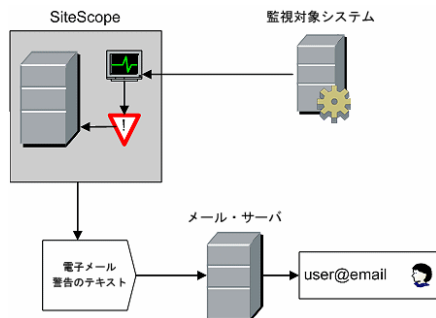


この警告タイプの機能は、モニタとモニタ・グループ間のグループ依存関係を作成する **「依存」** 機能と類似しています。重要な違いの 1 つは、対象のモニタまたはグループの状態が元の状態に戻っても、このタイプの警告によって無効化されたモニタは自動的に再有効化されない点です。モニタを無効化する、**警告カテゴリ**が **「エラー」** の警告を 1 つ作成できます。次に、そのモニタを有効化する、**警告カテゴリ**が **「正常」** の 2 番目の警告を作成できます。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 電子メール警告を使った作業

次の図のように、電子メール警告では SiteScope から指定の電子メール・アドレスにイベント通知が送信されます。



電子メール警告タイプを使用するには、次の必要があります。

- ▶ アクティブな電子メール・サーバへのアクセス
- ▶ 電子メール警告を受信できる 1 つ以上の電子メール・アカウント
- ▶ 外部の電子メール・サーバと連携できるように設定された SiteScope の電子メール・プリファレンス

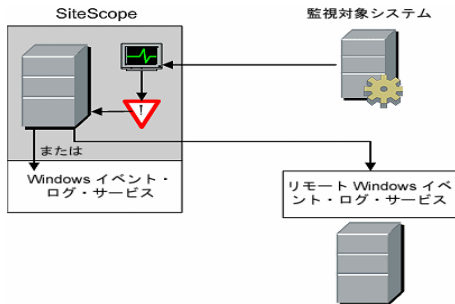
SiteScope の電子メール受信者の設定の詳細については、791 ページの「電子メール・プリファレンス」を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 ログ・イベント警告を使った作業

ログ・イベント警告を使用して、Windows アプリケーションのイベント・ログに記録されるイベントのタイプを拡張できます。これにより、通常は Windows オペレーティング・システムによって記録されないイベント・データをログ・クエリ・システムに転送できます。

次の図に、ログ・イベント警告を示します。



ログ・イベント警告タイプを使用するには、次が必要です。

- ▶ Windows イベント・ログ・サービスへのアクセス。標準設定では、SiteScope が実行されているマシンのイベント・ログになります。警告定義を設定して、ログ・イベントを別のサーバに送信できます。
- ▶ Microsoft Windows プラットフォームで実行されている SiteScope。

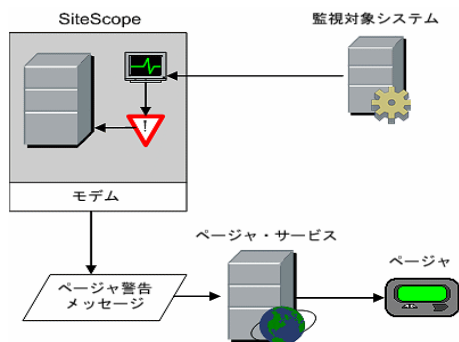
注意： SiteScope の Microsoft Windows イベント・ログ・モニタを使用している場合、無限ループ状態が発生してイベント・ログ・ファイルの空き領域がなくなる可能性があるため、ログ・イベント警告タイプを使用するときには注意が必要です。たとえば、Microsoft Windows イベント・ログ・モニタによって、ログ・イベント警告をトリガするイベントが検出され、新しいイベントがイベント・ログに書き込まれます。このことがイベント・ログ・モニタで検出され、ログ・イベント警告がトリガされます。このようなことが繰り返されると無限ループが発生します。これを回避するため、ログ・イベント警告タイプを Microsoft Windows イベント・ログ・モニタに関連付けないようにしてください。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 ページ警告を使った作業

ページ警告を使用して、電子ページにイベント通知を送信できます。これは、電子メールにアクセスできない場合に特に便利です。使用するページのタイプやページ・サービスの機能に応じて、問題や検出した条件についての簡略化した説明を含むページ・メッセージを送信するように [ページ警告] を設定できます。

次の図に、ページ警告を示します。



ページ警告タイプを使用するには、次が必要です。

- ▶ アクティブなページ・サービスへのアクセス
- ▶ SiteScope サーバがページ・サービスへの接続に使用できるモデム
- ▶ ページ警告を受信できる 1 台以上のページ
- ▶ モデムとページ・サービスが連携するように設定された SiteScope ページ・プリファレンス

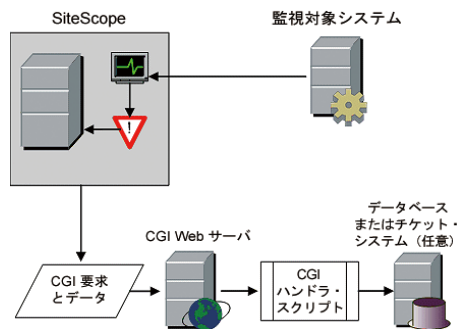
ページ警告の使用を SiteScope に設定する方法の詳細については、801 ページの「ページ・プリファレンス」を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

送信警告を使った作業

送信警告では、共通ゲートウェイ・インタフェース・プロトコル (CGI) を使用して、POST データが CGI 対応プログラムに転送されます。これは、トラブル・チケット・システムまたはレポート・データベースのフロント・エンドである別のサーバの CGI スクリプトにイベント・データを転送するために使用できます。この警告のタイプは、ほかのセキュリティ設定を変更せずに HTTP または HTTPS を使用し、ファイアウォールを通して警告情報を送信する手段を提供します。

次の図に、送信警告を示します。



送信警告タイプを使用するには、次が必要です。

- ▶ SiteScope サーバと、CGI スクリプトまたはサーバを実行しているサーバの間の HTTP アクセス
 - ▶ 適切な CGI スクリプトまたはサーバへの CGI POST 要求の形式および構文
- 警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

🔗 スクリプト警告を使った作業

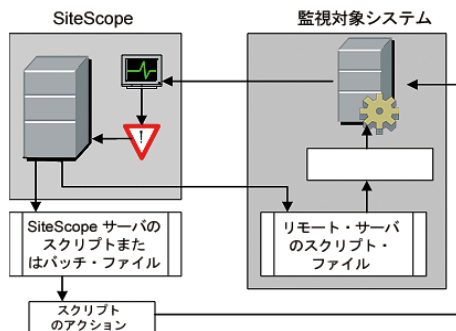
スクリプト警告では、自動的に復旧スクリプトを起動できます。スクリプト警告を設定して、サーバまたはサービスを再起動するコマンドを実行できます。

スクリプト警告の最も重要なコンポーネントは次のとおりです。

- ▶ スクリプト定義自体
- ▶ 警告をトリガするために割り当てられたモニタ
- ▶ 警告によって実行されるスクリプト

スクリプトの使用目的によっては、警告メッセージのテンプレートや、結果として生成される警告メッセージ・ファイルについても検討する必要があります。**[パラメータ]** 設定とスクリプト・テンプレートを使用して、データをスクリプトに渡すことができます。

次の図に、ローカル・スクリプトおよびリモート・ホストのスクリプトの、一般的なスクリプト警告の概念を示します。



スクリプト警告の定義またはインスタンスと、警告をトリガするモニタは、SiteScope のほかの警告やモニタと同様に処理されます。たとえば、リモート UNIX サーバで実行されている Web サーバを監視するモニタを作成するとします。スクリプトを実行するモニタに関連付けられたスクリプト警告を作成して、モニタでエラーが報告された場合に Web サーバ・プロセスを強制終了して再起動させることができます。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

本項の内容

- ▶ 1308 ページの「スクリプト・ファイルの管理」
- ▶ 1309 ページの「スクリプトへのデータの引き渡し」
- ▶ 1310 ページの「各種スクリプトの実行」
- ▶ 1311 ページの「スクリプトのトラブルシューティング」

スクリプト・ファイルの管理

スクリプト警告定義によって呼び出される、または実行されるスクリプト・ファイルを作成することは、SiteScope のこの自動化機能を使用する場合のもう 1 つの重要な手順です。スクリプトによって実行される特定のコマンドおよびアクションは、ユーザが決定できます。スクリプト・ファイルは、スクリプトを実行するオペレーティング・システムと互換性のあるプレーン・テキスト・ファイルで作成する必要があります。これは、SiteScope が実行されているサーバや、SiteScope からアクセスできるリモート・マシンになります。

SiteScope が実行されているマシンでスクリプトを実行するには、スクリプト警告が定義されている SiteScope マシンの **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %scripts** ディレクトリにスクリプト・ファイルを保存する必要があります。

リモート・マシンでスクリプトを実行するには、SiteScope にリモート・マシンでの実行権限があるユーザ・アカウントの、ホーム・ディレクトリ・ツリーの **%scripts** ディレクトリにスクリプトを保存する必要があります。

スクリプト実行時の現在の実行ディレクトリは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ > %scripts%** ディレクトリではなく **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %classes%** ディレクトリです。スクリプト自体によって実行されるコマンドの場合、相対実行ディレクトリは **< SiteScope のルート・ディレクトリ > %classes%** になります。スクリプトによって呼び出されるほかのファイル・システム・コマンドまたはプログラムでは、現在のディレクトリに注意を払う必要がないようにフル・パスを使用してください。また、サーバ・システムの環境変数はスクリプトの実行に対応するように設定されていない場合があります。これも、スクリプトによって呼び出される実行可能ファイルにフル・パスを使用する理由の 1 つです。SiteScope ではなくコマンド・ラインからスクリプトを実行して動作させる場合、ユーザがエラーを特定する必要があります。

スクリプトへのデータの引き渡し

多数のパラメータがコマンド・ライン引数として SiteScope からスクリプトに渡されます。このオプションを使用して、スクリプトのアクションの変更に使用できるデータをスクリプトに渡すことができます。これにより、スクリプト警告に汎用性が備わります。標準設定では、SiteScope スクリプト警告からスクリプトに 7 個のコマンド・ライン引数が渡されます。コマンド・ライン引数は次のとおりです。

- ▶ スクリプト・ディレクトリのパス
- ▶ 警告の原因となったモニタの名前
- ▶ モニタの現在の状態
- ▶ 警告メッセージ・ファイルへのパス
- ▶ モニタの ID コード
- ▶ モニタのグループ
- ▶ 警告フォームの [パラメータ] テキスト・ボックスで指定した追加パラメータ

これらの標準設定の引数の 2 つによって、スクリプトからより多くのデータにアクセスできます。1 つは警告メッセージ・ファイルで、もう 1 つは [パラメータ] テキスト・ボックスです。警告メッセージ・ファイルは、スクリプト警告インスタンスに選択された警告テンプレートに基づいて SiteScope によって作成される、一時的なテキスト・ファイルです。作成または使用するテンプレートに応じて、警告メッセージ・ファイルには、カスタム情報や、警告をトリガしたモニタに固有のデータが含まれます。警告メッセージ・ファイルへのパスをスクリプトに渡すと、スクリプトからこのデータにアクセスできるようになります。

[パラメータ] テキスト・ボックスを使用して、スクリプトに渡す個々のモニタ・パラメータ・データを指定します。パラメータをスペースで区切って複数のパラメータを含めることができます。これにより、スクリプトに渡すパラメータの総数を効率的に増やすことができます。

スクリプト・ディレクトリのパスは、別のプログラムへの実行パスを設定する場合や、スクリプトによって作成される出力のディレクトリ・パスを設定する場合に役に立ちます。

スクリプトへのパラメータやデータの引き渡しの詳細およびその例については、1517 ページの「スクリプト警告のスクリプトの記述」を参照してください。

各種スクリプトの実行

非バッチ・スクリプト (VBScript や Perl など) をバッチ・ファイルにラッピングせずに実行できます (9.50 よりも前のバージョンの SiteScope ではできませんでした)。

- ▶ スクリプトを拡張子付きで表示するには、`_scriptMonitorExtensions` プロパティを **master.config** ファイルに追加します。たとえば、`.pl`、`.py`、または `.php` スクリプトを表示するには、次の形式を使用します。
`_scriptMonitorExtensions=.pl;.py;.php`
- ▶ スクリプトの拡張子を使用してスクリプト・インタープリタを実行するには、次のように、`_scriptInterpreters` プロパティを **master.config** ファイルに追加します。
`_scriptInterpreters=pl=c:/perl/perl.exe;py=c:/python/python.exe;php=c:/php/php.exe`

スクリプトのトラブルシューティング

本項では、SiteScope スクリプトを使って作業する場合のトラブルシューティングと制限事項について説明します。

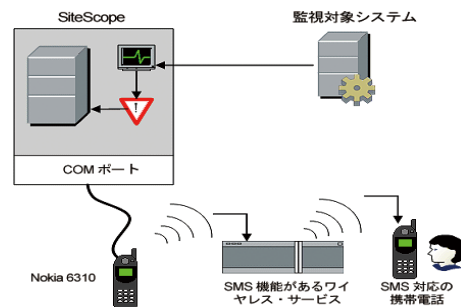
- ▶ スクリプトは、SiteScope サービスによって使用されるアカウントの権限で実行されます。スクリプトによっては、さらに権限が必要になります。この場合、[サービス] コントロール・パネルを使用して SiteScope のログイン・アカウントを変更し、SiteScope を再起動する必要があります。たとえば、サービスの再開またはリモート・マシンの再起動を行うスクリプトや、保護されたファイルをコピーするスクリプトがこれに該当します。
- ▶ スクリプトは SiteScope サービスによって実行されるため、ログイン時に実行される操作はスクリプトでは実行されない可能性があります。たとえば、マッピングされているドライブ、環境変数、ほかのログイン・スクリプトの項目は使用できません。また、キーボードなどの入力デバイスから対話形式の入力を受け付けることはできません。ユーザの確認や入力が必要なスクリプトのアクションまたはコマンドは、スクリプトがハングアップする原因になります。ユーザのアクションが必要な対話形式のコマンドをスクリプトに含めないでください。また、WIN32 アプリケーション (メモ帳など) を開く場合も、ユーザがアプリケーションを終了するまで待機してからスクリプトの実行が続行されるため、スクリプトがハングアップする原因になります。
- ▶ スクリプト警告の状態のサマリに引用符が含まれている場合、スクリプト警告の結果では、SiteScope によって引用符が二重引用符に変更されています。内容の照合フィルタを定義する場合は、このことを考慮する必要があります。

SMS 警告を使った作業

SMS 警告は、イベント条件を報告した SiteScope モニタの名前とそのモニタの状態をメッセージの内容として送信するように設計されています。ページャ警告の代替手段として、モバイル・ユーザに電子メールを使用せずにイベント通知を送信するために使用します。

注：現時点では、SMS 警告を SiteScope から送信するには、このセクションで指定したハードウェアを使用する必要があります。SiteScope を使用して SMS メッセージを送信する代替方法については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ 技術情報 (<http://support.openview.hp.com/selfsolve/documents>) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

次の図に、SMS 警告を示します。



SMS 警告タイプを使用するには、次が必要です。

- ▶ SMS 警告を送信する SiteScope マシンの空きシリアル通信ポート 1 個
- ▶ SiteScope を実行するマシンにワイヤレス伝送デバイスを接続するためのシリアル・ワイヤレス・デバイス間インタフェース・ケーブル (RS-232 アダプタ・ケーブル Nokia DLR-3P)

- ▶ 警告を送信する SiteScope マシンに接続された SMS 対応のワイヤレス・デバイス（インタフェース・ケーブルを使用する Nokia 6310 電話）
- ▶ SMS 警告を有効にするために必要なソフトウェア（通常、SiteScope 7.6c1 以降に付属）

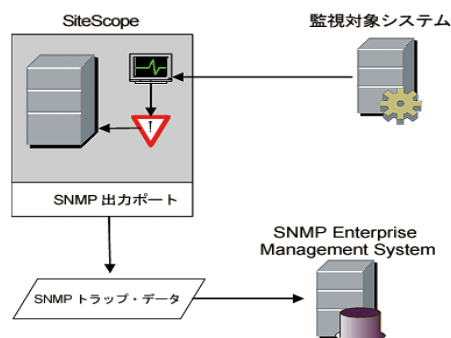
注：Nokia Data Suite, Palm Hot Sync, その他の PDA ソフトウェアが SiteScope を実行するサーバ上で実行されていないことを確認してください。これらのプログラムは、COM ポートをバインドしてダイヤラを正常に動作できなくする可能性があります。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

SNMP トラップ警告を使った作業

SNMP トラップ警告は、任意のタイプの SiteScope モニタから SNMP 対応のホストまたは管理システムにイベント・データを転送します。つまり、SiteScope を使用して、独自の SNMP エージェントを持たないアプリケーションやシステムのイベントを監視および報告できます。たとえば、SNMP トラップ警告を使用して、SiteScope Microsoft Windows パフォーマンス・カウンタ・ベースのモニタ・タイプまたは URL モニタから SNMP トラップの形式で測定値データを送信できます。

次の図に、SNMP トラップ警告を示します。



SNMP トラップ警告タイプを使用するには、次が必要です。

- ▶ 適切な SNMP ネットワーク・ポートへのアクセス
- ▶ 適切な SNMP 管理コンソールと連携するように設定された SiteScope SNMP プリファレンス

SNMP 警告の使用を SiteScope に設定する方法の詳細については、813 ページの「SNMP プリファレンス」を参照してください。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

サウンド警告を使った作業

サウンド警告は、警告の発生時に SiteScope が稼動しているマシンでサウンド・ファイルまたはオーディオ・ファイルを再生します。この警告は、サポート・スタッフが常駐する領域内に SiteScope サーバがあり、関連付けられたサウンド・ファイル进行处理できるサウンド・カードがサーバに装備されている場合にのみ効果があります。

または、SiteScope で提供する Web ページに警告オーディオ・ファイルを埋め込むように、SiteScope を設定できます。このオーディオ・ファイルは、メイン表示枠やグループの詳細ページなどの、モニタのエラー状態を含む SiteScope ページに埋め込まれます。これにより、ユーザ・インタフェース経由ですべての SiteScope クライアントにオーディオで通知できますが、これは SiteScope 警告とは異なるため、サウンド警告と同じ設定オプションは使用できません。

SiteScope でブラウザからサウンドを再生するように設定する方法の詳細については、1320 ページの「例 - SiteScope でブラウザからサウンドを再生するように設定する方法」を参照してください。

サウンド警告のその他の情報については、HP ソフトウェア・セルフ・ソルブ技術情報 (h20230.www2.hp.com/selfsolve/documents) を参照してください。技術情報を利用するには、HP パスポート ID を使ってログオンする必要があります。

警告を設定する方法の詳細については、1316 ページの「警告の設定方法」を参照してください。

タスク

警告の設定方法

このタスクでは、警告定義を設定する手順について説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1316 ページの「警告の作成」
- ▶ 1317 ページの「警告のテスト」
- ▶ 1317 ページの「警告のメッセージ内容のカスタマイズ」
- ▶ 1321 ページの「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」
- ▶ 1318 ページの「結果」

1 警告の作成

SiteScope ツリーのグループまたはモニタ・コンテナに、新規警告を作成するか、既存の警告をコピーすることができます。

- ▶ **新規警告を作成します。**警告に関連付けるコンテナを右クリックし、**[新規作成]** > **[警告]** を選択します。警告の名前を入力し、警告をトリガするターゲットを選択して、警告アクションを設定します (**[警告アクション]** 表示枠で、**[新規警告アクション]** をクリックして **[警告アクション]** ウィザードを起動します)。各警告スキームに 1 つ以上の警告アクションを作成できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1335 ページの「**[新規警告]** / **[警告の編集]** ダイアログ・ボックス」を参照してください。
- ▶ **警告定義をコピーします。****[警告]** タブでコピーする警告を選択し、目的のグループまたはモニタ・コンテナに貼り付けます。警告ターゲットが、自動的に警告のコピー先のグループまたはモニタに変わります。

注意：警告定義をグループ・コンテナ間でコピーする場合、貼り付けた警告の [警告ターゲット] が自動的にリセットされて、警告の貼り付け先であるコンテナの子がすべて含まれます。警告の貼り付け後、割り当てた [警告ターゲット] が新しい警告コンテキストと全体的な警告計画に対し適切になるように、警告定義のプロパティを編集します。

2 警告のテスト

モニタ・ツリーの [警告] タブで警告を選択し、[テスト] をクリックします。テストするモニタ・インスタンスを選択し、[OK] をクリックします。ダイアログ・ボックスが開き、警告テストに関する情報が表示されます。

注：警告をテストするために、選択したモニタが、警告をトリガするように選択した状態カテゴリと同じ状態カテゴリを報告する必要はありません。たとえば、エラー条件によってトリガされる警告をテストする場合、テスト時点でモニタがエラーを報告する必要はありません。

3 警告のメッセージ内容のカスタマイズ

SiteScope 警告テンプレートをカスタマイズして、警告メッセージの内容と形式を変更します。

タスクの詳細については、1318 ページの「警告メッセージ内容のカスタマイズ方法」を参照してください。

4 警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ

パーサで特定の区切り文字が必要な場合や、変数の識別に使用する括弧の区切り文字を変更する場合は、SiteScope 警告テンプレートのタグ・スタイルをカスタマイズします。

タスクの詳細については、1321 ページの「警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法」を参照してください。

5 結果

警告がモニタ・ツリーの指定したコンテナに追加されます (🔴 アイコンで示されます)。SiteScope ダッシュボードには、警告が 1 つ以上設定されている各グループまたはモニタの横に警告アイコン 🚨 も表示されます。

例：

名前	状態	タイプ	ター...	サマリ	更新...	詳細	🚨	🔄
選択した...								
CPU	🟢📉	CPU	Site...	1% ...	10/1...		🚨	
カウンタ (...)								
utilization	🟢			1%				
utilization c...	🟡			1%				
utilization c...	🟡			2%				

警告メッセージ内容のカスタマイズ方法

このタスクでは、SiteScope 警告テンプレートをカスタマイズして、警告メッセージの内容と形式を変更する方法について説明します。

- 1 SiteScope マシンの警告テンプレート・ディレクトリにアクセスできるテキスト・エディタを開きます。

SiteScope 警告テンプレートがあるディレクトリの名前のリストについては、1322 ページの「SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ」を参照してください。

- 2 カスタマイズする警告のタイプの既存のテンプレート・ファイルをテキスト・エディタで開きます。
- 3 テンプレートを変更します。警告のタイプに応じて、テキストの追加や削除、テキストまたはプロパティ変数の順序変更、ほかのプロパティ変数の追加ができます。特定のプロパティを追加するには、該当のプロパティ変数名を山括弧のペア (<>) の間に入れてテンプレートに追加します。

特定のプロパティ変数のリストについては、1323 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

- 4 該当の警告のタイプのディレクトリ内に、一意のファイル名で変更を保存します。新しいテンプレートが [アクションタイプの設定] テンプレート・ドロップダウン・リストに追加されます。

例 - 電子メール警告メッセージの短縮

電子メール警告の長さを短くするには、不要な情報を表示するプロパティを削除します。たとえば、特定の警告の時間を報告する必要がない場合、<time> プロパティをテンプレートから削除できます。

ヒント: カスタマイズするテンプレートのベースとして、Typical テンプレート (標準設定) を使用することをお勧めします。

< SiteScope のルート・ディレクトリ > %templates.mail ディレクトリで、Typical テンプレート・ファイルを開きます。Time: < time > という行を削除します。新しいファイル名で変更を保存します。

例 - SNMP 警告メッセージの変更

SNMP モニタの状態ではなく、「Error」状態のカウントとその値のリストが表示されるように SNMP 警告メッセージを変更できます。これにより、「Error」のしきい値を超えたカウントのみがメッセージに表示されるようになり、ほかのすべてのカウントは除外されます。

< SiteScope のルート・ディレクトリ > %templates.SNMP ディレクトリで、**Default** テンプレート・ファイルをテキスト・エディタで開きます。このファイルには次の行が含まれています。
SiteScope%<group>%<name>%<sample>%<state>%

文字列 <state> を文字列 <errorOnly> に置換します。山括弧 (<, >) でテキストを囲んだ状態のままにしておきます。

注 : 状態が「Warning」のカウントのリストを表示するには、文字列 <state> を文字列 <warningOnly> に置換します。

< SiteScope のルート・ディレクトリ > %groups%master.config ファイルを編集して、次の行を追加します。
_errorOnlyDelimiter=,

同様のエラー定義をほかにも追加します。

この例では、区切り文字はカンマ (,) ですが、スペース (" ") やタブ (¥t) も使用できます。**master.config** に追加した行は次のようになります。

```
_errorSoundURL=
_errorOnlyDelimiter=,
_errorOnlyNewlineFormat=true
```

注 :

- ▶ 文字列 <warningOnly> を使用する場合、**master.config** で文字列 `_warningOnlyDelimiter=< 区切り文字 >` を使用する必要があります。
- ▶ **master.config** で `_errorOnlyDelimiter` が定義されていない場合、標準設定の区切り文字は空白 (“ ”) になります。

例 - SiteScope でブラウザからサウンドを再生するように設定する方法

ブラウザでサウンドを再生してモニタの状態の変化を示すように SiteScope を設定できます。

ブラウザでサウンドを再生できるようにするには、次の手順を実行します。

- 1 < SiteScope ルート・ディレクトリ > %groups%master.config ファイルをテキスト・エディタで開きます。
- 2 _errorSoundURL 設定を見つけます。(
- 3 この設定を次に変更します。

```
_errorSoundURL=http:// < SiteScope のホスト > : < SiteScope のポート > /  
SiteScope/templates.sound/alarm.au
```
- 4 master.config ファイルを保存します。
- 5 SiteScope を停止および開始します。
- 6 この変更の後、エラーがトリガした時は常に SiteScope でアラーム音（この場合、< SiteScope > %templates.sound ディレクトリの Alarm.au）が再生されます。上記のタブでソース（src）を変更して再生されるサウンドを変更できます。警告または正常の状態のサウンドを追加する場合には、
_warningSoundURL= または _goodSoundURL= 設定を同様に変更できます。

警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ方法

このタスクでは、たとえば、警告メッセージを処理するパーサで特定の区切り文字が必要な場合に、リストの項目間の区切り文字を変更する方法について説明します。変数の識別に使用される括弧の区切り文字を変更することもできます。これは、XML でメッセージを読み込み、XML 文字列で変数を置換する場合に便利です。

- 1 括弧の区切り文字を変更するテンプレート・ファイルを編集します。例：
＜ SiteScope のルート・ディレクトリ＞ ¥templates.mail¥.
- 2 テキスト・エディタを使用して、関連するファイルの最上部に次の行を追加します。

```
[Tag-Style:{}]
```

html の山括弧 (<>) の代わりに区切り文字として使用する文字（この例では {}）を、コロンの後に入力します。

- 3 Tag-Style 文字列で定義した新しい文字で関連する変数を囲むように編集します。例：{state}。

参照情報

SiteScope 警告テンプレートのディレクトリ

次に、コピーおよびカスタマイズできる SiteScope 警告テンプレートが含まれるディレクトリ名のリストを示します。

テンプレート・グループ	説明	場所
イベント・ログ	イベント・ログに書き込まれたデータの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥ templates.eventlog
履歴	レポートが生成された受信者に通知する電子メール・メッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥ templates.history
電子メール	電子メールで送信された警告メッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥ templates.mail
テンプレート	ページ警告のグループ、詳細、場所、ページ形式、内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥ templates.page
送信	送信警告によって CGI スクリプトに送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥ templates.post
スクリプト	スクリプト警告がトリガされたときにスクリプトに送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥ templates.script
SNMP	SNMP トラップがトリガされたときに SNMP によって送信されたメッセージの形式と内容。	< SiteScope のルート・ディレクトリ > ¥ templates.snmp

SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレトリ

次の共通プロパティは、SiteScope 警告テンプレート、共通イベント・マッピング属性、および電子メール・レポートにあるか、使用されます。

本項の内容

- ▶ 1323 ページの「警告テンプレートとイベントのプロパティ」
- ▶ 1331 ページの「電子メール・レポートのプロパティ」

警告テンプレートとイベントのプロパティ

次に、SiteScope 警告テンプレートに含まれる共通プロパティと共通イベント・マッピング属性のリストを示します。

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<_customPropertiesValues>		
<_eventCategory>		NTEventlog
<_httpPort>		NTEventlog
<_webserverAddress>		NTEventlog
<alert>		XMLMail
<alertHelpURL>	警告トピックを含む、SiteScope ヘルプの URL。	NoDetails Traceroute WithDiagnostic
<alert::name>	警告の名前。	
<alert::id>	警告 ID。	
<alert::description>	警告定義のテキストの詳細。	
<alert::disableDescription>	無効操作の目的の詳細。	
<alert::actionID>	警告アクションの ID。	
<alert::actionName>	警告アクションの名前。	

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<all>	モニタのすべてのプロパティ。	
<allThresholds>	電子メール警告でモニタのすべてのしきい値を返す。	
<automaticSeverityMapping>		
<bacMonitorID>	モニタ BSM ID	
<bacSessionID>	BSM プロファイル ID。	
<category>	モニタのカテゴリ。	Typical
<_classifier>	電子メール警告でモニタの最初のしきい値を返す。	
<currentTime>	警告の実行時刻。	
<diagnostic>		XMLMail
<diagnosticText>		Default User NoDetails WithDiagnostic
<diagnosticTraceRoute>		Traceroute WithDiagnostic
<errorCounterOnly>	エラー状態のモニタ・カウンタのリスト (カウンタ名のみを返す)。	
<errorOnly>	エラー状態のモニタ・カウンタのリスト (カウンタ名とカウンタ値を返す)。	Typical
<etiType>		
<etiValue>		
<eventID>		NTEventlog
<eventMachine>		NTEventlog

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<eventSource>		NTEventlog
<eventType>		NTEventlog
<firstgroupdescription>		
<fullMonitorName>		
<FullGroupId>	SiteScope のルート・ディレクトリからグループへのフル・パス (¥SiteScope を除外)。	
<goodCounterOnly>	正常状態のモニタ・カウンタのリスト (カウンタ名のみを返す)。	Typical
<goodOnly>	正常状態のモニタ・カウンタのリスト。	Typical
<group>	モニタが含まれるグループの名前。	AllErrors Default Default User Ir-Default_mail_template NoDetails NTEventlogt PagerMail ShortMail Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<groupdescription>	グループの詳細	

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<groupID>	グループの ID。	Default Typical WithDiagnostic XMLMail
<id>		XMLMail
<mainParameters>	パラメータとして設定されたメイン・モニタ・プロパティのリスト。	Default Default User NTEventlog WithDiagnostic
<mainStateProperties>	状態プロパティとして設定されたメイン・モニタ・プロパティのリスト。統計結果が [レポート] に表示されます。	Default Default User NTEventlog WithDiagnostic
<metric>		
<metricValue>		
<monitorDrilldownURL>	モニタ URL へのイベントでハイパーリンクを作成します。	
<monitor>		XMLMail
<monitorName>		
<monitorType>		

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<name>	モニタの名前 (as_name と同じ)。	Default Default User Ir-Default_mail_template NoDetails NTEventlog PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<newSiteScopeURL>	SiteScope サーバの URL。	Default Typical
<newStatus>		
<oldStatus>		
<processtext>		
<remoteMachineName>	リモート・サーバ・マシンの名前。	

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<sample>	サンプル番号。	AllErrors Default Default User NoDetails NTEventlog PagerMail ShortMail Traceroute Typical Typical.mail WithDiagnostic XMLMail
<secondaryParameters>	メインの状態プロパティとその他の内部プロパティのリスト。	
<secondaryStateProperties>	メインの状態プロパティとその他の内部プロパティのリスト。	
<server>		XMLMail
<sitescope>		XMLMail
<sitescopeURL>	管理者アクセス用の SiteScope のメイン・ページへの URL。	AllErrors Default User NoDetails Traceroute WithDiagnostic
<sitescopeuserurl>	ユーザ・アクセス用の SiteScope のメイン・ページへの URL。	

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<state>	モニタが報告する状態文字列 (stateString と同じ)。	AllErrors Default Default User Ir-Default_mail_template NoDetails PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<tag>	モニタのタグ (存在する場合)。	Default Default User Ir-Default_mail_template NoDetails NTEventlog PagerMail ShortestMail ShortMail ShortSubject Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<tag:[tagName]>	<p>警告をトリガしたモニタに割り当てられた [tagName] を含む検索 / フィルタ・タグの値を表示します。</p> <p>例: 値 Apache がモニタに割り当てられた AppServer というタグがあり、モニタ用に設定された警告テンプレートに <tag:AppServer > を含めます。警告がトリガされた場合、警告テキストの新しいプロパティが Apache に置き換えられます。</p>	
<targetHost>	ターゲット・ホストの名前	
<thresholdCrossed>		
<time>	モニタが最後に実行を完了した時間。	AllErrors Default Default User lr-Default_mail_template NoDetails NTEventlog Traceroute Typical WithDiagnostic XMLMail
<time-date>	モニタが完了した時間の日付部分。	
<time-time>	モニタが完了した時間の時刻部分。	

使用可能なプロパティ	説明 / 例	該当するテンプレート
<warningCounterOnly>	警告状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名のみを返す）。	
<warningOnly>	警告状態のモニタ・カウンタのリスト（カウンタ名とカウンタ値を返す）。	Typical

電子メール・レポートのプロパティ

次のプロパティは、<SiteScope>\templates.history ディレクトリに保存されている電子メール・テンプレートに適用されます。

使用可能なプロパティ	説明
_httpPort	SiteScope へのアクセスに使用するポート番号
_webserverAddress	SiteScope サーバの IP アドレス
basicAlertSummary	トリガされた警告に関する基本情報
detailAlert Summary	警告に関する詳細な情報
reportIndexURL	管理レポート用の索引ページへの URL
reportPeriod	このレポートの対象期間
reportURL	HTML バージョンの管理レポートへの URL
summary	サマリと測定値情報
textReportURL	SiteScope で生成されたカンマ区切りのファイルへの URL
userReportIndexURL	ユーザがアクセス可能なレポート用の索引ページへの URL
userTextReportURL	ユーザがアクセス可能なレポートで生成されたカンマ区切りのファイルへの URL

使用可能なプロパティ	説明
userXMLReportURL	ユーザがアクセス可能なレポートで生成された XML ファイルへの URL
xmlReportURL	管理レポートで生成された XML ファイルへの URL


SiteScope 警告のユーザ・インタフェース

本項の内容










- ▶ SiteScope 警告ページ (1333 ページ)
- ▶ [新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス (1335 ページ)
- ▶ [アクションタイプ] ダイアログ・ボックス (1345 ページ)
- ▶ [警告アクション] ダイアログ・ボックス (1348 ページ)


SiteScope 警告ページ

このページには、選択したモニタまたはグループに関連付けられている警告に関する情報が表示されます。このページを使用して、警告定義を追加、編集、削除します。

アクセス方法	モニタ・ツリーまたはテンプレート・ツリーで、警告の記号  が横に表示されているグループまたはモニタを選択します。右側の表示枠で [警告] タブをクリックすると、オブジェクトに設定されている警告が表示されます。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 特定のモニタまたはグループに対して作成された警告は、オブジェクトの [モニタの警告] / [グループの警告] リストに表示されます。ターゲットのモニタまたはグループは、[モニタに関連付けられた警告] / [グループに関連付けられた警告] リストに表示されます。 ▶ 各テーブル・列は、列タイトルを右クリックすると昇順または降順に並べ替えられます。上矢印または下矢印は、並べ替え順序を示します。 ▶ また、警告を使って作業する場合、SiteScope API を使用することもできます。詳細については、42 ページの「SiteScope 設定 API の使用」を参照してください。
関連タスク	1316 ページの「警告の設定方法」
関連情報	1289 ページの「SiteScope 警告の概要」


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	子の警告を表示 ：選択したノードの直接の子の警告のみを表示します。
	すべての子孫の警告を表示 ：選択したノードのすべての子孫の警告を表示します。
	新規警告 ：[新規警告] ダイアログ・ボックスが開き、警告を設定して、選択した SiteScope グループまたはモニタに追加できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1335 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注 ：このボタンは、[モニタの警告] / [グループの警告] テーブルでのみ使用できます。
	警告の編集 ：[警告の編集] ダイアログ・ボックスが開き、選択した警告のプロパティを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1335 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	コピー ：警告がコピーされます。 注 ：このボタンは、[モニタの警告] / [グループの警告] テーブルでのみ使用できます。
	貼り付け ：ツリーの選択した場所に警告を貼り付けます。 注 ：このボタンは、[モニタの警告] / [グループの警告] テーブルでのみ使用できます。
	警告の削除 ：ツリーから警告を削除します。
有効化	有効化 ：モニタ / グループに関連付けられている警告が有効になります。
無効化	無効化 ：モニタ / グループに関連付けられている警告が無効になります。
	テスト ：選択したサーバの警告定義をテストします。
	すべて選択 ：表示されている警告がすべて選択されます。

UI 要素	説明
	選択を解除 ：選択をクリアします。
名前	SiteScope で認識される警告の名前。
状態	警告の状態（有効 / 無効）。
説明	警告の詳細。
アクション名	[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスの警告アクションの名前。

新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、SiteScope、グループ、またはモニタの警告を定義できます。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告] を選択するか、[警告] タブ（モニタまたはテンプレート・ビュー）で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。
関連タスク	1316 ページの「警告の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1289 ページの「SiteScope 警告の概要」 ▶ 1345 ページの「[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス」 ▶ 1348 ページの「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」 ▶ 823 ページの「共通イベント・マッピング」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前	警告定義の名前。SiteScope の表示でこの警告定義を識別するために使用します。
警告の説明	警告の詳細。この詳細はほかのコンテキストには表示されません。警告の編集時にのみ表示されます。







警告ターゲット












ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
警告ターゲット	<p>ショートカット・メニュー・ツリーを使用して、この警告をトリガするためのグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。ショートカット・メニューには、現在選択されているオブジェクトおよびすべての子オブジェクトが含まれます。現在のオブジェクトの横にあるボックスをチェックすると、チェックしたオブジェクト内のすべてのオブジェクトにこの警告が関連付けられます。個々のオブジェクトを 1 つ以上チェックすると、選択したオブジェクトにこの警告定義が関連付けられます。</p> <p>あるいは、SiteScope のルートを選択し、フィルタに設定された条件に一致するオブジェクトに警告の対象を制限する警告フィルタ・ルールを [フィルタ設定] で定義することもできます。詳細については、1343 ページの「フィルタ設定」を参照してください。</p>

警告アクション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	<p>新規警告アクション: [アクション タイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告をトリガしたときに実行するアクションを定義できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1345 ページの「[アクション タイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>警告アクションの編集: [アクション タイプ] ダイアログ・ボックスが開き、警告アクションを編集できます。ユーザ・インタフェースの詳細については、1345 ページの「[アクション タイプ] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
	<p>警告アクションの削除: 警告アクションを削除します。関連付けられたモニタは無効にはなりません。</p>
	<p>重複: 警告アクションを複製します。</p>
	<p>すべて選択: 表示されている警告アクションをすべて選択します。</p>
	<p>選択を解除: 選択をクリアします。</p>

UI 要素	説明
 < 警告アクション・タイプ・アイコン >	<p>警告に定義されているアクションの種類を示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="568 274 1230 343">  データベース : 問題の詳細を含む警告メッセージを SQL データベースへのレコードとして送信します。 <li data-bbox="568 361 1230 430">  モニタの無効化 / 有効化 : 警告の生成を手動で制御します。 <li data-bbox="568 447 1230 543">  電子メール : エラーまたは警告の詳細を含む電子メール・メッセージを、1 つ以上の電子メール・アドレスに送信します。 <li data-bbox="568 560 1230 630">  ログ・イベント : Microsoft Windows イベント・ログにイベントのログを記録します。 <li data-bbox="568 647 1230 708">  ページャ : SiteScope が特定の条件を検出したことを通知するメッセージをページャに送信します。 <li data-bbox="568 725 1230 821">  ポスト : モニタ条件の詳細を含む CGI POST を CGI スクリプト、サーブレット、またはその他の CGI 対応プログラムに送信します。 <li data-bbox="568 838 1230 1038">  スクリプト : SiteScope は、警告トリガ条件が検出されるとスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。呼び出されるスクリプトまたはバッチ・ファイルは、コマンド・ライン入力から呼び出し可能なシステム・コマンドまたは任意の言語のプログラムを実行できます。 <li data-bbox="568 1055 1230 1150">  SMS : ショート・メッセージ・サービス (SMS) を使用して、短いテキスト・メッセージを SMS 対応の携帯電話やワイヤレス・デバイスに送信します。 <li data-bbox="568 1168 1230 1237">  SNMP トラップ : SNMP ホストまたは管理コンソールに SNMP トラップを送信します。 <li data-bbox="568 1255 1230 1341">  サウンド : イベントが検出されると、SiteScope が稼働するマシン上でサウンドまたはオーディオ・ファイルを再生します。
名前	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。

UI 要素	説明
カテゴリ	[状態トリガ] 表示枠で選択した、警告アクションをトリガするカテゴリ。[状態トリガ] のユーザ・インタフェースの詳細については、1365 ページの「[状態トリガ] 表示枠」を参照してください。
いつ	[トリガの頻度] 表示枠で選択した、いつ警告を送信するかを示すスケジュール。[トリガの頻度] のユーザ・インタフェースの詳細については、1366 ページの「[トリガの頻度] 表示枠」を参照してください。
スケジュール	[アクションタイプの設定] 表示枠で選択した毎日または毎週のスケジュール。[アクションタイプの設定] のユーザ・インタフェースの詳細については、1348 ページの「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
ターゲット	<p>アクション・タイプのターゲット・データが含まれます。タイプに応じて、ターゲット列には次の内容が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 電子メール：[電子メールの送信先] セクションで選択した電子メール受信者が含まれます。 ▶ 無効化または有効化：[ターゲット] リストで選択したターゲットが含まれます。 ▶ データベース：[データベース接続 URL] ボックスで入力した URL が含まれます。 ▶ ログ・イベント：[電子メールの送信先] セクションで選択したログ・イベント受信者が含まれます。 ▶ ページャ：[ページャ警告受信者] リストで選択したページャ受信者が含まれます。 ▶ ポスト：[フォーム送信先 URL] ボックスで入力した URL が含まれます。 ▶ スクリプト：[スクリプト] ボックスで選択したスクリプトが含まれます。 ▶ SMS：[SMS 番号] ボックスで入力した SMS 番号が含まれます。 ▶ SNMP トラップ：[SNMP トラップ] リストで選択した SNMP トラップが含まれます。 ▶ サウンド：（この列は空です）。

HP Operations Manager 統合設定

注： [HP Operations Manager 統合設定] 表示枠は、HP Operations Agent をインストールし、HPOM/BSM サーバに接続しており、[HP Operations Manager 統合] ダイアログ・ボックス ([プリファレンス] > [統合プリファレンス] > [HP Operations Manager 統合] > [HP Operations Manager 統合のメイン設定]) で [イベント送信の有効化] を選択している場合にのみアクティブになります。詳細については、326 ページの「SiteScope からの HPOM または BSM へのイベント送信を有効にする方法」を参照してください。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
イベント送信	警告がトリガされると HPOM/BSM サーバへのイベントの送信を有効にします。 標準設定値： 選択されている
モニタのイベント・マッピングの使用	選択した場合、警告がトリガされると、SiteScope は警告をトリガしたモニタに関連付けられたイベント・マッピング・テンプレートを使用してイベントを送信します。 クリアした場合、SiteScope は警告イベント属性値を使用してイベントを送信します。これらの値は、選択した警告イベント・マッピング・プリファレンスに従って入力されます。次の [イベントマッピング] 設定は、警告イベント・マッピングが使用される場合にのみ使用できます。 標準設定値： 選択されていない

UI 要素	説明
イベント・マッピング	<p>モニタ・インスタンスのイベントの送信に使用するイベント・マッピング・テンプレート。このテンプレートには、警告および警告をトリガしたモニタ（測定値レベルの実行時データは使用不可能）の SiteScope 実行時データとイベント送信に使用される属性値のマッピングが含まれます。</p> <p>必要なイベント・マッピング・テンプレートを選択するか、標準設定のマッピングを使用します。[新規]または[編集]をクリックして共通イベント・マッピング・ダイアログ・ボックスを開き、新しいイベント・プリファレンスを設定するか、既存のイベント・プリファレンスを変更します。ユーザ・インタフェースの詳細については、831 ページの「[新規イベントマッピング] / [イベントマッピングの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>注：この設定は、[モニタのイベントマッピングの使用] がクリアされている場合のみアクティブになります。</p>
イベント・タイプ・インジケータ	<p>このイベントと一緒に送信される警告のイベント・タイプ・インジケータを入力できます。これは、測定値とインジケータ間のマッピングです。この設定は任意で、インジケータがなくてもイベントは送信されます。</p> <p>トリガされた警告の CI タイプは、警告（グループの警告や測定値ごとに CI タイプをレポートするモニタの警告）の設定時に毎回わかっているわけではないので、インジケータを手動で入力すると役に立ちます。</p> <p>注：警告インスタンスは複数のモニタに関連付けられているか、複数のカウンタによってトリガされる場合があるため、インジケータは自動的に解決できません。</p>
イベント・タイプ・インジケータ状態	<p>このイベントと一緒に送信されるイベント・タイプ・インジケータの状態を入力できます。これは、この状態変化を発生させるしきい値にマップされているイベント重大度レベル（不明、正常域、注意域、警戒域、重要警戒域、危険域）です。このフィールドの設定は任意で、インジケータ状態がなくてもイベントは送信されます。</p> <p>注：警告インスタンスは複数のモニタに関連付けられているか、複数のカウンタによってトリガされる場合があるため、インジケータ状態は自動的に解決できません。</p>

警告の有効化 / 無効化

警告の生成を手動で制御するために使用します。監視対象のシステムが保守のためにオフラインになっている場合や、警告の受信者が一定期間受信不可能な場合などに役立ちます。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
警告を有効化	無効化された警告アクションが上書きされ、定義した条件に基づいて警告が実行されるようになります。
警告を無期限に無効化	このラジオ・ボタンをクリアして警告定義を更新するまで、警告の条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されないようになります。 注： このオプションを使用すると、一時的な条件に対応するために警告が無効になっている場合、予想される警告機能が失われる場合があります。後でこの状態を確認し、必要に応じて警告定義を手動で有効にしてください。
警告を次の時間設定で無効化：<期間>	指定した期間、警告条件が満たされても警告アクションの実行を停止します。警告はすぐに無効になり、期間が終了すると再度有効になります。
1 回限定のスケジュールに基づいて無効化開始<時刻>終了<時刻>	指定した期間、条件に一致しても SiteScope で警告アクションが実行されなくなります。警告は、この期間の開始時に無効になり、この期間を過ぎると再度有効になります。
無効化の説明	無効操作の目的の詳細（任意指定）。

フィルタ設定

入力した基準に一致するモニタのみに警告アクションを制限するフィルタ条件を作成します。大量のモニタに警告を定義しておき、選択したリスト内の特定のモニタのみが警告をトリガするようにフィルタを適用できます。これによって警告定義の作成と警告管理を簡素化できます。警告のフィルタリングを無効にするには、該当するフィールドをクリアして、警告定義を更新します。

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
名前の一致	<p>名前の一部に特定のテキストが含まれるものを除き、関連付けられたグループまたはモニタすべてに対する警告を停止します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 名前の文字列パターンを照合するための正規表現をこのテキスト・ボックスに入力します。詳細については、240 ページの「正規表現の概要」を参照してください。 ▶ フィルタ基準として使用するモニタ名文字列の全部または一部を入力します。たとえば、文字列「URL:」を入力すると、この警告は名前に「URL:」が含まれるモニタに制限されます。 <p>注: 照合では大文字と小文字が区別されます。</p>
状態の一致	<p>特定の状態テキストを返したものを除き、関連付けられたモニタすべてに対する警告を停止します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 警告をトリガするモニタの状態テキストに表示される文字列を入力します。たとえば、テキスト「timeout」を入力すると、この警告に関連付けられ、タイムアウト状態になっているモニタのみが警告をトリガします。 ▶ 状態の文字列パターンを照合するための正規表現をこのテキスト・ボックスに入力します。詳細については、240 ページの「正規表現の概要」を参照してください。 <p>注: 照合では大文字と小文字が区別されます。</p>

UI 要素	説明
モニタ・タイプ的一致	警告アクションを、この警告に関連付けられている一連のモニタの中の特定のモニタ・タイプに制限します。[モニタ タイプ リスト] から対象とするモニタ・タイプを選択し、[選択されたモニタ タイプ リスト] ボタンに移動します。
タグ的一致	警告アクションを、タグ値を選択したこの警告と関連付けられているモニタのみに制限します。含めるタグを選択します。



タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。 概念の詳細については、122 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。
タグの追加	[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、133 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

[アクションタイプ] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、警告がトリガされたときに実行されるアクションを選択できます。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope, グループ, またはモニタを右クリックし, [新規作成] > [警告] を選択するか, [警告] タブ (モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して, [警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告時のアクション] セクションで, [新規警告アクション]  ボタンをクリックします。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 一度に選択できる警告のタイプは 1 つのみです。 ▶ 警告を編集する場合, アクションの種類は変更できません。たとえば, 警告のアクションの種類が電子メールの場合, SMS には変更できません。
関連タスク	1316 ページの「警告の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1289 ページの「SiteScope 警告の概要」 ▶ 1335 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」 ▶ 1348 ページの「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」



ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベース	<p>問題の詳細を含む警告メッセージを SQL データベースへのレコードとして送信します。次にデータベース・ツールを使用して、監視データのより詳細な記録、並べ替え、レポート作成を提供できます。データベース警告の詳細については、1351 ページの「データベース警告のプロパティ」を参照してください。</p>
モニタの無効化 / 有効化	<p>別のモニタでの状態の変化に基づいて、モニタまたはモニタ・グループを自動的に有効または無効にします。</p> <p>注：このアクションは、テンプレート警告の作成時には使用できません。モニタの無効化 / 有効化警告の詳細については、1353 ページの「モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ」を参照してください。</p>
電子メール	<p>1 つ以上の電子メール・アドレスに、警告をトリガした条件の詳細を含む電子メール・メッセージを送信します。電子メール警告の詳細については、1354 ページの「電子メール警告のプロパティ」を参照してください。</p>
ログ・イベント	<p>Microsoft Windows イベント・ログにイベントのログを記録します。</p> <p>イベント・ログのエントリは、イベント・ビューアで表示、およびイベント・ログから中央管理された警告を実行するほかのソフトウェア・ユーティリティで使用できます。ログ・イベント警告の詳細については、1356 ページの「ログ・イベント警告のプロパティ」を参照してください。</p>
ページャ	<p>SiteScope が特定の条件を検出したことを通知するメッセージをページャに送信します。ページャ警告の詳細については、1357 ページの「ページャ警告のプロパティ」を参照してください。</p>
送信	<p>CGI POST メッセージを CGI スクリプト、サーブレット、その他の CGI 対応プログラムに送信します。メッセージには、モニタ条件の詳細が含まれます。送信警告の詳細については、1358 ページの「送信警告のプロパティ」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
スクリプト	<p>警告条件に一致した場合に SiteScope でスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。スクリプトまたはバッチ・ファイルで、コマンド・ライン・エントリから呼び出せる任意の言語でシステム・コマンドまたはプログラムを実行できます。</p> <p>この警告を使用して、重大状態または障害に自動的に対応する復旧スクリプト（サーバの再起動やファイルのコピーなど）を実行できます。スクリプト警告の詳細については、1360 ページの「スクリプト警告のプロパティ」を参照してください。</p>
SMS	<p>ショート・メッセージ・サービス（SMS）を使用して、短いテキスト・メッセージを SMS 対応の携帯電話やワイヤレス・デバイスに送信します。SMS 警告の詳細については、1362 ページの「SMS 警告のプロパティ」を参照してください。</p>
SNMP トラップ	<p>SNMP 管理コンソールまたはホストに SNMP トラップを送信します。SNMP エージェントでは通常サポートされないシステム・パラメータの SNMP レポートが使用可能になります。SNMP トラップ警告の詳細については、1363 ページの「SNMP トラップ警告のプロパティ」を参照してください。</p>
サウンド	<p>イベントが検出されると、SiteScope が稼働するマシン上でサウンドまたはオーディオ・ファイルを再生します。サウンド警告の詳細については、1364 ページの「サウンド警告のプロパティ」を参照してください。</p>

[警告アクション] ダイアログ・ボックス

[警告アクション] ダイアログ・ボックスでは、警告のタイプに固有の設定を定義し、警告がトリガされたときに実行するアクションを設定します。



アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告] を選択するか、[警告] タブ (モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告時のアクション] セクションで、[新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ [警告アクション] ダイアログ・ボックスは、次の 3 つの表示枠で構成されます。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ アクションの種類の設定 : [アクションタイプの設定] は、[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスで選択した警告アクションの種類により異なります。アクション・タイプの詳細については、1350 ページの「[アクションタイプの設定] 表示枠」を参照してください。 ▶ 状態トリガ : 詳細については、1365 ページの「[状態トリガ] 表示枠」を参照してください。 ▶ トリガの頻度 : 詳細については、1366 ページの「[トリガの頻度] 表示枠」を参照してください。
関連タスク	1316 ページの「警告の設定方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1289 ページの「SiteScope 警告の概要」 ▶ 1335 ページの「[新規警告] / [警告の編集] ダイアログ・ボックス」

次の要素はすべてのアクション・タイプに共通します。

UI 要素	説明
新規変数	<p>クリックして新規変数を定義します。詳細については、994 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p> <p>このボタンを使用できるのは、テンプレート警告の [新規警告] ダイアログ・ボックス、[警告の編集] ダイアログ・ボックス、および [新規アクション] ダイアログ・ボックスから制限されます。</p>

[アクション タイプの設定] 表示枠

この表示枠のコンテンツは、[アクション タイプ] ダイアログ・ボックスで選択されたアクション・タイプによって異なります。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告] を選択するか、[警告] タブ (モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告アクション] セクションで、[新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクション タイプ] ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
関連タスク	1316 ページの「警告の設定方法」
関連情報	1348 ページの「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」

次の要素は [アクション タイプの設定] のすべてのアクション・タイプに共通しますが、その他の要素については個別のサブセクションで説明します。

UI 要素	説明
アクション名	警告がトリガされたときに実行されるアクションの名前。警告の名前ではありません。 例: すべての Solaris マシンの CPU をチェックして、警告がトリガされたときに SMS メッセージを送信するように警告を設定する場合、[一般設定] の警告名を Solaris_CPU、アクション名を send_sms に指定できます。
新規変数	クリックして新規変数を定義します。詳細については、994 ページの「[新規変数] ダイアログ・ボックス」を参照してください。

データベース警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
データベース接続 URL	<p>データベースに接続する URL を入力します。</p> <p>例：Windows NT では、[設定] コントロール・パネルの ODBC データ・ソース・マネージャを使用して、「test」という名前の接続を作成し、データベース接続 URL に「jdbc:odbc:test」と入力します。</p> <p>Windows 認証使用時の注意事項：Windows 認証を使用してデータベースにアクセスする場合、接続 URL として「jdbc:mercury:sqlserver:// <サーバ名または IP アドレス> : 1433;DatabaseName= <データベース名> ; AuthenticationMethod=type2」を、データベース・ドライバとして「com.mercury.jdbc.sqlserver.SQLServerDriver」を入力します。SiteScope サービスの実行元であるアカウントの Windows ユーザ資格情報を使用してデータベースへの接続が確立されるように、[データベース ユーザ名] ボックスおよび [データベース パスワード] ボックスは空のままにします。</p>
データベース・ドライバ	<p>JDBC データベース・ドライバの Java クラス名を入力します。</p> <p>SiteScope では、プライマリとバックアップのデータベース接続の両方に同じデータベース・ドライバを使用します。カスタム・ドライバを使用する場合、< SiteScope のルート > / java ディレクトリにそのドライバをインストールする必要があります。SiteScope のデータベース・ドライバの設定の詳細については、114 ページの「Database Query Monitor Overview」を参照してください。</p>
SQL ステートメント	<p>データベースへの警告の追加に使用する SQL ステートメントを入力します。</p> <p>山括弧 (< および >) で囲まれた項目は、警告をトリガしたモニタのフィールドで置換されます。</p> <p>標準設定値：INSERT INTO SiteScopeAlert VALUES('>time<', '>group<', '>name<', '>state<')</p>
データベース・ユーザ名	<p>必要に応じて、データベースに接続するユーザ名を入力します。</p>

UI 要素	説明
データベース・パスワード	必要に応じて、データベースに接続するパスワードを入力します。
バックアップ・データベース接続 URL	SiteScope 警告のログ記録にバックアップ・データベースが必要で、メインのデータベース接続が使用できない場合に使用するバックアップ・データベース接続の URL を入力します。 例: バックアップ・データベース接続の ODBC 接続の名前が testdb2 の場合、URL に「jdbc:odbc:testdb2」と入力します。
スケジュール	警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。 このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して使用可能な変数のリストを表示します。 標準設定値: 毎日、全日

モニタの無効化 / 有効化警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
グループ / モニタ・アクション	警告がトリガされたときに、この警告アクションでモニタを無効化するか有効化するかを選択します。 標準設定値: 無効化

UI 要素	説明
ターゲット	<p>この警告のアクションによって影響を受けるグループおよびモニタを選択します。[ターゲット]リストには, SiteScope に設定されたすべてのグループおよびモニタが含まれます。この警告アクションのグループ内で実行中のグループまたはモニタを選択し, [選択済みターゲット] リストに追加できます。</p> <p>例: この警告アクションがディスク領域モニタに設定されているとします。このモニタに対してトリガされた警告によって, 同じサーバを監視しているすべての CPU モニタを無効にできます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し, 警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する, 日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p>

電子メール警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
受信者	<p>[電子メール警告受信者] リストから, 警告の 1 人以上の電子メール受信者を選択します。このリストには, [電子メールのプリファレンス] で設定した受信者が表示されます。詳細については, 791 ページの「電子メール・プリファレンス」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
アドレス	<p>1 つ以上の電子メール・アドレスをカンマ (",") で区切り入力します。このアドレスは, 公式規格の RFC 2822 に従って構文が有効かチェックされますが, その他のエラー (電子メールのユーザが存在するかどうかなど) はチェックされません。</p> <p>注: [アドレス] ボックスにデータが含まれる場合, [電子メール警告受信者] リストからの選択は無視されます。</p>

UI 要素	説明
件名	<p>電子メール警告アクション・メッセージの件名フィールド・テンプレートを選択します。Typical テンプレートには次の値が含まれます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ メッセージの件名 (SiteScope 警告) ▶ モニタ警告のカテゴリ (「エラー」, 「警告」, 「OK」, 「データなし」) ▶ モニタの名前またはモニタ・タイトル ▶ モニタにより返された状態 ▶ 警告を送信した SiteScope インストールのアドレス (括弧で表示) <p>標準設定値: Typical</p> <p>例: SiteScope 警告, エラー, URL: http://gate.company.com, 不明なホスト名 (gate.company.com)</p>
スケジュール	<p>事前に定義したスケジュールが表示されます。</p> <p>注: [スケジュールプリファレンス]で作成されたスケジュールしか選択できません。詳細については、840 ページの「スケジュール・プリファレンスの概要」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
テンプレート	<p>電子メール警告アクションのテンプレートを選択します。</p> <p>短い電子メール・メッセージの場合は、電子メール警告アクションで ShortMail テンプレートを選択します。その他のオプションでは、電子メール警告に含める詳細のレベルを選択できます。</p> <p>標準設定値 : Typical。このテンプレートには次の値が含まれます。Monitor:<groupID>:<name>; Tags <tag>; Group:<group>; Status:<state>; Sample #:<sample>; Time:<time></p> <p>注 : < SiteScope のルート・ディレクトリ > <code>¥templates.mail</code> ディレクトリに別のテンプレートを追加できます。使用可能なテンプレートの詳細については、テキスト・エディタでこのディレクトリ内のファイルを開き、各オプションで送信される値を参照してください。</p>
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>

ログ・イベント警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
送信先	<p>イベントがイベント・ログに追加される Windows マシンの名前を入力します。</p> <p>標準設定値 : localhost (SiteScope が稼動しているマシン)。</p>
テンプレート	<p>ログ・イベント・タイプの警告アクション用のテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値 : Typical</p> <p>注 : < SiteScope のルート・ディレクトリ > <code>¥templates.eventlog</code> で、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。</p>

UI 要素	説明
メッセージ	<p>イベント・ログに送信されるメッセージのプレフィックスを入力します。</p> <p>次の文字列を入力して警告されたモニタのコンテキストで SiteScope を開くリンクを追加できます。</p> <pre>Login: <sitescopeurl>/servlet/Main?activeid=<_internalId>&activerighttop=dashboard&view=new&dashboard_view=Details&dashboard_model=true&dashboard_favorite=test.</pre>
イベント・ソース	<p>ログが記録されたイベントの <Source> フィールドの設定に使用する文字列を入力します。</p> <p>構文: テキストで指定する必要があります。</p> <p>標準設定値: SiteScope</p>
イベント ID	<p>ログが記録されたイベントの <ID> フィールドの設定に使用する数字を入力します。</p> <p>構文: 数値で指定する必要があります。</p> <p>標準設定値: 1000</p>
イベント・タイプ	<p>イベントに使用されるイベント・タイプを選択します。</p> <p>標準設定値: モニタの状態の使用。つまり、イベント・タイプは、モニタの状態が「エラー」の場合は エラー、「警告」の場合は 警告、「正常」の場合は 情報 となります。</p>
イベント・カテゴリ ID	<p>この警告で作成されたイベントの「カテゴリ ID」として使用される数字を入力します。</p> <p>標準設定値: 0</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して使用可能な変数のリストを表示します。</p> <p>標準設定値: 毎日, 全日</p>
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

ページ警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ページ警告受信者	<p>[ページ警告受信者] リストから、警告の 1 人以上のページ警告受信者を選択します。このリストには、[ページ プリファレンス] で設定した受信者が表示されます。このトピックの詳細については、801 ページの「ページ・プリファレンス」を参照してください。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
テンプレート	<p>ページ警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値: Typical</p> <p>注: < SiteScope のルート・ディレクトリ> <code>*/templates.page</code> ディレクトリで、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。</p>
メッセージ	<p>ページに送信されるメッセージ・テキストを入力します。</p> <p>次の文字列を入力して警告されたモニタのコンテキストで SiteScope を開くリンクを追加できます。</p> <p>Login: <code><sitescopeurl>/servlet/Main?activeid=<_internalId>&activerighttop=dashboard&view=new&dashboard_view=Details&dashboard_model=true&dashboard_favorite=test.</code></p>
スケジュール	<p>ページ警告受信者の事前に定義したスケジュールが表示されます。</p>
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>

送信警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
フォーム送信先 URL	<p>SiteScope から警告に送信する CGI スクリプトの URL を入力します。次に例を示します。 http://admindb.server.net/cgi-bin/error.pl。</p> <p>構文 : 文字列 http:// を含める必要があります。URL アドレスの構文が有効かチェックされます。</p>
テンプレート	<p>送信警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値 : Typical</p> <p>注 : < SiteScope のルート・ディレクトリ> <code>¥templates.post</code> ディレクトリで、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。</p>
認証ユーザ名	<p>送信警告で CGI スクリプトの URL にアクセスするユーザ名を入力します。ユーザ名が不要な CGI スクリプトもあります。</p> <p>または、このエントリを空白のままにし、[一般設定] ([プリファレンス] > [一般プリファレンス]) の [標準設定の認証ユーザ名] セクションにユーザ名を入力します。複数のモニタで使用する共通の認証資格情報を定義する場合、この方法を使用します。</p>
認証パスワード	<p>送信警告の認証ユーザ名のパスワードを入力します。</p> <p>または、このエントリを空白のままにし、[プリファレンス] > [一般プリファレンス] の [標準設定の認証パスワード] セクションにパスワードを入力します。複数のモニタで使用する共通の認証資格情報を定義する場合、この方法を使用します。</p>
HTTP プロキシ	<p>CGI スクリプトの URL へのアクセスに使用する、HTTP プロキシ・サーバのドメイン名とポートを入力します。</p>
プロキシ・サーバのユーザ名	<p>プロキシ・サーバが必要な場合、CGI スクリプトの URL にアクセスするユーザ名を入力します。</p> <p>プロキシ・サーバがプロキシ認証をサポートしている必要があります。</p>

UI 要素	説明
プロキシ・サーバのパスワード	<p>プロキシ・サーバで必要な場合、CGI スクリプトの URL にアクセスするパスワードを入力します。</p> <p>プロキシ・サーバがプロキシ認証をサポートしている必要があります。</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>標準設定値：毎日、全日</p>

スクリプト警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サーバ	<p>スクリプトを実行するサーバを選択します。</p> <p>スクリプト・ディレクトリは、リモート・スクリプトを SiteScope で実行できるリモート・ログイン・アカウントのディレクトリ・ツリー内にある必要があります。</p> <p>標準設定値：SiteScope サーバ</p> <p>テンプレート・モードで作業する場合の注意事項を次に示します。このフィールドのテンプレート変数の使用を有効にするテキスト・ボックスとして、ドロップダウン・リストが表示されます。</p>
スクリプト	<p>選択した条件に応じて実行するスクリプトを選択します。</p> <p>カスタム・スクリプトは、必要な数だけ作成できます。カスタム・スクリプトは、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %scripts ディレクトリまたはリモート・マシンの該当するスクリプト・ディレクトリに置きます。選択したサーバのこのディレクトリにあるすべてのファイルが、SiteScope によってドロップダウン・リストで表示されます。</p> <p>標準設定値：restartServer.bat</p>

UI 要素	説明
パラメータ	<p>スクリプトに渡すことのできる追加のモニタ・パラメータ。その例を次に示します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ スクリプト・ディレクトリのパス ▶ 警告の原因となったモニタの名前 ▶ モニタの現在の状態 ▶ 警告メッセージ・ファイルへのパス ▶ モニタの ID ▶ モニタ・グループ <p>これらのパラメータは、それぞれ 7 番目、8 番目、9 番目のようにコマンド・ラインの引数として送信されます。</p> <p>スクリプトに渡すことのできるパラメータは、警告をトリガするモニタのタイプにより異なります。</p> <p>構文: プロパティ・リストのプロパティ名変数を山括弧 (<>) で囲みます。たとえば、サーバ名をスクリプトに渡す場合、テキスト・ボックスに「<_machine>」と入力します。複数の追加パラメータを渡すには、パラメータを 1 つの空白で区切ります。これは、コマンド・ラインで引数を追加する方法と同じです。</p> <p>標準設定値: 値なし。スクリプト警告では、コマンド・ライン引数として常に上記のパラメータをスクリプトに渡します。上記のパラメータを値に含める必要はありません。</p>
出力のエンコード	<p>スクリプト出力のエンコードを選択します。ここで選択することで、エンコードされたファイルの内容を SiteScope で正確に照合および表示できます。</p> <p>標準設定値: windows-1252</p>
テンプレート	<p>スクリプト警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p>標準設定値: Typical</p> <p>注: < SiteScope のルート・ディレクトリ> %templates.script ディレクトリで、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。</p>

UI 要素	説明
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して使用可能な変数のリストを表示します。</p> <p>標準設定値 : 毎日, 全日</p>

SMS 警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SMS 番号	<p>メッセージの宛先を識別する SMS サービスに必要な電話番号を入力します。</p> <p>構文 : 数値のみ。最大 16 桁です。</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して使用可能な変数のリストを表示します。</p> <p>注 : この警告を使用できるのは Windows プラットフォームに制限されます。このテンプレート・アクションの [スケジュール] フィールドで、変数を使用できます。</p> <p>標準設定値 : 毎日, 全日</p>

SNMP トラップ警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
SNMP トラップ	<p>警告をトリガする 1 つ以上の SNMP トラップを選択します。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
テンプレート	<p>SNMP トラップ警告アクション・タイプのテンプレートを選択します。</p> <p>テンプレートの各行は、別々の SNMP 変数として送信されます。次の方法でテンプレート・ファイルを変更することもできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ [Agent Host: <hostname-or-ip-address>] をテンプレートの最初の行に使用し、トラップ元としてこのホスト名または IP アドレスのあるトラップを送信します。標準設定では、SiteScope が稼動しているマシンの IP アドレスがトラップ元として使用されます。 ▶ [Command: <command name>] を使用し、標準設定のコマンドを上書きします。 ▶ [Type: <var-type>] を使用し、オブジェクトの標準設定のタイプを上書きします。 <p>[OID: <object id>] を使用し、標準設定のオブジェクト ID を変更します。たとえば、var-binding 変数オブジェクト ID の変更これを使用します。</p> <p>標準設定値 : Typical</p> <p>注 : < SiteScope のルート・ディレクトリ > <code>¥templates.snmp</code> ディレクトリで、既存のテンプレートの内容を表示するか、別のテンプレートを追加できます。</p>
メッセージ	<p>この警告によって送信される、SNMP トラップに追加する任意のプレフィックスを入力します。</p>

UI 要素	説明
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>テンプレート警告のためのみにこのフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して使用可能な変数のリストを表示します。</p> <p>標準設定値 : 毎日, 全日</p>
警告を解除するようアクションをマークする	<p>状態が変化して警告のトリガ条件が真でなくなった場合、このアクションで警告が解除され、送信メッセージに「解除」を追加した解除通知が送信されます。</p>



サウンド警告のプロパティ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サウンド・ファイル	<p>< SiteScope のルート・ディレクトリ > %templates.sound ディレクトリから再生されるサウンドを選択します。.au のサフィックスの AU 形式 (8 ビット, &#micro;law, 8000 Hz, 1 チャンネル) で別のサウンドをディレクトリに追加できます。</p> <p>標準設定値 : Default</p>
スケジュール	<p>警告の条件が一致し、警告がトリガされた場合に警告アクションを実行する、日次スケジュールと週次スケジュールを選択します。</p> <p>このフィールドで変数を使用することも可能です。このためには %% を入力して使用可能な変数のリストを表示します。</p> <p>標準設定値 : 毎日, 全日</p>

[状態トリガ] 表示枠

[状態トリガ] 表示枠は、警告アクションをトリガするオブジェクト・タイプの状態の選択に使用します。ある状態から別の状態に変化したときに警告がトリガされます。警告アクションをトリガするカテゴリを選択します。



アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告] を選択するか、[警告] タブ（モニタまたはテンプレート・ビュー）で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告アクション] セクションで、[新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
関連タスク	1316 ページの「警告の設定方法」
関連情報	1348 ページの「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
使用不能	以前は使用可能だった監視対象マシンが使用不能に変化した場合、警告がトリガされます。
エラー	モニタが報告する状態が「正常」（標準設定）から変化した場合、警告がトリガされます。
警告	モニタが報告する状態が「正常」から変化した場合、警告がトリガされます。
正常	モニタが報告する状態が「エラー」から変化した場合、警告がトリガされます。

[トリガの頻度] 表示枠

[トリガの頻度] 表示枠は、トリガの頻度の選択に使用します。

アクセス方法	警告を定義する SiteScope、グループ、またはモニタを右クリックし、[新規作成] > [警告] を選択するか、[警告] タブ (モニタまたはテンプレート・ビュー) で既存の警告を選択して、[警告の編集]  ボタンをクリックします。[新規警告] または [警告の編集] ダイアログ・ボックスの [警告アクション] セクションで、[新規警告アクション]  ボタンをクリックします。[アクションタイプ] ダイアログ・ボックスで、アクションの種類を選択します。
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 使用可能なオプションは、[状態トリガ] 表示枠で選択した内容により異なります。 ▶ このオプションの詳細については、1294 ページの「SiteScope 警告が送信される時期について」を参照してください。
関連タスク	1316 ページの「警告の設定方法」
関連情報	1348 ページの「[警告アクション] ダイアログ・ボックス」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
エスカレート、次のアクション <N> が、<N> 回エラー状態だった場合	<p>作成する警告アクションが別の警告アクションに依存する場合、このオプションを選択します。この警告アクションが依存する別の警告アクションの名前を選択し、この警告アクションがトリガされる前に別の警告アクションがトリガされる回数を選択する必要があります。</p> <p>例: 特定の条件に一致したときにサウンド警告を送信する警告アクションを作成したとします。サウンド警告アクションが 3 回トリガされたときに、電子メール警告を送信するようにします。サウンド警告アクションの名前と 3 を選択します。</p> <p>注: このオプションは、警告に別の警告アクションが定義されている場合にのみ表示されます。</p>

UI 要素	説明
常時：条件が最低 <N> 回	<p>警告条件が少なくとも N 回発生後の最初のトリガ以降、警告条件が再度一致するたびに警告がトリガされます。</p> <p>警告が最初にトリガされる前に、警告条件が一致する必要がある最小回数を入力します。</p> <p>構文： 数値のみ</p> <p>範囲： 1 ~ 99</p>
1 回のみ：条件が ちょうど <N> 回	<p>警告条件が N 回一致した後に、1 回のみ警告がトリガされます。</p> <p>警告がトリガされる前に、警告条件が一致する必要がある回数を入力します。</p> <p>標準設定値： 選択されている</p> <p>構文： 数値のみ</p> <p>範囲： 1 ~ 99</p>
最初に <X> 回、以後 <Y> 回	<p>警告条件が X 回連続で発生した後に警告がトリガされ、その後は警告条件が Y 回連続で発生するたびに警告がトリガされます。たとえば、X に 3 を設定して Y に 4 を設定した場合、警告アクションは警告条件発生 of 3 回目、7 回目、11 回目のように実行されます。</p> <p>構文： 数値のみ</p> <p>範囲： 1 ~ 99</p>
1 回のみ：<N> 件のグ ループエラーの後	<p>[状態トリガ] 表示枠で [エラー] を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>グループ内のいずれかのモニタが警告を N 回連続で報告した後にのみ、警告がトリガされます。</p> <p>注： このオプションは SiteScope グループでのみ使用できます。</p>
1 回のみ：このグ ループ内のすべての モニタがエラー状態に なった後	<p>[状態トリガ] 表示枠で [エラー] を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>グループ内のすべてのモニタがエラー状態になった初回のみ、警告がトリガされます。</p> <p>注： このオプションは SiteScope グループでのみ使用できます。</p>

UI 要素	説明
モニタが以前に error/warning 少なく とも <N> 回	<p>[状態トリガ] 表示枠で [正常] または [警告] を選択した場合にこのオプションが表示されます。</p> <p>このオプションは、対象モニタまたはグループが次のいずれかの状態を報告するまで、警告のトリガを抑制します。</p> <ul style="list-style-type: none">▶ 警告カテゴリが「正常」の場合、「エラー」または「警告」▶ 警告カテゴリが「警告」の場合、少なくとも入力した回数での「正常」または「エラー」

70

スクリプト警告のスクリプトの記述

本章の内容

概念

- ▶ スクリプト警告のスクリプトの記述の概要 (1496 ページ)
- ▶ SiteScope のスクリプトを使った作業 (1496 ページ)
- ▶ SiteScope からスクリプトへのデータの引き渡し (1498 ページ)

概念

スクリプト警告のスクリプトの記述の概要

SiteScope では、エラーまたは警告ステータスが検出された場合にスクリプトまたはバッチ・ファイルを実行できます。通常、スクリプトのトリガとして機能するスクリプト警告を作成することによって、これを実行します。スクリプトまたはバッチ・ファイルは、システム・コマンドで実行するか、任意の言語で記述されたほかのプログラムを呼び出すことができます。危険域状態または失敗に自動的に対応する復旧スクリプトを作成する場合に、これを使用できます。

SiteScope 警告テンプレートに含まれる一般的なプロパティのリストについては、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

SiteScope のスクリプトを使った作業

SiteScope スクリプト警告を実行するスクリプト・ファイルは、**< SiteScope のルート・ディレクトリ> %scripts** フォルダまたはリモート UNIX マシン(リモート・スクリプトの場合)に置く必要があります。たとえば、SiteScope がディレクトリ **C:%SiteScope** にインストールされていてスクリプトの名前が **actionTest.bat** の場合、SiteScope によって、作成したスクリプト警告に応じて次のコマンド・ラインが試行されます。

```
C:%SiteScope%scripts%actionTest.bat C:%SiteScope%scripts monitor_name
```

ここで、**C:%SiteScope%scripts** は最初のコマンド・ライン・パラメータで、**monitor_name** は 2 番目のコマンド・ライン・パラメータとなります。

注：スクリプト警告によって実行されるローカル・スクリプトは **< SiteScope のルート・ディレクトリ> %scripts** に置く必要がありますが、実行パスは **< SiteScope のルート・ディレクトリ> %classes** ディレクトリになります。現在の実行ディレクトリの定義に関する問題を避けるため、スクリプトで呼び出されるファイル・システム・コマンドやプログラムにはフル・パスを使用する必要があります。

スクリプトで実行するアクションは、スクリプトの作成者によって決定されません。SiteScope は、スクリプト警告で呼び出される各スクリプトにいくつかのコマンド・ラインの引数を渡します。この引数を使用して、SiteScope から送信された情報に基づいてプログラム・スクリプトを実行できます。標準設定では、SiteScope は次のパラメータをコマンド・ラインの引数として各スクリプト警告に渡します。

- ▶ スクリプト・ディレクトリのパス
- ▶ 警告の原因となったモニタの名前
- ▶ モニタの現在の状態
- ▶ 警告メッセージ・ファイルへのパス
- ▶ モニタの ID コード
- ▶ モニタが配置されたグループ
- ▶ 警告フォームの [パラメータ] ボックスで指定された追加パラメータ

これらのコマンド・ラインの引数は、通常のコマンド・ライン変数表記規則を使用して、ターゲット・スクリプトによってアクセスできます。これらの表記規則は、Windows NT システムの場合は %1, %2, %3 の形式で、UNIX スクリプトの場合は \$1, \$2, \$3 の形式です（使用されるスクリプトのシェルまたは言語により異なります）。標準設定では、最初の 6 つのパラメータ（つまり、%1 から %6）が各スクリプトに渡されます。その他のパラメータを渡すには、[パラメータ] ボックスでスクリプト警告設定にプロパティ変数またはパラメータを追加する必要があります。[パラメータ] ボックスに入力された最初の変数またはテキストは %7 としてアクセス可能で、以降 2 番目のパラメータは %8, 3 番目のパラメータは %9 のように指定してアクセスできます。

スクリプト警告のパラメータにアクセスする、Perl で記述されたスクリプトの例を次に示します。

```
print " スクリプト ディレクトリのパス名 : $ARGV[0]¥n";
print " 警告の原因となっているモニタの名前 : $ARGV[1]¥n";
print " 現在のステータス モニタ : $ARGV[2]¥n";
print " 警告メッセージ ファイルのパス名 : $ARGV[3]¥n";
print " モニタの ID コード : $ARGV[4]¥n";
print " モニタのグループ : $ARGV[5]¥n";
```

スクリプトに渡されたパラメータを表示する、Microsoft Windows のバッチ・ファイルの例を次に示します。

```
echo スクリプト ディレクトリのパス名 : %1%1
echo 警告の原因となっているモニタの名前 : %2%2
echo 現在のステータス モニタ : %3%3
echo 警告メッセージ ファイルのパス名 : %4%4
echo モニタの ID コード : %5 echo モニタのグループ : %6
```

SiteScope からスクリプトへのデータの引き渡し

7 つの標準設定パラメータに加えて、その他 2 つのパラメータとデータをスクリプトに渡すためのメカニズムがあります。一つは、スクリプト警告設定の追加パラメータ・ボックスを使用するメカニズムです。もう一つは、警告メッセージ・ファイルにアクセスするメカニズムです。

本項の内容

- ▶ 1498 ページの「スクリプト警告設定を使用したデータの引き渡し」
- ▶ 1500 ページの「警告メッセージ・ファイルを使用したデータの引き渡し」

スクリプト警告設定を使用したデータの引き渡し

追加のカスタム・パラメータとデータをスクリプトに送る最も簡単な方法は、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスを使用する方法です。スクリプトに渡された 7 番目の標準設定パラメータ（警告フォームで指定される追加パラメータ）には、スクリプトに送られる 1 つ以上のカスタム・パラメータを指定できます。[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスの [アクションタイプの設定] 表示枠にある [パラメータ] ボックスで、スクリプト警告のカスタム・パラメータを指定します。

これらのパラメータには、ハード・コーディングされた値も指定できます。複数のパラメータをそれぞれ空白で区切って含めることができます。たとえば、次に示す 4 つのテキスト文字列をスクリプトに渡すとします。[パラメータ] ボックスに、次のように文字列を入力します。

パラメータ:

これらは、スクリプトに送られる 7 番目から 10 番目のコマンド・ライン・パラメータとなります。次の Windows バッチ・ファイル・スクリプトでは、標準設定パラメータと、[アクションタイプの設定] ページの [パラメータ] ボックスに入力した上記の追加例のカスタム・パラメータを表示します。

```
echo スクリプト ディレクトリのパス名 : %1%1  
echo 警告の原因となっているモニタの名前 : %2%2  
echo 現在のステータス モニタ : %3%3  
echo 警告メッセージ ファイルのパス名 : %4%4  
echo モニタの ID コード : %5%5  
echo モニタのグループ : %6%6  
echo 7 番目のパラメータ (customA): %7%7  
echo 8 番目のパラメータ (customB): %8%8  
echo 9 番目のパラメータ (customC): %9  
echo 10 番目のパラメータ (customD): %10
```

警告メッセージ・ファイルを使用したデータの引き渡し

データと SiteScope モニタ・パラメータをスクリプトに渡す別の方法として、警告メッセージ・ファイルを使用する方法があります。このファイルは、[警告時のアクション] ダイアログ・ボックスで指定した警告テンプレートを 사용하여、SiteScope により作成されます。独自のカスタム警告テンプレートを作成し、カスタム・テキスト文字列、または使用可能な SiteScope パラメータのいずれかを渡すことができます。SiteScope に含まれる標準設定の NTEventLog テンプレートを次に示します。< > 括弧で囲まれたパラメータは、該当するスクリプト警告がトリガされるたびに、対応する値と置換されて警告メッセージ・ファイルに書き込まれます。SiteScope 警告テンプレートに含まれる一般的なプロパティのリストについては、1451 ページの「SiteScope 警告テンプレートとイベントのプロパティのディレクトリ」を参照してください。

NTEventLog スクリプト警告テンプレート

```
Type: <eventType>
Event Time: <eventTime>
Source: <event>
Source ID: <eventID>
Category: <eventCategory>
Machine: <eventMachine>
Message: <eventMessage>
Monitor: <name>
Group: <group>
Sample #: <sample>
Time: <time>
<mainParameters>
<mainStateProperties>
```

スクリプトでこのデータを使用するには、4 番目の標準設定コマンド・ライン・パラメータで指定されたパス名の場所にある警告メッセージ・ファイルに、スクリプトからアクセスする必要があります（1496 ページの「SiteScope のスクリプトを使った作業」を参照）。その後、スクリプトで警告メッセージ・ファイルの内容を解析し、スクリプトで使用するデータを抽出する必要があります。

復旧スクリプトの記述方法の詳細については、< SiteScope のルート・ディレクトリ > %scripts ディレクトリにあるスクリプト・ファイルを参照してください。**actionTest.bat** のテンプレート例を使用して、独自のスクリプトを作成できます。**perlTest.pl** の例には、Perl スクリプトを呼び出す方法が示されています。**restartIIS.bat**、**restartService.bat**、**restartServer.bat** のスクリプトは、一般的な復旧アクションを実行します。

UNIX 環境のスクリプトの例には、アクションの **Test.sh** と **perlTest.pl** があります。

71

SiteScope レポート

本章の内容

概念

- ▶ SiteScope レポートの概要 (1502 ページ)
- ▶ SiteScope レポート・タイプ (1504 ページ)
- ▶ SiteScope 管理レポートを使った作業 (1506 ページ)

タスク

- ▶ レポートの作成方法 (1508 ページ)

参照情報

- ▶ SiteScope レポートのユーザ・インタフェース (1510 ページ)

概念

SiteScope レポートの概要

SiteScope レポートには、時間の経過に伴う監視対象のサーバとアプリケーションのパフォーマンスに関する情報が表示されます。SiteScope レポートは、運用パフォーマンスと可用性の監視とトラブルシューティング、監視対象環境の確認を行ううえで重要なツールです。

単一のモニタ、複数のモニタ、さらには多数のモニタ・グループのレポートを作成できます。レポート定義には、特定のモニタの測定値、結果のサマリ、グラフなど、レポートの内容のオプションが含まれます。

セールス、マーケティング、カスタマ・サポート、運営の管理層を含む、組織の多くのユーザが SiteScope レポートを活用できます。SiteScope ユーザ・アカウントによって、レポートを表示する SiteScope サービスへのこれらのユーザのアクセスを制限できます。詳細については、844 ページの「ユーザ管理プリファレンスの概要」を参照してください。

注：

- ▶ UNIX/Linux の SiteScope で特定のレポート要素を表示するには、SiteScope を実行しているサーバで X Window システムが稼動している必要があります。
 - ▶ SiteScope インストールのアップグレード後に SiteScope バージョン 9.0 以降で生成されたレポートを開くには、レポート・フォルダ < SiteScope のルート・ディレクトリ > %htdocs の手動バックアップを作成し、新しいインストール・ディレクトリにコピーする必要があります。
 - ▶ インジケータ値は SiteScope レポートには表示されません。
-

SiteScope 監視データ・ログ・ファイル

レポートの生成に使用できる SiteScope 監視データは、SiteScope サーバに格納されたログ・データの量に制限されます。標準設定では、SiteScope では監視データ・ログ・ファイルを 40 日間保持します。ログ・ファイルは循環式で、ログ保有期間よりも古いファイルは自動的に削除されます。

注：長期間監視データ・ログを保持すると、設定したモニタの総数と日ごとに実行するモニタの頻度に応じて、SiteScope サーバのデータ格納上の問題が発生する可能性があります。データの累積率を見積もるため、< **SiteScope のルート・ディレクトリ**> %logs ディレクトリのログ・ファイルのサイズを監視する必要があります。

ログ・プリファレンスを使用して、SiteScope で監視データを保持する期間を変更できます。監視データを外部の SQL 準拠データベースにエクスポートして、監視データをより長期間保持するか、他のレポート・アプリケーションで使用できるように、SiteScope を設定できます。詳細については、782 ページの「ログ・プリファレンスの概要」を参照してください。


SiteScope レポート・タイプ

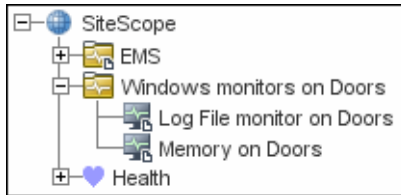
SiteScope には、4 種類の管理レポートが含まれています。次の表で、レポート・タイプとその使用法を説明します。

レポート・タイプ	説明
警告レポート	<p>警告レポートでは、指定した期間に生成された SiteScope 警告に関する情報を表示できます。警告レポートはその場に応じて作成されます。また、警告レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。</p> <p>警告レポートの設定の詳細については、1536 ページの「[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
管理レポート	<p>管理レポートでは、特定の期間のインフラストラクチャの可用性とパフォーマンス・データのサマリを表示できます。管理レポートは、SiteScope モニタによって収集されたデータから、事前に設定されたスケジュールで自動的に生成されます。事前に設定されたスケジュールに従い、SiteScope によって適切なログ・ファイルが読み取られ、指定した時間間隔のモニタ測定値に基づいてレポートが生成されます。レポート・データは、サードパーティ製のアプリケーションへのエクスポートに適したファイルに保存できます。</p> <p>管理レポートの設定の詳細については、1513 ページの「[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
モニタ・レポート	<p>モニタ・レポートでは、設定のプロパティと既存のモニタの設定を確認できます。モニタ・レポートは 3 つのテキスト・データ形式のいずれかでエクスポートできます。指定したスケジュールに基づく管理レポートと異なり、モニタ・レポートはその場に応じて作成されます。また、モニタ・レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。</p> <p>モニタ・レポートの設定の詳細については、1533 ページの「[新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

レポート・タイプ	説明
クイック・レポート	<p>クイック・レポートでは、特定の期間の指定したモニタまたはモニタ・グループの監視データを表示できます。指定したスケジュールに基づいて生成される管理レポートと異なり、クイック・レポートはその場に応じて作成されます。また、モニタ・サマリ・レポートの設定は SiteScope 設定には保存されず、後で使用できません。</p> <p>クイック・レポートの設定の詳細については、1527 ページの「[新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>
BSM 設定変更レポート	<p>BSM 設定変更レポートでは、BSM に報告する設定に関する統計情報を表示できます。この情報はトラブルシューティングのみに使用します。</p> <p>レポートは BSM から生成されます。BSM に報告する SiteScope が複数ある場合、このレポートに表示される情報には、選択した特定の SiteScope 以外の情報も含まれます。</p> <p>例： プロファイル・データベースへのデータ入力の失敗などの、レポート・ログの例外。</p> <p>注： このレポートは、SAM 管理から SiteScope にアクセスしていて、ユーザに SiteScope ログを表示する権限が付与されている場合にのみ使用可能です。</p>

SiteScope 管理レポートを使った作業

レポートは、モニタ・ビューの [レポート] タブに要素として追加されます。SiteScope ノード、グループ、または個々のモニタに、レポートを子として追加できます。レポートは、次の例に示すように、レポートを作成したグループまたはモニタの横にある  アイコンで、左側のメニュー・ツリーに表示されます。



レポートには、レポートが追加されたコンテナに基づくスコープがあります。レポートに含めるデータのあるすべてのモニタを含む、コンテナまたは要素にレポートを追加します。その後、[レポートのターゲット] 表示枠を使用して、レポートに含めるモニタの選択を絞り込みます。

レポート・アイコンのあるノードを選択すると、[レポート] タブに 2 つのテーブルが表示されます。[レポート] テーブルには、このノードで作成したレポートが表示されます。[関連付けられたレポート] テーブルには、祖先ノードで作成され、監視対象の選択でこのノードに適用されたレポートが表示されます。

SiteScope レポート定義は、必要な数だけ作成できます。ただし、レポート定義数を最小に保つために、計画を立ててレポートを統合する必要があります。これによりレポートの管理が容易になり、過剰なレポート・メッセージやアクションを抑えることができます。多数のモニタのレポートを作成する場合、モニタまたは測定値のタイプに基づいて別々のレポートを作成することを検討する必要があります。たとえば、20 の異なるリモート・サーバのシステム・リソースのレポートを作成する場合、CPU やディスク領域などの数値を測定するモニタのレポートと、サービスやプロセスなどの基本的な可用性を報告するモニタのレポートを別々に作成することを検討します。

標準設定では、SiteScope は最近生成された 10 件のレポートを保持します。つまり、1 時間ごとのレポートでは過去 10 時間、日次レポートでは過去 10 日間、週次レポートでは過去 10 週間のレポートが利用可能です。このレポートの保管期間を変更するには、SiteScope `master.config` ファイルの `_maximumReports` の設定値を変更します。

管理レポート定義を削除すると、対応するレポートの生成は中止されます。以前に生成されたレポートは、基になるデータが削除されるまで引き続き使用できます。

レポート定義はコピーして貼り付けできます。レポート定義の設定は、**[レポートのターゲット]** 設定（レポートを貼り付けるコンテナのすべての子を含むように自動的にリセットされる）を除き、新しい場所に貼り付けられます。レポートの貼り付け後、割り当てられた **[レポートのターゲット]** が新しいレポート・コンテキストと全体のレポート計画に適したものになるように、レポート定義のプロパティを編集する必要があります。

タスク

レポートの作成方法

このタスクでは、SiteScope レポートの作成に関する手順を説明します。

このタスクには次の手順が含まれています。

- ▶ 1508 ページの「レポート・タイプの選択」
- ▶ 1508 ページの「レポートの設定」
- ▶ 1509 ページの「結果」

1 レポート・タイプの選択

レポートを作成するグループまたはモニタ・コンテナを右クリックし、[レポート] をクリックするか、[レポート] タブから新しいレポートを作成します。追加または作成するレポート・タイプを選択します（管理レポートのみ追加できます。その他すべてのレポートはその場に応じて作成され、SiteScope に保存されません）。

レポート・タイプの詳細については、1504 ページの「SiteScope レポート・タイプ」を参照してください。


2 レポートの設定

レポートに含めるモニタを選択し、レポートを設定します。

ユーザ・インタフェースの詳細については、1510 ページの「SiteScope レポートのユーザ・インタフェース」を参照してください。

注：標準設定では、選択したコンテナ内のすべてのモニタのデータが含まれます。警告レポートの場合、レポートから選択したコンテナのモニタは削除できません。

3 結果

管理レポートは、モニタ・ツリーの選択したコンテナに追加されます（レポート  記号で表示）。管理レポートの表示の詳細については、1538 ページの「管理レポート」を参照してください。

その他すべてのレポートは生成され、Web ブラウザに表示されます。

- ▶ 警告レポートの表示の詳細については、1548 ページの「警告レポート」を参照してください。
- ▶ モニタ・レポートの表示の詳細については、1546 ページの「モニタ・サマリ・レポート」を参照してください。
- ▶ クイック・レポートの表示の詳細については、1542 ページの「クイック・レポート」を参照してください。


参照情報

SiteScope レポートのユーザ・インタフェース

本項の内容

- ▶ [レポート] ページ (1510 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス (1513 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス (1527 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス (1533 ページ)
- ▶ [新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス (1536 ページ)
- ▶ 管理レポート (1538 ページ)
- ▶ クイック・レポート (1542 ページ)
- ▶ モニタ・サマリ・レポート (1546 ページ)
- ▶ 警告レポート (1548 ページ)
- ▶ 注釈ツール (1550 ページ)








[レポート] ページ




このページには、SiteScope で定義されたレポートに関する情報が表示されます。このページでは、レポート定義の追加、編集、削除を行います。SiteScope オブジェクト（グループまたはモニタ）にレポートが設定されている場合、モニタ・ツリーのオブジェクト・アイコンの横にレポート記号  が表示されます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、[レポート] タブをクリックします。SiteScope オブジェクトを選択して、特定のオブジェクトのレポート・プロパティを表示します。
重要な情報	特定のモニタまたはグループに作成されたレポートは、オブジェクトの [モニタのレポート] / [グループのレポート] リストに表示されます。対象のモニタまたはグループは、[モニタに関連付けられたレポート] / [グループに関連付けられたレポート] リストに表示されます。

関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	1506 ページの「SiteScope 管理レポートを使った作業」

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	子レポートの表示 ：選択したノードの直接の子レポートのみを表示します。
	すべての子孫レポートの表示 ：選択したノードのすべての子孫レポートを表示します。
	新規レポート ：設定するレポートの種類を選択できます。 [レポート] タブに追加されるのは管理レポートのみです(その他のレポート・タイプはすべてその場に応じて作成され、SiteScope には保存されません。[新規 SiteScope 管理レポート] のユーザ・インタフェースの詳細については、1513 ページの「[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。 注 ：このボタンは、[モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルでのみ使用できます。
	レポートの編集 ：選択した管理レポートのプロパティを編集できます。[管理レポートの編集] のユーザ・インタフェースの詳細については、1513 ページの「[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。
	レポートのコピー ：選択したレポートのコピーを作成します。 注 ：このボタンは、[モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルでのみ使用できます。
	レポートの貼り付け ：ツリー内の選択した場所にレポートを貼り付けます。 注 ：このボタンは、[モニタのレポート] / [グループのレポート] テーブルでのみ使用できます。
	レポートを削除 ：選択した管理レポートを [レポート] タブから削除します。

UI 要素	説明
	レポートの生成 : 選択したモニタまたはグループの管理レポートを生成します。ユーザ・インタフェースの詳細については、1538 ページの「管理レポート」を参照してください。
	すべて選択 : 表示されているすべてのレポートを選択します。
	選択範囲を解除 : 選択をクリアします。
タイプ	レポート・タイプを示します。
タイトル	SiteScope で認識されるレポートの名前。
詳細	レポートの詳細。
有効	このレポートの生成が有効かどうかを示します。
パス	このオブジェクトを対象とする祖先ノードへのリンクを表示します。 注 : この列は、[関連付けられたレポート] テーブルのみに表示されます。

[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間のシステム可用性データのサマリを提供するレポートを作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [管理] を選択します。
重要な情報	レポート・テキスト・ボックスに入力した HTML コードは、有効性とセキュリティがチェックされ、コード（複数行にわたるために切り捨てられたコードなど）を修正する修正アクションが実行されます悪意のある HTML コードや Java Script が検出されると、フィールド全体が拒否されます。禁止されている HTML 内容は次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ タグ : script, object, param, frame, iframe。 ▶ on で始まる属性を含むタグは拒否される。例 : onhover。 ▶ 値に javascript が指定された属性。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1502 ページの「SiteScope レポートの概要」 ▶ 1510 ページの「[レポート] ページ」 ▶ 1538 ページの「管理レポート」

一般設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートのタイトル	この管理レポートのタイトルを入力します。この名前は、表示される管理レポート定義を識別するために使用されます。
詳細	(任意指定) このテキスト・ボックスは、レポート定義に関するその他の情報を記述するために使用します。たとえば、このレポートの目的、監視対象、設定日、読者などの情報を含みます。

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートのターゲット	<p>コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。</p> <p>標準設定値: 現在のコンテナおよびすべての子要素が選択されている。</p>

表示設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
しきい値	
すべてのしきい値	<p>レポートに含まれているすべてのモニタのモニタ・エラー、警告、正常しきい値設定のテーブルを作成します。選択されている場合、このテーブルは最初のレポート・セクションに表示されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p>
エラーしきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々のエラー読み取りのテーブルを作成します。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
警告しきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の警告読み取りのテーブルを作成します。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>
正常しきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の正常読み取りのテーブルを作成します。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>

UI 要素	説明
稼働時間および読み取り	
稼働時間サマリおよび測定値サマリテーブル	<p>[稼働時間サマリ] と [測定値サマリ] という 2 つのレポート・テーブルを作成します。これらのテーブルに含まれるデータの詳細については、1540 ページの「レポートの内容 - 管理レポート・ページ」を参照してください。</p> <p>標準設定値 : 選択されている</p>
稼働時間 : 警告を含む	<p>全体の稼働時間の計算に、警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
稼働時間 : 警告を無視する	<p>全体の [稼働時間および読み取り] のサマリ・セクションで警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p>注 : このオプションでは、テーブルの [警告 %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
稼働時間 : エラーを無視する	<p>全体の [稼働時間および読み取り] のサマリ・セクションでエラーとしてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p>注 : このオプションでは、テーブルの [エラー %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
全般	
測定値グラフ	<p>ドロップダウン・リストを使用して、グラフ・レポートに含めるグラフ測定値を選択します。オプションの詳細については、1525 ページの「グラフの測定値のオプション」を参照してください。</p>

UI 要素	説明
<p>モニタ読み取り</p>	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の読み取り（エラー、正常、警告のすべての読み取りを含む）のテーブルを作成します。レポートの対象期間およびその期間中にモニタが実行された頻度によっては、このレポート・テーブルに空の「バケツ」が含まれる場合があります。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
<p>警告テーブル</p>	<p>モニタに対して送信される警告のテーブルをレポートに含めるオプションを選択します。警告テーブル・レベルのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 警告テーブルなし：レポートに警告のテーブルは含まれません（標準設定）。 ▶ 基本警告テーブル：送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します。 ▶ すべての警告に対する詳細警告テーブルの表示：レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。 ▶ 失敗した警告に対する詳細警告テーブルの表示：各警告の時間とサマリ情報、および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。
<p>詳細モニタ情報</p>	<p>各モニタについて収集したすべての情報をレポートに表示します。詳細情報を表示しない場合は、各モニタの主要なデータのみが表示されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p> <p>例：URL シーケンス・モニタでこのボックスがチェックされている場合、シーケンスの各ステップのタイミング情報がレポートに表示されます。</p>
<p>エラーの時刻</p>	<p>レポート用に選択した各モニタを一覧表示するテーブル・サマリを作成し、レポート期間中にモニタの状態がエラーとして計算された時間（分単位）のサマリを表示します。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

フィルタとスケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタ フィルタ	<p>レポートに表示する、レポートのタイム・フレーム中に指定した状態になったモニタのサブセットを選択します。エラーまたは警告のモニタ、エラーのモニタ、警告のモニタ、OK のモニタのみ、あるいはすべてのモニタを選択できます。</p> <p>標準設定値: すべてのモニタを表示</p> <p>例: [エラーのモニタのみ表示] を選択すると、そのモニタがレポートの時間間隔中にエラーになった場合にのみレポート・データが表示されます。</p>
スケジュール・フィルタ	<p>スケジュールの期間中にサンプルがある、モニタのデータのサブセットのみをレポートに表示するスケジュール・フィルタ・オプションを選択します。</p> <p>標準設定値: レポートには、レポートの期間全体（毎日、終日）のデータが表示されます。</p> <p>例: [平日、09:00 ~ 18:00] を選択すると、月曜日から金曜日の午前 9 時から午後 6 時までの期間のサンプルがある、選択したモニタのレポート・データが表示されます。すべての計算にはこのデータのみが使用されます。</p>

UI 要素	説明
レポートの対象期間	<p>監視データを表示する期間を選択します。設定した期間（時間単位）、過去 1 日、過去数日、過去 1 週間、過去 1 か月、または月の始まりから現在までのデータをレポートできます。</p> <p>毎日および過去 1 か月のレポートは、毎日予定の時間に生成されます。毎週のレポートは、日曜日の予定時刻に生成され、毎月のレポートは、1 か月分のデータが含まれるように、当月の翌月の 1 日に生成されます。</p> <p>標準設定値：過去 1 日</p>
レポート対象期間の最後	<p>ドロップダウン・リストから時間を選択して、レポートの終了時間を選択します。たとえば、午前 0 時から午前 0 時までレポートを実行できます。</p> <p>標準設定値：レポートの実行時刻（指定時刻から開始され、レポートが生成された時刻に終了するレポートが SiteScope により生成されます）</p>

レポート・フォーマット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ファイル形式	<p>このオプションでは、レポートの外観の一部をカスタマイズできます。オプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 色付きの背景（標準設定） ▶ 色付きの背景、テーブルの枠線なし ▶ 白い背景

レポート配布

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
HTML 形式	<p>レポートを HTML 形式で送信するかどうかを選択します。SiteScope レポート・グラフィックを含めるには、このオプションを使用します。このオプションを選択しない場合は、テキスト形式のレポート・サマリのみが送信されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
レポートを電子メール・アドレスに送信する	<p>生成されたレポートを電子メールで転送するには、生成時に毎回レポートを送信する宛先の電子メール・アドレスを入力します。複数の電子メール・アドレスにレポートを送信するには、電子メール・アドレスをカンマで区切ります。</p>
フォーマット・レポート	<p>SiteScope で電子メール・メッセージを作成するときに使用するテンプレートを選択します。次のテンプレートから選択するか、いずれかのコピーを作成して、必要に応じてカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ HistoryLongMail : 詳細な履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。ユーザ・リンクと管理リンクの両方が含まれます。 ▶ HistoryLongXMLMail : 詳細な履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。レポートおよび XML ファイルのユーザ・リンクと管理リンクの両方が含まれます。 ▶ HistoryMail : 履歴レポートを送信するには、このオプションを選択します。これが標準設定のオプションです。 ▶ HistoryMailAlertDetail : 電子メールで送信されるレポートにすべての警告を含めるには、このオプションを選択します。 ▶ HistoryMailNoLinks : リンクを含まないレポートを送信するには、このオプションを選択します。

UI 要素	説明
<p>カンマ区切りのファイル</p>	<p>生成された管理レポートをカンマ区切りのテキスト・ファイルに保存する場合に選択します。このファイルは後でスプレッドシート・アプリケーションにインポートできます。</p> <p>これらのファイルは自動的に < SiteScope のルート・ディレクトリ > %htdocs ディレクトリに保存されます。自分のマシンに保存されているファイルの正確な場所を調べるには、レポートの [レポートの表示] タブをクリックして、[情報対象] 列にあるレポートのテキスト・リンクの上にポインタを移動します。Web ブラウザのステータス・バーにファイルの完全パスが表示されます。マシンに保存されているファイルを開くには、テキスト・リンクをクリックして [レポート] ページに移動します。[電子メール] テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにカンマ区切りファイルのコピーが送信されます。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p> <p>注 : カンマ区切りのファイルには、各モニタ読み取りに 2 つの列が作成されます。1 つには値と単位が含まれ、もう 1 つには値のみが含まれます。サードパーティ・アプリケーションではデータ値と単位を表すテキストが自動的に分離されない場合がありますが、この形式によってカンマ区切りデータをより簡単にそのようなアプリケーションにインポートできます。</p>
<p>カンマ区切りのファイルを電子メールで送信</p>	<p>テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにファイルのコピーが送信されます。</p>

UI 要素	説明
XML ファイル	<p>生成された管理レポートを XML テキスト・ファイルに保存するには、このボックスを選択します。これらのファイルは自動的に < SiteScope のルート・ディレクトリ> \htdocs ディレクトリに保存されます。自分のマシンに保存されているファイルの正確な場所を調べるには、レポートの [レポートの表示] タブをクリックして、[情報対象] 列にあるレポートの xml リンクの上にポインタを移動します。Web ブラウザのステータス・バーにファイルの完全パスが表示されず。マシンに保存されているファイルを開くには、xml リンクをクリックして [レポート] ページに移動します。[電子メール] テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスにカンマ区切りファイルのコピーが送信されます。</p> <p>標準設定値: 選択されていない</p> <p>注: XML ファイルには、各モニタ読み取りに 2 つの列が作成されます。1 つには値と単位が含まれ、もう 1 つには値のみが含まれます。サードパーティ・アプリケーションではデータ値と単位を表すテキストが自動的に分離されない場合がありますが、この形式によって XML データをより簡単にそのようなアプリケーションにインポートできます。</p>
XML ファイルを電子メールで送信	<p>テキスト・ボックスに電子メール・アドレスを入力すると、そのアドレスに XML ファイルのコピーが送信されます。</p>

計算メソッド

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サンプリング間隔	<p>このタイム・スケール・オプションを使用して、モニタ読み取りの時間間隔を選択します。毎分 1 回から毎日 1 回の範囲から間隔を選択するか、自動スケールを使用できます。自動スケールを使用すると、SiteScope では特定のモニタの選択した期間に取得された読み取り数を判断し、管理レポートの適切な間隔が選択されます。</p> <p>標準設定値 : 自動タイム・スケール</p>
最大のグラフ値	<p>グラフに表示される最大値を選択するには、垂直スケール・オプションを選択します。特定のスケール値を選択すると、異なるモニタおよび時間のグラフとの比較が容易になります。</p> <p>標準設定値 : 自動垂直スケール</p>

管理設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートの無効化	<p>このレポートの生成を一時的に無効にする場合に選択します。レポートをもう一度有効にするには、ボックスをクリアします。</p> <p>標準設定値 : 選択されていない</p>
次の時間にレポートを生成 (HH:MM)	<p>この管理レポートを生成する時刻。レポートには、レポート実行時までの過去 1 日、1 週間、または 1 か月の情報が含まれます。たとえば、毎日のレポートを 18:00 (午後 6 時) に生成する場合、前日の 18:00 から当日の 18:00 までの間に生成されたデータが含まれます。標準設定値は 00:00 (午前 0 時) です。</p> <p>標準設定値 : 04:00</p> <p>ヒント : 全体の監視タスクおよび負荷と比較して、オフピークの時間帯にレポートが生成されるようにスケジュール設定してください。レポート生成は一時的に全体的な SiteScope のパフォーマンスと応答に影響する場合があります (モニタ数、およびレポートの対象期間によって異なる)。毎日多数のレポートを生成する場合は、複数のレポートの [次の時間にレポートを生成] の値をずらして設定することを検討してください。</p>

タグの検索 / フィルタ

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< タグ名と値 >	<p>SiteScope オブジェクト（グループ、モニタ、リモート・サーバ、テンプレート、プリファレンス・プロファイル）を検索およびフィルタするために、キーワード・タグが使用される。SiteScope にタグが作成されていない場合、このセクションは空白で表示されます。タグが作成されている場合はここに表示され、必要に応じてタグを選択できます。</p> <p>概念の詳細については、118 ページの「検索 / フィルタ・タグを使った作業」を参照してください。</p>
タグの追加	<p>[新規タグ] ダイアログ・ボックスを開き、新しいキーワード・タグを追加できる。ユーザ・インタフェースの詳細については、129 ページの「[新規タグ] / [タグの編集] ダイアログ・ボックス」を参照してください。</p>

注：棒グラフは、すべてのブラウザ・タイプから印刷できるように、標準 HTML を使用して生成されます。折れ線グラフは java アプレットを使用して生成され、すべてのブラウザからは直接印刷できない場合があります。

グラフの測定値のオプション

この表では、レポートに含めることができるグラフの測定値のオプションについて説明します。


グラフ	説明
なし - グラフなし	レポートにグラフは含まれません。レポートには、選択した表形式のデータ内容のみが含まれます。
棒グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ	この棒グラフ・オプションを選択すると、指定したタイム・フレームで、グラフごとおよびモニタごとに 1 つの測定値タイプが表示されます。複数のモニタをレポートする場合、各モニタの測定値タイプごとに 1 つの棒グラフが生成されるので、グラフの数が最も多くなります。
折れ線グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ	この折れ線グラフ・オプションを選択すると、1 つのモニタの測定値タイプごとに折れ線グラフが表示されます。棒グラフ・オプションと同様に、測定値タイプの互換性に関係なく、レポートの対象として選択した各モニタの測定値タイプごとに 1 つの折れ線グラフが生成されるので、折れ線グラフの数が最も多くなります。
折れ線グラフ - モニタ・インスタンスごとのグループ分け	この折れ線グラフ・オプションを選択すると、1 つのモニタ・インスタンスからのすべての測定値が、モニタごとに 1 つのグラフにグループ分けされます。生成される折れ線グラフの数は、モニタでモニタ実行 (Microsoft Windows リソース・モニタ, UNIX リソース・モニタなどのタイプ) ごとに複数の測定値が記録されるかどうか、および測定値タイプが相互に互換するかどうかによって異なります。測定値タイプに互換性がない場合は、別々のグラフが生成されます。

グラフ	説明
折れ線グラフ - 同じ測定値の種類ของกลุ่ม分け	複数のモニタ・インスタンスで収集された同じ測定値タイプを 1 つのグラフにプロットするには、このオプションを選択します。折れ線グラフは、レポートの対象として選択したモニタの数に関係なく、互換性のある測定値タイプのセットごとに生成されます。
折れ線グラフ - 互換性のある測定値のグループ分け	選択したモニタからの互換性のある測定値をすべて 1 つのグラフに表示するには、このオプションを選択します。このオプションは、生成される折れ線グラフの合計数を最小化することを目的としています。生成されるグラフの数は、選択したモニタ・タイプおよびそれらのモニタによって収集される測定値タイプの互換性によります。レポートで選択されたすべてのモニタが同じタイプ、たとえば URL モニタである場合、各モニタを色分けした線で示す 1 つのグラフが生成されます。

注：棒グラフは、すべてのブラウザ・タイプから印刷できるように、標準 HTML を使用して生成されます。折れ線グラフは java アプレットを使用して生成され、すべてのブラウザからは直接印刷できない場合があります。

[新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間にわたるモニタまたはモニタ・グループの 1 回限りの SiteScope 管理レポートを作成できます。

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [クイック] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。</p> <p>あるいは、モニタを選択して SiteScope ダッシュボードの [クイック レポート]  ボタンをクリックすることで、事前設定を使用してレポートを作成できます。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ クイック・レポートの時間間隔は、自動的には増分されません。つまり、クイック・レポートには必ず、レポート定義で指定した [レポート期間] の絶対的な間隔のデータが含まれます。クイック・レポートでより最近のデータを表示するには、[レポート期間] 設定を編集します。 ▶ BSM で作業する場合、SAM 管理のクイック・レポート定義は、BSM コンテキストでのみ格納されます。クイック・レポート定義は SiteScope サーバに格納されず、サーバ上に存続しません。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1502 ページの「SiteScope レポートの概要」 ▶ 1542 ページの「クイック・レポート」

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートのターゲット	<p>コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。</p> <p>標準設定値：現在のコンテナおよびすべての子要素が選択されている。</p>

表示設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
しきい値	
すべてのしきい値	<p>レポートに含まれているすべてのモニタのモニタ・エラー、警告、正常しきい値設定のテーブルを作成します。選択されている場合、このテーブルは最初のレポート・セクションに表示されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
エラーしきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々のエラー読み取りのテーブルを作成します。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
警告しきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の警告読み取りのテーブルを作成します。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
正常しきい値	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の正常読み取りのテーブルを作成します。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
稼働時間および読み取り	
稼働時間サマリおよび測定値サマリテーブル	<p>[稼働時間サマリ] と [測定値サマリ] という 2 つのレポート・テーブルを作成します。これらのテーブルに含まれるデータの詳細については、1543 ページの「レポートの内容」を参照してください。</p> <p>標準設定値：選択されている</p>
稼働時間：警告を含む	<p>全体の稼働時間の計算に、警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

UI 要素	説明
稼働時間：警告を無視する	<p>全体の [稼働時間および読み取り] のサマリ・セクションで警告としてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p> <p>注： このオプションでは、テーブルの [警告 %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p>
稼働時間：エラーを無視する	<p>全体の [稼働時間および読み取り] のサマリ・セクションでエラーとしてレポートされるモニタ読み取りを含めないようにします。</p> <p>標準設定値： 選択されていない</p> <p>注： このオプションでは、テーブルの [エラー %] 列が非表示になるだけで、稼働時間 % の計算は変更されません。</p>
一般設定	
測定値グラフ	<p>ドロップダウン・リストを使用して、グラフ・レポートに含めるグラフ測定値を選択します。オプションの詳細については、1525 ページの「グラフの測定値のオプション」を参照してください。</p> <p>標準設定値： 棒グラフ - 測定値ごとに 1 つのグラフ</p>
モニタ読み取り	<p>レポート期間中にモニタによって記録された個々の読み取り（エラー、正常、警告のすべての読み取りを含む）のテーブルを作成します。レポートの対象期間およびその期間中にモニタが実行された頻度によっては、このレポート・テーブルに空の「バケツ」が含まれる場合があります。</p> <p>標準設定値： 選択されている</p>

UI 要素	説明
<p>警告テーブル</p>	<p>モニタに対して送信される警告のテーブルをレポートに含めるオプションを選択します。警告テーブル・レベルのオプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 警告テーブルなし：レポートに警告のテーブルは含まれません（標準設定）。 ▶ 基本警告テーブル：送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します。 ▶ すべての警告に対する詳細警告テーブルの表示：レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。 ▶ 失敗した警告に対する詳細警告テーブルの表示：各警告の時間とサマリ情報，および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。
<p>詳細モニタ情報</p>	<p>各モニタについて収集したすべての情報をレポートに表示します。詳細情報を表示しない場合は，各モニタの主要なデータのみが表示されます。</p> <p>例：URL シーケンス・モニタでこのボックスがチェックされている場合，シーケンスの各ステップのタイミング情報がレポートに表示されます。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>
<p>エラーの時刻</p>	<p>レポート用に選択した各モニタを一覧表示するテーブル・サマリを作成し，レポート期間中にモニタの状態がエラーとして計算された時間（分単位）のサマリを表示します。</p> <p>標準設定値：選択されていない</p>

フィルタとスケジュールの設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
モニタ・フィルタ	<p>レポートに表示する、レポートのタイム・フレーム中に指定した状態になったモニタのサブセットを選択します。エラーまたは警告のモニタ、エラーのモニタ、警告のモニタ、OK のモニタのみ、あるいはすべてのモニタを選択できます。</p> <p>標準設定値：全モニタを表示</p> <p>例：[エラーのモニタのみ表示] を選択すると、そのモニタがレポートの時間間隔中にエラーになった場合にのみレポート・データが表示されます。</p>
スケジュール・フィルタ	<p>スケジュールの期間中にサンプルがある、モニタのデータのサブセットのみをレポートに表示するスケジュール・フィルタ・オプションを選択します。</p> <p>標準設定値：レポートには、レポートの期間全体（毎日、終日）のデータが表示されます。</p> <p>例：[平日, 09:00 ~ 18:00] を選択すると、月曜日から金曜日の午前 9 時から午後 6 時までの期間のサンプルがある、選択したモニタのレポート・データが表示されます。すべての計算にはこのデータのみが使用されます。</p>
レポート期間	<p>監視データを表示する期間を指定します。レポートの対象範囲の開始時間を [開始] ボックスに入力し、終了時間を [終了] ボックスに入力します。</p> <p>標準設定値：期間は、クイック・レポートが生成された時刻の 1 時間前から現在の時刻までです。監視データをクイック・レポートに含める標準設定の期間を設定するには、[プリファレンス] > [インフラストラクチャプリファレンス] > [レポート設定] の [レポートの標準設定時間 (時間)] を設定します。</p> <p>注：時間は 24 時間形式で入力する必要があります。</p>

レポート・フォーマット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポート形式	レポートの表示に使用する形式を、HTML 形式、テキスト形式、または XML 形式から選択します。 標準設定値 : HTML 形式
ファイル形式	このオプションでは、レポートの外観の一部をカスタマイズできます。オプションは次のとおりです。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 色付きの背景 (標準設定) ▶ 色付きの背景, テーブルの枠線なし ▶ 白い背景

レポート配布

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートを電子メール・アドレスに送信する	生成されたレポートを電子メールで転送するには、生成時に毎回レポートを送信する宛先の電子メール・アドレスを入力します。複数の電子メール・アドレスにレポートを送信するには、電子メール・アドレスをカンマで区切ります。

計算メソッド

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
サンプリング間隔	このタイム・スケール・オプションを使用して、モニタ読み取りの時間間隔を選択します。毎分 1 回から毎日 1 回の範囲から間隔を選択するか、自動スケールを使用できます。自動スケールを使用すると、SiteScope では特定のモニタの選択した期間に取得された読み取り数を判断し、管理レポートの適切な間隔が選択されます。 標準設定値 ：自動タイム・スケール
最大のグラフ値	グラフに表示される最大値を選択するには、垂直スケール・オプションを選択します。特定のスケール値を選択すると、異なるモニタおよび時間のグラフとの比較が容易になります。 標準設定値 ：自動垂直スケール

[新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、1 つ以上のモニタ・グループで定義されたモニタの詳細情報を含むレポートを作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [モニタ] を選択します。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1502 ページの「SiteScope レポートの概要」 ▶ 1546 ページの「モニタ・サマリ・レポート」

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートのターゲット	<p>コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を選択します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。</p> <p>標準設定値: 現在のコンテナおよびすべての子要素が選択されている。</p>

表示設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
表示カラム	<p>レポート・列に表示するモニタ情報を選択します。[無効] や [頻度] などの特定のオプションが選択されている場合、または [モニタの詳細] などの値が指定されている場合にのみ、選択したパラメータのデータがレポートに表示されます。オプションや値が特定のモニタ・セットアップで定義されていない場合、そのモニタのパラメータの列は空白になります。</p> <p>注: 隣接する一連のグループを選択するには、SHIFT キーを押しながら選択します。隣接していない複数の項目を選択するには、CTRL キーを押しながらクリックします。</p>
パラメータの表示	<p>各モニタに定義されたパラメータをレポートに含める場合に選択します。このオプションには、上記のオプションのような個々の列ではなく、1 つのテーブルのセルで各選択モニタに定義したアクティブなオプションのリストが含まれます。</p> <p>標準設定値: 選択されている</p>

UI 要素	説明
並べ替え基準	レポートの並べ替えキーとして使用するモニタのパラメータを選択します。 標準設定値 : モニタ・タイプ
並べ替え順序	レポートの並べ替えに使用する順序を選択します。たとえば、レポートをモニタ・タイプのアルファベット順に並べ替えるには、[モニタ タイプ] を選択して、[昇順] 並べ替え順序を選択します。 標準設定値 : 昇順

設定のエクスポート

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
ファイルにエクスポート	SiteScope でモニタ・サマリ・レポートのデータをテキスト・ファイルにエクスポートする場合、このボックスを選択します。 標準設定値 : 選択されていない
ファイル名	[ファイルにエクスポート] オプションが有効な場合、SiteScope によって、ここに指定したファイル名にデータが選択済みテキスト形式で書き込まれます。ファイルは <SiteScope のルート・ディレクトリ> %htdocs ディレクトリに書き込まれます。 標準設定値 : monSummary
ファイル形式	エクスポート・ファイルの形式を選択します。カンマ区切りのテキスト、タブ区切りのテキスト、または HTML から選択できます。 標準設定値 : カンマ区切り (csv)

[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス

このダイアログ・ボックスでは、特定の期間に送信された SiteScope 警告を表示するために使用するレポートを作成できます。

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタを右クリックして、[レポート] > [警告] を選択します。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1502 ページの「SiteScope レポートの概要」 ▶ 1548 ページの「警告レポート」

レポートのターゲット

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
レポートのターゲット	<p>コンテキスト・メニュー・ツリーで、このレポートに含めるグループまたはモニタ、あるいはその両方を表示します。コンテキスト・メニューには、現在選択されているコンテナおよびすべての子コンテナが含まれます。</p> <p>注： 選択したコンテナのグループまたはモニタはレポートから削除できません。</p>

警告レポート設定

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
警告のタイプ	<p>レポートに含める警告のタイプを選択します。</p> <p>注: 隣接する一連のグループを選択するには、SHIFT キーを押しながら選択します。隣接していない複数の項目を選択するには、CTRL キーを押しながらクリックします。</p>
詳細レベル	<p>レポートに含める詳細のレベルを選択します。オプションは次のとおりです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 基本: 送信された各警告の時間およびサマリ情報を表示します (標準設定)。 ▶ すべての警告についての詳細: レポートに各警告の詳細な警告情報を表示します。 ▶ 失敗した警告についての詳細: 各警告の時間とサマリ情報、および失敗した各警告の完全診断のブレイクダウンを表示します。
警告時間帯	<p>レポートの対象期間を指定します。レポート対象範囲の開始日時を [開始] ボックスで、終了日時を [終了] ボックスで選択または入力します。</p> <p>標準設定値: 警告時間帯は、警告レポートが生成された時刻の 1 時間前から現在の時刻までです。</p> <p>注: 時刻は 24 時間形式で入力する必要があります。</p>

管理レポート

このレポートには、特定の期間のモニタおよびモニタ・グループの、インフラストラクチャの可用性およびパフォーマンス・データのサマリと特定の詳細情報が表示されます。管理レポートは、新たに出現した傾向を検出し、危機的状态になる前に潜在的問題を修正するために使用します。

[テーブル形式](#)
[エラーリスト](#)
[警告リスト](#)
[良好リスト](#)

[レポートのインデックス](#)

Core Weekly Report


(情報 10/12/02 16:55 ~ 10/12/03 16:55)

稼動時間サマリ

名前	稼動時間 %	エラー %	警告 %	最終
Cpu monitor on localhost	100	0	0	good
Disk Space: D on SiteScope サーバ	100	0	0	good
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	100	0	0	good
FTP: localhost	89.09	10.91	0	good

測定値サマリ

名前	測定値	Max	Avg	最終
Cpu monitor on localhost	utilization	24%	0.85%	8%
Disk Space: D on SiteScope サーバ	percent full	58%	58%	58%
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	total of file sizes	0 bytes	0 bytes	0 bytes
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	Last time since modified	n/a	n/a	n/a
FTP: localhost	round trip time	0.06 sec	0.05 sec	0.033 sec

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [管理] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[OK] をクリックします。[レポート] タブでレポートを選択して、[レポートの生成]  ボタンをクリックします。表示するレポート期間の日付が記述されたリンクをクリックします。生成されたレポートがない場合、または更新されたレポートを作成する場合は、[生成] ボタンをクリックします。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 管理レポートでは、英語以外のラベルはサポートされていません。 ▶ インジケータ値は SiteScope レポートには表示されません。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ 1506 ページの「SiteScope 管理レポートを使った作業」 ▶ 1513 ページの「[新規 SiteScope 管理レポート] / [管理レポートの編集] ダイアログ・ボックス」 ▶ 1510 ページの「[レポート] ページ」

レポートの内容 - インデックス・ページ

次の要素が管理レポート・インデックス・ページに含まれます（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
最新のレポート	現在選択されているモニタまたはグループの最新の管理レポートを表示する場合にクリックします。
情報対象 < レポートの日付と時刻 >	現在選択されているモニタまたはグループの、リンクで指定されている期間の管理レポートを表示する場合にクリックします。管理レポート・ページの詳細については、下の「レポートの内容 - 管理レポート・ページ」を参照してください。
生成	レポートの生成が予定されている日時に関係なく、現在選択されているモニタまたはグループのレポートを新規作成する場合にクリックします。

レポートの内容 - 管理レポート・ページ

次の要素が管理レポート・ページに含まれます（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
テーブル形式	現在選択しているレポートでテーブル形式の測定値データに移動するには、 [テーブル形式] リンクをクリックします。
エラー・リスト	現在選択しているレポートでエラー状態のモニタのリストに移動するには、 [エラー リスト] リンクをクリックします。
警告リスト	現在選択しているレポートで警告状態のモニタのリストに移動するには、 [警告リスト] リンクをクリックします。
良好リスト	現在選択しているレポートで正常状態のモニタのリストに移動するには、 [良好リスト] リンクをクリックします。
レポートのインデックス	管理レポートのインデックスに移動するには、 [レポートのインデックス] リンクをクリックします。管理レポートのインデックス・ページの詳細については、1539 ページの「レポートの内容 - インデックス・ページ」を参照してください。
稼働時間サマリ	このテーブルには、次が表示されます。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 名前 : レポートに含まれているモニタの名前。 ▶ 稼働時間 % : 正常であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ 警告 % : 警告であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ エラー % : エラーであるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ 最終 : レポート期間のモニタの最終読み取り値。

UI 要素	説明
測定値サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 名前：レポートに含まれているモニタの名前。 ▶ 測定値：監視対象のパラメータ（エラー条件）。 ▶ 最大：レポート期間中に測定値パラメータについて記録された最大値。 ▶ 平均：レポート期間中に記録された読み取りの平均値。 ▶ 最終：レポート期間のモニタの最終読み取り値。
< 測定値グラフ >	レポート期間中に監視された各インスタンスのグラフ形式の測定値データ。
< 測定値テーブル >	レポート期間中に監視された各インスタンスの測定値データを 30 分単位でテーブル形式で表示したもの。赤または黄色で強調表示されたエントリは、測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示します。青はモニタが無効になっていることを示します。
< エラー・リスト・テーブル >	モニタのエラー・ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは赤で強調表示されます。
< 警告リスト・テーブル >	モニタの警告ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは黄色で強調表示されます。
< 良好リスト・テーブル >	モニタの正常ステータスしきい値内のモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは緑で強調表示されます。

🔗 クイック・レポート

このレポートには、特定の期間のモニタおよびモニタ・グループの、インフラストラクチャの可用性およびパフォーマンス・データのサマリと特定の詳細情報が表示されます。クイック・レポートは、その場に応じて生成され、SiteScope 設定データには保存されません。

ライセンス タイプ/ステータス: ポイント ライセンス (59 日間有効). ライセンス ポイント合計 500; 使用ポイント 6。

[テーブル形式](#)
[エラーリスト](#)
[警告リスト](#)
[良好リスト](#)

[Close Window](#)

複数のモニタのサマリ

(情報 10/12/03 15:59 ~ 10/12/03 16:59)

稼働時間サマリ

名前	稼働時間 %	エラー %	警告 %	最終
Ping: 1.1.1.1	0	0	0	データはありません
Log Event Checker	0	0	0	データはありません
Cpu monitor on localhost	100	0	0	good
Directory: c:\ on SiteScope サーバ	100	0	0	good
Disk Space: D on SiteScope サーバ	100	0	0	good
FTP: localhost	92.33	7.67	0	good
BAC Integration Configuration	0	0	0	データはありません
Health of SiteScope Server	100	0	0	good

測定値サマリ

名前	測定値	Max	Avg	最終
Ping: 1.1.1.1	round trip time	n/a	n/a	n/a
Log Event Checker	matches/min	n/a	n/a	n/a
Log Event Checker	lines/min	n/a	n/a	n/a
Cpu monitor on localhost	utilization	8%	3.17%	8%

アクセス方法	<p>[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [クイック] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。</p> <p>あるいは、モニタを選択して、SiteScope ダッシュボード・ツールバーの [クイック レポート] ボタンをクリックすることで、事前定義されている設定を使用してレポートを作成できます。</p>
重要な情報	<ul style="list-style-type: none"> ▶ クイック・レポートの時間間隔は、自動的に増分されません。つまり、レポートには必ず、レポート定義で指定した [レポート期間] の絶対的な間隔のデータが含まれます。クイック・レポートでより最近のデータを表示するには、[レポート期間] 設定を編集します。 ▶ BSM で作業する場合、SAM 管理のクイック・レポート定義は、BSM コンテキストでのみ格納されます。クイック・レポート定義は SiteScope サーバに格納されず、サーバ上に存続しません。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	1527 ページの「[新規 SiteScope クイック レポート] ダイアログ・ボックス」

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
< ライセンスの詳細 >	ページ上部にライセンスの詳細が表示されます。これには、SiteScope のライセンス・カテゴリ、使用可能なモニタ・ポイント数、ライセンスの残り日数が含まれます。
テーブル形式	現在選択しているレポートでテーブル形式の測定値データに移動する場合にクリックします。
エラー・リスト	現在選択しているレポートでエラー状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。

UI 要素	説明
警告リスト	現在選択しているレポートで警告状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
良好リスト	現在選択しているレポートで正常状態のモニタのリストに移動する場合にクリックします。
稼働時間サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 名前 : レポートに含まれているモニタの名前。 ▶ 稼働時間 % : 正常であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ 警告 % : 警告であるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ エラー % : エラーであるとレポートされたモニタ読み取りのパーセンテージ。 ▶ 最終 : レポート期間のモニタの最終読み取り値。
測定値サマリ	<p>このテーブルには、次が表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 名前 : レポートに含まれているモニタの名前。 ▶ 測定値 : 監視対象のパラメータ (エラー条件)。 ▶ 最大 : レポート期間中に測定値パラメータについて記録された最大値。 ▶ 平均 : レポート期間中に記録された読み取りの平均値。 ▶ 最終 : レポート期間のモニタの最終読み取り値。
< 測定値グラフ >	レポート期間中に監視された各インスタンスのグラフ形式の測定値データ。

UI 要素	説明
< 測定値テーブル >	レポート期間中に監視された各インスタンスの測定値データを 30 分単位でテーブル形式で表示したもの。赤または黄色で強調表示されたエントリは、測定値がモニタのエラーまたは警告ステータスのしきい値を超えたことを示します。青はモニタが無効になっていることを示します。
< エラー・リスト・テーブル >	モニタのエラー・ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは赤で強調表示されます。
< 警告リスト・テーブル >	モニタの警告ステータスしきい値を超えたモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは黄色で強調表示されます。
< 良好リスト・テーブル >	モニタの正常ステータスしきい値内のモニタ・インスタンスが一覧表示されます。エントリは緑で強調表示されます。

モニタ・サマリ・レポート

このレポートには、レポートに含めるように選択したグループのモニタの構成および現在の設定に関する情報が表示されます。このレポートは、モニタのセットアップ情報およびモニタ・グループの編成と構成を表示するために使用します。たとえば、モニタのスキップで問題がある場合は、モニタ実行頻度（**[頻度]**設定）を確認し、比較できます。また、警告に影響する可能性があるモニタの依存関係を確認するためにレポートを使用することもできます。

SiteScope Monitor Summary Report

Group	name	class	frequency	dis
Health	BAC Integration Configuration	BAC Integration Configuration	1 day	
Health	BAC Integration Statistics	BAC Integration Statistics	100 seconds	
Multiple Monitors	BAC Integration Statistics	BAC Integration Statistics	100 seconds	
Health	Connection Statistics Monitor	Connection Statistics Monitor	10 minutes	
Windows monitors for localhost	Cpu monitor on localhost	CPU Utilization	10 minutes	
Windows monitors for localhost	Directory: c:\ on SiteScope サーバ	Directory	10 minutes	
Windows monitors for localhost	Disk Space: D on SiteScope サーバ	Disk Space	10 minutes	
Windows monitors for localhost	FTP: localhost	FTP	10 minutes	
Health	Health of SiteScope Server	Health of SiteScope Server	5 minutes	
Health	Log Event Checker	Log Event Health Monitor	10 minutes	
Multiple Monitors	Log Event Checker	Log File	10 minutes	
Health	Monitor Load Checker	Monitor Load	100 seconds	

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [モニタ] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	1533 ページの「[新規 SiteScope モニタ レポート] ダイアログ・ボックス」

レポートの内容

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
グループ	モニタが属するグループ名。
名前	各モニタの表示名またはテキスト説明。
クラス	モニタ・タイプ。
頻度	モニタに設定されている実行頻度。
無効	モニタが無効かどうかを示します。
依存	このモニタの実行が他のモニタの状態に依存する場合は、依存する側のモニタを一覧表示します。
ポイント	モニタ・インスタンスによって使用されるライセンス・ポイントの数。
OID	このモニタのオブジェクト ID。
スケジュール	標準設定以外のスケジュールが選択されている場合は、モニタのスケジュール。
エラー時頻度	[エラー時頻度] オプションが選択されている場合は、エラー条件をレポートしたモニタの監視間隔 (秒単位)。
タイムアウト	モニタのタイムアウト設定。
エラーの検証	[エラーの検証] オプションが選択されている場合は、[On] が表示されます。このオプションを選択すると、モニタでエラーが検出された場合にモニタを自動的に再実行します。
モニタの詳細	[モニタの詳細] ボックスのモニタのテキスト説明。
しきい値	モニタ・インスタンスのしきい値条件。

警告レポート

このレポートには、選択したコンテナのモニタに対して指定した期間中に生成された SiteScope 警告に関する情報が表示されます。

警告 (SiteScope) 10/12/03 16:08 ~ 10/12/03 17:08

Time	タイプ	メッセージ	モニタ	グループ
10/12/03 16:47	電子メール警告が送信されませんでした	test@yahoo.com, MISSING_MAIL_SERVER	FTP: localhost	Windows monitors for localhost
10/12/03 16:47	イベントログ警告が実行されました	C:\SiteScope\tools\perfex.exe *3180 -e "Group: Windows monitors for localhost, Name: FTP: localhost, Status: ファイルが見つかりません," "1000" 0 error "SiteScope" localhost (0)	FTP: localhost	Windows monitors for localhost
10/12/03 17:07	サウンド警告が再生されました	Default	FTP: localhost	Multiple Monitors
10/12/03 17:07	サウンド警告が再生されました	Default	FTP: localhost	Multiple Monitors
10/12/03 17:08	サウンド警告が再生されました	Default	FTP: localhost	Multiple Monitors

アクセス方法	[モニタ] コンテキストを選択します。モニタ・ツリーで、SiteScope ノード、モニタ・グループ、またはモニタ・コンテナを右クリックして、[レポート] > [警告] を選択します。レポートのプロパティを設定し、[レポートの生成] をクリックします。
関連タスク	1508 ページの「レポートの作成方法」
関連情報	1536 ページの「[新規 SiteScope 警告レポート] ダイアログ・ボックス」

レポートの内容


ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。


UI 要素	説明
< レポートのタイトル >	レポートのタイトルには、レポートが作成されたモニタ・グループ・コンテナまたは個々のモニタの名前、およびレポートの対象期間が含まれます。
時間	警告が起動された時刻。
タイプ	警告アクションのタイプ。
メッセージ	警告のメッセージのタイプ（標準、alarm など）。
モニタ	警告が起動されたモニタの名前。
グループ	警告が起動されたグループの名前。

注釈ツール

このツールを使用して、表示しているレポートのスナップショットに注釈を追加して、重要な領域を強調表示できます。注釈ツールは、ベースライン・モニタ測定値グラフを表示しているときに使用できます。注釈オプションを使用してスナップショットをカスタマイズできます。



注釈メニュー・バーの要素で次を行うことができます。



- ▶ スナップショットの外観を変更します。
- ▶ 注釈レポートを保存、印刷、電子メールで送信します。
- ▶ スナップショットに追加された注釈のテキストの外観をカスタマイズします。これらの要素は、[テキスト・ツール]  ボタンが選択されている場合にのみ有効です。



アクセス方法	ページの右側にある [注釈]  ボタンをクリックします。
重要な情報	注釈ツールを使用するには、マシンに Sun JRE プラグイン 1.6.0_x (推奨される最新バージョン) がインストールされている必要があります。プラグインがマシンにインストールされていない場合は、インストールを促すメッセージが表示されます。
関連情報	405 ページの「ベースラインを使用した状態のしきい値の設定」

注釈オプション

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します。

UI 要素	説明
	パン ツール : スナップショットに移動します。
	選択ツール : スナップショットの特定の領域を選択します。












UI 要素	説明
	<p>図形ツール：スナップショットに図形を追加します。図形ツール・ボタンをクリックすると、次の図形ボタンが有効になります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶  四角形：スナップショットの特定の領域を四角形でマークします。 ▶  塗りつぶした四角形：スナップショットの特定の領域を塗りつぶした四角形でマークします。 ▶  楕円形：スナップショットの特定の領域を楕円形でマークします。 ▶  塗りつぶした楕円形：スナップショットの特定の領域を塗りつぶした楕円形でマークします。 ▶  角丸四角形：スナップショットの特定の領域を角丸四角形でマークします。 ▶  塗りつぶした角丸四角形：スナップショットの特定の領域を塗りつぶした角丸四角形でマークします。 <p>カスタマイズ：このボタンを選択すると、インタフェースの次の各部分を使用して線の外観をカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 線の種類：追加する線の種類を選択します。次のオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 実線 ▶ 点線 ▶ 線の幅：注釈内の線の幅をピクセル単位で選択します。


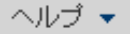










UI 要素	説明
	<p>線ツール：線ツールが有効になります。このツールは、選択したスナップショットの領域を線でマークします。</p> <p>カスタマイズ：このボタンを選択すると、インタフェースの次の各部分を使用して線の外観をカスタマイズできます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 線の種類：追加する線のスタイルを選択します。次のオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 標準の線 ▶ エンドポイント付きの線 ▶ 矢印付きの線 ▶ 線の種類：追加する線の種類を選択します。次のオプションがあります。 <ul style="list-style-type: none"> ▶ 実線 ▶ 点線 ▶ 線の幅：注釈内の線の幅をピクセル単位で選択します。
	<p>テキスト・ツール：スナップショットにテキストを追加します。</p> <p>例：レポートの特定の領域をマークしている線の上に「これは問題のあるトランザクションです」という構文を追加します。</p>

UI 要素	説明
境界線と塗りつぶしの色	<p>該当の四角形を選択して、注釈の境界線と塗りつぶしの色を選択します。次の四角形を使用できます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 上の四角形：線ツールで生成され、塗りつぶされていない図形に表示される線の色を選択します。 ▶ 下の四角形：図形を塗りつぶす色を選択します。 <p>どちらの四角形をクリックしても、色を選択する次のタブを含むダイアログ・ボックスが表示されます。</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ Swatches ▶ HSB ▶ RGB
不透明度	<p>不透明度バーをスライドして、注釈内で選択した図形の線、テキスト行、または図形の色濃さのレベルを選択します。</p> <p>注：</p> <ul style="list-style-type: none"> ▶ 不透明度が高いほど、より暗く表示されます。不透明度が低いほど、より明るく表示されます。 ▶ このフィールドは、図形ツール、ライン・ツール、またはテキスト・ツール・ボタンのいずれかが選択された場合に有効です。

注釈メニュー・バー

ユーザ・インタフェース要素について次に説明します（ラベルのない要素は山括弧内に表示されます）。

UI 要素	説明
	保存 ：スナップショットをローカル・マシンに保存します。 注 ： <ul style="list-style-type: none"> ▶ スナップショットは .png 形式で保存されます。 ▶ [マイドキュメント] ディレクトリまたはそのサブ・ディレクトリに保存する場合、[新規フォルダ]  アイコンは選択できません。
	すべて選択 ：スナップショットに追加されたすべての注釈を選択します。
	選択項目のクリア ：すべての注釈をクリアします。
	元に戻す ：スナップショットに対して実行した最新のアクションを元に戻します。
	やり直し ：スナップショットに対して実行した最新のアクションのロール・バックをキャンセルします。
	ズーム・イン ：スナップショット・ビューを拡大します。
	ズーム・アウト ：スナップショット・ビューを縮小します。
	初期サイズの復元 ：スナップショットを初期サイズに戻します。
	印刷 ：スナップショットを印刷します。
	電子メール送信 ：電子メールでスナップショットを送信します。

UI 要素	説明
	<p>リポジトリに保存 : スナップショットをレポート・マネージャにアップロードします。レポート・マネージャの詳細については、28 ページの「Report Manager Overview」を参照してください。</p> <p>注 : このオプションは、SiteScope 機能から注釈ツールにアクセスしているときには使用できません。</p>
	<p>ヘルプ : 現在表示しているページのヘルプをオンライン・ドキュメントで表示します。</p>
	<p>太字 : テキストを太字にします。</p> <p>注 : このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
	<p>斜体 : テキストを斜体にします。</p> <p>注 : このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
	<p>下線 : テキストに下線を引きます。</p> <p>注 : このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
	<p>アンチエイリアス : テキストまたは注釈行のピクセルの読み込みを調整し、滑らかに表示されるようにします。</p> <p>注 : このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
< フォント・ファミリ >	<p>レポート内のテキストのフォントを選択します。</p> <p>注 : このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>
< フォント・サイズ >	<p>レポート内のフォントのサイズを選択します。</p> <p>注 : このフィールドは、[テキスト ツール]  ボタンを選択するときのみ有効になります。</p>

索引

A

Active Directory

監視ソリューション 1103

Active Directory ソリューション・

テンプレート

デプロイ 1107, 1262

AIX Host ソリューション・テンプレート

デプロイ 1114

AIX ホスト, 監視ソリューション 1111

API, SiteScope 42

B

BSM 統合設定 1350

BSM 統合統計 1352, 1353, 1357

[BSM 統合プリファレンス] ダイアログ・

ボックス 758

BSM 統合プリファレンスの設定

制限事項とトラブルシュー

ティング 305

Business Service Management 272, 741, 749

SiteScope 測定値のインジケータへの

マッピング 279

SiteScope データの転送 273

ゲートウェイ・サーバの変更 292, 743

システム可用性管理のインジケータの

管理 277

Business Service Management

プリファレンス 740

Business Service Management-SiteScope

接続, SSL の使用 742

C

CI

ダウンタイム 285

cygwin OpenSSH, Windows

でのインストール 648

D

Diagnostics 統合 744

[Diagnostics 統合プリファレンス] ダイアロ

グ・ボックス 769

DNS ツール 176

F

FTP ツール 181

ツール 181

H

HP Operations Agent 327

HP Operations Agent のインストール 327

HP Operations Agent を使用したイベント

統合 313

HP Operations Agent を使用した測定値

統合 322

HP Operations Manager 統合 746

HP Operations Manager 統合ダイアログ・

ボックス 774

HP Quality Center

監視ソリューション 1119

HP Quality Center Application Server for

UNIX 1128

HP Quality Center Application Server for

Windows 1127

HP Quality Center ソリューション・テンプ

レート

デプロイ 1123

HP Quality Center9.2/10.0

License Status 1131

HP QuickTest Professional

License Server 1135

索引

HP Service Manager

- ホスト監視ソリューション 1137
- HP Software サポート Web サイト 24
- HP ソフトウェア Web サイト 25
- HP 統合設定 (共通モニタ設定) 467

I

i18N

多言語化を参照 915

iPhone アプリケーション, SiteScope へのアクセス 46

iPhone を使用した SiteScope へのアクセス 46

iPhone を使用したリモート・アクセス 46

IPv6

IPv6 をサポートするモニタ 634

SiteScope での IPv6 アドレスの優先の有効化 632

SiteScope でのサポート 627

混合環境での作業 630

サポートされているプロトコル 631

J

JBoss Application Server ソリューション・テンプレート

デプロイ 1140, 1150

JBoss アプリケーション・サーバ

ホスト監視ソリューション 1147

JMX コンソール 40

L

LDAP 認証状態ツール 184

LDAP 認証ツール 187

Lightweight シングル・サインオン 925

Linux Host ソリューション・テンプレート

デプロイ 1158

Linux ホスト, ソリューションの監視 1155

LW-SSO

一般的な参照情報 929

概要 930

システム要件 932

セキュリティに関する警告 933

トラブルシューティングおよび

制限事項 935

M

Microsoft Exchange

監視ソリューション 1163

Microsoft Exchange ソリューション・テンプレート

設定 1169

デプロイ 1167

Microsoft IIS

ホスト監視ソリューション 1173

Microsoft IIS ソリューション・テンプレート

デプロイ 1176

Microsoft Lync Server 2010

監視ソリューション 1181

Microsoft Lync Server 2010 ソリューション・テンプレート

デプロイ 1186

Microsoft SharePoint 2010

監視ソリューション 1189

Microsoft SharePoint 2010 ソリューション・テンプレート

デプロイ 1192

Microsoft SQL Server

ホスト監視ソリューション 1195

Microsoft SQL Server ソリューション・テンプレート

デプロイ 1198

Microsoft Windows Host ソリューション・テンプレート

デプロイ 1208

Microsoft Windows Host,

監視ソリューション 1205

Microsoft Windows Media Player ツール 195

Microsoft Windows サーバ

リモートの監視について 582

Microsoft Windows ソリューション・

テンプレート

デプロイ 1216

Microsoft Windows リモート・

ブリファレンス 582

N

NET

ホスト監視ソリューション 1213

Network Node Manager

イベントの転送 575

データをエクスポートするスクリプト
の記述 577

Network Node Manager i
概要 360

Network Node Manager 統合
説明 576

[New Monitor Report] ダイアログ・
ボックス 1533

[New Quick Report] ダイアログ・
ボックス 1527

[New View/ フィルタの編集] ページ 123

NNMi 統合
NNMi にレポートされる SiteScope
メトリック 373

NNMi の SNMP トラップ形式 370

O

OpenSSH for Windows, インストール 656

Operations Manager
SiteScope イベントの送信 313
SiteScope 測定値のレポート 322
SiteScope との統合 308
SiteScope モニタ・ディスカバリ・ポリ
シーの有効化 338
SiteScope を使用してイベントを
送信 326
SiteScope を使用して
測定値をレポート 349
UNIX/Linux 用の SiteScope にドリル
ダウン・ツールの有効化 346
Windows 用の SiteScope にドリル
ダウン・ツールの有効化 344
警告イベントの設定 317
状態変更イベントの設定 316
測定値名の整合 352, 356
に送信するイベントの設定 316

Operations Manager に送信するイベントの
設定 316

Operations Manager への SiteScope イベント
のレポート 313

Operations Manager への SiteScope 測定値の
レポート 322

Oracle
監視ソリューション 1221

Oracle Database ソリューション・

テンプレート
設定 1228
デプロイ 1224
テンプレート・ツール 1224

P

Ping ツール 201
Post ログ 1410

R

Real Media Player ツール 205

S

SAP
監視ソリューション 1231

SAP NetWeaver ソリューション・
テンプレート
設定 1235

SAP R/3 ソリューション・テンプレート
設定 1235

Siebel
監視ソリューション 1239

Siebel Application Server ソリューション
設定 1245
デプロイ 1242

Siebel Gateway Server ソリューション
設定 1248

Siebel Web Server ソリューション
設定 1249

SiteScope
SNMP プリファレンス 811
SSH クライアント 667
主な機能 31
および SSH 638
管理者アカウントへのアクセス 56
自動テンプレート・
デプロイメント 1051
操作 68
ソリューション・テンプレート 1081
テンプレートの作成 962
モニタ・タイプ 393

SiteScope API 42

SiteScope Failover Manager 39

SiteScope iPhone アプリケーション 46

索引

- [SiteScope LDAP ユーザを CSV ファイルに保存します] ダイアログ・ボックス 885
- SiteScope オブジェクトの検索 116
- SiteScope オブジェクトのフィルタ処理 116
- SiteScope 監視
 - カテゴリ 393
 - 使用されるポート 436
 - モニタを使った作業 391
 - リモート・サーバ 396
- SiteScope 監視モデル 33
- SiteScope グループ 387
 - 操作 379
- SiteScope 警告アクション 1473
- SiteScope サーバの状況モニタ 1360
 - UNIX のカウンタ 1361
 - Windows のカウンタ 1362, 1363
- SiteScope 状況 1337
 - BSM 統合設定モニタ 1350
 - BSM 統合統計
 - モニタ 1352, 1353, 1357
 - SiteScope サーバの状況モニタ 1360
 - SSL 証書の状態モニタ 1368
 - サーバの状況 1345
 - 負荷モニタの監視 1367, 1368
 - モニタの追加 1346
 - モニタ負荷 1345
 - モニタ・グループ 1338
 - ログ・イベント 1345
 - ログ・イベント状況モニタ 1364
- SiteScope 設定 689
- SiteScope ダッシュボード
 - SiteScope ダッシュボードのデータ分析 1290, 1292
 - SiteScope ツールへのアクセス 1289
 - Windows / UNIX サーバのリソースの監視 1294
 - 概念とタスク 1285, 1321
 - 概要 1286
 - [グループ内のモニタを確認] ダイアログ・ボックス 1306
 - [現在の状態] ビュー 1296
 - サーバ中心のレポート 1322, 1332
 - [ダッシュボード フィルタ] ページ 1310
 - [ダッシュボードのお気に入り] 保存] ダイアログ・ボックス 1308
 - [ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイアログ・ボックス 1309
 - [ダッシュボードの設定] ページ 1314
 - ダッシュボード・フィルタの概要 1287
 - モニタの状態の確認 1288
 - [モニタ履歴] ビュー 1305
- SiteScope ダッシュボードのユーザ・インタフェース 1295
- [SiteScope ツール] メニュー 108
- SiteScope データ
 - Business Service Management への転送 273
- SiteScope 電子メール・プリファレンス 791
- [SiteScope テンプレート] ページ 976
- SiteScope の BSM 統合プリファレンス 741
- SiteScope の NNMi への SNMP トラップ形式 370
- SiteScope の概要 30
- [SiteScope の選択] ページ, グローバル検索と置換 143
- SiteScope の統合 44
 - Business Service Management と 270
 - Network Node Manager i 360
- SiteScope の登録 272, 741, 749
- SiteScope の [ページャプリファレンス] 801, 903
- SiteScope 範囲スケジュールのプリファレンス 839
- SiteScope フェールオーバーソリューション・テンプレート 1093
- SiteScope へのアクセス 50
- SiteScope メトリックスのインジケータへの割り当て 279
- SiteScope モニタ
 - 測定値ごとのトポロジをレポートするモニタ 303
 - 複数の CI を使用 303
- SiteScope ユーザ・インタフェース 73
 - 共通ツールバー 66
 - コンテキスト・ツールバー 64, 74
 - コンテキスト・ツリー 64
 - コンテキスト・ボタン 67
- SiteScope リモート Windows SSH ファイル, サポートされたモニタ 663
- SiteScope レポート 1332, 1501
 - エラーの時刻の表示 1516, 1530

- モニタ警告の表示 1514, 1528
- モニタの正常結果の表示 1514, 1528
- モニタ読み取りの表示 1516, 1529
- モニタ・エラーの表示 1514, 1528
- SiteScope ログ・データベース・テーブル 783
- SiteScope-Business Service Management
 - 接続, SSL の使用 742
- SMS 警告
 - 操作 1439
- SNMP
 - SiteScope プロパティの設定 810
 - 統合 810, 811
- SNMP 受信者設定 810
- SNMP ツール 215
- SNMP トラップ警告
 - 操作 1441
- SNMP トラップの設定 810, 811
- SNMP トラップ・ツール 217
- SNMP ブラウザ・ツール 212
- SNMP プリファレンス 810
- Solaris Host ソリューション・テンプレート
 - デプロイ 1254
- Solaris ホスト, ソリューションの監視 1251
- SSH 監視 637
 - cygwin OpenSSH 643
 - OpenSSH for Windows 643
 - SSH クライアントを使った作業 667
 - SSH サーバのインストールと設定 646
- UNIX サーバの設定 644
- Windows サーバの設定 642
- 鍵ベース認証 672
- クライアントのパスワード認証 670
- 設定オプション 639
- 内部 Java SSH クライアント 668
- 内部クライアントで SSH2
 - を使用 670, 671
- リモート NT SSH ファイルのインスト
 - ール 659
- SSH クライアント
 - 内部 Java 668
- SSH でのセキュア監視 638
- SSL
 - Business Service Management-
 - SiteScope 接続 742
- SSL 証書の状態モニタ 1368
- SSO, 認証 925

U

- UNIX アダプタ
 - アダプタ・コマンド・リスト 682
 - アダプタ・ファイルの形式 680
 - 操作 676
 - 追加 677
 - 標準設定のアダプタ・ファイル・
 - リスト 679
- UNIX サーバ
 - リモートの監視について 582
- UNIX 用フェールオーバー監視ソリューション・
 テンプレート 1100
- UNIX リモート・サーバ 582
 - リモート・サーバを監視する設定 596
- UNIX/Linux 用の SiteScope にドリルダウン・
 ツール (Operations Manager) 346
- URL 詳細ログ 1411
- URL ツール 221
- URL モニタ
 - セキュリティ, 標準設定の認証資格情
 - 報の使用 690

V

- VMware Host
 - 監視ソリューション 1259

W

- Web サービス・ツール 226
- WebLogic
 - 監視ソリューション 1265
- WebLogic ソリューション・テンプレート
 - 監視対象モジュールの選択 1270
 - 設定 1272
 - デプロイ 1268
- WebSphere
 - 監視ソリューション 1275
- WebSphere ソリューション・テンプレート
 - システム要件 1278
 - 設定 1280
 - デプロイ 1278
- Windows Management Instrumentation 434
- Windows サーバ
 - イベント・ログ・アクセスのトラブル
 - シューティング 617

索引

リモートの監視 601
Windows 用の SiteScope にドリルダウン・
ツール (Operations Manager) 344
Windows 用フェールオーバー監視ソリュー
ション・テンプレート 1100
Windows リモート・サーバ
リモート・サーバを監視する設定 584
WMI, サポートされているモニタ 434

X

xml テンプレート・デプロイメント 1051
XML ドキュメント
URL として監視 515
内容照合値の使用 517
内容の照合の構文例 515
XSL 変換ツール 233

あ

アダプタ
SiteScope UNIX アダプタ 676
SiteScope UNIX アダプタの追加 677
SiteScope UNIX アダプタ・ファイルの
形式 680
SiteScope の UNIX アダプタ・コマン
ド・リスト 682
SiteScope の UNIX 標準設定のアダプ
タ・ファイル・リスト 679

い

依存関係の設定 (共通モニタ設定) 455
依存関係, グループ 389
依存関係, 作成 397
[依存の対象モニタの選択] ダイアログ・ボッ
クス 487
一般設定 (インフラストラクチャ・プリファ
レンス) 707
一般設定 (共通モニタ設定) 450
一般設定 (グループ) 388
一般プリファレンス 690
SiteScope の英語以外のロケールの
設定 918
Web スクリプト・モニタのファイル・
ディレクトリの定義 691
特定の言語での UI の表示 920

モニタの一時停止 691
ロケールの日付と時間の設定 918
[イベントマッピング] ページ 822
イベント管理 818
イベント・ログ・ツール 178
インフラストラクチャ・
プリファレンス 706, 707, 715, 727,
728, 730, 732, 733, 738
警告設定 729
モニタ設定 717

え

[影響を受けるオブジェクト] ページ, グロー
バル検索と置換 152
[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイ
アログ・ボックス, グローバル検索と
置換 153
永続性設定 730
永続性設定, インフラストラクチャ・プリ
ファレンス 730
エージェント
HP Operations Agent 327
エージェントレス SSH, サポートされている
モニタ 663
エラー限度, について 409
エラーの時刻, レポート 1516, 1530
エラーのリスト, レポート 1514, 1528
エラーを無視する, レポートの稼働時間読み
取り 1515, 1529
エラー・ログ 1409

お

オペレータ・ログ 1410
オンライン・リソース 24

か

確認
イベント 116
モニタ・ステータス 116
カスタム形式設定
SiteScope レポート 1518, 1532
カスタム設定 738
カスタム設定, インフラストラクチャ・プリ
ファレンス 738

稼働時間および読み取りオプション,
レポート 1515, 1528

監査ログ

SiteScope の開始 1381

一般プリファレンスの更新 1382

概要 1346

カテゴリ 1390

グループ操作 1381

[グローバル検索と置換] の操作 1389

警告 1388

設定 1378

その他のプリファレンスの更新 1383

テンプレート警告 1387

テンプレートの削除 1385

テンプレートの作成 1385

テンプレートの適用 1384

テンプレートの変更 1385

テンプレート変数 1385

テンプレート・グループ 1386

テンプレート・コンテナ 1384

テンプレート・モニタ 1387

テンプレート・リモート・

オブジェクト 1386

パスワードの変更 1390

モニタ操作 1382

レポート 1388

ログインとログアウト 1389

ログインの失敗 1389

監視

SiteScope サーバの状況 1337

Windows 2000 のユーザ権限の
設定 592

Windows XP/2003 のユーザ

権限の設定 591

テンプレートを使用し

たデプロイメント 941, 1009

ドメイン権限の設定 589

監視に使用されるポート 436

管理者, ログイン・アカウント 56

管理レポート

一般設定 1513

管理設定 1523

計算メソッド 1522

操作 1506

表示設定 1514

フィルタとスケジュールの設定 1517

レポート フォーマット 1518

レポートのターゲット 1514

レポートのタイトル 1513

レポート配布 1519

[管理レポート] ダイアログ・ボックス 1513

[関連する警告の有効化 / 無効化] 設定 (共通
のモニタ設定) 482

き

期間指定スケジュール・プリファレンス 836

技術情報 24

共通モニタ設定 447

HP 統合 467

依存関係 455

関連する警告の有効化 / 無効化 482

しきい値 458

全般 450

タグの検索 / フィルタ 484

ベースライン設定 485

モニタの実行 452

モニタの有効化 / 無効化 480

く

[クイック レポート] ダイアログ・
ボックス 1527

クイック・ヘルプ 66

クイック・レポート

計算メソッド 1533

設定のエクスポート 1535

表示設定 1528

フィルタとスケジュールの設定 1531

レポート フォーマット 1532

レポートのターゲット 1527

レポート配布 1532

グループ 694

SiteScope の設定 387

[グループ内のモニタを確認] ダイアログ・
ボックス 1306

グローバル検索と置換 131

しきい値の設定 133

状態の条件の上書き 133

[グローバル検索と置換] ウィザード 142

[SiteScope の選択] ページ 143

[影響を受けるオブジェクト]

索引

ページ 152
[影響を受けるオブジェクトをフィルタ] ダイアログ・ボックス 153
[サブタイプの選択] ページ 145
[サマリの確認] ページ 154
[サマリ] ページ 156
[詳細フィルタ] ダイアログ・ボックス 153
[タイプの選択] ページ 144
[置換モード] ページ 145
[変更の入力] ページ 147

け

警告

SMS 1439
SNMP トラップ 1441
アクション・タイプの設定表示枠 1477
概要 1417
警告アクションの作成 1421
[警告時のアクション] ダイアログ・ボックス 1473
警告テンプレートのカスタマイズ 1427
警告テンプレートのタグ・スタイルのカスタマイズ 1449
警告テンプレートのメッセージ内容のカスタマイズ 1446
コピーと貼り付け 1443
サウンド 1442
作成 1443
[状態トリガ] 表示枠 1491
スクリプト 1435
設定 1443
送信 1434
データベース 1429
テーブル, レポート 1516, 1530
テスト 1444
電子メール 1431
テンプレートのディレクトリ 1450
トリガ 1422
[トリガの頻度] 表示枠 1492
ページャ 1433
編集 977, 980, 1462, 1465
メッセージ内容のカスタマイズ 1446
モニタの有効化および無効化 1430
ログ・イベント 1432

警告アクション 1473
警告アクション, 作成 1421
警告設定, インフラストラクチャ・プリファレンス 729
警告テーブル, レポート 1516, 1530
警告テンプレート
 カスタマイズ 1427
 警告メッセージのカスタマイズ 1446
警告の有効化 / 無効化
 操作 1430
警告のリスト, レポート 1514, 1528
警告レポート
 警告レポート設定 1537
 例 1538, 1548
 レポートのターゲット 1536
[警告レポート] ダイアログ・ボックス 1536
警告ログ 1410
警告を含む, レポートの稼働
 時間読み取り 1515, 1528
警告を無視する, レポートの稼働
 時間読み取り 1515, 1529
[結果サマリの適用] ページ 1045
言語の優先順位 916
[現在の状態] ビュー 1296

こ

[コンテンツの変更] ダイアログ・ボックス 1043

さ

サーバ設定 715
サーバ設定, インフラストラクチャ・プリファレンス 715
サーバ中心のレポート 1332
 作成方法 1326
 生成 1322
サーバ統計情報
 [Perfex プロセス プール] ページ 1395
 [SSH 接続] ページ 1400
 [Telnet 接続] ページ 1402
 WMI 統計ページ 1398
 [一般] ページ 1391
 解析 1371
 [実行中のモニタ数] ページ 1393

使用 1370
 分析 1377
 [サーバ統計] ページ 106
 サービス・ツール 209
 最大のグラフ値, レポート 1522, 1533
 サイレント・デプロイメント・ログ 1410
 サイレント・ログイン 38
 サイレント・ログイン URL の作成 51
 サウンド警告
 操作 1442
 [サブタイプの選択] ページ, グローバル検索
 と置換 145
 [サマリの確認] ページ, グローバル検索と
 置換 154
 [サマリ] ページ, グローバル検索と置換 156
 サンプリング間隔 1522, 1533

し

資格情報のプリファレンス
 概念 890
 設定 893
 ユーザ・インタフェース 895
 時間指定スケジュールのプリファレンス 835
 時間指定スケジュール・ページ 837
 しきい値
 インジケータに割り当てられた測定値
 403
 可用性 401
 状態の影響 402
 スケジュール 401
 設定 400
 複数 402
 ベースライン 401
 ベースラインのアクティブ化 406
 ベースラインの計算 406
 ベースラインを使用した設定 405
 しきい値の設定 (共通モニタ設定) 458
 しきい値プロパティ, レポート 1514, 1528
 システム値
 正規表現でアクセス 249
 実行モニタ・ログ 1409
 自動テンプレート・デプロイメント 1051
 XML 属性の参照情報 751, 1071
 XML タグの参照情報 751, 1069
 XML バリデータ 1058

XML ファイルの例 1053
 XML 要素参照情報 1069
 インスタンス変数 1056
 グローバル変数 1056
 制限事項 1075
 デプロイメントの結果 1061
 テンプレート更新レポート 1060
 テンプレート変更適用 1059
 トラブルシューティング 1075
 必須変数 1056
 変数 1056
 順守レベル, 設定 409
 順守レベル, 微調整 497
 [詳細フィルタ] ダイアログ・ボックス,
 グローバル検索と置換 153
 詳細プロパティ, レポート 1513
 詳細モニタ情報, レポート 1516, 1530
 ショートカット・メニューのオプション
 診断ツール 1317
 テンプレート・ツリー 95
 モニタ・ツリー 81
 リモート・サーバ・ツリー 93
 [新規イベント マッピング]/[イベント マッピ
 ングの編集] ダイアログ・
 ボックス 824
 [新規管理レポート] ダイアログ・
 ボックス 1513
 [新規警告レポート] ダイアログ・
 ボックス 1536
 [新規タグ]/[タグの編集] ダイアログ・
 ボックス 129
 新規モニタ・ダイアログ・ボックス 444
 診断ツール 159
 プロセス 203
 [診断ツール] ビュー
 ショートカット・
 メニューのオプション 1317

す

スキップされたモニタ設定 727, 728
 スキップされたモニタ設定, インフラストラ
 クチャ プリファレンス 727, 728
 スクリプト警告
 SiteScope へのデータの引き渡し 1498
 記述 1496

索引

警告メッセージ・ファイル 1500
操作 1435
データの引き渡し 1437
トラブルシューティング 1438
スケジュール
時間指定スケジュール・ページ 837
範囲スケジュール・ページ 839
スケジュール・フィルタ, クイック・
レポート 1531
スケジュール・フィルタ, レポート 1517

せ

正規表現 235
* 数量詞 244
SiteScope の日付変数 248
一般の日付変数 249
大文字と小文字の区別を無視 246
改行を保持 246
改行を無視 246
区切られたログ・ファイル・エントリ
の照合 258
言語と国に固有の日付変数 251
検索モード修飾子 246
作業時の問題 262
照合値の保持 247
照合する句読点 242
数量詞 244
代替の使用 240
定義 237
テンプレート・モニタ 958
日付を含むログ・エントリの照合 261
メタ文字 241
メタ文字を使用したパターン
の照合 241
文字クラス 243
文字列リテラルの照合 239
モニタ URL またはファイル・パスの特
殊置換 252
ログ・ファイル内の数値の照合 260
ログ・ファイルの例 254
正規表現ツール 207
[整合性の確認] ページ 1041
正常値のリスト, レポート 1514, 1528
正常な限度, について 409
セキュア・シェル (SSH) を使用した

監視 637
セキュリティ
標準設定の認証資格情報の使用 690
標準のログイン・アカウント 56
ユーザ・アカウント 844, 862
ユーザ・パスワードの変更 852
[設定のバックアップ] ダイアログ・
ボックス 503

そ

送信警告
操作 1434
測定値グラフ, レポート 1515, 1529
測定値名の整合 352, 356
ソリューション・セット
.NET 1213
AIX ホスト 1111
HP Quality Center サーバ 1119
HP Service Manager 1137
IBM WebSphere 1275
JBoss アプリケーション・サーバ 1147
Linux ホスト 1155
Microsoft Exchange 1163
Microsoft IIS 1173
Microsoft SQL Server 1195
Microsoft Windows Host 1205
Oracle データベース 1221
Siebel サーバ 1239
Solaris ホスト用 1251
WebLogic 用 1265
ソリューション・テンプレート
Active Directory 1103
Microsoft Lync Server 2010 用 1181
Microsoft SharePoint 2010 用 1189
SAP モニタ 1231
SiteScope 1081
VMware Host 用 1259
概要 1082
[グループの選択] ダイアログ・ボック
ス 1020, 1027
[警告] タブ 979
タグの検索 / フィルタダイアログ・
ボックス 1000
デプロイ 1086
[プロパティ] タブ 1510

ソリューション・テンプレート・ページ 1089

た

[ターゲット サーバのフィルタ] ダイアログ・
ボックス 127

だいあろぐ・ぼっくす] 1020

ダイナミック・モニタリング
ダイナミック・モニタリング・
ページ 1404

[タイプの選択] ページ, グローバル検索と
置換 144

ダウンタイム, CI 285

[タグの検索/フィルタ] 設定 (共通のモニタ
設定) 484

タグの検索/フィルタのプリファレンス 902

[タグの検索/フィルタ] のユーザ・インタ
フェース 122

多言語化

SiteScope の UNIX 対応モニタ 921

SiteScope の Windows 対応モニタ 921

SiteScope のサポート 915

SiteScope の制限事項 915

SiteScope ユーザ・インタフェース 915
多言語ユーザ・インタフェースのサ
ポート 916

多言語ユーザ・インタフェース
のサポート 916

[ダッシュボード フィルタ] ページ 1310

[ダッシュボードのお気に入りに保存] ダイア
ログ・ボックス 1308

[ダッシュボードのお気に入りの削除] ダイア
ログ・ボックス 1309

[ダッシュボードの設定] ページ 1314

ち

[置換モード] ページ, グローバル検索と
置換 145

注釈ツール

設定 1550

ベースライン・モニタ

測定値グラフ 505

つ

ツール 173

DNS 176

LDAP 認証 187

LDAP 認証状態 184

Microsoft Windows Media Player 195

Ping 201

Real Media Player 205

SNMP 215

SNMP トラップ 217

SNMP ブラウザ 212

TraceRoute 219

URL 221

Web サービス 226

XSL 変換 233

イベント・ログ 178

サービス 209

正規表現 207

データベース接続 169

ニュース・サーバ 198

ネットワークの状態 197

パフォーマンス・カウンタ 199

メールの送受信 191

[次の時間にレポートを生成]

プロパティ 1523

ツリーのフィルタ処理 117

て

[データ統合プリファレンス] ダイアログ・
ボックス 764

データベース警告

操作 1429

データベース情報 173

データベース情報ツール 173

データベース接続ツール 169

データベース・ログ記録 782, 784

[デプロイ済みグループの選択] ページ 1039

[デプロイメント値] ダイアログ・

ボックス 1025

電子メール

統合 790, 791

電子メール警告

操作 1431

電子メール警告, テンプレート・

プロパティ 1451

電子メール, 使用するための SiteScope

の設定 56

索引

電子メール・プリファレンス 790

テンプレート 941

SERVER_LIST 変数 954

インポート 1001

インポートまたはエクスポート 1003

エクスポート 1001

エクスポートおよびインポート 1002

オブジェクト 946

概要 944

カウンタ選択の例 959

[グループの選択] ダイアログ・

ボックス 1020, 1027

計画 949

[警告] タブ 979

更新 1030

作成 962, 1030

システム変数 954

[自動デプロイ XML の生成]

ページ 1073

自動デプロイメント 1051

[新規警告] ダイアログ・ボックス 999

[新規テンプレート グループ] ダイア

ログ・ボックス 990

[新規テンプレート コンテナ] ダイア

ログ・ボックス 981

[新規テンプレート モニタ] ダイアロ

グ・ボックス 996

[新規テンプレート リモート] ダイア

ログ・ボックス 988

[新規テンプレート] ダイアログ・ボッ

クス 982

[新規変数] ダイアログ・ボックス 985

正規表現照合の追加 974

正規表現を使用したカウンタ選択 958

設定のコピー 972

タグの検索 / フィルタダイアログ・

ボックス 1000

適用 1029

[デプロイメント値] ダイアログ・ボッ

クス 1025

[テンプレートのインポート] ダイアロ

グ・ボックス 1008

[テンプレートのエクスポート] ダイア

ログ・ボックス 1006

[テンプレートの選択] ダイアログ・

ボックス 488

[複数のテンプレートのデプロイ] ダイ

アログ・ボックス 1022

[プロパティ] タブ 977, 1510

変更の適用 1030

変数 951

変数の参照 955

変数の参照例 956

モニタのカウンタ選択 957, 974

ユーザ定義変数 953

予約済みテンプレート・グループ 975

例 948

[テンプレート ツリーにコピー] ダイアログ・

ボックス 489

テンプレート設定 730

テンプレート設定, インフラストラクチャ・

プリファレンス 730

テンプレートの更新

[結果サマリの適用] ページ 1045

[コンテンツの変更] ダイアログ・ボッ

クス 1043

[整合性の確認] ページ 1041

[デプロイ済みグループの選択]

ページ 1039

テンプレート変更適用サマリ・

レポート 1047

[変数の変更] ページ 1044

テンプレート変更適用 1030

自動テンプレート・

デプロイメント 1059

テンプレート変更適用ウィザード 1038

[結果サマリの適用] ページ 1045

[コンテンツの変更] ダイアログ・

ボックス 1043

[整合性の確認] ページ 1041

[デプロイ済みグループの選択]

ページ 1039

[変数の変更] ページ 1044

テンプレート変更適用サマリ・レポート 1047

テンプレート・ツリー

オブジェクト 95

ショートカット・メニュー

のオプション 95

と

統合

Business Service Management 741
 Diagnostics 744
 HP Operations Manager 746
 汎用データ 747
 統合プリファレンス
 BSM 741
 Business Service Management 741
 [統合プリファレンス タイプ] ダイアログ・
 ボックス 757
 [統合プリファレンス] ページ 755
 統合モニタ
 操作 521
 廃止の置換 541
 廃止リスト 540
 フィールドのマッピング 545
 フィールドのマッピング,
 アクション・ディレクティブ 571
 フィールドのマッピング,
 一致条件 567
 フィールドのマッピング,
 イベント 550, 562
 フィールドのマッピング,
 イベントの例 555, 565
 フィールドのマッピング, イベント・
 ハンドラの構造 566
 フィールドのマッピング, 構造 549
 フィールドのマッピング, 条件式 571
 フィールドのマッピング,
 測定値の例 560
 フィールドのマッピング, タグ 572
 フィールドのマッピング,
 メトリック 556
 フィールドのマッピング,
 文字列式 571
 フィールドのマッピング, 例 573
 統合モニタのトラブルシューティング 542
 統合モニタのログ 542
 トポロジ・データ
 SiteScope から Business Service
 Management 273
 トラブルシューティング
 監視対象システム 159
 統合モニタ 542
 モニタの設定 159
 トラブルシューティングと技術情報 24
 トレース・ルート・ツール 219

な

内容の照合
 システム日付変数の使用 248
 正規表現の使用 235
 メタ文字の使用 241
 文字列リテラルの使用 239
 ログ・ファイルの例 254
 並べ替え基準, モニタ・レポート 1535
 並べ替え順序, モニタ・レポート 1535

に

日次ログ 1409
 ニュース・サーバ・ツール 198
 認証
 Lightweight シングル・
 サインオン 925
 LW-SSO の一般的な参照情報 929
 LW-SSO, 概要 930
 認証方法
 概要 926

ね

ネットワーク状態ツール 197

は

パーセンタイル範囲マッピング・
 テーブル 491
 廃止されたモニタ 442
 パスワード
 長さの設定, 英数字の設定, 句読点の
 設定 861
 変更 852
 要件の設定 861
 パフォーマンス・カウンタ・ツール 199
 パラメータの表示, モニタ・レポート 1534
 範囲スケジュール
 追加 841
 範囲スケジュール・ページ 839
 汎用データ統合 747

ひ

表示列, モニタ・レポート 1534

索引

ふ

ファイル形式, モニタ・レポート 1535
ファイルにエクスポート, モニタ・
レポート 1535
ファイル名, モニタ・レポート 1535
フィルタ
グローバル 117
ダッシュボード 1310
[フィルタ タグ] ダイアログ・ボックス 128
フェールオーバー監視ソリューション・
テンプレート 1093
概要 1094
デプロイ 1098
モニタ 1095
フェールオーバー・マネージャ 39
フォーマット・テンプレート, レポート 1519
負荷モニタの監視 1367, 1368
[複数のテンプレートのデプロイ] ダイアロ
グ・ボックス 1022
ブラウザの言語のプリファレンス 916
プリファレンス
Business Service Management 740
SNMP トラップ 810
インフラストラクチャ 706
[共通イベント プリファレンス] の
ワークフロー 820
時間指定スケジュール 835
全般 690
タグの検索 / フィルタ 902
電子メール 790
範囲スケジュール 836
ページャ 800
ユーザ管理 844
ログ 782
プロセス・ツール 203

へ

ページャ
接続 801, 903
ページャ警告
操作 1433
ページャ・プリファレンス 800
ページ・オプション
お気に入りに追加 66
ユーザのお気に入りにレアウトを

保存 66

ベースライン
SiteScope でのしきい値の計算方法 412
SiteScope によるエラー限度の
計算方法 412
アクティブ化 406
エラー限度 410
エラー限度の設定 497
計算 406
しきい値 411
順守レベルの設定 409
順守レベルの微調整 / 限度の設定] ダイ
アログ・ボックス 497
状態レポート 509
正常な限度 410
[設定のバックアップ] ダイアログ・
ボックス 503
注意事項および制限事項 407
パーセンタイル範囲マッピング・
テーブル 491
[ベースラインのアクティブ化] ダイア
ログ・ボックス 499
[ベースラインの計算] ダイアログ・
ボックス 493
[ベースラインの削除] ダイアログ・
ボックス 508
モニタしきい値の設定 418
[モニタ測定値グラフ] ダイアログ・
ボックス 504
ベースライン設定 (インフラストラクチャ プ
リファレンス) 733
ベースライン設定 (共通のモニタ設定) 485
ベースラインのアクティブ化 406
[ベースラインのアクティブ化] ダイアログ・
ボックス 499
ベースラインの計算 406
[ベースラインの計算] ダイアログ・
ボックス 493
[ベースラインの削除] ダイアログ・
ボックス 508
ベースラインの状態 510
ベースラインのプロパティ 510
ヘルプ, クイック・ヘルプ 66
[変更の入力] ページ, グローバル検索と
置換 147
変数

テンプレート内 951
[変数の変更] ページ 1044

む

無効化
レポート 1523

め

メールの送受信ツール 191

も

モニタ
.NET 1213
1 回実行するスケジュール 835
Active Directory 1103
AIX H 1111
HP Quality Center サーバ 1119
HP Service Manager 1137
JBoss アプリケーション・サーバ 1147
Linux ホスト 1155
Microsoft Exchange 1163
Microsoft IIS 1173
Microsoft Lync Server 2010 用 1181
Microsoft SharePoint 2010 用 1189
Microsoft SQL Server 1195
Microsoft Windows Host 1205
Oracle データベース 1221
Siebel サーバ 1239
SiteScope で使用されるポート 436
Solaris ホスト用 1251
VMware Host 用 1259
WebLogic サーバ 1265
WebSphere サーバ 1275
Windows 環境のみでサポートされて
いる 433
WMI のサポート 434
依存関係の作成 397
一時停止 691
エージェントレス SSH のサポート 663
確認イベント 116
カテゴリ 393
共通設定 447
サポートされた SiteScope リモート
Windows SSH ファイルの使用 663

状態のしきい値 400
スキップの
トラブルシューティング 1409
スケジュールに基づいた無効化 834
セキュリティ、標準設定の認証資格
情報の使用 690
デプロイメント 414
テンプレートを使用して作成 941
範囲スケジュール 836, 839
ベースラインしきい値 405
[モニタ タイプのフィルタ] ダイアログ・
ボックス 126
[モニタ レポート] ダイアログ・
ボックス 1533
モニタ設定、インフラストラクチャ・プリ
ファレンス 717
[モニタ測定値グラフ] ダイアログ・
ボックス 504
[モニタとグループの管理] ダイアログ・
ボックス 77
モニタの実行設定 (共通モニタ設定) 452
モニタのスキップのログ 1411
モニタのデプロイ 414
[モニタの有効化 / 無効化] 設定 (共通のモニ
タ設定) 480
モニタ読み取り、レポート 1516, 1529
[モニタ履歴] ビュー 1305
モニタ・カウンタ・ログ 1410
モニタ・カテゴリ・リスト 428
モニタ・タイプ 393
使用されるポート 436
モニタ・ツリー
オブジェクト 81
ショートカット・
メニューのオプション 81
モニタ・ディスカバリ・ポリシー、
有効化 338
モニタ・テンプレート 941
モニタ・フィルタ、クイック・レポート 1531
モニタ・フィルタ、レポート 1517
モニタ・プロセスの一時停止 691
モニタ・レポート
表示設定 1534
例 1542, 1546
レポートのターゲット 1534
モニタ・ログ 1409

索引

ゆ

- ユーザ管理設定ダイアログ・ボックス 865
- ユーザ管理プリファレンス 844, 862
- ユーザ管理プロファイル 862
- ユーザ定義テンプレート
適用 1029
- ユーザ・インタフェース
多言語のサポート 916
- ユーザ・タイプ 845
- ユーザ・プリファレンス
ユーザ・パスワードの変更 852
- ユーザ・プロファイル 844, 862

り

- リモート
Microsoft Windows リモート・
サーバ 582
- UNIX リモート・サーバ 582
- リモート UNIX サーバの監視
概要 582
- ユーザ・インタフェース 608
- リモート UNIX サーバ・プロファイル
定義 597
- リモート Windows サーバの監視 582
- リモート Windows サーバ・プロファイル
定義 588
- リモートの複数テスト・ログ 1410
- リモート・サーバ 581
プロパティ 598
- リモート・サーバの監視 396
- リモート・サーバ・ツリー
オブジェクト 93
- ショートカット・
メニューのオプション 93

れ

- レポート
HTML 形式オプション 1519
- [New Monitor Report] ダイアログ・
ボックス 1533
- [New Quick Report] ダイアログ・
ボックス 1527
- XML ファイルを
電子メールでそうしん 1521

- 外部データベースへのログ記録 1503
- 概要 1501
- 使用されるログ・ファイル 1409
- [新規管理レポート] ダイアログ・ボッ
クス 1513
- [新規警告レポート] ダイアログ・ボッ
クス 1536
- データ量 1503
- 電子メールで送信 1519, 1532
- テンプレートを使用した形式設定 1519
- モニタしきい値の表示 1514, 1528
- レポートを生成する時刻の制御 1523
- レポート期間, クイック・レポート 1531
- レポート形式設定オプション 1518, 1532
- レポート形式, クイック・レポート 1532
- レポート設定 732
- レポート設定, インフラストラクチャ・プリ
ファレンス 732
- レポート対象期間の最後, レポート 1518
- レポートのターゲット
クイック・レポート 1527
- 警告時間帯 1537
- 警告のタイプ 1537
- 警告レポート 1514, 1536
- 詳細レベル 1537
- モニタ・レポート 1534
- レポートの対象期間 1518

ろ

- ローカリゼーション
ローカル日付形式の照合 251
- ログ
統合モニタ 542
- [ログ ファイル] タブ 1408
- ログイン, サイレント 38
- ログ・イベント警告
操作 1432
- ログ・イベント状況モニタ 1364
- ログ・ファイル
monitorCount.log 1410
- Post 要求 1410
- SiteScope の再起動 1409
- URL モニタの詳細 1411
- オペレータ認知 1410
- 監視データ 1409

警告 1410
サイレント・デプロイメント 1410
データの保存量を設定 56
データベース・テーブル 783
データ列 1379
プリファレンス 782, 784
モニタの実行 1409
モニタのスキップ 1411
リモートの複数テスト 1410
ログ・ファイル, 表示 1346
ログ・プリファレンス 782, 784

